魔法少女リリカルなのは☆The Rider☆

剣静

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのは☆Ｔｈｅ　Ｒｉｄｅｒ☆

【Ｎコード】
Ｎ９１６９Ｋ

【作者名】
剣静

【あらすじ】
どこか単調な毎日に退屈を感じていた高校生、松田怜治。
彼はある日、家の地下室で人の言葉を話すバイクと出会う。
その日を境に魔法という非日常の世界に踏み込んでいく。
魔法のバイクに跨り、少年は空を翔る！！

月村すずか√終了！！　過去編開始！！

オリ主視点でリリカルなのはワールドを一期から書いていきます。

一部原作改変有り。作者にとらハの知識はありません。

第1話　地下室での出会い（前書き）

初投稿です。
オリ主は無理って方はUターンをおススメします。
更新速度はカメになりそうです・・・ｏｒｚ

第1話　地下室での出会い

雲のない夜の空に青年はいた。
彼は大型のバイクに跨り、短く切った黒髪の上からゴーグルを着け、黒を基調とし肩にプロテクターのついたライダースーツ、ブーツとグローブ、紺色のロングコートといった服装で夜空に溶け込んでいる。特別鍛えたという様子はないが細っこいという印象はない。
彼が跨るバイクもまた車体が黒く所々青色のラインがペイントされている。
バイクの前面には龍の頭を模したような形をしており眼にあたる部分からヘッドライトの光がついている。

「いい眺めだな。」

ゴーグルをはずし高いところから景色を見るように見下ろしながら少年は呟く。
彼が見下ろす先には夜の闇の中に光り輝く街があった。その光の正体は商店街の街灯や民家の窓からこぼれる明かりである。
海鳴市（うみなりし）、少年が見下ろす街の名であり、彼と、彼の家族が、友人が住む街。
不意にどこからか青年のとは違う男の声が響く。

『オマエ、オレをベンチかなんかと間違えてねえか？』

「んなことねえよ。・・・んじゃそろそろ夜空のドライブといくか？スタン」

『おおよ。んで今夜はどっちの方角に走るよ相棒？』

少年は自分が跨るバイクをぽんぽんと軽く叩いていうと、スタンと呼ばれたバイクは軽い口調で再度青年に問いかける。
その言葉に合わせるようにヘッドライトがピカピカと点滅する。

「そうだな・・・。昨日は西の方に行ったし、今夜は東の方角にしようかな」

『はいよ。だけどよ怜治(れいじ)、ほんっっっとに魔力の残量には気をつけろよ？先週みたいに夢中になりすぎてパラシュート無しでのスカイダイビングなんてオレは勘弁だぜ。』

「そんなもん俺だってもう勘弁だっての・・・それじゃ行くぜ」

青年は再びゴーグルを着け、スタンのハンドルのグリップを握る。
エンジン部分からドッドッドッドッと重たい振動が起こる。
本来なら排気ガスが出るべくマフラーからは紺色の光の粒子が撒かれていく。
そして一人と一台は走りだし夜空に消えていき……。

豪快にベッドから落下した。

「……ゴッツァ！？」

頭に響く激痛に、松田怜治(まつだれいじ)は悲鳴を上げた。
夢の世界から一瞬で現実へと引き戻される。

「っつう～……何だってんだ一体」

ズキズキと痛む頭をさすりながら怜治は起き上がる。

乱れたベッドの上を整え、落ちた枕を戻す。
カーテンを開けると暖かい朝日が差しこんで来た。怜治の部屋は二階で、周りには高い建物もないので日光を遮るものは何もなかった。
怜治は眼を指す光に顔を顰める。
「……まぶし」
寝巻を脱ぎ捨て、箪笥からシャツを出し、クローゼットから通っている高校の学生服を取りだして袖を通す。
学生鞄を引っ掴み、階段を下りて一階へ向かった。

「起きたか、寝ぼすけ」
一階の居間に来るや早々、しゃがれた声が飛んできた。
声の主は怜治の祖父、松田怜一郎（まつだれいいちろう）だ。側頭部のみに白髪を残し、あとはきれいに剃髪された禿げ頭の老人はこの家に住む怜治の唯一の家族だ。
彼が作った朝食は、テーブルの上で美味しそうに湯気を立てていた。

「どこが寝坊だ。いつもより十分早い」
怜治は壁に掛けられた時計を見る。
時刻は七時三十分。早くはないが、学校に間に合わないような時間でもない。
怜一郎の目が細められる。

「ふん、五十歩百歩だ」

「はいはい」

席に着く。怜治は箸を取り、朝食を食べ始める。
居間に置かれたテレビに映るニュースが、占いのコーナーに入った。
今日の怜治の運勢、最悪だそうだ。

季節は春、日本の四季の中で最も気候が穏やかな季節であり、学校の卒業式や入学式、テレビの改編、変人が増えるなどなにかと話題にこと欠かさない季節である。
天気は晴れ空には雲ひとつない快晴である。
そんな暖かい日差しが降り注ぐ道を、怜治がひとり歩いていた。

「ふわあ〜あぁ・・・眠いなぁ」

大きなあくびをして目じりに涙を浮かべながら鞄を肩で背負って学校へ向かう道を歩いく。

「たくっなんで今日はクラス分けと担任の発表だけのために学校にいかなきゃなんねえんだ」

「ははははっ相変わらずサボりたいオーラ全開だなぁ、ぜろ?」

『ぜろ』と呼ばれて怜治が振り向くと自分と同じ学ランを着た炎のような赤毛の少年が右手をブンブンと振り、左手で学生鞄をもって

走ってきた。
ちなみに『ぜろ』というあだ名の由来は怜治→れいじ→零時→0時→ぜろといった風である。

「あ？なんだ鉄平かよ、相変わらず無駄に元気そうだなぁお前」

「お前も相変わらず口が悪いなぁおい、そんなんだからセンコーに睨まれんだぜ？」

怜治の横に並んでニカッっと歯を出して笑う少年の名前は窪田鉄平（くぼたてっぺい）、怜治の数少ない友人（正確には悪友かもしれないが）2人のうちの一人である。怜治の口の悪さを指摘する彼だが彼の服装も人のことを注意できるような格好ではない。
第一に、学ランのボタンがすべてはずされており学ランの下には髪と同様に真っ赤なTシャツがのぞいている。そして右耳にはピアスがぶら下がっておりお世辞にもほめられた格好ではない。

「センコーに睨まれてんのはお前も同じだろうが、つーかマサはどうした？お前ら家が同じ方角だろ？」

「今日は道場でちょっと体動かしてから来るんだと、どうせ今日は大した行事があるわけでもねえからもしかしたらサボるかもな」

「……あいつのことだからサボるな」

「……だろうなぁ」

ここにいない友人の日頃の行動を思い出し2人は同じ結論に達した。
細めて遠いところを見るように目を細めている2人の横を一台の通学バスが通って行く。

「『私立聖祥大学付属小学校』ね、いいよなぁ家から遠いとはいえバスで学校まで行けて、移動中寝放題じゃねぇか」

しかもエスカレーター式だし、とバスに書かれた文字から市内にある私立学校のことを思い出し怜治はうらやましそうにバスを眺める。窓からは金、栗、紫とそれぞれ鮮やかな色の髪をした少女3人が談笑しているのが見える。

「はははっ金と頭のない人間に生まれてしまったことを悔やむんだな！んじゃおれ様はこれで！」

ビシッ！と右手を軽くあげて走り出す鉄平につられて思わず怜治も走り出す。

「おい！なんで走るんだよまだ全然余裕な時間じゃねぇか！」

友人の突然の行動に驚く怜治の抗議をははははっと笑い飛ばし鉄平は走り続け、結局いつもより15分以上早く学校に着いてしまう2人であった。

奇妙な静寂が教室を満たす。

怜治はシャーペンを握り、机に置かれた目の前の一枚の紙を睨みつけていた。

『進路希望調査』。そう黒字でプリントされた長方形の紙を、シャーペンの先でコツコツと叩く。

「……めんどくさ」

別に無理して悩む必要はない。

この紙には将来の夢とか希望の職業とかを書くのではない。進学か就職か。下部に書かれたふたつの選択肢のどちらかを丸で囲むだけ。

怜治が通う海鳴東高校はレベルとしては中間に位置する。

生徒の進路は神学と就職が半々に分かれるため、別に就職希望もおかしくはない。

怜治としては、進学するつもりはなかった。怜治の学力的な意味もあるが、経済的な理由もある。怜一郎が聞いたら「余計な心配するな」と怒りそうだが、怜治の家は貧乏、というわけではないが決して裕福ではない。あまり家に負担をしたくないというのが怜治の思いだ。

「だったら就職なんだよな……」

シャーペンを動かし、就職の文字を円で囲む。

そして、指が止まる。

「俺って、何がしたいんだろうな……」

授業終了を知らせるチャイムが響き担任教師が教室から出ていくと

同時に学生も鞄を抱えて、一部の学生は談笑をしながら次々と教室を出ていく。外を見ると太陽が高い位置にあるのが見えた。
時刻は現在十一時四十分。いつもならまだ授業があるが今日は春休みが終わってから最初の登校、新入生ならばこの後学内の説明のためのオリエンテーションなどがあるが、怜治たちがいる教室の入口には『２－２』と書かれた札が下がっている。
そう、怜治たちは今年で高校２年生、よって今日はもう学校にいる必要はもうないのである。

「なんかこれだけのために学校来るってなんかおかしいよな～」

「まぁ新しいクラスと担任と時間割を発表しただけだしな」

「いいじゃないの、これで堂々と真昼間からゲーセンに入り浸れると思えばさ」

「悪い、今日おれ様バイトなんだわ・・・」

教室の隅で話しているのは怜治と鉄平と黒ぶちのメガネをかけ、茶髪を肩まで伸ばした少年である。

「つーかマサ、お前よく学校来たな?俺はてっきりサボるかと思ったんだが」

「失礼な!さすがにボクも新学期初日に学校をサボるほどチャレンジャーじゃないよ」

『マサ』と呼ばれた茶髪の少年、本田正義（ほんだまさよし）は外見だけ見ると大人しく真面目そうな人間に見えるが実際はけんか好きで重度のサボり魔である。

実家は剣術の道場をしているため腕っぷしもある。そしてその稽古にのめり込みすぎて、もしくは体力を使いはたしてたびたび学校を休むのだ。

「今日も俺はパス。ジジイの手伝いしねぇと」

「怜一郎さんとこ?あの修理工場をほとんど1人でやってるなんて大変だよねぇ」

「だったら手伝いしに行ってやれよ。お前だってバイクの修理頼んでんだろ?まぁおれ様もだけど」

「いいよ別に、工場なんて名前だけでほんと小さい修理屋だしよ」

「でも腕は確かだぜ?そこんところはお前がよくわかってんじゃねえのか?」

まあな・・・、と怜治が呟くのを合図に3人の会話も途切れがちになり今日はこれでお開きにしようという鉄平の提案に賛同し、校門前で怜治は家に、鉄平はバイト先に、正義は当初の考え通りゲーセンへと向かうために分かれた。
のはずが、怜治の足が不意に止まる。

「なぁ、お前らってアレどうした?」

「ん?」
「あれって?」

怜治は振り向く。鉄平と正義もこちらを見ていた。
怜治はもう一度言う。

「あの進路希望調査。お前らどっちに丸付けた？」

怜治の問いに二人は一瞬考え、やがて答える。

「おれは就職。街出るつもりでいるしな」

「とりあえずは進学かな。細かいことは全然決めてないけど」

「あれ、おまえは道場継ぐんじゃねぇの？」

「アレは多分姉さんが継ぐよ」

悪友の回答に、怜治が呟く。

「そっか……」

「どうしたよ。らしくないぜ？」

「いや、ああいうのを聞かれる度思うんだが、俺って何したいんだろうなって……な」

怜治は空を仰ぐ。青空広がる昼間にはそぐわない話題だ。

怜治には夢が無い。将来への明確なビジョンもない。だからと言って、今を全力で生きているわけではない。惰性で過ごしている。

不満があるわけではない。悪友たちと過ごす毎日は楽しいし、家族との仲が悪いわけでもない。

それでも、心のどこかが欲していた。

胸が熱くなるような、全身の血液が沸騰するような刺激的な生活を。

「ジジイ～帰ったぜ～」

「遅いじゃねぇか怜治」

2人と別れ帰宅しガラガラと玄関を開けた怜治をむかえたのは少ししゃがれた声と作業着を着てスパナを片手にこちらを睨みつけるのは怜一郎だった。

彼の後ろには今の今まで修理をしていたのであろうスクーターがおかれていた。

怜治はスクーターの色や周囲に散らばる工具から確かブレーキの点検のために持ち込まれたやつであろうと記憶を掘り起こす。こういうのはきちんとした場所に持っていけばよいのだがベテランである祖父の腕と値段の安さから客足は多い。小さい頃はそばで見ているだけだった怜治だったが、大きくなると少しずつ祖父の作業を手伝うようになり今では簡単な仕事なら任せられるほどになっていた。

「悪いな、鉄平たちと少し話してたんだよ」

「また悪だくみか？相変わらず3人そろって悪ガキだなまったく・・・さっさと着替えてこい」

へいへいと小言を流しながら学ランを脱いで作業着に着替える。

『……』

「？」

『……い……聞こ……か……？』

「誰だ？ジジイじゃ……ねぇな」

明らかに怜一郎とは違う若い男の声に困惑する。

『ちだ……聞……か……地……だ』

「……地下からか？」

怜治が目を向けたのは地下へ下りるために取り付けられた階段である。

地下にあるのは修理に使う工具の予備や中型の機材がおいてあるいわゆる物置のようなものである。

「なんだ？コソ泥が怪我でもしてうめいてんのか？」

泥棒が入った先で負傷し逃走できずに捕まるという話はテレビでたまに聞くがまさかそれがうちで？

そんなことを考えながら地下への階段を下りていくと奥に大きな銀色のシート何かを包んでいた。

大きさからして大型のバイクか、それとも祖父が珍しく新しい機材でも買ったのか・・・。

そう頭で考えながら怜治は2つの考えを否定した。この大きさのものを70歳を超える祖父が1人でここまで持ち込めるとは思えない。

そもそもこの大きさでは地下の入口でぶつかるだろう。

つまりこれは昔からここにあったのだ。そして自分はそれに今の今まで気づかなかっただけ。

少々無理やりな解釈かもしれないが怜治にはそれ以外に考えが浮か

ばない。

『やっと……たな』

また声が響いた。今度はその声の出どころははっきりとわかった。
自分の目の前にあるシートからだ。
正確にはシートで隠れているものから。

「なんなんだよ一体……」

得体の知れないものへの恐怖と好奇心が同時に湧き上がり怜治は少しずつシートに近づく。
シートの下を知りたいという欲求と知ったら後悔するのではという疑念が頭の中でせめぎあう。
額から汗が流れる地下質の暑さからか自分の迷いからくる冷や汗か怜治は判別できなかった。
ノドがカラカラに乾いている。
ゴクッと唾を飲み込む音が響く。

気づくと怜治の右手はシートを掴んでいた。ここまで来たらもう戻れないだろう。
フーッっと一度深呼吸してシートを掴む手に力を込める。

バッと乾いた音を立ててシートをとると現れたのは

『やっと来たな……相棒?』

ヘッドライトをチカチカと照らしながら自分に話しかけてくる……

先が龍の頭を模した、大型の黒バイクだった。

魔法少女リリカルなのは☆Ｔｈｅ　Ｒｉｄｅｒ☆　第１話　地下室での出会い

第1話　地下室での出会い（後書き）

まさかこれ一つに4時間近くかかるとは・・・・orz
がんばって書いていくんで応援よろしくお願いします。

第2話　Ｗｅｌｃｏｍｅ　ｔｏ　非日常（前書き）

文章の構成に四苦八苦しながらも2話目投稿です。

第2話　Ｗｅｌｃｏｍｅ　ｔｏ　非日常

『やっと来たな・・・相棒？』

「・・・・・」

『相棒』と言われた怜治は今自分の目の前の状況をすぐには理解できなかった。

まだ自分は１７年しか生きていないが、はたして人にはその一生のうちに人の言葉を話す人間以外のものに遭遇する機会というものはあるものなのであろうか？

一瞬言葉を話す人面機関車やパンのヒーローの顔が頭をよぎるがいやいやあれはアニメや特撮とかの世界での話しであって実際にあるわけがない、そう頭で否定をするもいま自分の目の前にある光景がその否定を重ねて否定する。

とりあえず落ち着こう、一旦目を閉じてまたバイクをよく見る。

バイクの車体は黒く、青いラインが１，２本ひかれている。

龍の頭を模したような前面の両側に魚のひれのような青いくの字の模様が３本ずつ入っている。

また、一つ目が一般的なヘッドライトはふたつ目のようについている。

タイヤは通常のものより少し幅のあるようでまるで通常サイズのタイヤをふたつくっつけたようにも見える。後ろのほうには金色のマフラーが４本伸びている。

座席も大きく２人ぐらいなら楽に乗れるだろう。

『・・・ん？何をじろじろ見てんだよ相棒』

「なんでお前に相棒呼ばわりされなきゃいけないんだ？つーかなん

でバイクがしゃべってんだよ？」

『しゃべれるもんはしゃべれるんだから仕方ないだろう？それにここに来たって事はオレの声が聞こえたんだろ？てことはオマエはオレの力を使う資格があるってことだ、だから相棒、ＯＫ？』

「ＯＫ？じゃねぇよ。つーかなんだよお前の力って？」

『フフフッ。知りたいか？よーし教えてやろう。それはだな・・・・』

「それは？」

ドラムロールのつもりなのかダラララララ・・・と変な音を出してバイクは口を開く（厳密にいうと彼には口がないのだが）

『それは・・・魔法の力だ！！』

「んじゃあ俺はこれで・・・」

『おいいいいいいいいいいいいいいいいいい！！！な～にノーリアクションで立ち去ろうとしてやがるんだオマエ！！』

「いやいや、そんなこといきなり言われてはいそうですかって信じられると思うか？
お前ようはあれだろ？春になると増えるっていう変人」

だよな～そう考えればいろいろ納得できる、と勝手に結論を出して地下から出て行こうとする怜治。

『ちょ、ちょ、ちょっと待てよオマエ！
そういう解釈は死ぬほどイヤだがそれでオレを放置するのもおかしくねえ!?』

「いやいいよ、どうせうちに盗む価値のあるようなものなんてねえし。
気がすんだら出て行けよ警察とかめんどくせえことにならねえうちに」

『いやいやいやいやいや！！オレ泥棒とかじゃねぇし！！
てゆーか大体オレ自身自分で動けねえし！！』

「何そんなとこで遊んでんだおまえ?・・・・・・ん?」

いつまでも来ない怜治を探しに来たのかいつのまにか怜一郎が地下への入口まで来ていた。
そして床にシートが落ちているのに気付きそのまま視線を怜治、そしてバイクへと移す。

「おまえ・・・そのバイク」

「なんだよジジイ知ってんのかあのしゃべるバイクもどき?」

「ん・・・いや・・・しゃべるバイク?
なにバカなこと言ってんだおまえは、さっさとこんか！」

バイクを見て一瞬顔色が変わった怜一郎に違和感を抱きながらも彼の言葉に従い地下から怜治は出ていく、さっきまで騒いでいたバイ

クも今は静かに黙っている。

「まさか・・・動いたのか」

「？」

すれ違いざまに祖父の口からこぼれた言葉に首を傾げつつ怜治は作業場へと歩いて行った。

魔法少女リリカルなのは☆Ｔｈｅ　Ｒｉｄｅｒ☆　第2話　Ｗｅｌｃｏｍｅ　ｔｏ　非日常

「結局なんだったんだろうな・・・あれ」

誰かに向けたわけでもなく自室で怜治が呟くあれとは昼に地下室であったしゃべるバイクのことある。

現在は夜、外をみると太陽はすでに沈み代わりに月と無数の星が空に輝いている。

あれからは仕事やら家事やらで地下室に行く機会に恵まれずにそのまま夜中になってしまったのだ。

「ジジイはなんか知ってる様子だったけど、あの感じだと教えてはくれなさそうだな・・・」

夕飯のときに祖父に例のバイクのことを話題に出してもああ、とかかもな、と相槌を打つだけだった。
怜一郎は今では珍しい頑固おやじもとい、頑固ジジイである。
自分の意見を滅多には変えないし、見ず知らずの人間にも躊躇なく怒鳴りつけるような人間だ。
あんまりしつこく聞いてもゲンコツかしゃがれた怒声が飛んでくるのが関の山であろうと判断してそれ以降話題にすることはなかった。

「魔法の力を持つしゃべるバイクねぇ・・・ありえねえよな」

寝るか、と電気を消して布団にもぐりこみそのまま怜治は眠りについた。

「はぁっはぁっ・・・はぁ」

誰かが森の中を走っていた。木々が立ち並び顔にかかる葉っぱをかき分けて、時折地面に落ちている枯れた木の枝を踏んだパキッと渇いた音が鳴る。
走っているのは男子か女子か一瞬判断に迷うような中性的な顔立ち、年齢は１０歳になるかどうかといった、肩にかろうじてかからない程度に伸びた金髪、土色に近いマント、何か奇妙な模様の描かれた上着に半ズボン、腰にはベルトとポーチ、両手には指無しの手の甲には金色のプレートがついているグローブをつけている。ケガしているのか右腕からは赤い筋が垂れていた。
少年はひらけた場所に出ると足を止めて周囲を警戒するかのようにあたりを見渡す。
ガサガサと草木をかき分ける音が響き突如茂みから少年を見ている

ものがある。
それは異形のものだった。
全身が黒い毛に覆われている獣で頭からは触角が飛び出ている。

「くっ！！」

その黒い獣に少年は身構え赤い宝石のような球を取り出す。
宝石が輝きだし周囲に薄い緑色で四重に書かれた円の中に見たことのない文字と、中心から四角形が浮かび上がる。その陣に反応するように赤い宝石の輝きがさらに強くなる。

それを合図にしたかのように黒い獣が茂みから飛び出し少年へと突進する。

「妙（たえ）なる響き、光となれ！　赦されざる者を、封印の輪に！」

黒い塊が跳躍し少年に襲いかかる。黒い毛に隠れていたのか鋭い爪が鈍く光る。

「ジュエルシード　封印！」

赤い宝石の周囲に浮かび上がった陣に黒い塊が突っ込み周囲が光に包まれる。
風が巻き起こり木々を激しく揺らす。

陣にぶつかったときの衝撃か、それともそれ以外の力が加わったのか。
獣は苦痛の色の混じった声を上げ体液のようなものをまきちらしながら逃走する。

「逃がし・・・ちゃった」

膝をつき獣と同じように苦痛に顔をゆがめる。

「追いかけ・・・なきゃ」

しかし少年の願いとは裏腹に体は重くなっていきそのまま体が地面に突っ伏してしまう。

そして視界が白く染まっていく・・・・

「ん・・・なんだよ夢かよ」

カーテンの隙間からこぼれる朝の陽ざしに顔をしかめながら怜治は目を覚ました。

「しっかしなんだったんだろうな、朝の夢は」

「夢ってどんな？」

「ん～なんか知らねえガキが森ん中走ってて、毛むくじゃらの動物に襲われるって夢」

「自分がじゃなくて？変な夢だね」

「まあ夢なんてたいていおかしなもんだけどな』

場所は怜治の通う高校の屋上。
昼休みにいつものように鉄平、正義とともに購買で買ったパンを片手に話している。

「それでそのガキどうなったんだ？」

「動物に食われたってことはなかったっぽいぞ」

「どうして？正義の味方でも現れたとか？実はガキが格闘技やってたとか？」

「いや、なんか呪文みたいなのを唱えてて・・・あれはまるで」

「まるで？」

『魔法』という言葉を口にしかけてあわててそれを飲み込む。
昨日のバイクのことがあったからか妙に意識してしまう。
いつもならば別に何とも思わない言葉なのにだ。

「いや・・・つーか夢のことをなにマジで話してんだろうな俺ら」

確かに、とほかの2人もクスリと笑う。
そのあとはまたいつものように放課後どこにいこうか、最近あの店にかわいいバイトが入った、あのゲームがもうすぐ発売だ、それは面白いだろうかといった他愛もない話に花を咲かす。
友人2人が笑いながら話しているのに対して、怜治ははっきりと表情に出てはいなかったがどこか退屈そうな、というより今自分のいる日常に刺激を求めるかのようだった。
別に2人と一緒にいることが退屈というわけではない、ただ平和な毎日に物足りなさを感じているのだ、それはとても欲張りなことなのかもしれない。世界では凶悪事件だの戦争だのが毎日のように起こっているのだから。平和が一番、どこかには退屈を感じることすらできない人もいるのかもしれない。
彼にもそれはよくわかっている。だがそれでも求めてしまうのだ、今までとは違う非日常を、心の底から熱くなれるような毎日を、ほかの不良とやるケンカとは違った刺激を・・・。

日が傾き、あたりがわずかに暗くなるころ学校で部活動を切り上げ、生徒たちが帰宅を始めるなか怜治たち三人も家路につこうとしていた。といっても彼らはなにかの部活に所属しているわけでもないためこの時間まで遊びまわっていたのだ。

「いや～獲った獲った」

ぬいぐるみが大量に入った袋を抱えて鉄平はゆるんだ表情をしている。
彼が抱えているのは遊びに行ったゲームセンターのクレーンゲームで勝ち取ったものだ。

「相変わらず君はこういうの得意だよねぇ」

「つーか、そんなにぬいぐるみばっかゲットしてなにがしたいんだお前？」

「ふっふっふ・・・甘いなぜろ！女ってのはこういうのが好きなのが多いからな、この大量のぬいぐるみを元手におれ様は今年こそカノジョを手に入れる！！」

「そんな下心丸出しな手に引っかかる女なんているわけねえだろが」

拳を握りしめて空に叫ぶ鉄平にあきれてついため息が出てしまう。

キイイイィィィン

どこからか、金属同士がぶつかり合ったような高い音が怜治の耳をつく。

その音の出所を見つけようと周囲を見渡すと右手にみえる林の奥に目を止める。

なぜだろう、別に暑いわけでもないのに汗が流れてくる。

確証があるわけではない、しかし林の奥から何か異様な空気を感じ取る。

「ん？どうしたぜろ？」

突然足を止め、視線を林から外そうとしない怜治を見て鉄平が声をかけるが、怜治の耳には届かない。

怜治は今自分の中で渦巻く感覚を知っている。これは昨日地下で感じたのと同じ感覚。
つまり、この奥になにか、あのしゃべるバイクと同じ得体の知れないものがあるのだ。

ドクン、心臓が跳ねる。　同時に足がわずかに震えだし口元にはひきつった笑みが浮かぶ。

「ははは・・・おもしれぇ、見てやるよ！」

震える足を叩いて林の中へ駆けだす。

「あ、おい！ぜろどこ行くんだよ！！待てよ！！！」

鉄平の制止の声が聞こえるが怜治の意識は林の奥にある『何か』に集中していた。

「はぁっはぁっはぁっ・・・何してんだか俺は」

走っている間に頭が冷えたのか徐々にスピードを落としついにはその足を止める。
ずいぶんと奥の方に来てしまったのか見上げると木々に着いた葉っぱが空を覆っていた。

周囲を見渡すが何かがある様子もない。林の前で感じた異様な空気もほとんど感じない。

「・・・戻るか」

そう呟いて今来た道を戻ろうと振り返ると突如、フッと周りが暗くなる。

おかしい。まだ春に夜というには早すぎる。なによりこうも突然明るさが変わるはずがない。

「なんだ?」

そしてその疑問に答えるかのように

ザシュッという何かが着られる音とともに背中に激痛が走る。

同時にビチャビチャとぬめった赤い液体が地面を赤く染める。

血だ。

「がはっ」

なにが起こったのか、倒れそうになりながらも後ろを振り向くと

怜治の血で赤く染まった鎌のような腕を持つ２ｍをこえる巨大なカマキリが

その両目で怜治を見下ろしていた。

第2話　Ｗｅｌｃｏｍｅ　ｔｏ　非日常（後書き）

なかなか話が進みませんね…。

すいません。

第3話　魔導騎兵（前書き）

なんかナレーション部分をうまく書けてる気がしないなぁ・・・

第3話　魔導騎兵

怜治の家の地下室に放置された黒バイクは考える。
やっと自分を扱える人間が現れた。だがその人間には変人扱いされてしまった。
ショックだった。
自分はしゃべりはするが基本自分で動くことはできない。
そして誰でも自分を動かせるというわけではない。素質がいるのだ。
自分の中に組み込まれている力を使える素質が・・・。

『さて、どう説明すれば理解してるくれっかなぁ・・・ン？』

とりあえず例の少年に自分のことを正しく理解してもらわなければと考えていたら、自分の中の力が異様な波長を外から察知した。

『魔力反応？いやこれは魔導師のものじゃないな。何かのマジックアイテムが発動したか・・・？』

突如察知した外の異変の正体を確かめようと自分のサーチ能力を集中させる。
ここから少し離れた場所にその波長の発信源はあった。
そしてそのすぐそば、というより重なるようにして自分の知っている力の波長。

『ウオオオオ！！ア、アイツなんでそんなとこにいんだよ！？ま、まさかピンチか！』

察知した二つの反応の一つが怜治だとわかると慌てる。確かに彼には素質がある。

だがその素質が丸腰ではまず発揮されない。発揮するには自分が必要だ。

『よ、よし！待ってろよ相棒！！今オレが助けに・・・は！』

意気込んでみたものの先ほどを言ったように彼（？）一人では動くことができない。
だがすべての機能がそうだというわけではない。
実際声を発したり魔力を察知する機能は通常どおり使用できる。

『クソッもう長いこと使ってないけど・・・使えるか？』

悪態をつきながらも自分の中の力を使うため集中する。

・・・・・・・・・・

沈黙の中、張り詰めたような空気が流れる・・・。
すると、もともと光が少ないはずの地下なのにさらに1枚暗い膜で部屋を覆うかのように暗くなる。
それと同時に地面に紺色に輝く陣が描かれる。
二重の円の間に文字のようなものが綴られ、五芒星が円の中に浮かび上がる。

『キタアアアアァァァァァーーーーーーーーーーー！！！！！！！！！！

待ってろよ相棒！今、オレがぁぁぁ・・・行くぜエエエエエエエエエエ一一一一一一！！！！！』

歓喜の声を上げ、陣が放つ光が彼の車体を包み込む。

やがて光が収まったとき黒バイクの姿は地下室から消えていた。

魔法少女リリカルなのは☆Ｔｈｅ　Ｒｉｄｅｒ☆　第３話　魔走（ライ）騎兵（ダー）

怜治は林の中を走っていた。
息を乱し、時折後ろを確認しながらがむしゃらに走る。
林に入るときには持っていたカバンも今はない。

シュッと空気を切り裂く音を聞きとっさに地面をけり、前に飛ぶ。
すると今さっき怜治がいた場所に鋭い鎌が振り下ろされる。
ドスッと地面に突き刺さるそれは薄い緑色で、本来鎌が持つ金属らしい鈍い輝きはない。
それもそうだろう、その鎌は生き物の体の一部なのだ。
見上げるとそこには通常ではありえない大きさの、２ｍを超えるカマキリがいた。

「くそっなんだよあれ、カマキリの鎌ってあんな風に使うもんか？」

確かに通常カマキリの鎌は獲物を押さえつけるものであり、切り裂くようには使われない。
だが別にカマキリ本人が特別おかしな使い方をしたわけではない。

それがあまりに巨大なためにそう見えてしまうのだ。

ズボッと鎌を引き抜くとカマキリは再度獲物をとらえようと鎌を振り上げる。

うおっと声をあげて慌てて体を起こし怜治はまた走り出す。

よくみると怜治の顔はところどころ切り傷が見え、服も土や葉っぱで汚れている。

背中は鎌で切られたせいで破れ、赤い血が流れている。

見るからに痛々しいが怜治にその感覚はない。

驚きと恐怖でそこまで意識がまわらないのだ。

「と、とりあえずケータイで・・・」

ポケットからケータイを取り出し登録したアドレスの中から悪友2人に連絡を取ろうとするがそこで通話ボタンを押すことをためらってしまう。

（あいつらをこれに巻き込んでいいのか?）

電話をして助けてくれといえば2人は迷わず来てくれるだろう。

それは決して自惚れではない。

彼らは怜治を含めそういう人間だ。

だが呼び出したとして、それで解決するのだろうか。

後ろを見るとカマキリはいまだに自分を追ってくる。

木や枝が邪魔なのか相手はそれほど速くはない。

それでも真っ向から相手にすればどうなるだろう。

さきほど自分の背中を切り裂いた鎌に目をやり想像してしまう。

友人が鎌に切り裂かれる光景を、押さえつけられその身を喰われる

光景を。
一度でもそう考えてしまうともう電話をすることはできない。

疲労と混乱と思考することに気を取られ足がもつれる。

（しまっ・・・！）

心で悪態をつき、体勢を保てずついに転んでしまう。
それと同時にケータイも手から離れてしまう。

すぐに立ち上がろうとするが下半身になにか重いもののしかかり、
起き上がることができない。
最悪の想像をしながらも首を後ろにまわすとカマキリが自分の体に
のしかかっていた。
その眼は明らかに獲物を前に狩人がするそれであった。
無論狩られるのは自分。

もう駄目だ！と目をつぶる。
ドスッと自分のそばに何かが刺さる音が聞こえる。
おそらくあの鎌を地面に突き刺したのだろう。
自分の頭が喰われるグロテスクが光景が頭に浮かぶ。

（誰か・・・助け・・・）

『ヒイイイイイイイイイィィィィィィィハアアアアアアアァァァァ！！！！！！！！！」

バリイィィンとガラスが割れたような音が響き空間に穴があく。
そこからけたたましい叫び声とともに黒バイクが現れる。

黒バイクは怜治にのしかかっていたカマキリを突き飛ばし怜治の傍で着地する。

ズズウゥンと地響きが起こり枝をバキバキとへし折りながらカマキリが地面に倒れる。

「お前・・・地下室の黒バイク！どうして・・・どうやってここに？」

『んなこたー後だ。まずはあのバケモンをどうにかするぞ！』

「どうにかって・・・どうするんだよ？」

『カンタンさ・・・戦うんだよ！！』

「はぁ？・・・誰が」

『オレとオマエに決まってんだろ！』

「どうやってだよ！？ケンカが弱いつもりはねえがあれは無理だ！」

『オレもって言ってんだろ！言ったろ？
オマエにはオレの中の魔法の力を使う資格が、素質がある！
戦い方はやりながら教えるとして、とりあえずオレに乗れ！』

「またそれか・・・百歩譲ってお前が本当にしゃべるバイクだとして、魔法なんてあるわけ・・・」

『んなこと言ってる場合じゃなさそうだぜ？あちらさんはもうやる気マンマンらしいぞ』

先ほど飛ばされたカマキリが起き上がりこちらを睨みつけている。
目の色は怒りの色に染まっている。

『さぁ決めな！オレに乗って逃げるか、オレと一緒にあれに一発ブチかますかよぉ！！』

「・・・・・・」

一瞬迷いながらもキッとカマキリを睨みつけ、黒バイクに跨り、ハンドルを握る。
その瞬間地面に陣が描かれそこから放たれる光が一人と一台を包む。

『―Un veh?culo dos―de ruedas grande―clasificado seg?n tama?o que trabaja a trav?s de magia que esto, el cord?n del principio de desarrollo el registro del due?o de ”la estampida” de BK―522《これより、魔動式大型二輪車、開発コードBK―522『スタンピード』の所有者登録を開始します》.

―Principio ... completado la medida de la longitud de onda del poder m?gico《魔力の波長の計測を開始・・・完了しました》.

―Empiezo la afinaci?n con el centro del pseudolink《擬似リンカーコアとの同調を開始します》.

―＊＊ Complet? . 30% ... 60% ... 90% ...《・・・30%・・・60%・・・90%・・・完了しました》

―La conexi?n de la conexi?n de la mente se completa por la presente《これにより精神リンクの接続が完了》.

―Confirmo la informaci?n del due?o《所有者の情報を確認》.

―Nombre, Satoshi Matsuda Osamu, AAA grosero ― del sacerdote cabeza de diablo《名前、松田怜治、魔導師

ランクＡＡＡ－》.

―Endererece la naturaleza ... llame para convertir un poder m? gico en el presente no –; nod espierte.《魔力変換資質・・・風、ただし現在は未覚醒》;

―La afinidad con nuestro cuerpo es A＋《当機体との相性はＡ＋》.

―Habr? posibilidad de subir en futuro《今後上昇する可能性あり》.

―Empiezo la construcci?n de la chaqueta de la barrera consecutivamente《続いてバリアジャケットの構築を開始します》.

―＊＊ Complet? ... 25% ... 50% ... 75% ... construcci?n《・・・25%・・・50%・・・75%・・・構築完了しました》.

―Con el anterior terminó el registro del due?o《以上で所有者登録を終了します》.

―Agradecerle de antemano de hoy en adelante《これからよろしくお願いします》.

Mi（マイマスター）amo.』

黒バイクのとは違う、機械的な男の声が響き、光が徐々に弱まっていく。

光が止んだ時、怜治の姿は変わっていた。

短く切った黒髪の上からゴーグルを着け黒を基調とし、肩にプロテクターのついたライダースーツ、ブーツとグローブ、紺色のロングコートを纏っている。

「なんだよ・・・この姿？」

『「バリアジャケット」魔法を使うものが纏う防護服みたいなもんだ。

どうだ？魔法を信じる気になったか？』

「それじゃあれか？俺は、まほう使いになったってことか？」

『普通はな・・・だがオレを使うものはそうは呼ばねえ。』

「じゃあなんていうんだよ？」

『それはな・・・・・

魔導騎兵（ライダー）だ』

第3話　魔導騎兵（後書き）

次回は戦闘回です。

第４話　スタンピード（前書き）

やっとあのキャラが登場・・・。
そして話はあまり進まない・・・・ｏｒｚ

第４話　スタンピード

日が暮れかけた海鳴市の空を二つの影が飛ぶ。
それはどちらも人の形をしている。
まだ明るさが残る中で、地上にいる者が気付けば騒ぎだすかもしれない。
日が暮れかけた海鳴市の空を二つの影が飛ぶ。
それはどちらも人の形をしている。
まだ明るさが残る中で、地上にいる者が気付けば騒ぎだすかもしれない。
だが、誰一人として、空を見上げている者ですらその影に気付かない。
まるでもともとなにもないかのように認識されない。

飛んでいる2人はどちらも女性であった。
一人は赤い長髪で犬の耳のようなものが飛び出ている。
年齢は１６歳ぐらいであろうか、シャツにホットパンツといった服装で、お腹や手足を露出しており、シャツのしたからは女性を象徴する大きなふくらみが見てとれる。

対するもう一人は幼さの残る少女であった。
瞳の色は赤く、感情を読み取れない表情だが顔立ちは美少女といえるほど整っている。
流れる長い金髪をツインテールで結び、細く白い手には不釣り合いな黒い斧を持っている。
服装は黒いマントを羽織り、黒いレオタードのような服で同じく黒いニーソックスを履いている。

空気を切り裂いて飛行する中、金髪の少女が赤毛の女性に声を飛ば

す。

「アルフ。ジュエルシードの反応はこっちの方からであってるんだよね？」

「そうだよフェイト。
どうやらもう発動済みで、しかもどっかのバカが結界も張らずに戦ってるみたいだよまったく・・・」

『管理局』『ジュエルシード』『結界』といった普段聞きなれない単語が連なる。
そして、アルフ、フェイト、それが彼女たちの名前なのだろう。

「あれ、ほんとだ・・・誰だろう？」

「管理局の魔導師にしろ、そうでないにしろ、素人だろうねぇ」

アルフは眉間にしわを寄せて不快感を表す。

「そっか・・・。じゃあ急がないとね。
暴走して騒ぎが起きたりしたら大変だもん」

「フェイトは優しいねぇ～ホントット。
あの人の娘とは思えないよ」

「アルフ。
母さんのことを悪く言わないで・・・」

でもさぁ～、とアルフが続けようとするが、フェイトが首をフルフルと横に振ってそれを遮る。

その顔はどこかさみしさが浮かんでいた。

「行こうアルフ。
早くジュエルシードを集めるんだ、母さんのために！」

決意の意思を赤い瞳に宿し、フェイトはさらにスピードを上げる。
それを追うようにアルフもスピードを上げる。
２人の魔導師は金色とオレンジ色の軌跡を描きながら空を翔る。

魔法少女リリカルなのは☆Ｔｈｅ　Ｒｉｄｅｒ☆　第４話　スタンピード

心臓の鼓動がはやくなっていくのを怜治は感じていた。
それがいまだに残る恐怖からか、それとも戦いという場にいることへの緊張からかなのかは分からなかったが、間違いないのは今自分が日常とはかけ離れた世界、心のどこかで望んでいた非日常の世界にいることである。

『準備はいいか？相棒』

「ああ、いつでもいいぜ。・・・っとその前に」

『ア？なんだよ相棒？』

「お前って名前なんていうんだ。？

あと、俺の名前は『相棒』じゃなくて怜治だ。松田怜治」

『レイジね・・・れいじ・・・レイジ・・・OK覚えた』

「んでお前の名前は？」

『オレか？
オレの名前はスタンピードだ』

「暴走（スタンピード）ね・・・。なんか物騒な名前だな。・・・スタンでいいか」

『おう！好きに読んでくれよなアイボ・・じゃなくて、レイジ！』

その言葉を合図にしたかのようにカマキリが一人と一台に向かってくる。

「来たぞ！俺はなにをすればいい？」

『まず第一に、オレを動かす原動力は魔力！
魔導師ならみんな持っている気という精神エネルギーというか・・・。
とにかくそれをオレに流し込め！
そんでもって片手をスピードメーターの上に掲げろ！』

「流しこめってどうやんだよ！？
俺は魔法なんてつかったことねぇんだぞ！」

『気合いだあああぁぁぁぁぁぁ！！』

「ふざけんなあぁぁぁ！！」

キシャアアアァァっと三者三様の叫びが重なり、カマキリは片方の鎌を振り上げる。

「くそっ！こうなりゃなるようになれだ！」

ハンドルを左手で強く握りしめ、右手をスピードメーターの上に掲げる。

「はあああぁぁぁぁぁ！！」

怜治の声に反応するかのように右手の手のひらに紺色の光が集まる。
その光は最初は球形だったが、徐々に形を変える。

パキンッという音とともに重量感のあるものが右手に納まる。

「何だこれ・・・銃か？」

その手にあったのは一丁の銃があった。
ただ、普通の銃ではない。
レンコン形の弾倉、シリンダーがあることからリボルバータイプだとわかる。
さらにシリンダーの上には刃渡り３０ｃｍ程の剣がついている。
全体は銀色で銃身に目をやると三本の銃身が三角型についている。

（銃剣ってやつか？でも銃身が三本って・・・弾とかどうやって発射されんだ？）

『ボケっとすんな！
来たぞ！』

「うおっと！！」

いつのまにか鎌が目の前まで来てることに気づいてとっさに銃を横にして前に出す。

ガキィィィン

鎌と剣がぶつかり合い、甲高い音が響く。
二つの刃はギリギリと音を立てて拮抗している。

「おお！すげぇ！！」

『感心してる場合じゃねぇぞ！さっさと撃ちな』

はいよ、と剣を横に薙いですぐさまハンマーを上げ銃口をカマキリに向けて引き金を引く。

三本のバレルから紺色の光弾が発射される。
ズドン！！音が響くと同時に光弾はカマキリに命中してその巨体を吹っ飛ばす。

おお！怜治は銃の威力に感激の声を上げる。

『油断すんなよ！
ここはいったん距離をとるぞ！』

「なんで？
今の見たろ、このまま押し切れそうだぜ？」

『剣がついてるからって銃で近距離戦はあんまするもんじゃねぇ。
だいたいオマエ、あの鎌と毎回タイミング合わせられるのか？』

なるほど、と納得し怜治はスタンを後ろに向けて走り出す。

「なんかお前ってほんとに普通のバイクとは違うんだな」

スタンの後部をみると本来排気ガスが出るべきマフラーからは紺色の光の粒子が絶え間なく出ている。

『ン？
まぁ自覚がなかったわけじゃねぇが、やっぱそうなのか？』

「当たり前だろ？
なんかみたことねぇ形のエンジンしてるし、俺の魔力で動いてんだろ？
ようはエコカーってやつだ。」

『気楽だなぁ。
さっきも言ったが魔力ってのは一言でいえばオマエの精神力だ。
あんまりトバしすぎるとバテてぶっ倒れて、出てた速度次第じゃ即死だな』

「・・・マジで？」

『マジだ』

聞かなきゃよかった、とほんの少し後悔していると、突如スタンが声を荒げる

『レイジ!!
頭下げろ、アタマ!!』

は?と聞き返してくる怜治に再度指示すると、訳も分からずといった感じで頭を下げ、機体にピッタリとくっつける。

その瞬間、ズバン!!
と空気を切り裂く音が鳴り、怜治の頭の上をなにかがかする。
その際髪の毛が数本切れた。

バキバキ・・・ズウゥゥン

と大きな音がうしろから鳴り、なにがあったのかと後ろを確認すると、大きな木が2，3本幹の真ん中あたりから切り倒されている。

「な、なんだ!?」

突如起こった現象に戸惑いつつも遠くを見ると、あの巨大なカマキリが立ち上がっていた。
ただ一つ違うのは右手の鎌が異様なまでに長くなっていた。
ただ単に長くなったのではない。
まるで伸ばしすぎた電気コードを戻すようにズルズルと地面を鎌が引きづられて、やがてもとの長さに戻った。

「どうなってんだよあれは!?」

『どうなってって、腕の鎌が伸びてここまでとばしてきたんだろ?』

「んなこたぁ見りゃわかるって!!

俺が聞いてんのはなんで鎌があんなに伸びてんだってことだよ！！」

『ゴムゴムの実でも食ったんじゃね？』

「・・・・ツッコまないぞ」

地下室にいたはずのこいつがなんで某海洋冒険ロマン漫画を知っているのか問い詰めてみたいがそんなことをしている場合ではない。

『ジョークだっての、ノリ悪いな・・・。
多分あれを巨大化させたマジックアイテムの効果だろうな』

「え？それじゃやっぱあれはなんか魔法が関わってるってことか？」

『そりゃあ自然現象であの成長はありえねぇだろ。
ってか言ってる傍からほらまたキタアアアァァァァ！！！』

うおおおぉぉぉ！！っと慌てて頭を下げるとそのすぐ上を鎌が通り過ぎる。
そしてまた木が数本切り倒される。

「ちょっとした森林伐採だな」

『このままだとちょっとじゃ済まなくなりそうだがな。
林がただの荒れ地になっちまう』

「じゃあどうすんだよ！」

『まあ任しとけって、とりあえず魔力供給の方、よろしく頼むぜ』

そういうとグーッとスタンがスピードを上げる。
怜治の片手が銃でふさがっているのにもかかわらず安定して走っていることから自動運転機能でもついているのかもしれない。
そのまま前方の大きな木にスピードを上げずに突っ込む。

「ちょ！お前何してんだよ！」

『任しとけって言ってんだろ！！
オレを信じろよ！！』

その言葉を合図に前輪を上げ、ウィリーの体勢になる。
そして前輪に炎が、後輪に電気が纏う。

『ウオリャアアアアアーーーーーーー！！！』

前輪を上げた体勢のまま木にぶつかり、そのまま木を垂直に駆けのぼる。

ガサガサと枝と葉をかき分け、木を登り終えるとそのままの勢いで空に舞い上がる。

本来ならそのまま重力にしたがって地上へ落下するのだがその様子はない。

「うわっ、ぺっぺっ、口ん中に葉っぱが入った・・・・。
ってうお！！空飛んでる！？」

『ハーッハッハッハッハッハ！！

見たか！これがオレの数ある特殊機能のひとおおぉぉぉっ！
どーだ驚いたろ？感激だろ？カッコイイだろ？オレの乗り手になってよかったろ？
さぁ褒めろ！讃えろ！敬うがいい！！』

「なんか褒める気が音速で失せていくわ・・・・」

そんな軽口を叩き合っていると、地上から大きな影が飛び出す。

それは、大きな羽をバタつかせてこちらに向かってくるあのカマキリだった。

『チョ！飛べんのチミィ！！！？！？』

「まぁあんだけでかくなりゃ飛行距離も比例して長くなるよな。
・・・んで？次はどうすんだ？
このまま脳天に後輪でもぶち当てるか？」

『ぶち当てる前に鎌で真っ二つにされると思うぞ？
・・・とりあえず銃をチェンジすんぞ』

そういうと右手に持っていたリボルバーが輝き、二つに分かれて両手に納まる。

「こりゃまたＳＦチックな銃だな、おい」

それは銃全体が赤く、銃の真ん中あたりにグリップがあるため少し銃が大きく感じる。
銃身が太く、銃口は縦に３つ、横に２つの計６つある。

そんな拳銃が二丁あった。
まさにＳＦ映画やゲームの兵士がもっていそうな銃である。

『それは一度に撃てる弾数が１～３６発まで選べんだ。
しかもホーミング機能もつけれる』

「なんでそんな無駄に高性能なんだよ。
っていうかもうこれどっかの特殊部隊の装備より上じゃね？」

『いちいち気にすんなよ。
考え事ばっかしてねえで、あちらさんの相手をしてやれよ』

確かにまだカマキリと距離はあるが、あちらは鎌を伸ばすという奥の手がある。

「んじゃ、こっちもこの銃の試し撃ちといきますか」

『弾数はどうする？』

「そうだな・・・景気づけに最大弾数３６発といきますか！！」

ガチャッと魔力でできた弾が装填される。
そしてこちらへ飛んでくるカマキリに向けて発砲する。

ズドドドドッと二丁の銃から矢じり型の光弾が大量に尾を引いて弓なりに飛ぶ。
光弾の軌道が直線じゃないからか、弾数が多いからか、リボルバーほどの弾速はない。
にもかかわらずその数に驚いたのかカマキリは回避行動をとることもなくすべての光弾をその身に浴びる。

しかし、体勢は崩すも地面に落下することはなく、何メートルか高度を下げるにとどまった。

「くそっ！　やっぱリボルバーより威力が低いのか！」

『だが体勢は崩れた！
このままたたみ掛けるぞ！』

二丁の銃が三度輝き今度は一丁の長物が現れる。

「今度はライフルか・・・武器をかえればオールレンジに対応できるってか？」

新たに現れた銃はグリップは茶色でその銃身が黒くて長く、スコープがついている。
ボルトアクション方式といわれる、薬きょうの排出を一発ずつ手動で行うタイプのものである。

ゲームや漫画の見よう見まねでスタンを台座代わりにして引き金に手をかけスコープを覗く。

（うわっ・・・ライフルのスコープって思ってたよりよく見えるもんだな）

率直な感想を抱きつつ、狙いをつけて引き金を引く。
狙うのはカマキリの頭部だ。

パンッと軽い音が鳴ると同時にカマキリの頭部が大きく後ろに反り

かえる。
その勢いのまま今度こそ地面に落下する。

（っ痛・・・結構反動くんな・・・。
遠距離狙撃用だろうから、やっぱ弾速はリボルバーのそれ以上か・・・。
つーか相手が虫とはいえ、こんな簡単に弾が当たるかと思うと複雑な気持ちだな・・・）

銃は剣と違って殺したという感覚が残らないといったのは誰だったか・・・。
乱射魔（トリガーハッピー）になったりするなよ、と自分に言い聞かせる。

『よっしゃあ！　これでトドメだ！』

ライフルが消え濃い青色の突撃槍（ランス）が現れる。
それを右手で握り、落下したカマキリを追撃するため急降下する。

『これで・・・・』

「終わりだあああぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

スタンも含め、全体重をのせたランスがカマキリの胴体を貫き地面に縫い付ける。

ジタバタと手足を動かしてもがくカマキリの胴体から青色の宝石が飛び出す。

『・・・！　これがこの虫を巨大化させた原因か！！』

「どうすんだ！？」

『任せな・・・封印（シーリング）！！』

スタンの龍頭を模した前面の真ん中が開く。
まるで龍の口のようだ。
そのままバクンッと宝石を飲み込む。

「おいおいおい！！　それでいいのか！？
お前までかくなったりしねぇだろうな！？」

『落ち着けって、今のは封印（シーリング）、これでもう問題解決だ』

証拠にほれっ、と地面を見ると先ほどまで巨大化していたカマキリが普通サイズに戻っている。
胴体をランスで貫いたはずだが特に問題ないようだ。

「んじゃ、これで終わりか・・・？」

『ああ。・・・まぁ初戦闘にしちゃまあまあってところじゃね？』

「まあまあかよ」

戦いが終わり安堵していると周囲の空気が変わる。

「！・・・なんだ！？」

『こりゃあ結界か！！
・・・でも誰が！？』

「やっと着いた・・・。
あなたの持っているジュエルシードを渡して。」

上空から声が聞こえ、見上げると空中から、黒い服にマントをはおった金髪の少女とお腹を見せる服を着る赤毛の少女が下りてきた。

「もう一度だけ言います。
・・・あなたの持っているジュエルシードを渡して。」

冷たい感情のこもった声が再び響く。

怜治の魔導師初日は、まだ終わらない。

第5話　強くなりたい

「あなたの持っているジュエルシードを渡してください」

突如空から舞い降りてきた金髪の少女が冷たく言い放つ。

「誰だお前？・・・・魔導師か？」

『だろうな、しかもかなりの腕前だな』

「マジか！？」

「・・・・・・・・」

少女はスッと片手を差し出す。

さっさと渡せということなのだろう。

「ジュエルシードってのはさっきスタンが封印したやつのことだよな？

・・・あんな化け物生み出すもん手に入れてどうするつもりだ？」

「・・・・・・・・」

「黙ってるってことは誰かに頼まれててそれ以上は知らねぇってことか？

それとも人には言えねぇようなことに使うってことか？」

「あ～～もううっさい奴だね！！

さっさと渡さないと噛み殺すよ！！」

赤毛の少女が声を荒げ、犬歯をむきだしにしている。
噛み殺すというのは比喩ではないのかもしれない。
よく見ると犬の耳やしっぽのようなものが見える。

（犬のコスプレ・・・・か？）

「アルフ・・・・落ち着いて」

「うっ・・・ゴメン、フェイト」

『なるほど、アルフにフェイトって名前なんだな？』

「あ・・・・・」

しまった、といった感じでフェイトの先ほどまでの冷たい表情が崩れる。

「いや、そんな罠にはまっちまったみたいな顔すんなよ・・・・」

「と、とにかく！！　ジュエルシードを、あなたが今封印した宝石を渡してください！」

うっかり名前を知られてしまったのが恥ずかしかったのか、頬を紅潮させている。

「そればっかだなお前・・・・断ると言ったら？」

「力づくで・・・・奪います」

「ハァッ！！」

「クッ！」

力づくで奪う。
その言葉と通り、少女はその手にもった黒い斧を振り下ろし、それをとっさにランスで受け止める。
互いの武器がぶつかり、激しく火花が散る。

だが単純な腕力なら怜治の方が勝り、少女を押し返す。

「くっ・・・バルディッシュ！！」

『Ｓｃｙｔｈｅ　Ｆｏｒｍ』

少女の言葉に反応し斧についている金色の宝玉が光り、斧が変形する。
ヘッドが直角に展開し、先端に金色の光が発生する。
それはさながら鎌のようである。

「また鎌かよ！！」

「ハァッ！！」

鎌に変形した状態で再び切りかかる。
それをまたランスで受け止めようとする。

『レイジ！！　待て！』

「うおっ！」

急にスタンが後方に急発進したため、光の鎌は空を切り、怜治は危うく落ちそうになってしまう。

「い、いきなり動くなよスタン！！　落ちるとこだったじゃねぇか！！」

『そういうことはランスの状態をよく見てから言うんだな』

はぁ？と疑問符を浮かべながらもランスに目をやると先端部分が輪切りにされていた。

「げっ」

『ありゃ魔力で精製された刃だ。
魔力コントロールもまともにできねぇ今のお前じゃ、ランスごと真っ二つだぜ』

「やっぱ魔法使った戦いは向こうが上ってか？」

『さっきそう言ったろ？

・・・とりあえず空に逃げるぞ。地上じゃ遮蔽物が多くて走りにくい。』

ああ、と頷き魔力をスタンに注ぎ込む。
スピードを上げ、その勢いを利用して空に舞い上がる。

空中で旋回しながらフェイトの出方を窺っていると、地上から何かが飛んできた。
ブーメランのように回転している、先ほど彼女がだした光刃だ。

「飛ばせんのかよあれ!!」

『かわせえぇ!!』

すんでのところで回避するが、光刃は向きを変え、再び向かってくる。

『ホントにブーメランだな・・・かわしきれねえんなら撃ち落とす!!　レイジ!!』

「はいよ!」

後ろを向いた状態でライフルを出現させすぐさま引き金を引き、発射された紺色の光弾は光刃とぶつかり互いに消滅していく。

「よっしゃ!」

『嬢ちゃんも出てきたぜ』

前を向くとフェイトが自身の周りに光りの球、フォトンスフィアを

４個展開している。

「バルディッシュ、フォトンランサー・マルチショット」

『Ｐｈｏｔｏｎ　Ｌａｎｃｅｒ』

声とともにフォトンスフィアが怜治たちに向かって発射される。

『狙いが甘ぇ、かわせる！』

高度を下げてフォトンスフィアをかわし、ライフルでフェイトに狙いを定める。

「あたしを忘れんじゃないよ！！」

林の中に潜んでいたのか、当然現れたアルフの鋭い蹴りが怜治の横っぱらに刺さる。

ガハッと肺の中の空気を吐き出し、スタンから体が離れ、そのまま吹き飛んでしまう。

『レイジィィィーー！！』

スタンが回り込み、空中で怜治をキャッチする。

「サンキュ、スタン。　あ～痛え・・・ってか二対一かよ」

『キタネェとか言うなよ。　これはスポーツじゃねぇんだからな。
　ってかオレがいるから二対二だぞ』

「わかってるよ。　あ～まじで痛ぇ～」

『・・・痛いだけか？　骨とか大丈夫か？』

「あ？　・・・大丈夫だと思うぜ？　・・・ってか女の蹴りで折れるほどひ弱なつもりはねぇぞ」

『マジか・・・？』

「大丈夫フェイト・・・って聞くまでもないよね」

「うん。　大丈夫だよ。　それよりあの乗り物・・・」

「あのバイク？　やっぱデバイスじゃない？　乗り物型なんて見たことないけど」

デバイスとは魔導師が魔法を使う際に必要となるプログラムの構築と発動を補助するものである。
形状は杖や何らかの武器とさまざまである。
さらに機種にもタイプがあり、フェイトがもつバルディッシュはインテリジェントデバイスといわれる人工知能が搭載されたもので、デバイス自体が意志を持つため扱いが難しいが使いこなすことさえできればもともとのスペックを超えた力を出すことも可能になる。
そんなもの使いこなしていることから、フェイトの実力が高いことが分かる。

だがスタンは一般的なデバイスとは明らかな違いがある。
まず第一にスタンが行っていることは魔法の補助ではなく、所有者、

怜治の魔力を使っての自律行動、武器の召喚であり、バルディッシュのように魔法発動の補助をしているようにはみえない。

「あ、そうそう。　デバイスの方もおかしいけど、乗ってる奴もおかしいよ。　このあたしの本気の蹴りを喰らっても骨一本折れないんだよ」

えっとフェイトは目を見開く。

そう、アルフは犬の耳やしっぽがあることからわかるように普通の人間ではない。

いや、そもそも人間ではないのだ。

アルフは使い魔と呼ばれる魔導師が使役する一種の人造生物で、動物を素材とし、人工の魂を憑依させることで作り出されるものだ。

彼女の場合、もととなった動物は狼である。

当然もとが動物であるから身体能力は人間のそれより高い。

その上アルフは前線でフェイトをサポートするため、近接戦闘に長けた使い魔だ。

そんなアルフの蹴りをまともに喰らえば、骨はもちろん、最悪内臓にも危険が及ぶはずなのだが、怜治にそんな様子はない。

「別に防御重視のジャケットにはみえないし、プロテクションを使ったわけでもない。　なのに無傷、おかしな連中だよまったく」

「ん～・・・・」

指をあごにあてて考えるフェイト、無論相手への警戒は怠らない。

なにせ魔法を発動するのではなく、武器を召喚するという見たことのないタイプのデバイスを扱う相手だ。

魔導師としての実力はフェイトが一枚も二枚も上手だが、あの手の

特殊なものを持つものはこちらの予想だにしないことをしてくるものだ。

「ん・・・？　なんか向こう考え事してるみたいだな」

『多分、オレみたいなデバイスをみたことねぇから警戒しながら情報を整理してんだろうな』

「ふ～ん。　やっぱお前ってレアものなわけ？」

『まぁ、一般に普及してないはずだからな』

（オレからしたら、使い魔の蹴り喰らって無傷なオマエの方が不思議だけどな・・・）

「へぇ～実は凄い奴だったんだなお前」

はぁ～、と感心しているとフェイトとアルフがこちらに鋭い視線を向けている。

どうやら考え事は終わったようだ。

（もしかしたら奥の手みたいなのがあるのかもしれない・・・。だったらそれを出す前に倒す！！）

瞬間、フェイトの姿がぼやける。

否、残像が残るほどの速さで移動を始めたのだ。

フェイトは機動性を重視した高速戦闘型の魔導師だ。

レオタードのようなバリアジャケットもより速く動くことを追求し

た結果のものだ。

バルディッシュをサイズフォームにし、一気に斬りかかる。
それをとっさに銃剣のリボルバーを出して剣の部分でそれを受け止める。

『レイジ！　さっきも言ったが今のオマエじゃ魔力刃を受け止めきれねぇぞ！！』

「わかってるよ！！」

ギリギリと剣を傾け、リボルバーの銃口をフェイトに向け、発砲する。

「！！」

『Ｄｅｆｅｎｓｏｒ』

着弾する直前にバルディッシュの金色の宝玉が光り、金色の壁が防御する。
だが衝撃は殺しきれずフェイトの体が吹っ飛ぶ。

「ここまま一気にいくぞ！！」

リボルバーから二丁拳銃に切り替え魔力弾を装填する。

「弾数２０、ホーミングショット」

『ファイアーーーー！！』

二丁の拳銃から撃ち出された２０の光弾がフェイトに向かう。
それをフェイトは速度をさらに上げ、光弾をかわす。
だが怜治が撃ったのはホーミングショット、軌道を即座に変えフェイトを追い続ける。

「フェイトーーー！！」

「よそ見してんじゃねぇ！！」

ランスを出し、アルフを殴りつけ、アルフはそれを腕でガードする。
ランスの先端は切られているため本来の使い方とは異なるが、殴打に使えば威力は期待できる。

「グゥッ！　なんて馬鹿力だよ！！」

「アルフ！　・・・バルディッシュ！！」

『Ｙｅｓ　ｓｉｒ！』

アルフを助けようとフェイトは速度を保ったまま１８０。方向転換し、自分を追撃する光弾に向かっていく。
その際体にかかるＧに顔をゆがませながらも光弾の群れの中に突っ込んだ。

傍から見れば自殺行為だろう。
最前線にあった光弾がフェイトの動きに合わせて軌道を変える。
これでフェイトは光弾に挟み撃ちされるかたちになる。

『Ｂｌｉｔｚ　Ａｃｔｉｏｎ』

バルディッシュの音声を合図にフェイトの体が直角に急上昇する。
それにより２０の光弾は互いにぶつかりあい、爆風と爆音を響かせる。
そして爆風を追い風のように使いさらに速度を上げてフェイトは一気にアルフのところへ移動する。

「アルフから・・・離れろおぉぉぉーーー！！！」

光刃を発生させて斬りかかる。
怜治はそれをかわすためにアルフから距離をとる。

『いくら追尾弾だからって、ムチャすんなぁあの嬢ちゃん。それだけ本気ってことか・・・それともあのアルフってのがよっぽど大切なのか・・・』

「両方だろきっと・・・」

本気だから、力づく奪ってでも手に入れようとする。
大切だから、多少の無茶は躊躇なく行える。
そんな強い思いが幼い少女を突き動かすのだろう。

「アルフ・・・大丈夫？」

「ありがと、フェイト。　大丈夫だよ、腕も折れちゃいない。　それよりフェイト」

「・・・なに？」

「あの魔導師、大量の魔力を身体強化にまわしてるんだよ。　だからあたしの蹴りをまともに受けてもケガしない。　腕力も強いんだよ」

「えっ・・・でもそんなになるほど魔力を使ってたら他の魔法なんて・・・」

「そう、だからあのバイク型デバイスも魔法を使わないんじゃない。　使い手に魔法を使う分の魔力がないんだよ。　だから魔力の消費が少ない武器召喚しかしない」

「ってことは・・・」

「フェイトが警戒してた奥の手ってのがでてくることはない」

「そっか・・・じゃあ・・・」

倒すことに集中できる。
今までは相手がまだ切り札を残しているのでは、と警戒していたがその心配もなくなった。
事実、彼の攻撃もほとんどを無効化できた。
ランスはサイズフォームで切れた。
リボルバーは完全とは言えないがダメージを負うことはない。
ホーミングショットもさっきと同じ方法で回避すればいい。
ライフルも狙いをつけている間に十分攻撃できる。

「いくよ。バルディッシュ」

『Ｙｅｓ　ｓｉｒ！』

（殺したり、傷つけるつもりはない。　一点突破の一撃で意識を飛ばして、デバイスからジュエルシードを奪って、それで終わり）

鎌を形作る金色の光がより一層強く、大きくなる。
キッと前方にいる相手を睨みつける。
その赤い瞳に迷いの色はない。

『おいレイジ。　あの嬢ちゃん本気で来る気らしいぜ』

「さっきまでのが本気じゃねぇのかよ。　最近のガキはおっかねぇな」

『構えろ、相棒』

「はいよ・・・相棒」

リボルバーを出し、銃口をフェイトに向ける。

こちらの使う武器があちらに効かないことは怜治も分かっていた。
だが、あちらに隙が一切ないわけではない。
おそらく向こうは次の一撃にすべてをかけるだろう。
ならばこちらが付け入るところはそこしかない。
攻撃を重視すれば自然と防御はおろそかになる。
さきほどフェイトが唯一防御を行ったリボルバーでの一撃、あちらの攻撃にカウンターのように合わせて撃つ。
これが怜治に残されたった一つの勝機。

周囲の音が少しずつ消えていくのを感じる。

戦いからの緊張や興奮で高まっていた心臓の鼓動も今は聞こえない。
目の前の相手へ集中しているのだ。

先に動いたのはフェイトだった。
本来なら、言葉通り目にも止まらぬ速さだが無意識に視覚に魔力を集中させ、その動きをわずかながら捕えることができている。

（ここだ・・・・）

金色の鎌を切りかかる体勢になり、一瞬ガラ空きとなった胴体へ光弾を撃ち込む。
それを行うために引き金を引こうとした時、

彼の視界が大きく歪んだ。

最初はフェイトがスピードを上げたのかと思った。
だが、それなら歪むのはフェイトの姿だけのはず、歪んだのは彼の目に映る全て。
目の前にいるフェイト、その後ろにいるアルフ、沈みかかっている太陽、オレンジ色の空、その空に浮かぶ雲がすべてが歪んでもとの形も保っていない。

（な・・・んだ）

続いて歪んだ視界が横に回転する。

わずかにみえるのは自分にむかってくる黒と金の戦斧。

『レイジ！！』

「！！・・・・ガアァッ・・・」

スタンの声と同時に自分の頭を強い衝撃が襲う。
気付くとフェイトとの距離は大きく離れていた。
どうやらフェイトもなにが起こったのか理解できていない様子だった。
だがなぜだろう、その顔はひどく青ざめているように見える。

『レイジ、レイジ！！　おい！　大丈夫か！？』

「あ・・・ああ。　でもいったい何が・・・痛っ！！」

刺すような痛みを感じ頭を押さえると、赤いドロリとした液体が手についた。

血だ。

「な・・・なんだ・・・血・・・？」

一度に色々なことが起こったようで完全に理解しきれてないが大体は察した。
おそらく、銃を撃とうとした瞬間、体に異常が起こり、そのままフェイトの攻撃をまともに喰らったのだろう。
そして、大けがをさせるつもりはなかったのに自分が血を流していることにフェイトも戸惑っているといったところか。

（なんだよ・・・怪我させるつもりなかったってか？　優しいとこあんじゃん・・・）

（どうして・・・ケガさせるつもりなんて・・・）

フェイトは確かに本気で怜治を攻撃しようとした。
だがそれはあくまで意識を一時的に奪うためで、そのために殺傷力を抑えた状態で斬りかかった。
斬りかかるといっても受けるダメージは棒などで殴れた感じに近いはずだ。
だが、予想外のことが起こった。
突然怜治の体が大きく傾いたのだ。
まるで意識を失い、バイクから落ちるように。
突然の事態に驚くも、すでに自分の持つ鎌は彼へ斬りかかっていた。
当初の予定では脇腹、肝臓のあたりを打って意識を奪う予定だったのに、怜治が落下しかけたことにより、鎌が怜治の頭を斬りつけそうになったのだ。
いくら殺傷力を抑えたとはいえ頭部へのダメージは最悪死につながる。
フェイトはとっさに鎌の軌道をかえるもバルディッシュの斧に当たる部分が当たってしまったのだ。

「ア・・・アルフ！　あの人！」

「落ち着いてフェイト！　ちょっと血が出てるだけだって、死ぬようなケガじゃないし、フェイトは悪くないって！！」

「で・・・でも・・・」

戦えるといってもまだ幼い少女、人が血を流している姿というのは衝撃的なのだろう。

（魔力の枯渇!?　・・・いやそんなんだったら飛行も続けられねぇはずだ。
・・・クソォッ!!　なんで気付かなかった!!　オレが自分で言ったんじゃねぇか!!　こいつは魔力コントロールに関しちゃド素人だって!!）

怜治の異常の原因はスタンを動かす際に必要な魔力の枯渇だ。
いや、正確に言えば枯渇ではない。
スタンの言うとおりなら、両者はとっくに地上に落下しているはずなのだ。
確かに、量こそ減っているが魔力の供給は停止していない。
ではなにが原因なのか・・・。

（連戦による緊張感からの精神的疲労か・・・もしくはこいつが無意識にやっている身体強化か・・・）

原因は二つある。
一つはスタンの言うとおり、精神疲労である。
突然巨大化したカマキリに襲われ、それを撃破し、休む間もなくフェイトという高レベル魔導師との戦闘。
興奮や緊張から、身体的疲労は感じなくなるが、精神は魔力の消費によりどんどん擦り減っていく。

もう一つはスタンという特殊なデバイスを使った戦闘方法と怜治の未熟な魔力コントロールだ。
怜治の魔力の最大値を１００とすると、彼はその7割を無意識に身体強化へ向けてしまっていたのだ。
つまり、残りの3割でスタンへの魔力供給、武器の召喚、銃への光弾の装填を行わなければならないのだ。
カマキリ程度が相手ならその3割で十分圧倒できる。
だが、フェイトのような実力者が相手なら話は違う、しかも連戦だ。
数少ない魔力で彼女を相手に立ち回るには無理がある。
だが無理やり魔力を絞り出すことでなんとか互角に戦えていた。
そしてその無茶の反動があの一瞬に帰ってきたのだ。

（クソッ！！　なんで気付かなかった！？　魔法を使い始めて1、2時間しかたってねぇこいつが、平然とあんな風に戦えるわけがねぇ！！）

よくみると怜治は息も荒く、出血も止まる様子はない。
回復する時間をあちらが待ってくれるはずがない。
そうスタンは判断し、

『レイジ、ジュエルシードを渡そう』

敗北を認める決断を下す。

「は！？　何言ってんだよスタン！？」

『仕方ねぇだろ！　オマエの魔力はもうカラッポ同然なんだぞ！？
回復する時間を向こうが待ってくれるわけねぇだろ！？』

「だからって・・・悔しくねェのか！？」

『悔しいに決まってんだろ！！　でもな、そんな意地で続けたらオマエ死ぬぞ！？
　幸いあっちはおとなしく渡しゃもうなにもしねぇ。　さっさと渡して、ここは退くべきだ。　リベンジなんてまた機会があるって！！』

「・・・・・・・・」

それは怜治も理解している。
自分の体は明らかに異常がある。
今は治まっているが、また魔法を使おうとすれば起こるだろう。
今回は運良く大けがではなかったが、次もそうという保証はない。

『レイジ、オマエと嬢ちゃんの差は経験の差ぐらいだ。　オレならトレーニングプログラムをつくれる。
　特訓して、力の制御をできるようにして、それで万全の状態でリベンジ、それでいいじゃねぇか？』

スタンの言うことは正しい、降参＝死ならば体に鞭打ってでも続けるべきだ。
だが今回は違う。
向こうの目的はジュエルシードという宝石、それさえ渡せばもうそれで終わるだろう。
事実、向こうはわざわざ殺傷力をおさえて攻撃してきている。
さっさと殺して奪う方がずっと早いのに・・・だ。
それを十分理解したうえでの怜治の答えは・・・

「・・・・・いやだ」

『ハァ!?　オ、オマエ何言って!?』

「向こうは本気で来てんだ。　それを調子が悪いなんて理由で終わらせれるか」

『なんだよその理屈!?　無茶苦茶だ!』

「無茶でもなんでも嫌なもんは嫌だ。　あいつは本気でジュエルシードってのを欲しがってる。
理由はしらねぇ。　でもあいつは最初穏便にすまそうとした。
それを俺が断った。
それでこの戦いが始まった。　つまりこれは俺が売った喧嘩だ。
てめぇが売った喧嘩を、てめぇの都合で止められるか!!」

『なんだそれ・・・・』

困惑の声から呆れた声に変わる。

「負けるならよ、本気でぶつかりあって負けた方が清々しいってもんだ。　調子が悪いなんてつまらねぇ理由で終わらせれるかよ」

『・・・・・・・・・・・』

なんか間違ったこと言ってる?みたいな表情で問いかけてくる。

『あああああああああああ～～～～～～～～～もう!!!!!

分かった、分かったよ!!　こうなりゃ最後までつきあってやる。

でもな、これは一生のお願いってやつだぞ？　次はぜ～～～～～～ったいねぇからな！！』

「わかったよ。　・・・あんがとな、相棒。　・・・おいフェイト！！」

「えっあっ・・・はい！」

「次一発先に攻撃当てた方が勝ちってことにしねぇか？　お前がさきに当てたらジュエルシードってのをやるよ。　でも、俺が先に当てたらやらねぇ、いいな？」

「えっ・・・あの、その」

「いいな？」

「は、はい！」

「ちょ、フェイト！？　何言ってんのさ！」

「・・・・・あ・・・・」

「よっしゃ。　いくぜ・・・」

体勢を立て直し、しっかりとシートに腰を下ろす。
フェイトもバルディッシュを斧の状態で構える。

『んで？　どうすんだレイジ、スピードは向こうが上だし、カウンター狙いで集中するとまた異常をきたすぞ？』

「そうだな・・・・」

啖呵をきってスタンを説得し、勝負方法も告げてみたが、肝心の作戦がなかった。

「どうすっかな・・・・」

ホーミングショットは効かないし、リボルバーじゃまた眩暈を起こしかねない。
ライフルも同じだ。
ランスは問題外。

一瞬、素手で殴りかかるか？と思うがそもそもあの速さに自分の拳が当たるとも思えないし、なによりあんな幼い少女を殴るということには抵抗があった。
銃で撃つのはいいのかよ、と言われそうだがそれとこれとは話が違う。

（あ～せめて一瞬でもいいからあいつのスピードに追いつけりゃなんとかできそうなんだが・・・。
　でもあの速さに追いつくって瞬間移動でもしねぇと無理・・・・ん？）

何かが頭に引っかかった。

瞬間・・・移動・・・

「おいスタン！」

『なんだ？　なんか作戦思いついたか？』

「お前、俺が巨大カマキリに襲われてる時突然現れたよな？　あれなんだ？」

『ああ・・・あれはオレの特殊機能のひとつで、空間跳躍っていうか空間転移っていうか・・・》

「ようは、瞬間移動なんだな！？」

『まぁ、ざっくり言えばそうなるな・・・。　っておい待て！　それやる気か？
　無理だ！　あん時はオレにあらかじめ貯めておいた魔力使ってやったがもうそれもない！』

つまり、瞬間移動を行うには怜治の魔力が必要となる。
そしてその量は今の状態でならもちろん、万全な状態でもかなりの魔力を消費するものらしい。

「大丈夫、たった一回だ。」

『だから、その一回でも今のオマエじゃ危ねぇつってんだろ！！』

「大丈夫だって言ってんだろ？　俺を信じろよ相棒？」

『あ～なんかこの１，２時間でオマエという人間が分かった気がするよ・・・。
　しゃーねぇ、最後までつきあうって言っちまったし、やってやるよ！！』

よっしゃあ、とスタンを発進させる。
無駄に遠回りしたりせず、フェイトめがけて一直線に。

（堂々と突っ込んでくるだけ？　ただの悪あがきかな・・・）

相手の行動に理解できない。
しかしすぐに頭を切り替え、迎撃態勢に入る。
足元に金色の魔法陣が現れ、左手にも同じような魔法陣があらわれ、

「いくぞ！　スタン！」

怜治の掛け声とともに、紺色に輝く魔法陣が現れる。

『我、ここに求めるは空を貫く力、はるか遠くわが手の届かぬかの地へ通ずる扉・・・』

（ぐっ・・・また・・・）

スタンが魔法を詠唱するにつれて、体から力が吸い取られていくのを感じる。
また視界が歪み、意識が遠のき始める。

「撃ち抜け、轟雷！！」

フェイトの方は詠唱が終了したのだろう、その手に電気を帯びた金色のエネルギー体が現れる。

（ふざ・・・けんなぁ！！）

メーター部分に頭を叩きつけ、遠のく意識を無理やり取り戻す。

（無理は承知の上だろうが、気合い入れろ俺ぇ！！）

『・・・我が心を糧とし、切り開く！！』

スタンの詠唱が終了し、車体が紺色に輝き始める。

「サンダァーーースマッシャァァーーーー！！」

『―Ｅｌ　ｖｕｅｌｏ　ｄｅｌ　ｄｒａｇ?ｎ《龍の飛翔》』

フェイトの手から金色の閃光が放たれ、スタンからスタンとは違う声が魔法名を告げる。

フェイトの砲撃が怜治たちを貫く・・・ことはなかった。

（なっ！・・・消えた！？）

砲撃が当たる直前に彼らの姿が突如消えたのだ。

（私と同じ高速移動？　いや、今のはそんなのとは違った・・・・）

「そういや、俺はお前の名前知ってんのにお前に名前教えねぇってのはずるいよな」

「！！」

いきなり後ろから声が聞こえあわててふりかえると、フェイトより少し上に先を斬られたランスを構えた怜治がいた。
先ほどの魔法の疲労からか、額には汗がうかび、うっすらと血がにじんでいる。

「俺は怜治。　こっちはスタン。　とりあえず名前だけ伝えとくぜ！！」

「くっ！」

怜治はランスを振り下ろし、フェイトはバルディッシュを振り上げる。
その勢いに突風が吹く。

「・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・はっ、負けかよ・・・・・」

怜治の脇腹にバルディッシュが食い込み、フェイトのマントの金具をランスが砕き、マントがバタバタと飛んでいく。
ランスはわずかにフェイトに触れてはいなかった。

「だ、だっからさっさとジュエルシードを渡しな！！　あんたのアイディアだろ！？」

「そう怒鳴るなっての、・・・スタン」

『いいのか？』

「約束だからな」

『はぁ～、分かったよ。　ほれ嬢ちゃん受け取りな』

ヘッドライトの下が開き、そこからひし形の宝石が出てくる。

「・・・ありがとう・・・ございます」

フェイトはひし形の宝石、ジュエルシードを受け取ると、ためらいつつもお礼を言う。

「いくよフェイト！　あんた達ももうあたしらの邪魔をするんじゃないよ！！」

アルフが指をパチンと鳴らすと周囲に張られていた結界が解ける。

そして、フェイトとともに飛び立つ。

「・・・・・」

一瞬何か言いたそうに怜治たちを振り返りるが、すぐに向き直って夕方の空に消えていく。

『・・・・・・はぁ～～～、まぁ負けだけど結構いいとこまでいけたんじゃね？』

「何言ってんだよ。　向こうがこっちの提案に乗ってくれたおか・・・・げ・・・・だ・・・・」

徐々に体から力が抜けていき、まぶたが重く垂れさがってくる。

同時にスタンの高度もどんどんと加速しながら落下する。

『エ？　レイジ？　ちょ、ちょっとこんな高いところで気を失うなぁぁぁぁぁ～～～～～～～～～～～～～～～～～！！！！！！
　落ちるうぅぅぅぅぅぅぅ～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～！！！！！！！』

スタンの絶叫が響き、ズドーンと大きな音をたてて地面に落下した。

「・・・・・なぁスタン」

『ン？　なんだよレイジ』

「俺さ・・・・・強くなれっかな？」

『・・・・・・・・・・』

「やっぱ魔導師に・・・いや魔導騎兵（ライダー）だっけ？　なったからにはせめて一人前にはなりてぇし、フェイトにリベンジもしてぇ。
俺みたいにジュエルシードってやつに巻き込まれる奴らを助けてぇ。
だから・・・強くなりてぇ」

『魔法ってのはこっちの世界で言われてるのとは違って、科学的っていうか、論理的な部分が多い。
でもなオレは思うぜ、魔法ってのはやっぱ使う者の思いの力だってさ』

「スタン・・・・」

『強くなろうじゃねぇかレイジ！！　オレがいくらでも協力してやる！　お前には素質がある。　どこまでもオレと一緒に、走り続けようぜ！！』

「おおよ！！」

怜治は拳を空に突き出し、スタンはブロォンとエンジンをふかす。

『・・・・・その前にこの状態なんとかしねぇとな』

「・・・・・・・それを言うなよ」

強くなることをした一人と一台は・・・・・

見事なまでに地面にめり込んでいた。

「痛ってぇ・・・・・・・」

おもわず呟いた言葉が、夕陽輝く空に溶けていった。

第5話　強くなりたい（後書き）

次出すならなのはか。
早めに出さんと空気になるかな・・・。

第6話　フォーム？アームズ（前書き）

更新遅くなってすみません。

他のＦＦ読みすぎて書くの遅くなっちゃいましたｏｒｚ

第6話　フォーム?アームズ

その街の空に星はなかった。
雲が空を覆っているのか、埋立地の工場から出るスモッグのせいか、空には光りを放つものは一切なく、深い闇が広がっている。
その闇に対抗するように、そして星の代役を務めるかのように、街の中心にある電光掲示板がついた巨大な鉄塔を中心にビルや鉄塔はそびえ、白く時にオレンジ色の人工の光を発して街を照らす。
ビルはわずかな隙間を残して立ち並んでいるため、上から見れば街全体が巨大な迷路のように見える。

そんなビルとビルの間を、一つの黒い影が駆け抜ける。
それはバイクのようで、人が乗っている。
そしてそれを直径４０ｃｍ程の球状の機械製の物体が追いかけている。
ライトを点灯させ、その数は2つ・・・3つ・・・4つ・・・数える傍から数を増やし続ける。
あるものは枝分かれしたビルの隙間から群れに合流し、あるものは突然闇から生まれた。
それらが追うのはただ一つ、目の前を走っている者。

突如、前方を走るバイクに乗った人間が振り返り、片腕を球の群れに向かってのばす。
その手には剣のついたリボルバーが握られており、人間はその銃の引き金を引く。
紺色の光弾が発射され、一番前にいた追跡機を貫く。
その身に大穴をあけたそれは火を吹いて爆発し、周囲にいた同胞を巻き込んで爆発する。

それに反応するように街の中心にそびえる鉄塔の電光掲示板に１７２という数字が現れる。
その下には7という数字も点灯している。

追跡機の中心からビームが発射されるが、バイクの運転手はそれをかわし、再度引き金を引いて大穴をあけたそれが周りを巻き込んで爆発する。
その動作をまるで繰り返し再生するように行う。
そして球が爆発するたび、電光掲示板の上の数字は増えていき、闇から新たな追跡機があらわれる。

そんな流れ作業のようなことを繰り返し、掲示板の数字が２００を超えると人を追う追跡機の形が変わる。
四本のアームが生え、アメンボのような姿になる。
そのアームからもそれぞれからビームが発射され、その数が一気に５倍に増える。
さすがにこれには慌てたのか、バイクが左右に揺れ始め、危なっかしい運転になる。

やがて、一発のビームがバイクの後部に命中するとそこにビームを集中的に浴びせられる。

状況を変えるためいったん迷路のようなビル群を抜けて空に出ようと高度を上げるも被弾した影響か、高度があまり上昇せず後輪部分がビルの屋上のフェンスに引っかかりクラッシュを起こしてしまう。
バイクの運転手はコンクリートの床を2，3回バウンドして、バイクから３ｍほどのところまで投げ出されてしまう。
アバラをやってしまったのか、苦しそうに胸を押さえ立とうとするもうまく立ち上がれないようだ。

そんな絶好の機会を逃す理由もなく、アメンボのような形になった追跡機はライトで運転手の顔を照らす。
眩しさに顔をゆがませた運転手はゴーグルをつけた黒髪の少年だった。
追跡機の一機がアームからビームと同じ光りを放つナイフのようなものを精製する。
狙うのは少年の首。

「くっそ・・・・・」

光のナイフが振り下ろされた。

『Confirmo la muerte del amo. Terminó una batalla virtual. Resultado de la batalla ・・・ ñ?mero 200 derrocando, el ñ?mero de los golpes 36, grado de nivel de dificultad, ・・・14 eso lleg? a ?l. 《主の死亡を確認。仮想戦闘を終了します。戦闘結果・・・撃破数200、被弾数36、到達難易度レベル・・・14。》』

(ン〜まだまだだな。　始めた頃よりずっといいが、せめて被弾数は一桁、レベルも25ぐらいにはなってもらわねぇとな)

(本物の戦闘じゃないからって、毎回刺し殺される俺のみにもなれ

っての・・・）

フェイトとの戦闘から数日がたち、怜治は高校生活と並行してスタンによる魔法戦闘訓練を受ける日々を送っていた。

魔法少女リリカルなのは☆Ｔｈｅ　Ｒｉｄｅｒ☆　第６話　フォーム？アームズ

今怜治がいるのは彼が通う高校の自分のクラス。
休み時間なため、教室には先ほどの授業の内容をノートに再度まとめる者、次の授業の準備をするもの、友達同士で世間話に花を咲かせる者、机に突っ伏し惰眠を貪る者などさまざまだ。
その惰眠を貪る者の一人である怜治だが、寝ていたのではなくスタンが送信してきた魔法戦のトレーニングメニューをこなしていたのだ。
なんでも魔導師にはマルチタスク、ようは二つ以上のことを同時に思考・進行させるスキルが必須らしい。
これは実際の魔法戦で移動・回避・防御・攻撃を状況を判断しながらスムーズに行うためのものであるのだとか。
なので学校の授業を受けつつ、スタンの組んだメニューをこなすということはマルチタスクの訓練にうってつけなのだが、怜治にとって授業＝睡眠時間となっているのでスタンはハードなメニューを組んだのか自分が撃墜されるまで決して終わらず、しかも敵を倒すごとに少しずつ敵が強くなっていくというバトルロワイヤルのようなものであった。
しかも仮想戦闘でうけたダメージと疲労は現実の自分にフィードバックが来るというのだから、いくら寝ても体が休まる気はしないの

だ。

（確かに俺は強くなりたいと言ったがこんなん続けてたら強くなる前にぶっ壊れちまうぜ・・・）

（仕方ねぇだろ？　オマエは魔力コントロールが下手なんだからとにかく戦闘経験積んで体で覚えるしかないんだよ）

（だからって、これはやりすぎだろ・・・・）

ちなみにスタンと会話をしているが怜治の口はまったく動いていない。

それどころかスタンは近くにいない。

彼は家の車庫にいるためどんなに大声を出しても声が届くわけがないのだが、、一人と一台の会話は成立している。

その理由は念話といわれる離れた相手に言葉を伝える魔法で、魔法を使える者ならば誰でも使える、基本と言ってもよい魔法。

また逆に、魔力を持たない者には言葉を伝えることができないため、魔導師を見分ける簡単な手段でもあるらしい。

この念話、慣れた者なら目の前の人間と会話しながら別の人間と念話で話すこともできるらしい。

それを初めて聞いた時の怜治の感想は

「魔導師ってのはみんな聖徳太子のような力をなのか・・・・？」

というものだった。

「お～っす、ぜろ。　相変わらず休み時間だってのに寝てばっかだ

な。　高校生らしく青春を送ろうという意思がおまえにはないのかね？」

「そういう君はどうなのさ、高校生らしい青春とやらを送ってるの？」

「当然だ。　この間喫茶店で働くめっっっっちゃかわいい女の子を見つけたんだよ！　今度３人で行ってみねェ？」

「それ青春っていうの？」

「鉄平にマサか・・・なんのようだ」

「なんのようって・・・おまえ長年のマブダチに冷たすぎねぇ？」

「長年って・・・お前らと知り合ってまだ４年しかたってねぇぞ」

「結構密度の濃い４年だったと思うぞおれは？」

「密度が濃いって言うより騒いでばっかだった気がするけどね」

「マサの意見に賛成・・・・」

「おまえらな・・・っと忘れるとこだった。　ぜろ、おまえこれからどうする？」

「ん？　どうするって？」

「んなもんサボるかどうかに決まってんだろ？　どうせこの後は豊島の古典と板倉の日本史・・・」

「あと集会があったよね？　別にたいしたものじゃないし・・・どう？」

「ん～～集会で校長が何話すか気になっけど・・・まぁいいか」

「確か先週は政治家の汚職についてだったな・・・途中から『たけのこの里ができるまで』ってのにシフトしたが・・・」

「ほんとあの人って話すことに一貫性がないというか話題がころころ変わるというか・・・」

「聞いてもらいたいことが多いんじゃね？　それよか、サボんならさっさと行こうぜ」

「そうだね・・・今日はどこ行く？　ゲーセン？」

「こんな時間に行ったら補導されるっての・・・だから例の場所行ってみねぇ？」

ギクッ・・・・・・

「ん？　どうしたぜろ？」

「い、いや・・・別に」

別にという割には額には冷や汗が浮かんでいる。
その理由は今クラスで話題になっているミステリースポットだ。
ミステリースポットといってもＵＦＯが目撃されたわけでもミステリーサークルが現れたわけでもない。
数日前、学校近くの林から巨大な影が現れたとか、紺色の光が林に

向かって降り注いだとか、謎の地響きがおこったとか・・・早い話
怜治の魔法戦の話が広まっていたのだ。
といっても魔法がばれたというわけではない。
どうやら魔法が認知されていない世界で魔法戦をする際には結界と
いわれる通常空間から特定の空間を切りとる・・・ようは結界の外
のものから中の様子がわからなくする魔法を使わなければならない
らしい。
しかし、あの時は緊急事態であったし、魔法というものがなんなの
かもわからないうちにやったため結界を張っていなかったのだ。

フェイト達が来た時は彼女たちが張ってくれていたためその時のこ
とはだれも知らなかったのだが、カマキリとの戦闘、そしてフェイ
ト達が去った後のことなどは音だけとはいえ知られてしまったらし
い。
しかも悪いことに誰かが警察に通報したらしく、林の中の変わりよ
うまで伝わってしまった。
切り倒された木々、なにか巨大な生物が走った痕、銃痕、バイクが
走ったものと思われるタイヤ痕などが見つかり、総合して警察は暴
走族が花火で遊んだのだろうという結論を出した。
それで終わってくれと願った怜治だったが、今日バラエティ色の強
いメディアが終わらせてくれなかった。
ＵＦＯ襲来説から始まり、ＵＭＡ説、テロリストの生物兵器実験説、
地底人説、ついには悪の秘密結社と仮面のヒーローにより戦闘説ま
で飛び出し、あの林はうわさ好きの間で話題の中心となりつつあっ
たのだ。

（イヤァ～あん時はオレもオマエのピンチに焦ってたからねぇ～。
結界のことなんてすっきり忘れてたよいやマジで）

忘れてたで済ますなよと思う。

「うひゃ～～結構野次馬いるな。　まったくたかが噂に群がりやがって」

「僕らが言えたことじゃないと思うよ」

「まったくだ・・・・」

三人は学校をこっそり抜け出した後一度別れ怜治の家で再度合流、そして今例の林のまえに来ている。
三人はそろって自分のバイクに跨っており服装もそれ用のものになっている。

「駄目だなこりゃ、中に入るどころか入口を見ることすらできなさそうだ」

「じゃあこのまま三人でツーリングとする？　街はずれに最近新しいＣＤショップができたっていうし」

言い出しっぺの鉄平もそこまで執着がなかったのかそれとも予想以上の野次馬の数にげんなりしたのか正義の意見に賛成した。
そして三人はバイクを走らせる。

「ん～」

「いや、おまえのバイクってよく見ると変わってんなぁって思って」

特にそこ、と鉄平が指さしたのはキーを差し込むための鍵穴。

スタンにはなぜかそれが二つあるのだ。

「一体どこで手に入れたんだ？　雑誌とかでも見たことないタイプだけど」

「てゆうか怜爺さんがバイク乗るのよく許してくれたね？　あんなにぜろがバイク乗るの反対してたのに」

怜爺さんとは怜一郎のことで、彼を知る者は大体この呼び方をする。

「こいつは家の地下室でホコリかぶってたんだよ。　ジジイに聞いたら知らねぇっつうし、これに乗りてぇつったらこれならいいって即決だったよ」

「へぇ～」

「ふ～ん」

聞いてきたくせになんとも興味無さそうな返答が来た。

あれからＣＤショップまで行き、店内を物色した後鉄平はバイトが、正義は途中で別の店に寄りたいからといってそこで別れた。

なので怜治は一人で・・・正確にいえばスタンもいるのだが、帰り道を走っている。
もうすでに太陽も沈み始めている。
やはり街の外れまでは少し遠かったのだろうか、改めて自分の住む街の広さが分かった気がした。
同時に怜治は魔法に出会った日のことを思い出していた。

フェイトに負けてからどうにか地面から抜け出し、魔力もほぼ0だったのでスタンを動かすことができずひいて帰るはめになったのだ。

「あ～体中がいてぇ・・・あの小娘め本気で腹打ちやがって」

『本気でこいっつったのはオマエだろうが、あと体中がいてぇってのは無茶して空間魔法なんぞ使うからだ』

「なに怒ってんだよスタン」

『イ～エ？　オレは全然怒ってませんよ。　どっかの誰かの無茶のおかげで３０ｍ以上の上空からパラシュート無しでのスカイダイビングを強要されたってぜんっっっっっっぜん怒ってませんよ！！！』

言ってることとは裏腹に声に怒気を含ませている。
車体をよく見ると泥だらけなうえ傷だらけ、へこんでしまっているところもある。

「い、いや悪かったって・・・家帰ったら整備してやっから壊れてるパーツあったら変えてやっから」

『・・・こっちの世界のパーツがオレにつけれるとは限らねぇぞ』

「は？　こっちの世界？　何言ってんだお前？」

『ン？　・・・そういや言ってなかったな、オレはもともとこの世界とは別の世界。
『シェルコ』ってとこにいたんだ』

「・・・・・・ぱーどぅん？」

『・・・・・・・・・・・・』

現在、次元世界について説明中・・・・・・・・・・

「つ・・・つまりこの俺たちが住んでる地球って世界以外に色んな世界、次元世界ってのがあって、その世界の一つの『シェルコ』ってとこからオマエは来たんだな？」

『正確に言うと、『来た』じゃなくて『いた覚えがある』、だな』

「どう違うんだよ？」

『オレ自身の意思でこの世界に来たわけじゃないってこと。
いったん向こうで眠りに入って、起きたらこっちに移動してたってこと』

「なんだそりゃ・・・なぁそのお前が前にいた世界ってどんなとこだったんだ？」

『ン～覚えてねぇ』

「は？」

『覚えてねぇんだって、シェルコってとこにいたのは覚えてる・・・いや、シェルコにいたという記録がオレの記憶媒体に残されてる・・・だな』

「つまり・・・自分がもとの世界でどんな風に生活してたか覚えてねぇのか？」

『覚えてねぇな。　覚えてんのは・・・どこまでも砂漠が広がってる光景だけだな』

「・・・なんか寂しいな」

『ン～あんまそんな気にはしてねぇな、覚えてねぇこと気にしてもしょうがねぇしな・・・・あ！』

「どうした？」

『いや、今オレこっちの世界に来て一番古い記憶を思い出したんだ』

「は？　お前ってこの前俺が見つけるまで眠ってたんじゃないのか？」

『イヤ、確か向こうで眠りについてこっちで一旦目覚めて、そんでまた眠りに着いたんだ。　ンデ今その一旦目覚めたときの記憶をな・・・』

思い出すのは彼が最初に引きずられてあの家に来た時の記憶。

自分のハンドルを握っているのは女性、握る手はしわが刻まれており女性が高齢であることを示す。
女性は息も絶え絶えでかなり体力を消耗しているようだ。

大丈夫・・・だからね・・・

女性が出した言葉はスタンへのものか、それとも今にも倒れそうな自身への励ましか、彼には判断できなかった。

あんたみたいないい奴が、呪われてるわけ・・・ないよ

無茶をするなと叫びたいが彼の声は女性には届かない。
彼の声は彼自身に適合したものがいなければ聞こえない。
自分にできることがないということへの悔しさがこみあげてくるが、それで何かが変わるわけではない。
しばらくして女性の家に着いたのか彼女の足が止まる。
家の扉が開いて一人の男性が出てくる。
女性の旦那なのだろう、女性の容体を見て慌てて駆け寄ってくる。
男性の顔を見て女性はにこりと笑い、使命をやり遂げた勇者のように笑顔のまま倒れていく・・・・。

あんたには・・・あの子がいるから・・・お願い・・・ね

「・・・ン・・・お・・・・タン・・・おいスタン!!」

『ウオッ!　な、なんだレイジ、どうした?』

「ボケっとしてんな!　あれを見ろ!」

『？・・・・あ、ありゃあ！！』

「」

怜治のしめす方角を見ると、青白い光の柱が空に向かって立っている。

そして感じるのは数日前と同じ魔力反応。

『ありゃ・・・ジュエルシードか！？』

「わかんねぇが・・・・気づいちまった以上行くしかねェ！！」

『おう！！』

「・・・・・・・・なんか来たことスッゲェ後悔してんだけど」

光の柱が出現した場所にたどり着くと、そこは古びたビルに囲まれた路地裏であった。

日の光もあまり届かず、不気味な薄暗さがあった。

そしてそこには巻き込まれたのか気絶した人が数人倒れていて、前と同様ジュエルシードの影響で巨大化した生物がいた。

『オレも・・・・速攻でUターンしたくなってきた』

そこにいたのはまっ黒な体をした巨大な蜘蛛で、目は赤く充血しており、八本の足が槍のようにコンクリートの地面を突き刺していた。

そしてなぜか蜘蛛の腹の部分には大きな口があり、凶暴な獣が持ちそうな鋭い牙が並んでいて、その上には大きな目玉がギョロギョロ

と周りを確認している。

『きっといろんな動物が入り混じっちゃんたんだろうな・・・』

「感心してる場合か!!　さっさと結界張れよ!!　あいつら食われちまうぜ!?」

分かったよ、とスタンが周囲を結界を張る。
ついでに倒れていた人も外に出したからこれで無駄な被害が出ることもない・・・ビルは半壊するかもしれないが。

蜘蛛は獲物を見つけたかのように八つの赤い眼で怜治たちを睨みつけ、槍のように鋭くなった足を振り下ろす。

「うおおおおおっ!!!!　なんで蜘蛛が足で攻撃してくるんだよ!?　蜘蛛っつったら糸だろ糸!!　ケツから糸を出すんじゃねぇのか!!」

『なにを今さら、カマキリだって手が伸びてたじゃねぇか』

慌ててスタンを動かして避け、振り下ろされた足がコンクリートを砕く。

怜治はリボルバーを出し引き金を引く、狙うのは腹にある目玉だ。

「喰らいな!!」

紺色の光弾が発射され、目玉を貫くはずだ・・・だがそうはならなかった。
目玉に着弾するギリギリのところ光弾がそれる。

『A．T．フィールドか！』

「いや違うだろ・・・ってかなんでお前知ってんだ？」

『気にするな・・・来るぞ！！』

大きな口が開き、蜘蛛の巣状のものが吐き出される。

「そっから糸出すんかい！！・・・・・ってしまった」

思わずツッコンでしまい、反応が遅れ片足に粘っこい糸が絡みつく。
蜘蛛は足を振り上げ、再び怜治に向けて振り下ろす。

「やばっ・・・・・・！！」

『Ｅｌ　ｖｕｅｌｏ　ｄｅｌ　ｄｒａｇ?ｎ（龍の飛翔）』

怜治たちの姿が消え、蜘蛛の足は空を切る。

そして怜治たちは蜘蛛の正面の斜め上のところに現れる。

「あっぶねぇ冷や汗かいちまった・・・助かったよスタン」

『まったくだ、危なっかしい相棒持つと苦労するよホント・・・しかし面倒だな』

「あぁ・・・リボルバーが効かねぇってことは他の二つも効かねぇだろうな」

『そんで撃った隙を狙って糸を出し、槍みてぇな足で串刺し・・・』

「もしくはどっちかの口で丸飲み・・・か」

銃は効かない、だからといってランスで突っ込んでもあの足で刺されるだろう。

機動力は明らかにこっちが上だが相手の足は八本、あの巨体を支える必要があるとはいえ少なくとも半分の足、四本の足が向かってくると考えると全てよけきれるか分からない。

第一あちらに他の攻撃手段できたらそれに対処する余裕はない。

そう考えてる間にもじわじわと蜘蛛が近付いてくる。

一気に来ないのは蜘蛛ゆえの慎重さか、大きな故に動きが緩慢なのか。

「どうするよスタン？　お前ほかに武器とかねぇのか？」

『あるにはある・・・というかそれがオレ本来の力なんだが・・・』

「はぁ！？　そんなんあるならなんでさっさと・・・もしかして、なんか問題あんのか？」

『問題というか・・・単純に魔力の消費量が跳ね上がる。　オレを動かしたり、空間転移よりもオマエへの負担が大きくなるんだ・・・最悪の場合』

「フェイト戦の時みたく、また体に異変が起こる・・・か」

怜治の言う体の異変、それは魔力を使いすぎたために起こるいわばスタミナ切れのようなものだ。

フェイト戦のときは生死を賭けた戦いではなかったから少しのケガで済んだ。
しかし今対峙しているのは生き物の本能のまま襲ってくるのだ。
相手の異変に気づけば即座にそこを突いてくるだろう。
そうなったら怜治に待つのは死・・・・・。

「その・・・前みたいなことが起こる確率は？」

『五分五分ってところだな。
・・・・ってかどうせ９９％起こるといってもやるんだろオマエは？』

「当然！　分かってんじゃねぇか相棒」

『ハァ～、オマエってやつは勇敢なんだか無謀なんだか・・・』

「両方じゃね？」

ハァ～、と怜治の答えに対してため息のような声を漏らすスタン。
そして彼らの足元に魔法陣が描かれる。

『“龍の飛翔”と違ってこれはオマエが詠唱して発動させる。　オレに続いて詠唱してくれ。さっきもいったが負担が大きいってことは失敗したときにくる反動も大きいからな。』

「分かった」

『我、ここに求めるはすべてを砕く力』

「我、ここに求めるはすべて砕く力」

『鉄纏(くろがね)いし拳はあらゆる壁を打ち砕く』

「鉄纏いし拳はあらゆる壁を打ち砕く」

詠唱をするたびに魔力がスタンに流れ込むのを感じる。
もし魔力が足りなかったら、という恐怖と同時に妙な安心感を感じる。
失敗すればあるのは死。
そんな状況の中でも少しずつ安心感が恐怖心を包み込む。
スタンへの信頼からのものだけではない、
温かいものに包まれるような感覚。

あなたならできるよ・・・・・・

突然頭の中に声が響いた。
スタンではない、魔法発動時に聞くものでもない、初めて聞く声なのにどこか懐かしい感じがした。

銀(しろがね)・・・

『銀纏いし両腕はあらゆる刃を打ち砕く』

「!!　し、銀纏いし両腕はあらゆる刃を打ち砕く」

（なんだ・・・・・）

我ここに・・・
『我ここに誓おう』

「我・・・ここに誓おう」

（自然と・・・言葉が聞こえて・・・いや、浮かんできやがる）

「『この力をもって、希望を閉ざす闇を打ち砕く』」

自然とスタンと怜治の声が重なった。

『レイジ！？　オマエ・・・』

「絶望振りまく闇を打ち砕く」

今度はスタンよりも先に怜治が詠唱を続ける。

（まさか・・・オレとのシンクロ率が上がってるのか！？）

「悪しきものを砕くため、か弱きものを守るため、我は駆ける！！」

最後の詠唱とともにスタンが光に包まれ二つに割れる。

そしてそれが怜治の両腕を包み込む。

『詠唱終了だ・・・後はこの力の名前を呼ぶだけだ。オマエならもう分かってるだろ？』

ああ、と頷き光に包まれた両腕を広げ、拳を握り、互いの拳を打ちつけ合って怜治は叫ぶ。

その力の名前を・・・

「フォーム？（ワン）アームズ！！！！」

第7話　白の少女との邂逅

怜治たちが戦っているとき、スタンが張った結界に近づくものがいた。
飛んでいるのは少女で年齢は9歳ぐらいだろうか、髪は茶髪で短めのツインテールだ。
白を基調としてロングスカートのバリアジャケットを着ており、左手には先の赤い宝玉を金色のフレームを囲んでいる杖を持っている。

これが彼女のデバイスなのだろう。

怜治たちが戦っているとき、スタンが張った結界に近づくものがいた。
飛んでいるのは少女で年齢は9歳ぐらいだろうか、髪は栗色で短めのツインテールだ。
白を基調としてロングスカートのバリアジャケットを着ており、左手には先の赤い宝玉を金色のフレームを囲んでいる杖を持っている。

これが彼女のデバイスなのだろう。

結界は魔法を使えないものには感知できないし、近づこうとする意志を削ぐ効果もある。
なのに少女は明らかに結界のある方向を見てまっすぐ進んでいる。

「ジュエルシードの反応を追ってきたのに、もう誰かが戦ってるの？」

「結界が張られてるってことはそうだと思うけど・・・」

少女の問いに若い少年の声が答える。
そして少女の肩から黄色っぽい毛色の小動物が顔を出した・・・フェレットだ。
今の少年の声はこのフェレットからのものだ。

「またあの子かなぁ・・・」

少女の脳裏をよぎるのは以前出会った金髪の魔導師。

「わからない。　あの結界は魔力反応も遮断してる・・・でもあの結界の現れた場所からジュエルシードの反応はあった。　・・・ってことはあの結界を張った人はジュエルシードが目的なんだと思う」

「もしかしたら、三人目の魔法使いってこと？」

一人と一匹が飛びながら話していると、結界の中が眩しい光に包まれた。
それを見て一人と一匹が互いに驚いた顔を見合わせる。

「ユーノくん！！」

「なのは！！　急ごう！」

少女は結界へと急ぐ。

魔法少女リリカルなのは☆Ｔｈｅ　Ｒｉｄｅｒ☆　第７話　白の少女との邂逅

光が消えると、怜治の両腕は黒と白の金属に包まれていた。
そのため両腕全体がニ回りほど太くなり、手首の部分にスタンの頭部の部分が、肩にはタイヤがついている。

「スッゲェ・・・そんでもって・・・ちと重い」

『負担が大きくなるって言ったろ？　でもその分しっかりパワーはあがってるよ』

「だろうな・・・俺も感じるよ。　・・・でも魔力消費ってのは思ってたほど感じねぇな」

『・・・マジか？』

「マジだよマジ。　全くねぇってわけじゃねぇけど、バイク形態のときより少ないな」

（どういうことだ？　・・・こいつとのシンクロが上がったのは分かったが、魔力消費量が・・・精神への負担がそこまで減るってことはレイジの魔力コントロールが上達してるってことだよな・・・この短期間でか？）

考えをまとめようと思考していると、蜘蛛が再度襲いかかる。
槍のような足が一本、向かってくる。

「スタン来たぞ！！」

『ン？　ああ慌てんなよ。　詠唱にもあったろ？』

右腕が怜治の意思と関係なく動き、左肩を掴むような構えになる。
スタン自身が動かしているのだ。

『銀纏いし腕はあらゆる刃を打ち砕く』

蜘蛛の足が銀色の腕に当たり、グシャッと嫌な音が響く。
腕ごと貫かれたのかと思ったが、それは蜘蛛の足が潰れた音だった。
対して腕には傷一つない、コンクリートをたやすく砕くのだから傷ぐらいついてもおかしくないはずなのだが・・・。

「うおっ！　すげぇな・・・ってかあっちはノーリアクションかよ」

怜治がいうあっちとはたった今足を一本潰された蜘蛛だ。
潰れた足先を見てはいるが、眼に怒りを宿した様子はない。

（そういや虫って神経無いから痛みを感じないって聞いたことあるな）

とにかく、向こうの攻撃手段の一つを封じれることが分かり、怜治は蜘蛛に向かって突っ込む。
それに対して蜘蛛は続けて足を向けるが怜治の腕でことごとく弾く。
蜘蛛の攻撃を時に弾き、時にかわしながら接近し、蜘蛛の頭部を思いっきり殴りつける。

「オラァ！！！」

ドゴン、と音が響いて蜘蛛が足を曲げてうつ伏せに倒れる。
その際周りの建物の一部が損壊するがとりあえず気にしない。

蜘蛛は即座に体を起こし、口から紫がかった液体を吐く。

「うおっ！　あぶね！」

後ろに下がってかわす。

そして液体がかかった地面はシューッという音と煙をだして溶けていく。

『酸だな・・・蜘蛛って酸吐くっけ？』

「んなこと知るかよ！！」

蜘蛛は酸を吐き続け、怜治は前後左右に動きまわってそれをかわす。

下に回り込めば酸はこないが、腹にある口から糸の塊が動きを封じようと飛んでくる。

「あ～～～イライラする～～～」

『落ち着けよ。　集中途切れたら今度こと喰われるぞ？　あれで全身グルグル巻きにされたらいくらオレでも抜け出せないぜ』

くそっ、と悪態をついて蜘蛛の吐く糸をかわし続けていると、ふとある違和感に気づく。

「なぁ・・・こっからじゃよく見えねえけど、なんか腹の上の目玉に光が集まってねぇ？」

怜治の言うとおり先ほど魔力弾をはじいた目玉がある部分から赤い光が発している。

そしてそこから四本の赤い閃光が伸びる。
同時に口からも糸の塊を吐き出す。
それにより、怜治の視界が完全に赤と白で覆い尽くされようとする。

「ちょ、待て！！　こんなんよけきれるか！！」

いきなりの状況に思わず足を止めてしまう。

そこへ・・・・。

『Ｄｉｖｉｎｅ　Ｂｕｓｔｅｒ』

突然機械的な女性の声が聞こえ、桜色の閃光が蜘蛛を押し潰す。
当然蜘蛛の真下にいた怜治たちも巻き添えを喰らう。

「うおおおおおおおおおおおおおおっ！！　どこのどいつだ！！　フェイトか！？　俺ごと殺ろうとするとはあんのガキャアアアアアアア、大人しそうな顔してなんて真似しやがる！！！」

蜘蛛の攻撃を受けることはなかったが、代わりに蜘蛛自身に押し潰されそうになる。
必死に支えてはいるが、砲撃魔法を撃っている人物は怜治たちがいることを知らないのか・・・・知っててやっていたら相当な悪だが・・・勢いを弱めるどころかどんどん出力を上げている。

『オイオイオイオイ怜治！！　このままいったらペシャンコだぞ！！』

「それは勘弁だな・・・ってかこの砲撃撃ってるやつ殴りとばさねェと成仏もできねぇ」

顔に青筋を浮かばせて呟く。
腕もぷるぷると震えている。
どうやら疲労とイライラが同時に限界に達しようとしているようだ。

『それはオレも同感だ・・・こうなりゃ目には目を、歯には歯を、
砲撃には砲撃だ』

「・・・ユーノ君。　まだ・・・・・かなぁ？」

「もう少し頑張ってなのは！　あの蜘蛛が張ってるシールドが思ったよりずっと強い！！」

場面は変わり反対側で蜘蛛に砲撃を当てているのは先ほどの少女とフェレットだ。
彼女たちの会話から、どうやら彼女たちが砲撃を撃っている目的は蜘蛛のシールドを破ることらしい。
魔力弾を弾いたシールドだが、砲撃魔法までは弾ききれないらしく、この方法で防御を崩す作戦らしい。
無論彼女たちは怜治が蜘蛛の下で踏ん張っていることは知らない。

「こ・・・これ以上出力上げたら・・・こっちが倒れちゃうよぉ・・・あれ？」

「どうしたのなのは！？」

フェレットがなのはという少女に向かって叫ぶ。

魔力切れがきたのか・・・最悪の状況が脳裏に浮かぶ。

「くもの下から・・・青？　・・・いや紺色かなぁ・・・そんな光が」

「うおおおおおおおおおおおおおおお！！！」

再び場面は怜治たちに戻る。

肩のタイヤが紺色に輝き、激しく回転している。

そして重ねた手のひらには紺色のスフィアが形成され、怜治が魔力を注ぎ込むたびタイヤの回転が増し、スフィアがさらに大きく膨らむ。

「いくぞおおおおおおおおおお！！！！」

『おっしゃああああああああ！！！　いっけええええええレイジいいいいいいい！！！！』

「龍の！！」

『鉄拳！！』

『Ｅｌ　ｐｕ?ｏ　ｄｅｌ　ｄｒａｇ?ｎ』

紺色のスフィアが炸裂し、蜘蛛の体が浮き上がる。

ズガアアアァァァァン！！！

眩い閃光とともに轟音が響く。

蜘蛛の巨体が消滅し、ひし形の結晶が落ちてくる。

「ジュエルシード、シリアル６」

『封印！』

『Ｕｎａ（ふういん）　ｆｏｃａ』

英数字で?と刻まれたジュエルシードを掴み、封印を施す。

『よし、これで一丁上がり』

戦闘も終わり、スタンをバイク形態（フォーム）に戻す。

「あ、あの～・・・・」

「ん?」

上空から声が聞こえ、そちらを向くとヘッド部分が音叉のような形をした金色の杖を持った茶髪の少女がいた。

「だ、大丈夫・・・ですか？」

「大丈夫って・・・ああ！！！　お前か！　今さっきまで砲撃魔法で俺ごと押し潰そうとしやがったのは！！」

「んにゃあ！！　ご、ごめんなさい下に人がいるなんて思わなくって・・・ホンットごめんなさい！！」

奇妙な声をあげ、頭を下げて必死に謝っている。
どうやら悪気があったわけではないらしい、というかこんな幼い少女が悪気があってあんなことをしたらこの国は終わりだと思う。

「ってかお前も魔導師か？　・・・ったく、フェイトといいいお前といい魔導師ってのは年齢制限がねぇのか？」

「え？　フェイト・・・？　もしかしてあなたあの子のこと知ってるんですか？」

「あの子？　なんだよお前あいつの仲間じゃねぇのか？」

歳も同じくらいだからてっきりフェイトの仲間だと思ったがどうやら違うようだ。

「あの、あの子のこと教えてくれませんか？　わたし、あの子とお話ししたいんです！！」

少女は急に顔を近づけてきたので思わずたじろいでしまう。
近くでみると幼さこそあるもののまっすぐな眼をしたきれいな瞳だ。

『こいつぁ将来イイ女になるぜ・・・・と怜治は思った』

「勝手に人の心の声を捏造するな」

『イテッ』

スタンに蹴りを軽く入れて再度少女に顔を向ける。

「悪いな、俺もあいつとは一回戦っただけで詳しいことは知らねぇんだ」

ぐいっと少女の顔を自分から離し、スタンに乗る。

「えっ・・・あのちょっと!?」

「じゃあな」

少女に手を振り、そのまま走り去る。
その場に残された少女は茫然と立ち尽くすしかなかった・・・・・。

翌日

「ぜ～ろ～！　今日おれとお茶しない？（キラン）」

「なんだよ鉄平、彼女ができないからって同性に目覚めたか？　悪いが俺はその気はねぇ」

「変な風に受け取んなよ。　昨日いったろ？　かわいい娘が働いてる喫茶店見つけたって」

ああ、と昨日鉄平が言っていたことを思い出す。

「んで？　その喫茶店てどこだよ？」

「ふっふっふっふ・・・・その喫茶店の名は・・・・“喫茶翠屋”！！」

「あ、そこ知ってる。　確か女の子に人気の洋菓子がおいしい店だよね？」

「マサは知ってんのか・・・・しかし女に人気の店ねぇ・・・・」

怜治はつい想像してしまう。

女性たちが洋菓子に目を輝かせる中、男三人が同じテーブルで洋菓子をつつく・・・。

「場違いすぎねぇか？」

「気にしすぎだよ」

「おおよ！　そうと決まったらさっさと行こうぜ、善は急げだ！！」

「たかがナンパになにを大げさな・・・」

喫茶翠屋、海鳴市商店街に店を構える洋菓子店も兼業している喫茶店で自慢はケーキとシュークリームと自家焙煎コーヒーらしい。客の大部分は学校帰りの女子生徒や近所の奥様がたでクリスマスにはケーキが飛ぶように売れるらしい。

「やっぱ俺たち場違いじゃね？」

一旦家に戻りスタンに乗り、鉄平、正義と合流して翠屋にやってきたのだが、自分たちを除いて他の客は全員女性だ。

正直、この状況で男三人が一つのテーブルにつくというのはどうもシュールな気がする。

「気にしな～い、気にしな～い。　で？　鉄平が見つけたかわいい店員ってのは？」

「慌てんなって、すぐに注文聞くためにくるって・・・おまえら、惚れんなよ？」

「あ～はいはい勝手に言ってろ」

三人で談笑してるとぱたぱたと足音が近づいてくる。

例の店員が注文を取りに来たのだろうと振り返ると、

「ご注文よろしいでしょうか～・・・・ああ！！」

「あ」

『あ』

そこにいたのは“ＭＩＤＯＲＩＹＡ”と刺繍された黒いエプロンをした栗色の髪の少女・・・
昨日の砲撃魔導師がいた。

「？　えっと・・・鉄平、この子が君の言ってたかわいい店員？
確かにかわいいけど・・・犯罪だよ？」

「ち、違うわ！！　ね、ねぇ君、あの娘は？　黒髪で、メガネかけた！！」

「え、お、お姉ちゃんですか？　お姉ちゃんは今日はお休みですけど・・・」

「ガッデム！！！！！！！！！！！！！！！！」

ドンッ！とテーブルに拳を叩きつける鉄平、そんなに残念だったのか。

「あ、あのわたしなんか悪いことしましたか・・・？」

「いやいや、気にしなくていいから。　それより注文いい？」

涙を流して悔しがる鉄平を無視して注文し、しばらくしてケーキと

コーヒーが三人分運ばれてきた。

「おーい鉄平、いい加減泣き止めよ。　結構イケるぞここのコーヒー」

「ケーキもね。　人気が出るわけだ・・・鉄平いらないんならもらっていい？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ダメ」

のそっと顔をあげてコーヒーをすすり始め、ケーキをつつく。
そんな鉄平の様子に苦笑していると、

「（あの・・・・）」

突然頭の中に声が響く。
あたりを見回すと先ほど注文をとりにきた少女がこちらをチラチラと見ている。
それを見て少女が自分に念話を飛ばしてきたのだと分かった。

「（なんだよ）」

「（昨日の魔導師さん・・・・ですよね？）」

「（魔導騎兵（ライダー）だ）」

「（？・・・あなたは、どうしてジュエルシードを集めてるんですか？）」

「（別に集めてるわけじゃねぇよ。　ほっといたら面倒だから封印してるだけだ。
おまえこそあんなとこにいたってことはジュエルシードを集めてんだろ、なんでだ？）」

「（あれはとっても危ないものらしいんです。　だから・・・）」

「（俺と同じような理由か・・・）」

「（あの、あなたと色々お話したいんですが・・・）」

「（なんだよデートのお誘いか？　悪いが幼女趣味はねぇ）」

「（んにゃ！？！？？！？）」

奇妙な声（？）を出して少女はなにもないとこで躓いてすっ転んだ。

「（・・・・・・・・・大丈夫か？）」

「（だ、大丈夫です・・・・・）」

「（んで？　話しするっていってもずっとこのまま念話で話し続けるのか？）」

「（えっと・・・それじゃあお店終わった後か・・・夜とか？）」

「（ガキが夜中に家抜けてきて大丈夫なのか？　親公認の魔導師ってわけじゃねぇんだろ？）」

「（えっと・・・それは）」

「（明日って休日だろ？　予定が詰まってんのか？）」

「（いえそういうわけじゃ・・・・じゃあ明日の朝に昨日の路地裏で）」

はいよ、と念話と送ってテーブルに目をやるともう2人とも食べ終わっていた。
怜治も残ったコーヒーを流し込んで翠屋をあとにした。

次の日の朝

怜治はバリアジャケットを着て、昨日の路地裏に来ていた。
無論周囲の人間には分からないよう認識疎外のための結界を張っている。

「・・・来たな」

結界に誰かが入ってくるのを感じて、上を見上げるとおとといと同じ白いバリアジャケットを着た少女がいた。

「あの、遅れてすみません」

「別に対して待ってねぇよ。　んじゃ、とりあえず自己紹介からか

？」

「あ、はい！　高町なのはです！」

「松田怜治だ。　このバイクは相棒の・・・」

『アナキン・スカイウォーカーです』

「スタンピードだ。　俺はスタンって呼んでる」

『スルーかよ』

「よろしくお願いします。　怜治さん、スタンさん。　えっと、この子が・・・・」

「ユーノ・スクライアです」

『ウオッ！！　イタチがしゃべった！？』

「フェレットです！！　っていうかあなただってバイクなのに言葉話すじゃないですか！」

「んじゃ、自己紹介を終わったし、お互い知ってること話そうじゃねぇか」

自分たちが魔法に出会ったきっかけ、ジュエルシードを集める理由、そのジュエルシードとはなんなのか、怜治が話し、なのはも話して互いに質問しそれに答える。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・
・・・・

「つまりそこのフェレットが別世界で見つけたジュエルシードってのがトラブルでこの世界に散らばっちまって、それが暴走すると危ないからそれを集めるのに高町が協力してるってことか」

「はい、わたしに何かできることがあるなら手伝いたいんです」

へぇ、と怜治は内心感心した。
自分が魔法に関わっているのはフェイトに負けたのが悔しかったからだ。
彼女のように善意からの行動ではない。
そして同時に心配にもなる。
彼女のようなまだ１０歳にもならない子供がジュエルシードの影響で暴れる化け物たちと戦うというのは危険ではないかと。
フェイトとなのはは見たところ同い年のようだが、フェイトの方は魔法が常に身近にあり、魔法戦の訓練も積んでいた。
対してなのはの方は昨日の砲撃を見る限り非才というわけではないようだが、話しを聞くと彼女が魔導師になったのは自分と同時に近いらしい。
つまりは自分と同様力技で押すだけでそこに技術がないのだ。

「それで・・・あなたにお願いなんですけど・・・」

なのはの肩に乗ったフェレット・・・もといユーノが話しかけてきた。

「なんだ昨日のジュエルシードを渡せってか？　それとも収集に協力しろか？」

「前者の方です。　収集に関しては僕の問題ですから、危険にさらすわけにはいきません。それで、ジュエルシードを渡してくれませんか？」

「う～ん・・・・・・・・・ダメだ」

「えぇ！？」

「ど、どうしてですか！？」

「別に信用できねぇってわけじゃないんだ。　ただ・・・」

『オレたちはフェイト嬢にリベンジするつもりでな、あちらさんもジュエルシードを集めてるんでその餌としてジュエルシードがいるわけだ』

「リ、リベンジって・・・・」

「餌って・・・・」

「んな訳だから、まぁ決着ついたら渡してやるよ。　別に悪用するつもりはねぇし、それならそっちも文句ねぇだろ？」

んじゃ、とぽかんとしているなのはたちに背を向けて怜治たちは走り去っていった。

「・・・・・・・えっと・・・・・・・なのは」

「わ、悪い人じゃなさそうだし多分問題ないと思うよ？　・・・・

多分」

「だといいけど・・・・はぁ」

第7話　白の少女との邂逅（後書き）

今回の話は本編の４話と５話の間ぐらいです。

第8話　介入、時空管理局

次元空間、そこは世界と世界の間の空間。　そこの存在を知るものからは海とも呼ばれている。　暗く、まるで宇宙のようだが、そこには光を発する星はない。
そんな次元空間を進む一隻の船があった。
時空管理局・巡航Ｌ級８番艦。次元空間航行艦船“アースラ”それがその船の名だ。
船といっても地球に存在する海を渡る船ではない。　ＳＦ映画にでてくる大型の宇宙船といえばわかりやすいだろう。
そんなアースラのブリッジの艦長室では青いスーツを着たスタッフが作業している。
すると、艦長室への扉が開きエメラルド色の髪の女性が入ってきた。

「皆どう？　今回の旅は順調？」

「はい、現在第三船速にて航行中です。　目標次元にはおよそ１６０ベクタ後に到達の予定です」

「前回の小規模次元震以来、特に目立った動きはないようですが・・・。　３組の捜索者が再度衝突する危険性は非常に高いですね」

そう、と答えて女性は中央の席に腰を下ろす。

「失礼します。　リンディ艦長」

茶髪の女性スタッフがお茶の入ったティーカップを女性の前に置いた。
リンディ・ハラオウン。　彼女がこのアースラの艦長であり、次元

世界における司法機関“時空管理局提督”の地位を持つ。

「ありがとね、エイミィ。そうねぇ・・・小規模とはいえ次元震の発生は、ちょっと厄介だものね。危なくなったら、急いで現場に向かってもらわないと・・・ね、クロノ？」

「大丈夫。分かってますよ艦長」

クロノと呼ばれて返事をした、他のスタッフとは違う黒い制服を着た少年は黒いカードを手に取り、自信を込めて言う。

「僕は、そのためにいるんですから」

魔法少女リリカルなのは☆Ｔｈｅ　Ｒｉｄｅｒ☆　第８話　介入
時空管理局

「我、ここに求めるはすべてを切り裂く刃・・・」

なのはとユーノの話を聞いて、思っていた以上に大きなことに首を突っ込んでいるのだと怜治は思った。

「魔導の力は破魔の剣となって、闇を切り裂き光を発す・・・」

だからといってやめるつもりはない、彼がリベンジを望むフェイトに繋がるものは今のところジュエルシードしかないのだから。

「刃が発する光は邪を滅し、罪を清める・・・」

無論、リベンジが終われば約束通り集めたジュエルシードはユーノ達に渡すつもりだ。

「我ここに誓おう、　振るう刃は友のため・・・」

もしもフェイトが・・・ユーノについてもいえるが・・・ジュエルシードを悪用するなら、友人や身内が住むこの海鳴でなにかをするつもりなら・・・。

「闇を斬るのは守るため・・・」

俺が全力で・・・叩き潰すだけだ。

「己が信念を通すため、涙を流す者を救うため、我は剣を振るう！！」

ヒーローって柄じゃないけどな・・・。

「フォーム？（ツー）ブレイド！！！！」

ズバン！！と目の前の大木が真っ二つに斬られて倒れる。　それを斬った怜治の手には自分の身の丈ほどもある黒い大剣があり、刃は紺色に輝いている。

今さっき斬った樹はジュエルシードを取り込み、先ほどまでＲＰＧに出てくるモンスターのように動いていたのだ。

『はい、封印完了っと。　これで４個目！　戦闘も慣れてきたし絶好調だな』

「形態変化（フォームチェンジ）にも慣れてきたな、アームズ、ブレイド・・・」

『あとバスターだな。　他にもあるがとりあえずこれだけ使えりゃ十分やっていけるな』

「う～ん・・・」

『どうしたよ？』

「いや、まだあいつに勝つにはなんか足りねぇ気がしてな」

怜治の言うとおり前回のフェイトとの戦いでまともに当たった攻撃はなく、一方的にやられたといってもいいものだった。

『まぁ確かにフェイト嬢は魔力も経験も上、唯一勝ってるのは腕力ぐらいだしな・・・』

「人を脳筋みたいに言うなよ・・・」

『ホントのことだろ、そういやジュエルシードって全部で何個あるんだっけ？』

「たしか高町たちの話だと２１個・・・だったか？」

『んじゃ、オレたちが４つ、なのは嬢が３つ・・・』

「フェイトが持ってんのは俺達が渡したのと高町と取り合ったやつが４つで・・・今のとこ合計１０個、まだあと半分か・・・」

『フェイト嬢はオレたちと違って一日中探せるから、もっと持ってると思っていいだろ』

あれから時々なのは達と連絡を取り合うようになったのだが、どうやら向こうの方がフェイトとの遭遇率は高いのか、こちらは一回しか会ってないが、向こうは3回会って3回ともジュエルシードをめぐって戦ったと言っていた。
特に昨日戦ったときは互いのデバイスが損傷するほどのものだったらしい。

「ま、俺たちがこれ持ってる限りそのうち向こうから来てくれるだろ・・・」

『でもいつまでも待ってるのも面倒だ。　この際こっちから探しにいかねぇか？』

「あいつの居場所なんて知らねぇぞ？」

『な～に心配することはねぇ、ジュエルシードあるところにフェイト嬢あり・・・だ』

「？」

スタンの言うことをすぐには理解できず怜治は首をかしげるだけだった。

アースラがいるところとは別の次元空間に、要塞のような建造物があった。
“時の庭園”、魔法技術で次元間航行も可能なもので、庭園というには緑が少なく古い遺跡と言われた方が納得がいく。
内部は宮殿のような造りでところどころ雑草が生い茂っている。

バシッ！　バシッ！　バシッ！

「うぐ・・・あぁ！　あっ・・・・・」

そんな庭園の奥からムチを振るう音と、苦痛の声が響く。

「たった４つ？」

ムチを振るう音が止み、代わりに冷たい女性の声が響く。　髪は夜の闇のように黒く、大きく胸元の開いた魔女のような黒い服を着て、コウモリのような杖を持っている。
女性は声と同じように冷たい眼で自分の前にいる人物・・・フェイトを見つめる。
フェイトは両手を縛られ、だらんと力なくぶら下がっている。　ムチで叩かれ、白い肌に赤黒い傷が大量についている。

「これは・・・あまりにも酷いわね」

「はい・・・ごめんなさい・・・母さん」

フェイトは傷ついた体で、声を絞り出すように謝罪の言葉を口にする。

「いい、フェイト？　あなたは私の娘、大魔導師プレシア・テスタロッサの一人娘・・・」

すっ、とプレシアと名乗る女性は左手をフェイトのあごにそえる。

「不可能なことなどあってはダメ、どんなことでも・・・そう、どんなことでも成し遂げなければならないの」

「・・・・はい」

「こんなに待たせておいて・・・上がってきた成果がこれだけでは・・・母さんは笑顔であなたを迎えるわけにはいかないの・・・分かるわね、フェイト」

「はい・・・分かります」

プレシアの言葉に娘への労いの想いは一切なく、フェイトの頑張りを否定することしか言わない。
フェイトも母からの叱責に人形のように同じ返事を繰り返すだけ。

「だからよ・・・だから、覚えてほしいの・・・もう二度と母さんを失望させないように」

右手に持った杖が一本のムチへと変わる。　それを見てフェイトの

顔が恐怖に染まり、目をつぶる。　彼女にはこれから自分が何をされるのか分かっているのだ。　もう何度もあったことだから。

バシッ！

「うぅ！」

バシッ！

「あぁ！」

バシッ！

「うぐっ！」

再びムチを振るう音とフェイトの悲鳴が響く。　それは失敗への罰でも、躾でも、拷問でもなく、ただプレシアのいら立ちをぶつけているかのようだ。

そんな理不尽な暴力の音に耳をふさぎ、扉の前で座り込む人の影がある。　アルフだ。

「なんだよ・・・一体なんなんだよ？」

できることなら今すぐに2人の前に飛び出して自分の主を叩き続ける女を殴りとばしたい。
だがそれはできない。　できるならばとっくの昔にやっている。
それほどまでにあの女は・・・プレシアは強い。　大魔導師の自称はけっして驕りではないのだ。

「あんまりじゃないか・・・あの女！」

そしてなにより、あの女を傷つければ最も悲しむのはフェイトだろう。　自分と契約をかわしたパートナーが、愛する母を傷つける。　やさしく、人との交流が少なかったフェイトにとってどちらもかけがえのない存在で、どちらか一方を選ぶことなどできないのだ。

ひときわ大きな悲鳴が聞こえ、思わず目をつぶったがすぐに開き、壁に手を当てる。
その目が宿す感情はプレシアへの怒り。

（あの女の・・・フェイトの母親の異常さとか、フェイトに対する酷い仕打ちは、今に始まったことじゃないけど・・・今回のはあんまりだ！　一体何なんだ？）

ある日いきなり、プレシアはフェイトにジュエルシードという宝石が必要だから集めてこいといった。　だからフェイトはそれを集めた。　母に喜んでほしかったから、よくやったと、さすが母さんの娘だと言ってほしかったから。　お土産に地球のお菓子まで持って。だが待っていたのは褒め言葉でも、労いの言葉でも、感謝でもなく少ない、遅すぎる、そんな非難と本当に子の親なのかと疑いたくなるような虐待同然の暴力。

（あのロストロギアはジュエルシードはそんなに大切なもんなのか！？）

彼女の疑問に答える者はいない。

「ふん」

気がすんだのか、これ以上は今後の捜索に関わると思ったのかプレシアはムチを振るうのをやめた。　フェイトの体はさらに傷つき、意識もいつ途切れてもおかしくないほど体力が消耗している。

「ロストロギアは、母さんの夢を叶えるためにどうしても必要なの」

「はい、母さん・・・」

「特にあれは・・・ジュエルシードの純度は他のものよりはるかに優れてる。　あなたは優しい娘だから、ためらってしまうこともあるかもしれないけど・・・邪魔するものがあるなら潰しなさい、どんなことをしても！」

あなたには、その力があるのだから・・・。　そう言いムチを杖に戻し、フェイトの拘束を解除する。　支えを失ったフェイトはそのままうつぶせに倒れてしまう。
倒れた娘に手を差し伸べることもなくプレシアは続けて言う。

「行ってきてくれるわね・・・私の娘、かわいいフェイト」

まるで台本を棒読みするかのように、感情のない声だ。　第三者が聞けば明らかに上っ面だけの言葉。　だがフェイトにはそれで充分だった。

「はい・・・行ってきます、母さん」

少女は立ち上がる。　愛する母の笑顔を見るために・・・。

「んで、今度こそここでいいんだろうな？」

怜治たちは海鳴市内の臨海公園に来ていた。
フェイトを探すには、まずはジュエルシードを見つければいい。
そう結論付けたスタンの提案に従い、怜治は海鳴市内を走り回っていた。
学校は創立記念日で休みだったことも幸いし、いつも以上に捜索に専念できた。
だが本腰を入れて探し始めるとこれがなかなか見つからない。　昼の太陽が高いときに探し始めたのにもう夕方だ。

『ああ間違いねぇ、オレのセンサーがビンビン反応してやがるぜ』

本当のことを言うとここ以外の場所は探しつくしてしまっただけなのだがそれを気にする様子はない。　フェイトより先に見つけることができれば結果オーライだ。

「しっかし、ここに来るのも久しぶりだな」

『ん？　そうなのか・・・どうした、昔の思い出でもあんのか？』

「思い出ねぇ・・・・」

頭の中で、ここに遊びに来た時の記憶が蘇る。　それは１０年以上前で、自分は両親と手をつないで、３人はとても仲が良さそうで・・・。

そこまで思い出して頭を振ってこれ以上思い出すのをやめた。　ここに来たのは思い出巡りが目的ではない。　なにより、その先の思い出はつらいだけだった。　ふっきれたつもりでも、やはり心のどこかにしこりのようなものが残っているのだ。

『レイジ！　来たぞ！』

スタンの声で頭を切り替える。
すると草むらから青白い一筋の光が現れた。　ジュエルシードだ。

『ヤッホォイ！！　ほれ見ろ！　オレの言った通りだったろ？』

「ああ大したもんだよ。　ホント、最初っからここに来てればよかったよ」

『ウグ・・・ま、まぁ見つかったんだし、オレらが一番乗りだし、結果オーライじゃね？』

光の柱が消え、ひし形の宝石がそばにあった樹に埋まっていく。
そして樹は急激に巨大化していく。

「封時結界、展開！！」

どこからか声が聞こえ、周囲の空気が変わる。　怜治たち以外の誰かが結界を張ったのだ。
あたりを見回すと2本足で立ったフェレットがいた。　ユーノだ。

「なんだよ、来るの早いじゃねぇか」

続いてなのはも現れる。　こちらに気づいてこんにちはと頭を下げてきたので手を挙げて応えた。

ジュエルシードを取り込んだ樹は、朝方倒したやつのように幹から腕のようなものが生え、獣のようなうなり声をあげている。

突然、金色の光の矢が樹に向かって降り注ぐ。　だが標的となった樹はバリアを展開し、光の矢は全てそれに防がれてしまう。
矢が放たれた方を見るとバルディッシュを構えたフェイトと獣形態のアルフがいた。

「うおぅ！　生意気に、バリアまで張るのかい」

「うん、今までのより強いね」

「なんだよ、一番乗りつってもほとんど同時じゃねぇか」

「！　あなたは、あの時の・・・それにそこの娘は」

「久しぶりだなフェイト、あとアルフも」

なのはもフェイトに気づいたようだ。　フェイトがいるのは公園内のおおきな池の向こう岸にいるためまるで2対1のような構図に見える。
これで、ジュエルシードを探し求める3人が初めて同じ場所にいることになった。

樹がうなり声をあげ、地面が割れて太い樹の根が襲いかかる。
なのはと怜治はそれぞれ空へと逃げる。

「おっと・・・あぶねぇな。　いくぜスタン！！　フォーム？(ワン)アームズ！！」

「アークセイバー、いくよバルディッシュ」

『Ａｒｃ　Ｓａｂｅｒ』

『Ｓｈｏｏｔｉｎｇ　ｍｏｄｅ』

「いくよ！　レイジングハート！」

怜治はスタンをアームズ形態に、フェイトはバルディッシュをサイズフォームにし、レイジングハートも砲撃形態へと形状を変える。
これで各自の戦闘準備は整った。

「ハァッ！」

フェイトが金色の刃を飛ばし樹の根を斬りながら本体に向かう。
だが、本体にはバリアのせいで届かない。

「撃ち抜いて！　ディバイン・・・」

『Ｂｕｓｔｅｒ』

続けてなのはが真上から砲撃を放つが、それもバリアに防がれる。
だがその威力に樹が体を支え切れずに地面に沈む。

「オラァ！！」

怜治が樹の幹を殴りつけるが、それすらもバリアで防がれる。　どうやらこのバリアは全方向に展開でき、打撃も魔法も防げるようだ。

『ったく、厄介だなオイ！』

スタンが悪態をつく一方、フェイトは次の攻撃のために魔法陣を展開する。

「撃ち抜け、轟雷！」

『Ｔｈｕｎｄｅｒ　Ｓｍａｓｈｅｒ』

金色の閃光がバリアと激突する。　三方向からの攻撃はさすがにきついのか、樹も苦しそうな声をあげる。

『もう一息だ！　いくぜレイジ、バスターフォーム！！』

あいよ、と怜治は一旦樹から離れて詠唱を開始する。

「我、ここに求めるはすべてを滅する閃光、片目に宿すははるか先の敵をも見逃さず一寸の狂いなく打ち砕く。　響く轟音は森を払い、

海を裂く！　放たれし閃光は絶望を、闇を、あらゆる負を滅ぼさん！　我ここに誓おう、破滅を光をもって義に背く愚かなるものを裁くため、我は引き金を引こう！！　フォーム？バスター（スリー）！！！！」

詠唱が終わり、スタンの形が変わる。
左手には盾を持ち、右手には巨大なバズーカ砲を持っている。　さらに頭にかけたゴーグルはスコープ状になっていた。

「いくぜ・・・・」

ゴーグルをかけ、バズーカを樹に向ける。

「龍の・・・・」

『咆哮！！』

『Ｅｌ　ｒｕｇｉｄｏ　ｄｅｌ　ｄｒａｇ?ｎ』

紺色の極太の閃光が樹に激突する。　三方向からの砲撃を受け、バリアが砕ける。

ウォォォオオオオオオオオオオ・・・

断末魔の叫びをあげ、樹は消滅しジュエルシードが排出される。

『『Ｓｅａｌｉｎｇ　Ｆｏｒｍ.　　Ｓｅｔ　ｕｐ』』

「スタン、バイクフォーム」

『はいよ』

三人とも封印の準備にかかる。

「ジュエルシード」

「シリアル？」

「封印」

同時に封印魔法が発動し、眩い光が周囲を包む。
光が止むと、蛍火のようにうっすらとした光を発するジュエルシードが浮いている。
封印は成功したようだ。

「ジュエルシードには、衝撃を与えたらいけないみたいだ」

「知ってる。　そのせいで昨日、お前らのデバイスが損傷したんだろ？」

「うん、ゆうべみたいなことがあったら、わたしのレイジングハートもフェイトちゃんのバルディッシュも、あとスタンさんもかわいそうだもんね」

『あれ？　オレ今ついでみたいな扱いじゃなかった！？』

「気にすんなよ。　そんでもって俺ら三人、それぞれ譲る気はねぇ・・・と」

「もちろん」

『Ｄｅｖｉｃｅ　ｆｏｒｍ』

「わたしは、フェイトちゃんと話しがしたいだけなんだけど・・・」

『Ｄｅｖｉｃｅ　ｍｏｄｅ』

「結局やりあうんだな。　まぁこっちはそれでもＯＫなわけだが・・・」

『フォーム？、アームズ』

互いにデバイスを戦闘のための形態に変化させ、構える。

緊迫した空気が流れる。

そして、三人同時に駆けだす。

一人は杖、一人は斧を、一人は拳を振り上げて激突・・・・・・しなかった。

激突の瞬間強い光が発し、ひとつの人影が現れ、三人の攻撃を止めてしまう。

「ストップだ！」

その声はまだ声変わりしてない少年のもので、

「ここでの戦闘は危険すぎる！」

突然の出来事に三人は驚き、困惑している。

「時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。　詳しい事情を聞か

せてもらおうか」

それはアースラにいたあの黒髪の少年だった。

第9話　協力・非協力

時間は少しさかのぼり、場所はアースラに移る。

ブリッジにはスタッフがキーボードを操作しており、海鳴での戦闘映像が様々な角度でモニターに映りだされている。

「現地ではすでに三者による戦闘が開始されているもようです」

「中心となっているロストロギアのクラスはＡ＋、動作不安定ですが無差別攻撃の特性を見せています」

「次元干渉型の禁忌物品、回収を急がないといけないわね」

スタッフからの報告を聞きリンディは艦長席から立ち上がる。

「クロノ・ハラオウン執務官、出られる？」

「転移座標の特定はできています。　命令があればいつでも」

呼ばれたクロノはすでに自分のデバイス“Ｓ２Ｕ”を出しており、言葉通り出動準備は完了している。

「それじゃあクロノ、これより現地での戦闘行動の停止とロストロギアの回収、三名からの事情聴取を」

「了解です。　艦長」

転送ポートに乗り、移動先の座標を打ち込む。

（もし三人とも戦闘になったら厄介だな、みたところ魔力量もかなりあるし、みたことないタイプのデバイスもある）

できれば穏便に済ませたいが、万が一の事態を予想し再度気を引き締める。

そこへ

「気をつけてね～♪」

まるで散歩に行く子どもへかけるような軽い声をかけられ、緊張感が削がれる。

声の主は今さっき出動命令をだしたリンディだ。

頬を緩ませ、ハンカチまで振っている。

「はい・・・行ってきます」

リアクションに困った表情をしたクロノだが、すぐに意識を集中し転移を開始する。

虹色の光に包まれ、クロノの姿がポートから消える。

クロノを見送ったリンディは再びモニターをみる。

モニターに映るのは怜治、フェイト、なのはの三人。

「できれば、穏便に済ませたいけど・・・」

「クロノ君は頭固いですからねぇ、へんにあちらを怒らせたりしなきゃいいんですけど」

「フフ、ほんとね」

エイミィの言葉に思わず苦笑してしまう。
その眼は艦長として隊員を心配するものではなく、自分の息子を心配する母の眼だった。

魔法少女リリカルなのは☆Ｔｈｅ　Ｒｉｄｅｒ☆　第９話　協力・非協力

時間は再びクロノが介入したところまで進む。

「ストップだ！　ここでの戦闘は危険すぎる！」

三人とも突然のことに驚き眼を見開く、突如自分たちの間に見知らぬ少年が現れ、自分たちの攻撃を防ぎきったのだ。
なのはの杖を左手で受け、フェイトの斧は右手に持ったＳ２Ｕで、そして怜治の拳は防御魔法で防いでいる。
そして少年は自分が時空管理局の執務官、名はクロノ・ハラオウンと名乗った。
どれもこれも怜治には聞き覚えのない単語と名前だ。

「時空管理局？」

いつのまにか木に登っていたユーノが呟いた。　彼は知っているらしく、ということは魔法に関係ある単語なのだと怜治は判断した。

「まずは三人とも武器を引くんだ」

「なんだよ、いきなり出てきてエラそうなものいいじゃねぇか」

「なに！？」

怜治の言葉に不快感を隠さずに眉間にしわを寄せて睨みつけてくる。

沸点の低いやつだ。

そう思いながら少年をよく見るとなのはたちより頭一つ分ほど背が高いが、男子にしては背が低い。

（なんだよ。　またガキかよ）

今のところ出会った魔導師がみな子供ばかりだ。　実は魔導師というのはネバーランドみたく小さい子どもしかなれないのだろうか。

だったら自分は一体なんなんだ。

そう考えていると無視されたと思ったのかクロノはさらに眉間のしわを深くしていく。

『レイジ、ここは大人しく従おうぜ。　管理局ともめるのは面倒だ』

スタンに言われ、他の2人も大人しく従うようでここで自分だけごねるわけにはいかない。

わかったよ、と小さく呟いてにぎった拳を解き、四人そろってゆっくりと地上に降りていく。

「このまま戦闘行為を続けるなら・・・」

クロノの警告は、　突然空から降ってきたオレンジ色の光の矢によってさえぎられる。

「なっ！？」

クロノはすぐさま防御魔法を展開し、矢を弾く。
矢が飛来してきた方向を見上げると周囲に光球を浮かべる大型犬、アルフがいた。

「フェイト！　撤退するよ、離れて！！」

同時に光球を矢のように放ち、それに合わせてフェイトは再度飛翔する。

「うおっと！」

他の三人は矢が着弾する直前に後ろに跳び、回避する。
先ほどまで自分たちがいたところで爆発が起こり爆煙が周囲を覆う。

「ったくいきなり危ねぇな！」

「あっ！　フェイトちゃん！」

なのはの声で上を見上げるとフェイトがジュエルシードへと手を伸ばそうとしていた。
クロノもそれに気付いたのか無言でＳ２Ｕをライフルのように構える。
杖を構えて狙うのはフェイト。
彼女はジュエルシードに気を取られていてこちらを警戒する様子はない。

「おいお前何を・・・」

怜治が言い切る前に水色の光の弾丸が高速で発射される。
弾丸は真っすぐフェイトへと向かう・・・・が一発も当たらなかった。
否、当たる直前で別の弾丸に相殺されたのだ。

「なっ!?」

信じられないといった風な声を上げるクロノ。
彼はすぐに自分の隣をみると、リボルバーを構えた怜治がいた。彼が妨害したのだ。

「おいおまえ!!　自分が何をしたのか分かっているのか!?　公務執行妨害だぞ!!」

「はっ、武器を構えてもねぇ小娘をいきなり射撃すんのが公務かよ。執務官だかなんだかしらねぇがずいぶんと物騒なガキンチョだな」

「なんだと!!」

今にも噛みつかんとばかりに怒りをあらわにするクロノ。
対して、怜治は先ほどのエラそうな言い方といい、いきなりの射撃といいこいつとは仲良くなれそうもないなと思った。
チラッと視線をフェイトに向けるともうすでにアルフと一緒にこの場を去るところだった。
ジュエルシードは結局彼女が持っていったのだろう。

（ケガは大丈夫そうだな、さてとリベンジのチャンス潰してくれたこのガキンチョをどうするか・・・）

物騒なことを考えてながらクロノに視線を戻すと全身から怒りのオ

ーラを噴き出しているクロノと、今の状況についてこれていないのか目を白黒させているなのはがいた。

そして、怜治は知らないがこの光景をみているのがあと十数名、中継された映像を見ていたアースラの面々だ。

「・・・戦闘行動は停止。　捜索者の一名は逃走、ジュエルシードは・・・奪われました」

「すぐに追跡を！」

「多重転移で逃走しています。　追いきれません！」

はぁ、とため息をつくのは艦長席についたリンディ。
任務は半分成功、半分失敗といったところか。
だがせっかく止めた戦闘もまた再開しそうだ。　おもにクロノと怜治が。

「あちゃ～、クロノ君マジで怒ってますね。　任務邪魔されたから仕方ないかもですけど」

モニターに映る2人の少年の険悪なムードをみて危機感を感じるエイミィ。
だがそれは彼女だけでなくブリッジにいる全員が感じていることでもある。
まさに一触即発。
すぐにでも殴り合いでも始まってしまいそうだ。

「はぁ、クロノもなんだかんだでまだまだ子どもってことかしらね」

無警告での射撃、これは別にたいした問題ではない。
まぁ狙った相手が女の子だったので後で軽い説教でもしておこうかと考えた。

だが相手の言葉にいちいち怒りを覚える短気さはダメだ。

「とりあえず、事情を聞いてみましょうか。　その前に・・・」

あの状況をどうにかしないと、そういってリンディはそばにあった端末を操作する。
これで向こうにいるクロノと直接連絡がとれる。

『クロノ、お疲れ様』

「おぉ！　なんだいきなり!?」

突然目の前に円形のモニターが現れ驚く怜治。

「か、艦長!!　すみません！　一人には逃げられジュエルシードまで・・・」

モニターに映る女性に向かって姿勢を正すクロノ。
突然敬語を使いだしたクロノの態度の変わりように怜治は若干引いた。

『まぁ大丈夫よ、気にしないで。　それでね、ちょっとお話を聞きたいからそっちの2人をアースラに案内してあげてくれないかしら』

「了解です。　すぐに戻ります」

クロノも少し落ち着いたようで、これでもう大丈夫・・・

「おいおい勝手に話進めんなよ。　俺たちの意思は無視か？」

「うるさい！　誰のせいでジュエルシードをとられたと思っているんだ！！」

「最初に邪魔してきたのはそっちだろ？　大体ジュエルシードは誰かのものって決まってるわけじゃねぇだろ。　ってか普通そっち側がこっちに出向くもんじゃねぇのか？」

「キサマ、時空管理局に盾突く気か・・・・キサマ等のやってることは全て違法行為だぞ」

訂正、さらに悪化した。

「ホントエラそうだな・・・上等だよ、だったらここで一戦やっとくか？」

「いいだろう。　ズタぼろにしてアースラまで引きずってってやる」

カチャ、とＳ２Ｕを構えるクロノ。

対して怜治もファイティングポーズをとる。

「あ、あわわわ・・・」

なのははどちら側につけばいいのか分からないようだ。

両者ジリジリと円を描くように動く。　２人とも完全に戦闘モード

だ。

そこへ

『クロノ！！！　いい加減にしなさい！！！』

ビクッとクロノの肩が跳ねる。

振り向くとモニターに鬼の形相でこちらを睨みつけているリンディがいた。

『今のはあなたの方にも非があるわよ。　ここは管理外世界、私たちの常識とは違った常識があるの。　それを考慮せずに高圧的な態度は感心しないわ』

「す、すみません艦長・・・・」

イタズラがばれて叱られたかのようにしょんぼりと肩を落とすクロノ。

それをみてかわいそうに思ったのか

「はぁ・・・なんかこっちも悪かったな。　ＯＫアースラだっけ？　そっちに行くよ」

アースラ行きを了承した。

アースラ艦内にあるブリッジのとは別の転送ポートに五本の光の筋が現れ、その中からクロノ、怜治、スタン、なのは、ユーノが現れた。

ついた場所は広く彼ら以外に人も、機材すらも置いていない。
小型船の格納庫としても使われるのだろうか。

クロノが無言で歩きだしたので他もそれに続く。

「（こ、ここってどこなんでしょう・・・）」

後ろでなのはが不安そうに念話で尋ねてきた。

「（アースラってとこなんだろ、ワープしたから詳しい場所と外観分かんなかったけど）」

「（えっと、時空管理局の次元航行船の中だと思います）」

なのはのそばを歩くユーノが怜治の問いに答える。

「（航行船？　ってことはこれで異世界へ行けるのか？）」

（はい、世界と世界のはざまを渡るのがこの船で、それぞれの世界に干渉し合うような出来事を管理しているのが彼ら時空管理局なんです）

「（そうなんだ・・・）」

「（ん？　でもさっき俺たちの世界を管理外世界とかってなかったか？）」

「（魔法文化のない世界のことをそう呼びます。　異世界同士で干渉し合うようなことは魔法がない世界ではまず起こりませんから、管理する必要がないというか・・・）」

「（でも起こらないはずの世界でそれが起こっちまった。　だからあちらさんはオレ達から事情を聴いて対策立てようってことだな）」

「（魔法関連の事件が魔法のない世界で起こった・・・そりゃびっくりだろうな）」

やがて廊下への扉が開き、廊下へ出るとクロノがこちらに振り向いた。

「ああ、いつまでもその格好というのも窮屈だろう。　バリアジャケットとデバイスを解除して平気だよ」

「あ、そっか、そうですね。　それじゃぁ・・・」

「まず先にそっちから解除しな。　丸腰になった瞬間撃たれちゃかなわねぇしな」

『オマエはまたそういうことを・・・』

怜治の発言に一瞬ムッとした表情をするがこちらの言い分に納得したのかデバイスとバリアジャケットを解除した。

「これで満足かい？」

ジャケットを解除したクロノの服装は変わらず黒一色だった。　制服なのだろうか。

「あぁ分かったよ。　解除ね、解除・・・」

怜治のジャケットが解除され、出かけると時にきていた私服に戻る。なのはもデバイスとジャケットを解除した。　こちらは学生服のようだ。

「あれ、その制服もしかして聖祥大学付属？　あの私立の」

「あ、はいそうです。　分かります？」

「有名だしな。　あそこの生徒ってことは頭いいんだな。　うらやましいよ」

褒められたのが嬉しいのか、えへへ～、と笑って頭をかいている。

「君も・・・元の姿に戻ってもいいんじゃないか？」

クロノの視線の先にいるのはフェレットのユーノ。

「は？」

「え？」

クロノの言葉の意味がわからず2人は間抜けな声を出してしまった。

「あ、そういえばそうですね。　ずっとこの姿でいたから忘れてま

した。」

そういってユーノは目を閉じて集中する。
すると彼の体が輝き、形を変える。

光が消えるとフェレットは消え、代わりになのはと同い年くらいの金髪の少年がいた。

「はぁ～、なのはにこの姿を見せるのは久しぶりになるのかな？」

少年がなのはの方を見ると、彼女は目を点にしている。

「えええええぇぇぇぇぇぇぇえええええええええええええええええ
えええ！？！？！？」

少ししてなのはの驚きの声がアースラに響きわたった。

「な、なのは？」

「ユーノ君って、ユーノ君って・・・あの、その何！？　えぇだって・・嘘！！　えぇぇ！？」

「落ち着け高町、何言ってのか分からん」

「君たちの間で何か見解の相違でも？」

『あったみたいだな・・・・』

「え、えっと・・・なのは。　僕たちが最初に出会ったときって僕はこの姿じゃ・・・」

「違う違う！！　最初っからフェレットだったよう！！」

え？とユーノはなのはの言い分に頭に手を置いて記憶を探る。

ポクポクポクポク・・・・・・チーン！

「あ、ああ！　そうだそうだ！　ごめんごめん。　この姿は見せてなかった」

「なんだ、んじゃぁフェレットが人間の言葉話してたんじゃなくて、人間がフェレットに変身してただけか・・・・なんかがっかりだ」

「まぁ、人語を解する動物なんて使い魔でもない限りまずいないさ・・・それより艦長をまたせているので、早めに話しを聞きたいんだが・・・」

クロノの言うとおり、彼らは5分近く足を止めていた。

「あ・・・ご、ごめんなさい」

『まあまあ落ちつけよクロ坊、艦長は逃げたりしねぇって』

「当たり前だ！　というかなんだクロ坊って、僕はクロノだ！！」

「どっちでもいいだろ。　さっさと艦長さんとこ行こうぜ」

「あっ待て！　一人で勝手に行こうとするな、艦長室がどこか分かってるのか！？」

先にいこうとする怜治を追って彼らは再び歩き出し、艦長室前に到着した。
クロノが一歩前に出ると、扉が自動で開いた。

「艦長、来てもらいました」

「はわぁ・・・」

「へぇ・・・」

艦長室には盆栽に茶道で使う水指、茶器、茶碗、茶杓（ちゃしゃく）に茶筅（ちゃせん）、炉にかけた釜、柄杓、さらにはししおどしまであり、昔ながらの和風の部屋だった。
その部屋の中央に赤いじゅうたんの上でリンディが正座して待っていた。

「お疲れ様～、まぁ3人ともどうぞどうぞ。　楽にして」

先ほどの鬼の形相とはうって変わってその表情は笑顔だ。

リンディに促され、3人は赤い絨毯の上に腰を下ろす。
さすがにスタンまで乗せるわけにはいかないので少し皆から離れた位置を陣取る。
やがてクロノが茶菓子と抹茶を持ってきた。

「どうぞ」

「お、サンキュ」

茶菓子を口に運ぶ。　洋菓子とは違う和菓子特有の甘みが広がる。

「それじゃ、皆さんのお話し、聞かせてもらえる？」

「なるほど、そうですか」

自己紹介から始まり、一通り今までのことを話した。　その間リンディもクロノも黙っており、そのおかげで横道にそれたりせずに話すことができた。

「あのロストロギア、ジュエルシードを発掘したのはあなただったんですね」

「はい・・・それで僕が回収しようと」

「立派だわ」

「だけど同時に無謀でもある！」

クロノの叱責に言い返せず、ユーノは黙って下を向くだけだ。

「あの・・・ロストロギアってなんなんですか？」

なのはがリンディに向かって質問した。

「まぁ・・・遺失世界の遺産、といっても分からないわね」

えっと、と少し考えてからリンディは再び口を開く。

「次元空間の中にはいくつもの世界があるの。　それぞれに生まれて育っていく世界、その中にごく稀に進化しすぎる世界があるの。　技術や科学、進化しすぎたそれらが自分たちの世界を滅ぼしてしまってその後に取り残された失われた世界の危険な技術の遺産。」

「それらを総称して“ロストロギア”と呼ぶ。」

リンディの解説をクロノが引き継ぐ。

「使用法は不明だが、使いようによっては世界どころか次元空間さえも滅ぼすほどの力を持つこともある危険な技術・・・」

「しかるべき手続きをもって、しかるべき場所に保管されてなければいけない品物」

そこまで言って、リンディの視線がなのはと怜治を捕える。

思わず姿勢を正してしまう。

「あなたたちが探しているロストロギア・・・ジュエルシードは次元干渉型のエネルギー結晶体、いくつか集めて特定の方法で起動させれば、空間内に次元震を引き起こし、最悪の場合次元断層さえ巻き起こす危険物」

続けてクロノもなのはを見つめる。

「君とあの黒衣の魔導師がぶつかった時に発生した振動と爆発、あれが次元震だよ」

クロノがいっているのは怜治が昨日聞いた街での戦闘のことだろう。ただ、直接見たわけではないので詳しくは分からないが、なのはの方を見ると目を見開いている。　その様子から規模を勝手に想像する。

「たった一つのジュエルシードで全威力の何万分の一の発動でもあれだけの影響があるんだ。　複数個集まって動かした時の影響は計り知れない」

「聞いたことあります。　旧暦の４６２年、次元断層が起こった時のこと・・・」

「あぁ、あれはひどいものだった」

「隣接する並行世界がいくつも崩壊した、歴史に残る悲劇」

ユーノの言葉にクロノは苦虫を噛み潰したような顔をした。
リンディの表情も暗い。
よほどの大災害、いや災厄といった方がいいのだろうか。
次元震というから地震のようなものだと怜治は解釈していたが、どうやらそんなものより規模は大きいらしい。

だがそれ以外にも怜治には気になることがあった。

「（なぁスタン、今ユーノが旧暦っつったけど魔法世界じゃ今何年なんだ？）」

「（オマエ・・・今それ聞くのか？　・・・えっと確か今向こうが新暦６５年でユーノの言った次元断層は少なくとも１５０年以上前だな）」

「（どんなもんなんだ？　次元断層って）」

「（今リンディ女史が言ったろ？　まさに世界の終わりってやつだ）」

世界の終わり、そう聞いて想像してみる。
山よりも巨大な津波が都市を飲み込む。　火山が噴火し、大地が割れる。
人々の阿鼻叫喚。　そんな地獄絵図が頭の中を駆け巡った。

「やばいな・・・・・」

「そう・・・繰り返しちゃいけないわ」

心でつぶやいただけのつもりだったがどうやら声に出していたようだった。

そしてリンディは茶碗に入った抹茶に突然角砂糖を入れ、普通に飲んだ。
なのはも怜治もこれに驚いたがリンディは気付かない。

「これより、ロストロギア“ジュエルシード”の回収については時空管理局が全権を持ちます」

「君たちは今回のことは忘れてそれぞれの世界に戻って元通りに暮

らすといい」

「はぁっ！？　なんだよそれ！！」

いきなりの宣言に怜治は立ち上がって非難の声を上げた。
なのはも納得できないようだ。
それをみてクロノは目つきを鋭くして言う。

「次元干渉にかかわる事件だ。　民間人に介入してもらうレベルの話じゃない」

「俺達が住んでる街が関わってんだ。　よそものに全部任せられるわけじゃねぇだろ。　全部忘れて元通り暮らせ？　ふざけんな、こっちはもう全部聞いちまったんだ。　魔法の存在も、ジュエルシードの危険性も、なのに全部忘れて起こってること無視できるほど、俺は物分かりがいい人間じゃねぇんだ」

『オレもレイジに賛成、いきなりやってきてもう関わるなって、いささか横暴じゃねぇか？』

「君達の自己満足な責任感のために多くの人の命を危険にさらす気か！？　魔力は確かに大きいが、所詮素人に毛が生えた程度。　調子に乗らないことだ」

「自己満足なのはそっちも同じだろ。　忘れてるみてぇだが、こっちに魔法は普通存在しねぇ。　時空管理局への信頼なんて０に等しいんだよ」

「なんだと！！」

自分が所属する組織を侮辱され、クロノも立ち上がって怜治を睨みつける。
その眼には明らかに怒りがあった。
だが怜治は続ける。

「だいたい、どうやって他のジュエルシードを見つけるんだ？　俺達は早くても暴走直前までどこにあるか分からなかった。　それはそっちも同じだろ？　事前に場所が分かるならわざわざ戦闘中に来る必要ねぇもんな。　それなら結局暴走に巻き込まれたやつに危険は及ぶだろうが。　だいたい・・・・」

「はいちょっとそこまで！」

リンディが間に2人を引き離す。

「3人とも落ち着いて頂戴。　急に言われても気持ちの整理がつかないでしょう。　なのはさんたちも今夜一晩ゆっくり考えて、話し合って、それから改めてお話しをしましょ？」

口調は穏やかだが、反論許さずといった感じだ。

「・・・送っていこう。　元の場所でいいね？」

『結構だ。　こちとら転移魔法があるんでね』

「そういうことだ。　行こうぜ、スタン」

「あ、おい！」

クロノの制止を聞かずにスタンに跨って転移魔法を発動する。

「先言っとくけど、俺等の気持ちが変わらねぇから絶対。　お前らの邪魔するつもりはねぇから、そっちも邪魔すんじゃねぇぞ」

そう言い残して、怜治とスタンはアースラから姿を消した。

『ぁぁぁぁあああ～～～～！！！　やっちまった！　やっちまたよおい！！　よりにもよって管理局と揉めるとか・・・・マジやっちまったぜ』

「うるせぇな、なっちまったもんは仕方ねぇだろうが、今さらうだうだいっても何もかわんねぇぞ」

アースラから戻った2人はそのまま帰宅。　今はガレージでスタンの整備中だ。
大きな破損はないがところどころに細かい傷があり、今までの戦いでの苦労を思い出す。

『オマエなぁ、管理局って数百っつう次元世界を管理する司法機関だぞ！！　そんなとことモメるとか・・・あぁマジやべぇ』

「ビビってんなよ。　別に俺たちは悪いことするわけじゃねぇんだ。
ただ街に散らばったもん回収するだ、最終的にユーノに返してユーノが管理局に渡せば終わりだろ」

そう言いながら、エアクリーナのフィルターの汚れを落とす。
ここが汚れると燃費が悪くなる、スタンの場合怜治の魔力が燃料だから燃費が悪くなると怜治の負担が大きくなるからよりいっそう念入りに掃除する。

『あっちと手を組んで動こうとかいう考えはないわけね・・・』

「管理局つっても船一隻見ただけだしな。　本当にその組織の人間なのかわかんねぇ。　だったら手を組まずにあっちの動きから判断していった方がいいだろ？」

『今さらだけど・・・オマエって意外と人間不信なのな』

掃除する手が止まる。　一度深く息を吸って掃除を再開する。

「たまに言われる。　・・・俺としては慎重派と言って欲しいんだが」

『昔なんかあったのか？』

「・・・・・まぁな」

スタンはそれ以上深く聞かなかった。

「あぁ・・・今日はいろいろあって疲れた」

ボフッと布団に倒れ込みながら呟く。　もう外は真っ暗だ。
アースラからの転移は予想以上に体力を消費してしまった。
だが意識ははっきりしていて眠る気にはなれない。

「本でも読んでりゃ眠くなるよな」

そう言って本棚から一冊の本を取り出す。
深緑色の表紙で題名は外国語だ。
昔、怜一郎からプレゼントされたもので今でも時々読んでいるのだ。
といっても内容は日本語じゃないので意味は分からず、ときどき載っている図だけ見る程度だが。
パラパラと適当なページをめくって読み始める。
そこでふと違和感があることに気付いた。

（なんか・・・少しだけど、読めるな）

以前は全く読めなかった文字が、少しだけ読めるようになっていた。
本を間違えたのかと表紙を見直すと、確かに昔から読んでいたものだった。
表紙の文字を読み上げる。

「デバ・・・構築・・・・プロ・・・グラム・・・これは・・・理論って読むのか？」

余計意味が分からなくなった気がした。

その頃アースラではスタッフが怜治、なのは、フェイトの戦闘映像の解析をしていた。

「凄いや！　三人ともＡＡＡクラスの魔導師だよ！」

歓喜の声を上げるのはアースラ通信主任兼執務官補佐のエイミィ・リミエッタ。
茶髪のショートカットにつむじからぴょんと跳ねた毛が特徴的だ。

「こっちの白い服の子はクロノ君の好みっぽいかわいい子だし」

「エイミイ！　そんなことはどうでもいいんだよ」

クロノを時折からかいながらも解析作業のスピードが落ちることはない様子から彼女の優秀さがうかがえる。

「魔力の平均値を見てもこの子で１２７万、黒い服の子で１４３万、バイクに乗ってる人が１２０万！　最大発揮時はさらにその三倍以上、クロノ君より魔力だけなら上回っちゃってるね？」

「魔法は魔力値の大きさだけじゃない！　状況に合わせた応用力と的確に使用できる判断力だろ！」

自分でも気にしていたことを指摘され思わず声を強くしてしまうが、

エイミィは動じない。

「それはもちろん！　信頼してるよ、アースラの切り札だもんクロノ君は」

褒められてもどうも素直に喜べないようで、頬を膨らませるクロノ。
するとドアがスライドしてリンディが入ってきた。
管理局の制服ではなく私服姿だ。

「あ、艦長」

「何してるの？　・・・あぁ、三人のデータね」

「はい」

「確かに、凄い子たちね」

「松田を抜きにしてもこれだけの魔力がロストロギアに注ぎ込まれれば、次元震が起こるのもうなづける」

「あの子たち・・・なのはさんとユーノ君、怜治君にスタン君がジュエルシードを集めてる理由は分かったけど、こっちの黒い服の子はなんでなのかしらね」

「ずいぶんと必死な様子だった・・・松田が邪魔しなければ連行して話を聞けたのに！」

自分の任務を邪魔された時のことを思い出し、握る拳に力が入る。

「なにかよほど強い目的がある・・・とか？」

「目的・・・ね」

エイミィの言葉を繰り返し、リンディはモニターを見つめる。
ちょうどフェイトの放った刃が木の根を切り捨てる場面だ。

「まだ小さな子よね・・・普通に育ってればまだ母親に甘えていたい年頃でしょうに」

フェイトは何のために戦うのか、それは彼女しか知らないことだ。
でも考えずにはいられない。
子を持つ親として、子どもを守るべき大人として、彼女のことを考えずにはいられない。

「あ、艦長、通信です」

エイミィが告げると同時にモニターにフェレットモードのユーノが現れる。

「あらユーノ君。　どうかしか？」

『はい。　夕方のお話の答えについて、僕もなのはも協力したいと』

「協力・・・ね」

『ぼくはともかく、なのはの魔力はそちらにとっても有効な戦力だと思います。　ジュエルシードの回収、あの子たちとの戦闘、どちらにしてもそちらとしては便利に使えるはずです』

「ん～なかなか考えてますね。　それなら、まぁいいでしょう」

「か、母さ・・・艦長！」

ユーノの提案をあっさり了承したリンディに詰め寄るクロノ。
なにせ民間人はさがれといったのは自分自身なのであり、それをリンディも分かっていると思っていたからである。

「手伝ってもらいましょう。
こちらとしても切り札は温存しておきたいもの。　ね、クロノ執務官？」

リンディの言い分も最もである。
現在アースラの戦力でクロノは最も重要な位置にいる。
無論他に武装局員がいないわけでもないが、ＡＡＡクラスの彼女たちと同等に渡り合えるのはクロノしかいない。
そのうちの一人がこちら側に協力してくれるというのならばそれに越したことはない。
それをわかっているクロノはそれ以上は何も言えなかった。

リンディはモニターに映るユーノに告げる。

「条件は二つよ。　両名とも身柄を一時時空管理局の預かりとすること、それから指示を必ず守ること。　よくって？」

『分かりました』

ユーノとの通信が終わる。
そこでエイミィがふと思い出したように言う。

「そういえば、もう一人の人はどうなんですか？　ほらわたしと同

い年くらいの」

「怜治君ね・・・。　できればなのはさんと同じようにこちらに協力してくれればいいのだけれど・・・」

「ですよねー。　もうクロノ君があんなきつい言い方するからだよー」

「僕のせいか!?　だいたい、あんな奴いなくっても彼女がいれば戦力としては十分だ!」

「でもあの人の使うデバイスって変わってるじゃない？　バイク型デバイスでしかもあそこまではっきりとした自我があるやつなんて聞いたことないよ?」

「意外と・・・ロストロギアだったりして?」

「だったら好都合。　違法所持でしょっ引いてやるさ」

珍しく熱くなっている弟分の様子を見て、こりゃあまだまだ一悶着ありそうだなぁと思うエイミィ・リミエッタ通信主任であった。

第１０話　ＶＳクロノ・ハラオウン

「はやく・・・はやくなさい、フェイト・・・」

玉座に座り、苦しそうに呟くプレシア。
頭上にはフェイトが持ってきたジュエルシードがくるくると円を描いて浮かんでいる。

「約束の地が・・・アルハザードが待ってる・・・私の、私達の救いの地が！」

体の苦しみを振り払うように叫ぶ。　その瞳には狂気を含んだ強い意志の光が灯っている。
たった一つの望みが、彼女を突き動かす。
己の命を縮めてでも・・・・。

魔法少女リリカルなのは☆Ｔｈｅ　Ｒｉｄｅｒ☆　第１０話　ＶＳクロノ・ハラオウン

『あぁくそっ！　また向こうが早かった！！』

時空管理局の介入があった次の日。
怜治たちは結局管理局に協力はせずに自分たちは自分たちでジュエルシードを集めることにした。
だが実際やってみると、自分たちの不利な状況に気付いた。
時空管理局も、使い魔を使うフェイトも探索能力が自分たちよりも高く、どうしても後手に回ってしまう。
事実、今も管理局と手を組んだらしいなのはが鳥と融合したジェルシードを封印するところであった。

「これで高町たちはふたつ・・・ことごとく先回りされてるな」

『対してこっちはあれからまだひとつ・・・負けてるなぁ」

「次元世界を管理なんて言ってるだけのことはあるな。　捜索の規模が違う」

『フェイト嬢もアルフ嬢と2人でやってる。　それに比べてこっちは・・・』

「悪かったな、サーチひとつできない相棒で！」

しかし実際どうしたものか。
何かうまい手を打たないとこのまま自分だけ取り残されてしまう。
今さら探査魔法を覚えても正確さにはどうしても劣る。
別にこのまま事が終ってくれても構わないのだが、

「このままあのガキに素人呼ばわりされたままでいられるか・・・」

そんな意地のようなものが彼を動かしていた。

（どうする？　後から来て掠め取るってのもあんま上手い手ともいえねぇし、だいたいあの高町やフェイトと毎回やりあうのは効率悪すぎるしな・・・）

彼に必要なのは誰よりも早くジュエルシードを発見すること。
だが集団で動く管理局、魔導師として一流のフェイト、これらをどう出し抜くか・・・。

（ん？）

そこまで考えてふと思考を止める。　なぜ自分はジュエルシードを集めてたのだろう。
フェイトのような目的も、なのはのような思いも、管理局のような任務もない。

「あぁ・・・忘れてたわ。　俺別にジュエルシードが欲しいわけじゃないんだった」

彼がジュエルシードを集める目的は単純にフェイトにリベンジをするためのいわば餌。
それを果たすためなら、特別ジュエルシードに執着する必要はない。
だったら手段はいくらでもある。
そしてひとつのアイディアが浮かんだ

『なんだレイジ、いい作戦でも思いついたか？』

「あぁ思いついた。　といったも作戦といえるようなものじゃないけどな」

今思いついた事をスタンに話す。

『オマエ・・・やっぱバカだ、てか無茶苦茶だ。　フェイト嬢と手を組むなんて』

「誰も手を組むなんて言ってねぇよ。　向こうがジュエルシード集めで他に気が回らないんなら、さっさと集めりゃいいだけだよ」

そう言って怜治はスタンを動かして走り出す。

「んで？　そんな話を信じろってのかい？」

怪訝な顔をして怜治を見るアルフ。

あれから、怜治たちは湖のそばの森の中でフェイト達を見つけることができた。

理由は簡単。

自分たちが持つジュエルシードの封印を一時的に解除して誘い出したのだ。

当然だました上に協力したいといっても信じられるわけがない。

実際アルフからは睨まれ、フェイトも木の上からこちらを警戒している。

「まぁ信じられないのも無理はないよな。　でも俺たちはジュエルシードに拘る理由はない。　その証拠にほれ」

怜治は今まで集めたジュエルシード５つをフェイトに投げ渡す。

「・・・・どうして？」

両手で受け取ってから疑問を口にするフェイト。

「だからいってるだろ、俺たちはジュエルシードを集める目的も義務も任務もない。　ただ集めてりゃまたお前とやりあう機会が来ると思って集めてただけだ。　お前が今ジュエルシード集めにしか気が回らないんだったら、手伝ってさっさと終わらせて勝負したいだけ。」

「へぇ～、でもあんたに何ができるんだい？　封印はフェイト一人で十分だし、探査魔法だって大して使えないんだろ？」

『イタイとこついてくるね』

「まったくだ。　何ができるか、そうだな・・・例えば戦闘とか？」

「・・・それはあたしじゃ頼りないって言いたいのかい？」

気分を害され、非難するような目つきをするアルフ。

「落ち着けって、そうはいってねぇ。　でもこの先管理局との奪い合いになることが多くなるんじゃねぇの？」

管理局という言葉にピクッと耳を動かすアルフ。
どうやら彼女達もそのことについて対策を練ろうとしていたようだ。

「高町・・・あの白い方のガキは管理局に協力するらしい。　となるとお前らは高町とあの執務官同時に相手にしなきゃいかなくなる。
　ジュエルシードによる化け物退治と封印、そしてあの２人・・・
いやもしかしたらあの船には他の魔導師も乗ってるかもしれねぇな。

とにかくあちらは大勢で来るだろう」

一旦言葉を切り、一息ついてまたしゃべりだす。

「つまりだ。　フェイトが封印に専念。　俺とアルフが管理局の相手をする。　探索だっていないよりはましなはずだぜ？」

さぁどうする？と言って拳を差し出す。

合わせたら了承、しなければ拒否ということだ。

アルフは答えを出しかねてるようで、頭をガシガシと掻きながら言う。

「アンタの言いたいことは分かるよ。　でも、そういっておいて実はアタシ等管理局に売り渡すつもりじゃないだろうね」

まだ信用してはくれないらしい。

拳を下ろして怜治はやれやれと首を振る。

「そんなことして俺にメリットがないな。　俺の目的はフェイトへのリベンジ、管理局に渡して牢屋にでも入れられたらかなわねぇよ。　・・・別に俺を仲間にしろなんて言ってねぇよ。　ついてこれないようだったら置いていってくれて構わねぇ」

これだけ言ってもまだ納得いかないようで、アルフは腕を組んで考え込んでいる。

すると怜治の前にフェイトが下りてきた。

そして

「分かり・・・ました」

と一言だけ言った。

『それは、協力してＯＫってこと？』

コクッと頷くフェイト。

「ちょ、フェイト！？」

思わず叫んでしまうアルフ。

だがその声にフェイトの判断を非難する色はない。

フェイトは他人との交流がなかったため自分から人に近付くことがまずない。

なのはや怜治と鉢合わせした時も警告程度で多くは語ろうとしなかった。

そんなフェイトが他の誰かと手を組むということは思っていなかったのである。

「いいんだよアルフ。　最終的には管理局の人たちとは戦うことになるんだろうし、早くジュエルシードを集めるためなら。　・・・でも」

一度言葉を切って怜治の目を見て告げる。

「わたしは、あなたとの再戦に興味はありません。　ジュエルシードを集め終わったらすぐに帰ると思います。　それでもかまいませんね？」

異議は認めない。

そんな強い意志が彼女の瞳に浮かんでいた。

「いいよ別に。　そんときゃ無理にでも相手してもらうから。　ダメだったら仕方ないからあきらめるよ」

「よろしくお願いします」

「はいよろしく～」

これでジュエルシード捜索は管理局とそれに協力するなのは、そしてフェイトとアルフに協力する魔導騎兵（ライダー）という二つの勢力に二分された。

「あぁ！　まだだ～、また取られちゃったよクロノく～ん」

「またか・・・・」

モニターを見て情けない声を出すエイミィに対してしっかりしろとばかりに頭を軽く叩くクロノ。

彼らが話していることはジュエルシードの回収についてだ。

なのはとユーノの協力とアースラの探査能力によってジュエルシードは順調に回収できた。

それからはなのはと他の武装局員を動員しての回収。　そして自分たちはフェイトの捜索、といった具合に役割を分担していた。

ことは順調に進み、すでに二つのジュエルシードの回収、封印に成功している。

しかし・・・。

「うん。　他の局員がジュエルシードを見つけたら黒服の子と鉢合わせ」

「そして戦闘になり、ジュエルシードは彼女たちに奪われた・・・か」

クロノの言葉に頷くエイミィ。

ＡＡＡクラスの魔導師である彼女と対等に渡り合えるのはなのはかクロノぐらいなため、他の局員がぶつかった場合はことごとく回収に失敗していた。
しかも問題はそれだけでなく。

「あのバイクに乗った人はむこうに協力してるから、戦闘はそっちに任せて自分たちは封印に専念。　あ～あ、クロノ君があんなきついこというからだよ～」

「あの程度でへそを曲げるなんて、子どもすぎると思うけどね。
しかしこれでＡＡＡクラス魔導師を2人相手にしなきゃいけなくなる・・・・面倒だな」

モニターに映っていたのはフェイトに背を向けて武装局員を殴りとばす怜治の姿があった。

「これで向こうが手に入れたのは二つ・・・いや、彼は先日独りでひとつ確保してたから三つか」

「比べてこっちは二つ。　これで残りは・・・」

「五つだな。　もう陸地はほとんど捜索し終わった。　後は海だろうな」

探査装置を操作し探査区域を海上に変更する。

「向こうもそれには気付いてるだろう。　となると決戦は・・・・海だな」

海鳴市から沖合に出て数ｋｍの海上に怜治たちはいた。
ゴオオオオォォォォっと強い海風が吹き荒れ、冷たい雨が体を打ちつける。
波も荒れており、ところどころ海面に突き出た大岩に当たり水しぶきを上げる。

「こんなとこに残りのジュエルシードがあったとはな・・・いくら街中探しても見つからねぇわけだ」

『しかも残り五つ全部集まってやがる。　これであとはなのは嬢が確保した五つを奪っちまえば終わりだな』

「奪うね・・・まるで悪役だ」

『まぁやってることは悪役だな、てか自分であんな計画立てておいて今さら覚悟が揺れるなんてやめろよ？』

分かってるよ、と答える怜治。

彼が立てた計画はいまだに準備段階のような状態で、しかも自分の行動だけでなくフェイト、管理局といった他の人間の行動で左右されるというずさんなものだ。

だからこそ彼自身がうまく立ち回って自分に都合のいいように動かさないといけないのだ。

ゆえに、彼に自分の行動に迷っている暇はない。

迷いや戸惑いは計画失敗に直結してしまう。

頬をパシッと叩いて気合いを入れ直す。

「んで、フェイトは何やってんだ？」

フェイトの方を見ると足元に魔法陣を描き、呪文の詠唱をしている。

『ありゃ儀式魔法。　自然現象をコントロールする魔法だ。　フェイト嬢はあれでジュエルシードに魔力を叩きこんで無理やり暴走させて封印するつもりなんだろう』

「無茶するなぁ・・・」

『オマエがいうか』

「あんたらうるさいよ！　ちゃんと周囲を見張ってな！！」

主が真剣な中で緊張感のない会話をする怜治たちに憤慨してアルフが叫ぶ。

「はいはい」
『はいはい』

「“はい”は一回！！！」

そんなコント染みたことをしている間にフェイトの詠唱が終わる。

「はぁあああ！！！！」

叫びとともに彼女の周りに金色のスフィアが展開。　いくつもの雷電が海に突き刺さる。
そして海が更に荒れ、雷鳴が響く。　そして海中から青白い光の柱が五つ現れる。
ジュエルシードが発動したのだ。

「大したもんだな。　でも・・・・」

『あぁ、あんな大規模な魔法を発動した後に五つ同時に封印。　これはフェイト嬢の魔力でもきついだろうな』

「だからワタシ等の役目は、邪魔してくるやつを食いとめてフェイトが封印に集中できるようにすることだ」

アルフはそう言いながらも心配そうな顔でフェイトを見つめている。
彼女もこれでフェイトにかかる負担が大きいことは十分に理解しているのだ。
だがそれをいくら言ってもフェイトはやめることはない。
だからせめて、それ以上に余計な負担をかけさせないつもりだ。
たとえどんな手を使っても。

やがて風と海水が光の柱を包み込む。
フェイトは自分の愛機（バルディッシュ）を見つめる。

「いくよバルディッシュ。　頑張ろう」

アルフが結界を張ったことを確認し、フェイトは今や怒り狂った龍のように暴れまわる水柱に向かって突き進む。
それを察知し、水柱がフェイトに襲いかかる。
それをかわすと水柱から電撃が飛んでくる。
おそらくジュエルシード自身も攻撃に転じているのだ。
それをかわすが電気を帯び、時にそれを放つ水柱は五本ある。
すぐさま他の水柱が絶え間なく彼女を襲う。
怜治はリボルバーでフェイトを援護する。
放った光弾が水を、雷撃を打ち抜く。
だがすぐに再生しふたたびフェイトに襲いかかる。

「おいおいおい、切りねぇぞ」

「口きいてる暇があったら手動かしな!!　アンタにできるのは援護射撃しかないんだからしっかりやりな!!」

アルフが咆える。　考えてみれば彼女が一番フェイトの援護に回りたいのだ。
しかしこの状況での結界は集中を切らせばすぐに崩れかねない。
だから怜治に援護を任せた。
本当は自分がやりたいはずなのに。　他の誰かに任せたくないはずなのに。

「だよな・・・弱気なこと言ってる時じゃねぇよな」

援護役というのはある意味アルフからの信頼なのかもしれない。
そう思うと使命感のようなものが湧き上がってくる。

「んじゃ、しっかり援護させてもうか！！」

リボルバーから二丁拳銃に切り替え、一気に発射。
２０の光弾がフェイトの周りの水を薙ぎ払う。

ここでは、気の抜けたことをするわけにはいかない。

そう思い直して再び銃の引き金を引いていく。

「はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・」

「はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・くそ、いくらなんでもそろそろ限界だぞ」

あれから一時間以上がたったがまだ封印はできない。
相手の攻撃が激しく、フェイトもかわすばかりで封印まで持っていけない。
回避ばかりしていたため魔力よりも先に体力の方が底を尽きかけているのだ。
怜治も援護射撃だけとはいえ、激しい風雨の中では体力の消耗も激しい。
魔力もかなり消費した。
アルフの結界もいつまでもつかわからない。

「フェイト！　一旦下がれ！！　そのままじゃぶっ倒れるぞ！！」

「退け・・・ないよ。　これを持ってかなきゃ・・・母さんの・・・ために」

『母さん？』

「それがあいつのジュエルシード集めの目的かよ・・・くそっ」

息絶え絶えのフェイトが言った言葉に怜治は眉にしわを寄せる。
それは苛立ちのしるし。
誰かに頼まれたのだろうとは思っていた。
その誰かは母親だった。
もしかしたら母親が悪党に捕えられ、人質にでもなっているのだろ

うか・・・それならまだいい。　その悪党をぶっ飛ばせばいいだけだから。
だがそうではなく、母親が自分の意志でフェイトに頼んだとしたのなら、その母親を怜治は許せないだろう。
病気やけがで動けないのかもしれない。
母親は魔法が使えないのかもしれない。
たとえそうでもこんな危険なことを娘にやらせる親に対して怜治は怒りを覚える。

「おいフェイト！　お前の母親がなんでジュエルシード欲しがってんのかしらねぇが、それ渡すお前になんかあったらどうすんだよ！」

「そうだよフェイト！　あんな奴のためにそこまで無理する必要ない。　結界はもたせるから一旦退いて少しでも魔力の回復を・・・」

「ごめんアルフ・・・できないよ。　ここで退いたらまた、母さんを悲しませちゃうから！」

そう言うと同時に襲ってきた水柱にフォトンランサーを叩きこむ。
だがここで予想外のことが起こった。

水柱がフェイトの攻撃を避けたのだ。
避けられることは戦闘において別におかしくはない。　だが問題なのは避けた物だ。
あれはジュエルシードが暴走したことによって攻撃性を持ったただの海水。
無論知性などあるわけがなく、ただ近づくものに襲いかかるだけのもののはず。
そんなものが避けるという行動をするはずがないのだ。

それが起こった原因があるとするならば

『ジュエルシードが・・・ロストロギアが成長してるとでも言うのか？』

ロストロギアは現存する技術では造れない物質、もしくは技術そのもの。

だから自己学習機能なんぞがついたものがあってもさしておかしくはない。

知性が宿るまでいくとは思えないが、この土壇場の状況で行動パターンが増えるということは脅威だ。

そしてそんな突然の事態に対応できる体力はフェイトに残っていない。

攻撃をかわした水柱が、龍のように口をあけてフェイトを飲み込もうとする。

「フェイトオオォォォォオオオオオオオオォォオオオ！！！！！」

アルフの悲痛な叫びが響く。

その瞬間曇天の空から桜色の閃光が水柱を消し飛ばした。

閃光が来た方を見ると雲に穴があき、そこからまぶしい青空と太陽の光が差し込んできた。

そして光とともに下りてくるのは、金色の魔法杖に白いバリアジャケットを着た少女。

高町なのはだった。

隣にはユーノもいる。

「フェイトの邪魔を・・・するなぁぁぁあああ！！！」

アルフが吠え、突撃する。
しかしユーノの防御魔法で防がれる。

「違います！　ぼくたちはあなた達と戦いに来たんじゃない！！」

ユーノの言葉にヒューっと口笛を鳴らす怜治。
それが本当ならフェイトへの助太刀だろう。　ならばそれほど嬉しいことはない。

「助太刀にってんなら、もっと早く来てほしかったね」

「あの、えっと・・・すみません」

「別に責めてるわけじゃねぇから、さっさとあのガキ助けてやれよ。俺たちもフォローすっから」

「ありがとうございます！」

なのははペコッと頭を下げてフェイトのところへと向かう。
警戒するフェイトに対して静かに話しかける。

「フェイトちゃん！　手伝って、ジュエルシードを止めよう！」

そう言ってレイジングハート向けると、彼女の魔力が光の帯となってバルディッシュに注がれる。
デバイスごしにフェイトに魔力を分け与えているようだ。

『Ｐｏｗｅｒ　ｃｈａｒｇｅ』

バルディッシュが再び金色の刃を宿す。

『Ｓｕｐｐｌｙｉｎｇ　ｃｏｍｐｌｅｔｅ』

「２人できっちり半分子」

ほほ笑むなのはにフェイトは理解できないといった顔をする。
自分と彼女は敵同士のはず。　こんなことをしてなんの意味があるのだろう。
そう思考を巡らせているとまた水柱が襲いかかってきた。　今度は五本いっぺんに。

「させるかぁっ！！」
「させないよ！！」
「させっかよぉっ！！」

三者三様、しかしほとんど同じ言葉を発してユーノはチェーンバインドを、アルフはフォトンランサーを、怜治はホーミングショットを放ち、一気に水を薙ぎ払う。
そして拳銃を構えたまま怜治が叫ぶ。

「おいフェイト！　余計なこと考えてねぇでちゃっちゃと封印しちまえ！！」

「え・・・でも・・・」

「“え・・・でも・・・”っじゃねぇ！！　高町が損得勘定でもの言うなんてあるわけねぇんだから、その善意は素直に受け取って協力しとけ！！」

「えっと・・・なんか気になる褒められ方だけど・・・とにかく！
ふたりでせーの、一気に封印！！」

『Ｓｈｏｏｔｉｎｇ　ｍｏｄｅ』

レイジングハートのヘッド部分が音叉のような形に変わり、足元に魔法陣を描く。
封印の体勢に入る。

「・・・・・・」

『Ｓｅａｌｉｎｇ　ｆｏｒｍ.　　Ｓｅｔ　ｕｐ』

フェイトが指示したわけでもないのに、バルディッシュが槍のような形に変わる。

「バルディッシュ・・・」

愛機の突然の行動に驚き見つめる。
バルディッシュは何も言わない。
ふとなのはの方を見るとこちらの視線に気付いたのかウインクで返してきた。
迷いのない、純粋そうで真っすぐな瞳。
それを見て自分の中の迷いが消えていく。
なのははレイジングハートを上に掲げる。

「ディバインバスター、フルパワー……いけるね？」

『Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ，ｍｙ　ｍａｓｔｅｒ』

桜色の翼が展開、同時に足元の魔法陣が巨大化していく
フェイトも足元に魔法陣を描き、バルディッシュには金色の翼が展開する。
フェイトの魔力に反応して、轟雷が響きわたる。

２人のデバイスに膨大な魔力が集中していく。

「サンダー・・・」

「ディバイン・・・」

「レイジィィイイイイイイイ！！！」

「バスタァァアアアアアア！！！」

雷光がはしり、桜色の閃光が荒れ狂う海をえぐる。

すさまじい爆発が起こり、その衝撃が周囲のものを吹き飛ばす。
それらが治まった時、海の荒れも治まり、五つのジュエルシードが宙に浮かんでいた。
なのはとフェイトの間に。　互いに見つめ合う２人。
だが２人の瞳に戦意の色はない。　やがてなのはが手を胸において静かに告げる。

「友達に、なりたいんだ」

その言葉に目を見開くフェイト。　アルフもユーノも怜治も静かに見ている。

その時、空を禍々しい色の雷が貫き、海を割る。

『な、なななな何だ！？』

「母さん！？」

「母さんって・・・お前の母親は雷様か！？」

「バカ言ってんじゃないよ！　あれは・・・フェイトの母さんが、プレシアの魔法」

突如現れた雷は突如向きを変え、フェイトに襲いかかる。

「あああああああああぁぁぁぁぁああああああああ！！！！！」

「フェイトちゃん！　きゃあ！」

『なっ！？』

「どういうことだよ。　てめぇの娘を攻撃しただと！？」

「フェイト！！」

意識を失い、海へと落ちるフェイトをすんでのところでアルフが抱えそのままジュエルシードへと手を伸ばす。

だが手は阻まれる。　クロノのＳ２Ｕによって。

「邪魔を・・・するなぁあああ!!」

「うわぁぁあああ!!」

力づくでクロノ突き放し、再びジュエルシードへと手を伸ばす。
だがそこには二つしかなかった。

「なっ!?」

驚いてクロノの方を見ると、彼の手には三つのジュエルシードがあった。

「くそ・・・う、うわぁぁあああああああ」

アルフの咆哮。　手を高く上げ魔力を集中。　魔力の塊を海へと叩きこむ。
大きな水しぶきと高波が起こり一瞬視界が海水で遮られる。

「うおっ！　いきなり何を・・・スタン!!」

『分かってるって、見失うかよ!』

スタンのライトが光り、何かの解析を始める。
波が治まった時、2人の姿はなかった。

『あーあ、結局置いてけぼりかぁ。　レイジ、フラれたな?』

「ガキに俺の魅力はわかんねぇんだよ・・・って自分で言ってて恥ずかしくなってきた」

「そこまでだ。　大人しくしてもらおうか」

幼さの残る声とともに首に冷たい感触。　振り向かなくても分かる。クロノがＳ２Ｕを自分の首に置いているのだろう。

「ったく、つくづく後ろから仕掛けるのが好きなんだな。　どこの暗殺集団だ？」

「違うよ。　僕が君の後ろに回ったんじゃなく、君が僕に背中を向けていただけだ」

「挑発のつもりか？　だったらなってねぇな、そこは“どうして僕がわざわざ君の正面に回り込む無駄な労力を使わなきゃいけないんだい？”ってのが正解だな。　多分」

「君とくだらない言葉遊びをしている暇ない。　もう一度言うが、大人しくしろ。
　君のやっていることは全て犯罪行為だ」

「おかしいな。　バイクの免許なら持ってるし・・・まさかてめぇらの世界じゃ天気の悪い日に海に来るのは犯罪なのか？　なんとも融通のきかねぇ法律だな」

「最初にやった公務執行妨害、武装局員への攻撃、魔法文化の無い世界での魔法行使と戦闘、ロストロギアの無許可違法所持…以上が君の罪状だ。　何か言いわけはあるか？」

「ついカッとなってやった。　反省はしていない」

「ふざけるなぁぁぁあああああ！！！」

クロノの持つＳ２Ｕが火を吹き、水色の魔力弾が怜治の頬をかすめた。
血は出ていないが擦ったように赤くなっている。

ニヤリと厭らしい笑みを浮かべて振り向く怜治。
その笑みに憤ったのか再び魔力弾を発砲するクロノ。
怜治はスタンを即座に鉄拳形態（アームズフォーム）になりそれを弾く。
そしてそのままクロノに殴りかかる。　だがクロノは後ろに下がり拳の間合いから出る。
怜治は空を切った拳をすぐに解き、もう片方の手も差し出し互いを重ねる。
掌に魔力が集まり、スフィアを形成。　それに合わせて肩のタイヤが回転する。

「龍の・・・鉄拳！！！」

『Ｅｌ　ｐｕ？ｏ　ｄｅｌ　ｄｒａｇ？ｎ』

スフィアが炸裂し、衝撃波とともにクロノに襲いかかる。

手をかざし、防御壁を展開。　直撃を防ぐがその威力に後方に吹っ飛ぶ。

「おいおいおいどうしたぁあ！！　シツムカンってのはこの程度かよ！！」

「うるさい！！　力で勝ってるからって調子に乗るなぁあ！！！」

クロノはＳ２Ｕを構え、杖先に魔力を集中。

「ブレイズキャノン！！！」

水色の閃光が空気を切り裂き怜治へと向かう。

「力比べ上等！！　スタン！　フォーム？バスター！！」

砲撃形態（バスターフォーム）に切り替え、砲身を迫りくる閃光に向け、空気をなぞるように左右に動かすとボシュッという音とともに紺色のスフィアが設置される。

その数は計五つ。

「ドラゴニックカノン五連射ぁああ！！」

五つのスフィアが五つの閃光となってはしる。

砲撃は鉄拳形態でもできるが、あれは飛距離が短めで単発ずつでしか撃てない。

だが砲撃形態だと飛距離は数倍でしかも連射が可能であり威力も大きい。

放たれた閃光のうひとつがクロノの閃光と激突。

大きな爆発音と爆煙を出して相殺される。　だが残りの四つはクロノに向かって突き進む。

（その威力から、防御壁では無理だ。　だからといってこちらも砲撃で相殺するには数が多い。　だったら！）

クロノは体を少し傾け、前傾姿勢をとる。

そしてそのまま正面に、正確にいえば少し下降しながら全速力で翔

る。
すると怜治の砲撃は彼の頭を掠めて互いに激突。　爆煙と爆音を響かせ消える。

「ひとつアドバイスだ。　相手が1人だけなら無理して複数の砲撃をしない方がいい。
　今みたいに砲撃と砲撃の間に飛び込むだけでかわせるし、魔力消費も大きい」

『執務官は伊達じゃねぇか・・・いくら分かってても砲撃と砲撃の間に飛び込むなんざそうそうできねぇぞ。　フェイト嬢も似たようなことしたし、意外と気が合うかもな』

「今はそんなこと関係ねぇだろ。　さぁ・・・次行くぞ」

「いや、もう終わりだ」

なんだと――そう言おうとした瞬間、怜治を水色の鎖が縛り付ける。

「ディレイドバインド。　君と僕の砲撃がぶつかった瞬間に煙幕に隠れて仕掛けさせてもらった。　どうやら君はこの手の魔法への警戒は薄いようだね。」

しまった――とスタンは思った。　形態変化（フォームチェンジ）や魔力運用の訓練ばかりで捕獲魔法の方は後回しだった。　その仇がこんなところでくるとは。

クロノはもがき続ける怜治に静かに近づきＳ２Ｕの杖先を向ける。

「ブレイズキャノン」

ゴォッと水色の閃光が怜治を包み込む。

「がぁぁぁあああああ！！」

閃光の熱が体を焼く。　怜治はその痛みに思わず絶叫する。
続けてクロノはブレイズキャノンを撃つ。
再び絶叫が響き、爆煙で視界が遮られる。
その後も続けて二発。　合計四発の砲撃を撃ちこんだ。
もう苦痛の叫びは聞こえてこない。

「少し・・・やりすぎてしまったかな」

爆煙はまだ治まらず怜治の姿は見えてこない。
といっても四発も撃ち込んだのだ。　気絶かどちらにしろ戦える状態ではないだろう。
そう思ってふと下を見てみると、いつの間にか大岩の上にまで来ていたようだ。
しまった――怜治が気絶していたらあれに真っ逆さまだ。
海に落ちたくらいなら大丈夫だと思うが岩に激突したら無事では済まないだろう。
しかし自分に彼を持ったまま飛べるだろうか。　特にあのデバイスは重そうだ。

「まぁ落下中にアースラに回収してもらえばいいか」

そう決断した。　その時

「うらぁぁぁぁあっぁぁぁあああああああああああああぁぁああああ

あああ！！！！！」

煙の中から獣のような咆哮とともに、巨大な鉄の腕がクロノの胴をがっちりと捕まえた。

そして煙が晴れる。

「なっ！？　君は・・・」

「はは・・・こうやって捕まえちまえばバインドの意味もねぇよな？」

現れたのは鉄拳形態の怜治だった。

バリアジャケットはところどころ破れ、顔にも砲撃による傷があった。

クロノもジタバタともがくが効果はない。

Ｓ２Ｕで攻撃しようにも、腕ごと捕まっているのでうまく動かせない。

「くそっ・・・だが！　何もできないのは君も同じだ。　君が攻撃しようとして離れれば、僕の攻撃が先に届く！！」

「残念だったな・・・俺にそんな常識は通用しねぇ」

『ｐｕｒｇｅ』

ガシャッという音が腕から鳴る。　そして

「うぉおおおりゃぁぁあああああああああ！！！」

クロノを真上に放り投げた。　腕ごと。

「うわぁぁぁぁあああああああああ！！！」

空に木霊するクロノの絶叫。

怜治はスタンを自分と切り離し、クロノを拘束したまま投げ上げたのだ。

「んなななななにを考えているんだ君達はぁぁあああああ！！！？？」

クロノの絶叫が再び木霊する。

『まぁ落ちつけよクロノ坊。

自分でいうのもなんだが、この拘束から抜けるのは無理だよ』

「君の乗り手（マスター）はこのままいったら岩にぶつかって死ぬぞ！？」

クロノの言うとおり空を飛ぶ術を失った怜治が重力に従ってどんどんと落下している。

やがてクロノ達も上昇が終わり、怜治と同様落下を始める。

『残念だったな。　あいつは、レイジはオレに会うまでその魔力を無意識に身体強化にまわしてた。　だから魔力運用は下手で最初のころは魔力切れをしてばっかだ。』

でもな――と一度切って続ける。

『今でも一人前とは言えねぇが、オレっつう魔力消費の枷がなくな

って全魔力を身体強化にまわせる。　だからこの程度の高さは大したことはねぇ』

ズドン！！という音とともに怜治は着地。　着地した岩が軽く砕ける。

「～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～ッ！！！！」

骨折はしなかったが、衝撃で足がしびれる。　涙がほんの少し出た。

『さぁ質問だクロノ・ハラオウン。
オマエはＡＡＡランクの魔力全開の拳を受けて、無事でいられる自信はあるか？』

クロノの顔が青ざめる。

彼らの落下速度は徐々に加速していく。
クロノが下を見ると、怜治がこちらを見上げ、拳は紺色に輝いている。
今、１２０万の魔力が、最大発揮ならさらに三倍のＡＡＡランクの魔力が全て集中している。

「終わりだぜ・・・クロノ・ハラオウン」

足に力を入れ魔力を集中させた拳を固く握りしめる。

『スタンピードとレイジの即席コンビネーション！！！』

「う、うわぁぁあああああああああ！！！」

「『龍も臥す一撃（ソロソプラコストドラゴン）！！』」

突き上げた拳がクロノの背中に突き刺さる。
ゴキンッ！！と鈍い音が響き、クロノの体が大きく反れる。
そして――――

「がはぁっ・・・・・」

――――呻き声とともに肺の空気を全て吐き出し、意識を手放した。

第１１話　星光ＶＳ雷神

海鳴の海岸はまるで嵐が直撃したかのような惨状であった。
へし折れた木々が流木のように転がっており、砂は海水を含んで重たい色に染まっている。
そんな海岸に人影があった。
誰かと連絡を取っているようで、耳にケータイを当てている。　怜治だ。
やがて話が終わったのか、ケータイを懐にしまい、代わりにひし形の宝石を取り出して指で弄ぶ。
すぐ横にバイクをつけ、腰を下ろして空を見上げる。
先ほどまで雷雲と風雨で荒れていたはずだが、もうその様子はなく、眩しいほどの青空が広がっている。
海も落ち着きを取り戻し、いつも通りの穏やかな表情だ。

「う・・・・うぅ・・・」

不意に足元から声が聞こえる。

「なんだ？　気がついたのか？」

怜治はポンポンと黒髪の少年の頭を叩き、現在進行形で自分がベンチ代りにしているクロノに声をかける。　立ち上がろうとするがバインドで拘束されているため徒労に終わる。
叩かれて意識がはっきりしてきたのか徐々に目を開く。
そして

「な、なんだこれはぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？！？！？」

クロノの絶叫が海岸に響いた。

魔法少女リリカルなのは☆Ｔｈｅ　Ｒｉｄｅｒ☆　第１１話　星光ＶＳ雷神

「あ～うるせぇな。　こっちは疲れてんだ。　もうちょい静かにしろ」

「できるか！！　おい、なんで君が僕の上に乗っかってるんだ！？」

「え？　だって下砂だぜ？　そのまま座ったらケツが砂だらけになるじゃん？」

「僕が汚れる分はどうでもいいのか・・・くそっ！　このバインドを解け！！」

「そう言われて素直に解くバカがどこにいる？　結構苦労したんだぜそのバインド。　それにお前は大切な取引材料なんだから、悪いようにはしねぇよ」

「取引材料！？　どういうことだ！！」

『そのままだよクロ坊』

「クロ坊って呼ぶな!!　・・・くそっ、一回勝ったからって調子に乗るなよ。　僕はバインドとブレイズキャノンしか使っていなかったからな・・・」

「だからどうした？　お前が俺を侮った。手を抜いて負けるとかダサすぎるだろ。」

怜治の言葉に唇を噛んで黙りこむクロノ。
確かに自分は負けた。　だが怜治を侮ったつもりはない。
侮った点があるとするならば、それは怜治の人間性だろう。
いくら身体強化をしたからといって、自ら落下を選んだことをクロノは信じられなかった。
どれだけ背中を押されても、絶対安全だと念を押されてもすぐにバンジージャンプやスカイダイビングをやれる未経験者はごく少数だろう。　だが怜治がそれに近いことをやった。
信じられなかった。　だから、聞いてみたかった。“君は死を恐れないのか”と。
そしてそれを言おうと口を開く。

「君は・・・」

『レイジ。　お客さんだ』

彼の質問はスタンに遮られてしまった。
それを聞いて怜治は弄んでた宝石をしまう。

「そうか。　悪いが話はまた後だ」

怜治の視線の先をみると誰かがこちらに向かって歩いてくる。

近づくにつれてその姿がはっきりしてくる。
そして誰が来たのか分かり、クロノは驚愕する。

「母さん・・・」

来たのはリンディだった。
普段なら艦長と呼ぶところだが、驚きのあまり思わずそう呼んでしまった。

「クロノ・・・無事のようね」

息子の無事を確認し、安堵するリンディ。

「約束は守るって。　そっちこそ本当に1人で来るとはな」

「そうしろと言ったのはあなたでしょう？　早くクロノの上からどいてくれないかしら？　その・・・なんとも不憫で」

リンディの言葉に苦笑しながらもクロノからどく怜治。　だがバインドは解かない。

「あなたの要求は通信で聞いたわ。　そしてそれに対する対価も・・・」

「そうだな。　んで返事は？」

「問題ないわ。　返事はＹＥＳよ。　本当にそれだけでいいのか疑問に思う程よ」

「そっか・・・まぁ別に他に要求もねぇしそれだけでいいよ」

一旦言葉を切ってクロノにかけたバインドを解く。
クロノは立ち上がると同時にＳ２Ｕを起動。　怜治に杖先を向ける。

「やめなさいクロノ。　彼は今から協力者よ」

「協力者!?　こいつがですか!?」

失礼なやつだ。と思いながらもスタンを引きながらリンディに歩み寄る。
足を止めて懐からケータイを取り出し、それをリンディに渡す。

「これが今お前らが一番欲しがってるもの」

開くと画面には数字とアルファベッが羅列が映っていた。

「そこがアルフが使った転移魔法の最終到達地点の座標。　フェイトの根城だ。」

～翌日～

「なぁぜろ。　おまえ最近付き合い悪くね？」

「ん？　そうか？」

あれから、怜治はアースラにはよらずにその場を後にした。
そして今は学校。
フェイト達のジュエルシード集めに協力するため学校をサボっていたため久しぶりの登校となる。　高校は留年があるためこれ以上サボることは危険だった。

「そうだろうが！！　何日も学校サボりやがって、一体何やってやがった！！」

噛みつきそうな勢いで怜治を問いただす鉄平。
今怜治はここ数日の行動について悪友2人に問い詰められているところだ。

「大したことねぇよ」

「ぼくらに何も言わずに学校を休む。　連絡も取れない。　怜一郎さんに聞いても分からない。　これのどこが大したことないんだい？」

頭がぶつかりそうなくらい顔を近づけてくる正義。
嘘をついても眼を見れば分かるぞとでもいいそうだ。

「それについちゃ悪かった。　でもホントに大したことねぇンだよ。
もうそろそろ片がつきそうだしな」

嘘ではない。

スタンが解析し、特定したフェイトの拠点の次元座標。
それをリンディに渡したことにより事態は一気に終幕へと向かうこととなった。
管理局はフェイトにジュエルシード回収を命じた人物の存在をもう特定していた。
その名はプレシア・テスタロッサ。　フェイトの母親だ。
管理局も彼女たちの拠点を探していたようだが昨日の雷撃はアースラにも届いていて、探査装置がことごとく壊れてしまったらしい。
怜治は自分の要求がすんなり通ったのもそういう事情もあったのだろうと思った。

「ふ～ん」

怜治の答えに対して目を細める正義。　納得はしていないようだ。

「・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・はぁ」

無言で見つめ合うこと数秒。　諦めたかのように近づけた顔を話していく。

「まぁ君がいいって言うならぼくらも気にしないことにするけど、今度からは一言くらい言って欲しいね」

「だから悪かったって言ってるだろ」

「おまえは口酸っぱく言わねぇとダメなんだよ。　ったく、マジでヤベェ時はちゃんと言えよ？　おれたちは親友なんだからよ」

親友。　そんなこそばゆいことを言われて思わず笑みがこぼれる。

「ありがとな。　でもホントにホントに大丈夫だ。　ヤバい時はちゃんと頼らせてもらうぜ、親友？」

「おう！　じゃんじゃん頼れ！！　お礼になんか奢ってもらうことになると思うが」

「鉄平・・・その一言がなかったらカッコよく終われたのに」

正義の言葉に声をあげて笑う。
そして怜治は改めて思う。
この２人と出会えて良かったと。

次の日。　ＡＭ５：５５。

まだ日が昇りきらず、夜と朝が混ざり合った空の下、海鳴臨海公園にふたつの人影があった。
1人は白い服に身を包み、金色の杖を持つ栗色の髪の少女。
もう1人は黒い水着のような服に黒い杖を持つ金髪の少女。
2人は互いに向き合っている。
やがて白い服の少女、なのはが口を開く。

「ただ捨てればいいって訳じゃないよね。　逃げればいいって訳じゃもっとない」

金髪の少女、フェイトは静かになのはを見つめる。

「きっかけは、きっとジュエルシード」

なのはは己の杖(レイジングハート)をフェイトに向ける。

「だから賭けよう？　お互いが持ってる全部のジュエルシードを！」

『Ｐｕｔ　ｏｕｔ』

レイジングハートの赤い宝玉から七つのジュエルシードが吐き出される。
フェイトもバルディッシュから同様に残りのジュエルシードを出す。
同時にバルディッシュに金色の魔力刃を展開。

「それからだよ・・・全部それから」

彼女達の全ては、まだ始まってもいない。
だから、本当の自分を始めるために、2人の少女の戦いが始まる。
誰にも邪魔されない、最初で最後の本気の勝負が。

「始まったか」

そう呟くのはクロノ。　彼は今アースラのモニターから2人の戦いを見守っている。

傍にはエイミィもいた。

怜治からフェイト、すなわちプレシアの拠点の情報を受け取った彼らが取った行動は二つ。

ひとつはプレシアの逮捕。　これはすでに他の武装局員が出動している。

過去のデータから、プレシアの魔導師としての力はSランク。

このランクはクロノよりも高いが、出動した局員はAAランクを集めた一個中隊だ。

問題はないだろう。

ふたつ目はフェイトをプレシアから引き離すこと。

SランクのプレシアとAAAランクのフェイトを同時に相手するのは無理がある。

ゆえに、彼女をこちらに呼び出してプレシアと引き離す必要があったのだ。

「だから、高町とジュエルシードを賭けて戦わせて、高町が勝てばそのまま保護。　負けてもクロノが出る。　勝ちの決まってる勝負ってのはなんかいやだな」

「怜治さんだって賛成したじゃないですか。　今はなのはを信じましょうよ」

「君たちか・・・」

クロノが振り向くと怜治とユーノがブリッジに入ってきていた。
スタンも一緒だ。

「ユーノの言うとおり、仕方ないだろう。　そうでもしないと彼女はプレシアから離れないだろうし、このままなのはが勝ってくれれば越したことはない」

「そしてその間に武装隊の連中がプレシアを逮捕。　そうすればフェイトは晴れてあの女から解放されるんだね」

クロノの足元に狼形態のアルフがいた。
なぜ彼女がアースラにいるのかというと、あの海上の戦いの後にプレシアのところに戻ったところプレシアはフェイトの不甲斐なさに激怒して酷い仕打ちをしたらしい。
それは以前からあったことで、ついにアルフの堪忍袋の緒が切れてプレシアに掴みかかったが一蹴。
負傷した体でなんとか逃延び、なのはの友人、アリサ・バニングスに保護されたらしい。

『オッス、アルフ嬢。　体の調子はどうだ?』

「大丈夫だよ。　今までフェイトが受けた痛みに比べたらこんな傷・・・」

思い出したかのように歯噛みする。　フェイトが受けた虐待はよほどのもののようだ。
それを想像し、皆表情を曇らせる。

「ちょ、ちょっとアンタ達まで暗い顔することないよ!　悪いのは

全部あのオニババで、アンタ達はフェイトを助けようとしてくれてるんだからさ！」

暗くなった空気を察知し、慌てたように言うアルフ。
こういう空気は苦手なのだろう。
だがこの雰囲気が変わることはない。
そしてさらに重くなるようなことを言う者がいた。

「クロノ君・・・」

今まで黙っていたエイミィが口を開く。
その口調は深刻だ。

「言わなくていいの？　プレシア・テスタロッサの家族と、あの事件のこと」

「勝ってくれるにこしたことはないんだ。　なのはも迷わせるようなことを言うべきじゃない」

そだね。と納得するエイミィ。
クロノもそれ以上その話をしようとはしない。
だが、

「おい、勝手に終わらせるなよ。　なんだよプレシアの家族とか、あの事件とか」

怜治が終わらせなかった。

「君には関係ないこぎゃ！！」

「そんな深刻そうな顔して言っておいて、気にするなってのが無理なんだよ」

クロノの言い方にカチンときてクロノの首を締める怜治。
苦しそうに怜治の腕を叩くが締める力が緩むことはない。
徐々にクロノの顔が青くなっていく。

「ちょ、怜治君落ち着いて！　話す、話すから！！　クロノ君死んじゃうよぉ！！！」

エイミィの望み通りクロノを開放する。
ぜぇぜぇと息を乱すクロノをしり目に、エイミィが語り始める。

「・・・・ということなの」

「なんだよ・・・どういうことだよ！」

困惑した声を出す怜治。
アルフ、ユーノも驚いている。

『これは、意外な展開になってきたねぇ・・・』

そんな中、スタンが落ち着いた声で言う。

「と、とにかく今は当初の作戦通りフェイト・テスタロッサの保護だ。

その後のことは、後で考えればいい。　少なくとも、このことに関しては」

息を整え終わったクロノが皆の方を向いて言う。
そして再びモニターに向かう。
それにつられて皆もモニターを見つめる。
悲しそうな顔で画面の中でぶつかり合うふたりの魔導師を。

ガキン、ガキンと互いのデバイスがぶつかる音が響く。
鍔迫り合う中で、フェイトは今までのなのはとの戦いを思い返す。
彼女とぶつかり合うのは何度目だろう。
初めて会った時は魔力が強いだけの素人だった。
だが今は違う。
こうして自分と互角に戦えるまでに成長している。
この短期間でだ。
信じ難いことだが、今こうして目の前で起こっているのだから否定できない。

負けるかもしれない。
一瞬そんなネガティブな考えが脳裏をよぎる。
頭を振ってそんな考えを振り払う。
距離をとってフォトンランサーを展開。　目の前の少女へ発射する。

負けるわけにはいかない。
負けたらジュエルシードが手に入らない。
ジュエルシードが手に入らなかったら、母が悲しむ。
母を悲しませたくない。　その思いだけが彼女を突き動かす。

「勝って、ジュエルシードを全部手に入れれば・・・母さんもあの、

優しかった母さんに戻る。　またあの幸せな時間が戻ってくる」

なのはへ向けた言葉ではない。　自分に言い聞かせるための言葉。
自分が戦う理由の再確認。
そして思い出すのは幸せだったころの記憶。
大好きな母とピクニックへ行った記憶。

美しい草花が広がる草原に母さんといった。
仕事で忙しかった母さんと過ごした、数少ない穏やかな時間。
高い建物もなく、耳をつんざく飛行機の音もない。
いるのはわたしと、大好きな母さんだけ。
バスケットに詰めたお弁当を食べて、他愛もない話をして、それに母さんは笑ってくれて。
そして母さんは花の冠をつくってわたしの頭に乗せてくれた。
あの時感じた温かく、優しい手のぬくもり。
そして母さんはわたしの名を優しく呼ぶ。

「とても似合ってる。　かわいいわよ。　アリシア」

アリ・・・シア？

違う。　違うよ。　わたしの名前は・・・フェイト。

おかしい。　何かが、おかしい。

「アクセルシューター！」

「！！」

考え事をしている場合ではなかった。

八つの桜色の光弾がこちらへ飛んで来ていた。

慌ててこれをかわす。

だが、光弾は方向を変え、フェイトを追いかける。

――誘導弾か！

それは以前見た怜治が撃つものより速い。　以前のような手は使えない。

防御魔法（プロテクション）を展開し、防ぐ。

だがなのははもう新たにアクセルシューターを展開していた。　その数は四つ。

「シュート！！」

光弾がフェイトに向かって走る。

『Ｓｃｙｔｈｅ　Ｆｏｒｍ』

金色の刃がなのはの光弾のうち、三つを切り裂き、ひとつをかわす。

少しかすった。

そしてそのまま間合いを詰める。

魔力刃がなのはを襲う。

『Ｒｏｕｎｄ　Ｓｈｉｅｌｄ』

すぐさま防御魔法を展開。　円形の盾が魔力刃を受け止める。

それを破ろうとさらに力を込めるフェイト。

フェイトの注意がこちらに向いていると判断したなのはは先ほどフ

エイトがかわした一発の光弾を操作。
フェイトを後ろから襲う。　それに気付き、振り向いて防御するフェイト。
防ぎきり、再度なのはの方を向くがなのはの姿はない。

『Ｆｌａｓｈ　ｍｏｖｅ』

「てぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！」

上を向くと、空から高速で突撃してくるなのはの姿があった。
砲撃型であるはずの彼女が杖で殴りかかってくる。
とっさにバルディッシュで防御。
激しく火花がほとばしる。
昂った魔力が強い光と衝撃波を起こす。
光の眩しさに一瞬フェイトの姿を見失うなのは。
その隙を見逃さず、横から鎌で斬りつけるフェイト。
それをすんでのところでかわすが、上着のリボンが斬れる。

この距離はまずい。

そう思って距離をとろうとするが

「なっ！」

フェイトがあらかじめセットしておいたフォトンスフィアが彼女の逃げ道を塞ぐ。

『Ｆｉｒｅ』

雷撃を帯びた数多の光弾がなのはを襲う。

それをプロテクションを展開し防ぐ。

光弾の雨が止み、改めてフェイトと距離をとる。
お互い息が乱れ、呼吸とともに肩が上下に動く。

フェイトは改めて思う。
彼女は強い。
迷っていては勝てない。
そして、自分に負けは許されない。

礼拝をするようにバルディッシュを自分の前に掲げる。

彼女が包む空気が変わった。

金色の魔法陣が足元に展開される。
だが魔法陣の数はそれだけではない。
なのはの周囲、上下前後左右、あらゆる場所に陣が展開されていく。

『Ｐｈａｌａｎｘ　Ｓｈｉｆｔ』

フェイトの周囲に大量のフォトンスフィアが現れる。
その数は今までの比ではない。
５・・・１０・・・１５・・・まだ増える。

なのははそれに警戒し、防御を展開しようとするが突然背後に現れた魔法陣にレイジングハートを持つ左手が拘束される。
これでは防御ができない。

続いて右手も拘束。
なのははは空中に磔にされたかたちになる。

「やばいよ！！　フェイトは本気だよ！！」

アルフが焦りの声を出す。

「クロノ、すぐになのはのサポートに！」

それを聞いてユーノも慌ててクロノになのはへの救援を要求する。
クロノも頷き椅子から立ち上がる。
だが

「何言ってんだ。　真剣勝負に横やりは無しだろ」

怜治が無理やり椅子に押し戻した。。

「な、なに言ってるんですか！？　あれじゃなのはが」

「高町信じろつったのはお前だろうが。　それに今助けたらあれよりキツイの受けるはめになるぞ。　少なくとも、俺が高町だったらそうする」

怜治の言葉にユーノは黙り込んでしまう。
それを見て、慰めるように彼の頭に手を乗せる怜治。

「心配なのは分かっけど、ここは信用してやるところだと思うぜ？
お前の相棒だろ？　相棒ってのはここぞって時に信じてなんぼだと思うぜ」

「今が、ここぞって時ですか？」

ユーノの問いに無言で頷く。

「分かりました。　ぼくはなのはのパートナーです。　彼女を信じます」

なのはへの強い信頼を灯した瞳でモニターを再度見つめる。

フェイトを囲む光球の数はさらに増し、その数は３０を超えている。

「カルタス・クルタス・エイギアス。　疾風なりし天神、今導きのもと撃ちかかれ。
バルエル・ザルエル・ブラウゼル」

そしてフェイトの呪文詠唱が終わる。
光球が纏う電撃が強さを増し、雷鳴のような音が重く響きわたる。

そしてフェイトは告げる。

目の前の敵を撃ち砕く己のもつ最強の魔法の名を。

「フォトンランサー・ファランクスシフト」

そしてなのはを指さし、周囲の光球に号令をかけるように叫ぶ。

「撃ち砕け！！　ファイア！！」

瞬間、彼女の周囲の光球から、無数の雷が矢のごとく放たれる。

両手を拘束され、防御ができないなのはに、雷が彼女を容赦なく貫く。

爆煙が巻き起こり、なのはの姿が見えなくなってもフェイトは攻撃の手を緩めない。
次々と雷がなのはを撃つ。

何発も、何十発も、何百発も、延々と撃ち続ける。

次第にフェイトの魔力が底を尽き始め、周囲の光球も徐々に小さくなっていく。
そして、これで最後と言わんばかりに、小さくなった光球をかき集め、ひとつのバレーボール大の光球を作り上げる。

――まだ立っていられるようなら、これをぶつけよう。

そう決心し、確実に命中させるために、煙が晴れるのを待つ。

煙が晴れ、なのはの姿が徐々に現れる。

そしてフェイトは驚愕の光景を目の当たりにする。

「いったぁ～、撃ち終わるとバインドってのも解けちゃうんだね」

なのはが平然と立っていた。　ダメージはあるようだが、目で分かる傷はない。

信じられなかった。　両手を拘束し、確実に全弾を当てたつもりだった。
倒せなくとも、かなりのダメージを負っているはずだった。
だが、彼女は耐え抜いた。
フェイトの最大級の魔法を。
バリアジャケットは防御型かもしれない。

デバイスがとっさに防御魔法を展開させたのかもしれない。
フェイトが思った以上に消耗していたのかもしれない。

理由ならいくらでも思いつく。
しかし、それでも信じられなかった。

「今度はこっちの番だよ！！」
なのははそう言ってレイジングハートを構える。
彼女のデバイスはすでに砲撃用の形態に変形していた。

音叉状のヘッド部分に、彼女の桜色の魔力が集中する。

『Ｄｉｖｉｎｅ　Ｂｕｓｔｅｒ』

桜色の閃光がフェイトめがけて放たれる。

とっさに手にあった光球を投げつけ応戦する。
だが、投げつけた光球は閃光に飲み込まれ、一瞬で消滅する。

それを見て、フェイトは急いでプロテクションを発動。
展開された防御魔法に桜色の閃光が直撃する。

（・・・ッ！　直撃・・・でも、耐えきれる！　あの子だって耐えたんだから！！）

だがなのはの砲撃は容赦なくフェイトの防御魔法を蹂躙する。
砲撃の熱気や衝撃が、フェイトのマントを、グローブを焼いていく。
バリアジャケットが徐々に削れていく。

もう・・・ダメなのか・・・。

そう思った途端、フェイトを襲っていた閃光が消えた。
だがそれは、フェイトが耐え抜いたのではない。
それは、なのはの次の攻撃への布石。

「受けてみて、ディバインバスターのバリエーション！！」

いつの間にか上空に移動していたなのはの足元に魔法陣が展開される。
今までのものとは違う術式。

『Ｓｔａｒｌｉｇｈｔ　Ｂｒｅａｋｅｒ』

すると何もないところから、桜色の光がなのはに集まる。
まるで、空に輝く星の光を一点に集めているかのようだ。

（今までの戦闘で散った魔力を集めてる。　あれは・・・集束砲！？　マズイ！！）

そう思って回避しようとしたフェイトだが、体が動かない。
いつの間にか、自分の体がバインドで拘束されていた。
先ほどとは真逆の状態。
拘束を解こうとする。
だが、大技に続いて、全力の防御の後で疲弊しきった体では満足な抵抗もできない。

そして、なのはの前に巨大な魔力球ができあがっていた。
それはまるで小さな星のよう。

「これがわたしの・・・全力全開！！！」

魔力球が爆発寸前の星のように大きく膨らんだ。
そして

「スターライトブレイカァァァァアアーーーーー！！！！！」

極太の閃光が轟音とともに発射される。

防御する力も残ってなかったフェイトはなす術もなく、光の奔流に飲み込まれる。
フェイトを飲み込んだ光は海にまで届き、巨大な水柱を上げる。
そして桜色の光が爆発。
罪も、迷いも、人も、すべてを滅ぼすかのような光が海上を覆い尽くす。

それを見ていたアースラ勢は

「な・・・なんつーバカ魔力！！」

『防御できない相手に・・・なんとえげつない』

「フェ、フェイトちゃん生きてるかぁ？」

「ちょ、縁起でもないこと言わないでくれよ！」

「ははは、すっげぇな？　邪魔しなくてよかったろ？」

「そ、そうですね・・・・ホント」

ひとりは呆れ、ひとり（一台）は少女の容赦のなさに戦慄、ひとりは相手の安否を気遣い、ひとり（一匹）は主の身を本気で心配になり、ひとりは少女の砲撃のすさまじさにに笑い、ひとり（淫獣）はあれが自分に向けられた時場合を想像し顔を青くした。

桜色の光が消え、レイジングハートのヘッド部分から排熱が行われる。

消耗が激しいらしく、なのはは肩が上下し、靴から伸びた光の羽（フライアーフィン）も消えそうになっている。

息を整え、フェイトへ視線を向けると彼女は意識を失い海へと落下した。

「フェイトちゃん！」

急いでフェイトの下へと向かう。

海面に飛び込み、沈んでいくフェイトを抱きかかえて浮上する。

少しして、フェイトが目を覚ました。

「気付いたフェイトちゃん？」

それに気付いて声をかけるなのは。

「ごめんね・・・大丈夫？」

フェイトは無言で頷いた。

「わたしの・・・勝ちだよね？」

「そう・・・みたいだね」

なのはの問いに潔く自らの敗北を認めるフェイト。
その顔はどこか悲しげだ。

『Ｐｕｔ　ｏｕｔ』

バルディッシュからフェイトが集めたジュエルシードが排出された。
なのははフェイトに飛べるかと尋ねると、静かに頷いた。
そっと手をはなし、フェイトが空中に浮く。

「よし、なのは。　ジュエルシードを確保して。　それから彼女を・・・」

「いや・・・待って！」

フェイトに戦闘続行の意思はないと判断し、クロノがアースラから指示をとばそうとしたが、エイミィに遮られる。

何事かとクロノが尋ねようとしたが、モニターの映像を見てすぐに理解した。

先程までの青空がうって変わって黒い雲が空を覆っている。
先日と同じ、プレシア・テスタロッサの魔法だ。

そして。

黒雲から放たれた邪悪な色の雷がフェイトを貫いた。

「フェイトちゃん！！」

「うぅ・・・うわあぁぁぁぁあああ！！！」

フェイトの悲鳴が響き、バルディッシュに無数のひびが入った。

そしてジュエルシードは黒雲に吸い込まれていった。

「おいおいどういうことだよクロノ！！　プレシア・テスタロッサは他の武装局員が逮捕に行ったんじゃねぇのかよ！？」

「そのはずだ。　だが彼女が干渉してきたということは・・・」

――武装局員の全滅

その言葉がクロノの脳裏に浮かぶ。

「なのは！　急いで戻ってきてくれ、彼女も一緒に！」

「は、はい！」

突然アースラのモニターの映像が乱れる。

乱れが治まった時、モニターに映し出されていたのは全く違う場所。

暗く、まるで古い神殿の内部のようだ。

そしてその奥に誰か立っている。

プレシア・テスタロッサだ。

彼女の後ろにはなにかポッドのようなものが置いてある

そして彼女の足元に

「そんな・・・アースラの武装局員が」

気を失った状態で倒れていた。

『もう駄目ね・・・時間がないわ』

プレシアが突然しゃべり始めた。

こちらに映像が送られていることが分かっているのか時折こちらを見ている。

『ジュエルシードも結局全部集まらなかった。　こんな状態でアルハザードへたどり着けるかは分からないけど・・・でも、もういいわ・・・終わりにする。　この子を失ってからの暗鬱な時間を』

そう言って体をずらし後ろにあったポッドの中身が見えた。

中にいたのは金色の長い髪の少女が一糸纏わぬ姿で入っていた。

液体が入っているのだろう。　少女の体は浮いていた。

そして少女の顔は

『この子の身代りの人形を娘扱いするのも』

フェイトと瓜二つだった。

「アリ・・・シア」

クロノと怜治は、突然後ろから聞こえた声に驚いて振り向くと囚人服を着たフェイトがいた。　傍にはアルフとなのはもいる。

フェイトの顔色はひどく青ざめている。

『聞いていて？　あなたのことよ・・・フェイト』

プレシアに名指しされ、フェイトの肩がビクッとはねる。

『せっかくアリシアの記憶をあげたのにそっくりなのは見た目だけ、役立たずでちっとも使えない。　私のお人形』

フェイトの顔色がますます白くなっていく。
なのはは何を言っているのか分からず、怜治たちを見る。

あの人は何を言ってるのかと
一体何がどうなっているのかと

「最初の事故の時にね、プレシアは実の娘、アリシア・テスタロッサを亡くしてるの」

下を向いて、エイミィがなのはに真実を告げていく。

「彼女は最後に行っていた研究は使い魔とは異なる、使い魔を超える人造生命の精製」

なのはとフェイトの目が大きく見開かれる。

「そして、死者蘇生の秘術。“フェイト”って名前は当時彼女の研究につけられた開発コードなの」

なのはは信じられないといった顔でエイミィを見つめている。

『よく調べたわね。　そうよその通り。　だけどダメね。　ちっとも上手くいかない』

プレシアはポッドを撫でる。　アリシアをなでるように。

『造り物の命は所詮造り物。　失ったものの代わりにはならないわ』

そしてモニター越しにフェイトへ視線を向ける。

『アリシアは・・・もっと優しく笑ってくれたわ。　アリシアはときどきわがままを言ったけど、私の言うことをとてもよく聞いてくれた』

プレシアの声はまるで娘をだれかに自慢するかのように優しく穏やかだ。

だが怜治達には残酷な声にしか聞こえない。

怜治の頭の中が怒りに染まっていく。　だが拳を握りしめて耐える。

「やめて・・・」

なのはが消え入りそうな声で言う。　だがプレシアは止めない。

『アリシアは・・・いつでも私に優しかった』

そして冷たい声でフェイトに告げる。

『フェイト。　やっぱりあなたはアリシアのニセモノよ』

思わず叫びそうになった。

だが拳をさらに強く握り、食い込んだ爪で血が滴ってきた。

『せっかくあげたアリシアの記憶も、あなたじゃダメだった』

「やめて・・・やめてよ！」

なのはが再び懇願する。

フェイトの瞳は少しずつ色を失っていく。

『アリシアを蘇らせるまで間に私が慰みに使うだけのお人形。

だからあなたはもういらないわ。　どこへなりとも消えなさい』

やめてよ！となのはの悲痛の叫びとプレシアの笑い声が艦内に響く。

『いいこと教えてあげるわフェイト』

――やめろ。　それ以上言うな。

声に出さずに念ずる怜治。

だがプレシアには届く訳もない。

『あなたを造り出してからずっとね。　あなたが』

そして決定的な一言を告げる。

『大ッ嫌いだったのよ！！』

頭の中の何かが・・・切れる音がした気がした。

スタンのハンドルを握り、転移魔法を起動。

同時にフェイトが崩れ落ちる。

皆がフェイトに駆け寄る中、無言でアースラから移動を開始する怜治。

「ふざけんな・・・」

クロノの制止の声が聞こえたが、無視して怜治はアースラから姿を消した。

行き先は無論、プレシアのいる・・・・

時の庭園

第１１話　星光ＶＳ雷神（後書き）

なんとか１３話で一期終わりそうです。

第12話　親娘

昔の話をしよう。
とある世界のとある国、日本のある町に、とある家族がいました。
母と父と息子が1人。
裕福でもなく、貧乏でもない。
笑顔で暮らせる普通のどこにでもある本当に普通の家庭。

だが

子どもが五歳の時、その普通がある日突然崩壊した。
理由は単純。　不倫だ。
ただ、たった一つ普通とは言えないことがあった。
父と母、両方が不倫をしたのだ。

どちらか一方がしたのならば色々と揉め事が起こるだろう。
だが両方ともしていたのならば話は早い。
発覚したその日のうちに両親の離婚が決まった。
どちらにも比があることも明らかなので慰謝料は無し。
父が家に残り、母はそのまま不倫相手の家に行くことになった。

ただ、ひとつだけ問題があった。
彼らの子どものことだ。

これから両親はそれぞれ別の恋人と新しい生活が始まるのだ。
なのにその中に子どもがいるなんて、邪魔でしかない。

かくして、どちらが親権を取らなければいけないのかを決めるための裁判が開かれた。

本来ならば勝ち取ることに必死になるはずの親権を、どう理由をつけて相手に押しつけるかというなんともおかしな状態に陥った。

子どもの世話は母親の仕事だろ！！　おまえが引き取れよ！！

私は五年もあの子の面倒を見たわ！！　後はあなたがみるべきよ！！

ふざけたこと言うなよ！！

どっちがよ！！

本人たちは真剣だが、聞いている者たちからしたらバカらしいことこの上ない。

やがてネタに困ったメディアがこれを報道。

珍事として日本のお茶の間に知られることになった。

当然彼らの親にもだ。

情けないと嘆く者。　呆れ顔で何も言わない者。　一族の恥さらしと憤慨する者。

様々な反応を示し、ほとんどが傍観を決め込んだ。

そんな老人たちの中で、ひとりだけ行動を起こした者がいた。

その人物は子どもから見て父方の祖父に当たる人物だった。

彼は突然父親のもとへやってくると突然殴りとばし

「このガキは俺が引き取る。　これなら文句ねぇだろ。

てめぇらはさっさと新しい相手のとこ行けこのバカ共が」

そう一方的に宣言した。

両親は、これはラッキーとばかりにさっさと裁判を終わらせた。
そして子どもが祖父の家に引き取られる日。
父も母も、この時は仲良く息子の頭をなでた。

「お父さん達の都合で悪かったな。　おじいちゃんの家で元気に暮らせよ」

そして

「しっかし、おまえは本当に、笑わない子だったな」

父の言葉にははっと笑う母。　彼からしたら軽い冗談のつもりだったのかもしれない。
しかし、子どもはその言葉にひどく傷ついた。

笑わない？　そんなことはなかったはずだ。
笑わかったのではない。　笑えなかったのだ。
離婚が決まってから家の空気は重く、両親は口を開けばどちらが自分を引き取るかの口論。

そんな中で笑えるほど子どもはバカではない。

あなた達は自分の何を見ていたんだ。
家族なのになんでそんなに自分のことを分かっていないんだ。

そんな子どもの様子に気付かず、父は頭を撫で続ける。

「じゃあな、怜治」

そう言って両親は別々の方向に去っていった。
残された少年は、祖父と一緒に日が暮れるまで立ち尽くすだけだった。

魔法少女リリカルなのは☆Ｔｈｅ　Ｒｉｄｅｒ☆　第１２話　親娘（おやこ）

怜治は時の庭園に到着した。
到着すると同時に地震のような揺れを感じる。
これが次元震というやつか。

そこは廊下のようで、一本道だった。
両側にはツタが絡まった柱が一定の間隔で立っており、
廊下の最後には次の部屋への扉がある。

怜治はスタンを大剣形態（ブレイドフォーム）にして歩き出す。
彼の全身は怒りのオーラに包まれている。

『レイジ、オマエが怒る理由も分かるがここは冷静にいかねぇと』

怜治の怒りに危ういものを感じてスタンが落ち着くよう促す。

「悪いがスタンそりゃ無理だ。　俺自身もこのイライラを押さえられねぇ」

――あの女を一発殴りでもしないと

本人とては素っ気なく言ったつもりかもしれないが言葉の節々に怒りがにじみ出ていた。

『でもよぉレイジ。　プレシア・テスタロッサをぶっ飛ばすにしても、あいつがどこにいるのか分かんのか？』

確かにその通りだ。
クロノ達ならこの庭園の内部構造を詳しく把握しているかもしれない。
だが怜治は無断で来たためにそんなことは全く知らない。
そのことに対して怜治は

「そのことなら心配いらねぇ。　ああいう悪人は昔からアジトの一番奥にいるって、相場が決まってんだ」

『なんだよソレ』

スタンに呆れた声を聞きながら、次の部屋への扉を開く。
中に入るとそこは大広間のようでかなり広い。
装飾も豪華で、昔の持ち主はここでパーティでも開いていたのだろう。

広間を眺めていると、突然床から西洋風の鎧が現れた。
一つや二つではない。　たちまち広間全体を鎧兵が埋め尽くした。
大きさはどれも２ｍ前後で、皆手には斧や槍、剣と武器を構えてこちらを見ている。

『おいおい傀儡兵かよ。　あの女、用意周到だな』

スタンが感心したような呆れたような声を上げた。

それを聞きながら怜治は無言で目の前の傀儡兵の一体に声をかける。

「おい。　邪魔だ……どけ」

『……ってレイジ！？』

相棒の突然の行動に驚くスタン。
声をかけられた傀儡兵は何も言わない。
そのかわり手に持っていた斧を怜治めがけて振り下ろす。
怜治はそれを後ろに飛んでかわす。
標的を失った斧は石の床を叩き割った。

「なんだよいきなり」

『レイジ！　こいつらは“傀儡兵”、多分プレシアが時間稼ぎに召喚したやつだ！　機械仕掛けのこいつらに意思なんて存在しねぇ！！』

時間稼ぎ。
プレシアはアルハザードへ行くと言っていた。
そこでアリシアを今度こそ蘇らせるのだと。
その間管理局の動きを封じるために召喚したのだとスタンは言う。

「意思がない……そうか……じゃあ」

傀儡兵は再び怜治に襲いかかる。
だが怜治は動かない。　かわりに口を静かに動かす。
口から出た言葉は

――思いっきりやっていいんだな？

そう呟くと同時にほとんどの魔力を空いた片手に集中。
そして向かってきた傀儡兵を殴り飛ばす。

瞬間。　傀儡兵が軽々と宙を舞った。

ＡＡＡ級の魔力が、１２０万の魔力が傀儡兵の鎧を軽々と粉砕し、
その巨体を浮かせたのだ。
殴り飛ばされた傀儡兵は少しして落下。
下にいた他の傀儡兵を押し潰した。

それを合図にしたかのように、他の傀儡兵が一斉に襲い掛かる。

固く重厚な鎧が大波となって怜治を飲み込んだ。

時の庭園の最深部。
次元震で空間が歪み、瓦礫が不自然に浮いている奇妙な空間。
そこにプレシアはいた。
彼女はあの通信の後、アルハザードへの扉を開くために移動したのだ。
アリシアの入った生体ポッドと共に。

「来たのね」

プレシアは苛立った声で呟いた。
彼女は先ほどから庭園内で起こる次元震とは違う揺れを感じていた。
それを彼女は管理局の突入によるものだと推測した。

だが彼女が苛立っているのはそれだけではない。

彼女とアリシアのいる空間の下に見える黒い穴――虚数空間。
それはあらゆる魔法を無効化してしまういわばブラックホール。
彼女達は今、その穴に最も近い位置にいるのだ。

プレシアはアリシアを蘇生させる術を求めてアルハザードを求めた。
その過程で発生させた次元震の影響でこの虚数空間が出現した。
もしもジュエルシードの制御に失敗でもしたら、彼女は愛する娘もろとも虚数空間に吸い込まれてしまう。
もし失敗したら、という恐れと管理局の妨害が彼女を苛立たせているのだ。

落ち着こう。
そう思ってポッドの中で眠り続ける自分が愛する娘を見る。
その寝顔を見ていたら自然と冷静さが戻ってきた。

「もう少し……もう少しだからね。　アリシア……ゴホッゴホッ！」

突然咳き込むプレシア。
咳が治まると同時に口から赤いねっとりとした液体が流れ出す。
彼女の体は病魔に侵され、もう長くない。
だからこそ、自分が死ぬ前にせめて愛する娘だけでも救いたい。
無力だった自分のせいで死なせてしまった娘だけでも。
その思いがプレシアを突き動かす。
そしてその思いがフェイトを突き放した。

アリシアの入ったポッドにもたれかかり、ポッドに背を向けて体を支える。

「あと少しなのよ……あと少しでアルハザードへ行ける。そして……」

――アリシアを救える。

その言葉は声に出なかった。

代わりに――

天井が爆発する轟音が鳴り響いた。

「――なっ！？」

突然の事態に驚いていると、何かが瓦礫とともに落ちてきた。

その姿を見てプレシアは歯を噛みしめる。

「あなたは……」

「やっと会えたぜ……」

現れたのは怜治だった。

スタンを鉄拳形態（アームズフォーム）の状態で、頭からは血が出ていた。

だが怜治はそれを気にすることなくプレシアを見つめている。

そして

「やっと会えたぜ……」

全ての怒りをぶつけるように

「プレシア・テスタロッサァァァァアアアアアアアア！！！！！！！」

叫んだ。

「あなたは……フェイトと一緒にいた」

プレシアは不快そうに眉間にしわを寄せた。
突如現れた男を彼女は知っていた。
海中のジュエルシードを封印する際フェイトに協力していた男だ。
あの後どうなったのか知らなかったが、どうやら管理局側についたようだ。

「なんの用かしら。　私は今忙しいの、後にしてくれる？」

「できねぇ相談だ。　てめぇがフェイトの目の前で謝まるまでなぁ！」

フェイトという名を聞いてプレシアはさらに不快感を増す。

「フェイト？　今さらあの役立たずな人形に何を謝れというの？」

くだらないことを言うなといった口調で怜治に問いかける。

「今の言動も含めて・・・さっきの通信のフェイトに言った言葉全部だ。
フェイトが何のためにジュエルシードを集めたと思ってやがる。
あいつはあんたが……自分の母親が……」

「黙りなさい！！　あんな役立たず、私の娘じゃない！！　私の娘はアリシア、そうアリシアだけなのよ！！」

互いの言葉に両者の怒りと苛立ちは増し続ける。

「ざけんな!!　何が役立たずだ!　何が人形だ!　ガキは……フェイトはてめぇの玩具じゃねぇんだぞ!!　あいつの気持ち考えたことあんのか!!!」

「あなたこそ!!　あなたに私の気持ちが、アリシアを失った私の気持ちの何が分かるというの!?　私がどれほどアリシアを愛していたか、この子を失った時、私がどれほど絶望し、悲しんだか、あなたに分かるわけがない!!」

プレシアは溜まりにたまった負の感情を吐き出すように叫んだ。

確かに怜治には幼い弟も妹もいない。
人の死というものには、１１年前、彼が怜一郎に引き取られた一年後に祖母が仕事先で事故で亡くなったから全く知らないわけではない。
悲しみはあった。
それでもプレシアの言う絶望はなかった。

「確かに・・・俺にあんたの気持ちなんて分かるわけねぇし、アリシアがどんなやつだったのかも、あんたがどれほどアリシアを愛していたのかも知らねぇ。　そしてそんな大切な人間が死んだときの気持ちなんて俺にはまだわからねぇ。
でもな!!」

家族だと思っていた人に見放されたフェイトの気持ちならわずかでも分かる。
だから……。

「ひとつだけ分かることがあんだよ……」

伝えなければならない。

「てめぇのやってることは、
一から十まで間違いだらけだバカヤロウ！！！！！！」

彼女は・・・彼女たちはまだ戻れる可能性があるのだから

「黙れぇぇぇぇえええええええ！！！！！！！！！」

プレシアが杖を取り、雷光が炸裂。
怜治も床を蹴り、プレシアに飛びかかる。

魔女と魔導騎兵（ライダー）の死闘が始まる。

『一から十まで間違いだらけだバカヤロウ！！！！！！』

突然耳に大声が響き、クロノは思わず耳を押さえて顔を歪める。
近くにいたなのは達も同様に耳を押さえる。

彼らも怜治と同様庭園内に来ていたのだ。

なぜ彼らのの耳に怜治の声が届いたのかというと、先行した局員のサーチャーが拾った音声をアースラが中継して送信しているのだ。

「全く……勝手に先行して、もうプレシアと接触していたのか……」

一度言葉を切り、周囲を見渡す。
そして一言

「なんとも派手にやってくれたものだ」

彼の周りにはところどころ砕けた傀儡兵の残骸が転がっていた。
おかげで彼らの行く手を阻むものはほとんどない。

「ね、ねぇクロノ君。　わたしたちはどうするの？」

「そうだな……プレシアは彼に任せよう。　彼の性格からして一対一の戦いを邪魔されるのは好むところではないだろう。　僕らは駆動炉を封印しよう」

なのはの問いかけにクロノが答える。

「しっかしアイツも派手に暴れたねぇ。　アタシらの出番が無いじゃないか」

不満を口にするアルフ。
それを見てみな呆れた目で彼女を見る。
狙ったわけではないにしても、怜治のおかげで無駄な戦闘をすることがなくなったことは喜ぶべきことだが、どうも彼女は自分が暴れられないことが不満らしい。

「暴れたというのは正しいかもね。　どれもこれも魔法で破壊された様子はない。　あの馬鹿力には驚かされるばかりだ」

「でもクロノ。　いくら怜治さんでもこれだけの傀儡兵を倒したん

なら消耗は相当のはずだよ」

怜治の戦い方にあきれていたクロノにユーノが話しかける。
傀儡兵の力はAクラス魔導師と同等だという。
それが事実なら怜治も無傷ではないだろう。

それを聞いてクロノは顎に手を当てて考える。
やがて一つの提案を出す。

「よし、二手に分かれよう。　一方はぼくと一緒に駆動炉の封印。
残りは松田の援護――といっても彼の事だから良しとしないだろう。　だから彼がプレシア逮捕に失敗した場合のために行ってもらう」

真っ先になのはが手を挙げた。
彼女もプレシアの言動には憤りがあるのだろう。
クロノもなのはの意図を察し、彼女に任命しようとした。
だが

「わたしが行く」

それを遮る声が響いた。
クロノが声のした方を向くと、そこにいたのは長い金髪を二つにまとめた少女。
フェイトだ。

「いやフェイト、君は止めた方が……」

「大丈夫。　わたしなら……大丈夫」

しかし、とクロノは続けようとしたがフェイトの眼を見て止める。
強い意志を秘めた眼だ。

（やれやれ……どうしてぼくの周りにはこう頑固者が多いんだ）

口には出さないが皆には何を思っているのか分かっている様子だ。
ユーノもアルフも苦笑している。

「分かった。　ではフェイトとアルフはプレシアのところへ。　なのはとユーノはぼくと一緒に駆動炉の封印だ。　いいね？」

「うん」
「分かった」
「任せときな！」
「ありがとう」

クロノの決定に賛成の声を上げる。
そして五人は二手に分かれた。

庭園最深部。
虚数空間に最も近いといえる場所では壮絶な戦いが行われていた。

雷光が空気を焦がし、鉄拳が周囲を瓦礫に変えていく。
その空間にいるのは一組の男女の魔導師。
女が杖を振るうとそれに合わせて雷光が轟音とともに走る。
男が鉄を纏った拳を振るえば轟風が巻き起こり粉塵と瓦礫を巻き上げる。

やがて杖を振るう女――プレシアが杖を鞭に変える。
紫電を纏った鞭が蛇のようにうねり、男――怜治の腕を絡め捕る。
鞭を伝って鋭い電流が怜治の体を駆け抜ける。
苦悶な表情を浮かべる怜治。
すぐさまリボルバーを召喚。
剣の部分で鞭を切り落とし、即座に距離をとる。
追ってくる雷撃をかわし、スタンを砲撃形態に切り替え、発砲。プレシアはすぐにプロテクションを展開。
だが威力の高さから防ぎきれず、弾道をそらす形でやり過ごす。

怜治の砲撃をやり過ごしたプレシアはお返しとばかりに砲撃系の魔法陣を構築。
陣はあっという間に展開された。

「サンダースマッシャー！！」

雷撃を伴った閃光が走る。
怜治はとっさにそれをかわす。
同時に鉄拳形態となって一気に間合いを詰める。

「なっ！？」

「おらぁっ！！」

砲撃を撃って隙だらけだったプレシアの体に鋼鉄の拳が突き刺さる。
プレシアの体がくの字に曲がり、顔が歪む。

「まだ……まだあぁ！！」

必死の形相で体を起こすプレシア。
鞭を消し、柄のみとなった柄先から紫色の魔力刃が伸びる。

ひと振りの剣となった杖を振るうプレシア。
怜治も慌てて退くが頬に焼けるような痛みが走った。
頬に手を当てるとべっとりと赤い液体がついた。

「はっ……非殺傷じゃねぇってか。　容赦ねぇな」

「当然よ。　私とアリシアの幸せを邪魔をする者を生かしておく理由がないわ」

刃に着いた血を払いながら冷たく言い放つプレシア。

「分かんねぇな。　そこまで娘思いなら、なんでそれだけの愛情をフェイトには向けてやらねぇ？　アリシアと違ったとしてもあんたの娘だろ？」

怜治の質問に苦虫を噛み潰したかのような顔をするプレシア。

「娘？　ふざけないで。　私が求めたのはアリシアよ。　新しいあの子の代わりじゃないわ。　それにあのお人形はそのどちらにもなれなかった」

「またそれか。　子どもは親の都合のいい玩具じゃねぇっての！」

スタンを再び砲撃形態にしてプレシアに撃つ。
プレシアも雷撃を纏った光弾を発射。　怜治の攻撃は相殺される。
その瞬間を見逃さずに怜治は大剣形態で斬りかかる。
プレシアがとっさに魔力刃で防御。　激しい火花が飛ぶ。

鍔迫り合いの中、戦いにくい相手だとプレシアは思う。
こちらが遠距離から撃てば近づき、こちらが接近戦を仕掛ければ離れる。
その戦法は間違ってはいない。　だが危険が大きい。
射撃、砲撃に自分から近づくなど自殺行為だし、剣においては切っ先の方がより切れる。
だからいきなり離れるなどよほどの猛者でない限りするべきではない。
すなわち彼の行動は場合によってはハイリスクローリターンなのだ。

押されているわけでは決してないにしても、ペースを握られている気がしてならない。
そして同時に気付く。
今自分が戦っている男は魔導師として正規の訓練も教育も受けていないのだと。
だからこうも無茶な戦い方をするし、こちらもそれにペースを乱される。
同時に苛立ちがまた生まれてくる。
こんな素人に
魔法に出会って間もない人間に
努力も苦労もなく、偶然力を手に入れた人間に
何も知らない子どもに
自分の願いを否定されることがなによりも苛立たしい。

「はあぁぁぁぁあああ！！」

気力を振り絞り、怜治の剣を押し返す。
そして雷球を精製。
手のひらサイズの光弾――単純な射撃魔法だが、それゆえにプレシ

アの腕を持ってすれば必殺の威力を持つ――を連続で怜治を撃ち、爆発を起こす。

その威力に怜治の体がスタンごと後方に吹き飛ぶ。
プレシアは即座に剣を鞭に変更。
鞭を振るい、怜治の首を絞めあげる。

「ぐっ……く……そ」

また斬って逃れようにも、首を絞められて呼吸が上手くできず集中できない。

「あはははは！　やっと捕まえたわ！」

鞭に電気を走らせ、怜治の体を電流が駆け抜ける。

「があああああ！！」

怜治の悲鳴がこだまする。
それを聞いてもプレシアは止めず、むしろ流す電気を強めていく。
やがて膝が折れ、前のめりに倒れる怜治。

「生意気なこと言っていた割にはあっけなく終ったわね」

プレシアは吐き捨てるように言って半壊した部屋を見渡す。
やがて外に見える空間――虚数空間を見て笑みを浮かべる。
その笑みは見た物を氷漬けにするような残酷な笑み。

「いいこと思いついたわ。　あなたここの外の空間が見えて？」

怜治は答えない。　電流の痛みと首を絞められた苦しさで声が出ないのだ。

「あれは虚数空間。　あらゆる魔法を無効化する。　無論、飛行魔法も例外じゃないわ。　そんなところへ落ちたらどうなると思う？」

プレシアの問いに青ざめていく怜治。
魔法に関する知識は乏しいが答えは分かった。
そしてプレシアが何をしようとしているのか。

「さぁ！！　私の夢の邪魔をした報い、死をもって味わいなさい！！」

あの細腕のどこにこんな力があるのだろう。
そう思えるほどの力でプレシアは怜治とスタンを鞭で放り投げた。
狙いは寸分違わず外――虚数空間へ向かい、怜治とスタンは投げ出された。

「『うあああああぁぁぁあああぁぁあ！！！！』」

そろって悲鳴を上げる。
同時に魔力が体から抜けていくような感覚が襲う。

（くそっ！！　マジで飛べねェ。　このままじゃ……）

死ぬ。

認めたくない一言が脳裏をかすめ、何かないかと必死で体をまさぐる。
その間にも落ち続ける。

このままではスタンを操ることもできなくなってしまう。
そしてポケットに指を突っ込んだ時、指先に当たる固いものを感じた。
取りだしてみるとそれは、
「ジュエル……シード」
指の間に挟まっているのはひし形の青白い宝石。
この一連の事件の原因ともいえる物質。　ジュエルシード。
これで何ができる。
絶望感が体を満たしていく。
だがふと思い出す。
ジュエルシードとは一体なんだったのか。
（確かユーノが言ってたな……えっと）
記憶を洗い出し、そして思い出す。
ジュエルシードの力、それは――……願いが叶う。
「もしかしたら……いや、んなこと考えてる時間はねぇ」
決意を固め、両手でジュエルシードを握りしめ呼びかける。
「おいジュエルシード……てめぇ願いを叶えるためにあるんだよな？」
落下中に宝石に語りかけるというのはなんとも奇妙な光景だが、それ以外に手が思いつかない以上仕方がない。　スタンも黙ってみて

いる。

「でもな、てめぇがまともに願い叶えたことがあったか？　ねぇよな。　だったら、ここら一丁本気だせよ」

一旦言葉を切り、息を思いっきり吸い込んで大声で怒鳴りつける。

「一遍ぐれぇ気合い入れてやってみやがれ！！　答えろ！！
ロストロギアアアァァァ――――！！！！！！」

これで邪魔するものはいなくなった。　そうプレシアは思った。
後は集めたジュエルシードで次元断層を起こしてアルハザードへの扉をあけるだけ。
管理局も次元震を抑えようと躍起になってるようだが、難しいだろう。

「フフ……フフフフフ」

自分の願い――アリシアの蘇生が叶うと思うと笑いがこみ上げてくる。
やっと戻れる。　昔に失った幸せな時間――愛する娘との時間――が取り戻せると。
不思議と体を蝕んでいた苦しみも消えた気がした。

「フフフフ……ハハハハハハハハハハ！！！」

「ずいぶん嬉しそうだな」

「！！！」

自分以外の声が聞こえた方を向くと青白い光が輝いた。
光の中から一人の男が現れる。
両腕を鉄に包み、黒髪に頭にはレンズの割れたゴーグル。

そこに今さっきプレシアによって虚数空間へと落とされたはずの怜治がいた。
だが、先程までとは違う点がある。
彼の背中には青白い光の翼が生えていた。
怜治はプレシアの方へと歩き出す。　それに合わせて光の翼も散っていく。
プレシアとの距離が２ｍほどになって翼は完全に消え、その代わりにひし形の宝石――ジュエルシードが残る。
そしてジュエルシードは怜治の胸へと吸い込まれていった。
まるで帰るべき場所へと帰るように。
信じられなかった。　あれは願いを叶えると宝石と言われているが実際には叶えるどころか造った世界を滅ぼした。
誰も願いも聞き入れない呪いの宝石のはず。
だがそれを使いこなした人間が今、目の前に立っている。
思わずプレシアは疑問を口にする。

「あなた……何者なの？」

「ただの……魔導騎兵（ライダー）だ」

ジュエルシードが怜治に吸い込まれていく映像はアースラにも届いていた。
プレシアと同様アースラスタッフも皆驚きを隠せずにいた。

「いったい……あの子は何者なの？」

今まで次元震を抑え込んでいたリンディがプレシアと同じ疑問を口にする。

「艦長！　次元震、徐々に治まっていきます」

「なんですって！？」

「間違いありません。　庭園内から発生したエネルギーによって、これはおそらく……彼が取りこんだジュエルシードによるものかと」

驚いた。　彼は複数のジュエルシードによって発生した次元震をたったひとつで抑え込んでしまったのだ。

（ロストロギアの力を完全にコントロール――いや制御した！？信じられない！）

「ホント、何者なんでしょうねあの人」

エイミィの質問に、リンディは答えなかった。

「おらぁ！！」

鉄の拳がプレシアの頬を掠める。
プレシアはすぐさま雷球を放つがかわされる。

（こいつ……明らかに速くなってる！）

ジュエルシードが彼の力を回復させたのか。
そしてなぜ彼はそれができるのか。
疑問は尽きないが、今は考えている暇はなかった。

杖を剣に変えて斬りつけるが紙一重のところでかわされた。
当たりそうで当たらない。　自分の理解を超えた行動する男。
そんな状況が彼女を苛立たせる。

「あなたどうしてあの子――フェイトのためにここまでするの？」

頭を冷やそうと思ったあまり、変なことを聞いた思った。

「あ？　んなもん大した理由はねぇよ。　ただあいつが泣きそうな顔してたから、ムカついて、原因のあんたを殴りに来ただけだ」

何を当たり前の事を――と言い返す怜治。
プレシアは怪訝な顔で怜治を見つめる。

「それだけ？　それだけであんなろくに笑わない子に、どうしてそこまでできるの？」

プレシアの問いに今度は怜治が怪訝な顔をする。

「笑わない？　ふざけんなよ。　てめぇ親のくせになにも分かって

ねぇのか」

足を止め、プレシアを真っすぐ見据えて怜治は口を開く。

「ガキは、てめぇら大人が思ってるほど空気読まずにヘラヘラ笑うもんじゃねぇんだよ。　周りが嬉しそうだったり、優しけりゃ自分も嬉しそうに笑う。　逆に怒ってたり悲しんでたら不安になって笑えなくなるんだよ」

怜治の言葉にハッとしたように眼を見開くプレシア。
だが認めたくないのか頭を振る。

「フェイトが笑わない？　てめぇがフェイトに笑顔見せたことがあったのか？
あいつに優しくしてやったことがあんのか？　ねぇんだろ！」

「黙れ……」

「思い出せよ。　てめぇの言う、アリシアが優しい笑顔ってのを浮かべた時あんたはどうだったのか……怒ってたか？　悲しんでたか？」

「黙れ……」

「笑顔だったんじゃねぇのかよ……あんたも！　嬉しそうに！　優しそうに！　アリシアに笑いかけてたんじゃ、ねぇのかよ！？」

「黙れぇぇぇえええええええええええ！！！！！！！」

プレシアの叫びとともに、無数の雷球が展開される。

これを怜治は見たことがある。　なのはとの戦いでフェイトが見せた必殺魔法。

『ちょ！？　怜治、早く防御を……』

「砕け散れ！！　ファランクス！！」

金色の弾丸が弾幕となって怜治を撃ち抜く。

ドドドドドドッと轟音と爆煙が巻き起こる。

「うおおおぉぉぉおお！！！！」

両腕を壁にして防御を試みる怜治。　だが数が多すぎる。
しだいに押され始め、何発かが体を貫く。
体を走る激痛に膝を尽きそうになるが力を振り絞って立ち続ける。

「倒れるかよ……あいつは、高町は耐えたんだ」

威力はフェイトより数倍上のものだろう。
だとしても倒れるわけにはいかない。
それはつまらない意地かもしれない。
だとしても――いやだからこそ倒れたくなかった。
だから――

「俺が倒れて、たまるかぁぁぁぁああああ！！！！」

怜治の絶叫とともに、金色の光の奔流が彼を飲み込んでいった。

やがて弾膜が治まる。　何百発――いや何千発撃ったかわからない。
やりすぎたか――とプレシアは思った。
だがすぐにそれは間違いだと否定する。
――あの男は一片残らず消し去るほどの覚悟でないと倒れない。
ほんの数分の攻防。　交わした言葉をわずか。
その中でプレシアは怜治をそういう人間だと結論付けた。
やがて煙が晴れていく。　煙の切れ間から人間の足が見えた。
自分の予想が当たったかと思い、次の魔法を撃とうとして魔法陣を展開する。
だがその手が急に止まる。

「なんなの……」

震えるような声。　その声にこもっているのは驚愕と恐怖。

やがて煙が晴れ、怜治の全身像が現れる。

「あなたは一体……なんなのよ！！！」

「何度も言わせんなよ。魔導騎兵（ライダー）だ」

怜治の体は、金色に輝いていた。　彼の体中にバチバチと電気が爆ぜている。
どうやら怜治自身も何が起こったのか理解していないようで、自分の体を探し物をするようにまさぐっている。

「んで……どうなってんだ？　スタン」

『“敵対魔力吸収・外装展開機構”。　要約すると、相手の魔力を

吸収してバリアジャケットの上から鎧のように展開しちまうこと。
しかも変換魔力ならその属性の性質まで付与されるっつー、魔導騎兵（ライダー）としての戦闘方法の最終段階だ』

へぇ――と感嘆する怜治。　だが本人はスタンの言葉を全て理解したとは言い難い。

「んで？　見たところこれは雷纏ってるみてぇだが、性質は何だ？」

『実にシンプルだ。　それは、“速さと鋭さ”だ』

瞬間。　怜治の姿が消えた。

「！！」

「雷龍の、鉄拳」

『Ｅｌ　ｐｕ？ｏ　ｄｅｌ　ｄｒａｇ？ｎ　ｄｅｌ　ｔｒｕｅｎｏ』

怜治の拳がプレシアの顔面に突き刺さる。
同時に落雷のような轟音と雷光が部屋に響きわたった。

「はぁ、はぁ……終わった」

その言葉と同時に体に纏っていた電気が消える。
仰向けに倒れたプレシアに近づき、顔を覗く。

気を失ってはいるが、息もある。　瀕死の重傷という様子もない。
安心感と疲労感が同時に体を襲う。　魔力を体に通して無理やり体を支える。

『しっかりしろよ。　まだ逮捕してアースラに連れてかなきゃなんねぇンだぞ』

「分かってるよ。　でも……」

「母さん！！」

怜治の言葉を遮り、フェイトがプレシアに駆け寄る。
それを見て、怜治が静かに言う。

「今は、親娘の時間だ」

第１３話　名前を呼んで、拳あわせて（前書き）

配分ミスりました。
ちょっと長めです。

第１３話　名前を呼んで、拳あわせて

プレシアは夢の中で思い出す。
愛しい娘と過ごした時を。

「とても似合ってる。　かわいいわよ。　アリシア」

そういって頭に花の冠を乗せた娘（アリシア）に笑いかける母（プレシア）。

「ありだとー、ママ！」

アリシアも嬉しそうに笑う。
その笑顔を見てさらに顔が綻んでいくプレシア。

彼女たちがいるのは静かで、美しく、心地よい風が吹く草原。
年中仕事のプレシアが珍しく有給を取ることができ、アリシアの要望でピクニックに来たのだ。
そう思うと気が重くなってしまう。
明日からはまた仕事だ。　彼女が担当しているエネルギー炉の開発が本格的に始まる。
そうなれば、またこのような穏やかな時間を過ごすことは難しくなる。
仕事が忙しいことなど苦痛ではない。　それぐらいの覚悟はしていたからだ。
だがアリシアに寂しい思いをさせてしまうことが残念でならない。
彼女はまだまだ母親に甘えたい年頃だ。　だけど彼女は、むしろプレシアの体を気遣う時すらある。
自分の娘に負担をかけてしまっているのではないか。

そんなことを考えてしまい、表情が暗くなる。

「ママ？　かなしいの？　どうして？」

ふと気付くと、アリシアが自分の顔を覗き込むように見上げてきた。
その表情はプレシア同様暗く、それでいて悲しそうだ。

「え？　……いいえ、大丈夫よ。　アリシア」

慌てて暗い顔を引っ込め、笑顔をつくるプレシア。

「ホント？　ママ、かなしそうな顔してたよ？」

子どもというのはなかなか鋭いと思った。

そうね――と言いながらアリシアを抱き寄せるプレシア。
腕を通して娘の重みを感じ、前により重くなったことに気付いた。

娘の成長を嬉しく思うと同時に長いこと、こうしたことがなかったことに自分の不甲斐なさを感じてしまう。

「ごめんね……」

思わず謝罪の言葉を口にしてしまう。

「どうしてあやまるの？」

「ごめんね。　ママのお仕事のせいでかまってあげられなくて」

「そんなことないよ？　アリシア、今とーっても楽しいよ！」

両手を挙げて、満面の笑みを浮かべるアリシア。

「本当？　ママ、いつも一日中家にいなくて寂しい思いさせてしまって……」

「さびしいけど……ママのおしごと、たいへんなんでしょ？　だったらしかたないよ。　それに……」

「それに？」

「それにママはこうやってアリシアのためにおやすみとって、あそんでくれるもん！　つくってくれるごはんも、おやつも、とってもおいしいもん！」

――だから

「アリシア、ちょっとさびしいときもあるけど、すーっごくしあわせだよ！！」

アリシアの言葉に、涙を浮かべながら強く抱きしめる。

最初は驚いていたアリシアも、すぐに笑って腕を背中を回す。

「ありがとね……アリシア。　もう少し待ってね。　もう少しでママのお仕事も一段落するから、そうしたらまたこうやって2人で過ごそうね」

ホント！？と耳元に歓喜の声が聞こえてきた。

「ママとおかいものいける？」

「ええ、行けるわ。　アリシアに寂しい思いさせてしまったから、プレゼント買ってあげなきゃね」

「やったー！　ありだとー、ママ！！」

「何か欲しい物ある？」

プレシアが尋ねると、アリシアはえっとねー、えっとねー、と指で数を数えるように考え込む。
どうやら欲しいものはたくさんあるようだ。
別に一つだけとは言っていないのに、必死に一つに絞りこもうとしている。

やがて欲しい物が決まったようで、プレシアの顔を真っすぐ見つめた。
そして口を開く。

……――ママ！　アリシアね――……

魔法少女リリカルなのは☆Ｔｈｅ　Ｒｉｄｅｒ☆　第１３話　名前を呼んで、拳あわせて

「う、うぅ……」

苦悶の表情を浮かべながらプレシアは意識を取り戻す。
痛みでまだ目が上手く開かない。
そして気付く。　自分が負けたことを。
彼女の計画は失敗に終わった。　なのに不思議と悔しさがない。
むしろ憑き物が落ちたようにすっきりした気がする。
何か懐かしい夢を見たからだろうか。　思い出の中だけでも、娘に会えたからだろうか。

やがてゆっくりと目を開ける。
目に映ったのはこちらの顔を心配そうに覗きこんでいる少女。
綺麗な金色の髪を垂らし、紅色の瞳は不安そうに揺らいでいる。

プレシアはこの顔を知っている。　彼女が最も愛した少女の顔。
思わず少女の顔に触れようと手を伸ばす。

「アリ……シア」

びくっと少女の肩がこわばった。　プレシアは手を伸ばすのを止めた。

「違うわね……あなたは……フェイト」

「はい……母さん」

「何をしに来たの……」

彼女は少女を拒絶したはずだ。　消えろと。　いらないと。

なのになぜ少女はここにいるのだろう。

「あなたに言いたいことがあって来ました」

少女は静かに答える。

「わたしは……アリシア・テスタロッサじゃありません。　あなたが造った、ただの人形かもしれません」

プレシアは何も言わない。　少女の目を静かに見つめている。

「だけど、わたしは……フェイト・テスタロッサは……あなたに生み出してもらって、育ててもらった、あなたの娘です！」

「フフフ……ハハハハハ！！　だから何？　今さらあなたを娘と思えというの？」

プレシアは馬鹿馬鹿しいばかりにと横になったまま笑い声を上げる

「あなたが……それを望むなら」

笑い声が止んだ。

「それを望むなら、わたしは世界中の誰からも、どんな出来事からも、あなたを守る」

フェイトは言い続ける。　自分の想いを。

「わたしが、あなたの娘だからじゃない。　あなたが……わたしの母さんだから！」

プレシアの答えは

「望むわけ……ないじゃない」

変わらなかった。

「私が望んだのはアリシアの代わりじゃないわ。　アリシア自身なのよ」

今度はプレシアが自分の想いを告げる番となった。

「あなたを娘と認めたら、アリシアは本当に死んでしまう。　あなたとの記憶に塗りつぶされて、誰の記憶からも消えてしまって……そんなこと……それこそ死んでもできないわ。　できるわけがない」

そう言うとフェイトから視線を外す。　本当は立ち上がって離れたいが、体が動かない。

「だったら……わたしにも教えてください。　あなたと……アリシアの思い出を」

驚くように再びプレシアはフェイトを見る。

少女の眼は真剣だった。　プレシアは一瞬理解できなかった。

少女の頭の中には、自分が入れたアリシアとしての記憶があるはずだ。

今さらそんなことを聞いてどうなるというのだろう。

そんなことを考えていると、フェイトはそれを見透かしたかのように告げる。

「わたしの中にあるアリシアの記憶は、あくまでアリシアから見た記憶です。　だから、あなたから見たアリシアというものをわたしは知りません」

はっとしたようにプレシアは目を見開く。

「だから教えてほしいんです。　アリシアがどんな子で、何が好きで、何が苦手だったのかを。　あなたの口から直接」

「それを知ってどうするの？　今度こそアリシアになりきってみせるというの？　そんなこと……」

無駄だ――そう言おうとしたが、フェイトが首を横に振って否定したため言えなかった。

「共有したいんです。　アリシアの思い出を。　わたしの姉……になってたかもしれない人のことを。　あなたとわたしとアルフと、三人でずっと……」

そうすればアリシアは消えない。　生き返ったりすることは決してないけど、思い出として、記憶として自分の達の心に存在し続ける――と少女は言う。

聞いた人間次第では馬鹿らしいと一蹴する者もいるかもしれない。　だがプレシアはしなかった。　そしてフェイトの言葉で、思い出したことがあった。

……――ママ！　アリシアね、いもうとがほしい！！――……

……――い、妹？――……

……――そういもうと！　そうすればアリシアひとりじゃなくなるし、さびしくないよ！――……

「そうね……そういう考え方も、あって……いいのかもしれないわね」

そしてゆっくりとフェイトの頬を撫でる。
フェイトもその手に自分の手を重ねる。

長い間感じたことのない母の手のぬくもりに、思わず笑みが零れる。
そんなフェイトを見て、プレシアも笑顔を見せる。

「あら……あなたも、優しい笑顔……できたのね」

「は……い……」

少女の目から涙が落ち、プレシアの頬を濡らす。

「気付けなくて……ごめんなさい」

杖を放し、その手でフェイトの目に溜まった涙を拭う。

そんな2人のやり取りを離れて見守る怜治、スタンそしてアルフ。

「良かった……良かったね、フェイト……」

「一様これでハッピーエンドか？」

『だといいけど……』

アルフは涙声で、怜治はどこか嬉しそうにする中、スタンはこの先の事を心配していた。

プレシアのしたことは犯罪行為。　そしてフェイトもそれに協力していた。

フェイトの方はプレシアに無理やり……ということにすれば、多少の制限はあっても投獄ということにはならないだろう。

だがプレシアは違う。

この一連の事件の主犯であり、次元震まで引き起こした。　その危険性を知りながらだ。

ゆえに、実刑は確実。　そうなれば、フェイトと長い間離れることになるだろう。

だが怜治は言う。

「大丈夫だろ。　一回ちゃんと向き合えて、分かりあえたんだ。……家族だしな」

そう言って、アースラと連絡を取ろうとアルフから通信機をもらう。

その時

庭園が大きく揺れた。

「うぉっ！」

「なっ！」

『うわっ！』

突然感じた揺れに体が反応できず、短い悲鳴があがる。

「母さん！！」

フェイトの声が聞こえ、彼女の方を向くとプレシアがいた場所がから先が完全に崩壊していた。

フェイトは崖のようになったところに上半身を入れ、必死に手を伸ばしているようだ。

怜治たちは彼女が何に向かって手を伸ばしているのか気付き、即座に駆け寄った。

「おい！　大丈夫か！？」

フェイトと同じような体勢になって崖下を覗き込むとフェイトの細い手が、プレシアの手を必死に握りしめていた。

アルフはフェイトの体を、怜治はすぐにもう一方のプレシアの手を掴んで引き上げようとする。

が、体力や精神力を使いすぎたのか、上手く力が入らない。

その間に、揺れは徐々に大きくなっていく。

「くそっ！　一体どうなってんだ！！」

悪態をつきながらも、怜治には原因が分かっていた。

次元震を押さえていたジュエルシードの力が無くなったのだろう。

もう一度同じことをやろうにも、他のジュエルシードはプレシアが、もしくはアースラの中だ。

プレシアの持っていたジュエルシードはおそらくもう虚数空間に落

ちていってしまっただろう。

何か手はないか、そんなことを考えていると、彼の傍を何かが滑り落ちていった。

――アリシアが入ったポッドだ。

誰も彼女を助けることができない。　ポッドは重力に引かれ、静かに落ちていく。

それを見てプレシアから力が抜けていくのを感じた。

「お、おい！　なに力抜いてんだよ！　しっかりしやがれ！！」

「フェイト……あなたに教えておくわ。　アリシアとの思い出……」

怜治の声を無視して、プレシアはフェイトに語りかける。

フェイトはプレシアが何をしようとしているのか気付き、目に涙が溜まる。

「昔、珍しく休みを取れて、あの子とピクニックに行ったことがあるの……」

「知ってるよ……わたしにもその記憶があるよ……」

「そう……アリシアとそこでお弁当を食べたわ」

「知ってます……母さんはわたし――アリシアに花の冠をかぶせてあげて……」

「あの子はとっても喜んだわ……」

「おいおいおい！！　そういう思い出話は後だろうが！！」

怜治は再びプレシアを諫める。　だが彼女は話すのを止めない。

「あの時ね、私の研究が落ち着いたらあの子にプレゼントを買ってあげる約束をしたの」

――何を欲しがったと思う？

その質問にフェイトは分からないと言った風の表情を浮かべる。
どうやら彼女の中にあるアリシアとしての記憶も完全ではないようだ。

「あの子ね……妹が欲しいって、そう言ったのよ……」

「――え？」

「そうすれば、お留守番も寂しくないって……」

プレシアの目から涙が流れた。
それは遅すぎたことへの後悔か、思いを伝えたことからか。
そして――

彼女の頭上で小さな爆発が起こった。
彼女が自ら魔法を放ったのだ。

「うおっ！　何してんだよ一体！！」

衝撃で怜治は手を放してしまった。

プレシアは空いた手でフェイトの頬に触れる。

「最後まで、勝手な母さんを許してね？　でもあなたは一人じゃないわ」

プレシアはフェイトの頬を伝う涙を拭きながら言う。

「あなたにはアルフがいる。　友達になりたいと言ってくれる子がいる。　あなたのために動いてくれる人がいる」

一瞬、ちらりと怜治を見た。

そして申し訳なさそうに顔を伏せる。

「でもね、アリシアには誰もいないの。　もう……あの子に寂しい思いをさせたくないの」

――ごめんなさい。

その言葉と同時にフェイトの手から、プレシアの手がするりと抜ける。

「母さん！！　母さーーーーーーーーーーーーん！！！」

「ふざけんな！！　こんな終わり方があるかよ！！　あってたまるかよ！！」

追い打ちをかけるように彼らのいたところに亀裂が走る。

間一髪のところで後ろに飛ぶと、さっきまでいた場所は崩れ去っていた。

もう、助けられない。

受け入れがたい事実が彼らの頭を撃つ。
フェイトはその場に座り込み、涙を流す。

……――フェイト――……

突如、彼女の頭に声が響いた。
何事かと驚いたが、すぐに声の主は母であると分かった。
他の2人を見ると、彼らにも聞こえているようで、頭に響く声に耳を傾けている。

……――フェイト……一緒にいてあげることができなくてごめんなさい。　あなたに酷い仕打ちをしてしまってごめんなさい――……

頭に響く念話は後悔の念に彩られた謝罪の言葉。
しかし少女が聞きたいのはそんな言葉ではない。

……――……幸せになって……――……

声色が突然優しいそれに変わった。

……――私のように後悔せず、大切な人と、幸せになって……――……

「分かったよ……分かったよ。　母さん……」

声は二度と響くことはなかった。

庭園が崩れる音だけがむなしく聞こえる。

「こんな終わり方…ちくしょう…ちくしょう…ちくしょぉぉおおおおおお！！！！！」

その中で、怜治の叫びが響きわたった。

「さぁみんな！！　無事事件も解決したってことでぇ……カンパーイ！！」

「……」

「……」

「……」

「……えーっと……あ、あははー」

エイミィ・リミエッタの力のない笑い声が響く。

彼女を始め、なのはとユーノを加えてアースラスタッフ全員がアースラの食堂に集まっている。テーブルには豪華な料理が並んでいる

が誰も手に着けず、手もとのコップに入ったジュースをちびちびと飲むだけだ。

――あれから、なのは達によって駆動炉は封印。　次元震もリンディによって抑えられた。

その後怜治達もアースラに回収された。　時の庭園は虚数空間に飲み込まれ、かろうじてキャッチした映像と音声、そして怜治達の報告によって、一連のロストロギアをめぐる事件は終幕した。

事件解決が艦長であるリンディより正式発表され、エイミィはすぐに祝勝会を開催した。

彼女の脳内シュミレーションによれば、今頃ビールかけならぬ、ジュースかけを武装局員が行い、なのはやユーノ、怜治達も巻き込んだどんちゃん騒ぎに発展。

それをクロノの小言が聞こえるはずだった。

だが現実はそうならなかった。　プレシアの最期の映像と音声は他のスタッフ達にも送信されており、皆暗いオーラを放ちまくってしまってどんちゃん騒ぎどころか乾杯すら碌にできない状態に陥ってしまった。

（ダメだ……私じゃ、このどんより空気を拭いきれない……）

自分の非力さにうな垂れていると、通信スタッフの一人が近寄ってきて耳元で呟く。

「主任。　やっぱり今こんな空気で事件解決パーティは無理ですって！」

「え～でもこんくらいしなきゃみんな落ち込んだままだし……」

「でも全っ然盛り上がってませんよ！　しかもあのクロノ執務官が皮肉の一つもこぼさないなんて前代未聞ですよ！」

このスタッフの言うとおり、クロノは沈んだ顔でコップに入ったジュースを静かに傾けている。　だが、ジュースが減っている様子はない。

目の前にある料理に手を伸ばす気配もない。　なのはやユーノも同様だ。

「あれ？　そういえば怜治君は？」

目を凝らして食堂を見渡しても、彼の姿は確認できない。

「あぁ、彼なら医務室ですよ。　傀儡兵とプレシア・テスタロッサとの戦いの疲労が結構きついらしいです」

そっか――とエイミィは少し残念そうに言う。

医務室行きなら無理やり引っ張ってくるわけにはいかない。

といっても彼もプレシアの最期には多少なりともショックを受けていたらしいからいてもこの空気は変わりないような気もする。

フェイトもショックで部屋に籠ってしまい、アルフは彼女に付き添っている。

このままお開きにするか――と思っていると

「あ～腹減った。　お！　美味そうなのあんじゃん！」

食堂に入ってきた怜治（なぜか鉄拳形態）がクロノの前に置いてあ

った骨付きチキンを取ってかぶりついた。
肉を噛み千切る音だけが聞こえる。
なのはもユーノも、そしてクロノを始めとするアースラスタッフも茫然と見ている。

なんでこいつはこの空気の中で食えるんだ？

天然なのか鈍いのか分からないが、怜治は次々に皿に乗った料理に手を着けていく。

「うん、魔法界の料理ってのはゲテモノ系ってイメージがあったけど…対して俺らの世界と変わんねぇな」

クロノからコップをサッと取ってジュースをグビグビと飲み干す。
クロノがあっと小さな声を出すが気にしない。

「……ダメだジュースは合わねぇ、なぁお茶ってねぇのか？　緑茶じゃなくて烏龍茶派なんだけど俺」

「……君ってやつは何考えてるんだーー！！！」

空となったコップを渡され、好き勝手言われ、クロノがキレた。

「何いきなりキレてんだよ？」

「そりゃ怒るさ！！　見ろよみんな落ち込んで食事する気にもならないってのに、君はどうしそう呑気に食事ができるのさ！？」

「落ち込んでるって……何に？」

クロノは言葉を失った。　信じられないといった顔で怜治を見る。
だが怜治は本当に分からない様子だ。
その態度に静かな怒りがこみ上げてくる。

「プレシア・テスタロッサの最期を見て、君は何も感じないというのか？」

自分たちにもっと力があれば、救えたかもしれない命。　見ないですんだかもしれない涙。
今さら悔やんでも仕方ないということは分かっている。
こんな結末は初めてというわけではない。
だからといって、決して慣れることはない。

みな自分の無力さに打ちひしがれて、そして立ち上がって前に進む。
次は必ず全て助けるために。
それが傲慢な願いだったとしても。

「君は……何も感じなかったのか？」

質問を繰り返す。
答え次第では殴り飛ばそう。　そう心に決めてクロノは目の前の男が口を開くのを待つ。

「別に……」

拳を強く握りしめた。　骨が軋む音が聞こえた気がした。

「ふざけ……」

「あいつは！」

ふざけるなと言おうとしたが、怜治の声に遮られた。

「あいつは……プレシアは自分の意思で手を放した。　笑って逝った。　だから俺は泣かねぇ。　泣くわけにはいかねぇ」

別にお前らにまでそうしろとは言わねぇけど。

スタッフの持ってきたお茶をコップに並々注ぎ、怜治は食事を再開する。

他のスタッフもつられて料理に手を伸ばす。

静かながらも、祝勝会が始まった。

しばらくすると会話も少しずつ増えていき、三十分もすればにぎやかになった。

初めは遠慮がちだったなのはも異世界の料理というものに興味シンシンだ。

「ねぇねぇ怜治君。　なんでまだその姿なの？」

エイミィが怜治に話しかけてきた。

「ん？　あぁ、鉄拳形態（これ）ね。　体力使い果たしたせいで、スタンに補助してほらねぇとろくに歩けねぇんだよ」

魔力と体力って別物なんだな――と今さらながらに気付く怜治。

エイミィはそれを見て笑みがこぼれる。

そんなことも知らない人間がSランク魔導師に勝ったというのだから驚きだ。

「あら、みんな随分楽しそうね」

「あ、艦長」

今まで本局への報告と今後の指示を受けていたリンディが食堂にやってきた。
にぎやかに食事をしているクルー達を見て安堵の表情を浮かべる。
彼女も皆が落ち込んでいないか心配していたようだ。

「怜治君。　ちょっといいかしら？」

「ん？　まぁいいけど」

ちょいちょいと手招きするリンディを追って、怜治は食堂を出ていく。

その様子を、クロノとエイミィが気まずそうに見つめていた。

怜治はブリーフィングルームに連れてこられた。
少々薄暗い照明の部屋に置かれた長テーブルが鎮座している。

リンディが長テーブルの真ん中の席に座り、怜治に向かい合った席に座るよう促す。
それに従い、ふたりは向かい形になる。

肘をつき、絡ませた指に顎をのせて怜治を見つめるリンディ。

表情は深刻だ。

（なんかいい話題じゃなさそうだな……）

「ちょっと言いにくいことなんだけど……」

当たっちゃったよ。と怜治は自分の勘の良さにうんざりする。

何を言われるのだろうと考えてみるが、特に思いつかない。

答えを求めるためにリンディの瞳をまっすぐ見据える。

「実は、あなたの相棒――スタン君のことなんだけど」

「なんだよ？　実はこいつもロストロギアでしたーってか？」

「……実は、そうなのよ」

え？　マジで？

『おいおいおい！！　ちょっと待ってくれ！』

スタンが抗議の声を上げた。

『オレはどっかの次元世界を滅ぼすなんて物騒な真似した覚えはねぇぞ！』

ってかできねぇし！――と心外なとばかりに声を上げるスタン。

「次元世界を滅ぼした原因のみをロストロギアと認定するわけでは

ないわ。　滅んだ世界特有の技術もロストロギア扱いされるの」

その中で、危険と判断されたものは管理局に管理・保管、または封印されるという。

そしてスタンはその封印の対象だという。

「んじゃあスタンは危険と判断されたってか？　ありえねぇな。俺はこいつのせいで危険になった事は一度も……ナイヨ？」

『何その間!?　ってかそこ疑問形はダメだろ!!』

ぎゃあぎゃあと口論を始める怜治達をよそに、リンディは端末を操作する。

とある画面を映すとそれを怜治に見せる。

「なんだそれ？」

「スタン君について、本局で調べてもらった結果よ」

怜治は空中に浮かんだ画面の文字を読んでいく。

先日、リンディ・ハラオウン提督より提出および調査依頼されたデータからの検索によるヒット件数有り。　それをここに記す。

魔導二輪――第二級捜索指定ロストロギア

新暦３５年に全生命体の滅亡が確認された、現第４６無人世界シェルコより新暦４０年に発見。

一般に普及されているデバイスより、非常に高度なＡＩを搭載されたデバイスと判明。

使用可能と分かり、８人の魔導師が使用。　だが使用者全員が数日後に死亡した。
死体検分の結果、全員に共通して魔力の著しい低下、その原因が件の魔導二輪と推測。
プログラムの調査の結果、使用者の魔力を際限なく吸収し続ける機構を発見。
魔導師を死に至らしめる呪いの車体として新暦４７年にロストロギアと認定。
だが回収の際、突如暴走し失踪。　新暦５４年に発見され、管理局員に回収されるも局員は途中で変死体となって発見された。　魔力の低下が見られたことから、魔導二輪が原因とされる。　その後、魔導二輪の所在は不明となっている。

「……」

「分かってくれたかしら？」

怜治は黙り込んでしまった。　スタンも声を出さない。
驚くのも無理もない。
自分の相棒が原因で人が死んでいるのだ。
顔に出ずとも、動揺しているだろう。
そしてその相棒を奪おうなどと言えば彼は烈火の如く怒るかもしれない。
たとえそうでも仕方ない。　頭の固さから恨みを買うのも管理局の仕事だ。
リンディは意を決して口を開く

「残念だけど、スタン君は管理局で……」

「認めねぇな」

怜治が口を挟んだ。　やっぱり来たかとリンディは思った。

「スタン君が好き好んで人の命を奪ったなんて言わないわ。　実際、あなたにほかの被害者よりずっと長く彼と一緒にいる」

だが、それも偶然かもしれない。　彼の魔力の高さゆえかもしれないのだ。

――いや、可能性はもう一つある。　だが今言うべきことではない。

「あんたの言うとおり、スタンを動かすのにかなり魔力を消費する。　それも最近は楽になって来たが、いつか俺にもぶっ倒れる時が来るかもしれねぇ」

――でも

「こいつは俺の相棒だ。　だからこいつをあんたらには渡すわけにはいかねぇ」

「それは、管理局と敵対するということかしら?」

無謀なことだと思った。　いくら彼が強くても、管理局の力は大きい。

いずれ巨大な力によって潰されてしまうだろう。

それは哀れなことだし、惜しいことだとも思った。

怜治は少し考えるようにして、口を開いた。

「いい加減本音を言ったらどうだ?」

「……どういう意味かしら？」

「あんたは絶対融通の利くいい人じゃねぇ。　だからと言って規則に縛られるような頭でっかちでもねぇ」

続けて言う。

「どうせなんか裏技あんだろ？　スタンを回収せずに済むような方法が」

「……そう思う根拠は？」

「四の五の言わずにスタンを回収するつもりなら食堂で言えば良かった。　クロノなら反対しねぇだろうし、最悪あいつに俺をとっ捕まえさせりゃいい」

食堂には人が多くいた。　そこでは思う存分戦えないし、戦う力もあまり残ってない。

だがクロノなら狭い場所でも上手く動けるだろうし、力をあまり消費していない。

怜治の答えを聞き、リンディは小さく笑う。

「そうね……確かにあなたの言うとおり、手はあるわ。　あなたからスタン君を取り上げずにすむ方法」

――ただし

「この手を使うには一つ条件をのんでもらう必要があるの」

『今後管理局に協力しろ……か？　簡単に読めるぞ』

「できれば将来は正式に入局してもらうといいのだけれど……」

「やっぱそうか……まぁ別にいいけどそれくらい」

すんなり同意した怜治に、リンディは目を丸くする。　こうも簡単に承諾されるとは思わなかった。

「えっと……本当にいいのかしら？　一応、今後の一生を左右する決断だと思うのだけれど？」

「いいって別に。　特に他にはっきりしたこと決めてねぇし」

『まぁ怜治大学行けるほど頭良くねぇしな！！』

「うっせー」

とても重要なことのはずなのに、それを簡単に決める怜治をリンディは随分変わった子だと思った。

――いや。　彼もプレシア・テスタロッサの死を見て、クロノのように態度に表わさずとも色々感じたことがあったのだろう。

もしかしたらもともと管理局に入ることも考えていたのかもしれない。

実を言うと他にも勧誘のための台詞は用意していたのだが、杞憂だったかもしれない。

「分かったわ。　でも色々手続きがいるから、しばらくの間スタン君を預かっても構わないかしら？」

怜治がもの凄く面倒くさそうな顔をした。

「……どうせ嫌つっても持ってくんだろ？　いいよ。　でもあれが終わるまでは待っててくれよ」

「いいわよ。　もともとそういう約束もしてたわけだし」

話は終わり、ブリーフィングルームから出るとクロノが壁にもたれかかっていた。
表情は若干複雑そうだ。

「立ち聞きか？　いい趣味とは言えねぇな」

「そんなつもりはない。　ただ艦長に話があったから来たところへ君が出てきたんだ」

「へぇ～お前は壁伝いに移動する癖でもあんのか」

クロノの肩がピクッと震えた。
無理は言いわけだとは知っていたが、指摘されると恥ずかしいのだろう。
少し頬を赤くして怜治をキッと睨んでくる。

「はっきり言って、僕は君を許すつもりはない」

クロノは続ける。

「君のしたことは、結果的には良い方向に納まったかもしれない。
でも一歩間違えればこの世界は滅んでいたかもしれない」

「だからどうした？」

「なんだと！？」

噛みつかんばかりの勢いで迫ってくる。

「終わったことについて、たらればなんて考えたって仕方ねぇだろ。だいたい、俺がしたことは俺自身が後悔したりしねぇための行動だ」

無論、本当に自分の住む世界が滅びそうだったらそうならないために動くだろう。

もっともそのための行動がとれていたかと言われると微妙だが。

「俺はヒーローじゃねぇからな。　世界丸ごと救おうなんてでかいこと堂々とはいえねぇ。

でも、困ってそうな奴手伝ったっていいだろ？」

怜治の言っているのはフェイトの事だろう。

「それは世界を危機に陥れてでもやることか？」

「間違ってるな」

「なに？」

クロノが訝しげな顔をする。　それを尻目に怜治は続ける。

「人と世界。　天秤にかけること自体間違ってんだよ。　世界なん

て、バラしゃ一人ひとりの命だ。　世界のために、一人見捨てていい理屈になるかよ」

「理想論だな」

吐き捨てるようにいうクロノ。
彼もそう考えたことがあったのだろう。　だが、現実は常に残酷なものだ。

「たとえそうでも、俺は変えるつもりはねぇ。　無茶言ってるのも自覚してるから、お前に同じ考え持つよう強制もしねぇさ」

クロノの肩を叩き、歩き出す怜治。
クロノは自分の拳を強く握りしめる。

「世界は……いつだって、こんなはずじゃなかったことばかりだよ」

「だからって、立ち止まっていい理由にはなんねぇよ」

「……そうだな」

数日後。

怜治は再びアースラにやってきた。　スタンを預けるためだ。
フェイトの裁判のついでにスタンを一度本局に運び、怜治の専用デバイスにするための手続きが必要らしい。

怜治は転送ポートの前で立っていた。　スタンも横に鎮座している。
フェイトもなのはもここにはいない。
彼女たちは今、海鳴市で一時の別れを告げているらしい。
リンディが言うには、フェイトの罪は大きく罰せられることはないという。
多少の制限はつくが、大人しい彼女の性格なら特に問題ないだろう。

怜治がここにいるのはその少女を待っているのだ。
例の約束――一方的にしたものだが、それを実行するために。

転送ポートが光を放つ。　光の中から四人の人影が現れた。
クロノ、ユーノ、アルフそしてフェイトだ。

「高町との話は終わったか？」

「うん。　……でも、どうしてあなたがここに？」

フェイトの疑問に賛同するように、アルフとユーノもうんうんと頷く。

「ちょっと野暮用がね……。　それよりフェイト」

「はい？」

首をかしげる少女に向かって怜治は

「俺と本気の勝負、しねぇか？」

ニヤッと笑って言った。

「んで……どうしてこうなるんだい？」

「すまないね。　彼の強い要望というかなんというか……」

アルフが呆れたようにクロノを見る。

クロノも申し訳なさそうにしながら、ガラスの向こうの空間を見ている。

クロノが視線を向ける先は、トレーニングルームになっており、武装局員同士の模擬戦などに使われる。

だが今その空間にいるのは一人の少女と、バイクに乗った青年。

「えっと……あの約束みたいなのは本気だったんですね」

「当然。　冗談ならもうちょい面白いこと言うよ」

金色の髪の少女――フェイトは苦笑する。

確かに目の前の青年とはいずれ戦おうと言われはしたが、まさかこの時期にやるとは思わなかった。

「よくOK出ましたね」

「ちょ～と取引してな。　快くOKしてくれたよ」

取引をしたのなら快くとは言わないのでは？と思ったが口には出さないでおいた。

フェイトの表情を見て察したのか青年――怜治が口を開く。

「まぁあれだ。　ここ数日に色々あったし……」

「あったし？」

「……思いっきり体動かしてみるってのもいいんじゃねぇか？」

怜治の発言に、フェイトがプッと小さく笑い声がもらした。

「なんか、あなたらしいですね」

笑いながらバルディッシュを起動。　黒が基調のバリアジャケットが展開される。

「そりゃどうも。　お前も笑ってる方が似合ってるぜ」

怜治もバリアジャケットを展開。　同じく黒を基調としたライダースーツの上に紺色のコートが展開される。　あたまに乗ったゴーグルをかけ、スタンを鉄拳形態（アームズフォーム）に変形する。

『2人とも、用意はいいか？』

見学ルームからクロノがマイクで聞いてくる。

天井から声が響くように聞こえた。

「いいぜ」

「いつでも」

『わかった。　では……スタート！！』

ブーッと甲高いブザー音が鳴り響く。

同時にフェイトはフォトンスフィアを展開、怜治は二丁の拳銃を構える。

金と紺の魔力弾が激しくぶつかり合う。　爆煙がトレーニングルームを覆う。

フェイトがバルディッシュをサイスフォームにして煙を切り裂いて怜治に斬りかかる。

怜治はそれを右腕で防ぐ。　激しい火花が散る。

左腕で正拳突きを繰り出す。　それをフェイトは後ろに飛んでかわす。　同時にフォトンスフィアを三つ設置し、距離を取ると同時に炸裂させる。

雷光が怜治を襲うが、大きなダメージにはならない。

怜治は砲撃形態（バスターフォーム）でフェイトに向けて砲弾を連射。

フェイトは金色の鎌を飛ばして相殺する。

巻き起こる爆煙を、怜治は大剣形態（ブレイドフォーム）で斬り裂き、フェイトに突撃する。

ガキン！！とバルディッシュとスタンがぶつかり合う音が響く。

「らあああっ！！」

力比べは怜治が勝り、フェイトを壁に叩きつける。　さらに追撃しようと突きを繰り出すがフェイトは素早く移動してかわす。

「ああ～～！　もう始まっちゃてる！？」

見学ルームにエイミィが駆けこんできた。　走ってきたのだろう。息が切れている。

「今始まったばかりだよ」

「そう、よかった～。　ねぇどっちが勝ってる？」

「今ん所は互角ってとこだね。　まぁ最後にゃフェイトが勝つけど」

アルフが胸を張って言った。

「まぁ2人ともオールレンジで十分に戦闘可能だ。　互角になるのは当然だ」

「えっと……フェイトちゃんはスピード重視の高機動型で……」

「怜治はパワー重視の……重戦車型とでも言うのかな」

「ならやっぱり最後はフェイトの勝ちだね」

アルフが自信たっぷりといった具合に鼻を鳴らす。

怜治はパワーがあるが、フェイトはそれをかわしきるスピードがある。

そしてフェイトの攻撃は、少しずつでも怜治の防御を切り崩してい

く。
フェイトのスピードを殺すか、同等のスピードを出さなければ怜治はいずれ負ける。
そう彼女は言いたいのだ。

「やっぱそうか～。　怜治君、バインド苦手って言ってたもんな～。クロノ君はどう思う？　……クロノ君？」

クロノにエイミィの声は届いていないようだった。
2人の戦いに集中してるのだろうと思い、ほっておくことにした。
だがクロノが考えていることは別の事だった。
それは数時間前、フェイトをなのはに合わせる少し前に遡る。

「艦長。　怜治に、あの魔導二輪を正式に使わせるというのは本当ですか？」

クロノはブリッジにいたリンディに問いただした。
リンディは彼を見ずに背中を見せたまま答える。

「えぇ。　本当よ」

クロノの顔が苦々しいそれに変わるのを背中越しに感じた。

「気に入らないかしら？」

「当然です。　あれはロストロギア。　管理局が保管・管理するべき物のはずです」

クロノの言うことは至極もっともだ。　が、もう少し融通が聞いてもいいと思う。

「私たちがロストロギアを管理しているのは、一般人が扱いきれずに次元世界に悪影響を及ぼす可能性があるからよ。　でも彼はそれを使いこなしているわ」

リンディの言うとおり、過去にスタンを使った人間は長くて一週間もたなかった。

だが怜治はそれ以上の期間使っており、加えてあれだけの戦闘をこなしているのだ。

彼にも、そして他の次元世界に何かしらの影響があるとは思えない。

「安全に使える人間がいて、性格にも問題がないのだからいいと思うけれど」

「僕はそうは思いません。　彼は自分のものさしでものの善し悪しを決めている。　そんな人間にロストロギアなど、危険すぎます」

「けど、彼にその気はないし管理局と争うつもりもないそうよ」

「今は、の話でしょう。　将来どうなるかは分からない」

危険かもしれない者は排除。

それは間違っていないかもしれない。　何かが起こってからでは遅いからだ。

が、決してそれが正しいなどとは言えない。　言っていいはずがない。

組織の人間としてではなく、家族を持つ人間としては。

クロノには伝えた方がいいかもしれない。　そう決めてリンディはクロノに顔を向ける。

「クロノ。“特異点”って……知ってるかしら？」

「は？」

いきなり何を？と言いたげな表情だ。

「知ってるかしら？　これは、とても重要なことよ」

「……知りません」

重要なこと――その言葉に表情を変え、少し考えるようにしてから答えた。

「そう……まぁ仕方ないわね。　あれの話が出たのは私が新人の頃だったから」

「それは一体何なのですか？」

「それは……」

一瞬の沈黙。　無機質な機械音だけが耳をつく。

リンディは再び口を開く。

「全てのロストロギアを使いこなす力を持つ者のことよ」

「……え？」

随分と間抜けな声を出してしまった気がした。

ばかな、ありえない、そんな言葉が脳裏を駆け巡るがリンディの真剣な表情がその言葉を口に出すことを阻む。

「本当……なんですか？」

そんな力があるのかということではない。

このタイミングでそんなことを言うということはその力を持っている人間とは……。

「彼は、人の魔力を一週間足らずで奪い尽くす魔導二輪を使いこなしている。　そして一時的とはいえジュエルシードで次元震を抑え、その後彼のリンカーコアへと納められた」

「それについては聞いています。　ですが、それだけで全てのなんて……あの怜治が？」

リンディは静かに頷いた。

「当時は都市伝説みたいなものだったのだけれどね。　ああやって直に見てしまうと、そう思わざるを得ないのよ」

クロノはまだ信じられないと言った顔をしている。

当然だろう。　ロストロギアはたった一つで世界を滅ぼすような代物。

それを使いこなすということは、世界を滅ぼす力を使いこなすということなのだから。

「管理局が現在保管しているロストロギアは百を超えるわ。　分かるわねクロノ。　彼が……怜治君がその１００個全てを扱えたとしたら」

ごくりとクロノの喉が鳴った。

「彼は……管理局にとって最高の味方にも、最凶の敵にもなり得るのよ」

「……くん。　……クロ…くん！　……クロノ君！！」

「うわぁ！？　な、なんだよエイミィ！？」

突然耳元に響いた大声に驚くと、エイミィが呆れ顔でクロノを見つめていた。

「なんだよじゃないよ。　模擬戦に夢中なのかと思ったらなんかボーッとしちゃって……。
そろそろ決着つきそうだよ」

え？とトレーニングルームに目を向けると同時、眩い光と轟音が室内を飲み込んだ。

「なんだ！？」

「ホントに見てなかったの！？　フェイトちゃんの砲撃が怜治君に直撃したんだよ！！」

エイミィの呆れと非難の混じった声が聞こえてきた。

煙が晴れ、室内の様子がはっきりしてきた。

そしてまたクロノは驚愕する。

「なんだ……あの姿は」

怜治が金色の光を――いや雷光を纏っていた。　プレシア戦と同じ光景だ。

（あれが……魔導二輪の力。　そしてそれをつかいこなす……特異点）

「それ……なんですか？」

フェイトが驚いた表情で尋ねる。

自分の攻撃で、傷つくどころか姿が変化したのだから当然だろう。

彼女は息も絶え絶えで、バリアジャケットも所々擦りきれており、戦いの激しさを物語っている。

「まぁなんだ……一言で言うと、他人の魔力を吸収したってとこか？」

『簡単に言うとそうだな』

刹那、怜治の姿が消える。　そしてフェイトの右後方に現れた。

視界ギリギリに怜治を捕え、バルディッシュで防御する。

「今のを防ぐか……」

「ずいぶん、速くなりましたね……」

「まだまだ……これからだよ」

怜治の姿がまた消えた――否、それほどのスピードで移動したのだ。
すぐさまフェイトもブリッツアクションで自分の移動速度を上げる。

「クロノ……見えてるかい？」

ユーノがクロノに尋ねる。

「なんとか、といったところか」

彼の眼にはもはや二色の雷光が激しくぶつかりあっているようにしか見えない。

「形勢逆転……かな？」

「だろうな。　見る限りスピードは互角になった。　こうなるとパワーのある怜治の方が有利になるのは当然だろう」

「まだだよ……」

ユーノとクロノが声の主の方を向く。
アルフがにやりと笑い、鋭い犬歯を覗かせる。

「まだフェイトにはあれがあるよ！」

高速の戦闘の中、フェイトはチャンスを窺っていた。

自分の最大の魔法を放つチャンスを。
幸いなことに怜治の攻撃は今のところ大剣形態での接近戦重視で大ぶりの攻撃が多い。
一瞬の隙を狙えば一気に勝負をつけることができる。
自分の勝利のビジョンを頭に浮かべ、小さく笑う。
笑ってからふと気付く。
戦いの中で笑う時が来るなど思ってもみなかったからだ。

（なんだろうな……この気持ち。　戦うのが、体を動かすのが凄く楽しい！）

今まで自分が戦う理由は母のためだった。
だが今は違う。　純粋にどちらが強いかを決めるために戦っている。
何のプレッシャーのない戦い。　初めての事かもしれない。

何度となく刃をぶつけ合い、ついに怜治が今までより大きいモーションを見せた。

（そこ……だ！）　「バインド！！」

怜治の両手両足に金色の枷がはまる。
急に動きを止められ、慣性の法則で首が外れそうになった。

フェイトは距離を取ると足元に魔法陣を展開。
数多の雷球が周囲に出現する。

『やべぇぞ怜治！！』

「慌てんなよ。　あれを見るのは三度目だ！」

左手に魔力を集中させる。　すると青い電気を纏った光球が出現した。　スタンの魔力変換機構が働いたのだ。

「それは……まさか！！」

「二重雷装……いくぜ！！」

光球を握りつぶす。
すでに金色の体に青い光が加わる。　金と青のコントラストが美しいとも感じさせる。

フェイトは慌てて雷球に指令を下す。

「いきます！！　フォトンランサー・ファランクス！！」

雷球から無数の光弾が連射された。

「遅ぇ！！」

バキン！！と四肢を縛るバインドを力づくで破壊。
壁を蹴るようにしてフェイトへと突進。
二重に電気を纏った体は先ほどよりずっと速度を増していた。

光弾の弾幕を全てかわす怜治を見て、フェイトは全ての雷球を一つに集束。
巨大化した雷球の塊から一本の巨大な雷槍を放つ。

「スタン！！」

『おおよ！！』

大剣となったスタンに纏った電気を集中。
魔力刃が金と青の二色に輝く。
剣を振り上げ、叫ぶ

「雷龍の…爪剣！！」

『Ｌａ　ｕ？ａ　ｄｅｌ　ｄｒａｇ？ｎ　ｑｕｅ　ｌｌｅｖ？　ｅｌ　ｔｒｕｅｎｏ』

ズバン！！と雷槍が真っ二つに割れる。
その勢いのまま一回転。フェイトへと刃を振り下ろす。

「バルディッシュ！！」

『Ｙｅｓ　ｓｉｒ．』

バルディッシュについた鎌がさらに大きく、そして輝く。
彼女のこの場での思いと、全ての魔力を込めた一振り。

「はぁぁあああああ！！！！」

「おらぁぁあああああ！！！！」

ふたつの刃が激突。

本日何度目かの轟音と雷光が訓練室を覆い尽くした。

「はぁ…はぁ…はぁ……」

「はぁ……はぁ……はぁ」

2人は激闘でボロボロになった床にあおむけに倒れ込んでいた。
結果は引き分け。
どちらも魔力と体力を使い果たしたのだ。
だがその表情は疲労や悔しさの色はなく、むしろ清々しいすっきりした表情だ。

怜治はゆっくり立ち上がり、フェイトへ近づき、手を伸ばす。
フェイトは「その手は何？」みたいな表情を浮かべている。
それを察した怜治は

「握手だよ。　思いっきり戦りあった後はこうするもんなんだよ」

「そう……なんですか」

フェイトが怜治の手を握る。　怜治は握られた手を引っ張ってフェイトを立たせる。

「今回は引き分けだけど、今度は負けねぇからなフェイト」

「それはこっちのセリフです……えっと」

しまったといった感じの表情を浮かべるフェイト。
なのはの時もそうだが、どうして自分はこうも人の名前を覚えられないのだろう。
自責の念が脳内を埋め尽くす。

「松田怜治」

「え？」

「俺の名前だよ。　松田怜治。　怜治でいいよ」

「フェイト・テスタロッサです。　……怜治」

握った手を更に強く握りしめる。

「んじゃあスタン。　一旦お別れだな」

『まぁそんな長いことにはなんねぇだろ』

フェイトとの模擬戦が終わり、少し休んでから怜治たちは転送ポートに来ていた。

ここで怜治は地球へ戻り、スタンはフェイト達と一緒に管理局の本局行きだ。

「あ、そうだ。　フェイト」

何？と言いながらフェイトが近づいてきた。

怜治はポケットから薄い黄色の指輪を出す。

それをフェイトに渡す。

「これは？」

「な、な、なななな何やってるんだ君は！！？」

フェイトは首を傾げ、クロノは顔を赤くして叫んだ。
エイミィはなんだか眼をキラキラ輝かせている。

「何勘違いしてんだよ。　それはプレシアのだよ」

「母さんの？」

怜治が頷いた。
時の庭園から脱出する際、落ちていたプレシアの杖を持ってきたのだが、移動中に指輪になったのだ。　おそらくこれが待機状態なのだろう。

「お前の母親の……遺品みたいなもんだろ？　俺が持ってるのもなんだし、渡しとく」

フェイトは指輪を見つめ、やがて怜治に返す。

「わたしは……いいよ。　レイジにあげる」

「……いいのか？」

フェイトは小さく頷く。

「ま、そうならこっちもスタンがいない間のデバイスってことで使わせてもらうよ」

そう言って指輪を再びポケットにしまう怜治。

「んじゃあさよなら……ってのも変だな」

『ん～他はともかく俺はしばらくしたらそっち戻るわけだしな』

少し考えてから、口を開いた。

「またな！　相棒！」

『おう！　相棒！』

転送ポートの光が怜治を包み、やがて怜治の姿が消えていった。

第１３話　名前を呼んで、拳あわせて（後書き）

次ＩＦストーリーあります。

ＩＦストーリー　ありえたかもしれない結末（前書き）

書いてて楽しかったんで次回があるかも？

ＩＦストーリー　ありえたかもしれない結末

海を一望できる丘の上に、ひとつの墓標が建っている。
その前に立つのは一人の少女。
淡い色のワンピースに白いキャペリン（つばの広い帽子）をかぶり、
金色の髪が陽光で輝き、海からの風に揺れている。

「持って来たぞ」

後ろから男の声が響き、少女が振り返る。
男は黒一色で統一された――まるで喪服のような格好だ。
手には花と水の入ったペットボトルを持っている。

「ん、ありがとう」

男から花を受け取り、墓に供える。
膝を折って屈み、目を閉じて合掌。
男もペットボトルを墓に供え、目を閉じて黙とう。
風に揺れる木々の音だけが聞こえる。

目を開け、男は墓標に刻まれた文字に目を通す。　読めなかった。
刻まれた文字は男が住む国の文字ではない――いや、この世界の文字ではなかった。
墓の下に眠る者が住んでいた世界の文字なのだろう。

「ありがとうね」

少女が男に礼を言う。

「気にするなよ。　俺は……救えなかったんだ」

男の悔しそうな言葉を少女は首を振って否定する。

「あなたはわたしを救ってくれたよ。　それこそ命がけで。　あなたがいたから、わたしは今を生きてるし、あの人も……ママも笑って逝けた」

そう。　男は言葉通り命を削って少女を救った。

黒一色だったはずの髪はところどころ白い毛が目立つ。

顔も、実年齢より二回りほど老けて見える。

「お医者さん……なんだって？」

「リンカーコアには異常なし。　魔導師も続けられるし、体にも特に異常はない」

でも――

「テロメア……だっけか？　それが年の割に異常に短くなってるらしい。　孫の顔は見れねぇだろうってさ。　まだ付き合ってる女がいるわけでもねェのにな」

「そっか……」

一瞬暗い顔をする少女。

でもすぐに上を向き、明るい声で言った。

「一か月だったけど、わたし達は幸せだったよ。　ずーっと一緒に

いて、ご飯食べて、思い出話して……ホントに…」

少女の頬を涙が伝う。

「あれ？　はは…おかしいな。　もう十分泣いたのに……泣かないって……決めたのに」

「泣いたっていいだろ。　大切な人が死んで、泣かない方がおかしい」

男が少女の涙をぬぐった。

「ダメだよ。　わたしが泣いてると、ママも泣いちゃうもん。　せっかく笑って逝けたのに……泣いちゃ……ダメだよ」

「優しいな。　お前は」

「ママ譲りかな？　ママね。　わたしが笑うとすっごく嬉しそうに笑ってくれるんだ。それが嬉しくて、わたしはもっと笑って……」

「羨ましいな」

ありがと――と少女が涙を流しながら笑った。

「あ、そうだ」

泣き止んで、そろそろ帰ろうとした時、少女が思い出したように言

った。

「わたし、こっちに残ろうと思うんだ」

男が驚いた顔をした。　てっきり少女は母と暮らした世界へと帰るのだと思っていた。

「そうなのか？」

「こっちにはママのお墓があるし、パパの顔なんて今さら覚えてないしね」

「まぁお前が決めたことなら俺がとやかく言うつもりはねぇけど」

「後ね。　あなたの家に住んでいい？」

ちょっと待てと男が怪訝な表情を浮かべる。

「そういうのはリンディ提督に行った方がいいんじゃねぇか？」

「あっちは妹の事で色々忙しいでしょ？　わたしの方にまで手間かけさせたくないの」

俺には手間かけさせていいのかと思った。

「ん？　妹？　……姉じゃなくて？」

男の言葉に少女は頬を膨らませた。　機嫌を損ねたようだ。

「わたしがお姉ちゃんなの！！　妹ほしかったんだもん！！」

「四つ上の妹か」

少女の顔が更に険しくなる。

「ポッドの中でもすこ～しずつ成長してたもん！！　実際あの子と身長そんなに変わんないでしょ！！」

男は「死んでる時間入れたら俺より一回り以上年上だぞ」と思ったが言わないでおいた。
女性と体重と年齢は禁句だ。

「本気でうちでいいのか？　いっとくけど、とっつきにくいジジイとオイルのにおいが年中セットだ。　クッキーもジュースもろくに出ねぇぞ」

「わたしそこまで我がままじゃないよ」

あっそと言って男が墓に背中を向けて歩き出す。
少女はそれを追おうと歩き出し、一瞬墓に向かって振り返った。

「また来るね。　ママ」

再び歩き出し、男の手に飛びついた。
本当は腕を組みたいのかもしれないが、身長差でそれは叶わない。

「なんだよいきなり」

自分の手の甲に頬を擦り寄せてくる少女を見て怪訝な表情をした。
少女は男を見上げていった。

「わたしね。　妹欲しかったんだ」

「あっそ」

「お兄ちゃんも欲しかったんだ」

「……」

あれ照れてる？照れてねぇよ。照れてるじゃん！うっせぇ違うつってんだろ。

口論しながら歩いてく2人。
そんな2人の背中を墓標が静かに見つめていた。

これは、あったかもしれない魔導騎兵（ライダー）のための結末（エピローグ）
そして、あったかもしれない少女のための始まり（プロローグ）

了。

「わたしわたしわたし！！　誰が何と言おうとも、お姉ちゃんはわ・た・し！！」

『そ、そんな。　だってわたしの方が背だって大きいのに』

「そんなの関係ないよ！　ね、お兄ちゃん？」

「俺に振るな」

『お、お兄ちゃん！？』

「マジに受け取るな」

『え、えっと……じゃあわたしも……お、お兄……』

「暴走してるぞ」

今度こそ了。

ＩＦストーリー　ありえたかもしれない結末（後書き）

この後はオリ編一本挟んでからＡ，ｓ入ります。

でもテスト近いんで遅くなるかもしれません。

学生はつらいよ…（このご時勢社会人の方が大変かもだけど）

第１４話　剣士と預言　【前編】（前書き）

予定より長くなってしまったんで、前後編に分けます。

第１４話　剣士と預言　【前編】

六月、徐々に蒸し暑い日本特有の暑さが迫ってくる頃。
海鳴市、中丘町。　その街の一角に民家がある。
その家の中に、明かりをつけず、車いすに乗った少女がいた。
キコキコと車いすの車輪がまわる音だけがむなしく響く。
少女は自分の乗る車いすを動かし、リビングに備え付けられた電話機を覗く。　留守電メッセージがあることを知らせるランプが静かについていた。
少女はランプのついたボタンを押した。
『留守電メッセージ、１件です』と感情の無い声が流れた。
ピーッと高い音とともに、今度は感情のこもった女性の声が少女の耳に届く。
メッセージを入れた人物は、彼女が足の治療のために通院している大学病院の担当医だった。
明日の検査の後に食事をしないかという内容だった。
少女はふと電子時計に表示された日付を見た。　６／３と表示されていた。
明日――つまりは６月４日は少女の誕生日だ。
親を早く亡くし、幼くして一人暮らしをしている彼女に気を使ってのお誘いだろう。
自分の事を気遣ってくれる担当医への感謝の念と、どうしようもない寂しさがこみ上げてくる。
自室へ行き、ベッドに入る。　近くにあった本を手に取り読み始める。
パラパラとページをめくる音と、時計が秒針を刻む音だけが響く。
気付くと、もう日付が変わるころだった。　ベッドに入ったのが１０時前だったから、少なくとも２時間近く読みふけっていたことに

なる。

いい加減寝ようか、いやこの一冊だけでも読み終えてしまおうかと葛藤する。

そんなことをしているうちに、時計の針は１２時を指した。

そして、怪しげな光が部屋を包んだ。

何事かと思い、光源があると思われる本棚に目をやると、一冊の本が目に入った。

辞典のように分厚く、中央に金色の剣十字のついた分厚いカバーに鎖で十字に縛られている。

よく見ると、本が心臓のように鼓動しているのが分かった。自らを縛る鎖を引きちぎるかのように、生命を感じさせるかのように。

やがて、鎖は千切れ、本が勢いよく開いた。

何も書かれてない白紙のページが永遠に続く。

『Ｉｃｈ ｅｎｔｆｅｒｎｅ ｅｉｎｅ Ｖｅｒｓｉｅｇｅｌｕｎｇ.（封印を解除します）』

突然声が響いた。その声は本から出たものだった。

『Ａｎｆａｎｇ.（起動）』

再び声が響き、眩い光が部屋を覆い尽くした。

八月は夏休み真っ盛り――夏はこの日本という島国において、一年で最も暑く、最も昼が長い季節である。

もっとも　暑さの原因はジメジメとした湿気にもあるのかもしれないが。

「あ～暑い。　やっぱガレージにもクーラーいるだろ絶対」

若者らしいことをつぶやきながら、松田怜治はバイク整備に汗を流す。

このバイクは彼のものではない。　彼の家は機械製品の修理屋だ。

バイクなども例外ではない。

彼に本格的な修理はまだ無理だが、簡単な整備ならすることができる。

「ったく、オーバーホールくらい自分でしろよな」

暑さでイライラしているのだろうか、悪態が絶えない。

ジリジリとした熱気が体をなめる。

体温を調節するために出た汗が額から垂れてくる。

首にかけたタオルで汗を拭う。

なにしろ、今彼が来ている服は整備のための作業着で、長袖長ズボンに軍手までしている。

クーラーのような冷房器具の無いガレージにいることに加え、外からの熱気によって彼はまさにサウナ状態だ。　これではいずれ熱中症で倒れてしまう。

一旦休憩でも入れようかと思った時――

ピーンポーン

自宅のチャイムが鳴った。

客ならガレージの方に直接来るはずだから違う。　となると、自分の悪友たちか、最悪セールスだろうと予想する。

そんなことを考えているとまたチャイムが鳴った。
これで悪友の線は消えた。　彼らなら二度も鳴らさず、大声で自分の名前を呼ぶはずだ。
面倒くさいなと思いつつ、玄関を開ける。

「はいはい何の……何しに来た？」

一瞬で怜治の顔が怪訝なそれに変わった。

「嫌だなー怜治君！　そんな嫌な顔しないでよー！　もしかして名前忘れちゃった？」

怜治の耳に聞こえてきたのは元気で陽気な若い――自分と同世代の女性の声。
怜治の目に映ったのはピョコンとはねた髪と、髪と同じ色をした茶色い瞳。
彼はこの女性を知っている。　1，2か月ほど前に知り合った人物だ。

「なんでお前が地球（こっち）にいるんだエイミィ？」

「覚えててくれたんだね！　やっほーっ！　お久しぶり、怜治君！」

かなり高めのテンションで、私服姿のエイミィ・リミエッタ通信主任が笑いかけてきた。

ギラギラとした熱気を吐き続ける太陽の下、商店街にある喫茶店『翠屋』の扉が開いた。
カランカランと鐘が鳴り、店内の冷えた空気が外へ逃げていく。
逆に外から入って来た者には頬をなでる冷気が心地良い。

「いらっしゃいませー！　あ、怜治さん。　それに……エイミィさん！」

「やっほーなのはちゃん！　おっ久しぶり！！」

店名と同じ刺繍の入った黒いエプロンを着た少女、高町なのはの驚いた声が店内に響いた。
エイミィはなのはに近寄り、イエーイとハイタッチ（身長差からなのはがかなり無理をした格好だが）を決める。

「んで？　一体どうしてお前こっちいるんだよ？」

客席に通され、腰を下ろすと同時に怜治がエイミィに問いかけた。
注文したコーヒーを運んできたなのはも、うんうんと首を上下に揺らす。
エイミィは今、次元航行艦アースラで彼らの友人と相棒と一緒に管理局本局へ向かったはずだ。　本局というところがここからどれほど離れているのか知らないが、二か月足らずで往復できるものなのだろうか。

「いやー。　実は本局へ行く途中で私だけまたこっちに戻って来たんだよねー」

「なんだ……解雇（クビ）か」

かわいそうに。

「えぇ!?　そうなんですか!?」

「ちっがーーう!!」

バン!!とテーブルを叩いた音と、エイミィの叫び声が響いた。

「私は仕事できたの!!　し・ご・と!!」

バンバンとテーブルを連打するエイミィ。

「仕事？　なんだよ、次元震の影響の後始末か？」

「ううん。　それとはまた別件なんだけど……」

「別件？」

怜治が聞き返すと、エイミィがバツが悪そうな顔をした。

「もしかして……またこの町で事件なんですか？」

なのはが食い気味に聞いてきた。

可愛らしい少女だが、彼女はこれでも凄腕の魔導師なのだ。

「いや、まだ事件が起こったんじゃなくて、起こるだけかもってだけでね……」

「歯切れが悪いな……はっきり言っちまえよ」

怜治に促され、エイミィが重たい口を開く。

「実はね。　先日この世界に誰かが他の世界から転移してきたみたいなの」

「それで？」

「その転移が管理局の許可を取ってなかったみたいでさ……その人探して、何か犯罪行為をするようなら逮捕せよってアースラに通知が来てさぁ……」

「それでなんでお前が来るんだよ？　事件性があるならクロノが来るもんじゃねぇのか？」

だよねぇ～～とエイミィが重い溜息を吐いた。

「本当はさぁ。　クロノ君も来るはずだったんだよ。　でもフェイトちゃんの裁判が忙しくって、そしたら艦長が「怜治君に手伝ってもらいましょう」って」

「ちょっと待て、どうしてそこで俺を直に指名してくる！？」

「艦長と約束したんでしょ？　管理局に入るって」

エイミィの言葉になのはが驚いた顔をする。
怜治は目を細めて答える。

「約束はしたが、まだ入った覚えはないんだが？」

「ざ～んねん。　もう候補生ってことで処理済みだよ。　ようこそ管理局へ、労働基準法ギリギリの激務の巣窟へ」

「なんだそれ」

「新入り歓迎の言葉。　今はあんまり使わないけど、古株の人とか結構使うかな……私も配属初日に言われて、すぐ意味を理解したね」

淡々と答えるエイミィ。　心なしか、目が遠いところを見ている。
どうやら質の悪い冗談というわけではないようだ。

「はぁ。　……んで？　俺にその転移してきた人間を探すのを手伝えだっけ？　手掛かりとかあんのか？」

「あるよ。　ただ、私はこの町の地理に詳しくないからさ、その案内が欲しいってわけ」

なるほど――単純に戦闘要員ではなく、現地に詳しい人物として自分が指名されたのだと怜治は納得した。

「あの……それでしたらわたしも手伝いましょうか？」

なのはが聞いてきた。
言い方は控えめだが、やる気がうかがえる。
自分が魔法事件に関わったからか、何もせずにはいられないのだろ

う。
積極的に事件に関わろうとする彼女にエイミィは苦笑する。
「いいよ別に。　今回は戦闘になるって決まってるわけじゃないから大丈夫！　こっちじゃ今夏休みなんでしょ？　私たちの事は気にせず、友達と遊びに行ったりしなよ」
「俺も一応夏休みなんだが……」
「ご愁傷様です」
目を閉じ、合掌するエイミィ。　が、よく見ると口元が歪んでいる。
――笑ってやがる。
「でも……」
「まぁ助けが要りそうなら呼ぶから、そん時は頼りにするよ」
「はい！」
元気な声で返事をしたなのは。　明るい笑顔がまぶしい。
「んじゃ、私たちはそろそろ出発しますか！」
「はいよ」
残ったコーヒーを流し込み、エイミィとともに店を出る。
すると

「ぜぇぇぇえええええええろぉぉぉおおおおおお！？！？！？」

「てい」

絶叫しながら突進してくる物体Ｘ（人型）に驚き、つい拳を突き出す。

「ごふぅっ」

物体Ｘは腹を押さえてその場に膝まずいた。

「……なんだ鉄平か。　なに下向いてんだ？」

「てめぇが殴ったからだろうが！！」

物体Ｘ改め、怜治の悪友その一こと窪田鉄平が咆えた。
ワックスで固めた赤い髪が印象的だ。

「いや、今のは鉄平も悪いと思うよ」

メガネをかけた茶髪の男――悪友その二こと本田正義が言った。

「どうしんだよお前ら、こんなところで何してんだ？」

「何を？　何をしてるかだと！？」

怜治の疑問に対し、ギラついた目で鉄平が睨みつけてきた。
そして肩を握りつぶさんばかりに掴む。

「おれはな……今日こそお前らにおれが見つけたこの店の美人店員

を紹介しようと思ってだな……」

顔をうつむかせ、震える声を出す鉄平。

そして

「何にてめぇはなに女と喫茶店デートしとんじゃワレェェェエエエエ！！！！！！！」

咆えた。　同時にがくがくと怜治を揺さぶる。

壊れた人形のように怜治の首が前後運動する。

その様子にエイミィは目を点にして固まり、正義はやれやれといった風に首を振る。

「おい鉄平落ち着け」

「おれは落ちついてる！！　誰だこのカワイイ子は！？　まさかてめぇ春先で急に付き合い悪くなったのはこの子口説いてたからか！！　お前は男の友情より女とのくんずほぐれつ優先すんのかおいいいいい！！！！！」

「真昼間からくんずほぐれつとか言うなアホ。　あとこいつは春先で知り合ったのは確かだがそんな関係じゃない」

「ホントか！！？」

血走った目で叫ぶ鉄平。

怜治はもはや呆れるしかなかった。

そこへ正義が口を挟む。

「それじゃあ紹介してよ。　ぜろの友達なら、僕らの友達ともいえ

るし」

ね？とエイミィにウインクしてくる正義。
エイミィも気を取り直して自己紹介する。

「えっと……エイミィ・リミエッタでーす。　怜治君とはただの友達で、その……それ以上の関係じゃないよ？」

笑顔で敬礼のポーズをするエイミィ。
彼女の雰囲気にあてられてか、鉄平もやっと落ち着きを取り戻す。

「ホントか……ぜろ？」

「ホントだホント。　だから顔を近づけるな、暑苦しい」

真夏の日差しがきつい昼に男同士が接近したら、暑くてたまらない。

「そうかそうかそうだよな～。　ぜろが女に興味持つわけねぇもんな～」

「ちょっと待て、そのセリフはいらん誤解を招くから訂正しろ！」

怜治の抗議に対し、鉄平はどこ吹く風だ。

「んじゃあぜろ。　これから一緒に遊ばね？　あ、当然エイミィちゃんも一緒に」

「ごめんね～。　私たちこれから行くとこあるから……ね？」

「ちっくしょおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！

！！！！！！！」

再び鉄平の魂の叫びが轟く。　翠屋にとっては営業妨害ではないか？
熱されたアスファルトに両手をついて絶望している鉄平をよそに、
怜治とエイミィは歩き出す。

「悪いな」

「いいよ別に……そう言えばぜろ」

ん？と正義の言葉に怜治が歩みを止める。

「修理に出したバイク、まだ戻ってきてないの？」

「ん……ああ、派手にやっちまったからな。　もうちょいかかるらしい」

「ふ～ん。　早く戻ってくるといいね」

「ああ、そうしたらまたツーリングするとするか」

正義が頷く。　怜治はそれを見てまた歩き出す。
少し先にいたエイミィが駆け寄ってくる。

「なんかゴメンね？」

「謝るならさっさと相棒返してくれ。　ってかデバイス無しで任務に出すつもりかよ？」

「それなら大丈夫」

エイミィは肩にかけたカバンからひとつの青い宝石を取りだす。
一瞬なにかと思ったが、すぐにそれがデバイスの待機状態だと気付く。

「これ、武装局員用の簡易デバイス。　ＡＩ入ってないけど一応最新型。　渡しとくね」

予備もあるからねーといい、ポンっと怜治に握らせる。

「あ、そういえばやっぱそれってまだ反応なし？」

「ああ、これね。　残念ながら……な」

エイミィが指すそれとは怜治の小指にある指輪だ。　大した装飾もない簡素なものだったがどこか神秘的なものを感じる。
この指輪は春先に出会い、今はもういない魔女の置き土産だ。
怜治がもらったのだが、この二ヶ月間うんともすんとも言わない。
どうやらまだ新しいマスターとは認めてくれないようだ。

「まぁ当然か。　本人から直接渡されたわけでもないしね」

「でもいい加減認めてもいいと思うけどな。　もとの持ち主同様、頑固なやつだ」

「なんか怪しいね。　あの2人」

歩いていく2人の背中を見つめて、正義が言った。

「怪しいって何が？」

「2人そろってなんか隠し事してる感じがした」

「行き先言わなかったからか？　それぐらい隠し事に入んねぇだろ」

正義は首を横に振る。

「それ以外に……だよ。　何かそう、とても大切なことを……」

怜治とエイミィは神社へと続く石の階段を上っていた。

周囲は森に囲まれており、風が吹くたび木の枝についた葉っぱが揺れる。

エイミィは何か端末を操作している。　おそらく転移者の反応を辿っているのだろう。
それにしても

「あっついなぁ～」

本日何度目かになる怜治のぼやきが零れる。
森の中で日射が多少抑えられるにしても、この季節特有の熱気はそう簡単には消えない。
暑さを感じているのはエイミィも同様らしく、襟元をパタパタと扇いでいる。

「ホントだね～。　ミッドにも夏はあるけど、こっちの暑さはまた別だね」

「梅雨で湿気が多くなるからな。　雨の後なんてちょっとしたサウナ状態だ」

途中で買ったお茶のペットボトルを開けて口につける。
少し温(ぬる)くなっていた。

「なぁ、本当にこっちであってんのか？」

エイミィに尋ねる。　先程から３０分ほど歩いているが、一向に人気を感じない。

「あってるよ～……多分」

「曖昧だなおい」

「だって私は魔力ないからなにも感じないから、この探査装置（サーチャー）の反応を頼るしかないんだよ。　そっちこそ魔導師なんだからなんか感じない？」

「全然だな。　魔力の反応って自力で抑えられるんだろ？　それだったら……」

ふいに怜治の言葉が途切れた。　何事かと思ったが、すぐにエイミィも気付いた。

会話をしている間に石段を全て登り切っていた。　目の前には赤い鳥居に木造の社がある。

そして鳥居の下に人がいた。

フード付きの黒いローブで全身を包んでいるため、性別は分からない。

背丈はエイミィより少し低い。　だが彼女の弟分の執務官のような例もあるため、それだけで年齢は判断できない。

どちらにしろ、黒ローブは静かにこちらを見つめていた。　まるでここに自分たちが来ることを知っていたかのように。

「私たちは、管理局のものです。　あなたは……この世界の住人ではありませんね？」

エイミィが一歩前に出て端末から自分の身分証の映ったウィンドウを出す。

彼女の問いに、黒ローブは答えない。

それをエイミィは肯定と受け取った。

「あなたには無許可での次元転移の疑いがあります。　御同行を願えますか？」

エイミィはさらに続けようとした。　が、それより速く黒ローブがこちらに向かって駆けだしてきた。
袖から一本の剣が出てきた。
柄に取ってが付いており、切っ先が水平になっている。　刃もあるようには見えない。
突きを捨て、斬るのではなく、殴打に重点を置いた剣。
それがエイミィの首にめがけて振るわれる。

ガキン！！と金属同士がぶつかり合う音が響いた。

「ったく！　いきなりだなおい！」

怜治が一本の魔法杖で防いだのだ。　先ほどエイミィから受け取った簡易デバイスだ。

「暑苦しいかっこしやがって！！　こっちまで暑くなってくるんだよ！！」

怜治は前方に蹴りを繰り出す。　だが、黒ローブは後方へ飛んでかわす。
怜治は魔法杖の先を黒ローブに向け、魔力弾を撃とうとする。
が、魔法杖からは何も発射されない。　沈黙を守り続けている。

「ちょ……何やってんの怜治君！！」

怜治がギギギッとエイミィの方へ顔を向ける。　なぜか額には暑さからとは違う、冷や汗が浮かんでいる。

「この杖って……どう撃つんだ？」

時が止まった気がした。

「な、何それ!!?　射撃魔法って基礎中の基礎だよ!!!　クロノ君にも勝った人がなんでそれすらできないの!?」

「スタンの射撃は武器が銃型だったし、魔力込めて引き金引きゃ撃てたんだよ!!」

「あれから二カ月あったんだよ!!　なんで練習してないの!?」

「練習のためのデバイス持ってったのはどこのどいつだコラァ!!!!」

2人の怒号が飛び交う。

エイミィとしては魔導師として多少自主練習しているだろうという予想の上でデバイスを渡した。　だが怜治は相棒が戻ってくる前にこんな仕事を押し付けられるとは思ってなかったし、スタンを使っていた時と同じように撃てるものだと思っていた。

もともと、魔法というのは考えなしに撃てるものではない。

魔法を発動するためのプログラムが存在し、構築式がある。

魔導師はそれを組み、魔力を込め、必要なら詠唱を行って魔法を発動する。

ゆえに、魔導師は戦闘中もプログラムを組めるようマルチタスクが必須なのだ。

デバイスはそれを登録し、魔法発動を高速化するためのものである。

だが怜治はそのプログラム自体を知らない。

彼が使っていたスタンが特殊すぎたのだ。　射撃などは、怜治の魔力を弾丸の形に固めただけものだし、強力な魔法もスタンが怜治の魔力を使って自分で構築、制御していたのだ。

つまり、怜治は魔力をひたすらスタンに送り、動き回っていただけで魔法の発動、制御はほとんどスタン任せだったのだ。
魔法の基礎知識も知らない怜治は今、ただ魔力が大きいだけの普通の高校生だ。
もっている魔法杖も、ただの金属製の棒でしかない。
魔法が使えないと分かり、再び黒ローブが突撃してくる。

とっさに怜治は魔力を魔法杖に集中。
魔法発動ではない。　魔法杖自体に魔力をまとわせ、強度を上げたのだ。

「くそったれがァア！！」

大量の魔力をまとった魔法杖が黒ローブの剣とぶつかり、激しい火花が踊る。

「だらあぁぁァァ！！」

「！」

黒ローブに驚きの表情が見えた気がした。
怜治が振った魔法杖が、黒ローブを吹っ飛ばしたからだ。
弧を描いて宙を舞う黒ローブ。　だが、空中で姿勢を整え、猫のように着地する。
怜治は脚に魔力を集中。　脚力を強化し、黒ローブへ追撃をかける。
　石畳が衝撃で砕けて粉塵が巻き上がる。
黒ローブも再度突撃。　もう一方の袖から二本目の剣が現れた。
怜治は魔法杖を槍のように振り回し応戦。　ガキンガキンと金属がぶつかり合う音が絶え間なく響く。

怜治に武術の心得などない。　ただ本能や勘に従って振りまわしているだけだ。
だが魔力によって得た破壊力がそれを補う。
やがて黒ローブが押され始める。　怜治の馬鹿力を受け続け、腕が痺れてきたのだろう。
後方に跳ぶ黒ローブを魔法杖の先を突き出して追撃。
瞬間、黒ローブの姿が消えた。　否、消えたように見える速度で移動した。

「怜治君、後ろォ！！」

「うおっ！！」

エイミィの声のおかげで間一髪でかわす。　頬のすぐそばを刃のない剣が通っていった。
総毛が逆立つのを感じた。
黒ローブは再び高速で移動。
だが

「おんなじ手が通用するかよ！！」

魔法杖を思いっきり石畳に叩きつけた。　魔力によって強化されたヘッド部分が破砕球のように石畳を砕く。　衝撃波が走り、瞬時に小さなクレーターが形成。　同時に粉塵、石片がまき散らされる。

「ぐあっ！！」

呻き声が聞こえた。　移動中の黒ローブが大きめの石片にぶつかったようだ。
高速移動ゆえに、急ブレーキは効かないのだ。

すぐさま、怜治はできるかぎりの魔力を魔法杖に集中。
槍投げの要領で思いっきり投げつけた。
空気を切り裂き、魔法杖が黒ローブの体に突き刺さった。
余った勢いに押され、黒ローブは空を飛び、大きな弧を描いて森の中へと消えていった。

「エイミィ、予備！」

「あっ、はい！」

エイミィがカバンから予備の簡易デバイスを出し、怜治に投げ渡す。
受けとった怜治はそれをすぐに起動。　先ほど投げた物と同じ魔法杖が現れる。

「よし、追うぞ！！」

「え、ちょ、待ってよー！　待ってってばーー！！」

森の中へと飛び込んだ怜治。　エイミィはそれを駆け足で追っていった。

「なかなか、手ごわい御仁でしたね」

森の中で黒ローブが独り呟いた。　女の声だった。

改めて自分の体を見る。　骨は折れていないが、落下の際にところどころケガをした。
ローブはところどころ破れ、肌には擦り傷や切り傷が見えた。
黒ローブは医療キットを出し、簡単な治療を始める。
動けなくなるほどのケガではないが、放っておいて細菌が入ったりしたら大変だ。
彼女が住む世界はこの地球ではないため、風土病にかかる危険性も０ではない。
この世界の戸籍がないため、医療機関にかかることはできないのだ。
なにより、彼女の任務はできるだけ人に見られるわけにはいかない。

「しかし、魔法文化がないはずなのになぜあんた大きな魔力を持った人がいるのでしょう」

この町に来て感じた魔力は今のところ４つ。
うち２つはかなり大きい。
そのうちのひとつが今さっき戦った人のものだと分かった。
もうひとつの大きな魔力を持つ方もあのような人物なのだろうか。

「それは、勘弁していただきたいですね。　まだ、あれの発見も、任務も住んでいないというのに……」

これでは任務の前に自分の体が壊れてしまう。
しかし、自分の任務は戦闘は避けされるものではないだろう。

「全くもって面倒を押し付けられたものですね。　……この世界から魔力を持った人間を消すなんて……」

黒ローブが続けようとした言葉が途切れた。
近くに魔力を感じたからだ。　先程戦った男のものではない。　数

もふたつだ。
医療キットをしまい、愛剣を持って歩き出す。
魔力を感じた方へ向けて。

「ったく、相変わらず長ぇ石段だなオイ」

額から汗を垂らしながら鉄平が言った。
彼のテンションを表すかのように赤い髪も力なく垂れている。

「あのさ……」

「ん？」

「こっそりついてくる必要あるの？」

後ろにいる正義の問いに、鉄平は振り向いた。

「何言ってんだ。　おまえがぜろはなんか隠しごとしてるっつーからこっそりついて来てんだろうが」

「ぼくはそういう意味で言ったんじゃないんだけど」

自分の言った事に後悔するように言う正義。

「だいたいさ、ぜろが秘密にしてるってことは別に深刻なものじゃないと思うけど？

「あいつは人を頼るということを滅多にしないやつだ。　いや、それ以前に他人不信なところあるしな……」

「助けが必要な時に言うって言ってたよ？」

「あいつとおれ達とじゃ、助けが必要の度合いが違うかもしれねぇじゃん。　それに……」

「それに？」

「どこでエイミィちゃんと知り合ったとか知りたくね？」

「……それが本音だね」

呆れた声を出す正義。
だが、鉄平は気にしない。

「でもなんでぜろのやつ神社なんかに来たんだ？」

「エイミィちゃんの趣味じゃない？　実は歴女とかさ……」

「神社にきてやることといえば……はっ！！　まさか！！」

「絶対に君が考えてることじゃないと思うよ」

鉄平が何か言う前に正義が遮った。

こういう時鉄平がいうことは十中八九、下品な想像だ。

「大体君はさ……」

正義の言葉は続かなかった。

2人の間に誰かが割り込んできたからだ。

今の季節に合わない黒いローブで全身を覆い、両手に持つのは刃のない双剣。

「申し訳ありませんが……」

黒ローブが口を開いた。　女性の声だった。

「少しの間、眠ってもらいます」

双剣が振るわれた。

「うわっ！！」

とっさにかわす。　が、体勢を崩し正義は階段から転げ落ちそうになる。

なんとか落ちずに済んだのは日頃の剣術修行のおかげか。

正義は数年ぶりに親に感謝した。

鉄平の方に目を向けると、彼も尻もちをついているがけがをした様子はなかった。

続いて突然斬りかかって来た黒フードを見る。

表情は見えないが、全身から立ち上る殺気じみたものを感じる。

――こいつはやばい。

恐怖心が体を染めていった。　逃げたいのに体が動かない。　鉄平も同様のようだ

黒フードは双剣を振り上げる。　どうやらひとりずつやることに決めたようだ。

恐怖で目を閉じる。
ヒュッと風を切る音が聞こえた。
だが、体を打つ衝撃はなかった。
かわりにガキンと金属同士がぶつかりあう音が聞こえてきた。
ゆっくりと目を開ける。
そこにはひとりの杖を持った男が黒フードの剣を受け止めていた。
男は正義が知っている男だった。
彼はその男の名を呼ぶ。

「……ぜろ」

「ようマサ、こんなとこで……奇遇だな！！」

魔法杖で剣を押し返しそのまま黒フードを殴りつける。
だが、黒フードは跳躍してかわし、再び森の中へ入っていった。

「くそっ、逃げすかよ！」

「待ってぜろ！！」

黒フードを追おうとした怜治を思わず呼び止める正義。

「あれは一体何？　なんで怜治が戦ってんのさ？　一体、何に巻き込まれてんだよ！？」

立て続けに質問する正義。　鉄平も頷いて同意を示す。
怜治は複雑そうな顔をした。　話すべきか、話さないべきか迷って

いるようだ。
やがて怜治は口を開いた。

「……悪い」

掠れるような声でただ一言だけ言った。

「それは、後ろめたいことがあるから？　それとも、僕らを巻き込みたくないから？」

怜治の返事を非難しない。
そういう返事をするということは、そう答えるしかない理由があるからだ。

「……後者だ。　いや、それも自分勝手かもな」

「それでもいいよ」

正義は立ち上がって言った。
手についた砂利を払う。　掌を見ると、擦れて血が出ていた。

「ぜろがそう思ってるんなら、実際そうなんだろうね」

自分たちのために秘密にしているというならそれ以上聞くことはできない。
だが

「いつかは話してよね。　ぼくら、親友だろ？」

「ああ、分かった」

石段を蹴って、怜治は森の中へ跳び込んでいった。

「あいつ、中々ハードなもんに首突っ込んでんのな」

「大丈夫じゃない？　ぼくらを助ける余裕ぐらいはあるんだし」

「そりゃーな。でも……」

「分かるよ。　ぜろはぼくらに助けを求めないかもしれない。　だからぼくらは……」

パンッと拳を合わせる。

「勝手に首を突っ込むとしよう。　今は無理だけど、いつかね……」

「そうだな……」

鉄平は空を見た。

青い空に、途切れ途切れ雲が泳いでおり、太陽の光がギラギラと降り注いでいる。

「取りあえず……帰るか」

「おらぁっ！！」

怜治は魔力で強化した脚で力任せに地面を蹴り飛ばす。
地面がめくれ上がり、土砂が黒ローブに襲いかかる。
回避行動をとる黒ローブに向かって怜治は跳躍。　一気に距離を詰める。
そして魔法杖を振り下ろす。
黒ローブは剣で防御。　だが威力を殺しきれず、ズザザッと地面を滑る。

「てめぇ、さっきはよくも人のダチに手出してくれたなおい！」

魔法杖の先を黒ローブへ向ける。　黒ローブは静かに双剣を構えた。
そして、黒ローブの姿がブレる。　高速移動をしたのだ。

「それはもう……」

効かねぇ！！と言おうとしたが、続かなかった。
怜治が地面を割るより速く、黒ローブが怜治の背後を取ったからだ。
双剣が振るわれる。
背中を強打され、怜治の体が吹っ飛ぶ。
回転を利用した二連撃だった。

（さっきよりもずっと速ェ！！　くそったれ！　あれが最高速度じゃなかってのか！！）

怜治が思考している間に黒ローブは追撃。
ただ真っすぐ突っ込むものではない。　周囲の木を利用し、ピンボールのように跳ねながらの攻撃。
前後左右上。　まさに全方向からの剣撃が怜治の体を打ち続ける。
怜治の視界が少しずつ赤く染まっていく。　どうやら頭部から出血したようだ。

棒立ちを続けるわけにもいかず、がむしゃらに走りだす怜治。
だが、黒ローブはあっという間に回り込み、剣で怜治の顎を打ち上げる。
脳が揺らされ、膝が曲がり倒れそうになる。
黒ローブは怜治の腹部へ回し蹴りを叩きこむ。
怜治は斜面を転げ落ち、立っていた一本の木に後頭部をぶつける。

「ガハッ！！」

苦痛の声とともに肺からの空気と混じって血を吐き出す。
打った後頭部に手をまわすとヌチャッとした感触を感じた。　どうやら後頭部からも出血しているようだ。
もし鏡を見れば、頭部が血だるまになった自分が映ることだろう。

（くそっ、どうする？　スタンがいねぇんじゃあのスピードには追いつけねェ）

自分の小指にはまった指輪を見る。
どうやらピンチとなった自分を助けるつもりはないらしい。
魔法杖も打たれている間に落としてしまった。
魔力はまだ余裕があるが、体力はそろそろ限界だった。　血を出しすぎたのだ。

「はは……ケンカでもこんなに血流したことなんてねェな」

力ない笑みをこぼす。　視線を落とすと滅多打ちにされた四肢が目に入る。
特に考えもなく動かしてみると問題なく動いた。　どうやら骨は折れていないらしい。
そういえば、黒ローブは一向に追撃してこないことに気付いた。

視線を上げると、黒ローブは自分の１０mほど上に立っていた。
双剣の構えは崩していない。

（なめられてるのか……）

心の中で舌打ちをする。　苛立ちがたちのぼる。
黒ローブに対してではない。　自分の弱さにだ。

（確か、フェイトと初めてやった時もこんな感じだったような……）

二か月ほど前の戦いを思い出した。　あの戦いで、自分の戦い方は無茶苦茶だとよくいわれたなと苦笑混じりに思い出す。
そして、ひとつの作戦――いや、さらにひとつの事を思い出した。
それは自分の戦い方。　魔力で馬鹿力を出すことのできる自分ぐらいしかできない戦い方。

「はは……ははは！　そうだよな……なに色々余計なこと考えてんだ」

怜治は立ち上がる。　片手を前に、手の平を上にして指を2，3回曲げる。

――かかってこいよ。　俺はまだピンピンしてるぜ？

強がり丸見えの挑発。　事実、彼の体は後ろの木にもたれかかったままだ。
だが、黒ローブは軸足に力を入れる。　いつでも高速移動に入れる体勢を整える。
あえて挑発に乗ったのか、それとのひと思いにという強者の気遣いか。

黒ローブの姿がブレた。　同時に頭部に衝撃が走った。

（ヤロウッ……さらに速く……！）

意識を必死に繋ぎとめ、拳を黒ローブに突き出す。　だが、当たらない。

黒ローブは再び木を利用し、ヒットアンドアウェイを繰り返す。

腹に拳が突き刺さる。

怜治は倒れない。

頭部に剣が振り下ろされる。

怜治は倒れない。

回転を利用した蹴りが腰をえぐる。

怜治は倒れない。

血が幾度となく舞う。

怜治は飛びそうになる意識を決して離さず、そして黒ローブからも一度も目を離さなかった。

そして、何度目かの剣撃。　左側頭部めがけて剣が一閃。

ぐしゃりと嫌な音が響いた。

「！」

黒ローブの表情が驚きに変わる。

振った剣は、怜治の左腕によって止められたからだ。

ただ止めたのではない。　めいいっぱい伸ばされた腕は、黒ローブのもう片方の手首を掴んでいた。

信じられないほどの力で掴まれ、剣が振れない。

「やっと……やっと捕まえたぜ」

絞り出すような声が響いた。
黒ローブは怜治の目を見る。
その眼には、執念の炎が激しく燃え上がっていた。
彼は、腕一本を犠牲にして黒ローブの動きを止めたのだ。

「いくぜ……」

残った右手が紺色に輝く。　大量の魔力がそこに集中しているのだ。
そして
ＡＡＡ＋クラスの魔力をまとった拳が黒ローブの腹に突き刺さった。

「ぐはっ！！」

黒ローブから苦痛の声が漏れる。
斜面を滑りあがりながら、土煙を激しく巻き起こす。

「今のは、マサの分だ……」

黒ローブは無言で立ち上がる。
痛そうに腹を押さえている。　骨が折れたのだろう。
だが、双剣は下ろさない。

「まだやるか……上等！」

怜治も構えるが問題があった。
黒ローブを捕まえるのに左腕を犠牲にした。　派手に骨が折れたらしく、腕が上がらない。
これでは同じことはできない。　右腕で防御すれば殴ることができない。

――さて、どうするか……

そう考えていると、右眼の端でチカッと光るものをとらえた。
見ると、右手の小指にはまった指輪が輝いていた。

「これは……」

怜治は言葉を切った。　黒ローブが突っ込んできたからだ。
指輪の輝きを怜治の次の手だと考えたのだろう。
骨が折れているはずなのに、その速度が落ちる様子は見られない。
とっさに怜治は右手を前に突き出した。
双剣が振り下ろされる。

骨が砕けた音は鳴らなかった。

だが

ガキン！！と甲高い音が響いた。

怜治は右手に重みを感じた。
右手には、一本の杖があった。
静かに横に一閃。　黒ローブが吹っ飛んだ。

簡易デバイスではない。　薄い黄色を基調とした杖。　先端は扇のような形をしており、紫色の宝玉。　柄には蝙蝠の翼のようなものがついている。
怜治はこれが何なのか知っている。　二か月前に戦った黒衣の魔女の遺品。
彼女が使っていた魔法杖。　二か月近く沈黙していたそれが、この

土壇場で目覚めたのだ。
怜治を新たなマスターと認めたのだ。

『Ａｒｅ ｙｏｕ ｓａｆｅ？ Ｍｙ Ｍａｓｔｅｒ．（ご無事ですか？ マスター）』

無機質な声が聞こえてきた。
同時にバリアジャケットが怜治を包む。白を基調とし、金色のラインが入っている。
まるで修道服のようだ。
着たことのないタイプの服のため、どこか違和感を感じる。

『Ｄｏ ｎｏｔ ｙｏｕ ｌｉｋｅ ｔｈｅｓｅ ｃｌｏｔｈｅｓ？（お気に召しませんか？）』

その様子を見て、魔法杖が聞いてきた。

「いや、そういうわけじゃねぇけど……そういやお前の名前ってなんだ？」

『Ｉ ｄｏ ｎｏｔ ｈａｖｅ ｔｈｅ ｎａｍｅ． Ａ ｆｏｒｍｅｒ ｍａｓｔｅｒ ｗａｓ ｎｏｔ ａｂｌｅ ｔｏ ａｒｒｉｖｅ．（私に固有名称はありません。前のマスターがつけなかったので）』

「となると、なんて呼べばいいかわかんねェな」

『Ｉｆ ｉｔ ｉｓ ｓｕｃｈ ａ ｔｈｉｎｇ, ｙｏｕ ｐｌｅａｓｅ ｎａｍｅ ｉｔ．（でしたら、あなたがつけて下さい。）』

Ｂｅｃａｕｓｅ ｙｏｕ ａｒｅ ａ ｎｅｗ ｍａｓｔｅｒ，ｔｈｅｒｅ ｉｓ ｔｈｅ ｒｉｇｈｔ．（新たなマスターであるあなたには、その権限があります。）』

「そっか……んじゃあ」

考え込む怜治。

少しして、思いついた名前を呟く。

「エリシオン……」

『Ｅｌｙｓｉｏｎ（魂の楽園（エリシオン）ですか）……』

「嫌か？」

『Ｎｏ．Ｉ ｔｈｉｎｋ ｔｈａｔ ｉｔ ｉｓ ｔｈｅ ｖｅｒｙ ｇｏｏｄ ｎａｍｅ．（いいえ。とても良い名だと思います）』

「そうか……んじゃあよろしく頼むぜ、エリシオン！！」

『Ｙｅｓ．Ｍｙ ｍａｓｔｅｒ．（はい。マスター）』

エリシオンを構える。黒ローブも立ち上がっていた。

向こうも双剣を構えた。

両者同時に地面をけり、激突。溢れた魔力が波となって周囲をえぐる。

お互い顔に息がかかるほどの距離で鍔迫り合いが続く。

「なぁエリシオン。　俺は魔法のプログラムってのが全く分からなねェ」

『Ｉ　ｕｎｄｅｒｓｔａｎｄ　ｉｔ．　Ｂｅｃａｕｓｅ　Ｉ　ｗａｔｃｈｅｄ　ｉｔ　ｆｏｒ　ｔｈｅ　ｔｉｍｅ　ｂｅｉｎｇ（承知しております。　一応、私も見ていましたから）』

「なら話は早ェ。　俺は魔力をひねり出す。　後の事はお前に任せていいか？」

『Ｎｏ　ｐｒｏｂｌｅｍ．　Ｉｔ　ｉｓ　ｔｈｅ　ｒｏｌｅ　ｏｆ　ｄｅｖｉｃｅ．（問題ありません。　それがデバイスの役目です）』

「そりゃ頼もしいな……いくぞ！！」

言うと怜治は魔力を一気に放出。
紺色の魔力光が激しく光る。　エリシオンの宝玉も同様に輝く。
そして

一筋の閃光が森を駆け抜けた。

「……ッ！！」

間一髪で閃光をかわした黒ローブは絶句していた。
先程まで手に持つ杖で殴りつけることしかできなかった人間が、突然砲撃魔法を放ったからだ。
エリシオンから放たれた砲撃はレーザービームのように森を駆け、地面を半円形にえぐっていた。　射線上にあった樹の幹には野球ボール大の穴が開いていた。

「ぼんやりしてんなよ！！！」

怜治がエリシオンを突き出して突進。エリシオンの杖先には魔力刃が展開しており、槍のような形になっていた。

とっさに双剣をクロスするようにして防御。魔力刃が黒ローブの体を貫くことはなかった。だが、穂先からは紺色の光を放つ魔力球が形成。急速に大きくなっていく。

目を見開いた黒ローブに向かって怜治は静かに告げる。

「こいつが、鉄平の分だ！」

『Ｄｒａｇｏｎ ｆｏｒｃｅ』

先程の砲撃とは比べ物にならないくらいの閃光。極太のレーザーが黒ローブを飲み込んだ。

光は龍が這うように地面にその跡を残す。

木々を押し倒し、岩を砕き、土砂を撒き散らしながら走り続ける。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ！！！！！！！！」

黒ローブは自分が叫んでいることに少しして気付いた。

彼女はまだ、双剣で砲撃を防いでいた――否、光の直撃を免れていた。

だが砕けた石片、木片が体を叩く。

それでも気を散らさずに防御に徹する。

この一撃に耐えきれれば、勝機はこりらにあるからだ。

向こうはこれで倒せると思うはずだ。人は勝利を悟ると、そこに油断が生まれる。

そこを高速移動で一気に落とす。
勝利へのプランはあるのだ。　それをみすみす逃すわけにはいかない。

「うおおおおおぉぉぉぉぁぁあああああああああああっ！！！！！！！！！」

双剣に魔力を大量に注ぎ、一気に振り抜いた。
黒ローブを飲まんとしていた光が両断された。
彼女の顔に笑みが浮かぶ。
耐えきったと。　勝ったと。　だが

「うおらあああああああああああああああああああああああっ！！！！！」

彼女の頭上から怜治の声が響いた。
上を見上げると、そこには確かに怜治がいた。
エリシオンを指輪に戻し、空いた右手は紺色に輝いていた。
そこにこめられた魔力を、それだけ強化された拳の威力を想像して黒ローブの顔から血の気が引く。
彼女は動けない。　魔力を一度に大量放出した反動だけではない。
彼女自身、今の行動で勝利を悟ってしまったから、そこに油断が生まれた。
怜治は落下しながら右手を強く握りしめる。
標的は無論、黒ローブ。

「これが……俺の分だ！！！」

ＡＡＡ一クラスの魔力を宿した拳が、フードに隠された黒ローブの顔面に容赦なく突き刺さった。

地面が大きく割れた。
鼻っ柱に感じた激痛を最後に、黒ローブは意識を手放した。

第１５話　剣士と預言【後編】

魔法少女リリカルなのは☆Ｔｈｅ　Ｒｉｄｅｒ☆　第１５話　剣士と預言【後編】

「う……ううん……ッ」

黒ローブは意識をゆっくりと取り戻した。
どれくらい気絶していたのだろうか。
周囲を見渡すと赤い鳥居が目に入った。
どうやら最初に戦った神社の前にいるようだ。
そう思っているところへ、急に鼻に激痛が走った。
思わず鼻を押さえると妙な違和感がある。
鼻の骨が折れているようだ。　と、鼻っ柱を思いっきり殴られた事を思い出した。

「あっ！　目覚ました？」

「うひゃあっ！！」

突然声をかけられ、変な声をだした。
いつの間に、いや最初からいたのだろうか、エイミィが隣にいた。
距離を取ろうとしたが足が動かない。
ダメージが溜まった影響だろうか。

「あ、まだ動いちゃだめですよ！　怜治君に思いっきり殴られたんですから！」

「す、すみません」

少し落ち着いてきた。
それに合わせてエイミィがハンカチを手渡してきた。
そして気付いた。　今の自分の格好を。
別に服がはだけているわけではない。
ただ、着ているローブにあるはずのない赤いラインが二本ついていた。
鼻の下を触る。　ヌルッとした感触がした。
手を見ると、赤い液体がついた。　匂いですぐに血が渇いたものだと気付く。
うわっという声が漏れた。　どうやら豪快に鼻血を出してしまっているようだ。
渡されたハンカチで鼻を押さえ、上を向く。
その際、顔を隠していたフードが取れ、短く切りそろえた赤紫色の髪が露出する。
顔を見ると、まだ少女の面影が見て取れた。
血が鼻の中を逆流する感覚がした。　少し気持ち悪い。

「わ！　女の子だったんだ……」

エイミィが驚きの声を漏らした。

「なんだ目ェ覚ましたのか」

怜治が現れた。　手には水が入ったペットボトルがあった。

「水は……飲めそうにないな」

鼻を押さえて上を向く彼女をみて言った。

「ひどいよ怜治君。　女の子の顔を思いっきり殴るなんてっ！」

「俺、男女平等主義だから」

「それちょっと違う」

呆れた声を出し、エイミィは改めて神社の惨状を確認する。
石畳は砕け、地面はめくりあがっている。　森の方へ目を向けるとそこだけ開発でもあったかのように茶色い肌を露出していた。
はぁ、と重い溜息が洩れる。

「どうすんの怜治君？　結界も張らずに戦うから、もうなにもかも滅茶苦茶だよ」

「俺のせいかよ。　こういうのは管理局が弁償するもんだろ。　もくしはこの女」

目の前の少女に渡すはずだった水を飲みながら怜治は言った。
急に振られて少女は慌てて姿勢を正す。　鼻血がまた少し垂れた。

「す、すみませんッ！　わたしは、“聖王教会”の者です！」

「聖王教会ッ！？」

エイミィが驚きの声を上げた。

「知ってんのか？」

「昔の王様を崇めているところ……ってことしか私は知らないけど、確か未来を見れる人がいて管理局もその預言の内容には注目するこ

ともあるって……」

はぁ～、と怜治は感嘆の声をあげた。

未来まで分かる魔法があるのかと、ぜひこの国の将来を見てもらいたいものだ。

だが、管理局が注目している組織の人間がなぜ無許可で次元転移をしたのだろうか。

その答えはすぐに分かることになる。

彼らの目の前にウィンドウが現れた。

「は～いエイミィ、怜治君お久しぶりね！！」

ウィンドウからリンディ・ハラオウンの明るい声が聞こえてきた。

「か、艦長！？　どうしたんですか！！」

「えっとね。　エイミィに少し謝らなくちゃいけないことがあってね……」

急にトーンを下げてきたリンディにエイミィはドキッとする。

そしてリンディが申し訳なさそうに、しかし茶目っけたっぷりに言った。

「ごめ～ん。　例の無許可転移、あれ間違いだったの～。　申請に手間取ってたらしくて、あなたを派遣した後に許可がおりたのよ。
　無駄足させちゃってごめんね」

エイミィの時が止まった。

許可が下りたということはこの件に関して管理局は関与しないということだ。
ということは怜治が戦闘で破壊したものも弁償する必要もなくなる。
となれば弁償は怜治自身が負うことになるだろうが彼はまだ候補生。
しかも今回の件はエイミィが頼んだものだ。リンディからの提案があったということもあるが、なくても怜治に協力を要請していただろう。
となると責任を負うことになるのは……。

エイミィは考えるのを止めた。
これ以上考えたら鬱病にでもなってしまいそうだ。
そんなエイミィの様子に気付かずリンディは怜治に近況を報告する。
フェイトの裁判は順調に進みそれほど重い罪にはならないだろうということ、スタンの使用許可ももう少しで下りそうだということなどだ。

「それじゃあね。エイミィには悪いことしたけど、ちょっとした休暇だと思って楽しんできてね。バ～イ」

いいえ楽しめません。むしろ絶望の淵に追い込まれてるくらいです。
そんなエイミィの嘆きが届く前にウィンドウは消えた。

「……もしかして俺、殴られ損か？」
「……もしかしてわたし、殴られ損ですか？」

傷だらけの2人の魔導師の冷たい視線がエイミィの背中にブスブスと突き刺さった。

「な……」

彼女の肩がふるふると震えだした。

そして

「なんじゃこりゃーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーッ！！！！！！！！！！」

やけくそ気味の叫び声が夏の空に木霊した。

「えっと……それで君は誰なのかなぁ？」

エイミィはややややつれた笑みを少女に向けた。

どこか納得がいかないなぁと思いながら少女は姿勢を崩さずに口を開く。　鼻血はもう止まった。

「はい。　わたしは教会騎士団のカリム・グラシアの秘書、シャッハ・ヌエラです。　皆からはシスター・シャッハと呼ばれています」

「んで、そのシスターがなんでこの世界に来たんだ？　その上、魔力の無い一般人まで襲いやがって」

シャッハは怜治の言葉に小首を傾げ、口を開いた。

「ええと、実は先日わたしの上司である騎士カリムがひとつの預言を出したのです」

「えぇっ！？　そ、その内容ってのは？」

シャッハは懐からガサガサと古びた羊皮紙の束を並べ始めた。
紙面には見たことない異界の文字が綴られていた。

「古代ベルカ語……かなり昔の言葉で何通りもの解釈ができる難解なものです。　わたしたち聖王教会はこれを解読し、その内容を管理局に報告してきました」

エイミィがシャッハの説明を引き継ぐ。

「その預言をもとに管理局が動くの」

「んじゃあなんで今回は教会直々に動くんだ？　いつも通り管理局に任しとけばいいだろ」

「そういうわけにもいかなくなったんです……」

シャッハは並べた羊皮紙の一枚を手に取り、読み上げた。

「魔導無き九十七つ目の世界にて　梅花空木の夜　闇を統べる者が覚醒す
闇を統べる者　己を守護せし騎士を呼ぶ
白帝のころに騎士　魔導の源を蒐集す」

別の羊皮紙を取る。

「聖夜の日の前夜　騎士は倒れ　闇を統べし者は絶望の涙を流す
絶望に答え　魔導無き世界にて　闇の呪いが目覚める」

シャッハは次々と羊皮紙の文字を読んでいく。

「数多の魔導の源喰らいし闇の呪い　悲しみ秘めて世界を壊さん
広がるは黒き三対の翼　破滅を見守るは淀んだ紅眼」

そして最後の羊皮紙を手に取る。

「抗う者　永久の夢の牢獄へと堕つ　二度と目覚めない
世界を滅ぼし　己を滅ぼし　呪いは再び眠り世界を渡る」

全ての預言を読み上げ、シャッハはふーっと息を吐いた。
緊張していたのだろうか、額にはうっすらと汗が見えた。
預言には闇、絶望、呪い、破滅といった不吉な言葉が並んでいた。
エイミィは内容を聞いて絶句した。

「“梅花空木（ばいかうつぎ）”ってのは？」

「これは誕生花の事です。　この花は6月4日の誕生花です」

約二か月前――預言が当たっているのならば最初の“闇を統べる者の覚醒”は終わっている。
“白帝”とは秋の別名だから、“騎士　魔導の源を蒐集”はまだになる。

「“魔導無き九十七つ目の世界”は第97管理外世界の地球（ここ）であってんのか」

「“魔導の源”ってのは……リンカーコアのこと？」

「おそらくそうでしょう」

シャッハが頷いた。
確かに表現はいちいち回りくどいが、少し考えれば分かるものだった。

「この預言が当たる確率ってのは？」

「せいぜいよく当たる占い程度、しかしそれはあくまで他の解釈の仕方もあるからです」

つまり、解釈の仕方が当たっていれば１００％当たるということなのだろう。
怜治は質問を続ける。

「今のところ、この預言が当たってるっつー確証はあるのか？」

「残念ながら……」

うつむくシャッハ。
複数ある解釈の中で、一番物騒なものに当たりをつけてきたのだろうと怜治は思った。

「んで、あんたがこっちに来た目的ってのはなんだ。　預言に出てる“闇を統べる者”を探しに来たってわけじゃなそうだったな？」

「はい。　わたしは聖王教会から任務を任されたのです」

「任務って？」

シャッハは口をつぐんだ。　言っていいのかためらっているようだ

った。
穏やかな内容じゃないんだな、と怜治は思った。
しかし、決意したかのように口を開いた。

「わたしの任務は……この世界とその周辺の次元世界で魔力を持つ人間を消す――いえ、正確には保護することです」

消す、という単語を聞いて怜治は目を見開いた。　怒気を孕んだ目だった。
それを見てシャッハは慌てて言い直した。

「保護……預言にあった時期が過ぎるまで匿おうってか」

「“魔導の源を蒐集”の阻止ってことだね」

シャッハは無言で頷いた。
確かにリンカーコアをもつ者がいなくなれば蒐集が行えず、預言の阻止に繋がるかもしれない。
だが、あくまで一時しのぎ程度のものだろう。
彼女もそのことは分かってるはずだ。

「預言通りにことが進んでしまえば最後に起こるのはこの世界の破滅。　ですが、どこかひとつでも狂わせることができれば結果も変わる可能性があります。　教会はそれに賭けたんです」

シャッハは続ける。

「預言にある“騎士”……これはベルカ式という聖王教会の人間が使う魔法のエキスパートを指します。　実際、聖王教会にも騎士団というものがあります」

「つまり、自分たちの身内が世界を滅ぼすかもしれないと……」

「そうです。　この預言は決して実現させてはいけません。　その預言をしたのが教会自身というのは皮肉ですが……」

うつむくシャッハ。

二か月前の事件もなかなか大ごとだったが、今回はそれに負けず劣らずの事態のようだ。

世界が滅ぶ。　実感のない言葉だと怜治は思った。

果たして自分はそれを止めることができるだろうか。

前は助けることができなかったが、今回はできるのだろうか。

『Ｍａｓｔｅｒ』

指輪形態のエリシオンが語りかけてきた。

チカチカと白金色の光が点滅している。

念話ではないため、エイミィもシャッハにも聞こえた。

『Ｉ　ｄｏ　ｎｏｔ　ｋｎｏｗ　ｗｈｙ　ｄｏｅｓ　ｉｔ　ｄｅｓｔｒｏｙ　ｔｈｅ　ｗｏｒｌｄ（私にはなぜ世界を滅ぼすのか知る由もありません）』

皆が耳を傾ける。　一介のデバイスの言葉に。

『Ｉｔ　ｍｉｇｈｔ　ｈａｖｅ　ｂｅｅｎ　ｓｏｍｅｔｈｉｎｇ　ｓａｄ　ｐｏｓｓｉｂｌｙ.　（もしかしたら、何か悲しいことがあったのかもしれません。）　Ｊｕｓｔ　ｌｉｋｅ　ｔｈｅ　ｍａｓｔｅｒ　ｂｅｆｏｒｅ　ｍｅ.　（私の前のマスターのように）』

デバイスは続ける。

『Ｈｏｗｅｖｅｒ，　ｅｖｅｎ　ｉｆ　ｗｈａｔ　ｒｅａｓｏｎ　ｅｘｉｓｔｓ（しかし、どんな理由があっても）　Ｅｖｅｎ　ｉｆ　ｉｔ　ｍｉｇｈｔ　ｂｅ　ｓａｄ（どんな悲しいことがあったとしても）　……Ｉｔ　ｉｓ　ｗｒｏｎｇ.（それは間違っています）』

怜治がハッとした表情をした。

『Ｉｆ　ｉｔ　ｉｓ　ｙｏｕ，　ｉｔ　ｉｓ　ｓｕｒｅ　ｔｏ　ｓａｙ　ｓｏ.（あなたなら、そう言うはずです）』

言い終わるとデバイスは沈黙した。

「そうか……そうだな。　なんで弱気になってたんだか」

空を仰ぎ、自分に喝を入れるように頬をバチンと叩く。
そしてシャッハの方を向く。

「俺がその預言、止めてやるよ」

「本気で言ってるんですか。　あなた一人で世界を救えると？」

シャッハが訝しげな表情で怜治を見つめる。
無理に決まっているだろ、と口に出さずとも目が語っていた。

「俺一人だったらまぁ難しいだろうな。　でも、この町にはもう一人魔導師がいる。　俺より強いかもってやつがな」

「それでも……」

「力が足りなくっても管理局がいるよ。　次元世界の平和が管理局の本懐、うちのクロノ君が絶対力になるよ」

エイミィが笑って言った。
確かに、地球での事件ならアースラが来るだろう。

「そういうことだ。　教会のお偉いさんには、何が何でも止めて見せるって伝えとけ」

シャッハは怜治を見る。
信じていいのか迷っているようだ。　ダメだと判断したらすぐに任務を再開するつもりのようだ。
だが、やがて目を閉じてゆっくりと頷いた。

「分かりました。　こちらの方でもお力添えができるようならさせてもらいます」

スッと立ち上がるシャッハ。　パンパンとローブについた汚れを落とす。

「ではわたしは一度向こうに戻ります」

ぺこり、と頭を下げた。　彼女のしぐさは礼儀正しさに満ちていた。

「あ、じゃあ私もこれで任務終了ってことで戻るね」

「ん、随分急ぐんだな。　艦長殿は休暇のつもりでって言ってたぜ？」

「いや、早く戻って今回の被害の修復手続きしないと……」

嫌な汗をダラダラ流して言うエイミィ。　目が泳いでいる。

「ご愁傷さま」

「誰のせいだと……いや、もういいよ」

トボトボとした足取りで歩いていく。　どこかに転送ポートを用意しているらしい。

シャッハもついていこうとして――思い出したように怜治の方に振り返った。

「そういえば、言い忘れていました」

「なんだ？」

「わたしが襲ってしまったあなたのご友人。　お二人とも、わずかですが魔力がありますよ」

怜治は耳を疑った。

そんなはずない、という怜治の思いを代弁するかのように夏の風が吹いた。

少し、生温かった。

「はぁ、色々あって疲れた」

シャッハとエイミィの2人と別れ、怜治は帰路についていた。
2人が持っていた薬で傷は目立たなくなっていたが、それでもズキズキとした痛みがあった。

「それにしても……」

空を仰ぎ、シャッハから聞いた言葉を頭の中で反芻する。
世界が滅ぶという預言、滅ぼす闇の呪い、そしてなにより――

「鉄平とマサに魔力が……ねぇ」

未だに信じられなかった。
エイミィが言うには魔力の大きい人間の傍に長い間いると、その魔力に当てられてリンカーコアが生まれることもあるという。　つまり、怜治の魔力に当てられてあの2人にも魔導師としての力が出たということだ。
騎士は魔力のあるものを襲う。　あの2人も獲物になるかもしれない。
怜治は思い出す。　二か月前の戦いを。
異形の姿となった動物たち、雷撃の刃を振るう少女、黒衣の魔女。
たくさん怪我をした。　死を身近に感じたこともなかったわけじゃない。
そんな戦いに巻き込んだ。　それへの罪悪感が怜治の心を覆い尽くす。
こんなことを言ったら2人は怒るだろう。
一人で背負うなと、なぜ頼らないのだと、力になりたいと言われるだろう。
確かにあの2人なら頼めば力になってくれるだろう。　だが、でき

ない。
危険な目に合わせたくない。　12年前のあの出来事以来、初めて信頼できる友だったから。

『You look like her.　（あなたは彼女に似てますね）』

「ん？」

『She held it alone various things like that, finally……　（あの人もそうやって色んな物を自分一人で抱え込んで、そして……）』

エリシオンが誰の事を言っているのかは怜治もすぐに分かった。
彼が戦った黒衣の魔女。
過去を取り戻そうとし、未来も受け入れそうになって、でも過去のためにと命を捨てた女。
指にはまるデバイスは彼女に怜治が似ているという。

『You should rely on the person.　No use.
（あなたも人を頼っていいと思いますよ。　利用ではなくね）』

「分かってるけど……そう簡単にはいけないんだよ」

足元にあった小石を蹴飛ばす。

「とりあえずお前も起きたわけだし、魔法の練習でもするか」

『ＯＫ』

青年は歩き出す。　彼を追うように生温い風が吹いた。

時は過ぎ、残暑が残る９月。
いくつも連なる高層ビルの屋上に人影があった。
数は４つ。　ひとつは赤毛の小さい少女。　ひとつは桃色の髪の女。
　ひとつは金髪の女。　そして筋肉質な体躯を持つ男。

４人の足元にはそれぞれ陣が展開され、ゆっくりと回転していた。
それぞれ色が異なる三角形の陣だ。

「いくぞ」

桃色の髪の女性が静かに、そして力強く言った。
それに呼応するように足元の陣が強く輝く。
そして赤、ラベンダー、ミントグリーン、ライトペリウィンクルという４色の光が空へと飛び去った。
屋上にもう人影はなかった。

滅びの聖夜に向けて、物語は動き出す。

第１５話　剣士と預言【後編】（後書き）

次回からＡ－Ｓ編に入ります。

第１６話　強襲そして再会（前書き）

ちょっといつもより短めかもです。

第16話　強襲そして再会

夏が終わり、秋が過ぎ、冬になった。
12月に入り寒さが少しずつ、だが確実に強くなっていくのが分かる。
海鳴市でも外を歩く人々はコートやジャンバーを、中にはマフラーを巻いている人もいる。
夜になれば、さらに寒さは強くなる。
温暖化と騒がれているが、実際に暖かくなっているのだろうかと疑問に思ってしまうほどだ。

「どこだ……」

夜空から少女の声が響いた。　苛立ちがわずかに混じった声だ。
その少女は空にいた。　おさげを垂らした赤い髪、大きなリボンとフリルがついたゴスロリと言われる髪と同じ色の赤い服にうさぎの飾りがついた、これまた赤い帽子を被っている。　右手には少女には不釣り合いな鉄槌。　左手には百科事典のように分厚い本を抱えていた。
目を閉じ、何か考え事をしているように見える少女を隣で青い狼が見ている。

「どうだヴィータ。　見つかりそうか？」

青い狼が口を開いた。　口から聞こえたのは男の声だった。

「いるような……いないような……」

ヴィータと呼ばれた赤毛の少女が答えた。　どうやら何かを探して

いるらしい。

「こないだから時々出てくる妙に巨大な魔力反応がふたつ。　どっちか見つかれば、一気に２０ページくらいは行きそうなんだけどな……」

「ならば、ふたつとも見つければ４０ページか……ぜひ捕まえたいものだ」

少し考え、やがて分かれて探すことになった。
青い狼は少女に背（というか尻だが）を向ける。

「闇の書は預けるぞ」

「オッケー、ザフィーラ。　あんたもしっかり探してよ」

「心得ている」

そう言ってザフィーラと呼ばれた狼は夜空を飛んでいく。
姿が見えなくなったところで、ヴィータは右手に持つ鉄槌を振るう。
足元に三角形の赤い魔法陣が展開された。

「封鎖領域、展開」

『Ｇｅｆａｎｇｎｉｓ　Ｓｔｅｒｎ　Ｍａｇｉｓｃｈ』

鉄槌から音声が流れた。　そして、海鳴の街が異様な空気に包まれていく。
誰も気付かない。　いや、気付くどころか少しずつ町から人や車が消えていく。

まるで部外者を立ち退かせるように。　これから起こるかもしれない戦いに無関係な人間を気にするかのように。

『Ｃａｕｔｉｏｎ，Ｅｍｅｒｇｅｎｃｙ（警告、緊急事態です）』

「えッ……」

突然、高町なのはの愛機（レイジングハート）が声を出した。

次の瞬間、街を包んでいた異様な空気が彼女の家をも包み込んだ。

「結界っ！？」

驚き、おもわずイスから立ち上がる。

「魔力反応、大物みっけッ！！」

ヴィータは喜びの声を上げ、右手の鉄槌に目を向ける。

「行くよ。　グラーフアイゼン」

『Ｊａ　ｗｏｈｌ．（了解）』

ヴィータは空を翔る。　見つけた獲物、高町なのはのもとへ。

突然感じた異様な空気を怜治も感じ取っていた。

彼は学校帰りだった。　彼の通う高校で行われる行事、クリスマスパーティの準備で遅くなってしまったのだ。
これはただのレクリエーションではなく、校外からの客も来るいわば文化祭のようなものだ。
毎年、ある者は学校のアピールのために、ある者は客としてきた異性との出会いを求めて、ある者は純粋にイベントを楽しむためにと皆目的は異なれど、この行事のためにかなり前から準備を始める。
出し物はクラス単位、部活単位または友人を募っての個人単位で自由なのでかなりの数になる。　無論、いくつもの出し物を兼任するものも出てくる。
ちなみに、怜治のクラスは校庭での焼きおにぎり屋だ。
イベント当日はかなり寒くなると予想されるので、人気が出るだろうとのことだ。
ただし、怜治とその悪友はそれ以外にもやらかすつもりだが。

閑話休題。

怜治は周囲を警戒する。
彼の帰り道は決して人通りが少ないところではない。　常に車か人がいる。
なのに今は誰もいなかった。

『Ｍａｓｔｅｒ』

指輪形態のエリシオンが声を出した。　声に合わせて白金に点滅する。

『Ｒｅａｃｔｉｏｎ　ｏｆ　ｍａｇｉｃ．　Ｓｏｍｅｔｈｉｎｇ　ｈａｓ　ｃｏｍｅ　ｉｎ　ａ　ｄｉｒｅｃｔｉｏｎ　ｈｅｒｅ．
（魔力反応です。　何かこちらに向かってきています。）』

「なに？」

空を見上げる。　すると、確かに何か光るものがこちらに向かってきている。

それは狼の姿をしていた。　ザフィーラと呼ばれていた狼だ。

彼は怜治の前に降りた。　だが、その時姿は狼から人型へとなっていた。

両手に手甲をつけ、褐色の肌に白とも銀ともとれる髪。

だが、耳としっぽだけは残っている。

「貴様、魔導師だな」

「誰だてめぇ」

両者向かいあう。　敵意がむき出しだ。

「恨みはないが貴様の魔力、奪わせてもらう」

「ガン無視だなおい。　……あぁ分かった」

納得がいったといった顔をする怜治。

当然ザフィーラの表情は訝しげなものに変わる。

「お前守護騎士ってやつだろ。　想像とは随分違うが……んでもってリンカーコアを集めてるんだろ？」

「貴様、どうしてそれを」

「よく当たる占い師様から聞いてね」

「戯言を……」

「いや、マジなんだけどな……」

ザフィーラが拳を構える。

怜治もエリシオンを起動。　白いバリアジャケットに包まれる。

両者、軸足に力を込め、地面を蹴った。

「「はぁぁぁぁあああああ！！！」」

2人の雄叫びが響いた。

ザフィーラは拳を突き出し、怜治は片手剣に変形させたエリシオンで突きを繰り出す。

リーチの長さなら、怜治の方が長い。　紺色の魔力刃がザフィーラの顔に向かう。

ザフィーラは顔を動かしてかわし、カウンターで怜治の顔に拳を叩きこむ。

「がはっ！」

たたらを踏む怜治。　ザフィーラはもう片方の拳を突き出す。　鍛え上げられたストレートが怜治に迫る。

（くそっ……南無三！！）

ごきぃぃ、と鈍い音が響いた。

怜治ががむしゃらに突き出した拳が、ザフィーラの拳とぶつかったのだ。

だが、グローブしかつけてない怜治に対してザフィーラの拳は手甲で固められている。
どちらのダメージが多いかは明白だ。
事実、怜治は苦悶の表情を浮かべている。

『Ｏｎｅ　Ｓｈｏｔ』

エリシオンが自己判断で杖に戻り、光の翼が展開。　怜治を引きずるように距離を取らせる。

『Ａｒｅ　ｙｏｕ　ＯＫ，　Ｍａｓｔｅｒ？』

「あぁ、問題ねェ。　助かった」

手を振ったり握ったりしてみて状態を確かめる。　骨が折れた様子はない。　だが、少し血が滲んでいた。

「あれが騎士か……やっぱ強ェな」

「俺の場合は、守護獣という」

「なんだそりゃ。　使い魔みたいなもんか？」

目の前にいる男に視線を向ける。　あれを止めないと、世界が滅びる。
受け入れ難い預言の言葉が脳裏をはしる。

「負けられねぇよな」

『Ｙｅｓ』

一方、ザフィーラも自分の前に立つ敵に目を向けていた。
目の前の男はなぜ自分たちの事を知っているのだろうか。

（管理局の者か……？）

すぐにその結論に達し、すぐに否定。

（あれは訓練された者の動きではない。　おそらく、少ない実戦経験から独学で鍛錬を積んだといったところか……）

ザフィーラは自分の手を見る。
痛みはない。　だが、手甲にはわずかにひびが入っていた。
ほぼ素手でといっていいあの拳によって。
信じられなかった。

（どちらにしろ、油断はできんということか）

青き狼の獣人は再び拳を構える。
怜治も杖の状態のエリシオンを構えた。
戦いはまだ、始まったばかり。

場面は変わる。

「だらぁああっ！！」

ヴィータの咆哮とともに、彼女が握るグラーフアイゼンが振るわれる。
空気を切り、うなり声を上げる鉄槌は目の前の少女――なのはが展開した防御的と激突。
轟音と爆煙が起きた。

「きゃあっ！！」

なのはの悲鳴が夜空に響く。

時は少しさかのぼる。

彼女は自分に向かってくる魔力を察知し、こちらから打って出た。
ビルの上で待ち構えていると、夜空から鉄球が飛んできた。
プロテクションを発動し防御。　だが、鉄球はジリジリとなのはの魔法壁を抉る。
薄く、だが強固な壁一枚を隔てた攻防。　しかし、徐々になのはの方が押していた。
押し返せる。　そう思った。　だが、

「痛烈な一撃（テートリヒ・シュラーク）！！」

後ろからの声に振り返ると、赤い服に身を包んだ少女――ヴィータが鉄槌をなのは目がけて振り下ろしていた。
とっさにもう一枚プロテクションを展開。
鉄槌と桜色の防御壁が激突した。

そして時はもとに戻る。

なのははビルから落下していた。　普段の飛行とは違う浮遊感が体を包む。
彼女の防御魔法は破壊されたのではなく、衝撃で小さな体が吹き飛んでしまったため、傷はない。

「レイジングハート！　お願い！」

『Ｓｔａｎｄ　ｂｙ，　Ｒｅａｄｙ.　　Ｓｅｔ　ｕｐ!』

女性の声とともに、なのはの体を白いバリアジャケットが包み込む。
そして右手には赤い宝玉を金のフレームで囲む魔法杖――レイジングハートが握られる。
それを見てヴィータは無言で野球ボール大の鉄球を出す。

『Ｓｗａｌｌｏｗ　Ｆｌｙｅｒ！』

テニスのサーブのように鉄球を放り投げ、グラーフアイゼンで思いっきり叩く。
鉄球は魔力が付与された砲弾と化し、なのはを容赦なく打ち抜く。
なのはの防御魔法とぶつかり、再び爆煙がたつ。

「おらぁぁあああああッ！！」

大声とともに鉄槌を振り下ろし、ヴィータは煙を両断。
その間を縫って、なのはは距離を取る。

「いきなり襲いかかられる覚えはないんだけど！」

困惑した声を上げる。

「どこの子？　一体なんでこんなことするの？」

なのはの問いに、ヴィータは無言で鉄球を出す。

今度は指の間に挟まる程度の大きさのものが２個。

なのははそれを拒絶と受け取った。

「教えてくれなきゃ……」

手を指揮者のように振る。

「分かんないってば！」

先程放っておいた２発の誘導弾がヴィータを後ろから撃つ。

それに気付いたヴィータは体をよじって一発目を回避。

２発目を鉄槌で防御。　赤い三角形の防御壁が展開された。

「このヤロウォッ！」

防ぎ切り、なのはに突貫。　鉄槌を振るう。

レイジングハートが自己判断で魔力を追加したフィンを展開。　鉄槌を回避。

『Ｓｈｏｏｔｉｎｇ　Ｍｏｄｅ』

レイジングハートの金のフレームが音叉の形に変化。ヘッド部分に光の羽が展開する。

「話を……」

杖先に魔力環が展開し、魔力が集中する。

放つのは彼女の代名詞。
砲撃魔法。

「聞いてってば！」

太い光線が発射。　当てるつもりはなかったのか直撃はせず、ヴィータの赤い帽子を化する程度に終わる。　だが、衝撃でヴィータの体は吹き飛ぶ。
少し落ちたところで体勢を整える。　そしてヴィータは見た。
自分の被っていた帽子が無残にもズタズタになって落ちていくのを。
彼女の中で、何かがキレた。
憤怒の形相を向けるのは帽子を打ち抜いた少女。
鋭い目で睨まれ、なのはは恐怖を感じた。

「グラーフアイゼン！　カートリッジロード！！」

『Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ』

紅の鉄槌が鈍く光り、ヘッドの付け根が一回上下にポンプアクションする。
排熱機構が働き、蒸気が吐き出された。

『Ｒａｋｅｔｅｎ　ｆｏｒｍ』

鉄槌の姿が変わった。　ハンマーヘッドの片方が推進剤噴射口に、その反対側がスパイクに変形する。

「噴進式（ラケーテン）……」

噴射口から激しく推進剤が噴射。　ヴィータの体が回転する。

回転は徐々に速くなり、その勢いを生かしたまま突撃する。
なのははすぐさまプロテクションを展開。
だが

『鉄槌（ハンマー）！！！』

ヴィータの放った一撃は難なく防御壁を破壊。
そして、スパイクはレイジングハートのフレームを削り取る。

「きゃあああああっ！！」

予想以上の破壊力になのはは吹き飛び、周囲に建つビルのひとつに放り込まれる。
ガラスが割れる音が響いた。
ヴィータは即座に追撃。　なのはが体勢を立て直す暇を与えず、再び鉄槌を振るう。
なのはの魔法杖が自己判断でプロテクションを展開。
先ほどよりより強固なものを形成した。　だが、相手の攻撃はそれをも上回る。

「ぶち抜けぇぇぇえええええええっ！！！」

『Ｊａ　ｗｏｈｌ．（了解）』

主の命を遂行するため、鉄槌は噴射を強める。
そして
なのはのバリアジャケットごと破壊した。

「うおらぁあっ！！」

怜治が魔力を込めた拳を振るう。　だが、ザフィーラは難なくかわし、さらにカウンターで頬を殴り飛ばす。
エリシオンを剣に変形させ突く。　かわされ、懐に潜り込まれで掌底を叩きこまれる。　肺から空気が出ていく。
苦し紛れに射撃。　魔法壁により防がれた。
心の中で悪態をつきながら尻もちをつくように地面に倒れ込む。

「どうした。　この程度か？」

守護獣の問いに答えず、口に溜まった血を吐き出す。　歯は折れてない。　口の中を切ったようだ。
エリシオンを支えに立ち上がる。
足元を見るとがくがくと膝が笑っていた。　頭部を殴れ過ぎただろうか。　力が上手く入らない。

「無理をするな。　大人しくしていれば、これ以上傷つけるつもりはない」

思わず了承してしまうような言葉だった。
実際戦ってみて、力の差は歴然だった。
こちらの攻撃はかわされ、防がれ、向こうの攻撃は面白いように入った。

「こちらの目的は貴様の持つリンカーコアだ。　命まで取りはしない」

――受け入れろ。
心の中の悪魔だか天使だかが呟いた。
――認めろ。　お前じゃ勝てない。
認めたくなかった。
――リベンジすればいいじゃないか。　フェイトの時のように。

「嫌だね」

――現実を見ろ。　奇跡は起きない。

「うるせぇっ！！」

膝を殴り、震えを止める。　手に持つ魔法杖を掲げ、魔力を集中。
魔法杖の杖先に魔力刃が展開。　蝙蝠のような光の翼が広がる。
怜治が笑みを浮かべる。　そして、紺色の閃光が空に撃ち上がった。
雲を切り、星を撃ち落とさんばかりの勢いで光は空を駆けのぼった。

「それが……お前の答えか」

「情けかけられて、喜ぶ男がいるかよ？」

「よかろう……だが、それは勇気ではない。　無謀だ」

吐き捨てるように言う。
怜治は笑みを崩さず、エリシオンの杖先をザフィーラに向ける。
ザフィーラが地面を蹴った。　手甲に包まれた拳が迫る。
ゴガンッ！！という音が響いた。

「う……うぅ……」

なのはが呻き声を上げた。

彼女のバリアジャケットの上着は破壊され、黒いインナーがむき出しになった。

誰から見ても頼りない装甲だった。

レイジングハートも全体にひびが入り、軽く振っただけで粉々になってしまいそうだ。

それでも、あきらめずに杖をヴィータに向ける。　だが、力が上手く入らず焦点が中々合わない。

息を整えながらヴィータが歩み寄る。

グラーフアイゼンが蒸気を吐き出し、続けて薬莢のようなものを吐き出した。

吐き出されたそれはカランカランと渇いた音をたてて床に転がる。

ヴィータが鉄槌を振り上げる。　振り下ろされれば、それは少女の頭蓋を砕き、脳しょうと血を当たりにまき散らすだろう。

そんな凄惨な光景を思い浮かべ、血の気が引いていくのを感じた。

（こんなのって……嫌だ）

春に知り合った者たちが走馬灯のように脳裏に走る。

自分と魔法を引き合わせてくれた少年。

ちょっと頭が固いけど実は優しい（はず）の黒髪の少年。

アースラの乗組員のみんな。

そして

金色の髪をもつ、きれいな紅い瞳の少女。

ビデオレターを通して何度も連絡を取り合い、小学校の友人2人にもいつか直接合わせようと思ってもいた。

今日の朝までそんな先の楽しみを考えていたのに、それが今終わり

そうになっている。
受け入れたくない。　だが、そんな思いを踏みにじるように鉄槌の先のスパイクが光る。

（ユーノ君、クロノ君……フェイトちゃん・・・・・！）

目をつぶり、彼らの名を心の中で呼んだ。
鉄槌が振り下ろされた。
だが、いつまでたっても痛みはやってこない。
代わりにガキンッ！！と金属がぶつかり合う音が聞こえた。　そして、温かな光を感じた。
ゆっくりと目を開ける。
まず目に飛び込んできたのは、ふたつに分けられた金色の長い髪、黒いマント、手に握られた黒い戦斧。
今さっき思い浮かべた少女が、ヴィータの鉄槌を受け止めていた。

「ごめん、なのは。　遅くなった」

肩に手が置かれた。　手の先に目を向けると、またもや今さっき頭に浮かんだ少年がいた。

「ユーノ……君。　フェイトちゃん……」

なのはは、静かに彼らの名前を呼んだ。

怜治は今、信じられない光景を見ている気がした。
自分にザフィーラの攻撃を受け止めきれるとは思ってなかった。

だが、せめて一発でも攻撃を決めてやりたかった。
そのために立ち上がった。　無謀と言われても気にしなかった。
無茶だの、無謀だのと言われるのは慣れている。
ザフィーラが地面を蹴った。　こちらも砲撃の体勢に入った。
だが、彼らの間に割って入るものがいた。
それは黒く、バイクの形をしていて、龍の頭のようなものがついていた。
ザフィーラの拳がバイクに突き刺さった。　バイクには傷一つつかない。

『おいおい何やってんだ？　オマエはオレがいなきゃいっつもボロボロだなオイ』

「スタン……なのか？」

驚愕の表情で怜治が聞いた。

「あぁ？　オマエ、こんなワンダフルなやつが他にいると思ってんのか？」

怜治の顔が、喜びの色に染まっていった。

「くそっ、仲間か……」

「援軍か……」

異なるの場所で、異なるの乱入者を目の前にして、騎士が問う。

「違う」

「違うな」

金の髪の少女は手に持つ斧に金の刃を纏わせ、バイクはマフラーから排気しながら否定した。

そして

「『友達（相棒）だ』」

同時に言った。

世界を滅ぼす預言を覆すための戦いが、今始まる。

魔法少女リリカルなのはA’ｓ　☆Ｔｈｅ　Ｒｉｄｅｒ☆　第1話　強襲そして再会

第１６話　強襲そして再会（後書き）

今さらながら、ジントさん。
感想ありがとうございます。
励みになります。

第17話　魔導師＋1ＶＳ騎士（前書き）

ザフィーラの魔力光の色に驚き。
ライトペリウィンクルってどんな色っすか。

第17話　魔導師＋1ＶＳ騎士

「相棒……だと」

距離を取って、守護獣が尋ねた。

「そうだよ。　頼りになるとびっきりのな」

怜治がスタンのハンドルを握る。　白いバリアジャケットの上にバリアジャケットを着込む。　肩にプロテクターのついたライダースーツ、ブーツにグローブ、紺色のロングコートが展開された。　スタンを鉄拳形態（アームズフォーム）に変形。　金属に包まれ、両腕が二回りほど太くなる。

右手に杖形態のエリシオンを握る。

いつの間にか、足の震えが止まっていた。

心の底から自信がこみ上がってくる。

それにザフィーラも気付き、拳を再び構える。

「はぁああっ！！」

両者同時に地面を蹴る。　拳がうなり声を上げて迫る。　ふたつの鉄拳が正面から衝突し、衝撃でアスファルトで舗装された地面がひび割れる。

守護獣は痺れを感じた拳を即座に引っ込め、もう片方の拳を突き出しワンツー。

二発目の拳に怜治は対応できず、容赦なく腹に突き刺さった。

だが

「きかねぇっ！！」

魔法杖を向けて砲撃。　ザフィーラはとっさに魔法壁を展開。　直撃は防いだが、５ｍほど後ろに押し戻された。

「ジャケットの二枚重ねは伊達ではないということか！」

バリアジャケットはその言葉通り防護服だ。　着ているだけで魔導師の防御力を上げる。

それを重ね着すれば単純に防御力は２倍。　その分機動性は失われるだろうが、もともと怜治はパワー重視だから関係ない。

『どうやら、形勢逆転ってやつか？』

「油断はできねぇ。　だが、ビビらず積極的に攻めてくぞ！」

『ＯＫ』

「ベルカの騎士を、ヴォルケンリッターをなめるなぁっ！！」

再び、鉄拳がぶつかり合い、激しい音が響いた。

魔法少女リリカルなのはＡ’ｓ　☆Ｔｈｅ　Ｒｉｄｅｒ☆　第２話　魔導師＋１ＶＳ騎士

なのはをかばうようにして、フェイトがヴィータの前に立ちふさがった。

サイスフォームのバルディッシュを上段に構える。

「民間人への魔法攻撃……軽犯罪では済まない罪だ」

「なんだぁてめぇ。　管理局の魔導師か？」

フェイトの言葉に全く動じることなく、ヴィータは攻撃的な態度を取る。

とりあえず、聞かれたからには答えようとフェイトは口を開く。

「時空管理局、嘱託魔導師フェイト・テスタロッサ」

バルディッシュを下段に構え直す。

「抵抗しなければ、弁護の機会がキミにはある。　同意するなら武装を解除して」

「誰がするかよっ！！」

ヴィータは後方に跳び、割れた窓ガラスから外に出て行った。

せまい室内での戦闘が苦手なのか、ユーノを入れて二対一になることを避けたかったのか。

どちらにしろ、このまま逃がすわけにはいかない。

「ユーノッ！　なのはをお願い！」

うん、とユーノの声が聞こえたと同時に床を蹴って飛翔。　ヴィータを追う。

ユーノはなのはへの治療を開始。　治癒魔法の光がなのはを包む。

傷がたちまちふさがっていく。　だが、体に残る疲労感は消えない。　なにより、レイジングハートが破壊されたショックが大きい。

少しでも気を紛らわすため、ユーノが話しかける。

「フェイトの裁判が終わって、皆でなのはに連絡しようとしたんだ。
そしたら、通信は繋がらないし――」

なのはの耳に彼の言葉は上手く入ってこない。
色々なことが一度に起こりすぎて、戸惑っている。
突然襲われ、愛機が破壊され、死を覚悟したと思ったら友達が助けに来てくれて、だから

「ごめんね。　ありがとう」

ただ、そう言うことかできなかった。

『Ａｒｃ　Ｓａｂｅｒ』

バルディッシュの無感情の声が響き、フェイトは金の大鎌を振るう。
金色の刃は月牙となり、回転しながらヴィータに迫る。
ヴィータも鉄球を四つ出し、一気に打ち出す。
両者の攻撃が交差。

「障壁！」

ヴィータの掛け声とともに、グラーフアイゼンが赤い障壁を展開。
少女を覆うように発生したそれに、金色の刃がぶつかる。　やがて、刃は消滅。
フェイトは迫りくる鉄球を持ち前のスピードでかわす。　だが、鉄球は意思を持つかのように軌道を変更。　フェイトを追いかけまわす。

（追尾弾!?　でも、この手の攻撃は――）

もう四度目だ!!と声に出さず叫ぶ。　一旦ひきつけ、ギリギリで急転換。　鉄球はそれに反応する前に互いに激突して消滅。　そして

「バリアァァアアア……ブレイクッ!!」

下方からアルフがヴィータの障壁を打ち上げる。　障壁にひびが入り、光の粒子となって砕け散った。

ヴィータはお返しとばかりにアルフに鉄槌を振るう。　展開された魔法壁ごと、アルフを殴り飛ばす。

足元に違和感を感じ、視線を向けると渦を巻いた金色の魔力が足に絡みついていた。　フェイトが隙をついて斬撃。　上方に飛んで回避。　アルフがリングバインドを発動。　オレンジ色の足輪が足を固定しようとする。　ギリギリのところでかわす。　足に絡みついた魔法も消えた。　再び鎌となったバルディッシュがヴィータに迫る。　鉄槌を旋回、ヘッドの柄の部分で受け止める。　火花を散らしながらの鍔迫り合いが続く。

（くそっ、ぶっ潰すだけなら簡単なんだけどそれじゃダメだ!　魔力を持って帰らないと）

全力でやれない歯がゆさを噛みしめしながら、先程吐き出した薬莢の数を確認。　残り二発。　自分の残りの体力、魔力、敵の実力、さらなる援軍。　目的達成が可能かどうか計算する。

そこへ、アルフのリングバインドが再び発動。　今度は考え事をしていたこと、フェイトに注意を向けていたことでまともに受けてしまった。

磔にされたように大の字に空中に固定される。

「終わりだね」

アルフの横に並び、刃を向けながらフェイトが言った。

「名前と出身世界。　目的を教えてもらうよ」

刹那、ひとつの影が突然フェイトの目の前に現れた。　バルディッシュのヘッド部分を強く打たれ、衝撃で後方に飛んだ。

フェイトは体勢を立て直して現れた影の正体を確認。　人間だった。

桃色の髪をポニーテールでひとつにまとめ、黄色いリボンで結ばれていた。　手には長剣が握られていた。　整った顔立ち、そしてバリアジャケットの下から胸のふくらみから女性と判断。

立ち尽くしていると、女性は長剣を掲げる。　同時に、足元に魔法陣が展開。

「レヴァンティン。　カートリッジロード」

『Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ.』

鍔から薬莢と熱のこもった蒸気が排出された。

そして、剣が炎に包まれた。

「紫電一閃ッ！」

フェイトに接近し、炎を纏った剣を容赦なく振り下ろした。

バキン！という音ともに、バルディッシュが両断された。

「おらぁあっ！」

「はぁああっ！」

怜治とザフィーラが咆え、拳を振るう。　鉄に覆われた拳が激突し、火花と轟音が響く。

それを何度も繰り返す。　鉄がぶつかり合う音がＢＧＭとなる。

ザフィーラが怜治の脇腹に蹴りを叩きこむ。　怜治の一瞬顔が苦痛に歪むもバリアジャケットの二重展開のおかげでダメージは少ない。

すぐさま脇腹に入った脚をつかんで振り回す。　手をはなすと守護獣の体が宙を舞う。　ザフィーラは空中で体を回転。　電柱を足場にし、飛び蹴りを放つ。　怜治は腕を盾にしてガード。　そのままエリシオンを剣にして一閃。　ザフィーラは怜治の腕を足場にして跳躍。　振るわれた剣は空を切る。

ザフィーラは祈るように手を合わせ、落下を利用してハンマーのように振り下ろす。　怜治は後ろに跳んでかわし、エリシオンで射撃。

だが、灰色がかった障壁に防がれる。　ザフィーラが拳で地面を叩くと同じく灰色がかった拘束条が怜治の足元から生え、頭に向かってくる。　上半身をそらして回避するが、顎をわずかに掠めた。

怜治の体勢が崩れたことを見逃さず、ザフィーラは突進。　ふたつの拳を槍のように突き出し、怜治の腹に突き刺さった。　怜治の足がわずかに浮き、吹っ飛んだ。　エリシオンを地面に突き刺して無理やり体を止めた。　怜治はの顔をザフィーラに向ける。表情には痛みよりも苛立ちの色が目立っていた。

「あ～～イライラする！！」

頭を掻きむしりながら叫んだ。　スタンを使っていても、こちらの攻撃は防ぐがかわされ未だに一発もまともな攻撃は通っていない。

対してザフィーラの攻撃は――防げることの方が多いが――確実に怜治の体を撃つ。

スタンと合流して本来の戦い方ができ、バリアジャケットの二重がけで防御力も上がった。　それでも、騎士との実力の差は大きく変わらない。

「これが騎士ってやつかよ……」

再度、敵の強大さを再確認した。　目の前の騎士は、フェイトやなのはよりも強い。

だが

「負けられるかよッ！」

スタンを鉄拳形態（アームズフォーム）から大剣形態（ブレイドフォーム）に変形、肩に担ぐ。　魔力刃を展開したエリシオンの下段に構える。　非対称（アシンメトリー）な二刀流の構え。

ザフィーラも、左足を前に、右足を後ろにして開き、左腕を前に、右腕を腰の傍に構え、迎撃態勢を整える。

怜治は地面を蹴って突進。　大剣を振り下ろす。　ザフィーラの左手の手甲とぶつかり、火花が散る。　ザフィーラが左腕を回転。大剣をいなし、アスファルトに突き刺さる。

怜治は足を止めず、魔力刃を振り上げる。　ザフィーラの右手が打ち落す。　魔力刃が地面にあたる。　だが、大剣のようにアスファルトに刺さることなく刃が蛇のように曲がった。

ザフィーラの顔に驚愕の色が浮かんだ。

怜治はギリギリでエリシオンを剣から鞭に変形させていた。　刃を失い、代わりに魔力の帯は蛇のようにうねり、ザフィーラの右足に巻きついた。

「もらったあっ！！」

怜治は叫ぶと同時にスタンから手をはなす。　脚と腕に魔力を集中

し、跳躍。　力任せに鞭を引っ張ると、ザフィーラの体が宙に浮く。
　一本釣りのように腕を振り上げ、ザフィーラが空高く上がると体を反転。　今度は背負い投げのように腕を振り下ろす。　ザフィーラは足に巻きつく魔力帯に引っ張られ、地面に仰向けに叩きつけられる。
起き上がろうとするザフィーラに怜治は鉄拳形態にしたスタンで無理やり地面に抑え込む。
ザフィーラの両手を手甲で押さえ、自分の手だけを開放。　足の方もバインドをかけてザフィーラを地面に縫い付けた。
怜治はザフィーラに跨るように立ち、腰を下ろす。　指をコキコキと鳴らし、拳を握る。　ＡＡＡランク級の魔力が集束し、拳に紺色の魔力光が宿る。

「やっとだ……」

独り言のように怜治が言った。

「やっとお前に一発入れることができるなぁっ！！」

怜治は拳を振り上げる。　拳の輝きが一層増した。
ザフィーラが目を見開く。
そして、怜治の拳は振り下ろされた。

「どうしたヴィータ。　油断でもしたか？」

「うるせぇよ。　こっから逆転するとこだったんだ！」

「そうか。　それは邪魔したな。　すまなかった」

桃色の髪の剣士が手を掲げると、ヴィータを固定していたバインドが砕け散った。
ヴィータは指を動かし、調子を確かめている。

「無茶はするな。　お前が怪我でもしたら、我らが主は心配する」

「わーってるよ」

剣士のたしなめるような物言いに、ヴィータは頬を膨らませた。
そんな少女を見て、剣士は苦笑する。

「落し物だ」

先程、なのはに破壊されたウサギのついた帽子をヴィータの頭に乗せる。　帽子は見事元通りに修繕されていた。

「ありがと……シグナム」

シグナムと呼ばれた剣士は視線を下に向ける。　アルフがこちらを警戒していた。　だが、フェイトが心配なのかチラチラとフェイトの飛ばされた方向を見ている。

「実質、2対3か。　ザフィーラはどうした？」

「しらね。　どっかで獲物を探してんじゃねぇか？」

「いや。　奴がこちらに気付かないとは思えん。　おそらく、どこかで戦っているのだろう」

目を閉じ、ザフィーラの魔力を探す。　彼女たちがいる南西方向に反応を見つけた。　そのすぐそば、というより同じ場所に別の大きな魔力を見つけた。

「見つけたぞ。　どうやら戦闘中のようだ。　終わり次第こちらに来るだろう」

「そうか。　んじゃあ、あいつが来る前にちゃっちゃと終わらすか」

シグナムとヴィータにザフィーラの敗北ということは予想していないようだ。

「たかが一人ぐらい戦力差があろうと、我らベルカの騎士に……」

「負けはねェッ！！」

2人そろって下降。　ヴィータは腰に手をまわし何かを取り出そうとする。　だが、その手は空を掴む。　ヴィータの顔に焦りの色が浮かぶ。

「あれ、闇の書が……ない！！」

フェイトはデパートの中に倒れていた。　傍らに両断されたバルディッシュが落ちている。

彼女の頭上には自分が落ちてきたために開いた穴があった。　コンクリートの床や天井を何層も突き破ってきたのだ。　穴から差し込む月明かりに反射して、塵やほこりが妖精のように煌めく。

呻き声を上げながらフェイトは体を起こした。　いつの間にかやっ

て来たユーノが手を貸す。　彼はフェイトを心配し、なのはを回復機能のついた結界の中に入れてこちらに来たのだ。

「大丈夫？」

「うん。　ありがとうユーノ」

フェイトはお礼を言いながら、折れたバルディッシュを拾う。　全体にひびが入っていたが、本体となる金色のコアは無事だった。

『Ｒｅｃｏｖｅｒｙ』

バルディッシュの音声とともに、修復は始まる。　光に包まれ、斬られた両端が繋がった。

「ユーノ。　この結界内から全員同時に外へ転送、いける？」

「うん。　アルフと協力できればなんとか」

「わたしが前に出るから、その間にやってみてくれる？」

「２人を同時に相手する気！？」

ユーノが声を荒げた。
ヴィータはなのはを圧倒した。　ということは、シグナムも同等の実力を持つということになる。　それを２人同時というのは無理に決まっていた。　それでも、フェイトの決心は変わらない。　アルフにも念話で伝える。

「（アルフもそれでいい？）」

「（当然反対。　でも、どうせ聞きはしないんだろ？）」

「（うん。　ごめん）」

「（謝らなくていいよ。　こっちも、できるだけ援護はしてみるよ）」

「ありがとう」

フェイトは感謝の言葉を口にした。　あえて念話ではなく、声で。
自分のことを心配してくれたユーノと、自分の無茶に合わせてくれるアルフへのものだ。
フェイトは地面を蹴って飛翔する。
その後をユーノが追う。

（ここに怜治さんがいてくれたら……）

ユーノが苦い顔をした。
怜治の方も戦闘中だということは分かっていて、それでスタンを送った。　向こうの状況は分からないが、こちらと同様苦戦しているだろうと予測する。　だとすれば、彼の援軍は期待できなかった。
いない者を頼っても意味がない。　後ろ向きな思考を追いやり、自分がやるべきことに集中する。
フェイトとユーノが空を飛ぶのを、シグナム達とは別の角度から見ている者がいた。　その者は白金色の髪に、ミントグリーンのドレスのような服に身を包み、両手の人差し指には青色、薬指には緑色の宝石の付いた指輪を一個ずつつけており、脇には重厚なつくりの――表紙に剣十字がついた本を抱えていた。

「なるべく、確実に早く済ませます。　クラールヴィント、導いて」

指輪が輝き、ついている青と緑の宝石がゆっくりと指輪から離れた。

指輪から魔力糸が伸び、宝石に繋がり空へと飛んでいった。

「くそっ……逃げられたか」

『さすがにヤバいと思ったんだろうな』

怜治は悔しさと一緒に口内に溜まった血を吐き出す。　さっきまで戦っていた相手は突然消えてしまった。　残ったのは戦闘によって破壊されたアスファルトの地面や塀、そして怜治の腕に刺さるように生えている灰色がかった魔法条だった。

『それは攻撃魔法じゃなく、バインドみたいな拘束・捕縛系の魔法だな。　……どうだ、痛みはあるか？』

「いや、ちょっと痺れる程度だ」

怜治は魔法条を握りつぶし、地面に食い込んでいたスタンをバイク形態に変形。　エリシオンも待機形態に戻す。　下に着た白のバリアジャケットは解除したが、黒のバリアジャケットは展開したままにしておく。

今回の戦闘は終わった。　だが、不完全燃焼となってしまって怜治の顔に不満な色が浮かんでいた。

「追えるか？」

『決着つける気か？　悪いが、ほうさっきの手は通じねぇぞ』

そう言いつつ、ザフィーラの魔力反応を探し始めるスタン。　並行してエリシオンも探査を開始。　少しして、『Ｃｏｍｐｌｅｔｅ』の音声が流れた。

『こっから北東方面だな。　案の定、なのは嬢たちが戦ってるところだな』

「……高町も戦ってたのか？」

『……気付かなかったのか？』

「全然」

スタンがため息を漏らすような声を出した。　そして、なぜあのタイミングで自分が援軍にやって来た理由を話した。

『っつーわけで、そんとき戦闘中だったのは二か所。　なのは嬢にはユーノ坊とフェイト嬢、それにアルフ嬢が向かってオマエにはオレが来たってわけだ。　分かったか？』

「ああ、お前も無事登録ってのは済んだんだな」

怜治は顎を引いて頷いた。　そして、スタンに跨り転移準備に入る。
紺色の光を放つ魔法陣が足元に展開された。　光に怜治とスタンが包まれる。
光が消えると、彼らの姿は消えていた。

夜空の下、フェイトとシグナムが激しい剣戟を開始。　フェイトは

数合打ちあってから距離を取り、フォトンランサーを発動。　彼女の周りに四つの雷球が出現した。

「レヴァンティン。　私の甲冑を」

『Ｐａｎｚｅｒｇｅｉｓｔ！』

長剣が光り、シグナムの体を紫色の光が覆った。　フェイトはフォトンランサーを発射。　放たれた雷球はシグナムに襲いかかるが、彼女を覆う光に打ち消された。

「魔導師としては悪くないセンスだ」

シグナムは長剣を掲げて言った。

「だが、ベルカの騎士に一対一を挑むにはまだ足りんっ！！」

シグナムがフェイトに斬りかかった。　フェイトはフィールド状の魔法壁を展開。　シグナムの刃を受け止める。　だが、レヴァンティンはいともたやすくそれを破壊した。

仕方なく、バルディッシュで受け止めた。　刃がバルディッシュのコアに当たり、コアにひびが入った。　シグナムは剣を振り抜くと、再び鍔から薬莢が吐き出された。　同時に熱をもった蒸気が吹き出る。

「レヴァンティン、叩き切れッ！！」

『Ｊａｗｏｈｌ（了解）！！』

レヴァンティンが再び炎を纏い、フェイトに振り下ろされる。　バ

ルディッシュで受け止めるも、コアに入ったひびがさらに広がった。
やがてフェイトは力負けし、数m先のビルの壁まで吹っ飛んだ。
瓦礫が舞い、煙でフェイトの姿が隠された。

「フェイトちゃん！！」

なのはが悲痛の声を上げた。　煙が晴れ、フェイトの姿が見えた。
大きな外傷は見当たらないが、バルディッシュの損傷が激しかった。
アルフが援護に向かおうとするが、ヴィータが放った鉄球に阻まれた。

「（ユーノッ！！　転送はまだできないのかいッ！？）」

「（準備はできてるんだ。　でもこの結界が破れないんだッ！）」

ユーノは悔しそうに言った。　彼は補助系の魔法は得意だが、結界を破るほどのパワーが無かったのだ。
シグナムは他の者からの邪魔が無いことを確認すると、赤い薬莢をレヴァンティンの唾に入れた。　長剣から『装填完了』の音声が流れた。

（あれだ……あの弾丸。　あれで一時的に、魔力を高めてるんだ）

フェイトは痛む体を押さえながら、相手の情報を整理する。　実際、あの薬莢――フェイトが言うところの弾丸――が排出されると、シグナムの斬撃の威力が増していた。
相手の力の特徴は分かった。　だが、そこからどうすればいいのか、痛みのせいで思考が続かない。

「終わりか？　ならばジッとしていろ。　抵抗しなければ命までは取らん」

「だれがっ！！」

フェイトは痛みをこらえて立ち上がった。
それを見ていたシグナムの背後に、別の人間が現れた。
シグナムは後ろを振り返らずに口を開く。

「ザフィーラか……遅かったな」

「すまん。　少々厄介な相手だったのでな」

ほう、とシグナムは後ろを振り向いた。　そして、吹きだした。
ザフィーラが訝しげな顔をした。　彼の視界の端で、ヴィータも笑っていた。
フェイトはなんだか疎外感を感じていた。

「なんだ。　どうしたというのだ？」

「お前……鼻……くくっ」

鼻？と思い手を鼻に当ててみる。　ヌチャッという音がした。　手を見ると血がついていた。　ザフィーラは自分が鼻血を出していることをやっと気付いた。

「不覚。　奴の拳が寸でのところで掠めていたか……笑うなシグナム」

ザフィーラは腹を抱えているシグナムを睨む。　視界の端で、ヴィ

ータも笑っているのだ映った。

「いや、すまない。　だが、お前が不覚を取るとは……どんな魔導師だった？」

「魔導師か……」

「どうした？　……あぁ悪い。　こちらも話の途中だったな」

シグナムは忘れ物を思い出すかのようにフェイトの方へ向きなおした。　それをフェイトも感じたのか少しムッとしか顔をする。

「私はベルカの騎士。　ヴォルケンリッターが将、シグ――」

「見つけたぞ妖怪犬男ぉぉぉおおおおおおおおおおっ！！！！！！」

『ヒィィィハァァァアア！！！！！！！！」

スタンに跨った怜治が空間を突き破って現れた。　――シグナムの真横に。

「あっ」
「あっ」
「あっ」
「あっ」
「あっ」
「あっ」
『あっ』

「んっ？」

シグナムを除くその場にいた全員の声が重なった。　シグナムは何が起こったのかと横を向いた。　彼女が見たのは自分の顔めがけて突っ込んでくる回転する黒いタイヤが――

グキッ！！　ガッシャァアッ！　ドゴンッ！　バゴンッ！　ガシャンッ！

シグナムの首がものすごい角度に曲がって吹っ飛び、近くのビルの屋上に設置された金網フェンスを突き破り、屋上で二回バウンド、向かい側のフェンスに激突して止まった。

突然の出来事に、皆言葉を失い戦いの最中にもかかわらず静寂が訪れた。

『なんてことだ……人身事故だぞレイジ』

「くそっ、免許取り消しか……せっかくスタンが戻って来たってのに。　いや、魔法使う分には免許とかいらないのか？」

静寂を最初に破ったのは怜治とスタンだった。

怜治は屋上に降り立つとスタンから降りてシグナムに駆け寄る。

整った顔にタイヤ痕がくっきりついていたが大きなけがは見当たらない。　あの状況で受け身を取ったのか、それとも頑丈なのか、怜治には判断できなかった。　だが、これは明らかに怜治に非があった。

「大丈夫か？　悪いな、人……っぽいのを探して急いでたんだ。　ホントにスマン」

珍しく素直に謝り、シグナムに手を貸す。　怜治に引っ張られシグナムが立ち上がる。　金網に頭をぶつけたのか、左手で頭を押さえている。

「探してた？　誰をだ」

「えっとな……灰色っぽい髪で、色黒で、額に宝石みたいなもんがついてて……」

ヴィータとアルフがザフィーラを見た。　ザフィーラは目をそらした。

『それと犬の耳としっぽがあったな』

「ザフィーラァァアアッ！！！！」

シグナムが咆えた。　怜治はシグナムの視線の先にザフィーラを発見した。　轢いたショックで周りが見えていなかったようだ。

「なぜ俺に怒りを向ける」

ごもっとも。　ザフィーラが屋上に降り立つ。　ヴィータもそれに続く。

怜治もスタンを鉄拳形態（アームズフォーム）に変形。

隣にはレヴァンティンを持ったシグナムがおり、知らない人間が見たらザフィーラとヴィータ、怜治とシグナムの二対二の構図に見えただろう。　スタンがそのことに最初に気付いた。

『チッ、向こうは2人か。　オイッ、そこの剣士！　犬耳はオレたちがやる。　赤毛の方は任せたぞ！！』

「応ッ！！　……ってなんでそうなるッ！！」

スタンの悪ふざけにシグナムが剣を振るう。　手甲とぶつかり、火花が飛んだ。

「スタンのふざけた冗談にここまでノッてくれたやつ初めてだぞ」

『あぁ、今オレは最高の相方を見つけた！　彼女となら天下が取れる気がする』

「ふざけるなぁあっ！！」

レヴァンティンから薬莢が弾け、刀身が紅蓮に包まれた。
シグナムが剣を振り下ろす。　怒りが宿った一撃だ。
とっさに怜治は剣をタイミング良く両手で止めた。　真剣白刃取りというやつだ。
ついでに炎に変換された魔力を吸収。　スタンと怜治の全身が紅蓮の色に染まり、髪が陽炎のように揺らめく。
その姿に、シグナム達の顔に驚愕の色が出た。

「なんだその姿は……」

「てめぇの秘密暴露するほど、口は軽くないんでねっ！」

剣を弾き、スタンを大剣形態（ブレイドフォーム）に変形し、その場で反時計回りに一回転。　大剣の軌跡を紅蓮の炎がなぞる。

「返すぜッ！　龍の……」

『炎爪ッ！！』

『Ｕｎａ　ｕ?ａ　ｄｅ　ｌａ　ｌｌａｍａ　ｄｅｌ　ｄｒａｇ?ｎ.』

炎の大剣がレヴァンティンと激突し、爆裂。　衝撃でシグナムは吹き飛んだ。　怜治の姿が紅蓮から元に戻る。

シグナムがやられると同時にヴィータがコンクリの足場を蹴って特攻。　床面すれすれのところを滑空しながら、鉄槌を振るう。　怜治は体を回転させながら大剣を振り下ろす。　鉄槌と大剣が激突。

衝撃で足場が崩壊するが、怜治は即座に飛行魔法を発動。　浮遊感を感じながらもヴィータの鉄槌と鍔迫り合いが続く。

「あたしの攻撃が止められたッ！？」

「おいおい、高町やフェイトならともかく……」

怜治は大剣を持つ腕に力を入れる。

「この体格差で……」

徐々にヴィータが押され始めた。　少女の顔に悔しさの色が浮かんだ。

「俺が力負けする理由があるかよっ！！」

大剣を振り切り、ヴィータが弾き飛ばされた。　少女の悲鳴が夜空に木霊する。　怜治は追撃をかけようと突撃槍（ランス）を召喚。　魔力で腕の筋力を更に強化。　筋肉が隆起し、槍投げ。　ボッ！！と空気を抉る音が鳴り、突撃槍はヴィータへと飛ぶ。　ヴィータは障壁を展

開。　だが、突撃槍の速度はそれを超えていた。　穂先が障壁を貫き、未だに勢いは衰えを見せない。　自分が貫かれる様を想像し、ヴィータの顔に焦りが浮かんだ。　とっさにザフィーラが突撃槍の柄を掴み、強引に引き抜き怜治の方を向く。

「返すぞ」

「いらねぇよ」

ザフィーラが投擲した突撃槍を怜治は砲撃形態（バスターフォーム）で破壊。　爆煙が両者の壁となって視界を妨げる。　怜治は鉄拳形態（アームズフォーム）に変形し、煙の壁に飛び込んだ。　煙をかき分けるように進んでいくと、ザフィーラの顔が現れた。　向こうも煙の中に飛び込んでいたようだ。　両者の拳が激突し、衝撃が煙を吹き飛ばした。

「なるほどな」

ザフィーラが顎を引いて頷いた。　怜治はなんのことか分からず、怪訝な表情をする。

「幅のある戦闘スタイル。　この遮蔽物の無い開けた場所こそ貴様のフィールドということか」

「だったらどうした。　また下に降りてガチンコするか？」

「いや。　その必要はない」

ザフィーラが目を閉じて笑った。　怜治の視界の隅でシグナムが現れた。

「はぁぁあああっ！！」

シグナムが咆え、レヴァンティンを振り下ろす。　怜治はザフィーラに押さえられて動けない。　白い刃が眼前に迫る。

『Ａｒｃ　Ｓａｂｅｒ』

無機質な音声が聞こえ、金色の魔力刃がレヴァンティンの刃を打ち上げた。
怜治とシグナムの間に、フェイトが割り込んだ。

「わたしのこと、忘れてないでもらえますか？」

毅然とした態度でフェイトが言った。　手に持つバルディッシュをシグナムに向ける。

「スマンな。　突然の珍客に場が乱されたからな」

「ちょっと待て、それって俺の事か」

「他に誰がいるというのだ」

ザフィーラが冷たく言い放った。　怜治はちょっと傷ついた。
男2人を置き去りに、フェイトが口を開く。

「いきますよ。　……えっと？」

「シグナムだ。　剣の騎士シグナム。　これはレヴァンティン」

「ミッドチルダの魔導師、時空管理局嘱託、フェイト・テスタロッ

サ。　この子はバルディッシュ」

「これでお互い名乗ったな。　では、仕切り直しといこうかテスタロッサ」

言い終わると同時に、２人の剣戟が始まった。　高速戦闘になり、怜治の傍から２人はどんどん離れ今や金とラベンダー色の光の筋にしか見えなくなった。

ヴィータもアルフと戦闘を再開し、怜治のまわりにはザフィーラを除いて誰もいなくなった。

「えっと……ああいう名乗りってやった方がいいのか？」

「貴様が俺の相手にふさわしいと分かったらな」

「……上等ッ！」

再び、鉄拳がぶつかり合う音が響いた。

「助けなきゃ……」

結界の中でなのはは呟いた。　彼女が見上げる夜空には七色の光が駆け廻り、時に激しくぶつかり合っていた。　戦っている人数は転送に集中しているユーノを除き、三対三。　それぞれの実力はほぼ互角――いや、わずかに怜治たちが押されているように見えた。

相性の問題なのか、場数の差なのかは分からない。　だが、もし自分があそこにいけば何か変わるかもしれない。　そんな思いが少女の中にあった。

傷ついた体にムチ打って歩を進める。　少しでも友人の近くに行く

ために、少女は歩みを止めない。

『Ｍａｓｔｅｒ』

レイジングハートから音声が流れた。　ひび割れたコアが痛々しい。

『Ｓｈｏｏｔｉｎｇ　Ｍｏｄｅ，　ａｃｃｅｌｅｒａｔｉｏｎ．』

コアが輝き、桜色の翼が展開された。

「レイジングハート……」

『Ｌｅｔ' ｓ　ｓｈｏｏｔ　ｉｔ，　Ｓｔａｒｌｉｇｈｔ　Ｂｒｅａｋｅｒ．　（撃ってください　スターライトブレイカーを）』

「そんな、無理だよそんな状態じゃ……」

確かに、レイジングハートの機体は全体にひびが入っている。　砲撃魔法は威力が高ければ高いほど、デバイスと術者にかかる負担と反動は大きくなる。　最悪の光景が頭に浮かび、なのはは躊躇した。

『Ｉ　ｃａｎ　ｂｅ　ｓｈｏｔ．（　撃てます。）』

「レイジングハートが壊れちゃうよ」

『Ｉ　ｂｅｌｉｅｖｅ　ｍａｓｔｅｒ．　（私はあなたを信じています。）』

魔法杖の声に不安の色はない。

『Ｔｒｕｓｔ　ｍｅ，　ｍｙ　ｍａｓｔｅｒ．　（だから、私を信じてください）』

「……レイジングハートがわたしを信じてくれるなら」

少女は愛機の言葉に嬉しさを感じながら言葉を紡ぐ。

「わたしも信じるよ」

杖を掲げ、前方に中型の魔法陣が展開された。

「（フェイトちゃん、ユーノ君、アルフさん、そして怜治さん。わたしが結界を壊すから、タイミングを合わせて転送をッ！）」

「（なのは……）」

「（おいおい大丈夫か？　お前結構ボロボロだろ）」

『（無茶すんのはウチの相棒だけで十分なんだが？）』

怜治とスタンは反対の意を示した。　他の三人も、言葉にはしないが不安の色がうかがえた。

「（大丈夫です。　スターライトブレイカーで打ち抜くからッ！）」

「おい、今無茶苦茶物騒な単語が聞こえたんだがッ！？」

半年前に見た彼女の砲撃の威力を思い出し、思わず叫んだ。　ザフィーラが怪訝な顔をする。

「レイジングハート、カウントをッ！」

『Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ』

ｎｉｎｅ，ｅｉｇｈｔ，ｓｅｖｅｎ，とレイジングハートがカウントを始めた。それに合わせ、桜色の魔力球が周囲の魔力の集束を開始した。騎士たちもなのはの動きに気付くが、怜治たちがなのはに近づけさせまいとなのはへの道を塞いだ。

魔力球はどんどんと大きくなる。だが、レイジングハートのカウントの音声にノイズが走り始めた。なのはが心配そうな顔をするが、魔法杖は『Ｎｏ　ｐｒｏｂｌｅｍ.』と言ってカウントを続ける。やがて、魔力球の巨大化がゆるんだ。発動間近となり、なのはが杖を掲げる。あとは集めた魔力を放つだけだ。だが

「あぁ……っ」

なのはの顔が驚愕に染まり、たたらを踏んだ。その様子を見て、怜治たちも青ざめた。

少女の胸から人の腕が生えていたのだ。細く白い指から女性だと分かる。あまりにもショッキングな光景だった。腕は勢いをつけるように一旦引っ込み、また伸びた。そして、少女の胸から飛び出た光の塊を掴んだ。なのはの顔が苦痛に歪み、少女の体がよろめく。魔法杖に体を預け、倒れるのを防ぐ。

怜治はあたりを見渡す。その顔には怒りがあった。敵がもう一人いるという可能性を失念していた自分への怒りと、あんなことを平然とできる相手への怒りだ。やがて、なのはの立つビルの斜め後ろに人影を発見した。白金色の髪に、ミントグリーンの服の女だった。女は本を持っており、その本のページが勝手にめくれているのが見えた。何をしているのか分からなかった。だが、怜治には相手を発見しただけで十分だった。

怜治は女の方向へ猛スピードで向かう。

「シャマル！　あぶねぇっ！」

怜治の飛ぶ方向を見て、ヴィータが叫んだ。　どうやらあの女はシャマルと言うらしい。怜治を止めようとするが、アルフとフェイトに阻まれた。

「なにやってんだてめぇッ！！」

怜治は叫びながら砲撃形態（バスターフォーム）でシャマルに向かって砲撃を放つ。　怒りとともに放たれた紺色の閃光は空気を焼き払いながらはしる。だが、ザフィーラが回り込んで三角形の魔法壁を展開。　砲撃を受け止めた。

「うおおおおおおおおっ……があっ！！」

ザフィーラは魔法壁の角度を変え、砲撃の軌道をずらした。　閃光はシャマルの頭上のはるか上を素通りしていった。
間を空けずに怜治は鉄拳形態（アームズフォーム）でザフィーラに突撃。　憤怒の拳で魔法壁を破壊し、守護獣の肩を握り潰さんとばかりにつかんだ。　ザフィーラの顔が歪んだ。

「おい、てめぇらはガキにあんなこともすんのか？」

「我らの大義のため、仕方ないことだ」

「仕方ないだぁ？」

怜治は眉を顰（ひそ）めた。　肩を掴む腕の力が増す。

「そこは、“スマン”って言うとこだろうがぁッ！！」

怜治が頭を振って頭突き。　両者の額がぶつかり、ガゴンッと鈍い音が響いた。　同時に腕を包むスタンを射出。　ザフィーラをビルの壁に縫い付けた。

怜治はエリシオンを起動してシャマルに視線を戻し斬りかかる。だが、ヴィータの鉄槌に阻まれる。　グラーフアイゼンとエリシオンではグラーフアイゼンに分があった。　弾き飛ばされ、コンクリート製の床を滑る。　魔力刃で体を止めた。　度重なる横槍に舌打ちした。

「シャマル！　あいつの魔力も奪っちまえッ！！」

「分かってるッ！」

ヴィータが床を蹴って怜治に迫る。　怜治はエリシオンを槍状の姿に変形。　魔力刃の穂先に魔力が集まり一気に放射。　スタンを使った時とは異なる閃光がコンクリートを抉りながら赤毛の少女に迫る。　ヴィータの握る鉄槌から薬莢が一発吐き出され、ヘッド部分が噴射口とスパイクに変った。　削岩機のような形状になった鉄槌と、紺色の閃光が激突。

突然、怜治の体に衝撃が走った。　視線を下げるとなのはと同様胸から女性の腕が生えていた。　痛みは感じなかった。　女性の手はなのはと同様、怜治の体から飛びだした光の塊を掴んだ。

怜治は体から力が抜けていくのを感じた。　虚脱感のようなものが体を襲い、視界がかすんだ。　砲撃が維持できなくなり、片膝をつく。　閃光が消失した。　この感覚を怜治は以前体験したことがあった。　それは彼が魔法に初めて会った時の

（魔力が……ない？）

確かにこの症状はフェイトと初めて戦った時のものと似ていた。
となると、胸から生えている手が掴んだのは怜治の魔力。　騎士たちの目的は相手の魔力だったのだ。
女性の手が胸の中に沈んでいった。　怜治の体に穴は開いてなかった。　視線をシャマルに向けると、その手には今さっき怜治から奪った光の塊があった。　怜治は理解した。

（空間飛び越えた……か。　スタンの次元移動と似たようなもんか）

ヴィータが怜治の前に立った。　その眼にもう敵意はなかった。
魔力を奪った相手にはもう用はないということか。　怜治は自分の無力さに歯噛みした。
シャマルの方を再び見る。　彼女が持つ本のページが再びかなりの速度でめくれていた。　シャマルの顔には歓喜の色があった。

（奪った魔力はあの本に移されるのか……）

怜治の視線が本に移った。　届くはずもないのに、本に向かって手を伸ばす。　奪ったものを取り返そうとするかのように。　ヴィータが怪訝な顔で怜治を見ているが無視。　怜治の目が徐々に猛禽類のように鋭くなる。

（返せ……いや、戻ってこい）

念じるように頭の中で何度も繰り返す。

「戻ってこいよ。　俺の魔力ッ！！」

叫ぶと同時、怜治の視界が眩い光に塗りつぶされた。

「すごいは……あの女の子と合わせて５０ページ以上。　予想以上の大収穫だわ」

シャマルは本を見て歓喜した。　何も書かれていない白紙のページに文字が書き込まれ、空白が埋まると自動的に次のページへ行きまた文字が書き込まれていく。　それが延々と繰り返される。

だが、突然その作業がピタリと止まった。　もう終わったのかとシャマルは思ったが違った。　本はまだ文字を書きこもうとしていた。

だが、書き込もうとしている文字が点滅するように出たり消えたりを繰り返していた。　まるで、見えない力に妨害されているようだ。

「一体何が……ッ！？」

怪訝な顔が驚愕に変った。　突然、書き込まれた文字がビデオを巻き戻すように消えていった。　やがてそのページは白紙になり、前のページに戻りまた文字が消えていく。　シャマルは何もできず、ただ驚くしかなかった。

「どうしてっ！？　どうしたというの闇の書！！」

闇の書と呼ばれた本は答えない。　かわりに

「戻ってこいよ。　俺の魔力ッ！！」

怜治の声が響いた。　同時に、闇の書から光が放たれた。　光は流星のように空を走り、怜治の体に入り込んでいった。　シャマルは闇の書を見た。　怜治の魔力で埋まったページは、ほとんど白紙に

戻っていた。　シャマルの顔が絶望に染まった。

「そんな……３０ページも埋まってたのに、たった５ページ。　８割近い魔力を奪い返されたっ！？」

シャマルの嘆きに、他の騎士たちの顔色が急変した。

そして

「俺ふっかぁぁあああああああああああっっっっつっ！！！！！」

魔導騎兵（ライダー）の歓喜の咆哮が轟いた。

怜治の叫びに呼応するように彼の背中に青い翼が広がる。　半年前、虚数空間から抜け出す際に現れた翼だ。　だが、あの時より色が濃く、翼の輪郭もはっきりしていた。　ここにリンディかクロノがいればそれを説明できただろうが、ここにはどちらもいない。　よって、皆驚くしかできなかった。

青い翼は、怜治自身を包み込めるほどの大きさになった。　翼から出た青い光の粒子が鱗粉のように舞う。

「これは……魔力？」

ヴィータが舞い散る粒子を見て言った。　掌をかざすと、雪の青い粒子が積り少しして消えた。　手を通して魔法の力を感じる。　間違いなく魔力だ。　不思議なことに、消耗した魔力が回復していくのを感じた。

それに気付いた時、ヴィータはハッとした表情でなのはの方を見た。

魔力の粒子は怜治を中心にばら撒かれている。　それは結界全体に広がり、フェイトやシグナム達のところまで届いていた。

無論、なのはのところにも。

ホントに今日は色んな事が起こる日だと、なのはは思った。
突然、謎の少女に襲われて、自分の危機に友人が助けに来てくれた。
突然、胸から女性の腕が生えてきて体から力が抜けていった。
そして今、抜けていった力がわずか、でも確実に回復していくのが分かった。
原因はわからない。　だが、さっきから目の前を舞っている青い光が関係していることだけは予想できた。
なのはは足に力を入れ、しっかりと立つ。　そして、杖を掲げた。
幸い、彼女が苦労して集束した魔力球はまだ残っていた。
あとはこれを開放するだけ。　少女は絞り出すように声を出した。

「スターライト……ブレイカァァアアアーーーーッ！！！」

桜色の閃光が夜空を翔け、結界を一瞬で粉砕した。
閃光は空を翔け、結界を貫いた。
膨大な魔力の塊は暴風を巻き起こし、騎士たちや魔導師たちを薙ぎ払う。　建ち並ぶビルの窓ガラスが割れ、魔力光をキラキラと反射させた。
少女が作り上げた魔力の巨塔の周りを、ガラスと怜治が撒いた青い粒子が舞う。
その様子はさながら季節外れの天の川か、流星群のようだ。
やがて、光が消えた。　怜治が周囲を見渡すが、騎士たちの姿はどこにもない。　結界破壊の衝撃の中で、隙を見て離脱したようだ。

「クソッ、結局逃げられたか……」

「なのはッ！！」

フェイトが叫び、なのはに駆け寄った。
なのはは杖を落とし、崩れるように倒れた。　頭を固いコンクリートにぶつける直前にフェイトが抱きとめた。
なのはは意識を失っていた。

「なのは、なのはッ！」

「落ち着けフェイト。　ただの魔力切れだ」

怜治の言葉に、フェイトがキッと鋭い視線を向けた。
大切な友人が倒れたというのに、全く心配した様子の無い怜治に怒りを覚えたようだ。
怜治はやれやれと首を振る。

「俺も経験あるから分かるんだよ。　ちょっと休めば治る」

『（皆オマエみたいに単純な構造してないんだよ）』

「（うるさい）」

地面に刺さったスタンと念話をしながらなのはに歩み寄る。　そして、首根っ子を掴んで、体を浮かせ、腰に手をまわして肩に担いだ。
フェイトの「もう少し持ちかたがあるでしょ」という視線は無視。

「とりあえずアースラと連絡取ってくれ。　高町を休ませねぇと。
あと、いろいろ話したいこともあるしな」

うん、と頷いたフェイトはアースラと通信を始めた。
少し遅れてユーノとアルフがやって来た。
なのはを一旦2人に預け、怜治はスタンの回収に向かう。

ビルから飛び降りた時、空に輝く月が視界のすみに入る。
綺麗なはずの月が、禍々しい輝きを放っているように見えた。

第１８話　面接（前書き）

二週間ぶりです。
遅くなって申し訳ありません.

第１８話　面接

夜空を翔る四つの光があった。
近くで見れば、それが人が飛んでいるのだと分かるが，わざわざ確認する者はいない。

「今日はけっこー大物獲れたな」

「ああ。　しかし、あの状態から結界が抜かれるとは思わなかったな」

ヴィータの嬉しそうな声が夜に響き、シグナムが相槌を打った。
騎士たちはなのはが結界を抜くのと同時に戦闘を離脱していた。
目的の魔力の蒐集も、一人分だけとはいえ２０ページ近く埋まった。
助けに来た魔導師からも奪ってもよかったが、欲をかきすぎると足元をすくわれることになりかねない。　なにより、魔法杖の少女だけでも、数日分の蒐集量に匹敵したのだ。　戦闘を長引かせて、自分たちの情報を与える必要はない。

「ん？　どうしたザフィーラ」

ザフィーラの怪訝な表情を見て、シグナムが尋ねた。

「いや……あの自動二輪に乗っていた男……」

「むっ」

ザフィーラが口にした人間のことを思い出し、シグナムは顔をしかめた。　他のふたりも同様だ。

「確かに、あの子ひとりに引っかき回されたって感じね」

「ザフィーラは鼻血出すし、シグナムは轢かれるし」

「言うな。　あれは私にとって一生の不覚だ」

「極めつけは闇の書から魔力を奪い返した」

ザフィーラの言葉に騎士たちの顔が陰った。

奪った魔力を、持ち主の声で奪い返されるなど今までに例のない事態だった。　そして、怜治には他の魔導師とは異なる点が多すぎた。

杖型のデバイスだけでなく、術者が乗り込むデバイスを持ち、そのデバイス自身もかなり高度なＡＩを持っていた。

戦い方も魔導師というより自分たちに近いものがあった。　だが、術式は違った。

変換魔力を吸収して自分のものにし、青い翼は味方の魔力を回復させる。

「そういえばあの男、我らの事も知っていたようだった。　守護騎士という名も、我らが何を集めているのかも……な」

「おいおい、予知能力もあんのかよ。　あれホントに人間か？」

「もしや、　妖の類かもしれんな。　ならば私が不覚を取ったのも頷ける」

「いや、それはただのシグナムの不注――」

「違うぞシャマル。　断じて違うッ！」

夜空を疾走しながら口論を始める騎士二名。　だが、彼女たちの中で怜治に対する評価はまとまった。
戦い方や彼の言動などから判断された評価は――
できれば関わりたくない、いわばチンピラみたいなやつ――と。

魔法少女リリカルなのはA’ｓ　☆Ｔｈｅ　Ｒｉｄｅｒ☆　第3話　面接

「おお～見えてきた見えてきた！　すっげぇな～」
アースラのブリッジから怜治が感嘆の声を上げた。
「はしゃぐな。　子どもじゃあるまいし」
「いや、こういうのは男なら子供大人関係なく感動するもんだろ」
アースラの前方には巨大な要塞のような建造物があった。
中央の巨大な柱に、木の枝のようにいくつもの機械の柱が刺さっている。　それを覆うように環状の建造物が周りに浮いていた。　一見、まきびしのように見えた。
時空管理局本局。
クロノ達が所属する、通称“管理局”の本部だ。
本局は星が瞬くように光りを放っている。　それ全てが人工の光なのだから驚きだ。　全てが機械でできている。　さながら、人工の星だと怜治は思った。

アースラはドックに入ると、作業用のアームが伸びてきてそのまま修理に入る。
もともと、プレシア・テスタロッサの引き起こした事件――通称“P・T事件”――の際に負った損傷がまだ直りきらないうちに騎士たちによるなのは、怜治の襲撃が起きたため、修理を途中で投げたして来たのだという。
なのはは医務室で寝ており、フェイトとクロノは外で目を覚ますのを待っている。　怜治は待つのが面倒だと、局内の見学に向かった。
クロノが止めたが、リンディがＯＫした。　クロノは少し不満げだった。
リンディはエレベーターに乗り込み、エイミィが同行した。
ドアが閉まり、上昇を開始した。

「検査の結果、けがは大したことないそうです」

少しして、エイミィが口を開いた。

「ただ、魔導師の魔力の源、リンカーコアが異様なほど小さくなってるんです」

「そう。　じゃ、やっぱり一連の事件と同じ流れね」

「はい。　間違いないみたいです。　休暇は延期ですかねー、流れ的にウチの担当になっちゃいそうですし」

「仕方ないわ。　そういうお仕事だもの」

エイミィが残念そうに肩を下げた。　彼女は夏に休暇という名の出張任務があったが、怜治の戦闘の事後処理に引っ張りだこになり、余計疲れてしまった。　だから、今休暇を望んでいるのはほかでも

ないエイミィだった。
そこにこの事件である。　もしかしたら自分は休みという単語に嫌われてるんじゃないかと錯覚してしまうほどだ。
やがて、エレベーターが止まり扉が開いた。

「あ、そういえば怜治君の方はどうだったの？　彼も確か襲撃されたのよね？」

「えっとですね……」

エイミィが端末で怜治の検査結果を探す。　発見した。　驚きを通り越して呆れ顔になった。

「異常なしです」

「どこも？」

「どこもです。　無傷です。　健康そのものです」

ヒャッホウッ、スゲー！という陽気な声が聞こえてきた。　聞かなかったことにした。

「リンカーコアは？」

「むしろP・T事件の時より大きくなってます」

リンディは目を丸くした。　そして、すぐに思考の海に入った。
突然真剣な顔になった上司を見て、エイミィに緊張が走った。

「早いうちに、話しておいた方がいいかもしれないわね」

「？」

リンディの独り言の意味をエイミィは理解できなかった。

本局の内部はコロニーのように、ひとつの街のようになっている。ビルのように高い建造物が建ち並び、局員用の居住区をを歩けば街路樹が生えている。　天井を見上げると、機械の空に覆われ、そこを走る電気信号が夜空に浮かぶ星を思わせる。建ち並ぶビルの中にある一つに、当然医療施設もある。ナースキャップをかぶった女性の医療スタッフが廊下を歩くなか、彼女たちとは服装が違う者が一組廊下を歩いていた。

「いや、君の怪我も軽くてよかった」

「クロノ……ゴメンね、心配掛けて」

フェイトが頭を下げた。　長い金色の髪が揺れる。彼女の左手には包帯が巻かれていた。　骨に異常があるわけではないが、動かすたびに痛みが走る。

「君となのはで、もう慣れた。　気にするな」

クロノの言葉に、フェイトは苦笑した。

病室の中で、なのはは検査を受けていた。本格的なものはもう済んでおり、検査と言っても簡単なもので医師がバーコードリーダーのような機械でなのはの体を軽くスキャンす

る程度のものだった。
検査が終わり、医師が口を開く。
「さすが若いね。　もうリンカーコアの回復が始まっている」
笑顔で言われ、なのはの安堵した。
「ただ、しばらくは魔法がほとんど使えないから、気をつけるんだよ」
「あ、はい。　ありがとうございます」
病室の扉が開き、クロノとフェイトが入って来た。
「あ、ハラオウン執務官。　ちょっと、よろしいでしょうか？」
「はい、なんでしょう」
クロノは医師に促されて外へ出た。　病室にフェイトとなのはが残された。
沈黙が続く。　フェイトはこういう時何を言えばいいのか分からなかった。
友人を守り切れず、さらにはつい半年前まで交友関係が皆無だった彼女に、この状況でふさわしい言葉が分からない。
言葉が見つからず、フェイトの目が泳ぐ。
なのはも心配をかけてしまったっという罪悪感から、うつむいてしまっていた。
気まずい雰囲気の中、なのはは意を決して口を開く。
「フェイトちゃん……」

「なのは……」

互いの存在を確かめあうように名前を呼ぶ。

すると、急に緊迫した空気が霧散した。　少女たちの顔がゆるむ。

「あ、えっと……ごめんね。　せっかくの再会がこんなので……」

謝罪を口にするなのはの視線が、包帯を巻いたフェイトの右手に移った。

思わずフェイトは傷ついた手を隠してしまう。

「けが……大丈夫？」

「あ、ううん。　こんなの全然……それよりなのはが……」

「わたしも平気。　フェイトちゃんたちのおかげだよ」

げんきげんき！　と腕をまわすなのは。　だが、フェイトには無理しているのが明らかに分かった。　自分を心配させないためだろうということも。

フェイトの表情が陰る。

それを見てなのはが思わずベッドから起き上がった。　だが、すぐに足がもつれてフェイトに支えられてしまった。　患者ということで、今はパジャマのような格好だった。

なのはが苦笑した。

「助けてくれて、ありがとう。　フェイトちゃん」

――それから

「また会えてうれしいよ」

フェイトの目が大きく開いた。

「わたしも……なのはに会えてうれしい」

お互いの顎を互いの肩に乗せる形で抱きしめ合うふたり。
最初のきまずい空気は消え、再会の喜びに満ちていた。

だが

「もう済んだか？」

「「ッ！！」」

ビクゥッとふたりの肩が震えた。
声のした方を向く。
学ラン姿の怜治が病室の扉のすぐ横の壁にもたれる姿勢で立っていた。
片手にはどこで買ったのか缶コーヒーが握られていた。

「なんだまだなのか？　邪魔したな。　ほら続けて続けて」

「つ、続けるって何をですかッ！？」

「ていうかいつからそこにいたのッ！？」

「「フェイトちゃん……」「なのは……」のあたりから」

「最初っからじゃないですかッ！！」

「ドアが開く音しなかったよッ！？」

「そりゃクロノと入れ違いだったからな」

真っ赤になって叫ぶなのはとフェイト。　ただ、ふたりが離れることはない。

怜治はなのはが立てないだけだろうと思った。

「さて、からかうのはこのくらいにしといて……」

フェイトが非難の声を上げるが怜治は無視。

グイッと缶コーヒーの残りを飲み干す。

「ユーノに高町が目覚めたら連れてくるよう言われてる。　ついてきな」

薄暗い部屋でユーノがコンソールを叩く。

その様子をアルフがじっと見つめている。

ふたりの前には円柱形の台座があり、そこから放たれる光の中に待機形態のレイジングハートとバルディッシュがあった。　どちらも痛々しいひび割れがある。

ユーノはウィンドウに表示されたふたつのデバイスの状態を確認している。

扉が開き、怜治と私服に着替えたなのは、フェイトそして、クロノが入って来た。

「連れて来たぞ」

「なのは！　フェイト！」

「ユーノ君、アルフさん！」

なのはが2人に駆け寄る。　ユーノとアルフもなのはのことを心配していたのだろう。　ユーノは安心したかのように頷き、アルフの瞳は揺れていた。

なのはの中で皆にまた会えたことへの喜びが今になって込み上げてきた。

フェイトが自分の愛機が置かれた台座に近づく。　ひどく傷ついた相棒が目に入る。

「バルディッシュ……ごめんね。　わたしの力不足で」

「破損状況は？」

「正直、あんまりよくない。　今は自動修復をかけてるけど、基礎構造の修復が済んだら一度再起動して部品交換とかしないと」

ユーノの言葉にクロノが残念そうな顔をした。

今回の事件では相手が少なくとも四人いるというのに、こちらの最高戦力となりうる2人が戦闘不能になってしまったのだ。　状況は良くなかった。

クロノが怜治の方を向いた。

「今回の事件。　君に頑張ってもらうしかないな」

「別にいいけど、なんでそんなに残念に言うんだよ」

「夏の事を忘れたとは言わせないぞ」

クロノの視線が非難するように鋭いものに変わった。

「夏って……あれか。　エイミィが来たときの」

「そうだ。　君が山一つ消しかけたあれだ。　あれの始末書やらなんやらで、エイミィ泣いてたぞ？」

「俺は怪しい奴とっ捕まえただけなんだがな……」

怜治がぼやくがクロノの非難は止まらない。　怜治はうるさそうに耳をふさぐが、それがクロノに油を注ぐ結果となりさらに激しくなった。

「ねぇ、そういえばさぁ。　あの連中の魔法ってなんか変じゃなかった？」

クロノの小言が止んだと同時、アルフが言った。

「変ってどの辺りが？」

「魔法陣とか……使ってるデバイスとか」

「そんなに変わってたか？」

「まあ君だってその変わってる一人なんだからそう思うのも当然だろう。　あれは多分ベルカ式だ」

「ベルカ式？」

アルフが聞き返した。
なのはとフェイトが賛同するように頷く。
「その昔、ミッド式と魔法勢力を二分した魔法体系だよ」
ユーノの解説をクロノが引き継ぐ。
「遠距離や広範囲攻撃をある程度度外視して、対人戦闘に特化した魔法で優れた術者は“騎士”と呼ばれる」
「確かに、あの人ベルカの騎士って言ってた」
フェイトの言葉にユーノが頷き、説明を再開する。その顔には真剣さが帯びていた。
「最大の特徴はデバイスに組み込まれたカートリッジシステムって呼ばれる武装」
「儀式で圧縮した魔力を込めた弾丸をデバイスに組み込んで、瞬間的に爆発的な破壊力を得る。危険で物騒な代物だな……」
なるほど、と怜治は頷く。そんな物を使っているのならなのはの防御を簡単に突破し、レイジングハートとバルディッシュを破壊したことも納得が言った。だが、ひとつの疑問が脳裏をよぎった。
「なぁ、対人戦闘の魔法ってんならフェイトも同じじゃないのか？」
「いや、フェイトの場合は魔力を練り固めた刃を使うが、彼女たちはデバイス自体がそのまま武器になるんだ」

クロノの解説を聞き怜治はバルディッシュの姿を思い浮かべる。
そして、再度疑問を口にする。

「バルディッシュって斧じゃなかったか？」

「……あれで直接斬りつけてるわけじゃないから違うんだよ……多分」

急にクロノの言葉に自信が無くなっていった。　さらに追い込んでみようかと思ったが、状況が状況だけに、怜治は自嘲することにした。　そのかわり、ニヤニヤとしたイヤな笑みをクロノに注ぐ。
クロノはそれを逃れるように自分のデバイスを見ているフェイトの方を向いた。

「フェイト、そろそろ面接の時間だ。　なのは、怜治、君たちもちょっといいか？」

ガシャッという音ともに自販機から飲み物が吐き出された。
ユーノはそれをとってプルタブを開ける。
彼の隣にはアルフとスタンがいて、アルフも飲み物を口にしていた。
ユーノはスタンに室内でのなのは達のデバイスの状態やベルカ式についての話を聞かせていた。

『対人特化の魔法ねェ。　しっかし、レイジングハートもバルディッシュもヒドくやられたもんだな』

「うん。　でもエイミィさんが修理用の部品を発注してくれるって」

『いいねぇ。　オレも機関部の部品とか新品に変えたいよ』

「あんたの整備なんて誰もできないでしょ。　ロストロギアだし、触ったら死ぬし」

『だよな～。　やっぱレイジにデバイス整備の方を覚えてもらうしかないか』

「あ、ユーノ君たちここにいたんだ」

エイミィがやってきた。　手にはファイルが握られている。　おそらく、今回の事件に関する資料か何かだろう。

「レイジングハートとバルディッシュの部品、さっき発注してきたよ。　今日明日中には揃えてくれるって」

「ありがとうございます」

『仕事が早いねェ』

「まぁね～。　あ、そうそう。　さっき正式にこの事件、ウチの担当になったの」

「えっ、でもアースラは整備中じゃあ……」

アルフの指摘にエイミィが困った顔をする。

「そうなんだよね。　あ、クロノ君知らない？」

「なのはとフェイト、それに怜治を連れて面接だって」

「なんか、管理局の偉い人だそうですけど」

『レイジの奴……問題起こさなきゃいいけど』

スタンに大丈夫だよ、とはだれも言わなかった。

言えなかった。

広い応接室に、一人の老人が立って窓の外を眺めていた。

青い管理局の制服に身を包み、静かに外の風景を見ていた。

時空管理局顧問官ギル・グレアム。

それが彼の名前だ。

白髪が混じった髪をオールバックにし、もみあげと顎髭が繋がり、口ひげまで蓄えたその風貌は周囲の人間に、その未だ衰えない勇猛さを感じさせた。

応接室の扉が開き、クロノが怜治たちを連れて入って来た。

グレアムが頬笑みながら振り向く。

「クロノ、久しぶりだな」

「ご無沙汰しています」

挨拶をすませ、グレアムが座るよう手で促す。　テーブルにはすでに人数分のティーカップが用意されていた。

窓側の一人座りの座席にグレアムが腰を下ろし、それに向かい合う形で長椅子にフェイトとなのはが座る。　クロノは両方の間を取り持つように間に立った。　怜治は腰を下ろさず、なのは達の背後の壁にもたれかかった。

「……遠慮せず座ったらどうかね？」

「結構だ。　気にせず続けてくれ」

怜治の態度にクロノは顔をしかめるが、グレアムは頬笑みを崩さない。

怜治から視線を外し、フェイトに向ける。

フェイトは緊張しているのか、体が強張っているように見えた。

それを察し、グレアムは柔らかな口調で話し始める。

「保護観察官といってもまぁ形だけだよ。　リンディ提督から先の事件や君の人柄についても聞かされたしね。　とても、優しい子だと」

「あ、ありがとうございます……」

「君の事も聞いているよ。　とても前途有望な青年だとね。　松田怜治君」

「はっ、前途多難の間違いだろ？」

怜治の言葉にグレアムの表情が困ったものに変わる。

「もしや私は警戒されているのかな？」

「別に、信用してないだけだ」

空調で管理されたはずの部屋の空気が、一気に下がった気がした。

「グレアム提督は、クロノ君の指導係だった人なんだよ」

損傷したレイジングハートとバルディッシュの前で、エイミィがコンソールを打ちながら言った。

「歴戦の勇士。　一番出世してた時で艦隊指揮官、後に執務官長だったかな？」

「めちゃくちゃ偉い人じゃんっ！」

グレアムの経歴を聞いてアルフが驚いた声を上げる。

「うん。　でもいい人だよー。　優しいし」

『そんな人ならレイジもだいじょう……ぶじゃない気がしてきた』

「考えすぎじゃないかな？」

残念ながら、スタンの予感は的中していた。

高町なのはは急に緊迫し、冷え下がった空気に戸惑っていた。

さっきから口にする紅茶の味が全くしない。　リンディ並みの砂糖の追加を頼もうかと思ったほどだ。

彼女が戸惑う理由はもう一つある。　怜治の言動だ。

目の前にいるギル・グレアムはどこからどう見ても年上だ。

年上には敬意を払うよう常々、両親から言われてきたなのはにはありえない言動だった。

加えて、怜治は候補生とはいえもうすでに管理局の人間だと聞いている。　つまり、グレアムは彼の上司のようなものであるはずだ。

そんな人に対して、彼の言動は許されるものではないのではないだろうか。

ふと、自分の左右にいる人間に目をやる。

まず左を向く。フェイトも自分の面接と言う緊張も重なってか目が泳いでいる。

続いて右。直立不動の姿勢を崩さないクロノの視線が、鋭く怜治に向かっていた。ふざけるなと叫びたい衝動を押さえこむように歯ぎしりしているのが分かった。

最後に前を向き、グレアムに目を向けた。

信用してないと言われた時は驚きで一瞬目が大きく開いたように見えたが、今はまた最初の穏やかな表情に戻っていた。

「私は……そんなに怪しい人間に見えるかな？」

グレアムがゆっくりと言った。

言い方は穏やかだったが、目が笑っていなかった。だが、怒りは感じられない。むしろ逆にこれから怜治が何を言うのか期待しているような目だった。

怜治は壁にもたれたまま口を開いた。

「言い方が悪かったな。初見の奴は信用しないって意味だ。別にあんただけの話じゃねぇよ」

「まぁ確かに、軽々しく誰でも信用すれば良いというものではないがね……」

グレアムがゆっくりと紅茶を口に運ぶ。

「私はそこのクロノの指導教官だった男だ。彼の顔を立てる……という言い方もおかしいが、それでは信用できないかね？」

「クロノの恩師ってか？　余計信用できねェな」

「ちょっと待て、それはどういう意味だ」

「そのままの意味だよ」

「だからどういう意味だとッ！！」

怜治とグレアムの問答が、怜治とクロノの口げんかになってしまった。　いや、ただ単純にクロノが怜治に噛みついているだけなのだが。

いつ間にか冷え切った空気が霧散していた。　紅茶から上がる香りが心を和ませる。

「く、くくくく……」

グレアムが笑いをこらえていた。　クロノのこんな姿をみるのがおかしくてたまらないのだろう。

クロノは恩師の反応に唖然として立ちつくしてしまった。

グレアムの奇行が治まり、グレアムは続いてなのはについてのファイルに目を通し始めた。

フェイトだけでなく、なのはの面接も兼ねていたようだ。

少しして、グレアムの文字を読む目が止まった。

「なのは君は日本人なんだね。　懐かしいな、日本の風景は」

グレアムが思い出に浸るように目をつぶった。

なのはの口から「えっ」と驚きの声がもれた。

「私も君や怜治君と同じ世界の出身だよ。　イギリス人だ」

「えぇっ!?　そうなんですか!?」

「あの世界の人間のほとんどは魔力を持たないが、稀にいるんだよ。私や君、怜治君のように高い魔力資質を持つ者が」

グレアムが笑いながら怜治に目を向けた。　怜治はうっとおしいといった表情で顔をそらす。　少し残念そうな顔をしてから、グレアムはファイルに目を戻した。

「しかし、なのは君は魔法との出合い方まで私とそっくりだ」

グレアムは語り始める。

子どもの頃、森で傷ついた管理局員を助けたことがきっかけで、魔法の存在と自分の中の魔法資質に気付いたらしい。

管理局に入った詳しい経緯は語らなかったが、やはり自分かなのはのような事があったのだろうと怜治は推測した。

グレアムはファイルをテーブルに置き、フェイトに目を向けた。

「フェイト君。　君はなのは君の友達なんだね」

フェイトは頷いた。

「約束してほしいことがある。　一つだけだ。　友達や自分を信頼してくれる人の事は決して裏切ってはいけない」

穏やかな表情から一転、厳格な雰囲気を纏ってグレアムが言った。

そこにいたのは紛れもなく歴戦の勇士と称されるにふさわしい風体だった。
グレアムは続ける。
「それができるなら、私は君の行動について何も制限しないことを約束する。　できるかね？」
「はい。　必ず」
フェイトの返事は短く、強い意志が込められていた。
「うん。　良い返事だ」
こうして面接は終わり、怜治たちは部屋を出る。
なのはとフェイトは出る際頭を下げ、クロノが最後に出る際にグレアムの方に振り返る。
「提督。　もう聞き及びかもしれませんが先程、自分たちはロストロギア“闇の書”の捜索捜査担当に決定しました」
「そうか君がか。　言えた義理ではないかもしれんが、無理はするなよ」
「大丈夫です“急時にこそ冷静さが最大の友”。　提督の教えどおりです」
「ん、そうだったな」
クロノは頭を下げ、部屋を後にする。
一瞬、怜治はグレアムと目が合った。

「怜治君。　この事件、君の力が必要になるだろう。　期待しているよ」

怜治は答えず、ただグレアムの眼を見続ける。
扉が閉まる。　怜治はグレアムへの警戒を最後まで解かなかった。

部屋を出ると、クロノはアースラの様子を見てくると言って別れた。
　怜治となのは、そしてフェイトはとりあえず、スタンやユーノ達と合流しようと本局内の廊下を歩く。
なのはとフェイトは談笑しながら歩き、怜治はまだ見足りないというようにキョロキョロと辺りを見渡している。
少しして、なのははフェイトの様子がおかしいことに気付いた。
自分と話しながらも、時折視線がチラチラと怜治の方に注がれているのだ。　まるで話しかけるタイミングを計っているようだった。
怜治は気付かず、窓の外に広がる風景に魅入っていた。
ここは自分が聞くしかないだろう。
そんな使命感めいた感情に従い、なのはは怜治の方を向く。

「怜治さん。　フェイトちゃんが何か話しがあるようなんですけど」

「な、なのはっ！？」

フェイトは慌てたような声を出す。
怜治がんーっ？となのはの方を向いて、すぐフェイトに視線を移した。

「話ってなんだ？　フェイト」

「え、えっと……ね。　……その……」

歯切れの悪い言葉を並ぶが、決心がついたのかフェイトは怜治と視線を合わせる。

「あの……レイジは『初見の奴は信用しない』って言ってたけど、その……初見じゃなくてもう何回も会って話して、戦ったりもしてるわたしは……えっと……信頼……されてるの……かな？」

せっかく上げた顔をまた下げ、フェイトの言葉に連動するようにもじもじと手が動かし、足がつつつーっと円を描く。

よく見ると若干顔が赤く染まっているのが分かった。

怜治はため息を吐きながら膝を曲げ、フェイトと目線を合わせ、小さな肩に手を置く。

「フェイト、んなもん聞かなくたって分かるだろ……」

「レイジ……」

フェイトの顔がパアッと光輝く笑顔に変わる。

怜治はうんうんと頷きそして――

「いきなり斬りかかってくる奴　（※第５話参照）　を信用すると思うか？」

――満面の笑みで言い放った。

「痛ってぇ……」

「それは自業自得じゃないかな？」

エレベーターの中で、エイミィが呆れて言った

怜治の言葉が余程ショックだったのか、フェイトは「バカーッ」と涙の粒を散らしながら魔力を込めた拳を怜治の腹に思いっきり叩きこんだ。

予想以上に痛かったのか、未だに怜治はお腹を押さえている。

「軽い冗談のつもりだったんだがな……」

「ひどいです。　質が悪すぎます」

「怜治君は乙女心が分かってないねェ」

なのはとエイミィが非難するが、男の怜治に乙女心が分かるはずもない。

ちなみに、フェイトは今ここにはいない。　怜治に鉄拳制裁を加えた直後、リンディとエイミィと偶然合流し、その際リンディがフェイトに話があると言ってリンディとフェイト、怜治、エイミィそしてなのはの二組に別れたのだ。

「そういやリンディに会った時のフェイト、なんか余所余所しかったな」

「ああ。　フェイトちゃん、ウチの艦長と親子にならないかって話があるんだよ」

「リンデさん提督と親子って……」

「養子縁組か？」

「まぁ、まだ本決まりじゃないんだけどね。　プレシア事件でフェイトちゃん、天涯孤独になっちゃったし、艦長の方からウチの子になる？って……」

「天涯孤独って、アルフがいるだろう」

「まぁそうなんだけど、プレシアの事とかあるし今は気持ちの整理がつくのを待ってる状態だろうね」

そこまで言って、エイミィがアッという声を出して怜治の方を向いた。

「そう言えば怜治君の両親ってどんな人？　夏に私が行った時は会えなかったけど……」

怜治の顔が曇る。　それは一瞬ですぐに戻したがエイミィは見逃さなかったようだ。

エイミィは取り返しのつかない失敗をしたかのような表情をしていた。

「えっと……もしかして私地雷踏んだ？」

「いや、別に……俺の両親だっけ？　１０年くらい前にお互い別の相手つくって俺をジジイに預けて消えたよ。　どっちももう海鳴にいねぇし手紙一つ来たことねぇから今なにしてるかなんてわかんね

ェな興味もねぇけど」

怜治は汚物を吐き出すように一気に言った。

視界の端で、なのはが驚いた表情をしているのが見えた。　エイミィはそれに加えて自分のやった事を後悔しているような表情もしていた。

怜治も言った自分に少し驚いていた。

自分の過去を話すとほとんどの人間は同情や憐みを含んだ視線を向けてくる。　だが、怜治はそんなものを望まない。　いくら同情されてもなかったことにはならないしあの時の傷みが癒えるわけでもないのだ。　そして、この話は怜治にとって親友の鉄平や正義にもしていないのだ。　そんな話をなぜ彼女たちにしたのだろうか。

（俺がこいつらをあいつら異常に信頼してるってことか……？）

怜治の疑問に答える者はどこにもいなかった。

エレベーター内の暗く重い空気は目的のエリアで止まり、外に出ても付いてきた。

怜治は話をフェイトの養子に戻すことにした。

「しっかし、フェイトが養子になるとクロノが兄貴か……」

「あ、そうそう！　あの2人結構気が合うみたいでさ、いい兄妹になると思うよ！」

「そ、そうですね！　わたしもそう思います」

怜治の意図を察したのか、他の2人も少々ボリュームを上げて話す。

本局内の見学をでき、徐々に重い空気は霧散していった。

「玲治君。　ちょっといいかしら？」

「ああいいぜ。　ちょうど俺も聞きたいことがあったんだ」

玲治、なのはを加えたアースラスタッフのメインスタッフが集められた一室で、リンディが話しかけた。

先程、今後の捜査の方針が通達され正式にアースラスタッフがロストロギア“闇の書”に関する魔導師襲撃事件の捜査を担うことになった。　その際、司令部を海鳴市内に、しかもなのはの家の近くになったということで今は皆お祝いムードである。　喜ぶなのはとフェイトを囲むように皆笑顔であった。

そんな賑やかな空気に背を向けて玲治はリンディとともに別室に入った。

「実は、あなたに伝えなければいけないことがあるわ」

「俺に妙な力があるってことか？」

玲治の言葉にリンディの眼が大きく開かれた。

予想的中とばかりに玲治がほくそ笑む。

「自覚があったということかしら？」

「いや、さっきギル・グレアムに妙な事を言われたんでね。　そう思っただけだ」

そう。　先程の面接で、グレアムは怜治に向かって「君の力が必要になる」と言った。
あの場には怜治より魔力の高いなのはやフェイトがいたにもかかわらずだ。　考えすぎかもしれないが、グレアムを信用してない怜治には気になって仕方ない事だった。

「そう。　だったら話が早いわね」

息を吐き、リンディが真剣な表情で続けた。

「怜治君。　君には全てのロストロギアを使いこなす力を持っています」

怜治の顔に驚きが広がっていった。
リンディは続ける。

「これは希少技能（レアスキル）の中でもとりわけ異質なもので、管理局では“特異点”と呼ばれています」

怜治は何も言わず、リンディの言葉に耳を傾けている。

「実際、あなたはスタン君という魔導二輪、ジュエルシードを完全に制御下に置いているわ。　そして極めつけは……」

「闇の書に奪われたはずの魔力を奪い返した……か」

リンディが頷いた。

「あれを見て上層部も確信したわ。　あなたには“特異点”の資質があるということをね」

「それで俺をどうする？　解剖でもして研究するか？」

「あなたの今後の態度次第と言ったところです。　もっとも、私が絶対にそんなことさせません」

「そりゃどうも」

「怜治君。　もう少し真剣に聞いてください」

リンディの眼が細くなる。　どうやら怜治の飄々とした態度に少々ご立腹のようだ。

「あなたがグレアム提督にどんな態度で臨んだのかはクロノ執務官から聞いてます。　あなたの力は、その気になれば世界征服なんて馬鹿なことも実現可能にするものです」

「だから脅威扱いされて消されたくなきゃ管理局にしっぽ振れってか。　そんでもって気に入らなかったら消す……か？」

「先程も言いましたがそんなことには私がさせません。　ですが、そうなる可能性も決して０ではないということを覚えておいて下さい」

「分かってるよ。　俺は世界征服とかそんなもんに興味ねぇって」

話は終わり、怜治は部屋を出ようとする。　だが、扉の前で足を止めた。

「ちなみにさ。　俺が“特異点”だってのはどんくらいの奴が知っ

てんだ？」

「そうね。　あなたが知っている人の中では私にクロノ、グレアム提督の三人よ」

「なるほどね。　どうも」

やっぱり信用できねェなあのジイさん。

そう静かに呟きながら怜治は部屋から出て行った。

第１９話　引っ越し！　再会！　再戦！（前書き）

三週間ぶりの投稿……ｏｒｚ

本当すいません。　今月は色々ありすぎました。

第19話　引っ越し！　再会！　再戦！

「「わぁーーーーーーーっ！！」」

高層マンションの一室から、なのはとフェイトの歓喜の声が木霊する。

「すごい、すごい近所だッ！」

「ホント？」

「うん。　ほら、あそこがわたしんち！」

なのはが指さした方向に、翠屋の看板があった。

2人ともの近所に住むことになった子が嬉しいのか窓から身を乗り出して騒いでいる。

「盛り上がってんなー、上」

『（引っ越しって子どもにゃ結構な一大イベントだもんな）』

上から降ってくる歓喜の声を聞きながら、怜治は引っ越し業者のトラックから冷蔵庫が梱包された段ボール箱に手をかける。　全身に魔力を巡らせ筋力を強化する。

ふん、と鼻を鳴らしながら腕を上げ、自分より背の高いダンボールの箱を持ちあげる。

周りにいた引っ越し業者の人間から歓声が上がった。

「すげーな兄ちゃん！！」

「ウチで働いてみないかい？」

「ははははっ、考えとくよ」

怜治はダンボール箱を抱えたままエレベーターに乗り込み、司令部兼ハラオウン一家の別宅となった部屋に向かう。

目的の部屋まで一本道となったところで、開けっ放しになった扉の前に人がいるのに気付いた。

数は2人、近づくにつれてその容姿がはっきりしてくる。

訪問客はどちらも少女だった。　ひとりはフェイトよりも濃い金髪で長い髪の一部を結んだ部分が、ピョコンと横から可愛らしく飛びだしている。

もう1人はウェーブがかかった紫色の長い髪をした子で、頭にヘアバンドをつけている。

お隣さんだろうかと思っていた矢先、なのはとフェイトが出てきて談笑を始めた。

「高町の知り合いか……」

怜治の声が聞こえたのか、紫色の髪の少女がこちらの方を向いた。

彼女に続いて他の三人もこちらを向く。

怜治は扉の前まで来て足を止める。

「……あっ」

紫髪の少女が驚いたような声を出した。

「どうしたの？　すずか」

「えっと……お久しぶりです」

「「「えっ？」」」

すずかと呼ばれた少女に四人分の視線が注がれた。

魔法少女リリカルなのはＡ’ｓ　☆Ｔｈｅ　Ｒｉｄｅｒ☆　第４話
引っ越し！　再会！　再戦！

「えっと……どっかで会ったっけか？」

「あ、はい。　……二年前に……一回」

二年前、と言われて怜治は記憶を辿る。
お久しぶりといったということはすれ違ったとか遠くから見たことがあると行った類ではないはずだ。
案の定、すぐに思い出すことができた。
二年前、夕方、人通りの少ない路地といった当時の光景が脳裏をよぎる。

「あぁあぁ、あん時の！　思い出した思い出した」

のどに引っかかった魚の骨が取れたかのような解放感が湧き上がった。
すずかも思い出してくれたことが嬉しいようだった。

「元気そうだな。　……取りあえずコレ入れてぇんだが、いいか？」

「あ、はいすみません。　えっと……それじゃみんなウチのお店いこ！」

なのはの提案に他の三人も同意し、怜治の横をすり抜けるように出かけて行った。

開けっ放しの扉をくぐると、私服姿のリンディが出迎えた。

「手伝ってくれてありがとう怜治君。　やっぱりこういう時は男の人がいてくれると助かるわぁ」

私もなのはさんの両親にあいさつしてくるわ、と言ってリンディも出て行った。

「まぁ確かにクロノじゃ無理だろうな……」

クロノも魔力があるのだから身体強化ぐらいできるだろうが、もともと小柄なクロノでは怜治ほどの効果は期待できないだろう。

部屋に入り、持ってきた箱を置く。　体をほぐすようにねじりながら部屋全体を見わたす。

フローリングされた床に白い壁、詰めれば１０人は座れるであろうソファー、二階に続く階段。　窓からは海鳴市が一望できた。

「管理局って給料いいんだな……」

部屋というより、一軒家を突っ込んだような内装についそんな言葉が出てしまった。

「あ、怜治君ありがとー。　それキッチンの方に持ってきてくれる？」

「はいよ」

再び体を強化。　ダンボールから冷蔵庫を出し、キッチンへと入る。
エイミィが指定した場所に冷蔵庫を置き、配線を行う。
作業は五分程度で終了した。

「いやー、やっぱこういう時力持ちの男の子がいると助かるねー」

「悪かったな非力で」

仏頂面のクロノがキッチンに入って来た。
手に端末を持っているから、機材のチェックでもしていたのだろう。

「怜治、君に言っておきたいことがある」

クロノが真剣なまなざしを怜治に向けた。

「艦長から聞いたと思うが、君の持つ力は今回の事件において切り札になるかもしれない」

「だろうな」

「だから言わせてもらう。　Ｐ・Ｔ事件の時のような独断専行はやめてほしい」

「……」

「なのはを襲った奴らも君の力の危険さを体感したはずだ。　だから、奴らはきっと君を優先して潰しに来る」

「……クロノ」

「聖王教会からの預言はエイミィから聞いてる。　世界を滅ぼす……。　この預言は必ず覆さないといけない。　そのためにも君には勝手な行動は慎んでもらう」

「……クロノ」

「あぁ分かってる。　君の住む世界だ。　君のやる気は十分わかってるつもりだ。　でもだからこそ――」

「クロノッ！！」

ビクッとクロノの肩が震える。
沈黙した空気がキッチンを包んだ。

「何を焦ってる？」

「なんだと……」

クロノが怪訝な表情をする。

「何を焦ってるかだって？　決まっているだろ。　こうしている間にもあの騎士たちはリンカーコアを集めてる。　預言通りに事が進んでいるんだぞっ！！　落ち着いていられるわけないだろ！！」

「それだけか？」

クロノが口を噤(つぐ)んだ。
怜治は確信した。　クロノは闇の書と因縁のようなものがあるのだ

と。　だからクロノは焦っているのだ。　因縁の相手がすぐそこにいるのだ。　落ち着いていられる人間の方が少数だろう。

「言いたくねぇんなら聞かない。　でも、お前は落ち着いていろ。冷静でいろ。　アツくなって突っ込むのは俺の仕事だ」

クロノに近づき、少年の肩を軽く叩く。

「お前の仕事は後ろの方で皮肉の一つでも言うことだ」

そう言って怜治はキッチンから出る。

「生意気なことを……」

背後から声が届いた。　クロノだ。

「僕は後ろに控えているつもりはないぞ。　むしろ、魔導師歴半年足らずの君こそ後ろの方にいるべきだ」

「さっき俺の事切り札とか言わなかったか？」

眉をひそめて振りかえると、そこにはクロノの不敵な笑みがあった。さっきまでの焦燥感は消えていた。　怜治の知っている生意気、もとい冷静沈着を貫く執務官としてのクロノがそこにいた。

「なに、切り札は君だけではないということだ」

「あぁそうかい。　じゃあ精精（せいぜい）俺に頼るはめにならないよう頑張りやがれチビ助」

「当然だ。　君に言われるまでもないよド素人」

「ハハハハハ……」

「フフフフフ……」

「えっと……ケンカするなら外でやってもらうと助かるかなぁ？」

エイミィの願いを無視され、ふたりの間で死合開始のゴングが鳴った。

「……なんかあったんですか？」

「いや、なんでもない」

なのはに頬についた青あざについての問いに、怜治は素っ気なく答えた。

それでも、なのはを始めとした四人分の奇異の視線は止まない。

怜治は今、なのはの実家でもある喫茶翠屋に来ていた。

店内からはリンディがなのはの両親との話声がわずかに聞こえている。

クロノとの取っ組み合いはエイミィによる怒りの一撃（フライパン）で終止符を打った。　痛みに悶絶していると、頬に青筋を立てたエイミィにフェイトへの届け物を命令――もといお願いされたのだ。　頼まれた荷物は包装紙の上からリボンのついた平たい箱で、それは脇に抱えている。

「ほい、届け物だ」

「何？　これ」

「俺は渡されただけだからな。　開けてみりゃ分かるだろ」

んじゃ、と立ち去ろうとするが、急に足が止まった。　いや、止められた。

振り向くと、太陽のような濃い金色の長い髪の少女が怜治の袖を掴んでいた。

相手に勝気な印象を与えるであろう強気な瞳が怜治を射抜く。

「……なんか用か？」

「すずかとどんな関係なんですか？」

ブフッとすずかの口からレモンティーが吹き出た。

少女は一瞬そちらに目を向けるが、すぐに怜治に視線を戻す。

「それで、どんな関係なんですか？」

「ちょ、アリサちゃん何言ってるの！？」

「いいじゃない。　わたしが知らなくてすずかが知ってる人って珍しいんだもん。　それに、なのはとフェイトも気になるでしょ？」

アリサと呼ばれた少女は他の2人にも話を振る。　取りあえず仲間を増やして包囲するつもりらしい。

話を振られた2人はえっと…、と歯切れの悪い言葉しか出ない。

無理して聞く気はないが、気になるのは確かなようだ。

怜治はアリサからすずかへ視線を移す。

「なんかお友達はこう言ってっけど、話していいのか？」

怜治の問いにすずかは困った顔で首をかしげるだけだった。彼女としては話すのに抵抗があるようだ。

そう判断し、怜治は再びアリサに視線を向ける。

「当のご本人は話していいか迷ってるみたいだぜ？」

「むぅ……」

アリサは眉をひそめてすずかを見る。その瞳に非難の色はない。

隠し事をされて少し悲しいという感情が見て取れた。

怜治の袖をつかむ力が緩み、怜治は解放された。

「まぁあれだ。本人が自分から話してくれるのを待つのも友情じゃねェの？」

自分で言った後、怜治自身も友人二人に魔法の事を隠していることを思い出した。

アリサへの言葉が、自分のしていることの言いわけのように聞こえてしまった。

不機嫌さが顔に出てしまったのか、なのはとフェイトが少し怯えた表情をしているのに気付いた。すぐに思考を止め、表情を変える。

話題を変えようとフェイトに届けた箱を開けようと提案する。

皆同意し、箱のリボンを解き、包装紙を破って開ける。

「わぁ……」

なのはの口から感嘆の声が漏れた。
アリサとすずかも嬉しそうに目を輝かせており、フェイトが驚きの表情をしていた。
怜治も彼女たちの頭の上から覗き込む。　ほぉ、と感心したような声が出た。
箱の中には白いワンピースタイプの学生服が入っていた。
聖祥大学付属小学校――なのはが通っている小学校の制服だ。

「これって……！」

フェイトが箱を抱えて翠屋店内に入っていった。
なのは達も後に続く。

「……、まぁそういうことなんだろうな」

フェイトはこれから、なのは達と同じ学校に通うのだ。
店内から聞こえる声に少女たちの歓喜の色が加わった。
用は終わったとばかりに怜治は踵を返し、クロノ達がいるマンションへと戻っていた。

マンションに戻るとエイミィが入口に立っていた。
怜治が戻って来たことに気付くと、真っすぐに向かってきた。

「怜治くーん！　ちょうどよかった！　ちょっとスタン君部屋まで運んでくれない？」

「スタンを？」

「そう！　スタン君をっ！」

エイミィの要望通りスタンを部屋に運ぶと、部屋の様子が一変していた。　部屋の照明が落ち、代わりに部屋中に展開したモニターに映る画像や映像、文字が光を発している。
そんな薄暗い部屋の中にクロノが神妙な面持ちで佇んでいた。
クロノが見ているモニターには先日の騎士のひとりが分厚く、中央に金色の剣十字のついた本を抱えて飛んでいる映像が映っている。

「ロストロギア“闇の書”の最大の特徴は、そのエネルギー源にある」

聞いてもないのにクロノが解説を始めた。

「闇の書は魔導師の魔力と魔法資質を奪うために、リンカーコアを喰うんだ」

「知っているよ。　実際に一回喰われたからな」

奪い返したけどな……、と怜治が小さな声で付け加えた。

「だが、なのはのリンカーコアは喰われた。　そして、これと同じような事件が多数起きている。　闇の書は蒐集した資質に応じてページが増えていく。　そして、最終ページまで全て埋めることで完成する」

「完成すると……預言通りのことが起きるの？」

「少なくとも……碌なことにはならない」

「でも、大人しくそうさせるつもりはねぇんだろ？」

「当然だ。　そして、そのためには一刻も早いなのはとフェイトの復帰が望まれる」

遠まわしに自分たちでは力不足だと言われている気がしたが、怜治は否定はしない。

自分は一騎当千の魔導師ではない。　ならば、せめてあちらと同じ数だけの戦力をそろえたいと思うのは当然の判断だ。

自分の無力さに絶望するのはいつでもできる。　ならば、今はその無力な自分でもできることに集中するべきだ。

心の奥で自分に言い聞かせながら、怜治はクロノに向かって問いを投げかける。

「んで？　スタンをここまで連れてこさせた理由は何だ？　現状説明のためじゃねぇんだろ？」

「当然だ。　スタンには、一デバイスとしての意見を聞いてみたいことがあるんだ」

クロノがコンソールを操作する。　それに合わせてモニターが上下前後左右に移動する。　やがて、別のモニターがひとつ、スタンの前に引き出された。

モニターに映る文字は現在修理中のレイジングハートとバルディッシュについてのものだった。

怜治は横から覗き込むようにモニターに目を通す。　エリシオンの

おかげで、管理局で使われている言語については概ね理解できていたので、苦もなく読み進める。　変えた部品、修理工程などが細かく記載されていたが、ある文字で眼の動きが止まった。

「エラーコード？　足りない部品があるってことか？」

一通り読むと、ニ機の修理は終わっているのだがどちらもまだ不完全と判断しているようで、頻りにある部品を要求しているらしい。

「足りない部品、というより加えたい部品、と言ったところかな」

クロノがコンソールを操作すると、エラーコードの部分が拡大された。

クロノの傍らに立ったエイミィが要求された部品名を読み上げる。

「ＣＶＫ－７９２、ベルカ式カートリッジシステム」

怜治が驚いた顔でクロノを見る。　執務官は静かに頷く。

「ニ機ともこのメッセージを出したまま他のコマンドを一向に拒否しているらしい。　それに困ったメンテナンススタッフから相談が来たんだ。　要求通りこの部品を組み込んでいいのか、と」

「組み込んでいいのかって……、悩むことなのか？」

「当然だ。　カートリッジシステムは圧縮した魔力を体に入れる。つまり」

『デバイス自身にも、術者の嬢ちゃんたちにも、かかる負担が大きくなる。　せっかく直したのに、わざわざ壊れる危険性を増やして

いいのかってことだな』

「そういうことだ。　そこで君の意見を聞きたい。　君がいた次元世界“シェルコ”だったね。　あそこはデバイス技術に関して特化した世界だと聞く。　そこの出の君なら、僕たちよりこの手の知識は深いと踏んでいるのだが？」

クロノの挑むような問いに、スタンは考え込むように車体を揺らす。

やがて、考えがまとまったのか揺れが止まった。

『短期的に見ればオススメ。　でも長期的に見ればその逆だ』

「理由は？」

『まず、魔法体系には大きく分けて、“あらゆる条件下でもある程度の成果が見込めるもの”　と“特定の条件下で絶大な成果を上げることができるもの”のふたつに分けられる。　この場合、ミッド式は前者、ベルカ式は後者だな』

スタンの声に合わせてヘッドライトがチカチカと信号を送るように点滅する。

『ベルカ式の特定の条件下ってのは対人戦闘。　武器型のアームドデバイスで敵を直接ブッ叩くわけだから、当然強度は高く造られ、扱う術者も体を鍛えてるからカートリッジの圧縮魔力での負担もさして問題にならない。　まぁ二、三日不眠不休で戦ってたら別だけど』

スタンの解説に、皆静かに耳を傾ける。

スタンは続ける。

『対して、ミッド式は魔力伝導率を重視するし、　直接ブッ叩くなんてことする奴、レイジ以外まずいないからな。　物理的な強度に関しちゃ敵さんよりも若干劣る。　嬢ちゃんたちのデバイスが壊されたのもこのあたりが原因かな』

「成程。　では、短期なら良くて、長期は駄目というのは？」

『単純に嬢ちゃんたちの体が持つかってことだ。　デバイスに関しちゃ、フレームを強化するとかでどうにかなるが人間の体ってのは一朝一夕で丈夫にはならねェし、嬢ちゃんたちはまだ9歳だ。　まだ身体ができてねぇ。　なのは嬢に至っちゃ魔導師としての訓練なんてしてないしな』

「俺見たく魔力で強化するってのは？」

『レイジの強化は筋力とか視覚だろ？　圧縮魔力での負担は神経系に来るもんだ』

だから無理っ！とスタンは怜治の意見を切り捨てる。

「では、ニ機の改良は止めるべきか？」

『この事件を長期化するつもりならな。　でも、そう言ってる暇はないんだろ？』

当然だと言わんばかりにクロノが頷く。

事件を長期化させるということは預言通りの滅亡が来るということだ。　第一、長期化させてよい事件というものがあるのだろうか。

『簡潔に言うとだ、とりあえずデバイスたちの要求通りカートリッジシステムは導入する。　そんでもって、大量の人員をぶつけて速攻解決して、嬢ちゃんたちをじっくり休ませる。　ってとこだな』

「大量の人員というと……、一個師団か？」

『おいおい相手は一騎当千、対人特化のベルカ騎士だぜ？　ぶつけるなら艦隊で欲しいね』

「……無茶言わないでくれ」

「まぁオッケーだされても困るがな。　預言回避出来ても海鳴が消し飛びそうだ」

「なんとか……中隊ぐらいは引っ張ってみる」

『となると……、レイジ達にその分頑張ってもらうしかないわな』

「おいおい、戦艦並みの戦いをしろってか？」

『大丈夫、大丈夫。　カートリッジ使ったなのは嬢なら戦艦二、三隻分ぐらいにはなるだろ』

スタンの言い分に怜治の口から思わずため息が漏れた。
戦艦より強い９歳児というのはどうなんだろうか。　怜治の知っている限り、戦艦と戦えるのはＶアンテナつけて核エンジンとか太陽炉とか積んだ機動戦士ぐらいしか思いつかない。
そう思いつつも、頭の中で想像してみる。

魚群を思わせるような艦隊が空を飛ぶ。
それに迷いなく突っ込み、なのはは砲撃を放ち、フェイトが金色の刃を振るう。
戦艦が次々と炎を上げて堕ちていく。周囲の船にも衝撃と恐怖が駆け巡る。
混乱に陥った艦隊の真っ只中を縫うようになのはが飛ぶ
艦隊が弾膜を張るも、少女たちは桜色と金色の軌跡を残して全てをかわす。
やがて、一隻の船のブリッジになのはが張り付き、愛杖を構える。
フェイトも同様に黄金鎌を構える。乗組員の顔に絶望と恐怖を張り付く。
なのはの魔法杖の先端に膨大な魔力が集まり、フェイトの鎌には雷光が迸る。
艦隊が二色の光に包まれた。そして……

「あれ!?　違和感が全くねぇっ!!」

クロノもエイミィも、怜治の言葉を否定することができなかった。

夜。
黒いカーテンに覆われた空には星が瞬き、地上は人工の電気による光が照らす。
建ち並ぶビルの一つの屋上で、白いコートに紫色のマフラーを巻いたシグナムが街を見下ろす。
剣の騎士の顔には哀愁があった。
いつから、大地はこんなにも眩しくなってしまったのだろうか。

いつから、夜空の星はあんなにも小さくなってしまったのだろうか。
シグナムの知る夜空の星はもっと大きく、綺麗だった気がした。
そして彼女が知る大地はもっと――
そこまで思い出して、シグナムはかぶりを振って思考を止める。

「この眩しさは平和の証なのだろう。　あの頃とは違い、優しい光だ」

「お前の口からそのような言葉が出るとはな」

シグナムは声が聞こえた方向――自らの背後――を視線だけ向ける。
青狼の守護獣・ザフィーラがいた。　その隣には丈長のコートとケープを合わしたインバネスコートを着たシャマルが静かに佇んでいた。

「……盗み聞きか？　悪趣味な」

「あなたが勝手に呟いてただけでしょ？　気配に気付かないなんてシグナムらしくない」

「そうだな……すまない」

「無理もない。　これほど穏やかな日々を過ごせば私とて気が緩む」

そうだな、とシグナムが笑みをこぼす。
この世界、この時代、そして、あの主の下に召喚されてから騎士たちは笑うことが多くなった。　かつての彼らは笑うどころか、怒りも悲しみもどんな感情も表に出したことはなかった。　だが、今は素直に感情を露わにしている。
これもすべて今の主のおかげだと思う。

騎士が今望むは主との穏やかな日々を続けることだった。
そのために――

「今日も蒐集にいくぞ！！」

バァーン！！と扉が開き、赤毛の少女の声が響いた。
2人と一匹の視線が集中する。

「ヴィータか、主の様子はどうだ？」

「ぐっすり寝てるよ」

ヴィータは仲間の下に近づきながら、首から下げた鎖に繋がったミニチュアのハンマーを握る。

「さっさと行くぞ！　ちゃっちゃと完成させて、ずっと静かに暮らすんだ」

後に続くようにシグナムが懐から、同じく鎖に繋がったミニチュアの剣を取り出す。　シャマルも鎖に通した４つの金の輪を掲げる。
騎士たちの足元に各頂点に円が重なった正三角形の魔法陣が展開。
　中央に剣十字の紋章が回転する。
シャマルが闇の書のページを確認する。　全６６６ページの空白はすでに半分以上が埋まっている。　やはり、先日のなのはから奪ったリンカーコアが大きかったのだろう。　怜治という若干のイレギュラーはあったが、決してペースは遅くない。　この分なら年が明ける前に闇の書は完成するだろう。
シャマルが皆を見わたす。　騎士たちは皆、私服から騎士甲冑へと姿を変えていた。

「それじゃ、夜明け時までにまたここで」

「ヴィータ、あまり暑くなるなよ」

「わーってるよ」

屋上から四つの光が四方に飛び去った。

騎士たちは再びリンカーコアを奪うために次元を飛ぶ。

主のために、この平穏を続けるために、騎士たちは飛ぶ。

魔導師（なのはたち）は騎士たちの思いを知るために、魔導騎士（シグナムたち）は心から大切な物のために、そして魔導騎兵（れいじ）は自分の道を貫くために、戦いへと身を投じる。

翌日、怜治は通常通り高校に登校した。

ミーティングの末、シグナム達の動きはクロノ達が追うため、それまで怜治はいつも通りの生活を続けながらの待機となった。なのは達のデバイスも色々と微調整があってもう少しかかるらしく、彼女たちも一旦は普通の小学生へと戻った。

そういえば、と怜治は今日がフェイトの転入日だということを思い出した。

クロノが心配している（本人は隠しているつもりらしいがバレバレだった）ようだったが、なのは達がついているのだから問題ないだろうと怜治は思った。

それより今はこの状況をどうにかするべきだろう。

今、怜治の前には彼の悪友こと鉄平と正義が不満気な顔でこちらを見ていた。

場所は怜治の居る教室。三人とも同じクラスだから、彼らが教室

でたむろすることに問題はない。　椅子を三角形に並べて顔を向き合わせる三人の間には重たい空気が流れていた。
それを察してか、他の生徒も三人には近づかない。
しばし無言で睨みあう。

「ぜろ、もう一回言ってくれ。　できるだけゆっくり、もしかしたら俺の聞き間違いかもしれない」

沈黙に耐え切れなくなった鉄平が重苦しそうな口を開いた。

「ついに母国語まで理解できなくなったか？」

やれやれといった感じで今さっき言ったばかりの事を口にする。

「近々、この辺りで物騒なことが起こると思うから、あんまし夜に出歩くなよ」

一言一句違わず、自分の言葉を棒読みで復唱した。
鉄平の眉に深いしわが刻まれた。

「聞き間違いじゃなかったな。　ちなみに、その理由は？」

「物騒なことが起こるからって言っただろ？」

「だから、その物騒なことがなんで起こるんだ？　っていうかなんで起こるっておまえが分かるんだ？」

鉄平の問いに、怜治は口を噤んだ。
言えない。　言えるわけが無い。
魔法を使う騎士が魔力のある人間を襲ってると。　そしていづれ、

預言通りなら今年のクリスマスに世界が滅ぶなどと言って誰が信じるだろうか？　怜治自身も、当事者でなかったら絶対に鼻で笑うだろう。

「もしかして――あの夏の事と関係あるの？」

正義の言葉に、怜治の目が見開いた。
それを答えと受け取った正義が納得がいった風な顔をした。

「そっか……。　あれ関連の事なら、ぜろはまだ言えないわけか」

「悪いな……」

「そう思ってんなら話せ。　幼馴染って訳じゃねぇけど、それなりに長い付き合いだろ？」

鉄平が不機嫌そうな視線を怜治に向ける。
怜治はこの眼をつい先日見たばかりだった。　なのはの友人のアリサという少女と同じ眼だった。

「物騒なことが起こるってのはマジだ。　……でも、詳しくは言えねぇ」

「言うとおれらが首突っ込むからか？」

怜治は少し考えて、首を横に振った。
今回の事件では、魔力のある者が狙われるのだ。

「もう半分、巻き込まれてるかもしれないんだ」

2人の魔力があまり大きくないことは怜治でも分かった。
だが、騎士たちがなりふり構わずで、今では人間以外の魔力のある動物も襲っていることをクロノから聞いていた。　だから、魔力量の少ないとはいえ、2人が標的になるのは明らかだった。
とはいえ、それは2人に魔力があることがシグナム達にバレればの話だ。
事実、なのはや怜治の2人は高い魔力資質を持っているのにも拘らず、今まで襲撃されることが無かった。　つまり、騎士たちに魔力持ちの人間を探す術が長けているとは言えないのではないだろうか。
　ならば、2人に詳細は話さずこのまま大人しくしていてもらった方がいいのでは、というのが怜治の判断だった。
悔しいことに、怜治に2人を護衛しながら戦うことはできない。
自分の力の無さに、怜治は奥歯を噛みしめる。
怜治の葛藤を感じてか、徐々に鉄平の顔が穏やかなものになっていく。

「分かったよ。　しばらく大人しく……だろ？　言うこと聞いてやる」

ただし、と鉄平が一旦言葉を切った。

「事が済んだらちゃんと言えよ？　じゃねぇとマジで絶交だぞ」

「当たり前だ。　今回の事が片付いたら、全部話す。　約束だ」

「オッケー。　それじゃあ――」

正義が掌を自分の顔の横に掲げた。
意図を察した鉄平、怜治が掌を同様に掲げる。
そして、三人同時に掌が振られる。

バチン、と互いの手の平を打ちあい渇いた音が響く。

「指きりゲンマンって年じゃねぇが、その代わりがハイタッチってのも妙だな」

「文句言わない」

話が終わると同時に、チャイムが鳴った。

扉が開き、担任が入って来た。　同時に怜治たちも散会。　それぞれの席に戻っていった。

学校が終わり、怜治は駐屯所となったハラオウン家にいた。

今、怜治だけがリビングにいる。　エイミィは別室で作業中、なのはは本局にて検査。　フェイト達はその付き添いと修復されたデバイスの受け取りに行ってしまった。

他人の家で自分一人だけやることもなく待機というのはどうも居心地が悪い気がした。

この時間を使って訓練でもすればいいのだが、怜治はそこまで勤勉ではないし、やったとしても何かを壊しそうなので実行はしない。

体を伸ばし、ソファーに横になるとシミの無い天井が視界いっぱいに広がる。

――暇だ。

そう思っていた矢先、警告のアラームが鳴り響いた。

「怜治君っ！！　緊急事態来たよっ！」

エイミィの声に跳び跳ねるように立ちあがる怜治。

「都市部上空で二名発見っ！　今は強壮結界内部で他の局員が対峙中！　出れる！？」

「当然！　なのは達は？」

「今、本局からの帰りで中継ポート！　もう少しかかると思う！」

「そっちじゃねぇって！！」

急いでるためか、怜治の語気が荒い。
エイミィは怜治が何を言ってるのか一瞬悩むも理解した。

「なのはちゃんの体調は大丈夫！　デバイスも修理完了済みだよ！」

よし、と怜治は頷いて走り出す。

「ちょっ！？　怜治君そっち窓っ！」

エイミィの言葉を無視して怜治は窓を開ける。
冷たい冬の夜風が顔を撫でた。
怜治はベランダに出て柵に足をかけ、魔力を集中させ跳躍する。
衝撃で柵がひしゃげた。　ギャーッとエイミィの悲鳴が聞こえるが怜治は無視して跳ぶ。
１０秒ほどして徐々に失速。　重力に従って体が下降し始めた。

「スタンっ！！」

『ヒャッハーーーーッ！！！』

怜治の声に応えるようにスタンが空間を超えて出現した。
シートに腰を下ろしハンドルを握ると、黒と紺のバリアジャケットが怜治の体を包んだ。
タイヤが回転し、魔導騎兵（ライダー）が夜の海鳴を疾走する。

星の無い空の下でヴィータは自分の失態に歯噛みした。
それはザフィーラも同じでヴィータと背中合わせに立っていた。
2人の周りには武装した魔導師十数名が取り囲むように立っていた。
周囲は結界が張られており、逃げることはできない。
周囲の魔導師の実力は大したことなかった。　だが、問題はその数だった。
対人特化したベルカ式を使うヴィータ達にとって、厄介なのは一対多数の戦闘になることだ。
魔法の特性上、一度に多くの敵を攻撃できる手段を騎士たちは持っていない。　故に、数の上での戦力差が倍以上であるこの状況はミッド式魔導師以上に不利な状況であった。
そのことを知ってか、管理局の魔導師たちは攻撃をせず、ただ包囲をするだけだった。
わざわざ一対一の状況にする馬鹿はいなかった。

「めんどくせぇ。　かえり打ちにしてやるよ」

ヴィータがグラーフアイゼンを構える。
確かに、状況は良くない。　だが、ただ待っていれば状況が改善されることなど決してないのだ。
少しすればシグナムやシャマルが応援に来るだろうが、結界に時間を取られるかもしれない。　また、こうしている間に管理局側の応

援が来ないなんて楽観視はできない。　ならば、相手の戦力が最小である今のうちにこの場を離脱した方が利口な選択だ。
ヴィータの目に闘志が宿っていき、ザフィーラも戦闘態勢に入る。
その時、遠くのから紺色の光が飛来してきた。
点だった光が迫るにつれ、それが遠距離からの砲撃だと分かった。

「――っ！！」

ヴィータは慌てて障壁を展開。
紺の閃光と赤の障壁が互いを削り合う。
やがて、砲撃が止み、ヴィータも障壁を消す。
ヴィータは砲撃が来た方向を鋭く睨みつける。

「そんな怖ぇ顔すんなよ。　そっちだって奇襲みてぇなことして来たじゃねぇか」

怜治が軽い調子で現れた。
右手に槍形態のエリシオンを握り、バイク形態のスタンに跨っている。
ヴィータの視線がエリシオンに移る。　先程の砲撃の出所は分かったようだ。
怜治はエリシオン待機形態に、スタンを鉄拳形態（アームズフォーム）に変形。　武装局員の間を悠然と抜け、小さな騎士の前で止まった。
怜治はヴィータを見下ろし、ヴィータが怜治を見上げる。　ザフィーラはその後ろで警戒した様子で見ている。　当然、周囲の局員への警戒も緩めない。

「なんだよ？」

「いやなに、俺も一応管理局員らしいから聞かなきゃいかんらしく

てな。　……おとなしく投降する気は？」

「ねぇーよっ！！」

ヴィータが鉄槌を振るう。　それを怜治は右の鉄拳で受け止めた。
　激しい火花と音が響く。
それを戦闘開始の合図となった。
ザフィーラがヴィータを飛び越して怜治を急襲。　鋭い蹴りが頭部に振り下ろされた。
怜治は左手で蹴りを防ぎ、膝を曲げて体を丸めて半回転。　ザフィーラの腹部に蹴りを叩きこむ。
ザフィーラの顔が苦痛に歪み、吹っ飛ぶ。
ヴィータが回転。　ザフィーラと入れ替わりに鉄槌が再び怜治の頭部目がけて振り下ろされる。
怜治はとっさに一歩下がる。　鉄槌は怜治の前髪を掠めて通り過ぎる。　黒髪が数本、宙を舞う。
ヴィータの回転は止まらない。　回転の速度をさらに上げた二撃目が襲いかかる。
今度は下がらず、敢えて怜治は前に出た。　魔力を込めた両腕を前に突き出す。

「龍の――――！！」

「痛烈（テートリヒ）な――――！！」

「鉄拳っ！！！！！」
「一撃（シュラーク）っ！！！！！」

爆音が響いた。
衝撃波が起こり、包囲していた局員が数名巻き込まれた。

「ヴィータッ！！」

「うっせぇ！　大丈夫だ！」

「そうだぜ？　それより自分の背後を気にしろよ」

ザフィーラの顔に疑問符が浮かぶがすぐに危機を察知、体を全力でよじる。　ザフィーラの背中すれすれのところをクロノの杖が通過した。　杖先にはスティンガーがあり、槍となっていた。
ザフィーラの顔が一瞬青ざめる。

「君はどっちの味方なんだ」

クロノが忌々しそうに怜治を見た。
怜治は知った事かといった表情だった。

「何回言ったか覚えてねぇが、お前はいちいち後ろから卑怯なんだよ。　そう思わねぇかちびっ子？」

「あたしに話を振るんじゃねぇ」

「つまんねぇな」

ガキン、と音を立てて両者が距離を取る。
クロノが怜治の隣に立ち、ヴィータもザフィーラの隣まで下がった。
それに合わせてまた局員が包囲の形を変えた。

『怜治君！　現場に助っ人を転送したよ！』

エイミィから通信が届いた。
誰が助っ人なのかは察しがついていた。　どこにいるのかと見渡す。
ヴィータの視線が下を向いていたのに気付き、視線を追う。
怜治たちがいる上空から遥か下。　ビルの上から2人の少女がこちらを見上げていた。
なのはが紅い宝石を、フェイトが金の台座に乗った黄色い宝石を掲げる。
眩い光が柱となって2人を包む。

「いくよ……」

「わたしたちの……新しい力」

光の帯が2人の体を包み込む。
少女たちは呼ぶ。　望み、手に入れ、進化した新しい愛機の名を。

「レイジングハート・エクセリオン！！！」

「バルディッシュ・アサルト！！！」

「「セーット・アーップ！！」

『『Ｄｒｉｖｅ　ｉｇｎｉｔｉｏｎ.』』

桜色の光と雷光が夜を照らした。
光が消えると、バリアジャケットに身を包んだなのはとフェイトが現れた。
2人が持つデバイスも2人が着るジャケットも、わずかな違いがあった。
ベルカ式カートリッジシステムを組み込んだ際、その負担に耐える

ための変化であった。

「あのデバイス……まさかっ！」

「カートリッジシステム、らしいぜ？」

ヴィータが怜治を一瞬睨み、すぐになのは達に視線を戻す。

なのはとヴィータの視線が交錯する。

フェイトが一歩前に出た。

「わたしたちは戦いに来たわけじゃない。　まずは話を聞かせて」

「え……俺やる気満々で来てんだけど」

「君は少し黙ってろ」

「教えて！　闇の書の完成を目指している理由を！」

ヴィータが腕を組み、目を細める。

「あのさ、ベルカのことわざに、こういうのがあんだよ」

呆れたような口調でヴィータが続ける。

「“和平の使者なら槍はもたない”」

意味が分からず、なのはとフェイトが互いに顔を合わせ、首を傾げる。

「“話しあいしようってのに武器を持ってやってくるやつがいるか

バカ！”って意味だよバーカ」

「い、いきなり有無を言わさず襲いかかって来た子がそれを言う！？」

「それにそれは諺ではなく、小噺のオチだ」

「ちょっと待て、どうしたらそんなオチにいくのかスッゲェ気になんだが」

「ウッセェ！！　いいんだよ細かいことは！！」

ヴィータの怒声とともに空から紫電の光が轟音とともに舞い降りた。
桃色の髪をなびかせて剣の騎士（シグナム）が姿を現した。
「おい、強壮結界じゃなかったのか？　あっさり抜かれてるじゃねぇか」

呆れた声を出す怜治。　そして、下ではフェイトの顔色が変わったのが怜治にも分かった。
どうやら、話しあいは結局お流れになったようだ。

「クロノ君、怜治さん！！」

なのはの声が響く。　シグナムの乱入にも動じず、彼女の眼は常にヴィータを捉えていた。

「手、出さないでね。　わたし、あの子と一対一だから！！」

「……マジか？」

「マジだろ。　大人しく言うこと聞いとかねぇと、後が怖い」
怜治がザフィーラに視線を移す。
「さて、ピンク髪はフェイトが相手するようだし、どっちがあの犬男とやる？」
「狼だ」
ザフィーラが訂正を求めてきた。
小声で言ったつもりだったが彼の耳には届いたらしい。
緊張感が薄まり始めた戦場で、クロノがため息を吐いた。
「彼の相手は君がしてくれ」
「お！　いいのか？」
「最初からそのつもりだったんだろ？　僕は最後の一人を探す」
「ああ、あの緑のか。　確かに、遠くからリンカーコアブをブチ抜かれるのはきつい」
「そう言うことだ。　くれぐれも無茶はしてくれるなよ」
そう言ってクロノが飛び去る。
おそらくどこかに待機しているユーノやアルフと合流するのだろう。
怜治がザフィーラに視線を戻すと、向こうもこちらの方を向いていた。
守護の獣が闘志を宿した瞳で怜治を射抜く。
怜治の口元が笑みで歪む。

視界にはもうザフィーラ以外入っていない。
周りで起こる爆発や閃光も遠くに感じる。
両者が拳を握る。
腕を上げ、ファイティングポーズをとる。
合図はない。　だが、同時に膝を曲げて目の前の敵に向かって走り出した。
爆発や閃光、雷鳴の合奏に、甲高い轟音が加わった。

上空で行われる激しい戦闘を尻目に、クロノがシャマルを捜索する。
彼の後ろでユーノが探査魔法を、アルフが匂いや音で探す。
アルフの頭上で雷鳴が響いた。　見上げると、フェイトの雷弾と、シグナムの炎剣がぶつかり合うのが見えた。

「フェイト……」

「心配いらないよ。　彼女は強い」

アルフの心情を察したクロノが安心させるように言った。
それでも、アルフの表情は晴れない。
シグナムは強い。　そして、フェイトを圧倒した人物だ。　いくらデバイスをパワーアップさせたからと言って、心配の種が尽きたわけではない。

「フェイトがやりたいと言ったんだから、それでいいだろ」

ユーノの言葉に、アルフが鋭い視線をぶつけ、すぐに霧散した。
彼も、自分と同じ気持ちだということを思い出した。

再び上空を見ると、ヴィータの鉄球となのはの光弾がぶつかり合うのが見えた。

「ぼくはあの中に混じってなのはの援護をすることはできない。しようとすれば、逆になのはの足を引っ張りかねない」

ユーノが自嘲気味に言った。

「だから、今僕にできることをやるしかないんだ！」

力強い言葉に、クロノが頷いた。

今自分たちがやるべきことを念話で再確認。

目標はもう1人の女騎士と闇の書の主。

「僕とアルフが結界の外を探す。　ユーノは中を頼む」

「分かった」

アルフも無言で頷き、フェイトを一瞥してクロノとともに結界の外に向かった。

「（状況はあまり良くないな）」

結界の外に待機していたシャマルに、ザフィーラからの念話が届いた。

「（シグナムやヴィータが負けるとは思わんが、ここは退くべきだ

ろう）」

「（そうね。　私もそれに賛成だわ）」

「（なんとかできるか？）」

「（なんとかしたいけど、局員が外から結界維持してるの。　私の魔力じゃ破れない）」

シャマルが情けない声で答えた。

ザフィーラにシャマルを非難することはできない。

遠目から見ても、自分たちを囲む結界は強力だ。　シグナムが入れたのも、極力薄い部分を狙ったにすぎないだろう。

「（破壊するには、シグナムのファルケンか、ヴィータのギガントクラスが必要ということか）」

だが、その二人は手が離せない状況だ。　自分が援護にいこうにも、怜治がそれを許さない。

「（仕方ない。　あれを使うしかないか……）」

「（分かってるけどでも――！！）」

「闇の書の騎士ですね？」

ガチャ、とクロノがＳ２Ｕの杖先をシャマルの後頭部に向けて言った。

「（シャマル？　どうしたシャマル？）」

シャマルは無言で念話を切った。　ザフィーラならばこの意味が分かるだろう。

「捜索指定ロストロギアの所持、使用の疑いであなたを逮捕します」

シャマルの耳まだ声変わり前の少年の声が響いた。　そして、内心舌打ちした。　結界からそれなりに離れた場所にいたはずだ。　なのに、なぜ発見されたのだろう。

その理由はすぐに分かった。　彼女の前にザフィーラと同様、狼の耳としっぽをつけた女性が悠然と立っていたからだ。

アルフの鼻がぴくぴくと動く。

匂いで場所がバレたのかと分かったと同時に、自分は匂うという事実がシャマルの乙女心にひびを入れた。

「抵抗しなければ弁護の機会があなたにはある。　同意するなら武装の解除を！」

ひんやりとした杖の感触がシャマルの髪に触れた。

シャマルは表情を変えずに必死に思考を巡らす。

この状況を打破するにはどうしたらいい？

ダメもとで次元転送してみるか？　いや、術式を展開した瞬間に頭を打ち抜かれるだろう。

恥も外聞も捨てて逃走するか？　いや、自分はもともと後方支援型で俊敏さには欠ける。　前線で戦う魔導師や獣の身体能力を持つ使い魔から逃げ切れるわけが無い。

ザフィーラが異変に気付いて応援に来るまで時間を稼ぐか？　いや、仲間とは言え、他人と幸運任せの策など愚の骨頂だ。

いくつもの策が浮かび、すぐに否定されていく。

万事休すかと思った瞬間。

クロノの身体が吹っ飛び、向かいのビルのフェンスに突き刺さった。
現れたのは仮面をつけた男だった。　足を突き出していることから、クロノを蹴飛ばしたのは彼だとすぐに分かった。
紫がかった青い髪に白い仮面が夜の闇に不気味に浮かぶ。
突然の乱入者にアルフが戦闘態勢に入る。
仮面についた眼がシャマルに向く。
シャマルも突然の事態に戸惑っているのが分かった。

「使え」

男の言葉にシャマルの目が大きく開く。
この男のことをシャマルは知らない。　なのに、男はこちらが何をしようとしていたのかまで知っていた。　シャマルに怖気が走った。

「闇の書の力を使って結界を破壊しろ」

男が続けた。

「減ったページはまた増やせばいい。　仲間がやられてからでは遅いぞ？」

その言葉に、シャマルの目に決意が宿った。
男が飛翔し、クロノと対峙した。　クロノの怒声が聞こえたがシャマルは無視。
シグナム達に作戦の概要を念話で伝える。
足元に鮮やかなミントグリーンのベルカ式魔法陣が展開。
闇の書を開き、胸の前で固定。

「闇の書よ。　守護者シャマルが命じます。　眼下の敵を打ち砕く力を、今、ここに」

闇の書が光を放ち、蓄えられた膨大な魔力が噴出する。
黒ずんだ魔力が電撃を発し始めた。
漆黒の光が空に飛翔。　その魔力で雲が渦を巻き巨大な雷雲を形成した。
クロノが事態の異変を察知し、向かおうとするが仮面の男に蹴り落とされた。
間一髪のところで地面との激突は免れたが、蹴られた部位が激しい痛みを訴える。

「今は動くな！」

仮面の男が叫ぶ。

「時を待て。　それが正しいとすぐに分かる」

「撃って、破壊の雷っ！！」

『Ｇｅｓｃｈｒｉｅｂｅｎ.』

黒い雷撃が結界に降り注いだ。
強固な結果にひびが入る。
突然の事態に、怜治たちが、騎士たちが空を見上げる。

「すまんテスタロッサ。　この勝負預ける」

「シグナムッ！」

「ヴォルケンリッター、鉄槌の騎士ヴィータ。　あんたの名は？」

「なのは……高町なのは！」

「高町なぬゅ……ええい呼びにくい！！」

「逆ギレッ！？」

「ともあれ、勝負は預けた。　次は殺すかんな、ゼッテェだ！！」

「おいおいなんだよ！　空が割れてんぞっ！？」

「退け。　直撃を受けると危険だぞ」

「あっ！　ちょい待てコラ！」

ザフィーラを追おうとした時、怜治の頭上で黒い光が輝いた。
頭上を見上げると、黒い雷が振って来た。
怜治一直線に。

「ちょ……ヤバッ！」

『イヤァァァアアアアアアアアアッ！！！！！！』

轟く雷鳴とスタンの悲鳴をＢＧＭに、怜治の視界が黒に覆われた。

第19話　引っ越し！　再会！　再戦！（後書き）

次回。

やっとあの少女が名前付きで登場。

第２０話　予期せぬ再会

周囲を覆っていた極光が晴れた。
フェイトは光に塗りつぶされた眼が徐々に視力を取り戻していくのを感じた。
目を開くと、自分は何重もの魔法壁に囲まれていることに気付いた。
魔力光からアルフとユーノが守ってくれたのだと分かった。
バルディッシュをデバイス形態にしたまま空を見上げる。
先程まで外界とのつながりを隔てていた結界は完全に消滅していた。
続いて周囲を見渡す。　なのはとアルフ、ユーノがこちらに来るのが見えて安堵する。　だが、シグナムをはじめとした騎士たちの姿はもう無かった。
決着がつかなかったことを残念に思っていると、なのはが心配そうに自分の顔を覗き込んでいるのに気付いた。

「フェイトちゃん大丈夫？」

「うん、大丈夫。　なのはは？」

「わたしも大丈夫」

「こっちも大丈夫」

「あたしも大丈夫だよフェイト」

互いに無事を確かめる。　目で見ても傷があるように見えなかったので再び安堵する。　だが、一人足りないことに気付いた。

「あれ？　レイジは？」

フェイトの言葉に他の三人が視線を巡らせる。
彼女たちの視界に入るのは静かな夜の風景だけだ。
フェイトは自分の顔から血の気が引いていくのを感じた。
すぐにエイミィと通信を繋ぐ。
フェイトの耳にエイミィの声が聞こえてきた。

『魔力爆撃!?　物理被害はないけどこんな馬鹿げた威力の魔法を……っ！　ああっ！　ジャミングでレーダーとサーチャーが使い物にならないっ！』

「エイミィ、レイジが……レイジがいない！！」

ええっ!?　とエイミィの驚きの声が耳を打つ。　続いてコンソールのキーを叩く音が聞こえてきた。　怜治の安否を必死で確認してくれているのだろう。
やがて、キーを叩く音が止んだ。
一瞬の沈黙。
フェイトは自分の心臓の鼓動の音がやけに大きく聞こえた。
無事であって欲しい。　見当たらないのは地上にいるからだ。　もしくは、シグナム達を追ったのだ。　とフェイトは自分に言い聞かせる。
だが、

『周囲に怜治君の魔力反応無し、通信も繋がらない。　これは……ＭＩＡ（戦闘中行方不明）』

少女の瞳が衝撃に見開かれた。

じゃあね、と月村すずかは自分の家から去る友人に別れを告げた。
友人の少女――八神はやても同様に返す。
車いすに乗り、あまり長くない髪を髪留めでまとめたはやての後ろには親戚の白金色の髪の女性が立っていた。
今日ははやての自宅で鍋をご馳走になる予定だったのだが、他の住人が急用のため出席できず2人だけでは寂しいということで夕食会はお開き。代わりにすずかが自分の家にはやてを招待したのだ。

「今日は本当にごめんさない。急用で皆となかなか落ち会えなくて……その……」

「ええて、ええて。全然怒ってへんよ」

謝罪を繰り返す女性をはやてが笑って返す。

「すずかちゃん家のにゃんことも遊べたし、それより、みんなに大事が無くて良かったわ」

「ふふふっ、またいつでも来てね。あの子たちも遊びたいだろうし」

「ほんまに？　せやったらまたお邪魔させてもらうよ。今度は皆でな？」

「うん♪」

「はい」

そう言ってはやてが背を向けて出ていき、女性もそれに続く。

「またねー！　はやてちゃん！　シャマルさん！」

互いに手を振り合い、姿が見えなくなってすずかは玄関の扉を閉めた。

すずかの家から五分ほど歩いたところでシャマルが口を開いた。

「はやてちゃん。　本当にごめんなさい」

「またか？　もういいて言うてるのに」

はやてが自分の後ろを顔を上げて言った。

シャマルが車いすを押す力がわずかに弱まる。

「でも……はやてちゃんに寂しい思いさせてしまって……」

「だから気にしてへんって、せやけど、今度からは連絡の一つも入れてな？」

はい、と力の無い声でシャマルが答える。　元気のないシャマルの顔をはやてが見上げる。

シャマルの表情が暗い理由ははやてとの約束を蔑ろにしてしまったことだけではない。　無論、それが第一の理由ではあるがまず、管理局との戦闘のせいで蒐集があまりできなかったこと、そして、謎の仮面の男の事だ。

一分一秒が惜しい騎士たちにとって今回のように数分の戦闘のみで、奪えた魔力が0というのは避けたいことだった。　顔に出さず、シャマルが奥歯を噛みしめる。
そして仮面の男の目的が不明というのも気がかりであった。
現在の状況を鑑みて、自分たちに外部からの協力者がいることはありえないことだった。
ゆえに、あいての思考が読めない。
考えられることとしたら闇の書の力を横取りすることだろうがそれは不可能だ。
闇の書の膨大な魔力は闇の書自身が選んだ主以外には使えない。
使おうとすれば十中八九死に至る。　存命したとしても人としての普通の暮らしはできないだろう。
そこまで考えてひとつの考えに行き当たった。
思い出したのだ。　闇の書の主でもないのにそれをコントロールしようとした魔導師の事を。
名前をマツダ・レイジと言っただろうか。

（仮面の男とあの子が繋がってる？　管理局に協力するふりをして闇の書の力を手に入れようと？）

まさか、と浮かんだ考えを否定した。
ザフィーラが言うにはあの青年は魔法教育を受けた様子はなかったと言っていた。　そして、名前からおそらくこの世界の住人だろう。
シャマルも一度しか姿を見ていないが、力を悪用するような男には見えなかった。
あの時の目は本気で白い少女の事を心配し、その原因であるシャマルの事を本気で怒っている目であった。
なにより、本気で闇の書の力を手に入れようとしているのならばあの時魔力を奪い返す必要はないはずだ。　わざわざ自分の手の内をさらし、こちらに警戒心を与え、さらには闇の書の完成を遅らせた

のだから。

「シャマル……」

思案しているとはやての小さな声が聞こえてきた。　声に震えがあった。

「どうしたの、はやてちゃん」

はやては答えない。　顔を青くして前を見ている。
シャマルがはやての視線をなぞる。　息をのんだ。
人が倒れていたのだ。　うつ伏せに倒れ、ピクリとも動かない。
一瞬酔っ払いが倒れたのかと思った。　だが、全身に負った傷と周囲に流れる赤い液体がそれを否定させる。
傍にバイクがあることから事故に遭ったのかと思ったがそれも違う。
タイヤ痕も見当たらないし、なにより自分はこの道を通って月村邸まで来たのだ。
来る前に事故に遭ったなら分かるし、その後だったとしても音は家まで聞こえてくるはずだ。
うつ伏せになった者の周囲はわずかに陥没していた。
まるで空から落ちてきたようだ。
思考が止まった。
シャマルは車いすから手を離し、倒れている人物に近づく。
この国に多い黒髪。　見覚えのある男だった。　バイクにも見覚えがあった。
松田怜治が倒れていた。

「シャ、シャマル……そ、その人……」

はやてが震えた声を出す。　血を見たからか、顔面蒼白になっていた。
シャマルがゆっくりと手を取って脈を取る。
鼓動を感じた。　安堵の息を吐く。

「大丈夫です。　息はあります」

「そ、そんなら早ぅ救急車呼ばな！！」

はやてが携帯を取り出そうと車いすの後ろのポケットをまさぐる。
蒼白な顔面がますます色を失う。

「け、携帯すずかちゃん家に忘れてしもうた……」

「ええっ！？　私も家においてきちゃったんですけどっ！！」

慌てふためく2人。
その時、

「八神さん。　忘れ物を届けに来たんですが……っ！！」

落ち着いた女性の声が2人の耳を打った。
グルンと首を回転。　メイド服を着た女性が立っていた。
女性も状況を察したようだ。
すぐさま携帯を取り出し、ボタンを押す。
感謝のあまり、はやてが車いすから飛んでメイドさんに抱きついた。

怜治は目を覚ますと、そこは一切の光の無い闇だった。
宇宙空間にいるような浮遊感が身体を包む。
そんな闇の中でも自分の姿だけはしっかりと視認できた。

「ああ、これは夢か……」

怜治は自分がおかれた状況をそう判断した。
自分に何が起こったのか分からない。　だが、夢を見るということは生きてはいるのだろう。
眠ろう。　夢の中で眠るというのも妙な話だがそれ以外することが思いつかない。
目を閉じ、腕を広げる。
やがて、睡魔が身体を睡眠に誘う。

――何をのんびりしてるんだい？

突然脳内に響いた声が怜治をまどろみから引き戻した。
目を開けて見渡す。　だが、視線の先には重たい黒一色の世界が広がるだけだった。

「誰だ？」

これは夢だということも忘れて怜治は声の主へ呼びかける。

――あんたにはやることがあるはずだよ。

怜治の問いを無視して謎の声は話を続けた。

――立ち止まってる場合かい？

まるで子供をしかりつけるような声だった。
なぜだろうか。　自分はこの声を聞いたことがある気がする。
温かく、穏やかな声。　怜治の心に安らぎが広がる。

――しょうがない子だねえ、ちょっと待ってな。

声が途切れる。　少しすると闇しかない世界に光が差した。
それは孔のように広がり、人ひとりが通れるほどの大きさになった。
怜治は無意識に手を伸ばす。　だが、怜治が求める光の孔は遥か先にある。
それでも怜治は手を伸ばし続ける。　文字通り腕が伸びるのではというくらい力を込めて手を伸ばす。
ふと、指先が何かに触れた。
怜治はそれを必死に掴んだ。
眩い光が怜治を優しく包み込んだ。

怜治は今度こそ目を覚ました。
陽光が目を刺す。
身体をゆっくりと起こす。　頭と全身に白い包帯が巻かれていた。
　そして、自分がいる場所に疑問を抱く。
怜治が眠っていたのはベッドの上だった。　無論、自分の家のものではない。
となると当然今いる場所も自宅の自室ではない。
薄い色のカーテンがついた窓。　高級そうな絨毯が敷き詰められた広い部屋。　落ち着いた色の壁紙。　絹のような肌触りのシーツが敷かれたベッド。　隅には自分が来ていた服が綺麗に畳まれていた。
どれもこれも怜治の家にはないものだ。　ついでに言えば病室でも

ないようだ。
右手に柔らかいものが握られているのに気付いた。
視線を右手に向ける。　人の手だった。
ぎょっとしながらも視線を上げる。
わずかにウェーブがかかった紫髪の少女が視界に入った。　月村すずかだった。
すずかの頬がうっすら紅潮していることに気付き、怜治は慌てて手を離す。

「あ～……、悪い」

「い、いえ……」

怜治は目をそらし、すずかは俯いてしまった。
気まずい空気が流れる。
どうしたものかと怜治が思案していると、どこからか猫の鳴き声が聞こえてきた。
あっ、とすずかが声を上げる。
次の瞬間、ベッドの上に赤い首輪をつけた黒ネコが飛び乗った。
闖入者……もとい、闖入猫はトテトテと怜治に近づいてくる。
猫は怜治の右手に鼻を近づけてにおいを嗅ぐように鼻を動かす。
愛らしい挙動に思わず怜治から笑みがこぼれる。

「猫好きなんですか？」

「嫌いじゃないな。　特にトラウマもアレルギーもないし」

素っ気ない返答にすずかが残念そうな顔をする。
霧散しかけた気まずさがまた凝縮を始めた。
猫が怜治を諫めるような声を上げた。

「お前は猫好きなのか？」

「あっ、はい。　他にもいろんな子がいるんですよ！」

「へえ、何匹くらいいるんだ？」

うーん、と右手の人さし指をあごに当てて考え込むすずか。
やがて、右手をじゃんけんのパーの形にして怜治に向ける。

「５匹か」

「いえ、５０匹くらいです。　多分」

怜治は絶句した。　ここは猫屋敷か。
すずかは黒猫を抱きあげる。

「この子はその中でも特に人懐っこい子で、初めて会った人にも今みたいにじゃれてくる子で――」

すずかの熱弁は止まらない。
まさか全ての飼い猫の性格を把握しているのだろうか。
徐々に少女はヒートアップし、身を乗り出して語る。　すずかの可愛らしい顔がずいっと怜治の視界を覆った。

「あの……近い」

はっとした後、すずかの顔が再び蒸気。　耳まで真っ赤に染まる。
猫を胸に抱いたままゆっくりと身体を引いていく。

「聞きたいことがあんだけど……」

「……はい」

「ここはどこだ？　そんでもってどうして俺はここにいるんだ？」

「えっと……ここはわたしの家で、この部屋はお客さん用の寝室なんです。　昨日の夜にあなたが道端でけがをして倒れているのをわたしの友達とうちの使用人が見つけて、ここまで運んだんです」

「普通、怪我人見つけたら病院に運ぶような気がするんだが？」

「結構ひどいけがだったらしくて、病院に運ぶよりうちのお抱えのお医者さんを呼んだ方がいいってノエル……さっき言った使用人が言ったんです」

そうか、と短く言って怜治はベッドに身を沈めた。

しかし、来客者用にしては広い部屋に使用人、あげくお抱えの医者という怜治とは縁遠い言葉が妙に引っかかった。

怜治は月村という名字を思い出した。　海鳴でも有名な企業の社長と同じ名字だ。

ならば、怜治がいる家もむしろ屋敷と言えるような建物なのだろう。

「これが格差社会か……」

思わず零れた言葉に、すずかの顔に疑問符が浮かぶ。

怜治も特に意味があって言ったわけではないが、自分の住む家とここまで違うと少しショックを受ける。

「あっ！　そうだスタンッ！！」

「え？　え？　どうしたんですか？」

「俺の傍にバイクなかったか？　こう……黒くて大型の！！」

「えっと……確か友達が責任を持って預かるってノエルが……」

「その友達ってどこ！？」

怜治は跳び跳ねるように起き上がり、すずかに詰め寄る。

「えっと、確か中丘町の方で……って！　今から行くつもりですかっ！？　その身体で！？」

「問題ないかすり傷だ」

「そんな軽くないですって！　わたしは見てないでけど、お医者さんの話だとやけどがひどくて切り傷と骨にひびが入ってるところもあって、あと……と、とにかく大人しくしててください！！」

すずかが慌てて制止を無視して怜治は畳まれていた自分の服をひっ掴んで袖を通す。

その時、膝がカクンと力を失い、身体が下降した。

倒れそうになった怜治を必死にすずかが抱きとめる。

怜治は残った力を使って上半身を反らす。　なんとか倒れる方向をベッドに変えることができた。　ボフッと柔らかい音を立てて怜治の身体が沈む。

怜治の身体を蝕む疲労と脱力感。　魔力切れの症状だった。

落ち着いてくると、すずかの言うとおり体中に痛みがあった。

心配そうに自分の顔を覗き込むすずかの顔が見えた。

自分の情けなさに思わずため息を吐く。

「最初に会った時と似てますね」

「ああ……そうかもな」

「あの時も、頭から血が出てたのに「かすり傷だ！」なんて言ってましたね」

変わりませんね、とすずかが笑みを浮かべて言った。

そうだな、と怜治が返す。

それを最後に会話が途切れる。　沈黙が部屋を満たす。

怜治が天井を見つめ、すずかはその様子を椅子に座って見つめる。

時計の針が進む音だけが響く。

怜治は右手で身体の傷をひとつひとつ確認するように包帯をなぞる。

時折、鋭い痛みが身体を刺す。　だが、何故か高揚感が湧き上がる気がした。

自分には被虐趣味はないはずだが、この感覚がどこか心地良いと思った。

深く息を吸い込み、空気中の魔力素を取り込む。　リンカーコアを通して魔力を精製。　疲労感がわずかに緩和した。　戦闘は無理でも、スタンを向かいに行くことぐらいはできるだろう。

スタンとの精神リンクを確認。　詳しい場所は分からなかったが、無事なことは分かった。

体に力を込めて起き上がる。

案の定、すずかが立ちはだかった。

「だめです。　大人しくしててください」

「だからって、ずっと寝てるわけにも行かねえよ」

「もうすぐお医者さんも来ます。　せめてそれまでは我慢してくださ
い」

怜治は時計に目をやる。　短針が１０を、長針が４のすぐ前を指していた。
スタンを迎えに行くのは午後からでもできるか、と結論付けた。
この状態ではすずかを説得は困難だろうから、彼女の好意に甘えることにしよう。

「分かったよ。　んじゃあそれまで寝させてもらうわ」

「そうして下さい」

腰に手を当ててすずかが言った。　無理をしようとする怜治にご立腹のようだ。
苦笑しながら怜治は再びベッドに身を沈める。
とたんに睡魔が襲いかかる。
怜治は抵抗せず、そのまま眠りについた。

「ダメだ。　やっぱり家にもいないよ」

フェレットモードのユーノが通信機に向かって言った。
通信機の向こうから消沈した声が返って来た。
ユーノがいるのは怜治の自宅だ。　目的は当然、怜治の捜索だ。
屋根を伝って部屋を覗き込むが怜治の姿はない。

『そうか。　こちらもどこかの次元世界に逃れた線で探しているが、未だ発見できていない』

「なのは達の様子はどう？」

『当然、心配しているよ。　フェイトにいたっては休ませるのに苦労した』

「それはまた……大変だったんじゃない？」

『危うく黒こげになるところだった。　まったく、リーゼ達に無限書庫の使用許可をもらいたいのにこちらを後回しにするわけにはいかない。　ほんと、心労が尽きないよ』

ご愁傷さま、と言って通信を切る。

再度部屋を覗き込む。　悪あがきかもしれないが、何か手掛かりがあるかもしれない。

本棚に目がいった。　あの人でも本を読むのかと失礼ながらも意外な一面を発見。

並べられた本はマンガや若者向けの小説、辞書に図鑑といろんなジャンルがそろっていた。

整頓されずランダムに置かれているあたりが怜治らしいと思った。

上から下へと眺めていると中段あたりに置かれた本に目が止まった。

そして驚愕。

（ミ、ミッドチルダの文字！？　地球生まれで、つい半年前まで魔法と無縁だった怜治さんがなんで！？）

クロノかフェイトが渡したのだろうかと思ったがそんな話は聞いていないし、隠すことでもない。　なにより、明らかに古い。　どん

なに読み返したとしても半年ではああはならない。
ユーノは本のタイトルと著者を見てさらに驚愕した。
思わず顔を窓にこすりつける。

（フウライ・オートザム著の魔導工学論ッ！！！　１０年以上前に数量限定で販売されてもう手に入らない激レア本がなんでここにぃ！！）

魔法に関わる者、特に技師ならば大枚はたいてでも手に入れたい一品がそこにあった。
ユーノはしばらく目的を忘れ、かつて自分が探し求めた本の背表紙に目を奪われ続けた。

時間が流れ、太陽が沈み始める夕方。
冬のため暗くなるのが早く、５時前でも街灯に灯が灯る。
闇と陽の光が入り混じった色に染まる大地を怜治は歩く。

「ったく。　なんだかんだで長居しちまったな」

はぁ、と短くため息をついた。
あれから、医者に診てもらい、すずかの姉とメイドたちに無理やり昼食を一緒にさせられ、すずかに飼い猫を一匹ずつ全てを紹介され、あげくティータイムまで堪能してしまった。
すずかが習い事で出るときについでに出ることができなかったらもう一泊させられる羽目になっていたかもしれない。
手には無理やり渡されたお菓子の入った包みがぶら下げられている。
月村邸の人間は押しが強い。　それを怜治は身を持って感じた。

ポケットからすずかに書いてもらった友人の家までの地図を取り出し、あたりを見渡す。

「この辺のはずだな……っとあったあった」

目的の建物を発見した。

周囲が塀と垣根で囲まれた二階建て。　すずかが描いた絵と特徴も一致している。

インターホンを押す。　ピンポーンと無機質な音が響く。

『はーい。　どちら様でしょうか？』

機械を通して聞こえてきたのは若い女性の声だった。

どこかで聞いたことがある気がした。

「えーっと、昨日の夜に道端で倒れていた者ですが、俺のバイクをそちらを預かってもらったっていうのを聞いたんですけど……」

たとだとしい敬語で怜治が事情を話す。

向こうで息をのむ音が聞こえた。

（……まさか転売しようと思ってたんじゃねえだろうな）

殴りこもうかと物騒な考えがまとまりかけた時、扉が重い音を立てて開いた。

住人の顔が隙間からヌッと出てきた。

出てきた人物を見て怜治は思わず一歩下がった。

「ちびっ子ハンマー娘……！！」

「変な呼び方すんじゃねえ、ぶっ殺すぞ」
赤毛の騎士がこちらを睨みつけていた。

「粗茶ですが……」
「……どうも」
テーブルに湯気を立てる湯呑みがおかれた。
持ってきたのはヴィータだ。　怜治を見る目が殺気立っている気がした。
怜治を取り囲むように左にヴィータ、右にシャマル、後ろにシグナムが立ち、足元には狼形態のザフィーラがいた。　そして、怜治の向かい側の席には茶髪のショートカットの少女、八神はやてが座っている。　傍には車いすが置かれていた。

「えっと、初めまして！　八神はやてって言います」
「松田怜治だ」
まずは軽い自己紹介。　続いてはやてがシグナムたちのことを親戚だと言って紹介する。
ザフィーラは完全に飼い犬扱いされていた。
「いやー、ホントびっくりしたんですよ？　血ぃ出して倒れてるんですから」

「そりゃ悪かったな」

湯呑みを傾け、お茶をのどに流し込む。
冬の外気にさらされて冷えた体が温まるのを感じた。
顔を動かさずに視線を巡らせる。
騎士たちがこちらの動きを監視しているのが分かった。

（こりゃ、面倒なことになったな）

はやてに視線を戻す。
シグナム達がここにいるということは、この少女が闇の書の主なのは確実だろう。
すずかと同い年の子がどうして、と思ったが考えてみればなのはやフェイトだって同じ9歳であれだけの魔力を持っているのだ。　さして驚くことでもないのかもしれない。

（さて、ここでどう動こうか……）

怜治を家に入れた以上、大人しく帰すつもりはないだろう。
家を出たところを襲って幽閉か、最悪文字通り消されるかもしれない。
一対一ならまだなんとかなるが、四人同時にこられたら対処しようがない。　あっという間にやられるだろう。
どう切り抜けるか思案しつつ、とりあえず当初の目的を果たすことにした。　スタンの安否の確認だ。
そうと決まれば実行あるのみ。　怜治は口を開く。

「訪ねてきていきなりだが、俺のバイクはどこにあるんだ？」

「あ、それなら庭に置いてあります。　シャマル、ちょっと頼める

か？」

シャマルが駆けより、はやてを抱き上げる。　そのまま車いすに座らせた。
慣れた手つきで車輪を回す。

「足、悪いのか？」

「生まれつきです。　もう慣れましたよ」

気にした風もなくはやては言う。　そして、庭に通じる窓を開ける。
緑の芝生が植えられた庭にスタンが鎮座していた。
はやてにサンダルを借りて駆け寄る怜治。　スタンも怜治の姿を確認したのか、念話が頭に響く。

『（レイジ！！　何してたんだよ、オレがどれだけ肩身の狭い思いをしたと……！！）』

「（再会して最初の一言がそれか。　少しは俺を心配しろよ）」

『（オマエのケガなんて今さらいちいち気にしてられるか。　それより見ろよッ！！　オレの珠のようなボディーが傷だらけにッ！！）』

機体の調子を確認しながら念話で話しあう一人と一台。
確かにスタンのボディーには事故ったような凹みや傷があった。

「（あーこりゃひどいな。　後でクロノに修理頼んでやるよ）」

『（ホントだなッ！？　ホントなんだなッ！？　ウソだったらオレ

いい加減ぐれるよ！？）』

機関部への損傷は軽いようで、魔法を使う分には問題はなさそうだ。
相棒にもしものことがなくて怜治は安堵の息を吐く。
目的は果たした。　次はどうやってここから無事に帰るかだ。
後ろには変わらずシグナム達が立ちはだかっている。
奇襲すれば一人は倒せるかもしれないが他の三人にやられるだろう。
はやてを人質に取ろうかと考えたが即却下。　はやてに敵意は感じない。
怜治が魔導師ということも分かっていないようだった。　ならば、
怜治にとってはやては部外者だ。　無理に巻き込むことはしたくない。
どうしたものかと思考の壁にぶち当たった。

「……大丈夫ですか？」

「ん？　ああ、問題ない。　見た目は酷いけど、動かす分には問題ない」

「いや、バイクの事じゃなくてあなたの事です」

は？と怜治の口から間の抜けた声が出た。
振りかえるとはやてが怜治の目の前まで来ていた。
蹲踞（そんきょ）姿勢でしゃがんでいたため視線が合う。
突然、はやてが手を伸ばして怜治の胸板に触れた。　いや、押した。
鋭い痛みが体を駆け抜け、反射的に立ちあがる。　偶然なのか狙ったのか、骨にひびが入っているところ押されたようだ。
はやての顔が険しくなる。　まるで、子どものいたずらを叱る母親のような顔だ。

「やっぱり！　なんか庇うような動きしてるから変だと思ったけど、怜治さん！　あなたまだけが治ってないでしょ！！」

ビシィッ！！と怜治を指さすはやて。　その後ろでは呆気にとられた騎士たちの顔があった。

確かに、薬はある程度月村家お抱えの医者からもらっているが完治には程遠い。

すずかには自分で病院に行くと言っておいたが行くつもりもなかった。

入院している暇などないし、どうせ診せるなら管理局の方が早いと思ったのだ。

そんな怜治の都合を気付くはずもなく、はやてが言う。

「もう遅いですから病院もやってませんね。　……仕方ありません。今日はうちに泊まってってください」

ええっ！？と騎士たちが声を上げた。

怜治も鳩が豆鉄砲を食らったような顔になる。

「ホンキかはやて！？」

「主、お言葉ですがその案には賛成しかねます」

「そうですよ！　男の人なんか泊めたらはやてちゃん食べられちゃいますよ！？」

「おいこら金髪、その発言を即刻撤回しろ。　っていうかお前も、なんでそういう結論になるんだよ」

「だって怜治さんこのまま帰したら病院行きそうにないですもん。

ちょうどわたしも明日病院行くんで、そん時一緒に行きましょ？」

ね？と小首を傾げてはやてが言った。

柔らかな物言いだが、その言葉に有無を言わせぬ強制力を感じた。

だが、怜治はすんなり受け入れるわけにはいかない。　パッと見ただの民家だが、ここは敵の本拠地なのだ。

『（レイジ、レイジ！）』

「（あ？　なんだよスタン？）」

『（この嬢ちゃんの提案、飲もうぜ？）』

怜治の眉尻がはねた。　はやてにバレる前に平静を整える。

スタンが続ける。

『（嬢ちゃんはどう見たって今回の事件の事は知らねえ。　だったら騎士共も嬢ちゃんの前では怜治に手荒な真似は出来ねえはずだ）』

「（八神にくっついて、隙見て逃げろってか？　みっともねえが、今はそれが一番か……）」

怜治の口からため息が漏れる。　今日はどうも子どもに振り回される日だと怜治は思った。

騎士たちに目を向ける。　目で「断れ！　でも、ただでは帰さん！」と訴える。

はやてに目を向ける。　期待のこもった眼差しがとんできた。

「分かったよ。　んじゃ、一晩厄介になるよ」

騎士たちの殺気が膨れ上がった。　はやての顔に光が差した。
こうして、怜治は月村邸に続いて八神邸に泊まることになった。

雲ひとつない青空の中を、一筋の金色の光が翔る。
フェイトが猛スピードで空を疾走していた。
ここは地球から比較的近い次元世界だ。
文明が無く、魔法もない。　果てしなく青い海だけが広がっている。

「レイジーーーーッ！！！　どこーーーーっ！！！」

フェイトが声を張り上げて叫ぶ。　だが、返事をする者はない。
フェイトはスピードを上げる。　海水が激しい水しぶきをあげる。
どれだけ目を凝らしても人影どころか鳥も魚も見当たらなず、陸すら見えない。
スタンの次元転移によってあの剛雷を逃れたのでは、と推測して近場の次元世界を探し続けているが未だに見つけられない。
昨夜突然放たれた剛雷に物理的威力はないが、あれだけの魔力を一身に受けたら体が蒸発しかねないとエイミィが言っていた。
もしかしたらシグナム達に捉えられたかもしれないという意見もあった。　それでもフェイトは探し続ける。　だが、成果の無い探索は少女に疲労と諦めの念を蓄積する。
最悪の結末が脳裏を掠める。

（そんなこと考えちゃだめだ！　あきらめちゃだめだ！）

後ろ向きな思考を追い出すために頭を左手で小突く。　痛かった。
新調された彼女のバリアジャケットの左手には金属製の手甲がつい

ていることを失念していた。　それほどまでにフェイトは焦っていた。
クロノから通信が入る。　急停止。　吉報を期待して出る。
『フェイトか？　クロノだが――』
「クロノ！？　レイジは！？　見つかった！？　どうなの！？」
『ちょ、待った、待ってくれ、そして落ち着いてくれ！』
「……ゴメン」
『いや、君が心配する気持ちはよく分かる。　結論から言おう。まだ怜治は見つかってない』
「……そう」
フェイトは消沈した声を出した。　期待していただけドッと疲れが出てきた気がする。
それを察したかのようにクロノは
『フェイト。　一旦戻ってくれ。　もうずっと探しまわってるじゃないか』
「そんな……！　クロノはレイジが心配じゃないの！？」
『心配だ。　だが、君が無理して倒れることがもっと心配だ。　怜治も君が倒れるのを望むとは思えない』
フェイトの声が止む。　一瞬の沈黙の後、「分かった。　戻る」と

短い言葉で了解を得られた。
通信が終了する。
通信席に座るクロノの前には大量のモニターが展開され、複数の次元世界の映像、捜索結果、怜治の転移先予測表などが映っていた。
自分は卑怯だな、とクロノは思った。
こういえばフェイトが捜索を止めると分かっての物言い。
正直、クロノはまだ怜治という人間の事を計りかねている。
戦闘は力任せのゴリ押し。　魔力は高いが戦闘に関しては素人。
魔法もスタンが優秀なだけで怜治自身は術式ひとつ紡いでいない。
　以前、クロノはなのはは感覚で魔法を組むと評したが、怜治の場合は本能で魔力を叩きつけるのだ。　もはや魔導師と言っていいのかさえ疑わしい。　性格は人間不信な傾向があり、我が道を行くというか、良く言えば実直。　悪く言えば傲慢。
これだけ分かっていてもクロノは結論を出すのをためらう。　ピースが欠けている気がするのだ。
怜治の人間性はなんとういか……歪んでいるというか、とにかく変わっている気がする。
満足できる結論だ出ず、クロノはため息をついた。
独特の香りがクロノの鼻孔を刺す。　振り向くと、エイミィがカップを持って立っていた。　アルフも一緒だった。
カップの中にはコーヒーが湯気を立てていた。
礼を言って口に含む。　ほどよい苦味が口に広がる。　元気が出た気がした。

「フェイトちゃん頑張っているね～」

「頑張りすぎだ。　今すぐ戻るように言ったが機嫌を損ねたかもしれない」

アルフの眉が歪み、エイミィが苦笑した。

エイミィはモニターを覗き込んで、わっ、と声を上げた。
モニターにはフェイトが捜索した次元世界が書き込まれてあった。
その数は二桁に達している。

「フェイトちゃん、もうこんなにたくさんの次元世界を捜索したの？　無理しすぎじゃない？」

「だから今戻るよう言ったと言ったろう」

「こんなに必死になってるフェイト、ジュエルシードの一件以来だよ」

アルフの言葉に他の2人が沈黙する。　ある単語が脳裏に浮かんだのだ。
少し遅れてアルフも同じ考えに行きついた。
エイミィが遠慮がちに口を開く。

「えっと……もしかしてフェイトちゃんって……」

「言うな。　それ以上言うなエイミィ」

「そ、そそそうだよエイミィ。　そんなはずないって！　っていうかそんなことになったらアタシが体張って止めるよ！」

「う～ん」

「な、なんだいエイミィその「恋する乙女は止まらなんだよ」みたいな顔は！？」

「いや～怜治君ってフェイトちゃんのために結構無茶してたように

思えるじゃない？　女の子ってそういうのに弱いからな～」

わなわなとアルフの唇が震え始める。

「そ、そんな……フェイトに限って……。　フェ、フェイトーッ！　フェイトーーーッ！！！」

この後、帰還したフェイトがアルフに詰め寄られたのは言うまでもない。

「お待たせしましたー」

エプロンをかけたはやてがお盆を手に持ってキッチンから出てきた。

シャマルが車いすを押している。

テーブルの上に料理が並べられていく。

かぶら蒸しやぶり大根を始めとした冬の食材を使った和食が食卓を彩る。

茶碗に白ご飯が盛られ、とん汁がお椀に注がれる。　どちらも湯気を出し、食欲をそそる香りを出す。

テーブルの中心には大皿に乗った煮物が山となって置かれた。

騎士たちがそれぞれ席に着き、怜治も椅子に腰を下ろす。

ザフィーラが床で犬用のお椀にのったぶりや白米をジッと見つめる。

「それじゃ、みんな手を合わせて、いただきまーす！」

はやての掛け声に皆が続く。

はしが食器とぶつかり、カチャカチャと小気味のいい音を立てる。

「うまいな、このとん汁」

「あったりめーだ！　はやての料理はギガうまなんだぞっ！」

「ヴィータ、お客さんにそんな口のきき方いかんで？　あ、怜治さんおかわりならいっぱいありますからね」

「サンキュ」

「シグナム、ポン酢とってくれない？」

「了解した。　ところでシャマル、この煮物はもしやお前が？」

「あっ！　分かる？　今日のは自信あるのよねー！」

穏やかだった空気が一気に氷点下まで落ち込んだ。
煮物を取ろうとしていたヴィータの手が空中で急停止する。
はやてはその様子をみて苦笑。　怜治はなんのことなのか分からず煮物にはしを伸ばす。
黄金色に輝く大根を掴んで口に入れ咀嚼。
ヴィータが憐みを込めた視線を向ける。　シグナムは目を閉じて黙祷を開始。
シャマルがどう？と感想を求める。
怜治はごくん、と飲み込み口を開く。

「ああ。　酸っぱくて辛くて甘くて皮がちゃんとむけてなくて半ナマでまず……トテモウマイカラオマエラモクッテミロ」

「その感想聞いて食欲わく奴がいるか。　あと、マズイって言おう

としただろ」

ヴィータの言葉にシャマルがうつむく。

「は、ははは……まぁシャマルのお料理もまだまだ練習が必要ということで……」

「そうらしいな。　んじゃ、上達のためにどこが悪いのか皆して食って意見を述べよう。　そうしよう」

怜治は悪鬼の笑いを浮かべて殺戮兵器（シャマルの料理）を他の三人の取り皿にボトボトと入れる。　無論、ザフィーラも例外ではない。

シャマルと怜治を除く皆の顔に絶望と怒りが広がる。

ヴィータが強烈な怒気を孕んだ瞳で怜治を睨みつける。

「てめぇっ！！　なんてことを……！　っていうか意見言うってんならおまえもそのためにもっぺん食べろよ！」

「料理下手なやつの共通点その一、調味料を一気に入れて味見をしない。　慣れないうちは少しずつ入れて小まめに味見しろ。　あと、塩の入れすぎを砂糖でごまかそうとするな。　逆も然り」

以上、と言って怜治は椅子の上でふんぞり返る。

的を射た助言に騎士たちが目を丸くする。

はやてが浮かんだ疑問を口にする。

「怜治さんって料理するんですか？」

「一応な。　ウチのモットーは“てめえの食うもんはてめえでつくれ”だ」

「……なかなか強烈なモットーですね」

「慣れればどうってことねえって。　――さあ、お前らも食った食った」

騎士2人が煮物の山を過去最大の強敵を見るような目で見る。

見た目は悪くないが、それに反比例して味が破滅的なのがシャマルの料理だ。　ちなみに、その逆は存在しない。

「ぐ……っ」

「食べるしかないのか……」

「皆、がまんやがまん。　これでシャマルのど……料理が上達すると思えば……」

「（主、先に逝くことをお許しください）」

「なんで皆そんなに嫌そうなのっ!?　あと、はやてちゃん「ど」って何「ど」って!?　もしかしてその後には「く」がきたりするんですか!?　そうなんですか!?」

「そ、そんなことないよ!?　さあ皆、気合い入れて食うでー!」

「気合い入れなきゃ食べなれないんですかー!?」

はやてが皿にはしを伸ばす。

主だけいかせはせぬ、とシグナム、ヴィータ、そしてザフィーラが続く。

具を一つ掴み、口元へ寄せる。　恐怖で口が震え、なかなか口に入らない。
その様子を怜治はにやにやと笑って眺める。
これはなんの拷問だ。　まさか自分たちを戦闘不能にするための奴の策略か！とシグナムは思った。　おそらくヴィータとザフィーラも似たような事を考えているのだろう。
はやてが意を決して大根を口に入れた。
シグナムの決意は決まった。　主だけに危険を冒させておいて自分は恐怖に震えるなど、騎士としての誇りが許さない。

（私はヴォルケンリッターを束ねる将！　その私がたかが煮物に怯えてどうするのだ！！）

シグナムはとった具を口に放り込む。　言葉では言い表しきれない衝撃的な味が口内を蹂躙する。
死神に魂を持っていかれる前にはやての子皿と自分の子皿を大皿に戻し、煮物が積まれた大皿を掴み、持ち上げ、傾ける。
やめろー！とヴィータが叫ぶ。
シグナムは止めなかった。
ふと、はやての驚いた顔が視界に入った。
忠誠を誓った主に向かってシグナムは笑いかける。

（主よ！　あなたを苦しめるものはこのシグナムが！　命を賭して振り払いましょうぞ！）

その顔には騎士としての決して揺るがぬ鋼の意志があった。
煮物が雪崩（あっきらせつひゃっきやこう）となって剣の騎士に襲いかかる。
その後のシグナムがどうなったかは語るまでもない。

「あー、良い湯だった」

首にタオルを巻き、はやてが用意してくれた落ち着いた色の寝巻に着替えて怜治は一人呟く。

前に来ていた服は明日洗濯してくれるらしい。

リビングに入るとソファーに横になっているシグナムを見つけた。

見下ろすと、水気を吸って艶の出た髪が妙に艶めかしい。

改めて見てみると美人だな、と思った。

整った顔立ちに、女性として恵まれた体つき。

素直に綺麗だと思った。　だが、本人に言ったら半殺しにされる気がしたので言わない。　それが照れ隠しだったらまだ可愛げがあるかもしれないが本気で嫌だとしたら半を通り越して全殺しになる。

……全殺しってなんだ。

「おーい、生きてるか？」

「……黙れ」

シグナムはうつ伏せに寝そべったまま答えた。

体が重い、というか胃が重い。　原因はただの食べすぎだけではないはずだ。

おかげで好きな入浴もろくに堪能できなかった。

それもこれも全てこいつのせいだ、と恨みがましい目つきで怜治を睨む。

「大体、なぜ貴様がここに来れた？　この家の周囲はシャマルの結界が張られていて、ある程度の魔力を持つ人間は入れないというのに……」

「お前のお仲間が撃った雷撃のおかげで魔力がすっからかんになったんだよ」

完全回復にはもうちょいかかりそうだ、と怜治は付け加えた。

「何？　あの魔法にそんな効果があるはずが――」

シグナムが何か言いかけたが、はやてが入って来たため言葉を切った。

体をおこしてはやてと向き合う。

「あれ？　もしかしてお話し中やった？」

「いえ、そんなことは……。　何かご用でしょうか？」

「あ、そやった。　怜治さんのパジャマ、どんな感じですか？」

「ん？　特に問題ないが……これって親父さんのか？」

「ええ、まあ、そんな感じです」

「そういや、お前の両親ってどうしたんだ？」

怜治の問いにシグナムが厳しい視線を向けた。

はやてが苦笑しながら答える。

「わたし……両親いないんです。　小さい頃に……その……」

はやてが言い淀むが怜治はなんとなく事情を察することができた。

事故か何かで帰らぬ人になった……ということなのだろう。
怜治は少女から目をそらす。　代わりに星が輝く夜空を眺める。

「そっか……俺と似たようなもんだな」

えっ、とはやてが小さな声を上げた。

「怜治さんも、その……ご両親を？」

「死んだって話は聞かねえが、十年近く会ってないし、声も聞いてない」

「寂しく……ないんですか？」

「別に。　ダチだっているし、何かとうるさいジジイもいる。　おまえだって、今は寂しいって訳じゃないんだろ？」

怜治ははやてとシグナムを交互に見る。
はやてとシグナムは互いに目を合わせる。
少女の顔に朗らかな笑みが広がった。

「そうですね。　今は寂しくありません」

「よかったな」

「はい！　あ、怜治さんの寝る場所決めんと……！」

「いいよ別に。　ここで寝るから」

怜治はＬ字型のソファーを指さす。

いいんですか？と聞き返すはやてに頷く。
少しして、はやてが毛布を一枚持ってきた。

「あんがと」

「いえいえ。　それじゃおやすみなさい」

「ああ、お休み」

はやてがリビングから出ていく。
体を毛布で包み、怜治はソファーに身を沈める。
目を閉じて眠りに就こうとすると視線を感じた。
シグナムがこちらを見ていた。
腕を組み、脚を組んでこちらを静かに見据えている。

「なんだよ？」

「見張りだ。　主が寝ている隙に貴様が手を出さぬ保証はない」

「他人の寝込み襲う趣味はないね。　っていうか、お前こそ寝ている俺を襲うなよ？」

「騎士の誇りにかけてそのような真似はしない。　貴様は戦場で真っ向から叩き斬ってやる。　安心して眠れ」

「できねえよ」

口では言ってみたものの、徐々に温まる体につられて眠気がやってきた。
まぶたが重い。　抵抗を試みるも、身体は休息を求めている。　や

がて、意識を夢に預けて怜治は眠りについた。

どのくらい眠ったのだろうか。
怜治の意識がゆっくりと覚醒していく。
うっすらと目を開けるが、目が暗闇に慣れておらず、まだ視界がはっきりしない。

「いくのか？」

「あったりめーだ。　……こいつ、寝てるのか？」

話声が聞こえた。　声からしてヴィータとシグナムか。

「おそらくな。　起きないうちにさっさと行け」

「うむ。　だが、シグナム、お前は本当に待機でいいのか？」

ザフィーラの声が加わった。

「構わん。　どちらにしろ、誰かがこやつを監視せねばならんのだ」

「ならいいけど、気をつけてね」

「ああ」

シャマルの声が聞こえ、玄関が開閉する音が聞こえた。
再びリビングに沈黙が訪れる。

「……いい加減、狸寝入りは止めたらどうだ？」

「気付いてたのかよ」

暗闇にも慣れ、目を完全に開く。

寝る前と同じ体勢でシグナムがこちらを見ていた。

「蒐集か……」

「……ああ。　追わなくていいのか？」

「追っていいのか？」

「その時は、全力で止める」

あっそ、と怜治は力なく答えた。

魔力がどれくらい回復したか確認する。　四分の三といったところか。　戦闘する分には十分だが、シグナムを相手にするには不安がある。

のどの渇きを感じ、怜治は立ちあがる。

シグナムが警戒の色を示す。

「茶をもらうだけだよ。　お前も飲むか？」

「不要だ」

キッチンに入り、冷蔵庫を開ける。　すると、冷蔵庫の奥に弾丸のようなものがいくつも入っていた。　圧縮魔力を封じたカートリッジだった。

怜治は脱力した。

「乾電池かよ……」

お茶の入ったプラスチック製のポットを取り、冷蔵庫を閉める。
コップを一つ取り、注いで飲む。
冷えたお茶の柔らかい味が広がり、のどを潤す。
半分ほど飲んだ時、頭に念話が届いた。

「（くそっ！　みんな悪い、応援たの……うわあっ！！）」

念話が途中で切れた。　ヴィータの声だった。
シグナムが立ちあがる。　だが、怜治の姿を確認すると後ろ髪を引かれるようにまた座る。
今度はわずかに腰を上げる。　また下げた。　同じ動作を繰り返す。
はやての護衛兼怜治の監視とヴィータを助けに行くかを天秤にかけているのだろう。
まったく、と怜治はため息混じりの声をだした。
怜治は脱衣所へと向かい、昼間にきていた服に着替え直す。
脱衣所から出ると、シグナムと鉢合わせした。

「どこへいくつもりだ？」

「さっきの念話聞こえただろ？　俺にまで届くってことはかなりヤバいんじゃないのか？」

怜治は畳みかける。

「俺がここにいたらあのちびっ子助けに行けねえんだろ？　だったら、俺が行きゃお前もなんの憂いもなく助けにいけるだろ？」

「貴様が敵であるはずのヴィータを助けると？　その言葉を信じろと言うのか」

「だったら勝手にしな。　どっちにしろ俺は行く。　来るか来ないかはお前次第だ」

怜治はキッチンに戻ってコップを洗い、ポットを冷蔵庫に戻す。
カートリッジにまた目がいった。
冷蔵庫を閉め、庭へ向かう。
スタンが準備万端とばかりに左右に揺れていた。

「スタン、さっきの念話聞こえたよな。　どこから届いたものか分かるか？」

『逆探はすでに完了済み。　しっかし、こんな形で行く羽目になるとはね』

「ん？　どういうことだ」

『行けば分かるさ』

あっそ、と短く言って怜治はスタンに跨る。
バリアジャケットを着込み、頭につけたゴーグルをかける。
足元に魔法陣が展開。　二重の円の中に五芒星が刻まれたミッド式でもベルカ式でもない術式。
転移魔法を発動しようとした時、シグナムが庭に出てきた。
片手に愛剣レヴァンティンを持ち、洋服のような騎士甲冑をきている。
怜治はほくそ笑んだ。

「行くんだな」

「ヴィータに何かあったら、主が悲しまれるからな」

シグナムの足元にベルカ式の魔法陣が展開。

紺とラベンダーの魔力光が庭を照らし、2人を包む。

光が消えた時、庭には誰もいなかった。

第２０話　予期せぬ再会（後書き）

どうでもいいことかもしれないですが
本文ではＡ’Ｓに入ったということで話数をリセットしました
アニメとどんな感じで内容が違うか感じやすいかも

第２１話　鋼鉄の竜

次元転移の魔法が発動し、怜治とシグナムは次元の海を泳ぎ、地球とは異なる世界への顕現を果たした。
地球のものより一回り大きく見える太陽がギラギラと熱線を放つ。
空や太陽が紫色に見えるのは気のせいだろうか。
目の前には見渡す限り砂しかない不毛な世界が広がっている。

「やっとつい……ぐっ……はあっ……」

突如、怜治の顔が苦悶に満ちる。　息苦しそうにのどを押さえ、酸素を求めて口がパクパクと魚のように開閉する。　加えて頭を殴られるような頭痛がする。
異変はシグナムにも起こっているようで、血色のよかった顔色が徐々に青白くなる。
スタンはすぐさま怜治から魔力を吸収。　機関部に通して物質へと変換。　黒塗りのフルフェイスヘルメットがふたつ造り出される。
被れ、と怜治に促す。
怜治は藁をもつかむ思いでヘルメットを被る。　とたんに、呼吸が楽になる。　深く深呼吸して肺に酸素を送り込む。
もうひとつを掴んで、ひざをついて苦しんでいたシグナムの頭に被せる。

「ぐっ……はぁっ……はあ、はあ……。　かたじけない、助かった」

「全くだ。　サンキュ、スタン。　しっかしこの世界はどうなってんだよ」

息を整えながら2人が礼を口にした。

スタンは照れ臭そうに、そして申し訳なさそうに機体をゆする。

『いや、オレもちょっと油断してた。　そうだった、ここはそういう世界になっちまったんだったな』

「ん？　スタン、お前ここのこと知ってんのか？」

『知ってるも何も、ここがオレの故郷だからな……』

はあっ！？と怜治の間の抜けた声が空に響いた。

シグナムも目を驚きに見開いている。

『ようこそ怜治、シグナム嬢。　オレの生まれ故郷、第４６無人世界“シェルコ”へ』

魔法少女リリカルなのはＡ’ｓ　☆Ｔｈｅ　Ｒｉｄｅｒ☆　第６話　鋼鉄の竜

砂漠の空を怜治とシグナムが飛ぶ。

視線を巡らせながらヴィータを探す。

『イヤー、あの雷撃のショックでこの世界の記憶が戻ってなかったらヤバかったなホント。　まさに怪我の功名ってやつだな』

「怪我しなきゃここにくることもなかったがな……」

「しかし、先程から全く生物を見ないな。　砂漠とはいえ、何かいてもおかしくないだろうに……」

『あー、そりゃ昔いろいろあってな……』

スタンが言うには、この世界は昔からデバイスに使われる部品の原料となる地下資源が豊富で、その加工技術やデバイスの開発技術が発展した世界だったらしい。

高いデバイス技術を持った世界に他の魔法世界が目をつけるのは時間の問題だった。

やがて発展した魔法文化を持つ世界はシェルコ製の部品やデバイスを輸入し始めた。

高い性能を発揮したシェルコの製品の噂は人気になり、シェルコ全土の経済は発展した。

暮らしぶりとしては豊かだったが、その代償に山や森は切り開かれ、炭鉱や工場へと変わる。　そこから出る排気が森を枯らし、砂漠化が進んだという。

「俺らの世界も他人事じゃねえな」

『まったくだ。　そこでいい加減ヤバいと思った権力者たちもなんとかして砂漠化を止めようとしたんだが、別の問題が出てきた』

「別の問題とは？」

シグナムが興味深そうに聞いた。

『魔力素の濃度の上昇だ』

魔力素とは魔導師にとって魔法を使う際に必要不可欠なものだ。

だが、人が生きるために不可欠な酸素も、濃度が濃いと酸素酔いを起こすのと同様、魔力素も濃度が高いと人体に、特に魔導師の体調

に不調をきたし、魔法で機能する機械類にも異常をきたすのだという。　先程感じた怜治が頭痛も魔力酔いの症状の一つで、渡されたヘルメットには酸素マスクと魔力酔いを防ぐ効果があるのだという。魔力素の濃度上昇により、魔導式の機械が暴走し、部品製造に支障をきたし、魔導師は魔法が安全に使うことができなくなった。　さらに追い打ちをかけるように、高濃度魔力素の影響で動植物が死滅し始めた。　環境の急激な変化についてこれず、生態系が狂い始めたのだ。　上手く生き残った生物も高濃度魔力の影響で異形のものと化し、人々を襲い始めた。　加えて言えば、この世界の空が紫色なのは魔力素が成層圏で想をつくったせいだそうだ。　太陽からの日射にも毒性がつき、バリアジャケットを着てなければ危なかった。環境、経済、食料の三つの問題が一気に押し寄せ、対応が追い付かなくなった。　すると当然問題は雪だるま式に膨らんでいった。やがて、人が手に負える状況ではなくなった。

「そんでどうしたんだ？　まさか諦めて滅んだか他の世界に移住したのか？」

『最終的にはな、でも最後の手段ってことである特殊なデバイスが開発された』

「それって、まさか……」

『そう、オレのような高性能ＡＩを搭載し、車型の姿をしたデバイス、“Ｓシリーズ”だ』

Ｓというのは発案した技術者のファミリーネームらしい。
とにかく、その技術者はまず魔導師や魔導機器が安全に機能するようにしようとした。
まず、魔導師の魔法暴走は周囲の魔力素の濃度が濃すぎるためにデ

バイスに送る魔力量の調整が困難になったからだった。
そこで思いついたのがスタンのような特殊なデバイスだという
魔力が多すぎて暴走を起こすというのなら、その多い分を使いきっ
ても足りないぐらいの魔力消費がかかるものを造ろうとしたのだ。
　そして、送られる魔力量の調整をサポートするためにより高度な
ＡＩが開発された。
すると、自然と大型になり、機動性を上げるために乗り物になった
のだという。
これで魔法行使における問題は解消された。　Ｓシリーズを使って
行われたのは凶暴化した生物の駆除や技術者や科学者の護衛だった
が、デバイスの性能が高いためむしろ以前より良くなった。

「なるほどね。　そりゃあ高濃度魔力下専用の装備なんて、普通の
世界で使ったらあっという間に魔力使い果たすわな」

『オレが呪いのバイクなんて言われた原因もそれだろうな。　そん
なわけでＳシリーズは大活躍。　改良を重ねてデバイス自身が魔力
素を吸引して自律行動するタイプも造られた。　おかげでこの世界
の魔力素の濃度も徐々に下がっていった。　まあ今でも即魔力酔い
が起こるぐらいには高いわけだが……。　とにかく、これで問題の
一つは片付くだろうとみんな思ったわけだ』

「だが、この世界から人は消えた。　人だけでなく、全ての生物が
……」

シグナムの言葉にスタンが頷くように機体が揺れる。

『まあどれもこれも手遅れだったって訳だ。　文字通りこの世界全
てのまともな野生生物は死滅した、微生物や細菌までもな。　生き
残ったのは人間とペットと家畜くらいだ。　そして、土壌や水源も

魔力で汚染されて作物や魚も食えたもんじゃなくなった』

「最初の息苦しさは酸素が無いせいか。　光合成で酸素を出す植物がいなくなれば酸素をなくなるはな」

『そんでもって、この世界代表の政府はついにギブアップ宣言をし、その技術力を交渉材料に管理局に保護を求め、生き残った人類はシェルコを去った。　残ったのは他の世界じゃ使い物にならないＳシリーズとこの砂しかない不毛の大地だ』

スタンの説明が終了した。
同時、巨大な砂柱が上がる。　方向は怜治から見て北東。
轟音が大気を伝って怜治の鼓膜をうつ。
シグナムにも緊張が走る。　レヴァンティンの柄に手をかける。

「あっちだな……行くぞ！！」

「無論だ！！」

砂柱へと目がけて2人は飛んで行った。

怜治たちが砂柱のもとに来ると巨大な鉄塊が横たわっていた。
黒塗りの機体に節のように連なる四角い車両。
横たわっていたのは蒸気機関車だった。　日本ではＳＬと呼ばれるもので、先頭は一角獣
の頭部のような形をしている。
これがスタンの言っていたＳシリーズの一つなのだろう。　これが

砂柱を上げた原因か。
怜治が興味深そうにＳＬを眺めるのをよそに、シグナムは仲間を探す。
すぐに目的の人物は見つかった。　だが、決して安心できる状態ではなかったし、見つかったのは一人ではなった。
淡い緑色の三角錐の結界の中に傷ついたヴィータが横たわり、その様子をシャマルとザフィーラが心配そうに見ていた。
シャマルがシグナムに気付く。　だが、顔を覆うヘルメットのせいで警戒が解けない。

「シグナム……なの？」

「ああ、そうだ」

レヴァンティンを証拠に見せる。
シャマルの心配そうな顔に光が差した。

「よかった、来てくれたの……そのヘルメットは何？」

「うっ……こ、これはだな」

『酸素マスクみたいなもんさ』

シグナムの言葉をスタンが遮った。
シャマルもようやく怜治の存在に気付いた。　眉間に疑念と警戒のしわが刻まれていく。

「どうしてあなたが？」

「俺が八神に手を出すんじゃないか心配で助けに行けねえって言う

からついてきたんだよ」

怜治は結界の中の三人を一瞥。　三人とも息苦しそうに肩が上下している。　結界内には一応酸素があるようだが、それでもつらいのは変わらないのだろう。　ヴィータにいたっては顔色がひどく悪い。

「スタン、このヘルメットあと三つ出せるか？」

『素材はお前の魔力だ。　それでもオッケーならいくらでも』

頼む、と短く言って怜治はスタンに魔力を注ぐ。
すぐに三つの黒いフルフェイスヘルメットが現れる。
シグナムにヘルメットを渡し、シャマル達に被るよう言う。
怜治が渡しても、彼女たちは受け取らないだろう。
シグナムが結界内に入る。

「どういうことだ？」

ザフィーラが当然の疑問を口にする。
シャマルも頷いて同意を示す。

「すまん……だが、ここは黙ってこれを着けてはくれないか？」

黒いヘルメットを差し出す。
シャマルが手を伸ばすが、やはりためらいがあるのか手を引っ込める。
ザフィーラは手を伸ばしもしない。

「奴を信じろとは言わない。　だが、私が信用したこの兜の性能を信じてもらいたい」

シグナムの真摯な瞳がヘルメットの間から覗く。
三人の視線が交錯。　少しして、シャマルが再び手を伸ばす。

「……そうね」

ヘルメットを手に取り、被る。
あんまり可愛くないわね、とのんきに不満をこぼした。
ザフィーラもヘルメットを手に取り、ヴィータに被せ、続いて自分も被る。
結界が収縮し、シャマルとザフィーラが出る。
ヴィータの治療に集中するらしい。
目的は果たしたな、と怜治は再び巨大なＳＬに目を向ける。
明らかに怜治が知る地球のＳＬより倍近く大きかった。
感心したようなため息が零れる。

「しっかし、こんなんブッ倒すなんてな。　分かっちゃいたが強いなお前ら」

「違う」

ザフィーラの否定に怜治が振り向く。
ザフィーラもシャマルもまだ警戒を解いていないことに気付いた。
怜治に対してではない。　２人ともしきりに地面に警戒を向けていた。
嫌な予感が怜治の脳裏を掠めた。

「どういうことだ？」

予感が外れていることを期待しながら尋ねた。

ザフィーラが答える。

「そこの蒸気機関車を倒したのは我らではない」

瞬間、怜治たちの足元が大きく隆起した。
反射的に全員が飛び退くのと同時に巨大な砂柱が再び上がる。
その中から、漆黒の鉄の塊が現れた。
だが、塊という認識はすぐに改められた。
それは爪だった。　黒い丸っこい手の平につるはしのような鋭い五本の爪が砂の大地を割って現れたのだ。
やがて、同じく黒い腕が現れ、崖を這い上がるように一気に全身が現れる。

鈍色の関節を持ち、漆黒の身体。　胸に埋め込まれた紫色の宝珠が妖しく光り、頭部は楕円形で口の間からは鋭い牙が並ぶ。　蛇のような尾がギチギチと音を立ててしなり、大木のような二本の脚が砂の大地を踏みしめる。　背中には百を超える砲門が背負われている。
それは全身が鋼鉄に覆われた漆黒の巨大な竜だった。　翼はなく、逞しい脚と尾がその巨体を支えている。

「なんだよ……こりゃ……」

その巨体に気圧されて思わず怜治は一歩下がる。
ジュエルシードの影響で巨大化した生物は何体も見たが、この竜はあれらの比ではない。
突如、竜が咆えた。
狩るべき獲物を見つけた喜びからか、自分の縄張りを荒らされたことからの怒りなのか定かではない。　が、その咆哮は大気を震わせ、その場にいる全てのものに恐怖を振り撒く。
さすがのシグナムも気圧され、一歩下がる。　同時にザフィーラの

言った言葉の意味を理解。　先程の砂柱はこの竜が起こしたものなのだ。
ＳＬとヴィータ達が戦闘していたのは確かだろうが、その先頭に終止符を打ったのがこの竜なのだろう。　今現れたように地中から腕を伸ばしてＳＬを一撃で行動不能にしたのだろう。
その巨体から繰り出される一撃の威力は想像するだけでもゾッとするものだ。

「おいスタン、この世界には生物はいないんじゃなかったのか？」

咆哮が響く中で怜治が言った。

『いねえよ。　あれは生物じゃない』

スタンが落ち着いた口調で答える。

『あれも、“Ｓシリーズ”の一つだ』

怜治は絶句。　少し離れたところで聞いていたシグナムも驚愕に目を見開いた。

「おいおい、勘弁しろよ」

咆哮が止んだ。　代わりに怜治の呆れた声が響く。
竜の腕が上がる。　太陽を掴もうとするかのように空高く掲げる。

「こいつもデバイスだってのかよッ！！！！」

竜の腕が振り下ろされた。
大地を穿ち、砂の津波が起こる。

騎士たちが再び後方へ飛ぶ。　そこで気付いた。
ヴィータはまだ回復し終わっていないことに。
小柄な少女の体が結界ごと宙を舞う。　砂の津波がヴィータを飲み込もうとする。
シグナムが少女の名を叫ぶ。　少女に聞こえるはずがない。
ザフィーラが手を伸ばす。　少女に届くはずがない。
シャマルが結界を強化する。　焼け石に水にしかならない。
騎士たちの瞳に絶望が広がる。

「スタンッ！！！　フォーム？（ワン）アームズッ！！！」

『了解ッ！！！』

怜治の腕が白黒の金属に包まれる。
同時に空間転移の魔法陣が展開する。
怜治が空間を超えて駆ける。
ヴィータの目の前に転移、結界を力づくで破壊し、ヴィータを抱えて再び転移。
直後に砂色の津波が轟音をたてて落ちる。
怜治がシャマルの前に現れる。　腕にはヴィータが抱えられていた。

「ヴィータちゃん！」

「ほらよ、さっさと治療してやれ」

ヴィータをシャマルに渡す。　シャマルが治癒魔法をヴィータかける。　淡い緑色の光が少女を包む。

「どういうつもりだ？」

「ああ？」

怜治が振りかえるとザフィーラが腕を組んで立っていた。　目には疑念の色がある。
ザフィーラが再び疑問を口にする。

「我らは管理局側の貴様にとって敵のはずだ。　なぜ助ける？」

「くっだらねえこと聞くなよ。　俺はもとよりこのちびっ子の念話聞いて来たんだぜ？　助けんのは当然だろうが」

「ならば、なぜ念話を聞いて来た？　貴様に我等を助けて得るものも、助ける義理はないはずだ」

「生憎と、損得とか義理で動くほど分かりやすい奴でも、助け求められて無視できるほど冷血じゃないんでね」

地響きが響く。　竜がこちらに向かって歩いてきているようだ。
徒歩とはいえ、あの巨体での一歩はかなりの距離になるだろう。

『無視されてご立腹のようだな。　お二人さん、話は後にしてあっちの相手をしてやれよ』

「……ま、それもそうだな」

怜治はエリシオンを起動。　杖先に魔力刃が顕現、砲撃体勢へと入る。
ザフィーラの足元にベルカ式の魔法陣が展開。　離れた場所でシグナムがレヴァンティンを抜剣しているのが見えた。
シグナムが大地を蹴って鉄竜に向かって飛翔。

薬莢が爆ぜ、圧縮魔力が流れ込む。　魔剣に炎が纏う。
ザフィーラが拘束魔法を発動。　合わせて怜治が砲撃、シグナムが炎の斬撃を繰り出す。

「鋼の軛（くびき）ッ！！！」
「紫電一閃っ！！！」
『Ｄｒａｇｏｎ　ｆｏｒｃｅ』

すさまじい炸裂音が砂漠に轟く。
怜治の砲撃が花火のように破裂し、大輪の花を咲かす。　反動で腕が痺れる。
シグナムの斬撃が爆裂する。　危うく自らの腕を焼くところであった。
ザフィーラの拘束条が絶え間なく伸び続け、鉄竜を閉じ込める。
過剰な拘束だった。
三人が放った魔法は、全て本人達の希望した威力を遥かに超えていた。
決して喜ぶべきことではない。　すなわち、魔法制御ができなくなっているということなのだから。
三人の顔に困惑が広がる。
最初に立ち直ったのは怜治だった。
スタンの言葉を思い出す。　この世界は魔法を暴発させたと、Ｓシリーズによって多少濃度が下がったとはいえ、簡単に魔力酔いを起こすほどの濃度であることに変わりはないと。
怜治は自分が犯した間違いに気付いた。
この世界でまともなデバイスがまともに機能するはずがないのだ。
飛行や念話を始めとした簡単な魔法なら問題ないが、術式を組み、陣を敷く攻撃魔法は尽く暴走するのだ。
鉄竜の剛腕が振るわれる。
銀の牢獄を粉砕し、シグナムを薙ぐ。

シグナムの体が簡単に吹っ飛んだ。　砂柱が上がる。

「シグナムッ！！」

ザフィーラの声が飛ぶ。

それに答えるように砂柱が寸断、シグナムが姿を現す。

怜治は剣の騎士が持つ剣の形状が変わっていることに気付いた。

いくつもの節に分かれた蛇腹剣、鞭状連結刃が剣士を囲むように展開していた。

先程より圧倒的に攻撃範囲が伸びるであろうそれは、シグナムの中距離戦闘スタイルなのだろう。　だが、それでは駄目なのだ。

「待てっ！！　お前スタンの話聞いただろっ！！　この世界じゃ、俺のエリシオンもお前らのデバイスも暴走する！！」

怜治の言葉に、シグナムが目を剥く。

自分でも理解したのだろう。　忌々しそうに奥歯を噛みしめる様が見えた。

「どういうことだ？」

「ああっと、簡単に言うとだな――」

怜治の言葉が鉄竜の咆哮にかき消された。

腕を大地に下ろし、四足獣の体勢になった。

背中に背負う数多の砲門に光が灯る。

怜治は血の気が引くのを感じた。

ザフィーラとシャマルがとっさに障壁を展開。　だが、高濃度魔力の影響で制御ができない。　障壁ができたところからボロボロと崩れる。

砲門の光が一気に強まる。

「逃げろぉおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ！！！！！！」

シグナムの絶叫とともに砲撃が放たれる。

百を超える閃光が迸った。

視界が白い光に塗りつぶされた。

「う……ううっ」

全身を走り続ける痛みで、シャマルは意識を取り戻した。　できれば二度としたくない目覚め方だ。　倒れていたため騎士甲冑も砂だらけだった。

まだはっきりとしない意識をフル回転させ、何が起こったのかを思い出す。

強烈な光が自分の視界を覆い尽くした瞬間が脳裏を掠め、体を起こす。

シャマルは息をのんだ。

砂の大地が抉れていた。　まるで、隕石でも落ちたのではないかと思ってしまうほどの巨大な楕円形のクレーターが目の前に広がっていた。

そして、それを真正面から受けたであろう怜治とザフィーラの姿を見て戦慄した。

怜治は全身から血を噴き出し、足元の砂が、真っ赤に染まっている。

髪は血に汚れていた。

血を出しすぎたせいで、怜治の顔色はこれ以上ないくらいに悪い。

バリアジャケットは損傷し、胴と左脚を守るものはなかった。
腕を包んでいたスタンも損傷が激しく、砕けて破片となった個所もあれば、触れただけで鉄屑に変わってしまうほどのひびが入った個所もあった。
ザフィーラもボロボロだったが、元々の鍛え方の差だろうか、ザフィーラの出血はそこまでひどくはなかった。　もっとも、軽いと言えるわけではないが。
怜治は重傷だが、あれだけの砲撃を受けて生きているのは、鉄拳形態（アームズフォーム）がもとより防御型の形態だったからだろう。
他の形態で受けていたら、間違いなく死んでいただろう。
急いで治癒魔法をかける。　失った血は戻せないが、傷口だけでも塞いでこれ以上の出血を押さえる。
急いでいたせいか、魔力の暴走で余計傷が増えた気がしたが、とりあえず出血を止めることはできた。
同じようにザフィーラにも治癒をかける。　加減を覚えられたのか、こちらは問題なく治療できた。
シグナムが駆けよる。　彼女の顔にも唖然とした表情があった。

「なんと馬鹿げた威力だ……」

「まったくだよ、クソッたれ」

息絶え絶えの怜治が悪態をつく。
状況は最悪だった。
こちらの魔法はまともに発動せず、むしろ暴走する。
簡単な治癒魔法や結界程度は発動するようだが、それであの鉄竜と渡り合えるはずがない。
前衛役の四人のうちの三人のダメージは酷い。　対して鉄竜は未だ無傷。
シャマルは歯噛みする。

自分たちの非力さにではない。　自分たちへの不運にだ。
この世界――魔法が暴走する世界でなければ、自分たちが竜一匹にここまでやられるはずがないのだ。
シャマルが作戦を組み立て魔法で皆を補助し、シグナムとヴィータが敵を討ち、ザフィーラが防御支援をする。　そこにオールレンジで動ける怜治が加われば負けることの方が少ないだろう。　だが、この世界の濃い魔力がそれを許さない。
撤退しよう。
そんな後ろ向きな考えが浮かぶ。
情けないかもしれないが、前衛が重傷を負ったのだから仕方がないだろう。
ヴォルケンリッターが望むのは強敵との血沸き肉踊る戦いではない。
魔力を集め、闇の書を完成させ、その主であるはやてを救うことだ。
その旨を皆に伝えようとした時、

怜治が一歩前に出た。

「な……」

突然の行動にシャマルは驚愕に目を開く。
怜治はさらに歩を進める。
その度に腕が軋み、体を染める血が垂れる。

「な、何やってるのっ！？」

「戦うにきまってんだろ」

「な……っ！」

何を言っているのだ、この男は。

止めようとシャマルが怜治のバリアジャケットの裾を掴むが、振り払われた。
代わりにザフィーラが肩を掴んで今度こそ怜治を止める。
怜治がザフィーラに顔を向ける。
その顔には、歪んだ笑みが浮かんでいた。

「……ッ！」

思わずザフィーラが手を離す。

「ありがとよ」

怜治は再び歩き出す。
三度止めようとする者はいない。
怜治は歩き続ける。　そして気付いた。
自分は望んでいるのだ。
戦いを。　今まで体験したことのない非日常を。
傷つき、傷つけ、そして自分が生きていることを感じることができるのだ。
十二年前のあの日、両親と離別した時から感じた、胸にぽっかりと穴があいたような喪失感。　それが戦っている時だけは満たされていたのだ。
自分は狂っているのかもしれない、と怜治は思った。
それでも変わろうとは思わない。　無自覚でそうなったのならば、それが自分の本質なのだろう。　ならば、その異常さを受け入れて、抱えて生きよう。
どんな汚く、認めがたいものでも、失うのは嫌だった。
怜治は自分の腕を、腕を包む相棒を見る。

「言わないん…だな」

『何を……だ？』

「こういう時、無茶をするなって……よく、言うじゃねえか」

息絶え絶えに軽い口調で話す一人と一台。
あれほどの砲撃を正面から受けたのに、まるで恐怖を感じてないようだった。

『あー……、それはだな……』

怜治はスタンの答えを静かに待つ。
スタンが答えた。

『オマエが思ってるほど……無茶じゃ、ねえからだ』

怜治は目を丸くした。
どういう意味だ？と聞く前にスタンが説明を開始した。

『前に、魔法体系は……ふたつの種類に分けられるって、話をしたろ？』

「ああ、確か……“あらゆる条件下でもある程度の成果が見込めるもの”と“特定の条件下で絶大な成果を上げることができるもの”、だっけか？」

『オレの場合、どっちだと、思う？』

スタンの問いに怜治は考える。
自分たちの戦い方を思い返す。

近接戦の鉄拳や大剣だけでなく、遠距離からの砲撃も可能だ。

「前者の方……あらゆる条件下でもある程度の成果が見込めるもの……か？」

『半分、正解』

スタンがいたずらに成功したような声を出した。

怜治は少しムッとした顔をした。

『正直言うと、オレたちSシリーズは……そのふたつの中間に、位置する。　つまりは……“あらゆる条件下でもある程度の成果が見込め、さらに特定の条件下なら確実に勝利できる”、だ』

言い終わると同時、スタンの体が発光。

怜治の体に魔力が満ちていく。

『その条件ってのは――』

バリアジャケットとスタンが修復されていく。

それでも、怜治の魔力は全快だった。

怜治は驚愕に目を開く。

『高濃度魔力下での戦闘行為！！』

怜治はスタンの説明の中の一言を思い出した。

『改良を重ねてデバイス自身が魔力素を吸引して自律行動するタイプも造られた』

スタンが大気中の魔力素を吸引し、それを怜治に回しているのだ。

おかげで、怜治の魔力の回復量が跳ね上がったのだ。

「は、はは……ははははははははははっ！！！！！」

狂ったように怜治が笑う。
シグナム達がドン引きしているようだが、気にせず笑う。
体の痛みはもう消えていた。　癒えたのではない。　興奮状態で痛覚が麻痺したのだろう。

「最高だ。　やっぱお前は最高だよスタンッ！！」

『喜ぶのはまだ早いぜ？　その条件ってのはあちらの竜さんも満たしてんだからな』

「問題ねえっ！」

怜治は叫びながらスタンを大剣形態（ブレイドフォーム）に変形。　左手で持つ。
魔力で脚力を強化し、砂を巻き上げながら突撃する。
鉄竜が右の剛腕を振るう。　手加減など一切ない一撃が空を薙いで迫る。
痛みはなくとも、重症には変わらないまともに受ければ即ひき肉に。
腕力を強化し、スタンで受けても遥か彼方へ吹っ飛ばされるだろう。
そんなことは怜治も理解していた。　懐に右手を入れる。
獲りだしたのはふたつの筒状の薬莢。　シグナム達が使うカートリッジだ。

「なっ！？　いつの間に！」

「悪いが借りるぜえっ！！」

カートリッジを一気に握りつぶす。

圧縮された魔力が怜治の体を駆け巡る。
暴れまわる魔力を力づくで抑え、その全てを右手の拳に集中。
鉄竜が振り下ろす剛腕に向かって一気に突き出す。
鐘を叩いたような轟音が響く。
鉄竜と怜治、両者の腕が後方に跳ね、体ごと後方に飛ぶ。
怜治の右手から鮮血が舞う。　骨が砕けたのだろうか、感覚が消えた。
鉄竜の右手にひびが走る。　砕けた鉄片が砂漠に刺さる。
怜治は素早く体勢を整えて再度突撃。
鉄竜はその巨体が災いして体勢がまだ整わない。
大剣を振るう。　金属を削る耳障りな音が響く。
体に傷は付いたがダメージにはならないのか、傷が小さすぎるのか、鉄竜は動じない。
体勢を整え、左腕を振るう。
遠くから見たら緩慢な動きに見えるかもしれないが、至近距離で感じる圧はすさまじい。
後方へ飛んでかわすが、風圧が怜治の体を吹き飛ばす。
砂の大地を転がる。
口に入った砂を吐き出していると、影が落ちる。
咄嗟にその場から退避。　今いた場所を鉄竜の黒い足が踏み潰す。
スタンを砲撃形態（バスターフォーム）に変形。
魔力を一気に装填し、発射。　炎雷纏う紺色の光の奔流が鉄竜を飲み込む。
鉄竜の鉄爪は怜治の砲撃を切り裂く。
咆哮を上げ、再び四足獣の姿勢。　砲門に破滅の光が宿る。
怜治に恐怖を感じない。　どんなに威力があろうと、当たらなければ意味がないのは身を持って理解している。
大剣を地面に突き刺し、左手に蒼炎と蒼電を宿して一気に体に装填する。
怜治の全身が目が覚めるような蒼に染まる。

髪が炎のように揺らめき、放電の火花が散る。
炎の破壊力と電撃の速度を得る。
大剣を握り、大地を蹴って飛翔。
鉄竜の顎を斬り上げる。　鉄竜の体が後ろ向きに反れ、砲撃は空へと放たれた。
衝撃で鉄竜の体がひっくり返った。　この隙を見逃す手はない。
一気に降下して刃を鉄竜に突き立て、一閃。
鉄竜の体に大きな傷跡が刻まれた。
もう一撃、と思って飛翔したところへ鉄竜の剛腕が通過。
咄嗟に大剣で受けるも怜治の体はたやすく吹っ飛ぶ。

「っつ～、やっぱそう上手いことやれねえな」

『ン～、やっぱまだダメージが残ってる。　ちょっとヤバいかも？』

怜治は立ちあがって体についた砂を払う。
骨が折れたわけではないが、殴られた痛みはある。
それでも、怜治は笑みを崩さない。
やはり、自分はおかしいのだろう。
そう思いつつ、怜治は再び鉄竜へ突撃していった。

鉄竜と互角に戦う怜治の姿を、騎士達は茫然と眺めていた。
視線の遥か先で上がる砂柱や極光が戦いの激しさを表す。

「何というやつだ……」

思わず、シグナムの口からそんな言葉が漏れた。

魔力が回復したとしても、魔法が問題なく使えるとしても、怜治の体は変わらずボロボロだ。　なのに、体中が悲鳴を上げてもおかしくないというのに、怜治は笑って鉄竜に突撃していった。
普通の者なら、痛みと恐怖で動かなくなるだろう。　そうでなくとも、戦うことへの躊躇が生まれるはずだ。
シグナム達のように多くの戦いを乗り越えて来た者なら違うだろうが、怜治は違う。
戦闘経験はまだ浅いと言ってもよく、戦いとは無縁のはずなのに、怜治は迷うことなく戦いに身を投じて行った。
一騎当千の騎士が立ちつくし、半人前同然の魔導師が戦っている。
自分が当事者でなく、ただ話として聞いただけなら信じなかっただろう。
それほどの事態であった。

「何……ボサッとしてんだよ」

シグナムが振り返ると、ヴィータが目を覚ましていた。
傷が完治したようだが、体に残る疲労感のせいかまだ辛そうだ。
それでも、愛用の鉄槌を杖代わりにして立ちあがる。
ゆっくりと歩き、シグナムと並ぶ。　少女の眼には闘志がすでに宿っていた。

「何ボサッと見てんだよ！」

「ヴィータ……」

「揃いもそろって何あいつ一人に任せてんだ！！　なんでただ黙って助けられようとしてんだよ！！」

ヴィータは叫びながらさらに歩を進める。

足元はふらつき、今にも倒れてしまいそうだ。
怪我と疲労は違う。
いくら治癒魔法で傷を治せても、疲労の回復はすぐにはできないのだ。
それでも少女は止まらない。
ヴィータを突き動かすのは敵に助けられてたまるかという意地と黙っていることを許さない騎士としてのプライドだ。
無謀ともいえる行動だが、シグナム達の心に訴えかけるには十分すぎるものだった。
シグナムが歩き出す。
ザフィーラが歩き出す。
向かうは戦場。　立ちはだかるは鋼鉄の竜。　障害は魔法を暴走させる環境。
絶望的ともいえる状況だが、騎士たちは進む。
シャマルが止めようとして立ちあがる。

「ちょ、ちょっと皆!?　分かってるのっ!?　私達がやるべきことはあの子を助けることじゃないのよ!?」

シャマルはヴォルケンリッターの参謀だ。
状況を冷静に判断し、ベストな作戦を立て、前衛を魔法でサポートをするのが役目。
参謀として、この戦闘を容認するわけにはいかない。

「彼は管理局の人間よ!?　彼を助けたら、私達の事全部あっちに伝わっちゃうのよ!?　家の場所も!　はやてちゃんの事も!　分かってるのっ!?」

シャマルは叫ぶ。
冷血と蔑みたければ蔑めばいい。

彼女にとっての最優先事項ははやての身の安全と闇の書の完成。
そのためなら仲間である騎士たちに軽蔑されようと、心を鬼にしよう。
シグナムがゆっくりと顔を向ける。
この表情は軽蔑するような冷たい表情ではなく、穏やかで温かい笑みだった。

「シャマル。　お前の言うことはもっともだ」

シグナムは愛剣の柄に手をかける。

「今後の事を考えたら、奴を助けることはマイナスにしかならないだろう。　だが――！」

レヴァンティンを一気に抜剣。　陽の光を浴びて白刃が輝く。

「騎士として、我らのために命をかけている者を――たとえ敵だとしても――見捨てることはできんっ！！」

「つーか、あいつははやてと病院行くって約束してんだ。　ちゃっちゃと連れてかねえとな」

「奴に借りをつくるのは気に食わん。　それに、奴を置いていったら寝覚めが悪い」

「……。　あなた達って人は……」

ため息をひとつ零し、シャマルは腹を決めた。
ビシィッと不敵に笑う仲間を指さす。

「いい？　この世界じゃ私達の魔法はまともに機能しないんだから、ちゃーんと私の作戦通りやってよ？」

「無論だ」

「わーってるよ」

「頼むぞ参謀」

四人の騎士は駆けだす。
無茶をする変わった馬鹿を助けるために。

怜治は渾身の斬撃を鉄竜に叩きこむ。
もう何度目になるか知らないそれは、確実に鉄竜の体にダメージを与える。　だが、決して致命傷にはなり得ない。
怜治の攻撃が軽いのではない。　鉄竜が頑丈すぎるのだ。
怜治は息を上げる自分の体に苛立ち、舌打ちする。
次第に両者の体力差が明らかになってきた。
まだ傷が回復しきっていない怜治に、徐々に限界が訪れる。
鉄竜が振るう剛腕をかわそうと跳んだ時、その身に纏った炎雷が消えた。
急激に速度が落ち、回避が追いつかない。
鉄腕が迫る。
自分の身がミンチになる様を想像し、背筋が凍る。
瞬間、紅の光弾が鉄竜の腕を撃った。
鉄腕の軌道が逸れ、間一髪で怜治の下を通り過ぎた。
薄紫色の閃光が鉄竜の側倒部を叩き、鉄竜の巨体が傾く。

怜治が着地したのと、鉄竜が地に倒れるのは同時だった。
何が起こったのか分からないでいると、怜治の隣に赤い服の少女が舞い降りる。
ヴィータだ。　少し間を開けてシグナムも降り立つ。

「何情けねえ死に方しようとしてやがんだバーカ」

ヴィータの言葉に怜治は苦笑する。
彼女の言うとおり、今の自分はかなり情けない姿なのだろう。
視線だけ動かすと、自分の後方にザフィーラとシャマルが待機しているのが見えた。
どさくさに紛れて怜治自身も騎士たちのフォーメーションに組み込まれているようだ。
怜治は笑みを浮かべて言う。

「なんで、てめえがここに？　怪我人は大人しく寝てろよ」

「うっせーな。　てめーこそケガ人だろうが」

「なんだ、そんな俺を心配して来てくれたってか？」

「バーカ、んなわけねーだろうが。　おめーになんかあるとはやてが悲しむんだよ」

「八神が？　どうして？」

怜治の質問にヴィータの顔が険しくなる。
グラーフアイゼンを握る手が怒りに震えている。

「はやてと！　明日！！　病院に行くって！！！　約束しただろー

が！！！！」

声に合わせて鉄槌が地面に叩きつけられる。
怜治は「あーそういやそんな約束してたなー」みたいな顔をし、それがさらにヴィータの怒りを増長させる。
こいつ今から殺していい？てゆーか殺すは。という視線をシグナムに向けるが、シグナムは首を振って止める。
鉄竜が起き上がる。　その眼には怒りに染まっているようにも見える。
怜治、ヴィータ、シグナムの意識が鉄竜に向く。
それぞれ己が獲物を握りしめる。

「さて、まさか策もなくきたなんてマヌケなこと言わねえよな？」

「ったりめーだ。　ベルカの騎士をバカにすんじゃねえ」

ヴィータはグラーフアイゼンを掲げて鉄竜を指す。
正確にいえば鉄竜の胸、陽の光を浴びて輝く紫の宝珠。

「あの竜はデバイスなんだろ？　だったらあれがデバイスコアだ。
あれをブチ抜く！」

ヴィータの言うとおり、デバイスにとってコアとは脳であり心臓でもある。
そこを損傷すれば機能が低下するし、破壊すればデバイスとしての機能は完全に停止する。
まさに急所であった。　だが、言うは易く行うは難し。
敵も自分の弱点くらいは理解しているはずだ。　実際、怜治もそこを何度か狙おうとしたが、尽く防がれていた。
騎士たちの実力を疑うわけではないが、簡単にできることではない

のは明らかだ。
そんな怜治の考えを見抜いたのか、ヴィータが続けて言う。
「当然、バカみてーに全員であれに突っ込むわけじゃねー。　シグナムとザフィーラ、それとおめーがあの竜の注意を引きつけて、あたしがアイゼンでブチ抜く」
「おいおいケガ人が無理して大丈夫か？　念のため言っとくがあの竜結構固いし、都合よくコア部分だけ脆い保証はねえぞ？」
「バカにすんなっつってんだろ！　ヴォルケンリッターの中じゃ一撃の威力に関しちゃあたしが一番なんだ」
文句あるか？と言ってくるヴィータに怜治は苦笑する。
この少女とは気が合う気がした。
敵として会わなければそれなりに上手くやっていけるような気がする。
「オッケー。　そこまで言うんならやってみやがれちびっ子！」
「ちびっ子言うな！　……ヴィータだ」
「あ？」
「あたしの名前はヴィータだ！！　名乗ってやったんだから次からはそう呼べよな！！」
「ははっ……分かったよ」
今思えば、騎士たちから直接自己紹介されたのは初めてだ。

はやてを通して名前は知っていたが、本人からではないので呼ばないようにしていたが、これは一種の信頼の証と思って構わないのだろうか。

信頼といっても、この状況を打破するための戦力の一つになるという意味のものだろうと怜治は思い直した。

鉄竜が再び動き出す。

獲物が増えたためか、先程より頭部がせわしく動く。

頭部が止まり、色の無い両目がヴィータを捉えた。

ヴィータに向かって剛腕が振り下ろされた。

この巨体からは想像できない速度で剛腕が呻りを上げて襲いかかる。

ヴィータは飛翔し、小柄な体を生かして旋回しながら鉄竜の懐に飛び込み、鉄槌の一撃を右脚に叩きこむ。

可愛らしい外見からはかけ離れた一撃に鉄竜が姿勢を崩す。

その隙を見逃さず、シグナムはカートリッジを一発ロード。

レヴァンティンの刀身が伸び、鞭状連結刃へと変化する。

鞭のようにしなるそれは、この世界の濃い魔力の影響であさっての方向へと飛ぼうとする。

が、そうなることは想定済み。　暴走することが分かっている今、操り損じることなど烈火の将にはあり得ない。

巧みに鞭剣を操り鉄竜の左腕を拘束。　シグナムは鉄竜の背後まで飛び、力の限り引っ張る。

鋼鉄の左腕が背中に回され、苦痛の叫びが轟く。

ザフィーラが〈鋼の軛〉を発動。　大地より生える拘束条が右足を貫き、縫い付ける。

鉄竜も黙ってやられはしない。　鉄尾を多節鞭のごとく振るう。

尾先が向かうは足元にいた赤毛の少女。

ヴィータは後方に飛んで鉄尾を回避。　同時、すれ違いように怜治が駆け抜ける。

三つ目のカートリッジを取り出し、左手で潰す。

解放された圧縮魔力を大剣に注ぐ。　同時に蒼炎を全身で纏う。

黄砂の大地を蹴って飛翔。
鉄竜の尾が標的を怜治に変えて襲いかかる。
怜治は体を回転させて渾身の斬撃を尾先に叩きこむ。
圧縮魔力と蒼炎で強化された刃は鉄竜の尾を一瞬で二股に切り裂く。
鉄竜が悲鳴を上げる。
翼を持たぬ鉄竜は体を支えるために残った左脚はうごかせない。
準備は整った。
ヴィータはカートリッジを一発ロード。　グラーフアイゼンのハンマーヘッドの片方が推進剤噴射口に、その反対側がスパイクに変形する。
噴射口が火を噴き、ヴィータの体が回転。
濃い魔力が推進を暴走させる。　噴射口の火が大きくなり、ヴィータの回転が加速。
その回転は少女の制御を離れ、狙いと違う方向へと軌道を変えようとする。

「――っだらあああっ！！！」

ヴィータが咆哮。　その細腕で軌道を修正する。
高濃度の魔力によって高まった加速力がさらなる破壊力を生む。
狙うは一点。　鉄竜のコア。

「噴進式（ラケーテン）――」

金色の鉄杭が紫の宝珠を完全に捉えた。

「鉄槌（ハンマー）ぁあああああああああっっっ！！！」

轟音が響き、鉄槌の騎士の一撃が鉄竜の心臓を粉砕――、

しなかった。

「な――っ！？」

確かにラケーテンフォルムのスパイクは宝珠に食い込んだ。　だが、それもわずかな先端のみで、わずかにひびを入れるだけに終わった。

鉄竜が咆哮。

腕を振るい、怜治とシグナムを振り払い、両手を大地に下ろして四足獣の姿勢となった。

全員の背中に悪寒が走る。

鉄竜が背負う砲門に破滅をもたらす光が宿る。

もう駄目なのか。

騎士たちの顔に絶望が広がる。

「ヴィータッ！！」

怜治の声が響いた。

「もう一発だ！　今のやつを俺に撃ち込めぇっ！」

何を言ってるんだと思った。

だが、ヴィータは見た。　この状況でも必死に足掻こうとする男の顔を。

同時に怜治が言わんとしていることを理解。

自分は絶好のチャンスを不意にしてしまったというのに、それでもこの男は自分の力を必要としているのだ。

鉄槌を握りしめる。

いいだろう。　乗ってやろう。

今、この瞬間だけはおまえを信じよう。

鉄槌を掲げ、カートリッジをロード。
再び噴射口が火を噴き、加速。
怜治は蒼雷を纏い、ヴィータの前に出る。
ヴィータはさらにカートリッジをロード。　さらに加速する。
暴走を押さえこみ、体を暴れまわる魔力で体に激痛が走るが構わない。
目の前の男も同じようなことをしているのだ。
奴ができて、自分ができない道理はない。
少女の振るう鉄槌の先が、騎兵の足裏に触れた。
怜治は八神家から盗ってきた最後のカートリッジを消費。
大剣を突きの姿勢にして構える。
魔力で脚力を強化。
足の裏に何かが触れるのを感じた。
怜治は笑みを浮かべる。
今思えば、戦闘でこうして誰かと協力するというのは初めてだった気がする。
ヴィータがくれた足場に足を置き、膝を曲げる。
紺と紅の魔力光が輝き、魔力が渦となって巻き起こる。
ヴィータの鉄槌による加速。　怜治が強化した脚力。　攻撃と速度を高める炎雷。　高濃度魔力下で最大の力を発揮するスタンの大剣。
これ以上ないほどの一撃。
これで駄目なら素直に諦めよう。　惨めったらしく逃げ帰ろう。

「いくぞっ！」

「おうっ！」

鉄竜から百を超える閃光を放たれた。

破滅を招く極光が視界を覆い尽くす。
それでも怜治とヴィータは止まらない。
鉄槌の騎士は全力を持って騎兵を打ち出し、騎兵はその期待に応える。

「「龍槌突貫（ドラッケンエイル）ッ！！！！」」

怜治は飛び、流星となる。
紺と紅の光が螺旋を描いて怜治を包む。
極光の弾幕と流星の槍が激突。
勝負は一瞬で決まった。
勝者は流星。
双光の槍が極光の弾幕を切り裂いたのだ。
鉄竜との距離は一瞬にして零となり、大剣が鉄竜の宝珠に突きささる。
宝珠が砕け散る。　怜治の突撃は止まらない。
装甲を砕き、胸から突入。　内部機構を粉砕しながら突き進み、背中の砲門の森から脱出した。
胸に大穴を穿たれた鉄竜は大きく痙攣。　そして、発光。
爆発するのかと身構えたが、鉄竜は最期に悲しげな叫びを上げ、光となって消え去った。
光が雨となって降り注ぐ。

幻想的で美しく、そして儚い光景を。
紫の空が静かに眺めていた。

第２２話　決意

空から降り注ぐ光の雨をヴィータは静かに眺める。
鉄竜だった光は箒星となって黄砂の大地に刺さり、散る。
さしずめ、星のシャワーとでも言うところか。
幻想的な光景を眺めていると、ヴィータはその中に毛色の違う光があることに気付いた。
他の光が尾を引いているのに対してそれは球形で、周囲を光の渦で囲まれていた。
その光は放物線を描くのではなく、ゆっくりと重力に引かれて落ちてくる。
ヴィータはそれがなんなのか気付いた。　それは、自分たちが求めてやまないものだった。

「シャマルッ！！　あれ、あの竜のリンカーコアだ！！」

「えぇッ！？」

ヴィータとシャマルの叫びに、怜治が、シグナムが、ザフィーラが目の色を変えた。
怜治は視力を強化。
望遠が可能になった目を使って目的のものを探す。
発見。　脚力を強化して飛翔。　光のシャワーの中へと突撃する。
なぜデバイスであるはずの鉄竜がリンカーコアを持っているのだという疑問を放り投げ、怜治は魔力の源に手を伸ばす。
だが、鋼色の脚甲がその手を蹴り落とした。　蹴りは止まらず、怜治の顔に向かう。
怜治は舌打ちをして大剣を旋回して迎撃。　派手な音が響く。
体を捻って怜治は蹴りを繰り出す。　向かうは褐色の守護獣の顔。

ザフィーラが拳で蹴りを迎撃。　さっきとは違う低い音色が響く。

「おいこら、いきなり何すんだ犬野郎」

「狼だと何度言えば分かる」

怜治とザフィーラが空中で睨みあう。

男の体に当たった箒星が二人の間に巻き起こる火花を演出する。

「お前の目的は我等を助けることではなかったのか？」

「調子のいいこというなよ。　助けると手伝うは別だ」

「つまり、今度は我等四人を相手にすると？」

「てめぇこそ、手加減した魔法で俺に勝てると思ってんのか？」

一蹴食即発の不穏な空気が流れる。

シグナムとヴィータが得物を構える。

魔法が制御できないというのなら、魔法を使わず自分の武器本来の使い方戦えばいいだけの話だ。

2人が飛翔しようと足に力を込めた。

『止まれ、人ども』

突然、声が響いた。

黄砂の大地より白い鉄塔が飛び出し、怜治とザフィーラを分断。

鉄塔は伸び続け、白く巨大な三角形の壁となって立ちはだかった。

『ほう……面白いモノを使っているな、人よ』

壁から声が聞こえた。

『我が名は白のヴェルサティス。このシェルコと、Sシリーズの管理を任されている。人よ、なぜ貴様がそれを持っている?』

壁が再び声を出した。

声の次は音。

砂の上を進む車輪の音だ。

一つや二つではない。少なくとも二桁、もしかしたら三桁に達する数だ。

怜治を囲むようにあらゆる方向から聞こえてくる。

怜治はようやく、自分が囲まれていることに気付いた。

(おいおい、こいつら全部デバイスかよ)

人ではない。それは機械、いや、様々な種類の車だった。

おそらく、この世界に残されたSシリーズなのだろう。

怜治は体ごと回転させてその全てを一瞥する。

原付のスクーター、乗用車、普通・大型二輪、三輪車(トライク)、工事現場で見かけるような特殊作業者、中型・大型貨物車、緊急自動車、列車や新幹線、軍用車両もあった。

色も様々で、前面に動物の頭部がついていた。

車に囲まれる人間はもしかしたら自分が初めてかもしれない、と怜治は思った。

視線をヴェルサティスに戻す。

よく見ると、壁には人の顔を思わせる模様が刻まれていた。

「いきなり人のケンカに横やり入れやがって、何の用だ」

壁に刻まれた口が歪んで笑みをつくる。

『我らの世界を荒らし、あまつさえ、大地を守護する黒のアヴァンシアを滅ぼしたうえでその物言い。　まったく、人とは相も変わらず身勝手よ』

厳かな声が響く。

どうやら、ヴェルサティスがSシリーズ達のリーダーらしい。

怜治は壁に刻まれたふたつの瞳を睨みつける。

「あの竜が大切だったんなら倒す前に出てこいよ」

怜治はヴェルサティスに向かって歩を進める。

合わせて周囲のSシリーズが包囲網を狭める。

「身勝手なのはてめぇも変わんねぇよ」

周囲から敵意が噴き出た。

威嚇するように低いうなり声のような音が鳴り響く。

同時に怒声が聞こえ始めるが、一斉にしゃべるので聞きとれない。

『静まれ』

先程より低いヴェルサティスの声が響いた。

やかましいＢＧＭ　が一気に収まる

ヴェルサティスの双眸が怜治を、いや、スタンを見る。

『エッ！　オレッ！？』

『今一度聞こう。　人よ、なぜ貴様がスタンピードを持っている？』

あるはずもない眼光が怜治を貫いた。
暑いわけでもないのに、のどが渇く。

「家の地下室で、会った」

怜治は短く、事実だけを言った。
ヴェルサティスの瞳が、思案するかのように空を仰いだ。

『成程、あの女は貴様にそれを託したか……。　ならば、我らも貴様に託すべきなのだろうか……』

「おいこら、勝手に話進めようとすんじゃねぇよ」

苛立つ怜治に、ヴェルサティスは静かに視線を戻した。

『人よ、名は？』

「ああ？　なんだよいきなり」

ヴェルサティスは答えない。　ただ静かに怜治を見つめる。
怜治はため息を吐いた。　どうやら名乗らないと話は進まないらしい。

「……松田怜治」

『マツダ・レイジか……。　貴様にとって魔法とは何ぞ？』

「はっ？」

『魔法とは、元来己の思いを力とする。　その想いが大きければ強く、そして邪なれば悪に、清ければ善となる。　それを理解しているか？』

「言いたい事は分かるが、それがどうしたってんだ？」

『先程の質問に戻ろう。　貴様にとって魔法とは何ぞ？』

怜治は戸惑いながらも答えを探す。

自分にとっての魔法。　つまりは自分がどうして魔導師をしているのかということだろう。

腕を組み、頭をひねって考える。

魔法との出会いは偶然だった。　強くなろうとした理由は意地のようなものだった。

今戦っているのもその意地の延長なのだろうか？

違う。

あの時とは別の思いで自分は戦っている。　それだけは確かだ。

思い出す。　自分はどういう思いでプレシアと戦ったのか。

考える。　どういう考えで今この戦いに参加しているのか。

「……あ」

辿りついた、といったら語弊があるかもしれないが答えは見つけた。

怜治はヴェルサティスに視線を向けた。

「自分の信念を貫くための力……」

『ふむ……』

「多分そんなところだろうな。　別に正義感とか力を持つ者の責任、みたいなもんじゃ絶対ないし、俺にとっての魔法なんてそんなもんだ」

『なるほど、あの女とはまた違う答えだが……よろしい』

ヴェルサティスの前に五芒星の魔法陣が展開された。
陣の中から黒い盾のような鉄板が二枚現れた。
盾は大地に突き刺さる。

『餞別よ。　持っていけ』

「お前ってなんでもかんでもいきなりだな」

そう言いながら、怜治はふたつの盾を持ちあげる。
思ったほど重くなく、すんなりと持ち上がった。
裏面に取り付け用の部分があったので、スタンをバイク形態にして両サイドにつけてみるとすんなりと納まった。
もともとスタンのパーツの一部だったのだろうか。
取り付けが完了すると同時に物騒な音がヴェルサティスの向こう側から聞こえた。

『む、どうやらまだ戦いが続ける者がいるのか……』

「なんで他人事なんだよ。　お前この世界の管理人みたいなもんじゃなかったのか？」

『ふむ、ここは人同士、貴様に任せよう』

「はぁっ！？　何言ってんだよお前！　ちょ、まっ！！」

怜治の制止の声を聞かず、ヴェルサティスは頭上に魔法陣が展開させた。

陣はヴェルサティスを包み、その巨体を転送していく。

魔力光が怜治の視界を塗りつぶす。

光が収まる。　しだいに視力が回復したが、もうヴェルサティスも、周囲のＳシリーズの姿はもうなかった。

「なんなんだよ……、一体」

疲れたようなため息が零れた。

怜治が視線を先に向けると１００ｍほど先に魔法による光が輝いていた。

戦っているのは、おそらくシグナム達だろう。　誰と戦っているのか知らないが、どちらにしろこの世界から帰るのに騎士たちとの合流が必要だろう。

怜治はスタンを大剣形態（ブレイドフォーム）にして大地を蹴った。

時間は少し遡る。

シグナム達の前に突然白い壁が現れ、怜治と分断された。

ヴィータが出鼻をくじかれたような気分になっていると、ザフィーラが鉄竜（アヴァンシア）のリンカーコアを手に降りてきた。

シャマルは早速闇の書を開き、蒐集する。

手に入れた魔力を糧に、闇の書のページが埋まっていく。

「すごい……。　そこらへんの魔法生物の比じゃないわ」

「だが、この世界は蒐集に向かないだろう。　来るたびに奴の造ったこの兜が必要となる」

シャマルは顎を引いて同意を示した。
怜治とはあくまで敵対関係なのだ。
今回は偶然が重なって共闘したが、次回からはこうはいかない。
また敵同士だろう。

「取りあえず、この壁どうにかしねェ？　あいつも一緒じゃなきゃ帰るに帰れねぇよ」

「そうだな……。　さて、どうするか」

シグナムは目の前の壁を見上げる。
やはり、飛んで超えるのが手っ取り早いか。
膝を軽く曲げて飛翔の体勢に入る。

「見〜つけた」

「その服、闇の書の守護騎士で間違いないね？」

背後から聞こえた声に、シグナムは身を翻す。
騎士たちの後ろに、女性が2人立っていた。
一人はショートカット、もう一人はロングヘアで両方とも鴇色（ときいろ）の髪。
同じ黒い服に、猫の耳としっぽがあった。
だれかの使い魔だろう。
2人はこの世界に酸素が無いことを知っていたのだろう。　酸素吸

引用の装置を着けていた。
シグナムがレヴァンティンを構える。　ヴィータ、ザフィーラもそれに続く。
気配を悟られず、自分達の背後に立ったこの2人を警戒しないほど、騎士たちは温くない。
それを見て、ショートヘアの方が面倒くさそうな顔をした。

「あー……やっぱそうなるのか……」

「仕方ないわ。　ちょっと予定と違うけど、この程度なら問題ないわ」

ロングヘアの指先で、ミッド式の魔法陣が展開された。
魔力の散弾が炸裂した。
シグナムは弾雨をかいくぐって飛翔。　体を回転させて槍のような蹴りを叩きこむ。
ショートヘアが腕で防御。　そのまま足を掴んで投げ飛ばす。
散弾が再び炸裂。　黄砂の大地にいくつもの砂柱が築かれる。
ヴィータが噴進式鉄槌（ラケーテンハンマー）で強襲。
だが、魔力弾を鉄槌に集中され、軌道を無理やり変えられる。
ヴィータは歯噛みし、低空飛行して距離を取る。
後ろからザフィーラとシャマルが続く。

「くそっ！　なんであいつらは魔法普通に使えんだよ！？」

「この世界の事情を知っていたのだろう。　魔力制御の装備を持っているとしか思えん」

「っていうことは……管理局っ！？」

「だろうな。　目的は我らの捕縛か、奴の捜索か、その両方か」

「どうせ両方だろ。　ったく、あいつは面倒事ばっか運んできやがる……」

状況を解析しながらシグナムと合流。
使い魔たちがこちらに向かってくる。

「どうするのシグナム？　管理局が来た以上、あの子の事は心配ないと思うけど……」

シャマルがシグナムに問う。
怜治はあれでも管理局側なのだから、このまま自分たちが帰っても問題はない。
むしろ、このまま増援が増える可能性もある。
いつもなら蒐集相手が増えると喜ぶものだが、今は事情が違う。
いつまでも、魔法が暴走するこの世界にいるわけにはいかない。
自分たちの利を考えるなら答えは一つだ。

「退こう。　ヴィータも助けた。　収集もある程度行えた。　これ以上、ここに留まる理由はない」

シグナムの決定に騎士たちは頷く。
はやてをどう誤魔化そうか考えながら、シャマルは四人分の転送魔法の発動に取り掛かる。
暴走を危惧し、いつも以上に慎重に行う。
この際、転送の高速化は捨てて確実性を重視。　シェルコと地球の間に道を拓く。
無論、それを黙ってみているわけがなく使い魔2人が猛攻を仕掛ける。

シグナムとヴィータが時間を稼ごうと迎え撃つ。

「だらぁあああっ！！」

突如、乱入してきた怜治の膝蹴りがショートヘアの脇腹に突き刺さった。

苦悶の声をもらしながら使い魔が黄砂の大地を転がる。

怜治は大剣を旋回。　残ったもう一人に斬りかかる。

ロングヘアの張った防御壁ごと叩っ斬り、先程と同様地面に転がす。

突然の事態に騎士たちはぼうぜんと立ち尽くすだけだった。

驚きのあまり、シャマルも魔法を止めてしまった。

「おまえ……そいつら管理局だぞ」

「猫耳の知り合いはいねぇな。　……犬耳はいるが」

ヴィータの指摘に知った事かとばかりに怜治は答えた。

大剣は未だに使い魔達に向いている。

使い魔達が起き上がり、服や髪についた砂を払い落す。

自分の身に何が起こったのか理解し始めたのか徐々に険しい表情になっていく。

「ちょっと、いきなり何してくれんのよアンタ」

ショートヘアの方から恨みがましい声が響く。

怜治は警戒心を隠すことなく2人に目を向けた。

何かに気付いたようにロングヘアの方が空中にモニタを展開。

モニタと怜治を交互に見て、はっした表情をした。

「あなた、もしかしてマツダ・レイジ君？」

「だったらどうした」

「どうやら誤解があるようね。　私はリーゼアリア、あっちの髪の短いのがリーゼロッテ。　私たち、グレアム提督の使い魔よ」

「ギル・グレアムの？」

リーゼロッテが怜治に蹴られた脇腹をさすりながら頷いた。

「そ、つまりは私らは味方同士なわけ。　だからさ～、その剣向けんの止めてくんない？」

「あのな、俺はグレアムに使い魔がいるなんて知らねぇんだよ。証拠出せ証拠」

「証拠と言われてもね……」

「う～ん……」

「安心してくれ。　彼女たちのことは僕が保証しよう」

リーゼ達が困っているところへ、クロノの声が響いた。
遅れて次元転送の魔法陣が４つ展開。　クロノを筆頭になのは、フェイト、アルフが姿を現した。
四人ともリーゼ達同様、酸素吸引用の装置を着けていた。

「全く、無事なら無事とさっさと連絡してほしい。　一体どれだけ心――」

「レイジィーーーッ!!!」

クロノの言葉を遮ってフェイトが怜治に飛びつく。
かなりの速度が出ていたせいか彼女の頭部が治りきっていない怪我の部分にクリティカルヒットした。
こうかは　ばつぐんだ!
激痛が電撃のように襲いかかり、思わず仰向けに倒れてしまう。

「ああっ!　レイジ大丈夫!?」

お前のせいだお前の、と言いたかったが怜治の身を心配しての行動だから躊躇してしまう。
そんな怜治の思いに気付かず、フェイトは馬乗りになって怜治の体を診ている。

（女に押し倒されるならできればシグナムみたいな方が……いや、無理だな）

シグナムに押し倒される時が来るとしたらそれはレヴァンティンで心臓を一突きされる時だろう。　そんなイベントは一生来なくていいと思う。
絶対今日は厄日だ、もしくは女難の相があるんだ。と怜治は思った。
そんなことを考えていると、フェイトが怜治の右手の負傷に気付いた。
血で真っ赤に染まり、指があり得ない方向に曲がっている右手を見てフェイトの顔が青ざめる。

「レイジ、右手がこんなに……!!」

フェイトの白く細い指が紅い右手を包む。

思わず力が入ったのだろう。　怜治の顔が苦痛に歪む。
右手は指一本動かないというのに痛覚だけはしっかり生きてるようだ。
怜治の苦い顔を見てクロノとアルフがフェイトを引き離す。
安堵の息を吐きながら怜治は立ち上がる。
ふと、この場の空気が妙に緊張していることに気付く。
見ると、クロノ達とシグナム達が睨みあっていた。
リーゼ達も挟みこむように構えている。

「なんだよ……またここで一勝負か……」

『レイジ、これ以上ここでの戦闘は止そう』

頭を戦闘モードに切り替えようとした怜治をスタンが止めた。

「なんで？」

『さっきヴェルサティスが言ってたろ？　オマエに任せるって』

「俺、オッケー出してねぇんだけど」

『それでもさぁ……なんか新装備貰っちまったし、あいつとは仲良くしておいた方がいい気がする』

どうやら、スタンにはヴェルサティスに関する記憶はまだ戻ってないらしい。
色々気になる点はあるが、スタンの言うとおり戦いの仲裁をすることを決めた。

「クロノ、ここは退こうぜ」

とりあえず直球でいってみると、案の定クロノが怪訝そうな顔をして怜治を見る。
なぜだ？と聞かれる前に思いつく限りの理由を上げることにした。

「ここじゃ万全の状態で戦えねぇんだ。　決着つけるなら、ちゃんとフェアな条件でやりてぇ」

「彼女たちをここで逃がす手はない。　捕えれば、闇の書の完成も預言も回避できる」

「俺を助けてくれたのこいつらなんだよ。　命の恩人が目の前でお縄をちょうだいされるのは見たくねェ」

「ならば、君はこの先ずっと彼女たちを……ああ、そういうことか」

クロノは合点がいった顔をする。
怜治は頷く。

「そ、これで助けられた件は貸し借り無しだ。　俺はこいつらに手加減はしねぇ。　それと……」

怜治は大剣を旋回。　刃をリーゼ達に向ける。
皆が驚きの表情をするのが分かった。

「こいつらを信用できねぇ」

怜治の言葉にまたか、とクロノが頭を抱える。

「怜治。　彼女たちはグレアム提督の使い魔で、僕の師匠でもある

リーゼ姉妹だ」

「俺がグレアムに言ったこと忘れたか？　お前の師匠だろうが関係ねぇんだよ」

「君というやつは……」

クロノがため息を吐いた。

天秤が揺れていると判断して、スタンが畳みかける。

『クロ坊。　オマエらがここに来た目的の優先順位は、レイジの救出と騎士たちの捕縛。　どっちが上だ？』

「む……」

「日本の諺に“二兎追う者は一兎も得ず”ってのがあるよな。　いっとくが、小噺のオチじゃねぇぞ」

「てめぇ、ケンカ売ってんのか……」

「止せ、ヴィータ」

クロノが手を顎に当てて考え込む。

その様子を皆が固唾を呑んで見守る。

この年の割に背の低い少年の判断しだいでは、この場が戦場に変わるのだ。

自然と緊張が張り詰める。

クロノの手が下がる。

「僕らの第一目的は怜治の救出だ。　よって、僕らは帰ることにす

る」

「あんがとさん」

怜治がクロノの肩を軽く叩いてなのはとフェイトの間に入る。

「無論、守護騎士たちがやる気なら相手になるが？」

「遠慮しよう。　こちらも、これ以上こんな戦いにくい世界にいるつもりはない」

クロノとシャマルが転送魔法を発動。
光に包まれ、体が妙な浮遊感に包まれる。

「（んじゃ、世話になったな）」

『（そのヘルメット、一回脱いでしばらくすれば自動的に消えるから）』

怜治とスタンが騎士たちに念話をとばす。
返事は帰ってこない。
もう敵同士だから、慣れ合いはしないということだろう。
転送が開始され、視界から騎士たちが消える。
体にたまった疲労を吐き出すように息を吐く。
とりあえず、この後にやってくるだろう質問攻めに備えておこうと怜治は思った。

シェルコから出た時、地球では夜明けの一歩手前のところだった。
なのはとフェイトを自宅に転送した後、怜治はクロノとともに本局へ行くことになった。
朝日が完全に昇った頃に、二日連続の無断外泊についてクロノに言われて取りあえず家に連絡を取ることにした。
数回のコール音の後、怜一郎のしゃがれた声が聞こえてきた。　友人の家に泊まっていた、と言ったら祖父からの返事は素っ気ないもので、「迷惑かけるなよ」の一言だった。
クロノが少し驚いたようだが怜一郎とはそういう人間だと怜治は説明した。
そして本局につき、治療とデバイススタッフにスタンを預けた後、リンディの下に連れて行かれた。

「では、昨日の夜の魔力爆撃で負傷していたところ守護騎士に遭遇。逃亡する過程でシェルコに行き、そこでこの原生生物に襲われ一時共闘しそれを撃退。　守護騎士と別れようとしたところへクロノ達がやってきた……ということですか？」

リンディの問いに怜治は頷く。
怜治はクロノに以前グレアムと会った部屋に連れてこられた。
用件は当然、行方不明中の怜治の行動についてだった。

「まあ、要約するとそんなところだな」

怜治がリンディに報告した内容は、闇の書の主であるはやてを庇うように脚色したものだった。
ありのままを話せばこの事件は一気に解決なのだが、怜治には気がかりがあった。
ここに来る前にクロノから聞いた仮面の男だ。

怜治がはやての家にやっかいになった時、そんな男はいなかった。
つまり、仮面の男はシグナム達の仲間ではない。
おそらく、闇の書の力を横から掻っ攫おうとしているのだろうと怜治は結論付けた。
それなら管理局に敵対するのも、シグナム達と行動を共にしない説明もつく。
加えて、怜治が真実を話さなかった理由にこの部屋にある人物がいることがあげられる。
リーゼ姉妹だ。
2人はリンディの両脇に、まるで守護するかのように立っていた。
ギル・グレアムの使い魔にしてクロノの魔法と格闘の師匠という話はもう聞いていた。
怜治は初見の相手を決して信用しない。
グレアムの使い魔ということがさらに怜治に警戒心を抱かせていた。

「では私からの質問は以上です。　怜治君の方から何か質問は？」

「そうだな……。　俺がいない間に分かった事とか聞きたいな」

「それについては僕が後で説明しよう」

「じゃあクロノ、お願いね」

「はい」

怜治は席を立って応接室を出る。
ちゃっかり用意された茶菓子を口に放り込むことを忘れない。

「リンディ提督。　私たちもこれで」

「お父様にも報告しなきゃいけないしね」

「ええ、捜索協力ありがとうね」

「いえいえ、クロスケの頼みですから」

「その呼び名はいい加減やめてくれ」

ははは―、と笑うロッテをアリアが引きずって部屋から出て行く。
笑い声が徐々に遠ざかり、やがて聞こえなくなった。
沈黙が部屋を支配する。

「艦長。　今の怜治の話、どう思いますか？」

クロノがさっきまで怜治が座っていた席に腰を下ろし、リンディを見据える。

「嘘……でしょうね。　一から十までってことはないと思うけど」

リンディの言葉にクロノは頷く。
先程の怜治の報告はいくつかの綻びや微妙な矛盾が見えた。
クロノは怜治が虚偽の報告をした。　もしくは、何かを隠していると判断した。

「まぁ、怜治君本人も隠し通せたとは思ってないでしょうし、無理して聞き出す必要もないでしょう」

「本気ですか？　怜治が隠しているのは十中八九、闇の書の主の情報です。　事件解決のためにも聞き出すべきです！」

「そうかもしれないけど、怜治君は考えなしに行動する子じゃないわよ。　彼が隠したということはそれ相応の理由があるのでしょう」

「単純に、僕らを信頼していないだけかもしれませんよ」

「ならなおさらよ。　ここで無理強いしたら、彼は一生私たちに心を開かないわよ」

「特異点を敵に回したくないですものね」

クロノの皮肉にリンディの眉が跳ね上がる。

リンディはテーブルに置かれた極度の甘党の彼女用に、砂糖が大量に入っている緑茶をすする。

湯呑みをテーブルに戻した時の音がやけに大きく響いた。

どうやら、クロノの言葉は彼女の気分を害したようだ。

それでも、若い執務官は確認しなくてはならない。

怜治の勝手が許されるのは、その才能を味方側に置いておきたいからなのかどうかを。

魔法の才能が乏しかったクロノにとって、生まれながらの才能だけで優遇されるというのは無視できるものではない。

水色の瞳と翡翠の瞳が交わる。

重い沈黙の空気が構築されていく。

「怜治君のご両親の事は聞いた？」

「エイミィから。　人の過去を勝手に言いふらすなと小突いておきました」

「彼の今の状態は、フェイトさんにもありえたかもしれないことよ」

えっ、と驚きがクロノの口から零れおちた。

「詳しいことは知らないけれど、親から必要ないと言われたという点ではフェイトさんと同じよ。　今思えば、プレシア事件の時のあの行動も頷けるわね」

リンディは翡翠色の髪をかき上げる。
電灯の光に反射して艶のある髪が光る。

「必要ないと言われた時、心に大きな傷を負った時、フェイトさんにはなのはさんがいた。　使い魔のアルフさんがいたし私たちもいたわ。　でも、怜治君にはそんな人はいなかった」

「僕らがあの場にいなければ、フェイトもああなっていたと？」

「可能性は十分あると思うわ。　挫けてしまった時、フェイトさんは私たちの手を取ることで、支えられることでそれを乗り越えた。　対して怜治君は誰の手も取らず、誰にも支えられず自分一人で立ち上がり、乗り越えた」

「その時怜治は6，7歳……フェイトより幼かったのに……強かったんですね」

「脆い強さよ。　折れた心を無理やり立たせて、これ以上の衝撃が加わらないように心を殻に閉じ込める。　彼は強くて弱いのよ」

「僕が想像する心を閉ざした人のイメージには、怜治は当てはまらないです」

クロノは茶菓子を手に取り、口に運ぶ。

控えめの甘さが口内に広がる。

「エイミィの話だと親しい友人もいるようだし、特定の人には心を開いているのよ。　だったら、その特定の人になることも可能だわ」

「人によって態度を変えるなんて、調子がいいですね」

「そうね。　でも、相手の経歴や地位で判断するのではなく、彼は人柄や内面で判断している。　それは、とても人間らしいことだと思うわよ？」

「……」

「クロノ。　誰かに信頼してほしい時は、自分から相手を信頼しないといけないわ」

「言いたいことは分かります。　でも！」

「私は怜治君が何かの情報を隠したのは、誰かを助けるために必要だからだと信じるわ」

「あいつは、自分のしたいことを好き勝手にするやつです。　あいつにそんな考えがあるとは思えません」

リンディは苦笑する。

そして――

「じゃあ、怜治君は人助けがしたいのよ。　きっと」

クロノは開いた口がふさがらなかった。

怜治は本局の廊下を歩いていた。
眼の前に浮かぶモニタには怜治がいない間に闇の書について分かった事が記されていた。
それを読みながら、隣を歩くクロノから魔法用語の意味を聞く。

「闇の書の力は破壊にしか使えない。　守護騎士たちは魔法技術で作られた擬似人格で、ようは闇の書内のプログラムの一部。　闇の書の主は当然、魔導師……ね」

クロノの解説を怜治が頭でまとめて繰り返した。

「そう。　闇の書の転生とともに、守護騎士たちも様々な主の下を渡り歩いている。彼らの役目は頁の蒐集と主の護衛。　対話機能以上の感情を見せたという例は今回が初めてだ」

「あいつらが無感情の時が想像できねぇな。　しっかし、護衛にも使う騎士を女ばっかにするあたり、製作者の下心が見える気がするんだが……。　そういえば、俺たちはどこに向かって歩いてるんだ？」

「ユーノのところだ」

薄暗い空間。　鋼色の円環が通路のように張り巡らされている。
天井はどこまでも高く円筒形。　壁一面に本が敷き詰められた部屋にユーノはいた。
部屋が無重力なのか、ふわふわと浮いている。
怜治とクロノが入ると、こちらに気付き、一瞬驚いた顔をして手を振ってきた。
軽く振り返す。

「なんとも凄いところだなここは……」

「“無限書庫”。　管理局の管理を受けている世界の書籍やデータが全て収められた超巨大データベースだ」

「でも、中身がほぼすべて未整理のまま。　本来はチームで年単位で調査する場所だそうです」

いつの間にかユーノが近くまで来ていた。
彼の周りにはいくつも魔法陣が展開されている。　検索魔法の術式だとユーノは説明した。
へー、と呟きながら怜治は近くの本棚から本を一冊手にとってパラパラとめくる。

「……読めねぇ」

「基本ミッドの文字だからね。　本格的に入局したら覚えてもらうよ」

「というか怜治さんって本読むんですね」

ユーノの言葉に怜治の眉が軽く跳ねる。

「言ってくれるな。　俺だって本ぐらい読むんだよ」

不機嫌そうに言いながら本を棚に戻す。

「それで、ここで闇の書の情報を探そうってことか？」

「はい。　過去の歴史の調査は僕らの一族の本業ですから」

ユーノの言葉で、彼はスクライア一族と呼ばれる遺跡や古代史探索をする一族の出だということを思い出した。
クロノが本題に入ろうとばかりに口を開く。

「さて、これで君がいない間に起こったことは全部だ。　改めて聞くが、何か質問はあるか？」

「そうだな……。　スタンがいつ戻ってくる？

「さあな。　なんせロストロギアだ。　……検査が終わったら連絡しよう」

「サンキュ。　あと、あったらでいいんだが貸して欲しいもんがある」

「なんだい？」

クロノの問いに、怜治はニッ、と笑う。
少年2人が軽く引いた。

「これでよしっと」

怜治はクロノから借りた折り畳み式の通信用端末を右手一本で閉じる。　左手には電話帳のような本が抱えられていた。

「誰に連絡してたんですか？」

「ん？　ちょっとした知り合いにな」

はぐらかした言い方だが、ユーノは特に気にした様子はなく検索を再開した。

クロノからの連絡はない。

暇になったので怜治は気になっていたことを質問することにした。

「なあ、ユーノ」

「なんです？」

「クロノって昔、闇の書となんかあったのか？」

ユーノの手が止まった。

怜治はそれをイエスととった。

「なんかあったんだな」

「えっと……そういうことはクロノ本人から聞いて方がいいんじゃ……」

「固いこというなよ。　どうせお前だって俺の両親の事、聞いてんだろ？」

びくぅ！とユーノの肩が跳ねた。
ぎぎぎ、と錆びた機械が動くように首をまわして焦る少年の顔を出現した。

「ああいうことがあると人の表情や態度に敏感になってな。　俺が入ってきた時、オマエの顔が一瞬表情変えたろ？　それで分かった」

何で分かったの？という質問を先読みして怜治が言った。
ユーノが気まずそうに視線を右往左往させる。
やがて、諦めたように顔を伏せた。
そして――

「クロノの父親が、１１年前に闇の書の暴走に巻き込まれて亡くなったそうです」

予想の一つに当たり、怜治は疲れたように息を吐いた。

「それで？　二日連チャンで音信不通だったことについての言いわけは？」

「ダチの家に泊ってた」

怜治の言葉に脇の鉄平と正義が顔を合わせる。

「マサ、おまえん家にぜろ来たか？」

「来てない。　鉄平は？」

「同じく」

「……」

「……」

「……」

一瞬の静寂。　そして――

「「嘘だな」」

「ちょっと待てコラ」

「だってよー。　ぜろにおれら以外に友達いるとは思えねぇ」

「あ、でも夏にかわいい子連れてたよね？　……まさか！」

「てっめぇえええーーーーー！！！！」

「違う。　断じて違う」

奇声を上げながら飛びかかってくる鉄平をヒラリとかわす。

倒れそうになる鉄平を正義が腕を掴んで止めた。

「それで、例の如く秘密なわけ？」

「そ。　気長に待っててくれ。　……っと、着いたな」

怜治が足を止める。　悪友2人もそれに続く。
三人が来たのは春ごろから時々来るようになった喫茶店、“翠屋”だった。
いつもは鉄平が見たという可愛い店員が目当てだった（驚くことに毎回なんらかの都合でいなかったので未だ会ったことはない）が、今回は怜治からの提案だった。
ドアノブに手をかけて店内に入る。
暖房の温かい空気とともに来店を知らせるベルの音と「いらっしゃいませー」という店員の声が聞こえてきた。
そして

「あれ？　怜治さんだ」

なのはの声が響いた。　彼女のそばにいた友人三人が一斉に視線を向ける。
それをみた鉄平が腕を怜治に回して自分の顔を耳元に寄せる。

「おい怜治。　いつのまに小学生に手を伸ばした？　ロリか？　ロリに目覚めてしまったんか？」

「ぶっ飛ばすぞ」

ドスのきいた声で言うと鉄平はゆっくりと距離を取った。
怜治はジト目で悪友その一を責めながら、レジの前のショーウィンドウに並んだケーキを眺める。

「ケーキですか？　珍しいですね。　いつもはコーヒーなのに」

「自分用じゃねぇよ」

なのはからオススメを聞いてフルーツケーキとチョコケーキ、苺のショートケーキなど、数種類のケーキを購入。　クリスマスシーズンで順番待ちがあるらしく、箱に詰めてもらうのは少し時間がかかるとのこと。

「さて、俺の用は済んだがどうする？　毎度のことながら鉄平のお目当てはいねぇな」

「うーん……コーヒー飲んでこっかな」

正義の提案に鉄平も同意する。　番号札をもらい、四人がけの席に通された。

座ると同時になのはとその一行が駆け寄ってきた。

怜治たちの後ろの席に四人で座る。

やがて、なのは達の分も加えた七人分の飲み物が到着した。

「そういえば……」

すずかがミルクティーを手に、口を開いた。

皆の視線が少女に集中する。

「怜治さん、あれからおケガの方はどうですか？　家で見た時はひどかったですけど」

グルン、と皆の視線が急転換。　怜治に視線が集まる。

「ぜろ、怪我とはどういうことだ？」

「レイジ、まさかすずかの家に泊まったの？」
皆を代表して鉄平とフェイトが問いただす。
怜治はコーヒーをゆっくりと流し込む。
「俺が怪我して倒れてたところを月村の友人に発見されて、月村の家に運び込まれたんだよ」
「だから怪我した理由を言えよ！」
「そこはあれだ。　いつもの……」
「秘密？」
「そう」
「そっか……」
取りあえず鉄平と正義は納得してくれたようだ。
なのはとフェイトからクロノに伝わったら矛盾が生じるが、もとよりあの話を鵜呑みにしているとは思えないので問題ないだろう。
その後、すずかによってどんな怪我をしたか、という話から怜治がどんな怪我をしたことがあるかという暴露話に進んでいった。
「……なんか、わたしだけのけものにされてる気がする」
不意にアリサが不機嫌そうに呟いた。
今話題の中心が怜治で、彼女は怜治との接点は０に等しいのだ。
話の輪に入れるわけがない。

「そうかそうか。　では嬢ちゃんにはこれをあげよう」

鉄平は学生鞄から一枚のプリントを取り出し、アリサに渡す。

女子勢がプリントを覗き込む。

「東高クリスマスパーティ開催のお知らせ？」

「そう。　我らが海鳴市立海鳴東高等学校が主催するクリスマスパーティだ！」

「ちょっとした学園祭みたいなもので、クラスごとに出し物あるから良かったら来てね」

「へぇ～。　出し物ってどんなのがあるんですか？」

「色々だな。　俺らのクラスは外で焼きおにぎり屋だし、くらすによっては劇とか喫茶店とかお化け屋敷とかある」

話題がしだいにクリスマスパーティの話に逸れ、明るい少女たちの声が場を支配していった。

時間が過ぎ、番号札が呼ばれた怜治はケーキを受け取った。

ケーキが入った箱は二箱あった。

「ほい。　月村」

怜治は二箱のうちの一箱をすずかに渡す。

「え？　あの……これ……」

「助けてくれた礼。　足りねぇかもしんねぇが、これで勘弁してく

れ」

「い、いえ……ありがとう…ございます」

店を出て、絶対にいきますからねー！というなのはの声を聞きながら、帰路につく。

やがて、悪友とも別れた。

その後、怜治が向かった先は自宅とは別の方向だった。

ピンポーン、とインターホンが鳴り響く。

「ん？　誰だろう……」

はやてから借りた本を読んでいたヴィータが顔を上げる。

本をテーブルに置き、玄関へと向かう。

新聞の勧誘だろうか？と思いながら扉を開ける。

「よっ！　また会ったなヴィータ」

「てめぇ……何の用だ」

松田怜治が立っていた。

「何の用だ」

ヴィータはグラーフアイゼンを起動。　低い、威嚇しているかのような声色で言い放つ。

「まぁ待てよ。　別に俺は戦りあいに来たわけじゃねぇんだ」

怜治は扉をくぐり、靴箱にもたれかかるように立つ。

「信用すると思ってんのか？」

「いや、思わねぇ。　だからこれを着けてきた」

怜治は左手を掲げる。　手首に鈍色の連環が腕輪のようにはまっていた。

「犯罪を犯した魔導師用の手錠だそうだ。　はめた人間の魔力のほとんどを封じる。　今の俺の魔力はFランク以下。　魔法資質無しの一般人と変わらねぇ」

「なんでそんなもんつけてんだよ」

「和平の使者は槍はもたない……だろ？」

先日の自分のミスを掘り返されてヴィータの額に青筋がたつ。

怜治はケーキの入った箱をヴィータに渡す。

「なんだよこれ」

「ケーキだよ。　昨日、晩飯ご馳走になったからな。　一宿一飯の恩ってやつだよ」

赤毛の少女は警戒しながらも受け取り、箱から漂う甘い匂いに頬を緩めたり引き締めたりする。

「しっかし、嫌な世の中になったな……」

「はぁ？　何言ってんだ？」

箱の隙間からなかを覗こうとしていたヴィータが顔を上げた。

「闇の書ってのは持ち主に滅茶苦茶でけぇ力を与えるんだろ？　んな物騒なもんをあんなガキが欲しがるようになっちまうなんて――」

「黙れよ」

怜治の言葉が遮られた。　ヴィータの鋭い殺気が怜治の体を刺し貫く。

額から汗が流れる。　ヴィータに渡したケーキの箱が歪み始める。

怜治は体を起こし、まっすぐにヴィータに対峙する。

「はやてがそんなもん欲しがるわけねぇだろ！！　てめぇが、はやてのことを知ったように語ってんじゃねぇぞ！！」

「だったら話してみろ。　何のためにお前らは闇の書の完成を求める？　八神が望んだんじゃねぇってんなら何故魔力の蒐集をする？　守護騎士が主の命令なしに何故動く？」

ヴィータは口を開かない。

すさまじい殺気とプレッシャーが怜治を襲う。

怜治は退かない。　ここで退いたら決して自分が求める答えは得ら

れないから。
一歩、鉄槌の騎士へと近づく。

「半年前、俺は自分の娘生き返らせるために次元震なんてもんを発生させた女と会った。　お前らも同じか？　闇の書使って八神の両親蘇らせようとでも考えてんのか？」

「違う」

「だったらお前らは何がしたい？　闇の書通してお前らに破壊衝動でも芽生えたか？　誰か痛めつけて悦にでも浸ってんのか？」

「違う！！　闇の書が完成しないと……はやてが！」

「八神がどうした？」

ヴィータが下を向く。
手足が震え、涙が落ちるのが見えた。

「闇の書の力は、主であるはやての体を蝕んで……いつかはやてを殺す」

絞り出すような震えた声で、ヴィータが言った。
緊迫した空気が一気に霧散する。
怜治は息を吐いた。　汗でぬれた髪をかき上げる。
ヴィータの言葉では詳しいことは分からない。　分かるのは、はやてという存在が彼女の中で最も大切なものであるということだけだ。
　そして、それはシグナム達も同様なのだろう。
怜治は思う。　世界というのはどこまで意地悪なのだろうかと。
両親を早くに亡くし、足に障害を持ったままの孤独な一人暮らし。

家族ができたかと思えば、それによって命が失われようとしている。
人に幸福を与え、その幸せを真っ向からブチ壊す。　たった9歳の少女には、人間には過酷すぎる運命だ。
怜治は決意する。
その運命を変えようと決意する。

「今日の夜。　闇の書を持って遠見市のセンタービルに来い」

ヴィータが涙まみれの顔を上げた。

「八神を、闇の書から切り離す」

第２２話　決意（後書き）

予定よりストーリーの進行が遅いッス。

Ａ'ｓ編は１３話じゃ終わりそうにないですね。

第２３話　背中合わせ

八神家を出た怜治は再び時空管理局本局に来た。
スタンの検査が終了したという連絡が来たからだ。
ロストロギアということで、技術スタッフの眼が妖しく光っていたことを思い出す。

「変な改造とかされてないだろうな……」

カートリッジとか搭載されてたらどうしようか、という不安がよぎる。
シェルコでの戦闘で、怜治はカートリッジを握りつぶして使う方が相性がいいような気がした。　もっとも、そんなことしたら無茶するなと怒鳴られるだろうから口にはしない。
デバイスルームに入ると、スタンが預けた時と同じ状態で部屋の中央に鎮座していた。
改造された様子はない。　怜治は内心でホッと安堵の息を吐く。
怜治の視線がスタンの後輪の上に装甲のようにつけられたパーツに行く。
シェルコでヴェルサティスに渡されたパーツだ。

「そういえば、結局これってなんだったんだ？」

怜治の疑問に答えようと、技術スタッフの一人がやってきた。
眼鏡をかけた少女。　名前はマリエル・アテンザ――通称マリー――というらしい。

「えっとですね……。　そのパーツはトライアルと言って、調べてみたところスタンさんのブースターのような役割をしているようで

す。　魔力効率、出力ともに３０％ほど上昇しています」

マリーが資料と手渡してくるが、怜治はデバイス知識なんて皆無なので断る。

「スタン。　調子はどうだ？」

「上々。　このパーツのおかげでなんか新フォームとか発動できるぞ」

「へぇ。　後で試してみるか」

局内でスタンに乗るわけにもいかないのでスタンを大剣形態（ブレイドフォーム）に変形する。　背中に背負い、局内の長い廊下を歩きだす。

『んで？　はやて嬢のこと、どうすんだ？』

周囲に人がいないことを確認して、スタンが言った。

「ああ、そのことか……」

『クロ坊にはどうせデマカセ言ったんだろ？　バレたら大目玉だぞ』

「あいつがあんな嘘に騙されるタマかよ。　嘘だと知った上でよしとしたんだよ」

ふーん、とスタンの軽い調子の声が響く。

「スタン。　今夜、ちょっと出るぞ」

『むー。　嫌な予感しかしないけど一応聞こう。　どうして？』

「俺の……“特異点”の力で闇の書を八神から切り離す」

周囲の音が消えた。

『……レイジ。　意味分かって言ってんのか？』

「危険だってことか？　んなもん今更だ」

『違う。　オマエの力ではやて嬢を救うってことは、クロ坊たちを裏切ることになるぞ』

怜治の足が止まった。

『オマエは意外とバカじゃないから分かってると思うが、オマエのやり方は罪人を逃がすってことだ。　その行為は、管理局への、クロ坊たちへの裏切りだ』

怜治は沈黙を続ける。

その眼はどこか遠くを見ているかのように虚ろだ。

『クロ坊みてぇな事を言うかもしれんが、守護騎士たちのやってることはどんな理由があろうと犯罪だ。　たとえ、はやて嬢の命を救うためであってもな』

「……っ！！」

怜治の手が弾けたようにスタンの柄にかかる。

一気に抜剣。　大剣を床に突き立て、鋭い視線を投げかける。

「てめぇ……知ってたのか」

『こちとら腐ってもロストロギア。　会った時から、はやて嬢になにかしらの呪いめいたものを感じていた。　後は、オマエの態度からの推測だ』

今更ながら、怜治は自分の相棒の有能さに驚いた。

『話を戻すぜ。　オマエは、今自分を信じようとしてくれてる連中を裏切ってまで守護騎士に手を貸すのか？』

「人の命がかかってんだ。　比べるまでもねぇだろうが」

『見事な自己犠牲だな。　裏を返せば偽善ともいえる』

ハッ！と笑い捨てて怜治はスタンを持ちあげ、背にかける。

「俺が善人に見えたのか？　俺はいつでも、俺がやりたいことをするだけだ」

『それが犯罪でもか？　みんなの信頼を裏切ってまでもすることか？』

「俺が自分で考えた結論だ。　例えお前を含めた全人類が否定しようが、俺は俺の結論を信じる」

『……中二病』

「うるせー。　中二病ついでにもう一言。　本気で信頼できる奴な

んてな、片手で数えられるぐらいでちょうどいいんだ」

そう言って笑っていると、クロノから渡された通信用端末が振動を起こした。

発信者はクロノだった。　手に取り、通話開始のボタンを押す。

「何だ？　守護騎士どもが動いたか？」

『残念だが一歩遅かった』

クロノの暗い声が聞こえてきた。

怜治は眉を顰(ひそ)める。

「何があった？」

『フェイトのリンカーコアが……闇の書に蒐集された。

魔法少女リリカルなのはＡ’ｓ　☆Ｔｈｅ　Ｒｉｄｅｒ☆　第８話　背中合わせ

クロノは至急、アースラに来るようにと言った。　詳細はそこで話すという。

そして、怜治はアースラの会議室にいる。

なのはにクロノ、リンディ、エイミィ、アルフ、オペレーターのアレックス、そしてリーゼロッテがいた。　この６人で席が埋まってしまったため、怜治は壁にもたれかかるように立つ。

皆が一番に気にかけているフェイトの容態について、リンディが説明する。

「フェイトさんは、リンカーコアに酷いダメージを受けているけど、命に別条はないそうよ」

一同、安堵の息を吐いた。

「わたしの時と同じように、闇の書に吸収されちゃったんですね」

「アースラが稼働中で良かった。　なのはの時以上に救援が速かったから」

「それで？　何があったのか教えてくれねぇか？」

「そうだな。　エイミィ、話せるか？」

「え……う、うん。　大丈夫」

エイミィがフェイトのコアが奪われた一部始終を話し始める。
ハラオウン家兼捜査司令部が守護騎士たちの反応をキャッチした。
反応はふたつ。　シグナムとヴィータだった。
すぐさま、フェイトとなのはがそれぞれの因縁の相手へと向かった。
フェイトとシグナムが戦闘を開始。　カートリッジシステムを搭載したバルディッシュ・アサルトの性能はシグナムのレヴァンティンとも引けを取らなかった。
そこまで監視していた時、トラブルで映像が止まった。
再び映像が復旧したころには、仮面の戦士がフェイトのリンカーコアを摘出した直後だったという。

「2人が出動してしばらくして、駐屯所の管制室システムがクラッキングであらかたダウンしちゃって。　それで指揮や連絡がとれな

くて……ゴメンね。　あたしの責任だ」

『気にすることないって、この場にエイミィ嬢を責められる奴なんてどこにもいねぇって』

「そうだよ！　エイミィがすぐシステムを復帰させたから、アースラに連絡が取れたんだし」

ロッテが手元のスイッチを押すと、仮面の男がフェイトのリンカーコアを摘出する瞬間の画像が映し出された。
フェイトの顔が苦痛に歪み、金髪が力なく垂れさがり、胸から突き出た男の手の平には金色のリンカーコアが乗っていた。

「この通り、仮面の男の映像だってちゃんと残せた！」

「でもおかしいわね。　むこうの施設で使っている機材は管理局のものと同じシステムなのに。　それを外部からクラッキングできる人間なんているものなのかしら？」

リンディの言葉に弾かれたようにエイミィが立ち上がる。

「そうなんですよ！　防壁も、警報も、全部素通りでいきなりシステムをダウンさせるなんて……」

「ちょっと……あり得ないですよね」

アレックスが呟いた。
エイミィは続ける。

「ユニットの組み替えもしてるけど、もっと強力なブロックを考え

なきゃ」

「それだけ、すごい技術者がいるってことですか？」

「うーん……。　もしかして、組織だってやってんのかもね」

クロノが隣に座ったアルフの方を向く。

「君の方から聞いた話も、状況や関係がよく分からないな」

アルフが頷く。

「アタシが駆けつけた時には、もう仮面の男はいなかった。　けど、あいつが……シグナムがフェイトを抱きかかえてて、『言い訳はできないが、すまない、と伝えてくれ』って……」

「アレックス！　アースラの航行に問題はないわね？」

「ありません」

「うん。　では、予定より少し早いですがこれより、司令部をアースラに戻します。　各員は所定の位置に！」

はい！とクロノ達の声が重なる。

皆が席を立ち、部屋から退出していく。

怜治も続こうとした時、クロノが道を塞いだ。

「珍しく、何も言わなかったな」

「素人には分からんことがありすぎてな。　会話についていけなか

ったんだよ」

眼が鋭くなり、クロノが訝しげな顔で怜治を見る。

「君は何を考えている？　僕は、君がいつか敵になるのではないかと不安でたまらない」

「安心しろ。　まだ、管理局のやり方に不満があるわけじゃないからさ」

「まだ、ということはいつか裏切る気か？」

「言葉の文だよ」

怜治はクロノを避け、会議室から出ていった。

クロノはその背中を睨みつけるように見つめていた。

「スタン。　どう思う？」

人気のないロビーで、怜治は背中のスタンに問いかけた。

『外部から不可能なはずのクラッキングね。　シグ嬢の言葉から、あの仮面ヤロウが仲間って線はやっぱ無しか』

「それについては夜に聞けばいい。　それよりも、クラッキングの方だが……」

『防壁も、警報も、全部素通りでいきなりシステムをダウン、だっけ？　怜治はどう思う？』

「十中八九、内部からだろ」

『根拠は？』

「外からできないはずのクラッキング。　だったら中からだとしか考えられん」

『となると、誰が裏切り者かになるが……人数が多すぎるな』

「ヒントはある。　高町が言うにはフェイトが襲われる前に、仮面の男はヴィータを砲撃から守ったそうだ」

先程、こっそり念話で聞いた話をスタンに伝える。

『むー……。　２人がいた世界がどんくらい離れてたか分かんねぇが、かなり速い速度で次元転移したんだな』

徐々に集まる情報をジグソーパズルのように頭の中で組み立てる。リズムを取るようにコツコツとつま先で床を叩く音が響く。

「管理局員、高いクラッキング技術、闇の書との関係、高町の砲撃を守り、フェイトやシグナムに接近を気付かせない程の実力、速い次元転移」

パズルのピースが集まり、徐々にひとつの答えという絵をつくる。ある程度集まれば、足りない部分は想像で補完できる。

肝心な部分が足りない。　そんなことをする動機が分からない。

情報を頭の中で何度も反芻していく。

――私はそこのクロノの指導教官だった。

――彼女たちはグレアム提督の使い魔で、僕の師匠でもある。

――クロノの父親が、11年前に闇の書の暴走に巻き込まれて亡くなったそうです。

（なんだ……なんでこんなことを思い出す？）

怜治は額に手を当て、思考をフルに回転させる。

事件の全貌にぼんやりと靄がかかっている。　この事件の核心を隠すように。

怜治は確信していた。　この事件にはまだ何かあるのだ。

闇の書の完成を阻止しただけでは終わらない何かが。

なのはが転送ポートの準備ができたと呼びに来るまで考えたが、答えは見つからなかった。

怜治の瞳に決意が宿る。

今ある情報で答えに辿りつかないのなら、新たな情報を探せばいい。

「今夜の交渉、目的が増えたな……」

遠見市。

海鳴市の近隣に位置し、春先ではフェイトが拠点にしていたらしい。

この町を象徴するように建てられた遠見センタービルの屋上。　そこに怜治はいた。

手には通信用の折り畳み式端末が握り、耳に当てている。　会話の

真っ最中らしい。
バリアジャケットが風に揺れる。　防寒機能もあるが、冬の風の冷たさは変わらない。
眼下には繁華街の街灯による光の大海が広がる。
夜とはいえ、まだ遅い時間ではないのでまだまだ多くの人が街を練り歩いている。
通話が終了。　怜治は端末を畳んでポケットにしまい込む。

「そろそろかな……」

怜治は立ち上がり、エリシオンを起動。　身を守る不可視の魔法障壁が二重になる。
魔力弾を一発、夜空へと打ち上げる。　魔力弾は２０ｍほど上昇し、花火のように弾けた。
途端に、こちらに向かってくる魔力反応を探知。　数は２つ。
２つ？と怜治は眉を顰める。　予想していた人数の半分だ。

「スタン。　どっかに隠れてるかも知れねぇ、探査の方頼むぞ」

『了解』

空から降りてくる人影を確認。　数はやはり２つだった。
屋上に降り立った二人を見据えて、怜治はゆっくりと歩み寄る。

「来てくれてありがとよ。　ヴォルケンリッター」

「わざわざ呼びつけておいて、下らん話だったら斬り捨てるぞ」

シグナムが辛辣な言葉を吐いた。　殺気立っているというより、焦っているという感じだ。

「不機嫌だな。　八神の身に何かあったか？」

シグナムの眉が跳ねた。　どうやら図星らしい。
闇の書の力は予想より速く八神の体を蝕んでいるらしい。

「そういや、昼間はフェイトが世話になったらしいな」

「……謝罪はテスタロッサの守護獣を通して伝えたはずだ」

「聞けば騙し打ち同然だったらしいじゃねぇか。　お前らしくもないな」

「貴様に……私の何が分かる！」

「何も分からねぇ。　だから聞きに来た。　あの仮面の野郎はなんだ？　お前らの仲間か？　八神の身の上に同情した魔導師が協力してんのか？」

「知らぬ。　我らは件の戦士の事など、素性も目的も知らん」

ザフィーラが答えた。
なるほど、と怜治は納得の意を示す。
目的の一つ、守護騎士と仮面の男との繋がりに関しては分かった。
残った目的は二つ。

「世間話はここまでだ。　貴様の要件をさっさと話せ」

「その前に確認だ。　言った通り、闇の書は持ってきたか？」

シグナムが右手を上げる。　右手には確かに、闇の書が握られていた。

「オッケー。　では、本題に入るとするか」

注意をシグナムたちに向けながら、周囲への警戒も忘れない。
最も警戒すべきはシャマルの空間を超えてのリンカーコア摘出だろう。
精密な索敵はスタンに任すとして、怜治は話し始める。

「取りあえず、ヴィータからどこまで聞いてる？」

「貴様が闇の書を主はやてから切り離すと言った。　それだけだ」

「齟齬はないな。　それを聞いたうえで来たってことは、あくまで八神の命が最優先ってことだな」

「無論だ」

ザフィーラの言葉にシグナムが無言で頷く。
怜治は話を再開する。

「結論から言おう。　俺が八神に代わって、闇の書の主になる」

2人が驚愕。　何か言おうとしたシグナムを手をあげて制する。

「俺には希少技能（レアスキル）がある。　それは、ロストロギアを使いこなす。
いや、支配するって言った方が分かりやすいか……。　とにかく、その力で俺が闇の書を八神から俺に移す」

「そんなこと……できるわけが――！」

「できる。　というかやってみせる。　事実、俺はお前らに奪われたコアを奪い還した。　これ以上なんの証明がいる？」

シグナムの口がパクパクと力なく開閉。　二の句が継げなくなる。

「闇の書が俺に移れば八神の体が蝕まれる事はない。　お前らも消えない。　俺はお前らの守護なんて別にいらねぇから八神の傍にいりゃいい。　別に主から一定以上離れられないってわけじゃないだろ？」

「確かに……。　貴様の言うことが真実なら主は助かる。　だが……」

「何を迷う？　お前らの大事な主は助かる。　俺は破滅の預言とやらを回避できる。　良いこと尽くしじゃねぇか」

「貴様はどうなる？」

ザフィーラが前に出る。

「確かに我が主は助かる。　だがそれは、貴様が代わりに闇の書の呪いを受けるということになるぞ」

ザフィーラが続ける。

「加えて言えば、その策は我らの罪を見逃すということにもなりかねん。　そうなれば、管理局員の貴様の立場は危うくなるのではないか？」

怜治が口を噤む。

ザフィーラの言うとおりだ。

この交渉自体、誰にも相談せずに決めた怜治の独断。　しかも、内容が封印指定ロストロギアの所有権の譲渡と魔導師および魔法生物襲撃事件の犯人を見逃すというものだ。

管理局員としてまだ入局候補生扱いの怜治にそんなことを判断する権限などあるはずがない。

これは、管理局への背信行為と見られても仕方ないことだ。

故に、ザフィーラは問う。

なぜ、自分の人生を捨てて赤の他人を救おうとするのか、と。

ザフィーラの試すような視線が向けられる。

怜治は一瞬考え、口を開く。

「逆に聞くぜ。　なんでお前は敵である俺の身を按ずる？」

「む……」

「そういうことだよ。　俺もお前らも、他人の事を気にかけちまう甘ちゃんなんだよ」

「確かに……そうかもしれないな」

シグナムがゆっくりとした歩みで近づく。　その表情は穏やかだ。

闇の書を握った右手が差しだされる。

「貴様を完全に信じることはできん。　だが、貴様の力にある可能性は信じられる。　……頼んだぞ」

「頼まれた」

怜治が闇の書に手を伸ばす。
指が重厚な表紙が触れようとした時、

「早まるな！！」

４人目の声が響く。　同時にスタンから警告の声が聞こえた。

「スタンッ！！」

怜治はスタンを手元に呼んだ。
瞬間、スタンの横っ腹に衝撃。　怜治はスタンに押し飛ばされる形でビルから飛ぶ。
怜治のふたつの瞳は、あの仮面の戦士の姿をはっきりと視認した。
産毛が一気に逆立つのを感じる。　今夜の目的のふたつ目が現れた。
戦士はこちらに向かって飛翔。　スタンを鉄拳形態（アームズフォーム）に変形。　真っ向から受け止める。

「貴様っ！　自分が何をしようとしているのか分かっているのか！？」

「分かってるさ！　てめぇを誘き出せた！！」

仮面の向こうから歯ぎしりが聞こえた。
怜治は剣状のエリシオンを振るう。　戦士は身を翻して回避。
スタンを大剣に変形。　上段に構え、刺突の姿勢。
仮面の男はその一瞬をついて一気に距離を詰める。
怜治の顔を鷲掴みし、空気の足場を蹴る。

背後から風圧が怜治の体を圧す。　先程いたビルが小さくなる。

（シグナム達に援護をさせない気かよ！）

怜治は大剣で男の横っ腹を殴りつける。
仮面から苦悶の声が漏れる。　風圧が消えた。
眼下に広がる街並みは、遠見から海鳴へと移っていた。
怜治は膝蹴りを男の腹に突き刺すが、片手で止められた。
反撃に男の拳が叩きこまれる。　魔力で強化された拳だった。
怜治の体が飛ぶ。　眼に映る世界が盛大に回転する。
回転が止まった時、仮面の男の拳が再び迫っていた。
咄嗟に大剣で受ける。
エリシオンを砲撃型に変形。　魔力製の穂先から集束された魔力を一気に解き放つ。
右手に蒼い火球を生み、握りつぶす。　全身が蒼炎に染まる。

「火龍の――爪剣ッ！！」

蒼い斬撃が夜空を切り裂いた。
軌跡は蒼炎となって走り、夜空を彩る。
怜治は右手に大剣、左手にエリシオンを握ったまま動かない。　蒼に染まった髪が揺れる。
眼の前に集中。　敵の行動に対応できるよう構えておく。
蒼炎が爆ぜた。　怜治の身体に力がこもる。
炎の牢獄を裂き、仮面の戦士の姿が現れた。
前方に展開された魔法障壁が炎を弾いていた。
怜治の顔が驚愕に染まる。
蒼炎の斬撃を防がれたからではない。
障壁を展開した男の後ろに、もう1人仮面の戦士がいたからだ。
その姿は鏡から這い出してきたかのように全く同じ姿だった。

仮面の戦士は2人組だったのだ。

「はっ……そういうことかよ」

仮面の男は二人いる。　その情報は怜治が頭の中で組み立てるパズルの新たなピースとなった。　この事件を象徴する一枚絵がまた完成に近づく。

怜治は大剣と魔力剣。　二刀の刃を構える。戦士たちも構える。

「上等だ。　かかってこい」

結界が天地を貫いて覆う。　周囲に淀んだ虹色の光が煌めく。

両者同時に突撃。　1人が魔法陣を描く。　1人が拳を握る。　1人が剣を振るう。

陣が輝き、拳と剣は轟音を鳴らす。

激闘の音が眼下の街へと降っていく。

月村すずかは人気のない夜の道を歩いていた。

口から吐き出される息は白い。　冬の寒さをしのぐために、ダッフルコート着て、毛糸の手袋をしている図書館で面白い本を見つけ、そのまま嵌るように読み耽っていたら陽が落ちてしまっていた。

自分の失態を情けなく思う。

迎えを頼めばいいのだが、決して遠いわけではないので歩いて帰ることにした。

世話役のファリンに怒られてしまうだろうか。　それとも、迎えを頼むようにして下さいと懇願されるだろうか。

彼女の気持ちはありがたいが、すずかにとっては自分の都合で誰か

を動かすということはしたくなかった。
ふと、空を見上げる。
満天の星空、とまでは言わないが、夜天には多くの星々が瞬いていた。

「きれいだなぁ……。　クリスマスもこんな星空だったらいいけど、でも雪が降ってホワイトクリスマスなのもいいよね」

誰かに向かってでもなく、独り言を呟く。
本日は12月21日。　クリスマスまであと四日。　いや、祝うならイヴになるだろうから三日か。　そう思うと自然と心が弾む。
クリスマスの予定を指を折って確認していく。

「はやてちゃんと親戚の皆さんとパーティして、怜治さんの高校のお祭り行って……あっ！　その前になのはちゃん達にはやてちゃんを紹介すれば皆で行けるよね」

自分となのは、フェイト、アリサの四人にはやてが加わった画を思い描く。
思わず笑みが零れる。
瞬間、空の色が変わった。

「……え？」

すずかは驚愕した。　見上げていた夜空には澱んだ虹色の膜が張りついていた。
きれいな夜空が、一瞬で嫌悪すら抱く色合いへと変わった。
すずかは周囲を見渡す。　おかしい。　確かに今自分がいるのは人気のない通りだが、塀の向こうにある民家の明かりが消えているのはおかしい。

ケータイを取り出して時間を確認。　まだ就寝するには早い。
いつもならテレビで連続ドラマかバラエティが放送している時間だ。
　なのに、民家からはテレビの音も、住民の笑い声が一切聞こえてこない。
まるで、自分だけ取り残されたかのような孤独感が襲う。
続いて物騒な打撃音が耳を撃つ。　金属を撃ちつけるような音が絶え間なく聞こえる。
再び空を見上げる。　流星が尾を引いてこちらに向かって落ちてくるのが見えた。
そして――

「――きゃあっ！！」

流星はすずかの目の前に落下。　轟音と土煙、アスファルトの破片を周囲にばら撒く。
運よく破片が少女の身体を傷つけることはなかった。　いや、この異様な空間に迷い込んでしまった時点ですでに不運か。
土煙が晴れる。
すずかの顔に、これまでで最大の驚愕が広がる。
土煙の向こうから現れたのは、大剣で戦士の拳を受け止める怜治の姿だった。

「怜治……さん？」

すずかの呟きに、怜治が振り向く。　怜治の顔が驚愕に染まる。

（月村!?　なんでこいつが……人払いの結界も併用して張ったはずなのに！）

怜治は自分の失態に歯噛みする。

すずかは唐突に事態を理解する。

怜治は魔導師同士の戦いに少女を――

すずかは自分の理解の外の戦いに――

――――巻き込んだ――――

――――巻き込まれた――――

その様子を見ていた戦士が仮面の奥で下卑た笑いをもらすのを怜治は見た。

怜治は戦慄。

もう1人の仮面の男がすずかを背後から捕縛する。

右腕を少女の首に回し、吊るしあげる。

すずかの足が地面から離れ、首が絞まる。　呼吸を阻害されすずかの顔から血の気が失せていく。

怜治の瞳に激昂の炎が点火する。

「――てめぇ！！」

「動くな。　一歩でも動けば……言わなくても分かるな？」

すずかの首を絞める腕に力が入る。　少女の口から苦痛の呻きが零れる。

「もうこれ以上、勝手な真似をするな。　この街を守りたいのだろう？　ならば、ただ時を待て。　そうすれば全て無事に終わる」

拳を突き出す男が言った。

続いてすずかの首を絞める男が、

「――剣を下ろせ」

怜治は下ろさない。

やれやれと言った風ですずかの首をさらに絞める。

「くぅ……かぁ……」

すずかの顔が歪む。　手足が震え、顔色が蒼白に変わる。

自分の不甲斐無さに、怜治は唇を噛みしめる。　口内に鉄の味が広がる。

大剣を静かに下ろす。　大地に突き立て、柄から手を離す。

男も拳を下ろす。

「このまま家まで帰れ。　お前の姿が見えなくなったらこの娘を開放する」

怜治はすずかに背を向け、一歩踏み出す。

そして――

姿がぶれた。

「ッ！！！」

仮面の男たちが驚愕。　怜治の立っていた場所に大きな穿たれた跡が見えた。

すずかの目の前に、拳を握りしめた怜治の姿が出現。

「どうだ？　俺の姿、見えなくなったろ？」

拳に魔力を集中。　魔力光に包まれた剛拳を、仮面に突き刺した。

仮面にひびが入る。　男の体が数十m先まで吹っ飛ぶ。　腕から少女の体が零れた。
怜治は瞬時に抱き寄せ、自分の傍らに立たせる。　少女の顔に血の気が戻る
エリシオンを起動。　右手で魔法杖を魔力鞭に切り替え、振るう。
鞭はスタンの柄に巻き付き、引き抜く。　大剣は宙を舞い、怜治の左手に納まる。
大剣を水平に構え、右手で柄を掴み、抜刀の構え。

「お前……何をする！？」

殴り飛ばされた男がひび割れた仮面を押さえながら言った。
もう一方が拳を構え臨戦態勢をとる。

「ふざけるなよ……」

怜治の声にすずかの肩がわずかに跳ねる。
顔を見なくても、声を聞いただけで分かる。
怜治は今、本気で怒っていた。

「ガキを人質にするような奴が吐く、“守る”なんて言葉を、信じると思うか？」

怜治の怒りに呼応するように魔力が噴き出る。

「てめぇらの仮面剥ぎ取って、アースラの連中の前につきだしてやろうかと思ったが――止めだ」

スタンが発光。　柄を掴む手に力が入る。

「お前らは、ここで潰す！」

柄から刃を引き抜く。　柄を失った大剣が三つに分解。
真ん中が変形、トライアルが前面に回り結合、盾となる。
残りの二つはプレートアーマーとなって怜治の体を包む。
引き抜いた柄から鋼の白刃が伸び、片手剣となる。
トライアルが加わったことで追加された、スタンの新フォーム。
その名は――

「『フォーム？――騎士（ナイト）』」

右手に西洋風の片手剣。　左手に盾。　そして、鎧に身を包んだ姿はファンタジーの小説に出てくる騎士だった。

「――すずか」

「あっ……はい！」

「悪いが最後まで面倒見れねぇ。　俺があいつらを引き付けるから、その隙に逃げろ」

「でも、怜治さんは！」

すずかの言葉に怜治は苦笑。
彼女とは怪我したに会うことが多かったからか、怜治は弱いという印象があるのだろう。

「安心しろ。　俺は……俺たちはあんな奴らにやられるほど弱くねぇ」

言い切ると同時に背後の仮面の戦士が突撃。　拳に魔力が宿る。
ひび割れた方は魔法陣を展開。　魔力弾が放たれる。
怜治は片手剣を旋回。　戦士の拳を受け止め、盾で光弾を防ぐ。

「走れ！！」

怜治の声に弾かれるようにすずかは走りだす。
怜治の脇を抜け、拳と剣の攻防を視界の端に捕えながら一気に走り抜ける。
もともと、運動神経には自信のあるすずかの姿はあっという間に夜の闇に溶け込み、見えなくなった。

「さて……と。　片方の仮面にひびが入って見分けがつくようになったな。　ここはなんともない方をA、ひび割れた方をBとでもするか」

『そんな区別をつける意味がよく分からんが、油断すんなよ？』

「ったりめぇだ」

光弾が走る。　拳が振るわれる。　剣が軌跡を描く。
激闘は広い空から狭い大地へと場を移し、再開された。

すずかは走る。
はぁはぁ、と白い息を吐きながら走る。
いつもの彼女ならこの程度で息切れなど起こすはずもないが、さっきまで首を絞められて呼吸を阻害されていたこと、突然始まった戦

いへの戸惑い、そして怜治ひとりを残してきてしまったことが後ろ髪を引き、少女の足を鈍らせる。
すずかの脳裏に後悔の二文字が浮かぶ。
何故、彼を置いてきてしまったのか。　無理やりにでも引っ張って、2人で逃げるべきではなかったのか。
そんな考えをすずかは自ら否定する。
自分に戦う力など無い。　運動神経がいいとよく言われるが、所詮、小学生だ。　高校生の怜治やあの仮面の戦士達についていくことなどできるわけがない。　あの場に自分が残っても足手まといにしかならない。　どうせ、また人質になるのがオチだ。
怜治に逃げようと打診しても、彼は決して同意しないだろう。　一瞬見えた怜治の瞳には頑なな意志があった。
ゆえに、あの時自分にできたことはあの場からいなくなることだけだった。
少しでも怜治に戦いに集中してもらえるように、負担にならないように、逃げるしかなかった。
しかし、ただ何もしないわけにはいかない。
戦えないなら、戦う以外にやることがあるはずだ。
一番に浮かんだことは人を呼ぶことだった。
脳内にこの周囲の地図を広げ、交番の位置を確認。
ここからはかなり距離がある。　柄にもなく舌打ち。
いっそのこと、ここで大声でもあげてみようか。
人の気配は感じないが、もしかしたら聞こえるかもという淡い希望が湧く。
思い立ったら即実行。　息を多く、大きく吸い込もうと顎を上げる。
虹色の膜が張った空が見えた。

「――え？」

吸い込むはずだった息が止まった。

人が、空を飛んでいた。　知っている人だった。
桃色の長い髪、凛々しく整った顔立ち。　見慣れない服を着、腰には剣を差している。
なぜ飛んでいるの？
その格好はなに？
この空間について知ってるのか？
問い詰めたい事項がわき水のようにあふれ出るが、それらすべてを抑え込む。
今、自分にできることを。
そう心に決めた。　すずかは息を大きく吸い込む。
そして、空飛ぶ知人に向かって声を張り上げた。

怜治は剣を振るう。
狙われた仮面Ｂは跳躍して回避。　そのまま空中に留まる。
怜治は舌打ち、後ろから危険を感じて身体を回転。　脇を拳が通過していった。
カウンターに盾で殴りつける。　仮面Ａは腕をクロスして防御。
空中にいた仮面Ｂが背後から光弾を乱射。　着弾したアスファルトの地面が抉れる。　怜治は振り返って盾で防御。　隙を逃さず、仮面Ａが拳を突き出す。
無理やり体を捩じって剣をぶつける。　魔力で防護、強化された拳は傷一つつかない。
怜治は体を戻しながら飛翔。　仮面Ａが続き、再び戦場が空に戻る。
仮面の戦士たちは怜治を挟んだ体勢を崩さない。　息の合った動きだった。
長年、２人で行動していたのだろうと怜治は判断。

仮面Ｂが左太腿のホルダーから二枚のカードをとり出す。　それを
怜治に向かって投げる。
怜治は首を傾けてかわす。　カードは仮面Ａの手に納まる。
カードが発光。　カードは消え失せ、代わりに二本の長剣が現れる。
刃をなぞる様に光の筋が剣を縁取る。

「……デバイスか？」

『いや、簡易型の魔力蓄積装置、しかも使い捨てのやつだろう。
あれだ、ヴィータ嬢の鉄球みたいな感じ』

なるほど、と怜治は納得。
仮面Ａが突撃し、剣と剣がぶつかりあう。
もう一本の剣が突きを繰り出す。　盾で防御。
仮面Ａは体を捻って蹴りを腹に突き刺す。
鎧に守られてないところを蹴られ、胃が逆流。　怜治は必死に抑え、
剣をはじき返して突撃。　片手剣を振るう。

「やはり、剣については素人か」

仮面Ａが呟き、左手の剣を振る。　片手剣が簡単に弾かれた。
右手の剣が横薙ぎ。　盾で防ぐ。

「その形態になったのは失敗だったな。　いくら魔力が大きかろう
と、所詮お前は戦いに関して素人。　さっきのように力任せに大剣
を振りまわしていた方がまだましだ」

「真ん中の意見には同意だが、最初と最後だけは反論させてもらお
う」

盾が発光。　続いて爆裂。　剣が折れ、破片が落ちていく。
怜治は身体を回転させて回し蹴りを脇腹に叩きこむ。
仮面Ａから苦痛の呻きが漏れる。

「騎士形態（ナイトフォーム）は剣と盾で攻防一体、加えて斬撃と盾からの射撃による遠近両用の形態だ。　鉄拳（アームズ）や大剣（ブレイド）みたいに一撃の威力はねぇが、相手が多数の時はこっちの方が役に立つ」

「そうか……。　他の形態が一能突出なら、それはバランス型ということか」

仮面Ａはホルダーからカードを取り出し、剣に変える。

「だが、性能に頼るだけでは勝てんぞ？」

双剣を掲げて突撃。
怜治は盾を突き出す。　盾から光弾が連射。　だが、双剣が光弾を叩き斬る。
互いの剣の射程圏内に入り、剣戟が始まる。
徐々に怜治が押され始める。
相手の得物は二本。　こちらは一本。　盾からの射撃も、標準をつける前に剣が振られ、防御に専念せざるを得ないくなる。
得物の性能はあきらかにこちらの方が上。　だが、怜治が劣勢に立たされる理由はひとつだった。
――経験。
脳裏に浮かんだ二文字の意味に、怜治は歯を噛みしめる。
相棒の力を引き出しきれない自分の未熟さに腹が立つ。
一瞬意識がずれた瞬間、背中に衝撃。　中規模の爆音が響く。

「忘れるなよ。　お前の敵は二人いるんだ」

背後から届く声に押されるように、怜治の身体が前方に傾く。
怜治の眼に仮面Ａの仮面、胸、脚、そして夜の海鳴の街が映る。
仮面Ａが怜治の顎を蹴りあげる。　怜治の身体が弓なりに反れる。
視界を逆さまにした怜治の前に、仮面Ｂが展開する魔法陣が現れる。
怜治の視界の外で、仮面Ａが双剣を振る。
ここで終わるのか？
絶望が怜治の脳内を支配する。　走馬灯のように１７年間の思い出が駆け巡る。
自分を捨てた父と母、優しかった祖母、無愛想な祖父との日々、悪友との出会い、魔法。スタン、フェイト・テスタロッサ、高町なのは、ハラオウン親子、アースラスタッフの顔が浮かんでは消えていく。

――あの……大丈夫ですか？――

思い出したのはあの大人しそうな少女との出会い。
今更になって何故あの時の事を思い出す？　怜治の脳内に、疑問が浮かぶ。　そして理解。
彼女が最後にあった人間になるわけだ。
新たな疑問が湧く。
自分が倒れたら、この戦士たちを放っておいたら彼女はどうなる？
犯行現場を目撃された犯人は目撃者をどうする？
最悪の結末がよぎる。
良いわけがない。　そんな結末に、納得できるわけがない。
もうこれは自分だけの戦いではない。　あの少女を守るための戦いになった。
怜治の意識が一気に覚醒。　全身に力を込め、身体を捻る。
双剣が空を切った。
怜治は仮面Ｂに盾を向ける。　盾が発光、一筋の閃光が放たれた。

閃光は魔法陣に直撃し、炸裂。　悲鳴が上がる。
仮面Ａが双剣を再び振る。　一本が怜治の片手剣とぶつかり合い、火花を散らす。
二本目が時間差で迫る。
盾が間に合わない。　一か八かで全魔力を肉体の防護に当てる。
瞬間、剣が上からたたき落とされた。
振ってきたのは鞭剣。　続いて、その担い手が舞い降りる。
桃色の長髪、凛々しい顔立ち。　怜治はその者を知っている。

「――シグナム」

剣の騎士が、戦線に加わった。

「どうにか、間にあったようだな」

「なんでてめぇがここにいる？」

シグナムと怜治の視線が交錯する。　一瞬の腹の探り合いだった。

「すずか殿に頼まれたのだ。　貴様が襲われているから助けてほしいとな」

「余計な真似を……。　いや、ここは素直に礼を言うとこか。　ありがとう、助かった」

シグナムの瞳が見開かれた。
まるでこの世のものではない何かを見たような表情に怜治はムッとする。

「まさか、貴様から礼を言われる日が来るとはな……」

「うるせぇ」

「付け加えると、礼を言うならすずか殿に言え。　私は頼まれたから来ただけだ」

「わーってるよ。　ったく、助けるつもりが逆に助けられるとはな」

軽口を叩いていると、仮面の戦士たちがこちらを見据えていた。
仮面に隠された顔には疑問と驚愕が浮かんでいることだろう。

「守護騎士、なぜそいつの味方をする。　そいつは敵のはずだ」

「確かに。　だが――」

シグナムは仮面Ａに愛剣を向ける。

「貴様らは我が主のご友人に手を挙げた。　私にとって、貴様らはこれ以上ない敵だ」

仮面Ａが舌打ち。　シグナムと怜治の共闘は予想も想定もしてなかったらしい。

『これで二対二か。　少しはマシになるな』

「ああ、まことに不本意ながら、貴様に我が背を預ける。　足を引っ張るなよ」

「こっちのセリフだ」

シグナムは小さく笑い、剣を掲げる。

「我が名はヴォルケンリッターが将、剣の騎士シグナム！　我が魔剣、レヴァンティンの錆びになりたい者は前に出ろ！！」

戦いはさらに激しさを増し、夜空に怒号を撒き散らす。

月村すずかは少し後悔していた。

偶然見つけたシグナムに頼みこみ、怜治を助けに行ってもらったことをだ。

傍から見ればこれ以上ないベストな選択だが、彼女は他人に任せてしまったことに罪の意識を感じていた。

本音を言えば、自分が行きたかった。

自分を助けてくれた人を、今度は自分が助けたかった。

だが、少女に戦う力など無い。　その事実が、すずかの胸を締め付ける。

なぜ自分には力が無いのか。　弱い自分が憎い。

口がカラカラになる。　瞳の奥が熱くなる。

涙が頬を伝う。　嗚咽が零れ、手足が震える。

立ち止まっていると、後ろから来た誰かとぶつかってしまった。

しまった、と思って謝ろうと振り返ったがそこには誰もいない。

代わりに――

「――――え？」

代わりに、一本の剣がアスファルトの大地に刺さっていた。

第２３話　背中合わせ（後書き）

次回！！

魔法少女すずか！！！

爆☆誕！！！！

第２４話　月村すずか（前書き）

前回の２３話、誤字が多くて自分でもビックリ。

高いテンションのままに書いたからチェックが乱雑になったかな…

……

第２４話　月村すずか

出会ったのは二年前の春だった。
陽が傾き、空は茜色に染まり、その光を浴びる街もまた同様に染まる。
茜色に染まった大地を見てすずかは歩く。
少女の顔は暗い。　顔を俯かせ、トボトボと歩を進める。
すれ違う仲の良い親子や、談笑する学生を見てため息が漏れる。
少女は悩んでいた。　結論から言うと、月村すずかはいじめられていた。
大げさな言い方かもしれないが、このころ気が弱く、内気なすずかにはつらかった。
きっかけは分からない。　ある日突然、とある同級生の少女の自分に対する態度がキツくなった。
手を挙げられたわけではない。　だが、強気の姿勢や威圧するような言葉が、すずかは怖かった。
すずかが何もしないのに気を良くしたのか、それとも彼女の反応が面白いのか分からないが、それは続いた。
からかうように悪口を言われ、困った顔を見て嘲笑される。　少しでも反撃の態度を見せたら睨みつけられ、体が委縮してしまう。
そしてまたからかわれる。　その繰り返しだった。
さらに悪いことに、その同級生とはすずかが通っているバイオリン教室でも顔を合わせることになった。
わずかなミスでも指摘され、笑われる。　ミスが無くともいちゃもんをつけ、否定しようものなら暴言が飛ぶ。
次の日学校に行けばそれをネタにまたからかわれる。
悪循環だった。
すずかが困った顔をすればさらに増長し、黙って耐えていたら気に入らないとばかりに暴言を吐く。

少女の心は軋み、悲鳴を上げる。
すずかの様子を心配した家族に何があったかと聞かれても、なんでもないと答えるしかなかった。
本人がそう言う以上、家族もそれ以上は踏み込んでこなかった。
自分が正直に話せば、この問題は解決するだろう。
話したことはそのまま学校か、同級生の親へと伝わり、いじめはなくなるだろう。
それでも、すずかは話さなかった。　嫌だったのだ。　自分が話すことで、同級生の少女が悪者になることが。
偽善だと思った。
自分でこの問題を解決することはできないのに、ただ耐えるしかできないのに、それでもすずかは相手の少女を悪者にしたくなかった。
自分から何もしない癖に、いつか仲良くなれるだろうと都合のいい希望を抱いていた。
当然、そんな希望は真っ向から打ち砕かれる。
今日、学校で少女に自分がいつもつけているヘアバンドを馬鹿にされた。

「あんたさ、そのヘアバンドいつもしてるけど、はっきりいって似合ってないからもう着けないでくれない？　あんたの顔見るたび目について目障りなのよね」

あまりに理不尽な物言い。
悲しかった。　つらかった。
暗いとか、可愛くないとか、バイオリンが下手だとか、そんな言葉なら我慢できた。
でも、このヘアバンドだけは否定してほしくなかった。　馬鹿にしてほしくなかった。
怒りよりも悲しみが込み上げてくるあたり、本当に自分が情けないと思った。

思い出すと、瞳の奥が熱くなる。　涙が零れるのを唇を噛んでこらえる。
また彼女に会うのが怖くて、バイオリンのお稽古をサボってしまった。
学校から車でバイオリン教室の前まで送られて、車が去ったのを確認してから逃げ出した。
家に帰るわけにもいかず、どこに行こうとも思わず、ただふらふらと街をさまよう。
ふと、すずかの耳に罵声のようなものが届く。
顔をあげる。　どうやら、少し先にある建物と建物の間の路地裏から聞こえてくるようだった。
罵声、怒声、そして何かを殴りつけるような鈍い音がわずかに聞こえてきた。
少女の足が前に進む。
気が弱いくせに、こういう時に恐いもの見たさの感情が湧き上がる自分が嫌になる。
そっと顔だけを覗かせて路地裏の様子をうかがう。
すずかは息をのんだ。
黒い学生服を着た男子が数人で、奥にいる別の学生服を着た男子を暴行していた。
私刑（リンチ）だった。　殴る蹴るを繰り返し、その度やられている側の体が揺れる。
予想していたわけではない。　だが、想像していた以上に悲惨な光景だった。

――――――助けなきゃ――――――

一瞬そんな意志が湧く。
助ける？　自分が？　小学生になったばかりの自分に何ができる？
相手はおそらく中学、いや、高校生だろう。　それが五人ほど。

助けるなんてできるわけがない。　誰かに頼もうにも、皆我関せずを通して無情に歩いている。
すずかは無視していく彼らを非難できない。
みんな分かっているのだ。
自分が行ったところで何もできない。　怪我人が増えるだけだと。
それはすずかも同じだ。
心の中で謝罪しながらそっと目の前の出来事に背を向けようとした時、

「おい、何見てんだよ」

ビクッと肩が跳ねる。
走り出そうとしたら腕を掴まれる。　ギリギリと握りしめられて痛い。
暴行していたひとりに気付かれてしまった。
他の男子たちの視線が一斉にすずかに集まる。

「……あ……あの……」

恐怖で手足がすくむ。　呂律が回らない。
助けを求めて周囲を見渡すが誰も目を合わせようとしない。
絶望が脳を埋め尽くす。

「なに小学生なんかに手ぇ出してんだよ」

「なに？　おまえロリコンか？　やっべーだろそれ」

「うっせぇ！　このガキがさっきからジロジロ見てたんだよ」

男子生徒の言葉に他の男子たちが少女を取り囲む。

多数の目に見下ろされ、すずかはただ怯えるしかなかった。
ひとりの男子がすずかの着ていた服に目をつけた。

「これ……聖祥の制服じゃね？」

「聖祥ってあの私立の金持ち校？　……へぇ～」

すずかを見下ろす目が下品なそれに変わる。
ひとりが膝を曲げ、すずかと視線を合わせる。

「ねぇお嬢ちゃん。　俺らさ、お金欲しいんだよね～。　貸してくんない？」

「え……あの……」

「いやいや無いってことはないでしょ。　あんないい学校通ってんだからさ」

「そうそう。　ちょ～っとパパやママに頼んでもらうだけでいいからさ～」

下品な笑い声が響く。
すずかに何かを言う力はない。
ただ震え、言葉にならない声を出すだけ。
事態はすでに、少女の処理能力を超えてしまっていた。
返事の無い少女の態度に、男たちに苛立ちが募る。

「おい、黙ってねェでなんか言えよっ！！」

業を煮やしたひとりがすずかの肩を掴む。

ギリギリと絞められ、すずかの口から小さな悲鳴が上がる。
少女の目尻には涙の粒がたまっていた。
なぜこんな目にあわないといけない？
なぜ誰も助けてくれない？
恐怖が、混乱が、絶望が少女の心を砕こうと牙をむく。
ドン、という音が聞こえた。　肩の痛みが和らいだ。
え？と思っていると、自分の肩を掴んだ男が引き倒されていた。
男の胸は運動靴がのしかかっていた。
視線をあげる。　靴から伸びる足を辿っていくと見えたのは、

「寂しいじゃねぇか。　俺との喧嘩はもう終わりか？」

黒髪黒眼、黒い学ランを着た少年の顔だった。
不敵な笑みを浮かべ、右手に握った学生鞄を振る。
鞄の角が数人の男たちの側倒部を直撃。　殴られた者はもんどりをうって地面に転がる。
事態を把握した他の男たちから怒声と殺気があふれる。　たちまち乱闘へと発展した。
男たちが殴り合うのを、すずかはただ茫然と見ているだけだった。

「あの、大丈夫ですか？」

「――――ん？」

すずかの問いかけに少年は振り向いた。
路地裏には、先程すずかを取り囲んだ男子たちが倒れていた。

気絶している者、痛みで立ち上がれず殺気立った視線だけ向けてくる者、もう勘弁とばかりに倒れ伏す者。　その中で少年はただ一人立っていた。
とはいえ、少年の傷も酷い。
口内を切ったのか口元から赤い筋が垂れ、顔全体は腫れ、青痣があった。　頭部からは血が流れ、前髪が渇いた血でパリパリになっていた。　視線をすこし下げれば汚れ、穴のあいたボロボロな学ランが目に映る。

「別に、こんなんかすり傷だ」

「えっと……思いっきり殴られ傷だと思います」

少年の言葉に一瞬あ然としたが、すずかはここはお礼を言うべきだと思い直す。

「た、助けてくれてありがとうございます！」

「あ～いいって別に。　お前が絡まれてる隙ついただけだし。　っつーか、お前がいなかったら俺あのまま殴られ続けるだけだったよ」

少年は苦笑しながらボサボサになった髪をかき上げる。　額の痛々しい傷跡が見えた。

「俺の方こそ助かった。　あんがとな」

すずかは耳を疑った。　聞こえた言葉を反芻し、その意味を噛みしめる。
お礼を言われた？
自分はあなたを見捨てようとしたのに？

見て見ぬふりをして逃げ出したというのに？
礼を言われる資格など無いというのに……。

「う……うぐ……ひっぐ……」

「え、ちょ、なんで泣いてんだよお前！？」

少年は突如泣き出した少女を見て慌てる。
これは、事情を知らない者が見たらどう見たって自分が小学生を苛めて泣かしているようにしか見えない。
少年は必死になぜ少女は泣いているのかを考える。

「ど、どうした？　さっき掴まれてたところが痛いのか？　俺が暴れてる時にドサクサまぎれにどっか殴っちまったか？　おい、おいってば！」

少年の言葉に答えず、少女はただ、涙を流すだけだった。

2人は商店街から少し外れたところにある公園に移った。
ベンチに座り、夕日を正面から浴びる。
二人の体が茜色に染まり、背後には影のシルエットがのびる。
少年は顔横に向け、少女に話しかける。

「落ち着いたか？」

「ず　み〝ま〝ぜ　ん〝」

すずかはハンカチで残った涙をふき、鼻を押さえながら答え。　そのせいで鼻声だった。
返答はそれだけで、沈黙が訪れる。　公園で遊ぶ子供の声が妙に大きく聞こえた。
少年に連れてこられるうちに落ち着き、涙は治まっていた。
落ち着いてくると、先程の出来事がまた思い出してしまった。
今度は泣きはしなかったが、自分の情けなさに、弱さに嫌気がさしてしまう。

「お前、なんであんなとこいたんだ？」

「――――え？」

突然の問いかけに、すずかはすぐに返答ができなかった。
少年はすずかが手に持つバイオリンケースを指さす。

「バイオリン教室なんてあんなとこにねぇだろ？　それとも、聖祥は音楽の時間にバイオリンを弾くのか？」

すずかは首を横に振って否定。
少年は何も言わず、黙って返答を待つ。
すずかは迷う。　ついさっき会ったばかりの少年に自分の悩みを話していいのかと。
ふと、疑問が浮かぶ。　なぜ少年は暴行されていたのだろうか。
自分と同じような悩みを持っているのだろうか。
疑問は好奇心に変わり、のどを通って言葉となる。

「あなたも……イジメられてるんですか？」

「はぁ！？」

少年の口から心外なとばかりの声が出た。
すずかの肩が跳ね、委縮する。
もともと小さな体がさらに一回りほど小さくなる。

「まぁ、あんな場面見たらそう思うか……」

その様子を見て、少年は肩をすくめる。

「なんであんなことに？」

すずかの問いに、ん？と少年は少し考えるような声を出し、事の発端を語り出す。

「道端で肩がぶつかって、いちゃもんつけられたんだよ。　後はもうお前が見たとおり」

「そんな……それだけの理由で？」

信じられない、といった顔をするすずかに、少年は苦笑する。

「そんなもんだよ。　ガキのケンカに大した理由はねぇって」

少年の言葉にすずかはうつむく。
もしかしたら、自分がいじめられてる理由も大したものではないのだろうか。
自分に何か落ち度があったわけでも、無意識に相手を傷つけてしまったのでもなく、ただ相手の勝手な都合で苦痛を強いられているのか？

受け入れたくない事実がすずかの心に突き刺さった。
まるで奈落の底に落ちていくかのような感覚がすずかを襲った。
止まったはずの涙が再び溢れそうになる。
その様子を見て少年は、

「“あなたも”ってことは、お前も……お前はいじめられてんのか？」

少女は、少し黙ってから、ゆっくりと頷いた。
少年は顔をあげて空を見る。

「そっか……辛いんだろうな」

「あなたは、つらくないんですか？」

「俺か？　確かに、俺の性格や態度が癇に障ったとか言って突っ掛かってくる奴はいるが、俺もやられっぱなしじゃないからな」

「わたしには……やり返すなんてできません」

すずかのバイオリンケースを握る手に力がこもる。
白い指がますます白くなる。

「でも、今のままで良いわけじゃないんだろ？」

こくん、とすずかは頷く。
それを見て少年は、

「だったら黙ってたらダメだぜ。　黙ってたら自分の気持ちは伝わんねぇし、相手は図に乗る」

「わたしは、誰かを殴ったりなんかできません」

「じゃあ、それ以外の方法で伝えろよ」

「……どうやってですか？」

「腹の底から声出して、「やめて！」って叫べばいいんだよ」

「……それだけですか？」

すずかの言葉に少年は眉を顰めた。

「言ったな？　結構効くと思うぞ。　腹から出した声ってのは気持ちがこもってるからな」

言いながら少年は手を自らの腹に添える。

「腹ってのは、心に一番近いんだとさ。　死んだ祖母さんの受け売りだ」

少年は立ち上がる。

夕日の光を全身に浴びて茜に染まるその姿を、きれいだとすずかは思った。

「言わなきゃ後悔するぞ。　そんでもって、その後悔は一生お前につきまとう」

少年の紡ぐ言葉は、どこか現実味のあるものだった。

「頑張って言ってみな。　良い結果がでるかは分かんねえけど、言わないよりかはずっと良い」

言い終わると、少年は自分の鞄を引っ掴んで帰ってしまった。
ひとり残されたすずかは、ゆっくりと立ち上がる。　そろそろ戻らないと、稽古をサボったことがバレてしまう。
来た道を戻りながら、少女は脳内で最後に見た少年の顔を再生する。
頭に浮かんだ少年の顔は、すがすがしく、どこか悲しげな顔だった。

これが、小学一年生だった月村すずかと、中学三年生だった松田怜治の初めての出会い。
そして、二年間、ふたりは一度も出会うことが無かった。

魔法少女リリカルなのはＡ’ｓ　☆Ｔｈｅ　Ｒｉｄｅｒ☆　第９話
月村すずか

あの後、結局すずかは何もできなかった。
しかし、されるがままのすずかの様子を見るに見かねたのだろうか、他の同級生によって、すずかへのいじめはなくなった。
やめて！よ叫ぶ事が出来たのは喧嘩を始めたその２人を止めるためだった。
それを境に、すずかの性格は少しずつ明るくなっていった。
今では親しい友人もいる。　学校での生活も楽しいものに変わって

いった。
だが、すずかは心のどこかで何もしなかったことに罪悪感を抱いていた。
あの時の少年から受け取った助言を無駄にしてしまったと感じていた。

「どうして、あの時の事を思い出したんだろう」

目の前にある剣を見ながら、すずかは呟いた。
すずかは剣をじっとみつめる。
刀身は夕日のように赤く、炎が揺らめくように緩やかに波打っている。
柄は金色で、鍔の代わりに蓮根型のシリンダーがついている。
月明かりに照らされて美しく輝く。
刀剣類に詳しくないすずかは、ただ綺麗な剣だと思った。
見ているだけで引き込まれるような魅力を感じる。
不意に手を伸ばして手に取ってみたいという欲情に駆られる。
一歩進んで手を伸ばす。
近づくと、その剣から不思議な力を感じた。
この剣があれば、自分も戦えるのではないか？　そんな感情が湧き上がる。
再び一歩近づく。

――――ダメだよ――――

頭の奥で声が響く。　すずかの本能が制止を促した。
すずかの足が止まる。

――――手を伸ばすんだ――――

すずかの頭に別の声が響く。
引き留める感情と後押しする感情、ふたつの感情が葛藤の渦を巻く。
すずかの手袋に包まれた手が伸びたり戻ったりを繰り返す。
少女の頭の中には二つの声が絶え間なく響き続ける。

――――行っても何もできないぞ――――

――――あの人を見捨てるのか――――

――――取ったらもう元には戻れないぞ――――

――――逃げるのか？　今度は何かできるのに逃げるのか――――

冬なのに、少女の額に汗が浮かぶ。
すずかは考える。　目の前にあるのはどうみたって剣だ。
剣を使うということは何かを斬るということだ。　その何かはあの仮面の男たちだ。
自分に、人を斬れるだろうか。
無理だろうとすずかは判断する。
ならば、剣など持ったところで、あの場に舞い戻ったところで足手まといにしかならないだろう。
伸びた手が下りた。　だらりと少女の隣で力なく揺れる。
制止を促していた声が、そうだそうだ、とすずかの判断を肯定する。
だが、

――――また、あの人は傷つくよ――――

決壊したダムから流れ出す水流のように、すずかの脳裏に傷ついた怜治の姿がよぎる。
初めて会った時、彼は顔じゅう痣だらけで、頭からは血が出ていた。

先日会った時、彼の身体は火傷ときり傷で覆われ、骨にはひびまであった。
もしも、先日の怪我があの仮面たちによるものだったとしたら……。
……。
少女の脳裏に最悪の想像が浮かび上がる。
酷く傷つき、全身が朱に染まり、腕はあさっての方を向き、足元に血だまりをつくる怜治。　それでも彼は、どれほどの傷をおっていようが彼は言うのだろう。

「大したことない、かすり傷だ」――――と。

あまりにも容易に想像できた。
すずかの瞳に決意が宿る。
自分に人を斬る覚悟なんてない。
ならば、せめて彼が負う傷を一つでも減らせるよう――――

自分が盾になろう。

今度こそ手を伸ばす。
制止の声が怒鳴る様に響く。

――――後悔するぞ!!――――

すずかは止まらず、金の柄を掴んだ。
少女の身体を光が包みこむ。
眩い光が、流星の如く空を翔(か)けた。

刃が激しくぶつかり合う音が響く。
シグナムの剣と、仮面Ａの双剣が剣戟を繰り広げ、怜治と仮面Ｂの魔力弾による銃撃戦が戦場に花を咲かす。
シグナムの加入により、戦力は二対二。　実力も拮抗しており、互角の戦いが果てしなく続く。
怜治の剣は障壁に阻まれ、反撃にと放たれる魔力弾を盾、もしくは盾から放つ魔力弾で防ぐ。
シグナムの剣を戦士は受け止め、時に受け流し、双剣の利をもって反撃に移る。
膠着状態。
シグナムは状況をそう判断した。
一分一秒が惜しい彼女にとって、無闇に時間を浪費したくはない。

『Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ』

レヴァンティンからカートリッジが排出され、魔剣が炎を纏う。

「紫電――――」

シグナムが愛剣を振る。

「一閃ッ！！」

必殺の一撃が戦士を襲う。
双剣をクロスさせて防御するも、炎の斬撃は剣を粉砕。　仮面Ａが吹っ飛んだ。
仮面Ａは体勢を立て直しながら、ホルダーからカードを取り出す。

カードは二丁の銃に変化。
射撃を警戒するシグナムをあざ笑うように、仮面Ａは背を向ける。
シグナムは敵の意図に困惑するが、すぐに理解した。
戦士が銃口を向ける先に、怜治の背中があった。
怜治は仮面Ｂが放つ魔力弾の雨を防ぐのに集中しており、背後から迫る脅威に気付かない。　いや、気付く暇がないように仮面Ｂが誘導しているのだ。
シグナムが叫ぶより速く、銃が火を噴いた。
魔法で発砲音を消したふたつの弾丸は怜治の背中を貫こうと牙をむく。
怜治の背中に、影が落ちた。

『氷の城壁（アイス ブルグ）』

声が響き、怜治が氷の円柱に包まれた。
ただの氷ではない。　幻想的な紫色の氷、魔法によるものであることは明らかだった。
突如現れた氷に、弾丸も、魔力弾も尽く防がれた。
外にいる三人が驚愕していると、氷の壁が崩れ落ちた。　人影が二つ、現れる。
ひとりは怜治。　何が起こったか分からないといった顔をしていた。
もうひとりは少女。　ヘアバンドをつけた紫の長い髪をなびかせ、裾が燕の尾の形をした星屑模様のマント、深い群青色の長袖の服。
　フリルがついた夜色のスカートが膝まで隠し、風になびいて揺れる。　手に持つのは少女には不釣り合いな揺らめく片手剣。　刀身が夕日のように赤く、薄氷が張り付いていた。
この少女が氷を発生させたのだと理解すると同時、新たな衝撃が襲う。
皆が、その剣を持つ少女のことを知っていたからだ。
その少女の名は――――

「月……村……？」

怜治が困惑に彩られた声をだす。
少女が申し訳なさそうに顔を向けた。
改めて確認。
月村すずかがそこにいた。

「あの……戻って来ちゃってごめんなさい。　――――でも」

すずかが仮面の戦士達の方を向き、剣をむける。
そして、

「もう、何もしないのは嫌なんです！」

すずかが戦士に向かって疾駆。
剣を振ると軌跡を辿る様に紫色の氷が生まれる。
氷は、雪の結晶のような形となる。

『飛来する氷刃（アイス　フリーゲン）』

剣から声が響き、生まれた四つの結晶が回転。　戦輪となって戦士達に襲いかかる。
仮面Ａは銃を向け、仮面Ｂは魔法陣を展開。　光弾を斉射。　数は八発。
戦輪は破壊されて散り、残りの四発が少女を襲う。
すずかは剣の切っ先を突きだす。

『噴き出る氷盾（ブレーク　シルト）』

切っ先から噴水のように魔力が噴き出る。　魔力は氷に換わり、少女を守る盾となった。
光弾が着弾。　激しく爆風が上がるが盾にはひび一つ入らない。
氷が砕け、鋭い破片が仮面に向かう。
仮面Ａは銃を捨て、カードから双剣を召喚。
降りかかる氷を斬り捨てながらすずかへと斬りかかる。

『氷剣投影（コピール・ヤュヴェルト）』

紫色の刀身が氷を纏い、剣を象った氷が出来上がる。　出来上がった氷剣はすずかの手のあいた片手に納まる。

「はあっ！！」

すずかは体を回転させ、渾身の一撃で仮面Ａと撃ちあう。　撃ちあった刃が火花を散らす。少女の体が弾かれたように仰け反った。
所詮、大人と子供。　力の差は明らかだ。
仮面の二撃目が走る。
怜治が咄嗟に間に割り込み、剣を弾く。　間をおかずに盾を向け、光弾を発射。
小規模の爆音が上がる。
体勢を崩した仮面Ａに、シグナムが斬りかかった。　仮面Ｂがバインドを発動。　光の縄がシグナムの進撃を止める。

「この程度で、私が止まると……」

レヴァンティンの刃の付け根からカートリッジが排出。　圧縮魔力が騎士の身体を駆け巡る。
レヴァンティンが蛇形態（シュランゲフォルム）――――鞭状連結刃――――に変形。　蛇がうねるかのように蛇腹剣が舞う。

自らを縛るバインドを斬り裂く。

「思うなぁっ！！」

自由になると瞬時に納刀。　仮面Ｂの方を向いてカートリッジをロードし、抜刀。

「飛龍――――　一閃ッ！！！」

圧縮魔力を付与した蛇腹剣の斬撃が疾走する。
とっさに展開された防御壁を難なく粉砕し、斬撃は仮面Ｂの腹を喰い破った。
低い悲鳴を上げて、仮面Ｂが夜の街へと堕ちていき、消えた。
仮面Ａが驚愕の声をあげた。
怜治はその隙に片手剣を、すずかの氷剣に当てる。
すずかの変換魔力を吸収し、怜治は全身に紫色の氷を纏う。
黒髪が紫水晶（アメジスト）のように輝く。
仮面Ａが気付き、剣を振るうが、もう遅い。
怜治はすでに、必殺の刺突の姿勢へと移っていた。

「氷龍の――――剣角ッ！！」

神速の突きが戦士の剣を粉砕。
仮面Ａは体を捻り、直撃を回避。　だが、怜治の刺突は腕を撃ち、吸収した魔力を一気に放出する。
巨大な氷塊が怒濤のごとく夜空を一閃する。
戦士の腕ごと、空間を氷結させた。
仮面Ａの口から苦悶の声が漏れる。

「さて、その仮面の下、見せてもらうぜ」

怜治は近づき、仮面に手をかけようと手を伸ばす。

「――――くっ」

戦士は最後のあがきとばかりにホルダーから全てのカードをばら撒く。

カードは宙で固定され、陣を描き、光を発した。

失明するのではと思うほどの極光に目を伏せる。

光が消え、目が視力を取り戻した時にはもうすでに仮面の戦士の姿はなかった。

「ちっ、逃げたか」

「こちらもだ。　落下しながら次元転移したようだ」

悔しさを吐き捨てる怜治に、シグナムの声が重なった。

「そっか……んじゃあ」

二人の視線が一点、否、ひとりに注がれる。

「月村、いろいろ聞きたいことがあるんだが？」

「あ……はい」

月村すずかが頷いた。

「いろいろと、解せねぇな」

「同感だ。　なにより、すずか殿に魔法資質はないはずだ」

「はぁ……、そうなんですか」

『でも今はバッチリあるぜ？　あんまり高くはねぇが、その年にしちゃなかなか……』

すずかから剣を手に入れた経緯を聞いたふたりの頭に浮かぶのは疑問ばかりだった。
すずかには魔法について最低限の事を教えた。　なのは達も関わっていること、起きている事件については伏せておいた。

「そもそも、誰がその剣を置いたんだ？」

「思いつくのは先程の仮面の輩だろうか……」

「となると、三人目がいることになりそうだな。　厄介だな……」

『いや、いたとしてもすずか嬢に剣を渡す意味が分からん。　別のやつらだと考えるべきだろう』

「第四勢力か？……　たくっ、厄介なことには変わりねぇな」

怜治はすずかを家へと送るために空を飛びながら、シグナムと意見を交換し合う。
すずかは剣を腰に差し、バイク形態のスタンに跨る怜治の後ろに張

り付くようにして、乗っている。
空を飛んでいるということへの感動を、改めて感じているように見えた。

「そういえば……」

怜治は唐突に浮かんだ疑問を口に出す。

「なんですずかはいきなりあんなに戦えたんだ？　単純に運動神経が良いで済む話じゃないだろ？」

「確かに。　先程、剣を見せてもらったが、明らかにベルカ式のアームドデバイスだ。　扱いの難しさは私がよく知っている」

『じゃあシグ嬢に質問。　すずか嬢の戦いぶりを見た感想は？』

「妙な感じだった」

はっきりしない答えに、怜治が眉を寄せる。　シグナムが続ける。

「ベルカ式は、ミッド式と違って肉体的鍛錬が必要な魔法だ。　すずか殿に武術の経験は？」

シグナムの問いに、すずかは首を横に振った。

「そうですか。　すずか殿の戦い方は時折、戦い慣れした者の動きを見せた。　あれは魔法も剣術も体得している者の動きだ」

「あ！　そういえば、剣を使う時に誰かに後ろから手を握られているというか、剣に引っ張られるような感覚がありました！」

「“振りまわされる”じゃなくて“引っ張られる”？　まるで、剣が月村に戦い方を教えてるみたいな言い方だな」

『ん～、デバイスは使い手の戦闘データを記録することはできるが、それを使い手に還元するなんて聞いたことないな』

「インテリジェントデバイスならありそうじゃねぇか？　お前だって、俺に訓練メニューとか創ってたじゃねぇか」

『あれは蓄積したデータをもとに構成しているだけ。　オレが言ってるのは、その剣が前の使い手のデータをもとにすずか嬢の動きを誘導したってことだ！』

スタンの言葉の意味を考え、やがて怜治は納得したように言う。

「なるほど、変な話だな。　使う側と使われる側が入れ替わってる気がする」

怜治の言葉を肯定するようにスタンのヘッドライトが点滅する。

『そう。　すずか嬢の感じたとおりの事が起こったんなら、これは魔導工学に関して大発見だぞ』

「本来なら魔導師の力を最大限発揮させるためのデバイスが、逆にデバイスの性能を最大限発揮させるために魔導師の動きを操作する……か。　確かに、大発見だ」

シグナムの言葉に怜治も頷くが、すずかはついてこれてないようだ。怜治がかみ砕いて説明する。

「本来なら、俺たち使い手に合うようにデバイスを設計、調整する。
でも、お前が持ってきた剣は、剣に合うように使い手が訓練する必要があるってこと」

「えっと……。　機械を使うはずの人間が、逆に機械に使われる？」

『まぁ、そんな感じ』

その後、すずかを交えて意見を出し合うが、結局、納得できる結論は出なかった。
そして、目的の洋館が見えてきた。

「……よし、着いたぞ」

怜治はスタンを月村邸の前につける。
すずかが降りると同時、怜治は手を差し出す。

「月村、剣を渡せ」

少女の瞳が見開かれた。
怜治は近づく。

「それは玩具じゃねぇ。　お前だって分かってるはずだ」

「……はい」

すずかは腰に差した剣の柄に手をかける。
柄をしっかりと握り、剣を引き抜く――――ことはなかった。
怜治が眉を寄せた。

「やっぱり……嫌です」

「月村」

少女の我儘を諫めるような声が響く。
シグナムは黙ってその様子を見ている。

「今回の事って……魔法って、なのはちゃんも関わってるんですか？」

怜治の眼が見開く。　すずかはそれを肯定と受け取った。

「今年の春、なのはちゃん、とっても悩んでた時があったんです。
何か重いものを自分ひとりで抱え込んだみたいで……いま思えば、魔法が関わってたんですね」

すずかの独白は続く。　怜治もシグナムも黙って耳を傾ける。

「夏にはまた元気になったんですけど、最近また時々似たような表情をする時があるんです」

「それと、お前が剣を持ち続ける理由と何の関係が？」

「わたし、手伝いたんです！」

少女のはっきりとした声が響いた。
怜治は黙ってすずかを見つめる。
少女の目には、確かな決意が宿っていた。
それは、大切な友人が悩んでいるのなら、困っているのなら、それ

を助けたい。
昔、自分が困っていた時に助けてくれた人がいたように、自分も助けたいという思いだった。

「わたしにできることがあるなら、みんなの、友達の力になりたいんです！」

「すずか殿……」

すずかの言葉に、シグナムの心が揺らぐ。
少女の願いは純粋だった。　だが、少女の願いを聞き入れれば、自分は彼女の敵となる。
仕える主の友人に剣を向ける。　できるだろうかとシグナムは自問する。

「……ダメだ」

自答する前に、怜治の決断が下された。
二人の視線が青年に集中する。
すずかの瞳が悲しみで揺れる。
怜治は膝を曲げ、少女と視線を合わせる。

「月村、高町がお前に魔法の事を隠してたのは何のためだと思う？」

すずかは答えない。　怜治は続ける。

「魔法を知ったら、お前がそう言うと思ったからじゃないか？　お前があいつを心配するように、あいつもお前が巻き込まれるのはよしとしない」

怜治の言葉に、すずかは顔を俯かせていく。
少女の肩に手が置かれる。

「秘密にしてることを納得しろとは言わねぇ。　ただ、あいつが頑張ってるのはお前らを守るためだ。　それだけは分かってやれ」

すずかは顎を引いて頷いた。
よし、と言って怜治は立ち上がる。　少女の視線が上がった。

「じゃあ……せめてお守りってことで」

怜治はずっこけそうになった。

「……お前分かってねぇだろ」

「だ、大丈夫です！　もう、使いません。　約束します！」

「約束ってお前……」

困惑する怜治の肩をシグナムが叩いた。
視線が交わる。

「信用してやれ」

短い言葉だった。
信用。　その言葉が怜治の胸に突き刺さる。
怜治は初見の相手を決して信用しない。　だからといって二回や三回で信用するというわけではない。
怜治を見上げる少女と目が合う。

『レイジ』

スタンが説得するように名を呼ぶ。
三対一か、と怜治は小さく呟いた。

「分かった、分かったよ！　約束だ。　もう戦おうとするんじゃねぇぞ！」

「はい！」

すずかの顔が明るくなる。
剣が発光。　待機モードと思われるカードに変わる。
同時にすずかのバリアジャケットも解除され、服装も元に戻る。

「あの、お二人ともけがには気をつけて下さいね！」

明るい声をあげ、手を振りながらすずかは洋館へと入っていく。
少女の姿が完全に見えなくなったところで、

「お前、闇の書はどうした？」

「すまんな。　ヴィータが持って行ってしまった。　止めたのだが、あいつも主が大切なのだ。　分かってやってくれ」

「しゃーねー。　明日また、あの場所でだ」

「分かった。　……さて」

「ああ」

怜治はスタンを大剣形態（ブレイドフォーム）に変形、シグナムはレヴァンティンを抜剣。
互いの首筋に刃を向ける。同時にシグナムが遮音迷彩結界を張る。
これで会話やふたりでいる光景が誰かに見られることはない。
少し指を動かすだけで相手の首を斬り裂くことができる距離を保ちつつ、怜治が口を開く。

「お前ら、月村から魔力を蒐集するつもりは？」

「断じてない。彼女に何かあれば、主が悲しまれるからな。管理局こそ、彼女を魔導師として引き入れるつもりか？」

「素質があるからって、ガキを無闇に戦わせるほどこっちの上司は腐っちゃねぇって。つーか、俺がさせねぇ」

二人の視線が交差。互いの言葉の真偽を探る。
緊迫した空気が流れる。
突如、怜治の懐から無機質な着信音が流れ出した。
シグナムは首を動かして出るよう指示。怜治は手を懐に入れて通信用端末を取り出す。
ボリュームを上げてシグナムにも聞こえるようにし、ボタンを押して出る。

『もしもーし！　聞こえるー？』

端末から軽い調子の声が聞こえてきた。
若く高い少年の声だった。

「ああ、聞こえてる。頼んだもんは撮れたか？」

『もっちろん、バッチリだよ』

「よし、送ってくれ」

『はいはーい。　でも……その前に聞きたいことがあるんだけど』

「なんだ？」

怜治が聞き返す。　シグナムは会話を黙って聞いている。

『きみは何のために管理局に入ったの？』

「……」

『いやね、直接会ったわけじゃないけど、きみに組織はむかない気がする』

通信の向こうで話す少年が付け加える。

『特に、管理局なんてしがらみだらけの組織なんてね』

少年の言葉を、怜治は軽く笑い飛ばした。

そして、

「こちとら、誰かとのしがらみだ軋轢だを気にするほど繊細じゃないんだよ。　余計な心配すんなよ」

『……そう。　だったらいいよ。　それじゃあね♪』

「ああ、あいつにもちゃんと言っとけよ？　まだ借りは返してもら

ってねえって」

了解―、という返事とともに通話が終了。　同時に画像が添付されたメールが届く。

「なんだそのメールは」

「安心しな。　お前らの立場を悪くするようなもんじゃねぇよ」

そう言って怜治は大剣を下げる。　シグナムも続いて下げた。　…若干、渋々だったが。

「再確認だ。　明日、またあの場所でだ。　いいな？」

「ああ、了解した」

返答とともにシグナムは飛翔。　結界を解除しながら夜の空に消えていった。

怜治はメールに添付された画像を開く。

画面いっぱいに展開された画像を見て、怜治の眉間にしわが刻まれた。

「犯人確定……か」

怜治の落胆や怒りそして悲しみの混じった呟きが、寒い夜空に溶けていった。

第２４話　月村すずか（後書き）

いじめっこと、それを止めた子が誰なのか。

それは皆さまの判断に任せます。

第２５話　急襲そして（前書き）

「宝具ったー」とやらで自分の宝具を診断してもらいました。

結果、

地球破壊爆弾……だと？

第25話　急襲そして

「なんか、変な空だな……」

「そうだね……」

空を見上げながら、窪田鉄平は呟いた。　隣に立つ本田正義が頷く。
二人が見ている夜空には澱んだ虹色の膜が張り付いていた。
吐き気すら感じそうな不快な空模様に、鉄平の顔が歪む。

「ぜろが夜中うろつくなって言ったのはこういう理由か？」

「違う気がする。　嫌な空だけど、ただそれだけだ」

二人は歩き始める。
視線は常に空に向き、何かを探すように首を回す。

「今さらだけど、ぜろの忠告、無視してよかったの？」

「ホント今更だな。　いつまでも秘密にしてるあいつが悪い」

二人が外にいるのは、怜治の関わっているナニカを探すためだ。
怜治本人は困った時は助けを頼むと言っていたが、それが口だけのものだということを2人は知っていた。　だてに悪友は名乗っていない。

「なるほど、確かに……ん？」

正義の足が止まる。

「どうした？」

「あれ……」

正義の指が空を指す。　鉄平は友人の指をなぞるようにその先を見る。

夜空に、一筋の赤い光が走っていた。　光が尾を引き、流星のように夜空を斬り裂いていく。

「流れ星――――か？」

「なんか、こっちに向かって来てない？」

「……マジ？」

ヴィータは夜空を飛んでいた。　速度はかなり速く、風を切る音が鼓膜を叩く。

右手にグラーフアイゼン、左手に闇の書を持ち、その眼は焦りと殺気に満ちていた。

彼女がこれほどまでに焦っているのは、はやてが倒れたからである。大事には至らなかったが、病院での診察結果は原因不明。　だが、ヴィータは理由を知っていた。

闇の書の呪いだ。　八神はやてと密接なつながりを持つ闇の書の抑圧された強大な魔力に、はやての未成熟なリンカーコアは蝕まれ、健全な肉体機能どころか、生命活動まで阻害していた。　そして、

それは守護騎士たちの召喚を行う第一の覚醒を迎えたことで加速した。

つまり、ヴィータたち守護騎士の活動を維持するために必要なわずかな魔力がすら、はやての命を脅かすものだったのだ。

このまま放っておけば遠からずはやては命を落とす。　そんなこと、ヴィータは嫌だった。

そして、自分が存在していることにもその原因の一端がある。

守護騎士たちの決心は早かった。　自分たちのせいではやてが死ぬというのなら、自分たちの手ではやてを助けようと。

そのための方法はひとつ。　闇の書を完成させ、はやてを闇の書の主として完全に覚醒すれば、病は消える。

それを信じて、ヴィータは今まで魔力を掻き集めてきたのだ。

もうすでに、闇の書の頁の残りは四分の一をきっていた。

もうすぐはやてが助かると思ったところでのはやての昏倒。

守護騎士たちの焦燥は加速した。

怜治が、闇の書をはやてから切り離すと言っていたが、ヴィータの頭にはもう残ってなかった。

一分一秒でも早くはやてを助けたい。　その思いだけが先走り、シグナムの注意も無視して闇の書をひったくる様に持ち出し、今さっきまで異世界で蒐集を行っていた。

カートリッジが尽きたので戻ってきたが、管理局の魔導師と出くわさいよう、探査魔法で周囲を警戒し続けていた。

獲物を探す肉食獣のような瞳は、周囲に張られた結界を気に止めないだろうと勝手に判断し、彼女なら助太刀無用だろうと考えてヴィータは家へと向かって飛んでいた。

「――――っ！」

探査魔法が魔力反応を捉えた。　かなり小さいが、数はふたつ。

今残っている自分の魔力を確認。　奇襲を仕掛け、一撃でやればできると判断。
ヴィータは方向を変え、反応のあった方角へと向かう。
数分飛び続けると、地上を歩く男ふたりが見えた。　反応はあのふたりからだった。
小さな騎士は鉄槌を握りしめ、目標に向かって一気に加速する。
徐々に蒐集対象の顔が見えてきた。
ふたつの顔に浮かぶのは驚愕と困惑と恐怖。　それを意識ごと粉砕するかのように、騎士は鉄槌を振るった。

魔法少女リリカルなのはＡ’ｓ　☆Ｔｈｅ　Ｒｉｄｅｒ☆　第１０話　急襲そして

怜治は病院の中を歩いていた。　その顔には後悔と憤怒があった。
荒々しい足音が彼の感情を表していた。
入口に張ってあった地図の記憶を頼りに歩き、外科病棟三階の３１７号室と書かれたプレートのある部屋の前で怜治は停止した。
深呼吸して昂った感情を沈める。
扉をノック。「どうぞ」と声が聞こえ、怜治は扉を開けて病室へと入る。

「よ。　生きてるか？　死んでたら返事しな」

「へんじはない。　ただのしかばねのようだ」

「そうか残念だ。　せっかくお前が好きな“遠乃池優花”のグラビ

ア写真集持って来てやったのに」

「よく来たな心の友よ！　おれ様はお前を歓迎しよう！！」

「嘘だよ馬鹿」

ベッドから飛び起き、大声を上げた悪友に冷やかな視線を浴びせながら怜治は向かいで横になっていた正義の隣のキャビネットにお見舞いの果物を渡す。

「ありがと、ぜろ」

「礼なら委員長に言いな。　お前らが怪我して病院に運ばれたってのを連絡網で回したのはあいつだ。　ついでに、その果物はクラスの連中からだ」

怜治は改めてふたりの姿を見る。
顔に擦り傷があり、ふたりとも片腕をギプスで固め、首に回された白い布で吊るされていた。
毛布で下半身が見えないがめくれば痛々しい傷が目に飛び込んでくるだろう。
怜治の顔が徐々に険しくなっていく。　沈めたはずの激昂が再燃する。

「ぜろ。　顔、怖いよ」

「ん、ああ」

顔をもんで無理やり表情を元に戻す。　再び目を向け、疑問を口にする。

「……誰にやられた」

ふたりがバツの悪い顔をした。

渋々と言った感じで鉄平が口を開いた。

「恥ずかしい話だがな、ちっこいガキにやられた。しかも女」

怜治の眉が跳ね、思い当たる少女の顔が浮かんだ。

「赤いゴスロリ服着ててな。驚くなよ？　空からハンマー持って襲いかかって来やがった」

「一撃でやられたよ。一瞬で意識を失って、気付いたら病院のベッド。ホント、武道家の末っ子として情けないよ」

「そうか……」

怜治の頭を駆け巡るのは後悔と怒り。

自分自身の甘さに嫌気がさしてくる。

（俺が、魔法のことなんざ秘密にしなきゃ……）

もっと早く、ふたりに自分の関わっていることを話すべきだった。

このふたりが夜中に出ていた理由は聞かなくとも分かる。

自分のことを按じてか、もしくは好奇心か、どちらにしろ自分の隠し事が招いた結果だ。

素直に話していれば管理局に警護を頼めたかもしれない。

怜治を胸が締め付けられるような痛みが襲う。

顔が苦痛で歪む前に立ちあがり、病室を後にしようと決めた。

「俺いくわ。　さっさと治してさっさと復帰しろよ」

「分かってるよ」

「お見舞いサンキュな」

悪友の言葉を背中で受けながら、怜治は病室の扉に手をかける。

「ぜろ、仇討なんて馬鹿なマネはすんなよ？」

怜治の動きが一瞬止まった。　自分の考えを読まれていた。　このふたりに隠し事は無意味だなと改めて感じた。

「当たり前だ。　仇討するかしねぇかはお前らが決めることだ。俺の勝手な判断なんかでするかよ」

自分を納得させる言葉を吐きながら、怜治は続ける。

「でも――――仇討する時は手ぇ貸すぞ。　大切なダチ傷つけられて、大人しくしてられるほど俺は温厚じゃねぇんだ」

苦笑する声が聞こえた。

「分かった。　そんときゃ知らせてやんよ」

「ああ」

今度こそ、怜治は病室から出る。　入れ違いでふたりの家族が入っていく。

軽く頭を下げる。　扉が閉まり、顔を上がるとそこに見知った顔を少年が立っていた。
クロノ・ハラオウンだった。

「怜治。　話があるんだが来てもらえるか？」

言葉とは裏腹に、拒否は許さないとクロノの眼が語っていた。

「……ああ、いいぜ」

「君がいない間に分かったことを教えておこう」

アースラの食堂に場所を移し、クロノが話し始めた。
周りには怜治と、なのは、フェイト、アルフにエイミィを始めとするアースラスタッフが座って報告に耳を傾ける。

「ユーノが調べたところ、闇の書とは本来の名前ではない」

紡がれた言葉に、スタッフ達に動揺の波紋が広がる。

「正式名称は“夜天の魔導書”。　本来の目的は各地の偉大な魔導師のデータを蒐集して研究するため、主とともに旅をするものらしい」

報告書に目を通しながらクロノは続ける。

「破壊の力を振るうようになったのは、歴代の持ち主の誰かがプログラムを改変したからだと推測される」

「ロストロギアを使って無闇やたらに力を得ようする考えは、今も昔も変わりませんね」

アレックスの皮肉にみな内心同意する。

「全くだな。　その改変のせいで、旅をする機能と破損したデータを自動修復する機能が暴走しているらしい。　転生と無限再生はこれが原因だ」

「プログラム書き換えたくらいでそんな大それたことが可能になんのか？」

「古代魔法なら、それくらい可能とのことだ。　続けるよ、一番ひどいのは持ち主に対する性質の変化だ。　一定期間蒐集がないと持ち主自身の魔力や資質を侵食し始め、完成したら持ち主の魔力を際限なく使わせる。　……無差別破壊のためにな」

その光景を想像したのだろう、何人かが息をのむ声が聞こえた。

「そのため、これまでの主はみんな完成してすぐに……」

みなの顔に影が差す。　その先の言葉は容易に想像できた。

持っているだけで主を死に至らしめ、一縷の望みをもって完成させても破壊をもたらして主を殺す呪われた魔導書。

罪を犯す気などなくとも、己の命を救うために道を踏み外してしまう主。

かつての主の気まぐれで本来の役目から外れ、悲劇しか生み出せなくなってしまった魔導書。
確定した悪がいない。　解決後の後味の悪さが目に見えた。
フェイトが立ち上がって口を開く。

「なんとか止める方法とか、ジュエルシードみたいに封印はできないの？」

「それは今ユーノが全力で調べてくれてる。　だが――――」

クロノが目を伏せた。

「完成前の停止は難しいとのことだ」

「…どうして？」

「闇の書が真の主と認識した人間でないとシステムへの管理者権限が使用できない。　つまり、プログラムの停止や改変ができないんだ」

「そんなの！　管理局の技術力ならなんとかなるんじゃないのかい！？」

「アルフ、無茶を言わないでくれ。　無理に外部から操作をしようとすれば、主を吸収して転生してしまうシステムまで入ってる」

「そんな――――。　それじゃあ……」

なのはの絶望の混じった言葉をクロノが引き継ぐ。

「闇の書の永久封印は不可能だ」

フェイトの身体が糸の切れた人形のように力なく崩れ落ち、座っていた椅子に納まる。
意気消沈したような重い空気が流れる中で、クロノは報告書を閉じる音だけが響いた。

「さて、怜治」

クロノの呼びかけで、みなの視線が青年に集中する。

「僕たちに何か、報告するべきことはないか？」

クロノの鋭い眼光が怜治を射抜いた。

「ないね。　俺はこの前の爆撃受けて以来あいつらと戦ったわけでもないし、無限書庫でなんか調べたわけでもないしな」

「でも、騎士たちとは会っているだろ？」

クロノが端末を操作し、モニターが展開された。
モニターに映る画像を見て、どよめきが広がる。
そこには、怜治とシグナム、ザフィーラとの密会の画像だった。
紛れもなく、昨日のものだ。

「盗み撮りとは……。　いい趣味してるな」

「僕もこんなものが撮れるとは思わなかった。　本当は、君が守護騎士に襲われたらすぐに応援をおくれるようにするためだったんだが……」

「確かに、この中で蒐集されてない高い魔力持ちは俺くらいだしな」

「違う。　君が闇の書の主を知ったからだ」

周囲のどよめきが一気に大きくなった。

怜治を見る目に疑念が混じる。

「だったら……どうした？」

「どうした……だと？」

クロノの眉が跳ね上がる。　まだ幼さの残る少年の顔が憤怒に染まっていく。

「判っているのか！！　このまま放っておけば闇の書は破壊をばら撒く！　この世界にだ！！」

クロノの激昂の叫びにも、怜治はしてっとした態度で受け流す。

その態度が、ますますクロノの怒りを増長させる。

「僕らはまだ闇の書の主の正体も、居所も把握できていない！　君が主が誰なのか言えば、この事件は解決するんだ！　君が聞いた預言も回避できる。　それが分からない君じゃないだろう！！」

怜治は黙って聞き続け、黒い双眸は感情を出さずにただ少年を見ているだけだった。

「……そうか。　君はまだ――――」

怜治の態度に、クロノの瞳に悲しげな色が浮かぶ。

「僕らを信用できないということか……」

アースラスタッフがどよめく中で、クロノの沈痛な声がはっきりと響いた。

怜治が一歩、クロノに近づく。

「ちょっと来い」

「え……ちょ、まっ、待て！」

クロノの言葉を無視して、怜治はクロノの頭を掴んで食堂の出口へ向かう。

あまりに唐突な行動にみな言葉を失い、あんぐりと口が開く。

静まりかえる食堂を振り返りもせずに怜治は少年を引きずったまま食堂を後にした。

誰もいない会議室に入ったところで、怜治はやっとクロノを開放した。

クロノが体が自由になったと同時に怒りに染まった眼光を叩きつける。

「何をする！！　話があるなら食堂で言えばいいだろ！！」

「言えるわけねぇだろ。　言ったところで解決しねぇんだから」

「……？」

一瞬なんのことを言ってるのか分からなかったが、先程の自分への返答だと気付く。

「お前がさっき自分で言っただろうが。　停止も封印もできねぇって。　なのに、主教えたところでなんも変わんねぇだろ」

「だが、闇の書の完成を防ぐことはできる。　守護騎士の抵抗があるかもしれないが、レティ提督が送ってくれた中隊まで使えば十分可能だ！」

「仮面のやつらは？」

クロノは言葉を詰まらせた。

それを見て怜治はやれやれと言った様子でため息を漏らす。

「相手は二人だ」

クロノの瞳が大きくなった。　怜治は続ける。

「仮面の男は二人組、近接格闘系と遠距離魔法系に分かれてる。高町の魔力砲を防ぎ切り、フェイトやシグナムにも気付かれずに背後に回れる、実力は一級品。　そして――――」

「おい……怜治、まさか……」

「管理局のシステムに侵入できる、つまりは内部の人間。　この条件を満たしそうなのは――――」

「怜治っ！！」

クロノの悲痛な叫びが怜治の言葉を遮った。　肩がわずかに震え、瞳が動揺に揺らいでいた。

「やっぱし、お前だって気付いてんじゃねぇか」

怜治が吐き捨てるように言った。
端末を操作し、送られた画像を展開させてクロノに見せつける。
執務官の瞳が見開かれた。
認めたくない事実を突き付けられた少年を見下ろし、

「クロノお前、俺は誰も信じてないといったな。　でも――――」

言い放つ。

「お前は自分を信じれてねぇんだな」

「……信じたくないさ。　僕にとって、あの人は恩人なんだから……」

震えた声で話すクロノの肩に、怜治の手が置かれた。
クロノが怜治の顔を見上げる。　視線は交わらない。

「恩人だったら、なおさら見逃せるわけねぇだろうが」

怜治の言葉に、クロノ数瞬の思考の後、頷いた。
瞳に宿る決意を見た怜治は軽く笑い、すぐに2人は真剣な顔つきへと変わる。

「問題は証拠だな。　この画像だけでは、あの人には届かない」

「大丈夫だ」

「ん？」

「策は我にありってな」

その日の夜。　怜治と、四人の守護騎士が対峙していた。　場所は昨日とは違い、八神家のすぐ上空だ。

警戒しているように見えるのは、この場に怜治がいるためだろう。

約束の場所と違うどころか自分たちの拠点の真上に来られては誰もいい気がしない。

「何故ここにいる？　闇の書の受け渡し場所はここではなかったはずだが」

案の定、シグナムが疑問を投げかけてきた。

怜治は隠さずに答える。

「いやね、俺のダチがそこのガキにやられたんでね……」

指でヴィータを指す。　視線が赤毛の少女に集中した。

「だから何だってんだ。　仇討ちにでも来たのかよ」

「まさか。　んなもんに興味はねぇし、やるとしたらそれはあいつらが決めることだ」

病院のベッドで眠る悪友とかわした言葉を繰り返しながら怜治は続ける。

「でも、俺に闇の書を渡すとシグナムが決めた日のうちにそんなことされるとな……わかるだろ？」

「我らが信用できないと？」

「どっちかと言うと、まだそっちの意見がまとまってないんじゃないかと思ってね。　さっさと結論を聞きたくてここに来た」

怜治の言葉に騎士たちは沈黙する。　推測が当たっていたかと怜治は判断した。

互い口を開かず、静謐にしてピリピリとした空気が流れる。

「もうすぐなんだ……」

ヴィータの言葉が沈黙を破った。　怜治の視線が少女に向いた。

「もうすぐ、闇の書の頁は全部埋まる！　お前なんかに頼んなくたってはやては助かるんだ！」

「闇の書が完成したら八神にかかった呪いが解けるって確証はあんのか」

「少なくとも、今より悪化することはない。　主は生きていられる」

守護騎士たちの瞳に揺るがない決心を怜治は見た。
闇の書の完成が近付き、騎士たちは他人の手に頼らず自分たちだけで主を救う、という結論を出したのだ。
怜治は苛立ちを隠しつつ、説得を試みる。

「闇の書が完成したら持ち主の魔力を際限なく使って破壊行動を行う。　それが今の闇の書だ」

騎士たちに衝撃が走る。　怜治は続ける。

「これは歴史書に書かれてることだ。　……魔力を際限なく使う…。お前らならその末路が分かるだろ。　闇の書は完成させようがさせまいが八神を殺す！　俺の力で抑え込むのがベストなんだよ！」

「それは……それは今までの主に素質がなかったからだ！　はやてなら、闇の書の真の主になって完全に使いこなせる！！」

「確証があんのか？　お前の言う、今までの主と八神に決定的な違いがあるってのかよ」

怜治の問いにヴィータが言葉を詰まらせる。
確かな答えを出せず、ヴィータは歯噛みする。　怜治はさらに追及する。

「闇の書が暴走したらどうなるか、それはお前らが一番分かってることだろ！　その後の主の末路も！」

「うるせぇ、うるせぇ！！　何が暴走だよ！　何が主の末路だよ！　んなもん、あたしらはしらねぇ！」

ヴィータの悲痛な叫びに怜治の眉が跳ね上がった。
怜治は一歩、少女に近づいて問いかける。

「知らない？　んな訳ねぇだろ。少なくとも、過去に2，3回は暴走してるはずだ」

「しらねぇっつってんだろ！！　闇の書の暴走なんて、んなもん……」

少女の言葉が途切れ、代わりに頭を抱え込む。

「あれ……なんでだ？　昔の主も、蒐集の日々も覚えている。　なのに、なんで転生するところだけなんも覚えてねぇんだ？　なんで……」

「おい、ヴィータ！」

混乱する少女に触れようとした瞬間、白刃と手甲の拳に阻まれた。

「シグナム、ザフィーラ……」

「悪いが、交渉は決裂だ。　貴様の主を助けたいという思いだけ受け取っておく」

「それと、魔力もだ！」

長剣が一閃。　とっさに半歩下がった怜治の鼻先を切っ先が通過する。　剣圧で鼻が潰れそうになる。
そのまま後方に跳んで距離を取るが、剣の騎士と守護獣が追撃をか

ける。

「くそ、この分からず屋どもが！！　スタン！」

『オッケー、準備は万端だぜ！』

「よし！　行くぞ！」

怜治の足元に魔法陣が展開。　ミッドでもベルカでもない術式が光を発して回転する。

怜治の背中が曲がり、手が魔法陣に当てられる。

その光景を見て、ザフィーラは一瞬警戒し、即座に違和感に気付いた。

今、怜治はどこにもスタンを装備していない。　腕にも、背中にも黒い鉄塊は見当たらない。

怜治の口元に笑みが浮かぶ。

魔法陣の光が強まる。

そして、

『ヒャッハアアアアアアアアアアアアアッ！！！！！！！！！！』

耳をつんざくような雄叫びをあげてスタンピードが魔法陣から飛び出した。

龍のような頭部がくわえているものを見てシグナムが驚愕する。

闇の書がそこにあった。

怜治との交渉を断るつもりだったため、家の中に隠しておいたはずのものがそこにあった、

「貴様！　どうやって闇の書を！」

「スタンは予め魔力を入れておけば自律行動が可能でね」

『レイジがあんたらの気を引いてる間に中に入って拝借させてもらったぜ？』

「だが、隠してある闇の書の場所をどうやって……！」

『オレを敷地内に入れたのが失敗だな。　家の構造はきっちり把握してある』

「仮にもロストロギア同士。　闇の書の反応も分かるんだとさ」

闇の書をスタンから受け取り、怜治は笑みを浮かべる。
スタンに跨って逃走を開始。
騎士たちが憤怒の形相で追いかけてくる。
四対一、まともに戦えば怜治に勝ち目はない。　だが、逃走に専念すれば不可能ではない。
後ろから飛んでくる鉄球や斬撃、バインドを蛇行して回避しながら怜治は転移魔法を発動。
紺色に輝く魔法陣が門のように前方に現れる。　怜治は陣に向かって加速。

「させるかっ！！」

シグナムの声とともに一迅の烈風が魔法陣を貫き破壊。　陣が光の粒子となって空に消えた。　何が起こったのか確認する暇も与えずヴィータの鉄球が飛来。
怜治を取り囲むように飛び回る鉄球を召喚した銃剣で撃ち落とす。
巻き起こった爆煙をシャマルの指輪から生まれた風が薙ぎ払う。

怜治は片手に雷球を出し自身に装填。　全身に蒼電を帯びて速度を一気に上げる。
稲光の尾を引きながら怜治は空を疾走。　後方の騎士たちの姿がぐんぐん小さくなり、やがて見えなくなった。
転移魔法を展開し、さらに離れた場所へと転移して、怜治は雷装を解除した。

『よし、完全に振り切ったな！』

「後は、こいつの主を八神から俺に移すだけだな」

闇の書を掲げる。
半分に欠けた月と目があった。

図書館から借りてきた本を抱えて、月村すずかはベッドにもぐりこんだ。
ついてきた猫を撫でながら本を開き、挟んでおいた花柄のしおりを外して読み進める。
すずかが読むのは“月光騎士物語”というファンタジー小説だ。
祖国を守るために戦場で戦い続ける騎士の物語、という在りがちな内容だがすずかは気に入っていた。
騎士という単語に、すずかの脳内で昨夜の怜治の姿が再生された。
片手剣と盾の装備はいま読んでいる小説の主人公の装備と合致する。

「でも、騎士っていう感じじゃないかな……」

小説に出てくる騎士は馬に乗り、重装な甲冑を身に着けていた。
昨日見た怜治の姿との合致は見られない。
なにより、彼の性格は騎士という位には似合わない気がした。

「あ、でも魔法使いだったら鎧なんていらないのかな……？」

少女の疑問に答えるものはなく、猫が短く鳴いただけだった。
ふと、枕元に置いてあったカードに目がいった。　怜治に無理を言ってもつことにした、あの剣の待機形態だ。
手にとって眺める。　大きさはトランプほど、クレジットカードのように固く、さらに補強するかのようにフレームが縁にそってついていた。
裏返しにしてみると小さく文字が刻まれているのに気付いた。
日本語ではない。　見たことない文字だが、英語のアルファベットに似ていた。

「フラン……ベルク？　あの剣の名前かな……」

すずかの疑問に答えるように、窓を叩く音が聞こえた。
何だろう、と思ってすずかは窓にかかったカーテンを引く。　誰もいない。　冷たい風が頬を撫でる。

「気のせい……かな」

「違う」

頭の上から声が聞こえた。　反射的に上を向く。

「――――っ！！」

悲鳴をあげそうになった口が塞がれる。　白い布の感触が伝わる。
白と青の服、群青色の髪に表情を覆い隠す白い仮面。
これが誰か知っている。　いや、この格好をしている人間をすずかは知っている。
昨日、怜治と戦った仮面の戦士がそこにいた。
仮面の男はすずかを押して部屋の中に侵入する。
すずかは口を塞ぐ手をはずそうともがくがピクリとも動かない。
少女の顔が恐怖で蒼白に変わっていく。

「落ち着け。　大声を上げないなら、手を離してやる」

すずかは唸るような声をあげて異論を示す。

「ならばこのままだ。　こちらは伝えたいことがあるだけだ」

「……」

警戒しつつ、ゆっくりと顎を引いて頷く。　手が外された。

「何の用ですか？」

開口一番、すずかは男を静かな炎が灯る瞳で睨みつけながら言った。

「手短に言おう。　君の友人の命が危ない」

すずかの瞳が大きくなり、すぐまた細くなった。　双眸に浮かぶのは不信。
仮面の男が続ける。

「ある男によって、その子の命が奪われようとしている」

「信じると思ってるんですか？　きのう、あなたがわたしに何をしたか、忘れたんですか？」

声がわずかに震えていた。　昨日うけた痛みがぶり返してくる錯覚に襲われる。

震える手を握りしめ、すずかは視線を男からはずさず真っ向から見続ける。

「信じるかどうかは君の自由だ。　私はただ君に伝えるだけ……」

男の視線が一瞬ずれる。　向かった先は枕元に置かれた赤いカード。

「あれは、あの赤い剣かな？」

すずかは答えない。　だが、一瞬顔に現れた動揺を男は見逃さなかった。

「あの剣と君の力なら、お友達を助けられるかもしれないな……」

「回りくどいですね。　何が言いたいんですか？」

「……」

男の沈黙にすずかに怒りの炎が燃え上がる。

「百歩譲ったとして、あなたの言うことが本当なら警察に電話します。　わたしは何もしませんし、あなたの話を聞く必要もないです」

「警察か……。　どう話すのかな？　誰が、どこで、どのような危機に遭うのかを君は知らない。　話すには私の話を聞くしかない。　違うかな？」

「それは……」

すずかの言葉が詰まる。

男の仮面の奥から薄い笑いが聞こえた。

「さて、話を聞くしかなくなったところで詳しい話をしようか……」

仮面が変形し、道化師のような気味悪い笑みが浮かぶ気がした。

碧いふたつの眼が妖しく光る。

「君の友人、八神はやての命の危機について――――」

「……ああ、そうだ。　そろそろ始まるだろうから、いつでも出れるようにしといてくれ」

言葉とともに、怜治の口から白い息が吐き出された。

怜治がいるのは海鳴の空の遥か上空。　眼下に雲海が広がる雲の上だった。

通信を切り、端末を懐へとしまう。

轟音が大気を震わし、鉄の塊が怜治の背後を通過する。

固い翼と円筒形のエンジンをかわすと、目に入ったのはアルファベット三文字。　日本の航空会社のロゴマークだった。
窓から外を見ていた子どもと目が合いそうになり、急いで移動して視界から消える。
飛行機が通り過ぎたのを確認し、怜治は闇の書を開く。
怜治の眼が細くなる。
闇の書の頁は全て白紙だった。　なにも書かれていない、まっさらな頁が続く。

「……なんだこりゃ」

『魔法で偽装されてるっぽいな』

「解けるか？」

『ちょい待ち』

スタンのヘッドライトが闇の書を照らす。
闇の書に魔法陣が浮かび、破壊されたかのように消えると頁に文字がビッシリと浮かびあがった。
怜治の手が文字をなぞる。　ただの文字列のはずなのに、強烈な圧迫感を感じた。
数十、もしくは数百の人や生き物から奪った魔力がこの一冊に入っているのだ。　そう思えば、持ち主に何らかの影響を与えることも納得がいく。
怜治は目を閉じて集中、闇の書の支配を試みる。
半年前、虚数空間から抜け出すためにジュエルシードの力を引きだした時の感覚を思い出す。
語りかけるように、命ずるように、自分の思いと魔力を込める。
闇の中へと意識を潜り込ませていると、急に感じた魔力反応で引き

戻された。
怜治は小さく舌打ちした。　この魔力反応を、彼は知っている。
つい、昨日会ったばかりだからだ。
徐々に近づいてくる。　下のほうからだ。
背後の雲海から波濤が上がる。　上がった雲は重力に引かれて瀑布となって再び雲へと還る。
雲の影から1人の少女が現れる。
紫の長い髪に白いヘアバンドが映える。　裾が燕の尾の形をした星屑模様のマント、深い群青色の上着に、膝まで隠すフリルがついた夜色のスカートのバリアジャケット。
少女の手には夕日色の片手剣――――フランベルクが握られていた。
怜治と少女の視線が交錯する。

「こんなに早く約束破られるとはな……」

少女は答えない。　ゆっくりと、視線が闇の書へと移るだけだった。

「さすがに、ちょっとショックだな。　なぁ――――月村？」

少女の双眸が再び怜治を見つめる。
月光が、月村すずかの冷たい表情を照らした。
少女は、ゆっくりと歩むように怜治に近づく。　同時に剣を握っていない方の手が差しだされた。

「闇の書を、渡してください」

抑揚のない、機械のように無感情な声が響いた。
少女の発言に、怜治は言葉を失う。
昨夜に自分がすずかに話した内容を思い出す。　やはり、怜治は彼女に闇の書の事など話していない。

シグナムたち守護騎士が話したのだろうか？　それはないと直ちに否定。
話してなんの得があるとは思えない。　偽の情報で騙したとしても、すずかとはやてが友人である以上さいあく、蒐集がはやてにバレる。
　そんな危険を冒すとは思えない。

「闇の書を渡してください」

考えているところへ、再び少女の催促が飛ぶ。
怜治は思い切って聞いてみることにした。

「月村、どうしてお前が闇の書の事なんか知ってる？　まさか、シグナム達から聞いたのか？」

すずかは首を横に振った。

「その本が無いと、友達が死んじゃうんです」

「俺の質問に答えろよ。　そんな話だれから聞いた？」

すずかは答えない。　顔を俯かせ、肩が震える、まるで涙を堪えているように見えた。

「はやてちゃんが……死んじゃうんです」

震えた声が響く。　怜治はすずかを黙って見つめる。

「だから、その本を……」

「渡せねぇ。　お前がどんな話し聞いたかしらねぇが、これを返し

たってはやてが死ぬことに変わりはねぇんだ。　だから、渡せねぇ」

少女の肩の震えが止まった。　かわりに、剣を握る手に力が込められた。

「そう……ですか。　だったら――――」

すずかの重心が前に移動、膝が曲がり、一気に伸びた。

「死んでください」

夕日色の刃が怜治に振り下ろされた。

怜治は咄嗟にエリシオンを起動。　魔力刃を展開し、刃を受け止める。

間近ですずかと目が合う。　そして、怜治の胸に憤怒が沸騰を起こして湧き上がった。

少女の瞳は焦点が合っておらず、虚ろな眼が怜治を映していた。

魔法の知識がない怜治でも、すずかが何かしらの術を掛けられていることは明白だった。

誰がやったのか、容易に想像できた。

すずかに魔法資質があることを知っており、闇の書が怜治の下にあることをよしとせず、幼い少女を戦いに向かわせるようなことができる人物。

1人、いや一組しか思いつかない。

「あんの仮面どもぉ！！！」

怒りの雄叫びをあげて怜治はスタンを大剣形態（ブレイドフォーム）に変形し、すずかの刃を撃ち返す。

エリシオンの杖先から魔力弾が疾走。　すずかは紫の氷壁を生みだ

し防ぐ。
氷壁がすずかの視界を塞いだ隙に怜治は一気に距離を取る。
すずかを傷つけるわけにはいかないし、そもそも闇の書の主になり替わるだけの時間さえあればいいのだ。　無闇に戦う必要はない。
怒りに沸騰する頭を理性で抑えつけ、怜治は決断を下す。
ここは逃げに徹しよう、と。
氷が砕け、鋭利な氷塊とともにすずかは怜治を追う。
怜治は襲いかかる紫氷をエリシオンで撃ち落とす。　少女の周囲に爆煙が立ちあがる。
すずかはフランベルクを振るって氷を生み、戦輪にして投擲。　氷の回転刃が呻りをあげて怜治へと迫る。　怜治は大剣を振るって氷刃を叩き落とす。

『氷剣投影（コピール・シュヴェルト）』

フランヴェルグから声が上がり、すずかの手に二本目の剣が納まる。
すずかが速度をあげて突進。　黒い大剣と夕日色の片手剣が火花を散らして激突。
少女とは思えない力で大剣が押される。

「ったく、どんな魔法使ったんだよあいつら！」

『催眠魔法による精神支配、運動機能の強化……ったく、道徳ってのを学び直してもらいたいね』

人体の筋肉を構成する筋繊維は、普段は全力の５，６割しか活動していない。　全力を出すことで筋繊維が切れ、筋肉組織が破壊されるのを防ぐため脳が抑制しているという。　だが、火事場の馬鹿力という言葉がある様に、緊急時にはその抑制が外れて１００％の力が発揮される。　すずかは今その状態を無理やり引き出されている

状況なのだ。
その後に少女の身体にどんな影響があるのかを考慮していない魔法に、ますます仮面たちへの怒りが膨れ上がる。
スマン、と小さく謝りながらすずかの腹を蹴り飛ばして離れる。
肩に激痛が走った。　肩が鮮血が散り、熱さと冷たさが同時に痛覚を刺激した。
すずかの左手に握られた氷剣から血のりが垂れ、すぐに氷結。　離れ際に一撃喰らったのだと気付く。
相手は怜治を殺す気できている。　怜治は歯噛みして、決意を固める。
少女がフランベルクから無数の氷の斬撃を飛ばす。　氷結した月牙が怜治に襲いかかる。

「なっめんなぁあ！！」

肩から出血しながら怜治は大剣で氷の月牙を受け吸収、氷の魔力を体に装填する。
怜治の身体が紫色の氷に包まれる。

「氷龍の、爪剣ッ！！」

大剣から放たれた絶氷の一撃が少女の月牙を飲み込み、粉砕する。
一瞬、互いの姿が隠れる。
雲海に落ちる氷が月光に反射して輝く。
すずかが剣を構え直すと同時に腹部に衝撃。　蒼電を纏った怜治の拳が突き刺さっていた。
いくら運動能力を上げようと、殺傷力があろうと所詮9歳の少女。
高ランク魔導師たちと戦ってきた怜治の敵ではなかった。

「……あ……が……」

空気を無理やり吐き出され、少女の瞳がゆっくりと閉じる。
気を失い、倒れる少女の身体を怜治が受け止める。
氷剣が砕け、フランヴェルグがカードに戻り、すずかの服がバリアジャケットからかわいらしいデザインのパジャマに戻った。
バリアジャケットによる防護が無くなり、すずかの身体が震え始める。
冬にこの高度、気温は地上よりかなり低いだろう。

「風邪ひかれちゃたまんねぇな」

穏やかな寝息を立てるすずかを抱きかかえ、怜治は転移魔法を発動。
行き先を月村邸に設定し、2人の身体が光に包まれ、消えた。

月村邸についた怜治だったが、すずかの部屋が分からないことに気付いた。
スタンにすずかの魔力の痕跡を追ってもらい、窓から侵入。すずかをベッドに寝かせ、枕元にフランベルクのカードを置く。

「ったく、仮面共のせいで時間喰っちまった」

「それは申し訳ないな」

「――――ッ!!」

背後から聞こえた声に驚き振り返る。　同時に腹に重い衝撃が走り、
怜治の意識を闇へと突き落とした。

「て……めぇ……」

遠のく意識の中、怜治の眼にわずかに映ったのは無表情な白い仮面
だった。

アースラのブリッジで、クロノは通信機の発信ボタンを押して耳に
当てる。
無機質なコール音が鼓膜を叩く。　クロノの経験上、5，6回以上
コールしても出ない場合は相手が着信に気付いていない場合だ。
7回目のコール音が響いたのを最後に、クロノは自分から通信を切
った。
端末の画面上には連絡を取ろうした相手の名前が映し出されていた。
　クロノはその名前をじっと見つめる。

「怜治君、出ないの？」

「ああ」

背後から届いたエイミィの問いに短く答える。
クロノは端末を畳んでポケットにしまう。

「やっぱり、食堂での一件で愛想尽かされちゃったかな……」

「なんで僕らがあいつの機嫌を取らなきゃいけないんだい？」

エイミィの言葉を一蹴しながらクロノはブリッジの出口に向かう。

「ちょっと本局まで行ってくる。　無限書庫のユーノが何か見つけてるかもしれない」

「ん、分かった。　何かあったら連絡するね！」

「頼むよ」

ブリッジから出たクロノは真っすぐ転送ポートに向かい、起動させる。

淡い光が身を包み、少年の身体を本局へと移動させる。

「こんな気持ちは初めてかもしれないな……」

浮遊感に襲われながらクロノは呟いた。

クロノ・ハラオウンはここに祈る。

いま、自分のやろうとしていることが全て徒労に終わりますようにと。　骨折り損のくたびれ儲けだと、馬鹿だと笑われるような結果になるようにと。

そんな思いを胸に、少年は事件の裏側に足を踏み入れる。

第２５話　急襲そして（後書き）

アニメだと８話と９話の間くらい。

うん、１２話じゃ終わりません。

第２６話　空で地上でそして海で（前書き）

こっからクライマックスだぜ！！５～６話かけてな！！（あいさつ）

この小説のコンセプトはアニメ本編でバトらなかった人をバトらせることです。

第２６話　空で地上でそして海で

何かおかしい。
月村すずかは起床と同時にそう思った。
まず最初に不思議に思ったのは体を襲う鈍い痛み、筋肉痛のような痛みだった。
昨日は激しい運動をした覚えなどない。　なのに、体は筋肉の疲労と痛みを訴える。　ついでに言えば、お腹にまるで殴られたような痛みもある。　こちらの方も思い当たる節がない。
次に、いつ寝たのかの記憶がない。　本を読んでいたことまでは覚えているのだが、そこから就寝に向かうまでの記憶がぽっかりと穴が開いたようになかった。
読書中に眠ってしまったのかと思ったが、今までそんなことはなかったのですぐに違うと断定した。
結局、自分の納得のいく答えは見つからなかった。
多少の混乱を抱きながら、すずかは朝食を食べるために部屋を出て食堂に向かった。

すずかが朝食を食べ終え、学校へ行くために身支度をしていると、すずかのケータイが軽快な着信音を奏でながら細かく振動を始めた。
流れた音楽からメールが来たのだと分かった。
ケータイを開き、届いたメールを開く。

「……えっ！？」

届いたメールには、短い文ではやてが入院したという内容が書かれていた。

八神はやて。 その車イスの少女とすずかが出会ったのは街の図書館だった。
彼女も本好きということもあり、すぐに仲良くなれた。 互いの家に呼び合うほどの仲で家族とも良い関係を築けている。
そんな仲のいい友人が入院した。 すずかに衝撃が走る。
詳しいことは書かれてなかったが、重大と言うわけではないようでホッと胸をなでおろした。 だが、少女の頭の中にまるで靄がかかったような感覚が広がった。

「……か……」

八神はやて、その名前をつい最近いや、つい数時間前に聞いた気がする。
思い出せそうで思い出せない。 なんともむず痒い気分だ。

「……ずか」

必死に昨日の記憶を掘り起こす。
朝食を取り、休みだったためアリサの家に遊びに行き、なぜかなのはとフェイトに連絡がつかなくて、アリサが不機嫌になってそれをなだめ、昼食をご馳走になり、帰る途中で図書館に寄り、面白い本

があったので借りて、確か題名は“月光騎士物語”で、家に帰って夕食を食べて風呂に入り、ベッドの中で本の続きを読もうとして……。

そこまで思い出して、その先の記憶がない。　ぽっかりと抜け落ちている。

覚えていないということに不安を感じ、集中して記憶を呼び起こす。

「……すずか……」

ぼんやりとだが、映像が浮かび上がった。　自分は窓を開けたのだった。

なぜ開けた？　それはまったく思い出せない。

雲の上で誰かと話した気がする。

誰と？

話の内容は？　こちらも思い出せない。

自分が知りたい肝心な部分がまったく思い出せない。　ぼんやりとしたビジョンすらも浮かばない事態に、すずかの頭がパニックを引き起こす。

誰かに頭の中を操作されたのではとあり得るはずの無い想像をして恐怖と不安に絞めつけられる。

少女の心をじわじわと蝕み始めた暗い感情が。

「すずかっ！！」

快活な少女の声で弾き飛ばされた。

「え？　え？　……あれ、アリサちゃん？」

思考の海から強引に引きずり戻されたすずかの瞳に映ったのは、遠

慮なく不機嫌さを顔全体に広げたアリサの顔だった。

「“あれ、アリサちゃん？”じゃないわよ！　人が声かけてんのにいつまでも返事しないでぼーっとしちゃってさ！」

「え、あ、ご、ごめん……」

慌てて謝る。　記憶があやふやなのが気になりすぎて彼女の声はまったく耳に届いていなかった。
見ると、なのはやフェイトも心配そうにこちらの様子をうかがっていた。

「すずかちゃん大丈夫？」

「どこか具合でも悪いの？」

「う、ううん。　そんなことないよ」

「ウソね」

アリサが一刀両断。
すずかがそんなことないという前に続ける。

「なんか悩み事とか困ってることがあるんならさっさと言いなさい。いつぞやみたく、あたしの堪忍袋の緒が切れる前にね……」

小さく怒りを灯した半眼をなのはに向ける。

「にゃはは……」

「……？」

なのはは苦笑し、フェイトはなんのことだか分からず小首を傾げる。
フェイトは知らないが、なのはは今年の春にアリサと諍いを起こしていた。
迷いや悩みを抱えておきながら、それを相談しないなのはの態度にアリサが激怒したのだ。
なのはの次はすずかか、と言わんばかりの視線を向けられ、すずかは最近仲良くなった友人が入院してしまったことを話した。
記憶の欠落について言わないのは、言ってもどうしようもないことだという一種の諦めのようなものからだろう。
話し終えると、皆の顔が心配そうに暗くなる。
そっか……、と小さく呟いたアリサは思いついたように顔をあげる。

「じゃあ、放課後みんなでおみまいとか行く？」

「え、いいの？」

「すずかの友達なんでしょ？　紹介してくれるって話だったしさ、おみまいもどうせだったら賑やかな方がいいんじゃない？」

「う～ん……それはちょっとどうかと思うけど……」

「でも、いいと思うよ」

なのはもフェイトも賛成のようだ。
分かってはいたが、彼女たちの優しさに心が温まる気がした。

「ありがとう！」

すずかが笑顔でお礼を言い、少女たちも笑顔で返す。
かくして、少女たち四人による八神はやてのお見舞いが決定した。

放課後。　冬は日の入りが早いため、もうすでに街は夕焼け色に染まりきっていた。
茜色の絨毯となった病院の廊下を、なのはたち四人は歩いていた。
すずかの手には花束、なのはの手には翠屋のケーキの箱がある。
四人は八神はやてと書かれたプレートのある病室の前で止まり、ドアをノック。
中から「はーい、どうぞー」と少女の明るい声が聞こえ、ドアを開く。

「「「「こんにちはー」」」」

なのはたちの声が重なり、四重奏が病室に響いた。
訪問した四人の姿を視認すると、はやての顔が一気に明るくなった。

「おじゃまします。　はやてちゃん、大丈夫？」

「うん、平気や。　あ！　みんな座って座って！」

ありがとう、とフェイトが言い、お見舞い品を渡してコードを脱ぐと会話が始まった。
はやて以外だれもいない静かな個室に、一気に賑やかな空気が広がった。
簡単な自己紹介が終わると、話題は自然と近くなってきたクリスマスについてのものに移った。

「もうすぐやな～クリスマス。　みんなとのクリスマスは初めてやから楽しみや」

「みんなって？」

「はやてちゃん、親戚のみなさんと住んでるの」

「みんないい子やで～」

笑顔で家族の事を話すはやてを見て、なのは達の顔も綻ぶ。

「みんなはクリスマスどう過ごすんや？」

「う～ん、わたしの家はこの時期忙しいから家族団らんは難しいかも……」

「わたしは……こういうイベントとか初めてで、どう過ごせばいいかよく分からないかな……」

「だったらみんなしてあたしの家に来なさいよ。　ウチならけっこう大人数入れるわよ？」

「え、いいの？」

「Ｎｏ　ｐｒｏｂｌｅｍ！」

「う～ん、でもわたしは家族みんなで過ごしたいかな。　ごめんな、アリサちゃん」

「いいわよ別に。　クリスマスは来年も再来年もあるんだから」

そう言うと、あ！　とアリサは何かを思い出し、かばんから一枚のプリントを取り出す。

みんなに見えるように出し、皆が覗き込む。

「東高クリスマスパーティ？」

はやてがプリントに書かれた文字を読み上げた。

「あ、これって怜治さんの高校のイベントだよね」

「へぇ～おもしろそうやなぁ。　この日までにしっかり退院しとかんと」

「まだ後十日くらいあるし、慌てずにね？」

フェイトの言葉に、はやてはうん、と素直に頷く。

その時。

「はやてー！　お見舞いにきたよー！」

赤いおさげの少女が元気な声とともに飛び込んできた。

「えっ？」

「んっ？」

「あっ！」

「へっ？」

「おっ！」

「あれ？」

そして、

「「「ああっ！？」」」

なのは、フェイト、ヴィータの驚きの声が響いた。

ギル・グレアムは本局の廊下を歩いていた。
すれ違う局員のあいさつを頬笑みで返しながら進む。
やがて、医務室と書かれた部屋の前で足を止めた。
一瞬の停止の後、ドアの前に立つ。　センサーが反応し、ドアがスライドして中に入る。
医務室に入ると、真っ先にベッドで寝ている黒髪の青年の姿が目に入った。　他には誰もいない。
近寄ると、気配を察知したかのように青年の黒い瞳が開かれた。

「気がついたようだね。　怜治君」

声をかけると、ぼんやりとした瞳が徐々に色を取り戻す。
怜治は頭に手を置きながら体を起こす。

「俺は……いったい、ここは……？」

「本局の医務室だよ。　……何か飲むかい？」

「コーヒー、砂糖少なめで」

「分かった」

そう言ってグレアムは入り口に設置されたコーヒーメーカーの中に、挽いたコーヒー豆と水が入っていることを確認してスイッチを入れる。

ぽたぽたと落ちる黒い液体を見ながらグレアムは提督の自分が給仕していることにハッとした。　それをまったく気にしないあたり、怜治は将来大物になるだろうと勝手に想像する。

コーヒーが落ちる単調な音だけが医務室に届く。

グレアムが若者向けの話のネタを探していると背後から、

「どうして俺がここにいる？」

と、怜治が聞いてきた。

「ふむ、そうだね……私とて、全て把握しているわけではなくてね……」

一旦言葉を切り、グレアムは話し始めた。

「闇の書事件は、本局も注目していてね。　あれによって人生を狂わされた者は多い」

グレアムの表情に一瞬、影が落ちるのを怜治は見逃さなかった。

老人の口から苦笑が零れる。

「君が聞きたいのはこんなことではなかったな。　とにかく、管理

局も君たちとは別ルートで捜査に当たっていたんだ。　その途中、君が倒れているのを捜査員が発見してね。　君が候補生だと分かり、ここに運び込まれたんだ」

「アースラじゃなくてか？」

「候補生登録はしてあるが、アースラ所属にはなっていなんだよ君は」

なるほどそんなもんか、と怜治は頷いた。
コーヒーメーカーが音をあげてコーヒーの完成を知らせる。

「短く済ませてしまったが、君がここに連れてこられた理由は以上だ。　何か質問は？」

グレアムがコーヒーをカップに注ぎながら聞いた。
怜治は考える。　やがて、自分の指からエリシオンの指輪がないことに気付いた。

「俺のデバイスはどこやった？　あと、俺はどのくらい眠ってた？」

「安心したまえ。　念のために検査中だ。　終了しだい返却しよう」

グレアムは好々爺の笑みを向けて答える。　手には湯気を立てるふたつの陶器のカップ。

「眠っていた時間としては……ふむ、もうすぐ丸一日になるな。
ここは昼と夜の区別がつきにくいが、地球ではもう夜だ」

一日寝ていた事実に目を丸くしている怜治にカップのひとつを手渡

す。　中を覗き込むと、黒いコーヒーとその香りが鼻腔を刺激する。
グレアムはコーヒーを一口飲み、怜治もゆっくりとカップに口をつける。

「さて、怪我人はゆっくりしていたまえ。　私は出ていくとするよ」

「そうか。　悪いね、提督様に給仕なんかやらせて」

「別に構わんよ」

頬笑みを返しながらグレアムは医務室をあとにする。
自動ドアの前に立つと、入ってくる時と同様にドアがスライドする。
部屋から出てドアが閉まると、グレアムはセンサーが反応しないギリギリの距離で立ち止まり、静かにドアを睨みつける。
少しして、ドアの向こうから陶器が割れる派手な音が響いた。
グレアムは落ち着いた様子で再び医務室に入る。
中に入ると、床に砕けたカップの破片が散乱し、零れたコーヒーが黒い水たまりをつくっていた。
ベッドにはシーツの上で横になる怜治の姿があった。　その体勢から、自分の意志で眠ったわけではないことは明らかだった。
グレアムは破片や水たまりを避けてベッドに近づき、そっと怜治の手首に触れて脈を測る。　ゆっくりとしたリズムの脈動が伝わる。

「君が悪いのだよ？　私たちの忠告を聞かずに勝手な行動を取るから」

そう言ったグレアムの顔には先程の好々爺の顔などなく、鉄のように冷たい冷徹な顔があった。

「殺しはしない。　少しだけ、大人しくしてもらうだけだ。　私た

ちが闇の書を完全に封印するまでね」

そう言ってグレアムは背を向けて去ろうとした。

「封印？　ぜひとも、その方法をお聞きしたいね」

手を掴まれた。

同時に、声が背中越しに聞こえた。

ギギギッ、と錆びたねじが回る様にゆっくりとグレアムの顔が振り返る。

冷静な顔は崩れ、驚愕に彩られた。

「寝たふり。　こんな子供だまし以下の手に引っかかるとはな……」

閉じていたはずの青年の瞳ははっきりと開かれ、いたずら成功とばかりに口元が悪く歪んでいる。

「なぜ、眠らない……っ！？」

グレアムは咄嗟に自分の口を手で押さえるが遅い。　自分の方から薬を盛ったと自白してしまった。

怜治の口が裂けるほどにさらに歪む。

「こんな鎌かけに引っかかるか……。　なんでかなんて、少し考えりゃ分かるはずだがな」

そう言われてグレアムは思考を巡らせる。　徐々に頭が冷静さを取り戻していった。

落ち着いて考えると、答えはすぐに見つかった。

「そうか、君は私を信じていないのだったね。　信じていない人間の入れた飲み物など、口にするはずがない……か」

「その通り」

怜治が手を離すと、グレアムは体を怜治に向けて立つ。
再び好々爺のような笑みを浮かべて言う。

「どうやら、私と君の間には誤解があるようだな。　まずはそれを正そうじゃないか」

「……睡眠薬なんて仕込んでおいて誤解もクソもあるかよ」

「それについては謝罪しよう。　申し訳なかった」

腰を折り、グレアムが頭を下げる。
怜治は何も言わない。
三秒ほどして、グレアムの頭が上がった。

「ただ、勘違いはしてほしくない。　私が闇の書の封印を望んでいることは事実だ。　それだけは信じてほしい」

はっ、と怜治は鼻で笑い飛ばした。
グレアムの眉根が寄せ合い、眉間にしわが刻まれた。

「闇の書封印が願いなら、どうして闇の書の完成なんかに手を貸す？」

「……なんのことだい？」

とぼけたように聞き返すが、怜治は一瞬表情が強張ったのを見逃さなかった。
怜治は確信を得た。

「シャマルをとっ捕まえようとしたクロノを妨害し、フェイトからリンカーコアを奪い、月村に催眠をかけ、俺の手から二度も闇の書を奪った仮面のヤロウどもの片割れ――――」

まるで犯人を追いつめたミステリー小説の探偵のように。

「それがあんただろ。　ギル・グレアム」

告げた。

「ふ……ふはは……」

グレアムの口から笑いが漏れる。
まるで子供のジョークに対するような笑いだった。

「はっはっはっはっはっは！　なかなか、なかなか面白いことを言うね君は！」

「……」

「私が君たちを妨害する仮面の男!?　これは傑作だよ！　はっはっはっはっはっは！」

医務室にグレアムの笑い声が響く。
それを、怜治は真剣な顔を崩さずにグレアムを睨む。

「はぁ、はぁ……しかし、君も一方的に否定されては退くに引けんだろ」

ひとしきり笑った後、グレアムは腹を押さえながら言った。

グレアムは続けて言う。

「ぜひとも、私に身の潔白を証明する機会を与えてもらいたいね？」

「……」

「どうしたね？　まさか、当てずっぽうで私を犯人扱いしたのかね？　だったら、君には失望したよ」

「腕……」

「腕？」

オウム返しされた単語に怜治は頷く。

「前に仮面共と戦った時、腕に傷を負わせた」

「なるほど、私の腕に傷がなければ私は潔白ということか。　簡単で助かる」

そう言ってグレアムは手袋をはずし、左腕の袖をまくる。　老人にしては鍛えられたたくましい腕が露出された。

怜治は目を凝らして見る。　瞳に映る腕には、古傷こそあれ最近できたであろう傷はなかった。

グレアムの顔に勝ち誇ったような笑みが浮かぶ。

「これで、信じてもらえたかね？」

「ああ、確信に変わったよ」

怜治は腕だけを見ていたが、グレアムの表情が変わったのが分かった。　それほどまでの動揺が彼を襲ったのだ。

薄い笑みを浮かべながら怜治は口を開く。

「俺はどっちの腕かなんて言ってねぇのに、どうして迷いなく左腕を見せた？」

グレアムは愕然とし、一歩二歩と後退した。

「あんたは確かに仮面ヤロウじゃねえ。　でも、あんたは知ってるんだ。　怪我したことも、俺たちの邪魔ばっかしてることもな……」

怜治は体を折って見舞客用のイスを持ち上げる。

「共犯者ってのは身近な奴がなるもんだろ？　だったら正体は分かったも同然――――――だろ？」

魔力で腕力を強化。　持ち上げたイスをグレアムの顔に向かって投げた。

四本足のイスが回転しながら舞い、グレアムの背後から飛び出た影によって叩き落とされた。　影はグレアムをはさむように隣に着地した。

「久しぶり……って言った方がいいか？」

突然の登場に驚くことなく、怜治は淡々とその者たちの名を呼ぶ。

「リーゼロッテ、リーゼアリア！」

呼ばれた2人は猫の耳をわずかに動かし、歯ぎしりするだけだった。
ロッテの口から擦り合う歯の間からもらすように低い声が聞こえてきた。

「なぜ、私たちだと分かった？」

「それは、自分たちがやったって認めるんだな？」

ロッテは何も言わず、苦虫を噛み潰したように顔をしかめるだけだった。

「先に質問に答えろってか？」

やれやれと怜治は肩を落とし、面倒と思いながらも話し始める。

「クロノを一蹴できて、なのはの砲撃を防げて、フェイト達に気付かれずに近づけて、局のシステムにハッキングできる。　俺からしたら、お前らに思い当たらないのがビックリだ」

はぁ、とため息をつくと、アリアが苦々しそうに口を開く。

「結局、あんたは私たちを信用してなかったわけね……」

「信用する理由がないだけだ。　初対面のやつらをホイホイ信じるほど純真じゃなくてね」

それより、と怜治は一旦区切りを置いて。

「もっかい聞くが、お前らがやったと認めるんだな？」

「認めたら……どうする気だい？」

「お前らのやったことは犯罪だろ。　出るとこ出てもらうに決まってんだろ」

「別にいいけど、誰がアンタの話を信じるってのさ」

ロッテが薄笑いを浮かべながら続ける。

「こっちは提督、アンタはなんの実績もないただの候補生。　正規局員ですらないアンタの言葉に耳を貸す奴なんかいやしないよ」

一理ある、と怜治は頷く。

どんなに怜治は声を張り上げてグレアムたちのやったことを言ったところで、グレアムが否定をすればそちらを信じるだろう。

歴戦の勇士となんの功績もない無名の局員候補生。　どちらを信じるかなど、考えるまでもないことだ。

そんなこと、怜治は百も承知だ。　自分は初見の相手を信じないのに、他の者は自分を信じる。　そんな都合のいい展開を期待するほど怜治は楽観的じゃない。

「確かに、俺の話なんて誰も信じねぇだろうな。　妄言だと無視されるだろう。　でもな――――」

「執務官（ぼく）の言葉なら耳を貸してくれると思いますよ」

まだ幼さの残る少年の声に、グレアムたちは振り返る。
医務室の入口に、武装したクロノが立っていた。　手には彼が愛用するストレージデバイス、Ｓ２Ｕが握られている。

「クロノ……」

「グレアム提督、ロッテ、アリア。　今の話、全部聴かせていただきました」

悲しみが混じった声。　黒い魔法杖の先がわずかに点滅し、録音が完了していることを知らせる。

「信じたく……なかったです」

「クロノ……アンタ、お父様を逮捕するってのかい！？」

「闇の書回収の捜査妨害。　見逃せるものではないよ、ロッテ」

クロノは静かにＳ２Ｕの杖先をグレアムに向ける。
グレアムは信じられないと言った表情のから一変、笑顔となった。
一見、穏やかな顔だが有無を言わせぬプレッシャーのようなものをクロノは感じた。

「クロノ、君も勘違いしている。　私たちが捜査妨害をしたというのは怜治君の一方的な見解で、私たちは認めてもいないし、証拠もない」

「うわ～、開き直りやがった」

呆れた声をあげる怜治に目もくれず、グレアムの視線はただクロノに注がれる。
それを見て、クロノの瞳に浮かぶ悲しみが一層深い色になる。
クロノは懐から端末を取り出し、画面から立体画像が浮かび上がる。
リーゼ達が絶句。　グレアムの瞳が大きく見開かれる。

「証拠なら……ここにあります」

クロノが映し出した画像はリーゼ達だった。　ただ、ロッテの腰から下は白いズボン、アリアの手にはあの仮面が握られていた。
その画像は、まぎれもなくリーゼ達が変身魔法で仮面の戦士へと変わる瞬間の画像だった。

「どうして……いや、どうやって……」

「僕もそれについては聞いてみたいな、怜治」

クロノはポケットから出した白金色の指輪――エリシオン――を怜治に向かって投げ渡す。
その軌跡を追うようにリーゼ達の視線が怜治に移る。
怜治はエリシオンを受け取り、起動。　右手に蝙蝠のような翼を広げた白金色の魔法杖を握り、服装も白と金のバリアジャケットに変わる。

「この画像、どうやって撮ったんだい？」

「ん？　これか、聖王教会のシスターからの紹介でな。　えっと……ベネッタ？　ベロッタ……アロース？　ダメだな、こっちの世界の発音はどうも分かりにくい。　とにかく、こういった事が得意な

奴がいてね、頼んだんだよ。」

「聖王教会……ベロッタ……まさか、あのヴェロッサ・アコースか！」

クロノ達の瞳が驚愕で開かれた。

「無限の猟犬（ウンエントリヤークト）……なるほどね」

忌々しげにアリアが呟く。

へぇ、と怜治は感嘆の声をあげる。　実際に会ったことはなく、電話越しでも軽薄そうというイメージを感じていたのだが、それなりに名前は通っている人物らしい。

「意外だな。　まさか聖王教会が動くとは……。　彼らと君にどういう繋がりがあったのか知らないが、これはしてやられたとしか言いようがない」

「まぁあっちには貸しがあるからな。　取りあえず、証拠も揃った。後はお前らをとっ捕まえて、お前らのやろうとしていた封印法とやらを聞き出すだけだな」

怜治がエリシオンを構える。

状況は怜治とクロノがグレアムたちを挟んだかたち。　四方を壁に囲まれた医務室内で同時に砲撃をされてはかわすことはできない。

たとえ防御してもいずれ破られる。

有利な状況に、思わず怜治の口元が緩む。　それでも油断はせず、加減もするつもりはない。

「クロノ！　あんた、自分がやろうとしてること分かってんのかい

！？」

「十分に理解しているよ。　君たちの思惑はどうあれ、闇の書を完成させるわけにはいかない」

「違う！　私たちは闇の書を今度こそ完全に封印するんだ！　クライド君を殺したあの魔導書を、今度こそ！！」

クライド君を殺した、その言葉を聞いたクロノの瞳が揺らいだ。

ロッテが続ける。

「私たちを捕まえたら、闇の書は封印できない！　あんたたちがどう頑張ったって、今までと同じように闇の書は転生する！　あんたのお父さんを殺した魔導書は生き続けるんだ！　あんたは、クロノはそれでいいの！？」

クロノの父親は闇の書の暴走に巻き込まれて命を落としたと、怜治はそう聞いていた。

そして、ロッテの口ぶりから察するにそのクライドという男はグレアムの部下だったのだろう。　どうしてグレアムたちが闇の書の封印に固執するのか、その理由を怜治ははっきりと理解した。

彼らの目的は自分の部下を殺した魔導書への復讐なのだろう。　危険なロストロギアだからとか、任務だからと言い繕っても、闇の書への怨磋の思いが今ならはっきりと感じる。

怜治はクロノを見る。

表面だけは冷静を装っているが、杖を握る手がわずかに震えているのが分かる。

いま思えば、彼がこの任務にどこか執念めいたものがあったのは父親の死が原因なのだろう。　それでも私情にふたをして、今回の任務にあたってきた少年の心が揺らいでいるのだ。

父親を殺したものへの復讐、そんな極上の餌を目の前に差しだされた少年の心に迷いが生じているのが手に取るように分かった。

「……クロノ」

グレアムに名を呼ばれたクロノの肩が跳ねた。

「ぼ……僕は……」

「クロノ、私はあの時の事を、闇の書の暴走を止めるためにエスティアごとクライドを撃ったことをずっと後悔していた。　ああするしかなかったとは言え、自分の部下を見殺す結果になったことをね……」

穏やかな口調のままグレアムは続ける。

「周りの皆は仕方のないことだと、正しい判断だったと慰めてくれた。　だが、私はそれが辛かった。　何が歴戦の勇士だ、何が提督だ！　私は…たった一人の部下も救えない愚か者だ」

当時の光景を思い出したのだろう。　リーゼ達の顔にも影が落ちる。部下を見殺しにしたグレアムを待っていたのは非難でも侮蔑でもなく、賞賛と慰めの言葉だった。
その言葉を投げた者たちはグレアムの心を按じての行動だったのだろう。　別に彼らを非難するつもりはない。
悪いのは全て自分。　部下を妻子を残したまま死に至らしめてしまった不甲斐ない、無力な自分自身を、グレアムは憎んだのだろう。
　そして誓ったのだ。
もう二度と、あんな悲劇は生みたくないと、遺影の前で友人たちが涙するなかで、一番悲しいはずの妻は涙をこらえ、息子は前にある

写真が意味するものを理解できずただ眺める。
そんな光景はグレアムの心を絞め付け、掲げた誓いをさらに強固にした。
その思いを胸に、グレアムは今回の事を画策したのだ。

「だから、今度は決して失敗しない。　強力な氷結魔法も編み出た！　闇の書を主ごと永久に封印し続ける！　否、技術が進歩し、あの魔導書の破壊が可能になるまで封印し続けて見せる！！」

「――――――てめぇっ！！」

グレアムの口から聞き逃せない言葉が吐かれ、怜治は怒声を上げる。

「八神ごと封印するだと？　それはつまり、闇の書の封印と引き換えにあのガキ殺すってことか！！」

「違う！　技術が進み、闇の書を完全破壊する術が見つかるまで彼女には闇の書を繋ぎとめる枷となってもらうのだ！」

「それは一体何百年後の話だコラ！　そんな不確定なもんのために人の人生ブチ壊してんじゃねぇぞ！」

「私は！　あの時から闇の書の転生先を探し続けた。　そして、あの少女の下に、八神はやての下に転生したのを見つけ監視を始めた。
彼女の両親が死んだ時、親の友人として近づき援助した！　見守り続けた！　闇の書を逃がさないために！」

グレアムの口から溢れる言葉には狂気すら混じっていた。
最初の頃に持っていたはずのもう誰も死なせないという誓いは、いかにして闇の書を壊し復讐するかという執念に飲み込まれていた。

「クロノ、怜治君、手を貸してくれ。　君たちの力があれば私の計画は完遂する。　もうこれ以上闇の書の犠牲者を増やさないために、クライドの時のような悲劇を繰り返さないために！」

「ふざけろ、何が悲劇を繰り返さないだ。　どう見たって、てめぇがガキに八つ当たりしてるようにしか見えねぇんだよ！」

怜治の言葉に、グレアムは残念だと頭を振って今度はクロノを見る。クロノの顔には迷いの色が一層濃く広がっていた。
頭と一緒にＳ２Ｕの杖先は力なく下がり、今にも手から零れおちそうだった。
呼吸は荒れ、手足が震える。　彼の心が、壊れた天秤のように揺れ動く。
端末が通信をキャッチし、無機質な着信音が流れた。　そんな些細な音にも少年の肩が怯えるように跳ねた。
少年は通信に出ない。　数回のコール音の後に留守録機能でも起動したのだろう、エイミィの慌てた声が響く。

『クロノ君、今どこ！？　なのはちゃん達が闇の書の主に接触したみたいで、現在、守護騎士と交戦中！！　お願い、速く戻ってきて！』

クロノの顔が上がる。　憔悴しきったかのように顔色が悪かった。悪いことは重なるというように、少年の心を次々と起こる急事が圧し潰そうとしていた。

「クロノ……」

名を呼ばれ、クロノの視線がグレアムの向こうに立つ怜治に向いた。

「クロノ、てめぇが親父の死についてどう考えてるかなんて俺がどうこう言える話じゃねぇ。　俺にお前の気持ちなんて分かんねぇし、同情もしない。　でも――――」

一旦ことばを切り、また怜治は続ける。

「後悔しねェ選択をしろ。　そして自分が出した答えに不安を持つな、迷いながら援護されても邪魔なだけだ。　その上で出した結論なら、グレアムの肩もったって俺は何も言わねぇ」

クロノの瞳が大きくなった。
この場面でクロノがグレアム側につけば、怜治の負けは確定したも同然だというのに、彼はクロノを引きとめる言葉など一切かけなかった。
そうならないと信じているから？　いや違う。　怜治は本気でどちらでもいいのだ。
クロノが後悔しないというのなら共闘もするし、逆に真っ向からぶつかるつもりでもある。

――――怜治君は人助けがしたいのよ、きっと

脳裏に先日リンディが言った言葉がよぎる。
あの時は信じられなかったが今ならそうだなと賛成できる。
怜治は本当に助けたいのだ、八神はやてという少女の事を。
グレアムも、闇の書も、その目的のための前座でしかないのだろう。
そう思うと、今まで悩んでいた自分が馬鹿馬鹿しく思えてしまった。
荒々しく波立っていた心が落ち着いていくのを感じた。　狭まっていた視野が鮮明になっていく。
冷静になった頭でクロノは自問する。

――僕は、何がしたくて魔導師になったんだろうか……。

その答えはすぐに見つかった。

「提督……」

少年の瞳に、もう迷いはなかった。

「僕は闇の書が憎いです。　父さんを殺し、母さんを悲しませた闇の書への憎しみを否定しません。　死んだ父さんの遺志を継ぎたいと思って魔導師になり、管理局に入りました」

「そうだ、そうだとも！　クロノの言うとおりだ。　私たちと共に闇の書を！」

「……提督、父さんの遺志とは何ですか？」

グレアムの顔が笑顔のまま固まった。　瞳だけが疑問に満ちていく。

「僕が魔導師になりたいと思ったのは、僕が継ぎたいと思う父さんの遺志は……闇の書への復讐なのでしょうか？」

クロノは続ける。　グレアムもリーゼも、ただ唖然としてかつての教え子の言葉を聞く。

「僕が魔導師になったのは、執務官になってやりたかったことは……」

黒い魔法杖の先端が再び上がる。

杖先に少年の思いに呼応して魔法の光が灯る。

「父さんが助けられたかもしれない人達を、僕が代わりに助けることです！！」

杖先の光が爆ぜ、閃光が迸る。
同時に怜治がエリシオンで砲撃。　ふたつの光が絡み合い、爆風を巻き起こす。

「残念だよ。　クロノ」

爆風が一瞬で薙ぎ払われた。
その中心に立つ老人の姿はさながら白髪鬼か。
両脇に立つ使い魔が疾走。　ロッテが怜治の襟を掴んで逆方向に投げ飛ばす。
アリアが射撃の魔法陣を複数同時展開。　無数の光弾がふたりに向かって襲いかかる。
クロノが障壁を展開し直撃を防ぐが勢いは殺しきれず、医務室のドアを破壊しながら廊下に投げ出された。　ふたりが折り重なる様に倒れる。
有利だったはずの状況を一瞬で覆す力量、正確さ。　今、改めてリーゼ達の力を知った。

「クロノ、残念だよ。　本当に……」

怜治たちを見下ろすアリアの魔法陣から再び光弾が大量に飛来する。
怜治はクロノの襟を掴んで後退してかわす。　そのまま跳躍して飛行に移る。
せまい廊下を2つの影が疾走する。

「ったく分かっちゃいたが強ぇなオイ！」

「当たり前だ。　僕の師匠だぞ」

「あれで思想もまともだったら最高だな。　……そういや、スタンはどこだ？」

「分からない。　この本局のどこかにあるはずなんだが……」

「チッ、しばらくエリシオンひとつでやるしかねぇってか」

チラッと怜治は後ろを見る。　予想通り、リーゼ達が追ってくる。
グレアムは様子見なのか少し遅れている。

「んで？　お父さんの遺志を継ぎたいクロノ君としては、勝算はあるわけ？」

「茶化すなよ。　……そうだな、厳しい戦いだが……」

言葉を切り、クロノは怜治をジッと見つめる。　怜治は頭に疑問符を浮かべてしまう。
そして――――

「君がいれば何とかなるだろう……信頼、してるぞ」

怜治はきょとんとして、フッと笑みをこぼす。

「ハッ！　俺も、お前の実力は信頼してるよ！」

「実力だけか！」

怒鳴り合いながら振り返り、リーゼ達に闘志を込めた視線を叩きつける。
四つの魔力光が廊下を淡く染める。

「いくよ……クロスケ」

「来い！　ロッテ、アリア！」

身構えるクロノと怜治の間を、ふたりの使い魔が縫うように走り抜けていった。

「――――なっ！？」

クロノが振り向きながら驚きの声をあげる。　少年の瞳に移るリーゼ達の背中はどんどんと小さくなっていく。
自分は「いくよ」と言われて「来い」と返したはずなのに、返した相手は自分たちを無視して走り去っていった。　呆気にとられる以外のリアクションの取りようがない。

「彼女たちには別件の用があるからね、そちらを優先してもらった」

混乱に陥ったクロノの頭を、冷静な、けれど燃え滾る意志の籠った声が掬いあげた。
ゆっくりとクロノは振り返ると、そこにいたのは。

「僭越ながら、この老兵の相手をしてもらうよ」

黒いバリアジャケットに身を包んだギル・グレアムだった。
片手には先端に猛禽の両翼が広がった白銀の杖があった。

「いきなりボスキャラかよ……」

グレアムの姿を見た怜治は呟いた。
クロノも声に出さずとも同意する。
自分たちの目の前にいるのはかつて艦隊を指揮し、執務官長を歴任したこともあるまさしく英雄。　その武勇伝は局員銃の間に広まっている。
彼より強い魔導師など数少ないだろう。　いくら老いたからといっても、その経験は若さなどというハンデをもろともしない。
冷や汗とはこういうものか、と自分の頬を伝うものを感じてクロノはそう思った。
リーゼを追うにはグレアムを倒さなければならない。
先程、なんとかなるなどとほざいたはずが、目の前の勇士の姿を見て一瞬で勝機を見失ってしまった。　それほどのプレッシャーを、そこにいるだけでグレアムは与えていた。
汗ばんだ手を振り、クロノは念話を怜治に飛ばす。

「（怜治、提督は強い。　だから、僕が隙をつくるからそのうちに――――）」

「（クロノ。　お前、あの猫どもを追え）」

最高の一撃を放て、というクロノの言葉は遮られた。
一気にクロノの顔に熱が集まる。
この男は、どこまで無鉄砲な事を言えば気がするのだ。

「（君、自分が何言ってるか分かってるのか!?　あのグレアム提督を1人で抑える気か!?）」

「（猫どもの狙いはどう考えたって闇の書だろ。　あのジイさんの逮捕と闇の書完成の阻止、どっちが優先させるべきか言わなきゃわかんねぇか？）」

怜治の言葉に一度集まった熱が冷えていく。　同時に驚いた。
クロノが思っている以上に、怜治は冷静さを保っていたからだ。
これが三年の差か、などと妙な結論に至りながらもクロノは作戦を確認する。

「（分かった。　君が提督を喰いとめてる間に、僕がリーゼを追って闇の書の完成を阻止。　その後、なのはやフェイト、アースラの戦力を連れて戻ってくる。　それまで、耐えてくれ）」

「（オッケー。　でもよ……）」

怜治は念話を切り、不敵な笑みを浮かべ。

「別に倒しちまっても構わねぇだろ？」

そう言った。
クロノはきょとんとして、そして。

「フッ……。　ああ構わん！　できるものならやってみろ！」

身を翻し、リーゼ達を追って走り出した。

「行かせると思うかね？」

「行かせるに決まってんだろ」

クロノを止めようと駆けだしたグレアムを、怜治はエリシオンを振って止める。
グレアムは後方に跳んで杖をかわす。　ちらっと怜治の先に目を向けると、すでにクロノの姿は消えていた。
忌々しげに怜治に視線を戻す。

「念のため聞くが、私たちに協力する気は？」

「ねぇな。　さっさとかかって来い」

怜治の答えにグレアムは残念そうに頭を振る。

「仕方ない。　では、老体に鞭打って若者に力の差を教えるとしよう」

両者同時に駆けだし、互いの杖が激突した。

海鳴市。
この街の夜を、異質で禍々しい気配が満たしていた。
天を衝かんとばかりに建てられたとあるビルの屋上、そこにその気配の源があった。
黒、いや闇一色と言うべきか。　空を覆う闇よりも暗く、澱んだ力の塊が球体を成して鎮座していた。
その様子を、離れた別のビルの屋上で見つめる人影がふたつ。　ロッテとアリアだった。
ふたりの姿は仮面の戦士になっていた。

仮面を通して見つめるのはかつて自分たちの大切な人を殺した力。
悲願成就のために八神はやてから無理やり引き出した力だが、やはりどす黒い憎悪の感情があふれ出るのを感じた。
叶うなら今すぐにでも向かってあの力の元凶を殺してしまいたい。
そんな激情を噛み殺しながら戦士たちは闇の書封印の手順を確認する。

「結界の展開完了、デュランダルの準備は？」

「できている」

切り札を納めたカードを持ち、片方が闇の塊に目を向ける。
よく見ると、塊の斜め上に二色の魔力光が光るのが見えた。　なのはとフェイトだった。
ふたりには強制的に闇の書の相手をしてもらうことになるが、彼女たちの実力はリンディやクロノからも聞いていたから信用できるだろう。
彼女たちに闇の書打倒は期待しない。　あくまで、自分たちの準備ができるまでの時間稼ぎさえしてもらえればいいのだ。

「しかし……持つかな？」

才能は認める。　だが、魔力が大きいだけで勝てるほど闇の書は甘くない。
事実、ここから見えるふたりの表情は困惑と緊張に満ちていた。

「やはり、あの月村すずかという少女にも手伝ってもらうべきだったか……」

「過ぎたことを言っても仕方ないだろう。　素質は高いが、まだま

だ荒削りだ。　あそこまで強化してやったというのに松田怜治に勝てんようでは闇の書の相手などできん」

「そうだな、まぁ彼女には後に管理局に入って役立ってもらおう」

言い終わると同時に自分たちとは別の魔力反応を感知。
ふたりの背後に転送魔法の魔法陣と黒髪の少年の姿が現れた。
変装は無用とふたりは変身を解いた。

「クロノか……早かったな」

「ロッテ、アリア！」

クロノは自分の師、そしてその向こうにある淀んだ塊を見て状況を理解した。

「くそっ……間にあわなかったか！」

「まぁ待ちなよ、これから始まるんだ。　闇の書の最期を共に見届けよう」

「ふざけるな！　無関係な民間人を犠牲にするなんて、なにを考えている！！」

「無関係？　無関係だとっ！！」

ロッテから怒気が噴き出した。

「あの少女は闇の書の主だ。　クライド君を殺したあの闇の書のな！　それのどこが無関係だっていうんだ、クロノ！」

「たとえそうでも、八神はやてはまだなんの罪も犯していない。彼女は力を持っていたとしても、それを一度も破壊に向けていない」

「あれを見てもそう言えるの？」

アリアが黒い球体を指さした。　瞬間、球体が膨れ上がり、近くにいたなのはとフェイトを飲み込んだ。　咄嗟に障壁を展開したのが見えたがいつまで持つか分からない。

「あれが、覚醒した闇の書の力。　いずれ制御を失い、暴走する」

「君たちがそうさせたんだろ……」

怒りを噛みしめるように言い放ったクロノの言葉にロッテはやれやれとばかりに肩を落とす。

「私たちが手を出さなくったってああなってたさ。　私たちはそれを少し早めただけ」

「そして、それが闇の書の最期となる」

「もう……話は通じないのか」

クロノの杖先がリーゼ達に向けられた。　２人も戦闘態勢を取る。

「何？　１人で私たちと戦うっての？　無理だよ」

「１人ではありませんっ！！！！」

突然、四人目の声が響いた。
三人は声のした方へと顔を向ける。
クロノ達がいる屋上に設置された給水塔の上に立つ人影。

「滅びを喰いとめようとする理想は素晴らしい。　ですが、犠牲をよしとした理想などもはや理想ではありません！」

給水塔から飛び降り、その姿をクロノ達の前に露にした。
短く切りそろえた赤紫色の髪、袖の無い青竹色の騎士服、腰につけた白外套が風になびく。
両手には旋棍（トンファー）のような双剣が逆手に握られていた。

「何者だ」

「聖王教会所属、シャッハ・ヌエラ。　朋友、松田怜治の要請により参上いたしました！」

シャッハが前に出てクロノと肩を並べる。

「ハラオウン執務官、非才の身ながらも助太刀いたします！」

なのはとフェイトが球体から抜け出した。　時機に向こうも戦闘に入るだろう。

夜空（やてんのそら）では少女たちが闇の書と、ビルの屋上（コンクリのちじょう）では執務官と修道女が英雄の使い魔と、本局（じげんのうみ）では騎兵と英雄が激闘という名の演目を開始する。
彼らは、己が信じる道を突き進むためにその障害を粉砕せんと得物を振るう。

観客はなく、カーテンコールの代わりに低く鈍い爆音が響く。
勝者は自らの思想の正しさを証明し、敗者は己の無力さに唇を噛みしめる。

闇の書を巡る戦いは、最終局面へと移行する。

第２６話　空で地上でそして海で（後書き）

こっからクライマックスだぜ！！５～６話かけてな！！（大切なことなので二回言いました）

シャッハさん久しぶりに登場。　何歳だっけあの人……。

クトルーちゃんさんへ。　感想ありがとうございます！
感想で下さったご質問には次回あたりお答えできると思います。

まだね、時期が微妙なんすよ……。

第２７話　闇統べる王（前書き）

なんか先の展開が読めそうなサブタイ……。
でも他に思いつかなかったんだよなー

第27話　闇統べる王

時は、わずかに遡る。
はやての病室でヴィータと鉢合わせしたなのはとフェイトは驚きつつもなんとかその場をやり過ごし、はやてのお見舞いは終わった。

「（フェイトちゃん……これって……）」

「（はやてが闇の書の主ってことかな？）」

病室を出て、来た道を戻りながらなのはとフェイトは念話で話し合う。
自分たちの親友であるすずかの友達が闇の書の主という。　世の中とは意外と狭いものだと思いつつ、急な展開に頭がついてこない。

「（でも、ヴィータちゃんと仲がいいってだけでまだ……）」

「（うん、はやてから魔力反応は感じなかった。　でも……）」

フェイトは病室でのヴィータの態度を思い出す。
敵意のこもった眼差しを向けながら、はやてに対しては甘えるような態度を取っていた。
それだけで、本当にはやてのことが好きなのだろうということは十分に伝わった。

「（はやての言ってた家族って多分……）」

「（やっぱり、そうなのかな……）」

「ちょっと！　２人とも何してんのよ！」

「あ、ごめん！」

気付くと、なのは達とアリサ達との間にかなり距離があった。　念話に集中し過ぎて歩く速度が遅くなってしまったようだ。
エレベーター前にいるアリサに急かされ、駆け足で合流する。
一階に行くためにアリサがエレベーターを押す。　上部のライトが自分たちのいる階に到達し、扉が開いた。

「……あ」

「……む」

シグナムがいた。　思わずフェイトの口から小さく驚きの声が上がる。

「あ！　シグナムさん」

「これは……お見舞いですか？」

「はい。　はやてちゃんの！」

そうですか、とシグナムは軽く頭を下げながら四人の傍を抜けていく。
アリサ、すずか、なのはとすれ違いフェイトのすぐそばを通った時。

「（今日の夜、街の中心で待つ。　決着をつけよう……ふたりでな）」

「えっ？」

「フェイト？　どうかした？」

「え、う、ううん。　何でもない」

フェイトは急いでエレベーターに乗り込む。
扉が閉まり、下降を開始する。　体浮き上がるような感覚の中、フェイトはシグナムの言葉をひたすら反芻していた。

病院から出ると、外はもうすでに暗く、街灯に青白い光が点いていた。

「それじゃあわたしたちはここで」

「またね。　なのはちゃん、フェイトちゃん」

「うん。　また明日！」

「バイバイ」

アリサとすずかと別れ、姿が見えなくなったところでなのは達はデ

バイスを起動して空へと翔け上がる。
冬の冷たい空気を引き裂きながら少女たちは街の中心へと向かう。

「フェイトちゃん。　アースラに連絡しなくていいの？」

「ホントはするべきなんだろうけど、シグナムはふたりで決着をつけたいって言ってた」

フェイトの言うとおり、アースラに連絡すれば援軍として武装局員、クロノも来るだろう。
そうなれば、シグナムの希望する通りにはいかないだろう。

「もしここで大勢で行ったりしたら、もうシグナムとは分かりあえない気がするの……」

そっか、となのはは呟くだけだった。
フェイトはシグナムの言葉を、自分が本当に1人で来ると信じているから言ったのだと思っている。　ならば、その言葉を無下にすることは彼女の信頼の裏切りに他ならない。
親友の考えていることを推理しつつ、なのはは気付いた疑問を投げかける。

「あれっ？　それじゃあわたし行かない方がいいんじゃ……」

「う……でも、なのははわたしたちの勝負の邪魔はしないでしょ？　だったらいいと思う……多分」

「は、はははは……」

なのはの苦笑いを最後に会話が途切れてしまった。

シグナムの指定した街の中心まではまだ距離がある。
これから戦いとなることへの緊張からかふたりの間に言葉はなく、風を切る音だけが耳に響く。

「……そういえば」

無言の空気に耐えかねたのか、なのはが口を開いた。

「怜治さん、どうしたんだろう」

「あ……そうだね」

昨日、怜治は突然クロノを連れだしたかと思ったらそのまま帰ってしまった。
クロノに何があったのか聞いてもなんでもないの一点張りだった。
それ以来怜治とは会っていない。

「レイジ、もしかして管理局やめちゃうのかな……」

「そんなこと……ないと思うけど」

確かにクロノと怜治の関係はけしていいものではない。　だが、怜治がそれだけで離脱してしまうような子どもだとは思えない。
その根拠を探そうとした時、シグナムの魔力反応がなのはの思考を遮断した。
反応を辿る、ひとつのビルの屋上に降り立つ。
目の前には病院で見た私服を着たシグナムとシャマルだった。

「来たか。　……ふたりっきりだと思ったのだが」

「なのはは横槍を入れませんよ。　それに、そちらだってふたりじゃないですか」

「シャマルはバックアップの専門家（エキスパート）だ。　直接戦闘には参加しない。周囲への結界や通信遮断のために私が頼んだのだ」

余分なことに魔力を消費したくないからな、とシグナムは言う。
そしてレヴァンティンを起動。　長剣が騎士の手に納まる。
フェイトもバルディッシュに金色の刃を展開して構える。
なのはとシャマルはふたりの邪魔にならないよう、そして邪魔させないよう位置取り警戒。
ピリピリと緊迫した空気が周囲を支配する。

「ひとつ、賭けをしないか？」

「賭け……ですか？」

フェイトは意外そうに聞き返した。
彼女が抱いていたシグナムという女性のイメージとは随分かけ離れた言葉だった。
何を賭けるというのか。　フェイトはシグナムの次の言葉を待つ。

「私が勝ったら、闇の書を返してもらおう」

「――――どういう意味ですか？」

「そのままだ。　松田怜治が我らから奪った闇の書を返してもらう」

頭を殴られるような衝撃がフェイトを襲った。
レイジが闇の書を奪った？

フェイトはそんなこと知らない。　そしてクロノの言うとおり、怜治は闇の書の主を知っていたのかという疑念が湧きあがる。
知っていたのならなぜ言わなかったのか。
闇の書の確保に成功したのならなぜ報告をしてこないのか。
次々の怜治への疑問が浮かび、そして。

（怜治は……わたしたちを裏切ったの？）

怜治には特別な力があるらしい。　半年前にジュエルシードを自力で制御した事はフェイトも知っている。　それが普通ではありえないことも、彼が使うスタンもロストロギアだということも聞いた。
もしも、怜治がロストロギアを自由に扱えるのだとしたら、主を殺す闇の書すら制御できるとしたら。
そんな力を手に入れて、怜治は何をするのだろうか。
それは、最悪な想像にしか繋がらなかった。

（そんなこと……ない！）

フェイトは脳裏を走った予想を否定する。
怜治の過去はエイミィから聞いた。　そんなこと本人を差し置いて言ってしまっていいのかと思ったが、その内容にはフェイトも驚愕した。
怜治も自分と同じ――――といったらおこがましいかもしれないが、少なくともフェイトは一方的にシンパシーを感じた。
彼も自分と同じように親に拒絶されたのだと。　自分は最後に和解ができた。　だが、怜治はそれすらもできなかったのだろう。
そんなつらい思いをした者が取る道は、皆にも自分と同じつらさをという道か、自分以外にそんな思いはさせたくないという道のどちらかだろうとフェイトは思う。
フェイトは後者を選んだ。　ならば、怜治もそうだろう。

前者を選んだ人間が、あの時あそこまで必死に動く事が出来るわけがない。
その道を選んだ人間が、裏切られたと感じたことのある彼が、誰かを裏切るなんてありえない。
シグナムが弾丸の如く疾走。　彼女の体を紫炎が包み、騎士甲冑を纏わせる。
フェイトの鎌とシグナムの剣が激突、火花を散らす。

「管理局は、闇の書を確保してません。　多分、まだレイジが持ってるんだと思います」

「そうか、ならばお前たちを人質にして奴から奪還するまで！」

ガキン、と互いの得物が弾かれた。　両者の体がくるくると回転、フェイトはそのまま回転斬りを繰り出す。
シグナムが腰に差した鞘を抜き防御。
予想外の防御法にフェイトは驚く。　シグナムはそのまま金色の刃を受け流し、フェイトの腹に回し蹴りを叩きこむ。
フェイトは咄嗟に張った魔法壁で防ぐも、そのまま吹っ飛ぶ。　が、屋上の四方を囲むフェンスを足場にしてそのままUターン。　持ち前の速度を乗せた斬撃でシグナムと再度切り結ぶ。
二合、三合、四合と互いの刃が激しくぶつかり合う。
フェイトの一撃の威力はシグナムのそれには及ばない。　だが、腕力の差は速度で埋める。
シグナムが一振りする間にフェイトは三度振る。　それは鞘で見事に防がれるが、シグナムに戦いの主導権を握らせてはいない。　互角に戦えている。

（リンカーコアを獲られて以来はじめての実戦だけど……いけるっ！）

フェイトとシグナムの激しい剣戟を、なのはは静かに見守っていた。
不意に、シャマルと目があった。

「（あの……）」

念話を飛ばそうとしたが、妨害されているのか相手に届かない。
仕方なくなのはは直接聞くことにした。

「あのっ！　やっぱり、はやてちゃんが闇の書の主なんですか？」

「……そうよ」

シャマルの肯定の言葉は、フェイトの耳にも届いた。　思わず視線がシャマルに移るが、シグナムの攻撃にすぐ戻された。

「闇の書の完成まであと一歩。　邪魔をするなら、はやてちゃんのお友達でも……」

「待って！　ちょっと待って！　話を聞いてください！」

なのはは叫ぶ。
自分たちは確かに闇の書の封印が目的だが、はやてを助けたいという気持ちは騎士たちと一緒だ。　ならば、無理に敵対などせず共に闇の書の呪いからはやてを救う方法を模索できるはずだ。
その思いを伝えようとなのはは叫ぶ。
騎士たちが闇の書の事を知らないとしたら、よけい黙ってはいられない。

「ダメなんです！　闇の書が完成したらはやてちゃんは――――」

「――――はあっ！！」

赤い光がなのはに向かって飛来した。
なのはは咄嗟にプロテクションを展開して直撃を防ぐ。
魔法壁越しに目に移るのは見覚えのある鉄槌、そしてそれを握るヴィータだった。
ヴィータの一撃になのはの小さな体が吹っ飛び、フェンスに激突。

「なのは！」

「よそ見をしてる場合か！」

助けに行こうとするフェイトをシグナムが止める。
ぶつかり合う刃を通して、シグナムの鬼気迫る思いが伝わる。

「主を助けるには闇の書の力が必要だ。　だから――――」

「早く、返してくれないかしら。　あまり駄々をこねると……」

「手加減できねぇからよぉっ！！」

振り上げたグラーフアイゼンがカートリッジをロード。
ヴィータの一撃が焔を噴き、屋上の一角をなのはごと紅蓮に包む。

「なのはぁっ！！」

「大丈夫だよ、フェイトちゃん」

ヴィータが顔をあげると、炎の中に人影がはっきりと浮かび上がっ

ていた。　今の一撃を完全に耐え抜いたのか、防いだのか、どちらにしろダメージはうかがえなかった。
人影が歩を進め、炎から姿を現す。

「あ…まだ……」

自分の前に立ちはだかる少女（なのは）に向かってヴィータが呟いた。

「はやては、小さい時に両親亡くして、ずっとひとりで生きてきて、突然現れたあたしらを家族だって言ってくれて……」

ヴィータの頬を伝う涙を、なのはは見逃さなかった。

「もうすぐなんだよ……もうすぐ闇の書も完成して、はやての命も助かって、また楽しくみんなで暮らせるんだ。　……なのに！」

赤い少女の瞳に憤怒が灯る。

「なのにおまえらは邪魔すんのか！　今まで必死に頑張ってきたのに、はやてからこれからの人生も！　闇の書も！　幸せも！　みんなみんな奪うのか！？」

ヴィータの悲痛な叫びに、なのはは胸を絞めつけられる思いがした。
どうしてだろう。
自分も彼女も、八神はやてという少女を助けたいのは同じはずなのに、どうして争わなければいけないのだろう。
その疑問が、少女の心を絞めつける。

「おまえらは悪魔だ！　人の皮被って、他人の幸せブチ壊すクソッタレな悪魔だ！！」

「……悪魔で、いいよ」

なのはのレイジングハートを握る手に力がこもる。
その杖先をヴィータに向ける。

「悪魔らしいやり方で、話を聞いてもらうから！！」

なのはとヴィータが飛翔するのをフェイトは視界の端で見た。
このまま通信妨害の範囲外までいけたらいいと、自分たちが戦闘を開始したことにアースラは気付いているだろうかと思いつつ、フェイトは目の前の剣士に意識を戻す。
なのははヴィータの説得に失敗したが、だからと言って試しもせずシグナムの説得をあきらめるわけにはいかない。

「闇の書は、悪意ある改変を受けて壊れてしまっている！」

「ほう！　松田もそんなことを言っていたな」

「今の状態で完成させたら、はやては！」

「本当に奴と同じようなことを言うのだな。　だが、我々はある意味で闇の書の一部。　闇の書の事は我らが最もよく知っている！」

「じゃあ、どうして本当の名前で呼んであげないんですか！？」

空からなのはの声が降りてきた。　その言葉に、ヴィータもシグナムも、シャマルも一瞬動きを止めた。

「闇の書なんて名前じゃない、本当の名前で！！」

「本当の……名前……」

そんなものがあっただろうか。

記憶を辿るが、そんなものの記憶はない。　否、まるでぽっかり穴があいたような、忘れてしまったような虚無感が湧き上がる。

「成程、確かに本当の名があったのかもしれん」

「それじゃあ」

「だが、それとこれとは話が別だ」

シグナムが長剣を振るう。　刃が空気を切り裂き、剣圧がコンクリートの床を砕く。

フェイトはそれを決別の証と取った。

（きっと……以前のわたしもあんな風だったんだろうな）

話をしたいというなのはの言葉を無下にし、ひたすらジュエルシードを集めていたあの頃の自分と。

フェイトが母のためにジュエルシードを求めたように、シグナムたちもはやてのために闇の書の力を欲している。

今の彼女たちに口から出た言葉は届かない。　ならば、この手にある力で伝えるしかない。

『Ｓｏｎｉｃ　ｆｏｒｍ』

バルディッシュの声とともにフェイトのバリアジャケットが光に包

まれ、形を変える。
両手両足に手甲を、黒いレオタードのようなデザインから袖の無く、下はスパッツというデザイン。　両手首足首には金色の羽がつく。
その姿の意味を、シグナムは即座に看破した。

「薄い装甲をさらに薄くしたか」

「その分、速く動けます」

「ゆるい攻撃でも当たれば死ぬぞ。　正気か、テスタロッサ？」

「あなたに勝つためです」

シグナムは強い。
力も技量も今のフェイトでは及ばない。　だが、速さだけは自分が勝っている。
劣る部分を強くして追いつくのではなく、自分の長所をさらに伸ばすことで勝利を掴む。
それがシグナムに勝つためにフェイトが見つけた戦い方。
一撃死も覚悟の上。　一発当たれば終わりなら、当たらなければいいのだ。
敵の動きを何一つ見逃さず、一瞬たりとも油断せず、わずかに見えた勝機をこじ開ける。
もしも、という失敗を怖れて勝てるほど、シグナムは甘くない。

「こんな出会いをしていなければ、私とお前はどれほどの好敵手（とも）になれただろうか……」

「まだ、間にあいます」

「止まれん。　我ら守護騎士、主の笑顔の為ならば騎士の誇りさえ捨てると決め「た」

シグナムの頬を涙が伝う。

「もう……止まれんのだ！」

「止めます。　わたしと、バルディッシュが！」

ふたりの足元に互いの魔法陣が浮かぶ。

譲れぬ思いがあるのなら、今はそのためにただ力をぶつけあおう。

戦って戦って戦い抜いて、倒れた時に手をつなげばいい。

それは、自分にとって初めての親友がしてくれたこと。

「あなたと、友達になりたいから！」

『Ｙｅｓ，　ｓｉｒ』

両者同時に地面を蹴る。　未来を切り開くため、魔導の刃が闇に哮る。

桜色の光弾が疾走する。　弾数は六、狙いは赤いおさげの少女。

なのはの意志を受けて縦横無尽に弾道を変えるそれをヴィータは身を捩じる様に飛んで回避。　一瞬の好機を逃さすアイゼンで叩き落とす。

反撃にと打ったふたつの鉄球は光弾とぶつかり粉砕される。　粉塵による煙幕を目くらましに、ヴィータはなのはの死角への移動を試

みる。　だが、なのはの魔法杖がそれを許さない。
誘導弾の制御に集中しているなのはに代わり、レイジングハートが彼女の目となり耳となる。
人間のより遥かに高い演算能力でヴィータの次の動きを予測。　予想される進路をなのはに知らせる。
なのはは愛機の言葉に素直に従い誘導弾を操作する。　残った光弾を予想進路上に向かわせる。
予想は見事的中。　なのはの背後を突いたつもりでいたヴィータの眼前を桜色の光が埋め尽くす。

「こなくそぉっ！」

当たってたまるかと無理やり方向転換。　無茶な動きに体がわずかに悲鳴を上げるが無視。
後を追う光弾を鉄槌、鉄球、障壁で悉く破壊。　爆煙によりなのはの姿が隠された。
だがそれはこちらも同じ。　ヴィータはカートリッジをロード、グラーフアイゼンを第二の姿、ラケーテンフォルムへと変える。
スパイクとなった先端を上に向けて構え、煙幕が晴れるのを待つ。

（あいつの姿が見えたらソッコーでブチ抜く！）

そう心に決めて待つが、一向に煙幕は晴れない。　こう時間が空くと思考はつい他のものへと向いてしまう。

（闇の書の本当の名前……）

本当に思い出せない。　まるで頭をいじくられてその部分をばっさり切り取られたかのような感じだ。　この感覚をヴィータは前も経験している。

先日、怜治に闇の書を奪われた時の会話の際も、こんな感じがしたのを覚えている。

（どうなってんだよ……あたしらは！）

ヴィータが悪態をついた瞬間、煙幕の一部が膨れ上がる。　そして一気に弾けた。　曇天色の口から吐き出されたのは桜色の閃光。なのはの砲撃だということはすぐに分かった。

くそっ、と苛立ちを吐き出しつつヴィータは旋回、砲撃によって開いた穴に突っ込む。

閃光とすれ違い、ヴィータは鉄槌を構えて加速。　スパイクの反対側に付いた噴射口が火を噴く。

煙幕に突っ込もうとした瞬間、ヴィータのすぐ隣で黒い波濤が上がる。　その中から飛び出したのは栗色の髪の白い服の少女。　なのはだった。

「はぁぁぁあああああっ！！」

なのはが渾身の力で振るのは彼女の杖。　鉤爪のような杖先がヴィータに襲いかかる。

ヴィータは一瞬思考が止まった。　後衛型の砲撃魔導師が接近戦を選ぶなどありえないことだった。　そして、そのなのはによるあり得ない行動はヴィータの対処をゼロコンマ秒ながらも遅らせる。

鉄槌の柄と魔法杖の先端が激突。　想定外の事態に、噴射口の勢いを制御しきれずバランスを崩したヴィータがあさっての方向に悲鳴を上げて飛んでいく。

ヴィータが体勢を立て直した時、なのははすでに本来の戦闘スタイルに戻っていた。

「ディバイィィィン……」

鉤爪から音叉に変わった杖先に魔力が集まる。

「バスター――――！！！」

轟音。　桜色の閃光がヴィータを襲いかかる。

そして、突如消滅した。

「えっ！？」

驚いたのはなのは、そしてヴィータも何が起こったのかと茫然としていた。

そして、青黒い三つのバインドがなのはを縛り付けた。

「なのはっ！！」

なのはを拘束したバインドを見てフェイトはシグナムから剣戟を止める。　シグナムもこの事態に驚いているのか追撃は来ない。　そのことからも、あのバインドが彼女たちによるものではないとフェイトは判断した。

『Ｐｌａｓｍａ　ｌａｎｃｅｒ』

バルディッシュを振って雷球をひとつ出す、周囲を警戒。　魔力探査を全開にする。

「……っそこ！！」

気配を察知し、その方向に雷球から雷撃の槍放つ。

槍は何もない空間で急に姿を消した。　瞬間、その空間がわずかに揺らぐ。
即座にフェイトは飛翔、ソニックフォームにより引き出された速度を持ってその空間に斬撃を叩きこむ。

「……く、はぁ」

揺らいだ空間から仮面の男が姿を現した。
その姿を確認したフェイトに前に奇襲されたことへの怒りが点火した。
再度斬撃を放とうとするが、横から2人目の戦士に横っ腹を蹴り飛ばされる。

「がはぁあっ……！」

フェイトは痛む腹をおさえながら自分の失態に舌打ちする。
装甲が薄いから注意しろ、そのことを仇敵の出現に失念してしまっていた。
屋上に落下していくフェイトを見ながら最初に現れた男はカードを取り出し、発動。
なのはと同様のバインドがフェイトを空中で拘束した。　続いて十枚以上に及ぶカードを取り出し周囲に展開。　戦士の足元にミッド式の魔法陣が浮かび上がる。
陣から現れるのは青黒い拘束縄。　それは蛇のようにうねりシャマル、シグナム、ヴィータを次々と縛り上げていった。

「これって……一体……？」

なのはは疑問を口にする。　フェイトのリンカーコアを奪ったことや、クロノを攻撃したことから彼らはヴィータ達の仲間だという考

えを捨て切れずにいた。　なら、なぜ仲間であるはずの彼女たちまで拘束する必要がある？　なのはの疑問に答えるものはいない。

「この人数だと、バインドも通信妨害もあまり持たん。　早く頼む」

「ああ」

フェイトを蹴り飛ばした男が懐から一冊の本を取り出す。　それを見て、シャマルの眼の色が変わった。

「な……っ！　闇の書、あなたたちが持ってたのね！」

シャマルの言葉を無視して男は闇の書を開く。　何も書かれていない白紙の頁を開いて手をかざす。　闇の書が妖しい光を放ち始めた。

「が……ぁぁああっ！！」

ヴィータが突然苦悶の声をあげる。　いや、ヴィータだけではない、シグナムも、シャマルも同様に苦しみ出した。
三人の胸から引きずり出されるように現れたのは光を放つ魔力の塊、リンカーコア。
闇の書から三つの黒い光が伸び、彼女たちの魔力の源を吸い上げ始めた。

「最後の頁、不要となった守護者自らが差しだす」

「な……に……？」

男の冷たい言葉にヴィータは疑問を感じた。　そんなこと、仲間を糧にするなどという行為をした覚えは少女にはない。

「これまでも幾度か、そうだったはずだ……」

『Ｓａｍｍｌｕｎｇ（蒐集）』

闇の書から音声が響き、一気に魔力を飲み込んだ。

「あ、ああ……あああああああっ……」

悲鳴を上げるシャマルの体が光となって消えていく。
そして、シグナムの肉体も消滅していった。

「呪われたロストロギア、そんなもので誰かを救えるはずがない」

消滅していく騎士を見て、男はそう吐き捨てた。　彼女たちの希望を、斬り捨てた。

「シャマルっ！　シグナムっ！　…なんなんだ、なんなんだてめぇらぁ！！！」

「プログラム風情に知る必要はない」

「が、あああああああああ！！」

ヴィータの悲鳴が上がり、体が光の粒へと変わっていく。

「やめろ。　そいつはエサだ」

「む、そうだったな……」

蒐集が止まる。　ヴィータの体が力なくダラリと垂れる。　どうやら意識を失ったようだ。
仮面がなのはとフェイトに向く。　仮面で隠され、感情が見えない様が恐怖を抱かせる。

「次は、お前たちだ」

パチン、と男の指が鳴った。

はやては病院のベッドの上で眼を覚ました。　その目覚めは決してよいものではなく、悪夢からの目覚めに近い。　虫の知らせというやつか、胸騒ぎがする。
突如、血が逆流するかのような感覚がはやてを襲う。

「一体……何が起きてるんや……」

少女の疑問に、答える者はいない。

舞台は屋上にとまた戻る。

「なのはとフェイトはどうした?」

わずかに足を大地から離し、門番のように佇むふたりの男。

「四重のバインドにクリスタルケージだ、抜け出すまで数分かかる」

ふたりの間に、まるで生贄のように囚われたヴィータが頭を垂れて空中に磔になっていた。

上空には青い三角錐の中に閉じ込められたなのはとフェイトが必死にバインドをはずそうともがいていた。

「十分だ。　闇の書の主の目覚めの時だな」

「ああ、因縁の終焉の時だ」

ふたりの男がカードで顔をなぞる。　するとふたりの姿がなのはとフェイトに変わった。　バリアジャケットの色がわずかに違うが、それ以外は声すらも同じだった。

少女の姿へと変わったふたりの前にミッド式の魔法陣が展開。　一瞬の瞬きの後、陣の中心に茶髪の少女の姿が現れた。　はやてだった。

闇の書の影響か、苦しそうに胸を押さえる少女は自分を見下ろす2人に気付いた。

「なのはちゃん？　フェイトちゃん？　なんなん、なんなんこれ？」

事態が把握しきれていない少女を、ふたりは冷たい視線を向け続ける。

「君は病気なんだよ。　闇の書の呪いって病気」

「もうね、治らないんだ」

知り合いの突然の言葉に、はやては目を丸くした。

「闇の書が完成しても、助からない」

「君が救われることはないんだ」

冷たい言葉に、はやては頭を下げて俯く。　その様子を、少女の姿の悪意が薄い笑みを浮かべて眺めていた。

「そんなん……ええねん」

絞り出したような声が静かに流れた。

「ヴィータを、離して。　その子が何したっていうねん……」

「この子はね、もう壊れちゃってるの。　わたしたちがこうする前から」

「とっくに壊された闇の書の機能をまだ使えると思い込んでる、無駄な努力を続けてきたの……」

「無駄ってなんや！　シグナムは、シャマルは!?」

嗚咽の混じった声で叫ぶはやてに、偽のフェイトが顎をではやての背後を指す。

はやてが振り向くと、そこには彼女を守る騎士たちが着ていた服が、寂しく風にはためいていた。

はやての眼が見開かれた。　彼女は、全てを察した。

彼女の家族は、もういない。　あの楽しい日々は、もう来ない。

少女の瞳を絶望が塗りつぶす。

「壊れた機械は、役に立たないよね」

「だから、壊しちゃおう」

「なっ！？　ちょ、やめてえええええええ！！！！」

はやての懇願を、少女たちは嘲笑い、一蹴する。

「やめてほしかったら」

「力ずくでどうぞ」

ふたりが手に持つカードが光を発す。　はやてには、それが死神が振り上げる鎌に見えた。
涙の粒を散らして叫ぶはやてに、少女は優しく冷たく語りかける。

――――運命って、残酷だよね？

カードから解放された魔力が、ヴィータの矮躯を消し飛ばした。

「あ……ああ、あああああ……」

ドクン、とはやての中で黒い感情が蠢く。　少女はこれが何なのか分からない。
はやてを中心に三角形の、ベルカの魔法陣が展開した。　少女の頭上に、闇の書が舞い降りる。

『Ｇｕｔｅｎ　Ｍｏｒｇｅｎ，　Ｍｅｉｓｔｅｒ．　（お早うございます、ご主人様）』

純白の魔法陣が闇色に、優しい瞳が憤怒の紅に染まる。

「はやてちゃん！」

ようやくバインドから抜け出したなのはが声をかけるが、もはやはやてには届かない。

彼女の心は、自分の家族を失ったことへの絶望と、奪ったものへの憎しみで満ちていた。

そして、なのはたちは家族の仇としか認識していない。

仮面の男たちはすでにいない。

「ああ、あああ……あああああああああああああああああああああ！！！！！！」

はやての叫びとともに闇の光が踊り狂う。　闇が主の誕生を祝福するかのようだ。

『Ｆｒｅｉｌａｓｓｕｎｇ』

濁った輝きがはやてを包み、その姿を変貌させていく。

少女の手足が引き伸ばされ、幼い体が成熟した女の体へと変わる。

　優しい茶色い髪が冷たい銀に、肩にかからなかった髪が腰まで届く長髪に。

女の手足を赤い帯が戒めのように絡みつく。　顔に浮かぶ赤い線が浮かび、血よりも紅いその紅眼が少女の怒りを象徴する。

背中と耳元から三対の、計六つの漆黒の翼が広がる。　闇色のジャケットが彼女の心を映し出す。

変身を遂げた女が空を仰ぐ。　曇天に包まれた空を、哀しく見つめる。　ふたつの紅眼から涙が流れる。

「また、終わってしまった。　いったい幾度こんな悲しみを繰り返せばいい」

はやての変貌に、なのはたちはただ驚くだけだった。　だが、それでも一つだけ分かった事がある。

「我は闇の書、力のすべては……主の願いをそのままに」

闇の書が完成した。

闇の書の完成を、怜治は本局で見ていた。
グレアムが出したモニターにその一部始終が映っていた。

「おお、ついに！　ついに闇の書が完成した！　これが最後だ、呪われた魔導書の最期がやってきたのだ！！」

グレアムの歓喜の声に、怜治はぎしりと歯を噛みしめる。
彼らが八神はやてにした仕打ちに、怜治は怒りしか感じなかった。
手の平に爪が食い込み、うっすらと血がにじむ。

「てめぇってやつは……月村ん時といい八神といい、どんだけガキにひでぇ仕打ちしやがる！」

怜治の言葉に、グレアムの視線が戻る。

「非道い、か。　彼女にとってもこれが救いだと何故分からない」

「なんだと……」

「“いったい幾度こんな悲しみを繰り返せばいい”　いま闇の書が言ったことだ。　彼女も力を振りまわし、破壊をもたらすことを嘆いている」

ならば、とグレアムは言葉を一旦切る。　そして。

「ここで殺してやるのも彼女のためではないか？」

プツリと、怜治の中で何かが切れた。

「――――てっめぇえええっ！！！」

怜治が怒号をあげてグレアムに飛びかかる。
エリシオンの刃が脳天に振り下ろされた。

「意外だね。　なかなか熱血じゃないか」

ガキンとグレアムの杖が刃を防ぐ。　そのまま杖をまわして剣を払い、怜治の腹に杖を突き刺す。

『Ｂｌａｚｅ　Ｃａｎｎｏｎ』

ゼロ距離からの砲撃、怜治の体を閃光が飲み込み廊下の突き当たりに叩きつけた。
グレアムはゆっくりとした歩みで怜治に近づく。　怜治のバリアジャケットは土手っ腹に風穴があき、ところどころ焼け焦げ損傷していた。

グレアムは怜治を見下ろす。　青年はピクリとも動かない。　本気の砲撃であったのだから、動ける方がおかしいのだが。

「残念だよ。　あの人の孫を手にかけねばならぬとはね……」

そう呟いて杖を掲げる。　杖先に魔力刃が展開した。

『Ｐｕｓｈ　ｏｆｆ　ｔｈｅ　ｓａｆｅｔｙ』

音声が流れると、空間に殺意が満たされる。
グレアムが行ったのは非殺傷設定の解除、すなわち、制限されていた魔法による物理ダメージを戻したのだ。
刃が振り下ろされれば、それは怜治の体を裂き、赤黒い血と肉片をブチまけて彼を死に至らしめる。
グレアムにためらいはない。　長い管理局生活で人を手にかけたことなど経験済みだ。　なにより、怜治の力は危険すぎる。　制御（いうこと）の聞かない道具（まどうし）など、不要だ。

「さようならだ、松田怜治」

刃が振り下ろされた。

「下らぬ」

突然動き出した怜治の手が、グレアムの刃を握りつぶした。
グレアムの顔に驚愕が張り付く。　怜治の体から放たれるのは、どす黒い魔力。　その禍々しさにグレアムは本能的に後退を余儀なくされた。
ゆらり、と怜治は立ち上がる。　黒い髪が月光色に染まっていく、

黒い瞳が淀んだ翡翠に変わる、口元が狂気に歪む。

「く……くくくっ……くははははははははっ！！　なかなか、この器もなかなかよいではないか！　ほんの気まぐれに入り込んでみたが、この魔力！　この力！　光栄に思え塵芥、貴様は王の御眼鏡に適ったぞ！」

怜治の口から発せられる言葉を、グレアムは信じられないと言った顔で聞いていた。
グレアムの前で、月光色の髪をした怜治は笑い続ける。

「貴様……松田怜治ではないな、誰だ？」

怜治の笑いが止まる。　首を動かしグレアムを見る。

「我が誰かだと？　そうよな……」

顎に手を当て、考え込む怜治。　その様は、彼にはとても不相応に見えた。

「我は王。　闇の書の闇にして、この世全ての闇を統べる王！」

「闇の書の……闇」

「ふ、低能な塵芥にはこちらの方がわかりやすいか？」

「闇の書の防衛プログラム……とな」

ドクン、とグレアムは自身の心臓は跳ね上がるのを感じた。
闇の書の防衛プログラム。　それは闇の書が暴走する原因、そしてグレアムの部下が死ぬこととなった元凶。　それが今、目の前に人の形を成して立っている。

「ふふふ……よい眼だ。　殺意と憎悪がいい按配で混ざっておる」

「……何故だ？」

「む？」

「何故、彼の体に貴様がいる。　貴様がここにいるということは、海鳴にある闇の書は……」

「なんだそんなことか、つまらん」

がっかりした様子でため息を漏らすが、グレアムからしたら重要なことだ。
彼の計画では、闇の書が海鳴で暴走し、そのまま封じ込めるはずだった。　だが、暴走を起こす防衛プログラムが本局にいては彼の計画は頓挫してしまう。

「貴様も、こやつ……松田怜治と言ったか？　まぁそれが闇の書を騎士共から奪取したことは知っておろう？　その時この男、愚かにも闇の書の主になるなどと抜かしおったわ」

その時の事を思い出したのか、王を名乗る防衛プログラムは薄く笑う。

「一体どれほどのものかと思い、我は一部をこやつに忍び込ませただけよ」

「なら、海鳴の闇の書は……」

「安心せえ、本体はきちんと暴走する。　まぁ貴様の望み通りの顛末になるかは知らんがな」

話は終わりか？と防衛プログラムは尋ねる。
グレアムは黙って杖を握る手に力がこもる。　目の前にいるのは自らの仇敵、それを自身の手で破壊できる。　そのことへの喜びに、身体は怜治ということはとうに忘却の彼方に放り出していた。
ドンッ、とグレアムは突進。　殺傷力を込めた魔弾を展開し、杖には刃を宿らせる。
一気に距離をゼロにし、杖を振り下ろす。

「鈍(のろ)い」

防衛プログラムがエリシオンを振る。　白金色の杖は容易く黒杖を弾いた。　弾丸が一瞬で全壊された。
彼の背後にベルカ式の魔法陣が出現、膨大な魔力で組み上がった術式にグレアムは自身が総毛立つのを感じた。　明らかに怜治が持つ魔力量を超えている。
なぜ？という疑問は浮かぶとともに答えを得た。　怜治の中には防衛プログラムの一部が入っている、ならば、闇の書の魔力の一部もはいっているのではないか。
グレアムの考えを察したかのように、防衛プログラムは怜治の顔で禍々しく笑う。

「気付いたか。　聡明な者は嫌いではないぞ塵芥」

背後の魔法陣から三つの巨大な光球が現れる。　その光に、グレアムの視界が塗りつぶされる。

「褒美だ。　絶望をくれてやる、受け取れ塵芥」

白金の杖が振るわれた。　光球が膨らみ、弾けた。

「エクスカリバァァアアー――――――――――――!!」

破滅をもたらす極光が、全てを飲み込んだ。

第２７話　闇統べる王（後書き）

ん？　誰か忘れているような……ま、いっか☆

続いて感謝を。

ライサンダーさん、感想ありがとうございます。

あまりの嬉しさに踊り狂いそうになった作者です。

そして、質問を下さったクトルーちゃん　さんへの回答

“仮面組がすずかを操って怜治にぶつけた意味はあるのか？”

えー、まぁ順を追って説明していきますと←

グレアムの計画では、守護騎士から魔力を奪って闇の書を完成させ、なのはとフェイトそして怜治に闇の書が暴走するまでの時間稼ぎをさせて例の方法で闇の書封印。

←

でも怜治が独断で騎士たちから闇の書を受け取ろうとした。それを猫たちが妨害。

これが２３話。

←

２４話ですずか参戦。猫たちも負傷して、怜治の勝手な行動にグレアムピンチ。でも、怜治がダメならすずかに闇の書と戦ってもらえばよくね？と思いつく。まさにピンチはチャンス。

←

早速すずか洗脳。目的はすずかの実力の把握と怜治から闇の書奪取、後者は失敗しても猫が不意打ち喰らわせればＯＫ。これが２５話。

←

すずか、怜治に敗北。でも闇の書ゲットは成功。２６話に続く。

ちなみに、怜治がすずかに負けてたらすずかの洗脳は解けず闇の書とバトらせるつもりだった。　よくやった主人公！珍しくいいことしたな！

まとめますと、

グレアム的には「なんか素質ありそうだし戦わせればよくね？　役に立たなくても管理局入ってもらえばいっかー」

作者的には「せっかくすずか魔法少女化したんだからもうちょい戦わせてーなー」

みたいなことがあったりなかったり……。

答えになってるでしょうか？　まだ不明な点があったらまた。

第２８話　カウントダウン（前書き）

時々、他作家様の活動報告に出てくるバトンが
ジントさんから回って来ました。

まさか自分に来るとはと驚きましたが、
それ以上に次に回せる人が思い浮かばない自分の人付き合いの狭さに絶望しました。
というわけで、バトン回答はこちらに。

「その消えかけたバトンは俺が受け取ったぁああ！！」

というルール全力無視な方法がＯＫなら誰か拾ってあげて下さい。

回答

タイトル『回す人５人の名前を題名にしてビックリさせるバトン』

ルール
　必ず回すということ。
　回す人五人をタイトルにして驚かせましょとのこと。

突然来たんでビックリしてます。

☆名前・年齢・職業

剣静　１９歳　大学生

☆資格

英検、ＰＣ検、そろばん、書道、ｅｔｃ……
何級とかは覚えてません。
あ、あと免許か。　普通自動車免許。

☆今の悩み

バイトしたいけどレポートで時間がないことでしょうか

☆自分の性格を一言で

めんどくさがり屋？
でも途中で投げ出したことはないな……。
好きなものだけに関して頑張る性格なんだろうか。

☆誰かに似ている

アンパンマン。
中学時代ですよ？

☆社交的ｏｒ人見知り？

人見知り。
でも一回仲良くなると結構しゃべる。

☆ギャンブルは好き？

興味ないかな。
金賭けないなら面白そうなんだけどな。

☆好きな食べ物・飲み物

納豆　餃子　うどん……炭水化物ばっかだなオイ。
飲み物なら　紅茶　烏龍茶

☆嫌いな食べ物・飲み物

豆腐　トマト　マカロニ　魚介類　キノコ類　ｅｔｃ

☆理想の彼氏（彼女）のタイプを５つ

１、天真爛漫
２、趣味が合う
３、一緒にいて楽しいと思える
４、黒髪ロングヘアー
５、自分より背が低い

☆彼氏（彼女）とケンカしたら自分から謝る？

彼女なんかいたことねぇぜ！！！！！！！！！

多分尻に敷かれる気がするから自分から。

☆親友と呼べる人は何人？

５～８人くらい

☆バトンを回してくれた人は？

ジントさん。
いきなりでビックリしました。

☆人生談

小学校はサッカー部　読書に目覚める。
中学校はパソコン部　ラノベに目覚める。
高校は　科学部　アニメに目覚める。
大学では無所属　二次創作に目覚める。

☆何の為なら一肌脱ぐ？

友達？　疑問形なあたり情けないな……。

☆この為なら一食抜ける！

抜けない。

☆趣味・特技

趣味：読書　ゲーム　音楽・ラジオ鑑賞　小説執筆
特技：タッチタイピングぐらいしか思いつかんな……。

☆今行きたい所は？

リリカルパーティが開かれるのは埼玉だったか……。
まぁチケット無いから意味無いんだが。

☆今自由に使えるお金があったら？

なのはのＢｌｕ－Ｒａｙ　ＤＶＤシリーズの大人買い。
もしくはワンピのコミックス大人買い。

☆将来の夢

いまいちはっきりしていない……。

☆その為にしている事

とりあえず一日一日頑張ってます。

第２８話　カウントダウン

「ついに、完成してしまったのですね……」

地球から遥か離れた次元世界、ミッドチルダの北方。　そこに建てられた教会の一室から声が聞こえた。

声の主は少女だった。　黄金の髪に紫のリボンが映える。

まだ幼さの目立つ顔立ちだったが、その瞳は凛としたものだった。

少女は自分の目の前に広がるモニターを見つめていた。　彼女の秘書が送信してくれる画面に紅い瞳から涙を流す女性が映った。　それはなんとも悲しく、そして恐怖を感じさせるものだった。

少女はこうなることを、何カ月も前から知っていた。

預言者の著書（プロフェーティン・シュリフテン）。

最短で半年、最長で数年先の未来を詩文形式で書き出した預言書の作成を行う。　ようは未来を知ることができる能力。　それが彼女の希少技能（レアスキル）だ。

一見便利に見えるがその内容のほとんどが何かしらの騒動、事件を預言したものだ。　そして、それを彼女は自分の力で阻止することはできない。　毎回、管理局に報告し預言の阻止の成功を祈るしかなかった。

歯痒かった。　ただ自分は無責任に預言を読み上げ後は全て他人任せ、そんな自分の非力さを少女は恨んだ。　だが、恨んだところでこの力は消えない。　事態は良くならない。　幼いながらも少女はそのことを理解していた。

だから、少女は目をそらさない。　自分の預言の結末を見届けるために。

この画面の向こうで戦っている者たちの無事と、事件の解決を祈るだけ。

まるで呪詛のように、少女はその言葉を心に刻みつける。

「ちょっと、根を詰め過ぎなんじゃない？　姉さん」

部屋のドアが開くとともに少し高めの少年の声、そして甘い匂いが部屋に飛び込んできた。

部屋に入ってきた少年の手には皿いっぱいにシュークリームが積まれていた。

「ロッサ……」

ロッサと呼ばれた少年は男にしては長いグリーンの髪をなびかせながら、洋菓子の乗った皿を机に乗せた。

少年は少女のことを姉さんと呼ぶが、このふたりの間に血縁関係はない。　それでも、彼は少女を姉と慕っていた。　責任感の強い少女の事を気にして差し入れしてくるのがその証拠だ。

「そのお菓子は……またあなたの手作り？　それになぜあなたがここに？　シャッハと一緒に地球で戦っているのかと思ったわ」

「まさか！　ぼくの能力は戦闘向きじゃないからね。　足手まといになる前に帰ってきたよ」

戦闘に向いていないのではなく戦闘に使わないだけでしょ、という言葉を少女は飲み込んだ。

少年が戦うことを好いていないのは知っているし理解もしている。

男なら、などと古臭い小言を言うつもりも、お菓子作りの趣味を否定する気もない。　が、もう少しお菓子への情熱を戦闘訓練にも向けてほしいものだと少女は切に願う。

そんな義姉の想いを知ってか知らずか、少年は笑みを浮かべたまま言う。

「猟犬を何頭か残したきたし、それに、このシュークリームはぼく製じゃなくて地球のお店で買ったの！　名前は確か……翠屋！　いいね。　ぼくの髪の色と同じ名前だ」

そう言って少年は洋菓子を一つ取ってかぶりつく。

「おいしー！」と良い笑顔を浮かべる義弟に、少女は呆れた視線を投げる、

「……経費で落としませんよ」

「大丈夫。　お代はシャッハの財布から拝借したから」

「……殺されても知りませんよ」

「そこはほら、かわいい弟のために姉さんが……ね？」

はぁ、と少女はため息をこぼし、どこか諦めた風で義弟の差し入れに手を伸ばし、口に入れる。　優しい甘さが口いっぱいに広がり、さっきまで心に溜まっていた不安が霧散していく気がした。

おいしい、と少女の呟きに少年は小さく笑みをこぼす。　が、すぐに真剣な眼差しに変わる。

「それで……どう？」

「ここまで、預言はほとんど当たってます。　ですが、まだ希望は残ってます。　希望の糸は、すでに彼らの前にあり、あとは、それをつかむだけです」

「つかむだけ……か。　それが簡単にできればどれだけいいか」

「容易でも、困難でも、わたしたちは信じるだけです。　彼らの力を……」

少女の言葉に、少年は「そうだね」と静かに頷いた。

魔法少女リリカルなのはＡ’ｓ　☆Ｔｈｅ　Ｒｉｄｅｒ☆　第１３話　カウントダウン

電気による灯りが無くなった艦内を、アラートの警報と赤い光が照らす。
艦内を蔓のようなものが駆け巡り、侵食していく。
この異形の物の襲撃に乗組員はパニックを起こして逃げ惑う。

「くそっ、もうダメだ！」

武装した魔導師の１人がそう言った。
破壊しても伸び続けるその蔓に、何もできず退却していく。
艦内がパニックに陥る中、制御室で必死にコンソールを打ち続け、モニターを睨みつける男が１人。　男の艶のある黒髪が頭部から流れる血でわずかに汚れていた。
部屋の一部が爆発。　衝撃が振動となって艦を揺らす。
男はついに通信機器の復旧に成功、慌てて他の艦と連絡を取る。

「こちら、二番艦エスティア！　闇の書の暴走止まりません！　駆

動炉も、ブリッジも奪われました！」

通信機に向かって放たれた男の叫びがブリッジに木霊した。

部下からの絶望的な報告を、グレアムはエスティアの前を進む艦船内で聞いていた。

ノイズの混じった粗い映像越しに、傷ついた部下の顔を見ていた。

『操舵システムと、アルカンシェルのコントロールを……』

「エスティア、アルカンシェルのチャージ反応！」

「発射軌道上に本艦隊！」

スタッフの報告に、艦内に衝撃が走る。

「クライド提督、脱出を急げ！　エスティアは破棄する！」

グレアムの言葉を、クライドは落ち着いて聞いていた。　そして、落ち着いた声で返す。

『先程、全クルーの避難を確認しました。　こちらのアルカンシェルのチャージはあと一分程度で完了してしまいます』

クライドの言葉に、グレアムは嫌な予感を感じた。

『こちらのチャージタイムのカウントを出します。　発射前に――――』

ノイズが走り、クライドの言葉は中途半端に途切れてしまった。
だが、グレアムは彼が何を言おうとしていたのか察した。
アリアがクライドが送ってきた残りのチャージタイムを告げる。
６８秒。
もう、何か手を打てる時間は残っていなかった。

「こちらはチャージ完了しています。　いつでも撃てます」

アリアの感情を殺した声が響く。
グレアムは、決断した。

「アルカンシェル、バレル展開。　カウントゼロの前に、エスティアを……落とす」

作業はあっという間に進んだ。　あとは、グレアムが発射を宣言するだけ。
撃てと、彼はためらうことなくそう言った。

グレアムは全身を駆け巡る痛みで目を覚ました。　なつかしい過去を夢に見た。　何故いまさらあんな夢を見たのか、彼には判らない。
夢のせいか、次々といろんなことを思い出した。
あのあと見たのは魔導砲の光に飲み込まれ、花火のように消えていく艦船。　そして、その艦船には彼の部下が乗っていた。
いま思い出せば、あの事態は自分の甘さが招いたものだ。　闇の書の暴走により艦船が乗っ取られるなど、予想もしていなかったことだった。

誰もグレアムを責めなかった。　死んだクライドの妻さえも　そのことが、かえってグレアムを苦しめた。　誰も責めなかった分だけ、彼は自分自身を責めた。
そして、もうあんな悲劇は二度と繰り返さないと決めたのだ。　もう二度と、闇の書の犠牲者などださぬようにと。

記憶を辿り終わると、やっと今の自分の状況に気付いた。
バリアジャケットは半分近くが消し飛び、手に握る杖には亀裂が入っていた。
グレアムは立ち上がりながら魔力を消費してその両方を修復する。
　かなりの量を持ってかれたが、相手を考えれば安いものだ。
周囲を見渡す。　そして、絶句した。
自分の周りにはまるで嵐が通り過ぎた後かのように瓦礫の山が広がっていた。
なにかひとつでもグレアムに直撃していたら彼は死んでいただろう。
　自身の強運さに感謝。
前を向くと、自分がさっきまで怜治と戦っていたはずの施設がまるで巨大な生物にかじられたかのように破壊されていた。
円柱の形をしていたビルのような施設が、まるでししおどしのような形に変貌していた。
上を向くと、本局の屋根が破壊され次元の海が覗いていた。
自分の周りの瓦礫はあの屋根の残骸なのだろうと分かった。

「これが、闇の書の力か……」

正しくはその数十分の一にも満たないはずの力だが、それでもこの威力だ。　グレアムは咄嗟に防御壁を多重展開しても先程の惨状だ。
　本来の力が暴走を始めたらどれほどの被害が出るだろう。
破壊された施設にも局員はいた。　そのうちのどれだけの人が命を落としたのか、考えるだけで闇の書への怒りが込み上げてくる。

「破壊せねばならない……こんなものは、存在してはならないのだ……！」

改めて、誓いを胸に刻んで英雄は前を向く。

鋭い眼光の先には、月光色の髪の魔導師がこちらを見下ろしていた。

「解せぬな……」

怜治の身体を乗っ取った防衛プログラムが呟いた。

彼が見下ろす先には年老いた英雄がこちらを睨みつけてくるが、彼は気にしない。

それよりも問題は先程の魔法だった。

「何故だ？　魔力は十分だった、術式にも狂いはなかった。　なのに、なのに何故この程度しか破壊できぬ？」

先程放った魔法は広域殲滅系、防衛プログラムの予想では最低でもこの本局の半分を壊滅できると踏んでいた。　なのに、結果はご覧のあり様。　建物一つ破壊できない半端な結果。　本来の威力の百分の一も出ていない。

「確かにあの老兵を殺すために多少範囲を狭めたかもしれぬが、何故あの男1人蒸発させられぬ？　残る可能性は……」

防衛プログラムの頭に、ふたつの可能性が上がる。

「小僧が我に干渉を？　いや、奴は夢に送ったばかり。　目覚めるには早すぎる」

では……、と
防衛プログラムの視線が、右手に握るエリシオンに降りる。

「成程、このデバイスが負荷に耐え切れず魔法の威力を減殺したか」

巨大な魔法を放った反動か、エリシオンの全体に亀裂が走り、コアまで損傷している。　修理するより、一から造り直した方が早いだろう。

「まったく、なんという安物を使っておるのだ。　どうせ手入れも怠って……む？」

ふと感じた違和感が言葉を遮った。

「小僧用に調整されておらぬ？　……さてはこの杖、もともと小僧の物ではないな」

なんてことだと呟く。　武器としてそのまま使うアームドデバイスならまだ許せるが、ミッド式のデバイスを自分用に調整しないなど言語道断。　魔導師として恥ずべき事であった。

「まったく、素質はあっても魔導師としては半人前か。　拾ったデバイスがちょうど自分に合うなど奇跡だろうに……」

その奇跡に会った少女が1人いるし、怜治とスタンの相性の良さもそれに当たるが防衛プログラムは知る由もない。
エリシオンを指輪に戻し、何もないはずの空間に手を伸ばす。
そして、抜刀するように一気に振り抜いた。

『ちょおおおおおおおおっ！！？』

絶叫をあげてスタンが空間を超えて現れた。
防衛プログラムは無理やりスタンを大剣形態（ブレイドフォーム）に切り替え、床に突き立てる。　いつもなら紺色の魔力刃が、漆黒に染まっていた。

『テ、テメェ！　いきなり何しやがる！　というか何でオレの場所わかった！？』

「よく言う。　貴様とて我の本体を見つけたではないか。　貴様にできて我にできぬ道理はない」

つまらんことを聞くなといった風に防衛プログラムは続ける。

「それに、何をしやがるとは我の台詞よ。　勝手にこの建物の人間を助けおって」

『ムグ……』

「まったく、雀の涙程度しか残らぬ魔力を消費して塵芥の命を救うなど、酔狂なことだ……。」

『悪かったな。　こちとら酔狂でもなんでも、他人のケンカに巻き込まれて人が死ぬざまなんざ見たくないもんでね！』

文句あるか！とスタンは言う。
防衛プログラムは理解できないといった表情だ。
そして、

「さて、貴様の力を我に預けよ、あの老兵を素手で屠るには骨が折

れる」

『いきなりだなオイ。　……イヤだって言ったら？』

「我は口下手でな。　説明ではなく実践することになるが？」

『……遠まわしにレイジを殺すって言ってる？』

「かなり直接的に言っておる。　我は所詮枝葉、ここで滅んだところで本体にはなんの影響もない」

答えは？と怜治の身体を乗っ取った闇が問う。
スタンに選択肢はなかった。

『あのオッサン倒したら相棒の身体返せよ！』

「そうよな……本体に戻る機会があれば返してやる。　せいぜい我のために尽くせよ鉄屑」

スタンを抜き、肩に担いで下方に視線を向ける。
こちらを睨みつける英雄の眼光と交わる。
闇の主は邪悪な笑みを浮かべ、飛んだ。

本局での戦いは激しさを増していく。

「なのはゴメン、ありがとう…大丈夫？」

「うん、大丈夫……」

ビルの物陰に隠れて、フェイトがなのはに心配の声をかける。
なのはは渋い顔をしながら右手をさすっていた。　闇の書が放った魔法をなのはが防いだのだが、その衝撃は魔法壁越しにもダメージを与えたようだ。
フェイトはそっと物陰から顔を出す。　ふたりのいる数十m先に、闇の書がいた。　姿ははっきりと見えないが、彼女からあふれ出る魔力で場所は把握できた。　先程の魔法から、闇の書は動いてはいない。　おそらく探査魔法でもかけているのだろう。　なら、この場所が見つかるのも時間の問題だ。
フェイトは集まった情報を頭の中で解析する。

「あの子、広域攻撃型だね。　よけるのは難しいかな……」

そう言って、フェイトはバルディッシュに防護服（バリアジャケット）を元に戻させる。
ソニックフォームより防御をピンポイントで強化したいつものライトニングフォームへと換装、フェイトの速度でも広域魔法をかわしきるのは難しいと判断した。
なのはもレイジングハートを握りしめ、戦闘態勢へと思考を切りかえる。

「なのは！」
「フェイト！」

聞きなじんだ少年の声と同じく女性の声が響いた。
声のした方向を向くと、ユーノとアルフが向かって来ていた。

闇の書は涙を拭う。　涙腺を刺激する悲しみは、彼女のものではな

い。　彼女の顕現の触媒となった主が抱いた悲しみだ。　そしてその悲しみは黒い願望を構築する。

「主よ、貴女の望みを叶えます」

闇の書の足元に黒い魔法陣が展開する。

「愛おしき守護者たちを傷つけた者たちを……今、破壊します」

『Ｇｅｆ？ｎｇｎｉｓ　ｄｅｒ　Ｍａｇｉｅ（魔力封鎖）』

闇の書を中心に、黒い波動が放たれた。
波動がその周囲全てを包み込み、内部のもの全てを閉じ込める。
守護騎士たちの使っていた封鎖結界だ。
魔力によって塗り替えられた空気が不快に漂う。
魔力の波を当てられながら、なのはたちは自分たちが狙われていることを改めて実感する。
闇の書に、はやてにとって今の自分たちは家族を傷つけた仇なのだ。
誤解を解くのは難しいだろうとフェイトは判断した。

「クロノとレイジはっ！？」

「クロノは出撃するっていう通信が入ってきたよ。　もしかしたらあの仮面たちのほうに向かったのかも。　怜治さんは……」

「未だ行方不明。　あのバカ、ホントどこ行ったんだろうね！　肝心な時に勝手な行動ばっか取ってまったく！」

「レイジなら来るよ、きっと。　それまで、わたしたちでなんとかしよう」

「いいや、こうなりゃアタシらだけで解決するよ。　そんでもってあのバカを一発殴り飛ばす！」

「そんな乱暴な……なのは？」

「え、あ、うん……大丈夫」

フェイトに呼ばれ、とっさになのはがそう答えた。

意識は闇の書に向かっていたのだろう。　仕方がない、姿形は変わってもこれから戦うのは八神はやてなのだ。　複雑な気持ちなのだろう。

それでも、戦わなければいけない。　戦わねば、もっと取り返しのつかないことになるのだから。

闇の書が移動を始めた。　黒翼を巨鳥のように羽ばたかせてこちらに向かってくる。

今一度、フェイトはこちらの戦力を確認する。

近接型の自分、後衛砲撃型のなのは、回復やバインドといった援護が得意なユーノとアルフ。　バランスが取れたパーティだが、たった四人で勝てるかと問われたら即答はできない。

相手は、いくつもの世界を、人を滅ぼしてきたロストロギアなのだから。

フェイトが先陣を切って鎌を振るい、闇の書の強化された拳とぶつかり合う。　金と黒が何度も空中で交差する。

ユーノがチェーンバインドを、アルフがリングバインドを発動。

魔力で構成された鎖とリングが闇の書に絡みつき動きを止める。

だが、闇の書の魔力で容易く破壊された。

そこへフェイトとなのはが砲撃を放つ。

『Ｐｌａｓｍａ　ｓｍａｓｈｅｒ』

『Ｄｉｖｉｎｅ　ｂｕｓｔｅｒ，　ｅｘｔｅｎｓｉｏｎ』

「盾」

『Ｐａｎｚｅｒｓｃｈｉｌｄ』

金と桜、ふたつの閃光が闇の書が生み出した障壁に阻まれる。
なのはたちはさらに出力は上げるが障壁は突破できない。

『Ｂｌｕｔｉｇｅｒ　Ｄｏｌｃｈ』

本の詠唱で、闇の書の周りに深紅の短剣がいくつも現れる。

「穿て、ブラッディー・ダガー」

短剣が発光、そして疾走。　弾丸と化した刃がなのはたちを撃った。
　爆煙が上がる。
闇の書は続けて詠唱を開始。

「咎人達に、滅びの光を」

闇の書が掲げた右手に円環の魔法陣が展開。　周囲に散った魔力の残滓が集束する。
それを見たアルフが顔を蒼くする。
形を成す桜色の光球、ミッド式、それは高町なのはの最大の砲撃魔法。

「星よ集え、全てを撃ち抜く光となれ」

「そんな、スターライト……ブレイカー？」

唖然としつつ、なのははクロノの言っていたことを思い出した。
闇の書はリンカーコアを喰らい、その魔法資質を吸収する。　つまり、なのはのリンカーコアを喰らった闇の書は、なのはの魔法を使えるのだ。

「アルフ、ユーノ！」

フェイトに呼ばれたふたりは即座に頷き、距離を取るため疾走する。
なのはもフェイトに抱えられる様にして急いで闇の書から離れる。

「貫け、閃光……」

闇の書の詠唱が続く。　すでに光球は彼女の身の丈をはるかに超えていた。

「フェ、フェイトちゃん！　こんなに離れなくても……」

「至近で食らったら、防御の上からでも落とされる！　回避距離を取らなきゃ！」

フェイトの言葉になのはは口を噤む。　今更ながら、自分の魔法の威力を凄まじさを実感した。
本来スターライト・ブレイカーに詠唱はない。　故に、どのタイミングで放たれるかも判らない以上、全速力で離れるしかない。
フェイトとなのは、アルフとユーノに別れ市街地を疾走する。
どんどん闇の書と離れていき、もう少しと思った時、

『Ｓｉｒ，　ｔｈｅｒｅ　ａｒｅ　ｎｏｎｃｏｍｂａｔａｎｔｓ

on the left at three hundred yards.（左方向３００ヤード、一般市民がいます）』

バルディッシュの報告に息をのんだ。

月村すずかは困惑していた。

はやてのお見舞いを終え、アリサと家路につく途中で起きた異変。

周囲の空気が塗り替えられ、不穏な空気が胸を圧迫する。

異常を感じさせる原因はもうひとつ。　いないのだ、街に人が誰ひとりとして。

時間帯的にまだこの辺りは人通りが多かったはずだとすずかは記憶を探る。

不安のあまり、胸に抱えた鞄をギュッ抱きしめる。

そこへ、金髪を揺らしてアリサが走ってきた。　異変に巻き込まれた他の人を探しに行っていたのだが、

「ダメ、やっぱり誰もいないよ！」

結果は芳しくなかったもよう、走りつかれたのと落胆とで肩が下がる。

アリサとすずかの視線の先にはどこか暗い街並みと桜色の光が妖しく輝いていた。　それがなんなのか、ふたりには判らない。

「とりあえず、逃げよう！　なるべく遠くへ！」

アリサがすずかの手を握って走り出す。　こういう時、一番に動き出すのはやっぱりアリサだなとすずかは思った。　そして、ただ茫然としていた自分が少し嫌になった。

集束砲の光が大きくなるのを尻目に見ながら、フェイトとなのはは飛行を止めて地上に降りる。　バルディッシュが見つけた民間人を砲撃から守るためだ。

なのはが舗装された大地に踵から着地、土煙を巻き上げながら数十m滑り停止した。　対してフェイトは信号機の上に着地、高い位置から民間人を探す。

バルディッシュから、こちらに近づく者がいるという報告を受け周囲を見渡す。　すると、なのはの視界の端が路地裏から出てくる人影をふたつ捉えた。

「あのー！　すみません、危ないですからそこでジッとしててください！」

「えっ？」

「今の声って……」

人影が振り向いた。　その場の四人、全員に衝撃が走る。

「なの……は？」

「フェイト……ちゃん？」

「アリサちゃん、すずかちゃん……」

なのはとフェイトが茫然と立ち尽くす。　可能性が０などと誰も言っていないのに、こうなることなど考えてもなかった。

いや、そんなことはいまは後だ。とにかく、空から振り下ろされる

閃光からこのふたりを守らなくてはいけない。
そう決意を固めた時、

「スターライト・ブレイカー」

極光が放たれた。
桜色の滅閃は大地に振り下ろされ、大気を震わせ、余波が巨大なドーム状の衝撃波を大地に生みだす。　拡散する魔力は津波となって街を飲み込んでいく。
フェイトはすぐさまカートリッジを2発ロード、アリサとすずかを半球型のバリアで包み込む。　そして未だ事態を飲み込めていないふたりの前に立ってラウンドシールドを展開、自信を守ると同時に、友人のための壁となる。
なのはも自信を守るためカートリッジを2発ロード、広範囲に防御壁を展開して衝撃に備える。
準備を整え終わると同時に少女たちを魔力の塊が飲み込んだ。　激流に流されまいと足を踏ん張り、防御に魔力を注ぎ込む。
自分たちを守ろうと必死の形相のふたりの背中を、すずかは静かに見ていた。
瞬間、心臓が跳ね上がった。
胸のつっかえがとれるように、自分の中で置き去りにしていた記憶が蘇る。

「あ、ああ……」

欠けていた記憶のピースがはまる、思い出した。
仮面の男に洗脳されたこと。
体の身体機能を魔法で強化されたこと。
松田怜治から闇の書を奪い返せという指令を受けたこと。
その指令に自分が従ったこと。

全て思い出した。

「あ、あああ…ああ……」

すずかの心を悔恨の苦しみが掻き毟る。

なんということだろう。　自分は、月村すずかは松田怜治に刃を向けた。

恩人のはずなのに、自分を助けてくれた人に、襲いかかった。

それにいたる過程などどうでもいい。　彼を、敵意を持って傷つけようとしたという事実がすずかの心を苦しめる。

同時に目の前の友人の姿が胸を締め上げる。　すずかを守ろうとするその背中が、少女の心を抉る。

まただ。　また、自分は守られるだけで何もできないのか。　アリアが握ってくれた手に力がこもる、アリサの顔が痛みで歪むのも気付かず、すずかは手を強く握りしめる。

悔しい。　自分だけ何もできないのが、しようとしないのが。

違う。

あるではないか、自分にできることが。

持っているではないか、みんなを守れる力が。

すずかは鞄をさばくり、その力を取り出す。

自分を助けてくれた人とのつながりが欲しくて、接点を持っていたくて、そんな想いで肌身離さず持っていたもの。

その手に掴むのは赤いカード。　呼ぶのは夕日色の剣の名前――――。

「フランベルグッ！！」

カードが光り、すずかを群青色のバリアジャケットが包む。

夕日色の片手剣少女の右手に納まる。

驚愕する友人たちを尻目にすずかは膝を曲げ、一気に跳んだ。　星屑模様のマントがはためく。
フランベルグについた蓮根型のシリンダーが回転、二発の弾丸が地面に落ちて音を奏でる。
体を駆け巡る魔力を制御し、魔法を行使する。
フェイトの張った防御膜から飛び出ると同時に剣を前に突き出す。
剣がすずかの魔力を絶氷に換えていく。

『氷の路（アイスブファーデ）』

剣から放たれた氷弾が魔力の波を穿つ。　穿たれた穴は一瞬で広がり、なのはたちを魔力の怒濤から解放した。
氷弾が通った後は凍てつき氷のトンネルをつくりだした。

「すずか……ちゃん？」

なのはが恐る恐るといった感じで話しかける。
すずかからの返事はない。　少女の瞳はただ前、正確には今できたトンネルの出口越しに見える黒翼を広げる女性だけを見つめていた。
少女の瞳に怒りが燃え広がる。　視線の先にいる女性が何者なのかは分からない。　それでも、すずかの親友を傷つけようとしたのは確かだ。　すずかの重心が前に移動する。
なのはは驚いていた。
すずかがここまで怒りをはっきりと露わにしていることに。
なのはが知る月村すずかという少女は誰かを気遣う子だった。　それゆえに自分の感情を表にはっきりと出さない。　そんな彼女が、誰にでもわかる様に自身の怒りを露わにしていること、それはなのはにとって衝撃であった。

「ごめんね……黙ってて」

すずかの声が響いた。　剣を握る手を緩めず、少女が振り向く。

「ありがとう。　助けてくれて」

にっこりとした綺麗な笑みを浮かべ、月村すずかは飛んだ。
自身の魔力でつくったトンネルを流星の如く疾走していく。
向かってくる脅威に闇の書が迎撃態勢を取る。
握った拳の手前に砲丸サイズの鉄球が出現する。
放つのはあの紅い騎士の技。

「飛翔する燕（シュワルベ　フリーゲン）」

鉄球を殴りつけた。
鉄球が弾丸となって飛ぶ。　弾丸はトンネルに入り、真っ向からすずかを迎え撃つ。

『氷剣投影（コピール・ユヴェルト）』

紫氷の剣がすずかの空いた手に納まり、すぐさま投擲。
鉄球と氷剣が激突し互いに粉砕される。
すずかが速度を上げると、闇の書の手から黒光が放たれる。　が、すずかの方が一歩早かった。
間一髪、すずかがトンネルを抜けて真上に飛んだ瞬間に黒光がトンネルを貫き破壊した。
闇の書の頭上に飛んだすずかの左手に再び氷剣が握られる。
重力と強化された腕力、それを全て剣に乗せて闇の書に斬りかかった。
闇の書が展開した障壁とぶつかり、激しく火花が散る。

「――――はぁああっ！！」

すずかの咆哮。　障壁を切り裂き、闇の書を地に叩き落とす。　すぐさま追撃。

役目を終えたかのように氷剣は砕け散ったが、すぐさま新しい氷剣を手に握る。

闇の書が１０本の紅短剣を飛ばす。　すずかも迎撃する。　否、迎撃しろと誰かが耳元で囁いた。　どうすればいいか、その声が全て教えてくれる。

『投影十連（シュヴェルト・フン）』

すずかを守護するように十の氷剣が展開、疾走する短剣を全て撃ち落とした。

少女が闇の書の目の前に降り立つ。

「――――がっ……あ」

すずかの身体が反り返った。

少女の胸から、闇の書の手が伸びていた。その手の先にあるのはリンカーコア。

それは風の癒し手の魔法。

「旅の鏡」

闇の書の手がそっと伸び、コアを握り潰そうとする。

「っく――――ああ！」

フランベルグが一閃。　魔手を貫こうと突き下ろされた剣が空を切

る。
闇の書はとっさに手を引っ込めることで回避したが、同時にすずかがまた動き出す。
「どうしてですか……」
震える声で闇の書に問いかける。　闇の書は答えない。
「どうして、わたしの友達を傷つけようとするんですかっ！！」
怒声とともに氷剣が振るわれる。　が、闇の書の障壁の前に剣は砕ける。
すずかは即座に夕日色の剣を振る。　これも阻まれる。
少女は止まらない。　止まるなと自分でない誰かの言葉に従う。
再び氷剣を精製、振るう。
砕かれた。
――――もっと強く。
砕かれた。
――――もっと硬く。
砕かれた。
――――もっと鋭く。
砕かれた、けれど闇の書の障壁も切り裂いた。
すずかは剣を失った手を握り、拳をつくる。
カートリッジ一発分の圧縮魔力が身体を満たし、拳に集める。

違う。　これでは駄目だ。
頭の中で声が響く。　碌に鍛えていない自分が拳で殴れば逆に拳が壊れてしまう。
拳を解き、掌底に変える。
新たに障壁が張られる前に、すずかの掌底が闇の書の顔面を打った。
車に轢かれた人形のように闇の書の身体が吹っ飛ぶ。　が、すぐに体勢を整えて着地した。
ダメージを感じさせない表情、けれど打たれた部分は赤みを帯びていた。
血の色の瞳が、少女を射抜く。

「あなたも、主を傷つけるのだな……」

少女は切っ先を向ける。
闇の書がそっと手を挙げた。
黒い光球がすずかを殴りつけた。

どうして。
すずかの変身を見たなのはの頭の中を、その一言が埋め尽くす。
だが、

「（なのは！　なのは大丈夫！？）」

ユーノの念話が、思考に沈むなのはを現実に引き戻した。

「（大丈夫だけど……アリサちゃんとすずかちゃんが結界内に取り残されてて、すずかちゃんが魔法が使えて、えっと、ええっと――

――）」

「（なのは落ち着いて！　落ち着いて状況を説明して！）」

未だ困惑しているなのはに代わり、フェイトが状況を報告した。
すずかが魔法を使えることにはユーノも驚愕したが、戦闘中というのならまずアリサの救助を優先しようということになった。
ユーノがエイミィに通信を入れる。

『ん、分かった。　すぐに避難させる！』

「お願いします！」

言い終わると同時にアリサの足元に転送用の魔法陣が展開した。

「ねぇ、ちょっと！　いったい何がどうなっ――――」

アリサの言葉が終わる前に姿が消えた。
これで彼女は安心だと安堵するとともに、複雑な罪悪感めいたものが湧き出た。

「見られちゃったね……」

「うん、でも……」

フェイトが鎌を構える。　少女の視線の先には、まだ彼女の友人が戦っているのだ。
それを黙って見ているわけにはいかない。
なのはもそれは分かっており、黙った頷く。

「（ユーノ君、アルフさん。　アリサちゃんを守ってくれる？）」

なのはの提案にユーノはすぐに了承してくれた。
心の中で感謝の言葉を呟く。
そして、思考を戦闘に切り替える。
戦略を頭に描いているとエイミィから通信が入る。

『なのはちゃん、フェイトちゃん、艦長から連絡。　闇の書の主に、はやてちゃんに投降と停止を呼びかけてって！』

「わかりました！」

通信が終了、なのはたちは目を閉じて思念通話を闇の書に向ける。
轟音、そして衝撃波がふたりを襲う。
驚いているふたりに向かって、人の形をしたものが飛んできた。

「すずかちゃん！？」

飛んできたすずかを受け止める。　出血はない、骨にも異常があるわけではなさそうだった。
その向こうから、闇の書が地を這うように滑空してくる。
恐怖が一瞬湧き上がるが抑え込み、エイミィの指示を実行に移す。

「はやてちゃん、いや闇の書さん！　止まってください、ヴィータちゃんを傷つけたのはわたしたちじゃないんです！」

なのはの言葉に、すずかは耳を疑った。

「あれ……が、はやてちゃん？」

すずかの小さな声は誰にも聞こえなかった。
そして、闇の書が口を開く。

「我が主はこの世界が、自分の愛する者たちを奪った世界が悪い夢であってほしいと願った。　我はただ、それを叶えるのみ」

覚醒時のはやての感情からか、闇の書の声は悲しみを孕んでいた。

「主には、穏やかな夢の内で永久（とわ）の眠りを。　そして、愛する騎士たちを奪った者には……永久の闇を！」

闇の書の足元に黒い魔法陣が展開、少女の呼びかけに彼女は応えない。

「闇の書さん！」

「お前も……その名で私を呼ぶのだな」

舗装された大地が割れる、地の底から這い出るように大蛇の尾や触手が現れた。
それはあっという間になのは、フェイト、すずかに絡みつき縛り上げる。

「私は、主の願いを叶えるだけだ」

「願いを、かなえるだけ？　そんな願いをかな叶えて、それではやてちゃんは本当によろこぶの？」

絞め上げられながらも、なのはは闇の書に問いかける。

「心を閉ざして、何も考えずに主の願いをかなえるための道具でいて、あなたはそれでいいの!?」

「……我は魔導書、ただの道具だ」

冷たい返答、けれどもその紅い瞳からは確かに涙が流れていた。

「だけど、言葉を使えるでしょ！　心があるでしょ！　そうでなきゃおかしいよ、本当に心がないんなら、泣いたりなんかしないよ！」

「この涙は主の涙。　私は道具だ、悲しみなど……無い」

「悲しみなどない？　そんな言葉を、そんな悲しい顔で言ったって誰が信じるもんか！」

フェイトの声が響く。　闇の書は何も言わない。
なのはが続く。

「あなたにも心があるんだよ、悲しいって言っていいんだよ！　あなたのマスターは、はやてちゃんはきっとそれに応えてくれるやさしい子だよ！」

「だから、はやてを解放して。　武装を解いて。　お願い！」

二度目の呼びかけ、その言葉にも闇の書は応えない。
ただ、この少女たちは優しいのだなと思った。　はやての、呪われた魔導書の悲しみを、まるで自分の事かのように共に悲しんでくれている。
けれど、差し出された手をとる資格など闇の書にはない。　その綺麗な手を、血に染まった手でとる資格など無い。

彼女は闇だ。　闇が光を求めるなど、蛾のように光に群がることなどできはしない。
闇はただ、光を拒み、時に飲み込み、終焉を見るだけだ。
闇の書の手に闇色の球体が納まる。　そこから感じる魔力にフェイトは総毛立つ。
動きが封じられている以上、開戦時のように防御はできない。　そして、防御せずにあの攻撃を耐え抜くことなどできない。

「闇に、沈め」

ふたつの影が疾走。　ひとつは獣、もうひとつは人。
獣の爪が一閃、なのはたちを触手から解放した。　人はそのまま闇の書に向かって疾走する。
フェイトは自分のわきを抜けていく人影を見る。
隆起した逞しい体躯、褐色の肌、獣の耳をはやした白い髪、青い騎士服。
フェイトは直に話したことはないが、その者を知っている。
その者の名は――――

「ザフィーラ……」

己の名を呼ぶ闇の書を、守護獣は無言で殴りつけた。
拳は障壁ごと彼女を飛ばす。

「蒼き狼……裏切るつもりか？」

「それはこちらの台詞だ管制人格、主の御友人をどうするつもりだった？」

「主を傷つけようとする者には闇を、守護騎士として当然のことだ」

それに、と一旦言葉を切り、

「そこのふたりの少女は主から守護騎士たちを奪った者たちだ。彼女達も守るつもりか？」

「だ、だから違うって！！」

ザフィーラが後ろを向き、なのはたちと目が合う。　獣の瞳に睨まれ、なのはは思わず息をのんだ。

守護獣の視線が横にいた獣に移動。　深緑に近い色をした魔力で構成された猟犬、先程なのはたちを触手から助けたものだ。

「詳しい経緯はそこの猟犬に聞いた。　シグナム達を消したのはこの者たちではない」

闇の書の眉が跳ねる。

誤解はないのだと、なのはは安堵の息をこぼす。

「それでも、守護騎士がいないことに変わりない。　主はそんな世界を望んでいない」

「だから、主ごと消すというのか……」

「それも、止む無し」

闇の書の手から黒球が飛ぶ。　それを、ザフィーラは障壁を展開して防ぐ。　さらに四方八方を障壁で囲み、そのまま圧縮。　黒球が虚空に消え去った。

この瞬間、守護獣と闇の書は完全に敵対した。

地響き、大地が割れ巨大な火柱が天を衝く。

「な、なに！？」

「早いな……もう崩壊が始まったか。　私も時期、意識を失う。そうなれば、すぐに暴走が始まる」

まるで世界の滅亡のような状況にも闇の書は動じず冷静に言う。

「意識のあるうちに、主の望みを叶えたい」

「くっ、高町なのは！　フェイト・テスタロッサ！」

「は、はい！」

「なんですか！？」

「頼めた義理ではないのは承知している。　だが恥を忍んで頼もう、主を助けるために協力してくれ」

えっ、と呟き、なのははフェイトと顔を合わせ、笑顔。

「はい！　こちらこそよろしくおね――――」

「ちょ、ちょっと待って！」

すずかの声が、なのはの同意の言葉を遮った。

三人分の視線が少女に集まる。

注目されて体が強張るも、言葉を紡ぐ。

「あの、真っ先に斬りかかったわたしが言うのもなんだけど、戦う

ってことは……傷つけるの？　はやてちゃんを？」

沈黙が舞い降りる。

なんと説明すればいいのかとフェイトは悩む。

すずかにとってはやては大切な友人だ。　その想いはなのはやアリサと同等だろう。

はやてが大切というのはザフィーラも同じだが、彼は闇の書の主のために戦い続けてきたのだ、彼に躊躇いはないだろう。

だがすずかは違う。　どういう経緯で魔法の力を手に入れたのかは知らないが、彼女に友人に刃を向けろと言うのはあまりにも酷だろう。

フェイトがかける言葉が見つからずにいると、なのはが一歩すずかに近づく。

「傷つけるんじゃないよ……」

その顔に不安の色は無い。

「助けるんだよ」

その言葉が、その希望を捨てない明るい笑みが、少女の不安を消し去った。

「そうだね、そうだよね。　友達……だもんね」

うん！　となのはが頷く。

少女たちと守護獣、本来なら敵だったもの、あるいは無関係だったものが今、

１人の少女を助けるために手を組んだ。

滅亡のカウントダウン、それが０になるまで、彼女たちは諦めない。

怜治はまどろみから目を覚ました。
頭が重い。　体が浮くような違和感がある。

「どこだ……ここ……」

周囲を見渡す。
自分はさっきまで管理局の本局にいたはずだ。　なのに、ここはその面影もない。　四方が壁に囲まれ、壁には子供向けのアニメのポスターが、床にはおもちゃが入っている箱がふたつみっつと置かれていた。　木製のクローゼットにドアがあり、薄い水色のカーテンの隙間から朝日が差し込んでいた。
まるで子供部屋だと怜治は思った。
怜治はそのベットの上に横になっていた体を起こす。
別の場所に飛ばされたのだろうかと一瞬考えるが、その理由が判らない。

「ん？」

ふと違和感を感じた。　自分の手はこんなに小さかっただろうか。
　何故自分はこんなチェックのパジャマのような服を着ているのか。
ゾッとする想像が頭をよぎり、慌ててベッドから飛びおりる。
そして気付いた。　怜治の身体は幼少時に戻っていることに。

「マジかよ……」

膝を抱えてその場に丸くなる。　予想外すぎて頭が現状についてこ

ない。
そんななか、ドアの向こうから誰かが向かってくる音がした。
足音はどんどん近づき、バタン！と派手な音を立てて開かれた。

「怜治！　いつまで寝てるの、学校遅刻するわよ！」

現れたのはエプロン姿の女性。　腰に手を当て、ご立腹だということを示す。
怜治はこの女性の事を知っている。　忘れるわけがない。

「さぁ、さっさと朝ごはん食べちゃいなさい」

松田円奈（えんな）。　怜治の母がそこにいた。
部屋を出ていくかつての母の背中を、怜治は黙って見ていた。

これは夢。　闇の書が吸収した者に見せる、その者が深層意識で望む夢。

誰もが脱出を躊躇う虚構の牢獄（らくえん）。

第２９話　竜人（前書き）

なのはＴｙｐｅを購入。
フェイタルフェイト、連載されないかな……。

最新ゲームはまたもＡ－ｓ。
タイミング合えば組み込んでみようか……。

第２９話　竜人

火柱が上がる。
滝の流れを逆再生するかのように炎が伸び、曇天を貫き、天を衝く。
地響きが重く唸りを上げる。
結界によって淀んだ空が茜に染まる様子を、１人の老人がジッと見上げていた。
両側の即答部のみに白髪を残し、他の場所はきれいに剃られた禿げ頭の老人。　左手に赤く塗装された工具箱を、右手には黒曜石のように艶のあるナイフのような石が握られている。
いつもの作業着を着たまま、老人は異質な空を睨みつける。

「崩壊が始まったか……」

忌々しげにつぶやくと、老人は歩き始めた。
避難するのではなく、むしろ逆。　老人はこの災厄の中心へと向かう。
急ぐわけでもなく、慌てるわけでもなく、老人は一歩一歩を踏みしめて歩く。

「もうすぐ、全部終わるからな。　ミリィ」

老人の言葉は誰の耳にも届かず、ただ風に流され、そして溶けていった。

魔法少女リリカルなのはＡ’ｓ　☆Ｔｈｅ　Ｒｉｄｅｒ☆　第１４話　竜人

ガキンと鉄が折れる音が響く。
ロッテの足元に鉄が落ちる。　彼女の手には真ん中から折れた剣があった。
敵の剣を折ったシャッハはさらに一歩踏み込む。　ロッテは大きく後ろに飛んで回避。

「逃がしませんっ！」

「逃げるなんてしないよっ！」

言い返しながらロッテはカードを一枚取り出し、シャッハに投げる。
カードは修道女に届く前に発光、そして爆発。　轟音は聴覚を、黒煙が視覚を封じる。
シャッハは即座に双剣を振って黒煙を切り裂く。
だが、確保された視界にロッテの姿はなかった。

「なんですか、本当に逃げてるじゃないですか」

小言を口にしながらシャッハは乱れた息を整える。
彼女の使う魔法は守護騎士と同じく接近戦での対人特化のベルカ式、それとほぼ互角に戦うロッテはかなりの兵（つわもの）だろう。

「さすがは、英雄の使い魔ということですか……」

「お褒め頂きありがとう」

背後から声。　身を翻して飛び退くと今さっきまでいた場所にロッ

テの爪が一閃。　コンクリの大地を砕いた。
攻撃をかわされ襲撃者は舌打ち。　そのまま両手を大地に置いて四足獣の姿勢を取った。
シャッハは双剣を構え、ロッテを見据える。
先程と何か違う。
ロッテの体からは目に見えるくらいに魔力が溢れだしていた。
リミッターを解放したのか、または魔力増強用の魔法でも使ったのか、どちらにしろ、ロッテはその魔力を身体強化に回しているようだった。
近接型のリーゼロッテが全身を魔力で強化。　その効果は、想像するだけで寒気がした。
ロッテが大地を蹴って弾丸の如く疾走。　魔力を帯びた爪が伸び一閃。　シャッハの双剣の刀身を削り取る。
シャッハがカウンターを放つ、ロッテは腕でガードしそのままバク宙して距離を取った。
修道女は曲げた足を伸ばして距離を詰める。　するとロッテの手から何かが放たれた。　シャッハはすぐさま自分の前方に障壁を展開。
　飛翔物を弾きそのまま斬撃を叩きこむと脳内でシュミレーションする。
障壁に何かが当たった。
飛んで来た物を見て、シャッハの目が驚愕に開かれる。

「カードホルダー？」

しかも空。
呆気にとられたシャッハの顔に、使い魔の魔爪が襲いかかる。　体を捻って回避、猫らしいしなやかな肢体が脇を通り過ぎる。
顎に衝撃。　脳が揺れる、つられて視界が歪みひざが笑う。
すれ違いざまに顎を蹴りあげられたと気付くと同時に腹部に衝撃、骨が軋む嫌な音を耳に残しながら修道女の身体は吹っ飛び、四方を

囲むフェンスに叩きつけられた。
肺から逃げた酸素を掻き集めるように呼吸する。　息を整えながら集まった情報から結論を導き出す。

「なるほど、あのカードはカートリッジ同様の魔力の蓄積装置でしたか。　そして、あなたはカードに封じた魔力を全て解放し、自身の強化にあてた」

「正解だよ、教会騎士。　付け加えれば、あんたが叩き折ってくれた剣の術式を刻むのには結構苦労したんだ」

「それは、申し訳ありませんといえばよろしいので？」

ロッテは返答せずに突撃する。　魔爪と鋼刃が激突した。
そして始まる互いに両手両足を存分に使った体術の応酬、屋上の一角が、さながら台風のように砂塵を巻き上げる。

「どうして聖王教会があいつに協力するのさ！」

「彼には借りがあるものでして、今回はその返済とそれと……」

「それと？」

「個人的な理由です！」

シャッハの剣が魔爪を弾き、無防備になった腹に正拳突きが刺さる。
吹っ飛ぶロッテを修道女は追撃、斬撃を繰り出す。　使い魔は身を捻ってかわし着地、猫らしいとシャッハは思った。

「個人的？　言っとくけど、それは変な誤解を生みかねないよ。

ベルカ式使いの教会騎士が、闇の書の力を独占しようとしているとね」

「闇の書に関しての預言が出ている以上、そんな考えは曲解だと一蹴されるのがオチですよ」

何度目かになるだろう打ち合いをしながらシャッハは答えた。
それに、と一旦ことばを切って続ける。

「あなた方も、これ以上罪を重ねるのは止めた方がいい。　ロッサに証拠を押さえられたのでしょう？　大切な誰かを亡くされたのは辛いでしょうが、その苛立ちを年端もいかない少女に向けるのは筋違いというものです」

その言葉に、ロッテから怒気が噴き出る。
攻撃の激しさが増す。　シャッハの防御をすり抜け、爪や蹴りが容赦なく彼女を襲う。

「あんたに……あんたなんかに何が分かる！！」

攻撃とともに飛んでくるのは憤怒の叫び。

「小さな子供が自分の父の墓の前で茫然とする姿の痛々しさを！　たかが魔導書ひとつに何もできないことへの私たちの悔しさが！　辛さが！　悲しみが！　あんたに分かるものか！！」

シャッハの顎に膝蹴りが叩きこまれ体が浮く。
ロッテの両手が振るわれる。　全ての爪が閃く、十閃が放たれた。
シャッハの全身が切り刻まれ、バリアジャケットの破片が舞う。
体から噴き出た鮮血が屋上を朱に染める。

「だから！　今度こそ終わらせるんだ！　闇の書を封印して、もうクライド君みたいな人を、クロノのような子どもを作らないために、八神はやては邪魔なんだよぉっ！！」

ロッテの腕が伸び、シャッハの足を掴んでコンクリに叩きつけた。鼻の奥がツーンとする感覚に襲われながらシャッハは前転して体を起こす。　振り返ると目の前に魔爪が迫っていた。
とっさに双剣で防ぎ、横に飛ぶ。　すぐに追いつかれるかと思い、障壁を前方に展開させる。　が、追撃はいつまでたってもこない。上方から殺気。　慌てて跳んでその場を離れるとそこが抉られた。
襲撃者が下向きの放物線を描いてまた空に飛んでいく。

「今のはキメたと思ったんだけど……、勘がいいのかな？」

空から声。　視線を向ける。
ロッテが空からシャッハを見下ろしていた。　位置的な意味ではなく、侮蔑の意味も込めた視線。
シャッハは足に力を込めて跳躍。　渾身の力を込めて剣を振る。
修道女の反撃を嘲笑うかのようにロッテはわずかに上昇。　ギリギリのところで剣は空を切った。
ロッテの踵がシャッハの顔面に振り下ろされた。
赤い粘着液を振りまきながら落下。　受け身を取ったシャッハにロッテが空襲をかける。
魔爪から放たれる斬撃による爆撃。
シャッハはただ亀のように全方位に障壁を張るしかなかった。

「ははっ！　なんだ、あんた飛べないのかい？」

小馬鹿にしたような声が耳に届く。　その通りだと口に出さず肯定。

シャッハ・ヌエラは陸戦魔導師だ。　跳んだり跳ねたりはできても、なのは達のように自由に空を飛ぶことはできない。　森や建物といった遮蔽物として使えるものが多いところならまだしも、ビルの屋上という開けた場所では空戦魔導師にとって恰好の的だ。
ロッテは空爆を続ける。　猛禽のように動くヒットアンドアウェイ、確実にシャッハを守る障壁を削っていく。

「いいよ、このままジワジワ嬲ってあげるよ！！」

ロッテの言葉に言い返す余裕もない。
が、だからと言ってこのままただやられるつもりも毛頭ない。
見極めろ。
ロッテが空から攻撃を仕掛けるタイミングを。
見極めろ。
魔爪が障壁を削り取る瞬間を。
見極めろ。
敵が再び空に戻るタイミングを。
空にいる鳥に地を這う獣の爪は届かない。
けれど、鳥は獲物を取るために必ず地上に舞い降りる。　そして再び空に逃げる。
その瞬間を見逃さず、己が爪を以てその翼を叩き斬れ。

「ベルカの騎士を――――なめるなぁっ！！」

掴んだ。
空襲し、空へと舞いあがろうとするロッテの脚を、確かに掴んだ。
使い魔の身体をコンクリに叩きつける。　剣が閃く。　かわされた。
寸でのところでロッテは体を捻ってシャッハの斬撃をかわした。
そのまま大地を蹴ってバックステップ、屋上の外まで飛び出る。

「そこは――――――――」

シャッハの声はロッテには聞こえない。
ロッテはこのまま再び修道女の頭上に上がり、空爆を再開するだろう。
だが、それはできない。　双剣振るう修道女がそれを許さない。

「そこは、私の射程範囲だ」

双剣からカートリッジが弾ける。　圧縮魔力が体を駆け巡る。　脚に力を込め、重心を前に倒す。
ロッテが居る場所が例え空中でも、シャッハにとってそこはまだ地上なのだ。

「ヴィンデルシャフトッ！！」

旋迅疾駆。
シャッハが流星となって駆ける。
一筋の閃光は一瞬でロッテとの距離を零に縮める。
ロッテが驚愕する時にはすでに、シャッハの剣が目の前に迫っていた。

「こいつ……移動系！？」

なんとか剣をかわし、さらに距離を取ろうと速度を上げる。　が、振り切れない。
流星が使い魔を追いつめる。

「負けられないのは私も同じなんですよ！」

シャッハの声が夜空に響く。

「未来が知れるなんて下らない能力のために、その未来を知るたびに悲しげな顔をするあの子のために、誰か一人でも犠牲になると泣きそうな顔をするあの子のためにも！」

剣と爪が交錯、両者、オフィスビルへと突っ込んだ。
電気の付いていないオフィスに瓦礫に混じって室内の書類や機材が舞う。
四方八方全てがコンクリとガラス窓に囲まれた場所、空戦は不可能。
陸戦の利が発揮される戦場。
爪と剣が激突、火花が照明代わりにふたりの顔を照らす。

「誰ひとり、死なせるわけにはいかないんですよ！」

再度、双剣から薬莢が跳ねる。
魔力が満ちた剣がロッテの右爪を弾く。
シャッハの身体が反回転、右手の剣がロッテの左手を跳ねあげた。

「――――――烈ッ！」

一歩踏み込む、ロッテは回避行動に移れない。

「――――風ッ！」

しなった枝が元に戻る様に、抑えられたばねが弾けるように、シャッハの身体が回転する。

「一迅ッ！！」

風を切り裂く剛剣が、ロッテの頭に叩き込まれた。
使い魔は起き上がらない。

教会騎士は剣を掲げ、人知れず勝利を宣言した。

水色の光弾が疾走、標的にあたる直前に障壁に阻まれる。
黒衣を纏った少年が駆ける、黒杖を槍のように突き出す。　障壁が破壊された。

「甘いよ、クロノ」

標的である長髪の女性が言った。
すぐに現れた新たな障壁がクロノの魔杖を空中に固定した。
少年の腹に蹴りが刺さる。
呻き声をあげながらもクロノは後方に飛んで連撃を回避する。
距離を取って息を整えるかつての弟子を、リーゼアリアは静かに見つめる。
視線をクロノに固定しながら、意識を僅かにロッテにつなげた。
返答がない。　戦闘の様子が伝わってこない様子から、答えは一つだ。

「ロッテは、負けたみたいだな」

「そうみたいだね」

クロノの言葉に、静かに肯定。
信じられない事態ではあったが、状況からそれしか考えられないのだから仕方がない。
意識をクロノに戻す。
少年は息を整え終え、己の杖をまたこちらに向けていた。

「君も、いますぐ投降すればまだ間に合うぞ」

「それはこちらのセリフだよクロノ。　闇の書の暴走が近づいている今、私たちが封印しなければ取り返しのつかないことになるよ」

「だからといって、八神はやてを犠牲するなんて手段に、僕は頼らない」

「そんな甘い事、言ってんじゃないよ！」

ダンッ、とアリアはコンクリの大地を蹴りつける。　青黒い魔縄が伸びる、数は四本。
クロノは即座に魔法を紡ぐ、現れるのは水色のスティンガー。　数は同じく四つ。
斉射。　同時に大地を蹴って再度アリアに突撃をかける。
スティンガーがアリアの放ったバインドを切り裂く。
アリアが繰り出す魔弾をかいくぐり、ついに彼女の懐に潜り込む。
クロノの行く手を阻む障壁が展開、けれど、少年は思いっきり杖を振る。
杖先が発光、障壁を切り裂いた。

「ッ！！」

アリアは咄嗟に後方に飛ぶ。　光刃が服を掠めていった。

見ると、クロノの杖先に魔力刃が展開されていた。

「魔力刃（ブレード）の展開……私になら、ロッテじゃないなら接近戦で勝てると思ったの！」

心外とばかりにアリアは両手に魔力を込める。

握った拳の手前に障壁を張る。

障壁を纏った拳でクロノの刃とぶつかり合う。

クロノが破ったものより数段強度の高いバリアは確かに魔力刃を弾いていた。

やがて、体格差と経験で劣るクロノが押され始める。

少年が体勢と整えようと距離を取ったところですかさず魔力弾を撃って妨害、クロノは横に飛んで回避。

魔法を紡ぎ出そうとするクロノにアリアが右の拳を突き出す。

閃光が迸った。

「ノーモーション……遅延（ディレイ）魔法か！？」

「ハズレ、待機（ウェイト）魔法だよ」

クロノは跳躍して空に逃げる。

それを狙っていたとばかりに、アリアが先回りしていた。　不敵な笑みが悪寒となってクロノの身体を駆け巡る。

アリアが左の拳を突き出す。　張られた障壁が放たれ、クロノをコンクリの大地に叩きつけた。

プレス機のように障壁は下降しクロノを押し潰そうとする。　クロノはミシミシと自身の骨が軋む音を聞いた。

「諦めなさいクロノ、あんたじゃその障壁を破れない」

アリアが空から、抜け出そうともがくクロノを見下ろしながら言った。

「クロノ、どうしてお父様の想いが分からないの？　お父様はクロノみたいな子を作らないために闇の書を封印しようとしているんだよ」

「提督には悪いが……正直、余計なお世話としか言いようがない」

アリアがパチンと指を鳴らす。

クロノを潰す障壁が一枚追加された。　苦痛に満ちた悲鳴が木霊する。

「安心して、殺しはしないよ。　クロノが動けなくなるくらいに押さえておくだけだから」

「な、何ひとつ安心…できない、な」

「大丈夫、今は納得できなくてもいつかクロノにもお父様の判断が理解できるようになるわ。　だから、今は大人しくしてなさい」

そう言ってアリアは屋上に降りる。

クロノを一瞥した後、身を翻して離れていく。

ロッテを助けに行くのか、あの修道女を倒しに行くのか、闇の書の封印に向かうのか分からない。

だが、彼女がどれを行うにしても、彼女をここから逃がすわけにはいかない。

そして、彼女を倒す手段はすでにクロノの手の中にある。

「アリア、世界を守るために八神はやてを犠牲にするつもりか？」

アリアの脚が止まる。

「クロノ。　世の中ね、誰1人不幸にならない、みんな幸せはハッピーエンドなんて存在しないんだよ」

「同感だ。　僕が君の立場なら同じことを言うだろう。　でも――――」

思い出す。
半年前。
あの男は、世界よりも人を選んだ。

「人と世界、天秤にかけること自体間違っている。　あの男はなんの躊躇いもなくそう言ったよ」

あの男が誰を指すのか、アリアも分かっているだろう。
そして、その考え故に英雄と戦っている。

「理想論ね。　世の中を知らない青臭い理想論よ」

「全く、同意見だ」

でも、とクロノは言葉を続けようとする。
アリアは眼もくれず歩き出す。

「世界のために誰かを犠牲にするのと、誰かを救うために世界を守る。　どちらが美しいと、君は思う？」

アリアの足元が発光。　驚愕に目を見開く。

魔力で編まれた水色の鎖がアリアを縛り上げた。

「なっ！？　設置型（セット）！？」

何が起こったのかとアリアは障壁に押さえられているクロノを見た。

ほくそ笑む少年を見て理解した。

アリアがいるのは先ほど魔力弾を回避するまでクロノが居た場所だった。

「あの一瞬で置いたというの！？」

「当然だ。　だから君はそうして縛られている」

クロノはわずかに動く指で魔法陣を描く。

戦闘によってばら撒かれた魔力の塵を掻き集める。

そんな魔力によってできた水色の球体が四つ、アリアを中心にして、取り囲むように配置された。

魔力球はいまだに膨張を続ける。

「集束砲撃……！　しかも四つも操るなんて。　クロノ、あなたいつからこれほどの……」

「1人でも精進しろと教えたのは、君たちだろう……」

集束が止まる。　大きさはバスケットボールを二回りほど超えるほど。

クロノの額に汗が浮かぶ。

「まったく、これの何倍もの大きさのものを制御できるなのはは、

やっぱり天才だな」

光球が弾けた。
四方から放たれた魔力の激流がアリアを飲み込む。
轟音と光が周囲に鳴り響く。

砲撃が終わると、アリアの身体が静かに地に伏した。

戸惑いながらも席に着く。
目の前にあるのは湯気を立て、できたてであることを示す朝食。
和食だった。
箸を掴んで手を合わす。

「いただきます」

小さく言った。
味噌汁の入ったお椀をもってすする。　続いて焼き鮭をほぐし、ご飯に乗せてかっこむ。
やがて全て食べ終わり、最後にコップに入ったお茶を飲み干して立ち上がる。
ちらりと、自分の斜め前にいる人に視線を向ける。
広げた新聞紙に目を落としている男性。
自分とは違う亜麻色の髪。　それを見て自身の髪が母譲りだと実感した。
視線を感じたのだろう、父が顔を上げる。　目が合った。

「ん？　どうした、何か用か？」

「う、ううん、なんでもない」

思わず口調も昔に戻っていた。

数年ぶりに背負うことになった黒く塗られた牛革のランドセルを引っ掴み、逃げるように玄関に向かった。

外に出た。

季節は冬なのだろうか、冷たい空気が頬を撫でる。　着ている服を見れば分かることだが、怜治にはまだそんな余裕はなかった。

歩きながら街並みを眺める。

海鳴とは違う風景。　けれど、見覚えのある風景だった。

１２年前に出た街、もう来ることはないだろうと思っていた街。

それが今目の前に広がっている。

これが夢幻の類であるということはすぐに気付いた。　が、抜け出す方法が分からない。

脱出法が分からない以上、こうして怜治は２度目の小学生を演じるしかない。

「コナンじゃあるまいし、ったく面倒くせぇ」

この世界で自分が通っているはずの小学校を怜治は知らない。　けれど周囲を見渡せば自分と同様にランドセルを背負った子どもが見える。　彼らについていけば問題ないだろう。

改めてため息をこぼし、怜治は歩いていった。

いま思えば、真面目に学校など行かずにサボればよかったのではな

いか。　だが、サボったらサボったで学校から家に連絡がいくだろうなと思い直した。
夢の中でまで親に怒られるのも面倒なので怜治は学校に行くことに決めた。
靴箱に貼られた名前のシールで自分のクラスと名簿番号を確認、今の自分は3年生らしい。
自分の教室に向かう。
席替えをしてるかもしれないのですぐに教室に入らず、他の生徒が空席を埋めていくのを眺める。

「入らないの？」

声をかけられた。　音源の方向に顔を向ける。
怜治より背が頭一つ分低い少女が首を傾げていた。　ショートカットの青い髪が目立つ、快活そうな少女だ。
ぴょこんと跳ねた髪が揺れる。

「入らないの？」

少女は再び問う。　怜治は答える。

「自分の席を忘れたんだ」

「毎日来てるのに？」

「毎日来てるのに」

そっか、と少女は言った後、おもむろに怜治の手を取った。

「じゃ、わたしが教えてあげる！」

「お、おいちょっと！」

少女の力は意外と強く、怜治の身体は容易く教室の中へと吸い込まれていった。

教室に置かれた席は机とイスをワンセットにして６×６の３６人分。
青髪の少女は一番窓側の前から三番目の座席まで怜治を連れていった。

「ここが、れいじくんの席！」

ジャーン！と明るい声を上げる少女に押され、怜治はイスに座る。
特にすることもなく、ぐるりと教室を見わたす。
友達同士で談笑する者、こっそり持ってきたゲームをしたり漫画を読む者、それを傍で覗き込む者、授業の予習をしている者と様々だった。
１人の少女と目が合った。ショートの赤い髪に金の瞳、顔立ちが先ほどの少女と似ている気がした。双子だろうか。
赤毛の少女が近づいてきた。

「どうしたんだよれいじ、なんか元気ねーな？」

「いや、別にそんなことないぞ」

「そんなことあるってーの！うじうじなやむなんて、おまえらしくねーぞ」

「ちょっと、のんちゃん！　もう少し言い方ってのが……」

「うっせーぞスゥ！　こいつはなんでもかんでも自分でかかえこんじまうヤツなんだよ！」

赤毛の少女と青髪の少女がケンカを始める。
いや、興奮する赤毛を青髪がなだめようとしているだけか。
赤毛の少女の言葉が発端となり、教室にいた子どもが続々と怜治の近くに集まってきた。
みな口をそろえて「大丈夫？」「なんかなやみあるなら聞くぞ？」など怜治のことを按じている。
現実の世界で、怜治に小学校時代に友人といえる者はいない。だが、こちらの世界ではそれなりにいるようだ。
双子の少女により始まった喧騒は始業のチャイムが鳴り、担任がやってくるまで続いた。

数年ぶりに受けた小学生の授業というのは、正直いって苦痛でしかなかった。
怜治は決して頭がいい方ではない。が、さすがに小学三年生で習う程度の事は分かる。
いまさら九九やら割り算やらを詳しく説明されても退屈でしかない。
居眠りが許されない授業で、退屈というのは苦痛とイコールであった。

「だいじょうぶ？」

本日何度目になるだろうか、クラスメイトが心配そうな顔をして訊ねてきた。
四角いメガネをかけたその少年はいかにも学級委員長といった感じであった。

「ああ、大丈夫だ」

怜治もパターン化しつつある返答をする。
返答するたび、現実の自分との違いを感じさせられる。
それが、さらに怜治の心を揺さぶる。
二度と会うことのないと思っていた両親との平穏な生活。　友人に囲まれた学校生活。
どちらも、怜治が求め、そして手に入らなかったものであった。

本日最後のチャイムが響く。
皆が荷物をまとめ、帰路につく。
そのまま直接塾に行く者、遊びに行く者、真っすぐ家に帰る者とに分かれ、校門から出ていく。
怜治は帰宅を選んだ。
朝歩いた道をそのまま逆向きに進み、家路につく。
見えてきた。
この世界における自分の家。
扉を開ければ、中には祖父ではなく家事にいそしむ母がいるだろう。
日が暮れたら、外から開くこと無かった扉を父が開けるだろう。
怜治が心のどこかで求めた団欒があるだろう。
家の前に立つ。
扉の前に立つ。
手を伸ばす。
手が、鉄色のドアノブに――――――――――。

鋼の強度を持つ刃がぶつかり火花を散らす。
黒の大剣を振るうのは月光色の髪に翡翠の瞳の青年、されどその意識は夢に堕ち、その身を動かすのは闇の王。
魔杖を槍の如く操るは老いた英雄、その瞳に宿る復讐の思念は煌煌と燃え滾る。

「ははははっ！　どうした塵芥、この程度では準備運動にすらならんぞ！」

老兵は答えず、ただ目の前の敵を睨み続ける。
つまらん、と王は舌打ち、剣速を上げる。
二度三度と打ち合うと老兵の体がよろめいた。
勝機、口元が歪む。
渾身の力で大剣を英雄の脳天に振り下ろす。

「――――っふん！」

英雄の身体が前に倒れる、大地を蹴って敵の懐に潜り込む。
腕を突き上げ、大剣を持つ腕の肘を押さえた。
大剣の動きが止まる。
魔杖に展開された魔力刃が横に一閃した。

「なめるなよぉっ！」

ガリガリと硬いものを削る音。　人を斬った音ではない。
咄嗟に張った障壁が、英雄の刃から青年の身体を守ったのだ。
王は英雄の頭蓋を掴んだ。

「アロンダイト」

砲撃が放たれた。
英雄の身体が舞う。　体を焼く熱線を、杖と障壁で何とか防ぎながら地に足を着けて堪える。
障壁が廻る。　英雄の身体が時計まわしに廻る。
合気道という武術がある様に、戦いに勝つために、力の強さは絶対条件ではない。
敵が放ったすべての攻撃を、一を足して返すことができれば力は不要。
相手が一を放てば二にして返し、十ならば十一、百なら百一。
英雄の一の魔力が、王が放った魔力に加わり、標的を変え、飛来する。

『Ｂｌａｚｅ　Ｂｕｒｓｔ』

閃光が走る。
黒の大剣が一閃、閃光を二股に切り裂いた。
後方で轟音が上がる。　王は口を開く。

「なるほど、認識を改めよう塵芥。　準備運動程度には楽しめそうだ」

両者が同時に大地を蹴った。

触れなかった。
伸ばされた手は空を掻いて下がる。
聞こえた。
鋼と鋼がぶつかり合うような、激しい戦いの音が。

自分の相棒が、そこで戦っている。
だというのに、自分はここで何をしている。
怜治は己がやるべきこと、やろうとしていたことを再確認する。

「夢ん中にいる場合じゃねぇな……」

ポツリとつぶやき、踵を返して家から離れる。
少年の体は、青年へと戻っていく。
ここは自分がいるべき世界ではない。　帰ろう。　自分がいるべき世界へ。

「さて、どうやったら戻れっかな……」

とりあえず海鳴市にでも向かおうかと思った矢先、

「どうして？」

背後から声がした。　振り返ると、家の玄関が開いていた。
中から黒髪の少年がこちらを見ている。　悲しみのこもった黒い瞳が怜治を射抜く。
怜治はそれが自分だとすぐに気付いた。

「どうして？　この世界はいや？」

少年が再度問う。
怜治は答えを紡ぐ。

「嫌だ、とは違うな。　ただ、俺を待ってるやつがいる。　そんでもって助けたいやつがいる。　それだけだ」

「八神はやて？　きみがいても、状況は変わらないよ？」

グサリと胸を指す言葉。

そうだな、と怜治は肯定する。

いま海鳴にはなのはが、フェイトがいる。　クロノも向かったし、シャッハの援軍もある。　もしかしたらリンディも出るかもしれない。

自分よりも魔法に秀でた魔導師がこれだけいるのだ。　戦力としては十分過ぎて怜治の出る幕はない。　例えそれだけの戦力でも闇の書が撃てないのであれば、怜治が行ったところで結果に変動はないだろう。

だがそれでも、例えはやてを救うのが自分でないとしても、

「ガキを泣かせる馬鹿を殴り飛ばすくらいの出番はあるだろ」

少年が一瞬きょとんとし、またすぐ悲しみの表情に戻った。

「どうしてきみは傷つくことを選ぶの？　わざわざ危険にとびこんでいくの？　きみはあの時傷ついた、だれかを信じるのが怖くなるくらいに……」

少年は続ける。

怜治の身を按ずるかのように語りかける。

「魔法に関わって、なんども傷ついたのにどうして戦うの？　……ねぇ、もうやめようよ。　魔法のことなんて忘れて、この世界で暮らそうよ」

甘い誘惑。

少年が両手を広げ、怜治に言った。

この手を取れと、己が求めたものを手にしろと訴えかける。

「できねぇ」

「――――え？」

「できないと言った。　この世界は夢だ、現実じゃない。　そんな偽物の世界で、俺は生きるつもりはない」

力強い否定の言葉。

少年の顔が絶望に染まっていく。

「なんで、なんでだよ！？」

声を荒げるかつての自分を、怜治は静かに見つめる。

「俺は十二年前、親に捨てられた。　捨てられたと言ったら語弊があるかも知れんが、少なくとも俺はそう感じた」

「そうだよ。　だからきみは人を信じるのに抵抗をおぼえた。　信じて、好きになって、また自分のそばからいなくなるのが怖いから、きみは信じるのが怖くなった」

「ああ、そうだ。　同時に、もう何も手放したくないと思った、何かが俺の傍からいなくなるってんなら、それを絶対に掴んで離さないと決めた」

「だったら、よけい分からないよ。　きみがいるこの世界は手放してもいいの？　きみが心の底で願った世界を否定するの？」

ふるふると怜治は頭を振った。

「ここは、俺が願った世界なんかじゃねぇさ。　俺が本気で願うのは、両親もいて、ジジイもばあさんもいて、鉄平が、マサが、なのはがフェイトがユーノがアルフがクロノがアースラの連中が、そしてなにより――――相棒（スタン）がいる世界だ」

少年は絶句する。　怜治の強欲さに。
彼が望んだのは両親がいることではなく、両親もいることなのだ。
そのことを自覚してか、怜治は小さく笑みを浮かべる。

「まぁ確かに、こんな世界も魅力的といえば魅力的だ。　でも、俺がこの世界にいたらスタンが動けなくなっちまう。　一緒に強くなると、どこまでも一緒に走ると決めたあいつを裏切ることになる」

そんなことはしたくないと怜治は言う。
大切な者がいなくなる辛さを知る怜治は、それを誰かに味あわせたくなかった。
故に、怜治は信じた者を裏切ることはしないと決めた。　悲しませないと決めた
この世界はその信念を否定する。　どんな甘美な世界でも、そんな世界を怜治は受け入れない。
絶望に突き落とされた怜治を立ち上がらせたその想いを、怜治は決して曲げようとは思わない。
一歩、踏み出して少年から離れる。　この世界との決別の意味を込めて踏み出した。

「……いやだよ」

震えた声が響いた。

少年はうつむき、肩が震えていた。

「……いやだよ……いやだよ！！」

突風が吹き荒れる。

少年の体から噴き出る魔力が風となって吹き荒れる。

「――――なっ！？」

「きみがいなくなったら、この世界はただの真っ暗闇に染まる。
そんなのはいやだ！　きみが自分の信念を貫くためにここから去るというのなら――――」

少年の瞳に炎が灯る。　絶対的な殺意の炎が燃え上がる。

「ぼくの幸福のために、きみを闇に落とす！」

少年の咆哮。

同時に世界が縮小を開始する。

天が下降し、地に足つける感覚が消えていく。　虚構の世界が怜治を呑もうと雪崩となって襲いかかる。

逃げようと足を動かすが、怜治を襲うのはこの夢の全てだ。　逃げ切れるはずがない。

ダメなのかと思ったその時、

『フム、助力が必要そうだな？』

天から声が響いた。

続いて鋼の豪雨が降り注ぐ。

轟音を響かせ、世界を貫き、切り裂く。

怜治を襲う虚構の雪崩を鋼の弾雨が撃ち崩した。
破砕の雨が止み、世界の暴動も治まると、怜治はあたりを見渡して驚愕した。
アスファルトの大地に突き刺さるのは大剣、槍、大砲、千差万別の武具たち。　それらが次々と変形し、車両へと形を変えていった。

「お前ら――――シェルコのSシリーズ？」

影が差した。　上を向くと、空を覆う一隻の戦艦が坐していた。
船底についた人面を思わせる模様には見覚えがあった。

「ヴェルサティス……？」

『左様。　久しい、というほどでもないかな人よ』

響く声は、確かに以前、シグナムとともにヴィータ救出のために行った無人世界であったもの、Sシリーズたちを管理するヴェルサティスの声だった。

「なんで……っていうかどうやってここに来た？　ここは夢の中だ。その中になんで入ってこれる？」

『汝には我らとの契約の証を渡したであろう。　あれがある限り、我らは汝の危機を救う』

「契約の証し……？」

一瞬の思考、ヴェルサティスの言っている物がスタンに取り付けたトライアルの事だと気付いた。

「あれってそういう意味だったのかよ……」

『とはいえ、汝とは今は仮契約程度の繋がり。　本契約するか否か、この場で決めよ』

「お前ってとことんマイペースだな」

そこまで言って言葉を切る。

怜治としてはこの夢から抜け出すのならば何でもよいのだが、彼らとの契約を結ぶにはどうしても確かめておかなくてはならないことがあった。

「俺からしたら、お前らとの契約はメリットだらけで多少のデメリットは目をつぶれる。　でも、俺と契約することへのお前らのメリットは何だ？　なんの得があって俺に力を貸そうなんていいやがる？」

周囲を警戒しながら尋ねる。

怜治の周りにはシェルコのデバイスたちがいる。

契約を断った結果、彼らが暴走を始めかねない。

いつでも回避に移れるよう体に力を込めつつ、ヴェルサティスの回答を待つ。

『戦う機会が欲しい……』

「……なに？」

『我らはデバイス。　いくら型が異様でも、魔導師に使われその勝利に貢献することが本望』

郷愁の想いがこもった声が降り注ぐ。

『我らはシェルコのために造られた。　だが、我らを造った人間はシェルコの復興を諦め、世界を捨てた。　我らは不要となり、ただ取り残され、今では人を殺す呪いの魔導具などとも呼ばれる始末……』

周囲の車両から悲嘆の声が上がる。

『呪いの魔道具という名を払拭したいわけではない。　ただ、誰か一人でも我らの力は何かを守るためにあるのだと知ってもらいたい。　それだけだ……』

声が止む。

怜治は自分に期待のこもった視線が向けられていることに気付く。

なんとも、ややこしいものに関わってしまったなと思う。

ため息をひとつ吐く、答えはもう決まった。

「上等だ。　契約してやるよヴェルサティス。　お前らの力、俺に預けな！」

『契約成立、確かにしたぞ。　主（あるじ）よ』

周囲の魔導具たちから歓声が上がる。

姿を武具に換え、眩い光を帯び始めた。

『まずは祝砲、この世界から主を引き揚げようぞ』

閃光が放たれた。

轟音が大気を震わせ、今度こそ虚構の世界を粉砕した。
ひび割れた空の向こうに光が見える。　あれをくぐればこの夢から抜けることができるだろう。
踏み出すために足に力を込める。

「……ないで」

ピタリと怜治の動きが止まる。
ゆっくりと首をまわして声の音源に視線を向ける。

「……行か、ないで……」

痛々しい声はあの少年のものだった。
鋼の豪雨によって倒壊した家の前に跪き、傷ついた全身に鞭打って言葉を紡ぐ。

「きみが出て行ったら、ぼくは……ぼくは闇の中だ」

そんなのはいやだと、少年は言う。
冷たい闇の現実は嫌だと、虚構でも、温かい光の下にいたいという人として当たり前の願い。
自分のような辛さを味わさせたくないという怜治の心を、八神はやてを助けたいという怜治の想いを軋ませる。
だが、

「例え夢でも、自分の遺志で闇から抜けることはできねぇのか？」

「……え？」

「俺がここを出ても、お前は闇の中に行ったとしても、まだその先

がある。　俺みたいにねじ曲がりながらも立ち上がることはできる」

だが、八神はやては違う。
闇から抜け出したいという想いがあっても、彼女の命が潰えれば不可能になる。　そんなことを見逃すことはできない。
誰にも辛い思いを味わってほしくないと言いつつ、怜治は今、1人の少年に辛い思いをさせ、1人の少女を助ける。
身勝手かもしれない。
偽善かもしれない。
傲慢かもしれない。
それでも、怜治はそれを自覚したうえで言う。

「お前が俺の“もし”だってんなら、立ちあがって前向いて行けよ。俺にできたんだ、お前にできねぇ道理はない」

そう言い残し、怜治は跳んだ。
青年の身体は光をくぐり、そして、夢の世界から脱出した。

「ぐ、があああああああああああああああっ！！！」

戦場と化した本局に絶叫が轟く。
その音源は闇統べる王。
大剣を大地に突き立て、片手で頭を押さえて叫び続ける。

「ぐ、がぁっ……おのれ、仮初の器の分際で我に抗うか！」

月光色の髪に黒い影が蠢く。

怜治の意識と王の意識が真っ向からぶつかり合う。

「愚か者が……このまま我に任せておけば勝てるということが分からぬかっ！」

「うるせぇ、これは俺の戦いで、お前は俺の力の一部だ。　大人しく俺の中で眠ってやがれぇっ！！」

1人の口から2人分の言葉が吐き出されるという奇妙な光景。
その様子をグレアムはただ見ている。

「自惚れるな糞餓鬼がぁっ！　闇の書の夢から抜け出た程度で調子に乗りおって……！」

「さっさと、――――代われぇっ！！」

「があああああああああああああああああああああああああっ！！！！」

黒が一気に侵食する。
青年の喉から断末魔の叫びが迸る。
黒雲が完全に月光を飲み込み、翡翠も黒曜に染まる。　怜治の身体がだらりと力なくたれる。
グレアムは一歩踏み出す。
今の怜治は隙だらけだ。
今なら、確実に討てる。
そう思い、また一歩踏み出す。
二歩目は無かった。
グレアムの頬を風が撫でる。
力の無いそよ風はやがて強風になり、暴風となり、嵐となった。

その中心にいるのは黒髪の青年。
怜治から噴き出る魔力が風となって吹き荒れていた。

「風の変換資質……なるほど、まだ全力ではなかったと」

それでも、その力は怜治を優位にはしない。
変換資質など、使える魔法の幅を広げるだけ。　グレアムが長い時をかけて積み上げてきた経験には及ばない。

「しかし、驚いたよ。　闇の書の呪縛から抜け出すとは……。　そんなに八神はやてを救いたいのか？」

「なに、あのガキの方はクロノたちがどうにかするだろうさ。　今は、テメェをぶっ飛ばすのが先だ」

「彼女は、私が守らなければどのみち死んでいた。　それが今まで先延ばしになっていただけのことだ」

「まるで命の恩人みたいな顔してんじゃねぇぞ。　自分（てめぇ）の事情で生かして、自分の事情で守って、自分の事情で殺す。　ああ、恩着せがましいってのはてめぇのことを言うんだろうよ」

眉を顰め、グレアムは重心を移動させる。　瞳から殺気が放たれ、再び戦場の空気が場を支配した。
怜治は真っすぐにグレアムを見据える。
大剣の柄を握る手に力がこもる。

――――――誇りの翼を広げよう

怜治の口から言葉が紡がれる。

それは契約とともに教えられた詠唱。
スタンピードの新たな力と、怜治に力を与えるためのもの。

――――――善と悪は光と影　すなわち表裏一体

――――――善と悪は決して交ざらず　決して離れず　その身を紡ぐ

――――――ゆえにあり方は善に非ず　されど悪に非ず

――――――時に畏怖され　時に崇められる

大剣が光を帯びる。　吹き荒れる風が怜治を包む。

――――――神聖となり　災厄となる

――――――その在り方　まさしく

「フォーム？――――竜人（ドラゴン）」

――――――竜の如く

第２９話　竜人（後書き）

次回、怜治ＶＳグレアム　決着！！　（多分）

タカセさん、経津主さんから質問＆感想を頂きました。

＞タカセさん「変換資質『風』って何なんでしょう？」

　作者のイメージとしては怜治から噴き出た魔力が風のように吹き荒れる、といった感じでしょうか。　絵にするならＢＬＥＡＣＨの霊圧解放みたいな？

ＮＡＮＯＨＡｗｉｋｉでは“魔力の変換を意識せずに行えるのは一種の資質である”とあり、他のキャラに魔力が噴き出るみたいな描写が無かった気がしたのでこれもある意味変換かなと考えています。

　風は運動エネルギーなので確かに広範囲。

ぶっちゃけ作者もそこまで考えてませんでしたｏｒｚ

＞経津主さん「Ｒｉｄｅｒなのになぜ鉄蹴形態がなくて剣使う騎士形態なんですか？！

これじゃあ最終フォームが剣ばっかな平成ライダーじゃないですかｗ」

　最初、鉄蹴って何？と思ってしまいましたｏｒｚ

タイトルにＲｉｄｅｒとありますがモデルはベルトで変身するヒーローではなくむしろ征服王、もしくはメドゥーサ。　たしか空飛ぶし。　原型ないけど。

答えになっているでしょうか？
ご不明な点があったらまた。

第３０話　騎兵ＶＳ英雄　決着（前書き）

少し短めです。

第３０話　騎兵ＶＳ英雄　決着

砂漠、砂と礫だけで構成された大地。
殺風景な世界を歩く人影があった。
その者は女性、年老いた老婆だった。　けれど、彼女の瞳には力に満ちており、弱さを一切感じさせない。　腰に差す剣は使えこまれており、女性が魔導騎士であることを示す。
女性の手は自身の傍らにある二輪車のハンドルに置かれていた。
エンジンがかからない、鉄の塊と同様のそれを女性は引きずって歩く。

「ふぅ、ちょっと休憩」

そう言って、女性は剣を僅かに引き抜き、また戻す。
彼女の足元に氷塊が現れた。　その上に腰を下ろす。　汗で額に張り付いた白髪をかき上げる。
絶妙の魔力コントロールで造られた氷は女性に不快な思いをさせなかった。

「しっかし、相変わらずラルゴもこき使ってくれるわね……」

ここにはいない、上司兼友人への愚痴。　傍らにある二輪車は何も言わない。
いや、何か言っているのかもしれないが聞こえないのだ。
誰が何を思ってつけたのか今では知る由もないが、この二輪車は使い手を選び、その使い手が現れない限りこの二輪車の声は誰にも届かない。

「情報通りだけどホントに魔力をガンガン持っていくのね、あんた」

もうスッカラカンよ、と女性は呟く。

彼女には任務があった。

数年前にロストロギア認定された魔導二輪の所在がつかめ、それを回収することだった。

ロストロギアとはいえ、ただの回収任務。　慢心は無かったが、油断があった。

「まったく、あのヴェルなんたらってのも無茶苦茶よ。　いきなり襲って来たと思ったら帰れって脅すし、こんどは持ってけって言うし……」

勝手よね、と魔導二輪に語りかけるも返事はない。　期待していたわけではないが、やはり応答がないというのは悲しい。

「さて、そろそろ行きますか！」

そう言って腰を浮かせた瞬間、見知らぬ魔力反応を感知した。

おかしい。

この辺りには集落もないし、旅人が通るようなルートではない。

警戒を周囲に展開する。

やがて、その魔力反応の主が空から舞い降りた。

黒いインナーに身を包んだ女性たち。

リーダー格と思われる1人がゆっくりと腰に差した長剣を抜いた。

「あらあら、なんとも可愛らしい騎士だこと……」

女性もゆっくりと剣を引き抜く。

夕日色の片手剣を斜に構える。

敵の顔を見る。　まだ若く、整った顔立ち。　笑顔が綺麗だろうと思ったが、その顔にはなにひとつ感情のこもっていない表情であった。

「ごめんなさいね。　何が目的か知らないけど、家には無愛想な旦那とやっと元気になってきた孫が待ってるの」

砂漠の大地に殺気が充満していく。

「だから――――手加減、できないわよ？」

騎士が疾走、ふたつの剣が激突した。

魔法少女リリカルなのはA’s☆The Rider☆　第15話　騎兵VS英雄　決着

魔力の嵐が止む。
姿を現した怜治に、グレアムは目を見開いた。
背中には一対の黒い鉄翼が広がり怜治の身体を僅かに地面から浮かす。　背骨に沿って、いくつもの節を持った鉄尾が下がる。　胸を黒い胸甲が覆い、両手足は猛禽の爪のように鋭い刃がついた手甲・脚甲がつき、頭部には黒いヘルムを装備していた。

「それが、君の全力ということか……」

グレアムが杖を構え、光弾を放つ。　数は四つ。
襲いかかる光弾に、怜治はゆっくりと右手を上げる。
閃光が迸った。
紺色の光は光弾をふたつ呑み込み破壊。　身を捩じって回転、鋼鉄の尾が舞い、残り二つも破壊した。
巻き起こる煙幕を切り裂き、グレアムが怜治に突撃する。　魔杖の先には光刃が展開していた。
手甲と刃が激突、火花を散らす。
ガキンという音とともに両者、距離を取る。
怜治は両手に魔力を集め、右手に風を、左手に炎を纏う。
両手を突き出した。　放出された風は炎を巻き込み、周囲の空気を呑み込み蒼炎を育む。

「炎風、一旋ッ」

蒼い竜巻がグレアムを襲う。
グレアムの体が浮き上がり、大蛇の大顎が英雄を飲み込む。
飲み込まなかった。
グレアムの魔杖が光り、風の大蛇が爆ぜた。
着地と同時に大地を蹴り疾走する。
怜治は再び両手に魔力を込める。　風と、今度は電撃を生む。
本来、魔力の変換資質はひとりにつきひとつだ。　だが、炎と電気の変換機関をもつスタンにより怜治は三種の変換を行える。
風を纏った雷槍が出来上がる。　投擲した。
グレアムは身体を前に倒しながら首を曲げて回避。　後方で激しい光と轟音が上がる。
杖を振る。　放たれた閃光を怜治は爪で叩き斬る。　お返しとばかりに閃光を放つ。
障壁が展開、閃光を弾く。　両者が肉迫した。

光刃、光弾、鉄爪、鉄尾が激しく入り乱れる。
怜治の鉄脚がグレアムの足を払う。
拳で追撃しようとしたが、グレアムの身体は飛翔に空中に飛ぶ。
魔杖から魔弾が発射、怜治は跳躍して回避。　大地を抉った衝撃風を追い風にして怜治も空に向かう。
空を疾走するグレアムを怜治が追う。　互いに光弾や閃光を展開させ、本局の空を彩る。
英雄と騎兵の戦いは空に移った。

体がズキズキと痛む。
意識がまどろみに落ちそうになるたび痛みが無理やり引き揚げる。
ひどく不快だ。
そう思いながらどうにか意識を覚醒に向かわせる。
目を開く、暗闇に慣れていた目にはわずかな光もつらい。
徐々にぼやけていた意識が確かなものになっていく。
自分は今時空管理局の本局にいる。
なぜ？
地上本部の部隊と本局の部隊との合同訓練の打ち合わせのためだ。
体を起こす。
顔にかかった紫の髪を払い、自分がいる場所に違和感を覚え、目を見開いた。

「なによ……これ」

思わず驚きが声に出た。
目の前にはししおどしのような形に抉れたビル――――さっきまで自分がいた施設だ――――が飛び込んできた。

意識が一気に覚醒、立ち上がると後ろから誰かに肩を押さえられまた瓦礫の上に腰を下ろすことになった。

「ハーイ。　やっと起きたのね、メガーヌ」

頭上から声が降って来た。

顔を上げると、青みがかった髪をポニーテールに結んだ女性の顔が現れた。

メガーヌと呼ばれた女性の同僚だった。

お互い、整った美貌が塵やほこりで汚れていた。

「いったい、何があったの？」

「うーん、私もよく分かんないのよね。　とりあえず、私たちを助けてくれたあのバイクには後でお礼言わなきゃね」

「――――バイク？」

「そ、バイク」

理解ができず、首を傾げるメガーヌの頭上を二つの影が疾走していった。

腹に響く低い轟音が大気を震わす。

二色の光が尾を引き、二つの影から吐き出される光が花火のように天空を飾る。

「何……あれ？」

ひとりはギル・グレアムだと分かった。　だが、もう1人が分からない。　かろうじて若い青年だということは分かった。

メガーヌの疑問に、同僚の女性が答える。

「多分、テロリスト」

「んなっ！？」

ぎょっとして思わず立ち上がる。

考えれば確かに、目の前にある変形したビルを見れば何者かの破壊行為が起こったのかもしれない。　だが、ここは時空管理局の本局だ。　優秀な魔導師がごまんといるここでテロ行為――しかも質量兵器を使うのではなく生身で――をするなど、よほど自分の力に自信があるか自棄（やけ）になっているかのどちらかだ。

そこまで考えて疑問が浮かんだ。

なぜ他にテロリストと戦っている局員がいない？

先ほどから応戦しているのはグレアム一人で、彼を援護する者が誰もいない。

答えを求めて同僚に視線を向ける。

「襲撃者の応戦はグレアム提督に任せ、動ける局員は非戦闘局員および負傷者の避難を優先せよ。　なお、武装局員は襲撃者との戦闘を禁ずる」

「……は？」

「あなたが寝ている間に入った通信の内容。　おかげで私らはここで傍観しているしかないってわけ」

「どういうことよ……」

忌々しげにつぶやく。　目の前に確保すべき人間がいるのに、それ

をよりによって法を守る管理局が妨害するなど、本末転倒もいいとこだ。
メガーヌの苛立ちを感じたのだろう、青みがかった髪をなびかせながら女性が隣に並んで口を開いた。

「見定めてんのよ。　もしくは、天秤にかけてる」

「見定める？　天秤？　どういうことよ？」

「もし、もしもあのテロリストがグレアム提督を打倒したら、上層部はあれを管理局に引き込むつもりなのよ、きっと」

信じられないという顔をするメガーヌを尻目に女性は続ける。

「グレアム提督は確かに歴戦の勇士だけどもう年よ。　そんな提督を超えた力を持った魔導師が現れたら、是が非でも欲しくなるわよね」

「でも、相手はテロリストよ。　管理局に不満のある人間が入るわけない」

「そこはまた世間に言えないような方法で引き込むんでしょうね。　今頃、お偉いさんは交渉材料を掻き集めてるでしょうね。　証拠に、さっきから通信が繋がらない。」

信じられないと、メガーヌは呟く。
全ての次元を管理し平和を保つのが役目である時空管理局にとって、人手不足というのは早急に解決すべき重要事項の一つである。　が、この問題に関しては永久に解決されないだろうとメガーヌは思う。
何せ、百を超える次元世界全てを管理しようというのだ。　ひとつ

の世界に住む全員が魔導師であり、尚且つ全人口が管理局に勤めるなんて世界は存在せず、加えて魔法文化の無い管理外世界や人のいない無人世界にも有事の際には介入するのだ。
人手不足は必然だ。
けれど、決して1人の魔導師が1人分の働きしかできないのかといわれるとそうとは断言できない。
優れた魔導師ならば1人で文字通り百人力である。
つまり、質は量を凌駕する。　そのためならば例え犯罪者でも引き込もうというのだ。
確かに、犯罪歴のある魔導師が改心、もしくは徴兵されて管理局に勤める例はある。　上層部は今回もそうしてあの青年を取り込む気なのだろうか。

「あーあ、こんな面倒に巻き込まれるし、上層部の嫌な一面目の当たりにしちゃうし、スバルとギンガのお土産に買ったチョコもつぶれちゃったし、今日は厄日だわ」

同僚の声を聞き流しつつ、メガーヌはふたりの戦いを見続ける。
一歩踏み出し、魔力を練っていつでも動けるように体をほぐす。

「行く気？　命令違反よ」

「今は行かないわよ。　でも、もしものときには動くわ。　あなただって、ただ黙って見ているのは気が引けるでしょ？」

「――――当然！」

女性はニヤリと笑い、そう言った。

光弾が走る、迎撃され爆煙を撒き散らして消える。
空を翔るグレアムを、怜治が追う。
だが距離は縮まらない。　埒が明かないと、怜治は速度を上げる。
強烈な風に体を叩かれながら、怜治はグレアムの頭上に移動する。
逃げきろうとするグレアムの脚に鉄尾が絡みつく、一気に引き寄せ拳を顔面に叩きこむ。
落下する英雄を追撃。　光弾、風弾、炎弾、雷弾が多数展開、斉射する。
グレアムを守る様に障壁が展開、怜治の放った魔力弾は阻まれた。
怜治がスピードを上げる、グレアムの杖から光弾の群れが放たれた。
　数えるのも馬鹿馬鹿しくなるほどの数。
体を捻り、爪で裂き、尾で叩き落としながら怜治は突き進む。
弾幕をくぐり抜けた時、グレアムの鋭い蹴りが怜治の顎を撃ち抜いた。
電流が走る。　蹴り飛ばされ、体が回転する。
体勢を立て直すと、今度は両腕の動きが止まる。
視線を左腕に向けると、前腕に円形の魔法陣で固定されていた。
右腕も同様だった。
バインドの一種だと気付くと同時、周囲から殺気を感じた。
光り輝く光刃、スティンガーが怜治を完全に包囲していた。　前後上下左右、まさしく全方向から狙われていた。　逃げ場など無い。

「スティンガーブレイド・デスブロウシフト……」

グレアムが呟いた。　それがこの魔法の名前なのだろう。
起動にかなりの魔力を消費したのだろう、額には汗が浮かび息も荒い。

怜治は右腕にありったけの魔力を込める。
腕を固定した魔法陣がギシギシと軋む。　無茶な挙動に腕が悲鳴を上げる。
痛みに耐え、怜治は魔力を叩きこむ。　腕を動かす。

グレアムが杖を振った。
怜治の周囲に配置されたスティンガーが動き始める。

右腕を固定する魔法陣が砕けた。

「竜撃、参號……」

右の拳を突き出す。　込められた魔力が光の槍となって放たれた。
スティンガーが怜治に牙をむく。

「迦楼羅（カルラ）ッ！！」
「斉射（シュート）ッ！！」

数多の光刃が怜治を刺し、一閃された光槍がグレアムを貫いた。
極光と轟音が撒き散らされた。
赤い液体を振り撒きながら両者が落下していく。

着地に失敗、鈍い音を立てて大地に激突した。
怜治の鉄の兜や鎧は砕け、翼も尾も折れた。　全身を貫く光刃が朱に染まる。　グレアムの杖は折れ、バリアジャケットは半壊していた。　整えられた髪も乱れていた。
両者共に、自身の得物を修復させる魔力は残っていない。　息は荒く、骨は何本も折れており、視界はかすむ。　飛びそうになる意識を、全身を這う激痛が叩き起こす。
まさに満身創痍だ。

一歩。　それでも両者は踏み出した。
二歩。　そして両者は歩き出した。
拳を握りしめ、歯を食いしばる。
歩みが走りに昇華する。
赤い軌跡を残しながら両者は目の前の敵を討つために動き続ける。

松田怜治とギル・グレアム、このふたりは同質にして対極の存在だ。
過去にあったひとつの事象によって自信の在り方を、歩む道の指針を決めた、過去に縛られ、引き摺り続ける愚か者同士。
松田怜治は家族から、信頼していた者に捨てられた。　悲しかった。
　故に、自分は信じた者を決して裏切らない、悲しませないと決めた。　その結果、自分が傷ついたとしても。
ギル・グレアムは部下を自分の甘さで失った。　悲しかった。　故に、もう二度とそのような悲劇を起こさせないと決めた。　その結果、誰かが犠牲になったとしても。
松田怜治にとって、似通った過去を持つグレアムが八神はやてを悲しませることは許せることではない。　その行為は、怜治の誓いを否定するから。
ギル・グレアムにとって、似通った過去を持つ怜治が1人の少女のために多くの人命を危険にさらすような真似は許せなかった。　その行為は、グレアムの誓いを阻むから。
対立する両者の想いは皮肉にも同質である。
想いは同じでも、その過程が、目指す到達点が違う。
よって、両者は決して相容れない。
故に戦う。　目の前の敵を打倒し、己の道を貫くために両者は戦う。
両者の拳が交錯する。
鍛え抜かれた拳と、荒削りな拳が互いの思想を砕こうと襲い掛かる。
胸に鈍い衝撃。
怜治の拳は宙を泳ぎ、グレアムの拳が怜治を撃った。
反撃とばかりに振る拳はかわされ、腹を膝で撃ち抜かれた。

胃液が逆流する不快感、骨が折れる激痛が同時に怜治を襲う。　たたらを踏んだ足を叱りつけ、再び踏み出す。
拳を握りしめ、突き出す。　弾かれた。
カウンターの掌底が顎を撃つ。　視界が揺れる。
グレアムの連撃。　拳が、肘が、膝が、蹴りが、掌底が、鍛え抜かれた身体から放たれる打撃が怜治の身体を蹂躙する。
がむしゃらに撃つ拳など届くはずもなく、怜治の身体が軽々と殴り飛ばされた。
背中から落ち、一瞬呼吸が止まる。
足りない体力を気力でカバーし立ち上がる。
グレアムが地を蹴り、一直線に怜治に迫る。
迎撃のために蹴り出す力はもうすでにない。
凝視する。
自分に襲いかかる弾丸を凝視する。
飛びそうな意識を掻き集め、折れそうな心を叩き直し、力を総動員し、タイミングを合わせ、渾身の一撃を見舞わせる。
ゴキリ、という嫌な音。　音程が異なる打撃音が響いた。
怜治の拳はグレアムの腹に突き刺さり、グレアムの拳は怜治の顔面に噛みついた。
浮きそうになる足を、怜治は必死に抑え込む。
やっと当たった一撃。　やっと現れた肉迫の瞬間。

「――――あ、ああっ！！」

脚の筋肉を爆発させ、怜治は首を動かして猛打を避け、刺さった拳を更にめり込ませる。
グレアムが退いた。
瞬間、僅か髪の毛一本程度の勝機を怜治は見出した。
怜治はさらに踏み込む。
拳を突き出し、英雄の顔面を撃つ。

追撃を仕掛けるも、グレアムが怜治の脚を払う。
体勢を崩しながらも、身体を捩じって手の平から着地。　曲げた肘を伸ばし、蛙のような格好で後ろ跳び蹴りつける。
グレアムの腕が交差、蹴りを阻む。
怜治は体勢を整え再び踏み出す。　拳を握りしめ、全力で振る。
かわされた。　調子に乗るなとばかりにグレアムの拳が顔面を叩く。
視界が点滅し、痛みが奔る。　さっきのはマグレなのだと思い知らされた。
けれど絶望はしない。　勝機が見えたのは確か、あとはそれを力づくで広げるだけ。
反復する。
飛びそうな意識を掻き集め、折れそうな心を叩き直し、力を総動員し、タイミングを合わせ、渾身の一撃を見舞わせる。
弾かれた。　グレアムの拳が怜治の脳を揺らす。
怜治は止まらない。
反復する。

飛びそうな意識を掻き集め――――、
　剛腕が怜治の腹を穿った。　止まってはいけない。
折れそうな心を叩き直し――――、
　掌底が鼻っ柱に叩きこまれた。　止まってはいけない。
力を総動員し――――、
　強烈な蹴りが脇腹を抉る。　止まってはいられない。
タイミングを合わせ――――、
　拳が胸を撃った。　止まってたまるか。
渾身の一撃を見舞わせる――――！

さっきとは逆の拳が襲いかかった。

「――――、らあぁぁああっ！！」

英雄の拳を、同じく拳で叩き落とす。

「な――――――――――ぜ？」

何故そこまでして向かってくるのか、グレアムはそう問うた。

怜治の身体はすでにボロボロだ。

皮膚は裂け、骨は砕け、血だまりを幾つもつくり、魔力も尽き、戦闘技術の差は歴然。

それでも、松田怜治は倒れず向かってくる。

「何故、あの少女のためにそこまでできる？」

「……別に、あいつのためってわけじゃねぇよ」

拳を握りしめる。

「ただ、てめぇのやってることが気に食わねぇんだよ……」

足を踏み出し、渾身の力を目の前の敵に向ける。

「辛かったんだろ。　てめぇの部下が死んだ時、何もできなかった自分が！　自分の無力さが！　自分の弱さが！　辛かったんだろ……！」

グレアムの瞳が見開かれる。

迎撃のために握りしめた拳がわずかに鈍る。

「そんな思いを、あんな小さいガキに味あわせてんじゃねぇぞ！！」

突き出した拳がグレアムを撃った。

英雄がわずかに引く。

怜治は追う。

「てめぇのやってることは、一から百まで間違いだらけだクソッタレェッ！！」

二撃目。

グレアムの頭が激しく揺れる。

怜治は一気に畳みかける。

飛びそうな意識を掻き集め――――、

三撃。

折れそうな心を叩き直し――――、

四撃。

力を総動員し――――、

五撃。

タイミングを合わせ――――、

六撃。

渾身の一撃を見舞わせる――――！

七撃。

勝機はこじ開けられた。

八撃。

怜治の全力の拳がグレアムの顔面に突き刺さった。

「、――――――――――あ……」

さらに踏み込む。
突き立てた拳が軋み、悲鳴を上げる。

「、――――――――――ああ……」

反撃の拳は来ない。
拳を離さず、肘を曲げて力を込める。

「、――――――――――ああ……！」

グレアムの体が後ろに傾く。
貯めた力を、一気に爆発させた。

「、――――ああああああああああっ！！！」

全身全霊で振るった拳が、歴戦の勇士を大地に叩きつけた。
仰向けに倒れた敵は立ち上がらない。　ただ静かに、天を見ていた。

「……ち、だ」

怜治が呟いた。
崩れそうになる膝を叩き、姿勢を保つ。
空気を吸い込み、全世界に轟かせるかのように宣言する。

「俺の勝ちだ、ギル・グレアムッ！！」

「ああ……私の、敗北だ」

怜治は膝を押さえ、呼吸を整える。
血を流しすぎたのか、視界がかすむ。
目を閉じ、自分の中に鍵をイメージする。　その次は閉ざされた扉を開くイメージ。
完了する。
繋がったラインを通して濃密な魔力が怜治の体内に送り込まれた。
ヴェルサティス率いるシェルコのデバイスたちとの契約によって怜治が得たものは三つ。
一つ目はスタンの第五の変形、竜人形態（ドラゴンフォーム）。
二つ目がこの魔力の供給。第４６無人世界シェルコに充満する、他の生物が生存できない程に濃い魔力を受け取ることができる。

これにより、怜治は無限に近い魔力を手にできる。　とはいえ、竜人形態でしか魔力の供給は受けられぬ上、未だ魔導師としては未熟な怜治には膨大な魔力の制御は難しく、戦いながら魔力を終始回復し続けるなどという芸当はできない。
送り込まれる魔力をスタンの修復に回す。　時間が巻き戻るかのように破損した鎧が修復されていく。　体に刺さった光刃はその際抜け落ちた。
そのまま自身の魔力も回復しようとしたが、疲労と出血のせいか制御が不安定だった。
下手に暴走でもしたら厄介なので途中でやめる。
魔力は精々二三割といったところか。　もう一戦するには頼りない。

「仕方ねぇ。　闇の書はなのはたちに任すか、――――ん？」

突如、世界が回転し始める。　否、怜治の体が倒れているのだ。
自分の不甲斐無さに舌打ちしながら、これから来るであろう背中と後頭部への痛みを覚悟して目を閉じる。
――――が、

「情けないわね。　男なら最後まで立ってなさい」

誰かに支えられた。　いや、襟を掴まれ無理やり立たされたというのが正解か。
首をまわして声をかけてきた者の顔を見る。
青みがかった髪を後ろで纏めた女性の顔が視界を覆った。

「……誰、あんた」

「通りすがりの管理局員ってところかしら。　とりあえず、メガーヌ、治療お願い」

「はいはーい」

声とともに紫髪の女性が現れた。

魔法陣を紡ぎ、治療魔法を発動。　怜治の体が淡い光に包まれた。

ついでにグレアムも。

赤く彩られた傷口が塞がり、骨を修復していく。

「まったく、魔力がないからって殴り合いってのは魔導師としてどうなのよ？」

「メガーヌ、それ、私に喧嘩売ってる？」

「別にー」

光が消えると、怜治の体から傷は消えていた。　それでも失った血は戻らないし、疲労感は消えない。

「こんな感じかしらね。　私も治療は専門じゃないから、魔力とかは勘弁してね」

「別に、構わねぇよ」

そう、とメガーヌと呼ばれた女性は答えた。

「しっかし、グレアム提督と戦うなんてどんな奴かと思ったけど……意外と若いのね」

「なんだそりゃ……ってか、あんたら何しに来たんだ？　自分で言うのも何だが、この状況だと俺は助けられる側じゃないと思うんだ

が……」

「ん、自覚はあるのね。　――――じゃあ」

パシン、と軽い音が弾けた。

世界が回転、怜治は背中から思いっきり倒れた。

間髪入れずに目の前に、歯車状のスピナーがついた鉄拳が突き出された。

鼻先直前で寸止めされた拳の先には先ほどの青い髪の女性。

「――――まあ、こうなるわな」

ズキズキとくる頭の痛みに顔をしかめながら怜治は言った。

「理解が早くて助かるわ。　じゃあまず最初の質問、あなたの名前は？」

「……松田、怜治」

「マツダ？　意外、私の憧れだった魔導師と同じファミリーネームね」

「過去形かよ。　なんか不吉な言い方だな」

「うるさい。　――――二つ目の質問、所属している組織は？」

「まだ、学生の身分でね。　組織といわれても学校名くらいしか思いつかんのだが……」

「あら？　テロ組織の人間じゃないの？」

「……その言葉はキツイな。　答えはノーだ」

当てが外れたのか、女性は首を傾げる。
何かに気付いたのか顔を上げて「あっ」と声を上げた。
怜治は首を曲げ、世界が上下逆さまの状態で女性と同じ方向を見た。

「……うげ」

呻き声を上げた。
怜治の視界には、いつか見た武装局員と同じ格好した者たちが群れをなしてこちらに向かって来ていた。
立ち上る殺気は気のせいではあるまい。

「あちゃー、みんな命令無視しちゃって……」

「多分、私たちが発端な気がする」

「何？　手を出すなみたいな命令があったのか？」

「まあ、大体そんな感じ」

「……なんと真面目な連中か」

「管理局って一応平和維持のための組織だし、やっぱ正義感がある真面目な人が集まるのよ」

「あーマジか。　俺、再来春あたりに入局予定だった気がするんだが……やってけるかな？」

「ちょ、ちょっと待って!?　いま聞き流せない言葉を聞いて気がするんだけど!?」

メガーヌの声を無視して怜治は手を地面に置く。

ヴェルサティスたちとの契約で得た三つ目の力を発動する。

「告げる。　我が呼び声に応え、鉄騎の軍勢ここに姿を現しその力を示せ」

「――――っ!　ちょっとあなた、何やってるの!?」

女性が気付くが時すでに遅し。

紺色に輝く五芒星の魔法陣が多数展開され、その中から鉄の軍が姿を現す。

「よっしゃあああぁぁぁ一番乗りィ!」「キターーァァァァ!!」「ついに活躍の時ィィィィィっ!!!」「久々のシャバだあああぁぁぁぁ!」「やあぁああってやるぜぇぇえええっ!!」「レッツ、パアアァァァァリイイイィィィィッ!!」

騒音に等しい咆哮とともに、大量の鉄騎が召喚された。

「――――っ！　そんな、お父様が……」

海鳴のとあるビルの屋上で、リーゼアリアは目を覚ました。
覚ますと同時に、グレアムとの繋がりから彼の敗北の知らせが流れ込む。
あまりの驚きに、立ち上がることすらしない。

「そうか、まさか本当に勝つとはな……」

クロノが関心と驚きの混じった声で言った。
アリアに近づき、彼女の手に魔力封印機能のある手錠をかける。
視線を移す。
天を衝く火柱のさらに向こう、そこで激しくぶつかり合う魔力を感じた。
誰と誰が戦っているのかはすぐに分かった。

「崩壊が近づいているのか……。　僕も、応援に行った方がよさそうだな」

身を翻し、クロノは飛行のために魔力を練る。

「クロノ、待って……」

クロノの動きが止まる。
顔を向けず、アリアの言葉に耳だけ傾ける。

「私のポケットの中に、闇の書封印のためのものがある。　あんたに預けるよ……」

「いいのか？」

「お父様がやられて、私たちもこの様だ。　だから、あなたに託すよ」

アリアの自嘲気味の声。

そうか、とクロノは短く言ってアリアの方を向く。

ポケットに手を入れ、一枚のカードを掴んだ。

青と白のカード。　リーゼ達が使っていた物とはケタが違うということはすぐに分かった。

「氷結の杖、デュランダル。　私たちの願い、代わりにあなたが叶えてちょうだい」

「君たちの望みをそのまま叶えるわけにはいかないが、闇の書は、必ず止める」

今度こそ、クロノは飛翔した。

その下を、ビルの間を跳んで追ってくるシャッハの姿が見えた。

両者向かう先は同じ。

呪われた魔導書を止めるために、預言を回避するために、彼らの戦いはまだ終わらない。

第３１話　闇の終焉（前書き）

なんとか大晦日更新完了。
次は年明け、いつになるやら……

第３１話　闇の終焉

「ねぇ、ちょっと！　いったい何がどうなっ――――」

少女の言葉は魔法の光に遮られた。
視界が白に塗りつぶされ、気付いた時には彼女一人だけ別の場所にいた。

「あれ……学校？」

疑問の声を上げる。
強制的に転移させられた少女――――アリサ・バニングス――――の目の前建っているのは、確かに自分が親友たちと毎日通う学校の門前だった。

「なによ……なんなのよ、もう！」

鞄を振り回し、紙を振り乱し、大声を上げるがなんの反応もない。
誰もいないのだから当然と言えば当然なのだが。
一頻り暴れると、徐々に頭が冷静さを取り戻した。
ストレス発散にはやはり運動だなと再確認。
乱れた髪を整えながら頭の中で自分の周りで起こった事態を整理する。
良家のお嬢様なだけあり、アリサは同年代の子供よりも頭が回る。
そのため、混乱なく事態を理解することができた。　もっとも、理解しただけで納得はしていないが。

自分が持っている限りのピースを用いてアリサはパズルを組み立てていく。

まだ穴だらけで完成には遠いが描かれた絵の全容はわずかに見えてきた。

「……魔法？」

思わずそう呟いた。　そしてすぐに笑い飛ばした。

「そんなわけないわよね。　だって今二十一世紀よ？　大体魔法ってのはあんな機動戦士が撃ちそうなビームは撃たないでしょ。　まず衣装がフリフリで可愛らしくて――――」

思い出す。

なのはが着ていた服は今自分が着ているものと似ていたが細部が違い、装飾も多数ついていた。　フェイトやすずかの恰好はフリフリには程遠いが一般人が着るには勇気がいるだろう。

「……え、えっと…あ、あれよ！　魔法少女と言ったら杖でしょ！　こう、振っただけでキラキラが出るような――――」

なのはは赤い珠に金のフレームがついた杖を持っていた。

振って出たのは薬莢だがその後は光の壁が出ていた。

フェイトはともかく、すずかが持っていたのは剣だが、以前やっていたゲームに魔法剣士というものがあったことを思い出した。

「……マ、マスコットよ！　やっぱり魔法少女には可愛らしい動物がつきも――――」

なのはにはユーノというフェレット、フェイトにはアルフという犬、すずかは猫を大量に飼っていた。

「……え？　何？　ホントにあれって魔法なの？」

愕然とした表情でアリサは呟いた。

確かに魔法という結論は突拍子もないが、それ以外に思いつくものはあまりに物騒すぎて脳が拒否した。

とにかく、アリサは親友たちが魔法というもの――――もしくは魔法っぽい何か――――に関わっており、自分はその戦闘に巻き込まれてしまい、危険から遠ざけるために無理やりここに飛ばされたという仮説を立てた。

「……なんでよ」

ボソリと呟いた。

アリサの心に、沸々と熱いものが湧いてくる。

「なんであたしだけなんにも無いのよ！　なのはやフェイト、すずかまであんなことできてあたしだけできないなんて不公平よーッ！！」

アリサが咆えた。

どうやら疑問やら不安やらを、自分ひとりだけ蚊帳の外だということへの怒りがごぼう抜きしたようだ。

「あーイライラするわ。　みんなにその気がなくてもなんだか仲間外れにされた気分でホント頭にくるわね」

ブツブツと文句を言いながらアリサはこれから自分のすべき行動を考える。

大人しくここで全てが終わるまで待つなんてのは論外だ。　家に帰るのも当然。　だが、さっきの場所に戻るのも憚れる。　悔しいが、

アリサにはなのはたちのように戦う力なんて全くないのだ。
さて、どうしたものかと思案していると、

「へーイ、そこの彼女ぉ！　」

人をイラッとさせる軽い調子の声。　明らかにアリサに向けられたものだった。
ピキッと頬が引きつる音が聞こえた。
悩んでいる時にこんな風に呼ばれ、アリサのイライラが一気に噴火する。

「なによもぉ！！　――――あれ？」

鎮火した。
自分に声をかけた人物が知り合いだったからだ。
近づいてくるのは燃えるように赤い髪の青年と黒ぶちの眼鏡をかけた茶髪の青年。
ふたりはバイクから降りて近づいてくる。

「えっと……鉄平さんに正義さん？」

「おっ、名前覚えててくれたんだ。　アリサちゃん」

「えっと、どうしてここに？」

「たぶん君と同じ状況。　突然空がおかしなことになって、気になって病院抜け出して見に来た」

「そしたら今度はでかい火柱だ。　まったく、この街もエンターテインメントになってきたねぇ」

「言葉の使いどころが違う気がします……」

呆れた言葉をかけられても、２人は気にせずヘルメットをアリサに差しだす。

「……えっ？」

「あれ？　君もこの騒ぎの中心に行くのかと思ってたんだけど……余計なお世話だった？」

「い、いえ！　別にそうじゃありませんけど……こわく、ないんですか？」

「怖いよ」

アリサの問いに、正義はあっさりと答えた。

「怖いけど、多分あそこには僕らの友人もいるだろうし。　……友人が頑張ってるのに、僕らがこのまま何もしないってのは……ね？」

「で、でも！　あたしたちが行っても何もできないかもしれないんですよ！？　少なくともあたしにはあんなことできません……」

そうかもな、と鉄平は言う。

そして視線を暗雲を貫く火柱に向けながら。

「故事曰く、結果ではなく参加することに意義があるのだよ」

「……鉄平は少し黙ってて」

「オーケー」

馬鹿馬鹿しい。
ふたりのやり取りはそんなものだろう。
だが――――

「……ふ、ふふふ……」

思わず、笑いが零れた。
何もできないのは本当だ。　だが、自分の親友たちが何をしているのかを見ることならアリサでもできる。
不思議とそう思えた。

「あたし、行きます！」

アリサの言葉に、ふたりの青年が笑う。

「っしゃー！　とばすぜ嬢ちゃん、しっかり捕まってな！」

「いい加減、蚊帳の外にいるのも飽き飽きだよホント！」

騒音をまき散らしながら三人を乗せたバイクが走り出した。

魔法少女リリカルなのはＡ’ｓ☆Ｔｈｅ　Ｒｉｄｅｒ☆　第１６話　闇の終焉

海鳴の空で光が踊る。
黒と金と紫、三つの光が疾走する。
金と紫が共闘し、黒い光と激しくぶつかりあう。
光と光がぶつかるたび、魔力の波濤が大気を揺らす。
疾走する光の正体であるフェイトとすずかの戦いを、なのはは少し離れたところで見ていた。
ただ見ているのではない。　杖を構え、いつでも砲撃を撃てるよう待機している。
当然、闇の書もそのことには気付いている。　だが、彼女に肉薄するフェイトとすずか、そして動きを妨害ように捕縛系の魔法を放つザフィーラがなのはを守っていた。
フェイトとすずかが前衛で闇の書の障壁を破り、その瞬間を後衛のなのはが砲撃で撃ち抜く。　ザフィーラは中衛となり、三人を援護する。
それが彼女たちの作戦だった。

「（もうすでに分かっていると思うが、管制人格の使う魔法は基本的には広域型だ。　だが、我らが蒐集した魔法資質によりそれ以外の魔法も多用する）」

数分前、共闘が決定した時ザフィーラが念話を通してそう言った。

「（それって、つまりヴィータちゃん達のも……）」

「（無論、シグナムやヴィータ、それにお前たちの魔法も使うだろう）」

そんな……、とフェイトは絶望の色を孕んだ声を出す。
闇の書に蒐集された魔法は分かっているだけでなのは、フェイト、シグナム、ヴィータ、シャマルの五人分だ。
それだけで、砲撃、射撃、斬撃、打撃、回復など、数多くの系統の魔法が扱える。
フェイトはオールレンジで戦えるが、それでも回復などの補助系の魔法は扱えない。
使える魔法の種類も、魔力の量も圧倒的に闇の書が勝っている。
勝率など一桁台であろう。

「（そう悲観することはない。　多くの魔法が扱えようが使い手は奴1人。　ならば、我らは数で勝負する）」

ザフィーラの告げる作戦に、少女たちが意識を傾ける。

「（テスタロッサとすずか殿は前衛、申し訳ないが、管制人格と切り結んでもらう。　だが辛くなったらすぐに退け、私が代わる。
高町はその間に砲撃準備を整え、奴に隙ができたら手加減せずに撃て）」

「（……それで、勝てるんですか？）」

「（勝たねばならない。　勝てなければ、この街も、主も闇に沈んでしまうからな）」

ガチン、と鉄の拳を撃ち合わせる。
それが戦いの再開の合図となった。
フェイトとすずかが大地を蹴って飛翔した。

金色の鎌と夕日色の剣が闇の書に襲いかかる。
黒い障壁が展開し、刃が阻まれた。
闇の書の手に黒い魔力の球が生まれる。
氷が背中を滑るような悪寒が走った。　咄嗟に闇の書から離れた。
瞬間、黒光が奔った。　夜の闇を、さらに深い闇が呑みこんでいく。
その威力に、フェイトとすずかは唖然としてしまった。

「何をしている！　奴から距離を取るな、広域殲滅の魔法が来るぞ！」

ザフィーラの怒号が響いた。
弾かれたようにふたりは再び闇の書と距離を狭める。
血塗られた短剣が迎撃するが、それをザフィーラの軛が叩き落とす。
すずかの魔力を、フランベルグが氷へと換えていく。　紫氷の剣が手に納まる。　数は三つ。
フェイトの左手に雷球が生まれる。　加速・増幅を意味する環状魔法陣が生成される。

「プラズマ、スマッシャーッ！！」

雷光を伴う魔力砲が放たれた。

即座に闇の書はプロテクションを展開、フェイトの雷撃を防いだ。
間髪いれずにすずかが三本の氷剣を投擲。
渦巻く障壁に突き刺さった。

『炸裂する氷刃（アイス　エクスプロージオン）』

氷剣が破裂する。

弾けた氷の欠片が内側から闇の書の障壁を破壊した。

「なのはっ！！」

「なのはちゃんっ！！」

「ディバイン――――……バスターッ！！」

なのはの砲撃が炸裂した。

閃光は遥か遠くから、寸分違わず、防御する暇など与えず闇の書に命中した。

轟音と爆煙が撒き散らされる。

「やったか……？」

ザフィーラの疑問を一蹴するかのように、闇の書が黒煙を切り裂いて現れた。　その手には揺らめく炎剣が握られていた。

闇の書が黒翼を広げて疾走を開始した。

炎剣が振るわれる。

ザフィーラはフェイトとすずかを抜き、前に出る。　前面に、可能な限り障壁を展開する。

闇の書の間合いに突入した。　炎剣から放たれるのは剣の騎士が必殺とする斬撃。

「紫電、一閃」

炎剣が走る。

守護獣の障壁を悉く破壊し、刃がザフィーラを襲った。

「――――が、あああっ！」

ザフィーラの手が炎剣を掴み取る。
拳から伸びた魔爪で闇の書を殴り飛ばす。
障壁により直撃は阻まれた。　が、闇の書の身体が大きく飛んでいく。

「、鋼の軛！！」

大地を貫いて現れた拘束条が闇の書の身体を刺し、動きを空中で縫いとめた。
フェイトが闇の書の真上に飛ぶ。
金色の魔法陣に立ち、戦斧の切っ先に雷光を満たす。

「サンダーァァァ…レイジッ！！」

雷鳴が轟き、雷が闇の書を貫いた。
防御不可の状態での近距離からの砲撃、今度こそ決まったかと思った。

「……甘いな」

感情の無い声が響く。
闇の書が指を鳴らすと、大地から土色の蛇龍が現れた。
トンネルを掘るための掘削機のように牙が並んだ円形の口がフェイトに向かう。
いや、フェイトのすぐそばを通り過ぎ、蛇龍がなのはに向かって一直線に伸びて行く。

「なのは！！　――――ッ！」

すぐになのはを助けようとしたフェイトを闇の書の拳が襲いかかる。

闇の書はさらに蛇龍を二体呼ぶ。　ザフィーラとすずかの動きも封じた。
なのはも自分が標的にされたと気付き、迎撃する。　しかし、アクセルシューターでは蛇龍の鎧の皮膚に弾かれ、砲撃をチャージする時間はない。
ダメもとでチャージ未完の砲撃を撃つが、身を捩じって躱された。
円形に牙を並べた口が少女を呑み込もうと開かれた。

「――――旋迅疾駆ッ！！」

流星が蛇龍を打ち上げた。　蛇龍の動きが止まる。
続いて黒衣の少年が光刃を脳天に突き立てる。

「スティンガー、……ブレイク」

魔力の刃が炸裂。　脳を焼かれた蛇龍が活動を停止、大地に倒れ伏した。

「ク、クロノ君！　……と？」

「初めまして。　聖王教会所属、シャッハ・ヌエラです」

「え、はい。　初めまして、高町なのはです！」

自己紹介を終えると、三人は前方の闇の書に目を向ける。
ちょうど、ザフィーラ達も蛇龍を討ち終えていた。
クロノとザフィーラの視線が交錯した。　それも一瞬、守護獣はすぐさまフェイトの援護へと意識を向けて行った。

「……意外だな。　闇の書の守護騎士が味方についてくれるとはね」

「はやてちゃんを助けたいって気持ちは同じなんだよ……」

なるほど、とクロノは頷く。

手段はどうあれ、彼らの目的はそう非道なものではなかったようだ。

「目的は手段を正当化しないが、手段だけで目的を悪と認定することもできない……か」

そう思うと、グレアムのやったことは前者となろう。

彼の目的は次元世界の平和だった。　少なくとも、闇の書を葬ることは平和のためのひとつだったのだろう。　だが、彼は手段を間違えた。　結果を重視したあまり、その過程での被害を無視してしまっていた。

味方だと思っていた者と敵対し、敵だと思っていた者と今こうして共闘している。

複雑な思いがクロノの胸に募る。

「行こう。　僕たちも加勢する」

「了解しました。　ですが、私は皆さんのように空戦のスキルは無いのでやれることは少ないですが……」

「構わない。　あれほどの魔力を持つ相手だ、今はとにかく人手が欲しい」

なのはに今まで通り後方からの砲撃を任せ、クロノとシャッハは闇の書へと向かって行った。

「これで、6人か……」

駆けつけたクロノとシャッハを見て、ザフィーラはそう言った。
闇の書の強さは同志としては知っていたが、やはり実際に戦ってみると思っていた以上の力であった。
防御不可能な状況での砲撃も通じない。

（いや、もし零距離で撃つことができたら……）

なのはの砲撃はこの面子で最強だろう。　その砲撃を零距離で闇の書に撃ち込むことができたら、もしかしたら……。
だが、それにはいくつもの障害を突破せねばならない。
闇の書の動きを止め、障壁を突破し、なのはの砲撃をフルチャージさせた状態にもっていかなければならない。

（やはり、最良なのは主自ら闇の書の管制プログラムにアクセスしてもらうことだが……それは酷な要求か）

はやては今、闇の書の中にいる。　主である彼女なら内側から闇の書の管理者としての権限を使って闇の書を止めることが可能だ。
だが、八神はやては絶望と悲しみの渦の中にいる。
目の前で家族を消され、再び孤独へと堕ちた彼女の心にまだ、立ち上がる想いがあるだろうか。
ザフィーラは叱責を込めて自身の頬を殴る。
主に使える守護獣が、主を信じられないなど言語道断だ。

（信じろ、あの方の心は、へし折れたまま腐るほど弱くとも、世界の滅亡を本気で望むほど冷たくなどない！）

拳を握りしめ、守護獣は敵に向かっていく。

海鳴での戦いの様子を、リンディはアースラのモニタを通して見ていた。
もしもの時は自分も出れるように準備を整えて。

「歯痒いわね。　目の前であんな小さな子たちが戦っているのに、私は何もできないなんて……」

「そんなことないですよ。　艦長がいなかったらここの指揮は誰が取るんですか？　災害担当の局員だって、艦長の命令じゃなきゃ動けないんですよ」

エイミィに弱音を窘められ、リンディはそうね、と返す。
確かに、今できることを全力でやるべきだ。
何か策はないかと局のデータベースにアクセスして情報を探す。
その時、緊急通信を告げるアラームが鳴り響いた。

「何事！？」

「ほ、本局からの通信！　本局に襲撃があったもよう、犯人は現在逃走中とのことです！」

「ッ――――！　こんな時に……エイミィ！」

リンディに言われ、エイミィは急いで端末を操作し、本局から映像を引き出す。

なのはたちと並んで隣のモニタにその様子が映し出された。

『どけどけどけどけーーーー！！　どかねぇとテメェらの大切な提督様が怪我すんぞおおぉぉ！！』

『ヒィィハァァッ！　さっすがレイジ！　人質取るなんて主人公のやることじゃねぇぞコンチクショーッ！　そこにシビレるウゥ憧れるゥゥゥ！！』

ブツリ。

エイミィが条件反射的に映像を切った。

気まずい空気がアースラの中に流れた。

「……エイミィ？」

「いや違いますよ艦長あれ絶対何かの見間違いですカメラの故障です最新鋭にも不具合なんてごまんとありますからあり得ない話じゃないですもしくはただのソックリさんかもしれませんしほらあんな恰好してるとこ見たことないし世の中同じ顔の人が三人いるっていいますし！！！！！！！！」

魂の叫びを発するエイミィに皆の同情の視線が集まる。

「いやでも、さっき思いっきり“レイジ”って……いえすみませんですはいなんでもないです」

余計なことを口走ったアレックスをエイミィが視線だけで黙らせた。

が、それでも事実は変わらない。　エイミィの言ったことが正しいかどうかはともかくとして、映っていたのは思いっきり顔見知りであった。

色々疑問は尽きず、それを解明するためにも再度映像を見る必要がある。

「エイミィ、お願い」

「…………………………はい」

この世のすべてに絶望したかのような顔で、エイミィは再び映像をモニタに映した。

『クソッ！　人質を取るなんてなんて卑劣な！　この鬼、いや悪魔め！！』

『悪魔でいいさ。悪魔らしいやり方で押し通るだけだ』

『グレアムハンマー！』

『ゲフゥッ！』

『ていとおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっく！！！！！』

ブツリ。
エイミィが映像を切り、そのまま頭を抱えた。
リンディも茫然自失の状態で何も映さないモニタを見つめていた。

「なにやってんだアイツはーーーーッ！」

エイミィの魂の叫びがブリッジに木霊した。

「……ねむい」

深い深い闇の中に、少女の声が小さく響いた。
八神はやての目が開く。
紅い瞳の女性が少女を見ていた。

「そのままお休みを、我が主」

女性の口から、澄んだきれいな声が流れた。

「貴女の望みは全て私が叶えます」

目を閉じてと、女性は言った。
心静かに夢を見て下さいと、女性は言った。

（わたしは、何を……望んでたんやっけ？）

夢を見ること。
女性はそう答えた・

フランベルグからカートリッジが排莢された。　圧縮魔力がすずかの身体に満ちる。
その魔力を氷に換える。　氷刃を創り、投擲する。
闇の書は身体を捻ってそれを回避。　そのまますずかに接近し、拳

を振り上げる。

「痛烈な一撃（テートリヒ シュラーク）」

紅い騎士の一撃宿した鉄拳がすずかを襲う。
剣でガード、すずかの小さな体が吹っ飛ぶ。
体勢を整える少女を、黒翼の天使が追撃する。

『Ｂｉｎ　ｌｅｅｒ（カートリッジ残量０です）』

防御のために再度カートリッジをロードしようとしたところに、フランベルグの冷たい声が響いた。
闇の書が迫る。　拳をさらに強く握りしめ、少女を襲う。

「すずかっ！！」

金の少女の声。
ソニックフォームへと切り替えたフェイトの鎌が闇の書の頭上を掠めた。　さらにクロノのスティンガーが闇の書の軌道をずらしていく。
安堵したところに、フェイトがスピードローダーをすずかに投げ渡した。
すぐさま、緋色剣の機関部を開いてカートリッジを装填、フェイトに投げ返す。

「ありがと、フェイトちゃん」

「どういたしまして」

「どうして君がここにいるのかとても気になるが、今はこっちの方

が先のようだな」

クロノの言葉に、すずかが申し訳なさそうな顔をした。
手を振って気にするなと示しつつ、クロノはスティンガーを多数展開する。
光刃を斉射。
闇の書は襲いかかる剣膜をかいくぐり、時折闇色の魔力球を設置していく。

「……ナイトメア」

その言葉に反応し、設置された光弾からドス黒い閃光が伸びた。
放出した闇がスティンガーを呑み込んでいく。
クロノ達の前に白みを帯びた障壁が展開、闇の侵攻を阻んだ。

「すまない、助かった」

「礼には及ばない。　守護することが私の役目だ」

ザフィーラの手から魔力によって編まれた拘束条が伸びる。
闇の書が手で円を描く。　風の障壁が生まれ、バインドを弾いた。

「この程度のバインドで我を捕えられると思うてか、蒼き狼」

「思ってなどいない。　が、動きは止まった」

ザフィーラがわずかに降下する。
同時に、桜色の閃光が風の盾を貫き闇の書を撃ち抜いた。

「――――が、ぁ」

闇の書の口から苦悶の声が漏れた。
致命傷には程遠い、大したダメージではない。　が、まともに受けたのは確かであった。
紅い眼を動かし、自分を今撃った砲撃魔導師を見る。
少女との距離は遠く、視力を魔力で強化しないとはっきりと視認できない程離れていた。

（あの距離から正確に私だけを……厄介だな）

闇の書は高町なのはを優先的に撃墜すべき対象として認識した。
そのために必要な魔法と戦術を検索、行動に移す。

「ブリッツアクション」

闇の書が雷の如く駆け抜けた。

「――――なっ！？」

フェイトから驚きの声が出た。　すぐに追い掛ける。
防御を削ったソニックフォームによる加速で闇の書に迫る。
紅い四つの瞳が交錯した。

「ハーケン――――」

「――――封縛」

フェイトの鎌が振り下ろされるより速く、闇の書のバインドが発動。
飛行も解除され、動きを封じられたフェイトが落下していく。
闇の書がなのはに迫る。　拳に集中される殺意を感じ、なのははプ

ロテクションを展開し、可能な限り強化する。

「ウィンデルシャフトッ！！」

彗星が闇の書の前に現れた。

シャッハの双剣が渾身の力を以て振るわれる。

「烈風一迅――――！」

「旅の、鏡」

闇の書の姿が忽然と消えた。

標的を失った刃が空しく空を切る。

そして、闇の書がなのはの目の前に姿を現した。

「シャマルの空間移動だっ！！」

ザフィーラの声で、湖の騎士の魔法を知る者は全てを理解した。

彼女は離れたところから、空間を超えて腕を伸ばしてなのはのリンカーコアを抜き取った。

それと同様に、闇の書が全身で空間を超えたのだ。

必殺の拳が突き出される。

「暗黒（シュヴァルツェ）――――」

「なのは――――っ！！」

桜色の魔法壁に、淡い緑の魔法壁が重なる。

「ユーノくん！」

なのはの明るい声が飛ぶ。
その声に、ユーノはただ頷いて答えた。
２人分の魔法壁が、闇の書の拳を食い止めている。
が、それだけでは闇の書は止まらない。
突き出される拳は確実に少女に牙をむく。
そして。

「効果（ヴィルクング）、防壁破壊（ゼルストルング）」

なのはを守る二枚の壁が粉砕された。
咄嗟に杖の柄で防御を試みるが、その一撃は小さななのはの身体を吹き飛ばすのには十分すぎた。
重く響いた衝撃音とともに、なのはが悲鳴を上げて落下していく。

「なのはっ！」

叫ぶユーノに、闇の書の魔法が迫る。
少年の名を叫ぶ声が耳をうつ。
信じろと、ユーノは自身に言い聞かせる。
なのはの魔導師としての才能は自分を上回る。　先ほどの攻撃で重傷を負ったとは考えにくい。　防御は砕かれたが、威力を削ることには成功しているのだから。
だから、今自分がやるべきことは少女の身を按ずることではなく、

「ストラグルバインド！」

闇の書を止めることだ。
ユーノの手から放たれた魔法縄が闇の書を縛る。　が、それすら容易く彼女は引き千切った。

即座にユーノは防御魔法を多重展開。　闇の書の攻撃を防ぐ。
やがて障壁を全て砕かれ、ユーノはなのはと同様に地面に叩き落とされた。

「フェイト！　クロノ！」

落ちざまに少年が口にした名に反応し、闇の書が視線を背後に向ける。
そこには、闇を消し去るほどの光を放つ数多の魔弾だった。

「時間稼ぎ、ご苦労だったなユーノ」

「フォトンランサー……」

「……スティンガースナイプ」

フェイトとクロノが呟く。　それに反応し、魔弾が狙いを闇の書一人に絞り込む。
闇の書は即座に障壁を展開、今にも襲いかかるであろう脅威に備える。

「バァァリアァァ――――」

「――――？」

「ブレイクッ！！」

アルフの拳が、闇の書の障壁を粉砕した。
フェイトとクロノが同時に杖を振り下ろす。

「ファランクスッ！」
「エクスキューションシフト！」
「「一斉射（ファイア）《シュート》！！」」
金と青の魔弾が降り注いだ。

「う、ううん……」
全身を這いまわる痛みに呻きながら、なのはは体を起こした。
瓦礫によって防護服は汚れ、街中に建つ火柱の熱が身を焦がす。
「……あ」
立ち上がり、ようやく少女は自分が最悪な状態だと気付いた。
レイジングハートが、折れていた。
柄の中心からポキリと折れ、紅いコアには亀裂が走っていた。
原因は分かっている。
闇の書のあの一撃は、なのはとユーノの2人分の防御で防ぎきることのできるものではなかったのだ。

「そんな……」
絶望を孕んだ声が口から零れた。
空を見上げる。
そこで、少女の仲間は激闘を繰り広げているのだろう。　そして、
自分はそれに交ざることはできない。

悔しさがこみ上げる。
何もできない自分が悔しくて、悲しくて、少女の瞳から、一筋の涙が流れた。

『Ｍａ、ｓｔｅｒ……』

折れた杖からノイズの混じった声が聞こえた。
それを、なのはは精一杯抱きしめる。

「ごめん、ごめんねレイジングハート。　わたしが弱いせいで、また、あなたを傷つけた」

ごめんなさいと、なのはは絶えず謝罪の言葉を口にする。
だが違う。
レイジングハートが望むのはそんな言葉ではない。
なのははそれに気付かず、ただ嗚咽混じりの謝罪をくりかえす。

「……どうした嬢ちゃん。　何が悲しくて泣いている？」

背後からかけられた声に、なのはの肩が跳ねた。
ゆっくりと、涙で腫らした眼を声の主に向けた。
そこにいたのは１人の老人だった。
両側の側頭部のみに白髪を残した禿げ頭の老人。　左手に赤く塗装された工具箱を抱えたその老人は、ゆっくりとした足取りでなのはに近づく。

「ダメだな。　子供は子供らしく笑ってるのが一番だって言うのに……」

老人の背後の地面が割れた。

その割れ目から、土色の蛇龍が現れ、老人に襲いかかる。

「！　おじいさん、危な――――――！！」

老人の、松田怜一郎の右手が走る。　その手に握られた黒い石が蛇龍の額に突き刺さった。

「……邪魔だ、爬虫類」

蛇龍が弾けた。
まるで空気をパンパンにつめた風船を針で割ったかのように、蛇龍が弾けて霧散した。
唖然としているなのはをよそに、怜一郎は何事もなかったかのように少女の手から杖を取った。
あ、となのはが呟くも、怜一郎は気にした様子もなく二つに折れた杖を見る。

「ほぉ、ミッド式のデバイスにカートリッジを入れたか。　これを調製したやつは良い腕だが、フレーム強化が中途半端なのはいけねぇ。　時間がなかったのかも知れんが、これじゃ全力がだせんだろうに……」

よいしょと腰を下ろし、老人は工具から機材を取り出し並べて行く。
広げられたそれらは、どれもこれもなのはが見たことのないものだった。
老人の手がレイジングハートの上を滑る。　するとモニタが現れ、ミッドの文字が次々と表示されていく。
怜一郎の手元に光を放つコンソールが展開、老人はそれをかなりの速度でうっていく。
モニタが閉じると、今度は老人が並べた機材を使って杖をいじり始

めた。
一瞬なのはは声をあげそうになったが、それが修理なのだと分かり、大人しく怜一郎の作業を見ていた。

「しかし、ジュエルシードに闇の書。　この街も随分と魔法くさくなったものだ」

「……え？　おじいさん、今なんて？」

「……終わったぞ」

返答の代わりに差しだされたのはなのはが使う魔法杖。
怜一郎の言うとおり、レイジングハートは折れる前と同様に、いや、それ以上の状態ではないかと思うほどの出来だった。

「フレームも強化しておいた。　どうせ今まで全力だしてなかったんだろ。　それで一発、でかいのをブチかましてやれ」

「あ、ありがとうございます！　……おじいさんっていったい？」

なのはの問いに、怜一郎はふっと軽く笑った後、

「なに、ただのしがない修理屋だ」

そう言った。

「ユーノ！　大丈夫かい！？」

「う、うん。　大丈夫、ありがとうアルフ」

アルフに支えてもらいながら、ユーノは空を見上げる。
フェイトとクロノの放った魔法により、夜天は光と爆煙によって覆われていた。
闇の書の姿は確認できないが、今ので倒せたとは思えない。　いや、そもそも倒せばすべて解決するというわけでもないのだが。

「……？　あれは……」

爆煙の中に、それとは気色の違う黒が混じっていることに、ユーノは気付いた。
それは、何かに例えるとしたら――――闇。
それは霧のように広がり、フェイト達を包み込み、外部からの干渉を完全に断ち切った。

「な……に？　これ」

フェイトの疑問に答えられる者はいない。　が、これは危険なものだということは闇に包まれた全員が気付いていた。
闇の中は暗く、雷雲のように時折光を放つ。
そんな闇の中で、暗黒の主の姿だけが鮮明であった。
フェイト達を見下ろすように、闇の書が黒翼を広げて佇んでいる。
銀髪の女の手が上がる。　雷が獣の唸りを上げ、彼女の周囲に集まる。
ザフィーラが、前に躍り出た。

「撃ち抜け――――」

守護獣の口が、逃げろと動く。
白い障壁が多重に展開されていく。

「――――夜天の、雷！」

剛雷が轟き、黒い霧を消し飛ばした。

そうなんか？　と、はやては言った。
自分の望みが、現実で起きた悲劇から目をそむけ、無かったことにし、夢の中で生きることが、自分の望みなのかと、はやては自問する。

「わたしが、欲しかった幸せ……」

「健康な体、愛する者たちとのずっと続いていく暮らし……」

紅い瞳で主を見つめ、淡々と続ける。

「眠って下さい。　そうすれば夢の中で貴女はずっと、そんな世界にいられます」

女性の言葉を頭の中で反芻し、噛みしめる。
健康な体。
車イスになど頼らず、自分の脚でどこまでいくことのできる体。
――――――――――欲しい。

愛する者たちとの暮らし。
ヴィータとシグナム、シャマルにザフィーラ。　騎士たちとのかけがいの無い、家族との生活。
――――――――――欲しい。
要らないなどと言えない。
それが叶うのなら、どんなに幸せだろうか。
だが、少女は首を横に振った。　か細い手を精一杯握りしめる。
今にも閉じそうな瞳をこじ開け、その空色の瞳を開いて――――

「せやけど――――それはただの夢や」

少女は、そう言った。

眩い雷光が消える。
白く塗りつぶされた視界に色が帰って来た。

「――――う……ん？」

極端な明暗差に眩む目をこすりながら、フェイトは今の状況を確認する。
赤い瞳が一気に開かれた。

「……ザフィーラ」

「無事、のようだな……」

息絶え絶えの声で、守護獣が答えた。
彼の身体はまさに満身創痍だった。
障壁を貫いた雷撃に体を焼かれ、黒く焦げ付いた腕が頼りなく垂れている。
褐色の身体に赤い線が幾つも流れ、その大きな背中が小さく見えた。

「ザフィーラ…そんな、わたしたちを庇って……！」

「我は守護の獣、護ることが我が使命。　負い目を…感じる必要など、無い」

今にも消えそうな声。
盾の守護獣はその名の通り、自らを盾にしてフェイト達をあの雷撃から護りきったのだ。
だが、それもここまで。
もう彼は動くことはできないだろう。　ここに治療系の魔法を使える者はいない。

「ありがとう、ザフィーラ。　護ってくれて……」

「気にするな。　私は、私のすべきことをしただけ……だ」

守護獣の身体が崩れ落ちる。
フェイトとすずかが咄嗟に支えようとした。
そこへ――――

「終わりだな、蒼き狼。　――――我が内に還れ」

冷たい声が響いた。
ザフィーラの胸から赤い帯を締めた腕が生えた。

「――――――――ぐ、がぁっ！」

その手には、光の塊が握られていた。
腕は消え、上方にいた闇の書の手にザフィーラのリンカーコアがあった。
守護獣の身体が光となって散っていく。

「――――ザフィーラ！」

「すまぬ……私はここまでのようだ。――――頼む。主を、そして彼女を……」

――――――――救ってやってくれ。
そう言い残し、蒼き狼は散って逝った。

「ザフィーラ……」

「そう悲しむことはない。お前達もすぐ、闇の中で眠るのだから」

冷たい声。
それに対し、フェイトは首を横に振った。

「……眠らないよ」

闇の書の眉根がピクリと動いた。
フェイトは闇の書をまっすぐに見据え、右足を前に出し、体を前に倒しながらバルディッシュを下段に構える。

「はやてにシグナムたち、そしてあなたを助けるまで――――絶対

に眠らない！」

『Ｚａｍｂｅｒ　ｆｏｒｍ』

バルディッシュのリボルバーが二度回転、カートリッジをロードする。

戦斧が二つに分かれ、鍔となり、そこから金色の大剣が伸びた。

その電撃を帯びた魔力刃はフェイトの身体より大きい。

全ての力を攻撃に向けた、閃光の刃の最終形態。　ザンバーフォーム。

雷光の大剣を、フェイトは軽々と振りかざす。　少女の足元に魔法陣が展開する。

「疾風、迅雷――――！」

闇の書が障壁を多重展開する。

だが、それも無駄に終わる。

「スプライト、ザンバ――――ッ！！」

神速で放たれた斬撃が、闇の書を守る障壁を一瞬で斬り裂いた。

何とか残った最後の障壁に、全魔力を注ぎ、闇の書は自身を守る。

「くそっ、これでも威力が足りないのか！」

クロノが忌々しそうに言った。

ここで自分が下手に砲撃すれば、フェイトの斬撃を相殺しかねない。

近距離魔法を撃とうとしても、そうすれば自分があの斬撃に巻き込まれてしまう。

そのことを、すずかも分かっているのだろう。　ただ祈る様に見つ

めていた。

「――――――――大丈夫」

その言葉を残して、クロノの横を白い影が駆け抜けて行った。
栗色の髪、白と金の魔法杖を持った少女。　しかも、魔法杖にいたっては形状が先ほどと変わっていた。
それは、杖先が槍のようになったレイジングハートのフルドライブモード。　エクセリオン。
魔力槍を伸ばし、六枚の桜色の翼が展開させ、高町なのはは躊躇いなく闇の書に突撃した。
フェイトと闇の書によって巻き起こる魔力の乱気流が少女を襲う。
ジャケットが傷つくのも厭わず、なのはは全魔力を愛機に込める。

「エクセリオンバスターA・C・S――――ドライブッ！！」

魔力槍が、最後の障壁を貫いた。
なのはとフェイト、2人の渾身の一撃が闇の書に炸裂する。

「ブレイク、シュ――――ウゥゥトッ！！」

極光が弾けた。
闇の書が、一気に海まで吹き飛ばされる。
杖から熱気が排出されるのを確認し、なのはは追撃を開始した。

「ちょ、ちょっと待てなのは！　レイジングハートのフレームは大丈夫なのか！？」

「大丈夫！　優しいおじいさんに、修理してもらったから！」

おじいさん!?　とクロノが声を上げる。
そんなこと気にせず、なのはは海へと向かい、フェイトとすずかがそれを追う。
同じく追おうとするクロノを、シャッハが呼びとめた。

「申し訳ありません、執務官。　空戦スキルの無い私は、ここまでです」

あ、とクロノは声を上げた。
シャマルは陸戦魔導騎士。
これから向かう海で彼女の出番はない。
シャッハの機動力は魅力的だが、彼女の足場を用意する時間はない。

「いや、君のおかげでかなり助かった。　君には街の消火を手伝ってもらいたいのだが、構わないか？」

「それぐらいでしたら、喜んで」

「ありがとう」

クロノは礼を言って、今度こそ、少女たちの後を追った。

「わたし、こんなん望んでない。　あなたもおんなじはずや、違うか？」

闇の中に、八神はやての声が木霊する。

「私の心は、騎士たちの感情と深くリンクしています。　だから騎士たちと同じように、私も貴女を愛おしく思います」

紅い瞳が閉じられた。

「――――だからこそ、貴女を殺してしまう自分自身が許せない」

「――――――――ッ！」

「自分ではどうにもならない力の暴走。　貴女を侵食することも、暴走して貴女を喰らい尽くしてしまうことも、止められない」

少女の瞳が揺れる。

不思議に思わなかったわけではない。

闇の書が、自分を蝕んでいるのではないかと。　でも信じられなかった。

孤独だった自分に家族をくれたものが、自分を殺すなど信じたくなかった。

何か理由があるのではと、思い続けた。

その小さな口がゆっくりと言葉を紡ぐ。

「……覚醒のときに、今までのこと少しはわかったんよ。　望むように生きられへん悲しさ、わたしにも少しは分かる！　シグナム達と同じや！　さびしい思いしてきた……せやけど、忘れたらあかん！」

紅い瞳が大きく開かれた。

少女の手が、女性の頬に触れる。

柔らかく、優しく、少女の温もりが伝わってくる。

「あなたのマスターは、今はわたしや。　マスターの言うことは、ちゃんと聞かなあかん！」

魔法陣が広がる。
女性は跪き、少女と視線を合わせる。

「……名前を上げる。　もう闇の書とか、呪いの魔導書なんていわせへん。　わたしが呼ばせへん！」

優しく、力強い言葉。　心が温まるようだ。
紅い瞳から涙が零れる。

「わたしは管理者や。　わたしには、それができる」

「無理です……自動防御プログラムが止まりません！　管理局の魔導師が戦っていますが……」

「――――――――止まって……」

少女の祈りに応えるように、ベルカの陣が光り輝いた。

ギチリと、闇の書の動きが鈍るのをなのはは確かに見た。
さっきまでの激しい攻撃は止まり、まるで関節が錆びたブリキの人形のようにギコチない動き。
その異変に、皆が攻撃を止めた。

『（外のかた……管理局のかた――――！）』

なのはたちの頭に少女の声が響いた。

闇の書のとは違う声が、念話として皆に伝わる。

その声の主を、なのはは知っていた。

『（そこにいるの子の保護者、八神はやてです！）』

独特のイントネーションで告げられた名前に皆が驚きの声を上げる。

「はやてちゃん!?」

『（へ……なのはちゃん!?　ほんまに?）』

「（うん、なのはだよ。　いろいろあって、闇の書さんと戦ってるの！）」

闇の書の腕がぎこちなく上がる。　まるで、主からの束縛に抗っているかのようだ。

『（ごめんなのはちゃん。　なんとかその子とめてあげてくれる?　魔導書本体からはコントロールを切り離したんやけど、その子が奔ってると管理者権限が使えへん。　いまそっちに出てるのは、自動行動の防御プログラムだけやから！）』

多くの事を一度に言われ、なのははすぐに理解できなかったが、ユーノとクロノは理解できたのか、瞬時に情報を整理し、思考に移る。

（闇の書完成後に管理者が目覚めてる……これなら――――！）

（防御プログラムだけを吹き飛ばせれば、主に被害はない――――！）

「なのはっ！」
「フェイトッ！」

2人の少年に呼ばれ、2人の少女がそちらを向く。
少年たちは念話ですぐさま互いの一致に気付き、それぞれ伝えていく。

「（分かりやすく伝えるよ！　今からいうことをなのは達ができれば、はやてちゃんは外に出られる！）」

「（どんな方法でも構わない。　彼女を、魔力ダメージでブッ飛ばすんだ！）」

「「全力全開、手加減なしのフルパワーで！！」」

その言葉に、なのはとフェイトが顔を見合わせる。

「さっすがユーノくん！　分っかりやすい！」

「わたしとなのはでやってみる。　時間を稼いで！」

希望が見えた。
ふたりの少女が寄り添い合い、それぞれ最高の魔法の準備に入る。
闇の書の防御プログラムも危険を察したのだろう。
海面から彼女を守る様に触手が這い出てきた。
すぐさま、すずかの氷剣がそれを斬り捨て、クロノの砲撃が焼き切

り、ユーノとアルフのバインドが縛っていく。
レイジングハートが光翼を広げ、バレルフィールドを展開する。
なのはの魔力を、フェイトのザンバーの刀身に乗せる。
ふたりの魔力が混じり合い、相乗して高まっていく。
この一撃に乗せるのは、助けたいという強く優しい想い。
光を以て闇を払い、堕ちた者たちを引き揚げる。

「お待たせしました。　おっきいのいきます！」

この場にいる者に、気付いた者はいないだろう。
カリム・グラシアが預言した闇の書覚醒の日付は聖夜の日の前夜…
…クリスマスイヴ。
だが、現在の日付は———なのはたちが八神はやてと初めて会った日は———１２月１３日。

「「Ｎ＆ａｍｐ；Ｆ（なのはとフェイト）中距離殲滅コンビネーション！」」

預言とは異なったたったひとつの事象。
それがわずかな亀裂となり、彼女たちの想いが、預言を覆した。
破滅の未来を打ち壊したのだ。

「全力全開！」
「疾風迅雷！」

今、永く続いた旅が———
終りなき悲しみの連鎖が———
全てを呑みこむ絶望の闇が———

「「ブラスト———カラミティ！！！！」」

――――――――終わる。

第３１話　闇の終焉（後書き）

よし、後はフルボッコ回とエピローグだけだな！

それでは皆さま、来年もよろしくお願いします。

ちょっと早いけど、

あけおめ！　ことよろ！

第３２話　旅の終わり（前書き）

いつの間にやらＰＶが２０万突破！！
みなさま応援ありがとうございます。
まさに感謝感激とはこのことか。

第３２話　旅の終わり

「名前をあげる。　夜天の主の名において、汝に新たな名を贈る……」

名前をつける。
それは、簡単なようでとても難解な魔法。

「強く支えるもの、幸運の追い風、祝福のエール……」

自分がどれほどそれを愛しているか、大切に想っているかの証明。
その者の想いを短い言葉に集約すること。
それが、名前を付けるということ。
八神はやてが想いを込めたその名は――――

「――――リインフォース」

魔法少女リリカルなのはＡ’ｓ☆Ｔｈｅ　Ｒｉｄｅｒ☆　第１７話　旅の終わり

少女の呑み込んだ闇が消し飛ぶ。

暗く終わりの見えない闇の世界から、希望に満ちた光の世界へと変革する。
絶望はすでにない。　悲しみにくれる必要もない。
そこには、新たな希望と、悲しみを覆い隠すほどの喜びに溢れていた。

『新名称“リインフォース”を認識。　管理者権限の使用が可能になります。　……ですが、防御プログラムの暴走は止まりません。　管理から切り離された膨大な力が、やがて暴れ出します』

「ん……まあ、なんとかしよ……」

少女は手を広げ、胸に魔導書を抱きしめる。
もう、呪われた魔導書など呼ばせない。
破壊しかできないとか、殺戮しかできないとか、そんなことを二度といわせないために、ずっと一緒にいようと、少女は誓う。

「行こか、リインフォース……」

『はい、我が主』

その身に刻まれた呪いを解くために、少女と魔導書は夢の世界から飛び立つ。

世界が揺れる。

地震ではない、海震でもない。　大気が、世界が揺れている。
震源はすぐ目の前にある。
防衛プログラムとはやての分離に成功したなのはたちの目の前には、黒く淀んだ球体が海上に鎮座していた。
それを守るかのように、無数の触手がうねり、バリケードを構築している。

『みんな気をつけて！　闇の書の反応、まだ消えてないよ！』

エイミィの通信に、なのは達は身構える。
そうだ、今までの戦いははやてを助け出すための戦い。　闇の書を倒すための戦いは、まだ終わってはいない。

「管理者権限発動……」

『防衛プログラムの進行に割り込みをかけました。　数分程度ですが、暴走開始の遅延ができます』

「うん、それだけできれば十分や……」

光の世界を泳ぎなく、はやてのまわりにリンカーコアが現れる。
数は四つ。　その光から感じる魔力はよく知っている。

「リンカーコア送還。　守護騎士システム、破損修復。　――――
おいで、わたしの騎士たち……」

闇色の球体から、白銀の光の球が飛び出た。
それに付き従うように、四つの光が周りを飛ぶ。
光は人型になり、銀の光を守護するようにその姿を現した。

「…我ら、夜天の主の下に集いし騎士……」

長剣を携えた烈火の将が名乗りを上げる。

「主ある限り、我らの魂、尽きること無し」

「この身に命ある限り、我らは御身の下に在り……」

風の癒し手が続き、蒼き狼が誓いの言葉を口にする。
そして……

「我らが主、夜天の王――――八神はやての名の下に！」

紅の鉄騎が、主の名を呼んだ。
銀の光球が割れる。　その中から、金色の剣十字の杖を手にした黒衣の少女が姿を現した。
彼女の名前は八神はやて。
闇の呪いを終わらせる、最後の夜天の主。
夜天を統べる少女が、金色の杖を掲げる。

「夜天の光よ、我が手に集え。　祝福の風、リインフォース。　セーットアーップ！」

剣十字に光が満ちる。
光ははやてを包み込み、彼女を守護する騎士服を錬成する。
腰から下がる夜色の外套、純白のジャケットとベレー帽が少女を包む。
茶色い髪は月光色に変わり、瞳は蒼天に染まる。
背中から三対六枚の黒翼が広がり、羽ばたく。
今ここに、真の夜天の主が誕生した。

「……すごい」

フェイトの口から感嘆の言葉が零れた。
その驚きの原因ははやてから感じる魔力の量だ。
自分よりも、なのはよりも、おそらくこの場にいる中ではやての魔力量は一番多い。
その魔力が先天的なものなのか、騎士たちがリンカーコアを蒐集した結果なのかは分からない。

「でも……今はいいか」

ただ、この結果を喜ぼうとフェイトは思う。
半年前の母の時とは違い、今度こそ、助けたい人を助けることができたのだから。
とはいえ、諸手を挙げて歓喜するのはもう少し後だ。
フェイトはなのは、すずか、クロノ達とともにはやての合流しようと移動を始めた。

感動の涙、というのを流すのは初めてではないかとヴィータは思った。
助けたかったはやてが、もう会えないと諦めかけていたはやてが、今目の前に元気な姿で立っている。
それを確認しただけで、視界が涙で滲んでいく。
衝動的に、ヴィータははやての胸に抱きついていた。

「……はやて、はやて、はやて、はやて、はやて、はやて、はやてぇぇ……！」

嗚咽混じりに何度も主の名を呼ぶ。
そんな紅い少女を、はやてはギュッと抱きしめる。

「おかえり、ヴィータ。　みんなも、また会えてホンマに嬉しい……」

本心からの言葉を口にする。
騎士たちの謝罪の言葉が聞こえてくるが、今はどうでもいいことだ。
また、家族がそろったのだから。
ヴィータが泣き続ける中、なのはとフェイトとすずか、クロノたちが目の前に降り立った。
みな防護服はボロボロに擦り切れ、疲れきっていた。　だが、それでも彼女たちは笑顔を向けてくる。
今はやてが噛みしめている喜びを、自分の事かのように喜んでくれているのだろう。
感謝の念を同時、迷惑をかけてしまったことへの申し訳ない思いがこみ上げる。

「なのはちゃんもフェイトちゃんも、みんなホンマにゴメンな。

ウチの子たちが迷惑かけて……」

「ううん、そんなこと……」

「……感動の場面で申し訳ないんだけどよ。　今ってどういう状況よ？」

…ないよ、と続けようとしたなのはの言葉を、男の声が遮った。
全員の眼が、計２２の瞳が一点に向けられた。

「――――レイジッ！」

フェイトが代表して声をあげる。
皆の視線が向けられた場所には、竜人形態（なのは達からしたら見慣れない姿）の松田怜治が佇んでいた。

「アンタ、こんの大変な時にどこに行ってたんだい！」

「……いや、すっげー美人にお茶に誘われちゃってついつい……ってウソだよウソ。　そんな怖い顔で睨むな」

皆の眼が一斉に半眼に変わるのを見て、思わずたじろぐ怜治。
彼のジョークは不発に終わったようだ。
クロノが近づき、怜治だけに念話を飛ばしてきた。

「（提督に勝ったようだな）」

「（ま、イレギュラー満載だったけどな。　次やることになったら厳しいな）」

「（当たり前だ。　むしろ、二度目のラッキーパンチは無いと思え）」

「（はいはい……）」

クロノの言葉を軽く聞き流しながら、怜治は自分を見る魔導師たちを見わたす。
なのはたちがボロボロなのを見て、こちらもかなりの激戦だったのだろうと思った。
そして、1人の少女と目が合った。

「……で、なんでお前がここにいるんだ？」

「え、えっと、あの……」

すずかが申し訳なさそうに顔を下げる。
以前、フランベルグを手にした時にした、もう戦わないという約束を破ってしまった。
前回怜治と刃を交えたのは不可抗力だったとしても、今回のは自分の遺志のため、言い訳はできない。
しゅんとした表情で、すずかはそっと怜治の顔を見る。
すると、呆れたとばかりに息を吐いて怜治は、

「ったく……怪我はなかったか？」

パシンと、軽く頭をはたいた。
痛みはない。　叩くというより、一瞬だけ頭を撫でられたような感じだった。

「だ、大丈夫……です……」

「そ、ならよかった……」

「……はい」

『んで？　誰か状況教えてくれよマジで』

「……というわけで、あそこにあるのは夜天の書から切り離された防衛プログラム、夜天の書を闇の書と呼ばせた原因だ」

「なーる。　つまり、後はあの黒いのをどうにかすりゃこの騒ぎも終わるわけか……」

「言うは易いが、どうやって処理するかが問題なんだ」

そう言いながら、クロノは懐から一枚のカードを取り出す。
白と青のカード、アリアから受け取ったものだ。

「現在、暴走を止めるためのプランは二つ。　ひとつ、極めて強力な氷結魔法で停止させる。　ふたつ、軌道上に待機している艦船アースラの魔導砲アルカンシェルで消滅させる。　……これ以外に、何か言い手はないか？　書の主と、その守護騎士に聞きたい」

その問いかけに、シャマルがおずおずと手をあげて意見を述べる。

「えーっと、最初のは多分難しいと思います。　主の無い防衛プロ

グラムは魔力の塊みたいなものですから……」

「凍結させてもコアがある限り再生機能は止まらん」

「アルカンシェルもぜったいダメ！　こんなところでアルカンシェル撃ったら、はやての家までブッ飛んじゃうじゃんか！！」

ヴィータの言葉に、なのはがギョッとする。

「そ、そんなにすごいの……？」

「発動地点を中心に百数十キロ範囲の空間を歪曲させながら反応消滅を起こさせる魔導砲、というとだいたい分かる？」

「全っ然わからん」

『まぁ、次元震とかブラックホールとか、そんな感じのものを想像できればいいだろ。　……実際は全然違うけど』

「わ、わたしそれ反対！」

「同じく絶対反対！」

なのはとフェイトから反対の声。
それを聞いて、クロノは困った顔をする。
氷結魔法が不可能となると、手段はアルカンシェルしか残っていないのだ。

「反対なのは判るが、アレの暴走が本格的に始まったら被害はそれよりはるかに大きくなる」

「暴走が始まると、触れたものを侵食して無限に広がっていくから……」

「遠距離から一気に蒸発させるしかない……か」

『やれやれ、かつての主はどういう考えでそんなプログラムつけたんだか……』

スタンの言うこともっともだが、今はそんなことを議論している暇はない。

エイミィによると、暴走はあと15分程度で始まるという。それまでに作戦を決めなくてはならない。

「お前ら守護騎士やって結構長いんだろ？　昔の暴走はどうやって止まったんだ？」

「すまない。　暴走に立ち会った経験は我らにもほとんどないのだ……」

『アチャー、こりゃマジで手詰まりか？』

「戦闘地点をもっと沖合にできれば……」

「海でも空間歪曲の被害は出る」

「転送魔法でどっかの無人世界に送るってのは？」

「あれだけのものを次元転移させるのは無理だと思うな……」

「結界とかで空間歪曲ってのを押さえることはできないんですか？」

「難しいな。　下手にいじればアレの消滅にも失敗する」

『メンドクセー、いっそのこともっかい本に戻しちまうのは？』

「「「「「絶対ダメ！！」」」」」

『……おぅ』

「あーごちゃごちゃ鬱陶しいな、皆でズバッとブッ飛ばしちゃうわけにはいかないの！？」

結論の出ない会議に我慢できなくなったアルフがとんでもないことを言い出した。
皆が呆れたというか、呆気にとられた顔をする。

「ア、　アルフ……」

「これは、そんな単純な話じゃ……」

アルフをなだめようとするクロノとユーノ。　一方、なのはが手を顎にあて、考え込む。
それはフェイトやはやても同様で、何かとっかかりを見つけたようだ。

「ズバッと……ブッ飛ばす……」

アルフの言葉を、なのはが繰り返した。
フェイトやはやてがそれに続く。

「ここで撃ったら被害が大きいから撃てへん……」

「でも、ここじゃなければ……」

「あ」

「あ」

「あ」

少女たちの声が重なった。　互いに顔を見合わせそして――――

ドガガガガガガッ!!　と爆音を轟かせながら二台のバイクが疾走する。

砕け、隆起したアスファルトのせいで走り心地は最悪だ。

「急げマサ!!　なんかその、ここで急がなきゃ今後出番ないぜとおれのシックスセンスが呼びかける!!」

「ちょ、無茶言わないですね。　こっちのは君のより馬力が小さいんだから……」

「キャアッ!　ちょ、もう少し安全運転でお願いしますぅ!!」

「あなたたち、ここから先は危険です!　止まりなさい!!」

「治外法権！！」

「意味がちゲバラェッ！！」

「ひ、人はねたーーーっ！？　ちょ、いまあなた人を！！」

「気のせいだよ。　ホラ、証拠にバイクに傷一つ、肉片ひとつ付いてない。　だから、気のせいだよ！」

「ダメだこの人、はやくなんとかしないと！！」

金髪少女の叫びを振りまきながら、二台のバイクは疾走していく。
その後、悲劇にもひき逃げされた修道女が禿げ頭の老人に介抱されたのはまた別の話。

『なんともまァ……凄いことを思いつくもんだなあの嬢ちゃん達は』

「まったくだ。　ある意味逆転の発想ってやつか？」

クロノに指示された配置につきながら怜治は言った。
なのはたちが思いついた作戦はかなり過激なものだった。
アルカンシェルを撃てば周囲に被害が出るというのなら、被害が出ない場所で撃てばいい。
それがなのはたちの結論だった。
無論、無人世界などではない。

なのはたちが思いついた場所とは、宇宙。　艦船アースラが待機している軌道上だ。
何光年単位で星が離れている宇宙ならば被害など無い。　が、それでもまだ問題はあった。
まず第一に、宇宙空間まで転送するには、闇の書の防衛プログラムは大き過ぎるのだ。　故に、転送可能な大きさまで削る必要がある。
　欲を言えば、防衛プログラムのコアのみ残したい。
そうして転送されたコアを、アースラがアルカンシェルで蒸発させる。
これが、現在考えられる案の中でベストな作戦だ。
計算上可能なあたり、管理局の技術力というのも相当なものだと言える。

「実に個人の能力頼りでギャンブル性の高いプランだが……まぁ、やってみる価値はある」

クロノの言うとおりだ。
この作戦は、１人でもミスをすれば成功率は一気に下がる。
だが、この中に不安に思うものはいない。
怜治やなのは、フェイトにクロノ、はやてとすずか、守護騎士ヴォルケンリッター。　このメンバーで、できないことなど無い。
そう、皆が思っているからだ。

「防衛プログラムのバリアは魔力と物理の複合四層式、まずはそれを破る」

「バリア破壊はわたしとなのは、シグナムとヴィータで。……」

「バリアを抜いたら、僕とはやて、すずかの三人で防衛プログラムの動きを止める」

「そこへ、俺たちの一斉砲撃で外装をブチ壊し、コアを露出させる」

『そんでもって、ユーノ坊たちの強制転移魔法でアースラの前に転送』

「そして、アルカンシェルで……」

各自の役割を確認すると、防衛プログラムを包囲するように配置についた。

暴走開始までのカウントダウンがスタートする。

……３０……２９……２８……

「フランベルグ、もう少しだけ力を貸してね……」

『Ｒｏｇｅｒ．　Ｍｅｉｓｔｅｒ．』

……２７……２６……２５……

「アタシたちはサポート班だ。　あのウザいバリケードを止めるよ」

「うん」

「ああ」

……２４……２３……２２……

「終わるんだな……　闇の書の闇も、あたしたちの旅も……」

……２１……２０……１９……

「行くぞ、レヴァンティン……準備はいいな？」

『ｊａ．』

……１８……１７……１６……

「そして、はやてちゃんの病気も治る。　皆で、幸せに暮らせる……」

……１５……１４……１３……

「提督、見てますか？　あなたとは違うやり方で、僕は、未来を変えます。　――――力を貸してもらうぞ、デュランダル」

『ＯＫ，　ｂｏｓｓ』

……１２……１１……１０……

「皆に後れは取らん！　夜天の力を見せるで、リインフォース！」

『はい！　我が主！』

……９……８……７……

「バルディッシュ、思いっきりいくよ……」

『Ｙｅｓ，　ｓｉｒ』

「うん、いい子だ」

……6……5……4……

「レイジングハート、もう一回、全力全開で頑張るよ！」

『Ｙｅｓ，ｍｙ ｍａｓｔｅｒ』

……3……2……1……

「グレアムをブッ飛ばしちまった手前、きっちり決めるぞスタン！」

『オッケー！　でも無理すんなよ、まだグレアム戦のダメージは残ってんだからな。パラシュート無しでのスカイダイビングは勘弁だ』

「分かってるって！」

――――――――――――0

暴走が始まった。

闇の塊を讃えるように１０以上の黒柱が海面から飛び出し、触手が歓喜にうねり踊る。

淀みが膨らみ、水風船のように弾けた。

海に大波を起き、その中心に、すべての元凶がいた。

「夜天の魔導書を呪われた闇の書と呼ばせたプログラム……あれが、闇の書の闇……」

それはまさに、魔獣と言える巨大な姿だった。

獅子のような頭部、熊のように強靭な腕、蜘蛛を思わせる脚、黒い六つの翼が禍々しくギラつく。

全身を覆う鋼の装甲、猛牛のような角が四本、ゾウのように太い牙が生えた頭部は獰猛な獣の印象を与える。
頭頂部に君臨する銀髪の闇の女神像が怨磋の歌を奏でる。
開戦の狼煙は上がった。
ユーノ達サポート班が触手のバリケード目がけて魔法を撃つ。

「チェーンバインド！」

「ストラグルバインド！」

「縛れ！　鋼の軛！」

ユーノとアルフの放った魔法鎖が触手をねじり切り、ザフィーラの放った条が触手を一掃した。
作戦が始動する。

「ちゃんと合わせろよ、高町なのは！」

「ヴィータちゃんもね！」

ヴィータとなのはがデバイスを構え、先陣を駆る。

「鉄槌の騎士ヴィータと、鉄の伯爵グラーフアイゼン！」

『Ｇｉｇａｎｔ　ｆｏｒｍ.』

鉄槌がポンプアクション、二発のカートリッジが消費された。
紅の鉄槌のハンマーヘッドが巨大な角柱に変形した。

「轟天爆砕！！」

ヴィータが鉄槌を振り上げる。
それに合わせ、アイゼンの柄が伸長し、ヘッド部分が巨大化する。
ギガントフォルム。　巨人の名にふさわしい姿だ。

「巨人族の一撃（ギガント　シュラーク）！！」

振り下ろされた鉄槌は、その巨体相応の破壊をもたらす。
その衝撃に、第一のバリアが砕け散った。

「高町なのはとレイジングハート・エクセリオン、行きます！」

なのはの足元に桜色の魔法陣が展開。
彼女は杖を掲げカートリッジを四発ロード、光の翼が広がった。

「エクセリオン、バスター！」

レイジングハートに環状魔法陣が取り撒き、発生した光球に魔力がチャージされていく。

「ブレイク、シュート！！」

なのはの掛け声とともに四本の閃光が走り、バリアを削る。
最後に放たれた砲撃が先に出た四つと重なり、巨大な魔力砲となって二層目のバリアを粉砕した。
おのれを守る壁を立て続けに破壊され、闇の女神像から悲痛な叫びが響く。

「次、シグナムとテスタロッサちゃん！」

シャマルの指示に、烈火の将が愛剣を鞘から引き抜く。

「剣の騎士シグナムの魂、炎の魔剣レヴァンティン。　刃と連結刃に続く、もう一つの姿……」

長剣の柄尻と鞘を合わせる。

カートリッジがロードされ、二つを融合し弓の形へと変形させた。

これが、烈火の将がとる遠距離戦闘形態。

『Ｂｏｇｅｎ　ｆｏｒｍ』

魔力の弦を思いっきり引く。

弓の上下にあるスロットから計二発のカートリッジがロード、一本の矢を形成した。

「翔けよ、隼（はやぶさ）！」

『Ｓｔｕｒｍ　ｆａｌｋｅｎ』

狙いを定め、射つ。

矢に込められた魔力が爆発し、飛翔。　音速を超え、爆炎と衝撃波をもって三層目を破壊した。

「フェイト・テスタロッサ、バルディッシュ・ザンバー。　行きます！」

金色の大剣の柄から三発のカートリッジがロード、フェイトが全身を使って大剣を振る。

放たれた衝撃波が彼女の前を塞ごうとした触手を薙ぎならい、プログラムのバリアにダメージを与える。

大剣を掲げると魔力刃が雷撃を纏う。
少女の身の丈を超える刃がさらに伸び、それを渾身の力を以て振り下ろした。

「撃ちぬけ、雷神！」

『Ｊｅｔ　Ｚａｍｂｅｒ』

雷刃が最後のバリアを切り裂き、その奥にいたプログラムの左腕を切り落とした。
女神像からの悲しい悲鳴が木霊する。
それが合図となり、海面から単眼の蛇が出現。
金の瞳の表面に黒い魔球が発生する。

「盾の守護獣、ザフィーラ。　砲撃なんぞ、撃たせん！」

ザフィーラの咆哮とともに、鋼の軛が蛇を貫き破壊した。
防衛プログラムを護るものは全て消えた。
続いて動きを止めていく。
はやてが夜天の魔導書を開く。　そこに刻まれた魔法の詠唱を開始する。

「彼方より来たれ、やどりぎの枝。　銀月の槍となりて、撃ち貫け」

はやてが剣十字の杖を振ると足元に銀白の魔法陣が展開。
放出された魔力が空間を歪み、そこにもベルカの魔法陣が発生。
陣を囲む六本、魔法陣の中心に一本の計七本の魔力槍が出現した。

「石化の槍、ミストルティン！」

杖を振り下ろす。
銀槍が射出されプログラムの巨体に突き刺さる。
これはただの砲撃魔法ではない。　なのはの砲撃とは違い直接的な攻撃力は低く、射程も短い。
だが、それを十分に補うものとして追加効果が付与されている。
石化。
生体細胞を凝固させ、石のように固めてしまう。
防衛プログラムの身体が、槍の刺さった個所から石へと変質していく。
石へと変化した身体は脆く、頭部の女神像が崩れ去った。
だが、これで終わる闇の書の闇ではない。
膨大な魔力が損壊した肉体を修復、強化していく。
獅子の頭部が落ち、そのかわりに鉄色の新たな頭部が現れる。
さながら大古の肉食恐竜だ。　頭部から生えた剣角が雄々しくそびえたつ。
破壊されつくした触手も再生され、やはり強化されていた。

「うわ……なにあれぇ……」

「なんだか、凄いことに……」

より禍々しく変貌したその姿にアルフとシャマルが悲鳴を上げる。
エイミィから通信が入った。

『やっぱり、並の攻撃じゃ通じない！　ダメージを入れたそばから再生されちゃう！』

「だが、攻撃は通っている。　プラン変更は無しだ」

そう言って、クロノは自身の右手に握った魔杖を見る。

青と銀でカラーリングされ、杖先は猛禽の嘴を思わせる。
ギル・グレアムが創り上げた対闇の書用のデバイス。
皮肉なものだ。　彼の計画を否定した自分が、彼のデバイスを使って闇の書を止めようとしているのだから。

「行くぞ、デュランダル、すずかくん……」

『ＯＫ，　ｂｏｓｓ』

「はい！」

大きな返事とともにすずかが前に出る。
フランベルグを掲げる。　柄のシリンダーが回転、体にカートリッジ四発分の圧縮魔力が駆け巡る。
緋色の刀身から冷気が溢れる。
すずかの魔力を氷へと変換させていく。

「月村すずかと、緋色の氷刃フランベルグ。　行きます！」

剣を振る。　解放された冷気が空気を凍結させ、紫氷の刃を作り上げる。
その数は百を優に超える。
並列した氷刃はすずかの挙動に同調して動く。
剣を振り上げる。　氷刃が標的を定める。

「怒濤の氷刃！！」

『Ｅｉｓ　？ｒｇｅｒｗｅｌｌｅ』

全ての氷刃が、雪崩の如く降り注いだ。

切り裂かれた触手の断面は凍りつき、体に突き刺さった氷刃は防衛プログラムの体温を下げ動きを鈍らせる。
そこへ、すでに詠唱を終えたクロノの広域氷結魔法が炸裂する。

「――――凍てつけぇ！！」

『Ｅｔｅｒｎａｌ　Ｃｏｆｆｉｎ』

海が一瞬で水平線まで氷結していく。
闇の書の闇の巨体が凍結し、停止していく。
無限再生など関係ない。　再生を上回る速度で氷結させ、やがて活動を押さえこまれていく。

「怜治！　いっけぇ！」

『っしゃあ！　マツダ・レイジとスタンピード・トライアル！』

「ブチかますぞ！」

怜治の手が上がる。
彼の背後に紺色の五芒星の魔法陣が無数に展開。　そこからやはり無数の砲身が出現する。
怜治によって召喚されたＳシリーズが砲撃形態へと変形したのだ。

「ヴェルサティス！」

怜治の声に従い、奥から一隻の戦艦が現れた。　全砲門を防衛プログラムに向ける。
無数の砲門が光を宿す。
曇天を覆い尽くす光のカーテン。

まるで夜天に輝く星のようだ。

「いくぞ！　龍星――――」

『――――驟雨（しゅうう）！！』

全砲門が火を噴いた。

星の如く輝く光がスコールとなって降り注ぎ、防衛プログラムの外殻を砕いていく。

爆炎と轟音が鳴り響く。

まさに流星群、破壊の豪雨だ。

肉体を破壊され、防衛プログラムの中身が見える。

黒く渦巻く魔力の塊、その奥にうっすらと見えるのがプログラムのコアだろう。

『うっしゃぁ！　あとは嬢ちゃん達に任せるとしますか』

「そうだな。　さすがに俺ももうガス欠だ……」

「まかせてください！　…全力全開！」

なのはの杖に魔力が集う。

星のように輝く魔力が一点に集束され、巨大な光球を生みだす。

「雷光一閃！」

フェイトの大剣に雷が蓄積する。

高速発動した儀式魔法によって発生した雷光をその金色の刀身に宿す。

「ゴメンな……お休みな……」

眼下で蠢く防衛プログラムを見てはやては呟く。
アレも、なりたくてあのような姿になったのではないのだろう。
かつての主が行ったプログラムの改編、それによってアレも終りなき憎しみの連鎖に囚われた。
残念ながら、防衛プログラムをその連鎖から救うことはできない。
故に、はやては謝罪を口にした。
はやては誓う。
こんなことは最後だと。
魔導書の旅はここで終わらせると。

「響け終焉の笛！」

剣十字の杖に黒光が集う。
大量の魔力を杖に注ぐと、はやての背後に大きなベルカの魔法陣が展開する。
皆がこの光景を見守る。
長く続いた戦いが、今終わるのだ。
三人の少女が、それぞれ己が持つ最強の魔法を唱える。

「スターライト……」

「プラズマザンバー……」

「ラグナロク……」

「「「ブレイカァァァアアアア――――――――――！！！！！！」」」

桜、黄金、白銀。
三つの色の極光が炸裂し、極太の閃光が防衛プログラムを呑みこんだ。
轟音が大気を揺らし、衝撃が海面に大波を生みだす。
撒き散らされる魔力の波濤に皆の身体が弾け飛びそうになる。
衝撃波で飛ばされそうになったすずかの手を怜治が掴んで抱き寄せる。

「大丈夫か？　無理すんな」

「あ、ありがとうございます……」

巨大な爆発が起こる。
コアを包んでいた膨大な魔力が消し飛んだのだ。

「本体コア、露出……つかまえ、た！」

シャマルがコアの捕獲に成功した。
即座にユーノとアルフが転送魔法を起動する。

「長距離転送！」

「目標、軌道上！」

「「「転、送！！」」」

円環状魔法陣が広がり、防衛プログラムの核を空高く打ち上げた。
海上には無残に砕け散ったプログラムの肉片だけが残っていた。

「コアの転送、来ます！」

スタッフの報告にリンディは立ち上がる。
ついに、作戦は最終段階まで来た。
転送の間にもコアは再生を始めている。
一瞬の油断が命取りになる。

「アルカンシェル、バレル展開！」

アースラにつけられた魔導砲が起動する。
光が放ちながら三つの環状魔法陣が展開した。

「火器管制機構（ファイアリングシステム）、オープン。　命中確認後、反応前に安全距離まで退避します。　準備を！」

了解！　とスタッフから声が上がる。
リンディは一歩踏み出す。
手に握られたのはアルカンシェルのトリガーとなるキーだ。
目の前にある箱状のシステムにキーを差し込むと箱が赤くなった。
あとはこれを回すだけ。
防衛プログラムのコアが転送された。
醜く、矮小な姿になっても未だ再生を続けている。　放っておけばまたすぐあの巨体にまで戻るだろう。
そうなる前に、撃つ。
永かった因縁を、ここで断つ。

「アルカンシェル、発射！」

一筋の閃光が発射された。
放たれた弾丸はコアに見事命中した。
途端、空間がねじ曲がる。　歪曲の中心であるコアもまたねじ曲がっていく。
肉体を引き裂かれるような激痛が襲いかかる。
管理局屈指の殲滅力を誇るそれは、標的を確実に、無慈悲に噛み砕いていく。
だが、防衛プログラムのコアの再生力も並みではない。
破裂した眼球がすぐさま修復され、すぐまた爆ぜる。
引きちぎられた触手がビデオの巻き戻しのように再生され、早送り映像のように破壊される。
悲鳴をあげるための喉が圧搾され、再生、今度は粉砕される。
だが再生は行われる。　ぶつ切りで悲鳴が響くが、聞く者などいない。
いつ終わるか判らぬ無間地獄が、やがてコアの再生を破壊が超える。
徐々に肉体は挽き肉となり、小さな欠片はチリとなって霧散していく。
ミンチとなった肉体が小さく縮んでいき、ついに、反応消滅によるエネルギーと共に蒸発した。
眩い光が大輪を咲かす、何も知らない物が見れば綺麗だと思うだろう。
多くの命と魔力を呑みこんできた闇が、光となって散っていく。
エイミィがコアの完全消滅を報告した。
終わった。
誰しもが不可能だと思っていた闇の書の完全破壊を、まだ十歳にも満たない少女たちを筆頭に成し遂げたのだ。

「再正反応、ありません」

「ん、準警戒態勢を維持。　もうしばらく、反応空域を観測します」

了解、とエイミィは答えた。
息を吐くと同時に座席にもたれかかり、肩を下げる。
リンディはああ言ったが、アルカンシェルが命中した以上問題は何もないだろう。
そう思い、エイミィは地球にいる者たちに成功を知らせるために通信装置に手を伸ばした。

『――――というわけで、みんなお疲れさまでしたー！　状況、無事に終了しました！』

その報告に皆がそれぞれ歓喜の声をあげる。
ハイタッチする者、互いの健闘をたたえ合う者、安堵のため息を漏らす者と様々だ。

「んで、この後俺たちはどうする？」

「残骸の回収や市街地の修復とかが残ってるが……取りあえず、みんなアースラに一旦戻ろう」

「そっか、んじゃあザフィーラ達も一緒に……おっと」

すずかが突然怜治に倒れかかって来た。　慌てて抱きかかえる。
気を失っているようで一瞬ギョッとしたが呼吸は安定している。
碌に訓練もしない身体であれだけの戦闘をこなしたのだ。
緊張の糸がほどけ、疲労がピークに達したのだろう。

そして、それはすずかだけではなかった。

「はやて！　はやてぇ！」

ヴィータの悲鳴が響く。

見ると、はやても気を失っていた。

月光色の髪は元の茶色に戻り、今はシグナムの腕の中で眠っている。

「はやて、どうしたの！？」

「落ち着け。　どうせ魔力の使いすぎでぶっ倒れたんだろ。　ほら、こっちも」

「あ、すずかちゃん！」

「大丈夫？」

『ただの魔力切れ。　心配はないよ。　……それとレイジ、ひとつお知らせだ』

「……なんだ、なんか嫌な予感がするんだが――――――！」

ガシャンと音を立てて竜人形態が解除された。

スタンがバイク形態に戻り、スタンが悲しい御知らせを告げる。

『お前も、魔力切れだＺＥ☆』

なんだそりゃあああ！！　という言葉を残して怜治はすずかを抱いたまま重力に従い急降下していった。

突然の出来事に、他の誰も手が出せなかった。

「なんでだ！　なんでこう毎度毎度戦闘終了の度に魔力切れになるんだコラ！　スタンてめぇ燃費わるすぎるだろ！！」

『んだとぉ！　レイジが後先考えずに魔力使いすぎなんだよ！！』

器用に落ちながらケンカする1人と一台。
だが、徐々にその余裕もなくなっていく。
まだバリアジャケットは起動しているが、徐々に解除されていく。
　このまま凍った海に落ちればさすがに危ない。
いや、怜治なら大丈夫かもしれないがすずかはそうはいかない。
どうするかと考える間にも海面はグングンと近づいてくる。
打開策もなく、怜治はすずかを庇うように抱きしめ背中から海に落ちた。
ドボンと大きな音を立てて氷を砕き、一面蒼の世界が広がる。
着水と同時にバリアジャケットが解除され、全身に冷たい水による突き刺さるような痛みがはしる。

『ギャアアアアアアアアアア！！！　水が、水がしみ込んでくるぅウぅウぅウ！！！』

背中を打った拍子に肺の空気がほとんど吐き出してしまった。
残りわずかな空気も泡となって散っていく。
水を吸った衣服が鉛のように重い。
必死に手をかきまわすが、体は無情にも下降していく。
酸素が足りなくなり、意識がかすんでいく。
冷え切った手足は感覚がない。
力尽き、怜治の身体が沈んでいった。

そんな彼に、手を伸ばす者がいた。

ザバッ！　と水しぶきが上がる。
水の世界にはない風を感じ、怜治は目を覚ました。
自分はいま、海から出ている。
何故？
その疑問を、彼の手を掴んだ赤い髪の青年が晴らす。

「よう、悪友。　真夜中に寒中水泳の趣味があったとは驚きだな？」

「……鉄、平？」

「他の誰かに見えるってんなら眼科行け」

そう言って、鉄平は怜治とすずかを引き揚げてゴムボートに乗せる。
すずかはいまだ眠ったままだが、怜治は徐々に意識がはっきりとして来た。

「お前、なんで……？」

「お祭りには途中からでも参加する主義だ」

「祭りって……人の気もしらねェでよく言える」

呆れていると、正義とアリサの顔が怜治を覗き込んだ。

「大丈夫？」

「問題ない」

「いや、ぜろじゃなくて女の子の方」

「……あっそ」

空を見上げると、なのはたちと一緒に白いものが降って来た。
それは顔にあたるとヒヤッとし、すぐに解けて水になった。

「雪……か」

白い雪が降り続ける。
この勢いで振れば朝には積もっているかもしれない。
そんなことを考えながら、怜治は空から降りてきた仲間たちを迎える。
怜治の身を心配する者、だらしないと叱りつけてくる者、無茶をしすぎだと小言を言う者、様々だ。
やがて、アースラへの転送準備が完了し、皆でアースラへと向かう。
転送される直前、怜治は防衛プログラムの残骸を見つめる。
コアをなくし、再生の手段を失った肉体が力なく横たわっていた。

「起きんじゃねぇぞ。　ずっと旅してきたんだ。　今からは、ずっと寝てろ」

答えなど、返ってくるはずもなかった。

第３２話　旅の終わり（後書き）

これでA'ｓ編残すはエピローグです。
早めに投降できればいいのですが、なにせもうすぐテスト。
申し訳ありませんが、次話更新がいつもより遅くなると思います。
すみません。

第３３話　夜天の行く末（前書き）

どうも、剣静です。
一気にA's編を終わらせたかったんですが、どうやらこのペースだと一カ月以上待たせることになりそうだったんで二話に分割することにしました。
今まで長く待たせてすいません。
そして、またしばらく待たせることになりそうで申し訳ありません。

第３３話　夜天の行く末

アースラに転移すると同時に、はやてとすずかは医務室へと搬送された。
未だ眠っているが幸い命に別条はなく、時機に目を覚ますだろうとのことだ。
守護騎士たちははやての病室へと向かい、なのはとフェイトは一緒に来たアリサに今まで隠してきた魔法の事を伝えるために食堂へと向かった。
いまでも警戒態勢が継続されているアースラでは、食堂には誰もいないためゆっくりと話ができるだろう。
怜治も、悪友２人に魔法の事を話すつもりだったが、今の二人には地球で言うＳＦ満載のアースラの方が気になるらしく艦内を駆け回っている。
おかげでやることがなくなってしまった怜治は、暇そうに通路を歩く。
やがて、ある病室の前で足が止まった。

「……やはり、破損は致命的な部分にまで到っている」

はやての病室で、リインフォースが言った。
主は目を覚まさず、守護騎士が目覚めを待つ中で夜天の書の管制人格は続ける。

「防御プログラムは停止したが、歪められた基礎構造はそのままだ。私は、夜天の魔導書本体は、遠からず新たな防御プログラムを精

製しまた暴走を始めるだろう」

「やはり、か……」

別に、予想外の事ではない。

防衛プログラムに異常な再生力がある様に、管制人格であるリインフォースにも破損を自動修復する力はある。

例え本人は拒もうとも、破壊された防衛プログラムが再生されるのだ。

深い。

闇の呪縛は、どこまでも深く根を張っていた。

「修復はできないの？」

「無理だ。　管制プログラムである私の中からも夜天の書本来の姿は消されてしまっている」

「元の姿が解らなければ、戻しようもないということか……」

ザフィーラの言葉に、リインフォースは頷いた。

「主はやては……大丈夫なのか？」

「何も問題はない。　私からの侵食も完全に止まっているし、リンカーコアも正常作動している。　不自由な足も時を置けば自然に治癒するだろう」

その言葉に、騎士たちがホッと胸をなでおろす。

もとより、彼女たちの本来の目的はそれだったのだ。

闇の呪いから主が解放されたことは喜ばしいことだった。

同時に寂しさもこみ上げてくる。
シグナムが皆を見渡す。

「これで、心残りはないな」

守護騎士たちが頷いた。

「防御プログラムがない今、夜天の書の完全破壊はかんたんだ。
破壊しちゃえば暴走することも二度とない……」

ヴィータの顔に影が落ちる。

「かわりに、あたしらも消滅するけど……」

「すまないな、ヴィータ」

「なんであやまんだよ。　いいよ、べつにこうなる可能性くらいみんな知ってたじゃんか」

守護騎士とは、夜天の主を守るためのプログラムだ。
夜天の書が破壊されれば、プログラムである彼女たちも消えてしまうのは道理であった。

「いいや、御前たちは残る」

リインフォースの発した一言に、騎士たちの視線が集中した。
紅い瞳を揺らしながら、彼女は口にする。

「逝くのは、私だけだ……」

はやてとは別の医務室で、すずかは目を覚ました。
ほんの少しだるさがあり、まだ起き上がるのを体が躊躇った。
頭だけを動かして周囲を見渡す。
知らない天井、調度品、慣れない空気がすずかを囲んでいた。
右を見て、左に視線を動かした時、見知った男が視界に飛び込んできた。

「ん？　目、覚めたのか」

黒い服装の青年がこちらの視線に気付き、話しかけてきた。
少女は、その青年の名前を知っていた。

「……怜治……さん？」

「ったく、無理すんなっつたのにぶっ倒れるまで我慢しやがって……」

「ご、ごめんなさい……」

「別に、もういい」

そう言って怜治はすずかに近づき、右手を少女の額に添えた。
突然触られ、すずかはドキッとしてしまう。

「……海に落ちたから心配したが、特に熱があるってわけでもなさそうだな。　気分はどうだ？」

「大丈夫……です」

「よし、まだ少しダメなんだな」

「……」

強がりを見透かされた。
怜治は手をすずかから離し、傍にあったイスに腰掛けた。

「……クロノ…あの黒服のチビから聞いた話なんだが……」

「……はい？」

「強い魔力を持った人間ってのは、無意識にリンカーコアからわずかに魔力が漏れてるらしくな。　それを浴びた人間は、なにかしらのショックで稀にリンカーコアが後天的に発現するらしい」

「それって……」

怜治は頷く。
今思えば、すずかの周りには高ランク魔導師が多かった。
なのはとは小学校一年から友達で、つい最近はフェイトが加わった。
加えてはやてにシグナム達ヴォルケンリッター。
彼女たちの持つ魔力の余波と、仮面の男――リーゼたち――の襲撃

がすずかに魔導師資質を発現させたのだ。
そして、その原因の一端は怜治にもある。
なのはたちに比べたらほんのわずかとはいえ、彼の魔力の余波がすずかに影響を与えたのは事実だろう。
そして、おそらく怜治の友人二人の魔法資質も彼と一緒にいたためなのかもしれない。
そう思うと、例えようのない罪悪感めいたものがこみ上げる。
もっとも、これを友人たちに言えばふざけるなと怒られるだろうが……。

「とにかく、お前はそういう理由で魔導師になっちまったわけだが。残念、今回の戦いで魔力を使い果たし、そのままリンカーコアも消えちまったらしい」

「そう……なんですか」

すずかは手を胸にあてる。
確かに、何かを失った喪失感があった。
となると、この体のダルさはリンカーコア消失の反動ということだろうか。

「残念か？」

怜治の言葉に、すずかは首を振って否定した。

「いいんです。　体を動かすのは好きですけど、ああやって戦うのはちょっと……。　今回の事はどれも無我夢中でしたから」

「なるほど……」

「あ、でも……」

「ん？」

すずかは少し恥ずかしそうに笑いながら、

「空を飛べなくなっちゃったのは、すこし残念だなぁ……」

まるで楽しい夢から覚めてしまったかのように、すずかは言った。

そんな彼女に、怜治は提案する。

「俺のデバイスはバイクだ。　お前ひとりくらいなら後ろに乗せて飛んでやれるぜ？」

「え、ホントですか！」

ぱあっと、少女の顔が明るくなった。

「こんなことでウソついてどうするよ」

「約束、してくれますか？」

「してやるよ、すずか」

すずかが出した小指に、怜治は自分の小指を絡ませる。

だが、すずかの小指が一向に曲がらなかった。

疑問に思い顔をすずかに向けると、少女の顔に戸惑いの色が浮かんでいた。

なぜ、という疑問の答えにはすぐに到った。

「ああ、悪いないきなり名前で呼んで。　馴れ馴れしかったな」

「い、いいえ！　別にそんなこと……ただ、今までずっと“月村”って呼ばれてたんでその……」

「驚いた、か……」

こくりと、すずかは頷いた。

そして、

「あの、できればこれからも名前の方で呼んでいただけると……」

「ん。　分かったよ、すずか」

改めて名前を呼ばれ、少女は笑顔を浮かべた。

そして、指きりをするために、小指を曲げた。

本来なら乗員が集まり賑やかなムードに包まれるはずの食堂が今、重苦しい空気に包まれていた。

個性的な形をした長テーブルの端で、太陽のような金髪の少女が不機嫌な顔で座っていた。

少女こと、アリサ・バニングスの目の前には、級友であり親友でもある高町なのはとフェイト・テスタロッサが床に正座しふるふると震えていた。

その震えは、自分たちを見下ろす金の鬼への恐怖からか、それとも正座による足の痺れからか。

その様子を、鉄平と正義が気の毒そうに見ていた。

「オッケー、アンタたちが何に関わってたのかよーくわかったわ」

トントンと指でテーブルを叩きながらアリサが今聞いた話をまとめていく。

「つまり、フェイトは外国の子じゃなく魔法のある異世界から来た子で、ユーノも本当のフェレットじゃなくて男の子が変身したすがただと……」

「う、うん」

「それで、なのはが半年前に様子がおかしかったのは魔法の事件に巻き込まれていたからだと……」

「ま、巻き込まれたというか、自分から飛びこんでいったというか……」

「そして、今回も事件に巻き込まれていたと……」

アリサの顔が俯き、ふるふると肩が震えていた。

付き合いの長いなのはは、アリサが噴火寸前だと分かり顔が青ざめる。

「あんたたちだけズルイわーーーーー！！」

「「そっち!?」」

「そうよ！　魔法の国から来たっていうフェイトはともかく、なの

はやすずかが魔法使えてあたしだけ使えないの!?　不公平じゃない!!　ねぇなんで!?」

「んにゃあ～～～！　アリサちゃんやめて～～～～～!!」

「ア、アリサ落ち付いて……！」

ガクガクと肩を揺さぶられ、なのはの頭が前後に激しく揺れる。けれどアリサは止めず、フェイトもおろおろと見ているしかなかった。

「……なんか、凄いことになってるな」

「あ、怜治……」

「おっす。　説明の方、任せて悪いな」

「いえ別にこれくらい～～～……」

ぐわんぐわん頭が前後運動するなのはを見て、怜治はちょっと引いた。

「……すずかのやつ、目を覚ましたぞ」

ピタッとアリサの動きが止まった。

「様子見に言ったらどうだ?」

はい！　と返事してアリサはすずかの病室へと走って行った。

なのはとフェイトも後に続き、食堂には怜治たち高校生トリオが残

された。

「しっかし、ぜろも水くさいな。　魔法なんて面白い騒動に巻き込まれてることを隠すなんてよ」

「人の気もしらねェでよく言う。　お前らが怪我をしたのだって魔法関連だぜ？」

「君が素直に話しておいてくれたら怪我もなかったと思うけどね……」

む、と怜治は口を噤んだ。
実際、彼もそう思うところがあったのだから言い返すこともできない。

「……ま、一応おれらのこと心配した結果だろうから大目に見るけど、今後はこういうのはなしだぜ？」

「ああ、分かったよ……」

鉄平と怜治の拳がコツンとぶつかる。
正義とも同様にぶつける。

それから、戻って来たフェイトによる魔法講座をみんなで受けていると、クロノとユーノが入って来た。
神妙な面持ちの少年たちの様子に空気がピリッと引き締まる。

「……どうした？」

「…実は……」

「夜天の書の破壊!?」

「どうして！　防御プログラムはもう破壊したはずじゃ!?」

クロノの言葉に、なのはとフェイトから驚愕の声が出た。

怜治も口には出さなかったが、表情には驚きと疑問の色が浮かんでいた。

「闇の書…夜天の書の管制プログラムからの進言だ」

「防御プログラムは破壊できたけど、夜天の書本体がすぐにプログラムを再生させちゃうんだって」

ユーノの言葉に、「え…」となのはが呟いた。

「今度ははやてちゃんも侵食される可能性が高い。　夜天の書が存在する限り、どうしても危険は消えないんだ」

「だから、防御プログラムがない今のうちに魔導書を破壊しろ……か?」

怜治の言葉にクロノは頷いた。

なのはたちの顔に影が落ちる。

当然だ、破壊できたと思ったものがまだ完全ではなく、そのためにまだ暴走し始めていないリインフォースを未知の脅威として破壊する。

心の痛む選択だ。

「あ、待って！　夜天の書を破壊するってことはシグナム達は……！？」

「いや、私たちは残る……」

発せられた凛々しい声に皆が顔を向ける。　リインフォースを含むヴォルケンリッター全員が食堂へと入って来た。

「防御プログラムと共に、我々守護騎士プログラムも本体から解放したそうだ」

「つまりは、消えるのはリインフォースただ1人か……。　八神は納得してんのか？」

「するわけねぇよ。　でも、はやての幸せがあたしたちの幸せなんだ。　だから……」

「安心して逝ける……か。　重いねぇ……」

暗くなった空気に重みが加わった。

ヴィータ達の表情から察するに、はやてとは論争したばかりなのだろう。

はやてが何を言ったか、想像に難くない。

「なにか手はないんですか……？」

なのはの認めたくないという思いの入った言葉。

リインフォースが首を横に振った。

だが、

「手ならあるぞ」

力強い声が響いた。
皆が驚愕を顔に張り付けたまま、声のした方を向く。
守護騎士たちが入って来たドアとは正反対の位置にあるドアから、
２人入って来た。
１人はシャッハ・ヌエラ。　もうひとりは、禿げ頭の老人。
老人を見て、怜治となのはが同時に声をあげた。

「ジジイ！　なんでここに!?」
「おじいさん！　どうしてここに!?」

二人の言葉に食堂が静まりかえった。
新しく入って来た二人から、怜治たち二人に視線が移る。
皆が頭に同様の疑問を浮かべながら、代表してフェイトが尋ねる。

「えっと……なのは、この人知ってるの?」

「知ってるというか、リインフォースさんとの戦いで折れたレイジ
ングハートを直してくれた人なの……」

「怜治、この人は?」

「言った通り、俺の祖父だ」

ええっ!?　と少年少女たちから驚きの声が上がった。

「おれらも証人になるぜ。　確かに、ぜろのじいさん、怜一郎さん

だ」

鉄平に続き、正義も頷く。

へぇ、と皆が納得していくなか、クロノだけが未だ信じられないという顔をしていた。

「この人が……怜治の、祖父……だと？」

「なんだよクロノ。　言っとくが、俺が将来あんな頭になるわけじゃないからな」

「そんなことを言ってるんじゃない！　君は、この人が誰なのか知っていたのか！？」

「はぁ？　……何言ってやがる？」

ああもう！　とクロノはガシガシと髪をかきむしる。

「いいか！　この人は、現在のデバイス技術の基礎を築いた伝説的なデバイスマイスターだぞ！　この人がいなかったら今のインテリジェントデバイスは存在しないとも言われた人だ！」

「はぁっ！？」

大声でまくし立てるクロノに、皆が目を丸くする。

一部は珍しく熱くなっているクロノの様子に、一部はクロノの言葉の内容に驚いていた。

「デバイス関連の本もいくつも出してる！　確か、筆名（ペンネーム）はフウライ・オートザム！！」

「ええっ!?　この人があの……!?」

「局の訓練校の教本でよく見た名前じゃん!」

ユーノとエイミィの言葉に、皆がようやく事態を把握し始めた。
つまり怜一郎は昔、魔法と関わっていたということだ。
クロノの言うとおりの人物ならば、レイジングハートを修理できたというのも頷ける。

「ちょ、ちょっと待て!　それじゃあ何か?　ジジイはユーノみたく魔法世界出身ってことか!?」

怜治の言葉に、怜一郎が首を横に振る。

「違う。　わしはまぎれもなく地球出身。　さっきでたオートザムは祖母さんの旧姓を借りたんじゃ」

「ばあさんの……?」

「……ってことはぜろの祖母さんが……?」

「……魔導師?」

老人が頷く。
今度こそ、皆が驚きの大声をあげた。

「おい待て!　ばあさんが魔導師だったってことは……まさか親父も?」

「いいや。　アイツには魔法資質は無かった。　お前の母も同様、魔法の事も何も知らん」

「……ということは、レイジって……」

フェイトが何かに気付いたように呟く。

なのはが「あ」と声をあげる。

「魔法世界の人と地球人との……クォーター？」

「……マジ？」

「怜治の出生には驚いたが……話を戻そう」

一頻り驚いた後、クロノが脱線した話しを戻す。

ザフィーラが本題に斬り込む。

「老人、手があると申されたが……本当か？」

「本当だ。　闇の書の管制プログラムを救う手は確かにある」

その場にいる全員がどよめく。

垣間見えた希望に皆が注目する。

「管制プログラムが消えないといけないのは書の基本プログラムが防衛プログラムを再生しちまうからだ。　だから、その基本プログラムに手を加えて再生機能を取り除く」

「え……」

落胆の声が響いた。
ヴィータからだった。

「……残念だが、それは無理だ」

申し訳なさそうに顔を俯かせたザフィーラが続ける。

「夜天の書の改編前の基礎構造はもうリインフォース自身にも分からん。　元に戻すことは不可能だ……」

嘆くようなため息が零れた。
やはりダメなのかと沈み込む騎士たちに、怜一郎は呆れた調子で言う。

「フン、誰も元通りにするなんて言ってないじゃろうが。　闇の書の改編が行われた時と比べて、技術は格段に進歩している。　完全に元に戻すのではなく、代わりとなるプログラムを構築すればいいだけの話だ」

「ちょっと待って下さい！　夜天の書はロストロギア、主であるはやてちゃん以外の者にプログラムをいじることなんてできません！」

「そのために、この馬鹿がいる」

バシンッ、と背中を叩かれ怜治が前に出る。
意味が分からずアリサを始めとする非魔導師は首を傾げたが、なのはたちはすぐに気付いた。

「そっか！　怜治さんの希少技能（レアスキル）は確か……！」

「ロストロギアの……制御！」

なのはの言葉に、怜一郎が頷く。

「怜治のふざけた能力を使って魔導書に干渉、プログラムを新たに精製する。　それで、管制プログラムは助かる」

歓声が上がった。

魔導書のプログラムを元に戻せないのならば、改変されたプログラムをさらに改変し無害なものへと変える。　確かに、これならリインフォースが消える必要はなくなる。

必要な機材さえ用意できればすぐにでも始められる。

救いの道は拓いた。　あとは、その道を突き進むだけ。

「ちょっと待て、俺プログラムがどうとか全くわかんねぇぞ」

「そんなもの、お前がわしの言う通りにすればいいんじゃ。　余計なことは考えんでいい」

「あ、あたし、はやてに教えてくる！」

歓喜の声と共にヴィータが駆けだし、その後をなのは達が追っていく。

クロノとユーノは機材の準備に向かい、鉄平たちとアルフも手伝いについていく。

防衛プログラムの再生がどれほどの速度で行われるのか分からない以上、一分一秒も無駄にできない。

やがて、その場にはヴィータを除く守護騎士と怜治、そして怜一郎が残された。

「怜一郎殿。　本当に、心から感謝する」

「気にするな。　こちとら修理屋、壊れたモンを直すのは仕事のうちだ」

それでも、騎士たちは頭を下げる。
はやてが喜ぶということ以上に、長い旅をして来た仲間が助かることが嬉しいのだろう。
口元がほころんでいるのが分かる。
だが、その中に1人、未だ表情に影を落としている者がいた。
リインフォースだ。

「……どうした？」

「あ、いや……ひとつ、聞いてもいいだろうか？」

「……なんだ？」

「なぜ、私を救おうとしてくれるんだ……？」

「リインフォースお前……！」

「いや違う。　そうじゃないんだ。　私は、別に生きたくないなどと傲慢なことは言わない。　ただ、あなたが私を救おうとする理由が知りたいんだ。　私は……」

悲痛な顔のまま、リインフォースは怜一郎に迫る。

「私は、あなたの妻を殺したのに……！！」

誰かが息を呑む音が聞こえた。

懺悔するように、泥を吐き出すようにリインフォースは続ける。

「将たちは覚えていないかもしれないが、十年前の暴走の際、闇の書はある1人の女騎士から魔力を蒐集した。　緋色の剣を使う、年老いた女性だった。　……私が、管制プログラムの権限で将を戦わせ、リンカーコアを奪い、結果……殺してしまった」

怜治の脳裏に、祖母の最期の姿がよぎる。

数十年分の疲労が一気に流れ込んだような衰弱した姿。

それが、リンカーコアを蒐集したことによるものだと、リインフォースは言っているのだ。

「……」

「貴方にとって、私は最愛の妻を殺した怨敵のはず。　なのに、なぜ私を救うと言ってくれる！？　私に…救われるだけの価値があるのだろうか……？」

シン、と広い食堂が静まりかえった。

胸を押さえ、苦しそうに息を吐くリインフォースを見て、怜治は気付いた。

彼女は、プログラム改変を受けてから、ずっとこんな思いをしていたのだと。

多くの人から魔力を奪い、暴走し、多くの命を奪った。

それは、彼女の意思とは無関係だったのかもしれない。　が、それでも彼女は自分を責めた。

辛かったのだろう。　本意ではない罪を重ね、遺族に謝罪をする機会もなく、ただ自分を責め続けた。
自身の破滅は、彼女自身が永年願った望みなのだろう。
あらゆる生命を滅ぼした自分が滅ぶことで、少しでも罪を償いたいという想い。
人の命を奪った罪への償いが、自らの命を差し出すこと以外なにができるだろう。
憎悪や怨恨、人の心の闇を見てきたリインフォースだから出せる決断だろう。

「別に……憎まなかったわけじゃない」

リインフォースの顔が上がる。
紅い瞳が、揺れていた。

「ミリィの…、祖母さんの死の原因は最初は不明だったが自分で調べたらやがて分かった。　グレアム同様、お前を崩壊させるプログラムを造ったりもした。　けどな、そんなことしたってアイツが喜ぶとは思えんかったんだ。　そして、復讐をしてもわしは笑えるとは思えんかった……」

老人の独白を、騎士達も怜治も黙って耳を傾ける。

「やられたからやりかえすなんてのはそりゃ…ガキの理屈だ。　悲しい目にあったってんなら、他の人をそんな目に合わせねぇように助けてやるべきなんだ。　ただ、それに気付いただけなんだよ……。
なぁ、リインフォース」

「……なんでしょうか？」

「お前さんが、少しでも祖母さんを手に掛けたことをすまないと思ってんなら、生きてくれ。　生きて、祖母さんがいたら救えたかもしれん人を救ってくれ。　それが、少なくともわしに対してあんたができる償いだ」

「怜一郎……さん…」

リインフォースの膝が崩れた。
顔を両手で覆い、泣き続ける彼女の肩に怜一郎は手を置く。
泣きじゃくる子どもをあやすように、言葉を紡ぐ。

「なぁ、わしはまだお前さんから聞いてないんだ。　だから、答えてくれんか？」

泣きじゃくる子どもをなだめるような穏やかな声で、怜一郎は言葉を投げかけた。

「リインフォース。　あの小さな主と一緒に、生きたいか？」

答えなど、決まっていた。

第３４話　クリスマス（前書き）

今度こそＡ－ｓ編終了。
長くお待たせしました。

第３４話　クリスマス

闇の書との戦いから１０日ほどたった朝。
戦闘によって破壊された街は何事もなかったかのように修繕され、危うく世界が滅びかけたなどということを知る者は数限られている。
そんな数限りある者たちが、海鳴大学病院に集結していた。
金髪が三人、栗毛、紫、赤毛も二人、橙、白、茶髪。　頭髪を見ただけでも色鮮やか、背丈もまちまちな面々が目的の人物を今や遅しと待っていた。
やがて、車イスに乗った少女が桃色髪と白金髪の女性に押されながらやって来た。
楽しげに談笑する３人を、白衣を着た女性が追う。

「お待たせー！」

元気に手を振り、八神はやてがなのはたちの前で止まった。
そしてその場で１８０。回り、追い掛けてきた女医と目が合った。

「石田先生、外出許可ありがとうございます！」

「いえいえ。　でもはやてちゃん、今度はちゃーんと帰ってきてよ？　約束だから」

「はい、分かってます」

はやてと女医が指きりをしている様子を見て、なのはがヴィータに疑問を投げかける。

「やっぱり、あのとき大変だった？」

「ああ、無断外泊だったからシグナムとシャマルがめちゃくちゃ怒られてた」

その時の様子を思い出したのだろう。
ヴィータの顔が苦虫を噛み潰したように歪む。
闇の書との激闘の際、はやてはリーゼ姉妹によって病院から攫われる形で抜け出したため、彼女の担当医は大騒ぎだったという。

「こ、怖い先生なんだ……」

ヴィータが頷く。

「……でも、いい先生だ」

話しが終わり、女医が去っていく。
白い背中が見えなくなるまで手を振った後、鉄平が口を開いた。

「それじゃ、行きますか。　クリスマスパーティへ！」

「「「「「おーー！！」」」」」

歓声と共に、チビッ娘五名が拳を高く挙げた。

魔法少女リリカルなのはＡ’ｓ☆Ｔｈｅ　Ｒｉｄｅｒ☆　第１９話　クリスマス

海鳴大学病院からバスを乗り継ぎ、僅かに曇り、雪を期待させる空の下を歩いて十数分。　目的地に着いた。

“第３８回海鳴東高校クリスマスパーティ”

校門の前に建てられたアーチ状のゲートに、色鮮やかにデカデカとそう書かれていた。

「うわー……」

「すごいわね……」

すずかとアリサから感嘆の声が出た。

「学校の初代校長が祭り好きだったらしくてね。　クリパだけじゃなく卒パとか、夏祭りとか、とにかくイベントが多いんだよ」

「その中でもやっぱりクリパが一番盛り上がるな。　さて、おれらのクラスの出店に向かうとするか」

鉄平と正義に連れられて、少女たちがゲートをくぐる。

広いグラウンドの一角に、“焼きおにぎり”と書かれた旗を出した出店に到着した。

熱された鉄板の前に立つセーラー服の上から防寒用のカーディガンを着た、長い黒髪の女生徒がこちらに気付き、声をあげる。

「あーっ！　窪田に本田、あんたら何サボってんのよ！」

「まぁまぁおちつけ委員長。　こちとらただ開催式をフケタわけじ

ゃないのよ」

「そうそう、ちゃーんとお客さん大勢連れてきたよ」

そう言われて、委員長とやらが鉄平の背後を覗き込むと、やっとなのはたちの存在に気付いたようだった。

「あ、あーどうもいらっしゃい！　ようこそ二年二組の焼きおにぎり屋へ！　メニューはしょうゆ味、みそ味、しお味、ケチャップ味、ソース味の五種類！　ひとつ１００円で、五個入りは４５０円ポッキリだよ！　さぁどれにする？」

あっという間に商売人の顔になった委員長に白黒しつつ、なのはは鉄板の上を見る。

三角形に握られたおにぎりが味付けされて鉄板の上で焼かれ、香ばしい匂いが食欲をそそる。

「……意外と安いんですね」

「別に儲けを出すことが目的じゃないからな。　材料費くらい取れればいいんだよ」

「ふーん」

どれにする？　と尋ねると、少し考えた後、結局五個入りをふたつ買うことになった。

「それじゃあ、僕らは店の方やらなきゃいけないから案内はここまでね。　あとはこのパンフレットを見て好きに回ってね」

はやてがステープラーでとじられた冊子を受け取る。
開くと、校内の地図とどこの教室でどんな出し物があるかが細かく書かれており、軽音部のライブ予定などが記されていた。
これを全員分渡していると、向こうからジャージを着た厳つい顔の男がやって来た。
ゴリラを想像させる風貌になのはが思わず後ずさる。

「げっ、指導の鈴木……先生」

「来たな三馬鹿のうち二名。　……松田はどうした、今日もサボりか？」

「えっと……さぁ？」

鈴木先生に睨まれ、正義の頬が引きつる。
鉄平もばつの悪い顔をしているあたり、このふたりが苦手としている教師らしい、

「そうか……お前ら、今回もまた何かしでかす気ならそれ相応の罰則を覚悟しておけよ」

「い、いやだなー先生。　おれたちは品行方正純真無垢な好青年ですぜ？」

「俺が知る限り、スモークマシンで体育館を煙だらけにした奴を品行方正とは言わん」

そう言って鈴木先生は鼻息荒くドスドスと去っていく。
逞しく隆起した背中が見えなくなったところでやっと、鉄平たちは胸をなでおろした。

「ふぅ、ゴリにもさすがに警戒されるか」

「何？　あんたらまたなんか騒ぎを起こす気なの？」

「騒ぎなんて、僕らは純粋に祭りを盛り上げようとしてるだけなんだけどなー」

「それで生徒会や指導教諭に目をつけられたら意味無いでしょうが。ゴリさんが来たのも今のが初めてじゃないんだからね」

「……おめーらいったい何やったんだよ」

「去年の文化祭でスモーク焚いて体育館を白く染め上げたのよ。信じられないわ」

「校長先生の登場をかっこよく演出しようとしたんだよ。　白いスモークを切って校長がこう、ザッ！…って感じで現れて話しを始めるって計画だったんだが……」

「いやーースモークマシンが暴走しちゃって。　やっぱりヘタに改造するもんじゃないね、ああいうのは」

さらっととんでもないことをぬかす鉄平と正義に、信じられないという視線が集中する。

さすがに耐え切れなくなったのか、そそくさと去って行った。

「ええっと、それじゃみんなどこ回ろか？」

はやてがパンフレットを開き、これからの行動の予定を立て始める。
談義の結果、なのは・フェイト・すずか・アリサ・はやての五人、ヴォルケンリッター、アルフとユーノの三組に分かれることになった。

場所は所変わってアースラ。
スタッフが席についてキーを打つ音だけが聞こえる。
闇の書事件は終息したが、事件の報告書の作成や被害状況の把握など仕事はまだまだ多く残っているのだ。
エイミィ・リミエッタもそんな事後処理に追われる1人のはずなのに、彼女の前にあるモニタには業務とは関係なさそうなものが映っていた。
映っているのは女性で、年老いて白く色が抜けてしまった頭髪に銀の瞳を持った女性。
穏やかな表情であるのに、その銀の瞳は見ているだけで全てを見透かされるような気になってしまう。
その右隣にあるのは若い――――おそらくエイミィと同い年くらいの――――少女。
艶のある亜麻色の長い髪に銀の瞳。　今見ていた女性の若いころのものだ。
横に羅列された文字は彼女が局員時代の功績が長々と綴られていた。
正直、驚いた。
魔導師ではない自分はまだしも、これほどの功績をあげることのできる者はまさに一流。　エリート中のエリートなのだろう。

「何を見てるんだ?」

背後から聞きなれた声。　誰かは分かっているので振り返りはしない。
安易に振り返ろうものなら似合わない仏頂面で延々と説教されるだろう。
一応上官だし失礼かなと思いつつ、そこまで狭量な人物ではないだろうと思い直し、背中を向けたまま言葉を交わす。

「怜治君のお祖母さんのデータ。　すごいね。　松田ファミリア一等空佐…殉職したから少将かな？　あの三提督の同期にして管理局初の女性執務官。　弟子も何人も取ってて、中にはグレアム提督やリンディ艦長もいる」

「艦長は短期だったらしいけどね。　……キール元帥の懐刀にして生涯前線に立ち続けた氷刃の騎士。　誰もが認める、管理局が誇る魔導師の中の魔導師（エース・オブ・エース）」

上に上がると前線にいられないという理由で昇進を断っていた、というのはベルカ式使いの間では有名な話だとクロノは言う。

「執務官時代の担当は主に違法魔導師。　魔法戦のプロフェッショナルだったんだね」

「みたいだな。　局勤めのベルカ系魔導師は皆、この人に憧れているらしい」

へぇ、と感心のため息をつきつつエイミィはモニタの文に目を通していく。
ふと、ある一文に目が止まった。　ファミリアの旧姓についてだ。
どこかで聞いたことのある家名だと思った。

「……オートザム？」

「古代ベルカから続く貴族の家名だな。“覇王”クラウス・イングヴァルトの下で武功を立てて一兵卒から騎士の称号を、そして貴族に成り上がったと言われてる」

「うっわ！　怜治君が貴族の家系だったとは……」

「本家の方も、怜治（アレ）に自分たちと同じ血が流れてるかと思うと残念だろうな」

「ひどいこと言うね、クロノ君」

「アイツに対する正当な評価のつもりだ」

辛辣な言い方だが、クロノが感情をはっきりと出すことは珍しい。
ここにいない第三者へのものとなれば尚更だ。
なんやかんやで、怜治とクロノというのは仲良くなれるかもしれないとエイミィは思った。
冷静沈着を貫き、頭でっかちと言われるほど規則を重んじるクロノ。
飄々とした態度で、感情や勢いで行動する怜治。
まったく正反対の二人だが、なんやかんやで根本的な部分で似ているところがある二人だ。
いい友達に慣れたらいいなと、エイミィは人付き合いの苦手な弟を想う姉のような気持ちになった。

「そういえば、当の怜治君は？　あとお爺さんも」

「もうそろそろ、向こうに着く頃だろう。　怜一郎さんは、艦長と

一緒にいる」

「そっか。　はやてちゃんも喜ぶだろうね」

「そうだな。　君もさっさと仕事を終わらせて僕を喜ばせてくれ。
怜治にエリシオンとフランベルグの修理を頼まれてるんだろ？」

「はーい」

適当に返事をすると、「まったく…」という声と共に遠ざかる足音が聞こえた。
やがて足音は耳に届かなくなった。

「さて、それじゃあお姉さんとして弟分を喜ばせてあげますか！」

エイミィの白い指がキーを叩いた。

時空管理局本局は大変な騒ぎとなっていた。
謎の襲撃者による本局への破壊行為と歴戦の勇士ギル・グレアムの敗北。
死者こそ出なかったものの、破壊された施設や負傷者の数から考えて被害は決して小さくはない。
犯人は反管理局勢力のテロリストか、伝説の三提督を狙った暗殺者か、はたまた違法研究者が送り込んだ戦闘マシーンか。
上層部が緘口令を敷いたために、そんな当事者が知ったら憤慨しそうな憶測が飛び交っていた。

破壊を免れた区域にある喫茶店で、事実を知る数少ない者たちがお茶していた。
提督二名に伝説のデバイス技師。
局員が見たら卒倒しそうな面子だった。

「そうか……。　じゃあお前さんは今まで通り八神の嬢ちゃんを援助し続けるんだな？」

「ええ。　それが、私が彼女たちにできる数少ない償いです」

怜治との戦いでグレアムが負った傷はまだ完治していない。
頭には包帯が巻かれ、片腕が首から吊るされた状態で見るからに痛々しい。
服の下にはさらに多くの傷跡が残っていることだろう。

「しかし、ばあさんが言っていたあのじゃじゃ馬娘に青二才の小僧が揃って提督、しかも片方はＬ級艦の艦長とはな。正直驚いたな……」

禿げ頭の老人の言葉に、リンディとグレアムが苦笑する。
いくつになっても、過去の自分を知っている人物というのは難敵だ。

「私は短期間でしたけど、先生には魔導師としての心構えを教えていただきました。　本当に、感謝していますよ」

昔を思い出しながら、かつてのじゃじゃ馬娘は緑茶に角砂糖を次々と投入していく。
砂糖が沈殿する一歩手前で止め、それを幸せそうに口にする。
一瞬で糖尿病にでもなりそうな飲み方に辟易しつつ、怜一郎はかつての青二才の小僧に顔を向けた。

「聞いたぞ。　ウチの孫が本局（ココ）で起こした騒ぎの責任のほとんどを請け負ったそうじゃないか」

呆れた、と言った表情で言われ、グレアムは苦笑した。

確かに彼が闇の書事件での暗躍は犯罪行為だが、せいぜいクラッキングと捜査妨害。　提督という地位の者がとる責任としては希望辞職という形で丸く治まるはずだ。

だが、怜治が起こした本局での騒動の責任も取るとなると話は変わってくる。

施設一棟を半壊させ、負傷者は２７名。　処罰なしで済ませられる範疇を超えていた。

事実、怜治の春の入局は見送られ、最低でも二年後となってしまった。

「これは、私にできる彼への謝罪とお礼ですよ」

お礼？　とオウム返しに聞かれ、グレアムは続ける。

「はっきり言って、私の方が彼よりもはるかに強かった。　魔力量ではわずかに怜治君が勝っていたが、それ以外ではどれも私に分があった」

「だが、あんたは負けた。　４０年以上魔導師をしている歴戦の勇士が、半年足らずのヒヨッコに負けた」

グレアムは頷く。

その顔に浮かぶのは悔しさではなく、もっと穏やかな感情だった。

「私には迷いがあったんです。　これしかないと信じつつも、心の

どこかでこれでいいのだろうかという迷いがあった。　でも、彼にはそれがなかった」

「それが、４０年の経験に打ち勝ったと？」

信じられないといった調子でリンディが言った。
確かに怜治は魔導師としての素質は高いかもしれない。
それでも、怜治はグレアムには届かない。
怜治が勝てたのはなんらかのイレギュラーとグレアムの油断や慢心からだろうと思っていた。

「彼は言いましたよ。　世界一つと少女の命一つを天秤にかけた私を、何のためらいもなく、はっきりと……間違っているとね」

“辛かったんだろ。　てめぇの部下が死んだ時、何もできなかった自分が！　自分の無力さが！　自分の弱さが！　辛かったんだろ！”

目を閉じればすぐに思い出せる青年の言葉。

“てめぇのやってることは、一から百まで間違いだらけだクソッタレェッ！！”

自分の思想を全く疑わない。　傲慢で、けれど力強い想いのこもった言葉。
それがグレアムの心にあったわずかな迷いを揺さぶり、青年はグレアムの企みを打ち砕いたのだ。

「強い子ですよ、彼は……」

「そうかね？　少なくとも、あいつのやり方がいつもプラスになる

とは思えん」

「確かに、彼の性格は局員向きとは言えません。　ですが、彼の思想は嫌いではないですよ」

「はっきりと嫌悪を示す者もおるだろうよ……」

否定的な意見ばかり述べていく怜一郎を見て、グレアムはある疑問に達した。

「怜一郎さん……。　もしかして、怜治君が管理局に入るのは反対で？」

ジロリ、と鋭い視線を向けられグレアムは一瞬たじろいだ。

「家族が、常に命の危険を伴う職場に行くのを諸手をあげて賛成する奴がいると思うか？」

怜一郎の言うこともっともだ。

思い出してみれば、グレアム自身も管理局に入ることを家族に話した時は説得が大変だった。

リンディも、クロノが局員になりたいと言った時は難色を示したはずなのだ。

子どもの安全を気遣わない親はいない。

今思えば、怜治に魔法の事を教えなかったのはそんな親心からなのかもしれない。

強い魔力に特異な希少技能（レアスキル）。　それを持つ怜治が普通の武装局員よりも危険な任務を命じられることを危惧しているのだろう。

それでも、局は彼を求めるだろう。

本局破壊に関しての責任を怜治に負わせないのは、そういう意図が

あるからだろうとグレアムは確信している。
今回彼が破壊した以上の価値が、松田怜治にはあると判断されてしまったのだ。

「本当に、彼には謝罪と感謝をしなければなりませんね」

「そう思うなら覚悟しておけ。　あのガキは容赦なく拳を振り回すぞ」

怜一郎は自分の右頬を指さす。　よく見なければわからない程度だが、確かに青い痣があった。

「月村の嬢ちゃんにフランベルグ渡したのがわしだと分かった瞬間殴られたよ。　ガキに刃物渡すなんて何考えてんだ！　……ってな」

「すずかさんを通して怜治君に先生の剣を渡すつもりだったんですか？」

「ああ。　ま、そのまま嬢ちゃんが持ち続けることを予想できなかったわしの責任には変わりないがな。　おかげで、嬢ちゃんには怖い思いをさせてしまった」

「それこそ私の責任です。　近いうちに彼女にも謝罪をせねばなりませんね」

双眸が自責の念で揺れる。

「……ああそういえば」

ふと、グレアムが思い出したように続けた。

「彼と彼女は、もうそろそろ着く頃ですかな？」

低く重いエンジン音が響く。
不規則な振動がシート越しに伝わり体がわずかに浮く。
黒を基調とした大型のバイクが走っていた。
機械仕掛けの騎馬に跨るのは黒い学生服を着た青年。
ヘルメットが覆いきれなかった黒髪が風に揺れる。　顔にあたる目を開けていられぬほどの風はゴーグルによって防がれる。
青年の後ろに、見た者全てが見惚れるような美女が同乗していた。
長い銀髪が風で舞い上がり尾のように揺れる。
走行によって起こる風の中でも紅い瞳ははっきりと開かれていた。
やがて、目的地が見えてきた。
正門とは違い対して飾りっ気のない門をくぐり、バイクを駐輪場に止める。
バイクから降りて、ヘルメットを取る。

「さてと……。　ようこそ我が校主催のクリスマスパーティに！」

松田怜治が、わざとらしい笑顔を浮かべて言った。

校舎三階。　３－２というプレートが下がった教室で軽快な音楽が鳴り響いた。
喫茶店と化した教室にいた人の意識が一瞬集中、すぐに無関心へと切り替わった。
ランチのデザートに頼んだ杏仁豆腐を乗せたスプーンを口に入れようとしたフェイトの手が止まり、自分の服のポケットに視線が向く。
黒いジャケットのポケットに手を突っ込み、これまた黒一色の携帯電話を取り出し開く。
メール着信を知らせるメッセージを見てメールフォルダをチェック。
片手で操作してメールを開く。　文面を目で追いながら今度こそ杏仁豆腐を口に入れた。

「フェイトちゃん、メール誰から？」

「んっとね……レイジから」

意外な人物からの連絡で、少女たちの手が止まった。
フェイトが文面を読み上げていく。

「えーっと……“１８時に校舎一棟の屋上に来るよう八神に伝えてくれ”……だって」

「わたし？」

うん、とフェイトが頷く。　はやてはなんだろうかと考えを巡らせていく。
まだ松田怜治という人間をよく知らないはやてには彼の考えが読めない。　納得できる答えは一向に出なかった。

「行けば分かるでしょ。　１８時に屋上ならまだ時間あるし、色々

見ていきましょ」

「そやね。　アリサちゃんの言う通りや」

考えるのを止め、はやては自分のバニラアイスを口に入れた。

（……でも、なのはちゃんもすずかちゃんもアリサちゃんも知らんのに、どうしてフェイトちゃんだけ怜治さんのアドレス知っとるんやろ？）

一瞬だけ浮かんだはやての疑問は、口の中のアイスと一緒に溶けていった。

イベントで賑わっている現在では誰も来ないであろう雑草が生い茂った裏庭で、三人の青年が顔を合わせて笑っていた。

制服を着ていなかったら不審者にしか見えない。

「ふっふっふっふっふ……。　ついにこの時が来たな」

燃えるような赤毛の青年が笑う。

その両腕には円筒形の筒が大量にあった。

「首尾は上々細工は流々、去年の失敗を生かして練りに練ったこの計画に隙はない」

メガネをかけた青年がプリント用紙を見て言った。

紙には“クリスマス盛り上げプラン”と画かれ、なにやら物騒な図や言葉が羅列してあり、ボツになったのか二重線で消されたものもある。

「盛り上がること間違いなしだな。　なんたって、こっちには魔法使い様がいるんだから」

「任せろ。　魔法なんてものが信じられてない地球なら何もかもが手品で片付く」

自信たっぷりに言う黒髪の青年の後ろで、黒いバイクが呆れてため息をつく。

「プラン決行まで各自解散。　ゴリさんや生徒会に睨まれんなよ？」

「オッケー」

「了解。　そろそろ僕は店番だから問題はないと思う」

一度無言で頷き、別々の方角へ走り出した。

校内の時計が１７時５５分を指した。
なのはたちは怜治のメールにあった通りに一棟の屋上に向かう。
年末にもなると日没も早く、外はすでに夕闇に染まっていた。

白色蛍光灯が点き始める。
屋上に繋がる階段を上り、重い扉を押しあける。
ギギィ……と軋みながら扉は開き、その先の風景を少女たちの前に曝け出す。
その先は、闇だった。
完全に太陽は沈み、月は重く暗い雲に隠されていた。
その闇の中で、八神はやての瞳は確かに人影を視認した。
何かに突き動かされるようにはやては1人前に出る。
近づくことで、よりその影の輪郭がはっきりとしてくる。
闇の中で輝く雪のように白く長い銀髪。
黒いインナーから伸びるしなやかな四肢がその者の美しさを強調するようだ。
はやては、浮かんだ名を呼ぼうと口を開く。

「――――リイン……フォース？」

発した声は無視のように小さかった。
それでも、声は確かに届いたようで、目の前の女性が振り向く。
長い髪が揺れ、銀の海からルビーのように紅い二つの瞳が見えた。
瞬間、空に大輪の華が咲いた。
黒い空を茜に染める炎の華が、屋上を照らし出す。
女性の全身がはやての瞳に映る。

「リインフォース……！」

今度は自信を持って呼ぶ。
その名は彼女のもうひとりの家族。
掛け替えのない、五人目のヴォルケンリッター。
消えるしかないと言われた時は目を腫らして喚き散らしたものだ。
助かると聞いて、また泣いたものだ。

はやては車イスを必死に動かし、帰って来た家族の下へと急いだ。

夜空に咲いた大輪に、人々が注目する。
学校関係者たちの顔色には戸惑いが浮かぶ。　プログラムを見る限りこんな催しものはない。　そもそも、冬に打ち上げ花火などふつうは考えない。　そう、よっぽど騒ぐのが好きな者でなければ実行しようとはしないだろう。
だが、この学校の生徒や教師たちはそんな大騒ぎするのが大好きな馬鹿を三人知っていた。
皆が見上げる夜空を、一台のバイクが疾走していた。

「いいいいいっやっほおおう!!　やっぱり祭りはこう派手にいかねぇとな!」

『クリスマスに花火ってどういうセンスだよオマエ。　こんなことに魔法使いやがって、クロノ坊にバレたら大目玉だぞ』

「マホウじゃないよ、テジナだよ」

『……』

呆れる相棒を無視して怜治は魔力を供給。
スタンの変換機構を通して後輪に炎を灯す。
バイクの後ろを追い、炎の軌跡が空に刻まれていく。

「魔法ってやっぱすげぇな」

空で踊る悪友を見て、鉄平は言った。
正義が打ち上げ装置の調子を見ながら言葉を返す。

「確かに。　でも、あれと同じようなことを僕らもできるかもっていう方が驚き」

「ああ、全くだ」

魔法。
ついこの間まで漫画やゲームの中でしか聞くことのなかった言葉。
それが目の前に存在している。　そして、それを自分たちも使えるのだとクロノは言っていた。

「マサは……どうするんだ？」

「どうするって？」

「管理局。　入んの？」

「ああ」と正義は力なく答えた。
別に特別やりたいことがあるわけではない。
進路だって就職か三流の大学か。　どちらにしろこの街を出ようと考えてもいた。
魔導師としての素養があると言うのならその道に進むのもありだろう。

「別に、喧嘩は怖くはないけど。　殺し合いは遠慮したいな」

「聞いた限りじゃそこまで物騒な職場でもなさそうだけどな…」

「でも早い話、警察や軍隊みたいなものでしょ？　命の危険はやっぱり他の職業より高いと思うな」

確かに、と鉄平は頷く。

ヴィータに襲われた時の痛みや恐怖感は今でも思い出せる。

魔導師になれば、あの時のような思いをし続け、そして誰かに恐怖感を与える日々がやってくるのだろうか。

人生全力で楽しむが信条の鉄平にとって、そのような重い日常は正直遠慮したい。

だが、そんな日常の中で生きようとしている友がいる。

あの悪友は、鉄平から見てとても危なかったしい存在だ。

ひん曲がった性格のせいか、味方より敵が圧倒的に多い。

わざわざ嫌われるようなことも口にする。

だから、自分のように味方になれる者が必要だろうなとお節介な想いが溢れる。

それは、偽善かもしれない。

でも――――

「偽善とは、人の為の善と書く……か」

「ん？　何か言った？」

「……おれ、魔導師やるわ」

鉄平の言葉を聞いて、正義は目を丸くした。

あんなに悩んでいたのに、突然の決断。

しかも迷いはすでに吹っ切れていた。

そんな清々しい顔をされてはいちゃもんの付けようがない。

「そう。　ならまた、三人そろって色々やるわけだ」

「そうなるな……」

今一度空を見上げる。
色鮮やかな華が咲く空で親友が踊る。
今は眺めることしかできないが、いつか、いつか必ずあそこまで行って三人で騒ごう。
言葉にせずとも、2人の想いは同じだった。

少女が飛ぶ。
炎の華に背を向けた女性の胸元へと飛び込み、女性は見事に少女を受け止めた。
はやての両腕が首に回され抱きしめられる。
もう二度と、感じることのない温もりがリインフォースに伝播していく。

「リインフォース……もう、体はだいじょうぶなん？」

「はい。　松田怜治と怜一郎さんのおかげで、私の中で防衛プログラムが再生することはありません。　ただ……」

語尾を濁され、不安がはやてに伝わる。

「ただ……代償として融合騎としての力のほとんどを失ってしまいました。　もう、あの時のように主を助けることはできないかもしれません」

「そんな、そんなんええんよ。　わたしは、リインフォースが居てくれるだけでうれしいんや……！」

「我が主……」

涙が、紅い瞳から流れる。
悲しみではない。　哀しみではない。
主と共に生きていけることへの喜びが流す涙だ。

「主はやて……私は、私は……」

永い旅だった。
本来の目的とは違うものに書き換えられ、集めるのは知識でなく破壊の術。
恐怖と絶望に染まった人の心を見続けて、怨磋と憎悪の言葉をかけられて、何人もの主の最期を看取ってきて――――

「私は……、世界で一番幸福な魔導書です――――！」

心から忠義を誓える主に出会えた。
もう、旅することはない。
最後の夜天の王と守護騎士たちと共に生きていく。
涙で熱くなった頬に、冷たいものが落ちた。
それは白く、すぐに溶けて水となった。

「これは……雪？」

「ホンマや。　ふふっ……ホワイトクリスマスやね」

空から、再開を喜ぶ2人を祝福するように、雪が降り続けていた。

花火が咲く空の中で、騎兵が最後のスパートをかける。
炎の軌跡は文字を空に刻んでいく。
それを、その場にいた全てのものが、同時に読み上げた。

“Ｍｅｒｒｙ　Ｃｈｒｉｓｔｍａｓ”

これにて、闇の書をめぐる戦いは幕を閉じる。
だが、これからも彼らは激しい戦いに身を投じるだろう。
相手の想いを理解したうえで、それを踏みにじる覚悟を持って魔導を振るう。
辛いこともあるだろう。
心が折れそうになることもあるだろう。
それでも、彼らは前に進み続ける。
松田怜治は、高町なのはは、フェイト・テスタロッサは、八神はやては、もう独りではないから。
騎乗兵と、魔導師と、騎士。
彼らが歩む道の先に、輝かしい未来があらんことを――――

第３４話　クリスマス（後書き）

これにてＡ'ｓ終了。
次はＩＦとか色々同時投降の予定なんでまた間が開くかもです……。

ＩＦストーリー　あり得たかもしれない魔女の最期

崩壊を開始した庭園の最下層で、魔女と騎兵は対峙していた。
魔女の傍らには生まれたままの姿の少女が浮かぶポッド。
騎兵の後ろには金髪の少女と栗毛の少女、黒髪の少年に、金髪の少年、そして犬耳の女性が事の成り行きを見守っていた。
対峙する両者の身体は傷だらけの満身創痍。　周りの損傷具合が、ふたりの戦いの激しさを物語っている。
黒衣の魔女が前に出る。　白金色の杖で傷ついた体を引きずりながらも、その双眸に宿る闘志と執念は未だ消えていない。
魔導騎兵は手にした大剣を握りしめて歩を進める。
魔女が手を振ると紫電の雷球が幾重にも展開され、騎兵が魔力を込めると構える大剣に炎が絡みつく。
誰も2人の戦いに手を出さず、ただ静観する。
雷球が疾走し、大剣が一閃される。　激しい怒号と爆煙が部屋を駆け回る。
ふたりの間には中規模なクレーターが生まれていた。
魔女の膝が折れ、崩れるように倒れた。　騎兵は倒れず、大剣を杖代わりにして立ち続けた。
崩れ落ちた魔女の手から、菱形の宝石が零れおち、カラン、と音が響く。
騎兵の後ろにいた少年少女が一斉に駆けだした。
1人は魔女のもとに、1人は騎兵に治癒魔法をかける。　他はふたりを取り囲むように立つ。
傷が塞がりきる前に騎兵は前に出て魔女の手から落ちた宝石を拾い上げる。　その際、魔女と目が合う。　戦う力は残っておらずとも、その瞳は未だ熱を持ち続けていた。

「レイジ……」

魔女の傍で心配そうな表情をしている金髪紅眼の少女が騎兵に声をかける。

レイジと呼ばれた騎兵は振り返り、軽い頬笑みを返す。

「安心しろ、別に大したことしねぇって」

「いや、まったく信用できないんだが……」

黒の髪の少年の言葉を無視して、怜治は少女が浮かぶポッドへと向かう。

「待ち……なさい。
アリシアに……何を……」

もはや力など残っていないはずなのに、魔女がゆらりと立ち上がった。

瞳に業火を宿しその美貌を激情に歪ませながら、魔女は怜治へと近づく。

「か、母さん！」

必死に引き留めようとする少女を乱暴に振り払う。　小さな悲鳴を上げて倒れる少女を犬耳の女性が受け止めた。

「あんた……けっきょく最後まで！」

「アルフ、やめて」

「でもフェイト！」

後ろの２人に目もくれず、魔女は怜治を止めようと手を伸ばす。
黒髪の少年が杖で魔女の行く手を遮る。
魔獣のような瞳が少年を貫く。

「時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。
プレシア・テスタロッサ、あなたを逮捕する」

「どけ、どきなさい！　私は……アリシアをぉぉおお！！」

プレシアは自分の名と所属を述べるクロノの言葉など受け付けず、
ただがむしゃらに前に進もうとする。
それを見て怜治は、

「ったくうるせーなさっきから。　集中できねぇだろうが！」

全員の動きが固まり、視線が怜治一人に集中する。
誰ひとり声をあげない部屋に崩落と地鳴りの音だけが響く。
怜治は菱形の宝石――ジュエルシード――を握りしめてポッドに手
を当てる。
中で浮かぶアリシアという少女の顔が目に映る。

「ま、賭けみてぇなもんだから成功の保証はねぇけどな」

『よく言うよ。　どうせ、上手くいくまでやるんだろ？』

背負う大剣形態のスタンの言葉に怜治は苦笑する。
確かに、自分なら納得がいくまで繰り返すのだろう。

目を閉じて集中する。　手の中の宝石に願いを込めて宝石の秘めた力を解き放つ。
青白い光が部屋を覆い尽くし、おびただしい量の魔力が奔流となって部屋を駆け回る。

「なっ！？　何をする気だ！」

「ああ？　決まってんだろ。　そこのバカ親の願いとやらを叶えんだよ！」

怜治を除く全員の顔に驚愕が張り付く。
あり得ない。　その言葉が全員の頭に浮かぶ。
プレシア・テスタロッサの望みはただ一つ。　幼くして死んだ一人娘の命を取り戻すこと。　つまりは死者の蘇生だ。　そんな奇跡を、怜治は起こすと断言した。

「アリシアが……蘇る？」

プレシアが呟いた。
彼女の一人娘――アリシア――の命は、アルハザードという次元の狭間にあるという地の秘術を使わねば取り戻せないと思っていた。
そして、そこへと至るためにフェイトに集めさせたジュエルシードを失い、それも叶わないと思った矢先の怜治の宣言。
魔女の瞳に希望と不信感が同時に浮きあがり、葛藤を繰り広げる。
この男の言葉を信じていいのかと。
そんなことをして男になんの得があるのかと。
多くの疑問が脳内を駆け巡る。

「言っとくがな！　こいつ生き返らせるのはてめぇのためじゃねぇぞ！」

「……だったら、何故あなたがそんなことをするというの！？」

「その通りだよな。　俺は困ってる人間を放っておけないような善人じゃねえんだがな」

薄く笑いながら、怜治は続けた。

「ただ、ここでやらなきゃ後悔する気がしちまったんだよなぁ！！」

叫びとともに光が強くなる。

目を潰すほどの光に、クロノ達が目を庇う。

そんな中、怜治の顔から笑みが消えて焦りと苛立ちが浮かび始めた。

（さすがに、こんな願いまでタダじゃねぇってか……。　上等！）

腕に力を込めるとポッドに亀裂が走った。　それは、怜治にとって自分の望みを妨げる壁に見えた。

ならば、これを壊して、その先のものを掴もう。

（対価がいるってんなら、俺がやれるもんならくれてやる！

――――だから）

光がさらに強くなる。

「焦らしてねぇでさっさと言うこと聞けよクソッタレェ！！！」

部屋に満ちた魔力が一気に爆ぜた。

魔力は瀑布となってクロノ達を薙ぎ払う。　少年少女が悲鳴を上げて吹っ飛ぶ。

頭を打ったクロノはチカチカと点滅する視界の中で光が治まったことに気付いた。
視界が完全に回復し、痛みを訴える体にムチ打って立ち上がる。
破壊されたポッドの傍で、怜治は自分の着ていたコートでアリシアを包んでいた。
力を疲弊させたのか、肩が上下しており苦しそうに見えた。
クロノの視界の端で、黒い風が走っていくのが映った。　プレシアだ。
プレシアは怜治を弾き飛ばさん勢いで駆け寄り、コートにくるまったアリシアの頬に触れる。
プレシアの手に温かい体温が伝わってきた。　耳を澄ますと、すーすーと穏やかな寝息も聞こえ、アリシアの手首に指をあてると一定のリズムでの脈動をはっきりと感じることができた。
アリシア・テスタロッサは、確かに生き返った。

「ああ……ああ……アリシア……！！」

愛しい娘を抱き締めるプレシア。　その瞳から涙が流れ出す。
怜治はよろよろと立ちあがり離れる。
2，3歩進んだところで膝が折れた。

「怜治さんっ！？」

ユーノが咄嗟に支えようとするが、何せ体格が違うため一緒に倒れてしまった。
怜治は体を回転させてユーノの上から退く。

「大……丈夫だ。　ただの、立ちくらみだ」

スタンを杖代わりにして立ち上がり、瓦礫に座り込んで怜治は息を

ついた。
ユーノが近づき、治癒魔法を発動。　淡い光が怜治を包み、体力と魔力を回復させていく。

「無茶のしすぎですよ。
ジュエルシードを無理やり制御するなんて、しかも死者の蘇生なんて何考えてるんですか」

「終わりよければ……ってな。　細かいことごちゃごちゃ言ってると、あのクロチビみたいになるぞ」

「余計な御世話だ」

クロノが怜治を見下ろしていた。
まだ頭が痛むのか、後頭部をさすっている。

「体の調子はどうだ？」

「ちょっと疲れただけだ。　心配するほどのもんじゃねぇよ」

強がりにしか見えない言葉を吐く。　事実、怜治の体はボロボロだった。
外見上の傷だけではなく、何かそう、生命力が削り取られたようなそんな感覚だった。

（死者蘇生の対価はそれ相応の寿命……か。
ガキ1人生き返らせんのに俺の半分くらいで済んだんだから、まぁ得したほうか）

ユーノの治癒により、徐々に体力が戻ってきた。

荒い呼吸も落ち着き、魔力も幾分か回復してきた。　それでも、体に溜まった疲労感は抜けず、まだ動くのはしんどかった。
容態が安定したのを見届けたクロノの足がプレシアの方に向いた。
その顔は冷静な執務官としてのそれになっていた。

「何するつもりだ？」

怜治はできる限り大きな声でクロノに問いかける。
声はプレシアにも届いたようで、ゆっくりと警戒の色を浮かべながら顔をこちらに向けた。
クロノは顔を怜治に向けず、プレシアの方を向いたままだった。

「決まってる。　プレシア・テスタロッサを逮捕する」

和らいだかに見えた空気に再び緊張が走った。
プレシアの顔にはっきりと怒りが浮かび、なのは達は戸惑いの色を見せていた。

「仕事熱心だな」

『融通が利かないとも言う』

「どうとでも言え」

そう言ってクロノはプレシアの方へと歩いていく。　プレシアはアリシアを抱いたまま逃げようとするがもはや立つ余力も残っていない。　戦うなど論外だ。
それを見て怜治はため息をひとつつく。
クロノがやっていることは正しいことだ。　次元震というのがどんなものなのかよく知らないが、危険なものということははっきりと

分かる。
プレシアはそれを自分の望みのために引き起こした。　幼くして命を落とした娘を生き返らせるという望み。
美談めいた望みだが、美談なら何をしてもいいなどと言ってしまえば世の中は無法地帯になってしまう。　一部の例外こそあれ、好きで罪を犯す者などいないのだから。
だからクロノのやることに間違いはない。　アリシアは保護し、プレシアは逮捕する。　イレギュラーこそ発生したが、それが彼の任務だ。
理解もできるし納得もできる。
だが。

（ここでただ見てるってのは無責任だよな、きっと）

今は眠っているあの少女が目を覚ました時の事を考え、怜治は決めた。
疲労がたまった体に鞭打って息を思いっきり吸い込み。

「いやー、しっかしさっきの地震凄かったな！　震度何くらいだろうな！」

出来る限り大きな声で言った。
案の定、この場にいる全員の視線が集中する。

「……何を言ってるんだ君は？」

皆を代表してクロノが言った。　呆れたような、どこか馬鹿にしたような声だった。

「だからさっきの地震だよ。　でかかったよなー。　こんな場所で

も自然災害とか起こるんだな、スタン？」

『そうだな、フェイト嬢の家に遊びに来て地震が起こってそのせいで怜治の頭に瓦礫が落ちてくるなんて不運すぎるよなー、ユーノ坊？』

「えっ！？　あ……あ、そうですね！　地震のせいでセキュリティが誤作動起こして傀儡兵が現れた時はビックリしたよね……なのは？」

「んにゃ！？　……う、うん！　おっきな地震でビックリしたプレシアさんやアリシアちゃんが倒れちゃったりした……よね？　フェイトちゃん？」

「え……う……うん。　すごく……ビックリ……した……アルフ？」

「もう少し何か言ってくれよフェイト。　あー、あれだ。　この部屋がボロボロなのはあんたがパニクって魔法を乱射しちゃったからなんだよね、プレシア？」

「……そうね。　見苦しいところを見せてしまったわ。地震なんてあまり経験したことなかったら……遊びに来たフェイトの友達には迷惑をかけたわね？」

「いやいや別に良いって、大事にならなかったんだから。なー、クロノ？」

六人と一台分、計１４の瞳がクロノに注がれる。

「な、君たち自分たちが何を言ってるのか分かってるのか！？」

「何を言ってるって……、俺たちは感じたことをそのまま言ってるだけだぜー？」

うんうんと全員が頷く。　一部かなりたどたどしい者もいたが。

彼らは、プレシアが次元震を起こしたことを全員で無かったことにする気だ。

事実、次元震を起こしたジュエルシードも消えてしまい、次元震事態ももうすでに治まっている。

怜治たちが証言しなければ、事実を知るのはクロノ達アースラスタッフのみとなる。

「あー、しっかしヤバいなぁ。　俺やプレシアはケガで動けねぇし、ガキどもに担いでもらうわけにもいかねーな」

怜治はわざとらしく腕を回したり首を鳴らしたりして怪我人をアピールする。

「あーあ、ここに都合よく救助隊みたいなやつらこねぇかなー」

「な……っ！　き、君というやつは……」

怜治の勝手な物言いにクロノがずんずんと荒い足取りで近づく。

今にも掴みかかりそうな形相が迫ってきた。

『はーい、クロノ君ストップ！』

「なっ！？　エイミィ！」

怜治とクロノの間にウィンドウが開き、少女の顔がアップで映った。

『えーっと、艦長から伝言ね。　“突如発生した地震により崩落の危険にある時の庭園内より、要救助者7名の救助を命じる”　だってさ』

なぁっ!?　とクロノから驚きの声が上がる。
どうやらクロノの上司は怜治の提案を受け入れたようだ。
怜治は勝ち誇った笑みを浮かべてクロノを見上げる。

「さて、艦長命令だがどうする執務官殿?」

「く……分かった!　怪我人2人、いや3人。　そちらを優先し全員保護する!
これでいいんだな!」

「ああ……そうだよ」

「エイミィ、みんなの状態はどう?」

次元空間航行艦船“アースラ”。　その船の艦長席に座るリンディ・ハラオウンはモニタに映る茶色い髪の少女に聞いた。

『特に問題はないみたいです。
なのはちゃんもフェイトちゃんもちょっと魔力を消費してますけど、怪我はありません』

「プレシア・テスタロッサとその娘さんは?」

『プレシアは現在治療中、外傷の方は問題ありませんが病気の方はもう……』

そう、とリンディは短く答えた。

エイミィが続ける。

『アリシア・テスタロッサの方は検査の結果がでました。　意識はまだ戻りませんが、問題は無いようです』

この報告にもリンディは同様に短く答えた。

そして、彼女は一番気になっていた話題に話を振る。

「怜治君の容態はどう？」

エイミィの顔が暗くなる。　重い口を開いて答えを紡ぐ。

『消耗した魔力は順調に回復してます。　怪我も重傷といえるものは見当たりません。

ですが……』

「ですが……何？」

『……衰弱、とはまた違うんですが何というか……一気に体だけ何十年も年老いたかのような状態だそうです』

「――――――――」

エイミィの報告をリンディは頭の中で反芻し、解読していく。

聡明な彼女の頭脳は、すぐに答えを導き出した。

「……とんでもない子ね」

『艦長……？』

「ん、ありがとうエイミィ。　何かあったらまた報告してね」

そう言って通信を切った。
すぐそばに置かれた緑茶（角砂糖投入済み）の入った湯呑みを取り、中身を流し込む。
プレシア・テスタロッサは拘束した。
ジュエルシードも回収可能なものはすべて集め、封印処理を施した。
あの少年少女たちの役目はこれで終わり、後はゆっくり休み疲れを癒してもらいたい。

「……さて、頑張りましょうかね」

これから始まる事後処理は自分の仕事だ。
そういう想いを込めて、リンディ・ハラオウンはそう言った。

アースラ内の医務室で、金髪の少女が目を覚ました。
患者衣を着た少女は上半身をベットから起こし、紅い瞳で部屋を見わたす。
知らない部屋、知らない天井、知らない空気。
周りにあるものすべてが底知れぬ不安感を少女に与えた。

「……ママ」

ベットからおりる。　飛びおりる際、金紗の髪が波を打った。
ペタペタと裸足で歩き、扉の前に立つとセンサーが働き、開いた。
廊下に顔だけを覗かせて左右を見渡す。
やはり、少女が知らない廊下だった。
時間がたったからか、少女の中に渦巻いていた不安感が好奇心へと変わり始める。
ここはどこなのか。　何故自分はここにいるのか。
それを知るため、少女は部屋の外へと飛び出した。

コツコツと、アースラの廊下に足音が響く。
足音の主は全身を黒衣に包んだ女性。　夜色の長い髪がより一層彼女の妖しさを引き立てる。
背筋を伸ばし、凛とした女性の手には手錠がはまっている。　両手の自由を拘束すると同時に魔力を封じ、魔法の使用を防ぐためのものだ。
女性の後から、クロノ・ハラオウンが付いて歩く。
やがて、2人は扉をくぐる。　すると、エメラルドグリーンの長い髪の女性と白が混じった黒髪の青年が彼女らを迎えた。

「……で？　なんの用なのかしら？」

「少し、お話しがしたいだけよ。　プレシア・テスタロッサ」

プレシアが通された部屋は、大の大人が四人も入ると少々窮屈に思えてしまう程度の広さしかなかった。
使われていない倉庫なのだろうか。　必要最低限の照明しかなく体を少し動かすだけで顔を視認できなくなってしまう。
そんな暗い部屋の中にいるのはプレシアと、艦船アースラの艦長リンディ、その息子にして執務官のクロノ、そして怜治の四人だった。

「……なんですって……」

プレシアの口から驚愕の声が零れた。
唇は震え、ありえないとその双眸が語っていた。

「……冗談でしょ？」

「いいえ、冗談ではありませんよプレシア・テスタロッサ。
我々アースラは、貴女とアリシアさんの地球での居住を認めます」

信じられない。
リンディの話を聞いたプレシアの感想はその一言だった。
プレシア・テスタロッサは犯罪者である。
ロストロギアを集め、次元震を起こし、周辺の次元世界を崩壊の危機に陥れた。　これは立派な犯罪だ。
自分はこのまま管理局に連行され、裁判を経てそれ相応の刑が執行されるものだと覚悟していた。
なのに、リンディはプレシアを管理局へ連行しないと言った。
病魔に侵され、余命幾許の自分を地球に住まわせるという。　プレシアの娘であるアリシアと共に。

「当然その間、我々側から監視員を付けます。　ですが、貴方たちが違法行為をしない限り行動を縛るつもりはありません」

「信じられないわね……。
いつから管理局はそんな甘い組織になったのかしら？」

温情処置。
そういってもいいだろう。
だが、法を守る時空管理局からしたら大変な事態だ。
娘のためなら次元震を起こしても許される。
そんな判例をリンディは創ってしまうことになる。
ありえない。
なら、そんなことをするだけの価値があるものをリンディは握っているのでは？
プレシアは唐突にそんな結論に達した。
どこかに行っていた警戒心が戻ってくる。

「要求は、なにかしら？」

「ありませんよ、なにも。
……強いて言うなら、アリシアさんと幸せに過ごしてくださいね」

ふざけるな、信じられるものか。
そう言おうとした時、リンディの通信端末が発信音を鳴らしだした。
通話ボタンを押すと、エイミィの蒼白した顔が映し出された。

『リンディ提督、大変です！』

「……どうしたの？」

『アリシアちゃんが……アリシアちゃんが病室からいなくなっちゃいました！！』

「「なんですって！？」」

リンディとプレシア、ふたりが同時に立ちあがって叫んだ。
そのままプレシアが血相を変えて部屋から飛び出していった。

「あ、待て！」

クロノが追って出て行く。
怜治も続こうとしたが、膝が砕けて倒れてしまった。

「――――ッ！　くそっ、だらしねぇ体だ」

「無理しちゃダメよ。　あなたの身体は今酷く弱ってるんだから……」

くそっ、と怜治は舌打ちする。
プレシアの追跡をクロノに任せたのか、リンディは再び席について怜治に問いかける。

「ねぇ、確認したいのだけれど。　貴方の気持ちに変化はなくって？」

「ない。　アリシアがプレシアと一緒にいられるってのを守ってくれるんなら、俺を実験動物にでもなんでもしろ」

「よくもまぁ……躊躇いなくそんなことが言えるものね」

リンディは呆れていた。
それは、怜治の出したある条件にある。
アリシアとプレシアを一緒にいさせることを条件に彼は自分の身を差し出したのだ。
彼が持つ不可思議な能力の解析がしたければ協力するし、嘱託魔導師のような扱いになっても構わないと言った。
無論、この程度の条件で管理局がプレシアの自由に納得するとは思えないが、リンディの持つコネクションをフル活用すれば無理も通るだろう。

「そうですか。　では、早速任務を与えます」

「おう、なんだ」

「……とりあえず最低限の礼節は身につけて下さい」

「……分かったよ、じゃなくて……分かりました」

よろしい、とリンディはほほ笑んで一枚のカードキーを差し出した。

「なんだそれ……それはなんですか、艦長？」

「プレシア・テスタロッサの手錠のキーです。　貴方に預けます」

「……は？」

「あなたを地球でのプレシア・テスタロッサの監視員に任命します」

「は？」

「……返事は？」

「あ、はい！　謹んでお受けいたします」

たどたどしい言葉遣いに、リンディはため息をついた。

「……貴方に敬語は似合いませんね」

「余計な御世話だ……です」

テッテッテッテ……。

軽快なステップで金髪の少女は通路を進む。

見るものすべてが新鮮で、最初にあった不安感はほぼ消えていた。

本来、子どもが好き勝手に歩きまわれるはずないのだが、プレシアによって傷ついた局員の治療や船の損傷の修復などに人手を割かれ、彼女が歩きまわる姿は誰にも発見されなかった。

やがて、少女はひとつのドアの前で止まった。

他のものと大して変わらない質素なデザインのドア。

なのに、彼女の第六感がここに興味を持って離さない。

特に何も考えず、湧き上がる好奇心に従って少女はドアを開ける。

「……だれ？」

薄暗い部屋の奥から聞こえてきたのは澄んだ声。

女の子かなと思った。

一歩、部屋に足を踏み入れる。

目が暗闇に順応し、室内に設置されたベッドの上に膝を抱えて座り

込んだ少女の姿を捉えた。
自分と同じ流れるような金紗の髪。
自分と同じ兎のように紅い瞳。
そして、

「あなた……だれ？」

自分と同じ顔だった。
普通なら驚くなり戸惑うなりするだろう。　事実、目の前の少女の紅眼に戸惑いの色が浮かんでいた。
だが、享年五歳で一度この世を去った少女にそんな感想はなく、だれ？という質問に素直に答えることにした。

「わたし、アリシア・テスタロッサ！　あなたのお名まえは？」

「……フェイト……テスタロッサ」

母（プレシア）に愛された少女と、母（プレシア）に愛されたかった少女が出会った。

二つの黒い影が疾走する。
1人は小柄な少年で、1人は妖艶な雰囲気の女性。
クロノは端末を操作し、乗組員にアリシアの捜索を指示していた。
プレシアは自由の利かない両手に苛立ちの舌打ちをする。

「まったく、寝ている子供の面倒一つ見れないなんて、管理局も大したことないわね」

「悪かったな。　どっかの誰かのせいで局員の治療や破壊された機器系統の修理に人手を割くはめになってね」

クロノは端末を操作。　エイミィへと通信をつなげる。

「エイミィ！　全監視モニターをチェックだ！　アリシア・テスタロッサの場所を探してくれ！」

『言われなくてもやってますよ！　もう発見済み、場所を送るよ！』

通信が切れ、代わりに艦内のマップが送信されてきた。見慣れたアースラの図面上に、赤い点が点滅していた。場所を確認し、驚愕した。

「フェイトのいる部屋だ！」

もうダッシュで目的地にたどり着いた時、クロノとプレシアの目に予想外の光景が飛び込んできた。

「わぁ！　わたしと同じかお！　ファミリーネームまでいっしょなんてすごいね！」

「え、う、うん……」

「あ、そういえばここってどこなの？　クラナガン？」

「えっと、アースラっていう管理局の次元航行船の中だよ」

「管理局！　それじゃあフェイトも管理局のひとなの？」

「ううん、わたしは違うよ」

「？　じゃあどうしているの？
家族に管理局のひとがいてのせてもらったの？」

「そういうのでも……ない」

同じ顔の少女たちが、プレシアの娘のオリジナルとクローンがにぎやかに談笑していた。
談笑、といってもアリシアがまくしたてるように話し、それにフェイトが相槌を打っているだけなのだが。
クロノは唖然としていた。
本来、自分と同じ顔の人間が目の前に現れたら戸惑うものだ。
だが、アリシアにとっては杞憂だったようだ。
こちらの視線に気付いたのだろう。　アリシアが太陽のように眩しい笑顔を向けた。

「あ！　ママ！」

アリシアがプレシアの胸に飛び込んだ。
ほほ笑むプレシアを、フェイトが複雑そうに眺めていた。

「ねぇねぇママ、すごいんだよ！
あの子、フェイトとわたしって顔も同じでファミリーネームも一緒！」

「え、ええ……そうなの……」

チラリとプレシアは顔をあげ、フェイトの顔を見た。
拒絶した女と拒絶された少女の瞳が交錯する。

「……母さん……」

虫が鳴いたような小さな声。　だが、その声は確実にアリシアの耳に届いていた。

「……かあさん？」

フェイトを見て、プレシアを見て、もう一度フェイトを見る。
うーん、と目を閉じて唸り、ぱちっと紅い瞳が開かれた。

「いもうと！」

発せられた単語に、その場にいた全員が固まった。
そんなことに気も止めず、アリシアはフェイトの下に駆けよりその手を握りしめた。

「いもうと！
そうでしょ、フェイトってわたしのいもうとでしょ！」

「え？　え？」

「わたしずっと前からいもうと欲しかったの！
それでママにお願いしてたの！　いもうとが欲しいって！」

ぶんぶんとフェイトの手を握った手を上下に振りながらアリシアは言う。
屈託のない笑顔を振りまく姿は、心からフェイトの存在を喜んでい

るのだと分かる。

「ねぇママ、そうでしょ？
フェイトってわたしのいもうとでしょ？」

え、とプレシアは口を噤む。
確かに昔、何が欲しいかと聞いたら妹と言われたことがあった。
妹がいれば留守番も寂しくないからと言われた時には、多忙を理由に娘をずっと1人にさせていた自分への不甲斐無さと愛娘の優しさに涙が流れたものだ。
が、それとこれとは話が違う。
フェイトはアリシアの妹ではない。　クローンだ。
全く同じ遺伝子情報を持った、アリシアになれなかったアリシアもどき。
妹でなければ双子でもない。
プレシアがフェイトを拒絶してきたのは、アリシアへの愛情であり自分の最後の矜持でもあった。
アリシアとフェイトの違いは何か。　答え、性格と利き手と魔法資質だ。
そのほかはすべて同じ、顔も髪も声も同じだ。
性格は違えど、決して悪いわけではない。　利き手など気にするなど神経質すぎるし、魔法資質もあるからといってなんだというのだ。
だが、プレシアは矜持故にその相違を許せなかった。
彼女が望んだのは自分を愛してくれるアリシアの蘇生であり、アリシアの代わりでも、アリシアと同じ記憶を持った別人でもないのだ。
フェイトのアリシアとの相違を見逃すことは、自身の誇りを踏みにじり、なによりアリシアへの侮辱に他ならない。
故に、プレシアはフェイトを愛そうとはしなかった。
あくまでアリシア蘇生のために使役する都合のいい駒だと思って

いた。
だから、この時も否定するつもりだった。それはアリシアの妹ではないと、あなたのクローンだと、言い聞かせようと口を開こうとするだが、口は空しく開閉されるだけで言葉を紡ぐことはなかった。アリシアの無垢な瞳を曇らせることを、母親としての本能が拒絶した結果だ。

「そ、そうよ……。フェイトは、あなたの……妹…よ」

葛藤の末プレシアが発した言葉はなんとも歯切れの悪いものであった。
プレシアの娘だと認められたのに、フェイトも素直に喜べそうにもなかった。
一方で、アリシアは歓喜の表情を浮かべてぴょんぴょんと飛び跳ねている。
しかし、プレシアの手元に視線が言った時、アリシアの動きが止まった。

「ママ。その手にしてるの、何？」

プレシアはハッとして自分の手元を見る。
両手はいまだに手錠によって拘束されたままだった。
どう説明しようかと思った時、突然背後から伸びた手が手錠を外した。

「はい完了。ったく、手間をかけさせるなよ」

「あなた……」

はずした手錠を弄びながら、怜治は言う。

「……では、プレシア・テスタロッサ。
地球に住む際の注意事項について説明したいので、娘たちと一緒にこちらへ」

「ええ、分かったわ。
さぁ行きましょうアリシア、フェイト」

「うん。
……ママの手の、外してくれてありがとうね。　れいじ！」

プレシアの右手にアリシアが元気よくとびつき、アリシアの右手がフェイトの左手を掴む。
決して触れあうことの無かった偽りの親娘が、本当の娘を通して確かに触れあった。
その背中を見ながら、怜治は呟いた。

「……俺、自己紹介なんかしたっけか？」

彼の疑問に答える者は、誰もいなかった。

「ふ～ん……つまり、おまえが近頃付き合い悪くなったのはあの子の家族問題に巻き込まれてたからだと……」

コーヒーをすすりながら赤毛の青年こと鉄平が半眼のまま言った。

目を少し動かし、件の“あの子”を視界にとらえる。
流れるような金紗の髪の少女が、黒髪の母親らしき女性と楽しく談笑している。
視線を戻す。
茶髪の悪友Aこと正義を素通りし、シマウマのような髪になった悪友Bこと怜治を捉えた。

「なんだよ。　信じられねぇってか？」

「正直信じられん。　…が、おまえがそうだと言う以上おれらも根掘り葉掘り聞く気はない」

「ありがとよ」

「へっ、謝るくらいならホントのを話せよな」

コーヒーカップを置くと、かちゃんという音が店内に軽く響いた。
彼らがいるのは喫茶翠屋というコーヒーとケーキが自慢の喫茶店だ。
主な客層は若い女性であり、今も店内には多くの女性客で混み合っている。　その中に男が三人、仲良く談笑するわけでもなくコーヒーを飲む姿というのはわずかに違和感を感じさせた。

「しっかし、あんな美人親娘とどう知り合ったんだ？」

「秘密だ」

会話が途切れた。
ぽっかりと空いた沈黙の空気を中和するように、少女の明るい声が三人の耳をはいってくる。

「ママー！　このケーキおいしーね！」

「そうね。　コーヒーも美味しいし、通いつめようかしら……」

「ねぇママ。　ここのケーキ、フェイトとアルフへのおみやげに買おうよ！」

「……そうね」

「どんなのが好きなのかな？」

「きっと、アリシアが選んだものなら間違いはないわよ」

「そうかなー」

少女が頬を染めて笑う。
一見、微笑ましい親娘の会話だ。
だが怜治には、一瞬アリシアの顔が曇ったように見えた。

階下から聞こえる賑やかな声を、なのはは翠屋の二階席で聞いていた。
彼女と同席しているのはフェイトだ。
綺麗な金髪に、時折目を止める人もいる。

「アリシアちゃん、うれしそうだね」

「うん……そうだね」

会話が途切れる。
お互い、どこか遠慮している体が見受けられた。
仕方ないだろう。
つい先日まで、敵としてジュエルシードを奪い合っていたのだ。
昨日の今日で親しくすることができるほど、なのはもフェイトも単純ではない。　だからと言って、いつまでも警戒心を出しているほど意固地でもない。
だからこそ会話が続かない。
お互い趣味嗜好も知らないためどんな話題を振ればいいかも分からない。
ただひたすらカップに入れられたお茶が減っていく。

「ねぇ……」

フェイトの声で、なのはは顔をあげた。
ルビーのように紅く綺麗な瞳が揺れていた。
言っていいのか、躊躇っているように見えた。

「なに？」

「……くれる？」

「んにゃ？」

「街……案内してくれる？」

「ほえ？」

思わずそんな声が出てしまった。

それをどう受け取ったのか、フェイトの体が縮こまっていく。

「その、わたしこの街のことぜんぜん知らないから。　あ、案内とかしてくれると……うれしい」

なのはの顔が輝く。

返事をする前に、少女の手はフェイトの腕を掴んでいた。

見知った顔の少女が二人、疾風のように店内から出て行く。

ひとりは嬉しそうに、ひとりは相手のテンションについていけてないように見えた。

敵対していたとはいえやはり子ども。

そういう壁が取っ払われるのは早いのだなと思った。

少女たちが出て行くのを見たのは怜治だけではなかったようで、

「あー！　フェイトどこ行くんだろ？」

「さぁ……遊びにいったんじゃないかしら？」

「わたしも遊びに行きたい！」

「いいわね。　アリシアはどこに行きたいの？」

「うーんとね……」

小さな顎に指を当てて考え込む仕草。

なかなか思いつかないようで、うんうんと呻っていると、怜治と目

が合った。
アリシアの眼が輝く。　嫌な予感がした。
「れいじの家に行ってみたい！」
嫌な予感は、的中した。

ガラガラと、お世辞にもきれいとは言えない自宅へと怜治は皆を迎え入れる。
アリシア達が暮らしていた世界――ミッドチルダというらしい――では見たことがないのか、アリシアの眼は好奇心で輝いていた。
パタパタとはしゃぎ回るアリシアを押さえつけて怜治の部屋へ向かうために居間を通る。
居間には、テレビの前に座り込む怜一郎の姿があった。
「なんだ……お客さんか？」
「ああ。　自分の部屋で騒ぐから気にすんな」
怜治、鉄平、正義、アリシアが次々と怜治の部屋に向かうため二階に向かう。
だが、プレシアだけが、怜一郎を前にして固まっていた。
「ママ、どうしたの？」
「え、ええ大丈夫よ。　ちょっと、お祖父さんとお話ししてから行くから、先に行っていて」

プレシアの様子に疑念を抱きながらも、アリシアは二階へと姿を消した。
二人だけになった居間で、プレシアはゆっくりと膝を曲げて正座。
手をついて怜一郎に頭を下げた。

「お久しぶりです。　先生」

「……」

怜一郎は答えない。
プレシアに目を向けず、テレビの画面だけを見ている。

「ミッドの大学では、本当にお世話になりました。　あの忌まわしい事故の時も、私のために尽力していただきありがとうございました」

「……わしは、お前みたいな馬鹿な生徒を持った覚えはない」

かつての恩師が発する突き放す言葉が、プレシアの心に突き刺さる。

「どうして……どうして人造生命技術なんぞに手を出した？
大魔導師なんて呼ばれたお前が、そんな過ちを犯した？」

「どうしても、受け入れることのできない運命がありました」

「一度起こったことは、受け入れにゃならん。
研究者・技術者はどんな結果も受け入れる覚悟がいる」

確かに、その通りだ。

出た結果を冷静に受け入れ、そこから改善策を模索し、改良していく。
研究・技術開発を職にしていたプレシアなら、それはできたはずだ。
できたのに、プレシアは愛娘の死を受け入れなかった。

「私は、技術者としてではなく、母親として、アリシアの死を受け入れることができませんでした」

「……そうか」

怜一郎が立ち上がり、台所へ消えて行った。
少しして、２人分の湯呑みをお盆に乗せて戻って来た。
差し出された湯呑みに注がれた日本茶を、プレシアはゆっくりと飲んだ。

「意外でした。　彼が先生の…お孫さんだったなんて」

「あいつが生まれた時は、もうお前は行方を眩ませていたからな」

湯呑みを傾け、怜一郎も日本茶でのどを潤す。
フゥ、と息をついたところでプレシアは疑問を口にした。

「…ファミリアさんは今日も任務ですか？」

「ミリィは……死んだよ。　１０年以上前だ」

重い空気が一気に充満した。
申し訳なさそうにプレシアが頭を下げようとするのを、怜一郎は気にするなと手で制す。

「……彼は、先生たちのことを知っているのですか？　その……」

「わしと祖母さんが管理局員だったということか？　知らんよ。あいつには魔法の事を全く教えておらん」

えっ……、とプレシアは驚愕を零した。

怜治が魔法教育を受けていなかったということは、プレシアは魔法歴が一カ月程度の半人前に敗北したということだ。

訓練も碌にしていない魔導師が、自他共に認める実力を持つ大魔導師を打ち破った。

ということは、怜治の素質はプレシア以上ということになる。

そのことを口にすると、「アレはそんな大層なもん持っとるわけないじゃろ」と怜一郎は鼻で笑い飛ばした。

「それで、お前はどうするんじゃ？」

突然投げかけられた質問に、プレシアは頭上に疑問符を浮かべた。

「お前の……もう1人の娘の事じゃよ」

「……」

無言。

プレシアはただ沈黙を貫くだけだった。

「……まぁ、そう簡単に認められない事象ではあることは確かだ。だがなプレシア。　あの子はお前を慕ってるんじゃないのか？」

そんなことは言われなくとも分かっている。

フェイトは自分を母だと未だ思っているだろう。
いや、プレシア以外に母だと呼べるものがいないというのが正解か。
そんな心情を察したのか、怜一郎がプレシアの肩を叩く。
学徒だったころ、自分が悩んでいると決まって彼はこうしていた。

「なぁプレシア。　あの子を娘だと思えなくとも、あの子にかけてやる言葉くらいは、持っているんじゃないのか？」

怜一郎の言葉に、プレシアは何も言うことができなかった。

やがて、春が終わり、夏が来た。
日ごとに日差しは強くなり、青々とした緑が生い茂る。
その間に、プレシアとアリシアは色々なところへ行った。
動物園に行き、水族館に行き、遊園地に行き、野山へピクニックに行き、街で買い物をした。
かつての生活では決してできなかっただろう楽しい日々。
二人の間には笑顔が絶えなかった。
だが、その日々にも終りがやって来た。
プレシアが倒れたのだ。
もともと、病魔に蝕まれた体に鞭打ってアリシアと過ごしていた彼女の体も、ついに限界に達した。
今まで体が持っただけでも奇跡なのだ。
リンディが用意した病室の前で、一同が介していた。
プレシアの娘であるアリシア、そのクローンであるフェイトとその使い魔のアルフ、プレシアとアリシアの日常を見守って来た怜治、事件の当事者としてなのは・ユーノ・クロノ・リンディ。

診断を終えた医師に、皆の意識が集中する。
医師は何も言わず、ただ首を横に振るだけだった。
少女たちの顔から希望の光が消える。

「患者からの要望で三人だけ、お話しがあるんだそうです」

「三人？　誰です？」

「アリシアさんとフェイトさん、そしてあなたです。　怜治さん」

名前を呼ばれた三人の顔が上がる。
戸惑いと疑念を織り交ぜながら、まずは怜治が1人で病室に入る。
病床についた魔女の姿は儚く、今にも霞に消えてしまいそうなほどに弱弱しかった。
顔色は青白く、以前あった美貌は見る影もない。

「貴方には……いろいろ迷惑をかけたわね」

「ああ……全くだ」

余計な言葉は交わさない。
彼女には、自分以上に言葉を交わすべき人間が他にいる。
だから、怜治はできるだけ早く話を終わらせるつもりだった。

「後がつっかえてる。　用件をさっさと話せ」

「フフッ……。　つれないのね」

力の無く笑い、魔女の双眸が怜治を捕える。

「貴方に……アリシアのことを頼みたいの」

「……俺より、管理局の方がいいんじゃねえのか？」

「信用できないわ。
少なくとも、局より貴方の方が信用できるわ」

「それは、喜んでいいのか？」

怜治も信じ切れていない組織と比較されても嬉しくはない。
魔女の瞳を真っすぐに見据えて、青年は答えを出す。

「決めるのはアリシアだ。
あいつがそれでいいってんなら、あいつを生き返らせた責任として、
俺はあいつを守ろう」

「約束…したわよ？」

「ああ。　俺は嘘も吐くし隠し事もするが、約束だけは守る」

その答えに魔女は微笑し、満足げに「ありがとう」と言った。
怜治は病室を後にした。

続いて、フェイトが入って来た。
愛娘と瓜二つな外見も、プレシアははっきり判別できる。
少し怯えた様子でゆっくりとプレシアに近づいてきた。
そっと、プレシアの手が伸びてフェイトの頭上で止まった瞬間にフェイトの肩がビクッ、と跳ねた。
当然の反応だ。
今まで、プレシアは何度もフェイトを虐待してきた。

鞭でその白い肌に赤い線を刻み、頬を引っ叩いて腫らせた。

「フェイト……」

「……はい」

「貴女は、まだ私を母と呼ぶ気なの？」

沈黙。　プレシアはそれをイエスと受け取った。

「……私の人生の半分が、アリシアのためだったと言ってもいいわ。だから、私はアリシア以外を本気で娘だなんて言うつもりはないわ」

ズキリ、と心に刺さる言葉。

覚悟していたことではあった。

クローンとして生み出され、普通とは違う誕生をした自分は最後まで彼女の娘になることはできないということを。

「でも……」

魔女が言葉を切った。

フェイトの顔が上がる。

「貴女が、私を母と呼びたいのなら……勝手にしなさい」

「……え？」

驚いた。

激しく拒絶されると思っていた手前、その驚きはさらに大きかっ

た。

「でもねフェイト。　私がアリシアに固執し過ぎて今の状態になったように、貴女も私に固執し過ぎる必要はないのよ」

一瞬、何を言われているのか分からなかった。
それを知ってか知らずか、プレシアは続ける。

「アリシアに固執したことを、私は一片の後悔もないわ。
でもそれは、私にはアリシアしかいなかったから。
それに比べて、貴女には友人がいる。　貴女のために本気で怒ってくれる人がいる。
だから、私に固執せず、貴女は自由に生きなさい。
私という鎖なんかに、縛られたりなんかしないで」

今まで、直に投げかけられたことのない心のこもった言葉。
素っ気なさはまだ残るものの、その言葉をフェイトはしっかりと心に刻みつけた。

「分かり、ました。
今まで、ありがとうございました……母さん」

母からの最期の言葉を頭の中で反芻しながら、フェイトは病室を出て行った。
彼女とすれ違うように、彼女と瓜二つの少女が入って来た。
一瞬、フェイトとアリシアの視線が交錯する。

「ママ……」

悲しみに揺れる紅い瞳が危篤の魔女を映す。

暗い顔を変えたくて、プレシアは愛娘の頭を撫でる。
くすぐったそうにアリシアの頬が緩む。

「アリシア。　また、寂しい思いをさせてしまってごめんなさい……」

そんなことない、という言葉は飲み込んだ。
それは強がりでしかなく、プレシアはそれを容易く見破る。
力のない手を握る。

「ママ。　わたし、知ってるよ。
　ママがわたしを生き返らせようとがんばっていたこと、ジュエルシードのこと、フェイトの……プロジェクトFのこと、」

プレシアの顔が凍りついた。
アリシアの言ったことは、即ちプレシアが犯した罪を理解しているということだ。
この一カ月、彼女にはそんなことを話してはいないというのに。

「全部ってわけじゃないんだ。
　なんだろう、他のだれかの記憶を共有してるって言うかな？
　わたしは一度死んでいること、死んで２０年以上たっていること、フェイトがわたしのクローンだって言うこと、ママが……フェイトのことをきらいって言ったこと。
　知ってるのは、これくらい」

アリシアの言葉から、プレシアの頭脳がひとつの答えを導き出した。
アリシアの蘇生には、怜治の生命力が使われている。
ならば、怜治の記憶の一部が彼女に生命力と一緒に流れ込んだと考えればつじつまが合うのではないか。

「ママ。　ごめんなさい……」

「……どうして、アリシアが謝るの？
悪いのは、全部私なのに……」

アリシアが首を左右に振る。　金紗の髪もつられて揺れる。

「わたしがあの時死んじゃったりしたから、ママはこんなに苦しんじゃったんだよ。
優しかったママを、わたしが悪い人に変えちゃった……」

そんなことない。
思わずそう叫びそうになった。
彼女の声を押し殺させたのは、プレシアの手を握りしめる少女の力だ。
顔をくしゃくしゃにして涙を押し殺しているアリシアの顔がなんとも痛々しい。
プレシアは空いた方の手を伸ばし、アリシアを抱きしめる。
顔が見えなくなってやっと、少女の嗚咽と涙が一気に流れ出した。
それは、また独りぼっちになってしまうことへの悲しみか、唯一の肉親が消えてしまうことへの悲しみか。　いや、その両方だろう。
プレシアはただ、娘の慟哭を静かに受け止め続けた。
どれくらいの時が経っただろうか。
ようやく泣きやんだアリシアの顔を見つめて、プレシアは言葉を贈る。

「アリシア。　私がいなくなっても、貴女はもう独りぼっちなんかじゃない」

アリシアが顔を真っ赤にしたまま頷く。
二人で、最期の言葉を紡いでいく。

「アリシア。　私は、プレシア・テスタロッサは――――」

「わたし、アリシア・テスタロッサは――――」

互いに手を強く握りしめる。

「貴女（アリシア）の母親になれて――――」

「あなた（ママ）の娘になれて――――」

「「本当に……幸せでした……！」」

三人に言葉を贈り、魔女はその両目を閉じた。
そして、二度と開くことはなかった。
今思えば、彼女の人生は壮絶だったかもしれない。
愛したはずの夫とは早々に離別し、愛娘とは仕事に追われて一緒に過ごすことは叶わず、事故によってその愛娘を失い、失意のどん底から這い上がりながらも試みた愛娘の蘇生は失敗しさらなる絶望に突き落とされた。　やがて病魔に侵され、結局愛した娘との穏やか

な日常はとても短かった。
そんな波乱の人生を歩んだ魔女の死に顔は――――

幸福に満ちた、美しい笑顔だった。

海を一望できる丘に建てられたひとつの墓標。
刻まれた文字は地球のものではなく、その下に眠る者が育った異界の文字。
静かに風を受ける墓標の前に、金の髪の少女が立っていた。

ＩＦストーリー　あり得たかもしれない少女の日常

夏。　付け加えて言えば夏休み。
長期休みによってハイテンションになった学生をあざ笑うかのように、アジア特有の猛暑が人々に襲いかかる。
雲ひとつない青空が広がっており、太陽からジリジリと放射される熱線とアスファルトからの照り返しにより地上の気温を確実に上げていく。
ほぼ毎日のように熱中症による死者が報道されるような猛暑も、エアコンという文明機器の前には意味もなさない。
エアコンを発明した人間は実は世界の救世主なのではないか。
そんな変な思考に没頭してしまうのも夏のせいだと思いつつ、松田怜治は喫茶翠屋に入る。
ここのコーヒーの味は好きだが、彼がこうして毎日のように通うのはそれだけではない。
彼の妹分が、ここの店主の娘と仲良くなりそれに巻き込まれる形で常連になったにすぎない。
今日も、店内の一角にて金の少女の勉強会が行われている。

「１×１＝１、１×２＝２、１×３＝３……」

「このあたりは問題なさそうだね」

「……3×2＝6、3×3＝9、3×4＝12……」

「うんうん……」

高町なのはが頷くと、ツインにまとめられた栗毛も揺れた。

彼女の前でひたすら九九を唱えているのは最近友達になった少女で、秋から小学校への編入が決まっているアリシアだ。

享年五歳で一旦その短い生涯を閉じた少女は、とある異能を持った少年によって再びこの世に生を受けた。

生き返った以上、少なくともこの国では義務教育として15歳までは学校に通わなくてはいけない。

小さく見られるのが嫌だったのか、それとも妹がそれに相当するからか、彼女は小学三年生への編入を強く希望したのだ。

となると学力的な問題が発生する。

いくらアリシアが五年間過ごしていたミッドチルダが地球よりも発展していようが、いきなり三年生相当の授業についていけるとも思えない。

よって、このように夏休みを利用してなのはに家庭教師（教えられる側が通うのだから少し違うが）を頼んだのだ。

9歳児の平均学力から見て、なのはの学力は高い方に位置する。

それもそのはず、なのはが通う小学校は聖祥大付属なのだ。

大学までエスカレーター式の市立ゆえ、生徒にはそれ相応の学力が、扶養者にはそれ相応の経済力が必要とされる名門校。

そんな彼女にとって、普通の公立小学校の問題など（文系は苦手らしいが）難しくはない。

「9×7＝63、9×8＝72、9×9＝81！　やった！」

「おめでとー！」

パチパチと称賛の拍手をされ、アリシアは誇らしげに胸を張る。
これで理数系は大方片付いた。
アリシアが英才教育を受けていたという話は聞いていないが、母親譲りなのか彼女の学習能力というのは凄まじかった。
そのことを本人に話すと、アリシアはにっこりと笑って

「そんなことないよ。　きっと、なのはの教え方が上手いんだよ」

「そうかなー？」

「そうだよ。
あ！　そういえば聞きたいことがあったんだ……」

ガサゴソと可愛らしいデザインの鞄を漁り、アリシアは一冊の本を取りだした。
表紙に印刷された文字を見て、なのはは顔をひきつらせた。
彼女の苦手な文系の教本だったからだ。

「えっとね、ここの問い2なんだけど……」

「え、ちょ、ちょっと待って！」

逃げるように店の奥へと駆けこんでいくなのは。
きっと電話で友人に聞きに行ったのだろう。
アリサと言っていたか。　彼女とは未だ面識はないが、なのはの友達なのだからきっといい子なのだろうとアリシアは思った。
とりあえず、小さな先生が戻ってくるまで算数の復習をすることにした。
カラン、とコップの中の氷が音を立てた。

秋。　もう一言加えるとするなら新学期。
夏の残暑を残しつつ、確実に季節は移り変わっていく。
建てられたばかりだの頃は染み一つなかったであろう、現在はクリーム色に色褪せてしまった小学校。　これが、アリシアが今日から通う小学校だ。
アリシアは今亡き母が買ってくれた淡い水色のワンピースを着て、背中に赤いランドセルを背負って教室へとつながる扉の前に立っている。
今日から担任となる教師がここで待つよう言ったのだ。
ドキドキと心臓の鼓動が速くなる。
この扉の向こうにいるのは３０人近い初対面の自分と同い年くらいの少年少女たち。
プレシアが仕事で忙しかったため家での留守番が多く、外に遊びに行ってもほとんどプレシアとふたりっきりだったアリシアには、同年代の者と接する機会が少なかった。
時々プレシアの仕事場に連れて行ってもらった時は他の職員に可愛がってもらったが、それはそこにいたのが皆大人だったからだ。
だが、この先にはあの時のように自分を可愛がってくれる大人はいない。
皆が平等に扱われる、特別扱いなどあり得ない世界。　アリシアにとって初体験の世界。
自然と、緊張の波が押し寄せてくる。
自分の格好はおかしくないかとなんども髪を結ぶ青いリボンをいじったり、金紗の髪を手櫛でといてみたり、どうも落ち着かない。

本音を言うのなら、なのはと一緒の小学校に通いたかった。
だが、アリシアが居候させてもらっている松田家に市立に通わせられるほどの余裕はない。
仕方なく――と言ったら傲慢だが――アリシアは公立に通うことにしたのだ。

「それでは、今日はみんなに新しいお友達を紹介します」

扉越しに教師の声が聞こえ、次に大きな歓声が聞こえてくる。
心臓の鼓動を静と大きく深呼吸する。
緊張が、少し和らいだ気がした。

「入ってきてー」

教師に促され、アリシアは扉をくぐる。
６０近い視線が自分に集中するのを感じる。
静まりかけていた心臓の鼓動が再加速する。
黒板の前まで歩き、自分を見る者たちに顔を向ける。
何人かが、感嘆の声を漏らしたような気がした。
息を吸い込み、ずっと前から考えていた自己紹介の言葉を口にする。

「今日からこのクラスの一員になる、アリシア・テスタロッサです！
よろしくお願いします！」

「たっだいまー！」

「おう、おかえり。　学校、どうだった？」

「もう友達５人もできちゃった！　みんな良い人たちですっごく楽しい！」

「そうか、そりゃ良かった」

「男子から告白までされちゃったー？」

「……」

「あれ？　あれれ？　嫉妬しちゃったー？　もーう！　怜治のシスコーン！」

「……」

その後、怜一郎が帰ってくるまで頭をグリグリされるアリシアであった。

冬。　ストレートに言えば１２月。

この月の終わりにはクリスマスというイベントがあるらしい。

本来はとある宗教の教祖の誕生祭らしいが、この国にはそんな宗教的な雰囲気は感じられない。

その国民の大多数がその宗教の教徒ではないというのに不思議な国だと思ったが、アリシアも特に何かの宗教に入っているわけではないので深く追求はしないでおく。

友人から聞いたところ、クリスマスというのは家族でケーキやチキンを食べ、いい子のところには寝ている間にサンタクロースという老人が空飛ぶトナカイにソリをひかせてプレゼントを配りに来るという。

魔法技術の無い世界に空飛ぶトナカイなどいるのだろうかと不思議に思う一方、子供が寝ている間に家に忍び込むというのは法的にも民家の警備体制的に良いのだろうかと疑問に思う。

この国に住んで半年以上経つが、まだまだ驚く話題が尽きることはない。

ちなみに、松田家の男どもは１０年ほど前からそんなものに関心はなくし、特にいつもと変わりないらしい。　が、今年からはアリシアが加わったからか、１０年ぶりにクリスマスらしい１日を過ごすことになった。

そのため、アリシアは今海鳴市の商店街にいる。　クリスマスケーキの予約のためだ。

松田家ではアリシアが主役になるらしく、よってケーキもアリシアの好きな物を選べるのだ。

だが、何でもいいと言われると却って迷うもので、先ほどから３０分以上店を渡り歩いているのだが一向に決まらない。

なのはの両親が経営している喫茶店でもケーキの予約を受けているらしく、最終的にはそこでオススメを聞けばいいのだが、どうせなら自分の眼で決めたい。　欲を言えば、義兄とその祖父にも喜んでもらえる物を買いたい。

そんな家族想いの心が、余計に決断を迷わせる。

「きゃん　あい　へるぷ　ゆー？」

「え？」

いきなり英語で話しかけられ、素っ頓狂な声が出た。
いつの間にいたのだろうか、車イスに乗った茶髪の少女が自分を見上げていた。
当然アリシアはこの少女の事を知らない。

「えっと……」

「あ、日本語しゃべれたん？
なんや、いきなりごめんな。　外国の子が買い方分からんと困っとる思て声かけたんやけど……」

そう言われてアリシアは自分がケーキ店の前で立ち止まっていることに初めて気付いた。
ショーウィンドウには商品であるケーキの見本が陳列されていた。

「ううん、ありがと。
困ってるというか、迷ってるのはホントだけど買い方は分かるよ」

「？　買い方分かるんなら何に迷っとるん？」

「うーんとね。　実は……」

後にして思えば、何故この時初対面の少女にこのようなことを聞いたのだろうか。
そして、こんな問いに対する少女の提案を何故実行したのか。
きっと、この時からアリシアはこの車イスの少女が掛け替えのない友人の一人になることを、どこからか感じ取っていたのだろう。

「……それで、お前の選んだのがこれか」

「うん。

これだけあればみんな一つくらい好きなものがあるでしょ？」

「ホール型じゃなくて八分の一カットを八つ、しかも全部別物か。

確かに、これならひとつくらい満足して食べられるだろうよ」

三人とも、それぞれ自分の好みのケーキを取り、皿に乗せる。

こうして、少女の初めてのクリスマスパーティが始まった。

これは少女にあり得たかもしれない何気ない日常。

それでも、彼女はこの日常に幸せを感じ、噛みしめて生きていくだろう。

少女の二度目の人生に幸あらんことを。

了

ＩＦストーリー　あり得たかもしれない少女の日常（後書き）

試験的に書き方をちょっぴり変えてみました。
こっちの方がいいという人は連絡を

キャラ設定　というか考察？（前書き）

設定というか、作者がこんなイメージを持って書いてますみたいなもの。
そんなモンにキョーミねーＺＥ☆　な方はあとがきだけ目を通して下さい。

キャラ設定　というか考察？

松田怜治（１７）
　イメージカラー：黒
　魔力光　　：紺色
　デバイス　　：スタンピード、エリシオン、今後さらに追加予定あり
　魔力ランク　　：ＡＡＡ－
　その他　　：変換資質『風』、希少技能有り
魔法少女リリカルなのは☆Ｔｈｅ　Ｒｉｄｅｒ☆（以下Ｒｉｄｅｒ）における主人公。　日本人らしく黒髪黒眼。
性格のモデルとしてはＴＯＶのユーリ・ローウェル、とある魔術～の上条当麻。
外見もこのふたりの中間くらいだと考えてくれればＯＫ。
「テメェのやってることは一から～」は一応決めゼリフ。　狙うぜ流行語大賞。
背丈は恭也より少し低いくらい。
最初の頃は『少年』か『青年』かごちゃ混ぜにしてたけどカラーリングが被るクロノと区別するために『青年』で固定。　意味的には問題ないはず。
以前もあとがきで書いたとおりＲｉｄｅｒのモチーフは仮面ライダーに非ず、蹴られた人は爆発しません。
最強系キャラではなくあくまで既存キャラ達と肩を並べていけるくらいの強さ。　そのせいかヒロインメンバー相手にはほぼ無勝。
それでいいのか主人公……。
なのはのような天性のセンスはなく、怜治自身は魔力が高いだけであとはデバイスが優秀だから戦えるという設定。
術式に関してはミッドでもベルカでもない（あえて言うならシェルコ式？）。　詳しいことは今後書く予定。

取りあえずあんまり他の二次で見ないのにしようということで無印編から高校生、デバイスがデカイ・複数所持と色々やってみた。
なのはが後衛型ならコイツは前衛型、フェイトが高速機動だがなら重戦車系、クロノが委員長キャラなら不真面目キャラ。　とにかくいろんなキャラと対になるような感じでやって行ったらこんなキャラに……。
希少技能に関しては今後のネタバレもあり得るためここには載せず。念のため言っておくが、イケメンに非ず。
しかしこの主人公、３４話やってて勝てたのがクロノとプレシアとグレアムとすずかだけ……。
主人公補正って大事だね！
名前の由来は自動車メーカー『マツダ』。　怜治は数字変換して０２、二世とか第二世代とかそんな意味を込めて。
イメージＣＶは鳥海浩輔さん

スタンピード
　イメージカラー：黒
　基本形態：バイク（全力出せばフェイト並みに速いという隠し設定が……）
　第一変形：鉄拳（戦隊物にでる巨大ロボの腕的な）
　第二変形：大剣（モンハンやゴットイーターの大剣を想像してくれればおｋ）
　第三変形：砲撃（上と同じくで、こっちはガンランス）
　第四変形：騎士
　第五変形：竜人
　　今後も追加予定あり
　怜治のデバイス。　適当にバイクの形を想像してくれればおｋ
戦闘訓練してない怜治がまともに戦えてるのはコイツのおかげ。
デバイスの性能的にはトップクラスで、事実コイツがいない戦闘

では九割苦戦してます。
燃費の悪さが唯一にして最大の弱点。
変形維持にも魔力を常に消費続けるため半端な魔力量だとあっという間に空に。　怜治が結構な頻度で魔力切れ起こすのもこれが原因。
一応、原動力は魔力オンリーなため排気ガスは0、うーんエコロジー。
名前の由来は本編でも言ったように暴走を意味する『ｓｔａｍｐｅｄｅ』より。
イメージＣＶは柿原徹也さん

アリシア・テスタロッサ（９歳相当）
本編では死亡、ＩＦではＩＦにおけるメイン。　ＩＦストーリーはたいてい彼女中心に展開します。　だからこの位置に。
本編で生存させなかったのはあの蘇生の方法だと怜治が危ないということとＡ’ｓ編で特に出番を与えてやれる気がしなかったから。
死んでる期間合わせたら〇〇歳とか言っちゃダメ。
あー映画には泣いたな……。
Ｒｉｄｅｒにおけるメインヒロイン候補その一。

窪田鉄平（１７）
イメージカラー：赤
魔法資質に関しては今後ストーリー上で書きます。
怜治の悪友その一。　なのはでいうところのアリサポジション。
怜治より背が低い。
赤毛って言うけど真っ赤というよりヴィータっぽい赤。　こだわるなら朱色。
モデルはちょっと軟派な青年エリオ君。

名前の由来はユンボやトラクターと言った建設機械が主要な『クボタ』より。
イメージＣＶは中村悠一さん

本田正義（１７）
イメージカラー：茶
鉄平と同じく魔法資質は後述。
茶髪にメガネの怜治の悪友その二、なのはでいうところのすずかポジション。怜治より背が高い。
他２人のストッパーであり加速装置。
実は最初は女キャラとして出そうとしていた。でも主人公の友人で女ってのは変なフラグ立ちそうだったんで却下。大人しめなのはその名残。
モデルは特になし。
名前の由来は本田技研工業株式会社の通称『ホンダ』より。あとソフトバンクの孫正義。
イメージＣＶは石田彰さん

松田怜一郎
イメージカラー：灰
幻想を殺しちゃった（イマジンブレイク）怜治の祖父。魔力資質無し。
伝説の三提督と同い年という設定で、彼らの年齢が不明なためこちらも明記せず。
管理局ではかなりの有名人。
地元の老人会主催の温泉旅行が楽しみで、海鳴ではそれなりに人望あり。
子どもに優しく大人に厳しい。怜治のことも態度には出さないが一応心配している。

まだまだ隠し設定テンコ盛りだけどそこは今後明かしていけるかも？

モデルは「はじめの一歩」の鴨川源二。

名前の由来は怜治と同じく自動車メーカー『マツダ』。　数字変換して０１、初代とかそんな意味を込めて。

イメージＣＶは内海賢二さん

ここから先は既存キャラ←　残念ながら、教会組はＳｔＳ編に回します。

一期　無印編

いま読み返してみると結構ひどいところが……。

でもヘタに書きなおすとどっかに矛盾生みそうなので放置。

高町なのは

本来の主人公。　でもＲｉｄｅｒはオリ主なため出番がガリガリ削られる。

後衛型は動かしにくいからさらに削られる。　一期はフェイトがメインだからまたまた削られる。

フェイト戦とか闇の書戦がなかったらホント空気になってたなこの子……。

余談だが、作者が「リリカルなのは」にハマったのはなんかの雑誌でＦｏｒｔｈバージョンのなのは（２５歳くらいのだっけ？）を見て、

「わ、この人かっけー！」　とか思ってアニメを見始めたのがきっかけ。

そうです。　作者はなのはファンになって一年経ってないのです。

フェイト・テスタロッサ
　みんな大好きフェイトちゃん。　作者も大好きです。　中の人も含めて。
　声優に興味がなかった作者にスタッフロールを目に通すようにしてくれた張本人。
　一期と二期での微妙な変化が表現できてたらうれしいなと思う。
　戦闘スタイルが接近戦なんで戦闘シーンを書いてて結構楽しいキャラ。
　Ｆｏｒｔｈでなんかおばさん臭くなった気がしてちょっと残念。
　Ｒｉｄｅｒにおけるメインヒロイン候補その二。

ユーノ・スクライア
　淫獣なんて呼ばないで！　ラッキースケベと言ったげて！　……あれ、あんまり変わんねぇ。
　Ｒｉｄｅｒはアニメ本編で活躍できなかったキャラを活躍させるのがコンセプトなのにいまいち活躍させられてない人その一。
　ユーノに関しては彼が一回でも攻撃魔法使うシーンがあればいろいろそこから広げられるんだけどなー。　いっそオリジナル魔法つくって無理やり戦わせるか？

アルフ
　活躍させられなかった人その二
アルフに関しては一応今後に期待。　ユーノと違って十分ガチンコできるキャラだからやりようはある。

クロノ・ハラオウン

ＫＹなんて言わないで。
規則に厳しい委員長系は結構好きなキャラ。
怜治とは口に出さずとも互いを認め合える仲になってもらいたい。
ＳｔＳ編じゃ出番がほとんどないけどどうにか作ってあげたいなとか思ってる。
他の二次創作だと偶に扱い酷い時が合って剣静ちょっと涙目。
特に語ることはないとエイミィはカットする。

リンディ・ハラオウン
剣静が思うなのはシリーズ最強キャラその一。
構想当初は怜治ＶＳリンディとか考えてたけどなんかこの人には勝っちゃダメだと思いカット。
きっと戦う時にはなのはもビックリの魔力砲をぶっ放すのだと剣静は信じてる。

プレシア・テスタロッサ
剣静が思うなのはシリーズ最強キャラその二。
体調が万全だったら怜治は勝てなかったと思う。
劇場版の最期のシーンで涙腺が崩壊したのは俺だけじゃないはず。
アリシアと同じく、Ａ’ｓ編で出番なさそうだから原作通りデッドエンドへ。
プレシアの人生とは常にアリシアと共にあるが故の選択。
ここからは剣静独自の見解だけど、フェイトへの仕打ちは仕方ないと思う（決して今問題になってるＤＶを擁護するつもりはないけど）。
仮に、ある日自分の家族が姿形はそのままでもまったくの別人になったとしたら俺は今まで通り接するなんてできないと思う。　家族を避けるようになるだろうし、家族面されることに苛立ちすら覚

えるかもしれない。
プレシアもそれと同じでフェイトをアリシアと同一視することも新しい娘と見ることもできなかったんだろうなと思っている。
きっと、同じプロジェクトFで息子つくったモンディアル夫妻とは相容れないだろう。
人はおもちゃじゃないんだ。全く同じものを身繕っても内に宿るものが違うんだから同一人物だなんて思えるはずがない。よく分からない人はＴＯＡをプレイしよう。
プレシアが望んだのは新しい娘でもアリシアの代わりでもない。
五年間を一緒に過ごしたアリシアだったのだから……。とか色々語ってみる。
これを読んで異論を呈したい人もいるでしょう。お前は何を言ってるんだと声を荒げたくなる人もいるでしょう。ですが、剣静とは違う考えを持つ人もいるのは当然で、人の数だけ解釈があります。だからここは「へー、この人はこう考えてるんだ。へー」と軽く流して下さい。

二期　Ａ’ｓ編。
剣静の力不足から１３話にまとめきれませんでした……ｏｒｚ
バトルより日常シーンが苦手というまさかの弱点を自覚。
キャラも増えたため視点がコロコロ変わってしまいちょっと読みづらかったかも？
今後の課題に。

八神はやて
Ａ’ｓ編におけるメインのはずなのだがほとんど蚊帳の外。

彼女の活躍は今後に期待して下さい。
しっかしこの子の方言はめんどくさい。
お笑い番組とか見て勉強してるがどうも違和感が……。
そういやA’s編も映画化されるらしいがバリジャケのデザインはまた一新されるんだろうか……。

リインフォース。
PORTABLE編をやりたいがために生存。（チョA’s編のラストシーンでじーんときてもらえたら本望。
戦闘力は最強クラスのはずなのだが今はひどく弱体化してます。
キャラクターとしては薄幸ネガティブキャラと勝手に認定。

ヴォルケンリッター（シグナム・ヴィータ・シャマル・ザフィーラ）
すみません、一括します。
怜治に轢かれたりシャマルの料理を無理に食べたり結構苦労させてしまったシグナム。
ストーリーをめんどくさい方向にブン投げてくれたヴィータ。
特に出番の無かったシャマル。
最後の最後で魅せ場を創ってやれたザフィーラ。
だいたい予定通りに動かすことができました。
ヴォルケンズはRiderでは少ない怜治より年上戦闘キャラなのでそれが怜治にどう影響をもたらすのかを見守ってもらいたいです。
余談ですが、剣静は放送終了後のアニメをDVDなどで見る前にwikiでホントに面白いか確認する癖があります。　その際、シグナムとヴィータの欄を読んだ時「美人」「少女」という部分を見逃したため実際に見るまで物凄いゴツイ男だと思っていました。
マジでごめんなさい。

月村すずか
　アニメ一期を見た際、剣静が「あれ、このアニメで一番かわいいのこの子じゃね？」と思った子。
　バーニングアリサは知ってるけどこの子が魔法少女化したのあんまり見ないなと思い魔法少女化。
　本家とらハじゃいろいろ設定あるらしいけど剣静は未プレイ・未視聴のため完全無視。
　Ｒｉｄｅｒにおけるメインヒロイン候補その三
　アリサはほとんどアニメ通りのため割愛。

ギル・グレアム
猫どもはカット。
プレシアと違って特に弁護する気になれないのは何故だろう？
　剣静がいい年こいて青臭い理想論でも考えているのか、それとも犠牲になるのが美少女だったからか……。　うん、きっと後者だ。
　彼は正義感が強く、誠実で、悪を許さず、厳罰を持って対処した。
　故に一点の汚れも見逃せなくなってしまったのだ……。　とか言ってみる。
まぁ正義感が強い故に間違ってしまったということで。　みんなあんまり責めないでやってください。
　感想にて彼の処罰に関して色々考え送ってくれた方々がいましたが剣静はそこまでひどい罰にしようとかは考えてません。
　彼のやったことへのなのは達の反応もビンタ一発くらいで済むでしょう。　リリカルなのはの子どもたちはみんなそこらの大人より大人びてるからね。

キャラ設定　というか考察？（後書き）

この度、Ｒｉｄｅｒは二週間に一度、酷い時には三週間に一度というドン亀更新のなか、ついにＡ’ｓ編完結まできました。
これも読者の皆様の応援のおかげです。
文章の誤字脱字を逐一報告して下さった方々、心温まる感想を送ってくださった方々、本当にありがとうございました。
今後のＲｉｄｅｒの展開予定をお話しさせていただきますと、まずはＰＯＲＴＡＢＬＥ編。　つまりはＰＳＰ用ソフトで発売された「魔法少女リリカルなのはＡ’ｓ　ＰＯＲＴＡＢＬＥ　－ＴＨＥ　ＢＡＴＴＬＥ　ＯＦ　ＡＣＥＳ－」の方へ進みます。
その後はＳｔＳ編までの十年間を描く「Ａ’ｓ　ｔｏ　Ｓｔｒｉｋｅｒｓ」編を予定しております。

さて、ここから本題に入ります。
Ｒｉｄｅｒも３４話。　ＩＦも入れれば３７話になるでしょうか。
キャラクターも一通り出し終えました。
そこで、皆さまにアンケートを三つほどとりたいと思います。
どういう結果になってもＳｔＳ編には影響ないので気軽にお答えください。

質問１．「魔法少女リリカルなのは☆Ｔｈｅ　Ｒｉｄｅｒ☆」に恋愛要素は要るか？

1.　要るｏｒ欲しい
・タグに「恋愛」が追加されます。
・主人公とヒロイン一名が恋人関係になります。

2.　要らない
（テメェに恋愛の何が分かる！　〇〇ちゃんはオレの嫁！　ぶっちゃけＳｔＳのキャラの方が好き。な人向け）
・主人公が年齢＝恋人いない歴になります。
・ＳｔＳ編で新たに√ができるかもしれません。

質問2.　質問1で「要るｏｒ欲しい」を選んだ人へ。
主人公の恋人になるヒロインは誰がいいですか？　選択肢は三つ。

1.　サブからメインに昇格？　月村すずか√
・ＰＯＲＴＡＢＬＥ編後にすずかメイン（になるはず）のオリ編が開始。
・主人公のとんでも能力が明らかに！　でも分からくても特に問題はない。
・すずかの出番が多くなる。
・主人公にロリコン疑惑浮上
・違う！　ロリが好きなんじゃない！　ロリも好きなんだ！

2.　みんなのアイドル！　フェイト・Ｔ・ハラオウン√
・フェイトを含めてハラオウン一家の出番が増えます。
・主人公にロリコン疑惑浮上
・違う！　ロリが好きなんじゃない！　ロリも好きなんだ！

3.　少女のあり得たかもしれない幸せ　アリシア・テスタロッサ√
・ＰＯＲＴＡＢＬＥ編以降にまえがきでショートＩＦストーリー掲載。
・本編事態は質問1で「要らない」を選んだのと同じ。
・ＳｔＳ編終了後ダークＩＦ編開始。
・主人公に義妹好き疑惑浮上
・違う！　義妹が好きなんじゃない！　義妹も好きなんだ！

作者はユーなの派なので、なのは√はなし。　まぁ二人をくっつけるつもりもないけど。
はやて√はハーレム化しそうなんでなし。
エイミィ√はクロノが独身になっちゃうのでなし。

質問3.　松田怜一郎の過去編が読みたいですか？
1.　読みたい
2.　読みたくない。

A's終盤で、怜治の祖父母が元管理局員だったことが判明しました。
当然、怜一郎が魔法に出会うきっかけというものがあり、話も一応考えてあります。
そんな長編になる予定ではなく、3~5話で片付くかなと思っております。
オリキャラも大量には出ない予定です。
外伝扱いのため、本編には影響ありません。

投票方法は感想、活動報告へのコメントのどちらか。
お１人様一回のみ投票可能とさせていただきます。
期限は一カ月もあれば十分でしょう。
３月１７日いっぱいとさせていただきます。　日付が変わった瞬間締め切りとします。
では皆さま、投票をお待ちしております。

第35話　闇の欠片（前書き）

注1．一部設定の変更有

注2．基本主人公視点なため一話ごとの登場人物が少ない

注3．アホの子など知らん

以上を注意してお読みください。
あと、サブタイを変更しました。　戸惑わせたらすみません。

第３５話　闇の欠片

そこには、何もなかった。　ただ虚無の空間が広がる暗い世界。
だがやがて、たった一つの闇が生まれた。
黒の中に黒が生まれたというのに、その闇ははっきりとその存在を感じさせていた。
闇はブラックホールのように周囲の光を、魔力の残滓を取り込み形を取った。
形を取るとソレは、今度は意思と感情が生まれた。
感情が生まれると、憎悪が、嫉妬が、憤怒が、絶望が、悲哀が、恐怖が。　あらゆる負の感情が意思を埋め尽くし、意志とした。
そしてソレは思い出す。　ソレが受けたあの痛みを、苦しみを。
ソレは狂喜した。
今ここに存在しているということは、生きているということは、自分を屠った者たちに復讐ができるということだからだ。
ソレは目的を果たすための準備に取り掛かる。
意志を核とし、力を生み、力を律するための理性が生まれた。
たった一つの形を取ったソレが別れ、また別の形を成していく。
新たに成したその形は、人の姿だった。　なんの皮肉か、先にソレを滅ぼした物たちの姿を真似たものだった。

「……憎い」

黒翼を背負った少女の姿で、ソレは呟いた。

「憎い、憎い、憎い、憎い、憎い、憎い、憎い、憎い、憎い、憎い、憎い、憎い、憎い、憎い、憎い、憎い、憎い、憎い

憎い憎憎いいいいいいいいいいいいいいいいいいいぃぃぃぃぃぃぃ！！！！！」

月光に似た銀髪を振り乱し、翡翠の瞳に憤怒の劫火を燃やしてソレはどす黒い言葉を吐き続ける。

ありったけの呪詛を、ありったけの侮蔑を、ありったけの悪意を唱え続ける。

そうでもしなければ、その身に刻まれた苦痛に喰い殺されると言わんばかりに。

「…………王」

黒い服を纏った少女が口にした言葉に、ソレの声が止んだ。

頭が冷えたのか、瞳の劫火が消え、代わりに煌煌とした意志が宿り始める。

それを確認し、少女はもう一度呼びかける。

「王。　指示を。

私たちは彼方（あなた）の剣であり大筒。

どうか、私たちを導いて下さい」

「…………我が望みは、戻ること。

また再び、あの闇に包まれ悠久の時を旅すること」

王の言葉に同調し、頷く。

「そのためには足りぬものがある。
奪うのだ。　闇を統べる王の玉座を自ら棄てたあの子烏から、闇の書の力を……！」

王は闇色の剣十字を突き立てる。
そこから沼のように闇が広がり、その中から幾人もの人型が這い出てきた。
これは、王がかつて中枢を司っていた闇の書の力の一部。
蒐集したリンカーコアの持ち主の記憶を再生させる力。

「さぁ行け。
闇の書の復活のため、贄を集めるのだ！」

人型が我先にと駆けだしていく。
闇の縛鎖が伸びていくようだ。
闇を拒み、光に生きることを決めた裏切りの同胞を捕えんと
ゆっくりと……
ゆっくりと……
伸びていく。

魔法少女リリカルなのはＡ’ｓ　☆Ｔｈｅ　Ｒｉｄｅｒ☆　－ＴＨＥ　ＢＡＴＴＬＥ　ＯＦ　ＡＣＥＳ－
第１話　闇の欠片

夜天の主と最後の守護騎士が再開を果たしてから、早一週間がたっ

た。

12月とはイベントの多い月でクリスマスが過ぎたらすぐに大晦日である。　数時間後には新年を迎えることになる。

年賀状やらおせちやらの準備で忙しく、師走という呼び方もある月だが、松田怜治にとってはそうでもない。

携帯電話が普及した昨今、年賀状をわざわざ書く若者も少なくなってきている。　怜治もその一人で、適当にメールで済ますつもりでいる。

おせちなんて手間のかかる物をつくるモノ好きはなく、いつも通りの食事か百貨店にでも行って出来合いものを買ってくるのに納まってしまう。

そんな彼は今、アースラにいる。

怜治の目の前には亀裂が走り指一本で崩壊してしまいそうな杖と剣が一本ずつ、ポッドのような機械の中で鎮座していた。

それを怜治とじっと見つめるのは若苗色の髪にメガネをかけた白衣の少女と跳ねた髪が特徴的なエイミィ・リミエッタ、紫の髪に白いヘアバンドをつけた月村すずか。　そして怜治の祖父である怜一郎だ。

「うーん、やっぱり難しいですね」

白衣の少女が申し訳なさそうに言った。

彼女の名前はマリエル・アテンザ。　通称マリー。

エイミィの後輩で、魔導師用の装備のメンテナンスを担当している。　なのはのレイジングハートとフェイトのバルディッシュにカートリッジシステムを組み込んだのは彼女だ。

それがきっかけとなったのか、ヴォルケンリッターたちのデバイスのメンテナンスや調整を担当している。

そんな彼女が今やっているはグレアム戦の最中に損傷してしまったエリシオンと闇の書の闇を倒す際に損傷してしまったフランベルグ

の修理だ。
だが、どうやらその作業は難航しているようだ。

「どちらも外装も中の機関部もボロボロです。　正直、修理すりより新しいものをひとつ造った方がいいと思います」

「そうか……」

「ご、ごめんなさい。　お婆さまの形見をこんなにしてしまって……」

「気にすることはないさね。
もともと古いデバイスだったんだ。　最後に一華咲かせてやれただけ、よかったよ」

頭を下げるすずかの肩を怜一郎が叩く。
確かに、エリシオンは２０年以上、フランベルグにいたっては６０年以上前に造られたデバイスだ。
やはり古いもの、特に使い込まれた物は消耗が激しく、さらにあの激戦によるダメージによって部品交換だけで済むレベルを既に超えていた。　本局勤めのメンテナンススタッフにもお手上げというわけだ。

「マリーじゃダメでも、怜一郎さんがやったらどうにかなるんじゃないんですか？」

「……どうにも過大評価されとるようじゃが、わしにもここまで酷いと手の施しようがない。　だが――――」

怜一郎の皺だらけの手が伸び、キーを叩く。

ふたつのデバイスの状態が映し出され、さらにキーを叩くと損傷個所がピックアップされていく。

「運が良い。　お互いにまだ使えるパーツを掻き集めれば、新しいのが一機造れるかもしれん」

「え……ああっ！　本当です！　これなら、外部パーツさえ揃えられればデバイスが一機造れます！」

歓喜の声をあげるマリエルに、怜一郎が頷く。

「エリシオンとフランベルグのパーツからできたデバイスなら、かつての担い手の遺志も少しは宿ろう。　それにほら、この二機ならできるのはミッド・ベルカの混合式（ハイブリッド）じゃろ？　八神の嬢ちゃんの杖を造るのにも役立つじゃろう」

「俺のデバイス、実験台かよ」

「文句を言うな。　言い換えれば、おそらく初の混合式デバイスを持てるということじゃぞ」

そんなこと言われても、未だ魔法世界における常識というものを知らない怜治には判らない。

とりあえず判ることは、エリシオンとフランベルグの修理は不可能で、代わりに二機を組み合わせてできる新しいデバイスが自分に渡されるということだ。

デバイス設計に関してはマリエルに任せようと、怜治たちは部屋を出ていく。
デバイスルームの扉をくぐったところで、クロノに渡された通信機が着信を知らせるアラームを鳴り響かせた。
通信機を取り、通信に出る。
展開したウィンドウに、まだ幼さの残る少年の顔が映し出される。

『怜治か？　こちらクロノだ』

深刻そうな声色に、怜治は眉根を寄せる。
どうやら厄介事のようだ

「どうしたクロノ。　新年のあいさつにはちょっとばかし早いな」

『相変わらずのん気だな。
今、海鳴市全域に謎の結界が発生しているんだ』

結界？　と怜治がオウム返しに訊く。
すると、ウィンドウが切り替わり映像が流れ始める。
夜の海鳴市内。
いつもと変わらぬはずのその風景には、確かに違和感を覚えた。

『最初は一つ二つだったのが、今は二十を超える数にまで増えている。
調査にアースラスタッフを向かわせているが、君も行ってくれ』

「俺、まだ管理局員になってないはずなんだけど？」

その通りだ。
怜治は闇の書事件の際の本局を少々ボロボロにしてしまったため、

候補生から外されてしまったのだ。
フェイトのように嘱託試験も受けてないから、今の彼は全くの一般人である。

『そうだな。　だから現地協力者として向かってもらいたい』

「……ってことはだ。　別に断ってもいいんだな？」

『ああ。　だがその場合は君のデバイスの修理費用を請求するかもしれないが』

痛いところを衝かれた。
デバイスは高価で、その修理費も怜治がどうやっても出せる額ではない。
この返しを予想していなかったわけではないが、怜治は小さく舌打ちした。

「…人の足元見やがって。　良い性格してるよお前」

『褒め言葉として受け取ろう。　それで、返事は？』

「解ったよ。　どうせ暇人だ。　行ってやるよ」

通信を切り、怜治はスタンを連れて海鳴市へと向かった。

大晦日に賑わう海鳴市上空。
謎の結界によって外界との繋がりを断たれた空間の中で戦いが繰

り広げられていた。

「――――つ、ぐあっ！」

男の悲鳴が木霊する。

彼はアースラのスタッフで、闇の書事件時は捜査チームのリーダーとして動いていたギャレットだ。

突如発生した結界の調査に来たのだが、何者かに襲撃を受けてしまった。

「なぜ……。　なぜあなたがこんなことを……」

否、何者かという表現は正しくない。

なぜなら、彼が戦っている相手はギャレットが知っている人物だったからだ。

乱れた息を整えながら、真っすぐに相手を見据える。

艶のある桃色の髪と同じ色の騎士服。

凛と美しく整った顔。

白刃煌めく長剣は魔剣の二つ名を持つ彼女の騎士精神の結晶。

「なぜなんですか――――――――――シグナムさん！！」

「――――――――」

剣の騎士は無言。

ただ剣の柄をさらに強く握りしめるだけ。

「――――――――――ッ！」

シグナムから発せられた殺気に、ギャレットは弾けるように杖を

構え直す。
彼女がこんなことをする理由は不明。話し合いの余地もなさそうだ。
このままただやられるのを待つほどギャレットは大人しくない。
相手が攻勢に打って出るなら、迎え撃つまでのこと。

「弾丸（スフィア）、――――起動（セット）」

魔力を魔法杖に注ぎ、デバイスコアに登録された術式プログラムを起動。
光輝く魔弾が七つ、円環を描くように設置される。
ギャレットはクロノ達のように高い魔力資質を持ってはいない。
だが、一撃でやられるような魔導師が、捜査班のリーダーになど任命はされない。
シグナムが空気の足場を蹴って突撃すると同時に魔弾が疾走。
同時にギャレットは後方へと飛ぶ。
シグナムは対人戦、とりわけ接近戦特化のベルカ式だ。彼女相手にクロスレンジは自殺行為に等しい。よって、距離を取ることが一番の得策。
放たれた弾丸は空気を切り裂き、呻りをあげて剣の騎士に肉迫する。
シグナムはレヴァンティンを一閃。
その白刃と生じた剣圧によって先陣を切っていた魔弾三つが切り裂かれ、光の塵となって消えた。
後から来た二つを体を回転されて回避。
魔弾があさっての方向へと飛んで行った。
残りの二発がシグナムに直撃。だが、彼女の鎧に阻まれダメージを与えるには至らなかった。
シグナムは何事もなかったかのように、弾丸となって突貫する。
この間、三秒にも満たない攻防。

そして、ギャレットはすでに次の手を打っている。
彼の杖先に展開するのは魔力で形成した刃。
それをシグナムに向け、弾丸のように射出した。
先ほどの魔弾とは比べ物にならない速度で魔力刃が疾走していく。
だが、たった一発の、直線的な攻撃など騎士の称号を持つ彼女には通じない。
進路を変更し、射線から外れることで容易に回避して見せた。
そんなことはギャレットも分かっている。　今のあくまで陽動にすぎない。
ギャレットの杖から渾身の魔力を込めた砲撃魔法が炸裂した。
シグナムの標的がギャレットである以上、彼女は必ずこちらに向かってくる。
ならば、真っ向から力で抑え込むまで。
先ほどの攻撃はその時間を稼ぐためのものに他ならない。
光の奔流がシグナムを呑みこまんと咆哮する。

「――――レヴァンティン」

シグナムの言葉に、長剣の柄がスライドし、弾丸を一発吐き出した。
カートリッジ。
一時的に魔力を高めるベルカ式魔法の最大の特徴。
圧縮魔力がレヴァンティンに満ちていく。　それをシグナムは炎熱に変換。
炎の魔剣の名にふさわしい、煌めく炎が刃を包み込む。

「紫電、一閃！！」

炎を纏った刃が、光の奔流を粉砕した。
塵となった魔力が粉雪のように散っていく。

「な――――に？」

ギャレットは愕然とした。

別に、今ので倒しきれると思っていたわけではない。　しかし、自分の渾身の一撃をああも容易く打ち破られるとは思わなかったのである。

彼の奮闘をあざ笑うかのように、美しい白刃がギャレットの胸を貫く――――――――――

「――――発射（ファイア）」

――――ことはなかった。

シグナムの頭に何かが命中し、彼女の身体が大きく回転しながら左に逸れていった。

そして代わりに、黒いコートに身を包んだ青年がギャレットの前に現れた。

バイクに跨り、スコープの付いたライフルを手に持っている。

「大丈夫か？　えっと……ギャラハット？」

「……ギャレットだ。　いい加減覚えてくれ、怜治君」

悪いね、と怜治は謝るがギャレットとしては煮え切らない。

助けてもらったのだからお礼を言うつもりが、彼のせいでその気持ちが薄らいでしまった。

とはいえ、助けられたことに変わりはないのだからお礼は言っておくべきだろう。

「ありがとう。　助かった」

「どういたしまして。　……っと、なんでアイツとバトる羽目になったんだ？」

「判らない。　私がこの結界に入った時にはすでに彼女はいて、私を見るや襲いかかって来たんだ」

ふーん、と怜治はシグナムに目を向ける。
突然の奇襲にも剣の騎士は慌てず、剣を斜に構えてこちらを見据えている。
どうやら、状況を観察する程度に冷静ではあるようだ。
だとすると、何故シグナムがこんなことをするのか益々判らなくなる。

「念のため訊くけど、アンタ、アイツが怒りそうなことした？　例えば……胸揉むとか」

「……君は、私にどういう印象を持っているんだ」

「なるほど……。　となると、残る理由は八神絡みか？」

『だったら、早急にはやて嬢と連絡を取る必要があるな。　ヴォルケンズを止めるには主直々の言葉が一番だ』

「そうだな。　……ギャレット！」

声をかけながら怜治は前に出る。
シグナムとの戦闘に合わせるため、スタンを大剣形態（ブレイドフォーム）に変形させる。

「アイツは俺が止めとくから、アンタはここから出て八神を呼んで来てくれ。　お前んとこの騎士が大暴れしてるってよ」

「ああ、了解した！」

ギャレットが駆けだす。

逃がすものかと襲いかかるシグナムの刃を、大剣で受け止める。

「――――ッ！」

「シカトなんて冷たいな。
アンタとまともにやり合うのは初めてなんだ。　じっくり楽しもうぜ？」

剣を弾き、シグナムは距離を取る。

炎が刃を舐めるように包み込み、彼女の周りを茜色に染め上げる。

対して、怜治は自身の魔力を気流として風に変換し、スタンに纏わせる。

「――――――――」

「――――――――」

両者同時に突撃する。

蒼く輝く風剣と、茜に輝く炎剣がぶつかり合い、炸裂した。

背後から聞こえる爆音に身を震わせながら、ギャレットは結界から脱出した。

自分より若いものに戦闘を任せること、自分の情けなさに怒りを覚えながら、ギャレットは今自分にできることを為す。
通信機を取り出し、八神家に連絡を取る。

『はい、もしもし。　八神ですけど』

数回のコール音の後、はやての顔がウィンドウに映し出された。
家族団らんの最中だったのか、はやての背後からは賑やかなテレビの音が聞こえる。
すぐさま、ギャレットはシグナムの事を伝える。

「八神さん！　こちら、アースラスタッフのギャレット。　シグナムさんが大変です！」

だが、当のはやてからの返答は、

『え？　シグナムやったら今、わたしの目の前にいますけど』

「――――――――――は？」

体と共に、思考が急停止した。

風と炎がぶつかり合う。
その度に飛び散るのは火花ではなく衝撃波と轟音。
怜治の風がシグナムの魔力の鎧を斬り付け、シグナムの炎が怜治の髪を焦がす。

剣を弾き、回転して距離を取る。　そして、すぐさま次の攻撃に移る。
魔力を腕に集めて筋力を強化。　風を纏った大剣を、剛力を以て振り下ろす。
シグナムは剣を横にして難なく受け止める。
そのまま踏み込み、大剣をなぞる様に滑らせてヴァンティンで切落す。
襲いかかる長剣に対して怜治はすぐさま踏み込み、カウンターで拳を腹に叩きこむ。
シグナムは無音で《精神甲冑（パンツァーガイスト）》を発動。
騎士を覆う、魔力で構成された防護フィールドが怜治の拳を防ぎきった。
雷鳴の如く放たれた膝蹴りが怜治の顎にヒット。
脳が揺れ、視界が一瞬ぼやける。
追撃の逆胴をなんとか大剣で防ぐが、腰の入っていない防御に意味はなく、体が大きく弾き飛ばされた。　風が大剣から消えていく。
空中をバウンドしながら、素早く体勢を立て直そうとするが、まだ脳が揺れている。
その隙を逃すほど、剣の騎士は甘くはない。
すでに彼女は怜治をレヴァンティンの射程圏内に収めていた。
炎剣を振り上げ、渾身の力で振り下ろそうと発せられる殺気が語る。
怜治はなんとか防ごうと大剣を振り上げようとして

「（やめろ。　そのまま、右にかわせ）」

届いた念話に言われるがまま、右に全身を傾けた。

「――――ッ！」

瞬間、一迅の烈風が駆け抜けた。
それに驚いたのはシグナムも同じだ。
即座にレヴァンティンで烈風を受け止めようとしたが、暴風の牙は魔剣を難なく砕き、甲冑を貫通して剣の騎士を朱に染め上げた。
シグナムの胴を貫いているのは一本の矢だった。

「……が、あぁっ……！」

苦痛の呻きとともに鮮血が吐き出された。
シグナムの美貌が苦痛に歪められ、口元を汚す赤が彼女を悪鬼だと錯覚させる。
シグナムがもう戦えないと判断した怜治はそのまま後ろを振り向く。

「――――――――」

そこには、重弓を携えた、もう一人のシグナムが立っていた。
となると、騎士を貫いたのは彼女が使う魔法の中で最高の破壊力を誇る直射型射撃魔法、《烈風の隼（シュツルムファルケン）》だろう。
怜治は目を丸くして驚き、血まみれのシグナムをもう一度見て、またもう一人を見て、

「……双子？」

「違う」

斬り捨てるようにもう一人のシグナムが答えた。
重弓を長剣に戻し、鞘に納めて怜治と肩を並べる。

「ギャレットから連絡を受けて来た。

私がお前と戦っている、とな……」

シグナムが顎で血まみれの自分を指す。
ソレは大量の血を失い、顔色が蒼白になっていた。
もがく様に手を伸ばす。
――――ぱきり、とその手に亀裂が走った。

「――――ッ！？」

崩壊は一度始まると止まりようがなかった。
怜治たちが何かする前に、剣の騎士が石膏の彫像のように白くなり、全身に走った亀裂から砕け散る。

「あ、ああ……っ！」

光の塵となって消えていくその散り様は美しく、同時にひどく儚いものだった。
剣の騎士の消滅と共に、結界が解除された。
異質だった空気が消え去り、いつも通りの冬の空気が頬を撫でる。

「……何だったんだ？　今の……」

「闇の書の欠片。　だそうだ」

「闇の書の欠片？
……っていうか、お前は本物なわけ？」

大剣を向けられ。シグナムの眉が不満気に歪む。
だが、それも一瞬。　すぐに平静を整えて口を開いた。

「確かに、私が本物であるとお前に証明する手段はない。
だが、私はお前に敵意は持っていない。　それだけでは不満か？」

数瞬考えた後、怜治は切っ先をシグナムから逸らした。

「……いや、十分だ。　助けられたわけだしな。　疑って悪かった」

「気にするな。　私も、お前の立場はそうする」

和解が成立したところで通信が入る。　ウィンドウが開き、ユーノの顔が現れた。

『怜治さん、シグナムさん。　大丈夫ですか？』

「問題ない」
「同じく」

『良かった……。　えっと、シグナムさんはもう聞いてると思いますけど、怜治さんのためにももう一度説明します。
今街の中に発生している結界は闇の書の闇の残滓です。
消えずに残った小さなかけらが、記憶や魔力を集めて、再生しようとしています」

「ってことは、さっきのシグナムは……」

「過去の私……少なくとも、主はやてに出会う前の私ということだ」

なるほど、と怜治は納得する。
過去の記憶から再生されたというのなら、全く同じ容姿と魔法を使ってもおかしくはない。

「でもよ。　闇の書の防衛プログラムはアルカンシェルで蒸発させたんだろ？　なんでまだ再生機能が残ってるんだ」

『それはおそらく、私のせいだ』

新たにウィンドウが開き、リインフォースの顔が映し出される。

そこに映る彼女の表情はどこか暗い。

『書の管制プログラムである私の存在が、欠片たちの動きを活発にしているのだろう。

私を核にして、また闇の書を再生させるつもりなのかもしれない』

「……！　だったら、お前は家で大人しくしてた方がいいんじゃ……」

その通りだ。

闇の欠片の目的が闇の書の再生であり、そのためにリインフォースが必要となるなら彼女を前線から遠ざけるべきだ。

だが、彼女はすでにあの騎士服に身を包んでいる。

戦う気なのだとすぐに分かった。

『いや、これも私の責任だ。　私が、今度こそ決着をつける』

「あのなぁ……」

すべて背負いこもうとしているリインフォースに何か言おうとした怜治を、シグナムが手をあげて制した。

「すでにヴィータ達にクロノ執務官にテスタロッサ、主はやてに高

町も動いている。
松田。　お前も引き続き、闇の欠片たちの処理に当たれとのことだ」

「……了解。　しかし、顔見知りが出てきたら本物かどうかの判断がし辛いな」

「ああ、それなら問題はない」

シグナムが懐から白地に金の鳥の刺繍が入った腕章を取り出し、怜治に渡した。
よく見ると、シグナムの左腕にも同じものがあった。

「主はやてのアイディアだ。
これなら、本物が偽物かすぐに判る」

「なるほど、確かに」

すぐさま、右腕に腕章をつける。
怜治のバリアジャケットは黒基調のため、白い腕章は余計に目立った。

『……形になって表れているのは、かつて闇の書に蒐集された魔導師や騎士達の記憶と願いだ。
燃え残った願い、苦しんでいた記憶。　そんな負の感情が形を取っている』

「それはまた、面倒なこって……」

『頼めた義理ではないのだが……それでも頼む。

闇の欠片たちを……眠らせてやって欲しい』

「ああ、判った。
でもなリインフォース。　義理とか、そういうモンをいちいち気にする必要はねぇだろ。
俺たちってもう、仲間なんだからさ」

通信が切れる。
何度か会って判ったことだが、リインフォースは何かと考えが後ろ向きだ。
今までやって来たことのせいもあるだろうが、全部を背負いこみ、自分を追いこんでいるように見える。
彼女の中では、まだ罪の意識が強く残っているのだろう。

「あんまり良い傾向じゃねぇな。　ヘタしたらアイツ、自分を犠牲に全てを終わらせるとか言いかねんぞ」

「それについては、私たちも心配している。　そうならないためにも、早急に事態を収拾する必要がある」

「そうだな……。　で、どうすんだ。　このまま次の結界まで一緒に行くか？」

「ああ、そうしよう」

スタンをバイク形態に戻し、怜治はシグナムと共に夜天の空を駆け出した。

「お、おおおおっ！！！」

ローブを着た魔導師の雄叫びと共に魔法杖が輝き、数十メートルに及ぶ巨大な魔法陣が展開。　陣の中から巨大な赤竜が召喚される。

大蛇の体から生えた樹木のような脚部についた鋭い爪が空中を掴み、三つの鉤爪を持った触手が獲物を品定めするかのようにうねる。

積層鎧のような鱗が鈍く光り、爬虫類独特の鋭い眼光が怜治を射抜く。

怜治はスタンを騎士形態（ナイトフォーム）に変形。　赤竜を迎え撃つ。

赤竜の突撃を盾で受け流し、盾から魔弾を連射。　赤竜を押し留めつつ一気に魔導師の目の前に飛びだす。

体をバネにして高速の刺突を繰り出す。

「龍の、剣角！！」

片手剣が魔導師を貫く。

大きく息を吐いてから、魔導師の身体が光となって消えていった。

「……フゥ……」

戦闘の緊張を肺に溜まった空気と一緒に吐き出し、怜治はスタンをバイク形態に戻す。

これで倒した闇の欠片は三つ目。

幸い、あれから知り合いの偽物とは会っていないが、それも長くは続かないだろう。

「どうした、もう疲れてきたか？」

戦いを見ていたシグナムが声をかけてくる。

先ほどから、彼女は戦闘に参加してこない。
一対一が信条なのか……シグナムに限って戦いたくないということはないだろうが、後ろから自分の動きを観察されるのは良い気分ではない。

「どうしてお前は戦わないんだ。　戦闘狂（バトルマニア）の称号が泣くぞ？」

「お前ひとりでもやれそうだったからな」

それに、と続けるシグナムの眉間にしわが刻まれる。

「そのような称号を貰った覚えも名乗った覚えもないし、誇る気もない」

「お前はそうでも他の連中は大体そんなこと思ってるぜ？　ヴィータとか高町とか……あと俺とか」

「……」

「？」

シグナムの様子に怜治は首を傾げる。
怒っている気配ではない。　何かに憂いているようだ。

「……こうして、お前と一対一で話すのも久しぶりだな……」

「ん……ああ。　すずかがフランベルグを起動した時以来か」

目を閉じればその時の場景が浮かんでくる。
当時はこんな風に仲間として共に闘う日が来ることを予想してい

ただろうか。

「その後、我々はお前に闇の書を渡すという取引を断り、結果、主はやては一度闇の書に取り込まれ、お前はそのせいで入局を見送られてしまった」

「おいおいおいおい！　勝手に責任感じて鬱にはいるなよ。本局で暴れたコトと、お前らに取引持ちかけたコトは全くの無関係だ。

グレアムに関してはどちらにしろやるつもりではいた。　だから、お前らが責任感じるコトなんか一つもない！」

「だが、我らのせいでお前の管理局入局が大きく遅れたのは事実だ。主はやてやテスタロッサ達は仮配属期間を経て次の春には正式に入局するが、お前はそこからさらに二年、待つことになった」

「春にアイツらが入局したとしても、別に学生やめる訳じゃないだろ。　俺は高校卒業してから入る。　それだけの違いだ」

なのはが言うには、とりあえず中学校までは通うつもりでいるらしい。

学生と管理局魔導師の二足の草鞋が可能なのか判らないが、難しいと言われてやめる彼女たちではないことは怜治も判っていた。

中学までとは違い、留年が存在する高校に通う怜治としては卒業まで入局を考えなくていいことはむしろ僥倖であった。

怜治は魔力こそ彼女たちと肩を並べられるほど高いが、シグナム達のような経験は勿論、なのはのような天性の才能も、フェイトのような高度な魔法知識があるわけではない。

だから、この二年間を魔法修行に費やせられると考えれば、入局先送りも目くじらを立てるほどの事ではない。

入局が遅れたことに関して、シグナム達が責任を負う必要などどこにもないのだ。

「…ってか、闇の書事件って言えばお前らがグレアムを許したことの方が予想外だ。　どいつもこいつも、拳骨一つ入れずに許しやがって……」

やれやれと呆れた声を出す怜治の言葉に、シグナムの眉がつり上がる。

「別に、奴の所業を許したつもりはない。　ただ、主が許すというのだから手を出さないだけだ。
テスタロッサ達に関しては……その優しさが美点だろう」

「美点……ね。　まぁアイツらがそれで良いっつったならそれ以上は言わねぇけどさ」

会話が途切れる。
怜治は特に意味もなく空を見上げた。

「――――？」

怜治は違和感を覚えた。
空にはまだ、膜のようなものが張り付いた感覚がある。

「結界が……消えてねぇ……」

海鳴に多数発生した結界は、闇の欠片たちが造り出した物のはず。
今さっき、この結界を創りだした欠片は倒したのだから、結界はすぐに消滅するはずだ。　少なくとも今までの結界はすぐに消滅し

た。
だが、この結界は未だに消滅の気配を見せない。
となると、考えられる原因は一つだけだ。
「結界が二重に……！？　もう一体、闇の欠片がどこかに！」
シグナムも異変に気付き、周囲を警戒する。
怜治は自分の鈍感さに舌打ちする。
よく注意すれば、この中に巨大な魔力反応を感じるではないか。
さきほどの魔導師とは比較にならない程の力。　こんな魔力に何故今まで気付かなかったのだろうか。
「――――！」
急速に接近してくる魔力反応とともに、肌を叩く鋭い殺気。
即座に思考を戦闘に切り替える。
「だっりゃあああああああああ――――！！！」
聞き覚えのある咆哮。
スタンを鉄拳形態（アームズフォーム）に変形させ、鋼の拳を殺気を感じた方向に向ける。
瞬間、鋼がぶつかり合う甲高い音が響く。
鉄拳を叩いたのは赤い柄の鉄槌。
「――――――――てめぇ……」
それを握るのは奇妙な兎を帽子に飾り付けた真紅の少女。
紅の鉄騎、ヴィータだった。
彼女の腕に腕章はない。

ということは――――――――――

「闇の欠片か――――――！」

鉄槌を押し返し、一気に攻撃に転ずる。
だが、振るった拳をヴィータは鳥が舞うようにかわす。
一定の距離を取ると、少女の手に鉄球が握られる。
それを、テニスのサーブのように打ってきた。
高速で飛来する鉄球を怜治は硬度をあげて回避。

「ブチ抜けえええぇぇぇ！！！」

そこへ、ヴィータの《噴進式鉄槌（ラケーテンハンマー）》が牙をむく。
ラケーテンフォルムに変形した鉄槌が鉄拳を抉っていく。

「～～～～～～～～～ッ！！！」

怜治の口から、声にならない悲鳴が上がる。
腕力だけなら怜治の方が勝るかもしれないが、技の威力となると話は違ってくる。
いくら鉄拳形態が防御型の形態とはいえ、強襲形態のラケーテンフォルムからの攻撃は危険だ。
それこそ、なのは並みの防御魔法が必要になる。　だが、怜治にはそういう素質がないのか、エリシオン無しで防御魔法は成功した試しがない。
何か手はないかと思考を巡らせている時、怜治の目に信じられない物が映った。
それは、ヴィータの首に巻かれた――――――――

「……はあっ！？」

――――――――白地に金の鳥の刺繍が入った腕章だった。
怜治の声に虚を衝かれたのか、ヴィータが一歩引いた。

「……あ」

やべっ、という呟きが聞こえた気がする。
ヴィータの視線が、怜治の右腕に射抜いた。
どうやら、彼女も早合点していたことに気付いたようである。
彼女も例の腕章を身につけているということは、このヴィータは本物ということだ。
ギギギ、と錆びついたブリキのおもちゃのように首をまわしてシグナムを見ると、なんとも呆れた表情で二人を見ていた。

「……」
「……」

気まずい沈黙。
そりゃ味方を間違って攻撃してしまったらそうなるだろう。

「……お前……」

「な……なんだよ……」

「早とちりしやがったな」

「……悪いかよ」

ブチッ、とナニかが切れた。
途端に怒りが沸点に達した。

「ふっざけてんのか、テメェ！！　いきなり襲ってきやがってテメェの目ん玉は飾りかコラァ！！」

「んなっ！？　て、てめえの方こそ反撃しやがって、違うなら違うって言えばあたしだってすぐに止まったよ！」

「ウソつけ！！　だいたい、見分ける手段の腕章を首に巻くバカがいるか！？　スカーフじゃねぇんだから変なおシャレ魂（ソウル）発揮させてんじゃねぞバカ！！」

「バ、バカバカと連呼しやがってこの――――」

ヴィータが続けようとした瞬間、空が一瞬光った。
まるで、雷鳴のように。

「ヴィータ、松田！！」

シグナムの怒声が飛ぶ。
その内容はヴィータも怜治も瞬時に理解した。
自分たちの頭上から圧し掛かる様なプレッシャーを与える魔力は、確かに先程感じた魔力。　すなわち、闇の欠片だ。
雷が落ちた。
轟音と光のカーテンから、それは姿を現した。
ツインテールに結んだ青い髪。　奇妙なことに、毛先だけ濃紺だ。
禍々しさを象徴するかのような赤紫の瞳と同じ色の戦斧。
青いマントと黒い衣服に身を包むが、袖がなく、脚を露出するほどの軽装だ。
以上の出で立ちの少女を怜治は知っていた。

「……フェイト？」

いや違う。

怜治の脳がすぐさま否定した。

確かに、その容姿はフェイトにそっくりだった。

いや、正確には容姿は一緒で纏う雰囲気というか、色合いが異なっていた。

髪や瞳、戦斧の色。　まったく違う。

「どうやら、今までのニセモノとは違う見てぇだな」

ヴィータの言うとおり、目の前の少女はフェイトの記憶を再生させたものとは思えない。

アリシアとフェイトのようなクローンではなく、まるで、フェイトをモデルにして構成された全くの別人のようだ。

「貴様、何者だ」

シグナムの問いに、フェイトの姿をしたソレが口を開いた。

「僕は、君たちが切り捨てた闇の書の闇の構成体（マテリアル）。

君たちが呪いと蔑む闇の凝縮存在。　名は――――――――」

ゆっくりと、呪詛のように少女はその名を告げた。

「力のマテリアル。

――――――――雷刃の襲撃者」

第３５話　闇の欠片（後書き）

前話の最後にあったアンケートへの回答が少なすぎてちょっと驚いてる作者、剣静です。
強制ではなく自由回答なので仕方ないですが……。

これは作者の自由にしろということなのか全部やれということなのか……。

まだまだアンケート回答は可能ですのでお待ちしてます。

第３６話　雷刃の襲撃者（前書き）

『これは雷刃（アホ）の子ですか？』

『いいえ、雷刃（シリアス）の子です』

第３６話　雷刃の襲撃者

雷刃の襲撃者。
フェイトと似た姿をしたソレはそう名乗った。
闇の欠片の凝縮存在。　確かに少女から感じる魔力は今までの闇の欠片とは段違いに強く、過去の記憶の再生でしかない欠片たちと違い確固たる自我を持っている。

「構築体（マテリアル）、つったな。　……ってことはだ、お前をブッ倒しゃこの騒ぎは終わるってことか？」

「答える必要はないね。　なぜなら、君たちは今ここで僕に敗れるからさ！」

襲撃者が毒々しい色の戦斧を構える。
怜治も大剣形態（ブレイドフォーム）に切り替え、シグナムとヴィータも武器を構える。

「大した自信だな。　じゃあ質問を変える。　目的はなんだ？」

怜治の問いかけに、襲撃者が口元を歪めて笑う。
少女の姿には不相応な悦に入った笑いだ。

「闇の書の復活さ。　そのために、書から切り離された守護騎士の力と、君の中にある頁（ページ）を返してもらう」

ぶるりと悪寒が走った。
怜治は思わず自分の胸を押さえた。
闇の書の頁。
闇の書事件の際、咄嗟に取り込んだ闇の書の一部。

グレアム戦以来全く気配を見せなかったアレが、わずかに反応した。

（また乗っ取られるのは勘弁だな）

敵は内と外の二つ。

面倒な事になってきたと怜治は内心で毒づいた。

「さあ、戦いを始めよう！　君たちを殺し、その力を糧として僕は飛ぶ！

そして、あの温かく艶やかな、血と怨磋にまみれた闇へと帰るんだ！」

雷刃の襲撃者が戦斧を掲げる。

彼女を讃えるように空には雷鳴が轟き大気を震わせる。

青い少女が弾けるように疾走を開始した。

迎え撃つは騎兵と騎士。

執念を以て追ってきた闇の縛鎖を、今ここで粉砕せよ。

魔法少女リリカルなのはＡ’ｓ　☆Ｔｈｅ　Ｒｉｄｅｒ☆　－ＴＨＥ　ＢＡＴＴＬＥ　ＯＦ　ＡＣＥＳ－

第２話　雷刃の襲撃者

疾走する襲撃者の様子は、正しく稲妻だった。

光の軌跡を描いて向かうそれは、フェイト同様に凄まじい速度を誇った。
あっという間に怜治は背後を取られ、戦斧の一撃を受ける。
バリアジャケットによる守りがなかったら背骨が砕けていたかもと思わせる程の衝撃に息を呑む。
ヴィータの鉄槌を戦斧で受け、弾いて一気に上昇。
そこをシグナムが一気に叩く。
レヴァンティンの一閃が煌めく。　だが、雷刃の戦斧がこれを容易く受け止めた。

「僕のバルニフィカスに、そんなナマクラが通用するか！」

バルニフィカスから青い光刃が伸びる。

「なっ、ハーケンセイバー!?　姿だけでなく、魔法も同じのを使うのか」

「同じ？　違うね、全っ然違う。
僕の魔法はもっと強くて、もっとカッコいい！！」

うおりゃあああ！！　という雄叫びと共にシグナムを押し返し、鎌となったバルニフィカスを振り上げ、一気に振り下ろした。

「光翼斬っ！！」

光刃が戦斧から外れ、回転しながら怜治へと襲いかかる。
攻撃の隙をついてシグナムとヴィータが同時に突撃する。
だが、襲撃者の高速移動についていけず、グングンと引き離されていく。

「電刃衝っ！」

雷弾の雨が降り注ぐ。
怜治はスタンを砲撃形態（バスターフォーム）に変形。
大筒を光刃に向け、魔力砲を放つ。
轟音と共に空を一閃する極光に、光刃光弾が消し飛んだ。
魔力砲の光が治まった瞬間、怜治の腹に鈍い衝撃が走った。

「――――が、はぁっ」

苦悶の声が漏れた。
怜治の腹に体当たりをかましたのは、今さっきシグナム達を大きく引き離していた雷神の襲撃者だ。

「な、――――に、――――」

おかしい。
襲撃者はさっきまでシグナム達の攻撃をかわすために、怜治からさらに遠のいた位置にいたというのに、その距離を一瞬で、百戦錬磨の騎士達が視認できない程の速度で移動したというのか。
フェイトを元にしたからとはいえ、今の速度は明らかにフェイトを超えていた。
自分に抱きつくように密着する襲撃者に、怜治は戦慄する。
怜治は今砲撃形態。遠距離戦闘用の形態だ。
この密接した距離で、できることはない。
ただ、零距離からの殴打を大人しく受けるだけだった。
少女の姿からは想像できない程の強烈な拳が容赦なく突き刺さる。
込み上げてくる嘔吐感に堪えながら、怜治は腕を少女の腰に回して動きを止める。

「ヴィータ！！」

「おうっ！！」

すかさず、ヴィータの鉄槌が襲撃者の後頭部を全力でブッ叩いた。
流星のように落下する怜治と雷刃の襲撃者。
風圧で骨が軋む。
襲撃者が怜治の拘束から逃れ、飛翔する。
怜治も体勢を立て直し、大剣形態（ブレイドフォーム）に切り替えマテリアルを追う。
頭部を叩かれ中枢神経にダメージでも負ったのか、襲撃者の速度は先ほどより格段に落ちている。
シグナムの長剣が閃き、ヴィータの鉄槌が唸りをあげる。
剣を防御魔法（プロテクション）で防ぎ、鉄槌をバルニフィカスで受け止める。
両手が塞がったところで、怜治が大剣を一閃する。

「龍の爪剣！！」

魔力で強化された剛力と、鉄塊に等しい大剣から繰り出される斬撃が雷刃の襲撃者を呑みこんだ。
夜天を切り裂かんと疾走した衝撃波が少女の矮躯を蹂躙する。

「――――ぐ、がぁあっ！！」

苦痛に満ちた悲鳴。
戦斧を強く握りしめ、光刃を再度展開する。
渾身の力を込めて一閃、斬撃を破壊した。
とはいえ、その体も無傷ではない。
青色のマントはただの襤褸布（ボロぬの）と化し手甲、脚甲も粉砕された。
髪を二つに束ねていたリボンの一つが破れ、無数の蛇のように髪が踊る。

「――――く、そ――――――ッ！」

目の前をちらちらと舞う髪を鬱陶しそうに掴んでまとめ、バインドをリボン代わりに束ねた。

ギロリ、と敵を睨みつける。

一撃入れたことが嬉しいのか、三人の顔には笑みが浮かんでいた。

怒りが込み上げてくる。

自分は雷刃の襲撃者。　闇の書の中枢を司るマテリアル。

それが、高々末端機能に過ぎない守護騎士とただの人間に敗れるわけがない。　敗れていいわけがない。

光刃の魔力密度を高めていく。

鎌はより輝きを増し、獲物を求めてギチギチと暴れ出す。

腰を落とし、体を前に傾け、手を空気の足場に着いて四足獣の姿勢を取る。

両手両足に力を込め筋肉を収縮。

「――――――――――いくぞ……！」

蓄えた力を一気に爆発させた。

少女の矮躯が瞬時に彗星に変わる。

一瞬でＭＡＸスピードに達したそれは稲光りする尾を引き、怜治たちをボーリングのピンのように弾き飛ばした。

襲撃者じゃやったのは単純な体当たり。　だが、光速で駆け抜けるそれは膨大な運動エネルギーを持ち、触れた者を一瞬で轢死体へと変えていく。

怜治たちが人の形を保っていられるのは、標的を三人にしたために威力が分散してしまったから、そして彼らが着込む防護服（バリアジャケット）の性能故。

雷刃はブレーキをかけ停止する。

マテリアルとして、見た目以上の強靭な肉体を持っていはいるが、

超スピードの直進からの方向転換は、その時生じる遠心力で身を引き裂かれかねない。
だからといって困ることはない。
こうしていったん止まり、再度標的に真っ向から突っ込めばいい。
四足獣の姿勢を取り、両手両足に力を込める。

「――――、させるかよっ！」

怜治の手に雷球が生まれ、それを装填。　蒼電を纏って襲撃者に肉迫する。
大剣を一閃して雷刃の爆走を止める。
バルニフィカスと大剣がぶつかり合い火花を散らす。
すかさず放つ怜治の蹴りを襲撃者が体を捻って回避。
光刃を振り回し、怜治を突き放す。
だが、距離を取られたところで即座に詰める
鎌と大剣による刃の応酬。
速度の上がった怜治が、襲撃者と互角に剣戟を繰り広げた。

「く、そ――――だったらぁっ！」

バルニフィカスを掲げる。
バインドが発動し、怜治を空中に縛り付けた。
禍々しい戦斧のコアが妖しく輝き、雷光が満ちていく。

「松田！　危ない！！」

シグナムが危険を察知し声を荒げる。
だが、怜治が拘束から逃れる前に、雷刃の襲撃者の魔法が発動した。

「天破・雷神槌！！」

迅雷が轟いた。

文字通り雷撃を帯びた鉄槌が怜治に降り注ぎ、雷光が視界を白く塗りつぶした。

光が止む。

回復した視界に。怜治の姿が映る。

「……残念だったな」

怜治にダメージはない。

むしろ、襲いかかった雷撃をさらに兵装として纏っていた。

前以て電撃を纏っていた怜治に、同じ電撃は効かない。

ダメージを負うどころか、むしろ力を増すだけだ。

バインドを砕き、大剣を構え直す。

だが――――

「――――――――――なっ！？」

驚愕の声が漏れた。

雷刃の襲撃者の姿が、変化していたからだ。

「ハハ……。　なるほどね、これは良いね。　力が漲る」

襲撃者の悦に入った笑いが響く。

少女の体が、青く輝いていた。

長い髪からバチバチと稲妻が爆ぜる。

怜治と同じように、雷撃を纏った姿だ。

「おいスタン。　あれはお前だけの機能じゃなかったのか？」

『オレの機能は“相手の魔力を吸収する”ことだ。
お前はオレの補助有りでやってるが、コツさえ掴めば他の奴でもできる』

なんだよそれ、と怜治は悪態をつく。
怜治が今さっきまで剣戟を繰り広げることができていたのは、雷撃を纏うことで速度を上げていたからだ。
襲撃者も同様に雷撃を纏ったとするならば、速度は明らかに向こうの方が上となる。

「いくぞ……僕の剣の錆びとなれ」

少女が雷弾となって疾走を開始する。
バルニフィカスに光刃が展開し、魂を刈り取る魔鎌となって襲いかかる。
突撃を伴った斬撃に怜治の身体が弾き飛ばされる。
雷弾となった襲撃者が怜治を追う。
怜治はまだ体勢を立て直し終わっていない。先ほどは大剣に阻まれたが、今ならその刃は確実に青年の命を摘み取るだろう。
殺意を込めた斬撃が振り下ろされる。
そこに一片の躊躇いもない。少女にとって目の前の者は闇の書の闇を復活させるための贄。食料のようなものだ。
獅子が獲物を喰らうのに躊躇いがないように、雷刃の牙を突き立てようとした瞬間。

「翔けろ、隼……！」

獅子を捕えんと、空の狩人がその猛爪を繰り出した。
襲いかかった烈風を防御壁、光刃の二重の壁で受け止める。

だが相手は剣の騎士が放つ最高の一撃。
急ごしらえの防御など一瞬で粉砕する。
暴風の槍が腹を抉り、襲撃者を空から叩き落とす。
追い打ちで、ヴィータが《飛翔する燕（シュワルベフリーゲン）》を打つ。
鉄球が弧を描いて雷刃を打ち抜いた。

「これで、終わりだ！！」

怜治が大剣を構えて突撃。
その重量からの落下速度を利用した一撃が迫る。

「……けるな……」

ギリッ、と歯ぎしりをする。
戦斧を握りしめ、残った魔力をバルニフィカスに注ぎ込む。

「僕はマテリアルだ。　防衛プログラムの中枢だ……」

担い手の声に応えるように、毒色の戦斧が形を変えていく。
戦斧が二つに分かれ、鍔となり、そこから碧く輝く雷刃が伸びた。

「僕が、守護騎士プログラムやただの人間なんかに負けるはずがないんだ……！」

その電撃を帯びた魔力刃は襲撃者の身体よりはるかに大きい。
その姿に、三人は驚愕する。
それは、フェイトのバルディッシュの最終形態。　ザンバーフォーム。

「退けぇ、松田っ！！」

言われるまでもない。
怜治はすでに退避行動に移っていた。
あの巨刃から感じる魔力は凄まじい。
襲撃者との距離は二十メートルあるというのに、肌を突き刺す殺気は一向に薄まらない。

「砕け散れ……！」

殺気と共に夥しい魔力が刃に集まり、力を凝縮していく。
その一振りから繰り出されるのは闇の力の完全開放。
全てを打ち砕く必殺の剛剣。

「雷神滅殺！　極光――――――――斬！！」

一閃必殺。
全てを粉砕する剛雷の瀑布と、全てを切り裂く刃の波濤が牙をむいた。

雷刃の襲撃者が放った一撃は、監視していたアースラにも驚愕を齎(もたら)した

「怜治君！　シグナムさん、ヴィータさん！　応答して！」

アースラの指令室で、リンディの声が飛ぶ。
出動した魔導師の状況を送信していた監視スフィアの一つ、怜治

たちを追っていたスフィアからの通信が突如途絶えた。
続いて観測した膨大な魔力反応。
間違いなく、怜治たちに何かがあったのだとリンディは判断した。
彼らが持つ通信機に呼びかけて入るが、返事はない。
最悪の事態を想定してのプランが一気に構築されていく。

「――――――――」

まったく、こういう時には自分の聡明さが嫌になる。
心では否定していても、どこか理性的な部分が彼らの死を肯定しているかのようだ。
焦燥を提督としての顔で包み隠し、エイミィ達に指示を飛ばす。
優秀なスタッフたちが、あっという間に結果を出し、報告した。

「魔力反応、三人とも共に確認、無事です！」

「強力な魔力によって通信が安定しません。　復旧にはもうしばらくかかるかと！」

「……そう」

ドサリ、と音を立ててリンディは艦長席に座り直す。
最悪の事態は回避された。　否、今はまだ最悪に至っていないの間違いか。
構築体（マテリアル）の目的が闇の書の闇の復活で、そのために魔力を集めているとなれば高い魔力資質を持つ三人は恰好の獲物だろう。
今の一撃で倒しきれなかったとしたら、必ずとどめを刺すはずだ。

「現場スタッフ全員に通達、今から送る座標に近い者は速やかに急行してください！」

はい！　と力強い返答が数多く返ってきた。
中には年端のいかぬ少女たちのも当然あった。

「……」

これでいいのか、と自問する。
只々さらなる犠牲者を増やすだけではないか、と自問する。
それしかない、と自答する。
誰かが倒さなくてはならない脅威なのだから、と自答する。

「……頼むわね、みんな……」

月が見える。
黄金とも白銀ともとれる月。
夜天に鎮座する三日月が自分を嘲笑っているように見えた。
空に月の光を遮る物は何もない。
張り付く膜のような結界も、空を漂う雲もない。
さっきまであったそれらは雷刃の一撃で薙ぎ払われた。

「――――――――」

思考が戻ってくる。
四肢に力を込める。

「くそ……、痛ぇ……」

体を動かそうとする度に全身を猛獣に咀嚼されるような痛みが走る。

血は、出てはいないようだ。

これはバリアジャケットの性能に感謝しよう。

ゆっくりと、眠る赤子を抱き上げるような緩慢な動作で上半身を起こす。

「ああ……バリアジャケットがボロボロだ」

黒いコートが右肩から左の腰にかけて裂け、もはや衣服としての機能を果たしていない。

ズボンから焦げ臭いにおいがして、所々に穴を空けていた。

頭に着けていたはずのゴーグルはベルトが千切れ傍らに落ちていた。

そこまで確認してから、ようやく自分が瓦礫の上に横たわっていることに気付いた。

襲撃者の一撃を受けて地に堕ちたのだと気付くのに一秒。

その一撃で市街に乱立する建物にも一部被害があったのだと判るのに二秒

シグナムとヴィータの安否を心配して周囲を見渡すのに三秒。

自身の背後の光景を見て全身が硬直するのに、四秒と少し。

「――――――――ヴィータっ！！」

雷刃の襲撃者の手が、真紅の少女の喉に伸びていた。

ヴィータの矮躯と大して変わらない体格の少女が、鉄槌の騎士を右手一本で持ち上げている。

襲撃者の口元は悦楽で歪み、対してヴィータは苦痛と悔しさで口元を歪めていた。
二人の足元にはシグナムも倒れていた。
騎士二名、どちらも怜治同様に酷い有様だった。
騎士服は無残な形に変わり、結われた髪が解けて力なく風に煽られて踊る。

「く――――そ……！」

「フフ……ハハハっ！　どうだい？　凄いだろ、強いだろ、恰好いいだろ！　これが力の差さ、闇の書本体から切り離された守護騎士プログラム風情が、その中枢の構成体（マテリアル）である僕に勝てるわけがないんだよ！」

勝ち誇った笑みで襲撃者が笑う。
喉を掴まれたヴィータは言い返すことなどできず、せめてもの抵抗に襲撃者を睨みつけるだけ。

「ハハハハ……！」

それを嘲笑い、ヴィータの喉を掴む手に力がこもる。
首の骨が軋む音が怜治の耳にも聞こえた気がした。
少女の首がへし折れる光景が思い浮かぶ。

「やめろ――――――――」

やめるわけがない。
彼女と自分たちは敵同士、情けをかける必要性など皆無。

「――――やめろ――――」

どうしても、やめさせたいのであれば。

「――――――――やめろ！」

ヤルことは一つだけ。

「……っ！」

体が動かない。

恐怖じゃない。　単純に、この体が負った傷のせいで動けないのだ。

今無理をすれば命に関わると脳が無意識に動きを止めていく。

何もできないのか。

ただこのまま、見ていることしかできないのか。

――――……力を貸してやろうか？……――――

「――――――――っ」

ドクン、と心臓が早鐘を打つ。

血の循環が早まり、体を動かしていく。

同時に込み上げてくるのは、

抑えようのない、

堪え切れようのない――――――――

『……レイジ？』

――――――――殺意。
すぐそばに落ちていたスタンを拾い上げ、怜治は弾けるように崩壊した大地を蹴った。
たった一度の跳躍で襲撃者の前に躍り出る。
そして、大剣でそのか細い右腕を肘から切断した。

「ぐがぁあああっ！？」

断末魔が響く。
腕の断面からは鮮血が迸り、すぐに光となって霧散していく。
ヴィータの身体が地に落ちて横たわる。
その時、ヴィータと雷刃の襲撃者は確かに見た。
怜治の漆黒の瞳が。

「れいじ、おまえ……」

「その眼は……」

翡翠に燃えていた。
瞳に灯る感情はたった一つ。
視線が合い、襲撃者が戦慄する。

「――――、くそっ……！」

大地を蹴って襲撃者が空に逃げる。
腕を亡くした痛みのせいか、思ったより速度が出ない。
いや、そんなことは今はどうでもいい。
問題なのは、今さっきまで倒れ伏していた青年の変わりようだ。
あの瞳の色の本来の持ち主を、雷刃の襲撃者は知っている。

「ふざけるなよあの暴君……。
何が楽しいか知らないけど、僕まで使い捨ての玩具（おもちゃ）にする気か……！」

雷刃の襲撃者は防衛プログラムを構成する中枢だが、中枢の核ではない。
核が滅びない限り、彼女はまた再生される。
とはいえ、痛覚も死への恐怖も感じる以上そんなのは勘弁してもらいたい。
だというのに、怜治の身体に一部を入り込ませたアレは襲撃者を切り捨てた。
理由は単純。
楽しいから。
怜治自身が困惑するのが楽しいのか、自分が苦痛に喘ぐのを見るのが楽しいのか、そんなものは判らない。
だが、どちらにしろこのままでは殺されるのだけは確かだ。
ならば、自分が取るべき手段は一つ。

「いったん退いて、回復に専念するしか……」

幸か不幸か、先ほどからこちらに向かってくる魔力反応がある。
おそらく仲間の危機に他の局員が駆けつけようとしているのだろう。
それは恰好の獲物でしかない。
片腕を失ったとはいえ、雷刃の襲撃者の力は魔導師として上位に位置する。
《雷神滅殺極光斬》もまだ一発くらいなら打てる。
それでのこのこやっていた魔導師を薙ぎ払い、その力を糧として回復を図る。
先ほどの怜治の状態。

見たところ精神面まで支配されたわけではない。
もっと本能的な部分、生きるための防衛本能か、狩猟本能か、猟奇的な殺戮本能を刺激されたのか。
どちらにしろ、あの状態は長くは続くまい。
アレが人間としての尊厳があるなら、必ず理性が本能的行動を抑制するはずだ。

「うん、イケる……！」

手の平に青く輝く雷球を生み、それを戦斧に装填する。
少女の全身を雷光が包む。
移動速度をはね上げ、獲物を狩ろうと決めた時。

『龍の飛翔（ブエロドラゴン）』

空間を超えて現れた鉄竜が、襲撃者の腹に噛みついた。

「が、――――は……！」

無理やり軌道を変えられ、そのまま押しつけられる形で近くのビルに叩き込まれた。
雷装が解け、無機質な大地を無様に転がる襲撃者。

「――――――――っ」

ゴリッ、と鈍い音が足元から聞こえた。
倒れたまま視線を脚にやると、バイクの前輪が圧し掛かっていた。
少し遅れて鈍痛がやってきた。
バイクの重量は片腕でどうにかなるような重量ではない。　完全に動きを封じられたのだ。

「どこ、だ……バルニフィカス……」

必死に自分の武器を探す。

射撃魔法でバイクを押し倒せばどうにかなるかもしれない、と淡い希望を抱いて探す。

「あった……」

頭の少し上、そこに彼女の戦斧が横たわっていた。

左手を限界まで伸ばす。

指先が、その柄に触れようとしたところで――――

「――――――――あ」

――――砕けた。

プレス機のように降りた足が戦斧を踏み砕いた。

顔を上げて、その犯人を見る。

瞳が翡翠に輝く青年だった。

「……」

無言のまま、怜治は左足で襲撃者の左手を踏みつける。

「――――っ」

ギシッ、と歯ぎしりが聞こえた。

ゆったりとした動きで、怜治の右足が上がる。

まるで断頭台に掛けられたかのようだと襲撃者は思った。

違うのは、落ちてくるのがギロチンの刃ではなく人間の脚だとい

うことと、結果が断頭されるのではなく頭蓋ごと頭部を砕かれるということ。
上げられた脚に魔力が集中していく。
凝縮された魔力が一撃の威力を高め、鋭さを増していく。

「ここまでか……くそっ」

脚をバイクに潰され動けない。
武器は破壊された。
片腕はなく、残った方は今踏み付けられて動かない。
雷刃の襲撃者に残されたのは、ただ己の死を待つことだけ。

「これで、終わったと思うなよ……」

苦痛に満ちた顔で怜治を見上げる。
どうせ殺されるのなら、何か言い残しておこう。

「構成体（マテリアル）は僕一人じゃない。　まだいるし、闇の書が復活すれば僕もまた再生される」

「……そうか」

抑揚のない返答。
怜治の意識は、ただ目の前にいる獲物を仕留めることだけに向いている。
振り下ろした脚がどうこの少女の頭蓋を砕くのか、どんな惨状を創りだすのか。　想像するだけで悦楽の震えがこみ上げる。

「……？」

思考が介入し、意識を分散した。
何故、自分はここまで猟奇的になっているのだろうか。
自分に、誰かを嬲ることに快楽を感じるサディスティックな一面があったのだろうか。

「――――――」

今まで、誰かに対して敵意を持ったことは当然ある。
殺気染みた憎悪や憤怒を感じたことはあるが、ここまで明確な殺意は持ったことはない。
自分を突き動かす衝動に困惑し、足を下ろすことに躊躇いが生まれる。

「おまえなんか……」

「……なんだ？」

「おまえなんか、アイツに殺されてしまえ……！」

躊躇いが、消えた。
どうやら、少女の言うアイツを、怜治は本能的に嫌悪しているようだ。
足が下ろされる。
後頭部を粉砕され、額も砕ける。
万力に挟まれるようにして、少女の頭蓋が二方向から粉砕されていく。
鮮血が花火のように迸り、青い髪を赤に染め上げていく。
果実を踏み潰すように、少女の頭部がその形を失った。
冷たい死が、雷刃の襲撃者を包みこんでいった。

「――――――」

フゥ、と息を吐く。　足を上げると、靴裏にへばり付いた脳？がグチャリと耳障りな音を立てた。

吐いた分吸い込むと、噎せ返る程の血の匂いが嗅覚を抉った。

だがそれも一瞬。

広がった血の池も、冷たくなった小さな身体も、光の塵となって散って行った。

同時に、体を駆け廻っていた興奮も退いていく。

怜治は気付かないが、瞳も翡翠から黒に戻っていった。

「……終わったか」

スタンに跨り、魔力でバリアジャケットを修繕する。

そして走り出そうとした時、なのはたちが来ていたことに気付いた。

「あっ……」

フェイトや他のアースラスタッフの姿もある。

ヴィータがシャマルに背負われ、シグナムがザフィーラに支えられていた。

治療は既に受けたのだろう。　二人の表情には疲弊の色こそ感じられるが、目に見える傷は塞がっていた。

「――――――」

「……」

無言のまま、無数の視線が怜治を射抜く。

どの辺りから見ていたのか。

彼らの反応から、今来たところというわけではないだろう。
最低でも、少女の頭を踏み潰すところは見られたのだろう。
なんとも、闇の欠片が張った結界よりも複雑な空気が場を侵食していく。
怜治はスタンから降り、スタンを引きながら彼女たちの元へ歩きだす。

「……レイジ……」

横を通り過ぎようとした時、フェイトに裾を掴まれた。
兎のように赤い瞳が不安の色を孕んで怜治を見上げている。

「わたしのこと……きらい？」

「――――――――は？」

「だって、わたしと同じ顔した子を、その……ああしたから……」

どうやら、フェイトは襲撃者がやられたことを、自分に置き換えているようだった。
自分に嫌悪の感情を抱いているからこそ、似た姿の少女をあのように滅（ほろぼ）したのだと。
怜治は溜息をつく。
どうもこの金の少女はあの融合騎同様、物事を後ろ向きに捉えようとする傾向が目立つ。
今に至るまでの経緯のせいでもあるのだろうが、早めに矯正されることを怜治は願った。

「レイジ……」

今にも泣きそうな顔の少女を見て、怜治は右手でフェイトの髪をくしゃくしゃと掻きまわす。

「少なくとも、ヴィータよりは好きだ」

「……へ？」

「上等だてめえ、今すぐアイゼンのがんこな汚れにしてやらあ」

疲れた顔でヴィータがドスの効いた声を出す。
フェイトはフェイトで喜んでいいのか迷っているようだ。
少し、張り詰めた空気が薄まった気がした。

「さてと、いつまでもこんなとこで油売ってる暇ねぇぞ。
さっきのフェイトモドキの言うことが本当なら、マテリアルってのはまだいるってことだ」

「……む、そうだな。　結界もまだ残っている。　……よし、みんな各自持ち場に戻れ」

クロノの指令が飛び、アースラの魔導師たちが飛び去って行く。
なのはとはやて、わずかに頬を紅潮させたフェイトが飛び去るのを確認して、クロノが怜治をまっすぐに見据えて訊いた。

「怜治、さっきのはなんだ？」

「……なんのことだ」

「気付いてないのか……。　君の瞳、翡翠色に変わっていたぞ」

ハッとして怜治は眼を押さえる。
それで判った。
あの妙な感覚の正体が。

「……」

「その顔、身に覚えがあると言った感じだな」

「ああ……でも、今は言えねぇ」

「なら、この事件が片付いたら話してもらおう」

質問でも提案でもない。　命令だった。
怜治に不満はない。
別に話す必要もないから伝えていなかったが、逆に言えば秘密にする必要もないのだ。　なら、そろそろ良い頃合いなのかもしれない。

「松田怜治……」

リインフォースが語りかける。
なんだ？　と怜治は顔を合わせずに答える。

「迷惑をかけて、本当に済まない」

ただそれだけを言って、黒翼を広げて飛び去って行った。
その後ろ姿に、怜治は何か嫌なものを感じた。
それは他の守護騎士達も同じなのか、四人とも厳しい表情をしていた。
ヴィータが一歩、前に出た。

「あいつの事はあたしらに任せろ」

一言、そう言ってヴィータも床を蹴って飛翔。　他の騎士達もそれに続き、空中で四方に散って行った。

やがて、クロノも飛んでいく。

残されたのは怜治とスタンだけ。

「……」

無言でスタンに跨り、今度こそ、夜天の空に飛び出した。

海鳴市上空に無数に展開した結界の一つの中に、彼女はいた。

肩のあたりで切られた栗毛の少女は瞳を閉じて闇の核への思念通話をつなげる。

「雷刃のがやられました……」

頭の中で念じるのではなく、言葉にして口にした。

自身にその事実を刻みつけるために。

「……」

返答はない。
当然か。　雷刃の襲撃者を滅ぼしたのは事実、あの王なのだ。
本体から切り離した枝葉に過ぎないとはいえ、その思考回路は本体と変わらない。
ならば、あそこでの介入は王の意志だろう。
文句はない。
闇の書さえ復活すれば、消えた彼女もまた再生されるのだから。

「……今しばらくお待ちを、雷刃の。
あなたが望んだ温かな闇、必ず貴女をそこに連れていきましょう」

自身に刻みつける誓いの言葉を、手に掴む赤い魔杖に額を当てながらゆっくりと言った。
そして、パチパチパチ、と聞えてきた拍手の音に、少女は瞳を開いた。
いつの間に来たのか、目の前には一人の男がいた。
髪も肌も身に纏った衣服も、不快なほどに白く染まった青年。

「……何の用ですか？」

「いや、同胞が殺られて落ち込んでいるのではと思ったのだが……不要だったようだな」

「当然です。　雷刃のは永遠に消滅したわけではありません。
王が闇の書として復活すればまた蘇るだけのプログラムデータの凝縮存在。　それは、貴方も私も変わりません」

淡々と少女は述べる。
彼女の言うことは間違ってはいない。

自分たちは言わば部品。
闇の書という巨大な機械を動かすための歯車の一つ。
その起動に足りない部品を集めるために一時的に自我を与えられた仮初の生命。

「だが、オレはちょっと違うぞ。
今はあの王様には従うが、オレにはオレの目的がある」

「存じています。　貴方は自分の欲望を果たすために態々(わざわざ)夢の世界から顕現を果たした変わり種。
顕現の対価として王に使役される、本来なら不要な構成体(マテリアル)」

「その通りだ」

ジロリ、と少女の双眸が白い男に向けられた。
その瞳には僅かに怒りと侮蔑が込められていた。

「まさか、それを確認するためだけに態々ここへ？」

「ああ。　アレはオレが潰す。
だから、敵討ちなんて考えずオレに譲ってくれよ？」

「……先ほど言ったことを聞いていなかったのですか？
彼女は闇の書復活ともに再生するのです。　敵討ちなどする必要もない」

「そうか、それを聞いて安心した」

用は済んだのか、男は去っていく。
その後ろ姿を、ジッと少女は見つめていた。

「夢に取り残されたイフの可能性が、現(うつつ)で何をするつもりなのでしょうね」

誰にも聞こえない声で、少女は呟いた。

第３６話　雷刃の襲撃者（後書き）

ハイドラさん、感想ありがとうございました。

アンケートも残り2週間、答える気あるけどまだ、という方はお急ぎを……。

第37話　追うべき背中

闇の書復活を阻止するべく、怜治は次の結界へと飛び込んだ。
そして、中で出会った敵の姿を見て、茫然と立ち尽くした。
その闇の欠片が取った姿は、夕日のように鮮やかな緋色に輝く片手剣を携えた老婆だった。
結われた毛髪は色を失い真白で、顔や手に刻みこまれた皺は優しさと厳かさを同時に感じさせる。
深赤の法衣のような衣服に身を包み、首に巻かれ腰まで垂れる長い白のストールが風に煽られ踊る。
全てを見透かす銀の瞳が、穏やかな視線で怜治を捉えていた。

「ったく、マジかよ……」

別に考えなかったわけではない。　ただ、そんなことになって欲しくないと思って無意識に思考を閉ざしていただけ。
リインフォースは言っていた。
闇の欠片がとる形は、かつて闇の書に蒐集された魔導師や騎士達の記憶や願い。
だったら、あの人が出てきたとしても何ひとつおかしくない。

「なんだい、人の顔を見るなりしんみりしちゃって……。　久しぶりに会ったんだから、もう少し嬉しそうな顔をしたらどうだい？」

投げ掛けられた言葉に、耳朶を打つ声に怜治は身を震わせる。
怜治はこの声を知っている。
今目の前に佇む老婆の事を知っている。
忘れるはずがない。
彼女は、海鳴にやって来た怜治が、心を閉ざした少年が初めて心

を開いた女性。

「俺だって……判るのか？」

「当たり前だよ。　自分の孫の顔を忘れる祖母ちゃんがいるものか」

ギシッ、と奥歯を噛みしめる。

怜治は、真っすぐに老婆を見据える。

彼女の名は――――――――

「久しぶり……って言っていいのかな、祖母さん」

「いいんじゃない？　……大きくなったね、怜治」

――――松田ファミリア。

怜治の祖母が、そこにいた。

魔法少女リリカルなのはＡ’ｓ　☆Ｔｈｅ　Ｒｉｄｅｒ☆　－ＴＨＥ　ＢＡＴＴＬＥ　ＯＦ　ＡＣＥＳ－

第３話　追うべき背中

「そう、ここはあれから十年後の海鳴なのね。　それにしても……」

銀の瞳に怜治が映る。
彼女が最後に記憶していた孫は十にも満たない少年だったが、今は手足も伸びて男性らしい体つきになっていた。

「かっこよくなったね。　昔のレイにそっくり」

「レイ……ジジイの事か。　今のジジイを見てると、喜んでいいのか判らんのだが……」

「うん、私もあんなに薄くなるとは思わなかった」

ふふ、と薄く笑う。
あの時は怜治も塞ぎ込んでおり、このように会話することも少なかった。
本当に、成長したのだなとファミリアは実感した。

「さて、私がこうして居る事に驚かないってことは、私の事はもう知ってるの？」

「ああ」

「どこまで、聞いてる？」

怜治は記憶を掘り起こし、聞いた話を思い出せる限り述べていく。

「祖母さんとジジイが管理局員だったってこと。
ジジイが有名なデバイス技師で、祖母さんは有名な魔導騎士だったってこと。
そして――――――――」

スタンに手を置き、真っすぐにファミリアを見据える。

「――――スタンを家に持ってきたのが祖母さんだってこと」

「……そう、あの後、ちゃんと私は連れて行けたんだね」

よかった、とファミリアは安堵の息を零す。

闇の欠片に再生された彼女の記憶は、十年前に守護騎士に魔力を蒐集されるまでのもの。

その後の彼女の行動を、このファミリアは知らない。

リンディは、スタンが十年前に発見されたが回収任務に就いた魔導師は死んだと言っていた。

ファミリアが死んだ時と、闇の書に蒐集されたのも十年前。時期は合っていた。

「祖母さん、なんでスタンを家に連れてきた？

そりゃ今は感謝してるが、あんたの任務はスタンを管理局に渡すことだったんじゃないのか？」

「うーん……それはね、その子とあんたが似てたからさ。

一人ぼっちで、その哀しさを誰にも伝えようとしない。だから、もしかしたらアンタ達二人は息が合うんじゃないかと思ってね」

私の予想は正しかったね、とファミリアは笑って言った。

そして、一転して真剣な表情となった。

「怜治。あんたがその子を連れてここにいるってことは、あんたも魔導師に？」

「……ああ、もうすぐ一年経つ。今すぐってわけじゃねぇが、管

理局にも入るつもりでいる」

「そう……。　じゃ、あんたは局員になって何をするつもり？」

「何って……どういう意味だよ」

怜治の返答に、ファミリアは呆れて溜息を零した。

「何って、そりゃどういう道に進むかってことだよ。
私のように執務官になるのか、レイのようにデバイス技師になるのか、それとも武装局員か戦技教導官か、はたまたキャリアに進んで提督にでもなるのか、色々あるでしょ？」

「む……」

怜治は口籠る。
今考えてみれば、怜治の入局理由は管理局がスタンという遺失物（ロストロギア）を手中に収めておきたいからだ。　本局に被害を出しておきながらも怜治の入局が完全に白紙にならない理由の一端がこれだ。
そういえば、周りの連中を見てみると皆それぞれ自分の歩む道というものを決めているようであった。
なのはは教導官、フェイトは執務官、はやては捜査官、ユーノは無限書庫の司書だったか。
全員魔導師であるにも拘らず、四人とも目指す道は違う様子。
となれば、怜治も彼らのように進路を定める必要がある。

「――――――――」

思いつかない。
怜治にはそもそも大きな夢があるわけでもなく、なのは達のよう

に魔法を通して何か思うところがあったわけでもない。
簡潔に言おう。
松田怜治には、これと言った目標が未だないのだ。
それを悟ったのだろう、ファミリアが再び深い溜息を吐いた。

「はぁ……あんたって子は……」

「む、別にいいじゃねぇか。　やりたい事とかは、局員続けながら見つけるさ」

「ま、それでもいいんだけど……。
……ん、よし決めた。　稽古をつけてあげる」

言い終わると同時にファミリアの姿が霞む。
一瞬眩い光に包まれたかと思えば、彼女の姿が変わっていた。

「な――――っ！？」

怜治の前に、老婆の代わりに女性の姿が現れた。
背は怜治の鼻あたりで、年齢は怜治より少し上くらいか。
腰まで届く艶のある亜麻色の髪が風に乗って踊る。
白銀の胸甲の上から赤いジャケットを羽織り、腰にはジャケット同じ赤の外套を巻き、黒いホットパンツからはすらりと白い脚が伸びる。
唖然としている怜治が面白いのか、銀の瞳が愉快そうに光る。

「ふふ、闇の書もなかなか融通利くのね。　魔力量はさすがに無理だったようだけど、姿も体の感覚も寸分違わずあの時と一緒ね」

「……まさか、祖母さんか？」

その問いに、女性が不機嫌そうに頬を膨らませた。
「この姿で祖母さんなんて言わないでよね。
そうね……ざっと五十年くらい前の姿かしら」
「……」
ようやく理解した。
新しく現れた女性は、ファミリアの若かった頃の姿だと。
信じられないが、彼女が本人ではなく闇の欠片から再生された記憶だとしたら理解できない話でもない。
つまり、ファミリアの記憶を五十年分巻き戻し、姿もそれに合わせたということか。
ファミリアの右手が後ろに回り、腰から下げた剣を掴む。
時を遡ったのは、ファミリアだけではなく彼女の武器もだった。
怜治に切っ先を向けるその剣は美しく緋色に輝く。
煌めく炎の如く、フランベルグが真の主の下で真の輝きを取り戻していた。
ファミリアが前傾姿勢を取る。
銀の瞳には闘志が滾っていた。
それを感じ取り、怜治もスタンを大剣形態（ブレイドフォーム）に変形し斜に構える。
先ほどのまでの穏やかな雰囲気はいつの間にやら一変していた。
祖母と孫の何気ない会話がはるか昔に感じられるほどに、張り詰めた空気が結界内を支配する。
「結局、やるしかないんだな……」
少し悲しげに呟く。
どれだけ正確に本人の記憶を保持していようが、彼女は闇の欠片

であることに変わりない。
今の彼女の役目は、結界に入り込んだ者を狩ることなのだ。
だが、ファミリアは首をゆっくりと横に振った。

「別に、欠片としての役割は抵抗しようと思えばできるのよ。
でもさ、あんたが管理局に入るなら色々教えなきゃいけないことがあるでしょ」

「教えなきゃいけないこと？」

こくん、とファミリアが頷く。
そして、彼女の両足が虚空を蹴った。

「魔導師としての在り方を、ね」

それがゴング代わりになったのか、赤と黒と刃が激しくぶつかり合った。
騎兵（れいじ）が乗り越えるべきは己の祖母にして、“最強”と言われた魔導騎士。
過去最大の壁が、怜治の前に立ち塞がった。

ガギャン、と噛み合う鋼が悲鳴を上げる。
その細腕のどこにそんな力があるのか、黒い大剣が赤い剣に圧し返される。
体勢を崩したところで鋭い蹴りが奔（はし）る。
腹に突き刺さった一撃に怜治はたたらを踏む。

「――――――――」

無音動作で魔法が発動。

ファミリアの手に一振りの氷剣が治まる。
デバイスが詠唱した様子はない。
即ち、この氷剣はファミリア自身がデバイスのサポート無しで創り上げたものだ。
それだけでも、彼女の技量が高いことが判る。
氷剣が一閃。
それを大剣で受け止める。
その隙にフランベルグが一閃、峰で怜治の頭を殴り付けた。
お返しだと怜治が突き出した拳は体全体を独楽のように回転させることで回避され、その勢いのままに回し蹴りが脇腹に叩き込まれた。

「――――――――が、ああっ……」

苦悶の声が漏れた。
顎を引いて頭を下げたところへ容赦なくアッパーカット。
がら空きになった胸へ渾身の肘が槍の如く突き刺さった。

「――――がっ……！」

短い悲鳴を残して怜治の身体が吹っ飛ぶ。
虚空で無様に転げ回る様を見て、氷剣を破棄しながらファミリアは冷静に告げた。

「あんた、才能ないね」

「――――――ぐっ！？」

その一言が一番効いた気がする。
確かに、たった一度の打ち合いでここまで一方的にやられたこと

はなかった。
なにより、今まで真っ向からの力勝負で圧し返されたのは初めてな気がする。
頭では判っていた。そして、体でもしっかりと理解した。
松田…いや、ファミリア・オートザムは怜治の知る中でまさに最強。
フェイトよりもクロノよりも、プレシアよりもグレアムよりも強い。
今、目の前にいるのは管理局最強を誇った氷刃の騎士の全盛期か。
その看板に偽り無しだ。

「うーん、魔力量は私譲りで結構あるのに……。
やっぱり私が生きてるうちに魔法の事少しでも教えておくべきだったかしら？　でも、家に来た頃のあんたってほんと一杯一杯な感じだったしなー」

「く……そ……」

痛みはまだ体中を駆け廻っている。
休息を要求してくる身体に鞭打って立ち上がる。
犬のようにだらしなく息を荒げながらも、なんとか膝をついて立ち上がった。
それを見てファミリアは称賛のつもりなのか拍手を贈る。

「よしよし立ったわね。　今度は息を整えなさい、待っててあげるから。
……そうね、ただ黙ってるのもなんだし、昔の話でもしてあげよっかなー」

呑気な口調にカチンと来るが、まだ身体はふらつく。

大剣を支えにして、なんとか息を整えなければ次の一撃で意識を刈り取られそうだ。

「うーん、よし。　それじゃあ私がレイと初めて会った時の事をしてあげましょう。
そう、それはこんな感じに月がよく見える晴れた夜で――――」

「要らん……。　そんな、カビの生えた話に……誰が、興味持つか」

「む。　なかなか失礼な物言い。
結構壮絶な出会い方だったのよ、私と彼」

「知るか――――ってんだ！」

息を深く吸い込み、一気に疾走。
大剣を振り上げ、渾身の力を込めて振り下ろす。
それを――――

「はーい、ただ力任せに出した一撃なんて効きませ～ん」

――――容易く剣で受け止められた。
滑りこむように懐に潜り込まれ、胸に細い人指し指が添えられた。
親指を立て、中指、薬指、小指を曲げて、まるでピストルの様。

「っ――――――」

息を呑む暇もなく、魔力の塊が叩き込まれた。
指先から放たれたそれはまさしく魔弾。
零距離からの射撃が容赦なく穿つ。
咄嗟に後ろに飛ぶと、飛来する魔弾が氷弾に変わる。

襲いかかる氷塊を大剣で砕く。

『ったく、容赦ねぇなお前のバアさん！』

「まったくだ。　ジジイもあんな凶暴な女のどこに惚れたんグァボフッ！！？」

ファミリアの飛び蹴り。　つま先が怜治の腹に突き刺さった。
そのまま襟を掴まれ、額と額がぶつかる。
痛みで火花が飛んだ気がする。
怜治の視界いっぱいに、ファミリアの顔が広がる。
額にたった青筋は見間違いではないと思う。

「怜治。　間違っても女の子に凶暴とか凶悪とか、悪魔とか鬼とか暴力的とか猛獣とか歩く大量破壊兵器とか言っちゃダメなんだからね……」

「は、はい……」

『……言われたことあるんだ、特に最後……』

ファミリアは襟から手を離し、夕日剣を一閃する。
たたらを踏み、紙一重でかわした怜治をさらに追撃。
氷剣を精製し投擲する。
大剣で防いだところで夕日剣の神速の刺突が顔面に襲いかかる。

「――っんとに容赦ねぇな、おい！！」

首を限界まで曲げてかわす。
切られた黒髪が夜空を泳いで行った。

左手で今通過した右手を掴んでファミリアの身体を引き寄せる。
右ひざを上げ、蹴りをその腹に叩き込んだ。

「――――――――っ！」

初めて、ファミリアの表情が苦痛に歪んだ。
だがそれも一瞬。
脚を掴まれ、そのまま投げ飛ばされる。
弧を描いて宙を舞う怜治に、追撃に投擲された氷剣が三本、立て続けに命中し爆散した。
落下し始める怜治に走り寄り飛び蹴りが叩き込まれる。

「っ――――――がっ！」

身体を貫通するのではというほどの一撃を受けて悲鳴が上がる。
転がる体を起こし、虚空を蹴って突撃する。
大剣形態（ブレイドフォーム）から騎士形態（ナイトフォーム）に変形。
大振りになる大剣より、片手剣の方が隙が少ないと判断した。
直進してくる怜治に向かって氷剣が飛来する。
盾を構えて防ぎ、ファミリアに肉迫する。
蒼炎を手に出し、装填。　全身を蒼炎に包まれながら、渾身の刺突を繰り出す。

「火龍の、剣角ッ！！」

全身をバネにして突き出された神速の一撃が疾走する。
炎と剣圧の円舞（ワルツ）が月明かりの下で駆け回る。
ファミリアの姿はそれに呑まれて怜治の視界から姿を消す。

「……くそっ」

怜治の口から悪態が漏れる。
突き出した剣を通して身体に伝わる感触が、今の一撃が不発に終わったことを示していたからだ。
虚空を舐め回していた炎が消え、その奥の敵の姿が鮮明に映し出された。

「――――――――」

怜治は息を呑んだ。
今の刺突は自分にとっても渾身の一撃。
それを、ファミリアは防御壁を展開させることなく紙一重で回避しきっていた。
先ほどの怜治とは違い、髪の毛一つ傷ついた様子はない。
驚愕を表面に張り付けた怜治を見て、ファミリアの口元が吊りあがる。

「大剣じゃ隙が大きいってのは間違ってないけどね。　でも、炎を選択したのは失敗ね。
私の魔力変換は凍結、炎熱とは正反対。　魔力制御の技術は私が一枚も二枚も上だから、簡単に相殺できる」

ファミリアの左手が怜治の肘を、右手がコートの襟を掴む。
左脚を一歩踏み込み引き手を引いて怜治の体勢を崩す。
右足で怜治の左足を思いっきり刈り怜治の身体を一気に倒した。
流れるような動作によって行われた大外刈りによって、怜治は仰向けに倒された。
喉元に夕日剣が突き付けられた。
切っ先から放たれる殺気が肌を刺し、嫌な汗がどっと溢れてくる。
指一本でも動かそうものなら即座に殺される。　そう思った怜治

は大人しく真っすぐに祖母を見据えた。

「よろしい」

ファミリアはそう言うと殺気を納めた。

だが、剣は未だ喉元に突き付けられたまま。　このまま横になったまま話を聞けということだろう。

「……怜治、あんたは力技に頼りすぎ。　威力重視になるのも判るけど牽制ってもんを知りなさい。　相手の二手三手先を読んで動くのは魔法戦の基本、そのためのマルチタスクでしょうが。

アレだけやられて怖気づくことなく来るのは褒めてもいいけど、だからと言って真正面から突っ込んでくるもんじゃないわ。　喧嘩と戦闘は違うのよ。

防御魔法も全然ダメだし、今のあんたはスタンピードの性能のおかげで戦えてるようなものね。　ホント、魔力が高いだけのド素人よあんた」

がぁーっと機関銃のように捲くし立てるファミリア。

その一言一言が的を射ているので怜治は反論もできない。

確かに、マルチタスクの訓練もスタンが管理局に行ってしまったり闇の書事件やらで碌にできていない。

スタンの性能に頼るというのも自覚はある。

初めてザフィーラと戦った時といいグレアムの時といい、スタンがいない時に怜治はこっぴどくやられていた気がする。

ド素人という点にも頷くしかない。

奇妙奇天烈な希少技能があると言ってもそんなポンポン使えるような便利な能力でもない以上、怜治は未だ魔法に関しては素人なのだ。

「……」

急に、ファミリアの表情が切り替わる。
出来の悪い教え子に呆れるような表情から一変、真剣でありながら、どこか悲しげな表情。
まるで、何かに躊躇しているかのような表情だった。

「――――――」

怜治は何も言わずにファミリアの言葉を待つ。
やがて、意志を固めたのか、ファミリアが口を開いた。

「怜治、管理局員なんて止めなさい」

ガツン、と頭を殴られるような衝撃が襲った。

「……え？」

思わず、戸惑いの声が漏れた。
ファミリアが銀の瞳を真っすぐ向けながら続ける。

「別にあんたが弱いからこんなこと言ってんじゃない。
ただ、あんたみたいに理想も夢もない人間に、管理局の仕事は辛いだけよ。
あそこは、ただ善行だけをやり続ける理想の組織じゃない。　清濁が混じり合い、権謀術数が飛び交う、光と闇が渦巻く伏魔殿に近いわ。
そんなところに、孫（あんた）を行かせたくはない。　レイや私があんたに魔法をすぐに教えなかったのもそれが理由の一つよ」

いつの間にか、剣は喉元から引かれていた。
それでも怜治は起き上がろうとしない。
彼の脳ではファミリアの言葉を反芻し、噛み砕き、その意味を理解しようとフル回転していた。

「今のあんたは感情で動いているにすぎない。執務官になりたいとか、教導官になりたいとかいう具体的な目標もない。　困っている人を見過ごせない、なんていうものでもない。ただ自分の近くで起きた事件が魔法絡みで、自分にも火の粉が振りかかりそうだったから。　違う？」

怜治は答えない。
それは肯定と同じだ。
P・T事件ではジュエルシードという危険物が街中に散らばってしまったから、闇の書事件では世界そのものが崩壊するのではと言われたから。
言ってしまえば、怜治が動く理由は危険が自分に振りかかるかもしれなかったから。
同じ地球出身の魔導師でも、なのはのようにユーノを手伝いたいという善意でも、はやてのような贖罪でもない。
確かに、松田怜治には夢も理想もない。
想いが伴わない魔法に意味はないのだと、ファミリアは言っているのだ。
なんの夢もない魔導師が管理局では生きていけないと言っているのだ。

「……昔、ある女の子がミッドチルダの北部に生まれたの」

月を見上げ、そのさらに遠くを見るようにしてファミリアが語り出した。

「その子は生まれつき強い魔力を持ち、騎士としての資質もあった。大の大人でも苦戦するような訓練も十歳になる前に合格した。周りのみんなが、その子のことを天才だと褒め称えたわ」

夜風に舞う亜麻色の髪を抑えながらファミリアは続ける。

「女の子はやがて周囲からの勧めもあって管理局に入局したわ。いろんな任務をこなして、結果を出して、大勢の人から称賛されたわ。でもね、それでもその子は嬉しいとは思えなかった。いいえ、むしろ悲しいとさえ思ったわ。

当然よね。周囲の人たちが求めたのは彼女の力とそれが出す結果、彼女自身を求めていたわけじゃないもの」

感情を押し殺した声。

彼女の言う“女の子”が、ファミリア自身のことだと気付いた。

最強と呼ばれ、多くの魔導騎士達の憧れ。

天賦の才も、騎士としての栄光も、彼女を縛り付ける鎖でしかなかったというのか。

「……そう。夢も理想もなく、力だけを持っていた結果がそれ。だから、あんたにもきっとそういう未来が待ってる。求められるのは力と結果。松田怜治という一個人を誰も求めない。あんたには何の見返りもない世界。

そんな組織に所属する必要なんてないのよ……」

「……だったら」

「ん？」

「……だったら、なんで祖母さんは管理局員なんて続けたんだ」

え……、とファミリアが驚愕に目を見開いた。

「辛かったのを、どうして死ぬまで続けたんだ。　ジジイと結婚したのを期に辞めることだってできたはずだ。　なのに、あんたは続けた。　何が、あんたを管理局に居続けさせたんだ……」

「――――――――」

ファミリアは答えない。

考えたことも無かったのかもしれない。

管理局を辞めるなんて考えに到らない程に、彼女にとって管理局魔導師は生活の一部になっていたのだろう。

だからこそ、怜治は訊ねる。

何が、彼女をそうさせるのかを聞きたかった。

「祖母さん、俺は魔法に関わって色んな奴に遇った。　そして、どいつもこいつも理由は魔法に込める想いってのは違ってた」

純粋な善意、愛する者への献身、犯した罪への贖罪、亡き父の遺志の継承、自ら課した責任を果たすため、と皆様々だった。

無論、歪んだ想いを持った者もいた。

亡くしたモノを取り戻そうと破滅の道を歩んだ黒衣の魔女。

大切なモノを奪った者への復讐に駆られた年老いた英雄。

いま思えば、彼らも歪みながらも確固たる芯のようなものがあった。

「どうしてあいつ等は……ああも一つのモノを目指していける」

「……それしか、無いからよ」

絞り出すような声に乗って、答えが返って来た。

「でも、あんたには他にも道はある。　わざわざ辛い道を選ぶ必要はないわ」

「……」

ファミリアの言う通りなのかもしれない。

たった一つしか残されていなかった彼らと違い、怜治にはまだ選択の余地がある。

この一年で関わった事件で、怜治はそれぞれ死の一歩手前まで行った。

管理局に入ればそんな危険な目に遭う率は高まるだろう。

「――――――」

だが、そんな危険に身を置くほどの価値がある何かを、彼らは見ていたのではないだろうか。

文字通り命を懸けて、人生を賭けていた彼らが見ていたモノを、見たいと思った。

「祖母さん。　俺、やっぱり管理局入るよ」

「怜治……」

「祖母さんが何を見てきたのか、目指したモノってのを俺も見てみたくなった……」

真っすぐに怜治を見据え、やがて呆れたような溜息を零した。
怜治に背を向けて離れていく。
立ち上がり、スタンを大剣に変えて構える。

「あんたって子は、言い出したら聞かないところとかホントにレイにそっくりね……」

くるりと回り、再び怜治に対峙する。
その表情には綺麗な笑みが浮かんでいた。
両手の指の間に計八本の氷剣が挟まっている。

「……祖母ちゃんからの卒業試験よ、怜治。この魔法を破れたら、認めてやるよ」

静かな宣言と共に氷剣が投擲された。
八本の氷刃が弧を描いて宙を舞う。
剣が立方体の頂点になる様に中空で止まる。
獲物を捕らえた檻のように重厚な音を立てる。

「――――――」

ファミリアから膨大な魔力が放出される。
溢れだす魔力が装填されるカートリッジの圧縮魔力と同時にフランベルグに注がれていく。
騎士の体が、神々しい赤い魔力光に包まれていく。

「此処に、標（しるべ）を建てよう――――」

伽藍とした空間に、静かな詠唱が響き渡る。

「この先に在るのは命無き世界。
無情の北風は想いを凍てつかせ、希望の熱を奪い去る。
天を覆う死霊の暗雲。　大地に満ちる怨念の絶氷。　死に逝く様を見届けるのは我一人。
剣を突き立てるのは我に非ず――――
銃の引き金を引くのは我に非ず――――
槍で胸を穿つのは我に非ず――――
弓で眉間を射るのは我に非ず――――
言霊で心を呪うのは我に非ず――――。
我は只の道標。
生に迷いに旅人を、破滅の道に導くのみ」

詠唱が終わる。
ガキン、と鉄檻に錠が掛かる様に結界が完成した。
「起動（ロールアウト）――――――魔封、氷結世界（ニブルヘイム）」

結界が起動した。
怜治のファミリアを囲み、外界から遮断した結界が牙を剥き始める。

「ん――――なあっ！？」

ビキビキと怜治の身体が凍りついていく。
怜治だけではなく、スタンにも獲物に群がる蟻のように氷が張って行く。
結界内の温度が下がっているわけではない。
事実、ファミリアの身体には一切の異常が見られない。
同時に、まるで重しを背負ったかのように体が重くなる。

「これは、魔力切れん時の――――――まさかっ！」

「へぇ、気付いたんだ」

上出来上出来、と嬉しそうに笑みを浮かべる。

「この結界（ニブルヘイム）はね、相手の魔力を強制的に凍結変換するものなの。

結界ってのは大抵内側にある者を守るものだけど、これは内側の者――当然私は除くけど――の魔力を際限なく奪い尽くす拘束系の結界。

私が現役時代に使っていた対魔導師戦における切り札よ」

まぁ闇の書相手には起動させる前にやられたんだけど、とファミリアは語る。

つまり、この結界の中に居る限り自分の魔力を氷に変えられていくということ。

相手はやがて魔力が底をつき、倒れる。

成程、魔導師というのは魔力が空になると動きが途端に鈍くなる。

加えてこの凍結変換。　体温まで奪われれば意識を保つのも難しくなろう。

「……ったく、なんてえげつねぇモン使いやがって……！」

「文句言ってる暇があるなら抜け出す方法を考えなさい。

魔力量がいくら多くても、体温も並行して奪い続けるニブルヘイムの前じゃそう長く持たないわよ」

「く――――そ……！」

ファミリアの言うとおりだ。

彼女は何もせずとも標的が力尽きていく。
ならば、事態を変化させるには自分から動くしかない。
全身に力を込める。

「――――――――！」

膝が崩れる。
体力の限界ではない。
背中に富士壷のように氷が重りとなって怜治を圧し潰そうとしているのだ。
魔力・体温・体力が同時に奪われていく三重苦。
加えて、力を込めると自然と魔力を放出してしまい、それが氷になって散っていく。
これではまるでアリジゴクだ。
一度捕まったら最後、もがけばもがくほど自分の命を削って魔導師殺しの結界。
ファミリアの必勝パターンに怜治は嵌ったのだ。

「――――さて、どうするのかな……」

静かに、落ち着いた声でファミリアは言った。
この結界を打ち破る方法は二つある。
一つは結界の基点となっている八つの氷剣を砕くこと。
八つの剣を頂点にしてそれぞれを線で結び、面を為して結界として機能しているのだからそれを破壊すれば結界は消滅する。
二つ目は術者であるファミリアの撃破である。
結界維持に必要な魔力を供給しているのがファミリアなのだから、彼女を倒せば結界は自然消滅する。
だが、この二つの方追うにはどちらにも問題点がある。

一つ目の基点を壊すという方法だが、当然基点となる氷剣を守るための術式も施されている。
まずはその術式を見つけて解除しなければ基点の破壊はできない。
二つ目のファミリア撃破の問題点は、勿論ファミリア本人を倒すこと自体が難しいというところだ。

（今まで、この結界を敗れたのは三人だけ……。
ラルゴは素早く術式を見つけて基点を破壊して解除したし、弟子のゼストは詠唱中の隙をついて私を倒した。　覇王ッ子は……思い出すのやめよ）

あれは痛かったなー、と独り語散る。
あまり良い思い出ではないらしい。

「――――お！」

期待の籠った声を上げる。
一度膝をついた怜治が、再び立ち上がった。
怜治が大剣を掲げる。
黒い瞳が真っすぐにファミリアを見据えてくる。

「やっぱり、私狙いか……」

予想はしていた。
知識のない人間がいきなり基点をどうこう、という考えに行くとは思ってなかった。
では、怜治はどうやってファミリアを下すつもりなのか、そちらに興味が向いていく。

「――――ぁぁぁあああああああっ！！」

怜治が咆えた。
魔力が一気に放出される。

「――――――――――！」

驚愕に、ファミリアが眼を見開いた。
放出された魔力は結界によってすぐさま氷塊に換えられ、重力に従って落下していく。
それでも、怜治は魔力の放出を止めない。
これ以上ない愚行だと、ファミリアは思った。
怜治がやっているのはただ自分から底無し沼に潜って行くようなもの。
何もせずとも魔力を奪われていくというのに、自分からそれを加速させるなど正気の沙汰ではない。

「……ああ、成程ね……」

その疑問はすぐに解決した。
怜治の全身に氷が張っていく。
だが、それは彼の体を凍て付かせるのではなく、まるで彼の体を守る様に覆って行く。

「変換魔力の吸収か……。　でも、暖を取るのに氷の鎧ってのはどうかと思うな」

となればアレは戦闘用だろう。
氷で身を固めて突貫し、接近戦で一気にケリをつけるつもりか。
だが、それはファミリアが真っ向から受けるのが前提となる。

ファミリアからしたら、こちらが何もせずとも相手は勝手に自滅していく。
なのにわざわざ剣を交える必要はない。
時間いっぱいまで逃げに徹すればいい。
いつでも回避運動に移れるよう集中する。

「……――――なっ！？」

目に飛び込んできた光景が、集中を途切れさせた。
ファミリアの視線が、大剣に向けられる。

「――――――――」

大剣が、巨大化していた。
正確に言えば、大剣が氷に包まれ、本来の五倍以上の大きさに膨れ上がっていた。
大剣に注がれた魔力が氷に変換され、それが積み重なることであの巨大さを形成していた。
大剣というより巨剣。
人間が扱える大きさを凌駕していた。
だが、怜治はそれを振り上げる。
全魔力を腕に込めて筋肉の限界を超えて強化。
先ほど纏った氷の鎧もそれの補助なのか。　それとも魔力の集中に時間がかかっただけの副産物なのか。
どちらにしろ、あの剣の巨大さは想定外だ。
あの巨剣を振り回されたらどこにいっても逃げられまい。
死に物狂いで回避に全神経を集中させるか、全身全霊を以て防御に徹するしかない。

「いや、もう一つあるか……」

剣を構え、前傾姿勢を取る。
両足に力を込めて疾走の準備。
回避でも防御でもなく攻撃。
あの巨剣が自分めがけて下ろされる前に怜治の意識を刈り取る。
回避に徹しても、わずかでも掠ればそれが決定打になりかねない。
防御に徹しても、あれを受け止めきれる自身は無い。
危険はどの手段でも同じ以上、少しでも可能性の高い攻撃に全てを賭ける。

「――――――――」

「……」

一瞬だけ視線が交錯する。
それが、最終ラウンド開始のゴングになった。

「――――シッ！」

虚空を蹴り付けファミリアが疾走する。
その様はまさに赤い弾丸。

「……ぁぁぁぁぁあああああああああああっ！！！」

咆哮が轟き、巨剣が降下を開始する。
空気を切り裂き、彗星にも近い剛剣がファミリア目がけて落下する。
初動はほぼ同時。
間に合うか、などと余計な思考を排除し、ただ己の一撃にのみ集中する。

「――――――」

自分の頭上に影が落ちるのをファミリアは感じた。
巨大な物が自分に向かって来るという恐怖は感じない。
緊迫した状況が恐怖心を麻痺させていた。

「……」

だが、彼女を一心に見据える黒い瞳に気付いた。
ただ塞ぎ込むだけだった子どもが、今成長した姿で自分の目の前に立っている。
その瞳に灯る意志の強さは、ファミリアの予想をはるかに超えていた。

「――――――終わりだ」

その刹那の思考が、勝負を分けた。

「――――氷鎚屠竜撃……！」

電源を落とすように、ファミリアの視界が闇に落とされた。

再び意識が浮上した時、最初に目に飛び込んできたのは怜治の相貌だった。

黒い瞳がジッとファミリアを見つめていた。
月が遠い位置にある。
どうやら自分は大地に叩き落とされたのだと気付いた。　結界（ニブルヘイム）は、既に解除されていた。
ファミリアはアスファルトの大地に背を預け、頭の横には大剣が突き立てられていた。

「そっか……負けたか」

なんとも無茶苦茶な手段で負けたなと思った。

「でも、まだまだだね」

怜治の戦法は言わば肉を切らせて骨を断つ。
聞こえはいいかもしれないが、そんなものは魔導師としては二流だ。
特に、武装局員として立て続けに戦闘任務に就くこともある以上、一々肉を切らせていたらいつか力尽きる。　それではダメだ。

「無茶に耐え得る力より、無茶をせずに済む力の方が大切よ。　よく覚えておきなさい」

ファミリアの忠告に、怜治は一瞬迷いながらも確かに頷いた。
今は理解できなくとも、いつかできるだろう。

「もう……時間ね」

体から力が抜けていく。
別れも近い。
だから、できる限り言葉を交わしておこうと思った。

「怜治、友達はできた？」

「ああ。　毎日バカやって騒いでるよ」

優しい光が騎士の体を包む。

「可愛い彼女とかできた？」

「まだだな。　どうも俺の周りにいる女は物騒でイカン」

若い姿から年老いた姿へと戻って行く。

「ご飯、ちゃんと食べてる？」

「大丈夫だ。　俺だってもう料理くらいできる」

足元から光の塵に変わって行く。

ファミリアが挙げた手を、怜治はしっかりと握りしめる。

「祖母さん……」

「なんだい？」

「あなたが居てくれたから、今の俺がある。

あなたが居てくれたから、スタンと会えた。

あなたが居てくれたから、俺はあなたの背中を追って行く」

腰までが消えた。

消滅は止まらない。

「決めたぜ祖母さん。　俺の夢はあんたに追いついて、あんたを追い越すことだ。
あんたの理想が俺の理想で、あんたの夢が俺の夢だ」

「……私の夢は、そう簡単に叶えられるものじゃないわよ」

「上等。　そうでなきゃやりがいがねぇ」

ファミリアが笑みをこぼす。
胸まで消えた。
枝分かれするように、両腕が順々に消えていく。

「……怜治、最後の忠告よ。　最高評議会には気をつけなさい。
連中、年を経るごとに考えが物騒になってきてるから」

「ああ」

握っていた手が粉雪のように消えた。
首まで消え、あとはその穏やかな双眸を残すのみ。

「……」

口まで消えた。
最早言葉はかわせない。
だから、精一杯の感謝の言葉を伝えておく。

「ありがとう。
大好きだったよ……祖母ちゃん」

「……」

にっこりと微笑んだまま、松田ファミリアの姿が消滅した。
結界が消滅する。
後に残されたのは怜治の身に刻まれた傷跡のみ。

「……」

静かに立ち上がる。
その瞳に悲しみはなく、強い意志の炎が煌煌と燃え盛っていた。
目標は決まった。
夢は定まった。
理想は掲げた。
あとは、それを成し遂げるために走り出すだけ。
目指す者の背中は果てしなく遠い。
それでも、怜治は駆け抜けるだけだ。
そのためにも、早くこの騒ぎを終わらせよう。
目の前に立ちはだかる困難は数知れず。
ならば、後ろから忍び寄る縛鎖など、一瞬で粉砕しろ。
そう心に誓い、怜治は飛翔した。

第37話　追うべき背中（後書き）

アンケート終了まであと1週間を切りました。
まだやっていないという方はお早めに……。

第３８話　星光の殲滅者（前書き）

東北で地震があって早１週間。
東海地方に住む自分も他人事じゃなねェとビクビクしてます。

被災者の方の力に少しでもなればと募金しに行くか……。

第３８話　星光の殲滅者

なのはや怜治達の働きにより、闇の欠片がつくりだす結界の数は確実に減っていった。
あれ以来マテリアルとの戦闘もなく、このまま順調に事態は収束するかと思った。
だが、相手は長い年月を活き続けた闇の書。そう簡単に済むはずがなかった。
それは、エイミィからの通信で全員に伝わった。

『海上に、異常反応！！　特殊結界を確認！　魔力反応……大きいッ！』

それは、現場にいた怜治達もすぐに判った。
全身を突き刺すような鋭い魔力。
禍々しく、全てを圧し潰さんとする巨大な魔力。

「――――――――」

怜治は息を呑んで、海の方向を向く。
街の中心からでも分かるほど濃い魔力が繭のように蠢いていた。

『怜治！』

クロノからの通信。
少年の顔がウィンドウに映し出される。

『怜治、気付いているか？』

「ああ、いくら俺でも気付く」

海上の繭に目を向ける。

蠢くソレに向かって、光の塵たちが一点に集まっていく。

まるで胎児に養分を運んでいるようだ。

「結界が……消えて行ってやがる」

それが光の塵の正体だ。

今さっきまで街中に展開していたはずの結界が消え、塵となってあの繭に向かって流れ込んでいるのだ。

「――――――やばい、んだろうな」

ああ、とウィンドウの向こうでクロノが頷いた。

繭のようななにか、そこに流れ込む闇の欠片。

欠片たちは闇の書復活のために魔力を集めていた。

それが今、蜜を集め終わったミツバチが巣穴に戻る様にあの繭に向かっている。

力を蓄えた繭が行うことはただ一つ。

「闇の書の核が……」

『――――蘇る』

E BATTLE OF ACES－
第４話　星光の殲滅者

繭が割れた。
幼虫が蛹（さなぎ）を経て成虫になる様に、羽を広げるように魔力が噴き出した。
怨霊のように踊る魔力。
触れたものから命を奪い、枯らせ腐らせる破滅の使者が嘲笑を響かせながら舞い踊る。
その中心。
闇の魔力を従えて、闇統べる王が降臨した。

「ふふ……はは……ッ！　力が漲る……魔導が滾る！」

闇色の騎士甲冑を纏い、背から黒翼が広げる闇の王。
銀月色の髪が妖しく輝き、翡翠色の瞳が狂喜に揺れる。

「集え、闇の欠片よ……我が身に捧げる贄となれ……ッ！！」

手をかざし、欠片たちを貪りグングンと力を蓄えていくその姿は、意外にも少女の姿だった。
その姿を見て、リインフォースが愕然とする。

「あれが構築体（マテリアル）の中枢……。　よりにもよって、何という姿を……ッ！」

その姿は、彼女の主、八神はやてと瓜二つだった。
無論、同じなのは見た目だけ。
あの姿からは、はやてが持つ穏やかで温かい心も優しさも感じない。

「……ッ！」

ギリッ、と唇を噛むと粘り気のある血の味が口内に広がる。
ギシッ、と拳を握りしめれば爪が食い込み血が滴り落ちる。
できることならば、今すぐにでもアレを滅ぼしてしまいたい。
主を敬愛する融合騎にとって、彼女の姿を真似ることはこれ以上ない侮辱である。

「だが、あの凶悪な魔力……。　壊れかけたこの拳で…止めること、かなうか…？」

悠久の旅を終わらせるために、リインフォースはその力のほとんどを失った。
本来なら戦うことも難しく、下手すれば干からびた泥のように脆く崩れ去ってしまう。
捨て身の特攻などしてもアレに傷一つつけることすらできないだろう。
それほどにリインフォースの力は枯渇し、それほどに闇統べる王の力は漲っていた。

「いや、違うな……かなうか、ではない。
止めるのだ。　主や騎士達を守るため……、雛鳥たちの空を開くため……」

リインフォースの背に黒翼が展開する。

苛立ちから握った拳を解き、力強く握り直す。
すでに、十分に生きた。
ほんの僅かな日々だったが家族と幸せに過ごすことができた。
元を辿ればこれも自分が犯した罪の一つ。
「私がこの身に――――命に代えてでも！！」
ならば、贖罪のためにこの身を捧げよう。
「――――――――、はあっ！！」
拳に出来得る限りの魔力を込めて飛翔する。
目標は言うまでもなく闇統べる王。
相手がこちらに気付く前に、防御の姿勢を取る前に、祝福の風ができる最高の一撃を叩き込む。
「暗黒効果（シュヴァルツ・エフェクト）！！」
魔力によって強化された鉄拳が怨霊の壁を粉砕。
神速の拳が、大砲の如く闇統べる王の横顔を穿つ――――――――――
「――――ブラストファイアー」
――――直前、桜色の熱線がリインフォースを包み込んだ。
「っあああ……！」
身を焼かれ、リインフォースの体が堕ちていく。

「――――――」
「……」
その様を蔑むように見下ろす闇の王。
そして、無感情に見つめるのは――――
「高町……なのは？」
「いいえ、私は理のマテリアル。　星光の殲滅者」
黒いバリアジャケットに身を包んだ少女が名乗りを上げた。
少女の手に在るのは血のように赤い魔法使いの杖（レイジングハート）。
雷神の襲撃者と同じだ。
闇の書の構築体が、高町なのはの姿を取って顕現したのだ。
「――――くっ！」
黒翼で空気を掴み、体勢を立て直す。
王を守る様に立ちはだかる星光の殲滅者が杖を向ける。
防御壁を展開しようと身構えた時、殲滅者の杖先が標的を変えた。
「――――――」
夜空から桜色の閃光が飛来した。
自分めがけて墜ちてくる彗星を殲滅者は無言で迎え撃つ。
激しくぶつかり合う二つの砲撃。
結果は引き分け。
光の奔流が爆散し、雪のように降り注ぐ。
「リインフォースさん、大丈夫ですか！？」

白いバリアジャケットの少女がリインフォースを守る様に前に立つ。

「高町、なのは……」

その小さくとも頼りになる背中を向けたままなのはは頷く。
状況は判っている。
今何をすべきかも判っている。
少女の背中がそう語っていた。

「……」
「――――――」

無言のまま、なのはと殲滅者の視線が交錯する。
まるで鏡に映る像を見ているようだ。
だが、姿は同じでもその性質は真逆だと本能的に感じる。

「なんだ、星光の。　やはり自分のオリジナルは気になるか？」

「……そうかも、しれませんね」

冷淡な返答。
王はそれでも満足なのは薄く笑う。

「どうやら、ようやく役者も揃ったようだな」

眼を細め、何もない中空を見つめる。
その場に新たな魔力の反応を感じると同時に虚空に亀裂が走る。
黒い魔導二輪に跨った怜治が空間を超えて現れた。

騎兵に続く様に艶やかな黒翼を羽ばたかせて八神はやてが舞い降りる。
二人の視線は真っすぐに闇統べる王へと向けられる。

「……」

はやては自分と瓜二つの容姿の少女の姿を見て、嫌悪の感情を遠慮なく露わにした。
自分と同じ顔でありながら、感じる禍々しい魔力は自分と正反対である。
まさに光と闇。
決して相容れないであろう存在だと直感的に理解した。

「――――――」

怜治は不思議な感覚に襲われていた。
フェイトに続き、なのは、はやてと同じ顔の少女が二人。
なのはもどきが雷神の襲撃者と同じ構築体（マテリアル）だということは一目でわかった。
だが、はやてもどきからは別のものを感じていた。
そう、まるで以前どこかで遇ったことがあるような感覚。
その正体不明のむず痒さに辟易していると、闇統べる王が笑いを浮かべて顔を向けた。

「ふふ……こうして直に顔を合わせるのは初めてだが、敢えて久しぶり、と言おう。
元気そうだな、小僧」

「……てめぇ！」

疑念が晴れた。
雷神の襲撃者を倒した時、クロノは怜治の瞳が翡翠色になっていたと言っていた。
闇統べる王の瞳も翡翠色。
加えて今の物言いで正体は掴めた。

「そうか、てめぇか。　グレアムん時といいフェイトもどきの時といい、横槍入れてくれた奴は……！」

「酷いのう。　我があの時手を貸してやられば、貴様は死んでおった。
即ち、我は貴様の命の恩人ということよ……」

「自分で言うな。
まぁいい。　お前を倒せば今度こそ、この騒ぎは終わるんだな」

スタンを大剣形態（ブレイドフォーム）に切り替えて斜に構える。
自分に向けられる脅威にも動じず、薄笑いを浮かべる闇統べる王。
ふと、空を仰ぐ。
こちらに向かってくる魔導師たちの魔力光が星のように輝いている。

「抵抗しても無駄やで。　夜天の書の守護騎士達にクロノくん、フェイトちゃん、アースラスタッフのみんながこっちに向かって来とる。
闇の書を砕いたメンバーや。　あんたらに勝ち目はあらへん」

「ふっ……子鴉風情が囀るな。
だが、確かにあの数で喚かれては五月蠅くてかなわん」

闇色の剣十字が掲げられる。
杖が瞬き、巨大な結界が発生。　怜治・なのは・リインフォース・はやてを除く魔導師の侵入を阻んだ。

「く……これは……」

「固ぇ……」

中に飛び込もうしたシグナムとヴィータを容易く弾き、闇の結界は悠然とそこに在り続けた。
外部からの干渉は不可能。
守護騎士たちは、ただ主の健闘を見守るしかなくなった。

「ふむ。　これで邪魔者は入らぬ。
思う存分、うぬらを蹂躙してくれよう！」

「生意気ほざくな。　ようはあの数を一遍に相手できるほど力が戻ってねぇんだろ」

指摘され、王の顔が歪む。
魔力に混じって重い殺気が叩きつけられ、一瞬たたらを踏む。
その様子に満足なのか、王の口元が吊り上がる。

「まずは、闇統べる王の玉座を自ら棄てた愚か者を守護騎士の前で嬲り殺しにしてくれよう。
主を血祭りに上げられる様を見て、奴らが己の無力さに打ち拉がれる姿が目に浮かぶ……」

闇の王が嗤う。
その姿を見た全員に悪寒が走る。

この少女の形を取った闇は、本気で楽しんでいる。
人が苦しむ様を、悲劇や絶望にのた打ち回るのを、愉悦を覚えている。
まさに闇の中枢。
絶望の怨磋に塗れた書が生んだ闇の権化だ。

「さて、開幕と行こう！　今が、闇の書復活の時だ！！」

カン！　と闇の剣十字が虚空を叩く。
海上に展開された結界に、部屋を三つに分けるように二つの隔壁が墜ちる。
左側の空間に高町なのはと星光殲滅者。
中央の空間に八神はやて・リインフォースと闇統べる王。
そして、右側の空間には――――

「おいおい、俺だけ待ち惚けかよ」

怜治だけ、相手がいない。

「安心せよ。　小僧の相手は、きちんと用意してある。
――――さぁ、出でよ。　業の構築体（マテリアル）！」

虚空が罅（ひび）割れる。
雛鳥が卵の殻を破る様に手が突き出て、頭、胴、脚と出てその全体像を露わにする。

「……」

怜治は絶句した。
自分の目の間に現れたのは、小麦粉のプールにでも飛び込んだの

かと思わせるほど全身白一色の松田怜治だった。

「――――――――」

思わず息を呑む。

なのはやはやてが自分の姿を真似た構築体に遭った感覚はこんな感じだったのだろうと思う。

同時に、目の前のニセモノは、他の構築体とはどこか違う雰囲気を出していた。

第一に、雷神の襲撃者といい星光の殲滅者といい闇統べる王といい、どのマテリアルたちの姿は闇の書らしく黒。

だが、業のマテリアルと呼ばれた青年は白一色。　髪も肌も身に纏う防護服も白。　一瞬眩暈を起こしそうな気分の悪い白。

第二に、他のマテリアルたちはオリジナルとほぼ同じデザインのバリアジャケットなのに対し、業のマテリアルのバリアジャケットは怜治のそれとは異なる。

黒コートの怜治に対し、業のマテリアルは白のレザーアーマーの上から白のジャケットを羽織っている。

第三に、マテリアルたちの武器はオリジナルとほぼ同じ形状なのに対し、業のマテリアルの武器は双剣。

他のマテリアルたちがなのはたちの姿を映した鏡像とするなら、業のマテリアルは生き別れの双子の兄弟と言ったところか。

無論、怜治にそのような身内はいない。

だからこそ、目の前の相手に戸惑いを覚えた。

その様子が可笑しいのか、くっくっ、と業のマテリアルが笑いを押し殺している。

「……なにを笑ってやがる、てめぇ……」

「いや、こうも予想通りの反応をされると却って可笑しくてな。

気にするな。　この身は闇の書によって掬い上げられた夢の残骸。
確かに他のマテリアルたちとは事情が異なるが、やることは同じだ」

ゆったりとした速度で、殺気が漏れ始める。

「オレは悪意を司る業のマテリアル。　名は――――」

背中に携えた双剣の柄が握られる。

「――――鉄心の殺戮者」

刃がぶつかり合う後が耳朶を打つ。
一つ間を空けた場所での戦いだが、緊迫した空気を震わせてその剣戟は確かに高町なのはの耳に届いていた。

「――――――――」

それでも、なのはの視線は一点に集中している。
目の前に佇むのは自分とほぼ同じ容姿の少女。
白服の自分に対して彼女は黒服。　髪も自分より少し短く、肩の辺りで切り揃えられた栗毛。
手に持つデバイスも、形こそ同じ。　その色は自分が持つ金の杖とは違い黒みを帯びた赤。

人から流れた血がそのまま形を成したような赤い魔杖。
まるで水面に映った自分の心の闇が、そのまま這い上がって来たかのようだとなのははは思った。
事実、不思議と戸惑いは少なかった。
突然二人だけの空間に隔たれても動揺はない。
おそらく、隔たれることがなかったとしても彼女の相手はなのはがしていただろう。

「なぜでしょうね……」

「……そうだね」

突然投げかけられた呟きに、無意識のまま返答していた。

「わたしは、鉄心ののように貴女（オリジナル）になんの感慨もないはずなのに、心が滾ります。
眼前の貴女を砕いて喰らえと胸の奥から声がします」

「ん……。　でも、やられちゃうわけにはいかないかな……」

彼女の言い分を、自然と受け止めることができた。
その理由をなのははは気付いている。
星光の殲滅者は、高町なのはの影なのだ。
昔、高町なのはの父親が事故で大怪我したことがあった。
予断を許さない危険な状態が長く続いた。
その間、母は喫茶店で忙しく、兄姉は看病と家業の手伝いで、なのははそんな家族の負担にならないようにと自己を押し殺し、誰かに迷惑をかけない『いいこ』を演じていた。
自分の無力さが辛かった。
何もできない手持無沙汰が苦しかった。

魔法に出会い、自分にできることを見つけたことでその辛苦は消えた。
けれど、もしも消えずに『いいこ』を演じ続けていたとしたら……。
その結果が目の前の黒い少女だ。
自己を殺し、機械のように静かにそこに居るだけの存在。

「――――――」
「……」

両者、無言で杖を構える。
語る言葉は不要。
ただ己の魔導をぶつけ合って雌雄を決する。
胸に滾る感情の意味を知るために、
弱かった頃の自分にケジメをつけるために、
二人の少女の魔導がぶつかり合う。

右から剣戟、左から砲撃の音が絶え間なく響く。
仲間たちはすでに闘いを始めている。
ならば、この場もすぐに戦闘が始まるだろう。
八神はやては真っすぐに自分の姿を模る闇を見据える。

「……」

視線を合わせ、闇統べる王はにたり、と下卑た笑みを浮かべる。
それが酷く不快に感じる。

その挙動一つひとつが夜天の主としての自分の存在を嘲笑っているようで気に障る。
体の中を蟲が這い回っているようで全身を掻き毟りたくなる。
穏やかな性格のはやての中に、珍しく憎悪にも等しい感情が溢れてくる。
あれを許すな。
あれを認めるな。
あれを存在させておくな。
あれを今すぐにでも消し去れ。
体の奥底から湧き上がる感情のまま、はやては駆けだしそうとした時、

「我が主、ダメです！」

リインフォースに止められた。
融合騎は主の腕を掴んで疾走を妨げる。

「リインフォース、離してくれへん？」

低く冷たい声。
その言葉には彼女本来の温かさが無い。
ゾクリとしながらもリインフォースは離さない。
今手を離せば、はやては感情のままに飛び出してしまうだろう。
はやての魔法資質は高いと言ってもいい。
魔力もなのはや怜治たちより高い。
だが、彼女には経験が足りない。
彼女が魔導師として生きると決めてまだ一週間足らず、いくら日々訓練をしているとは言えこの場で戦闘を行うにはまだ早すぎる。
経験とは戦闘するにあたって決して軽視できるものではない。
いや、それ以上に主を危険な目に合わせたくないという想いが強

いだろう。

「……」

「……」

真っ向から睨み合う夜天の主と融合騎。

危険な目に合わせたくないというのははやても同じだろう。

リインフォースは改編された防衛プログラムの無限再生という呪縛から解放されるために、融合騎としての力の大半を失った。

それはつまり、戦闘力の喪失を意味する。

今のリインフォースは、例えるなら硝子。

打てば容易く砕けてしまうほどに儚く脆い。

本来ならこうして戦場に出向くことさえ憚れるほどだ。

それをこうして弱った体に鞭打って前線に出る理由は一つ、贖罪だ。

多くの人の命を奪い、幸せに満ちたであろう人生を闇に沈めてきた闇の書としての日々。

その罪を少しでも償うために、リインフォースは戦場に出向いてしまう。

その姿が、はやてには痛々しく映って仕方がない。

彼女としては、リインフォースには家でゆっくりと休んでいて欲しいと思っている。

祝福の風となるまでに、彼女はとても苦しみ、悲しんだ。

その分だけ、彼女には穏やかな日常の幸せを過ごして欲しいのだ。

そして、今まで見守ってくれた分だけ、今度は自分が守るのだと決めた。

主を守るためにその身を顧みずに駆けだす融合騎。

守られるのだけは嫌だと決死の想いで駆けだす夜天の主。

互いの想いが強すぎるが故に生まれた齟齬。

風乗って聞こえる不協和音に、闇統べる王の口元が歪む。

「パイロシューター」

冷たい声と共に光弾が奔る。
牽制のために放たれた四つの追尾弾。
なのはは旋回して躱し、殲滅者の頭上を取る。
杖を向け、魔力を注ぎ込む。

「ディバイィィィィン――――」

桜色の光が灯り、魔力に破壊力が付与されていく。

「――――バスターァァァァ！！」

閃光が迸る。
黒い少女に向かって彗星の如く光が墜ちる。

「――――――――」

直撃。
黒煙に少女の姿が覆われる。
なのはは杖を下ろさない。
今のは効いていないと直感する。
証拠に、殲滅者が撃った光弾は放物線を描いて未だなのはを狙っている。

「レイジングハート！」

『Ａｃｃｅｌ　Ｓｈｏｏｔｅｒ』

光弾を一発放つ。

数ではなく貫通力や弾速といった質に力を入れた魔弾が夜天を翔る。

質を凌駕された弾丸に、誘導弾が撃墜されていく。

光弾が塵となり夜空に溶けていく。

その様はどこか神秘的で、それに一瞬心を奪われたなのはを狙って砲撃が放たれた。

「ブラストファイアー」

黒煙を切り裂き、熱線が奔る。

咄嗟に《プロテクション》で防御。

だが、光の奔流は確実に防壁を削って行く。

なのはは《アクセルシューター》を発動。

数は十二、一斉掃射。

光弾は光線となって奔り、殲滅者の眼前で爆発する。

視界を光に覆われ、砲撃が止む。

「――――――――」

頬を伝う汗を拭う。

ほんの数回の攻防。　だが、その一つ一つが致命傷になりかねない。

見たところ両者の力は互角。

天秤は揺れながらも拮抗を示している。

それはつまり、ほんの小さな事象が勝敗を決めるということ。
そしてそれは、起きるのを待つものではない。

「……！」

殲滅者から感じる魔力が膨れ上がる。
似ている。
まるで、カートリッジから魔力を装填したかのよう。

「行きますよ。　高町なのは……」

冷たい声が響く。
肌寒い冬の夜の空気を熱する程の魔力の奔流。
眼前に現れるのは星のように巨大な魔力の塊。
それを、槍状になった杖一本で、星光の殲滅者が支えていた。

「――――――」

息を呑む。
おそらくそれは星光の殲滅者が持つ中で最強の魔法。
なら、高町なのはがやることはたった一つ。
今の自分がやれる最高の一撃を以て迎え撃つこと。

「いくよ。　レイジングハート」

『Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ．　Ｍｙ　ｍａｓｔｅｒ』

杖を掲げる。
流星のように周囲の魔力が一点に集束されていく。
加えてカートリッジをロードしさらに魔力を注ぐ。

星のように光輝く魔力の塊が形成される。
それは殲滅者も同じ。

「スターライトォォォォォ――――――――」

「ルシフェリオン――――――――……」

刹那の静寂。
視線が交錯し、杖を標的に向けた。

「「ブレイカァァァアアーーーーーーーー!!!!!!!!」」

決死の咆哮ともに、極光が放たれた。
膨大な魔力の奔流が真っ向からぶつかり合う。
蛇が互いに喰い合うように絡み合い怒濤のようにせめぎ合う。

「――――――――あ」

ぽつり、と声が漏れた。
根拠はない。　直感に近い。　だが否定する気にもなれない。
負けた。
なのはの脳裏にその三文字が浮かんだ瞬間、熱線が閃光ごと少女を呑み込んだ。
光が津波となって体を押し流し、轟音が耳朶を打つ。
視界は真白に焼き尽くされ、聴覚はゴォゴォという音しか捉えない。
身を焼く熱さに悲鳴を上げる暇もなく、ブツリ、とテレビの電源を落とすように高町なのはの意識が途切れた。

「ん……あ……」

体を駆け巡る鈍痛によって意識が覚醒する。
蘇った視界に映ったのはさっきまでと変わらぬ遠い夜空。
星が点々と瞬く夜空にポツリと佇みこちらを見下ろす空色の瞳。

「――――――」

星光の殲滅者が真っすぐにこちらを見下ろしていた。
さっさと戻ってこい。　まだ闘いは終わってはいない。
感情のない瞳からそれだけが伝わって来た。
そうして、ようやく自分の砲撃が彼女のソレに負けたことを理解した。
向こうの方が発射が早かったのか威力が向こうの方が強かったのか。
どちらにしろ負けた。
よく見てみれば、バリアジャケットも所々焼け焦げ破損していた。
ゆっくりと立ち上がる。
地に落ちた愛機を拾い上げる。
幸い破損はしておらず、まだ戦える。

「――――――」

ふと、飛ぼうと力を込めた足が止まる。

「向かって行って……どうしよう……」

《スターライトブレイカー》が圧し負けた。
となると殲滅者の集束砲に勝てる魔法はなのはにはない。
向かったところでまた同じ結果になるだけ。

ならば何か策を練らねばなるまい。
だが戦場は一対一で遮蔽物も何もない空、策など弄することなどできない。
不安がなのはの脳髄を埋め尽くす。
その時、
『Ｍａｓｔｅｒ』
「レイジングハート……？」
『Ｂｅｌｉｅｖｅ　ｙｏｕｒｓｅｌｆ』
たった一言。　それだけ言って、少女の杖は再び沈黙してしまった。
たが、その一言は確かになのはの不安を溶かして行った。
むしろ言われるまで気付かなかった自分が恥ずかしい。
高町なのはにできることなど、始めから限られている。
「そっか、そうだよね……」
胸に手を当て、大きく深呼吸。
それで落ち着いた。　今まであった不安や戸惑いは完全に消え失せた。
それは開き直りにも近いものだった。
なのはには砲撃しかない。
怜治の様な多彩な戦闘法も、
フェイトの様なスピードも、
はやての様な広範囲に及ぶ魔法も持っていない。
あるのは、自分の全てを一撃に込めること。
最初からそうだった。

フェイトとの本気の勝負の時も、
闇の書を止める時もそうやってきた。
一度敗れたが、なら今度はそれを上回る一撃を放てばいい。
地を蹴って今度こそ飛翔。
星光の殲滅者の前まで上昇し、目線を合わせた高度で止まる。

「……」

無言で杖を向けてくる殲滅者。
だが、なのははその前にしなければいけないことがある。

「わたし、高町なのは！　聖祥大付属小学校三年生、砲撃魔導師！」

きょとん、と殲滅者は目を丸くした。
感情のない瞳に、初めて戸惑いという感情が生まれた。

「この子はわたしのパートナー、レイジングハート。　あなたを止めます！」

真っすぐに見据える。
その意図を察したのか、殲滅者は己が杖を寄せる。

「わたしは星光の殲滅者。　闇の書の理性を司るマテリアル。
この子はルシフェリオン。
血と怨磋の闇を取り戻すため、貴方を討ちます」

それで終わり。
杖を掲げ、２人の少女に魔力が集束していく。
再び、二つの巨星が精製されていく。
レイジングハートから、ガコガコと危ない音を立ててカートリッ

ジがロードされていく。
空になったマガジンをひっこ抜き、新しく装填。　立て続けにロードしていく。
自分が制御できるギリギリまで魔力を注ぎ込んでいく。
それは殲滅者も同じ。
魔力塊の大きさはほぼ同じ。

「いくよ、これがわたしの、全力全開！」

「集え明星、全てを焼き消す焔となれ！」

「スターライトォォオオ……」

「ルシフェリオン――――……」

星が弾け、光の奔流が真っすぐに奔る。

「「ブレイカーァァァァアアアア！！！！！！！！！」」

ついさっきの出来ごとの再現だった。
地を這う蛇のように光が奔り、真っ向から敵に喰らい付く。
一方が他方を呑み込もうとすれば他方はさらに顎を開いて呑み込み返す。
その繰り返し。

「……」

つまらない、と殲滅者は思った。
一度墜ち、再び戦場に舞い戻った少女がやっていることは全く同じ。

魔力を可能な限り注ぎ、砲撃を放つ。
やることが同じでは結果も同じだ。
白い少女は再び焔の光に呑まれ再び地に墜ちる。
いや、威力だけならさっきより遥かに高いのだから、その光に呑まれれば今度こそ少女は灰塵に帰するだろう。
事実、今回も僅かにこちらが勝っている。
殲滅者の目的はそれで達せられるはずなのに、喜びは無い。
自分はあの少女に何か期待していたのだろうかと思った時、

「――――――――」

ふと、違和感が生じた。
僅かに、白い少女からの砲撃が強くなった。
おかしなことだ。
周囲から集束できる魔力はすべて集めた。つまりはこれ以上の威力の増強は無理。
一体、どこから魔力を持ってきたのか。
見ると、なのはの服装が変わっていた。
白いバリアジャケットから、ダッフルコートに変わっている。

「まさか、バリアジャケットを構成する魔力を砲撃に……！？」

驚きが漏れる。
別に、バリアジャケットが無くとも魔法は使える。
だが、それは自分の身を守る鎧を脱ぎ棄てるということ。
この攻め合いに負ければ、彼女は本当に命を落とす。

「面白い……！」

杖を握る手に力がこもる。

これで、両者の力は完全に拮抗した。
些細な事象が勝敗を決する。

「……」
「――――――」

激突は、どれほど続いただろうか。
やがて、星のような極光が、一人の少女を呑み込んだ。

体から力が抜けていく。
肉体を構成する魔力は底をつき、しだいにこの体は塵となって霞に消えていくだろう。
悲願は叶わず、あの温かな闇へと帰ることができないというのに悔しさはない。
もしかしたら、自分にとって闇の書の復活などどうでもよかったのかもしれない。
考えを巡らせていると、自分を撃ち抜いた少女の姿が目に映った。
防御すら攻撃に廻した彼女の決意。　自分にはそれが無かった。
それが勝敗の分かれ目になったのだと気付いた。

「強いのですね、貴方は……」

「ううん。　あなただって」

高町なのはは、真っすぐな眼でそう言った。
その瞳に敗者を見下す色は無い。
風が吹く。

ざっ……、と星光の殲滅者の体が揺れる。
砂礫が舞うように、少女の肉体が崩れていく。

「ああ……。　わたしは、消えるのですね……」

他人事のようにさらりと言った。
その様が、あまりにも儚くて、

「うん……。　ごめんね」

思わず謝っていた。

「なに、強い戦士と戦って敗れたのです。　生まれた甲斐はありましたとも」

「うん……ありがとう」

「もし、次に見えることがあれば」

殲滅者の手が伸びる。

「今度はきっと、決して砕け得ぬ力をこの手にして貴女と戦いたいと思います」

「ん……。　待ってる、とは言えないけど」

黒い少女の手を握る。
その手は普通の人間と同じ温かさが確かにあった。

「次にわたしと戦うまで、貴方の道が勝利で彩られますように……」

その言葉を最後に、星光の殲滅者は消え去った。
跡形もなく、まるで最初からそこに居なかったかのように。

「……」

地面に倒れ込む。
バリアジャケットを編む魔力も失い、加えてエクセリオンモードのスターライトの反動でなのははしばらく魔法は使えない。

「あー、またマリーさんにレイジングハート見てもらわなきゃ……」

『Ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ』

遠くなった空を見上げる。
残念ながら他のところへ応援には行けそうにない。
とりあえず、高町なのははここで休憩だ。
救援が来るまで、とりあえず休もう。
疲労した体をなでる夜風が心地よい。

“次にわたしと戦うまで、貴方の道が勝利で彩られますように……”

「頑張らなきゃな……」

黒い少女の最期の言葉が、なのはの耳にいつまでも残り続けた。

第３９話　鉄心の殺戮者（前書き）

第３９話　鉄心の殺戮者

ガキン、と鋼がぶつかり合う音が響く。
刃を交えるのは白と黒の二人の青年。
相貌は瓜二つ。　だが、決して同じ人間ではない。

「――――――――っ！」

鉄心の殺戮者と名乗った青年の刃が顔の横を通過していく。
白い双剣は出刃包丁のような形で刃が鮫の牙のようにねじれている。
続けざまに繰り出される突きを黒い大剣で捌く。
手数は負けるが、一撃の威力では怜治の方が上回る。
双剣を弾き、大剣を振り下ろす。
殺戮者は二振りの剣を交差して防御。　そのまま刃を滑らせて怜治の喉元に襲いかかる。
怜治は後方に飛んで躱し、大剣を一気に振る。

「龍の爪剣ッ！」

斬撃が奔る。
大剣のリーチの長さを生かし、殺戮者の間合いの外から攻撃する。
再び双剣をクロスさせて受けるが、衝撃によって大きく吹き飛ばされる。
スタンを砲撃形態（バスターフォーム）に切り替え、砲撃。
魔力の砲弾が白の青年を包み込む。

「拡がれ、エウリュアレ！」

殺戮者の声が響く。　同時に、怜治の魔力砲が切り裂かれた。
光弾が塵となって消える。
殺戮者の左手にある剣の形状が変化していた。
柄から刃が四叉に別れ、獣の爪を連想させる。
変形した剣を一閃。
ガキッ、と音を立てて三つの刃が回転しながら飛ぶ。
一つは右から、一つは左から、一つは頭上から怜治に向かって飛来する。
怜治は残された退路である後方へ回避行動をとる。
そこへ、

「まったく、呆れるほど予想通りの動きだ」

鉄心の殺戮者の肘鉄が突き刺さった。
腹に突き刺さる一撃に、もんどりうって虚空を転がる怜治。
標的を失った爪が剣に戻って行く。

「そら、もう一度行くぞ！」

四叉の剣を再び一閃。
狂気に歪んだ刃が飛行する。
怜治は体を起こし、騎士形態（ナイトフォーム）に切り替えて対峙する。
飛来する刃を盾からの魔力弾で撃ち、片手剣で叩き落とし、盾で防ぐ。

「――――――――」

殺戮者の右手の剣が閃く。
防御の隙間を縫って繰り出された一撃に、怜治のバリアジャケッ

トが悲鳴を上げる。
非殺傷など考慮されているはずもなく、白い刃が容赦なく防護服を切り裂く。

「っ――――――――」

たたらを踏む。
追撃は来ない。
体に傷は無いが、バリアジャケットは胸の部分が真一文字に切り裂かれた。
即座に魔力を注いで補修する。

「まったく、馬鹿正直に全部叩き落とすとは相変わらずだな」

「な……に……？」

殺戮者の言葉に怪訝な表情をする。
まるで、前に一度会ったことのあるかのような物言い。

「む、まだ気付かんのか……存外鈍い奴だな」

「あ？　何言ってんだテメェ」

「オレとオマエは、前に一度会っていると言っている。　まぁ確かに、あの時はオレもこの姿ではなかったがな……」

どこか、引っかかるものを感じた。
脳が記憶を引っ張りだそうとし、途中で落下していくようなもどかしい感覚。
思い出せそうで思い出せない、そんなむず痒さが苛立たしい。

「本当に鈍いな。　夢の中で遇ったことなど、とうに忘れたというわけか」

「――――――――あ」

引っかかりが消えた。

せき止められた水が一気に流れ出すように、答えが脳に流れ込む。

かつて、闇の書が見せる夢の中に現れたもう一人の松田怜治。

両親と別れ、海鳴に来ることのなかった怜治のイフの存在。

「お前が、あの……」

殺戮者の口元が歪む。

「その通りだ。　オレはオマエのＩＦ（もし）。

あの時、夢の中に取り残されたマツダレイジ。　それを闇統べる王が掬いあげ、オレにした」

魔法少女リリカルなのはＡ’ｓ　☆Ｔｈｅ　Ｒｉｄｅｒ☆　－ＴＨＥ　ＢＡＴＴＬＥ　ＯＦ　ＡＣＥＳ－

第５話　鉄心の殺戮者

「……」

「オマエはオレに言ったな。　立ちあがって前を向けと。
どうだ、オマエの要望通りにオレは立ち、夢の中で成長し、再びオマエの前に現れた」

「そりゃまたご苦労なこって……。　んで？　目的はなんだ、俺を殺して入れ替わろうって腹か？」

「ふむ……まぁ、概ねその通りだ。
王からも承諾は貰っている。　あとは――――」

双剣を握る手に力が籠る。
膝が曲がり、力が蓄えられていく。

「――――オマエが死ぬだけだ」

虚空を蹴り、マツダレイジが疾走する。
大剣に切り替えて応戦する。
鋼がぶつかり合い火花を散らす。
突風の如き双剣を、爆風の如き大剣で叩き伏せる。
不思議と、怜治の頭は冴えている。
鉄心の殺戮者、いや、マツダレイジがあの夢の中の自分だと判ってから、妙に相手の動きが読める。
当然と言えば当然か。
殺戮者は他のマテリアルたちのように姿や魔法を似せたのではなく、松田怜治という人間性もコピーしている。
ならば思考も自然と読めてくる。
相手が夢という並行世界からやって来たもう一人の自分なら、動

きも似通ってくる。

「――――ふっ！」

だが、それは殺戮者から見ても同じである。

「――――はぁっ！」

動きの読みあいとなれば、闇の書というロストロギアからの生まれた殺戮者の思考速度が上となる。

少しずつ、怜治の体に赤い線が奔って行く。

傷の一つ一つは致命傷には程遠い。

だが、傷は小さくともその痛みが毒の様に怜治の思考を妨げる。

それが隙となって新たに傷を生み、また思考が妨げられるという負の連鎖が起きる。

「――――だぁっ！」

殺戮者の咆哮。

渾身の力を以て繰り出された一撃を大剣で受ける。

腕が痺れ、衝撃に押され、たたらを踏む。

そこへ、追撃の刃が襲いかかる。

「突風――――、一迅」

刃を風が包み、切っ先から風の槍が伸びて怜治の胴に突き刺さる。

「――――が……！」

苦悶の声が零れた。

風の槍はバリアジャケットを貫通には至らなかったが、その衝撃は確実に体の中に届いていた。
虚空に膝をつく。
下がった頭を、容赦なく蹴り上げる殺戮者。
怜治の体が面白いように宙を舞う。
放物線を描いて飛ぶ怜治を殺戮者が追う。

「くっそ……」

体勢を整え、襲いかかる刃を防ぐ。
大剣を振り回し、無理やり殺戮者を引き離す。

「どうした？　この程度か、オリジナル殿。
自分が否定した日常を過ごしたオレに圧されるというのはどういう気分だ」

「はっ、夢の住人風情が調子に乗るな。
テメェこそ、痛い目見ないうちに夢の中に戻りやがれ」

「そういうセリフは、せめて一撃でも入れてからほざけ」

空気が張り詰める。
全身がチリチリと総毛立つ。

「――――――――ふ」

ふと、空気が弛緩した。
殺戮者の双剣を握る手が下がる。
突然の行動に、怜治は怪訝そうに顔をしかめる。

「オリジナル、オマエにとって魔法とは何だ」

「……なに？」

「ああ、間違っても『想いを叶える力』などと言ってくれるなよ？
オレが訊いているのは、オマエが魔法を使って何をするのかということだ。
何をするための手段として魔法を使うのかと訊いているのだ」

「んなもん……」

決まっている。
この事件を通して、怜治の目指す者は見つかっている。
追うべき背中も、辿りつくべき境地も定めている。
だが、それをコイツにいちいち教える義理はない。

「テメェには関係のないことだ」

「そうか……残念だな」

殺戮者の瞳が揺れる。
どこか遠くを見るように顔を上げ、口を開く

「オレはね、ヒーローという者に憧れたよ」

突然の告白に、怜治は顔をしかめる。

「所詮魔導書から生まれた紛い物の存在らしく、なんとも曖昧な夢なのは自覚している。　だが、オマエが去って残されたのはこれだけだったのでね。　……いや、もしかしたらこの夢も王が取り繕っ

ただけなのかもしれないがな」

「……回りくどいな。　結局お前は何がしたいんだ」

「オマエという存在を奪い、その夢を叶える。　それだけのために、オレはここに来た」

双剣を握る手に、再び力が籠って行く。

遠い瞳に、沸々と殺気が灯って怜治に叩きつけられる。

怜治は黙って大剣を構える。

殺戮者（マッダレイジ）の願いを聞いたところで、はいそうですかとこの体をくれてやるつもりなど更々ない。

殺戮者と怜治が同時に存在することを、彼ら自身が拒絶する。

ならば、どちらかが消えるしかない。

消えるのは、力の無い方だ。

「この体は魔力で構成されている。　魔力が尽きればオレは消える」

「お前が何だろうが関係ねぇ。　俺にとってお前は過去だ」

「だから、オレがこの世に居続けるには――――」

「俺が前に進むのには――――」

「「お前（オマエ）が邪魔だ」」

両者、同時に虚空を蹴る。

どちらの刃にも籠るのは殺意。

もはや、様子見も牽制も不要だ。

全ての斬撃が必殺となる。
激突する鋼の咆哮が夜天に轟いた。

「オレとオマエは、根底は同じだが決して同じではない！　オマエには、オレとは違い多くの物がある。　そのくせ、オマエはそれを認めようとしない。　自分の傍にある物に、尽く壁を造って拒絶する。　満たされている癖に、それを拒む！」

剣戟と共に殺戮者の怒号が響く。
今まで胸に溜め込んでいた鬱憤を吐き出すように、ひたすら叫ぶ。

「オマエが過去（オレ）を振り切ることなどできない。　オマエは、自分から過去の鎖を握りしめているからな！」

「判ったような事を、抜かしてんじゃねぇ！」

双剣を弾き、大剣を振る。
火花散る剣戟は激しさを増していく。

「判るさ。　忘れたか？　オマエが闇の書に一度取り込まれた。その時にオレはオマエの過去を見た！　両親に捨てられ、心を閉ざしたあの時のオマエをな！」

左剣（エウリュアレ）から三つの爪が飛ぶ。
大剣で叩き落としたところへ、右剣の刺突が迸る。

身を翻して回避。　翻るコートを刃が噛み千切って行く。

「そんな記憶の一部を垣間見た程度で全部理解したつもりでいるってか？　ったく、“もしかしたら”の俺ってのは随分生意気だなオイ！」

千切れたコートをすぐさま補修。

大剣に炎を纏わせ一閃する。

冷えた冬の空気を熱し、熱風と共に敵を切り裂く。

双剣が斬撃を妨げる。　風が吹き荒れ、炎をかき消していく。

「生意気なのはオマエも一緒だ。

オマエはねじ曲がっている。　独りが嫌なくせに寄ってくる者を拒もうとする。　なにもないのが辛いくせに満たされることが苦しい。　また失くしてしまうのが怖いから、オマエは最初から何もない方がいいと、心のどこかで思っている」

「――――――――」

「『初見の相手を信じない』などと態々言って回るのはそれが理由だろ？

甘ったれなんだよオマエは。　誰かにかまってもらわなければいられない臆病者だ」

剣が撥ねる。

両者の体が離れる。

虚空に剣を突き立て、怜治は目の前の敵を睨みつける。

「テメェ……いい加減にしろよ」

怒りで沸騰しながらも冷え切った声。
心の弱さなど、そんなことは怜治自身がよく判っている。
それを、改めて自分の事かのように語られるのは虫唾が走る。

「行くぞ、スタン」

大剣が分解し、鎧となって怜治を包んでいく。
怜治とスタンの現最高形態。
ギル・グレアムを下した第五の姿。

「フォーム？――――竜人（ドラゴン）」

鉄翼が広がると同時に無数の魔法陣が背後に展開する。
五芒星の陣から現れるのは無数の鉄騎。
異界の鉄軍が召喚された。

「覚えているぞ。　あの時阻んでくれた忌々しい鉄の群れ。
――――だが、今度はそうはいかんぞ」

殺戮者の右手が上がる。
魔法陣が、翼の様に展開した。
数は無数。　そこから這い出る物もまた無数。

「――――――――――な」

怜治の口から驚愕が漏れる。
魔法陣から出てきたのは、音叉状の飛行物体――――魔法杖の先端部分だった。
灰色のコアが埋め込まれた飛行物がゆらゆらと滞空する。

「これで、戦力は互角。　数が同じである以上、勝敗を決めるのは術者の質だ」

両者が背後に従える物はもはや軍勢で、まるでこれから戦争がはじまるようだった。

いや、実際に始まるのだろう。

無数の武器が飛び交えば、実質一対一でも状況は戦場と同じになる。

両者、敵を真っ向から見据える。

背後の杖が、鉄騎が放たれる殺気と魔力で空気が張り詰める。

「――――――――飛べ」

「舞え――――――――」

号令と共に、無数の力が突撃を開始した。

轟音が炸裂する。

無数の鉄の塊が必殺の勢いを以て飛来し、激しくぶつかり合う。

戦車の砲身が唸りを上げ、音叉から光線が瞬く。

鉄騎がその重量で破壊すれば、音叉は連携しコンビネーションで撃つ。

列車が音叉を轢き殺せば、音叉は魔縄で鉄騎を縛り上げて動きを封じ、容赦なく魔弾で砕く。

力と技が真っ向からぶつかり合う。

破片が舞い、光が踊る。

魔力が砂塵の如く吹き荒れる戦場の中心で、両雄が激突していた。

鉄爪が閃き、左剣が煌く。

火花が散り、風が起こる。

「伸びろ、ステンノ！」

殺戮者の声に、右剣が反応する。
折り畳まれた刃が広がるように、右剣の刃が倍近く伸長した。
右剣の斬撃を、鉄翼を盾に防ぎ、顎を蹴りあげる。
たたらを踏む殺戮者を追撃する。
体を思いっきり回し、鉄の尾で横っ腹を殴り飛ばす。

「くっ――――やはり、それはオレには相性が悪い！」

悪態をついて一歩退く。
双剣の殺戮者に対して、今の怜治の武装は多い。
両手足の鉄の爪に翼に尾。
加えて、エウリュアレの飛来刃は周囲で鉄騎が飛び交う乱戦状況では制御しきれない。
武器の特性を一つ封じられたというのは、鉄心の殺戮者でなくても苦しい事態だ。

「いや、それ以上に厄介なのは……」

怜治の右手が上がる。
それに反応したジープが一台、飛んで来る。
変形し、身の丈を超える槍斧となって右手に納まる。
槍斧が空気を切り裂いて殺戮者に下ろされる。
戦慄と悪寒が背筋を駆け抜ける。

「――――く、そ……！」

双剣で防ぐも衝撃に体が飛ぶ。
周囲で飛び交う鉄騎は、全てがスタン同様に形状を武具に変える。

怜治が従える無数の鉄騎は、同時に怜治が扱う無数の武具でもあるのだ。
そしてその全てがロストロギア認定されてもおかしくない、現代技術では製造不可能な物ばかり。
鋭い連携で舞う殺戮者の音叉もかなりの性能だが、所詮は闇の書の欠片が構築した紛い物。
徐々に、乱戦も鉄騎たちが圧していく。
殺戮者の額に、汗が浮かぶ。

（オレが……負けるのか？　こんな、何も持とうとしない奴に……）

敗北すれば、殺戮者は夢という無に帰ることへとなる。
あの時の、怜治が夢から覚めていく過程で崩れていく世界が脳裏をよぎる。

「ふざけるなよ……」

侮蔑の声は誰に向けた者か。
怜治にではない。
今ここで、自ら負けを認めかけている自分にだ。
消えたくなければ、勝つしかない。
無理も道理もねじ伏せて、勝利の道をこじ開けるしかない。

「……ぁぁぁあああああああっ！！！」

殺戮者の咆哮と共に、暴風が吹き荒れる。
荒れ狂う嵐が音叉を噛み砕いていく。
砕かれた音叉が光の塵となって殺戮者へと注がれていく。
無数の音叉は飛来する武器であると同時に、殺戮者の魔力を底上げするブースターとしての役割もあるのだ。

「――――――――」

怜治は猛り狂う殺戮者を見据える。
魔力が上がり続け、暴風が勢いを増していく。
相手は、終わらせに来ている。
上等、と怜治は小さく呟く。
負けられないのはこちらも同じ。
鉄騎たちを自分の背後に控えさせる。
殺戮者は飛来物を消した。
なら、こちらもそれに倣うべきだ。

「行くぞ」

虚空を蹴って、全速力で突撃する。
殺戮者の嵐が牙を向く。
それを、真っ向から鉄爪で切り裂く。
だが、風とは実態を持たぬ物。
魔力から発生したとはいえ風には違い無く、切り裂かれた風はすぐに怜治に絡みつく。
いや、それは切り裂かれる前よりもさらに激しく、巨大な竜巻となって怜治を包む。
轟音を立てて、風の牢獄が怜治を捕えた。
無理に突っ込もうものなら、風の牙が怜治の体をズタズタに粉砕するだろう。
そして、自滅を待つ殺戮者ではない。
右剣に纏わせた風が槍となって放たれる。
風の牢獄を一方通行に駆け抜けて槍が怜治を襲う。
間一髪、身を翻して躱す。
だが風の槍は絶え間なく襲いかかる。

なんとか躱して行くが、何せ竜巻の中での安全圏は怜治一人分ですでにギリギリだ。
その中で動き回ればいつか牙に噛み砕かれる。
『レイジ！　どうするよ、このままじゃ時間の問題だぞ！』
「判ってる！」
苛立った声で返す。
風の壁は内側から破るには出力が足りない。
殺戮者の様に風で迎撃するにしてもまだ怜治はそこまで自分の変換資質を操りきれていない。
（いや、手が無いわけじゃないが……）
躊躇いがある。
怜治の中にある物。
闇の書事件の際、咄嗟に取り込んだ闇の書の一部。
それを使えばこの状態から抜け出せるかもしれない。
だが、下手をすれば再び、意識を闇の書に奪われるかもしれない。
いやむしろ体を乗っ取られる可能性の方が高く、もう二度と戻らないかもしれない。
それはつまり、松田怜治という個人の死を意味する。
「……」
今までと違い、自分から死へと飛び込むことなど、そう易々と出来るわけがない。
一歩踏み込むことへの躊躇いを、心に無意識にかかるリミッターを

「……迷ってる時じゃねぇだろ」

自分から引き千切る。
一度決めれば、あとは簡単だ。
やり方など知らなくても問題ない。
今まで勝手に表に出てきた奴だ。
こっちから手招きしてやれば、出てこないはずがない。

「――――――――ッ！」

心臓がドクンと早鐘を打つ。
裡から自分で無い物が這い上がってくる。
慌てる必要はない。
今までと違い、今度は自分から招いている。
予め来ることが分かっている者に奇襲を受ける筈がない。
自分の心臓を掴もうとするモノを、逆に掴み取る。
恐れる必要はない。
闇の書の一部だろうがロストロギアだろうが、自分の裡に在るのならそれは松田怜治の力だ。
自分の力を恐れるな。
力が暴れまわるというのなら手綱を掴み乗りこなせ。

「――――っぁあああああああああああああああああああ！！」

竜人が咆えた。
その雄叫びに応えるように、力の奔流が溢れ出た。

ゴォゴォと轟音を立てる竜巻という暴風の牢獄を見据えて、鉄心の殺戮者は双剣を構える。
双剣に風が絡みつく。
絡みついた風は突き出せば槍となって竜巻をすり抜け、その中にいる標的を貫くだろう。

「――――――――」

双剣を構えたまま動きが止まる。
断じて躊躇いが生まれたわけではない。
風が吹く音に混じって、聴覚が異音を捉えたからだ。
そう、例えるなら、刃が風を切るような音が……。

瞬間、竜巻が中から爆ぜた。

「――――――――なぁっ！？」

驚愕に目を見開く。
一度巻き込まれれば、全身を切り裂くはずの風の牢獄を切り裂いて、一つの影が飛び出した。

「……松田……怜治」

飛び出した影の名を呟く。
そして、竜巻を通り抜けたことの衝撃異常に、怜治の背後にあるモノに目を奪われた。
三対の翼があった。
元々あった鉄翼のほかに、光輝く光翼と、武骨な樹翼があった。
どちらも、怜治の裡に潜む力が発現した姿だった。
光翼はジュエルシード。

樹翼は闇の書の一部。
六つの翼が刃となって竜巻を切り裂いたのだ。

「くっ――――――！」

迫りくる脅威を向かい撃つため、殺戮者は切り裂かれ形を失って行く竜巻を剣に纏わせていく。
剣を中心に、ふたつの暴風が荒れ狂う。
殺戮者は嵐を纏った双剣を振るう。
怜治は背中の六翼を広げ、六つの刃を振るう。

「双閃――――神風（カミカゼ）！！」

「竜撃伍號――――阿修羅（アスラ）！！」

剛嵐が牙を向き、疾風が爪を立てる。
二つの力が、真っ向から激突し、爆風を撒き散らした。

「――――――――」

音が消える。
吹き荒れる嵐の音すら、この耳朶は受け付けない。
殺戮者の眼前に広がるのは二つの嵐を真っ向から受け止める青年の姿。
勝てるはずだと思った。
だというのに、青年の翼は嵐を切り裂いてぐんぐんと近づいてくる。

「……バカな！」

「馬鹿はテメェだ」

声が聞こえた。
視界を埋める黒い青年の貌。
負けた。
そう思った瞬間、松田怜治の拳が鉄心の殺戮者の顎を打ち上げた。

視界が明滅する。
脳が焼き付いた回路の様に痛い。
手足の感覚は既にない。
瞳を閉じれば、もう二度と開かれることはないだろうと直感する。

「そうか……オレは消えるのか……」

ああ、と誰かが答えた。
目の前の青年を見る。
自分を見つめる黒い双眸には、消えようとしている自分への情など欠片もない。
薄情な男だと思う反面、それでいいと思う感情もある。
だが、消える前に訊いておかなければならないことがある。

「どうして、オレは負けた……」

魔法とは想いを形にする力。
自然摂理や物理作用をプログラム化して云々以前に、それが根底だと殺戮者は思う。
そして、目の前の男より想いが弱かったなどあり得ないと思った。

この体に在るたった一つの存在理由が、奴に及ばなかったなどあり得ないのだ。

「お前の夢ってのは、曖昧でも立派かも知れねぇ。
でも、それでもお前には何もないんだよ。　夢があって、その先に描くのも所詮想像」

投げ掛けられる冷えた言葉に耳を傾ける。
青年の言葉を残った脳に刻み込む。

「お前は俺が、『失くすのが怖いから何も手にしようとしない』といったな。　その通りかもしれねぇ。　未だにあの時のことを引きずってるのかもしれない。　でも、確かにこの眼に、耳に、胸に刻んだものはある」

殺戮者は知らない。
自分の娘のために己が生涯の全てを捧げた魔女を。
殺戮者は知らない。
たった一人の部下の無念のために道を踏み外した英雄を。
始めは綺麗な夢を持っていたであろう者たちが現実に摩耗し、変貌していったことを知らない。
それが勝敗を分けた。
綺麗な夢を持ち、強い意志を持つが現実を知らない者。
弱くとも、現実の前に道を外した者たちを見ても前に進み続けようとする者。
それがこのふたりの違い。
それを聞いた殺戮者は、そうか、と一言呟いて瞳を閉じる。
脱力し、このまま消滅しようとする青年を。

「待て。　なに勝手に消えようとしてやがるお前」

松田怜治が引き留めた。

予想外の引き留めに、殺戮者は眼を白黒させている。

「あん時は置いてけぼりにしちまったからな。　今はまだ余裕があっから、連れてってやるよ。　俺が行く先へ」

「何……を……」

消えようとしていく殺戮者の体が、怜治の裡へと流れ込んでいく。

「オマエ……自分が何しようとしているか解ってるのか」

「何だよ、なんか問題あんのか？」

殺戮者は絶句する。

怜治がやろうとしていることは、裡から体を乗っ取ろうとするモノを一つ増やすだけだ。

自分から自身を危険に晒すなど、普通するはずがない。

だというのに、松田怜治はそれを容易く行動に移す。

器がでかいのか何も考えていないのか。　それともただの意地か。

「オレは、諦めたわけではないぞ。　オマエが弱ればその体を奪い取るぞ」

「上等だ。　そん時は力ずくででも押さえこんでやるよ」

それで終わり。

これ以上何を言っても、この青年は止めないだろう。
鉄心の殺戮者をその体に取り込み、いつ体を奪われるかという危険を抱きながら己が決めた道を突き進む。
ならば、それを見てやるべきだろうと、鉄心の殺戮者の意識が沈んでいった。

光が消える。
これで全ての構築体（マテリアル）が消えた。
残ったのは闇統べる王ただ一人。
夜明けも近い。
それが、事件の終結も近いのではと皆に思わせた。

「ほれほれ、避けきれるか子烏！」

哄笑とともに魔弾が翔る。
はやては身をねじってなんとか躱す。
いや違う。　闇統べる王がギリギリ見極められる速度で、ギリギリ回避出来る位置を狙っているのだ。
全力で回避に徹すればなんとかなるという攻撃。
無様に踊るはやてを嘲笑うような射撃に、リインフォースの頭が沸騰する。
拳を握り、はやての前に出ようとする。

「あかん、リインフォース！」

「我が主！？」

小さな手がそれを阻んだ。

はやてはこの期に及んでも、リインフォースが戦うことを拒んでいる。

リインフォースはもう戦えない。

その事実だけがはやてを突き動かす。

自分一人では闇の王に勝てないと解っていても、それは変わらない。

八神はやてにとって、自分が傷つく以上に家族が傷つくことを許容できない。

闇統べる王もそれは判っている。

夜天の主は融合騎を守るために前に出る。

それが彼女の実力を半減させているとも知らず。

「ハハハハッ！　踊れ踊れ子烏、このまま羽を一枚一枚削って地に墜としてくれるわ！」

哄笑が響く。

闇色の剣十字（エルシニアクロイツ）が光り、魔弾が放たれる。

はやては身をねじって躱し、リインフォースは前に出ようとするがそれをはやてが遮る。

その繰り返し。

「くっそぉ、壊れろよこの結界！！　このままじゃはやてがっ！」

ヴィータの鉄槌が結界を叩くが、壁は罅一つ入らない。

苦々しく眉間に皺を刻むのは他の守護騎士達も同じだ。

この結界は内と外を阻むことにのみ機能する結界。
たとえヴィータのギガントでも破壊することはできない。
破壊される時は、中の戦いが終わった時。
なのはと怜治の戦いは終わった。
つまり、八神はやてと闇統べる王、どちらかが消えた時だ。

「我が主、貴女は私の後ろに。　私が前に出ますから！」

「ダメや。　リインフォースは、家族は私が守るんや！」

本来、はやては前に出て打ち合う魔導師ではない。
前衛に時間を稼いでもらい、広域魔法を放つ完全な後衛型魔導師だ。
だというのに、はやては前に出る。
後ろにある家族を守るために。
それが自分の首を絞めているだけと気付かず、いや、気付いているうえで前に出続ける。

「――――――――っ！」

闇の魔弾（エルシニアダガー）がはやての頬を掠める。
少女の肌に赤い線が奔る。
息が切れる。
心臓が悲鳴を上げて酸素を要求してくる。
喉が渇く。
冬の夜風のせいで汗は掻かないため判りづらいが、疲労は確実に溜まっている。
闇の書の呪縛から解き放たれ、麻痺した両足が治り始めてまだ二週間と少し。
体力のないはやてにとって、ギリギリで躱し続けるのは辛い。

限界が、近い。

「もう終わりか。　つまらんな」

侮蔑の声。

エルシニアクロイツに光が灯る。

月光に似た冷たい銀の極光。

凝縮する魔力。

はやてとリインフォースに戦慄が走る。

「絶望にあがけ、塵芥ッ！！」

聖剣の名を持つ破滅の渦が放たれる。

「エクス、カリバ――――――――――ッ！！！！！！！！」

第３９話　鉄心の殺戮者（後書き）

次でＰＯＲＴＡＢＬＥ編終了です。

第４０話　名前で呼んで

迸る極光に視界が塗りつぶされる。
光り輝く銀光は純粋な破壊のみを引き起こす。
破滅の奔流に体を呑み込まれれば、この身はあっという間に灰燼に帰すだろう。
どこか達観したような感想しか込み上げない。
絶望を素直に受け止めようという諦めしかない。

「みんな……ごめん……」

走馬灯の様に家族や友人達の顔が脳裏を駆け抜ける八神はやての目の前に、

「主ッ！！」

祝福の風が立ちはだかった。
極光が炸裂し、音が消える。
世界は白に塗りつぶされ、その他の色は光に呑まれて消えた。
そんな色を失くした世界の中で、八神はやては確かに見た。
白一色の世界にたった一人で挑む、銀髪の女性の姿を。

魔法少女リリカルなのはＡ’ｓ　☆Ｔｈｅ　Ｒｉｄｅｒ☆　－ＴＨＥ　ＢＡＴＴＬＥ　ＯＦ　ＡＣＥＳ－
第６話　名前で呼んで

世界に色が戻っていく。
音が蘇る。　崩壊の音が聞こえてくる。
白が消え、黒い夜空が還ってくる。

「あ……ああ……あああ……」

はやての目に、見るも無残な姿のリインフォースが飛び込んできた。
翼の半分が焼きこげ、あらぬ方向に折れ曲がっている。
騎士甲冑はボロ衣と成り果て、もはや身を守るものとしては機能しない。
体から溢れる血が、きめ細かい肌を朱に染め上げていた。
なぜリインフォースがこんな傷を負っているのか。
考えるまでもない。
はやてを庇って、リインフォースは傷ついたのだ。
己が主の身を守るために、自信を犠牲にした結果、確かにはやての体には傷一つない。
だが、はやての心は傷ついていた。
弱っているリインフォースを守るために戦っていたはずなのに、結局彼女を傷つけてしまった。

「我が、主……ご無事、ですか？」

「……リイン、フォース……」

大けがを負いながらも主の身を案じる。
リインフォースのその献身さが、余計にはやての心を抉る。

その、今にも霞と消えてしまいそうなその背中を抱きしめる。

「我が、主……？」

「ごめん、ごめんな……リインフォース。　わたしが、弱いばっかりに……」

「……」

「ごめん、ごめん……」

ただひたすら、謝り続ける。
リインフォースの背中に顔を埋めて嗚咽を漏らす。

「……我が主」

すっと、リインフォースははやての頭を撫でる。
泣きじゃくる子どもをあやす様な優しさでゆっくりと撫でる。

「貴女は、決して弱くはありませんよ」

「ふぇ？」

「貴女のは、優しさです。　それは、決して弱さではなく……強さです」

そんなことない、とはやての瞳が訴えていた。
そんな卑屈な主に、融合騎は優しく笑いかける。
辛そうに、はやては顔を逸らした。

「リインフォースは、本の姿やった頃からずーっと、いつもわたしのそばにいて見守ってくれてた……。
せやのに、わたしはリインフォースを守れとらん。ほんまに、情けない主や」

「そんなこと、ありません。貴女は強い。私は、貴女の優しさに救われた。
貴女の優しさに、私は守られた」

優しい声が響く。

「我が主。貴女は私を守ろうと、前に出ました。それは、守られるだけは辛い、自分も家族の力になりたいから。……違いますか？」

ゆっくりと、無言ではやては頷いた。

「それは、私も同じですよ」

え、とはやてが驚きの声を上げた。
リインフォースは続ける。

「私も、貴女を守りたい。確かにこの体はもう戦うことはできないかもしれません。それでも、私は貴女を守るために戦いたい。
ただ守られるだけなのは、嫌なのです」

「リイン、フォース……」

「我が主。祝福の風は夜天の主を、守護騎士たちを、家族を守るために戦いたいのです」

ズガンッ、と頭を殴られたような衝撃がはやてを襲った。
今まで守ることしか考えてなかった。　守られる側の気持ちを全く考えていなかった。
自分の馬鹿さ加減に怒りを通り越して呆れてくる。
そうだ。　ただ守られるだけが辛いのは皆一緒。
それを、今になって気付いた。

「はは……ほんと、ダメダメやな私……
――――リインフォース」

「はい」

「わたしじゃアイツに勝てへん。　せやから、一緒に戦ってくれるか」

「――――――――え？」

「融合システムの裏技。　リインフォースがわたしに融合するんやなくて、わたしがリインフォースに融合する！」

「――――なっ！？」

「そんならイケるよ……戦える」

「ダメです……。　貴女への負担と危険が大きすぎます！」

必死にはやてを止めようと叫ぶリインフォース。
本来、ユニゾンとは融合騎が術者と融合することで魔力の管制・補助を行い、通常の状態とはケタ外れの感応速度や魔力量を得るこ

とだ。

例えるなら、融合騎がソフトで術者がハードという関係にある。

その役割が逆になるということは、リインフォースがすべきである魔力の管制・補助をはやてが行うということ。

リインフォースは人の姿こそとっているが、その実体は融合型デバイス。　レイジングハートやバルディッシュ、スタン達と同様の存在だ。

そんな彼女の役割をはやてが代わりに行う。　その負担が絶大なのは想像に難くない。

下手すればはやての精神が崩壊。　もしくは、融合状態が解除されないなどの異常が起こる可能性は十二分にある。

そんな危険性を伝えても、はやての決意は変わらない。

「夜天の主と祝福の風は一心同体。　無茶するんも一緒にや。　無茶は無茶でも、気合いで道理を引っ込ます。

平気や。　魔力制御の練習、ちゃんと毎日してきた。

それにこんな程度のことで、わたしの大事な祝福の風の命を削らせるんは絶対イヤや」

「我が、主……」

「ずっと一緒やったし、これからも一緒や……。

行こう、リインフォース」

「はい……我が主……！」

心は決った。

二人の意志と想いは、ここに一つとなった。

「ユニゾン――――――――！」

「――――――――――インッ！」

眩い希望の光が夜の闇を照らす。
闇に閉ざされた道を切り開く様に、夜天の主と祝福の風が一つになった。

光が治まる。
そこには、神々しいほどの力を持った一人分の影。
闇の中でもはっきりと判る高貴な黒翼。
陽光を浴びて輝く月の様に髪が煌く。
傷は癒え、甲冑は完全に修復された。
気の抜けた風船の様に頼りない体には魔力が満ち、今までの弱弱しさが嘘の様だ。

「融合率９６％……この、力は……！」

『ゆうたやろ？　夜天の主と祝福の風は一心同体やって……』

「はい……」
（この温もり、この絆……私は……！）

――――――――守りたい。

拳を握る。

『さ……いくよ、リインフォース！』

「はい……我が主！」

闇の因縁を断つため、夜天の光が飛んだ。

「それで、茶番は終わったか？」

虚空で足を組み、冷やかな視線を投げかける闇統べる王。

撃ち砕くべき敵を見据え、リインフォースが口を開く。

「マテリアルよ。　闇の書の運命は、もう終わりだ……。

蘇っても、もう何も……誰のためにもならない」

「ほざけ、抜け殻の分際で王たる我に口答えするか。

よかろう。　今度こそ、我が魔導で一片残らず滅ぼしてくれる！」

闇色の剣十字が光る。

放射線状に放たれる魔弾（ドゥームブリンガー）を旋回して躱す。

体が軽い。　魔弾が遅く見える。

ユニゾンの効果は確かに出ている。

負ける気が、しなかった。

黒球（ナイトメア）を間隔を空けて三つ配置する。

標的を指すと同時に黒い閃光が黒球から吐き出された。

まっすぐに向かい、闇統べる王の閃光（アロンダイト）とぶつかり爆ぜた。

黒煙が両者の視界を妨げる。

問題はない。

姿は見えなくとも、互いに標的の魔力でだいたいの位置は把握できている。

「――――――――行くぞ」

ボッ！　と右手に炎が宿る。

ゆらゆらと揺れる炎が剣を模(かたど)る。
黒翼を広げ、翔る。
黒煙を切り裂いた先に、黒い少女が居た。

「少し力が戻った程度で、調子に乗るなよしぼり滓がぁあっ！」

王が咆える。
剣十字を持ちかえ、右拳を握る。
魔力で拳が硬化していく。

「紫電――――」
「痛烈(テートリヒ)な――――」

ふたつの黒が交差し、

「一閃(シュラーク)ッ！」
「一撃ッ！」

激突した。
魔力が弾け、波濤となって空気を震わせる。
剣と拳が真っ向からしのぎを削る。

「「――――――――ッ！！」」

弾けるように離れる。
炎剣は崩れ、拳の効果は解けた。
すぐさま次の魔法の詠唱に入る。
接近戦など本来二人の役割ではない。
二人の資質は、あくまで遠距離からの広域殲滅なのだ。

極光が両者に灯る。
必殺の魔眩を放たんと力が凝縮していく。

「咎人達に、滅びの光を」

「激昂する天神、その手に握るは浄化の光槍」

リインフォースの手に光が集う。
闇統べる王の杖から雷刃が伸びる。

「星よ集え、全てを撃ち抜く光となれ」

「吼えろ雷霆、穢れた大地に粛清を」

桜光が輝く。
雷光が輝く。

「貫け！　閃光！」

「雷光！　一閃！」

己を救った希望の光をここに呼ぶ。
己を滅ぼした忌々しき光をここに呼ぶ。

「スターライト――――――――」

「プラズマザンバー――――――――」

極光が、爆ぜる。

「「ブレイカーァァァアア！！！」」

轟音が時空を震わせ、極光が世界を塗りつぶす。
破壊の波が結界を叩き不穏な音が響く。
うおっ！？　と結界に張り付いていたヴィータが飛び退いた。

「――――――――」

極光が治まって行く。
闇統べる王はすぐさま次の詠唱に入る。
苛立たしいことに、あの絞り滓とは力が拮抗している。
自分が無事だということはあちらもそうだろう。
　買い被りはしない。　慢心はこの瞬間だけは捨て去る。

「祈りの光をここに――――――――」

――――己が最強の魔法で葬り去る。
剣十字に光が灯る。
背後に巨大なベルカ式魔法陣が展開し、力を蓄えていく。

「未来を撃ち抜き、現在（いま）を焼き、過去にその爪痕を残す。
王の敵を、破滅の刃が撃ち砕く。
希望の光を、絶望の闇へと突き落とせ――――」

詠唱が終わる。
背後に立つ銀光の魔力塊。
少女の姿の王が持ち得る最強の力が聳え立っていた。
そして、それは相手も同じことだった。

「夜天の祝福をここに。　――――行くぞマテリアル。　闇の書は、今度こそ滅ぶのだ」

神々の黄昏。　そんな名を冠した巨大な力が、リインフォースの背後にあった。
月光に照らされるその顔に不安はない。

「――――――――ちっ」

憎たらしい、と王は吐き捨てる。
希望に満ちた表情。
どこまでも飛んでいけるという強い意志。
下らない。
闇の書が希望を持つなど、あってはならない。
闇はただ破壊と絶望を振りまき、血と怨磋の舞踏に歓喜する。
そんな、血みどろの運命から自分だけ離れようというのなら、

「我が手で、屠ってくれるわ塵芥――――――！！」

極光が膨らむ。
あとは、杖を向けるだけで破壊の津波が怒号を上げて襲いかかる。

「エクス――――」

「ラグ――――」

「――――――――カリバーッ！！」
「――――――――ナロクッ！！」

再び、極光が世界を塗りつぶした。

轟音が耳を潰し、魔力の洪水が全身に叩きつけられる。
真っ向からぶつかり合う膨大な魔力が弾け、大輪の光の華を咲かせた。

「――――――――――くっ」

視界が真白に塗りつぶされる。
光と共に迫りくる熱の津波が、闇統べる王の体を蹂躙する。
全身が焼ける痛みを、歯を食いしばって耐える。
この痛みは、つまりそのまま相手が味わっている痛みでもある。
ならば、これを耐え抜いたものが勝つ。
勝つのは自分。　だから、この熱波を耐えねばならない。
だというのに、

「――――――――――な」

白い世界に一点、黒い影が舞い降りた。
小さな点だったソレは、徐々に大きくなり、

闇統べる王の心臓を貫いた。

「――――が、はぁ……！？」

苦悶の声が漏れる。
胸に深々と突き立てられた金色に輝く剣十字。
それを両手でしっかりと握る少女の顔は、闇の王と同じ顔だった。

「おのれ子烏ぅ……ユニゾンを、解いたのか！？」

信じられないことだった。
あの熱波の濁流を、その身一つで渡って来たというのか。
だが、確かに少女の騎士服は焼け焦げており、なんとも無様だった。
それでも、煤けた顔には勝利に酔いしれる眩しい笑顔が張り付いていた。

「おのれぇ……」

力が抜けていく。
体が光の塵となって消えていく。
結界が消える。
消えゆく王を、魔導師たちが静かに見ていた。

「終わらんぞ……」

その中に、黒髪の青年を見つけた。
ドクン、と心臓が跳ねる。　縋る様に手を伸ばす。
探し求めていたジグソーパズルの最後のワンピース。
それを見つけたような高揚感が全身を駆け抜けた。

「闇の書は、終わらんぞおおおおおおおおっ！！！！」

王の咆哮とともに放たれた一筋の閃光。
それが、怜治の胸を真っすぐに貫いた。

「これで、終わりかな……」

エイミィが呟いた。

「だろうな。　結界もなくなり、新しく発生している様子もない。だが……」

「判ってるって。　念のため観測続行、でしょ？」

「ああ」

「しっかし、今回の事件名はなんていうんだろうねぇ……。　闇の書の欠片事件……とか？」

「長いな。　闇の欠片事件でいいだろ」

クロノは後ろを振り向く。

そこには、怜治やなのはたち一同が並んでいた。

無事に事件を解決したはずなのに、みな頭が痛そうに目を顰めていた。

その理由は、怜治の手の平にあった。

「どうして、その子がいるんだ？」

「「「……さぁ？」」」

身長が３０ｃｍほどに縮んだ闇統べる王がいた。

自分の姿が情けないのか、胡坐(あぐら)をかいて半眼でクロノを睨みつけていた。

残念ながらそのサイズでは迫力など無く、むしろ可愛らしいともとれるかもしれない。

「……どうして、その子が、ここにいるんだ？」

一回深呼吸をして、ゆっくりと、クロノが再度訊ねた。

「こいつが最後の最後で怜治になんかして、」

「この子の体が消えたと思ったら、」

「怜治のリンカーコアが分離して、」

「またこいつになったんや」

はやて、なのは、フェイト、そしてまたはやて、と順々に説明した。

頭痛を抑えるように、目頭を押さえるクロノ。

「……怜治。　何か心当たりは？」

「まったくな――――」

「こやつの裡に、闇の書の一部があるからの。　我はそれを触媒に

こうして復活を果たしたのだ。
まぁ、こんなみじめな姿になるとは予想外だったがな」

怜治の言葉を遮り、王が言った。
みなの視線が怜治に注がれる。
そういえば、闇の書の一部を取り込んだことを言ってなかったなー、と怜治は思った。

「怜治？　少し、話を聞かせてもらおうか」

「あー……メンドイからいや」

「レイジ？」
「怜治さん？」
「松田……」

ジリジリと怜治を包囲していく少女たちと騎士達。
そんななかから、リインフォースがはやてだけを誰にも気付かれずに廊下に出る。

「リインフォース？」

「我が主、お話があります」

祝福の風の真剣な眼差しに、はやては頷くだけだった。

廊下を進み、適当な部屋に入る。
照明を点けて真っすぐにはやてとリインフォースが向きあう。

「我が主。　緊急融合の反動はどうですか？」

「ん、ちょっと体がだるい感じだするけど問題はないよ」

「そうですか……」

ほっとして、リインフォースは胸を撫で下ろした。
そして、本題に話を進める。

「リミエッタ執務官補から聞いた話なのですが、限定的とはいえ融合能力が戻るかもしれないとのことです」

「ホンマか！？」

突撃するほどの勢いで、はやてが迫る。
リインフォースは頷き、続ける。

「ですが、この体が弱っていることは事実。　ですのでやはり……」

「ユニゾンデバイスの後継機……か？」

「はい。　私のように不安定な融合騎ではなく、本格的に主の魔法行使を補佐してくれる二代目の祝福の風。　やはり必要です」

融合騎デバイス（俗称ユニゾンデバイス）の作成。
管理局では融合適性を持つ者の少なさや術者に合わせた微調整・適合検査の手間、そして何よりデバイスが術者をのっとり、自律行

動を始めてしまう「融合事故」の危険性・事故例により積極的に開発がされなかったが、はやてのような高い融合適性を持った魔導師が入るため研究が再開されたらしい。
その試験第一号が、はやて用の新たな融合騎デバイスだ。

「そうか……。　でも、そうなると呼び分けがしづらくなるなー」

指を顎にあてて思案するポーズ。
リインフォースも倣って考えを巡らす。
やがて、リインフォースが口を開いた。

「では、私が『?(アインス)』で、ふたり目の方が『?(ツヴァイ)』というのは」

「そ……それはちょうシンプルすぎるような気がしないでもないけど」

「ダメでしょうか?」

「……ううん。　響きはかわいいし、ええかも」

はやてが微笑む。　つられてリインフォースも笑う。

「ほな、皆も待っとるやろしそろそろ行こうか」

「はい」

はやてが乗った車イスが部屋から出ていく。
小さな背中を見つめながら、リインフォースは思う。
己が主を守るもう一人の祝福の風。
八神家の新しい家族。

きっと、青い空がよく似合う優しい風になるだろう。
夜天の主とずっと、どこまでも飛んでいける強く優しい風に。
そんな未来の光景を思い浮かべ、くすり、と小さく笑いを零した。

所変わって、松田怜治はバインドで両手両足を繋がれて廊下の隅っこにほっぽられていた。
強制体育座りである。
闇の書の一部を取り込んだことを黙っていたことへの罰、と金髪少女談。
加えて、赤毛の少女がマジックで顔に色々落書きをしたらしく、さっきから通りかかる船員がくすくすと笑っている。

「くっそーあいつら。　ちょっと言うの忘れてただけじゃねぇか…」

「いや怜治君だったらそのまま一生言わないでしょ」

いつの間にか、エイミィが見下ろしていた。
脇には直方体のケースを抱えている。
そして、

「ふ、無様だな小僧」

闇統べる王が、エイミィの肩に座っていた。

「うるせぇちんちくりん」

「貴様……」

「はーいストップ！　口げんかは後にしてね」

エイミィの制止の声。　そして、怜治の首根っこを掴んで歩き出す。

「おい。　なんのつもりだ」

「大人しくしてねー。　せっかく怜治君の新しいデバイスが完成したのに。　落しちゃうよ？」

「マジか！」

「マジもマジ。　マリーの自信作だから期待してよー」

期待に胸を膨らませながら、ズルズルと怜治は引きずられていった。

怜治の新デバイスのお披露目は食堂でとなった。

お披露目にはいつもの面々が参加していた。

ふたつのデバイスを組み合わせて一つにする、というのはやはり珍しいのだろう。

あのシグナムでさえ、目を期待に輝かせていた。

「それじゃあお待たせしました！　管理局の総力を結集して完成した怜治君の新デバイスは……これだ！」

「「「「おおっ！！」」」」

ケースを開けると同時に歓声が上がった。

それは、銀の刀だった。

「名前は、フラガラッハ」

「フラガ……ラッハ」

無駄な装飾を省いた簡素なデザイン。　鍔の形のみが蓮根型の弾倉で、あの緋色の片手剣の特徴を受け継いでいた。　僅かに反り返った刀身は青龍刀を連想させる。

「……杖の部分はどこに行った？」

怜治が疑問を口にする。

見たところ、受け継がれた特徴は祖母の形見の剣だけだ。

つまりはアームドデバイス。　怜治の戦闘スタイルから判断したのだろうが、それではミッド式の白金杖の特徴はどこにいったのだろうか。

「大丈夫。　エリシオンと同じ感覚で魔力を注げば、魔力弾はちゃんと撃てるよ。

それと……」

エイミィが刀を怜治に渡す。

初めて持ったはずなのに、使い慣れたような感覚がした。

エイミィが端末を操作する。

「いくよ……」

『Ｌｏｎｇ　ｍｏｄｅ』

無感情な声が流れ、刀身が一気に伸びた。

「――――なっ！？」

息を飲む。

さっきまで３０ｃｍ程度だった刀身が、３倍近く伸長した。

重心が変わり、思わず落としそうになるのをなんとか堪える。

「なんと、フェイトちゃんのザンバーフォームを参考にした長刀形態！

見た目通り威力もアップ！　リーチもアップ！　アップアップのアップ尽くし！」

どうだまいったかー！　とＶサインをするエイミィ。

確かに、長刀と言うのは扱うのに時間がかかるかもしれないがパワー系の怜治には向いているかもしれない。

「ありがとよ。　エイミィ」

「え？　あ、いや、そう面と向かってお礼言われると照れるなー。

あはは……」

頭をポリポリと掻くエイミィ。

その傍で、はやての眉尻がピクリと跳ねたのは誰も気付かなかっ

た。

「試運転は、これからか？」

「あ、あーそうか。　それもやらなきゃいけないんだった」

忘れるところだった、というエイミィに、クロノが溜息をついた。

「刀剣型、となると相手はシグナムがいいか」

「シグナムね……」

「なんだ。　私では不服だと？」

怪訝そうにシグナムが眉根を寄せる。

「だって、お前って手加減とかしなさそうだし。　試運転から壊されそうだし」

「そんなこと――――」

「あるな」

「あるわね」

「シグナムならな」

ヴォルケンズ一同同意。

ない、とも言い切れないのかシグナムも強く反論はしない。

代わりに、

「なら、テスタロッサならどうだ。　魔力弾を撃てる斬撃主体とな

ると、一番近いのは彼女だ」

「ん、確かにそうかもな。　というわけで、相手お願いできるかフェイト？」

なのはの耳がピクリと動いた。　誰も気づかない。

「うん。　いいよ」

フェイトが頷き、訓練ルームに向かおうとした彼女を、

「はいはいはーい！　わたし、わたしもやります！」

「わたしもー！」

なのはとはやてが止めた。

はぁ？　と怪訝そうに顔をしかめる怜治。

「高町、八神、お前ら何言ってんだ？」

「それです！」

「は？」

「どうして怜治さんはわたしたちだけ名字で呼ぶんですか？」

それで、ああ、と大体の者は彼女たちの言いたいことが解った。

「わたしたち考えたんですけど、怜治さんて戦ったことのある人を名前で呼んでるんですよね」

「いや、別にそんなこだわりはない」

フェイトは初めて会った時名前しか教えられなかったから、クロノはファミリーネームで呼ぶとリンディと被るから。　ユーノやエイミィはいちいちスクライアとかリミエッタとか言うのが面倒くさかったから。　シグナム達にいたっては名字すらあるのか怪しいところだ。

だが、なのはたちにはそれがどうにも壁を造られているようで嫌だったのだろう。

そういえば小学生とか結構名前で呼び合うよなー中学辺りで名字になるけど、と考えている怜治の服の袖をむんずと掴んで二人が引っ張る。

当然、小学三年生の少女が高校生の男を引っ張ったところで大したことはないのだが、何が面白いのか後ろからエイミィ達が押して来るので体がずんずんと進んでしまう。

「勝ったら名前で呼んでくださいよ。　約束ですからね！」

「あーはいはい。　もう好きにしろ」

諦めたのか、やれやれと頭をふりながら怜治は足を自ら動かし食堂から出ていった。

その背中を、闇統べる王がじっと見ていたことに、クロノを除いて誰も気付かなかった。

「君は、なんだ」

冷たい声が響く。

その声を聞いたのは闇統べる王ただ一人だけだった。

皆とは少し離れていたこと、そして皆はガラスの向こうで行われている怜治たちの模擬戦に集中になっていたため、クロノの言葉を聞いたのは彼女一人だけだった。

「なんだ、とは不躾な質問だな。　そもそも我が今どんな状態かなど、貴様はとうに知っておろう？

あれだけ調べたのだ。　それで解らなければ管理局の技術もたかが知れる」

「そうだな。　今の君は、松田怜治に適応した融合騎だ」

「……」

ほくそ笑みながらクロノを見る闇統べる王。

眼下で、なのはの魔力弾と怜治の魔力弾がぶつかり爆発音を響かせていた。

「……怜治は、闇の書の一部を内側に取り込んだと言っていた」

「“ロストロギアを制御する力”か……随分と、馬鹿馬鹿しい能力だ」

「その点に関しては僕も同意しよう。

君は、彼の中にあった闇の書の一部を触媒に再生した。　そうだな」

王は答えない。　それを肯定と受け取り、クロノは続けた。

「つまり、君は闇の書として復活した。　そういうことか？」

桜色の閃光が咆える。

中空に大輪の光華が咲く。

「――――フ。　だったら、どうする？」

「君をこの場で消す。　君は、どう考えても危険だ」

無音動作で黒い魔杖がクロノの手に納まる。

ガラスを叩く魔力の波濤で、誰も気づかない。

「――――――――」

「……」

一人は鋭い眼光を飛ばし、それをもう一人が飄々とした態度で受け流す。

そんな膠着状態が数分続きやがて、

「心配するな」

闇統べる王が言葉を発した。

ガラスの向こうで、剣十字の杖と銀刀がぶつかりあった。

「我は確かに闇の書よ。　だが、かつてのような膨大な魔力はなく、

あるのは貯めに貯めた魔法知識のみ。　世界を滅ぼすなど、どうあがいてもできんよ」

一旦言葉を斬り、ガラスの向こうにいる青年に視線を向けた。

「奴が生きている限りはな」

弛緩しかけた空気が、また一気に固まった。

「どういう、意味だ」

「そのままの意味だ。
我は復活の際、奴のリンカーコアを複写した。　そのせいか我と奴には因果線のようなものが繋がった。
あの男は我の力を解放するリミッターを握っておる。　この姿はそのせいだな」

「つまり、怜治が君の闇の書としての力を封じていると？」

「そうとってもらって構わん。
先ほど闇の書を触媒にしたと言ったが、別に奪い還したわけではない。　正確には共有。　奴が死ねば、我は闇の書の力と奴の魔力と資質を吸収して完全復活する」

淡々と述べる闇の王。
その言葉に嘘偽りは感じられなかった。
彼女が本来の力を持っていないことも、
松田怜治が死ねばその力を取り戻すということも、全て事実。

「さて、ものは相談なのだが……うぬら、我をあの小僧に預ける気

はないか？」

「……なに？」

「どうせ我を自由にさせるつもりはないのだろう？　ならば監視役にあやつにしてはどうかと言うておる」

「そんな要求飲めるか。　君と怜治をふたりにすれば何が起こるかぐらいすぐに判る」

「話を聞いておらんかったのか？　我の力は奴にセーブされておる。我が奴の寝首を掻こうとしたところで返り打ちに遭うのが関の山よ」

その言葉に、クロノはすこし思案を巡らせて、

「……確かに、そうかもしれないな。　君は彼の融合騎でもあるし、もしもの時は役に立つかもしれない。判った。　艦長にもその方向で話をしてみよう」

闇統べる王の提案に頷いた。

「物分かりがよくて助かるぞクロノ・ハラオウン」

「ただし、怜治の同意もあればだ」

「問題ない。　奴が通路で転がっている間に念話で済ませた」

轟音が響いた。

爆煙が立ち上り、仮想空間の地上には少女と青年が合計三人、仰

向けに倒れていた。

「終わったようだな。　引き分け、まぁ十分だろう」

クロノの呟きを聞きながら、闇統べる王が飛ぶ。
倒れた少女たちを起こす騎士達に混じり、怜治へと一人近づく。

「話、つけてきたぞ」

「……そう、か」

息絶え絶えに、青年は答えた。

「あの小童、我は貴様の融合騎だから役に立つと言いおった」

「適当な理由で自分を納得させてるんだろ。
あいつも、少しは柔軟になったかな」

王の目が鋭く光る。

「我は、貴様と融合する気はない」

「それはこっちのセリフだ。　ユニゾンなんてしようものなら、お前は今度こそ俺の体を乗っ取るつもりだろ」

「当たり前のことを訊くな」

眼光が交錯する。
松田怜治と闇統べる王。　このふたりの関係は決して協力関係でも共存関係でもない。

互いに互いを監視し合う関係。
闇統べる王に松田怜治は殺せない。　それは事実だ。
だが、それは直接手を下せないだけで、怜治を死に誘導することはできる。
怜治はそれを知っている。　クロノもおそらく気付いている。
その上で王の自由を許したのだから、柔軟になったといいたくもなろう。
それが、王は気に入らない。
まるで、自分が怜治達の助けになると信じられているようで気に入らない。
だから。

「ディアーチェ」

少し、我儘を言うことにした。

「……は？」

「闇統べる王（ロード・ディアーチェ）。　我のことはそう呼べ。　どうせあの小娘たちも名前で呼ぶのだろう？　ならばついでだ、我もそう呼べ」

「……ああ。　判った。　よろしく頼むぜ、ディアーチェ」

「ああ。　こちらこそな、怜治」

握手する。
信頼など一切無い偽りの握手だった。

かくして、夜天を縛る闇の縛鎖は消え去り、魔導騎兵は闇の融合騎を手に入れた。

闇の欠片事件編（ポータブル）、終幕。

第４０話　名前で呼んで（後書き）

てなわけで闇統べる王生存。

さて、１周年に向けてなんか書くか……。

あ、一周年だ

「ねーねーティアティアー！」

「どうしたのよスバル？」

「一周年だよ！」

「は？」

「ついに、“魔法少女リリカルなのは☆Ｔｈｅ　Ｒｉｄｅｒ☆”２０１１年４月１７日づけで一周年突破なんだよ！」

「へぇ……。

ん？　でも私達って出番まだまだ先でしょ？　いいのこんなタイミングで出てきて」

「いいんだよ。　この小説読んでてリリなのアニメ本編見てない人なんて希有だよ！　それにわたしはロリッ娘バージョンがＡ’ｓ編に登場したから無問題だよ！

気付かなかった人は２９話を読み返してみてね？」

「誰に向かって言ってるのよ……。　で、用はそれだけ？　だったら私自主トレ行きたいんだけど」

「ふっふっふっふ……よくぞ訊いてくれました！　なんと、この場を借りて、いつかやったアンケートの結果を発表しようと思ってるのです！！

さぁティア！　どうせＶｉＶｉｄまで何やってもなのはさんには

勝てないんだから自主トレなんて止めて座って座って！」

「アンケート……ああ、あの『主人公が誰とくっつくか、主人公のお祖父さんの昔話が聞きたいか』ってやつねそれはそうとスバル、アンタ後で殴るわね」

「やだ！　じゃあ結果発表いくよーそれ！

総投票数６票

恋愛要らない……１票

恋愛要る　……５票

すずか　√……３票

フェイト√……２表

アリシア√……０票

過去話有り……３票

無し……０票

となりました！　投票してくれた皆さまありがとうございました！」

「アリシアさん（涙）。　――――えっと、じゃあすずかさん√に入るのね。

……ねぇ、スバル」

「なに？」

「総投票数少なくない？」

「あははー。　この小説、一応お気に入り小説登録件数が２５０以上で総ユニーク数も３０，０００越えのはずなんだけどねー。

まぁ作者も３０人ぐらいだろうなーとか思ってたけど。　鉛筆片手に『正』の字書く準備してたら指でカウントできるって言うＭＡ

☆ＳＡ☆ＫＡ♪」

「しかも過去話に関しては総投票数と数が合ってないし」

「無回答はカウントしないので過去話はやるよとのこと」

「ふーん」

「いやーでも1年で４０話。　ＩＦとか足したら４４部だよ。　作者の予想に反して話が進んだとのこと」

「もっと遅筆の予定だったんかい。
それで？　これからこの小説どうなっていくのよ」

「ペースは相変らずで、これからは
ＰＯＲＴＡＢＬＥ編の特別編
すずかさん√のオリ編、
お祖父さんの過去話編、
管理局入局後からＳｔｒｉｋｅｒＳ直前までのＡ，ｓ　ｔｏ　Ｓｔｒｉｋｅｒ Ｓ編（別称十年編）、
そしてＳｔｒｉｋｅｒＳ編に突入する予定らしいよ」

「なんか私達の本来の出番はまだまだ先なのね……。
そういえばさ、アンケート結果が『恋愛要らない』になったら新しく√出来るって言ってたけど……誰の√が開拓される予定だったの？」

「えっとね……作者から渡された資料によると、
ギンガ√、
チンク√、

ノーヴェ√、
ウェンディ√、
の三つがプラスされて、計7√＋『誰ともくっつかない』からもっかいアンケート取る予定だったらしいよ。
それでＳｔｒｉｋｅｒＳ　Ｘ編に突入、と」

「六課の新人メンバーはガン無視なのね……。
あ、今気付いたんだけど」

「ん、なーに？」

「こういうアンケート取っておいてさ、結局後になって『ＩＦ√入りまーす』とか言って他の人の√やったりとかしないの？」

「しません」

「断言したわね……」

「フェイトさん√に関してはＡ’ｓ　ｔｏ　Ｓｔｒｉｋｅｒｓ編から書き直す必要があるんでやらないとのこと」

「めんどうくさいだけなんじゃない……。
アリシアさん√はどうなの？　あれは前書きに短編載せたりするだけって話だったけど」

「特に要望が無い限りはしないって」

「ふーん」

「さて！　あっという間でしたが一周年記念特別座談会はこれにて

終了！」

「座談会って……。　アンケート結果発表しただけじゃない。　だいたい、こういうのって作者本人が出てくるもんじゃないの？」

「そのためのわたしだよ！」

「そのためのアンタかい！」

「えー、作者に代わりお礼申し上げます。
この作品に一年付き合っていただきありがとうございました。
二年目に突入しても、引き続き応援の方よろしくお願いします」

「取りあえず、今年中にＳｔｒｉｋｅｒＳ編まで持っていきたいわね」

「それは神のみぞ知る！！！」

「ウソでも頑張りますって言いなさいよ！！」

了。

と言っておいて特別編。　あの人がやっと登場。

冬の冷たい風が駆け抜ける。
市街から少し離れた閑静な住宅街の一角。
広い敷地を持つ民家の庭先にある小さな剣道場。
いつもなら民家の住人が剣を学ぶために使われるはずが、今日に限っては板張りの床を踏み叩く音も、木剣がぶつかり合う音もない。
冷たい板張りの床の上で、一人の青年が姿勢を正して瞑想している。
黒髪に隠れた顔は、端整な顔立ちをした好青年を印象付けさせる。
吹き込む風に、黒い髪が靡く。
冷たい風に身を震わせながら、青年は年の離れた妹の言った言葉を思い出す。

“わたし、魔法使いになったの”

本来なら何の冗談だと笑い飛ばすところだが、末妹の真剣な表情を前ではできなかった。
事実、それは真実だった。
本やゲームの中だけの存在だと思っていた魔法。
だが実際には文明を築き上げるほどにそれが発展した世界があるという。
魔法。　異世界。　どれもこれも、彼には非現実的すぎる話だった。
そんな世界に、彼の末妹は生きるという。

「――――――」

別に反対はしない。

彼女が自分で考え、自分で決めたことを批判することも、覆すこともできない。

あれは誰に似たのか頑固と言うか、一度決めたらなかなか考えを変えない。

それでも、兄として妹の旅立ちをただぼんやりと見ているわけにはいかなかった。

「……」

瞳が開く。

「――――――」

何もない空間を睨みつける眼光は、強い意志を宿した証。

立ち上がる。

高町恭也。　なのはの実兄は力強い足取りで道場を後にした。

魔法少女リリカルなのは　☆Ｔｈｅ　Ｒｉｄｅｒ☆　一周年記念特別編　高町恭也

冬の朝は起きるのが辛い。

目が覚めても絶え間なく睡魔が襲ってくる。

瞼は重くなり、やがてそれに負けて二度寝に陥ってしまう。　学校

が休みの日曜日、特に用事のない日は尚更だ。
松田怜治も、そんな人間の一人だった。
少々物がちらかった部屋。　もとより広くないその部屋は、最近増えた居候によってさらに狭くなっていた。
そんな彼の部屋で、無機質な着信音が響く。
ベッドの上に気付かれた毛布の山から手が伸びる。

「ん……なんだぁ？」

音の発信源であるケータイを手に取る。
画面に映るのはメール受信のメッセージ。
ケータイを操作して新たに受信したメールを見る。

“怜治さんへ
今日の１０時。　わたしの家に来てくれませんか？
高町なのは”

「……」

なんだこりゃ？　と首を傾げつつ枕元の時計を確認。
現在の時刻は8時３０分。　スタンに乗って向かえばなのはの家まで１５分程度なので今すぐ急ぐ必要はない。
とりあえず、なのはからのメールの意味を読み返そうと寝ぼけた頭を動かす。
と、

「ほう、『来ませんか』という誘いでも『来てください』という要望でもなく、『来てくれませんか』という嘆願か。　なかなか変わった内容だな」

居候であるディアーチェが、月光色の髪を弄りながら答えた。
起き抜けなのか寝ぼけ眼だ。

「で、我の眠りを妨げたこの書簡はなんだ」

「文章通りだろ。　なのはの家に来てくれっていう」

「応じるのか？」

「面倒だけど、無視したら後が怖い」

「情けないな」

「うるせぇ」

ベッドから降りる。
箪笥から服を取り出し着替える。
寝巻を放り投げると、ディアーチェの眉が歪む。

「貴様、我が居ることを忘れておるのか？」

「どうしてお前に遠慮しなきゃいかんのだ」

放った寝巻が投げ返されてきた。

９時４５分。　眠気も完全にとれた所でスタンに跨る。

ハンドルを握り、ふと後ろを振り返る。
３０ｃｍ程の大きさから、普通の人間サイズになったディアーチェがいた。
彼女も寝巻から私服（エイミィのお古）に着替えている。

「で、お前は付いてこねぇんだな」

「呼ばれたのはうぬだけなのだろう？　ならば我が付いていく道理はない」

「また散歩か。　クロノに目を付けられるような事はすんなよ」

ああ、と返答が来る。
ディアーチェが松田家に居候するようになって早１週間、見る物全てが珍しいのか彼女はほぼ毎日、散歩と称して１日中街を歩き回っている。
問題を起こさない限りは静観するつもりなのか、規則にうるさい少年からの小言はないので怜治もあまりうるさくは言わない。
ディアーチェが何かしようとすればラインの繋がりがある怜治にはすぐに判るから、彼女も派手に動くつもりもないだろう。
家の前で別れる。
ディアーチェが歩き出すのを確認してから、スタンを発進させて高町家へと向かった。

予想通り、高町家へは１５分程度で着いた。
スタンを家の前に止め、呼び鈴を鳴らす。
少しして、扉が開いた。

「あ、怜治さん。　いらっしゃい」

栗色の髪の少女――高町なのはが顔を出した。
頭の両脇で結った髪を、黒いリボンで止めていた。
フェイトと交換したというあれか、と怜治は思った。

「お呼ばれに預かりまして――、と。　んで、何の用だ」

「え、ええっとですね……」

申し訳そうに、顔を背ける。
その視線は、庭先にある小さな剣道場に向いていた。

「あっちに行けばいいのか？」

「……はい」

これまた申し訳そうに頷いた。
そ、と素っ気なく返して怜治は剣道場に向かう。
なのはは付いてこない。
怜治は何となく事態を把握した。

（俺を呼ぶように言われたわけか……。　さて、要件はなんとなく想像できるが……面倒くさいことにならなきゃいいが）

嘆息しつつ、剣道場に入る。

「松田怜治くん、だね？」

凛とした声が響いた。
目を凝らして道場の奥を見る。
日射しの影に隠れて顔は見えないが、誰かが板張りの床に正座していた。
声色からして男。　年齢は自分より上だろうかと怜治は推測する。
「なのはに俺を呼ぶよう言ったのは、あんたか」
「ああ。
初めまして、なのはの兄の高町恭也だ」
男が立ち上がる。
相手が動くと同時、怜治も道場に上がって近づく。
手を伸ばせば届くくらいに近づいたところで、顔が見えた。　自分より背が高く、やはり年上かと小さく呟く。
凛とした端整な顔立ち。　怜治とは違う品のある黒髪。　偶に聞く好青年とはこういう人の事を言うのだろうと怜治は思った。
「兄ね、あんまり似てないな」
「年が離れているし、男と女だ。　それに俺は父親似で、なのはは母親似だ」
「そうか」
重い沈黙が降りる。
恭也は身を翻し、また道場の奥へと進む。
怜治も後に続く。
「受け取れ」

竹刀を二本手に取り、一本を怜治に差しだす。
言われたまま手に取り、眺める。
剣道なんて学校の体育の授業程度でしかしたことのない怜治にとって、慣れない重さだった。
「って、もっと物騒な物を振り回しているよな、俺」
「何か言ったか？」
「いや別に。
で、これで何するんだ？　竹刀の使い道なんて一つくらいしか思いつかないんだが」
「そのたった一つのことだよ」
そう言って、少し離れて恭也は竹刀を斜に構える。
慣れているのだろう、怜治とは違い教本にでも載っていそうな綺麗な構えだ。
「俺は魔導師というものと戦ったことはなくてね。　ぜひとも、一手お願いする」
「……俺、剣道詳しくねぇんだけど」
「だったら、そこは君の自由で構わない。　俺はあくまで、魔導師との一戦をしたいんだ」
ギシリ、と板ばりの床が軋む。
ピリピリと空気が張り詰めていく。

お互い、手に持ったのは竹刀なのに、真剣で立ち合いをしているかのようだ。
その間合い、約３ｍ。

「――――――」

深く、息を吸い、吐く。
恭也がこの立ち合いで何をしたいのか、怜治は何となく理解している。
怜治のデバイスであるスタンは外、フラガラッハはまだ微調整とやらで手元にはない。
だから、きっと怜治は恭也に勝てない。
魔法がなければ、怜治は普通の高校生に過ぎない。
道場が家にあり、日頃から剣の鍛錬をしているであろう恭也に、勝てる筈がない。
だから、今できる怜治の全力をぶつけようと思った。
集中を自身の裡に向ける。
デバイスがない怜治に出来る魔法はたった一つ。
その魔力で、その体を強化するという魔法と呼んでいいか判らない程の些細な術。
それを、全身に可能な限り掛ける。
竹刀を構える。
恭也とは違う、形だけを真似た不格好な構え。

「行くぞ」

「来い」

強化した脚力が爆発し、床板を叩く。
怜治の体が弾け、一気に両者の間合いをゼロにする。

体を前に傾け、竹刀を下段から逆袈裟に斬り上げる。

「――――――」

迫りくる一撃を、恭也は冷静に受け止める。

強化された腕から迸る剣速は凄まじい。　なるほど、これなら確かに並みの人間では躱せない。

だが、高町恭也とて幼少から剣を修めてきた人間。

放たれた一撃に感心こそすれ、後れをとることなどあり得ない。

いくら威力が高くとも、馬鹿正直に放たれた剣を受け止めることなど容易い。

竹刀がぶつかり合い、パァン、と渇いた音が響く。

受け止めたら今度は恭也が攻める番となる。

対峙する青年は隙だらけだ。　狙い所はいくつもある。

そこで敢えて、一番回避が困難であろう箇所へと竹刀を振り下ろす。

「……！」

反撃が迫る。

本来の怜治の力では視認もできない一撃。　だが、今の彼は全身に魔力による強化が施されている。

視力が強化され、迫る剣を捉える。

脳からの伝達速度が強化され、いつもより速く体が反応する。

体の強度が強化され、本来の関節の可動限界を超えて全身をねじ曲げる。

「――――な！？」

零れた驚愕の声は恭也のもの。

確実に敵を打つはずの竹刀を、敵はほぼ横っ跳びするように躱した。

くるくると中空で回り、木から落ちた猫の様に着地した。

無茶苦茶な動きに翻弄されそうになる頭を怒鳴り付け、すぐさま体を向ける。

四肢を床に着けた青年はまるで一頭の獣だ。

右手には律儀に竹刀を握りしめ、真っすぐに向けられた黒い視線にあるのはただの闘志。

戦略、戦術。　そんなものは投げ棄てる。

戦略などたてたところで両者の剣の腕の差は変わらない。

怜治に在るのはこの、魔力で強化された体一つ。

故に、彼に残されたのは愚直なまでの直進しかない。

獣が疾走を開始した。

半ば跳躍に近い疾走。　初撃と同じ、獣は一瞬にして間合いを詰める。

「――――――――」

そして、それを見切っていることも、初撃と同じだった。

カウンターで合わせた竹刀が一閃する。

獣の左を素通りするように、一撃を胴に叩き込む。

はずだった。

怜治の胴を打つはずの竹刀は、怜治の竹刀によって止められていた。

再び、渇いた音が響く。　今度は両者踏みこんでいたため、響く音はより甲高い。

「――――――――」

「……」

先に動いたのは恭也だった。
竹刀を滑らせ、怜治の竹刀を弾く。
右腕ごと、竹刀が真後ろへと飛んでいく。
これで終わり。　相手は全身隙だらけ。
あとは、恭也が一撃を叩きこめば終わる。
怪我させないように力を加減しながら竹刀を振ろうとした時。

「自由でいいって、言ったよな」

悪寒が背筋を駆け抜ける。
怜治の顔を見る。
イタズラに成功したような意地悪な笑みを浮かべ。

渾身の左拳を突き出した。
打撃音が響く。
弾かれたように両者宙に舞う。
一人は倒れ、一人は見事着地に成功。
勝負は決まった。
一人は一撃当て、もう一人はそれを超えられなかった。

「いっつ～！　これ、骨とか折れてねぇだろうな！？」

勝ったのは、高町恭也だった。
倒れた怜治は打たれた横っ腹をさすりながら起き上がる。

「まさか、拳が来るとは思っていなかった」

心底驚いたと言った風で恭也が息を零す。

「自由でいいって言ったのはあんただぜ。　もとより、俺は剣士ってのに拘りがあるわけでもねェし」

傍に落ちていた竹刀を拾い上げ、恭也に渡す。

「――――――――」

竹刀を受け取りながら、恭也は自分の竹刀を握った手を見る。

たった二撃。　渾身とはいえ、僅か二度の打ち合いで恭也の腕は痺れを持っていた。

毎日木剣を振っている恭也が、素人の剣を受けて腕が痺れる筈がない。

つまり、怜治は強化によって素人の域を超えたということ。

恭也が幼少のころから積み重ねてきたものに、素人が一気に迫る。

それが魔法。

「こんなものを、なのはは使っているんだな」

「ん？」

「怜治くん。君に折り入って頼みがある」

真剣な顔で、恭也が言った。

本気を示すように正座する恭也に、怜治も腰を下ろす。

「なのはは、魔法使いになって管理局に入ると言っている」

「そうか」

「管理局と言うのに俺は詳しくない。　だが、聞けば警察組織の様なものだという。
つまり、なのはは魔法を使って誰かと戦うということなんだろう」

「……そうなるな」

「きっと、危険な仕事なんだろうな」

「待った。　止めてくれって相談ならお断りだ。
家族のあんたが言ってダメだったもんを、俺が言ってどうにかなるとは思えない」

違う、と恭也が首を横に振った。
じゃあなんだ、と聞き返すと彼は真っすぐ怜治の目を見て。

「単刀直入に言う。　怜治くん、君がなのはを守ってくれないか？」

「……」

沈黙が落ちる。
判った、などと軽々しく口にできない。
だからと言って、嫌だ、などとも口にできるほど怜治は薄情ではない。

「あいつの魔導師としての才能は、俺より上だぜ？」

「それでも、まだなのはは九歳の女の子だ」

「もう九歳、かもしれねぇぜ？」

「それは……」

「俺はあいつが日頃どんな風に過ごしてるかなんて知らねぇよ。
あいつと初めて会った時、あいつは既に戦ってた」

「――――――」

「あいつは、俺が思ってるほど強くねぇのかもしれねぇ。　けど、
あんたが思ってるほど弱くない。　俺はそう思う」

「――――――そうだな」

大きく息を吐いて、高町恭也はそう言った。
家族が危険な仕事に就くことには依然抵抗がある
だがそれが、本人が己の意志で決めたことならば、止めるのではなく応援するのが家族だろう。

「ありがとう。　怜治くん」

「お礼言われるようなことした覚えはねぇな」

「したんだよ、君は」

ははは、と笑い声が響く。
恭也が笑いながら立ち上がる。
怜治も続こうとした時。

「よし。　ではお礼に俺が剣を教えよう」

「――――――は？」

ピタリ、と怜治の体が硬直した。
怜治の腕をつかみ、強引に立たせる。
眩しいほどの頬笑みに寒気を覚える怜治。

「俺も修行中のみだが、これでも高校生の妹に剣を教える程度には修めている。
君は体つきもなかなかだし、その力に技術が加われば必ず強くなる！」

力説する高町兄。
この強引さ、間違いなくなのはの兄だなと実感した瞬間であった。

「いやいい。　遠慮する。　剣とかなら他の奴から教わる予定だし、うん、大丈夫」

嘘ではない。
フラガラッハを使いこなすために、シグナムから剣を習う約束をしている。
加えて、魔法理論の勉強だの魔法世界でのルールだの、アースラ組総出で教授されることになっているので、これ以上予定を詰め込みたくないと真摯に思う。
なので恭也の提案は却下だ。　目指せ、ノーと言える日本人。

「ああ、もしかしてその人、シグナムさんかい？　なら問題ない。
あの人は一刀で、俺は二刀流だ。　君もどうせなら色々な型を覚えた方がいいだろう！」

残念、元からある予定に捩じ込んできた。
これでは断る理由が潰れ、おそらくいや絶対シグナムも賛成する

だろう。

「く……なのはといいこいつといい、この家の連中は人を引っ張りまわるなオイ！」

「いや～照れるなぁ」

「褒めてねぇよ！」

日が沈む。

街は茜に染まり、すぐ夜の闇へと沈んでいく。

そんな闇の中、松田家に倒れ込むように帰宅した一人の青年を、ディアーチェが冷たく見下ろす。

「……で、早速打ちこまれてきたと。

うぬも奇特な運命に巻き込まれておるの」

「うるせぇ……」

以後、高町家の剣道場で響く声に、一人分の声が加わった。

特別編、というかある意味４１話　了。

以下ボツにしたリリなの二次創作ネタ。
このネタで書きたいという方が万が一いたらどうぞご自由に。
←　←　←

「……」

トントントン。
シャーペンの先で机を叩く。
目の前にあるのは『進路志望調査』と書かれた白い紙。
高校二年生にもなると、早い者はすでに明確な未来のビジョンというものが見えているが、俺にはまだそんなものは見えない。
だからこんなものを書けと言われても適当な大学の名前を記入するしかない。

「……」

ちらり、と隣の席に視線を向ける。
そこには、綺麗な銀髪の少女が居た。

「――――――――――」

息が止まる。
心臓が早鐘を打つ。
やばい。　ちら見しただけで顔が火を噴きそうだ。
彼女に気付かれる前に視線を元に戻す。

「やっぱり……綺麗だな」

俺、光岡澪雅（みつおかりょうが）は恋をしている。

隣の少女、リインフォース・オリンピアを。

「よう。　てめぇが闇の書か？」

「管理局……か」

「ああ。　別に恨みはねぇんだけどよ。　――――――世界のために死んでくれ」

いつからだろう。　憧れにも近い感情が、胸を焼く恋慕へと変わったのは。

されど、その少女には、普通の日常とはかけ離れた悲痛な運命が纏わり付いていた。

「――――魔法、だと？」

「そうだ。　彼女の体内には闇の書と言われる呪われた魔導書がある。

それが起動すればこの街いや、世界すら滅ぼしかねない」

告げられる事実。

ただ人を殺し、世界を滅ぼし、あらゆる憎悪と怨磋を記憶した少女。

「もう、誰も殺したくなんかない！！　もうあんな辛い想いなんかしたくない。　でも仕方がないんだ。　私と言う存在は、必ず人を不幸にする。　その破滅の連鎖がここで終わるというのなら、ここで死んでも構わない」

「――――ふ、ざけんなっ！！」

死を覚悟した少女。
全てを知りつつ、その死を受け止められない少年。

「逃げよう、リインフォース。　おまえが誰かのために死ぬっていうなら、俺のために生きてくれ」

始まる逃避行。
終わりの見えない逃走。
だが、どれほど全力で走っても、闇の運命は振りきれない。

「君一人のために何十億という人の命を危険にさらすなど、そんな我儘は許さない」

「もういい。　もういいんだ澪雅。
誰かにこれほど想ってもらえて、私は幸せだった。

私は、大丈夫だ」

避けられぬ運命。
無数の命を守るため、たった一人の少女が己が命を差し出す。

「俺には――――何もできないのか」

「ああ。　君は黙って見ていろ。　彼女が、人を救うところを」

そんな運命を、少年は受け入れることなどできなかった。
地上を走る少年に、空を翔る魔導師たちを追えはしない。

“――――――――翼が、欲しい”

そんな切実な願いを叶えるように。
紅蓮の翼が、少年を空に送る。

「信じられるわけないだろ。
何がもういいだ。　何が幸せだ。　何が大丈夫だ。
――――あんな、あんな泣きそうな顔で言われた言葉なんて、なに一つ信じてやるもんか！！！」

少年の背に広がるは四対の紅い翼。

燃え盛る翼が、闇の運命を焼き尽くす。

「おまえが闇の中に沈むってんなら、俺が引き揚げてやる。
おまえが闇の中を進むってんなら、俺がその闇を照らしてやる。
おまえが闇の中にいるのが嫌だってんなら、俺がその闇を全部燃やし尽くしてやる！！」

魔法戦記リリカルＡ，ｓ　～夜天を照らす紅蓮の翼～

少年の想いが、夜天を焦がす日輪となる。

作品説明
生まれながらにして、闇の書という呪われた魔導書を体内に秘めていたヒロインが管理局に追われる。
ヒロインの事が好きだった主人公が管理局からヒロインを守ろうとあーだこーだする話。
Ｒｉｄｅｒとどっちをやるか最後まで迷ってたもの。
王道っぽくボーイミーツガール。　リインフォースヒロイン。
あと多分若返っている。
そのせいか主人公の性格がどこか似ている。
ちなみに、名前の元ネタはやっぱり車関連。

ボツ理由
・パラレルにパラレルを重ねたためもはやリリなのじゃねぇ。
・管理局微アンチだ。
・公式設定をかなり無視している。
・あれ、これはやていらなくね？　など。

二つ目←

「……ん」

目覚まし時計のアラームで目を覚ます。
けたたましい電子音を止め、ベッドから体を起こす。
カーテンを開き、窓を開ける。　眩しい朝日と穏やかな風が飛び込んできた。

「今日も面倒事に巻き込まれませんように」

陽光に輝くミッドの街を見下ろしながら、俺こと、クレフ・ヴァンガードは朝日に祈るのだった。

階段を下りて一階に降りる。
一階は事務所となっており、書類整理のためのデスクや接客のためのソファーなどが並べられている。

「起きたか、寝ぼすけ」

……俺が座るべきデスクで、剣（デバイス）の手入れをしている女がいる。
褐色の肌に海の様に深い碧眼と、それと同じくらい青い髪。
我が相方、フォルテ・ゾンダ・ベルヴェデアだ。
その端整な相貌とスタイルの良さから大層な美人とよく言われるが、俺からしたらただ恐ろしい戦闘狂だ。

「おい。　そこは書類整理をするためのデスクで、おまえの剣を手入れする場所じゃない。
　そんなことはゴミ箱の中でやれ」

「書類整理ぐらいしか能のないクレフは自主的にゴミ箱に入るべきだ」

　いつもの軽口を叩き合いながら俺は外に出る。
　ホコリ臭い朝の空気を吸い込みながら、電子端末を操作して依頼が届いていないかチェックする。
　俺が住み、フォルテが出入りするここは魔導師事務所だ。
　事務所名は『ゾンダ・ベルヴェデア&ヴァンガード魔導師事務所』。
　まことに遺憾ながら、あの凶暴女の名前が先に来る。
　文句を言いたいが言いきる前に斬り捨てられるのが関の山なので言わない。
　男女平等を通り過ぎ、男尊女卑は女尊男卑の時代となってしまった。

「んー、相変わらず大した依頼が無い。　だからと言って断ったら飢えて死ぬから受けるんだけど」

　魔導師事務所とは、一言で言えば『魔導師が経営するなんでも屋』だ。
　仕事内容は逃げた飼い猫の捜索から世界を震撼させる犯罪者の討伐までと幅広い。
　とはいっても、俺たちの仕事はたいてい前者なのだが……。
　後者の依頼はまず管理局が大手の事務所に捜査協力という形で依頼する。

「げ、管理局から魔導師ランク測定のお知らせって……。　面倒くさ」

魔導師事務所を経営する魔導師の九割は嘱託資格を持っている。
別に義務ではないのだが、この資格を持っているいないで依頼の入りは天と地ほどにも違う。
嘱託資格と言うのは管理局が実力を認めたことを示すわけだから、やはり信用度が変わってくるのだろう。　ならば、時々管理局にいいように使われるとしてもとっておく価値はある。

「もっとも、いいように使われたことなんてないんだけどねー……ん？」

端末を操作する手が止まる。
珍しいことに、管理局員から直接メールが入っていた。
念のため言っておくが、俺に局員の知り合いも身内もいない。

「なんだ、まさかあの莫迦親父がまたなにかしでかしたのか？」

そうだったら今度こそあの男の息の根を止めよう。　世界のために。
そう心に決めながら、『八神はやて』という人物からのメールを開いた。

魔法戦士リリカルＳｔｒｉｋｅｒＳ　とある研究者と魔導剣士

作品説明
八神はやては自身が率いる機動六課に、新たに嘱託魔導師二名の編入を要請した。

やってきたのは一組の男女で……。
三期にオリキャラを投入しての再構成。
当然の如くキャラ名は車から。
ボツ理由
・オリキャラメインすぎて既存キャラの影が薄い。
・既存キャラがサブキャラレベルにまで落ちるのはダメだと思うんだ。
・オチが思いつかなかった。

あ、一周年だ（後書き）

てなわけで二年目に突入です。

ですが、大学が忙しくて更新はまた遅く……。

申し訳ありません。

外伝　鉄心の行く末　上（前書き）

登場人物

マツダ・レイジ　三一歳。　執務官。ティアナと共に麻薬王を追う。

ティアナ・ランスター　二十歳。　執務官。　マツダの行動に振りまわされる苦労人。

外伝　鉄心の行く末　上

とある世界のとある町に一人の少年がいた。
特に勉強ができたわけでもなく、運動に秀でていたわけではない。
ごくごく平凡などこにでもいる少年。
それ故、子どもが一度は抱く夢を当然のように抱いた。

“――――困っている人を助ける、正義のヒーローになりたい”

それを聞いた彼の両親は、なれたらいいね、と模範解答のような返事をした。
正義の味方。
ほぼ全ての少年が長い人生の中で一度は夢に見て、そして成長と共に薄れていく夢。
現実を見て、そんなモノにはなれないと知って皆大人になっていく。
だが、その少年だけは決して夢を諦めることはなかった。
成長と共にその想いは薄れることはなく、むしろ強まっていった。
現実と夢の狭間で苦悩する少年の前に、奇蹟にも近い出会いが訪れた。
魔法。
少年が暮らす地球という世界で、魔法とは小説や漫画の中でのみ存在する幻想の力。
だが、宇宙のように広大に広がる次元世界にはその幻想が当たり前にある世界もあった。
なんの因果か、少年にはその力が備わっていた。
魔法が存在しない地球では自覚がなかった。　が、異世界からやって来た『魔導師』との出会いにより、自身の内に宿る力を自覚した。

正義の味方という途方もない夢を望む少年の前に現れた魔導師という手段。
彼がその道を歩み始めるのに、そう長い時間はかからなかった。

魔法少女リリカルなのは　☆Ｔｈｅ　Ｒｉｄｅｒ☆　外伝　鉄心の殺戮者

夜。　半月の月が夜空に座し、下界の様子をのんびりと眺めている。
街の喧騒から離れた海に面した倉庫街の静寂を、人の集団が発する足音が壊していく。
訓練された一糸乱れぬ足並み。
集団の服装と装備は統一されていた。
黒に近い濃紺のジャケットの上から肩と胸を守るために着込んだ簡易鎧。
手には先端が音叉の形をし、谷間に色とりどりの宝玉が一つ挟まった杖。
そんな集団の先頭を走るのは、最近になって幼さが抜けてきたのではと思うほどの若い女性だった。
黒いボディースーツの上から白いジャケットとスカートを着込み。
黒いグローブをつけた両手には二丁の拳銃が握られている。
女性は夜中でも分かる派手なオレンジの髪を躍らせながら、近代

的なデザインの拳銃を袈裟切りの直後のように構えて走る。
若い女性に率いられた集団は、やがて一つの倉庫の前で止まった。
倉庫の扉はシャッターで固く閉ざされ、彼らの侵入を拒絶する。

「ランスター執務官」

名前を呼ばれ、オレンジ髪が翻るほどの素早さで振りかえる。
その表情は見惚れてしまうほどに凛々しく、集団を率いる者として申し分なかった。
ティアナ・ランスター。齢二十。難関と言われる執務官試験を一発で合格したという秀才。
そして、四年前に管理局の存続を危ぶませた大事件を解決した奇跡の部隊の元メンバー。
彼女のことを聞かれた者の多くはそう語る。

「全員、配置完了しました。いつでも行けます」

頷き、ティアナは目の前のシャッターに拳銃を向ける。
銃口に光が灯り、シャッターを撃ち破ろうとした時。

「ぎゃあああああああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！」

この世のものとは思えない耳を劈く断末魔が鳴り響いた。
悲鳴は、シャッターの奥からだった。

「――――――――――くっ！」

作戦変更、と後ろの隊員達に叫び、トリガーを引く。
銃口から放たれた光弾が轟音を響かせ、容赦なくシャッターを突

き破り人一人が通るには十分すぎるほどの大穴を空けた。
ティアナが穴に向かって飛び込み倉庫内に突入。隊員たちも続々と続く。
倉庫の中は照明が点いてなく、闇一色だった。
空けられた穴からの月明かりが唯一の光源となっていた。

「――――――――」

ティアナは顔に出さず、内心では苛立っていた。
この倉庫内では自分が前々から追っていた犯罪グループの取引が行われる。
彼らを一網打尽にするため、できるだけ静かに音を立てずに突入したかったが、その全てがパァだ。
もっとも、彼女が苛立っている原因はそれだけではない。

「何をやっているんですか……」

倉庫内には、血の匂いが充満していた。
噎せ返るほどの鉄の匂い。
蠢くように聞こえてくる呻き声。
闇に目が慣れる前に、目の前の惨状が判ってしまった。
ティアナは闇の向こうにいるであろう、この惨状を引き起こした張本人を真っすぐに睨みつける。

「――――――――」

コツコツと足音を立ててそれがやって来た。
時折ガラスが砕ける音がすることから、照明はそれが破壊したのだとティアナは直感した。
そして、それが姿を現した。

「御苦労。　遅かったな、ランスター執務官」

「マツダ執務官……！」

それは男だった。

白いレザーアーマーの上からこれまた白いジャケットを羽織った男。

マツダと呼ばれた男は、まさに全身白ずくめだった。

レギンスも手に握った双剣も白。

肌は病人のように白く、まだ三十歳になったばかりのはずなのに髪も真白。

見ているだけで眩暈を起こしそうになるほど、男は白に包まれていた。

マツダ・レイジ。

それがこの男の名前だった。

「マツダ執務官、単独行動は慎んで下さいとあれほど……！」

「仕方あるまい。　君が掴んだ情報よりも早く取引が始まってしまったのだ。　みすみすそれを見逃すわけにはいくまい」

「だからと言って……」

マツダの奥の光景に目が行き、息を呑んだ。

そこは、地獄絵図だった。

地に倒れ呻き声を上げ続ける男たち。

だが、その数は全体の半数程度だった。

「――――――――」

残りの半分は、すでに息絶えていた。
両断され体が上と下に分かれた者。
脳天から唐竹割された者。
首を刎ねられた者。
腹を裂かれ内臓をぶちまけた者。
頭部を両断されている者……。
死んでいる者は皆一刀のもとに斬殺されていた。
瞳は白濁し体は温もりを失って行く。
ついさっきまで生きていたであろう者たちは、一瞬のうちに物言わぬ肉塊へと変貌していた。
生きている者も無傷の者など一人もいない。
皆、手足の骨を砕かれ、酷い者は先が切断されていた。

「マツダ執務官。　これは、どういうことですか？」

「どういうこととは、どういうことかな？」

平然としたもの言いに、かぁっ、と頭に血が昇る。
この男は、まるで害虫を潰すような感覚で殺戮を行ったというのか。

「ふざけないで下さい。
彼らは逮捕して聞きたいことがあるのに、殺してしまっては意味がない」

できるだけ平静を装って言葉を紡ぐ。
だが、マツダはその努力を嘲笑うように言う。

「仕方あるまい。　いきなり武器を向けられたのだ。自分が生き残

るためにもそうせざるを得なかったのだよ。
それにほら、殺したのは半分でもう半分はちゃんと生きている。
デバイスもコアは生きているから記録（ログ）はきちんと見れるはずだ」

マツダは地面に落ちた機械の残骸を指さす。
確かに、破壊されたデバイスは魔法補助には使えないだろうが、コアは無傷のままだった。
今後の捜査に役立つ情報も無事だろう。
だが、その配慮が余計にティアナを苛立たせる。

「デバイスだけを破壊したのなら、なぜ殺したんですか。　百歩譲って動けない程度に攻撃したとしても、殺す必要はなかった……」

「ベルカ式魔法はミッド式ほど非殺傷が簡単ではないんだよ」

「誤って殺してしまった、とでも言いたいんですか？」

「いや、きちんと殺意をもって殺らせてもらった。　上からも許可は出ていたじゃないか」

「――――――――――！！」

怒りが臨界点を突破する。
振りかえり、マツダの胸倉を掴んでその貌を睨みつける。

「……」

誰もが萎縮するであろう憤怒の形相にも、マツダは揺るがない。
むしろ、癇癪を起した子どもを宥めるように手を重ねた。

「落ち着け、ランスター。　部下が見ているぞ」

「……」

ゆっくりと、掴んだ胸倉を離す。

男の言葉に納得したからではない。

ここで自分がいくら激昂しても、この男には通じない。　暖簾に腕押しとはこのことだろう。

平行線を辿るだけの議論を止め、本来の目的に思考を切り替える。

「生存者の逮捕を。　重傷の者はまずは医療機関に運んでください。デバイスも回収して解析班に廻します」

指示を受けて隊員たちが動き出す。

無駄のない動きで犯罪グループを次々と運び出す。

死体も袋に入れて運ばれ、倉庫内は濡れたような赤い血の痕と直方体の金属製の箱が残された。

その箱の一つをマツダがゆっくりと開ける。

中には、粉末の入った小さな紙袋がギッシリと詰め込まれていた。

これが先ほどのグループが取引しようとしていた品物だ。

マツダは一つを手にとってまじまじと見た後、嘲笑を浮かべた。

「莫迦みたいな話だと思わないか。　こんな小さな袋一掴みで家が建つなんて……」

箱の中の物を見て、ティアナは顔を顰めた。

「合成麻薬『ウニモグ』……」

近年、爆発的に広がっている違法薬物『ウニモグ』。

その効果は他の違法薬物と同じく、服用すると気持ちが高揚し、多幸感・幻覚をもたらし、精神と肉体両方の健康を害する。
使用法はたばこの様に吸うか、水に溶かして飲む。
効果と依存性が高く、一度使ってしまえばあっという間に薬物依存症となって破滅の人生を歩ませる。
危険なものだと判っていても、失墜の中にいる者はその一瞬の快楽に身をゆだね、気付いた時にはもう抜け出せない。
蜘蛛の巣に飛び込んでしまった哀れな蝶のように、あとは死ぬまで密売組織の収入源として骨の髄までしゃぶられ続ける。
今さっき逮捕したグループも、末端とはいえこの違法薬物の密売組織の一つだ。

「……」

忌々しげに薬を睨みつける。
麻薬に手を出す人間は、心の弱い者だけだ。
自信が持てず、意志の弱い者だけが薬物に手を出し、溺れ堕ちていく。
多くの人間がそのような印象を持っているだろうし、ティアナもそう思っていなかったと言ったら嘘になる。
だが、事実は少し異なる。
売人が餌にするのは前述の心の弱い者だけではない。
こんな例がある。
ある売人が、薬物とは縁遠い真面目そうな若者と飲み屋で隣の席になった。
特に嫌悪していたわけでも、その若者が薬物への興味を示していたわけでもない。
若者がトイレに行くため席を立った時、こっそりと若者の飲み物に薬物を溶かしこむ。
何も知らない若者は飲み物を口にし、気付いた時には薬物依存症

だ。
不運という一言で済まされてしまう不幸。
なんという理不尽。
麻薬という獣は道を踏み外して墜ちてきた者だけを喰らうのではなく、真っ当な路を歩いている者を襲い引き摺りこむ。
そんな理不尽を無くすために、管理局では密売組織の掃討に力を入れている。

「――――――――」

だが、やはりマツダのやり方は見過ごせない。
いくら犯罪者とはいえ、法を守り、人を守るはずの管理局員が人を手に掛けるということは見過ごせなかった。
マツダを睨む。
視線に気付き、ティアナが言わんとしていることを察したのか、マツダは極めて冷静に言う。

「彼らは人を食い物にする違法ドラッグの密売グループだ。温情を掛けることはないと思うのだが？」

「だからと言って、殺していい理由はありません。
犯罪者なら、きちんと法に則った裁きを受けさせるべきです」

マツダはふむ、と考え込むように腕を組んだ後、冷え切った瞳でティアナを見据えた。

「成程、君は彼らが更生する機会を与えたいわけか。
どんな犯罪者でも、刑期を終えれば心を入れ替えて真人間として生きていく。そう思っているのだな？」

嘲笑うかのような口調。
一度下がった溜飲がまた上がって来そうになる。

「そこまで楽観的に見ているつもりはありませんが、誰にでも更生のチャンスは与えるべきだと思います。事実、そのための嘱託制度ですし、私もきちんと更生した人を見てきました」

「N2Rの事を言っているのか？　アレは特別なケースだろう。出生が特殊で、加えてかなり偏った教育をされてきた、というものだ。だが、私が斬った者たちは違う。普通に生まれ、普通に生きてきた。更生は難しいだろうよ」

「……」

「あと嘱託制度だが、あれは更生する意志のあるものが受ける物だ。犯罪者なら誰しも受ける物ではないし、受かる物でもない」

「……！　彼らにその意志が無いなんて、貴方が決めることじゃありません！！」

堪え切れず叫ぶ。
だが、マツダは冷え切った目を向けたまま、

「その通りだ。だが、彼らにその意志があると決めるのは君ではない」

鋭い眼光が、ティアナを貫いた。

「あ――――、う――――」

言葉が詰まる。
恐れたのではない。　彼の言葉に言い返す言葉が見つからなかったのだ。

「……ふ」

くぐもった笑い。
張り詰めた空気が弛緩した。

「いやスマン、このような問答には正解も不正解もないな。君が彼らの更生を願う気持ちを否定することはできんし、下らんと一蹴するつもりもない。　君も、私の考えを否定することはできまい」

話はこれで終わりだとばかりにマツダは倉庫から立ち去って行く。
その背中を、ティアナもほかの隊員達も冷やかな視線で見つめていた。
誰かを守るために誰かを殺す。
それは仕方のないことなのかもしれない。
だが、彼は最後まで足掻くことなく、早々に人を手に掛ける。
もっと良い道があるのではと思索することなく彼は刃を下ろす。
人を斬っても彼は揺れない。　その行為の結果救われた者がいると信じて彼は歩き続ける。
その様を、畏怖と皮肉の意味を込めて彼をこう蔑んだ。

――――“鉄心の殺戮者”と……。

「はあああ～～～～～……」

深い深い溜息をついて、ティアナは自分の席に腰を下ろした。

チラリと時計を見ると、夜はとっくに明けていた。

彼女がいるのは時空管理局本局にある執務室。　執務官たちが出入りし、報告書や書類を処理するだけでなく情報を交換し合う一種の交流所のような場所だ。

待機中や任務が無い時、ほとんどの執務官がここにいる。　もっとも、今は他に誰もいないようだが。

ティアナの場合は前者、というより逮捕したグループの取り調べやら押収物の確認やらに追われ、やっと取れた休憩時間と言ったところか。

だが、休憩時間とはいえティアナは素直に休むことは無い。

彼女の任務は『ウニモグ』の生産工場（プラント）の停止と流通首謀者の逮捕である。

先ほど捕えた者たちなど氷山の一角にすぎない。

「――――――――」

無言でコンソールを叩き、捜査に必要な資料をウィンドウに出していく。

しばらくカタカタと無機質な音だけが聞こえ、やがて、一人の男の顔が映り出された。

コンソールを叩く指が止まる。

「バモス・ドマー二……」

ヒキガエルのような顔の男の名を呟く。

この男こそ、『ウニモグ』を始めとする次元世界で蔓延する八割の違法ドラッグの流通を牛耳っていた、まさに麻薬王だ。
過去形なのはもうすでに死亡しており、孫が後を継いだという。
写真の隣には判っている限りの素情や経歴が記載されている。
その一文に目が止まる。
“次元最悪の七人（クライシス・セブン）”
読んで名の如く、この広い次元世界で最も恐れられる超がつく凶悪犯罪者だ。
その者たちによる被害はもはや天災級で、その行方を管理局が血眼になって捜している。

「まったく……あの変態より危ないのが七人もいたなんて、考えたくもないわね」

『いた』と過去形なのは、今はもう三人が逮捕もしくは討伐され“次元最悪の四人（クライシス・フォー）”となっているからだ。
なんでも六十年ほど前にたった一人の執務官が立て続けに討ったという。
相手が相手だけに、それを成し遂げた魔導師には尊敬を通り越して畏怖を感じる。
その本人は二十年ほど前に死去したため会ったことはないが、当人を知る古株の執務官に訊けば延々と武勇伝を聞かせてくれるだろう。

「天才、か……」

ポツリと呟く。
気分が沈んでいる自分に気付いて頭を振る。
どうも自分は才能というものにアレルギーの様なものがある。
それは自分の力に自信が持てないことから来ていたことで、それ

は四年前にいた部隊の隊長たちのおかげで解消されたと思っていたが、根は深いらしい。

気を取り直してコンソールを叩く。

バモス・ドマー二の後を継いだ、ブレビス・ドマー二に画像を切り替える。

トカゲに似たほっそりとした顔の男の写真が出た。濃い金髪に黒が少し混じり、危険を知らせる道路標識の様なカラーリングだ。

先ほどバモスの後を継いだ、と言ったが組織の幹部たちは快く思わなかったらしい。

考えてみれば当然か。

幹部の連中からしたら、ブレビスのような若造がいきなりトップに据えられたら気に食わないのだろう。

おかげで密売組織は空中分解寸前。一部の幹部が好き勝手やっているらしく、今まで出さなかった尻尾が出てきたというわけだ。

この機を逃す手はないと、管理局は組織を一網打尽にしようとティアナにその任務に就かせたのだ。

「でも……なぁ……」

溜息が出る。

問題なのは、捜査のパートナーだ。

激しい戦闘が予想されるとして、戦闘力に秀でた執務官が任命されるのは判る。

だが、

「もっと人いなかったのかなぁ～～～。戦闘できるってことならフェイトさんとか……」

「え、私がどうしたって？」

「うひゃあっ！？」

後ろから話しかけられて飛び上がる。

振り向くと、長い金髪の女性が居た。

いま口から出たフェイト・テスタロッサ・ハラオウンその人だ。

執務官用の黒い制服に身を包んでいることからティアナと同じ執務官であることが判る。

四年前にティアナが所属していた部隊の分隊長であり、ティアナが彼女の執務官補佐を務めていたことから今でもよくしてくれている。

「どうしたの、ティアナ。　何か任務で悩み？」

「任務というより、相方のことで……」

「そっか……マツダさんか……」

ティアナが話した倉庫街での一件を聞いて、フェイトは苦笑した。

「あの人とは何度か一緒に仕事したことあるけど、私も結構振りまわされたな……。　勝手にズンズン突き進んじゃうからついてくのが大変だった」

どこか遠い目でフェイトは言った。

どうやら、彼の行動は前からそうだったようだ。

ティアナの口から溜息が出る。

「まったく、あの人はやることが極端というか……大体、なんで執

務官になったんだか……」

「助けたかったんだよ」

透き通るような声で、フェイトが答えた。

返答が来るとは思っていなかったティアナは目を丸くした。

「……え？」

「あの人はね、人を助けたかったの。　人に振りかかる、不幸なんていう一言で済まされるような理不尽から誰かを守りたかったんだよ」

「……」

言葉が出ない。

あんな、躊躇なく人を斬り殺すような人間が、そんな願いを持っているとは思ってなかった。

「ティアナ知ってる？　あの人、執務官試験に七回も落ちたんだよ」

「ええっ！？」

今度こそ本当に驚いた。

確かに、執務官という役職は狭き門であり、試験の合格膣は１５％以下と難易度は確かなものだ。

執務官試験に半年に一度行われるから、七回落ちたということは最低でも四年、マツダレイジは執務官を目指し続けたということになる。

いや、目指した年月ならそれ以上か。

正確には、マツダは四年間、『お前は執務官に相応しくない』と言われ続けてきたということだ。
それでも諦めなかった。それは執念にも近い。

「でも、執務官試験なんて落ちるのが普通で、私の場合はフェイトさんが丁寧に教えてくれたからで……」

「ありがと。でも、マツダさんはそれほど執務官になりたかったっていうのは判るでしょ？」

「……はい。でも、そんなに頑張って執務官になってやりたかったことがアレなんて……」

ティアナの脳裏にあの惨状が浮かび上がる。
飛び散った鮮血。
苦痛に呻く者たち。
命乞いする暇もなく殺された者たち。
綺麗な理想を掲げ、四年以上の苦労の末に執務官になった男がやる所業だとは、到底思えなかった。

「どうして、あんなことを……」

うーん、とフェイトは指を唇にあてて考え込む。
その仕草に、思わずティアナは見惚れてしまった。
フェイトという女性はティアナから見ても美人だ。
整った顔立ちに金紗の髪、つんとした鼻と艶やかな唇。
制服の上からでも判るほど抜群のプロポーション。
大人の雰囲気というか、艶やかな色香が漂ってくる。
これでティアナと年齢が三つしか変わらないというから驚きである。

三年経ったら自分もこんな風になれるのかと考えていると、

「じゃあ、マツダさんのこと知ってる人に訊きに行く？」

「え？」

「で？　どうなんだよ」

突然の問いに、伸ばした箸が中空で停止した。

マツダはなんの脈絡もなく質問をしてきた初老の男の顔を見る。

二人が居るのはミッドチルダの首都クラナガンの中央区画に在る居酒屋だ。

外見がお洒落なレストラン風だというのに店内は丸っきり現代日本風（正確には日本風に近いデザイン）という変わった店だ。

第９７管理外世界地球の日本出身であるマツダはこの故郷に似た雰囲気とメニューを持つ店を気に入っている。

テーブルを挟んで向かい側の席にいる初老の男はマツダが新人時代に世話になった恩師で、マツダの後見人でもあり、今でもこうして時折呑みに誘ってもらえる。

確か今の階級は二等陸佐で、小隊を一つ率いていたかと記憶を巡らせる。

「どう、とはどういうことですか？」

「だから、ランスターの小娘はどうなんだと訊いているんだ」

「どうと言われましても……有能だと思いますよ。　まだ若いですけど同期の局員の中では飛びぬけてると思いますが」

「そうか……くそっ」

忌々しげに舌打ちをする。

マツダは溜息をついた。

彼の恩師は悪い人間ではない。　のだが、彼はどうも天才アレルギーというか、俗に言う『才能溢れる人間』というものを嫌っている。

高い魔法資質を持たず、長い時間をかけて努力だけで今の地位まで上り詰めた人物だけに、若くして高い地位を持つ者を嫌悪するのも仕方がないのか。

「まったく、ハラオウン兄妹といい、ランスターの小娘といい、どいつもこいつも天才ばかりで嫌になるぜ。

その点、お前はいいな。　執務官になるのに十回も失敗してるあたり、お前の努力家なところは好感が持てる」

「十回じゃないです。　七回です」

「執務官補佐の試験入れりゃ十回だろうが。　ほんと、お前は試験というものに縁が無いな」

ハハハ、と笑いながらグラスに琥珀色の酒を注いでいく。

白い泡が零れる寸前まで注がれたグラスを渡され、口をつける。

「そういえば、正義の味方とやらにはなれそうか？」
「まだまだですよ。　我ながら、目標地点が遠すぎます」

店を出て、恩師と別れてクラナガンの街を歩く。
時間はすでに夜明け、空が曙に染まっていた。

「さて、これからどうするか……」

酒は飲んだが酔ってはいない。
これから本局にもどって報告書の作成と今後の捜査方針を決めよう、と予定表を頭の中で組み立てていく。

「おい」

予定表を組んでいると、声を掛けられた。
声のした方を向くと、そこはビルとビルの間の路地だった。
夜明けの光が届かず、未だ闇に包まれた空間から足音が近づいてくる。

「……レヴィか」

「あいかわらず辛気くさいかおをしているなおまえ」

現れたのは少女だった。
長い青い髪をふたつに結び、黒一色の服を着て近づいてくる。
同僚に似たような顔の人がいたなとマツダは思った。

「何の用だ」

「知ってるぞ。　おまえ、今『いほーやくぶつ』ってのを探してるんだろ？」

マツダは無言で少女を見据える。

レヴィとは五年前に任務先の観測世界で倒れていたのを助けて以来の知り合いだ。

といっても、少女の方からマツダに突っ掛かってくるだけなのだが。

知り合いと言ってもマツダはレヴィのことは何も知らない。

住所も素性も何も知らない。

ただ、レヴィの方からこうしてマツダに会いに来ては仕事に首を突っ込んでくるのだ。

どこから情報を得てくるのか知らないが、管理局の情報管理を見直す必要があると思う。

マツダの無言を肯定と捉えたのか、レヴィはイタズラが成功したような無邪気な笑みを浮かべる。

「へっへ～ん。　なんと、僕は『うにもぐ』のコウジョーってのがある場所を知ってるんだぞ。　すごいだろ、さぁ頭を撫でろ！」

「な――――――――――に？」

一瞬頭の中が真っ白になり、怪訝そうに眉を顰めた。

そんなことに気付かず、レヴィは「さぁ撫でろ撫でろ」と頭をすり寄せて来るのだった。

太陽がてっぺんに昇った昼ごろ。
ティアナはフェイトに連れられて聖王教会に来ていた。
荘厳と建つ教会を見上げながらティアナはフェイトに訊ねる。

「マツダさんは、聖王教会の出なんですか？」

「違うよ。　でも、マツダさんが入った頃は局にベルカ式の使い手が少なかったからよく出向していたらしいよ」

礼拝堂を通り中庭出ると、二人の魔導騎士が立っていた。
どちらも女性で、一人は桃色の長い髪をポニーテールにまとめ、もう一人は赤紫色の短髪。
ついさっきまで手合わせでもしていたのか、うっすらと汗が浮かんでいた。

「シグナムー！」

手を振りながらフェイトが桃色髪の女性の下へ向かう。　ティアナも後ろからついていく。
こちらに気付いて、シグナムと呼ばれた女性が微笑む。

「テスタロッサ、ランスター！　久しぶりだな」

「はい、お久しぶりです」

出された手を握りながらティアナは頭を下げる。

シグナムはティアナが以前所属していた部隊の分隊の元副隊長だ。
厳格な性格の人物で、その凛とした雰囲気はフェイトとはまた違う美人である。
フェイトを慈愛の聖母とするならシグナムは猛々しい戦乙女と言ったところか。
短髪の女性はシャッハ・ヌエラ。
聖王教会の教会騎士団に所属する魔導騎士である。
閑話休題。
再開の挨拶もそこそこに、ティアナは率直な疑問を口にする。

「フェイトさん。　シグナムさんがマツダさんのことをよく知ってる人なんですか？」

「うん。　マツダさんが執務官になる前に居た部隊がシグナムと同じなの」

「おい、何の話をしている？」

「あ、はい実は……」

「ああ、マツダ・レイジか。　よく覚えている。　誠実な男でな。暇さえあれば訓練室を独占するような男だった」

シグナムの語り口は軽快だ。
それほど好感を得れる人物だったようだ。
彼女がそのように語られる人物が、ティアナが知っている男と同一人物だとは思えない。

「正義に燃える男というのはああいう男を言うのだろうな。……だが」

突然シグナムの表情が暗くなる。

憐れむような、悔しがるような、そんな表情だ。

「何が、あったんですか？」

「……知りたいか？」

真っすぐに見据えられ、総毛立つのを感じた。

シグナムの視線は冷たく、こちらの覚悟を問うていた。

この先はマツダ・レイジが抱える闇の部分だ。

それを本人からではなく他人から聞くことがどういうことか、ティアナは解っている。

それは他人の心に土足で踏み込むことと同時。

そして、土足で踏み込みながら本人が伸ばす手を払いかねない。

万一ティアナが彼の闇を拒絶してしまえば、今後共に任務を遂行することはできないだろう。

そんな危険を考慮したうえで。

「お願いします」

ティアナは頷いた。

ここで踏み込まねば、自分は一生あの男を理解できないだろう。

その覚悟を察したのか、シグナムは身を翻して「ついてこい」と一言だけ言ってズンズンと先に行ってしまう。

遅れてたまるかと追って行くティアナの背中を、フェイトが静かに見つめていた。

教会の中を歩く。
やがて、ある扉の前でシグナムの足が止まる。

「……」

一瞬、躊躇う素振りをしたが、決心して扉をノックする。

「シグナムだ。　今、いいか？」

少しして、「はい、どうぞ」と返事が返って来た。
扉を押して入る。
そこは書庫だった。
高く積み上げられた書架一杯に本が並べられている。
棚に入りきらない本は床に積み上げられて本の山と化していた。
その山の中に、一人の修道女が静かに佇んでいた。
肩まで切り揃えられた栗色の髪、左目を眼帯で隠されているがようやく少女が女性に変わるくらいの相貌。
一瞬、なぜかティアナは自分の昔の上官を思い出した。

「初めまして。　時空管理局執務官、ティアナ・ランスターです」

「初めまして。　この書庫の管理を任されています。　シュテルと申します。
シスターシュテルと、お呼び下さい」

感情があまり感じられない声だった。
シグナムに促され、一歩近づく。

そこで気付いた。
修道服の左袖が、空気の抜けた風船のように力なく垂れていた。
そこにあるべきであろう左腕が無かった。

「ああ、これですか。　昔、任務でしくじりまして……」

自嘲するような口調。
切なげに空虚な左袖を撫でた。

「シスターシュテル。　ランスター執務官は今、マツダ執務官と任務についているそうだ」

瞬間、感情が乏しい瞳に光が灯った。

「えっ、レイジとですか……！　彼、元気そうでしたか！？」

ティアナの手を右手で握りこむ。
ズイッと顔を寄せられ、思わずティアナはたじろいだ。

「え、ええっと元気……だったと思います」

「あ……すいません突然」

恥ずかしそうにシュテルが身を引いてくれた。
目まぐるしく変わる様子にティアナも困惑する。

「シスターシュテル。　彼女に、あの時の話を聞かせては貰えないか」

このままでは話が進まないと思ったのか、シグナムが助け船を出

してくれた。
シグナムの言葉を聞き、シュテルの顔に影が落ちる。
少し躊躇の意志を見せたが、やがて、
「分かり、ました」
ゆっくりと頷いた
「……」
シュテルの話を聞いて、ティアナは絶句していた。
それを見て、シュテルが苦笑した。
「貴女が気に病むことではないですよ」
そう言われて、ティアナは言い返す言葉が見つからない。
それは、その通りだからだ。
聞いた話はよく聞く話だ。
理想に燃えた若者が、現実の厳しさに打ちひしがれた話。
ただそれだけ。
同情がかろうじてできる程度の話。
「――――――――あ」

重くなった空気を引き裂く電子音。
ティアナの通信端末だ。
通話ボタンを押し耳にあてる。

「はい。　ランスターです」

『私だ。　今、どこにいる？』

心臓が跳ね上がった。
通信の主は、今さっきまで話題の中心だったマツダ・レイジからだった。
心の動揺を隠して平静を装う。

「聖王教会です」

だが、

『……なぜそんなところに。
まあいいか……。　朗報だ。「ウニモグ」の製造工場（プラント）の場所が判ったぞ」

平静ごと動揺が弾き飛ばされた。

外伝　鉄心の行く末　上（後書き）

長くなったんで上下に分けます。
一応、鉄心のにあり得たかもしれない未来話。
フライングして登場してくる人在り。

用語解説

次元最悪の七人（クライシス・セブン）
作者の脳内の厨二病域がビッグバンして生まれた単語。
Ａ’ｓ終了時点で残りは四人。
定義としては「その者の行いにより次元世界全体に多大な被害を及ぼす危険性が大きいと管理局が認定した七人」
人間災害とか人災というより人型災害。　マジで迷惑極まりない。
簡単に言うなら、あの変態ドクター以上にヤバい人たちトップセブン。
Ｒｉｄｅｒにおけるオリジナルストーリーのほとんどはこいつらが直接でないにしろ絡んでくる予定。
上手いこと全員出せればいいなぁ……。

外伝　鉄心の行く末　下（前書き）

登場人物

マツダ・レイジ　三一歳。　執務官。ティアナと共に麻薬王を追う。

ティアナ・ランスター　二十歳。　執務官。　マツダの行動に振りまわされる苦労人。

外伝　鉄心の行く末　下

空が怒っていた。
暗雲は天を覆い尽くし、冷たい雨を吐き出す。
それは癇癪を起した子どもの様だ。
雨はやむ様子を見せず、むしろどんどん強くなっていく。
大地を穿たんと水滴が叩きつけられる。
そんな豪雨の中、一人の男が立っていた。
深い森を抜けた丘の上で、一人の男が立っていた。
肌を刺す雨は体から熱を奪う。
寒さに体が震える。　いや、その震えは寒さからではない。

「……あ……あぁ――――――ああ……」

目の前に、血まみれの少女が倒れていた。
左腕は肩から斬り落とされ、可愛らしかったはずの顔にはおどろおどろしい爪痕が走っていた。
その傷は少女の額から左目を容赦なく引き裂き肉を抉った。
赤い池の中に、少女は倒れている。

「――――――――」

激しい雨音は、耳に残る少女の悲鳴にかき消される。
暗い世界は、少女の体から迸った血で赤く塗りつぶされている。

「……シュテル」

少女の名を呟く。　反応はない。
当然だ。　この傷で意識を保っている方がおかしい。

「どう……して……」

口にする疑問は誰に向けた者であろうか。
自分を庇って傷を負った少女にか。
この傷を負わせた犯人にか。
それとも、

その犯人を見逃そうとした自分にか。

任務の内容はひどく簡単だった。
罪を犯した魔導師が捕まった。　けれど逃げた。
それを追って逮捕するのが任務。
ただ、それだけ。
失敗など考えられるはずがなかった。
けれど、犯人を追いつめた時、男の心が揺れた。
見逃してくれという嘆願。
家には身籠った妻がいる。　それを一人残してはいけない。　だから見逃してくれと。
当然、そんな願いを聞き届けることはできない。
だが、男の心が揺れてしまった。
誰かを助けるという夢のために魔導師になった男の心が、揺れてしまった。
その一瞬の躊躇いが、任務に同行していた少女を傷つけた。
男の隙をついて罪人は魔法を発動。

それを庇って、少女は左腕と左眼を失った。
そして、命の危機に陥った。

「なんて……」

無様。
誰かを助けるために魔導師になったはずなのに、助けるどころか傷つけた。
そして、

「――――――――」

助けようかと迷った犯人も、激情に任せて殺してしまった。
視界の端には、血まみれの肉塊となった犯人が転がっている。
結局、男は誰1人助けることができなかった。

「は、ははは……ははははははは……！」

笑う。
曇天を仰ぎ、狂ったように笑う。
無様な自分を。　愚かな自分を嘲笑う。
誰かを助ける、守るとほざいておきながら結局誰1人助けず、挙句の果てには傷つけ殺した。
どうして今まで気付かなかったのか。
誰かを守り助けるということは、誰かを守らず見捨てるということだと、どうして気付かなかった。
いや違う。
気付かなかったのではない。
気付いていながら、その事実から目をそむけ続けてきた。
自分は違う。　自分は特別。

そんな事実は殴り倒して、己が理想を叶えられると自惚れた。
その結果が、この血の海だ。
「はははっ！！！！！」
熱い物が目尻から零れる。
冷えた頬を温める。　それもすぐ雨に流され冷えていく。
「…………………………………………………………レイジ」
狂ったように嗤う男の姿を、倒れた少女が残された右目で見つめていた。
「……………ッ！　……………………むかんっ！」
思考が、闇から浮上してくる。
「………………………執務官っ！　マツダ執務官っ！」

目が覚めた。
目蓋を上げると、オレンジ髪の女性がこちらを見下ろしていた。
「眠って……いたのか」
「そのようですね。　良い夢は見れましたか？」
「……いや、実につまらん夢だったよ」
腰を上げる。
眠りこけていたマツダを怒っているのか、ティアナの眉間には皺が刻まれている。
地面が揺れている。
いや違う。　ここは、管理局が保有する局員輸送用のヘリの中だ。
ババババッ、とプロペラが空気を切り裂く音が聞こえる。
窓から見える外は暗い。
すでに日は沈み、夜の闇には人工の光が斑模様に広がっていた。
ミッドチルダ工業地区。
静まることのなく機械が動き、物を造り続ける。
この世界が存続する限り、この地区の光が消えることは未来永劫無いだろう。
眼下に広がる鉄の大地を、忌々しげに睨みつける。
この大地のどこかに、自分たちが追う獲物が潜んでいる。
「木を隠すには森の中、とはよく言ったものだ。　こうも堂々と麻薬を作り続けていたとはな……」
「でも、本当にこんなところで？　だってこの辺りは……」

「ああ。　地上本部御用達の大手製薬会社のエリアだ」

息を呑むティアナ。

「信じられない……」

「なに。　まだ関与が決まっているわけではない。　一部の役員が腐っているのかもしれんし、ネズミのように知らぬ間に潜り込んだのかもしれない。

どちらにしろ、今我々がやるべき事とは関係ない」

「……」

マツダがヘリの扉を開け放つ。

強風で髪が煽られる。

「さて、私は先に行くが……君も来るか？」

「……はい」

マツダが差し出した手を、強く握った。

そして、

「――――――――行くぞ」

二人は飛び出した。

重力に引かれて体が落下していく。

バタバタとバリアジャケットがはためく音を聞きながら、マツダは飛行に入る。

落下速度が減速し、ゆっくりと、舗装された大地に降りた。

「……」
「――――――――」

一瞬だけ目を合わせ、ふたりの執務官は走り出す。
思い返してみれば、こうして現場で並走するのは初めてではないかとティアナは思った。

レヴィからの情報にあった工場に突入する。
できるだけ気配を消して走る。
ここに来る前に確認を取って見ると、この工場のオーナーは数年前に死亡したはずだった。　さらに踏み込んで調べてみれば関係書類などになんとも不可解な点が見えてきた。
ここまでこればもう灰色といっても黒に近い。
強制捜査で踏み込みたかったが、せっかく見えてきた獲物のしっぽだ。　下手に騒いでまた闇に潜られては面倒だったのでしなかった。

「……」

足を止めるティアナ。
照明の下、人気はなく、ひたすらに機械だけが動き続ける。
ラインに乗ってやって来た梱包されたコンテナを一つ取る。
ふたを開けると、ぎっしりと紙袋が詰め込まれていた。
見間違うはずがない。　昨夜港の倉庫で押収した物と同じ、『ウニモグ』だ。

「当たり……ですね」

「ああ」

マツダが静かに頷いた。

「行こう。　いくら全自動と言っても、どこかで機械の様子を見る部屋くらいはあるはずだ」

そこならさらになにかあるはずだと推定し、ふたりは奥に進んだ。

探していた部屋は簡単に見つかった。

監視室、とでも言うべきか。　監視カメラの映像が一挙に押し寄せるモニターが壁の一面を覆い、あとはテーブルとイス、暇を持て余すための雑誌や飲み物があるだけだ。

テーブルの上に寂しく置かれた端末を手に取る。

「――――――――」

端末を操作する手が止まり、マツダの口元が吊り上がる。

見てみろ、と端末の画面をティアナに見せた。

「これは……組織の幹部の名前と所在！？」

「加えて取引に使われる場所や日程、主な買い手まで記してある。これは、予想以上のものだな」

思わずほくそ笑むマツダ。

それは仕方のないことだとティアナは思う。

これに加えて前に逮捕した密売グループのデバイス解析が終われば、ウニモグの撲滅だけでなく麻薬王の組織そのものを壊滅に追い

込めるかもしれない。
手柄とか出世とかそういうものを抜きにしても、胸の鼓動が高まってしまう。

「――――ワクワクしてるな」

「あ、いえ、別に私はそんなこと……」

ばつが悪そうに顔を背ける。
モニターに顔を向けた時、ティアナの顔が固まった。

「――――？」

マツダもモニターに目を向ける。
カメラによって切り取られた工場内の映像に、必死に走る人影があった。

「あれは――――」

息を呑む。
ここで見つけた物以上の者が、そこにいた。
トカゲに似た、ほっそりとした男。濃い金髪に黒が少し混じった髪。
間違いない。彼は、

「ブレビス・ドマー二……」

「待て、ランスター！」

待たなかった。ティアナは弾けるように部屋を出ていく。

監視映像からブレビスが通った場所は判っている。
走れば十分ほどで奴を追いつめられるだろう。
先ほどの端末にブレビスの所在は記されていなかった。　組織のトップであるブレビスを捕えることができるのはもしかしたらこれが最後かもしれない。
そんな焦りが、彼女を突き動かす。

「まったく、あのじゃじゃ馬め……！」

放っておくわけにもいかない。
嘆息しつつ、マツダも部屋を飛び出した。

走る。
いつもならこの程度で息が乱れることなど無いのに、高まる心拍が呼吸を乱す。
カンカンカン、と階段を駆け下りる。
薄暗い廊下を走り、T字路を曲がる。
扉を殴りつけるように開けると、ひらけた空間に出た。

「――――――――」

そこは、倉庫の様だ。
積み上げられたコンテナ。　中に何があるのかなど考えるまでもない。
輸送用のトラックが何台も並び、発進を今か今かと待っている。

その奥、シャッターを背にしてこちらを怯えたように見据える男の影。

「ブレビス……ドマー二……！」

忌々しげに呟く。

ブレビスの肩が跳ねた。

ひぃっ、と情けない悲鳴が聞こえてくる。

「――――時空管理局です。　大人しく、投降しなさい」

ティアナの両手に、愛銃『クロスミラージュ』が納まる。

銃口をブレビスに向けた。

「ち、ちくしょお！　なんでここが解った、誰が俺を売りやがったああ！！？」

半狂乱でブレビスが喚く。

部下から信用が無いというのは本当だったらしい。

「諦めなさい。　ここを押さえた以上、あなたもあなたの組織ももう終わりよ」

「お、……わり？」

ピタリとブレビスの動きが止まる。

ギョロリと爬虫類じみた目玉がティアナを捉えた。

排水に溜まったヘドロの様な不快な視線。

「――――ひ、ひひひ……」

「――――――――――？」

「ひひひゃはははははははははははははは……！！！
終わり、終わりってか？　俺を馬鹿にしてきたジジイ共も、使えねぇクズ共も皆、みんな捕まって終わり……くっだらねぇっ！！」

ブレビスの狂った嗤いが響く。　口角泡を撒き散らす。
暗い天井を仰ぎ、手足を震わせて嗤う。

「もういいよ……どうせ捕まるってんなら……」

だらりと両腕を下げ、ブツブツと何か呟く。
どす黒い殺気が噴出した。

「てめぇもここでブチ殺してやらあああああっ！！！！！！！！」

「――――――――――！」

危険を感じ、背後に飛び退く。
怒声の直前、ブレビスが呟いた言葉が聞き間違いでなければ、それは――――

――――空間を超えて物を呼び出す召喚魔法。

瞬間、眩い閃光が倉庫を覆い尽くした。

視界を塗りつぶす光の中に巨体の影が落ちる。
肌に突き刺さる存在感。　ティアナを遥かに超える魔力量。
そう、それはまさしく魔獣の王。
四足の竜が、そこにいた。

「行けライプニッツ！　そこの生意気な女を、ぐちゃぐちゃにブチ殺せええええ！！！！！」

紫電の竜が咆哮した。
空気が震え、振動でコンテナの山が崩壊していく。

「――――――――――な」

唖然とするティアナ。
彼女の眼前に聳えるのは紛れもなく竜種。
鰐の頭部に納まる琥珀色の瞳が獰猛に輝き、蝙蝠の翼が羽ばたく度に強風が吹き荒れ、肉食恐竜の四足が大地を踏み砕く。　アメジストのような剣鱗が連なり、紫電が迸る。　棘に覆われた二本の尾が苛立たしげに震える。
召喚された場所が気に入らないのか、瞳には憤怒の炎が燃え上がっていた。
不意に、巨木のような前足が動いた。
足元に転がっていたトラックに引っかかり、トラックが軽々と舞う。
紫電竜――ライプニッツからしたらただ歩こうとしただけなのかもしれない。
それでも、その巨体から繰り出される怪力は数百ｋｇのトラックを難なく吹き飛ばした。
宙を舞う鉄塊が、死神となってティアナに降り注ぐ。
目の前の光景に思考が麻痺し、茫然と立ち尽くす。

「なに棒立ちしている馬鹿者！！」

そんな彼女を、後ろから突き飛ばす者がいた。
小さく悲鳴を上げながら地面を転がるティアナ。
彼女を圧し潰すはずだったトラックは、魔力の突風によって軌道を変え、ライプニッツに激突。　ぐしゃりと拉げたトラックが爆散した。

「あ……マツダさん」

「竜種を目の前に茫然とするのも解るが、それでは執務官の名が廃るぞ」

白い双剣を携え、マツダ・レイジが紫電竜を見据えていた。
いや、正確にはその傍らに佇むブレビスをか。

「大したものだな。　魔導師だとは聞いていたが、まさか竜召喚が使えたとはな……」

「ああ。　これだけが唯一の取柄さ。
逆らう奴は、これで消してきた」

「なるほど、バモス・ドマー二が信頼と実績で組織を率いたが、貴様は力と恐怖でというわけか……。
だが残念、組織の幹部たちは虎の威を借る狐に頭を垂れなかったわけか。　……いや、虎にも愛想を尽かされたか」

「は？」

瞬間、呆けた声を漏らしたブレビスの姿が、霞んだ。

赤い軌跡を残して、ブレビスの体が壁面に叩きつけられた。
ライプニッツの前足が、ゴミを払うようにブレビスを薙いだのだ。

「ごっぎゃあああああああああああああああああああ！！！？？」

吐血混じりに、ブレビスの悲鳴が木霊する。
それを掻き消すように、ライプニッツの咆哮が大気を震わせる。
そして、

「ランスター、伏せろ！」

「え？」

雷撃の息吹（ブレス）が迸った。
熱線が大地を溶かし、触れた物を一瞬で蒸発される。
視界が白に塗りつぶされる。
高温が肌を焦がす感覚に襲われながら、マツダはティアナを押し倒すように物陰へ避難する。
コンクリが融ける臭いが鼻をつく。
顔を顰めながら、双剣を握りしめる。

「ちょっと待って下さい。　どうするつもりですか？」

「どうするも何も、召喚者が倒れてしまった以上アレを止めるのは我々しかいないだろ」

「無茶です！　相手は竜種ですよ。　ここは応援を待つべきです！」

「確かに無茶だが、無理ではあるまい。　あれは真竜ではなくただ

の成竜だ。
それにだな、ランスター」
「……？」
「応援を呼んでも来るまで三十分はかかる。その間、あの竜が大人しくしていると思うか？」
紫電竜の翼が広がる。
咆哮と共に風が荒れ狂う。
獰猛な瞳が、獲物を探して揺れ動く。
「このままでは、アレは外に出るぞ。このエリアで竜が暴れればどうなるか言うまでもあるまい」
最悪の光景がティアナの脳裏をよぎる。
ここは工業地帯で、竜の息吹が放たれれば燃料へ引火しドミノ倒しの様に周囲を巻き込んで壊滅する。
そう思うと、なんとしてでもあの竜をここで止めねばなるまい。
だが、
「できるんですか？　たった二人で竜を止めるなんて……」
「違うなランスター。　できるできないの問題ではない。
――――できなければ、我々が死ぬだけだ」
それだけ言い残して、鉄心の殺戮者は駆けだした。
「ステンノ、エウリュアレ。　最初から飛ばして行くぞ！」

答えるように、双剣がその姿を変える。
長剣となった右剣ステンノ、四叉に別れた左剣エウリュアレ。
ともに幾多の戦いを超えてきたマツダ・レイジのアームドデバイス。
それが今、最凶の敵を前に雄々しく刃を煌かせる。
こちらの敵意に気付いたのだろう。紫電竜がその巨体をまわして真っ向からマツダを睨みつける。
存在を圧し潰すほどの殺気を受け流し、左剣エウリュアレが開戦の火ぶたを切って落とす。
一閃されると同時に宙を舞う四つの刃。
高速回転をするそれは四方向から紫電竜へと爪を立てる。
だが、竜の鱗の強度は鋼の鎧を凌駕する。
弾かれ、力なく漂う刃を死棘の尾が叩き落とす。
紫電竜が咆える。
人間では保有できない圧倒的な魔力が放出し、魔法を紡ぐ。
魔力が電気に、電気は球体を模り、竜に仕える従者の様に立ち並ぶ。
竜の瞳に殺意が満ちる。
その意志を察し、雷球が弾丸となって奔る。

「やはり知性が無いのか。　全弾直撃コースとは芸が無いぞ！」

大地を蹴って跳ぶ。　雷弾が何もない空間を駆け抜けていく。
左剣ステンノを構える。　同時に魔力を放出する。
マツダ・レイジが保有する魔力変換資質『風』。
魔力が突風となり、剣に絡みつく。
歪んだその刃を竜の鱗へと突き立てた。
吹き荒れる風がガリガリと鎧を削る。

「――――――――ちっ！」

虫を払うように右前足が襲いかかった。
直撃は回避したが、騎士服の一部を持っていかれた。
竜の追い撃ちが迫る。
鉄槌の尾を躱し、死神の鎌めいた左前足を左剣で受け流す。
左腕から鈍い音がした。
気にしない。
魔力で補助すれば動く。　痛覚は無視する。
竜の追撃は終わらない。
大顎が開き、ナイフの様な牙が襲いかかる。

「だから、芸がないと言っているだろうが！」

右剣に風を纏われ一閃。
風が刃となって、竜の口内を切り裂いた。
悲鳴が響く。
口腔から赤い粘りけのある液体が垂れて地面を朱に染める。
外皮は鱗の鎧に守られていようと、口の中は違う。
唯一防御の効かない箇所を攻撃され、竜が苦悶に喘ぐ。
誰が見ても判る。
マツダ・レイジは、確かに竜と互角に戦っていた。

「なによ……あれ」

茫然と呟くティアナ。
目の前で繰り広げられる闘いは、彼女の理解を超えていた。
竜種とは多くの魔法生物の中でもその力は最上級だ。

膨大な魔力を有し、放たれる魔法は強力。　皮膚は硬質な鱗に守られ、手足の力は一撃で命の灯を消し飛ばす。
そんな化け物を相手に、生き残るどころか一太刀浴びせた。
マツダ・レイジと自分との実力の差を見せつけられているような気分だ。

「私なんて、いなくてもいいんじゃ……」

暗い感情が心に張り付く。
それを、

「――――って馬鹿か私は！」

頭を殴って振り落とした
ほとほと、自分の馬鹿さ加減に腹が立つ。
確かにマツダは竜種相手に戦えている。
だがそれは戦えているだけであって、決して勝てるということではない。
彼の腕から鈍い音が鳴るのを、ティアナも聞いたはずだ。

「思い出しなさいティアナ・ランスター」

自問する。
自分は何のために魔導師になった。
何をするために管理局に入り、難関と言われる執務官になった。

「決まってる。　まだあの想いは、変わってない」

そうだ。　自分の夢は。

「ランスターの弾丸に、撃ち抜けないものなんてない！」

自分の魔法の力を証明すること。

竜種が相手だから、などという泣き言は聞く耳持たん。

証明せよ。

我が魔弾は、竜の鎧すらも粉砕すると。

震える脚を叱り付け、若き執務官は最も近くて遠い戦場へと駆けだした。

突然だが、痛覚と言うのは生物の命を守る上で重要な感覚だ。

痛みによって体の異常を伝え、痛みによって痛む箇所を使うことの危険性を知らせてくれる。

足を挫いたサッカー選手が痛みに耐え酷使した結果選手生命を断たれる、というのが解りやすい例だろうか。

つまり、マツダが左腕の痛みを無視して動き続けるというのは、たいへん危険な行為だ。

治療魔法でも使えればまだましだろうが、魔力で無理やり痛みを押さえこむというのは何の解決にもなっていない。　むしろ、左腕が完全に壊れるのを早めている。

「いや、そんなことを気にしていては腕だけで済まないのだがな……」

エウリュアレの刃が舞う。

どう見たって牽制のためのものだが、そうだと認識する知性をライプニッツは持っていない。

竜の翼が羽ばたき、暴風で刃が落ちる。

その隙をついて、風を纏った左剣で鱗の鎧を抉ろうと斬り付ける。

「――――ちっ」

何度も、しかもできるだけ同じ個所を攻撃しているというのに鎧が削れるようすは一向にない。

「やはり、眼や口を狙うしかないか」

だが、口内への攻撃は竜も警戒しているのだろう。

耳触りな咆哮はなりを潜めている。

残る有効な攻撃点は眼なのだが、竜の足や尾、翼はどれもが人間にとっては必殺の凶器だ。

そんな中を通って急所に突っ込むというのは無謀すぎる。

「――――っと！」

マツダの頭上を、槍尾が掠める。

ぞわり、と背筋が総毛立つ。

屈んだマツダを狙ったように、右前足が真っすぐ繰り出された。

躱せない、とヤケクソ混じりで防御の姿勢をとる。

こんなもので竜の一撃を防ぎきれるわけがないが、即ひき肉になるのは避けられるだろう。

竜の爪が迫る。

衝撃に備えて足に力を入れた瞬間、マツダの横を六発の魔弾が駆け抜けた。

オレンジに輝く魔力弾が竜の頭部を撃つ。

爆煙が上がる。　爪の軌道がずれ、マツダはなんとか回避することができた。

「遅かったな」

自分の横に立つ者を感じて、顔を向けずに言った。

「ずっと隠れているのかと思ったぞ」

「残念、私って観るより参加する方が好きなんです」

オレンジの長い髪を靡かせて、ティアナ・ランスターが愛銃を構えた。

軽口で怯える自分を押さえているのだとマツダは判った。

ちらりと見てみれば額には汗が浮かび、脚は小刻みに震えている。

無理もない。　竜を前にして怯えを見せない者など、どこかのネジが外れているとしか思えない。

事実、マツダ自身こんな場所でなければ早々に逃げている。

「加勢してくれるのはありがたいがな、非殺傷は解除しておけ。不殺（ころさず）を貫かせてもらえるほど、竜種は優しくないぞ」

「ご安心を。　殺傷設定にしたぐらいで戦闘力が跳ね上がるなんてご都合設定なんかありませんから」

「……強情な女だ」

「貴方に言われたくありません」

「……行くぞ」

「――――――はい！」

一瞬だけ眼を合わせ、磁石が反発するように両者、逆方向に走り

出す。
竜を中心にマツダは時計回り、ティアナは反時計回りに走る。
鱗の壁を隔て、念話がティアナの頭に響く。

「（相手は知性もない、ただ目の前の獲物に襲い掛かる野獣だ。
動きまわって狙いを定めさせるな）」

「（攻撃箇所は？　マツダさんのを見ているとほとんどきいていませんでしたが）」

「（できるだけ眼や鼻を狙え。　角があればそれを狙うのだが、あれにはそれがない。
後ろや真横に来た時はできるだけ一点を狙って撃て。　雨滴も積み重なれば岩を穿つというやつだ）」

思念通話が切れる。
戦闘に集中しろということだ。
引き金を引き、クロスミラージュが火を噴いた。
放たれるのはティアナの髪と同じ色の魔力弾。
鱗の鎧に当たり小さな爆発を起こす。
効果が無いのは承知の上。
今はひたすら、彼女自身の最高の一撃の布石として魔弾を連射する。
魔弾が続けざまに放たれ、爆散していく。
頭部から横っ腹を狙って連射。
尾が襲いかかるのを察知し、後方に飛んで躱す。　顔にかかる風に背筋が総毛立つ。
竜の背後に回り込んだ。
マツダとすれ違う。
視界の端で、白い双剣から風の塊が放たれるのが見えた。

双剣でどうやるつもりなのかと思っていたが、納得がいった。
走る。
マツダの魔力の残滓を辿り、できるだけ同じ箇所を撃ち抜く。
竜の爪が迫る。
即座に防御壁を展開。　魔法壁は一瞬で粉砕されジャケットの一部を引き裂かれたが直撃は避けた。
竜の双眸がティアナを射抜いた。

「――――――――そこ！」

躊躇なく発砲。
オレンジの魔弾が竜の左眼を撃ち抜いた。
悲鳴が轟く。
そして、

「ランスター！　伏せろぉ！」

怒り狂った竜の閃光が視界を焼き尽くした。
噴き出る魔力の全てが雷撃に変わる。
天を衝く雷光が巨塔を築く。
部屋全体を這うように電撃が走るとともに、激しい熱気が肌を刺す。
全方位放電。
ライプニッツの怒号の雷撃が、ふたりの執務官を貫いた。

視界が明滅する。
吹っ飛ばされて背中を打ったのか、上手く呼吸ができない。
ズキズキと疼く体に鞭打って立ち上がるティアナ。
すぐさま自分の現状を確認する。

「……しない方が良かったかも」

嘆息した。

防護服の上着は消し飛び、黒いインナーを残すのみ。

クロスミラージュに損傷はない。　負傷しているのは自分の体だけ。　メンテナンススタッフに本気で感謝する。

腕から少し出血しているが大騒ぎするような怪我ではなかった。

「――――――――」

ふと、自分に影が落ちていることに気付いた。

顔を上げる。

愕然とし、全身が硬直するのが感じた。

「マツダ……執務官」

声が震える。

ティアナの前には、彫像の様に佇むマツダ・レイジが立っていた。

その全身には火傷と裂傷がある。

理由はすぐに判った。　ティアナを庇ったのだ。

「無事か、ランスター」

「あ、はい……」

咄嗟に返事すると、そうか、とマツダはそのまま歩き出した。

まるで怪我など一切していないかのように。

その行動に、痛みを忘れて思わず立ち上がるティアナ。

「な、なにしてるんですか！？」

「何って、やることは変わらんさ。　竜を止める、それだけだ。見ろ、さっきの放電で空いたあの穴を」

「え……？」

天井を仰ぐ。

マツダの言うとおり、灰色の屋根にぽっかりと風穴が空き、闇色の空に銀の月が彼女たちを見下ろしていた。

いくつもの天井の層が貫かれた様はまるで月へと届く階（きざはし）のよう。

そして、ティアナと同様に月を仰ぐ紫電竜が咆えた。

歓喜の色が混じった咆哮。　当然だ。　ライプニッツは今、自身を閉じ込める檻からの脱出口を見つけたのだ。

双翼が広がり、羽ばたく。

突風が粉塵を巻き上げ、浮力を得た翼が竜の巨体を浮かせる。

その巨体からは想像できない程の速度で、ライプニッツが夜の空へと飛び立った。

轟音と突風で吹き飛びそうになる体を踏ん張って耐える。

風が止むと、まるで嵐が通り過ぎたかのような不気味な静寂が広がる。

穏やかな月明かりと静けさに、体の感覚が麻痺していく。

「ランスター」

「……あ、はい！」

マツダに声をかけられ、麻痺が解けた。

「まだ戦えるか？」

「――――――――」

一瞬の逡巡の後、ティアナは小さく頷いた。

「よし。　今から私があいつを惹き付ける。
隙を見て、全力の集束砲（ブレイカー）を叩き込め」

「――――！　マツダさん。　どうして私の魔法の事を……」

「今回だけとはいえ、私は君の相棒だぞ？　相棒の手札くらい把握している」

何を言っているのだ？　と、鉄心の執務官は依然と変わらぬ口調で答えた。

「行くぞ。　ステンノ、エウリュアレ」

一歩前へ。　双剣が頭上で交差する。
重なり合う鋼が軋みを上げる。
柄尻が爆ぜ、圧縮魔力を込めた弾丸がふたつ排出された。

「フル――――ドライブ！！」

風が起こる。
浮力により足が地面を離れ、流星の如く鉄心の殺戮者が夜空へと飛び立った。

ゴォゴォと激しい風音が耳朶を打つ。
夜風を切り裂き飛行するマツダの手には、一本の両手剣が納まっていた。
ステンノとエウリュアレを合体させたフルドライブ形態。

「――――見えたぞ」

雲に届きそうな上空に、紫電竜の背中を確かに見た。
速度を上げる。
一気に追い抜き、竜の眼前に踊り出た。
突然の障害物に、紫電竜が急停止する。
琥珀の瞳に灯るのは敵意一色。
襲いかかる重圧（プレッシャー）に身を僅かに震わせながら、マツダは静かに笑みを浮かべる。
これほどの強者に出会ったのは久しぶりだ。
厳しい訓練と激しい実戦によって鍛え上げられた魔導師としての技量はそうとうだが、それで満足したことなど一度もない。
この竜を倒せば、さらなる高みへと行けるかもしれない。
竜への恐怖以上に、強くなれるという好機への歓喜が身を震わせる。

「――――――――」

あの雨の日の記憶が一瞬よぎる。
もっと強く、もっと上へ。　そうすれば、もうあんな悲劇は起こらないかもしれないから。

「行くぞ、紫電の竜」

外套が翻る。
内側に隠されていたかのように、大量の音叉が湧き出た。
鉄の翼の様に配置される音叉たちは、まるでマツダに付き従う騎士のよう。
叉に納まる宝珠が妖しく光る。
星空を覆う光のカーテンのようだ。

「行くぞ、お前が相対するのは魔杖の軍勢。
たかが有象無象と侮れば、火傷では済まんぞ」

ライプニッツの咆哮が夜の静寂を引き裂く。
この騒ぎ、この地域の人間もいずれ気付くだろう。
無関係な人間が騒ぎ出す前に、片を付けよう。
両手剣を携えた騎士が夜空に舞う。

「――――――――」

深く息を吸うと針に刺されたような痛みが体を駆け巡る。
集中しようとすれば、魔力を注ごうとすれば痛みが邪魔をする。
散って行く意識を無理矢理繋ぎとめて愛銃に向ける。
クロスミラージュの銃口には橙に輝く光球が形成されていた。
その光目がけて、小さな光が集まって行く。
集まる光を吸収し、光球はさらに膨らんでいく。
集まってくる魔力は今までの竜との戦闘でばら撒くことになった魔力弾の残滓と、マツダ、ライプニッツの魔力の残滓だ。
魔力集束。

周辺魔力を集めて体内を通さず直接使用する、砲撃魔導師の最上級技術（エクストラスキル）だ。

ティアナは砲撃魔導師ではない。　だが、彼女を鍛え上げたとある教導官がそうだった。

その教導官は、射撃タイプだったティアナのために己の技術を全て叩き込んでくれたのだ。

この魔力集束もその一つにして、今のティアナにとって最終兵器。

オーバーAランク魔導師二人と、強大な魔力を持つ竜種の魔力。

これらを全て集め、放つ一撃に耐えられる者などいない。

同時に、ティアナの額に汗が浮かぶ。

「……行くわよ。　クロスミラージュ」

『Ｙｅａｈ』

当然、それを制御しようとするティアナの負担はかなりのものだ。

頭は神経が焼き切れるように痛い。

膨大な魔力を抱えた両腕が悲鳴を上げる。

熱した鉄を押しあてられるような痛みが全身を駆け巡る。

歯を食いしばり、痛みに耐える。

「――――――――――！」

肌を刺す重圧を感じ、空を仰ぐ。

ティアナの集束砲に気付いたのか、ライプニッツがこちらに飛んで来る。

口を開き、刃の様な牙が並んだ口腔の奥が光る。

（息吹（ブレス）がくる……！）

戦慄が走る。
集束が終わるまでまだ時間がかかる。
今竜の息吹を放たれれば、ティアナは一瞬で消し炭になる。
だが、それは彼女が1人だったらの話。
影が一つ、ティアナを守るように紫電竜の前に躍り出た。

「マツダ執務官……」

竜の殺気だった視線が突き刺さる。
息吹の熱が全身を撫でる。

「全く、もう少し待ってくれてもいいだろうに……」

両手剣の柄尻から、カートリッジが連続ロードされる。
その数、八発。
圧縮魔力を注がれ、両手剣が輝き風を纏う。

「行くぞ……」

ライプニッツの雷光が迸る。
口腔から放たれた熱線が真正面からマツダに襲いかかる。
バリアジャケットが燃え散る。
雷撃の奔流の中で、マツダは両手剣を掲げる。
音叉が塵と変わり、更なる魔力として両手剣に注がれる。
これが、マツダ・レイジの最高威力の一撃。

「天衝一閃――――神風!!」

白刃が一閃された。
刃に絡みついた風が解き放たれ、暴風となって翔る。
雷の奔流を、内側から嵐が引き裂いた。
大地を焼き払うはずだったライプニッツの息吹（ブレス）は、風の刃によって塵へと霧散された。

「すごい……」

感嘆の声が漏れる。　風はそのまま竜へと絡みつき、動きを止める。
マツダの一刀により、ライプニッツは完全に無防備となった。

「行け、ランスター！」

「シフト《ファントムストライク》……」

クロスミラージュを掲げる。
狙うのはライプニッツの無防備な口内一点。
マツダは自分の仕事を全うした。
ならば、ここで自分が決めねば申し訳が立たない。

「スターライト……」

ふたつの光球が膨れ上がった。
そして、

「ブレイカーァァアアッ！！！！」

双連の極光が天を衝く。
放たれた膨大な魔力の奔流がライプニッツの口腔を直撃した。

竜の瞳が見開かれる。
体内を駆け巡る魔力に細胞が焼かれ、神経が切れ、筋組織が断裂していく。
内側から爆薬が炸裂したように鱗に覆われた表皮が盛り上がる。
翼が破れ、竜を支えた浮力が消失する。　ライプニッツの巨体が重力に引かれて落下した。
ズゥン、と大地が揺れる。
天井を粉砕して地上に舞い戻った紫電竜は、その意識を断たれていた。

ミッドチルダ中央区。　首都クラナガンでもっとも大きな病院、ここには負傷した管理局員が収容される。
その病院内を、青い髪の女性――まだ少し幼さが残る――が走っていた。
看護師の制止の声を無視して走る。
理由は単純。　彼女の友人が任務で負傷し入院したという知らせを受けたからだ。
仕事先でその知らせを聞いたのが二時間前。
同僚の車を借りて病院に飛び込んだのが十五分前。
受付の人にタックルする勢いで病室を聞いたのが五分前。
そして今、その病室にたどり着いた。
部屋の前のプレートで間違いでないことを確認し、ドアに手をかけ全力全壊で飛び込んだ。

「ティアーーーーーーーー！！！！！！！！！
任務で大けがしたしたってほんぶふっ……」

「うっさいスバル。　入る前にノックくらいしなさい」

ティアこと、ティアナ・ランスターが顔面に投げつけた枕が女性から落ちて、ぼふっ、と気の抜けた音がする。

ごめん、と謝罪しながらスバルと呼ばれた女性がティアナに寄る。

ベッドに上半身だけを起こした状態で寝ているティアナの姿は、外見は大したこと無さそうでも、内側は酷かった。

膨大な魔力を無理矢理制御した反動で神経が傷つき腰から下はまともに動かず、魔力はゼロになりしばらくは魔法行使ができない状態だ。

スバルもそれを察したのだろう。　その顔はやや暗い。

「なんであんたが落ち込んでんのよ。　この怪我は私の力不足なんだから、あんたが気にすることなんてないのよ。　いつもみたいに頭にお花でも咲かせてなさい」

「でも……」

「でもじゃない。　別にもう執務官として働けなくなったわけでもないんだし、まぁちょっと長めの休暇だと思って休ませてもらうわよ」

ラッキーラッキー、とティアナは笑みを浮かべる。

その笑みが、無理やり繕った強がりによるものだと、スバルはすぐに判った。

なにせティアナとは訓練生時代、八年近い付き合いだ。

所属部署が変わり、一緒にいる時間が少なくなったとはいえ彼女

の言葉が本心かどうかくらいは判る。

「そっか……。　そうだよね、ティアって昔からやり過ぎなところあったし。
うん。　いい機会かもだね」

「やり過ぎって……あんたに言われたくないんだけど」

「わたしはティアみたいになのはさんにブッ飛ばされてないもーん」

「くっ……この、心の古傷を掘り返して……」

「……ぷっ」
「……フフフ」

小さく笑みが零れる。
ティアナが浮かべたそれは、今度こそ本心からのものだった。

「それじゃ、わたしもう帰るね」

「そうしなさい。　あんたの部隊も暇じゃないでしょうし」

十五分くらい経っただろうか。
世間話と近況報告を済ませると、スバルは帰り支度を始めた。

「ティア、ちゃんと休んでなきゃだめだよ？」

「あんたに言われなくても判ってるわよ」

「じゃ、また来るね」

「うん、ありがと」

お大事に～、と間延びした言葉を最後にスバルは病室から出て行った。

そして、彼女と入れ替わるようにマツダ・レイジが入って来た。

「さっきのは……友人か？」

「はい。　訓練校時代からの」

「そうか……」

沈黙が降りる。

不思議なことに、マツダの怪我は外傷だけはティアナより酷かったはずなのに、彼はあっという間に退院してしまった。

何故かと訊ねたら、「鍛え方が違うのだ」と一言で済まされてしまった。

やがて、壁にもたれながらマツダは口を開いた。

「ブレビス・ドマー二は逮捕。　あの工場で得た情報から、続々と麻薬組織の幹部や売人が逮捕され、ドラッグプラントは運転を停止している。

大手柄だな、ランスター執務官。　君のおかげで、次元世界から違法薬物の八割が消えることになった」

「私ひとりの手柄ではないですよ……」

「だが、世間の多くはそう思っているらしい。
マスコミ各紙は若手執務官の大捕り物と報じているよ」

「まぁ確かに、マツダさんじゃ華やかさに欠けますものね」

「ふん。　そんな軽口を叩けるならば現場復帰にそう時間はかからんだろう。
――――さて、一つ、聞きたいことがあるのだが」

「……なんですか？」

嫌な予感がした。
ティアナを見つめるマツダの瞳は、いつかのように冷たい鉄のようだった。
空気がどんよりと重くなる中で、マツダはゆっくりと言葉を紡ぐ。

「工場（プラント）に突入した日の昼、私が連絡した時君は聖王教会に居たな。
なぜだ？　あそこで何か捜査の手がかりがあるとも思えんし、君が仕事中に友人に会いに行くほど軽い人間だとは思えんのだが？」

「そ、れは……」

嫌な予感が当たった。
いや、この問いは予想していた。
その予想が外れればいいなと希望的観測の下に考えることを放棄していただけだ。
ティアナの動揺を見て察したのだろう。　マツダの視線がより鋭くなる。
もう逃げることはできないなと、ティアナは観念した。

「シスターシュテムに会いました」

「……はぁ。

それで、全部聞いたのだな？」

「はい」

「全く、君は相当の物好きだな。　私の過去など、誰も興味無かったというのに」

はぁ、とマツダは深く溜息をついた。

いつも間にか、鋭い視線は治まり表情は呆れ顔へと変わっていた。

「それで、何か心に残る物はあったかね？　先輩の失敗から何か教訓でも得たか？」

「……」

口籠るティアナ。

得た物はない。　心に残るというより、ズガンと衝撃が来ただけだ。

それでも、マツダの過去を聞いて思ったことはあった。

「助けようとしても、裏切られるかもしれない。

救おうとしても、傷つけられるかもしれない。

――それでも、私は貴方のような方法は取りません」

「……」

「どれだけ裏切られても、どれだけ傷つけられても、私はやり方を

変えませんよ。
助けられる人はどんな悪人でも助けますし、罪を犯してもやり直せると信じます」

真っすぐに、力強い眼差しでマツダを見るティアナ。
その瞳に迷いはない。　今の言葉が、心の底から紡がれたことは確かだと判る。
その言葉に対しマツダは壁から離れ、ティアナを真っすぐに見据えて、

「……そうか。　なら、その気持ちを決して手放すなよ」

穏やかな調子で、静かにマツダが応えた。

「先達からのアドバイスだ。
迷うなよランスター。　迷えば、自分以上に誰かが傷つくことになる。
それが執務官だということを、ゆめゆめ忘れるな」

背中を向け、病室から去っていくマツダ。
扉が閉まり、足音が遠のいていく。

「――――――――迷うな、か……」

静寂が戻った病室で、ティアナの言葉だけが静かに響いた。
視線を窓に向ける。
四角く切り取られた外の世界には、綺麗な青空が広がっていた。
この綺麗な世界を守るために、自分は戦っているのだ。

「迷いませんよ。　私は、一人じゃありませんから」

風が吹く。
自由に空を舞う風に、背中を押されているような気がした。

これは、本来ならばあり得ない物語。
決して出会うことのない者たち、交わることのない刃。
けれど、こんな夢の話があってもいいだろう。
夢から生まれた殺戮者は、夢幻を生き、夢想として消える。
その人生は、辛かったのか、幸せだったのか。
掛け替えのないものだったのか、凡庸なものだったのか。
それを知る者は、もういない。

外伝　鉄心の行く末　了

外伝　鉄心の行く末　下（後書き）

以下、ＰＳＰ編のキャラの解説・設定

ＰＯＲＴＡＢＬＥ編

プレイした人はどのくらいいるんだろうＰＳＰ編。

なのはたちの活躍はゲームをプレイすれば判るはずなのでほぼ怜治視点一括。

オリジナルのマテリアルが出てきたり主人公の祖母ちゃんが出てきたりと何気にオリキャラがいます。

ギャレットを最初だけ出したけど、彼の外見が全く判らない。

知ってる人いる？

闇統べる王（ロード・ディアーチェ）

マテリアル勢の中で唯一生存。

決して味方になったのではなく、闇の復活のため怜治抹殺計画中。

ベジータみたいな立ち位置。

弱体化はしていますが実力的には主要キャラたちとほぼ同列。

魔法知識は豊富、という設定なので作者的に最強キャラその３かな？

あと、何気にユニゾンデバイス化。

星光の殲滅者

黒なのは。　上記外伝上で一瞬だけ登場。

オリジナルとの砲撃合戦が上手く出来てたらいいな。

作者の印象としては、物静かでクールキャラだけど根っこはなのはと同じで頑固者だと思う。

砲撃シーンはなのはが閃光、星光さんが熱線で使い分け。

彼女の最期の言葉はいつか実現させてあげたいな。

雷刃の襲撃者
アホの子なんて知りません。
ウチのマテリアルたちはみんな総じてシリアス系。　なのでなのはストーリーの性格を採用。
ゲームだとアルフが「フェイトもああなってたかも」とか言ってたけどそれは無いと思う。　ってかシャマルストーリーだとなぜああもキャラが違うのか……。
星光さんと同じく外伝上にて一瞬だけ登場。

鉄心の殺戮者
オリジナルマテリアル。
理、力ときたら後は思想ぐらいしか思いつかず巡り巡って「業のマテリアル」に決定。
２９話に出てきた少年怜治にあり得た可能性の一つ。
外伝のマツダ・レイジはこいつがまた別の時間軸で成長した姿。
外伝内でのシグナム曰く昔は誠実で真面目で誰にでも優しかったとか……あれ、こっちの方が主人公っぽくね？

ぶっちゃけると、コイツ以外のマテリアルはいつか出番が……

これでＰＯＲＴＡＢＬＥ編は完結です。

次話でやっとこさすずか√に入ります。

第４１話　その冬の日

無数に存在する次元世界。
それらの狭間に広がる次元空間。
次元航行艦が行き交う、通称『海』。
その海を、艦船でないものが漂っていた。
それは、城だった。
地球人から見たら、欧州に現存していそうな古城。
城型の次元航行艦ではなく、まるで土壌ごと引き抜いて海に放り込んだような姿。
そして城を守護するように、巨大な環状魔法陣が城を囲む。
城は泳ぐ。
確かな航路、確かな目的を持って、次元の海を進んでいた。

城内は静かだった。
照明はなく、華美な装飾や意匠を凝らした細工は闇色に染まり、その輝きを見せない。

「ついに、見つけましたよ」

男の声が響く。
穏やかな声色の中に、確かな歓喜の色が混じっていた。
男がいるのは城の上部。　円形に広がる空間はダンスホールとしても使われそうだが、その実、そこはこの城の城主――すなわち王との謁見の間であった。
されど、王が座るべき玉座に人はいない。
金と赤に装飾された豪華な玉座は、主もなく空しく鎮座する。

「六百年にわたる悲願。　失敗すること千を超えついに、ついに陛

下に相応しい器を見つけました」

その虚空。　斜め頭上に在る主不在の玉座に向かって男は言葉を続ける。

片膝をつき、頭を下げ忠誠を示す。

男の言葉への返答はない。

それでも、男は続ける。

「今、エルカミーノとテージスを先遣隊として向かわせております。やがて、陛下の器を連れてくるでしょう。

……ええ、過去最高の適性反応。　今度こそ、陛下をここに呼ぶことができます」

いつの間にか、男を見下ろすモノがあった。

それは宝石だった。　手のひら大の宝石が、中空に座して男を見下ろす。

血のように赤く、太陽の様に輝き、炎のように見る者に畏怖を与える宝石から溢れるのは魔力。

それを近くで浴びせられ、男の額に汗が浮かぶ。

宝石は問うているのだ。

今度こそ成功するのかと。

また失敗するのではないかと。

……もし、失敗したらどうなるか判っているのかと。

宝石は絶対君主として、男を見ていた。

「必ずや。　今代の騎士団は皆精鋭。　過去最強の面々だと自負しておりますが故、管理局への対策も万全でございます」

――――どれほどの時が流れただろうか。

緊迫した空気が弛緩したかと思うと、紅い宝石は消えていた。

ふぅ、と肺に溜まった空気を吐き出し、新たに冷たい空気を吸い込み、汗を拭う。

「まったく、心配性な御方だ……そして、貴方たちはいつまで隠れているつもりですか？」

立ち上がり、声を上げる。

それでも姿を現す者はおらず、ただ、己が存在を誇示するように魔力の波濤が男の体を叩く。

普通の者なら卒倒してしまいそうな魔力。

それを男は軽く受け流しながら言った。

「別に、点数稼ぎのつもりはありませんよ。陛下はお優しい御方です。

この世に降臨なされたあかつきには、皆さまの願いをきちんと聞き入れてくれますよ」

玉座に背を向け歩き出す。

コツコツと男の足音が間に響く。

「行きましょう。

我らは灰被り（サンドリオン）の騎士団（シュバリエス）。

緋色の夜の女王に仕える者。

阻む者がいるのなら――――」

――――ただ、殲滅するのみ

場所は変わり、時空管理局本局。
約一月半前に、とある青年によってボロボロにされた広場は修繕され、管理局員による喧騒を元通りにぎわせていた。
だが、その賑わいも奥に進むにつれて小さくなり、やがて消えていく。
扇形に広がる空間。　もとはブリーフィングルームだろうが、今ある空気はさながら裁判所だ。
二十人前後の人間――立体映像による出席もあるため実際にそこにいるのはほんの数人だが――が見つめる一点には照明がただ一つ、扇の根に当たる箇所に立つ老人を照らしていた。
老人の顔は寂しげで、これから死地に向かうかのようだった。

「では、処罰を発表します」

暗い空間に声が響く。
感情のこもらない冷淡な声を出し、一人の男が立ち上がる。

「管理局提督ギル・グレアム。
貴方は、第一級捜索指定遺失物（ロストロギア）『闇の書』の所在を知りながらこれを隠匿。
独断によりこれを封印しようとし、管理局魔導師、嘱託魔導師、現地協力者および第九十七管理外世界――以下『地球』――に住む

一般人の命を危険に晒しました。
これは次元世界の平和を守る管理局の一員として許されるものではありません。
よって……」

一旦区切り、数瞬の後続けた。

「処罰の内容は以下の通りです。
ひとつ、ギル・グレアムへの自主退職の勧告。
ふたつ、通常状態での魔力の八割を封印。
みっつ、次元転移の中継ポートの利用を無期限禁止。
……一つ目はすでに本人も承諾しており、辞表はすでに提出されています」

以上です、と男は言葉を切った。
グレアムは奥歯を噛みしめる。
魔力の封印、中継ポートの使用禁止。　つまりは魔法界からの永久追放だ。
グレアムは、もう二度と次元世界に足を踏み入れることはできない。　魔杖を振るい、部下を率い、戦場を駆けることも大量の書類に忙殺されることもない。
人生の半分以上を管理局で過ごしたグレアムにとって、それは手足を引き千切られることに等しかった。
リーゼ姉妹を維持できる程度の魔力を残してくれたのはせめてもの温情か。
それでも、もうグレアムは戦えない。
歴戦の勇士は、ただの老人へと成り下がってしまった。
いや、別に抗いはしない。　グレアムが犯した罪は、グレアム本人が自覚している。
自分の復讐のために少女の命を犠牲にしようとした。

当時は仕方がないことだと身勝手な納得をしていたが、いま思えばなんと莫迦なことを考えていたのだろうとあの時の自分を殴りたくなる。

「……ひとつ、いいでしょうか」

「発言を認めます。　どうぞ」

「私が犯した罪と言うのは、自主退職などで帳消しされていいのでしょうか」

消え入るような声が漏れる。
投獄されることもなく、刑も重いとは到底思えない。
グレアムの罪の意識は、魔法から追放された程度では薄まらない。

「グレアム提督。　それは、貴方の都合です」

そんなかつての英雄の言葉を、男は一言で斬り捨てた。
眼を見開き、愕然とするグレアムを冷たく見据えて男は続ける。

「我々管理局は次元世界とその住民を守る存在。　いわば正義の味方です。
　この印象を壊すことはできません。
そして、貴方のしたことはその管理局の印象を壊しかねません。
今はマスコミにも誤魔化しておりますが、貴方が明確な罰を受けたら良からぬ噂が立ちます」

事務的な語りに、グレアムは身を震わせる。
　管理局はいくつかの世界が共同で運営する組織だ。
優れた技術、優れた人材の支援を受けることができるのは、今男

が言った存在意義だ。
もしもグレアムの行動が世に出て、管理局の信頼が地に堕ちた時、同様の支援はあるだろうか。
答えは、ノーだろう。
そんなことになれば管理局は空中分解しかねない。
いくつかの派閥に分かれての権力闘争。秩序が乱れ、世界規模での戦争の勃発。
極端な想像かもしれないが、決して無いとは言い切れないのだ。
故に、管理局の信用を落としかねない事象は内密に処理に、外には決して漏らさない。
グレアムには罪には問わない代わりに二度と表舞台へと出ることを禁じた。
決して知らなかったわけではない組織特有の闇。
グレアムは、それを今、身を以て知らされた。

「仮に、貴方に罰を与えるとすれば、それは罰を与えないことです。責任感の強い貴方の事だ。せいぜい自責の念に圧し潰されながら余生を生きなさい」

男の言葉を最後に、査問会は幕を閉じた。

独り退出していくグレアムの背中は、一回り小さく、やせ衰えているように見えた。
バタン、と音を立てて扉が閉まり、静寂が空間を満たす。
皆、互いに視線を絡ませながら、やがてその静寂を砕く。

「さて次の議題は、グレアム提督を打ち破った彼についてですが……」

「能力的には申し分ありませんな。　血統も確かですし」

「ファミリアと怜一郎ですか。　天才二人の孫となれば、期待も膨らみます」

「鷹が鳶を生んだという可能性も捨てきれませんよ。　実際の人柄はどうなのです？」

「推薦保証人はハラオウン提督ですよ？　問題ないと思いますが」

「あの人は少々の問題は個性の一言で片づけるところがありますからね……」

「さすがの彼女でも本当に危うい人物を推薦などしませんよ。彼女の責任問題にも発展しかねませんし」

堰を切ったように意見が次々と飛び出す。

皆言いたいことは言い終わったのか、十分ほどで喧騒は途絶えた。

男が再び立ち上がり、全員を見わたして言った。

「では当初の予定通り、松田怜治による本局襲撃の件は不問とします。　ただし、彼に問題が発生した場合は即刻それ相応の対処をするということで……」

解散、と誰かが言った。

立体映像で出席していた者は電子音と共に消え、実際に出席した者たちは扉から退出していく。

かくして、本人の知らぬところで、松田怜治への対応会議は終幕した。

意気消沈とした面もちで退出したグレアムを待っていたのは、濃い青の制服に身を包んだ緑髪の女性――リンディ・ハラオウンだった。

リンディは一礼すると、グレアムとともに歩き出す。

「お疲れさまでした、グレアム提督。
……処分の方は、どうなりましたか？」

「予定通り、なのだろうね。　事実上の永久追放だが、自業自得だよ」

自嘲的な笑みをこぼし、グレアムは続ける。

「さて、これからが大変だよ。　私物の整理に住所や戸籍の変更、ああ、リーゼ達の戸籍も用意してやらねば。　やることは山積みだ」

「提督。　申し訳ありませんが……」

「ん？　……ああ、管理外世界に移住するわけだから、こちらの技術を使われた物品はほとんど持ちだせないのだったね。
私物整理が楽になりそうだ」

いやいや助かる、とグレアムは言う。
だが、それは実に辛いことだということは判っている。
通信端末は没収され、こちらでできた友人たちとの連絡は一切不

可能。
　退職金を細々と使えば生活に困りはしないだろうが、技術的に劣る地球での生活は、慣れるまで不便があるだろう。
「……見苦しいかもしれないがね。　私の管理局生活が、こんな形で終わるなんて思っていなかったよ」
「提督……」
「いや、君が気にすることではないよ。　私には、少し辛い仕打ちがあったほうがいい。
　それほどのことを、私はしたのだから……」
　沈黙が降りる。
　二人分の足跡が空しく響く。
「……あ」
　五分ほど歩いたところで、リンディが声を上げた。
　何かとグレアムが訊ねる前に、リンディが懐から四角い包みを取り出し、グレアムに差しだした。
「これは？」
「はやてさんから、提督へと」
「――――――――」
　ぐらり、とグレアムの視界が歪む。

耳朶を打った衝撃が脳へ届き、揺らす。
はやて――八神はやて。　グレアムが見守り、大義名分を盾にその命を奪おうとした少女。
グレアムの正体を、彼女は知らないはずだ。
少女の父親の友人を騙り、援助と称して監視していた。
そのことを、彼女は知らないはずなのに。　どうしてグレアム宛の贈り物が届くのか。
そんなグレアムの不安を拭うように、リンディが種明かしをする。

「実はこれ、郵便物として届けられるはずのものだったんですよ。それをちょっと」

イタズラに成功した子どもの様な表情を見せる。
それを聞いて、グレアムは胸を撫で下ろした。
つまり、これははやてがリンディに渡したのではなく、はやてが出したモノをリンディが拝借してきたということか。
不安は消えた。　だが、新たに疑問が生まれる。
どういう理由で、はやてはこれを贈ったのだろうか。

「なぜこれを？」

赤と白のラッピングで包装されたそれを見て、グレアムは訊ねた。

「ええっと……。　なんでも、地球ではもうすぐ恋人や親しい人なんかに贈り物をする日がやってくるとか。
なんていいましたっけ……ああそうです確か――――――――」

「バレンタインデーね！」

二月四日。　まだ空気が冷たい冬でも、気持ちのいい陽ざしが出た昼間、屋内で窓際に立てばなかなか暖かい。

そんな昼休みの学校で、アリサ・バニングスの言葉に高町なのは首を傾げた。　隣に立つ月村すずかも同じ反応だ。

「バレンタインデーね！」

また言った。

バレンタインデー。　またの名をセントバレンタインデー。

主に恋人たちの愛の誓いの日とされ、日本では女性が男性にチョコを、欧米では花やケーキなど贈り物を恋人や親しい人に贈る日である。

日本では近年、男友達に贈る「義理チョコ」、女友達に贈る「友チョコ」、男性が女性に贈る「逆チョコ」などバリエーションが増えている。

ちなみに、贈り物がチョコ限定で、基本女性が男性に贈り、一月後にホワイトデーなんてものがあるのは日本くらいである。

起源はローマのキリスト教聖職者が処刑された日で、実際のバレンタインデー風景をみた日本の製菓業界が現在の日本式バレンタインデーを広めたんだったか……とテレビで見た曖昧な情報を頭の中でつないでいく。

――と。　反応が面白くないのか、アリサは親友2人に苦言を呈する。

「もう、なによ二人とも。　もしかしてバレンタインデーなんて興味なしなの？」

「いや、別にそういうわけじゃ……ねぇ？」

「う、うん……」

すずかと顔を見合わせ、苦笑いするなのは。

別にバレンタインに興味が無いわけでも忘れていたわけでもない。

ただ、アリサの張り切りようが腑に落ちないのだ。

なのはだって女の子。　バレンタインが近づけば母にアドバイスをもらいながら自分なりに手作りチョコなどの作る。

主に渡す相手は父と兄、あとは前述した「友チョコ」としてアリサとすずかくらいだ。

去年も一昨年もそうだったし、今年もそのはずだ。　なのに、アリサの張り切りぶりがよく判らない。

「もしかしてアリサちゃん、好きな人ができたとか？」

「ええっ！？　そ、そうなのアリサちゃん？」

「違うわよ！　今年は、いつものバレンタインよりチョコをおくる相手が増えたから気合が入るわねってことよ！」

うがー！　と叫ばんばかりのアリサの言葉に、あ、となのはは納得の声を上げた。

「そっか、怜治さんやユーノくん！」

なのはの言葉に、アリサが頷きながら付け加える。

「あと、フェイトのお兄さん。　わたしたち、あの人たちにはかなり世話になっちゃったでしょ？
この機会にお礼と言うか、感謝の気持ちを示したっていいでしょ」

呆れたとばかりに溜息をもらすアリサ。
本来のバレンタインの趣旨とは異なるかもしれないが、それも良いだろうとなのはは思った。

「そうだね。　今年はユーノくんにクロノくん、それに怜治さんや鉄平さんに正義さん。　ほんとう、いつもよりいっぱい作らなきゃだね」

「うん。　それじゃあ学校帰りに道具とか材量とか、いろいろ買いに行こ」

「そうね。　はやてとか誘って行きましょうか。
……あと、あの風邪っ引きの分も買ってきてあげましょ」

「へ……へきしっ」

闇の書事件捜査本部兼ハラオウン家の一室にて、可愛らしいくしゃみが響いた。
ベッドの上で横になりながら、布団を被り、鼻をぐしゅぐしゅと鳴らすのは金髪の少女――フェイト・テスタロッサだ。

兎の様な紅い瞳が潤み、頬は赤く、口には体温計を咥えていた。
クロノ、エイミィ、アルフとこの家の住人が総出で看病に当たっていた。
ピピピッ、と体温計が計測終了を知らせる電子音が鳴る。
エイミィが体温計を口から抜き取る。

「エ、エイミィ。　フェイトはどうなんだい！？」

「……三十八度五分。　完ぺき風邪だね」

「あう……」

申し訳なさそうに顔を毛布に埋めるフェイト。
アルフが冷却ジェルシートを少女の額にペタリと貼る。
ひんやりとした冷たさが心地良い。

「うーん、疲れが出ちゃったかな？」

「だろうな。　いま思えば、裁判が終わってすぐ地球に来て闇の書事件。　そして間髪いれずに闇の欠片事件だ。　疲労で体がダウンしてもおかしくない」

スポーツドリンクが入った水筒を枕元に置きながら、クロノが言った。
優れた魔法資質を持っていても、年端のいかない少女であることに変わりは無い。
ここ数カ月で彼女の身の回りで起こった出来事はそれほどまでに壮絶だったのだ。

「ごめんなさい……」

「謝ることじゃないさ。　風邪くらい誰でも引く」

「そうだよフェイトちゃん。　今は体を休めてゆっくりしてればすぐに治るよ」

「ほんと？」

「ほんとほんと」

それで安心したのか、そう、と言ってフェイトは眼を閉じた。
少しして、穏やかな寝息が聞こえてくる。
残された三人はフェイトを起こさないよう、音を立てずに部屋を出た。

「フェイト、大丈夫かな……」

「ただの風邪だ。　大人しく寝ていれば問題は無いよ」

「うわっ、冷たいなぁクロノ君は。　お兄ちゃんとしてそこは心配してあげるべきでしょ？」

エイミィの言葉に、じろりとクロノは半眼を向ける。

「まだ、養子縁組はしてないぞ」

「そのうちするんでしょ？　フェイトちゃんも承諾したんだし、もう兄妹みたいなものでしょ」

「勝手に言ってろ……」

機嫌を損ねたのか、クロノは背中を向けて自室へと籠ってしまった。
おそらく、書類仕事でもしているのだろうとエイミィは中りを付けた。

「それじゃ、私は買い物に行ってこよっかな。　アルフはどうする？」

「アタシはフェイトを看ているよ。　おかゆくらいなら作れるし」

「ん。　それじゃあ精のつくものでも買ってきましょうかね。
ああ、あとチョコレートもね」

エイミィの最後の言葉に、アルフは首を傾げた。
チョコレートは栄養価が高く、登山などでは非常食としても携行されているという。
だが、風邪をひいた子どもに与えるという話はあまり聞かない。
アルフの疑問に気付いたのか、財布と買い物袋を持ちながらエイミィが言った。

「美由希ちゃん――なのはちゃんのお姉ちゃんね――から聞いたんだけど、もうすぐ女の子がチョコレートを贈るイベントの日が来るんだって。　確か……」

「バレンタインデーだな！」

時は昼休み。　教室に置かれた灯油ストーブと弁当により匂う空気を入れ替えるために窓が全開され、冷たい風が問答無用で入り込む。

晴天とはいえまだ二月。　冬の風は寒く、生徒たちは寒さに身を震わせる中、燃えるような赤毛の青年こと窪田鉄平が突然声を上げた。

「……は？」

友人の奇行に、松田怜治は怪訝な顔をした。

もう一人の友人、本田正義もケータイをいじる手を止めてきょとんとしている。

「だから、バレンタインデーだよ！　おまえら、まさか興味ねぇとか言う気じゃないだろうな！」

熱の入った言葉でまた言った。

バレンタインデー。　またの名をセント以下略。

起源はローマのキリスト教聖職者が処刑された日で、実際のバレンタ中略……とテレビで見た曖昧な情報を頭の中でつないでいく。

「それで？　バレンタインデーだからなんだってんだ。

俺もお前も、そんなもんに縁がねぇだろうが」

「何言ってんだよぜろ！　今年は、おれたちにだってチャンスは十二分にあるだろう！！」

「チャンスなんてどこに……ってああ、シグナム達か……」

合点がいったと怜治は頷いた。

去年に無くて今年あるもの、それは魔法を通じて知り合った者たちだろう。

その中でも鉄平が親しくなりたいと思いそうなのは、はやての家族である守護騎士の将と癒し手だろう。

「シャマルはともかく、シグナムがこんなイベントに参加するとは思えないけどな……」

「いや！　はやてちゃんが参加するならあの人も参加すると願っている！！」

「希望かよ。　しかもはやてが参加すること前提って……」

「んーぼくはシグナムさんよりシャマルさんから貰いたいね。

家庭的っぽいし、料理もうまそうだし」

「……」

シャマルの料理を食べたことのある身としては、それは大きな間違いだと怜治は言いたかったが、夢を壊すのも可哀相なので言わないでおいた。

いくら料理下手のシャマルでも、市販のチョコを溶かして別の形にして固めるだけのチョコ作りで不味くしようが無いだろう。

もっとも、その過程で余計なひと手間が惨事を引き起こすのがよくあるオチだが。

「しっかし、バレンタインねぇ……。　今まで縁無しだったからい

まいち判んねぇや」

「いつの日か、毎年くれる可愛い彼女ができることを願うね僕は。
……そういえばさ、あの子、どうしてる？」

「あの子？」

「ほら、年末に君の家に転がり込んできた、はやてちゃん似の」

「ああ、ディアーチェね。
さぁな、毎日散歩つって街中歩き回ってるみたいだし、今日もどっかをてくてく歩いてるんだろうよ」

「呑気だなぁ。　いいのか？　あの子を監視しておくよう言われてたんじゃねぇのかよ」

「一瞬も目を離さずにみてなきゃなんねぇなら学校連れてくるか俺がサボってるよ。
一応ラインの繋がりがあるから大体の居場所は判るし、なんか仕出かそうとしたらすぐリミッターかけて止められるよ」

「ふーん。　でもさ、あの子がなんかするのかだけじゃなくて、彼女がなんかされることも考えておいた方がいいと思うよ」

「……どういうことだ？」

怪訝な顔で訊ねる怜治に、正義が今さっきいじっていたケータイの画面を見せてきた。
ケータイで見られるニュースだろうか。
そこには、太い黒文字で、

“少女連続失踪　ついに二十件目　警察は未だ解決の糸口掴めず”

そう、重々しい文章が浮かんでいた。

ロード・ディアーチェ。　闇の欠片の中枢として具現した少女。
魔法は使えるものの、闇の書としての次元転移能力と転生機能は完全に失ったと言っていい。
そして今は、一人の青年により力を抑えられ、ましてやその者の融合騎にまで落ちぶれた。

「――――――――」

とはいえ、闇の書として蒐集した魔法知識は健在で、魔法生命体としても上位に位置するためか、魔法により異変というものに敏感であった。
そんな彼女が不穏な気配を察知したのが、この世に留まり居候を始めてから一週間ほど前。
それ以来、暇を見つけては街を練り歩き、その気配の大元を探し続けた。
ただの気のせいかもしれないし、魔法を使えば管理局に目を付けられるため自分の足で動き、己が感覚に頼るしかなかった。
そしてついに、その場所を見つけた。

「……事実は小説より奇なりとはいうが、これは奇すぎではないか？」

そこは、一見するとただの雑貨屋だった。

看板のデザインやファンシーな装飾から、女児向けの店なのだろう。

事実、先ほどから十五分ほど観察しているが、店に来る客は少女がほとんどである。

「ここが、我が感じていた違和感の出どころか……」

可愛らしい外見の店とは裏腹に、ディアーチェには不穏な、微量な魔力を感じていた。

そしてその魔力の波長は、闇統べる王である彼女さえ怖気を感じさせるほどに澱んでいる。

「魔力はこの店からではないな。この店の人間に魔法資質が？……いや、ならば反応が移動するはずだ。それがないということは……」

この店の中に、魔力を発する何かがあるということ。

「さて、我が取る手は二つあるが……」

顎に手を当て思案する。

ひとつは、店の店員から聞き出す。腐っても魔導書の中枢、催眠でもなんでもして無理矢理情報を絞り出すことなど造作もない。

もうひとつは店内に入り、この目で直接魔力の正体を見つけだすこと。

前者の選択は容易だが、あの小言のうるさい少年からなにか文句が来るだろう。
後者なら小言は無いが、その分危険が伴う。　正体不明のものほど厄介な物は無い。

「――――――――む」

どちらをとるか思案していると、店に入っていく少女たちに目がいった。
その中に、車イスに乗った、ディアーチェと瓜二つの顔立ちの少女がいた。
ディアーチェの顔が見る見るうちに険しくなって行く。

「あの、莫迦者どもが……！」

苛立ちを吐き出しながら、ディアーチェは店へと歩き出す。
見つけてしまった以上、守りはしなくとも忠告くらいはしておかなくてはなるまい。
仮にアレらを潰す者がいたとしたら、それは完全復活した闇でなくてはならないのだ。　こんなところで、蹲いてもらっては困る。

「へぇ、こんなお店あったんだ」

「まだお店開いて二週間たってないみたいよ。
今は開店セール中だし、女の子向けの商品がいろいろあっていいかなって」

「セール言われるとなんか余計なもんまで買いそうになるなぁ……あ、この型抜きペンギンさんの形しとる」

「ほんとだ、かわいい！」

店内。アイドルグループの歌が流れる中、四人の少女たちの話声が聞える。

うち三人が制服、残り一人が車イスに乗っているせいか周囲から若干目立っている。

彼女たちがいるのは女の子向けにデザインされた調理器具の棚だ。パステルカラーに彩色された調理器具を手に取り眺め、棚に戻しては別の者を取って眺める。

そんな作業を何度繰り返しただろう。やがて、四人とも気に入った品を手に取りレジに行こうとする。

その際、はやての目にあるものが止まった。

「あ」

「どうしたの？」

急停止したはやてを不思議に思い、なのはがはやてと同じ方向へ視線を向ける。

それを見て、なのはが声を上げる。

「わぁ……」

それは、紅い宝石のペンダントだった。

といっても本物の宝石がこんなところにあるわけがない。

宝石に似せたものをはめ込んだものだろうとなのはは思った。
燃え盛る炎のように赤く輝くそれは、まるで本物の宝石のようだった。

「きれいだね……」

「ほんとう……」

そのペンダントに、すずかとアリサも見惚れたようだった。
タグを見る。
やはり偽物なのだろう。　小学生の小遣いで十分買える値段だ。
そして、商品の煽り文句にまた目を奪われた。

“願いがかなう魔法のペンダント”

そう、金色の文字で書かれていた。

「願いが、かなうか……」

「なのはからしたらあんまり良い品じゃないわね」

「にゃはは……」

アリサの言葉に、なのはは苦笑した。
先の春に、その手の魔法物品に振りまわされた身としては微妙なところだ。
だが、そんな怪しげな歌い文句を抜きにしても、紅いペンダントは綺麗で思わず手を伸ばしそうになる。

「う～ん、やっぱりきれいやなぁ。　値段も高ないし……」

「じゃあ買ったらいいじゃない。　願いだって叶うっていうんだし」

アリサの言葉にはやては、信じられない、と言いそうな顔を向けた。

「なによその顔」

「や、アリサちゃんってこういう曖昧なもん信じないと思うてたから意外やなぁと……」

「失礼な。　わたしは初詣にはおみくじだって引くし、朝の星座占いや血液型占いだって見るわよ。　……まぁ鵜呑みにしたりしないのはほんとうだけど」

失敬な、と憤慨するアリサに笑みをこぼしながら謝罪の言葉を口にする。

「ふふふ、ごめんなアリサちゃん。

……そやね、こうして目に止まったんも何かの縁ちゅうことで」

買おう、とはやてがペンダントに手を伸ばした時。

「それに触れるのはやめておけ」

制止の声がかかった。

伸ばしかけたはやての手が中空でピタリと止まり、声の主へと顔を向け、その可愛らしい顔を顰めた。

「ディアーチェ……」

「どうした、苦虫を噛みつぶしたような珍妙な顔をしおって。顔芸なら所望しておらん。　早々に止めよ、見苦しい」

敵意を隠さぬ辛辣な物言いに穏やかだった空気がピリピリと張り詰めていく。

髪と瞳の色を除いて瓜二つの貌の少女。

双子などでは決してなく、互いに互いの存在を心のどこかで疎んでいた。

闇に家族を奪われかけたはやてと、住処である闇を滅ぼされたディアーチェ。

戦いから一月たっても、このふたりの関係が良好になることはなかった。

顔を合わせれば罵詈雑言こそないものの、どちらも仲良くしようなどと思わず、ただ顔を歪めて睨み合うのみ。

それは、たとえ友人たちの前でも変わらない。

「なんのようや。　あんたにはここは似合わんで」

「我も好き好んでこんなところにおるわけではない。それよりも、そのペンダントは止めておけ」

「え……どうして？」

すずかの問いに、ディアーチェは目を細めてペンダントを見つめながら言う。

「それは、いやな感じがする」

「なんやその漠然とした理由は」

「事実なのだから仕方あるまい。　まぁ、子烏がどうなろうが知ったことではない。　うぬの好きにしろ。
だが、警告はしたぞ」

そう言って、ディアーチェは店から出ていく。
張り詰めた空気が弛緩し、思わず安堵の息を吐くなのは。
会話は五分と続かなかったと言うのに、その間の時間が妙に長く感じたのは彼女だけではないだろう。
気まずい雰囲気を払拭するように、四人の少女はレジへと向かう。
その、紅いペンダントも一緒に。

日が暮れ、空が紫がかった茜色に染まり、やがて静かな闇に染まる。
そんな鮮やかな変化を見せる空に目もくれず、クロノ・ハラオウンは自室で仕事に没頭していた。
闇の書関連の事件は概ね終わったと言ってもいいが、執務官である彼には事後処理を含めたデスクワークが付きまとう。
事件の元になった物が物だけに、万が一に備えて舞台となった海鳴市への観測は未だ続いている。
もっとも、その事件を引き起こした魔導書の一部が、人型を取って街を闊歩しているので観測対象は絞られているのだが……。

「――――――――ん？」

ピタリと、端末を操作する手が止まる。
中空に展開されたウィンドウには警戒色で問題を知らせる一文が浮かぶ。

「観測衛星に不調？　一部監視網に穴だと……！？」

クロノの背筋を、悪寒が滑り下りる。
脳裏に浮かぶのは緑眼の少女。

「まさか彼女がなにか？　……いや、そんなことすれば怜治も気付くはずだし、さすがにあいつもこんなことしたら報告するはずだ」

クロノが評する松田怜治の人物像は、あまり良くない。
実力は認める。
が、素行は決して良いと言えるものではなく、物事を軽視する傾向も一部見られる。
ディアーチェがなにかしても、大したことないと無視する可能性は十分にあり得た。

「……さすがに、それは彼を疑い過ぎ、か……」

両手を上げ、大きく伸びをする。
凝り固まった筋肉をほぐすように腕を回し、肩を軽くもむ。
さて、もう一仕事するかと意気込んだ時、階下から声が上がる。

「クロノくーん！　ご飯できたよー！」

声の主はエイミィだ。　時計を見れば、確かに夕食時だった。
だが今さっき仕事に打ち込もうと決めた身、後で食べるからと言

おうとしたが、腹の虫は歓喜の声を上げた。

「む……」

不思議なことに、音を聞いた途端空腹がやって来た。

「空腹で仕事しても効率が悪いだけか……」

そう自分に言い聞かせ、クロノは自室を出て階下へと下りて行った。

で。

「なんで君がここにいるんだフェレットもどき」

「……きみは、いつまでそのネタを引っ張るつもりなんだい？」

ダイニングに下りてくると、来客がいた。

淡い栗色の髪に緑色の瞳。　中性的な顔立ちは性別の判断を迷わせる。

全体的に唐草色を連想させる服を着た少年の名はユーノ・スクライア。

春先の事件の際に知り合い、今はクロノの友人である。

食卓にはすでに色鮮やかな食事が並び、美味しそうに湯気を立てている。

ユーノはその一角に陣取り、食べる気満々であった。

クロノは言葉を変えて、再度訊ねる。

「どうしたんだ。　君は無限書庫の司書になるための勉強中ではな

かったか？」

「その勉強中の人間に資料請求してきたのはどこの誰だい？」

不満を隠さず、ユーノはディスクを一枚、クロノの前に置いた。

そういえば、昼間にそんなメールを送った気がした。

「ああ。　確かにしたな。　悪かったな、貴重な時間を割かせてしまって」

「別に。　ずっと部屋にこもってたら体に悪いからね。

それより、フェイトが風邪ひいたってエイミィさんから聞いたけど、大丈夫？」

「ただ疲れが出ただけさ。　ゆっくり休んで、栄養と水分を取れば明日には元気になるさ」

「そう。　それは良かった」

「はーい、おっまたせー！　エイミィさん特製ディナーだよー！」

エプロンを付けてエイミィがやってきた。

やがてアルフも到着し、ハラオウン家プラスワンでの夕食が始まった。

夜。　時刻は日付が変わり時計が二周した午前二時。

松田家の住人は皆、眠りについていた。

だというのに、外と同様闇に閉ざされた一室で動く者がいた。
銀月の髪に翡翠の瞳――ディアーチェである。
怜治の部屋で布団に寝ていた彼女は、この夜遅くに起き上がり窓へと向かう。
この部屋本来の主を跨いで、窓のカギを開ける。
冬の夜は寒い。　窓にはびっしりと結露し、水滴が無数に張り付いていた。

「――――――」

窓を開け放つ。
凍えるような夜風と共に、邪悪な魔力の波が吹きこんできた。
無意識に身を縮こませる青年を余所に、ディアーチェは顔を歪ませる。
その顔には、憤然と焦燥の皺がはっきりと刻まれていた。

「あの莫迦め。　我を嫌悪するのはこちらも望むところだが、なぜこうも無知なのだ……」

罵倒の言葉を呟きながら、ディアーチェは窓から身を乗り出し、黒翼を広げて飛び立った。
目指すはこの邪な魔力の根源。
闇はふたつと要らない。　ゆえに、闇統べる王はその邪悪を滅ぼさんと闇を翔る。

ディアーチェが出て行って半刻。　枕元に置いたケータイの着信音に怜治は眼を覚ました。

「ん……ああ。　なんだよ一体……さむっ」

何故か開いていた窓を閉めながら、ケータイを開いて電話に出る。

「はい、もしもし……」

『怜治君ですか!?　私です、シャマルです!』

鼓膜を突き破らんばかりの大音量に、思わず耳に押し当てていたケータイを引き離す。

それでも相手の声は大きく、音割れを起こしつつも聞こえていた。

「シャマル？　どうした。　お前にモーニングコールなんか頼んだ覚えはねぇし、時間が五時間近く早いぞ。

味覚の次に時間感覚まで崩壊したか？」

『違います！　そんなこと言ってる場合じゃないわよ!
はやてちゃんが、はやてちゃんがいないんです!!』

電話越しに聞こえる悲痛な叫びに、一気に眠気が吹っ飛んだ。

「どういうことだ？」

『最初に気付いたのはヴィータちゃんなんだけど、お手洗いに起きたら隣で寝ていたはずのはやてちゃんがいないって!
車イスはあるのに……、どういうわけか魔力反応も追えないんです』

「なに？」

怜治は訝しげに眉を寄せる。

魔導師である以上、魔力は常に体から漏れている。
隠すこともできるがそれでも完全な遮断はできず、シャマルの腕を以てしても探れない程に、はやての魔力遮断が上位だとは思えないし、遮断する理由も解らない。
そしてなにより、はやての足は回復に向かっているとはいえまだ完治してはいない。
彼女が日常生活で外を出歩くには車イスが必須で、それが放置されているということはつまり。

「誘拐か？」

『判りません。　でも、わざわざ家に入ってきて物を盗むのではなく人を攫うなんて……』

「聞いたことないわな。　だいたい、侵入者ならそっちの番犬と剣士が気付かないわけがない。
他のやつには連絡したか？」

『実は……』

怜治の問いに、電話の向こうでシャマルの声が沈むのが判った。
数瞬の後、シャマルの答えが返って来た。

『すずかちゃんやなのはちゃんの家にも連絡したんだけど……』

「だけど？」

『……ふたりも、家にいないって』

衝撃が襲う。

そして、昼間に正義に見せられたニュースページを思い出す。

“少女連続失踪　警察は未だ解決の糸口掴めず”

「……判った。　俺も今から探してみる」

『心当たりがあるんですか？』

「ないな。　でも、俺はお前らよりずっと長くこの街に住んでる」

電話を切る。

クローゼットからコートを取ろうとして止める。

深夜だから人気も少ないだろうし、緊急事態だ。　クロノもそううるさくは言わないだろう。

机に置いた腕輪（リング）を握り、翻して窓に向かう。

そこで、ディアーチェがいないことに気がついた。

「なんだ……探す奴が一人増えたのかよ！」

閉めたばかりの窓を開け放つ。

刺すような冷気を全身に受けながら、松田怜治は飛んだ。

「フラガラッハ！」

リングが光る。

銀の刀が右手に納まる。

「スタン！」

続いて叫ぶ。

ガレージで眠りこけていた魔導二輪が、空間を飛び越えて出現し、
怜治を受け止める。
スタンピードに跨ると同時に怜治の体をバリアジャケットが包み込む。
肌を刺す冷気が遮断される。

『どうした相棒。　夜の散歩には遅いし、朝の散歩には早すぎるぜ？』

「はやてとすずかになのは、それとディアーチェが行方不明だ。
ただのガキの家出かもしれねぇが、早めに探すのに越したことはねぇ」

『ふーん。　なぁレイジ。　一つ訊いてもいいか？』

「なんだ」

『この街、なんでこんなに魔力持った奴がいるんだ？』

瞬間、不気味な殺気が怜治の全身を突き刺した。
そして、殺気が塊となって飛来した。

「うおっと！」

地上から石の塊が襲いかかった。
直撃は避けたが、バランスを崩し、世界が逆さまになる。
頭に血が昇る気持ち悪さから逃れるため、一旦地上に降りる。

「ったく、誰だよいきなり――――い！？」

息を呑む怜治。
夜の闇に紛れて気付かなかった。
いつからいたのか判らない。
人っ子一人いない街道に、

街灯を塗り潰すほどの、石の兵士が待ち構えていた。

「――――なんだよ、これ……」

かくして、平穏の冬は終わりを告げる。
そして、重苦しいカーテンコールと共に、新たな戦いの幕が上がる。

魔法少女リリカルなのは　☆Ｔｈｅ　Ｒｉｄｅｒ☆　ＡＸＥＬ　第１話　その冬の日

第４１話　その冬の日（後書き）

そんなわけで始まりましたすずか√。
すずか√なんて言ってる時点で展開読めそうですがまぁそこは気にせず。

ちなみにＡＸＥＬは“アクセル”と読み、
「加速」の方のアクセルではなくフィギュアスケートの「トリプルアクセル」とかのアクセル。
そういえばロックマンＸに出てきたアクセルはＡＸＬって綴りだったっけ？

ともかく、すずか√開始です！

第４２話　迫りくる影

時は、やや遡る。
闇に閉ざされた空間に響く男の声が静寂を引き裂く。

「くそっ！　マスタングの野郎、何が“魔法のない管理外世界だから問題はありませんよ”だちくしょう！　高ランク魔導師が大量にいるし、管理局まできっちり入り込んでるじゃねぇか！」

男――アウレリア・テージスの怒声が響く。
漆黒のローブで全身を隠し、顔は無地の白い仮面で隠すというテージスの恰好は、黒魔術師のイメージをそのまま具現化したようだった。
仮面に掘られた二つの孔から見える彼の双眸には怒りの炎が灯っていた。
そして、そんな彼を窘める男がもう一人。

「落ち着け。　今のところ奴らが我々の動きに気付いた様子は無い。我らは我らの役目を全うするまでだ」

「それでもだエルカミーノ！　陛下の器の選定には管理局は必ず気付く。　最初から局がいると判ればもっと魔具を用意してきたというのに……！」

「選定にそう時間はかからん。　奴らが気付き、駆けつけた時にはすでに我らはここにはいない。
　そのために店からこんなにも離れた場所に拠点を構えたのだろうが」

冷静に語る男の名はノマド・エルカミーノ。
深緑のインバネスコートを纏った赤髪の男は壁にもたれかかりながら、男は階下に目を向ける。

「それよりも、憤るならもう少し静かにしろ。　せっかく集めたガキどもが目を覚ますぞ」

階下で横たわる、二十を超えた少女たちを見下ろしてそう言った。
すやすやと落ち着いた寝息を立てる少女たちを一瞥して、エルカミーノは立ち上がる。

「どうした？」

「先の発言を撤回しよう。　何者かが、こちらに向かって来ている。真っすぐにな」

「なんだと！？」

エルカミーノは声を上げるテージスに鋭い視線を向ける。
静かにしろ、と目だけで伝えて、エルカミーノは外へと向かう。

「私が食い止めよう。　おまえは準備が整い次第、選定を開始しろ」

「……判った。　すまないが、お前に任せる」

「気にするな。　もとより、私の役目はそれなのだから……」

足を止める。
身を翻し、向き合った二人は同時に口を開く。

「「全ては我らが願いと、緋色の夜の女王のために」」

魔法少女リリカルなのは　☆Ｔｈｅ　Ｒｉｄｅｒ☆　ＡＸＥＬ　第2話　迫りくる影

「――――つ、らああっ！！」

怜治は大剣を一閃する。
石の兵士が五体、まとめて粉砕されて土に還る。
だが、それは焼け石に水と言うものだ。
兵士は無数に存在し、それらが雪崩となって襲いかかってくる。

「くそっ、こいつらいったい何なんだよ！？」

『ゴーレムだな。　魔力が籠ったクリスタルを核にして、物質に魔力を込めて練り合わせ、形を自由に変えて使役するゴーレム創成（クリエイト）。
それをこの数同時操作とは、術者はかなりの使い手だな』

「感心してる場合かよッ！！」

白刃が一閃、フラガラッハがゴーレムを一体両断する。
ゴーレムたちの強度はたいしたことないのは不幸中の幸いか。
兵士たちの姿はガイコツに似ており、見た目通り一撃で確実に動きを停止させることができる。　が、それでもこの数は危険だ。

人海戦術を続けなれれば、無限の体力を持たない怜治に勝ち目は無い。
どうしたものかと思案していると、遥か前方で光が発しているのが見えた。
それは、誰かが魔法を使った際に出る魔力光だった。

「まさか――――スタン！」

『はいよっ！』

右手にフラガラッハ、左手に大剣形態（ブレードフォーム）のスタンを持った状態で、怜治はその場で大きく回る。
白と黒の剣が舞い、風が起こる。
風と回転は勢いを増し、その場で小型の竜巻を生み、ゴーレムを一掃した。
間を空けず、スタンを砲撃形態（バスターフォーム）に変形させる。
魔力を注ぎ、≪竜の咆哮≫を放つ。
魔力の奔流が駆け巡り、ゴーレムの群れを一気に薙ぎ払う。
閃光が止むと、前方を塞いでいた石兵が残骸に変わっていた。

「――――うしっ！」

怜治は瓦礫を踏み越え、前に進む。
そして、その先にいる少女の名を呼んだ。

「ディアーチェ！」

銀月髪の少女が振り向く。
驚きの表情が一転、不機嫌なそれに変わる。

「何しに来た小僧」

「散歩に見えるんなら眼科行け。
……念のため聞いとくけど、これ、魔法絡みか？」

「そうでないと思うのなら脳外科に行け、そして死ね。
まったく、どいつもこいつも鈍い塵どもだ。　結界が張られていることにすら気付かんとはな！」

闇色の杖から魔弾が奔り、迫って来たゴーレムどもを一蹴する。
怜治もフラガラッハを振って応戦する。
自然と、互いに背中を合わせてゴーレムと対峙する。

「おい、それはマジで気付かなかったんだが」

『同じく。　さすがディア嬢、魔法への敏感さならピカイチだな！』

「まったく……無駄口を叩く暇があるなら動け塵芥！」

エルニシアクロイツから砲撃の光が迸る。
薙ぎ払われ、瓦礫と化していくゴーレムの間を縫って生き残りがディアーチェに襲いかかる。　それを怜治が魔弾で抑え込む。

「んで、こんな大量のゴーレムに囲まれてモテモテのディアーチェさんはこんな夜中に何用で？」

「茶化すな小僧。　あの子烏がどうなろうと知ったことではないが、我の周囲で魔導をひけらかす無粋な輩が気に食わんかっただけよ」

『なる。　はやて嬢が心配で出て来たんだな』

「……」

ディアーチェの言葉が消える。

ただ無言で魔弾を掃射してゴーレムを破壊する。

怜治とディアーチェ、二人がかりでかかってもゴーレムの数は減らず、むしろ増えているような気がする。

街を徘徊しているゴーレムがこちらに集中しているのか、ゴーレムを操っている術者が絶えず創り続けているのか。

前者か後者か、はたまた両方か。

どちらにしろ、このままでは二人とも力尽きて倒れるだけだ。

「ディアーチェ。　お前、はやてたちがどこにいるのか判ってたりするか？」

「闇の書の中枢を舐めるなよ。　そんなもの、とっくに把握しておる。　だが、こいつらが邪魔して向かえんぞ」

「つまり、こいつらの妨害が無きゃ行けるんだな」

「貴様、何をするつもりだ？」

怜治は不敵な笑みを浮かべ言う。

「俺がこいつらを引き付ける。　お前はその間に、はやてたちを助けに行け！」

ディアーチェを引き寄せ、彼女の背後にいたゴーレムを白刃で瓦礫に変える。

「我が子烏を助けると思うか？　ついうっかり手を下してしまうかもしれんぞ」

「つまんねぇ問答している場合じゃねぇだろ。
そのうっかりの後、どうなるか判らない程にお前の頭はお花畑か？」

杖先に発生させた魔力刃がゴーレムを横一文字に切り裂いた。
その場で二人は背中を合わせたまま一回転する。

「ほざいたな、小僧」

「ほざいたぜ、小娘」

紺と銀、二色の魔弾が掃射される。
破壊の豪雨に曝され、ゴーレムたちが崩れていく。
一瞬の沈黙の後、ディアーチェが口を開く。

「十分だ。　それだけあれば子烏の下へ行ける」

「了解した。　そんくらいなら稼げる」

「三つ数えたら我は飛ぶ。
一……」

黒翼が広がる。
襲いかかる石兵を、ドゥームブリンガーで薙ぎ払う。

「二……」

少女の体が重力から解放され、足が地を離れる。
怜治はフラガラッハを待機状態に戻し、スタンを構え直し、詠唱を開始する。

「「――――――――三ッ！！」」

闇統べる王が飛翔した。
ゴーレムたちが即座に反応。　体の一部を切り離し、岩石砲をぶっ放す。
だが、

「――――――――その在り方、まさしく竜の如く！
フォーム？、竜人（ドラゴン）！！」

吹き荒れる暴風に叩き落とされた。
黒い鎧に身を包んだ青年の背後に、巨大な五芒星の魔法陣が浮かび上がる。
魔法陣から呼び出すのは異界の鉄騎。
豹の頭部を前面に着けた、鉄の大蛇が召喚された。

「行って来い！　ディアーチェ！！」

兵装した八両編成の蒸気機関車が爆走し、ゴーレムをその巨体で蹂躙していく。
それを視界の端で捉えてから、ディアーチェは加速する。
流星となり、光の尾を引いて少女の姿が空へと消えたところで、怜治は再び自身を取り囲む石兵の群れと対峙する。

『なぁレイジ。　こいつら引き付けるのは結構だが、それだとクロノ坊たちとの連絡が取れねぇんじゃね？』

「そりゃお前、向こうの方から気付いてもらうしかないな」

『どうやって？』

「思いっきり暴れんだよぉ！！」

叫ぶと同時に新たに鉄騎を三台召喚。

天地を駆け回る鋼の巨獣と共に、青年は激闘の舞いを踊り出す。

「何が起こっている！？」

「判りません！　海鳴市全体に魔力反応、一〇〇、二〇〇、まだ増えています！」

くそっ、とクロノは歯噛みする。

深夜、緊急事態を知らせるアラームに跳び起きてみれば、街中に現れた謎の魔力反応、街の様子を探ろうにもサーチャーは機能せず未だ詳しい状況は把握できない。

そのため、バリアジャケットは装着し、Ｓ２Ｕを起動状態にして待機することしかできない。

歯痒い状態に辟易しつつ、スタッフからの報告を待つ。

焦燥に駆られるのは、本来指揮をとるべきリンディが不在なために、全ての権限が少年の双肩に委ねられているのも原因か。

待つこと数分、報告が上がる前にクロノは別の魔力反応を感知した。

「――――――――！」

その魔力の主は知り合いだった。
荒々しく、でもどこか芯の通った魔力。　これは――――

「怜治か！」

弾けるように駆けだすクロノ。
感じた怜治の魔力を手繰り寄せ、その位置を把握する。

「エイミィは観測を続けてくれ。　ランディは艦長に連絡を。
クロノ・ハラオウン、出る！」

「待って、クロノ……」

急停止。
その勢いのまま振り返ると、金髪の少女が立っていた。

「フェイト……」

「わたしも、行く」

フェイトの言葉に、クロノは首を横に振った。

「ダメだ。　君は休んでおくべきだ」

「風邪ならもう大丈夫。　ゆっくり休んだから」

拳を作り、腰のあたりでガッツポーズして快調をアピールするフ

エイト。
確かに、顔から赤みは引き、血色は良い。
だが病み上がりである以上無理をさせることはできない。
頑なに、クロノはフェイトの出動を承認しない。

「それでもダメだ。　戦闘中に倒れられでもしたら迷惑だ」

冷たく言われ、思わず後ずさるフェイト。
クロノの口調は、初めて会った時よりも冷たかった。

「君がすべきことは……ゆっくりと体を休めて明日元気に学校に行くことだ」

それでも、一瞬だけ優しく微笑んだ後、クロノは家を飛び出し、夜空へと消えて行った。
残されたフェイトは、ギュッと拳を強く握る。
爪が食い込み、痛みに堪え、フェイトは独り思う。
どうしてわたしは、こんな時に動けないのかと――――。

「――――っ、はあっ！！」

炎の魔剣が閃く。
煌く炎がゴーレムを爆殺する。
烈火の将の脇を蒼き狼が駆け抜け、石兵を噛み砕く。

「ブチ抜けぇえ――――――！！！」

紅い少女が鉄槌と共に大回転。　紅い旋風にゴーレムが薙ぎ払われる。
石の残骸を風のリングが掻き集め、砲弾にして石兵の群れへと叩きつける。
十も数える間もなく、四〇体以上のゴーレムが破壊された。
それを行ったのは三人の女性と一頭の狼。　女性のうち一人は外見十歳にも満たない幼い少女だ。
彼らの名はヴォルケンリッター、夜天の主に仕える雲の騎士だ。
主が消え、焦燥に駆られ外に飛び出た彼らを待ち受けていたのは無尽の石兵。
光の宿らぬ眼窩が、自分たちへの嘲笑に感じられ、彼らは悟った。
この者たちが、自分たちの大切な主をどこかへ連れ去ったのだと。
言葉を解さぬ石の塊なら遠慮はいらない。
怒りをぶちまける対象として、いつか手掛かりが手に入ると信じて戦い続けてどれほどたったか。

「だ～～くそっ！　何体いんだよこいつら、叩いても叩いてもキリがねぇ！！」

「口を動かす暇があるなら手を動かせ、ヴィータ」

「うっせぇ、んなこたわかってる！　でも、こうしてあたしらが手間取ってる間にはやてになにかがあるかと思うと……」

顔を俯かせ、グラーフアイゼンを握りしめる。
情けない。　そして腹が立つ。
主を、家族を守るべき守護騎士たる自分が主誘拐の気配すら感じられなかったことに。
シグナムやシャマルも、そしてヴィータの傍らに立つザフィーラ

も同じ気持ちだろう。
顔には出さずとも、胸の裡は自責の念と敵への憤怒が激しく渦巻いていることだろう。
ヴィータは静かに顔を上げ、眼前のゴーレムの群れを見据える。
いくら砕いても湧いて出てくる石の兵。
いつになったら先へ進めるのか、主を救いに行けるのか。
先の見えない事態による焦燥の念が思考を妨害する。
そんな思いを払拭するように、綺麗な声が、天から降って来た。

「将！　みんな！」

騎士たちが空を見上げる。
綺麗な三対の黒翼が羽ばたき、月を背に、銀色の長い髪が舞う。
祝福の風、リインフォースの声が夜空に響いた。

「リインフォース、主はやての居場所は判ったか？」

シグナムの言葉に、リインフォースは悲しげに首を横に振る。
騎士達の表情に影が落ちる。　が、リインフォースは続けて声を上げる。

「今さっき、海の方に向かう光を見た。　誰だかは判らなかったが、その方角に何かあるのは確かだろう」

「じゃあ、そこに！」

はやてがいるのか、とヴィータが視線で問いかけ、それにリインフォースは力強く頷く。
シグナムが指示を飛ばす。

「シャマル、我々が時間を稼ぐ。　お前はその間に転移魔法でリインフォースと共に行け！」

「そんな、シグナムたちは？」

「我らの事なら心配いらん。　こんな雑兵に後れは取らん」

「主に万が一のことがあった場合、おまえたちがいた方がよかろう」

「そういうこった。　あたしらのことは気にせずとっとと行け！」

シグナム達の言葉に、シャマルは頷きかけるが、それをリインフォースが止めた。

「ここは私に任せて、将たちが向かってくれ」

はぁ！？　と声を上げたのはヴィータ。

口にはしないが、シグナムの顔にも驚愕が張り付いていた。

反論が来る前に、リインフォースは畳みかける。

「私が行っても我が主にしてやれることは少ない。　ここは、そなた達が行って安心させた方がいい。

それにな……」

地に降りて、リインフォースは言葉を切る。

冷たい視線が、ゴーレムの群れを射抜く。

「私も、腹が立っている。　主から目を離した己の愚かさと、主を攫った下朗への怒りでな……」

「……」

ヴィータは思わず身震いした。

リインフォースの言葉は氷のように冷たく、刃のように鋭い。

彼女とは長い付き合いだが、こんなリインフォースを見るのは初めてだった。

その迫力に圧されてか、シグナムもゆっくりと頷いた。

シャマルが空間転移の術式を紡ぎ出す。

それを脅威と取ったのか、ゴーレムたちが一斉にシャマルに襲いかかる。

「レヴァンティン！」

魔剣の柄から圧縮魔力を込めた弾丸が弾ける。

多節刃、シュランゲフォルムとなったレヴァンティンがゴーレムどもを薙ぎ払う。

ヴィータの鉄球が撃ち抜き、人型へと変身したザフィーラの拳が砕く。

「準備完了、みんな来て！」

シャマルの声が上がる。

クラールヴィントによって紡がれた円へと、守護騎士たちが飛び込み、門が閉じた。

それを見送ると、リインフォースの手から漆黒の魔球が放たれた。

「闇に染まれ……」

広域殲滅魔法≪デアボリック・エミッション≫が、大地ごとゴーレムどもを呑み込んでいく。

純粋魔力の塊が内部で爆発し、渦巻く衝撃波がゴーレムたちを容赦なく叩き潰す。

やがて闇が消え去り、再び舗装された大地が顔を出した時には、ゴーレムたちは一体残らず、欠片さえ残さず消滅していた。

場所は変わり、魔導騎兵が踊る舞台へと舞い戻る。

鋼の猛獣が唸りを上げ、ゴーレムたちをその巨重と突進で粉砕する。

シェルコから召喚された鉄騎は、ただ走り回るだけではなく、自身に装備された砲門を駆使し、魔弾の雨を降らす。

鉄騎の突撃を回避し、魔弾の雨から逃れた石兵をフラガラッハの一撃で叩き切る。

囲まれれば鉄翼を広げ回転し、薙ぎ払う。　破壊の轟音が鳴り止まぬ舞台で、青年は舞う。喝采の代わりにゴーレムが砕ける音が鳴り響く。

そんなステージに、黒髪の少年が参戦した。

言葉を交わさず、少年は杖をゴーレムに向け、砲撃を放つ。　直線状に並ぶゴーレムを、青い閃光が貫き焼き払う。

背後から襲って来たモノをくるりと躱し、杖で殴りとばし、スティンガーでバーベキューのように串刺しにする。

幼さの残る顔立ちながらも、その立ち振る舞いは戦士のそれであった。

頼もしい援軍。　それを見て、怜治は。

「なにしてんだバカヤローーーーッ！！！」

本気で怒鳴り付けた。
予想外の言葉に、怒鳴られたクロノは目を白黒させつつ言い返す。
「な、なにって助けに来たに決まってるだろ！！」
鉄の爪でゴーレムを切り裂きながら、怜治が叫ぶ。
「誰が頼んだ誰が！　俺がこんな判り易く暴れてるのは涎垂らして寝てるてめぇを叩き起こして指揮取らせるためだろうが！
なのにお前が前線に出てきてどうすんだバカ！」
「打合せもしてないのに出来るか！！
だいたい、何が起こってるのかはすでに大方把握していた」
「なのはたちが居なくなったこともか？」
「当然だ！」
スティンガーが飛ぶ。　クロノには珍しく感情の入った一撃だった。
「だったら、さっさと行けよ！　ここは俺が抑えとくから」
クロノの背後に迫る石兵を、怜治が鉄尾で叩き潰した。
クロノが怜治めがけて駆けだす。
「君だけで？　無茶だ！」
「無茶も何も捨て置け。

お前、いつからそんな優しい奴になったよ。　初めて会った時みたいな、背中向けたガキに魔弾叩き込むような冷徹さはどこに行ったんだよ！」

「あの時とは、状況が違うだろ！！」

怜治の背中を踏み台に、クロノが跳ぶ。

中空に無数のスティンガーがセット。　一瞬の静止の後、一斉に奔り出す。

中規模範囲攻撃魔法≪スティンガーブレイド・エクスキューションシフト≫が、ゴーレムを串刺しにしていく。

刺さった魔力刃が爆発し、衝撃波で更に敵を薙ぐ。

言い合いながらも、二人の息は合っている。

独奏が二重奏（デュエット）になり、戦場を彩る音の幅が増す。

どれほど敵を払っただろう。　それでも、ゴーレムの大群は未だその兵力に衰えを見せはしない。

無尽蔵の敵を前に、クロノが肩を上下させながら言う。

「確かに……これは、ちょっとキツイな」

「だろ？　だからお前はさっさと行け。

こんなんどう見たって足止めだろ。　いつまでもここに張り付いてたら敵の思うつぼだぞ」

「それもそうだ。　だが、君は本当に大丈夫か？」

「問題ない。　今俺は案内人だからな。　さっさと行ってくれた方が、俺も行動を移せる」

クロノは怜治の言葉の最後あたりに首を傾げたが、怜治の言動が

理解し難いのはいつものことかと割り切り話を続ける。

「なら僕は行かせてもらおう。　はやてたちはどこにいる？」

「ちょっと待てよ……臨海公園の、少し北に行ったあたりか？　そっちにディアーチェが向かってる」

「ディアーチェが？」

クロノが顔を向ける。

少年の表情には懸念の色が浮かんでいた。

「大丈夫なのか？」

「実力がか？　はやての安否か？」

「両方だ」

憮然とした声を、怜治は笑い飛ばす。

「問題ねぇよ。　弱くなったつっても化け物じみた強さから俺らクラスに堕ちてきたようなもんだし、はやてになんかしようものならその後自分が生きていられねぇことくらい判ってる」

「楽天的だな、珍しく」

「心配ならさっさと行ってあいつを見張れ」

一瞬、二人は視線を交錯させる。

そして、クロノは力強く頷き、地面を蹴った。
その隙を狙うゴーレムたちを、先ほどと同様に、怜治が尽く撃ち落とす。
クロノが流星となって視界から消えるのを確認して、怜治はスタンに話しかける。

「で、残り何人だ？」

『んー、シグ嬢たちも向かったな。　あとはリイン嬢が離れたところで暴れてるけど、そろそろ向かっていいんじゃね？』

「リインフォースか。　まぁあいつなら俺より上手くやるだろ。
それじゃあ……」

地面を蹴って跳び、ちょうど真上に着ていた機関車へと飛び乗る。

『ダンナ！　行き先はどちらまで？』

「とりあえず、このまま真っすぐだ！」

追いかけてくる石兵を薙ぎ倒しながら、青年は暴走特急と共に、夜の街を駆け抜けた。

夢を見ていた。　夢だと自覚できる、明晰夢と言うやつか。
暗い闇の中を、ひたすら落下し続ける夢。
いや、もはや落下しているのか上昇しているのか、はたまた平行

移動しているのかも曖昧だ。　明晰夢だというのに曖昧とはどういうことか。

意識が朦朧とする。

まるで暑い夏の日差しの中、外に立たされて延々と意味のない会話を聞かされているよう。

頭が重い。　体がだるい。　風邪でも引いてしまったかのような悪寒。

自分でない何かが、裡から飛び出そうとするような気味の悪い圧迫感。

だがそれも、視界の端で捉えた物によって払拭された。

（あ……）

闇一色の世界で、一筋の光を見た。

縋るように、その光に手を伸ばす。

手を伸ばした方向に体が動いているのか、それとも光の方から向かって来ているのか。　どちらにしても、その光はどんどん大きくなっている。

闇が溶け、視界を光が覆って行く。

そして、

そして……

世界が

光に

支配された。

「あ、あああああああっ……！！」

はやての口から悲鳴が迸った。
電流が全身を駆け抜けたように体が跳ねる。
夢が醒めると同時に襲いかかる激痛。　何かを拒絶するかのように、弾けるようにあの世界から抜け出してきた。

「はぁ、はぁ、はぁ……」

動悸が激しい。　心臓の鼓動が耳朶を打つ。　頭痛がする。
汗をかいていた。　冬だと言うのに、べったりと肌に張り付いた服が気持ち悪い。
……少し落ち着いたところで、ようやくここが自分の家でないことに気がついた。

「あれ……どこや、ここ……？」

暗く、どこかカビ臭い。
流れてくる空気は冷たく、わずかに潮の香りがした。　近くに海があるのだろうか。
そして、徐々に目が暗闇に慣れて来ると、自分の居る空間がはっきりしてきた。
四方をコンクリートに囲まれた装飾が一切ない、倉庫の様な建物。
二階建てで、四方の一角に階段が設置されていた。　二階の格子窓からわずかに月明かりが差し込んでおり、それが唯一の光源だった。
外へと通じる赤銅色の扉は固く閉ざされ、開かれる気配は無い。
動こうとして、今更だが車イスがないことに気付く。
闇の書による呪縛から解き放たれて一カ月半経つが、はやてへの侵食の根は深く、未だに彼女の両足は上手く動かない。

「えっと、たしか魔力を通して神経を……」

もっとも、以前と違って全く動かないというわけでもないのだが。
細い管に水を注ぐように魔力を両足に通す。
やがて、覚束(おぼつか)ないながらも自力で立つことができた。
ゆっくりと視点が上がる。
そして、ぐるりと周囲を見わたした彼女は、驚愕の光景を目の当たりにした。

「なんや……これ……？」

呟きが反響する。
今まで自分ひとりだけかと思っていた。　だが違った。　そこには、二十人余りの少女たちが横たわっていた。
年は自分と同じ子もいれば、高校生くらいの者もいる。
服装も顔立ちも統一性は無い。　ただ、皆共通してその寝顔は苦悶で歪められていた。
頭の片隅で未だ残るあの気味の悪い夢。　それを、この少女達も見ているのだ。
あれを見た一人として、はやてはその苦しみが理解できた。
闇一色という希望も何もない空間に投げ出され、ようやく見つけた光明は触れてみればそう、憤怒と憎悪の塊だった。
自分は本能が拒絶を起こし逃れることができたが、もしこの少女たちは未だにアレを見ていると思うと放っておけなかった。
起こしてやらなければ。
そんな使命感めいた想いが湧きあがり、とりあえず近くにいた少女を起こそうとした時、はやての耳に聞き覚えのある声が届いた。
視線をそちらに向ける。　瞬間、はやては息を呑んだ。

「すずかちゃん、なのはちゃん！」

悲鳴の様な声を上げるはやて。
視線の先には、宙に浮かぶなのはとすずかの姿があった。
彼女たちの首は二本の黒い手に掴まれ、その先には白い仮面が浮かんでいた。

「だ、誰やあんた!?　わたしの友達になにしとるん!!」

はやての怒声に、仮面が視線を向ける。　窪んだ眼窩から、ぎょろりとしたどす黒い眼光が少女を射抜く。
なのはの首を掴む手が緩み、どさり、と音を立ててなのはが地面に落ちる。
そんなことに気を止めることなく、すずかの首を掴んだまま、白い仮面がゆらりとはやてへと歩み寄る。

「なんだ、何故ガキが目覚めている」

低く、苛立ちの籠った声に思わずはやては後ずさる。
声からして男だと判る。
闇に浮かぶ白い仮面が男の怪しさを際立たせていた。
仮面に掘られた二つの孔から覗く澱んだ瞳が、はやてを舐め回すように見つめる。

「ああ。　この街に来た時に感じた馬鹿デカイ魔力はおまえのものか……」

「なん、やて……？」

「気にするな。　もうおまえにはようはないんだから、こちらの用が済むまで大人しくしていろ」

冷たく言い放ち、男――アウレリア・テージスは身を翻して離れていく。
そして、すずかを自分の視線と同じ高さまで持ち上げると、ぼそぼそと何か呟く。
それは、言葉に魔力を乗せた魔法詠唱。
それに気付いたはやては、自分がデバイスを持っていないことも忘れてテージスに向かって走り出した。

「あんた、なにする気や！？」

手を伸ばす。　もう少しでテージスの身を覆うローブに触れそうというところで、何かに突き飛ばされた。
はやての腹に叩き込まれた魔力の塊が、少女の体を風船のように突き飛ばしたのだ。

「が……！」

仰向けに地面に叩きつけられ背中を強打。　肺の空気が全て吐き出し、新たに空気を吸うこともできず水面に出た鯉のように口をパクパクと開閉する。
何が起こったのか、はやては理解できない。　腹にある鈍痛は魔法によるものだと言うことは判ったが、それがいつ放たれたのかが解らない。
テージスはデバイスを出したわけでもなく、彼が呟いた呪文はすずかへ向けてのモノではやては対象外のはずだった。
呼吸が再開され、痛みを引きずりながらはやては立ち上がる。
瞬間、すずかの胸から緋色の光が放たれた。
太陽が輝く様に、炎が揺らめく様に、その光ははやてたちのいる空間を覆い尽くした。

「お、おお……おお！！」

テージスは歓喜に満ち溢れていた。

不本意な任務。　予想外だった管理局の駐在。　予定外の敵の襲撃。　そして極めつけは攫った少女の目覚め。

今まで思い通りに事が運ばないことへの苛立ちが、この瞬間の歓喜で遥か彼方へと消し飛んだ。

紫髪の少女から放たれる緋色の光。　それは彼が、彼らが探し求めていた器の証。

これで、彼の夢は果たされる。　長年追い求めていた望みが叶うのだ。

「すずかちゃん……。　あんた、すずかちゃんに何したんや！」

……だというのに、この喜びに水を差す声が一つ。

茶髪の少女へと視線を向ける。

先ほどから煩いと思っていたが、この瞬間の横やりは、最も彼を苛立たせる要因となっていた。

「うぜぇな。　あんまり現地人を殺すなと言われているんだが……」

右の掌をかざす。　指の間には妖しく光る宝石が計三個、挟まれていた。

テージスはそれを投げるように、右腕を振りかぶる。

「まぁ、一人くらい別にいいだろ」

「――――――――――！」

はやての背中を悪寒が走ったと同時、宝石が投げつけられた。
宙を舞う宝石は光を放ち、魔力の渦を放出し、それに圧されてはやては尻もちをついた。
火がガソリンに引火するように、魔力が炎へと換わっていく。
小粒の宝石が、一瞬にしてはやてを丸ごと呑み込む炎へと変貌した。

「あ……」

それは、諦めの呟きだったのだろうか。
家族の、友人の顔と思い出が走馬灯のように脳裏に浮かんだ後、

天井から、嫌な奴の顔が降って来た。

いきなり、闖入者が現れた。
それは少女で、はやてと炎の間に着地した。
肩についた天井の瓦礫を払いながら、少女は迫りくる炎を一瞥し、慌てることなく魔法壁を展開した。
魔力の障壁が、炎の進行を止める。
炎が消えると同時に障壁も消えうせた。
自分の身を守った少女を、はやては茫然と見上げていた。
黒翼と、黒を基調とした騎士甲冑。銀月色の髪は光の少ないこの闇の中でもはっきりと視認でき、翡翠の瞳は妖しく輝いていた。
己を見上げる視線に気付き、はやてと瓜二つの少女ははやてを見下ろす。

「なんだ。我としたことが少し早く来すぎたか。
もう少しゆっくりしていれば子烏の丸焼きを見られただろうに」

心底残念そうに、闇統べる王（ロード・ディアーチェ）はそう言った。

海鳴市は、その中心部こそビルが立ち並ぶ近代的な街だが、周囲を海や山に囲まれているため、少し郊外に出ると昔ながらの町並みが建ち並ぶ。

そんな郊外の一角、桜台登山道に、ノマド・エルカミーノが身を潜めていた。

緑が生い茂ってはいない冬の山道は、深緑色のインバネスコートを隠すには不十分だが、少し道を外れて木々が乱立する林道に入ってしまえばそれも問題ではない。

エルカミーノは懐から短剣を取り出す。

艶やかな装飾が施されたそれは、戦闘用ではなく儀礼用の短剣だった。

短剣を地面に突き刺し、呪文を詠唱する。

すると、短剣はズブズブと音を立てて地面に潜っていく。

地中に潜った短剣から魔力が放出され、短剣を核に砂礫や鉱物を凝集し、圧し固めて硬度を上げていく。　形を成し、自壊しない程度の最低限度の装甲と爪を持たせると、再び地上へと戻っていく。

ボゴッ、と音を立てて地面が掘り起こされ、墓場から蘇ったゾンビのようにゴーレムが誕生した。

核となった短剣に込められた魔力を動力に、核に刻まれた指令に従ってゴーレムは山を下りていく。

ぎこちない動きも、やがて魔力が馴染めばよくなるだろう。

山を下りていくゴーレムを一瞥し、エルカミーノはまた短剣を取り出してゴーレムを創り上げていく。

もう何体のゴーレムを創っただろうか。　彼の周りは、重機で無計画に掘り起こしたような惨状になり変わっていた。
そんなことは気にせず、また新たなゴーレムが誕生した。
さらにもう一本、短剣を取り出し地面に突き刺そうとした腕が、一旦停止した。

「誰かが、近づいてくるな」

探査魔法を展開し、警戒を向ける。

「ひとつ、ふたつ、みっつ？　……いや、やはりひとつか。　後は人の気配がしないな。
魔導師か」

インバネスコートが翻る。　コートの裏に縫いとめられた短剣を十本、自身を中心に、そして円状に、全て同時に地面に突き刺した。

「随分と早いな。　探査に引っかかるようなヘマをした覚えは無いのだが……」

両手を合わせ、魔法陣を展開する。　それは短剣に予め施した術式とは違う、量産型ではない別型のゴーレム創成術式だった。
地面が大きく盛り上がり、十体のゴーレムが現れる。
先ほどまでとは違う、屈強な鎧騎士の姿をしたゴーレムが出現した。
格闘系三体、剣闘系五体、射撃系二体。　円陣を組んで創造主を守る。

「さぁ来い管理局。　私のゴーレムが貴様を迎え撃つ」

ゴーレムが唸りを上げる。
大気が震え、その振動を切り裂いてやって来る者をエルカミーノは感知した。

「あと、百メートル」

戦闘用の短剣を構える。
ギシリと音を立てて鎧騎士が腰を落とす。

「……八十メートル」

射撃系ゴーレムが長銃を構える。
弾丸は石塊で、火薬代わりに魔力で押し出すだけだが、足りない速度は質量で破壊力を補う。

「六十メートル、撃て！」

射程圏内に入った瞬間、長銃の引き金が引かれ、轟音が鳴り響く。
押し出された石塊が山林を駆け抜け、途中の木々をなぎ倒していく。
やがて地面に着弾。　土砂を巻き上げ、伝わる振動がその威力を物語っていた。

「当たったか……？」

そう呟いた瞬間、その予想を裏切るように、閃光が迸った。
光が射撃系ゴーレムの上半身を消し飛ばした。

「――――！！」

エルカミーノの顔に驚愕が貼り付く。
すぐさま残った射撃系に迎撃を命じようとした時、黒い影が飛来した。

「くそっ！」

突き出された拳に半ばヤケクソで短剣を合わせて弾く。
黒い影には、黒鋼（くろがね）の翼が生えていた。
宙返りして影は離れ、腰から白い剣を抜く。
格闘系と剣闘系が挟み打ちで突進し、剣闘系の背後で射撃系が長銃で狙いを定める。

『Ｌｏｎｇ　ｍｏｄｅ』

討ち取った、というエルカミーノの期待を嘲笑うように、白刃から電子音声が響く。

「――風牙一葬」

一気に三倍近く伸長した刃を、影が力任せに振りまわす。
風が巻き起こり、一刀を以てゴーレム三体を上下に両断した。
遅れてやって来た風が崩れ落ちる鎧騎士を蹂躙し、砂塵へと還した。

「な――――に……」

思わず、エルカミーノは呟いた。
一瞬でゴーレム四体を破壊されるなど、考えてもいなかった。
だが、エルカミーノの胸に宿るのはそんな相手への恐怖ではなく、自身の作品を無残に砕いた敵への怒りだった。

「貴様、何者だ」

双眸を怒りに燃やしながらのエルカミーノの言葉に、黒い影が答える。

「松田怜治。　魔導騎兵（ライダー）だ」

己を包む風に黒髪を揺らしながら、松田怜治は名乗りを上げた。

エルカミーノは続けて訊ねる。

「なぜここが判った？　探査妨害の結界は張ったし、魔力も僅かしか出していないというのに……」

「現地人なめんじゃねぇぞ。　この街であんだけのゴーレムを創る土がある場所なんて限られてんだよバーカ」

怜治の返答に、エルカミーノは舌打ちする。

そんな、勘にも等しい理由で居場所を看破られたことが、彼の怒りをさらに増長させる。

怜治はそんなことも露知らず、静かに腰を落とし、戦闘態勢へと移行する。

「色々訊きたいことがあるが、悪いが職質権限はないんでね。　とりあえず、安眠妨害でぶん殴る！」

拳を握りしめ、竜人が駆けだした。

第４３話　灰被りの騎士団

「判りました。　私も今すぐ現場に向かいます」

時空管理局本局内の喫茶店で、リンディ・ハラオウンの声が響いた。

彼女の手には通信端末が握られ、展開したウィンドウには通信士のランディの顔が映し出されていた。

『お願いします。　現在、ハラオウン執務官が指揮をとっていますが、未だ事態の正確な状況は掴めておりません』

「では貴方たちは引き続きクロノ執務官の指示で。
最悪の場合、大規模転送で住民を避難させますから、その準備も」

『了解しました』

通信が切れると同時に席を立つリンディ。

砂糖を飽和ギリギリまで入れた紅茶を一気に飲み干し、喫茶店を出る。

早歩きで地球への転移中継ポートへと向かう。

角を曲がり、直線に入ったところで走り出そうとした時、声を掛けられた。

「あらリンディ、どうしたのそんなに慌てて」

「レティ……！」

思わず足を止めるリンディ。

声をかけてきたメガネの女性はレティ・ロウラン。　本部運用部勤務の、リンディの友人だ。　はやて達へ恩赦をかけるよう取り計らってくれたのも彼女で、八神家にとっては恩人である。
閑話休題。
いつもならちょっとお茶しよ、とでも誘うところだが今はそんな場合ではない。

「ごめんなさいレティ。　私これから地球の方に行かなきゃならないの」

挨拶も省いて、リンディはレティの脇を駆け抜けようとしたところで、レティの声が再び彼女の足を止めた。

「地球？　無理よ」

「……え？」

「中継ポートでしょ？　なら無理よ。　今メンテナンス中だから」

「なんですってぇ！？」

悲鳴を上げるリンディ。　レティの肩をつかみ、詰問する。

「どうしてよ！　いつもはこんな時期にメンテナンスなんて無かったじゃない！」

「いつもはね。　でも、今回は色々と事情があったのよ」

「事情って？」

「どっかの坊やが本局ボロボロにしちゃった事情」

「あ……」

するり、とレティの肩を掴んだ手が滑り落ちた。

魔法少女リリカルなのは　☆Ｔｈｅ　Ｒｉｄｅｒ☆　ＡＸＥＬ　第３話　灰被りの騎士団

ディアーチェをクロノとヴォルケンリッターが追いかけ、怜治はゴーレム使いの撃破へと向かう中、独り町に残りゴーレムとの戦いを続けるリインフォース。

破壊したゴーレムが三桁をとうに超えた辺りで、リインフォースはゴーレムの増加が止まったことに気付いた。

「誰かが、術者を止めたのか」

それとも、現在戦闘中なのか。　とにかく、これ以上増えないというのは有難かった。

魔力切れが怖くて、今までちまちまと倒していたが、その杞憂はもう無い。

大技で一気にカタを付けることができる。

「――――行くぞ」

黒翼を広げると同時に、無数の雷の光球が展開した。
その数、無限に届く。　全てが連射型の大型の魔弾であり、光の壁の如く立ちはだかった。
リインフォースが手を挙げると、光球がバチバチと電気が弾ける音を鳴らす。

「フォトンランサー・ジェノサイドシフト。　――――ファイア！」

手が振り下ろされるのを合図に、雷光の死神が我先にと愚鈍な獲物へと駆けだした。

建物の中を支配した暗闇が、天井の穴から注ぐ月の光に引き裂かれる。
月光と共に舞い降りたのは天使ではなく、むしろ悪魔と言った方が適切か。
それでも、はやての目はディアーチェに、月光に濡れる少女の姿に見惚れてしまった。

「……あ」

そんな自分に気付き、ブンブンと頭を振って煩悩を追い出し、精一杯の鋭い目つきでディアーチェを睨みつける。

「あんた、何しに来たんや！」

「……」

ディアーチェは答えない。

ただ無言で視線を、テージスへと向ける。

黒い魔導師の手には未だすずかの体がぶら下がっている。

未だ眠り続ける少女の安否も、彼女の胸元からの光にも興味を示さず、ただディアーチェは、敵意の視線をアウレリア・テージスへと向ける。

「此度の騒動、貴様が原因か？」

テージスも答えない。　空いている左手を幾度か開閉し、その手に光る宝石を握りこむ。

ディアーチェの視線が一瞬、そちらに向き、また戻った。

「魔力の籠った宝石……鉱石魔法か」

ディアーチェの呟きに、テージスの瞳に一瞬光が宿る。

「知っているのか……」

鉱石魔法。　自然に魔力の籠った鉱石――魔石に術式を刻むか、魔力の通り易い宝石などに自身の魔力を注ぎ、術式を刻んでそれを使用する魔法体系。

術式と魔力を持った魔石は使用すると、術式による効果と属性を発生させ、込められた魔力によって威力と効果の持続時間が決まる。

一つの魔石に刻める術式は一つだが、その術式の意味の一点に置いて突出した力を持つ。　例えるなら、用途が限定された、一能突出型の石コロサイズのデバイスだ。

たった一つのことしかできないが、その一つの効果の威力は高い。

威力は込められた魔力量に左右される。　よって、魔力量の少ない魔導師でも長い期間をかけて魔力を込められた魔石の威力は、高ランク魔導師すら凌駕し得る魔法なのだ。

「だが天然の魔石は希少で、宝石は高価だ。　その上、使用した魔石は二度と使えない。　一回きりの消耗品にしてはコストがかかり過ぎる故、デバイスが発明されると同時に廃れて行った、今では使い手などほとんどおらんマイナーな魔法体系だ」

「言ったな、ガキ……！」

己が魔法を貶され、怒りに燃えるテージスの手から宝石が投擲される。

投げなれたのは紅玉と翠玉。

紅玉に刻まれた炎熱変換術式が炎を生み、翠玉が生んだ風がそれを育み大火とし、空間を茜色に染め上げる。

巨大な炎が渦を巻き、大蛇の如く燃え盛る顎門がディアーチェを呑み込んだ。

「吠えるな、塵芥」

心底馬鹿にした声が響くと同時、黒翼が蛇の腹を切り裂いた。

宙に舞う黒い羽が弾丸となって蛇を引き裂いていく。　虫に食われたように穴だらけとなった炎の蛇がゆっくりと崩れ落ち、空気へと溶けて行った。

消えゆく炎の波から、ディアーチェの姿が浮かび上がる。

少女には傷一つ、焼け焦げ一つなく悠然と立っていた。

ディアーチェはつまらなそうに言う。

「で、これで終いか？　随分とつまらん催しだったな」

「ちっ……！」

テージスが忌々しげに舌打ちした。

突然、すずかを放り投げると同時に投げた青水晶で四肢を中空に縫いとめる。　十字架に囚われたように、すずかの体が固定された。

続けて三つ、指の間に魚眼石（アポフィライト）を挟む。

魚眼石に刻まれた術式が起動。　光の爪が顕現した。

「ほう……」

不敵に口元を歪め、ディアーチェは笑う。

エルニシアクロイツを突き立て、円を描く。　結界が発動され、床に横たわる少女たちを魔力の膜が包んだ。

これで、ディアーチェ達と少女たちには隔壁が生じた。　万一少女たちを踏みつけるような心配もない。　空間をねじ曲げたことで、外の人間がディアーチェ達に触れることはできなくなったのだ。

戦場が整い、両者戦闘態勢に入る。　が、そんな2人を止めようと声が飛んだ。

「ちょ、ディアーチェ何やっとるん！？　今は戦う場合ちゃう。はよぉみんなを起こしてあげんと！」

「知るか。　我は貴様らを助けに来たのではない」

冷たく言い放ちながら、ディアーチェは闇色の剣十字をテージスへと向ける。

「我の目が届く内で、魔導をひけらかす下朗を討ちに来ただけのこと。

そこらに転がる路傍の石に興味は無い。　助けたくば、貴様が自力でどうにかせい子烏」

「――――なっ！？」

驚きの声を上げるはやてを無視して、ディアーチェは駆けだした。彼女を中心に、エルニシアダガーが円を描くように展開し、疾走する。

テージスが突撃し、魔力爪が振るわれる。　ダガーを尽く撃ち落とし、ディアーチェへと迫る。

杖から光刃を伸ばし、ディアーチェは迎撃態勢をとる。　槍となった杖で刺突を繰り出す。

テージスは閃く一撃を身を捻って躱す。　大地を蹴って跳躍し、上方から一気に光の六爪が振り下ろされた。

ディアーチェが即座に〈精神甲冑（パンツァーガイスト）〉を発動。　銀の魔力光に身を包み、防護フィールドが光爪を受け止めた。

杖を振り回し、テージスを引き剥がすと黒翼を広げて低空に滑空を開始する。　光の穂が敵の胴を穿たんと突き出された。

テージスはローブを翻し、回避しようと跳躍したが、ローブの裾が穿たれ布切れが舞う。

黒魔導師が舌打ちする。　追撃するディアーチェに向かって、光爪を投げた。

光爪を杖でいとも容易く弾き、ディアーチェが叫んだ。

「自ら得物を放るとは、空（うつ）け者が！」

杖に魔力刃を展開し、テージスに迫る。

光槍の切っ先が鉱石魔導師に襲いかかる。　が、テージスの手から伸びた光刃がディアーチェの槍を弾いた。

「――――――っ！？」

翠緑の瞳が見開かれる。
振り下ろされる刃を旋回して躱し、距離をとる。
テージスは懐からオリーブ色のペリドットを投げ、それに刻んだ浮遊の術式を起動し、宙を漂う。

「貴様……」

ディアーチェが苛立ちの籠った言葉を吐いた。
テージスの右手を包む光刃は未だ健在で、ブゥゥンと羽音をたてている。
その様子に、ディアーチェは疑問を抱いた。
鉱石魔法とは魔石に刻んだ術式を発動し、その際、僅かでも術者から離れて位置で発動する。　魔石に込めた魔力は既に自分のモノとは別のモノとなっているため、下手をすれば己が放った魔石の効果に巻き込まれて自滅する可能性があるからだ。
だが、テージスの剣は明らかに腕に密着している。　仮に、斬撃の術式を刻んだ魔石を発動させたのだとしたら、テージスの腕も切り刻まれているはずなのだ。　だがその様子は無い。
そこから判る事実を思索し、ディアーチェは答えを出した。

「貴様、体に魔石を埋め込んだな？」

その言葉に、テージスの双眸が光った。　仮面の下からくぐもった笑いが漏れる。

「ほう、見ただけで見抜いたか」

確かに、体に魔石を埋め込み一部とすることで自身の魔力を常に

注ぐことができ、一回きりの鉱石魔法を何度も使用可能にする。
鉱石魔法の短所を見抜き、それを改善しようとした者からしたら当然の判断かもしれない。
だが、異物を押し込められた人体はそう簡単に順応できない。

「はっ、舐めるなよ塵芥。
そんなモノを埋め込んで拒絶反応が起こらないあたり、随分と体を弄ったのだろう。
全身を包むローブと顔を隠す仮面はそのためか。　さぞかし、醜悪な面構えになったのだろう」

「――――――――――！」

テージスから、怒気のオーラが噴出する。
それを見て、ディアーチェの口元が厭らしく歪む。
小馬鹿にされ、テージスは雄叫びをあげながら翔ける。
空いた手からも光刃が伸び、必殺に全神経を向ける。

「莫迦が、やすやすと挑発に乗りおって」

嘆息し、ディアーチェは杖を振る。　鏃で右手を、石突きで左手を払い、がら空きになった胴体に右手を当てた。

「種が明された奇術で、このロード・ディアーチェを討てると思うな塵芥！」

虚空を踏みこむ両脚の力、腰の回転、肩を捻り、それら魔力で強化した全身の瞬発力を総動員し、相乗し、右掌に集積させた超弩級の一撃を、咆哮と共に叩き込んだ。

「烈鋼牙！！」

魔獣の顎門を思わせる闘気が、黒魔導師の胴を撃ち抜いた。

戦場から切り離され、何もできなくなったはやて。

それでも、ただ見ているだけなど出来ず、取りあえず眠らされている少女たちをここから連れ出そうと考えた。　いくら結界で保護されたとはいえ、万一が無いとも限らないからだ。

そのためにまず、未だ眼を覚まさぬ栗毛の友人を起こすことにした。

一人より二人だ。　なにより、こういう魔導師として潜った場数はなのはの方が多い。

なのはの下まで歩き、すうすうと寝息を立てている友人の頬をペチペチと叩きながら声をかける。

「なのはちゃん、なのはちゃん、起きて！」

「う～ん、むにゃむにゃ……」

「起きてってばー！」

「んにゃ～もう食べられないよ～」

「な、なんてベタな寝言を……って、ホンマそんな場合とちゃうんやってー！」

半ばヤケクソでがくがくと肩を揺すると、ほにゃ？という声と共に、空色の瞳が開かれた。

「あれ、はやてちゃん……？」

「なのはちゃん、起きてくれたんやな！」

まだ寝ぼけているのか、なのはは焦点の合わない目で辺りを見渡して一言。

「あれ、ここどこ……？」

「ええい！　そんな説明は後でする！　だからちょお手伝ってー！！」

はやてが叫ぶと同時、彼女たちの間に黒い塊が落ちた。

「え……？」

「ぐ……がはっ」

落ちてきたのはテージスだった。

内臓をやられたのか、盛大に血糊を吐き出して地面に血だまりをつくる。

ディアーチェの結界によってはやてたちが血に汚れることは無かったが、その光景は寝ぼけていたなのはの頭を叩き起こすには十分すぎた。

「えええええっ！？　あ、あの大丈夫ですか？　い、いいいいま救急車を……！」

「いらん」

ディアーチェの足が、なのはの鼻先を掠め――結界によってそよ風ひとつあたらなかったが――テージスの顎を盛大に蹴り上げた。

ごろごろと人形のように転がる黒魔導師を見下ろして、ディアーチェは言った。

「終わりだな塵芥。　どれ、辞世の句ぐらいなら聞いてやらんこともないぞ」

「ち……くしょう……」

仮面の下半分を破壊され、顎が晒された状態でテージスが呻いた。

二つの孔から見える瞳は苦痛と敗北からの屈辱に塗れ、内側から破壊された体は脳の指令を激痛を以て拒絶する。

それでも、テージスはもがく。

意識は今にも飛びそうでも、彼はもがく。

譲れない、決して諦めることのできない、夢（のぞみ）があるから。

「――――――――あ」

それは、決して屈することのない男への、神からの贈り物なのかもしれない。

まるで、釈迦がカンダタを助けようと蜘蛛の糸を下ろしたような慈悲。

テージスには、己の背後にいる不可視の十字架に架けられた少女がそう見えた。

「は――――――ははは！」

希望を見つけたと同時、不思議と活力が漲って来た。
治癒の術式を刻んだ宝石をすべてつぎ込み、傷を癒す。　続けて肉体強化の術式を発動させ、ディアーチェの反応よりも早く背後に飛ぶ。　極めつけに、虎の子の魔石を発動させ、結界を破壊した。
空間の歪みが消えたと同時、テージスはすずかの首に鏃型の魔石を突き付けた。
なのはとはやてが息を呑んだ。

「――――――――」

黒魔導師の最後の足掻きを見て、ディアーチェはその瞳に失望の色を浮かべた。
それでも、テージスからしたら自分の夢を果たすための最後のチャンスだ。　明らかになった口元は狂喜の笑みを浮かべ、粗く息をする。　カンダタでは登り切れなかった蜘蛛の糸を、彼は決して離そうとはしなかった。

「貴様、本物の莫迦か？　その娘を欲しがったのは貴様だろう。なのにそれを人質にとるとは、自棄（やけ）になるのもほどほどにしておけ」

「はは、残念。　俺が欲しいのはあくまでこのガキの体だ。
当然無闇に傷つけるのは避けたいが、最悪、五体満足でさえあればいいんだよ」

「……なんだと」

ディアーチェの眉根が跳ねる。
目つきが鋭くなり、不快感に染まった眼光にも、テージスは動じない。

やがて、ディアーチェは諦めたように眼を閉じて、冷たい瞳を開いた。

「では、その小娘ごと貴様を葬ろう」

冷徹な宣言と共に、銀の魔弾が展開する。

その数約三十。　一斉掃射すれば、テージスに防ぐ術は無い。

同時に、すずかの体も無残に魔弾に貫かれることになるが、ディアーチェの眼に迷いは無い。

仮面の下で、テージスは全身から血の気が引くのを感じた。

「本気か……？」

「何を寝ぼけたことを。　我は貴様を屠るために来た。

それさえ果たせれば、別に誰が巻き添えになろうと知ったことではない」

「あんた……！」

淡々と語るディアーチェに、ついにはやての堪忍袋の緒が切れた。

鬼気迫る形相でディアーチェに歩み寄り、その肩を握りつぶさんと思わせる力で握る。

「いい加減にしぃや。　すずかちゃんを犠牲になんて、絶対させへん。　このわたしが許さへん」

「ほう……？」

ゆっくりと、ディアーチェの視線がはやてに移る。

冷たい翠緑の瞳がはやてを捉え、

「ほざくな、子烏」

容赦なく、少女の顔面を殴り飛ばした。

きゃあ、と悲鳴を上げて倒れるはやて。　鼻が熱く、触ってみると赤い粘液が指を染める。

出血を認識するより速く、ディアーチェの足がはやての頭を踏みつけた。

頭部の痛みに視界が明滅するのを耐え、はやては怯まずディアーチェを睨みつける。

「なんだ、その眼は」

「あんたってやつは……。　もしかしたら良い子かも、なんて思っとった自分が恥ずかしいわ。

あんたはやっぱり、最低な奴や」

「口を慎め子烏。　ここは戦場。　デバイスも持たず、貴様を守る守護騎士もいないこの場では、貴様の言葉など露ほどにも響かん」

「くっ……」

悔しげに顔を歪ませるはやての顔を軽く蹴り、再びテージスの方に向き直ると、黒魔導師はすずかを連れて立ち去ろうとしていた。

即座に、設置された魔弾のうち三弾が奔った。

一発目は外れ、二発目でテージスの足下の地面を砕いて動きを止めた。　だが、三発目は軌道が逸れ、すずかへと向かう。

「すずかちゃん！」

はやての悲鳴が響く。
それと同時、すずかと魔弾の間に割って入る一つの影。　なのはだ。
すずかの前に立ちはだかり、両手をかざして〈アクティブプロテクション〉を発動した。　桜色の光壁が展開し、魔弾を防いだ。
「ほう。　そうだったな、うぬは子烏よりも経験があったな。　デバイス無しでの魔法行使など、もはやお手のものか」
ディアーチェを真っすぐ見据え、なのはが叫ぶ。
「ディアーチェちゃん！　わたし、まだ何が起こってるのかよくわかってないけど、魔法で誰かを傷つけるのはダメだよ！」
「うぬもそのような世迷言をぬかすか。
だがな、うぬらをこんなところに連れてきたのも、月村すずかを攫おうとしているのも、その男の企みよ。　それでも、うぬは奴を見逃せというか？」
ディアーチェの言葉に、なのはは首を横に振った。
「違うよ。　見逃してなんて言わないけど、傷つけるのはまちがっていると言ってるの」
「……そうか」
ディアーチェが杖を下ろすのを見て、胸を撫で下ろすなのは。
だが、次の瞬間には彼女はバインドで拘束され、再び地面に転がった。
それを見下ろす、翠緑の瞳の少女。

「だが、うぬの言葉を聞いてやる義理もないのだよ、我には」

「そん……な……」

なのはを跨いで、ディアーチェはテージスの前に立つ。

「待たせたな。　さて、辞世の句は思い付いたか？」

テージスは答えず、沈黙を保つ。

この期に及んでまだ策を練っているのか、助けが来るのを待っているのか。

どちらにしろ、これ以上時間をかけるのは得策ではない。

すずかが巻添えになることも気に掛けず、ディアーチェは杖を振り上げ、魔弾を奔らせようとして、

彼女の足を掴むはやてに気付いた。

「――――――――」

冷たい表情で、足元の少女を見下ろす。

鼻から出た血と、地面にこすりつけられたことで汚れた顔は、決死の表情でディアーチェを見上げていた。

細い手は万力のようにディアーチェの足を掴んでいた。

その様子が、ディアーチェには酷く不快に感じて、

彼女は我慢を止めた。

「そうか。　そうかそうかそうか――――」

緩慢な動作で、エルニシアクロイツの石突きをはやての頭部の真上に置く。

石突きに魔力が込められ、魔力刃が伸びる。

この瞬間。ディアーチェの意識が完全に自分から離れたことを、テージスは見逃さなかった。

残った攻性術式を刻んだ宝石を握りしめ、ディアーチェに向かって投げつける。

まともに喰らえば死にこそせずとも、追跡はできない程度のダメージを与えられる光の魔弾が奔った。

それに気付かず、ディアーチェの咆哮が響き、それに気付いていたなのはの悲鳴が反響した。

「せっかく拾った命を、そんなにも捨てたいか子烏――――――！！！！」

「やめてーーーーーーーー！！！！！」

一瞬の閃光の後、耳を押さえたくなるような音と共に――――

赤い華が咲いた。

「■■■■――――！！！」

木々が乱立する林道に、鎧騎士の雄叫びが響き渡る。

振り下ろされる巨獣の拳を躱し、怜治はフラガラッハをゴーレムの首に突き立てた。

フラガラッハの柄からカートリッジが弾け、溢れだす圧縮魔力が風に換わる。

内側から吹き荒れる嵐に、ゴーレムの上半身が砂塵に変わり、大地へと還って行った。

青年を背後から、剣闘系ゴーレムが二体同時に襲いかかる。それを、鋼の大蛇が轢き殺した。

「ちっ――――――――」

エルカミーノの舌打ちが響く。

彼の苛立ちも当然。戦闘が始まって十分足らずで彼自慢のゴーレムの七体が破壊されたのだ。

残ったゴーレムは剣闘系が三体のみ。魔導師同士での白兵戦の力は明らかにエルカミーノが劣る。加えて、敵が召喚する鉄騎の威力は脅威だった。

以上の状況から、彼が取るべき最善の選択は――――

「あ、待てコラ！」

逃げること。

元より、エルカミーノの役割は足止めであり、敵の撃退ではない。

自身の不利が確定した以上、無理に戦闘を続けるのは百害あって一利無しだ。

敵に背を向けることへの恥じよりも、今ここで捕縛されて管理局

に情報を渡してしまうことの方が辛い。

「だが、このままでは終わらんぞ……！」

次があったら、必ず打倒する。

そんな誓いを立てながら、エルカミーノは残ったゴーレムを引きつれて林道を登り、見晴らしのいい丘の上へと辿りついた。

背後からは竜人が追いかけてくる気配を感じる。

エルカミーノが取る道は二つ。

反対側の林道へと飛び込むか、玉砕覚悟で迎え撃つか。

「逃げたところで、追いつかれるのは時間の問題。　俺の今の手持ちで創れるゴーレムでアイツを倒せるとは思えん。　――――だが」

これ以上逃げるのは、彼のプライドが許せなかった。

せめて一撃、一撃入れて帰還しよう。

下策だと自覚しつつ、エルカミーノは今さっき登って来た林道に体を向ける。

ゴーレムが軋みを上げ、突撃の体制を取る。

「行け！」

大地を震わせ、ゴーレムが走り出す。

追跡者が飛び出したと同時、鎧騎士が唸りを上げて斬りかかった。

だが、

「おっらあああああああああああ！！！」

巨大な魔法陣から、巨大な戦艦が飛び出した。

機関車が豆粒に見える程の大質量がゴーレムどもを轢き砕いた。

大地を抉り、土砂を巻き上げながらヴェルサティスが駆ける。

「な、なんだそれはあっ！？」

エルカミーノは答えを聞く前に、戦艦によって突き飛ばされた。

登って来た方とは逆方向の林道の中、怜治は木々に凭(もた)れている深緑のコートの男を見下ろす。

男の息は絶え絶えだ。瀕死ではないが、自力で動くことはできないだろう。怜治もそうなるよう手加減したから当然なのだが。

エルカミーノの胸倉をつかみ、強引に立たせて訊ねる。

「さて、お前らの目的はなんだ。どうしてこの街に来た。仲間は何人だ？」

立て続けの問いに、エルカミーノは答えない。

答えられないのではなく、答えようとしない。証拠に、その瞳は未だ屈していない。

「ちっ、面倒だが連行させてもらうぞ。

俺より怖ぇ女侍が来ると思うから覚悟しとけよ」

エルカミーノをバインドで拘束し、肩に担ぐ。

街へ戻ろうと身を翻した瞬間、怜治の視界に影が一つ飛び込んできた。

「うおっ！？」

閃く爪を、咄嗟にフラガラッハで弾く。
衝撃で尻もちをついてしまい、その隙に影はエルカミーノを怜治の肩から奪って行った。

「てめぇ、誰だ！」

影は回りで一番高い木の上に立ち、緑の翼を広げた。

「我が名はファルコン。　主の命により、同志を助けに参った」

月光に照らされ、その姿が露わになる。
鋭い相貌に、瞳は暗視スコープに覆われ、四肢の指には鋭い爪が生えており、背中に生えた翼からは緑の羽が舞う。
人ではない。　おそらく、動物を素体に造られた魔法生命体。

「鳥の使い魔……」

『主の命、同志つったな。　ってことは他にも仲間はいるのか』

ファルコンと名乗った使い魔は答えず、飛び立とうと翼を広げた。

「逃がすかよ！」

即座に怜治は反応し、魔法陣を多数展開した。　武具へと姿を変えた鉄騎の軍勢が顔を出し、狙いを定める。
ファルコンの動きが止まり、スコープに隠れた双眸を向けた。

「貴公には、我らよりも優先すべきことがあるべきだと思うが？」

「攫ったガキどものこと言ってんなら問題ねぇさ。　この街には、

俺より上の奴らが何人も控えてる」

「それでも、その者たちは彼女たちに埋め込まれた物の危険性を知らないだろう。　まさかアレが、時限式の爆弾などと思うまい」

「なんだと……！？」

ファルコンの言葉に怜治が怯んだ瞬間、使い魔が飛び立った。すぐに鉄騎を掃射したが全て躱され、エルカミーノと共に消えた。

「くそっ」

すぐに追おうとする怜治を、スタンが窘める。

『落ち着けレイジ！　もう完全に転移された。　それよりも今は……！』

「……判った」

怜治は悔しげに呟くと、スタンは竜人形態（ドラゴンフォーム）からバイク形態へと戻し、踵を返して街へと戻って行った。

ディアーチェから遅れること五分と少し、クロノはようやく件の場所へと辿りついた。

海の傍の港に建つ倉庫。

これほど近くにこればさすがに判る。　倉庫から、異様な魔力の気配がひしひしと伝わってくる。

突入しようか迷っていると、背後に立つ人の気配。　弾けるように振り向く。　が、それが知り合いだと判り警戒を解く。
立っていたのはヴォルケンリッターだった。
シグナムが代表して言う。

「クロノ執務官。　主はこの中に？」

「おそらくな。　先行したというディアーチェの魔力も感じる」

クロノの言葉を聞いて、ヴィータが鉄槌を威勢よく振りまわす。

「っしゃあ！　じゃあさっさと行ってはやてを助け出すぞ！」

「落ち着けヴィータ。　敵の正体もつかめていないというのに、それは無茶だ」

「無理無茶上等！　どうせ中にいるのはあのゴーレム創ってたやつだろ。　あんなのしか創れねぇ様な奴なら敵じゃねぇって」

ザフィーラの忠告を聞かず、ズンズンと歩き出すヴィータ。
彼女が扉に近づくと、まるで待っていたかのように重い扉が呻きを立てて開いた。　思わずヴィータは立ち止まる。

「――――――――」

扉の向こうの闇を睨みつける。
やがて、一人分の足音と共に、銀月髪の少女が倉庫から出てきた。
少女を見て、クロノがその名を呼ぶ。

「ディアーチェ……」

「む？　……ああ、小僧に騎士共、王の出迎えか。　大義である」

「ざけんな！　てめぇ、はやてはどこだ！　無事なんだろうな！」

ヴィータの怒声に、ディアーチェは肩をすくめて答える。

「子烏なら中におる。　高町と月村の娘も一緒……」

言い終わる前に、騎士たちが倉庫へと飛び込んでいった。

「なんだ全く忙しない……」

「ディアーチェ」

「なんだ、クロノ・ハラオウン」

ディアーチェはクロノの視線に気付く。　咎人を糾弾するような鋭い視線。

それは、ディアーチェが引き摺ってきた黒い者に注がれていた。

ああ、とディアーチェが笑う。

「ここ数日に起こった少女失踪の犯人だ。　言うまでもなく、魔導師であった」

胸に、二か所の孔を穿たれた黒衣の鉱石魔導師、アウレリア・テージスの骸が掲げられた。

クロノの視線が怒りを孕む。　例え罪人でも、それを殺めることへの義憤だった。

「君は……」

「言わなくともよい。　だがな、こ奴を生かせば他の娘どもの誰かが死んでおった。
うぬは罪人に生き、罪なき者に死ねという気か？」

「……違う。　片方が生きるには片方が死ななければならないなんて、そんな選択肢しかなかったわけじゃないはずだ。
特に、君ほどの魔導師ならな」

クロノの言葉に、くつくつとくぐもった笑いを漏らすディアーチェ。

「相も変わらず硬く、甘い童よのう。
だが、貴様はそんなことは言うまい。　のう、怜治？」

クロノが振り返ると、スタンに跨る怜治の姿があった。　ジャケットはやや土にまみれ、顔色から疲労が窺えた。
ディアーチェが質問を変える。

「ゴーレム使いはどうした？」

「ブッ飛ばしたが、逃げられた。
どうやら今回の犯人（バカ）も団体さんらしい」

ファルコンにみすみす逃げられたことを思い出し、苦い顔をする怜治。　すぐに表情を戻し、ディアーチェの手に在る死体に目をやる。

「殺したのか？」

「それに関しての問いはすでにした」

平然とするディアーチェに溜息をつき、怜治は返答する。

「結果をどうこう言ってもしょうがねぇが、せめて尋問くらいはしたかった。

今んとこ、俺たちはそいつとそのお仲間についてなんも知らねぇからな」

「ああ、その点なら問題ない。　ある程度の記憶なら我が引き出せる」

「あっそ、便利だな……」

適当に返事を返しつつ、スタンから降りて怜治は倉庫へと向かう。

ぱっくりと口を開けた入口の前で立ち止まり、体をねじって振り返る。

「いなくなった連中はこん中にいるのか？」

「ああ」

ディアーチェが頷くのを確認してから、怜治は倉庫へと足を踏み入れた。

暗闇へと身を投じ、目が慣れて中の様子が判った。　まるでガス漏れでもあったかのように人が倒れているという状況に眉を顰めつつ歩き出す。

見知った顔を発見し、足を止めて声をかける。

「はやての調子はどうだ、ザフィーラ」

「松田か」

低く、重く、唸るような声が返ってきた。

怒りを押し殺したような声色を疑問に思い、怜治はザフィーラの隣に立つ。　蒼き狼の視線の先にいる少女の様子を見て、彼の怒りに納得がいった。

「非道い怪我だな。　ヤバいのか？」

「いや、大事に至るほどのものではない。　だが……」

「なる。　女にはキツイはな」

シャマルに介抱されているはやての顔下半分が、血と砂に汚れていた。　血の出所は鼻。　誰かに蹴られたか殴られたのだろうと推測できる。　傍にいたシグナムとヴィータの顔を見て、嫌な予感がした。

「もしかして、あれやったのって……」

「おまえの融合騎だそうだ」

「……はぁ」

怜治は大きく溜息をついた。　空気を吸い込むと、酸素と一緒に罪悪感が胸にたまる。

はやてとディアーチェ。　あの二人の仲が険悪なのは知っていたが、ここまでとは予想外。

はやては同年代の少女よりも精神面が大人だし、ディアーチェははやてを嫌悪こそすれ、憎悪は無い。　だから引き合わせても問題ないと思ったが、見通しが甘かった。

「悪いな、俺の判断ミスだ」

「いや、それでも奴がこなければ危なかったらしい。　主を助けてくれたことに関しては感謝する」

「顔蹴り飛ばしたから帳消しだけどな」

「帳消しどこかむしろ負だ」

「はは……」

気の抜けた笑いを零した後、顔を引き締めて歩を進める。
目指すのははやてたちのさらに奥。　未だ眠り続けるすずかと、それを心配そうに手を握るなのはに向かう。

「なのは」

「あ、怜治さん」

こちらに気付き、なのはが顔を向けた。　まだ二月。　寝間着姿の少女の肩は寒さに震えていた。　手足の指先も青白い。
友人の容態を心配するのは判るが、怜治にはそれより気になることがあった。
ファルコンと名乗った使い魔が去り際にはなった一言。

“まさかアレが、時限式の爆弾などと思うまい”

敵の言葉を鵜呑みするつもりは無い。　だが、万が一ということもある。　急ぎ確認する必要がある。
だから――――

「なのは、ちょっと服脱げ」

説明とか、遠慮とか、そういうのを全力全壊真向無視で言った。
一瞬の沈黙の後、なのはが顔を真っ赤にして叫んだ。

「えええええ～～～っ！！？！？」

響く絶叫が倉庫内に反響し、木霊する。　守護騎士たちがこちらを向くが、怜治は気にせずなのはのパジャマに手をかける。
容赦なく、プチプチとボタンを外しにかかる。

「ちょ、ちょっと怜治さんやめ……」

なのはの懇願を、怜治は無視する。　なんせ命が懸かっているのだ。
強行は止まらず、その慎ましやかな胸元を開こうとした瞬間、

「怜治のばかぁぁぁあああああーーーーーーー！！！！！！」

雷光一閃電光石火。　家で大人しくしているはずの金髪紅眼の少女が、怜治の後頭部をその戦斧で殴り飛ばした。

「痛……。　フェイトのやつ、思いっきり殴りやがって」

「どう見ても自業自得だ」

呆れ半分怒り半分な口調で、クロノが言った。

あの後、スタンから事情を聴き、皆は急いでハラオウン宅に舞い戻り、アースラへと移動してなのはたちの検査を実施した。

本来の艦長であるリンディが不在で、現在の指揮権はクロノにあり多少の混乱が懸念されたがそこは訓練された管理局員。　毎度感心する手際の良さで攫われた少女たちの検査を開始した。

医療班について言ったシャマルを除く守護騎士達とクロノ、ユーノ、アルフと共に怜治は食堂で報告を待つ。　ちなみに、フェイトは病み上がりなのに無茶をするなとベッドに縛り付けられている。

時計の針が半周するくらいの時間がたち、シャマルに連れられてなのは、はやて、すずかと攫われた少女たちがやってきた。

怜治が声をかける。

「大丈夫だったか？」

「……」

なのはは怜治と目を合わせようとしない。　何があったのか聞いていたのか、ほか二人の視線もどこか冷やかだった。

嘆息しつつ、シャマルに視線を移す。

「どうだった？」

「怜治君の言うとおり、攫われた子たちの胸に何か宝石の様なものが埋め込まれていたわ。　摘出には苦労しなかったけど魔力を感じたから、爆弾だったってのもあながち嘘じゃないかも」

皆の顔から血の気が引く気がした。
怜治は思わず少女たちの胸が裂けて赤い華が咲くのを想像し、顔を顰めた。
少し視線をずらすと、クロノが手を顎にあて、思考を巡らせている。やがて、口を開いた。

「ディアーチェが何か判ったかもしれない。行ってみよう」

薄暗い、ディアーチェに与えられた一室で、黒衣の魔導師の骸が横たわっている。
ディアーチェは白い仮面を外し、その額に手を置く。
瞳を閉じ、意識をダイブさせる。脳神経の森を超え、テージスの記憶の井戸へと辿りつく。
幼少期――――カット。
少年期――――カット。
学徒時代、友人との思い出、初めて抱いた恋慕の情、夢、その悉く(ことごと)を省きさらに奥へと潜る。
次元空間を漂う古城。その中で円卓を囲む者たち。数は七人。
灰色の背広に紺色のネクタイ、メガネをかけた若い男。銀の甲冑に身を包んだ長髪の女騎士。淡い緑髪に赤銅色の肌をした偉丈夫。深紅の布で顔を覆った戦士。中折れ帽を被った無精髭の銃士。深緑のインバネスコートを纏った赤髪のゴーレム使い。
そして、円卓の中心に座す赤い宝石。
その奥に、ディアーチェは確かな生命を感じ取り――――

「っ――――ああっ!!」

弾かれた。精神ダイブからの強制送還。反動で体が少しだる

い。
すぐさま再度額に手を当てダイブを試みる。
「……ダメか」
頭を振る。　テージスの脳内の記憶野がぐしゃぐしゃに破壊されていた。　もう精神ダイブで記憶を探ることはできない。
いや、驚くべきことは他に在る。
最後に見た、赤い宝石の中のナニカ。　それがテージスの記憶を破壊したいのだ。
「莫迦な。　ありえん……」
第三者からの精神攻撃。　テージスにあらかじめそんな細工をしていたなら納得できる。　が、そんなものが無いことはすでにディアーチェが調べていた。
だからこその安心しての精神ダイブ。　だが、その目論見は外れた。
あの宝石は、脳に記録された情報越しにその力を発し、ディアーチェを追い出した。
過去から未来への時空を超えた攻撃。　そんなことを可能にするほどの魔力。　ディアーチェの闇の書の知識に無い魔法。
「闇の書を凌駕するだと……そんなもの」
在るはずがない。　在っていいはずがない。
闇の書を超える物が在るなど、認められない。
ぎしり、と奥歯を噛みしめ、拳を握りしめる。
それが、己が敗北を認めているが故のことだと気付き、ディアーチェはさらに苛立ちを募らせた。

これ以上自分にできることは無い、と部屋を出ると、クロノが立っていた。
クロノが口を開く。
「あの男から何か分かったか？」
「完全ではないな。　我が思った以上に力が落ちておる」
言葉を切り、ディアーチェは邪悪な笑みを浮かべる。
「もっとも、怜治が死ねば完全に読めるだろうがな」
「ふざけるな。　分かった範囲でいいから教えてくれ」
「ふむ」
ディアーチェは先ほど得た少ない情報を告げていく。
「奴の名はアウレリア・テージス。　第一管理世界の東方の育ち。詳しい経歴は無視したからそちらで探れ」
クロノが頷いた。　ディアーチェは続ける。
「敵の人数は全部で七人、そのうち一人があの男であったから残り六人だな」
「構成メンバーは？」

「判ったのは名前と、奴らの組織名ぐらいだ。
テルスター・マスタング、
インシグニア・モヴァノ、
クンタッシ・ランボルギーニ、
トゥアレグ・パサート、
パオ・キャブスター、
ノマド・エルカミーノ、
そして……」

ディアーチェが足を止めてクロノの方に体を向ける。クロノも足を止める。

「組織名は、灰被り（サンドリオン）の騎士団（シュバリエス）」

第４３話　灰被りの騎士団（後書き）

ついに、オリキャラ勢の名前と組織名が明らかになりました。
詳しい説明は次話で。

しかし、すずか√のはずなのに本人との会話がぜんぜんないな……。
いや、展開上仕方なかったんですけど。

第４４話　一夜明けて（前書き）

話が……進まない。

第４４話　一夜明けて

次元の海を漂う古城に二つの光が突入したのを、テルスター・マスタングは感知した。

灰色の背広に紺色のネクタイ。飴色の革靴を履き、黒縁眼鏡をかけた彼の姿は地球基準でごく平凡。　毎朝通勤ラッシュに苦しむ一会社員という印象を受ける。

だが、真っすぐに彼の顔を見た者なら違った印象を受けるだろう。その氷の様な微笑に、恐怖を感じない者はいない。

城内を歩き、突き当たりの扉を開けて扉に入る。広い空間がマスタングの視界に飛び込んできた。

天井から吊るされた魔石が微小な光を発し、部屋を淡く照らす。部屋の中心には六対十二翼の凰（おおとり）が描かれた大きな円卓が置かれ、イスの前には金のゴブレットが置かれていた。

用意された席は七つ。そのうち四つはすでに埋まっていた。

マスタングはにっこりと、傍から見れば胡散臭い笑みを顔に張り付け、席に着く。

「おや皆さん、もういらっしゃったんですね」

「まあな」

「ええ」

「……」

「――――」

返ってきた返事は二人分。しかもその二人も感情は入っていない。

マスタングは気にしない。むしろ笑顔で挨拶を返された方が恐ろしい。

ゴブレットに注がれた果実酒を呷り、円卓に置き直す。金属音が

ひどくはっきりと響いた。

魔法少女リリカルなのは　☆Ｔｈｅ　Ｒｉｄｅｒ☆　ＡＸＥＬ　第４話　一夜明けて

「――――――――」

沈黙が続く中、マスタングは円卓に並ぶものを一人ずつ見ていく。

まず、自分の座る席の一つ左にいる銀のドレスの様な甲冑を着込んだ栗色の長髪の女騎士。名をインシグニア・モヴァノ。今では数少ない古代ベルカ式魔法の使い手、『騎士』の称号を持つ女傑だ。

そのさらに左に、淡い緑の長髪に赤銅色の肌をした偉丈夫が腕を組んで座っている。身につけた白い衣服には黒いバラの刺繍が施されていた。

クンタッシ・ランボルギーニ。身の丈二メートル半を超える巨人だ。

彼の得物は腕輪となって沈黙しているが、一度起動すれば持ち主の巨体と合わさり破壊を周囲にばら撒く鬼神となるだろう。

その奥に見えるのは深紅の布で顔を隠した戦士。赤黒いジャケットをはおり、さらけ出された胸板は厚く、性別を男だと判断できる。トゥアレグ・パサートだ。

彼の素顔を知る者はおらず、また誰も追求はしない。自分たちはその程度の繋がりしかないのだとマスタングは納得する。

インシグニアの対角線上にある席に、円卓に足を投げ出して無精髭の男の男が座る。

枯れた色の中折れ帽に草臥（くたび）れた土色のジャケットに同色の脚絆、

さながら西部劇にでも出てきそうな風貌の男は、銃士パオ・キャブスター。
腰から下げた連珠のアクセサリーが鈍く輝きを見せていた。
彼の左隣二つ、つまりはマスタングから見て右二つの席は空席だった。
一つは数分もすれば埋まるだろう。だが、もう一つの空席は決して埋まらない。埋まったとしても、そこに座るのは前とは別の人物が座るだろう。
マスタングが入ってきた扉が再度開かれ、赤髪の男が入ってきた。
右腕を左手で押さえており、負傷しているようだ。
マスタングは体ごと視線を男に向け、声をかける。

「ノマドさん、どうですか体の調子は？」

「ああ、おまえの使い魔に治療してもらった」

「それは良かった」

感情のこもらない返答。
エルカミーノは眉根を寄せながら言った。

「……ファルコンは、おまえの差し金か？」

マスタングが顎を引いて頷いた。

「気分を害してしまったら申し訳ありません。ですが、あなた達に何かあっては困りますから」

「テージスは死んだらしいぞ」

「ええ、悲しいことです」

ちっとも悲しんだ様子のない声で言った。

エルカミーノは憮然としたまま席へと着く。腰を下ろすと、トゥアレグが身を乗り出して来た。

「よーノマド、アルレリアを殺ったのはどんな奴だ？」

「知らん。私はファルコンに聞かされただけだ。知りたければ本人に聞け」

「じゃあおまえをブッ飛ばした奴は？」

「……」

「だんまりか。は、つまらねぇな……」

一度言葉を切り、布の隙間から覗くトゥアレグの金の瞳が厭らしく歪む。

「ま、六席と七席じゃあ仕方ねぇよな」

「どういう意味だ、パサート」

エルカミーノの眼光が鋭くなった。瞳に怒りの炎が灯る。

嘲笑うように、トゥアレグは言う。

「そのままの意味さ。第九十七管理外世界なんていうド田舎に駐在の魔導師にやられるなんざ、騎士団の末席らしいからな」

「勘違いするなよパサート。席順がそのまま実力の序列だったのは創立時のメンバーの話だ。今の席順にそんな意味はない」

「確かにそうだ。
でもよノマド、おまえがオレに劣るのは事実だろ？」

「貴様！」

円卓を殴り付け、エルカミーノが立ち上がる。
一瞬で空気が緊迫し、両者の魔力がチリチリと火花を散らす。

「やめないか」

巨人の腕が割って入った。ランボルギーニだ。
偉丈夫の太い声が張り詰めた空気を薙ぐ。
窘められ、しぶしぶといった様子で二人とも腰を下ろす。
嘘臭い笑顔を張り付けたまま、マスタングが小さくお辞儀する。

「ありがとうございます、クンタッシさん。
ノマドさん、報告をお願いできますか？」

「ああ」

エルカミーノが端末を取り出し、円卓の下の端子につなぐ。　中央から青白い光と共に立体映像が浮かび上がった。映し出されるのは海鳴市のミニチュアだった。

「当初の予定通り、テージスが作った陛下の贋作を使って素養のある者を攫い、その中から器の素質を持つ者を選定した。それが、この娘だ」

映像が切り替わる。街のミニチュアが消え、紫髪の少女の顔が現れた。

「名は月村すずか、年は九つ。魔法資質は、魔法行使の痕跡はあったが魔力は感じられなかった。なんらかの事情で消失したと思われる」

倉庫に集めた時に予め集めておいた情報を述べていく。

両親の職業、家族構成、交友関係、生活習慣、好きな食べ物、嫌いな食べ物、癖。関係のなさそうな事でも細かく報告しておく。

十五分後、報告が終わり映像が消える。

最初に声を挙げたのはトゥアレグだった。

「今度の器はガキかよ。前は三十路前の女じゃなかったか？」

「器の素質と年齢は関係ありませんよ。

もっとも、若い人の方が施術に耐えられる可能性が高いので助かりますが」

「若すぎても問題があると思いますが？」

「モヴァノの言うとおりだ」

ランボルギーニが静かに言った。五人の視線が集まる。偉丈夫の言葉が続く。

「だが、彼女が成長するのを待つ時間はない。我らにそのような余裕はない」

巨人の言葉に、マスタングが頷く。

「その通りです。私達の悲願を叶えるためにも、陛下の復活のためにも、彼女が必要なのです」

「それで、今後はどう動く？」

インシグニアの言葉に、即座にトゥアレグが反応した。

「そんなもん、今までと同じさ。乗り込んで、奪い取る！それで終わりだ」

「あそこには管理局員が駐在しているんだぞ。本気で管理局と戦争するつもりか？」

「ああ、それはよくありませんね。
できることなら荒事は避けたいところです」

「はっ！何をいまさら。人攫いは良くて暴力はダメってか？下らねぇ」

「と、言われましてもね。人間出来ることなら話し合いで解決したいと思うのは当然ですよ」

ふん、とつまらなそうにトゥアレグが鼻を鳴らし、イスにもたれる。ランボルギーニには程遠いにしても、がたいの大きいトゥアレグの体重にイスが悲鳴を上げた。

「……管理局の義務と、我々の大義は決して相容れない。話し合いなどで解決はしまい」

ランボルギーニの言葉に、エルカミーノが頷いた。

「同感だ。管理局は私欲を捨ててでも正義を全うする。一方、我らは己が大望のために他者を犠牲にしようとしている。手を取り合うことなど決してない」

「悲しいですね……」

そうして、議論は進み、時計の長針が一周したころに終了した。マスタングが腰を上げ、告げる。

「では、今後はこの作戦で動きます。指揮は今まで通り私が執ってよろしいでしょうか？」

「「「「異議なし」」」」

皆、席を立って部屋を出ていく。

最後まで言葉を発しなかったキャブスターは、去り際に標的の顔を思い出す。脳裏にあどけない少女の顔を思い浮かべて言った。

「ウチの娘と同い年か。まったく、神様というのはとことん性根が腐っていると見える」

会議が終わり、自室へ戻ろうとしていたインシグニアはその視界の端で褐色の巨人を見た。

城内の地図を思い浮かべ、彼の部屋はこの辺りではないというこ

とを確かめる。不思議に思い、後をつけた。
一応は気付かれる様子もなく、中庭を抜け、階段で上へ上へと昇り、二つ目の角を曲がったところでふと気付く。

「この先は確か……」

足を速める。角を曲がり、さらにもう一階上がり、開けた空間へと抜け出た。
騎士の眼前に広がる、野原のように広い空中庭園。色とりどりの花とともに、白い墓標が突き刺さっていた。
墓標は一つではない。十、二十、それ以上だ。
この全てが、かつて灰被り（サンドリオン）の騎士団（シュバリエス）に所属した魔導師の物だ。
墓標の群れの中、ランボルギーニが新たな墓標を突き立てていた。
インシグニアが歩み寄る。

「テージスの墓か？」

「ああ」

偉丈夫が短く答えた。
墓前に漆塗りの小箱を置く。テージスの遺品だ。

「奴の望みは何だったろうか……」

ランボルギーニの言葉に、インシグニアが記憶をめくる。やがて答えを見つけ、口にした。

「確か……鉱石魔術の再興、だったか」

「そうか」

沈黙が降りる。
偉丈夫が瞳を閉じる。黙祷のつもりだろう。騎士道精神を持ち合わせた彼らしい行動だとインシグニアは思った。
インシグニアも黙祷を捧げようとした時、下卑た笑いが響いた。
振り向くと、深紅の布の男、トゥアレグが居た。手には酒瓶、トゥアレグが布の隙間から酒を口に含む。
巨人の瞳が開かれた。

「何の用だ、パサート」

「いやいや、このめでてぇ時に辛気臭ぇことやってる奴らに喝を入れてやろうと思ってな」

「喝、だと……？」

巨人の目が細められる。庭園の空気が張り詰める。

「それにめでたいとはどういう意味だ」

「そのまんまよ。見ろ、この墓の数を。この下で寝てるやつらには全員夢があった。誰かを犠牲にしてでも叶えたい夢が。
でもそれは叶わなかった。女王陛下の器に足るものが見つからなくて」

腕を広げ、トゥアレグが声高らかに叫ぶ。

「だが、その器がついに見つかった！オレたちの世代で！
何十何百という同胞が無念に散って行ったなか、オレたちがその大望を叶える好機に恵まれた。これをめでたいと言わずして何とい

う？
それに……」
一旦言葉を切り、さらに続ける。
「同胞とは言うが、所詮オレたちの繋がりは『他を犠牲にしてでも果たしたい大望がある』という一点のみだ。
女王さまがオレたちの望みを叶えてくれて、そこに矛盾が生じたら即殺し合い。そういう仲だろオレたちは」
トゥアレグの言葉を、誰も否定しない。なぜなら、それは事実だからだ。
灰被りの騎士団（サンドリオン シュバリエス）に属する者はみな、全てを賭して叶えたい願いがあり、そしてその願いは千差万別なのだ。
今ここにいるランボルギーニにも、インシグニアにも、トゥアレグにも、そしてこの墓標の下に眠る者たちにも大望があり、そしてその願いは皆違う。
再生を願うものがいれば、破壊を願うものもいる。故に、その対立はいずれ亀裂を生み、闘争へと発展するだろう。
己が待望を叶えるために、他者を蹴落とすことに戸惑いなど無い。
だが、その時になるまで裏切るつもりなど無い。
灰被りの騎士団（サンドリオン シュバリエス）。
一枚岩には程遠く、けれども大望が叶うその時まで、彼らの結束は固い。

アースラ艦内の一室。

眠気で重い瞼を気合いで開きつつ、エイミィ・ハラオウンはコンソールを叩く。背後には怜治とクロノ、ヴィータを除いた守護騎士達、ディアーチェにユーノにアルフが立っている。

なのはたち少女組は早々に家に帰し、無理にでも寝かせた。黎明も近い。彼女たちには学校もあるのだから少しでも疲れをとってもらわなければ困る。

「その理屈で言ったら怜治君も寝た方がいいんじゃなーい？」

「そのセリフ、そのままお前に返す。後ろからみると眠気に耐えてるのがよく判る」

「いえいえ、私はこういうの慣れてますから」

パシン、と頬を叩いて眠気を飛ばす。

作業を再開し、目的のページへと辿りついた。モニタに表示された文面を読み上げる。

「灰被りの騎士団（サンドリオン　シュバリエス）。

成り立ちは結構古くて、その始まりは旧暦まで遡るみたい。活動内容としては古代の魔法文明の研究となっているけど、結構過激でちょくちょく管理局や次元世界の警察機関とも揉めていたみたい」

「別にこれが初めてってわけじゃないのか……」

クロノの言葉に、エイミィが頷く。

「ここ六百年くらいで研究対象は一つに搾られてるみたい。それは……あった、〈女王の魂（クイーンズソウル）〉。第三級捜索指定古代遺失物（ロストロギア）」

誰かが息を呑む音が聞こえた。
またか、と怜治は嘆息する。
彼が魔法に出会ったきっかけも、その後の事件もみなそれが関わっていた。
過去に滅んだ超高度文明から流出する、特に発達した技術や魔法物品。
それがまた、騒動の原因だという。
無意識に拳に力がこもる。
できるだけ平静を装い、疑問を口にする。
「その〈女王の魂（クィーンズソウル）〉ってのはどんなもんなんだ？」
「えっとね……形状は宝石だけど、これはジュエルシードみたいなエネルギー結晶じゃないみたい。
この宝石のなかには、大昔の、とある世界の女王様が眠っているみたい」
「――――――――――は？」
間抜けな声が響いた。
エイミィがコンソールを操作し、解説を続ける。
「遥か昔、管理局ができるより、魔法技術が中心となるよりずっと前。大戦期と言われた時代にいた女王様。今はもう無い次元世界『エメロード』最後の女王、プラウディア・エメロード・ギャラン」
モニタに女性の肖像画が映し出された。
黒真珠の様な長い黒髪。肌は雪のように白く、唇は真紅。紅蓮の瞳が真っすぐにこちらを見据え、絢爛なドレスと装飾品に彩られた

その美貌が、モニタ越しでも伝わってきた。
数瞬の沈黙の後、怜治が疑問を呈する。

「こいつが宝石のなかにいるってのはどういう意味なんだ？」

「なかにいるっていうか、正確には宝石のなかにこと人の記憶や知識、魔力が記録されているみたい。
これを埋め込まれた人は、意識や体に封じられた記憶や力が流れ込み……」

「プラウディア・ギャランが、蘇る……。それが彼らの目的か？」

クロノの言葉に、「多分」と、エイミィが頷いた。

「なのはちゃんたちの胸に埋め込まれてたってのはこれのすっごく精巧な贋作。多分、そうすることでこのロストロギアの適合者を探してたんだと思う。
あれから解ったことなんだけど、攫われてた人達って、みんな魔法資質を持ってたんだ」

「なんだと？」

シグナムが眉根を寄せて言った。
エイミィが続ける。

「ほんとに僅かだったけど、みんな確かにあったよ。
みんなに埋め込まれたのを調べたら、魔法資質に反応して転移魔法を発動するよう術式が刻まれてた。そうして選別しなきゃ、見境なしに人を攫わなきゃならなくなる」

その言葉に、ディアーチェが頷いた。

「なるほど、鉱石魔導師ならではの方法だ
……で、我が調べた人物について何か判ったか？」

「さすがに全員は無理だったけど、一人だけ判ったよ。いま出すね」

エイミィからコンソールを再度操作。
モニタが切り替わり、プラウディアの肖像が消えて、男の顔写真が現れた。
メガネをかけた、冷たい瞳の若い男だ。

「テルスター・マスタング。ミッドの大学の考古学教授で、五年前に突然退職して、現在は行方不明」

「なっ！？テルスターって、考古学の権威じゃないですか！
若くして博士号も得た天才が、どうしてこんなところに！？」

驚愕の声を上げたユーノに、怜治が言う。

「天才とバカは紙一重っていうだろ、こいつはその一線を越えたバカってことだ」

「どっちでもいいさ。とにかく、彼らの目的は概ね判った。それなら対策も取りようがある」

「だが、対策と言っても我々は奴らの拠点も判らない。我々にできることは奴らが来るのを待つことだけではないか？」

リインフォースの言葉に、クロノが静かに答えた。

「なに。待つしかないというのなら、待ってやるまでさ」

月村すずかは夢を見ていた。

緋色に染まった空がどこまでも続き、天空には丸い天体が坐してこちらを見下ろしている。

下を見れば紅蓮の炎が大地を舐め、炎の平原が広がる。

炎でクリーム色に染まった古城のバルコニーから、赤い世界を見下ろす女性が一人。

黒真珠の様な長い黒髪。肌は雪のように白く、唇は真紅。紅蓮の瞳が外界を捕え、絢爛な黄金のドレスが彼女の美しさを惹き立てる。

「悲しいわね……」

女性が呟く。その音色はまるで鳥の歌声。凛とした綺麗な声が響く。

「ここまでしても、人々は戦いを止めない。どうして世界を独り占めしないと気が済まないのかしら？」

「常に欲し続けるのは人間の本質さ。鳥が空を飛ぶように、魚が川を泳ぐように、人は欲し続けるものだ」

少女以外の声が響き、奥の闇から人影が現れた。

深い闇色のフード付き外套で頭から足元まで覆い、その貌をうかがうことはできない。声から男性だということだけ判った。

押し寄せる熱波に怯むことなく、男は女の隣に立つ。
自然な動作で、女は男に寄りかかる。
すずかは察した。このふたりは、恋人どうしなのだ。
赤い世界を眺める黒い男と金の女。その光景はどこか幻想的だと思った。
甘えるような口調で、女が言う。

「ねぇ。私、違う時代に生まれたかった。戦争なんてない平和な世の中。
女王としての地位も、この魔法の力もいらない。ただ、あなたと穏やかに暮らしたいわ」

「僕もだよ、プラウディア」

ぞくり、と悪寒がすずかの全身を駆け巡った。
女の顔が、こちらを向いたからだ。
悦に染まった、獲物を見つけた肉食獣の様な笑みを浮かべて、女が手を伸ばす。

「あなたがいれば、それも叶う」

伸びた手は赤く燃え、翼を得た鳥となり、その嘴で、その爪で、その炎翼で、すずかを焼き――――。

「――――――――――あ」

――――尽くす前に、目が覚めた。
視界に広がるのは見慣れた自室の天井。

時計の針が示す時刻は、いつもすずかが起きる時間。

「夢……か」

そして現実に帰ってきたことを確認し、体を起こす。

嫌な夢を見たせいだろうか。冬だというのに、パジャマが汗ではり付いていた。

「うう、気持ち悪い」

ベッドから降りる。瞬間、視界が闇に染まった。

襲いかかる頭痛。ここではない、どこか暗い場所の光景が脳裏に浮かぶ。

口論をする姉妹の様なふたりの少女。光の縄に拘束されて大地に転がる栗毛の少女。自分の喉に鋭利な輝石を突き付ける白面に黒ローブの誰か。

そして、赤い翼を背負った自分――――――――――。

「う、あ――――」

膝をつき、嫌な汗がどっと噴き出す。

体が熱い。口を開け、酸素を貪る。心臓が早鐘を打ち、頭が割れるように痛い。

何かが、自分という殻を破って這い出て来るような感覚。蹂躙され、自分という人格が塗り潰されそうになる。

「はぁ、はぁ、は――――――はぁ……」

しばらくして、やっと動機が治まる。

体の火照りは消え、頭痛は止んだ。

ゆっくりと、水面に浮かぶ板に乗るように立ち上がる。

「わたし……どうしたんだろう」

少女の疑問に、答える者はいない。

考えても答えは出ない。すずかは学校へ行く支度を開始する。

すずかの体調、状態に関係なく世界は回り、進み続けるのだ。

風呂場まで行き、パジャマを脱ぎ、シャワーで汗を流す。

汗で濡れた下着も替え、シャツを着て、ソックスをはき、聖祥大付属小学校の白いワンピースタイプの制服へと袖を通す。

最後に、お気に入りの白のヘアバンドをつけて準備完了。

汗と一緒に不安も洗い流せたのだろうか、幾分か気分はすっきりとしていた。

少し大きなリビングへと向かうと、朝食の準備ができていた。

すずかが最後らしく、テーブルについた面々が矢継ぎ早に挨拶をしてきた。

「おはよう、すずか」

「おはよう、お姉ちゃん」

「おはようございます、すずかお嬢様」

「おはようございます」

「おはよう、ノエル、ファリン」

「おーっす」

「おはようございます、怜治……さん！？」

すずかの顔に驚愕が張り付く。
いつもはここにいるはずのない青年。松田怜治はイスに座り、バターロールをかじっていた。
彼の手元にある白磁の皿にはベーコンエッグと緑黄色野菜のサラダがあった。どうやらここで朝食を取るつもりらしい。
彼の隣には同い年くらいの銀月髪の少女。ディアーチェが座る。
状況観察完了。とりあえず、最初に湧いた疑問を投げかける。

「えっと、どうして怜治さんたちがここに？」

「ん？ああそりゃお前、護衛だよ護衛」

「護衛？」

聞き返しながら、すずかは席につく。
怜治は二つ目のパンえと手を伸ばしながら頷いた。
ディアーチェは会話に加わる気が無いのか、黙々と食事を続ける。

「昨日の……というかあれからまだ数時間だからな。とりあえず学校までは俺たちがついていく。また奴らがくるって保証はねぇが、まぁ石橋は叩いてというか、備えあればというか……」

怜治がパンにイチゴのジャムを塗る。すずかはマーマレードを塗る。ディアーチェは両方塗った。他人の家でもこの王様は遠慮をしない。
ふと、すずかは怜治がついてくるという意味を理解して顔に熱が集まるのを感じた。
普段同性と行動していたせいか、異性への免疫が無いせいだろうか。

「で、でも……！」

気恥ずかしくなり、思わず早口になってしまう。

「わ、わたしたち学校はバスで行きますし、怜治さんだって学校ありますしそんなご迷惑を……」

「なのははユーノとヴィータ、はやてはシグナムとリインフォース。念のためフェイトをクロノとアルフが、アリサをザフィーラとシャマルがそれぞれ護衛することになってる。それで、お前の担当が俺とディアーチェだ。ああ、あと他に攫われた連中はアースラスタッフが影から護衛中。

ついでに、俺の高校への通り道にはお前の学校が、ある」

怜治が皿の上の料理を平らげ、牛乳を飲み干して言った。

ディアーチェも満足したのか、背もたれに体を預けて大きく息を吐く。

「美味であった。怜治、うぬの家もこのくらい出すべきだ。主に我のために」

「食費稼いできたらいくらでも食わしてやるよ。出前になるだろうけど」

軽口を言い合いながら、二人はすずかが学校へ行く準備が整うのを待つ。

どうやら、ふたりがついてくるのは決定事項で、自分の意見が通ることはないのだとすずかは悟った。

仕方ないと諦めつつ、少し気になってる異性との通学と言うのに

鼓動を早めつつ、すずかはパンをかじった。
その後、バイクで送っていくという怜治の発言に、体を密着させねばいかんのかというすずかのドキドキを、出発して五秒で校門前という空間転移によってデストロイしたのは言うまでもない。

昼休み。
海鳴東高校。
すずかを学校まで送り、ディアーチェに監視を任せて怜治は自分が通う高校へと向かった。
なのは、フェイトという高ランク魔導師二人に、加えてすずかとアリアの四人についていた護衛、怜治を除いて計九人の魔導師が学校に張り付いている。
相手は残り六人、ファルコンを含めれば七人だが、こちらはアースラスタッフを動員すれば軽く上回る。よほどのイレギュラーが起こらない限り、勝利は管理局の手にある。
これで灰被り（サンドリオン）の騎士団（シュバリエス）が攻めてくるというのなら、それは無謀でしかない。
怜治は護衛から外れているが、ディアーチェとのラインで視覚聴覚は共有している。何かあればすぐさま駆けつけることが可能だ。
とりあえずはことが起こるまで怜治に出来ることはない。敢えて言うなら、悪友二名に深夜の出来事を伝えておくことぐらいか。
クロノがこの場にいたら守秘義務がどうなの言いそうだが、鉄平も正義も卒業後は管理局入局を希望し、闇の書事件以降シグナムやクロノにしごかれているから問題ないだろうと怜治は判断した。
怜治の話を聞き、鉄平が言う。

「なんとも、この街は異世界から大人気だな。意外と調べりゃもっと色々起きてたんじゃね？」

「縁起でもないことを言うなよ」

「それで、その騎士団って連中は強いの？」

「俺は一人としかやってないから判らん。あれが一番の下っ端なのかすらもな」

「ふーん……。ねぇ、手伝いとかいりそう？」

「やめとけ。お前らまだデバイスも持ってねぇんだから」

怜治の言葉に、二人は口を噤む。

魔法資質は計測したところ、鉄平はベルカ式、正義はミッド式の資質があるらしい。

どうせ持つならオリジナルがいいと、二人してデバイスを自作しているがまだ完成には程遠い。

魔力も経験も少ない二人は、厳しいことを言うと足手まといでしかない。

そんなことは言われずとも自覚しているのか、二人は言い返しては来ない。

そして、内心悔しがっているのを、怜治は察していた。

昼休み終了五分前を告げるチャイムが鳴る。

鉄平、正義が自分の席へと向かう。怜治も授業の準備をしていると、ディアーチェで念話を飛ばしてきた。

「（我に見張りをさせておいて、自分は呑気に平穏を満喫か。良い御身分だな小僧）」

「（そんなことのためにわざわざ念話してきたのか。てめぇは黙って護衛してろ）」

「（つれないな。我はうぬにとっておきの情報を教えてやろうとしておるのに……）」

黙り込む怜治。ディアーチェの言うとっておきは、大概悪いことだと思っている。

そんな怜治の気持ちも構わず、ディアーチェが続ける。

「（あの夜、アウレリア・テージスを討ったのは我ではない）」

怜治が目を細める。当時の状況は聞いただけだが、ディアーチェ以外に出来た人間がいたとは思えない。はやてはディアーチェに押さえこまれ、なのははバインドで拘束されていた。

「（じゃあ何か、あの黒マントは自害でもしたってのか？それともあの鳥が？）」

「（どちらも外れじゃ。よく考えろ。もうひとり、あの場におった者がおろう？）」

「（……嘘だな。ありえねぇ）」

ディアーチェの嘲笑が聞こえてくる。

それを無視して、怜治は続ける。

「（それが本当なら、どうしてなのはとはやては何もいわねぇ。あいつらはそこまで冷静になれるたまかよ）」

「（我が記憶を操作した、というのはどうだ？）」

「（メリットがないだろ）」

「（あるとも。うぬが驚く顔を独り占めできる）」

「ちっ……」

忌々しげに、怜治は舌打ちした。

そうだ。ディアーチェは味方などではない。偶然が重なり敵ではないが、怜治達を仲間などと思っていない。

そして、ディアーチェは決定的な一言を告げる。

「（アウレリア・テージスを討ったのは、月村すずかだ）」

チャイムが鳴り、最後の授業が終わる。

生徒たちが帰り支度し、席を立つ。

なのはも同じく、席を立つ。同時に、友人たちが寄ってきて声をかける。

「じゃあ、行こっか」

「うん」

アリサの言葉に頷く。鞄を背負い、アリサの右隣に立つ。

フェイトがなのはの右に立ち、金髪２人で栗毛を挟む。

なのはがもう一人の友人に声をかける。

「すずかちゃーん、帰ろ」

「……」

返事はない。無視した、というより考え事をしていて聞えなかったといった感じだ。

特に怒る様子もなく、もう一度声をかける。

「すずかちゃーん？」

「…え、あ、なのはちゃん？どうしたの？」

「学校終わったし、帰ろ」

「う、うん……」

「どうしたの？顔色悪いけど、大丈夫？」

「あ、ありがと。大丈夫」

立ち上がるすずか。強がっているが、やはりどこか元気がない。

鞄を背負い、四人そろって教室を出る。下駄箱で靴を履き替え、校門を出る。

他の生徒に混じって歩いていると、不意にアリサが不満気に言う。

「大変なことが起きてるのは分かるけどさ、やっぱり良い気がしないわね」

なのはが苦笑する。
周囲には聖祥大付属の生としかいないように見えるが、実際にはクロノ達魔導師が姿を隠してなのはたちを護衛している。
魔力反応すら隠され、どこにいるのかは判らないが、見張られているという事実は自分たちの身の安全とはいえ、どこか居心地が悪い。
歩いている横で、アリサがブツブツと文句を言っているが、彼女なら車で送り迎えしてもらっても問題ないのだ。つまり、口にはしないが彼女もなのは達が心配なのだ。

「素直じゃないなぁ……」

「なのは、なんか言った？」

「う、ううん」

首を横に振って誤魔化す。
無言の圧力が左から圧し掛かってくるが耐える。

「――――あれ？」

ふと、雑踏の向こうに異質な物を見た。
小学生の波を割ってこちらに向かってくる男性一名。
灰色の背広に紺色のネクタイ。飴色の革靴を履き、黒縁眼鏡をかけたその姿はごく平凡なサラリーマンにしか見えない。
だが、なのはは見た。
その男が放つ魔力と、その感情の冷え切った氷の瞳を。
思考が戦闘モードに切り替わると同時、周囲を結界が囲んだ。
認識阻害の結界が張られ、外部の目からなのはたちを切り離す。
この結界のなかでは、なのは達に何が起ころうと、外にいる者た

ちは感知できない。
フェイトが異変に気付き、すぐさまバルディッシュを起動する。
なのはも後に続いてレイジングハートを起動。それぞれ黒と白のバリアジャケットに身を包み、己がデバイスを構える。
空気が緊張に張り詰める。
男の口元が歪み、冷たい笑みを浮かべる。
少女たちとの距離が十メートルになった時、周囲に待機していた魔導師たちが一斉に駆けた。

「止まれ、時空管理局だ」

クロノがＳ２Ｕを向ける。ヴィータがグラーフアイゼンを突きつけ、アルフとザフィーラが拳を固く握りしめ、ユーノとシャマルが魔法陣を展開する。
ディアーチェは電柱の上で傍観を決め込んでいるが、その翠緑の瞳は男を確実に捉えていた。
合計九名の魔導師を前に、男は笑みを崩さない。
男は襟元をただし、恭しく頭を下げてお辞儀した。

「初めまして、管理局魔導師の皆さま。
私、灰被りの騎士団（サンドリオン シュバリエス）首席、テルスター・マスタングと申します」

まるで営業先に挨拶するように、マスタングが言った。
予想外の対応に、緊張した空気が困惑に歪む。
冷静に、クロノは言う。

「白昼堂々やってくれるな。用件は何だ、自首する気にでもなったか？」

マスタングは顔を上げ、笑みを浮かべたまま言う。

「いえいえ。今日は、交渉の席を設けていただきたいと提案に来たのですよ」

「交渉？」

クロノは眉を顰める。

マスタングは頷き、言う。

「我々はテロ集団でもカルト教信者でもありません。故に、管理局と対立するつもりはありません」

「だから、交渉すると？その結果、僕たちが彼女を君たちに渡すとでも？」

視界の端ですずかを捉え、クロノが言った。

マスタングは冷えた笑みで答える。

「我々のしていることが、貴方達管理局にも益になることをじっくりお伝えしたいのです」

「……」

「即決できないのも当然でしょう。ですので、これを渡しておきます。会談の席が用意できましたらご連絡ください。日時条件はそちらに委ねます」

マスタングが差しだしたのは一枚のチップ。

中にはマスタングの連絡先が記されていた。

クロノの額に懸念の溝が刻まれる。

「君は、ここから拠点がバレないと思っているのか？」

「申し訳ありませんが、そこから我らの拠点が明らかになることはありませんよ」

朗らかな笑みを浮かべるマスタング。だが、その笑顔に温かさは見受けられない。

その態度に苛立ちを覚え、ヴィータが一歩踏み込む。

「めんどくせぇ。そんなことする前に、テメェをここでとっ捕まえちまえばいいだけだろうが！」

鉄槌が火を噴く。

ヴィータが大地を蹴り、疾走し、鉄槌が唸りを上げる。

インパクトの瞬間、マスタングの間に何かが割り込んだ。高い金属音が鳴り響く。

「なっ……！？」

ヴィータの顔に驚愕が張り付く。

少女の鉄槌を受け止めたのは赤い槍。それを握るのは銀のドレスの様な甲冑を着込んだ栗色の長髪の女騎士――――インシグニア・モヴァノだ。

「ありがとうございます。インシグニアさん」

「テルスター、用件が済んだのなら早々に帰還しましょう。私でも、この数を相手にするのは厳しい」

「そうですね。
では管理局の皆さん。良い返事をお待ちしております」

マスタングが頭を下げると同時、赤い槍が光を放つ。
視界を塗り潰す光が止んだ時、二人の姿はどこにもなかった。
結界が解かれる前に、クロノ達も明細魔法を起動して再度姿を消す。なのはたちもジャケットを脱ぐ。
平静を装って歩き出すなのはたちを見送りながら、ユーノが言う。

「クロノ、どうする？」

「……」

クロノは顎に手を当て思案する。
やがて、少年が告げる。

「今夜だ。今夜、交渉の席を設けて、そこで奴を捕えるぞ」

魔導師たちが息を呑み、そして力強く頷いた。

第４５話　海鳴戦線（前書き）

奇跡的に１週間で更新。

いや、来週は無理ですって……。

第４５話　海鳴戦線

日が沈み、空を闇が覆う。
街には街灯が地上の星雲の如く輝く。家々には団欒の明かりが灯る。
街から外れた豪邸。月村邸に、魔導師たちが集結していた。
灰被りの騎士団（サンドリオン　シュバリエス）との交渉にこの場を選んだのはすずかへの精神面の配慮と、アースラでは戦闘となった際に武装隊が思いっきり戦えないという理由から。
ここで行われることは交渉だが、その後は確実に戦闘になるとクロノは踏んでおり、怜治もそう思っているいる。
海鳴在住の魔導師とアースラスタッフ、総勢二七名が配置され、各々監視に護衛に待機していた。
広い庭にテントが張られ、そこが仮設の本部となっていた。
クロノが指示を出し、それをエイミィが通信で各員に通達する。
その傍で、目の前に並んだ三人を見て怜治はため息をついた。

「どうしてあんたらがいるんだ。危険ってのは教えたつもりだが？」

「聞いたよ。聞いて、理解したうえでここに来た」

「今までは何ひとつ教えてもらえず蚊帳の外だったんだ。教えてもらった以上は来ないと損だろ」

「直接力になれなくとも、俺たちにも手伝えることがあるはずだ」

各々の言い分に、怜治は改めて嘆息した。
怜治の前に並ぶのは窪田鉄平、本田正義の悪友二名。そして、なのはの兄の高町恭也だ。

出来ることはないと言ったにも拘らず、往生際も悪くやってきたこの三名。

悪友二人は今後のために管理局の仕事風景を見ておきたいとのこと。恭也が来た理由は妹とその親友が心配だから。

恭也の恋人の忍はすずかの姉だったな、と怜治は思い出した。

三人を再度一瞥して、怜治は言う。

「言っとくけど、間違っても戦おうなんて思うなよ。殴り合いなら弱くはないだろうが、あいつらとするのはそんなもんじゃない」

「重々承知。そこんところはヴィータちゃんに思い知らされたからね」

「シグナム姐さんに鍛えられた逃げ足の見せ所だな」

笑い声が上がる。三人はテントから離れていく。

三人の背中が小さくなったところで、怜治の笑みが消え、真剣な眼差しにかわる。

鉄平と正義、彼らとの日常は平穏の象徴にも近かった。なのはにとって、恭也も似たようなものだろう。

それが、いつの間にか戦闘のなかにいた。

複雑な思いが腹のなかで渦を巻く。

腰に差したフラガラッハの柄を握り、怜治は誓う。

一刻も早くその騒ぎを終わらせ、彼らとバカみたいに笑い合える日常へと帰ろう。

魔法少女リリカルなのは　☆Ｔｈｅ　Ｒｉｄｅｒ☆　ＡＸＥＬ　第５話　海鳴戦線

管理局員がひしめく月村邸。
その中を歩く、太陽の様な金色の髪の少女。アリサ・バニングスだ。
事情を聞き、無理を言ってこの場に同席させてもらったが、当然彼女に出来ることは何もなく、無力さを振り払うように邸内を散策していた。

「……といっても、いまさら知らない所なんかないんだけどね……」

誰に向かってでもなく独りごちる。
アリサとすずか、そしてなのはは小学校一年生の頃からの親友だ。互いの家には何度も遊びに来ており、この月村邸は自宅同様に知り尽くしている。
おかげで、気を他に向けることなどできなかった。

「ダメだ。もどろ」

大きく息を吐き、踵を返した時、二つの並んだ翠緑が視界に飛び込んできた。

「おぅわっ!!は、はやて……じゃない、ディアーチェ…だっけ?」

「如何にも、我はディアーチェ。うぬは……アリサだったか?」

「そうよ。……なんか、あんたと一対一で話すのってはじめてよね?」

「そうよな。特に共通の話題があるわけでもないからの」

会話が終わる。どこか気まずい沈黙が落ちる。

一言別れを告げて歩き出せばいいのに、アリサはその場から動かない。

ディアーチェもアリサにようなど無いはずなのにただ立ち尽くす。

沈黙に耐えられなくなり、アリサは意を決して口を開く。右足を動かす。

「……えっと、じゃあ」

「待て」

前に出したアリサの右足が空中で急停止。バランスが崩れ、倒れそうになるのをなんとか堪える。

体勢を立て直し、声をかけてきたディアーチェを見る。

「……なに？」

「うぬは、何を悩んでいる？」

「え……？」

ぽかんと口を開け、アリサは呟いた。

ディアーチェは冷たいその翡翠の瞳を向けたまま言う。

「ここは時機戦場になるであろう。迷いや悩みを抱えていては邪魔だ」

「な……っ！？」

アリサの頭に血が昇る。
何かを言い返す前に、ディアーチェが続けて言った。

「……ゆえに、何か悩みがあるのなら言ってみろ。解決はできんでも、聞いてもらうだけでも人は安らぐのだろう」

またも、出鼻を挫かれた。
一瞬の間を空けて、アリサは思ったことを述べてみる。

「あんたって……意外といい奴」

「くだらんことを言うなら聞いてやらんぞ」

顔を顰めるディアーチェを見て、アリサはくすりと小さく笑みを零した。

「わたしたちってさ、一年生からの付き合いだったんだ。友達になったきっかけは……まぁバカなわたしを止めてくれたことから始まったんだけど……」

長い廊下を、アリサとディアーチェが並んで歩く。
金の少女の言葉に銀の少女が静かに耳を傾ける。

「ずっと、そりゃ十年二十年したらいっしょにはいられないと思ってたけど、気軽に連絡とって、気軽に会って、手を伸ばせば届くくらいのつながりがずっと続くと思ってた。でも、ちがった」

アリサの声が沈む。ディアーチェは何も言わず、少女の次の言葉

を待つ。

「なのはが魔法に出会って、わたしたちの間にフェイトやはやてが加わって、それでその二人も魔法使いで、どこか遠くの存在になっちゃった気がしてさ。

知ってる？なのはって、『何かをしたいのに何をすればいいかわからない』、なんて理由で悩んでたのよ」

変わってるわよね、とアリサは笑う。

「でも、なのはは魔法に出会ってそれもなくなった。安心したと同時に、遠くに行っちゃった気がして、なんかさびしくなっちゃった」

表情に浮かんだ笑みが一転、沈む。

「それで、今度はすずかまで……。

わたし、置いていかれちゃったな……」

緑の瞳に、うっすらと涙が浮かぶ。

ぐしぐしと手でぬぐい、笑顔を繕う。

「ごめんね、愚痴っちゃって。少しすっきりした。ありがとう」

「――人間は、自身より優れた者を尊敬すると同時に畏怖を抱き、やがてそれは嫉妬と憎しみに変わる」

突如、ディアーチェが沈黙を破り、言った。

アリサの言葉を待たず、続けて言う。

「この世界に本来魔法は存在しない。にもかかわらずそれを行使す

る高町なのはや子烏、怜治はこの世界にとって異質なものだろう。
奴らのことを知ったら、この世界の人間のほとんどは奴らを脅威とみなすだろう」

ディアーチェの顔がアリサの方を向く。
翠と緑の瞳が交錯する。

「だがうぬは違う。魔法の事を知っても、高町なのはや子烏へ恐怖を持つことはなかった」

「そんなの、当り前よ。ふたりはわたしの友達なんだから」

「それでもだ。本来なら、そんな異質な者とは距離を取りたがるか、利用しようと近づくかのどちらかだ」

ディアーチェの口元が歪み、妖しい笑みが浮かぶ。

「高町なのは達だけが変わり者だから淋しいというのなら安心しろ、アリサ・バニングス。
うぬも、十分変わり者だ」

「――――――――あんたって、実はいいやつなんだね」

「……五月蠅い」

笑みが一変、しかめっ面のディアーチェが、こつん、とアリサの頭を小突いた。

自室のベッドの上で、すずかは考えていた。
扉の向こうには管理局の魔導師が護衛として立っており、すずかの外出は基本許されない。
身の安全のためとはいえ、幽閉されているようで気が沈む。
窓から見える夜空は張られた結界によって異質な色に染まっている。

「はぁ……」

なぜこんなことに、とすずかはため息をつく。
今頃は、友人たちとバレンタインにむけて楽しくチョコ作りに勤しんでいるはずだった。なのに、現実は違う。己が身は異世界の魔導師に狙われ、この街は戦場に変わろうとしている。
どうしてこんなことになったのか。すずかの胸の裡に、暗い感情が渦巻く。
眼を閉じ、闇に沈む意識を引き揚げるように、窓を叩く音が聞こえた。

「……？」

顔を上げる。窓へと顔を向けると、異質な色の夜空をバックに、怜治が立っていた。
すずかの顔に驚愕が張り付く。

「怜治さん……！」

窓に駈けより、解錠して窓を開ける。吹き込むよ風と共に、怜治が部屋へと飛び込んだ。

「おっす、元気……ってわけでもなさそうだな」

「あの、どうしてここに？」

すずかの問いに、あー、と怜治は悩むように頭を掻く。少しして、結論を出す。

「クロノに言われてな。かなりキツイ思いしてるだろうから元気づけてこいとさ。無茶言ってくれる」

苦い笑みを浮かべながら、怜治は続ける。

「こういうのは普通、なのはとかはやてあたりが適してると思うけど――――」

「そんなことないです！」

怜治の言葉をすずかが遮った。

微妙な静寂が生まれる。

しばしの間、視線が交錯するとすずかは恥ずかしそうに顔を伏せる。

「えっと……」

何かちょうどいい話題はないかとすずかは模索する。そして、もうすぐ来るあるイベントのことを思い出した。

決意を固め、顔を上げて口を開く。

「あの、怜治さんはチョコとか好きですか？」

「チョコ？まぁ甘いのは好きな方だけど……」

「じゃあ、この事件が終わって……その、バレンタインデーがきたら、わたしからのチョコを受け取ってもらえますか？」

「は……？」

怜治がぽかんと口を開けた。

その様子を見て、すずかは自分が何を口走っているのか気付いた。日本で言うバレンタインとは、早い話が女性から男性に向けての告白だ。第三者からみれば、すずかの言っていることは愛の告白にも聞こえるだろう。

急速に顔の熱が高まり、すずかの顔が真っ赤に染まる。

「～～～～～ッ」

火の噴いた顔を再び伏せる少女に、怜治は思わず笑みをこぼす。怜治は右手ですずかの頭をポンポンと軽く叩く。柔らかい髪の感触にくすりと笑いながら青年は言う。

「チョコ、楽しみにしてるからな」

弾けるようにすずかが顔を上げる。顔がさらに赤くなり、小さくコクコクと頷いた。

それが小動物の様で、可愛らしく思えて怜治はほほ笑む。

もう少し話をしたいところだが、クロノから通信が入った。端末から浮かぶウィンドウに少年の顔が映る。

『怜治、もうすぐ時間だ。配置についてくれ』

「はいよ」

通信が切れる。端末をしまい、入ってきた窓へ近づく。
窓の縁に手をかけて身を乗り出し、最後にもう一度、すずかへと顔を向ける。

「あんまり思いつめるなよ。このメンバーで出来ないことなんてありゃしない。
お前を、あいつらに渡すような事はしねぇよ」

縁を蹴り、星へと向かうように青年は窓から飛び立った。

時刻は夜十時。
月村邸の門をくぐる者の魔力を結界が感知し、クロノを通して全局員に通達される。
テントから出て、クロノは交渉の場へと向かう。
中庭に置かれた丸いテーブルと、対立するように二つのいすが置かれていた。
クロノがイスの後ろに立つと同時、ギャレットとその部下に挟まれてマスタングがやって来た。
昼間に会った時と同様、灰色の背広に紺色のネクタイに飴色の革靴を履き、黒縁眼鏡をかけている。
手には紙包みを持っているが、ギャレットが容認しているということは危険物ではないだろうとクロノは判断した。
マスタングがテーブルの向かい側に立つと、ギャレットともう一人が下がる。同時に外部からの侵入を遮断する結界が起動し、屋敷を覆う。これで、他の騎士団は中に入ることはできない。

中庭にいるのが二人だけになると、マスタングがまた嘘臭い笑顔を浮かべて紙包みを差し出す。

「この度は、我々の提案に同意してくれてありがとうございます。つまらないものですがこれを……」

「結構だ。そういうものは受け取らないことにしている」

「そうですか。まぁ、賄賂と受け取られると面倒なのはこちらもですし、素直に下げておきましょう」

紙包みを地面に置き、マスタングが席に着く。クロノも椅子に腰を下ろす。

「では、早速話を始めましょうか。
二度目になりますが、灰被り（サンドリオン）の騎士団首席（シュバリエス）、テルスター・マスタングです」

「時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ」

ただの自己紹介のはずが、言葉を紡ぐ度に空気が緊迫していく。
マスタングがちらちらと周囲を見渡して言う。

「どうやら、傍聴人があちらこちらにいるようですね」

「――――――――」

ぞくり、とクロノの背筋を冷たいものが走る。
マスタングの言うとおり、この場には二人のほかに、迷彩結界で姿を自然に溶け込ませた魔導師が何人もいる。荒事になった時に即

座に対応できるようにとの配置だったが、見破られては意味がない。

「まぁ、一度に多くの方に聴いていただけるというのなら構いません。
話を始めましょう」

が、気付いておきながらマスタングは気分を害した素振りもせずに続ける。

「初めに、我ら騎士団の目的はご存知ですか？」

「古代の魔法文明の研究、だろ？」

「その通りです。
付け加えるなら、古代の魔法を現代に蘇らせ魔法技術の更なる発展が目的です」

「プラウディア・エメロード・ギャランの復活もそのために？」

マスタングが頷く。

「陛下が御存命だった時代、次元世界エメロードの魔法技術は最先端でした。
それこそ、アルハザードに匹敵すると言われたほどに」

迷彩結界で姿を消したフェイトが肩を揺らして反応した。
フェイトの母が求めた魔法の秘術が眠る理想郷。その存在はおとぎ話の中だけだと言われているが、プレシアほどの魔導師がただの夢物語を信じるわけがない。彼女には何らかの確証があったのだとフェイトは思っている。

対して、クロノの顔には訝しそうな表情が浮かぶ。

「あんなおとぎ話を、君たちも信じているのか」

「そういう貴方は信じておられないと……」

残念です、とマスタングは顔を伏せる。

クロノは話を切り出す。

「そんなことよりも、灰被りの騎士団（サンドリオン シュバリエス）の目的、つまりはプラウディア・ギャランの復活は管理局にも益があると言っていたが？」

「ああ……。では、それについて説明いたしましょう」

マスタングが顔を上げ、笑みが引き締められ真剣な表情へと変わる。

「すでにそちらもご存じかも知れませんが、陛下が使い、知識として修めておられる魔法は現在では失われてしまったものが多くあります。

陛下が復活し、それを再び蘇らせることができれば管理局にとっても得なはず」

「具体的にどんなものがあるというんだ？古代の魔法が蘇ったところで、それが全て世のためになるとは限らない」

「そうですね……例えば」

マスタングが目を閉じて思案。結論が出たのか、瞳を開いて告げる。

「ロストマギ、でしょうか」

「――――――――――なっ！？」

弾けるようにクロノが立ち上がる。

少年の顔には驚きの困惑、そしてすぐに怒りに変わる。

「遺失魔法（ロストマギ）の復活……本気か？」

クロノの静かな声には、確かに憤怒の感情が含まれていた。

姿を隠し、物陰からみていたはやては何を怒っているのか分からず、隣にいたリインフォースに訊ねる。

「（なぁ、『ろすとまぎ』って何なん？）」

「（まず、かつて滅んだ高度な文明から流出した技術や魔法をロストロギアと称しますね）」

「（うん）」

「（一方で、ロストマギは管理局が危険だと判断し、時代から消えていった魔法を指します）」

リインフォースの質問に、はやてが首を傾げる。

「（？それじゃ、ロストロギアとロストマギは同じってこと？）」

「（世界から消えた理由で区別できます。

技術や魔法がロストロギアと言われる理由は自然災害や事故によっ

て流出したものです。
ですが、ロストマギと呼ばれる魔法は全て危険で、次元世界の平和を乱す術として管理局がその魔法の修得と使用、閲覧すらも禁止した、いわば人の手で歴史の闇に葬られた魔法を指します）」

「（……なんや物騒なもんがあるんやな）」

「（はい。そして灰被りの騎士団はそれを復活させようとしているということです）」

はやての顔が真剣みを帯びる。
二人の視線が、中庭に置かれたテーブルに向けられた。

クロノの顔が怒りに歪んでいる。
真一文字に結ばれた口から呪詛の様に言葉が出る。

「正気か？考古学の教授がロストマギの恐ろしさを知らないわけではないだろう。
あれはまさに悪魔の術だ。人が持ち、使うことを許されない禁断の魔法だぞ」

マスタングの目が細くなる。冷たい視線が鋭く、興奮の色が増す。
それでも、口元には未だ笑みがある。

「まるで、見てことがあるかのような物言いですね、執務官殿」

「見たことなんてないさ。でも、話だけで何度も聞いた。
光すら飲み込む真空の闇を生み、時には太陽すら創り、逆に太陽すら滅ぼす超天体魔法。時を操り、空間をも超える亜空間魔法。数千の命を生贄に魔獣を生み出す大召喚魔法。どれもこれも、人が扱

い切れる代物ではない」

「そうです！」

マスタングの両目が大きく開かれ背広の男が立ち上がる。
イスが倒れ、派手な音を立てる。
両腕を大きく広げ、天を仰ぎ、マスタングの声が轟く。

「そう。現代魔法学の理解を超えた魔法技術。それこそがロストマギ。現代の魔法文明に革命をもたらす劇薬なのです！
そして、灰被りの騎士団の団員は皆そんな劇薬でしか叶（なおる）うことのない大望という名の病にかかっている！その病を治すため、我らの願いを叶えるために、陛下が、〈緋色の夜の女王〉が必要なのです！！」

クロノが一歩下がる。
マスタングの瞳にあるのは狂喜の笑み。
男の無個性な印象は消え去り、ただ欲望を謳う狂人の姿がそこにいた。
裡に湧いた怖れを押し殺し、クロノはマスタングに告げる。

「本性が……本音が出たな。おまえたちがやろうとしていることは、ただの好奇心からの暴走に過ぎない。
管理局は見過ごせない……！」

広げられた両腕が下がる。マスタングの瞳から狂喜が消え、冷たい感情が双眸を満たす。

「交渉決裂……ですか」

マスタングの右腕が突き出される。親指と中指がくっつき、弾けて音を立てた。
その瞬間、屋敷を覆う結界が消え去った。

「――――なっ!?バカな、結界が破られただと!?」

空を見上げ、悲鳴のような声を上げるクロノ。
それが開戦の合図となった。
周囲に潜んでいた魔導師たちが迷彩結界を破棄して突撃する。
金の魔杖、黒い戦斧、剣十字に炎の魔剣、赤い鉄槌、黒と白の双翼がマスタングに襲いかかる。
砲撃魔法を紡いでいたディアーチェが空から降って来る物を感知した。両目に魔力を叩き込み視力を強化。天空からの襲撃者を捕捉し、声を上げる。

「――――――――――っ!
うぬら止まれぇ!!」

ディアーチェの叫びに全員が急停止。同時に襲撃者が着地した。
轟音と振動が大地を揺する。
巻き上げられる土砂と土煙の波濤が視界を奪い、マスタングを隠す。
怜治の目の前から土煙を引き裂き、ゴツゴツとした太い腕が伸びる。咄嗟に後ろに跳んで躱す。

「くっそ……!あの腕、またかよ……!」

剛腕が振りまわされ、砂塵のカーテンを一掃。その全貌を露わにした。
岩壁の様に荒々しく隆起した岩石の巨躯。つい二十時間ほど前に

出遭った、ゴーレムだ。
数は五体。それぞれがこの巨体を揺らし駆けだす。
腕を大きく広げて魔導師たちを捕えようと中庭を駆け回る。

「ちっ……！」

ディアーチェが紡ぎ上がった砲撃魔法を放つ。
銀の閃光がゴーレムを一体貫き粉砕した。近くにいたヴィータの悲鳴が響く。
次の標的に標準を合わそうとするが、太い腕に体全体を包む様に掴まれた。

「ぐぅ……、この無礼者がっ！」

ディアーチェを皮切りに、フェイトが、なのはが、はやてが、リインフォース、シグナムが、捕えられていく。

「なのは！」

「フェイト！くそ、離せぇえ……！！」

アルフが咆える。咆哮と共に放たれた拳はゴーレムの頑強な体の前には歯が立たない。
像の様な脚がアルフを蹴り飛ばす。
ゴーレムの胸が膨らむ。魔法陣の光が胸に明滅する。
クロノが声を荒げる。

「術式が組み込まれている……！？まずい、魔法が発動する！」

「なぁっ！？」

「誰か、奴らを止めろ！」

怜治の顔に驚愕。大剣を掲げ、ゴーレムへと突撃する。

跳躍し、渾身の斬撃を叩き込もうとした瞬間に刻まれた魔法陣が輝いた。

強い光に、まるで昼間かと疑うほどに周囲を照らす。光が治まると、ゴーレムと共に怜治達の姿が消えていた。

中庭はゴーレムの着地による塹壕の様な大穴が掘られていた。

クロノがマスタングを睨む。

「おまえ、フェイト達になにをした！」

鋭い執務官の眼光にも、男は揺るがない。

冷笑を浮かべて、マスタングが言う。

「何を、と言われましてもね。戦闘において、敵戦力の分散は戦術の初歩でしょう」

「戦力の分散……ということは、さっきの術式は転移魔法か！」

「ええ、ですが御安心を。彼らはこの街から出てはいません。今ごろ、この街の各所に待機している灰被り（サンドリオン）の騎士団（シュバリエス）の団員が相手をしているでしょう。

そして……」

言葉が途切れる。そして、足元にミッド式魔法陣が展開。

藍色の光に包まれて、無数の骸骨の姿をしたゴーレムたちが出現した。

「貴方がたの相手は、彼らにお任せしましょう。その間に……」

マスタングが屋敷に体を向ける。その冷たい双眸は、外壁の向こうにいるすずかを見ていた。歩き出す。

クロノが追おうとするが、石兵がそれを阻む。

砲撃を放ち、薙ぎ払うが膨大な数のゴーレムを前には焼け石に水でしかない。

どうする。どう動く。クロノの中で渦巻く惑いを打ち払うように声が飛ぶ。

「何してんだ！ここはおれらに任せて行けよ！」

声が響くと同時、クロノを囲んだゴーレムが粉砕された。

クロノを守るように立つのは三人の青年。

「鉄平、正義、恭也さん！」

名を呼ばれた三人は振り返らずにゴーレムの大群へと突き進む。

鉄平と正義が持つのは武装隊に支給される杖型のストレージデバイス。恭也は二刀の刀を握っていた。

各々、手にした獲物でゴーレムを殴り飛ばす。

剣術を修めているという恭也はともかく、鉄平たちが魔力弾を撃つのではなく殴り付けるあたりまだ素人の域を出ないのは分かる。

それでも、その僅かな助力でも嬉しかった。

周りを見れば、他の局員たちもクロノのために活路を開こうとゴーレムへと挑みかかっていく。

やがて石兵の波は割れ、背広の男への道が拓かれた。

クロノは周りを見渡す。

直接目を合わせずとも、その背中が、早く行けと語っていた。

「――――――――――みんな、ここは任せた！」

「「「了解！！」」」

力強い返答を追い風に、少年は走りだした。

ゴーレムと魔導師たちの乱戦の中、その隙間を縫うように疾走する銀影が一つ。

赤い槍を手にした一陣の風が屋敷へと突入しようと飛ぶ。

それを、鉄槌が壁となって阻む。

銀影が急停止。その甲冑姿を露わにすると同時に声が飛ぶ。

「よう、また会ったな」

槍の騎士が体を向ける。栗色の髪が揺れる。

声のした方、視線の先に立つのは真紅の騎士服を纏った少女――

――ヴィータだ。

ヴィータは地面に刺さった己が鉄槌を引き抜き、肩に担ぎ、名乗りを上げる。

「ヴォルケンリッター、“紅の鉄騎”。鉄槌の騎士ヴィータ。

我が主の友を守るため、鉄の伯爵グラーフアイゼンと共に汝を討つ！」

乱戦の最中、少女の声ははっきりと届いた。

槍の騎士も名乗りを上げる。

「灰被りの騎士団次席（サンドリオン シュバリエス）、“銀の鬼将”。槍の騎士インシグニア・モヴァノ。

邪魔するというのなら、我が大望のため、女王陛下復活のために、破魔の赤槍ガジャルグを以てそなたを屠ろう」

両者の足元にベルカ式魔法陣が浮かぶ。

赤と白の魔力光が闇を照らす。魔力と共に、闘志と殺気が噴き出る。

「――――いざ」

「尋常に――――」

「「勝負！！」」

ベルカの騎士たちが大地を蹴り、真っすぐに激突した。

眩い光に包まれ、体が浮遊感に包まれた後に地面に叩きつけられ、フェイトは小さな悲鳴を上げた。

彼女をここまでつれてきた石の巨人は砂塵に還り、残されたのはフェイトと決して離さなかったバルディッシュだけ。

「いったい何が……」

『Ｓｉｒ』

珍しく、バルディッシュが声を上げた。

その短い言葉の意味を、長くともに戦ってきたフェイトは容易く汲み取る。

立ち上がり、周りを見渡すと、そこは自分がよく知っている場所だと判った。

「ここ、学校？」

もう一度しっかりと見渡すが間違いない。

広い校庭、植えられた木々や大きな校舎。間違いない。フェイトはもちろん、彼女の友人たちが通う聖祥大付属小学校だ。

夜に見る学校はいつもと印象は違うが、毎日来ている学校の外観を忘れるわけがない。

「すずかの家からここまで……？他のみんなは……。なのはー！はやてー！」

フェイトの声が冷たい空気を伝って響く。

しばしの静寂の後、聞き慣れた声が帰って来た。

「フェイトちゃーん！」

「はやて！」

夜の闇から浮かび上がった茶髪の少女へと駆け寄るフェイト。

近づくにつれてその全身が見えてきた。どうやら怪我はないようでほっと胸を撫で下ろす。

だが、その安心はすぐに打ち砕かれた。

自分たち以外の魔力をフェイトは感じた。知り合いのものではない。ということは敵、灰被りの騎士団（サンドリオン シュバリエス）の魔導師がいる。

思考を戦闘モードに切り替えて周囲を見渡す。

見つけた。はやてと同時に視線を昇降口へと向ける。

「お前達か、私の相手は……」

淡い緑髪の男が座っていた。

男が立ち上がり、その姿にフェイトは思わずたじろいだ。

男との距離は百メートル弱。だというのに、男の体が異様に大きく感じる。

男が跳ぶ。百メートルの距離を一瞬で七十メートル近く縮め、少女の前に着地した。

大地が揺れる。男が曲げた身体を起こした時、フェイトは男の全長を確認できた。

赤銅色の肌に、逞しく隆起した肉体を持つ偉丈夫。その身長は約二・五メートル。丸太の様な腕の右手首に腕輪をつけ、纏う白い衣服には黒バラの刺繍があった。

巨体からの重圧に、フェイトもはやても臨戦態勢へと移行する。

戦斧に魔力を込めながらフェイトは己が所属を告げる。

「時空管理局嘱託、フェイト・テスタロッサ。この子はバルディッシュ」

「同じく、八神はやて」

少女たちの名乗りに、偉丈夫が右腕を掲げる。腕輪が光り、その真の姿を現した。

巨人の手に納まったのは楔型の穂先を持つ巨大な突撃槍。銀色の穂先は竜の頭にも見えた。

偉丈夫が言う。

「灰被りの騎士団三席、“剛強無双”。クンタッシ・ランボルギーニ。

我が剛槍ファイティング・ブルの餌食となる覚悟はあるか」

『ＵＲＲＲＲＲ……』

巨槍が唸り、上段に掲げられる。
戦斧から金の刃が伸び、はやての背に黒翼が広がった。

シグナムとリインフォースは海鳴の中心街にいた。
三か月前に暴走した闇の書の意志を止めるために少女たちが戦った場所だ。
両脇をビルに囲まれた広い道路の真ん中で、シグナムは既に柄に手をかけていた。
それは、彼女たちの目の前にいる男に対する敵意からだった。
真紅の布で顔は窺えないが、隙間から覗く金の瞳は眼前の二人の美女を舐め回すように見ており、嫌悪を抱くには十分すぎた。
くぐもった笑みを零しながら男が言う。

「テルスターの野郎、オレに女を相手させるとは分かってるじゃねぇか。
なぁネーちゃんたち、名前は？」

苦い表情を浮かべながら、騎士たちが口を開く。

「ヴォルケンリッター、“烈火の将”。剣の騎士シグナム」

「同じく、“祝福の風”。リインフォース」

それ以上は言わない。貴様と会話する気はないという拒絶の意志

だった。
男がため息を漏らす。
「愛想がねぇのは残念だが、まぁいいさ。
オレは灰被りの騎士団四席、“月落とし”。トゥアレグ・パサートだ。
今だけは余計な事を考えず、オレと遊ぼうぜ、ネーちゃんたち」
トゥアレグから魔力が噴出。
炎の魔剣が抜かれ、リインフォースの手に魔力が凝縮する。

桜台登山道。二十時間前に怜治によって穿たれた戦いの爪痕は管理局によって綺麗に修繕されていた。
冷たい風を受けながら、なのはは目の前の男へと言葉をかける。
「あの……わたし、高町なのはです。この子はレイジングハート」
『Ｎｉｃｅ　ｔｏ　ｍｅｅｔ　ｙｏｕ』
「……」
男は無言で腰から下げた連珠のアクセサリーを取り出す。その表情は枯れた色の中折れ帽によって見えない。
連珠が光り、大小ばらばらの四つの球が男の周りを浮遊する。
球の大きさはテニスボール大から運動会で使われそうな大玉まで。
ダークブラウンの光を発しながら空中を泳ぐ。

「あの……」

「キャブスター」

「え？」

なのはが聞き返すと、男は改めて名乗る。

「灰被りの騎士団五席、“魔銃士”。パオ・キャブスター。浮いてるこいつらは小さいやつからエウロパ、イオ、カリスト、ガニメデ。悪いがこちらは時間が惜しくてね。早々に始めよう」

「ま、待って下さい！どうしてあなたたちはこんなことするんですか！？」

「……そんなこと聞いてどうする？」

冷たい言葉に、なのはは怯まない。こんな反応はもう慣れっこだった。

そして、みんな実は大切な者のために戦おうとしていた。フェイトの時も、はやての時も。

戦うしかないと勝手に決め付けて、自分から辛い方へと進もうとする。

灰被りの騎士団もそうなのではと、なのはは思っていた。

「力になれるかもしれないから、です」

「……」

キャブスターが目を閉じて、また開く。再び現れた瞳には、もはや戦う意思しかなかった。

「優しい子だ。もしもその言葉が本当だというのなら……」

四つの球の動きが加速する。風に乗って、キャブスターの鋭い魔力がなのはを叩く。

「月村すずかを渡してもらおう」

球が奔る。

なのはは杖を構え、迎え撃つ。

ほんとうに、どうしてみんなこうも頑固なんだと思いながら。

海からの風が、臨海公園へと吹き込む。

べた付く風にディアーチェが顔を顰める。彼女の前で、街とは違う風の匂いを吸い込みながら、怜治は目の前の男へと声をかける。

「またお前ってことは、リベンジと受け取っていいのか？」

「構わん。今度こそ勝つ」

深緑のコートを着た男が力強く言う。

懐から短剣を四本取り出し、宙へと放る。

「灰被りの騎士団六席、“四元の翁”。ノマド・エルカミーノ。

我が誇りに賭けて、貴様を倒す」

宙を舞った短剣の一本が地面に突き刺さる。一本は地中へ潜り、一本は海へと飛び込み、最後の一本は糸でつるされたように中空で停止した。

短剣から魔力が放出し、剣を核に外殻を形成していく。

岩石が大亀となり地を揺らし、疾風が猛虎となり剣歯をのぞかせ、海水が竜となり蛇の如く這い、炎の鳥が大地を貫き飛翔した。

「……ほう」

エルカミーノを守護するかのように並ぶ異形の獣に、ディアーチェが感嘆の声を上げた。

「岩石だけでなく、液体である水や不定形のはずの風や火ですらゴーレムとするか。

油断するなよ怜治。どうやらそやつ、先日は手を抜いていたらしい」

エルカミーノが得意げな笑みを浮かべる。

「私から言わせれば、岩や土でしかゴーレムを造れん者は三流だ。この世にあるあらゆる物質で創れてこそ一流」

「上等。だったらその一流の技とやら、拝見させてもらうぜ！」

大剣を掲げ、怜治が大地を蹴る。

四獣が咆え、主の敵へと牙をむいた。

「止まれ、テルスター・マスタング」

背中に届いた声に、マスタングが足を止める。振り返ると、さっきまで話をしていた少年がたっていた。

黒い魔杖を携え、その瞳には闘志が灯っていた。

少年の後方ではエルカミーノが量産した自律機動のゴーレムが管理局と乱戦を繰り広げていた。クロノの顔にそちらを気にする意志は見えない。

部下への信頼か、任務優先か。どちらでもよいが、ここで邪魔されるのは不本意だった。

「ファルコン」

「はっ」

名を呼ばれると同時に、緑の翼を広げてマスタングの使い魔が前に立つ。

「彼の足止めを。私は陛下の器を取りに行きます」

「御意」

ファルコンが一歩前に出る。マスタングは再び屋敷の入口へと体を向ける。

重厚な扉へと触れた瞬間、手が弾かれた。

「……これは、結界ですか」

「そうです。その先へは、僕が認めた人しか通れません」

若い声。まだ声変わり前の高い少年の声に、マスタングが視線を動かす。

淡い栗色の髪に緑色の瞳――――ユーノ・スクライアだ。その後ろにはクロノが控えている。

マスタングが眉根を寄せる。

「ファルコン、何をして……」

「悪いが、お前の使い魔は我ら相手している」

マスタングの言葉を遮り、太い男の声が響いた。同時に右側で鈍い音。視線を下げると、ファルコンが吹っ飛ばされうつぶせになっていた。

視線を上げ、その犯人を探す。すぐに判った。銀髪の男と、オレンジ髪の女性。両者獣の耳と尾を有しており、使い魔だとすぐに判った。

「主、申し訳ありません。いますぐ追い返します」

「構いません。貴方は使い魔の相手を。
そこの少年たちの相手は……」

マスタングが懐に右手を入れ、腰に左手を回す。出てきた手に握られていたのは酷く歪曲した刃の短剣と赤い革表紙の本。

本が開く。パラパラとページがめくり、勝手に紙が離れて宙を舞う。

折り紙の様に紙が変形し、鳥の形を成して滞空する。

見たことのない魔法に、クロノが声を上げる。

「なんだ、その魔法は……！？」

「おや、そちらが言ったんですよ。我ら騎士団の目的は古代の魔法の研究と再現。この本は、先人たちが残した研究成果の一つです」

ファルコンが飛び、ザフィーラ、アルフと戦闘を開始した。

マスタングが名乗りを上げる。

「灰被りの騎士団首席、“怪鳥”。テルスター・マスタングとその使い魔ファルコン。

貴方達を殺す者の名ですから、覚えておいてください」

冷たい笑みを浮かべて男は哂う。

海鳴を舞台に、再び魔導師たちの戦いが始まる。

火花を散らす者たちを、黄金の月が静かに見下ろしていた。

第４５話　海鳴戦線（後書き）

次回から戦闘だらけ。
さて、どいつから片付けていこうか……。

ん？すずかの身以上に海鳴自体が崩壊の危機じゃね？

第４６話　創る者と壊す者

予想していたとはいえ、突然起こった戦いにエイミィが声を上げる。

「そんな……屋敷を覆う結界が破られて、代わりに海鳴全体に結界が！？」

「主任、消えたフェイトちゃんたちの反応が海鳴市内に！」

「場所は！？」

ランディがコンソールを叩く。海鳴の街の地図がモニタに映り、五か所が点滅していた。ランディが位置を読み上げる。

「聖祥大付属小学校、中心街、桜台登山道、臨海公園、そしてこの月村邸です！」

エイミィは臍をかむ思いだ。

敵勢力は七人、こちらは三十人近くいて乱戦になれば十分に勝てると踏んでいたが、それが外れた。

主戦力であるなのはたちを遠くに飛ばされた。加えて、こちらはゴーレムとの乱戦状態で援護も捜索もできない。治療系のシャマルが残ってくれたのが幸いか。

敵の力は未知数。その上で、ほぼ一対一の状態で彼らは勝てるだろうか。

「みんな、頑張って……！」

エイミィはただ祈る。
そして、この場における自身の無力さに唇を噛みしめた。

魔法少女リリカルなのは　☆Ｔｈｅ　Ｒｉｄｅｒ☆　ＡＸＥＬ　第６話　創る者と壊す者

風虎が咆える。吹き荒れる爪が空を奔り、アスファルトを切り裂きながら怜治を襲う。
跳んで回避したところで水竜が鎌首をもたげて鞭の如く振り下ろす。大剣で胴を薙ぐが、別れた胴体はすぐさまくっつき元に戻る。液体を切り裂くことなどできない。とっさに横に転がるように飛んで回避。怜治が立っていた場所が陥没し、飛沫が顔にかかる。
倒れた怜治へ火炎鳥が襲いかかる。火の粉が舞い、熱が顔についた水滴を蒸発させる。
燃える猛禽の爪と大剣が激突。衝撃と熱波を撒き散らす。
火炎鳥を押し返すと同時に寒気。本能に従い一歩下がる。腹部を土塊の破砕球が掠めていった。
破れたバリアジャケットを魔力で補修し、後方に飛んで一気に下がる。
土、水、火、風の四獣がその場で怜治を睨みつけていた。
思わず怜治が呟く。

「……ったく、さすがに四対一はキツイな」

正確にはこちらも一人と言うわけではない。わずかな期待を込めて背後へ視線を送る。

臨海公園に置かれたベンチに座り、足を組む自称王様は我関せず。いや、一観客を決め込んでいた。援護は望めない。

スタンを大剣形態から騎士形態（ナイトフォーム）へと切り替える。盾を腕に固定し、フラガラッハを抜く。黒と白の双翼が胸の前で交差させる。

セカンドコンタクト開始。

滑空して迫る火炎鳥を飛んで躱し、フラガラッハの刀身を伸ばす。伸長する切っ先で核となる短剣を狙う。

火炎鳥が身を捩って回避。刃は片翼を貫きアスファルトを穿つ。翼を失った火炎鳥が無様に大地を転げ回る。

虚空を蹴って追撃する怜治に風虎が襲いかかる。気流の剣牙が左腕に突き刺さり、血風が舞う。

苦痛に顔をゆがめながら、怜治は黒い片手剣を突き出す。上半身をねじり、刃に風が絡みつく。

「龍の剣角ッ！！」

風虎の額に刃が突き刺さる。絡みついた風が解き放たれ、猛虎を内側から粉砕した。

翼を再生させた火炎鳥が垂直飛翔。熱風が怜治を包む。ジャケットの裾が炎上、すぐさま斬り捨てた。

天空から火炎鳥が、下から水竜が襲いかかる。逃げ場は一つ。虚空を蹴って怜治は前方に回避。

火と水が激突。水蒸気が弾ける様を尻目に怜治は土亀に突撃する。液体である水竜や、はっきりとした形をもたない火炎鳥や風虎はすぐには倒せない。それよりも土でできた土亀の撃破を優先した。

双剣を振り上げその岩壁の甲羅を砕こうとした時、エルカミーノが甲羅の上に躍り出た。

「私を忘れるなよ」

実戦用短剣が怜治の斬撃を受け止める。

動きが止まったところへ土塊の破砕球が怜治を殴り飛ばした。怜治の体が宙を舞い、アスファルトに叩きつけられた。

土亀の前足が上がる。激痛を押し殺して転がる様に回避。

鉄槌の足が下ろされ、アスファルトが陥没する。

怜治はフラガラッハの刃を土亀の胴体に叩きつける。無理な体勢からの斬撃では意味がなかった。

水竜が突撃。激流に体が押し流され、大木に叩きつけられた。

「――――が、はぁ……っ」

連続する激痛に体が熱く、視界が明滅する。口の中が鉄臭く、粘っこい物が舌に絡む。吐き捨てると、赤黒い血が地面を汚した。

木に寄りかかる様に立ち上がる。顔を上げると、再生した風虎がその爪牙を向けていた。

咄嗟に横に飛ぶ。大木が粉砕され、木くずが頭に降り積もる。

『レイジッ！！』

「判ってる！」

大地を蹴って飛翔する。四獣のうち、空を自由に飛べるのは火炎鳥ただ一体。空で一旦体勢を立て直す。

だが――――

「だから、私を忘れるなと言っている！」

エルカミーノが追ってきた。その手には彼の身の丈を超える土塊

の巨鎚。
防御が、間に合わない。
超重量級の一撃が怜治を直撃。流星の如く、奈落の底へと叩き落とした。
空気を震わす轟音の後、アスファルトと土砂が瀑布となって巻き上がる。
標的の撃墜を確認し、エルカミーノが地上に降りる。
手放した巨鎚が形を変え、あの土亀へと戻った。

「一度作ったゴーレムの形を変えられないなど二流の腕、その姿を悉く変えてこそ真の一流。
刮目せよ、これがゴーレム創成者（クリエイター）、”四元の翁”、ノマド・エルカミーノの真骨頂だ」

敗者を見下ろし、エルカミーノの言葉が響く。
翁の双眸がディアーチェを捉える。

「次は、おまえが来るか？」

「……」

ディアーチェが静かに立ち上がる。
今まで戦いを傍観していた少女が、静かな足取りで大地に空いた大穴に近づく。
穴の底に横たわる青年を、ディアーチェは冷たい視線で見下ろした。
黒翼を広げ、穴へと飛び込む。砂塵を立てることなく着地し、倒れた青年の頭を軽く蹴った。

「怜治、うぬは弱い」

青年の指が僅かに動く。ディアーチェは続ける。

「魔導師となり、いくつかの事件に関わって強くなったつもりでいるのだろうが、それは間違いだ。

思い出せ。ギル・グレアムに殺されそうになった時助けてやったのは誰だ？雷刃のを代わりに討ってやったのは誰だ？――――――この我だ」

冷たい言葉をディアーチェが投げる。

「……だというのに、うぬは己が器も弁えずに多くのモノを掴もうとする。うぬが手に握る鉄屑、我、鉄心の。うぬは強欲で、傲慢で、なかなか面白い男だ」

少女の頭上に影が落ちる。

月を背に、エルカミーノが空にいた。土亀を再度変形させた、土塊の巨棍が手に握っていた。

「いいだろう。その男もろとも、肉片となれ！！」

巨棍が投擲される。超質量が大気を引き裂き天を滑る様はまさに天から降る一筋の流星の如く。

迫りくる死を前にしても、ディアーチェは全く動じない。静かに青年に背を向け、声をかけた。

「だが、あの程度の雑魚にやられるようなつまらん男に成り下がるようならもうよい。

早々に死んで、闇の書真の復活に役立て」

流星が着弾。轟音が大気を震わせ、更なる土砂とコンクリの破片が巻き上がる。
大地を揺るがす衝撃と吹き荒れる爆風に海が荒れ、森が騒ぐ。撒き散らされる魔力が淡い光の粒子となって夜天を舞う。

「……」

土砂の瀑布が落ちる。
エルカミーノによってもたらされた岩の爆撃は、臨海公園を半壊させた。
だというのに、四元の翁の顔には困惑があった。
回避出来る筈がなかった。防御の隙は与えなかった。直撃したら、即座に相手は肉片に変わるはずだ。
なのに、なぜ松田怜治の魔力反応が消えていないのか。
土の霧が晴れる。
穿たれた巨大な穴の最下に、今さっき投擲した土の巨棍が突き刺さっていた。

「莫迦な……」

否、それは止められていた。
黒と白の双剣が噛みつき、巨棍の進撃を止めていた。
双剣を握る手の先には、黒髪黒眼の青年。

「あの一撃を、真っ向から受け止めたというのか！？！？」

耳朶を叩く驚愕の叫びを、松田怜治は確かに聞いた。

全身を蠢く激痛に、意識が飛びそうになる。だが、手放した意識

が激痛によってまた戻される。
理不尽な責め苦を噛みしめ、怜治は双剣を握る手に力を込める。

「――――あ……」

足を上げ、一歩前へ。
双剣が岩塊に食い込み、腕の骨が悲鳴を上げる。

「――――――――っらあああああああああああああああ！！！！！」

それでも、一歩前へ。
双剣が走り、巨岩を三枚に斬り下ろした。核の短剣を斬り砕き、その行動を停止させる。
肩を上下させ、息を整えながら体の状態を確認する。
骨・内臓に異常なし。痛みは未だ鋭く体を奔るが耐える。スタン・フラガラッハ両機に異常無し。戦闘続行は十分可能。デバイスより先に、己が身を心配せよ。
呼吸が落ち着いてくる。最後に一息、大きく深呼吸した。

「……ったく、我ながらてめぇの頑丈さにびっくりする」

『バリジャケの性能に感謝しとけ』

「判ってるよ……！」

高く跳んで穴から脱出する。
着地の瞬間を狙って風虎が突撃してきた。
怜治はフラガラッハを一閃。猛虎の体を両断。露わになった短剣へスタンを振り下ろすが火炎鳥が横から掻っ攫った。

火炎鳥が空高く飛翔。散開した風が再び集束し風虎が再生された。

「――――――――ッ！」

怜治が驚愕に目を見開く。

火炎鳥の爪は風虎の背中に突き刺さっており、そこから二体のゴーレムが融合を始めたのだ。

風虎を構成する空気が火炎鳥の炎をさらに肥大化させ、紅蓮の暴風が吹き荒れる。

上半身は風の剣牙が連なった猛虎の貌、背には大火の翼。下半身は燃え盛る紅蓮の竜巻。

異形の魔獣、炎翼天虎（マンティコア）が天に轟かす産声を上げた。

獣の双眸が怜治を捉えた。

爪が虚空を蹴って炎翼天虎が駆ける。紅蓮の竜巻が加速装置となってその速度をはね上げる。

前足が虚空を叩く度に火の粉が舞い、赤い足跡を空に刻みつける。

「……」

「――――助言を一つくれてやろう」

双剣を構えた怜治の眉根が動く。炎翼天虎を凝視しながら、わずかに意識をディアーチェに向けた。

「大海に一杯の水を入れたところで何も変わらん。質が多少異なろうとも、所詮はおなじ水。矮小なものは大きなものに飲み込まれるのみだ」

「……何が言いたい」

冷たい翠緑の瞳が怜治を刺す。

「思い出せ。うぬの変換資質は何だ。その鉄屑に搭載された機能は何だ。それが解れば自然と答えは見えよう」

「俺と、スタンの変換……」

数瞬の後、思案に落ちた。

フラガラッハを待機状態に戻し、片手剣となっているスタンを上段後方に構えて刺突の体勢。

怜治はスタンに魔力を注ぐ。スタンの変換機構を通し、魔力が炎熱、そして蒼い炎となって刃に宿る。　続いて怜治自身の風の変換資質が発動。蒼炎に重ねるように風が宿り、蒼炎の烈風が剣を中心に吹き荒れる。

「――――――――行くぞ」

答えるように、炎翼天虎（マンティコア）が吼えた。

地上を焼き払うように紅蓮の魔獣が直下する。

天上に挑むかのように魔導騎兵が対峙する。

地を砕く爪牙が振り下ろされ、天を裂く烈剣が突き出された。

爆音と熱風が弾けた。衝撃が不可視の波濤となってアスファルトの大地を蹂躙する。

紅蓮と蒼炎、二色の炎風が真っ向からしのぎを削る。

ディアーチェは言った。

質は違えと同じ水なら、より大きい物が小さなものを呑み込むと。

それは、炎と風でも同じこと。相手が炎と風で形成された魔獣なら、こちらはそれ以上の炎と風を以て凌駕する。

剣に宿った蒼炎が膨らみ、蛇が獲物を丸のみにするかのように炎翼天虎を包み込んだ。

魔獣の口から苦痛の悲鳴が上がる。獲物が捕食者に食われる際の断末魔だ。

紅蓮の竜巻を、蒼炎の嵐が呑み、さらなる暴風へと昇華する。

その身を形成する炎と風を奪われ、ゴーレムの体が消滅し、核となる短剣が暴風に切り刻まれ砕け散った。

「食らいやがれぇえええええええええっ！！！！」

その手に掴んだ燃え盛る嵐を、怜治は容赦なくエルカミーノに向ける。

烈火と烈風がアスファルトを砕き、木々を焦がし、切り刻みながらエルカミーノへと牙をむく。

「ちっ――――――――――！」

エルカミーノの腕が動く。その手に水竜を素早く手繰り寄せ、その形を変えていく。

竜の体が伸び、極長の棒へと変わる。

次の瞬間、青い軌跡が一閃。炎嵐を両断した。

怜治の顔に驚愕。嵐を切り裂いたソレは真っすぐに彼めがけて疾走してくる。

本能が危険を察知し、飛んで躱す。砕けた地面を転がると同時、怜治が立っていた場所がパックリと割れた。

転落防止の柵を破壊し、海面を疾走。神話を再現するかのように海を裂き、瀑布が上がる。

伸長した棒が戻っていく。

怜治の顔が苦渋に歪む。

大地を駆け抜けて行ったのは、魔力を研磨剤とし超高圧によって放たれる金剛石すら切り裂く水の刃だ。

その切れ味の説明は不要。今目の前で見せられた。

エルカミーノの口元が不気味に歪む。
怜治の背筋を再び氷塊が滑り落ちていく。
エルカミーノの腕が動くと同時に怜治は駆けだす。
水の刃が疾走。音速を超えた水流にふれた物は皆平等に抉られ無残に破壊させていく。
液体故の特性か。刃は鞭の如くしなり、不規則な軌道を描く。
必殺のアーチが怜治に迫る。身を折り、出来る限り体を小さくして刃から逃れる。
バリアジャケットの裾を水流が掠め、豆腐の様に破砕していった。

『オイ、レイジやべぇぞ！！』

「言われなくても！」

怜治はスタンをバイク形態へと戻す。ハンドルを掴み、魔力を込める。
大きくなった的に水の死神が迫る。三六〇度全方向から絶殺の刃が襲いかかる。

「行くぞ、スタン！」

スタンから魔力が迸る。
紺の光が魔導騎兵を包み、前方に五芒星の魔法陣が展開。陣に突っ込むように走りだす。
水刃の檻が閉じられた。触れただけで万物を斬殺する死神の牙が噛み合う。
だが、殺すべき獲物はすでに水刃の網から抜け出していた。
唖然とするエルカミーノの眼前に、黒い鉄騎がその姿を現した。
唸りを上げる前輪が迫る。短剣を交差させて防御姿勢を取る。
次の瞬間、両者は真っ向から激突した。

――――木の枝が折れるような、渇いた音が響いた。

宙を舞う円筒の物体。弧を描き、かさりと音を立てて地に落ちる。

「くっ……！」

苦悶の声を漏らし、エルカミーノが後ずさる。力なく水の刃が手元に戻って行く。

怜治の顔には困惑と驚き。黒い瞳は、エルカミーノが押さえる彼の者の右腕から魅入られたように動かない。

「ほう……」

ディアーチェが興味津々といった顔で呟く。

翠緑の視線の先はやはりエルカミーノの右腕。

彼の右腕は、肘と手首の中間あたりから消えていた。背後に力なく地を転がる右手が虚しい。

先端を失った右腕からは出血が無い。いや、それ以前に筋肉の断面すら見えない空洞だった。

皮膚はまるで陶器のように固くなって人間味を失い、触れればそのまま崩壊しそうな儚さがあった。

「なんだよ……その腕……」

「……」

怜治の問いかけに、エルカミーノは答えない。代わりとばかりに、ディアーチェが嘲笑混じりの声を上げる。

「くははははっ、面白いぞ怜治！その男、あのアウレリアと同じだ。魔導の探究のため、己が体を弄くりまわしておる。その道化っぷり、見事だ塵芥！！」

エルカミーノの顔に鬼の形相が張り付く。身を射抜く眼光にもろともせず、ディアーチェが続ける。

「その身体、とうに真っ当な人間のものではあるまい？どうやって成った？ゴーレム創成と使い魔作成の応用と見たが……」

「……自分と同じ形・性能のゴーレムを創り、予め外部メモリに保存しておいた己の記憶を転写した」

「ふむ、自ら己の分身体を作り上げたか。だが材料とリンカーコアはどうした。土人形にコアクリスタル程度の魔力ではすぐに自壊するだろうが」

「人体を構成する物質なんて、揃えるのにそう苦労は無い。リンカーコアは体内に埋め込んだ魔導炉で代用している」

「ほう、その体躯に納まる程度の魔導炉であれだけのゴーレムを創るとは、かなりの性能だな」

「自作だ。この体は三代目で、起動開始から二十八年になる」

「それはたいした技術だ……」

「ちょっと待て！お前ら、俺を置いて勝手に話して勝手に納得すん

な!!
おいディアーチェ、つまりこいつの体はどういうことなのか簡単に説明しろ」
「……いいだろう」
エルシニアクロイツで肩を叩きながら、ディアーチェが説明を始める。
その顔は、新しい玩具を見つけた子どもの様に活き活きとしていた。
「この男は魔導の極めんとする研究者だったのだろう。だが、一代でそれを成すなどよほどの天才でしか不可能だ。
そこで取る方法はふたつ。己が子孫に夢を託すか、己が身を理から外れたモノへと変わるかのどちらかだ。前者が正法、後者が外法で、この男は後者を取った」
「……つまりあれか。魔法を極めようとしたけど時間が足りない。だからいつまでも生きられるように体を作り変えた、ってことか？」
「造り変えたというより、限界を迎えた身体を捨ててまた別の体へと記憶と知識を移し替えたのだろう」
『マジかよ。そりゃもう人じゃなくて記憶と知識の情報体じゃねぇか』
「知ったような事を訊くな!!」
会話を断ち切るように水流の刃が走る。

二人は襲いかかる刃を後方に飛んで躱す。
エルカミーノの相貌は憤怒で歪み、鰭が罅（ひび）のように見えた。

「ったく、何がしたくてそんなモンになろうとするんだよ！」

『そういや、マスタングの奴が言ってたな。灰被り（サンドリオン）の騎士団（シュバリエス）の全員が諦めきれない夢を持っていると』

「だったら、どうした」

「うぬの夢は、外法に頼らねばならぬほどに大きいということか。己が身を弁えぬ夢をもつとはつくづく道化よのう」

嗤うディアーチェを、エルカミーノが睨みつける。
奥歯を噛みしめ、唸るように言った。

「新たなる人造生命の開発……私の人生はそれを成すためだけに費やされてきた」

怜治が眉を顰める。
人造生命の精製のために道を外れた黒衣の魔女の姿が脳裏をかすめた。

「今のお前は、体を乗り換えることで長い時を生きてる。それじゃまた満足しねェのか」

「ああ駄目だ。これは只の延命処置に過ぎず、私が求めるモノには遥かに及ばない。
使い魔もゴーレムも、所詮は魔力が無ければその形と活動を維持できない。私が求める新たなる生命はそんな不完全なものではない！

人と同じように成長し、だが人より優れた能力と知性そして生命力を有した新人類だ」

「ざけんな。人を作りたけりゃ女相手に腰でも振ってろ。あのガキ犠牲にしてまでするものでなけりゃ、大昔の魔法に頼るほどのことかよ」

エルカミーノの瞳から殺意が溢れる。

怜治はスタンを大剣形態（ブレイドフォーム）に切り替え対峙する。

「貴様のような者に私の理想を、夢を理解することなど求めていない。

退廃していく人類を導くためには、人を超えた導き手が必要なのだ。

かつて、エメロードにはホムンクルスという人を超えた種を生みだす技術があったという。その知識と技術があれば、私の夢は叶う！！」

エルカミーノの意志に従い、水流の刃が駆ける。

鞭の如くしなり、あらゆる方向から怜治を狙う。

「ソレはもう見切ってんだよ！！」

怜治は大剣を振りかざし、渾身の力で大地に叩きつけた。砕けたアスファルト塊が舞い、エルカミーノの視界を塞いだ。

エルカミーノの顔が不快で歪む。

あらゆる物を切り裂く水の刃も、ソレを操るのはエルカミーノ自身であり、彼の視界が悪くなれば狙いも操作も粗くなる。

水の刃が瓦礫を斬り砕く。視界がクリアになった時にはすでに、怜治の姿はなかった。

背後に気配。急いで振り向くと、鉄の翼を広げた怜治がいた。

「悪いが、俺はお前ほど人間に絶望してねぇんだ。
人を超えた存在だの導き手だの、そんなモンに頼るつもりは毛頭ねぇ。なにより――――」

怜治が左足を軸に回転。遠心力と共に魔力が右足に集中。鉄の爪が光輝く。
防御しようにも片手は無い。水刃を戻そうにも間に合わない。

「――――そんなモンより大切なモンがあるんだよ！！」

竜撃肆號〈伐折羅（バサラ）〉。
容赦なく。手加減なく。
蹴りと共に放たれた光の矛がエルカミーノの胴を穿つ――――。

海鳴市中心街。
月下より鉄がぶつかり合う音が響き渡る。
街を疾走するのは赤・桃・黒の三つの影。
桃と黒は共闘し、時折赤と交差する度にその音は響く。
何度目かの激突。剣士の魔剣と戦士の拳が火花を散らす。
衝撃で両者後方へ飛ぶ。身を反転させ、背にしたビルに垂直に立つ。
動きが止まり、その姿を月下へと晒した。

「おうおう大した太刀筋だ。ネーちゃんあれか、ベルカの騎士ってやつか？うちにも似たようなやつがいるから判るぜ」

「……」

「無視かよ。ツレねェ――――」

トゥアレグの足が折り畳まれる。ビルの壁に亀裂が奔る。

「なっ――――と！！」

足が伸びる。コンクリの足場を砕いて覆面の戦士が弾丸の如く突撃する。

シグナムは長剣を水平にしてトゥアレグの拳を受ける。

「――――はあっ！！」

足場にしていたビル壁が陥没、窓ガラスが粉砕され破片が月光を反射させて雪のように舞う。

騎士と戦士、両者の力が拮抗し動きが止まる。月光を背にしてリインフォースが飛翔。拳に魔力を凝縮、硬化させる。

「暗黒効果（シュヴァルツ・ルタング）」

流星の如く急速降下。振りあげた剛拳が唸りを上げる。

トゥアレグは素手でシグナムと打ち合ったということは、肉体強化の魔法をかけているはず。故に、拳に付与する効果は強化魔法の除去効果。

魔拳がトゥアレグを撃った。轟音が鳴り響き、凝縮され魔力が波濤となって駆けた。

「な――――――――っ！？」

リインフォースの顔に驚愕。彼女の拳は、確かにトゥアレグの顔面に直撃した。

だというのに――――

「はは、こっちのパンチも大したもんだ」

トゥアレグは涼しい顔をしていた。

大きな手がリインフォースの腕を掴み、投げ飛ばす。直後に後方に飛ぶ。トゥアレグの鼻先をレヴァンティンが通過して行く。

「ハズレだ」

トゥアレグの掌底がシグナムの顔面を撃ち抜いた。

騎士の体がビルにめり込む。

もう一撃打ち込もうとするトゥアレグへ、ブラッディダガーが放たれる。

二人の間に撃ちこまれた血色の短剣がトゥアレグを引きはがす。

続けざまにリインフォースの手から黒光が伸びる。漆黒の魔力砲が覆面の戦士を吹き飛ばした。黒い奔流に戦士が押し流されていく。

「将！大丈夫か！？」

「問題……ない」

壁にめり込んだシグナムをリインフォースが引っ張りだす。

シグナムは自分の状態をチェック。騎士服が鎧の役目を果たし、戦闘行為に支障はない。五感すべて良好。戦闘可能を示すようにレ

ヴァンティンの柄を強く握りこむ。
弾けるように魔剣が閃く。
白銀の刃が、赤い魔弾を切り裂いた。
騎士の顔が動く。視線の先、睨みつける虚空には真紅の覆面の戦士が浮いていた。
リインフォースの顔には怪訝な表情が浮かぶ。魔力砲が直撃したはずなのに、トゥアレグにはダメージの色が無い。
加えて、先ほどの攻撃の際に感じた違和感が重なり、疑問が膨らんでいく。

「将、あの男……」

「ああ、あのタイミングで砲撃を防御するなんて、あの男手強い」

「いや、それ以外にも一つ」

「なんだ？」

「私はさっき、奴に暗黒効果（シュヴァルツ・エフェクト）を打ち込んだ。奴がかけているであろう強化魔法を破壊する効果を付与してな」

暗い声。リインフォースの言わんとすることに気付き、シグナムの眉間に溝が刻まれた。

「まさか……」

僅かに震えた声に、リインフォースが頷いた。

「その効果が機能した手ごたえがなかった。あの男、将の剣と文字通り素手で打ち合っていたいたということだ」

シグナムに戦慄が奔る。
無論、本気で腕を斬りおとすつもりで剣を振ったわけではない。だが、魔法による補助なしで受け止めるなど不可能であるはずだ。
シグナムの瞳がトゥアレグの金の瞳とぶつかる。
獰猛な金の眼差しに、烈火の将は一瞬でも恐怖を覚えた。

「どうする将。強化無しで鉄以上の硬度を持つ相手……レアスキルという可能性もあるが？」

「どうと言われてもな。このシグナム、生憎と斬る射る打つ以外の武を持ち合わせてはおらん」

レヴァンティンを構え直すと同時にカートリッジをロード。刀身の付け根のダクトパーツがスライドし弾丸が排出される。
刃を炎が撫でる。紅蓮を纏った魔剣を振りかざし、烈火の将は虚空を蹴った。
鍛え抜かれた脚力は数十メートルの距離を一瞬でゼロにし、シグナムはトゥアレグと肉迫する。
紅蓮刃と赤い手袋に覆われた右手が激突。鈍い打撃音が響く。
戦士の左手が唸りを上げる。五指が五つの矢となって迸る。レヴァンティンは強く掴まれ動かない。
シグナムは腰に差した鞘を引き抜き五矢を防ぎ、そのまま裂帛の気合を以て蹴りをがら空きの腹に叩き込む。
スリットから覗く艶かしい脚が槍となって腹を穿ち、トゥアレグが悶絶。魔剣を掴む手が解かれる。
拘束から逃れた魔剣が鋭く閃く。魔力を乗せた斬撃が真紅の戦士を斬り飛ばす。炎が軌跡となって虚空を舐める。
確かな手ごたえと鈍い音。骨折を示す打撃音にシグナムは内心心を踊らす。

宙を舞うトゥアレグへ更なる追撃。月光を受け光輝く六連閃が空を滑る。
魔力を乗せた剣圧が飛来刃となってトゥアレグを切り刻む。これにはたまらずトゥアレグも防御魔法を起動する。
赤い魔法壁が舞い飛ぶ斬撃を防ぎきる。

「今だ――――――――――――！」

リインフォースがシグナムの背後から現れ、紅い短剣が踊り並ぶ。
トゥアレグの瞳に焦りの色が浮かぶと同時、紅い鉄の雨が降り注いだ。
鳴り止まぬ爆撃にトゥアレグは防御するしかない。トゥアレグの目は、紅い雨を降らせながらも次の攻撃への魔法を唱えるのが見えていた。
防御を解けばたちまち、彼女が詠唱する広域殲滅魔法に蒸発させられる。
だが、防御だけに徹していれば。

「――――はあっ！！！」

紅蓮の刃が魔法壁を袈裟切りにする。
返す刀で魔剣が一閃。とっさに回避したが顔を覆う布の一部が切り取られる。

「撃て、破壊の雷！」

そして、リインフォースの広域魔法がトゥアレグを貫いた。
空が黒雲に覆われ、吐き出された漆黒の雷が槍となり、高圧電流とその熱がトゥアレグを蹂躙する。
男の悲鳴が響き渡る。

同時に、シグナムの悲鳴も上がる。

「――――お、お、おおおおおおおおおおおおっ！？！？」

全速力で雷の効果範囲から離脱するシグナム。

背後から雷撃の槍が追いかけてくる。

広域攻撃魔法である〈破壊の雷〉は、効果範囲内のすべてを攻撃対象とする。よって、トゥアレグに肉迫していたシグナムにも襲いかかるのだ。

シグナム速度を上げ、轟く雷撃の狩人から逃げ続ける。

「将！」

リインフォースの手が伸びる。シグナムも手を伸ばす。

天が瞬き、新たに雷撃の槍を吐き出そうとした直前に両者の手がつながる。

リインフォースが回転。自身を中心に、シグナムを百八十度円運動させる。直後、吐き出された雷撃が雷鳴と共に大地へと駆け抜けて行った。

あと一秒遅ければ黒こげになっていた。あり得たかもしれない自分の末路に、シグナムは身震いする。

騎士の眼前では、絶え間なく降り注ぐ暴虐の雷電が咆哮を上げる。

昨冬にシャマルが同じ魔法を使ったが、あれとは威力が段違いだ。弱体化したとはいえ、これが闇の書本来の力なのだろうか。

轟いた雷鳴が五十に到達してようやく破壊の雷はその牙を納めた。

天を覆う暗雲が消え、空は静けさを取り戻し、月は何事もなかったかのように天に座していた。

月光の下で、雷に焼き尽くされたトゥアレグの姿が合った。

赤い衣服は悉く焼け、身体は所々炭化し、肉の焼ける臭いがした。

顔を覆っていた赤い布が炭となり崩れ、その相貌を露わにした。
その貌に、騎士たちが驚愕の声を上げる。

「――――なっ！？」

「……！？」

赤い布の下から現れたのは人の顔ではなかった。
灰色の毛深い貌から突き出た鼻先は黒く、その下に短剣の如き鋭い牙が並ぶ。顔の横ではなく、頭の上に耳がついていた。金の瞳が獰猛な肉食獣の色を放つ。
同じく露わになった手足もまた毛深く、指先には鋭い爪、脚はどう見てもイヌ科のそれ。

「狼……貴様、もしや獣人族、しかも人狼か！？」

蓄えた知識からリインフォースは情報を探る。
無限に等しく広がる次元世界の中には、人語を解し文明を築きながらも、容姿が一般と異なる種も存在する。
巨大な体躯と強靭な肉体を持つ巨人族。肺呼吸と共にえら呼吸が可能で、水中での活動が可能な魚人族。そして獣の特性を備えた獣人族などがよく例に上げられる。時には亜人類と呼ばれるが、彼らはそれを蔑称として忌み嫌う。
巨人族はその巨躯を生かした肉体労働、魚人族はその特性を生かして海難救助などでヒトや管理局とは良好な関係を築いているが、獣人族はその野性的な特徴からか、たびたびヒトと衝突していた。
種族間の緊張はピークに達し、つい二十年ほど前に管理局を中心とする部隊との大規模な激突があった。数で勝る管理局に軍配が上がり、現在は獣人族も大人しくしている。

「――――なるほど、獣人の毛皮と筋肉の鎧がレヴァンティンの刃を弾いていたということか」

人間よりもフィジカルで勝る獣人は、特に兵装しなくともその肉体そのものが盾となり矛となる。ソレに魔法が加われば鬼に金棒。リインフォースの顔にいやな汗が浮かぶ。

騎士達の動揺を見透かし、人狼が笑う。

「獣人と判ると色々面倒だから今まで顔を隠していたし手加減もしていた。だが――――」

トゥアレグが腰を落とす。

「それももう終わりだ」

炭化した皮膚が粟立ち、再生していく。獣人ならではの並はずれた自然治癒力の賜物だ。

獣人が弾ける。虚空を蹴り、一瞬でシグナムと肉薄する。

右手の五指から伸びる鋭利な爪がレヴァンティンの刀身に突き立てられ火花が散る。

トゥアレグの左手が奔る。神速で突き出された手槍がシグナムの頬を抉り、騎士の顔に赤い斑点をつくる。シグナムの端整な顔が歪む。

リインフォースが〈ナイトメア〉を放つ。黒い光の奔流がトゥアレグの体を押し流す。

数メートル押し流されたところでトゥアレグが砲撃から逃れる。胸にはほんの少しの焼け痕があるだけ。獣人の皮膚は魔力ダメージすら軽減する。

「レヴァンティン！」

シグナムは魔剣を鞘に戻す。
ダクトパーツがスライドし、弾丸が排莢。鞘から長剣が放たれる。長剣にいくつもの節が生まれ、蛇腹剣へと変形した。
鞭状連結刃に乗った魔力が斬撃となって打ちだされた。

「飛竜一閃！」

砲撃魔法にも匹敵する斬撃が大気を滑るさまはまさに天翔ける竜が如く。
トゥアレグが息を大きく吸い込む。背が反り、腹が膨らむ。
とじた口が開き、紅蓮の火球が吐き出された。
疾走する斬撃砲と迸る火球〈炬陽鎚〉が激突。爆裂音と衝撃波、熱波が撒き散らされる。
爆煙を切り裂きトゥアレグが疾走。
リインフォースが魔力砲を放つが、体を小さく折り畳み人狼は回避。疾走は止まらない。
シグナムが魔剣を振って剣圧を放出。トゥアレグの右脚が横薙ぎされ、魔力の蹴撃が飛ぶ。
大気を滑る〈空牙〉とトゥアレグの〈雀刈〉がぶつかり相殺。斬撃が散ると同時に騎士と人狼が激突。刃と爪が火花を散らす。
リインフォースがトゥアレグの上に回り〈ブラッディダガー〉を掃射。トゥアレグが身体を回し太い尾で短剣を弾いた。そのまま回転、虚空を蹴って突撃。両手を合わせた十指が削岩の流星となってシグナムを襲う。
シグナムは片手を突き出し装甲手楯（パンツァーシルト）を全力展開。三角形の魔法障壁が獣人の爪を防ぐ。
リインフォースが〈封縛〉を発動。集束する光のリングがトゥアレグの足を捕え動きを止める。連結刃がトゥアレグを弾き飛ばす。
弧を描いて飛ぶトゥアレグへシグナムの〈飛竜一閃〉とリインフ

ォースの〈サンダースマッシャー〉が襲いかかる。
爆発音とともに上がる煙を引き裂きトゥアレグが急上昇。月を背に獣人が一回転。振りあげられた脚が、断頭台の刃の如く振り下ろされた。

「斧炎（フェンリル）？髏！！」

赤い斬撃が直下した。
騎士達を巻き込み、灼熱の魔力刃が大気を切り裂き地上に着弾。熱波と衝撃波を撒き散らし、アスファルトに大断層を刻みつけた。
高熱によって融解した大地が蒸気を上げる。
トゥアレグは赤く輝く断層を上空で見下ろし、声を上げて笑った。

「終わったな、これで上手いこと他のやつらが負けて、マスタングが女王様を連れて来てくれれば……」

来たるべき先を想像し、口元がゆるむ。

「オレの望みが叶う。人間どもの時代が終わり、獣人が支配する世の中が……」

腕を広げ、天を仰ぐ。
人より優れる筈の獣人が人に支配される。それはトゥアレグにとって苦痛だった。
弱く脆い種族が強く頑丈な種族を、数に任せて虐げ支配する。そんな間違いはあってはいけない。正されるべきなのだ。それをしない巨人や魚人の神経が解らない。
トゥアレグとしては今すぐにでも生き残った同族を集めて人間へと反旗を翻したいところだが、人間は数が多い。特に管理局というところは多くの次元世界からの技術や人員の支援があり強大だ。そ

んな組織に真っ向からケンカを売ればあっという間に獣人族は滅ぼされる。それだけは避けるべきだ。

だから、失われた魔法にすがる。単に人間の数を減らしてもいい。獣人を増やしてもいい。遺失魔法（ロストマギ）の中にはヒトの価値観を塗り替えるものもあったというから、ソレを使ってもいい。

とにもかくにも、これでトゥアレグの野望へと一歩近づいた。

見下ろす大地には〈斧炎？髏〉によって黒こげになった騎士二人が――――

「な……に……？」

いない。正確には、倒れても黒こげにもなっていない。

騎士甲冑は半壊し、顔にすすや傷があるが戦闘不能には程遠い。

天を見上げる四つの瞳は、諦めも絶望もない。ただ強い闘志が煌煌と燃えていた。

レヴァンティンから弾丸が排莢。長剣と鞘を合わせ、その姿を重弓へと変えた。さらにカートリッジを二発ロード。圧縮魔力が一本の矢を紡ぐ。シグナムが弓を引く。矢に魔力が凝集し、彼女の魔力光の色に輝く。

リインフォースの右手に眩い雷光。迸る雷撃が黄金の刃となって腕を覆う。

「バカな……！？今の一撃喰らって死なないなんてどういう身体してやがる！！」

「この甲冑は我らが主の、我らへの想いが宿っている。そう易々と砕けはせぬし、主の想いを守るヴォルケンリッターは決して屈しない」

「そういうことだ。人狼よ、我ら守護騎士を甘く見るな！」

眼下から立ち上る夥しい魔力にトゥアレグの皮膚が粟立つ。危険を知らせる本能に従い、さらに空高く上昇する。

が、守護騎士たちが逃すはずがない。

「翔けよ、隼！」

「撃ち抜け、雷神！」

『Ｓｔｕｒｍｆａｌｋｅｎ』

集積した魔力を抱いて、必殺の矢が飛翔する。

音速を超えて天上へと伸びる閃光を防ごうと、トゥアレグは防御壁を多重展開。必死に築いた防壁は七つ。

魔鳥が防壁に激突。巻き起こる爆炎と衝撃波が、一瞬で四枚の防壁を粉砕した。一切速度を落とすことなく、光がさらに天上へと走る。

リインフォースの黄金の刃が振るわれ、発生した衝撃波が残る防壁を全て破壊。魔鳥が翔け抜ける突破口を開く。

さらに腕が振るわれ、魔力刃が伸長する。天を衝くほどに伸びた雷刃が一閃。雷光の刃が音速の矢と並び同時にトゥアレグへと襲いかかる。

トゥアレグの右腕に〈烈風の隼（シュツルムファルケン）〉が突き刺さり、掌から肩までを貫通。引き裂かれ、虚しく空いた孔から白い骨が覗く。

トゥアレグの左腕を〈ジェットザンバー〉が斬り裂き、肩から斬り落とす。赤い濁流がしぶきを上げる。

獣人の断末魔が響きわたる。

舞台から転げ落ちるようにトゥアレグが地面に落下。アスファルトに無残に叩きつけられた。

落下の衝撃で脚の骨が砕け、地を這う獣人に白と金の刃が突きつ

けられる。
苦痛と憎悪に満ちた瞳から涙が流れる。百戦錬磨の獣人も、両腕を失った痛みを無視できない。
シグナムが魔剣を突き付けたままいう。
「大人しくしろ。命までは取らん」
「ふ……ふざ、けんな……！」
金の瞳に憤怒の炎が灯る。感情に呼応するように灰色の尾が膨らみ、天を指す。
突如吹き荒れた魔力にリインフォースが警戒。バインドで獣人を拘束する。
「るぅぅうがあああああっ！！！！！」
獣の咆哮が轟き、バインドを粉砕。
風穴の空いた右手と折れた足で飛び跳ね距離を取る。全身を這いまわる激痛を怒りと興奮で押さえつけ天を仰ぐ。
灰色の尾が金色に発光。光が強くなる度にトゥアレグに魔力が満ちる。
「なんだ一体！？」
「将、月が！」
リインフォースに言われてシグナムは月を見上げる。
信じられないことに、天に座す黄金の月が鼓動していた。まるで月下の獣人に呼応するかのように。

「月や太陽と言った天体が魔力を発するのは知っているな？オレたち獣人族は天体からの魔力の恩恵を受けて強靭な肉体を手に入れた。そして、人狼はその恩恵を特に強く受ける！」

トゥアレグの全身が淡く輝く。

全身の細胞が活性化し、再生。断絶した神経や筋肉や骨が癒着し右腕の傷を癒し、腫瘍の様に膨らんだ細胞が木が生長するように失われた左腕を癒した。皮膚の下で骨が再生、両足を癒した。

魔力がそのまま生命力や自然治癒力に変換する、下手すれば寿命すら削りかねない強引な治療だ。只の人間ならばすぐに生命力を使い尽くし死にいたるだろう。

「そして！月から授かったこの魔力を使って、オレの最強魔法が発動する！！」

巨大な魔法陣が大地に展開。陣はどんどん拡大し、半径十キロメートルを超え、まだ拡大する。

「なんだ、何が発動する！？」

「判らん。こんな術式は見たことが無い」

困惑する守護騎士に、トゥアレグの下卑た声が届く。

「忘れたのか？オレの二つ名を……」

シグナムが記憶を掘り返す。

最初に対峙した時、奴が名乗った二つ名を思い出し、戦慄が走った。

「まさか……」

弾けるように走り出す。リインフォースも続く。

飛行し、全速力で戦場から離脱する。

「逃げろ逃げろ！どうせ無駄だがな。この魔法から逃げたきゃ、次元転移でもするしかねぇ。だが、それはテルスターやインシグニアが張った結界がそれをさせねぇ」

トゥアレグの言葉にも耳を貸さずに逃げ続ける。

魔法の正体が解った以上、逃げる以外にできることはない。トゥアレグを倒そうにも、あの溢れ出る魔力があらゆる傷を癒してしまう。

魔法陣が展開完了し、赤い光を放つ。

大気が揺らぎ、そこに現れようとするものに押し退けられてビルが崩落する。

「食らいな！！月の質量をそのまま召喚する大魔法――――」

トゥアレグの哄笑とともに、巨大なソレが海鳴の町に下ろされた。

「〈月落とし（ムーンフォール）〉！！」

超質量が大地を踏みしめ、全てを粉砕した。

第４６話　創る者と壊す者（後書き）

とりあえずふたつ決着。
次回は誰にしよう。

あ、あとそろそろ学校の方でテストが近いので更新さらに遅くなります。
申し訳ありません。

第４７話　過去を見る者と未来を見る者

「わぁ～凄いね！」

太陽のように明るい声が、エルカミーノの耳朶を叩く。

意識は未だ朦朧とし、風景に靄がかかったように歪んで見える。

現実感がなく、浮遊感が身体を包む。

まるで、夢の中にいるよう。

（いや……実際にこれは夢なのだろう）

夢を見るなど久しぶりだ。真っ当な人間の体を捨ててから夢など見たことがなかった。

聞えた声は誰のものだったか。聞いたことのある声だが、どこの誰だか思い出せない。

「こんなのたいしたことないよ。術式を刻んだコアを使っただけで……」

「それでも凄いよ！わたしは魔法使えないから、こういうの見れてすっごく楽しい！」

風景を歪める靄が徐々に薄まる。見えてきたのは、明るい空の下、青い草原の上で戯れる少年少女。

二人の間には小さな土色の人形があり、単調なリズムで手足を上げて踊る。

少年はつまらなそうに人形を眺めるが、少女は嬉しそうに華が咲いたような笑顔を浮かべる。

他愛もない風景に、エルカミーノは眼を見開く。

それは、四元の翁がかつて人間だったときの記憶だった。
父の書庫から魔導書を引っ張りだし、そこにあったゴーレム創成の魔法を仲の良かった少女に見せた時の光景だ。
魔法資質を持った少年には簡単でたいしたことが無いことでも、少女には絵本の世界が現実に現れたかのように感じるのかもしれない。

「ねぇ、他にはどんなことができるの？」

「うーん、どうだろ。父さんの書庫に他にもいろいろあるかもしれない。
今日はもうこれだけだけど、明日はまた別のを見せられるかも」

「ホント！？じゃあ明日、約束だよ！」

歓喜の声を上げて、少女は飛び跳ねる。
日が暮れて、互いに家に帰る時が来るまで少女の顔は笑顔だった。

「……そう、だったな。これが、私の魔法の原点……」

エルカミーノが魔法を学ぶようになったきっかけは、あの少女の笑顔だった。
どんな小さな魔法でも、あの少女は心の底から喜び、華のような笑顔を浮かべた。
それが嬉しかった。自分の力で、誰かが笑顔になるのが嬉しかったのだ。
もっと多くの人を喜ばせようと、笑顔にしようと魔法を学び始めたのだ。
あれから永い時が立った。今の自分は、変らずそれを目指しているだろうか。

答えは、考えるまでもなかった。

「まったく、どうしてこうも歪んでしまったのか……」

嘆息する。

ゴーレム技術を人体に応用したことへの弊害か。かつての想いが、身体と記憶を移し替えるたびに摩耗したのか。

「いや、そんなことはどうでもいい。確かなことは……」

自分がやって来たことが、当時の想いからかけ離れてしまっているということ。

それに気付くと、その時を待っていたかのように、エルカミーノの意識を光が包んだ。

意識が、今度こそ現実へと戻ってきた。身体を這う激痛がその証。身体から痛覚を排除してしまえばいいのだが、そんなことをすれば自身の滅びを察知できない。永く生きるためには仕方のないことだった。

「……む」

目に映る世界が低いことに気付いた。

背中に当たる固い感触から、木にでももたれかかっているのだと思い、体を起こそうとするが動かない。

見ると、身体が木とともにバインドで拘束されていた。魔力で編まれた縛鎖が体を締め付け、全く動けない。

「気がついたか」

声がし、顔を上げると怜治がエルカミーノを見ていた。
青年はバイクに跨り、今にも走り出しそうだった。
転移魔法を発動させようと魔力を練るが、発動までいかない。術式構成の過程で妨害が入る。
何故か判らず、首を傾げている青年へエルカミーノが説明する。

「マスタングとモヴァノが、この街全体に転移・通信妨害の結界を張っている。
奴らを倒さない限り解除されることは無く、その間、誰独りこの街から出ることはできないし、思念通話もできない」

怜治が渋い顔をする。
顎に手を当て思案を巡らせる。結論が出て、小さく頷いた。

「仕方ねぇ。時間がかかるが走って戻るか。途中で誰かと会ったら拾って行こう」

「そうせざるを得まい。だが、その男はどうする?」

ディアーチェが、剣十字の先をエルカミーノに向ける。

「通信で局員を呼べん以上、逃げぬよう誰かが見張っておく必要がある。
我はそんな役はしたくない。うぬは月村邸へ向かわねばならない」

ディアーチェが言葉を切る。少女の顔には残酷な笑み。

「殺しておくか？」

少女の背後に無数の魔弾が浮かぶ。

ディアーチェが杖を一振りすれば、銀の魔弾がエルカミーノを撃ち抜く。拘束された彼に、防御の術は無い。

「やめろ」

怜治が二人の間に割り込んだ。ディアーチェが顔を顰める。

「殺さなくても、両手足引き千切る程度でいいだろ」

「おまえは涼しい顔で恐ろしいことを言うな」

エルカミーノは思わず溜息を吐く。一瞬でも慈悲を感じた自分が情けない。

「もう逃げないから、おまえたちはさっさと行け」

「……信用できんな。貴様自身が逃げずとも、他の騎士団が助けに来る可能性はある」

「我らは決して一枚岩ではない。この作戦が成功し、女王陛下の復活が達成されても今度は騎士団同士での奪い合いが始まる」

「達成させる気はねぇがな。

……なる。エメロード・ギャランが全員の願いを叶えてくれるとは限らないわけか」

エルカミーノが頷き、肯定を示す。

「この様では、逃げたところで他の騎士団に殺される。言い換えれば、ここで大人しく捕まり脱落すれば、やつらは私を歯牙にもかけまい」

「えらくあっさりしてるな。新人類の開発とやらはもういいのか？」

「ああ……もういい」

さらりと、憑き物落ちたかのような顔で、エルカミーノが言った。ディアーチェが興味を失くしたようで、銀の魔弾が静かに空気に溶けて行った。

「つまらん」

少女の呟きを尻目に、怜治が言う。

「あんたが良いなら俺からは何にもねぇ。が、だからと言って逃げないなんて言葉を鵜呑みにもできねぇから、バインドはこのままにしておく。騒ぎが収まって回収に来るまで大人しくしてろ」

「大人しくするもなにも、もう碌に動けんよ」

怜治はスタンに跨り、アクセルをかける。魔力粒子がマフラーから排出され、タイヤが回転を始める。

走り去っていく青年の背中を見て、四元の翁が小さく呟く。

「ありがとう。あの時の想いを思い出させてくれて」

青年は振り向かず、やがて見えなくなった。聞えたかどうかは問

題ではなかった。聞えたところで彼も何故言われたのか不思議に思うだけだろう。
疲労が限界に達したのか、眠気が襲ってくる。
抗わず、エルカミーノは瞳を閉じる。
眠りにつき、またあの頃の記憶を巡ろう。
楽しく、希望に満ちていたあの頃の思い出を。

魔法少女リリカルなのは　☆Ｔｈｅ　Ｒｉｄｅｒ☆　ＡＸＥＬ　第7話　過去を見る者と未来を見る者

魔弾の雨が降り注ぐ。
無数の光が大地へ直下し、着弾と同時に土砂と砂塵を巻き上げる。
爆煙を引き裂き、白い少女が駆ける。
足には光の羽が羽ばたき、少女の体を僅かに浮かせて飛行する。
少女を追って、光の射線が変わる。少女の飛行の軌跡をなぞるように魔弾が地面を穿つ。

「レイジングハート！！」

『Ｙｅｓ，　Ｍａｓｔｅｒ』

しっかりと両手に握る愛杖に声をかけ、高町なのはは身体を反転。
背中を地面に向け、背面飛行。
魔杖の先端が音叉の形に変わり、主から送られる魔力を先端に集

める。ダメ押しにとカートリッジをロードする。
なのはは上空を見据える。視線の先、暗い夜空を絶え間なく自転しながら動き続けるのは四つの球体。少女を襲う魔弾はソコから放たれている。

「ディバイン――――」

術式構成完了。
桜色の光が少女を照らす。

「バスター！！」

轟音とともに、桜色の閃光が天上へ駆けあがり、四つの球体を狙う。
球体たちは散開して砲撃を回避。華麗な螺旋図を描きながら球体が直下。その間にも魔弾が連射され、光の豪雨が大地に叩きつけられる。
大地を抉り、爆煙が上がる。なのはは全速力で土煙の大波から逃れる。
土煙を引き裂き、魔球が疾駆する。一番小さなテニスボール大のエウロパから魔弾が掃射。扇形に広がる弾幕を上昇して躱す。エウロパはハチドリの様に素早く動き、なのはを翻弄する。
絶え間なく動く少女へ、最も大きい大玉のガニメデから砲弾が発射された。轟音が響くと同時に着弾。土砂が抉られ大地に大穴が穿たれる。
爆風で吹き飛ぶなのはを、ソフトボール大のイオが追撃。引き絞るように圧縮された弾丸が光速で駆け、少女を狙い撃つ。レイジングハートが自主的に防御魔法を発動。桜色の防壁が弾丸の進行を防ぐ。
体勢を立て直し、なのはは誘導狙撃型射撃魔法〈アクセルシュー

ター〉を放つ。四つの光弾が生まれ、少女の意志に従い疾走。四つの球を砕きに行く。

バスケットボール大のカリストが他の三つを庇うように前に出る。等間隔で魔弾を放ち、少女の光弾を確実に撃ち抜く。

球と少女の間に煙の壁が築かれる。

壁の向こうから殺気を感じ、なのはは左へ急速旋回。次の瞬間、黒ずんだ土色の閃光が大地を焼き払った。

パオ・キャブスターが放った砲撃魔法だ。

精密な射撃に、なのはは肝を冷やす。が、同時に相手の特性も判った。

キャブスターが操る四つの球体は、サイズに合わせて性能が異なるのだ。

最小のエウロパは、威力が低い代わりに連射性と移動速度が高い。対して最大のガニメデは威力が高く、単発でしか打てないうえ移動速度が遅い。その中間の性能を持つのがイオとカリストだ。

そして、その四つの球を同時に操り、使いこなすキャブスターが最も恐ろしい。ただ操作に集中するのではなく、先ほどの様に自ら攻撃に参加することもある。実質上の五対一だ。

（強い……魔法の威力とかよりも、戦術が）

奇しくも、なのはとキャブスターは同じ射撃・砲撃を得意とする後衛型の魔導師だ。

その弱点はクロスレンジでの近接戦闘だ。その弱点をカバーするため、なのはのバリアジャケットは機動性を捨ててでも防御を重視している。

だが、キャブスターはそもそも相手を近づけないという戦法を取っている。四つの球が敵の接近を妨げる盾となり、敵を討つ矛となる。

魔力量はなのはの方が上回る。が、経験では圧倒的にキャブスタ

ーの方が上だと、なのはは判断した。
相手の力に驚嘆しつつ、疑念が湧く。
「どうして、こんなことをするんですか！？」
「話すことなど無い」
「～～～～ッ――――もう！！」
なのはは直射砲を放つ。桜色の閃光は地面に中り、土砂を巻き上げる。
突如現れた土の壁に、四つの球が急停止。エウロパとイオが回り込み、ガニメデとカリストが魔弾を吐き出し土壁を粉砕して直進。
そしてまた急停止。
少女を取り囲むつもりが、その少女が見当たらない。
キャブスターが空を仰ぐ。黄金の月を背に、高町なのはが空にいた。
金の杖を振りあげる。桜色の光弾が多数展開。その数、優に五十を超える。
なのはが杖を振り下ろすと、五十以上の光弾がキャブスター目がけて直下する。
キャブスターは後ろに飛び、最速のエウロパを呼び寄せる。ダークブラウンの軌跡を描き、エウロパが主の盾となる。
吐き出される魔弾の嵐が、光弾の雨と激しくぶつかり合い魔力粒子を大気にばら撒く。
なのはは魔力を捻り出し、光弾を放ち続ける。
キャブスターもエウロパの連射性を全開にし、魔弾を撃ち続ける。
さすがに一機に集中するしかないのか、他の三機はやってこない。
魔力弾の撃ちあいは、やがて魔力量が勝るなのはへと天秤が傾く。
徐々に魔弾が光弾に押され、エウロパへと光弾が中る。キャブス

ターは自身に来る流れ弾を魔法壁で防ぐ。
とどめとばかりに、なのはが必殺の砲撃を放つ。

「ディバインバスター！！」

桜色の流星が直下。魔力の奔流がエウロパを包み、大地へと叩きつける。
カートリッジを立て続けにロードし、魔力の爆流がその勢いを増していく。
破裂音。強烈な魔力砲の一撃が、エウロパを破壊したのだ。
破片がばら撒かれ、魔力の波濤が木々を揺らす。

「……！」

キャブスターの冷えた瞳に、驚愕の色が浮かぶ。
草原の丘に、なのはが着地する。
散った魔力が風に乗って舞う。
踊る栗色の髪を押さえながら、なのはは言った。

「お話、しませんか？」

「……して、なんの意味がある」

「わたし、まだ魔導師になって一年経ってないんですけど、その間にもいろんな事件にあって来ました。
その中で戦った子たちはみんな大事な人の想いに応えるためとか、大切な人を守るためとか、複雑な事情がありました」

過去の戦いを思い出しながら、なのはは続ける。

「だから、あなたにもそういう事情があるんじゃないでしょうか？わたしは力になれないかもしれないけど、力になってくれる人を紹介することくらいはできます。
最初っから話してもムダだなんて言わないで、話してくれませんか、あなたの想いを」

キャブスターの瞳が見開かれ、動揺を示す。
開かれた瞳が細められ、じっと少女を見る。

「……君は、変った子――――」

言葉を切り、頭を振る。

「いや、優しい子だな」

少女の言葉に、嘘偽りはなかった。
初めて会い、そして敵であるキャブスターに、高町なのはは本気で心を開いていた。
戦場ではあり得ない行為。愚かで馬鹿馬鹿しいとさえ思えることだ。だが、幼い少女としては当たり前の思考なのかもしれない。
構えを解く。
三つの球体が緩やかに宙を漂う。光は消え、球体が力なくキャブスターの背後に回る。

「何が聞きたい？」

「あなたが、この戦いに何を賭けているのかを」

風が吹く。大地に根差す草が波打ち、ソレに合わせてキャブスターの声が少女に届く。

「私の願いは、過去を変えることだ。そのために、私は灰被り（サンドリオン）の騎士団（バリエス）にいる」

え、と少女の口から驚きの声が漏れる。

中折れ帽を押さえて顔を隠し、キャブスターは続ける。

「これでも昔は、少しでも多くの人のためになろうと管理局の門を叩いたこともあった。だが、最も守るべき家族すら守れなかった情けない男だよ、私は」

「それじゃあ、あなたの家族は……」

「ある日、長期任務から帰ったら既にな……。犯人と鉢合わせになり、戦ったが見事に負けた。そして見逃された。“私が憎ければ追いかけて来い”などと残して、奴は消えた」

キャブスターの肩が僅かに震える。その様子になのはは胸を締め付けられる思いだった。

昔、なのはの父親は仕事で大けがをして何日も意識を取り戻さない日々が続いた。幸運にも父は目を覚まし、今では元気に喫茶店をしている。だが、キャブスターの家族――――親兄弟なのか妻子なのかは判らないが――――は二度と目覚めることは無い。もう、彼はその日常に帰ることはできない。

時間を超えて、過去へと飛ばない限り。

「あなたは、過去へと跳びたいということですか？」

「そうだ。（緋色の夜の女王）の力を使い、私は過去のあの時へと戻り、家族を取り戻す！」

力強い、決意に溢れた言葉だった。
彼に似た執念を持った者を、なのはは知っていた。
娘を事故で失い、娘の命と失った時間を取り戻すために闇に身を落とした黒衣の魔女。キャブスターのこの戦いにかける想いは、彼女がかけたモノと似ていた。
彼らの気持ちを、なのはは理解できない。理解したなどと言ってはいけない。
家族が命の危機に落ち入りながらも、最後には戻ってきたなのはと、二度と戻らなくなった彼らの境遇は大きく違う。
その悲しみや絶望、悔恨の想いを、軽々しく理解していいはずがない。
――――だが、だからといって肯定していいわけではない。
プレシア・テスタロッサは死んだ娘を生き返らせるために多くの人間を危険に晒し、自分を慕う少女の想いを利用し、踏み躙った。
パオ・キャブスターも、家族を取り戻すために、今なのはの大切な友人を狙っている。
どんな悲しいことがあったとしても、ソレしか手が無かったとしても、誰かを悲しませることになる行いを肯定していいわけがない。
杖を握りしめ、ゆっくりと構える。

「ごめんなさい……。話を聞きたいなんて言い出しておいて、わたし、あなたを手伝えない」

「構わん。もう、話し合いで踏みとどまれる段階は超えている」

キャブスターの背後を泳ぐ球体が光を取り戻す。
なのはは新たなマガジンをレイジングハートに差しこみ、カートリッジを充填する。

「悲しいですね……」

なのはの呟きに、キャブスターが反応する。

「わたしもあなたも、大切な人を守りたいだけなのに、こんな風に争わなくちゃいけないなんて……」

「本当に、君は優しいな」

少女の言葉を斬り捨てることも、嘲笑うことなく、静かに肯定する。

キャブスターが腰を落とす。腕を引き、拳を握りしめる。

「だが覚えておけ、誰かを守るということは――――」

引いた腕とともに、拳が突き出される。拳の前には光り漂うイオがあった。

「それ以外の誰かを、傷つけるということだ!!」

閃光が迸る。超高速で疾駆する魔力砲を、なのはは咄嗟に身を屈めて避ける。

頭上を砲撃が通過していく。突風と熱で栗色の髪が乱れ、轟音が耳朶を激しく打ち鳴らす。

轟音と熱風が治まり、顔を上げる。

振り向くと、大地を駆け抜けた砲撃が塹壕の様な穴をつくっていた。

塹壕からは蒸気が上がり、終わりの地点にはイオが転がっていた。

何が起こったのか理解し、なのはの顔に驚愕が浮かぶ。

キャブスターが放ったのは魔力砲だ。だが、なのはの〈ディバイ

ンバスター〉のような純粋魔力砲ではなく、デバイスを砲弾として使う本物の大砲だった。

経験はあれど知識のないなのはにはそれがどういう原理の下で放たれたのかは解らない。が、確かな質量を持った物体が高速で撃ちだされるということの恐ろしさは理解できる。

物体の運動エネルギーは質量×速さの二乗÷二。イオの重さも先ほどの速度も正確には分からないが、どれほど威力を持っているのかは今目の前で見せられた。

威力を知り、それを防御魔法で受け止めることは不可能だということも悟った。

防御不可能な高速魔力砲。それがキャブスターの切り札だった。

回避できたのは本能的な面が大きく、運が良かっただけだ。キャブスターの手元には残り二発の砲弾がある。その両方を躱す確率は低いとなのははは分析する。

加えて、一度砲弾として使えるのは一度切りなどという決まりは聞いていない。つまり、無限に放つことすら可能かもしれないのだ。

キャブスターの手にカリストが乗る。次弾を予想し、なのはが大地を蹴って飛翔。大空へと避難した。

極光が迸る。超高速の砲弾が天上へと駆けあがる。光の尾を引くソレは流星の如く。

なのははカートリッジを連続ロード。全身を駆け巡る圧縮魔力を防御に回し、〈プロテクション・パワード〉を多重展開。かつて、赤毛の少女の一撃を防ぎきった強固防壁が流星を迎え撃つ。

一瞬で粉砕。軍配はキャブスターへと上がる。防壁を貫き、流星が奔る。防壁による抵抗で速度と軌道が僅かにずれたのか、砲撃はなのはのすぐ横を通過した。

直撃は免れたが、その衝撃波は少女を容赦なく襲う。少女の矮躯が吹き飛び、バリアジャケットが大きく破損する。

錐揉み回転する身体にブレーキをかけて体勢を整える。魔力を注いで防護服の破損を修復。

自身の魔力の残量とカートリッジの残弾数を探る。問題無し、まだ行けると判断。

やはり、キャブスターの一撃を回避どころか防御することも困難だ。ならば、高町なのはが取るべき行動は只一つ。

真っ向からの砲撃戦。己が最強の一撃で光速の砲弾を撃ち抜くのみだ。

「レイジングハート！エクセリオンモード、フルドライブ！」

「Ｙｅｓ，　Ｍａｓｔｅｒ」

レイジングハートの形状が、杖から槍へと変わる。顕現した黄金の槍の穂先には大気にばら撒かれた魔力が集束していく。それは今までの撃ちあいでなのはとキャブスターがばら撒いた魔力だ。

少女の下に光が集い、巨大や球体を形成していくさまはまさに星の如く。

巨星を創り上げる少女に、キャブスターが驚愕の声を漏らす。

「その年で集束砲すら操るか……。まったく、末恐ろしい娘だ！」

キャブスターの手に納まるは彼が持つ最大の一球、ガニメデ。

魔銃士渾身の魔力が大気を震わす。少女の杖から弾丸が連続排出。視認できるほどの濃密な魔力が渦巻く。

「スターライトォォォ――――――――――」

「極光一閃――――」

闇を切り裂く滅光。両者、全身全霊をかけた一撃が咆哮する。

「ブレイカアアアーーーー！！！！」

「――――ガニュメデス！！」

天上から降り注ぐは大地を灼く星の光。
地上から駆け上がるは天を穿つ破壊の流星。
ふたつの光が激突し、夜の街を昼に変えた。

運が悪い、とフェイト・テスタロッサは思った。
勝敗を運のせいにはしたくないが、今回ばかりはそう思わざるを得ない。
それほどに、クンタッシ・ランボルギーニという偉丈夫は反則だった。
大地を蹴って疾走。振りあげる戦斧から金色の刃が伸びる。

「はぁっ！！」

裂帛の気合を以て振り下ろされる魔力刃。鉄すら両断するはずの刃だが、偉丈夫の鋼の巨槍を切り裂くことはできない。
ハーケンが鋼の槍に牙を立て火花を散らし、金の刃が消失。巨槍には傷一つつかない。
フェイトは弾けるように飛び退き、距離を取る。が、剛槍ファイティング・ブルの前に距離の意味はない。
振り下ろされる巨槍。颶風（ぐふう）が吹き荒れ、暴虐の嵐が巻き起こる。
強風が少女の体を吹き飛ばす。フェイトが着地すると同時にはや

てが魔弾を扇状に掃射。銀色の魔弾が疾走する。

「――――――」

飛来する脅威に、ランボルギーニは防御魔法を発動させず、ただ大木のように太い腕を前に出すだけ。

魔弾が偉丈夫に命中。だが、本来なら爆煙をあげる筈の魔弾は砕け、泡雪のように空気に溶けて消えてしまった。

はやてが苦虫を噛み潰したように顔を歪める。

フェイトが魔弾を消したモノの正体を見極める。

「対魔力……魔法への耐性力を持ってる。下手な牽制や低威力の魔法は打ち消されてしまう！」

それは、魔法を無効化するという先天資質。フェイトやシグナムの変換資質よりも珍しい能力だ。

はやての顔に驚きが浮かび、フェイトは怪訝な表情で続ける。

「でも、あそこまで強い対魔力を持つなんてあなた、何者ですか？」

「己が出生を長々と話す趣味は無い」

槍を肩に担ぎ、僅かに腰を落としたまま偉丈夫が答えた。

折り畳まれた脚が炸裂。大地を粉砕し、鉄塊のような巨体が突撃してきた。

真っ向から受け止めるなど不可能。フェイトは横に、はやては上空へと飛んで躱す。

バルディッシュに再び金の刃が生じる。少女の斬撃に合わせるように、巨人の槍が振るわれる。

激突は一瞬。魔力刃は粉砕され、少女の体が吹き飛ぶ。

「フェイトちゃん！」

はやての悲鳴が響く。が、それはすぐに己が身に降りかかる脅威への悲鳴へと変わる。

ランボルギーニが槍を握った腕を上げる。二・五メートルのランボルギーニが腕を上げ、その先に槍が握られればその射程範囲は圧倒的な広さになる。

偉丈夫の頭上を巨槍が薙ぐ。鋼の穂先ははやてを真っすぐに捉え、少女を叩き落とす。

はやての体が地面に激突する直前、金の閃光が少女を抱えて槍から離脱、高速移動を繰り返し、そのまま校舎の中へと消えて行った。

「……速いな」

巨人が校舎へと身体を向ける。ファイティング・ブルを待機状態へと戻し、腰を落とし、脚を曲げて一旦停止。

「まったく、こういう時は空戦技能を持つ者たちが羨ましい」

桁外れの脅力からの跳躍は、獲物へと飛びかかる猛獣のように巨人を空へと打ち上げた。

通い慣れた校内も、誰もいない夜に来るとまた新鮮な気分だ。

もっとも、そんな呑気な事を考えている場合ではないのだが。

「はやて、大丈夫？」

「う……うぅ……」

呻くはやてを肩にかつぎ、フェイトは保健室へと身を滑りこませる。

場所を知られるわけにはいかないので電気はつけず、手探りでベッドまで行く。

はやてをベッドに寝かせ、棚から包帯と三角巾、そして副え木になりそうなモノ――――部屋の隅に段ボールがあった――――を取って戻る。

はやての左腕を見ると、上腕部が紫に変色し、酷く腫れていた。明らかに骨が折れている。

フェイトはシャマルの様な治療魔法は使えないが、かんたんな応急処置くらいはできる。教えてくれた師匠に心の裡で感謝しつつ、手早く処置していく。

副え木で上腕部を固定し、三角巾で腕を吊る。

「これで、いちおうは大丈夫かな」

「ううん、ごめんなフェイトちゃん、迷惑かけて……」

「迷惑だなんてそんな……！」

フェイトの言葉を遮るように、はやてが首を横に振る。

痛みを訴える左腕を静かに触れ、悔しそうに唇を噛みしめる。

「傷ついたことだけとちゃう。わたし、ホントはフェイトちゃんの援護せないかんのに、全然できてない。それが情けなくて……」

はやてが顔を伏せる。フェイトはどう励ませばいいのか考えるが、

こういうのに自分は慣れていないと再確認するだけだった。
確かに、はやての後衛としての援護は本来のパートナーであるアルフに比べれば拙い。が、それを責めることなどできなかった。
はやての魔力はフェイトよりも上だ。だが、魔導師としての経験はフェイトの方が数段上だ。
しかし、それも仕方のないことだ。はやてはまだ魔導師として訓練するようになってまだ二ヶ月しかたっていない。ヴォルケンリッター達がすぐれた師であっても、たった二ヶ月でフェイトと並ぶなど無理な話だ。フェイトに言わせれば、「思い付いたからやってみた」などといって集束砲を繰り出す白い少女や、訓練な魔法理論の勉強など碌にしていないのに高ランク魔導師に勝つ黒い青年の方がよほど異常なのだ。

「しっかしなんなんやあの人、魔法が通じんなんて反則や……」

「……多分、あの人は巨人だよ」

フェイトの呟きに、はやての顔が上がる。

「巨人？巨人って、山くらいでっかいて言う？」

「えっと……わたしたちの世界だともうそれは大巨人とか巨神っていってもう別種族なんだけど……。
次元世界ってのは無限に広がってるの、その中には当然と言えば当然なんだけど、わたしたちとは姿形が違うのが当り前な人種もいるの。例えば、巨人族とか獣人族とか」

「んー、こっちの世界で肌の色で黒人とか白人って区別するような感じ？」

「んーまぁ、そんな感じ。
わたしたちと姿が違うから、当然わたしたちにない力を持ってる場合もあるの。巨人の場合はさっきもいった――――」

「――――対魔力」

フェイトが頷き、続ける。

「どうしてそんな能力が備わったのかわからないけど、巨人族には魔法が効かない。強力な魔法なら効くかもしれないけど、すくなくともわたしのハーケンやはやての射撃魔法は効かなかった」

「対魔力って、ようはどういう原理なん？シールドやバリアで防ぐんと何か違うん？」

「防ぐ、というより無効化する、かな。あの人の体に触れた瞬間、魔法は発動前の無害な魔力に戻される。魔力結合を解離させられる、と言えばいいのかな」

先ほどの戦闘から推論を導き出す。そういえば、ＡＡＡランクの魔法防御に似たようなものがあったなと思い出した。
それが常に、ランボルギーニの全身を覆っているということだろうか。ならば、こちらには分が悪すぎる。
巨人特有の膂力からの剛力。巨槍で広範囲を薙ぎ払い、生半可な魔法は打ち消される。加えて、先天的な才能に溺れることなく鍛錬を積んだであろう戦闘技術。
魔力量ではこちらが上だろう。だが、力と経験は向こうが上。まったく、運が無い。
轟音が響く。少女たちの顔が上がり、窓ガラスへと視線が向かう。
窓ガラスがカタカタと振動していた。コンクリの壁が破壊され、

ガラス片が踏み砕かれる音が聞こえる。

「ランボルギーニ……！」

音の原因となる者の名を呟くフェイト。

二・五メートルの巨躯を誇る彼の動きを封じられるのではと思い校内に逃げ込んだが、当ては外れたようだ。向こうは後始末のことなど考えず、台風の様に校舎を破壊することを選んだようだ。

立ち上がるフェイト。紅い瞳は、どこかにいる力の塊を見つめていた。

「……フェイトちゃん？」

「ちょっと行ってくる。はやては休んでいて」

はやての静止の声を聞かず、少女は部屋を飛び出した。

コンクリの壁をブチ抜いて、ランボルギーニは校内への侵入を果たした。肩に積もる瓦礫や砂塵を払い、前を見る。巨人の突撃に巻き込まれ、無残に破壊された教室だったものががらんと口を開けていた。その先に延びる廊下を漂う、いつくもの金色の球体。電撃を纏い、バチバチと派手な音を立てていた。

「――――――――」

ランボルギーニが一歩歩を進める。それに反応し、雷球から雷撃の槍が放たれた。

暗い廊下を照らす金色の波濤が巨人を貫く。
爆煙が上がり、巨人の姿を隠すと、雷球からの攻撃が止む。

「子ども侮っていたが、なかなかどうして知恵が回る」

太い腕が煙を引き裂き、ランボルギーニの姿が現れる。雷撃が貫いた部分の服は焼かれ、赤銅色の皮膚には焦げた跡があった。
大抵の魔法を打ち消し無効化する巨人族の対魔力でも、魔力変換による攻撃は無効化できない。
フェイトはその弱点を即座に見抜き、こうして罠を張った。一撃でランボルギーニは倒せなくとも、敵の動きを察知する度に攻撃を繰り出す設置型のフォトンスフィアなら、フェイト本人が対峙する頃には体力と魔力をかなり削れるはずだ。
無論、スフィアの維持にフェイトの魔力も消費されていくが、真っ向から斬り合うよりも勝率は上だ。
もっとも、ただランボルギーニが歩いて移動すればの話だが。

「……起きろ、ブル」

『ＥＲＲ……』

腕輪が発光し、ランボルギーニの手に巨槍が納まる。
穂の付け根にあるコアから、獰猛な声が上がる。

「本気で行くぞ。存分に暴れろ」

そう言った瞬間、巨槍が狂喜の声を上げた。

『ＵＲＲＲＲＲＲＲＲＲＲＲＲＲＲＲＲＲＲＲＲＲッ！！！！！』

ビリビリと建物を揺らすほどの咆哮。そして、槍そのものも大きく振動していた。

今にもランボルギーニの手から逃れようと、彼の腕ごと震わすほどの振動にも、ランボルギーニは涼しい顔でゆっくりと巨槍を振り上げる。

「魔牛（ヴァッケ・コロ）の爆走」

巨槍が一閃。瞬間、長い廊下を巨大な斬撃が疾走した。

斬撃が通ったところはあっという間に粉砕され、フォトンスフィアも両断される。

巨人の一撃に、一階の天井、二階の床を粉砕し、一階と二階が統合される。

遥か先まで破壊の後が続くその様はまさに一撃必殺。敵の立つ大地ごと消し飛ばす。

細かい瓦礫や砂塵が宙を舞い、地に落ちる。ガラス片が月明かりに照らされ光輝く。全てを破壊尽くされた場所に降る。まるで雪のようだ。

その雪の中を、一筋の閃光が疾駆する。

稲妻の如く軌道を曲げ、雷光の如く一瞬のうちに巨人の頭上に現れた金の少女。手に握る戦斧には金色の刃が鋭く伸びていた。

閃く斬撃。ランボルギーニの槍が振るわれる。少女の鎌はすでに二度打ち負けている。よって三度目の敗北も必至。

「バルディッシュ！」

だが、今度は打ち負けなかった。黒い柄から吐き出される二発の弾丸。少女の体には魔力が満ち、ソレを注がれて刃がさらに頑強となる。

激しく火花を散らす槍と鎌。三度目にして、ようやく両者の刃は

拮抗した。

「ブル！」

『ＵＲＲＲＲＲＹＹＹＹＡＡＡＡＡッ！！！！』

「バルディッシュ！」

『Ｙｅｓ，ｓｉｒ』

主の声に応え、巨槍はより激しく振動し、戦斧は圧縮魔力を呑み込んで刃を強化させる。

迸る魔力が、撒き散らされる衝撃で周囲の瓦礫がさらに細かく破砕される。

いつまで続くか判らぬ拮抗。それを、突如飛来した銀の閃光が崩した。

「――――ぬうっ！？」

魔力の奔流は、ランボルギーニが打ち消せる許容量を超えていた。故に巨人の体にようやくダメージが伝わる。

体勢が崩れたところへ、金色の刃が一閃。ランボルギーニの巨体を、肩から腰にかけて袈裟切りにした。

巨人の膝が折れ、片膝を付く。

フェイトはランボルギーニの背後、今にも壁にもたれかかるように立つ少女へと目を向け、名を呼ぶ。

「はやて、どうしてここに！？」

「ゴメンな、フェイトちゃん。でも、わたしもう嫌なんや。ただ、

誰かに守ってもらって、自分が何もしないのは！」
はやてがシュベルトクロイツを構える。
立ち上がる巨人へと、砲撃魔法〈クラウ・ソラス〉が放たれる。
銀の閃光がランボルギーニの胴を撃ち、爆煙があがる。
「どや、この威力の魔法なら打ち消せへんやろ！」
確かに、先ほどと違いランボルギーニに攻撃は通っている。が、効いているかはまた別問題である。
太い赤銅の腕が伸び、その先に握られた槍が大地に突き刺さり、地盤をひっくり返す。
突如現れた壁へ、はやては〈ブリューナク〉を連続発射。銀の魔弾が壁を砕く。
フェイトが鎌で巨人を斬り上げる。槍の石突きとぶつかり火花を散らす。
槍が旋回し、鎌を弾きながら巨大な鎌がはやてへ襲いかかる。
はやては〈スレイプニール〉を発動。黒翼が肥大し、空気を掴んではやてを後方へと飛ばす。
槍が顔すれすれを通過。巻き起こる颶風で少女の体が吹き飛ぶが、くるりと回転して着地。同時に〈バルムンク〉と〈クラウ・ソラス〉を同時発動。放射弾と直射砲が疾駆すると同時にフェイトが〈プラズマスマッシャー〉を発動。銀と金の閃光が巨人を挟みこむ。
「嘗めるなぁっ！！」
『GURRRRRRRRRRRッ！！！』
ランボルギーニが咆え、ファイティング・ブルが閃く。
振動する槍が一閃され、疾駆する斬撃が銀の閃光を粉砕。旋回し、

戦斧の如く振り下ろされた穂先が雷光を叩き潰した。
少女二人の顔に驚愕が浮かぶ。
「はぁあああああっ！！」
『ＬＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＲＲＲＲＲＲＲＲッ！！！』
裂帛の気合を以て、巨槍が大地に叩きつけられる。
土砂の瀑布が上がり、灰色の津波が巻き上がる。
衝撃波が波濤となり、破壊の波が少女二人を呑み込んだ。
「……う……うぅ……ッ」
痛みで目を覚ます。身体を這い回る激痛に顔をゆがめながら、フェイトは起き上がる。
金紗の髪は土埃でいつもの艶を無くし、白い肌もくすんでいた。
自らの手に視線を向ける。小さな手には、頼りになる閃光の戦斧が確かに握られていた。それだけで希望が湧いてくる。まだ戦えると、闘志が再燃する。
立ち上がろうとしたフェイトへ、絶望の影が落ちた。
片膝をついたまま、フェイトは顔を上げる。
ランボルギーニが、目の前に立っていた。
聳えたつ偉丈夫。その太い手が、茶髪の少女を捕えていた。
だらりと力なく四肢が垂れており、一瞬死んでいるのではと錯覚してしまう。
それを察したのか、ランボルギーニが言う。

「安心しろ。生きてはいる」

安心などできない。フェイトは奥歯を噛みしめる。

生きているとはいえ、はやての命はランボルギーニによって、文字通り握られている。あの手がほんの少し力を込めるだけで、はやての身体は枯れ枝の様にへし折られてしまうだろう。

「……バルディッシュ」

小声で愛機に声をかける。金色のコアが静かに明滅する。

四肢に力を込め、雷光の如く駆けだした。

「むっ！？」

稲妻と化した少女が突撃してくる。ランボルギーニは槍を巧みに操り迎撃する。

巨槍の穂が唸る。が、雷光を捉えることはなかった。

偉丈夫の手に痛み。視線を向けると、捕えていたはずの少女の姿が無かった。

背後から音が聞こえる。振り返ると、金の少女が、捕えていたはずの少女を抱えていた。

「……速いな」

フェイトのバリアジャケットの形状が変化していた。

レオタードとスパッツのみという軽装。左手だけだった装甲が右手にも付き、手足には光の羽〈ソニックセイル〉が輝く。

防御を捨て、機動性を突き詰めた〈ソニックフォーム〉。速度に全てを賭けたそれは、今見たとおりランボルギーニの攻撃を完全に避けることに成功した。

「う……フェイト、ちゃん？」

腕の中で、はやてが目を覚ます。

ホッと胸を撫で下ろす。

「はやて、聞いてくれる？」

「ん……なに？」

「わたしが時間をかせぐから、はやては先に月村邸に戻って」

はやての瞳が大きく開かれる。

「本気かフェイトちゃん。あの人相手に、一人で勝てるわけがない」

「でも、二人でも勝てるかわからない。思い出してはやて、わたしたちの目的を」

「そ……れは……」

口籠るはやて。フェイトの言う通り、自分たちの目的はランボルギーニを倒すことではない。あくまですずかを守りきること。

ランボルギーニはいわば足止め。彼を相手に真面目に戦う必要はない。隙を見て逃げ、すずかの下へ行くことが重要だ。

判っている。判っているが、はやては首を横に振った。

「あかん。すずかちゃんも大事やけど、フェイトちゃんも大事な友達や。友達を置いて逃げるなんてでけへん」

「ありがとう。でも、わたしなら大丈夫。勝てはしないけど、絶対に死んだりしないから」

「そういうことを言っとるんじゃ――――」

「ごめん」

フェイトの手の平がはやての胸に触れる。手の平から雷光が迸り、雷撃がはやての体を弾き飛ばした。

悲鳴を上げ、弧を描いて遠くへ飛んでいくはやて。ダメージが残らないよう加減したつもりだが、心の中で謝罪する。

謝罪が終わると同時、巨人から声が届く。

「話は、終わったか？」

「はい。わざわざ待っていただき、ありがとうございます」

金の少女と赤銅の巨人が対峙する。

バルディッシュから弾丸が吐き出される。戦斧が変形し、フェイトの身の丈を超える金色の刃が伸びる。

バルディッシュ・アサルトのフルドライブ、ザンバーフォームが姿を現した。

美しく、雄々しき刃が月下に輝く。

「気にするな。背後から襲いかかるのは我が信条に反する」

「騎士道、というやつですか？」

「騎士の称号を拝した覚えはないが、まぁそのようなものだ」

ランボルギーニが巨槍を上段に構え、フェイトが大剣を下段に構える。

「ひとつ訊いてもいいですか？」

「なんだ」

「背後から襲わない。正々堂々とした戦いをするあなたが、どうして灰被りの騎士団（サンドリオン シュバリエス）なんかにいるんですか？

……あなたの願いは、何なんですか？」

しばしの沈黙。巨人は瞳を閉じ、また開き、ようやく己が願いを口にした。

「簡単だ。不治の病にかかった友がいる。奴を救いたい、それだけだ」

フェイトの瞳が見開かれる。

大剣を握る手に力がこもる。

相手も、自分も、友のためにここにいる。友のために武器を取った。

ならば、もう話し合う必要はない。ただ戦い、一方の願いを踏みにじり、己が願いを叶えるだけ。

両者、同時に大地を蹴って疾駆する。

激闘の颶風が巻き起こる。

「わっ、きゃっ、くぎゃんっ！！」

がさがさと木から垂直落下。何本かの枝を折りながら、はやては大地へと落下した。

痛むお尻をさすりながら立ち上がり、自身に起こったことを考え、気付き、悔恨が湧き上がる。

「わたしは、何もできへんのか……」

今、はやてに出来ることはふたつある。

ひとつは今すぐ学校に戻り、フェイトに加勢すること。もうひとつは、フェイトの提案通り月村邸へと向かいすずかを守ることだ。

「……そんなん、考えるまでもないやん」

フェイトは、すずかを守るためにはやてを逃がした。今ここで学校に戻れば、フェイトの想いを裏切り、そして彼女の信頼を裏切ることになる。そんなこと、はやてにはできるはずがない。

「待っててよフェイトちゃん。すずかちゃん守りきったら、すぐに助けに来るから！」

大地を蹴り、飛行へと移るはやて。自分ができる最高速度で疾走する。

その時、自分と同じ顔をした少女とすれ違った。

「ふうっ！！」

「はあっ！！」

巨槍と大剣がぶつかり合う度、火花が散り、大気が震える。
ランボルギーニは剛力を以て少女を叩き潰し、フェイトは神速を以て巨人を切り裂く。
大地が穿たれ、雷光が迸る。土色の瀑布が上がり、瓦礫が薙ぎ払われる。
両者の戦いはさながら天災のぶつかり合いであった。
圧倒的な力と速さがしのぎを削り、破壊の渦を巻き起こす。
永遠に続くかと思われる戦いにも、やがて決着の時が来る。
フェイトは飛んで距離を取り、大剣を振りかぶる。
カートリッジが排莢され、大剣が雷を帯びる。
最高の一撃が繰り出されると読み、ランボルギーニも己が最大の一撃を用意する。
巨大な穂先が開く。淡い緑の魔力刃が伸び、さらに巨大な槍となる。
その大きさに一瞬たじろぐが、意を決してフェイトは大地を蹴る。
神速を以て巨人の懐へもぐりこみ、必殺の一撃を叩き込む。

「雷光一閃！！」

「仁王の剛鎚（デーヴァ・マルテロ）！！」

『Ｊｅｔ　Ｚａｍｂｅｒ』

『ＶＲＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＡＡＡ

大地が砕け、木々がなぎ倒される。
天災にも匹敵する破壊の渦の中。

少女の鮮血が、宙を舞った。

「が……ああっ」

フェイトは見た。巨人の刃を前に、己が金色の刃が砕かれるのを。
淡緑の刃が己が身を切り裂き、赤い血が噴き出るのを。
クレーターの底で倒れ、自らの血でできた赤い海へと身体が沈む。
死に向かう少女を、ランボルギーニは静かに見下ろしていた。
フェイトに、巨人の様子は分からない。だが、自分が倒れ、彼が立っているということは自分が負けたということ。

「ま……だ……」

否。まだ負けてはいない。黒い戦斧は未だ健在。確かに少女の手にある。
戦斧の柄を握りこむ。立ち上がろうと、力を捻り出す少女へ声が投げかけられた。

「立つな。まだ戦うようなら、今度こそ殺す」

フェイトの体が停止する。恐怖が湧き、体が震える。
立ち上がらない少女を見て、ランボルギーニが言う。

「それでいい。そのまま寝ていろ、我らが目的を果たすまでな」

「――――ッ！！」

少女の体に電流が走る。
彼らが目的を果たすという意味を思い出し、恐怖を別の感情が塗り潰す。
震えが止まり、四肢に再び力がこもる。
ここで倒れていては、なんのために一人で戦うことを選んだのかわからない。
せめて、はやてが月村邸へと辿りつくまでの時間を稼がなくてはならないのだ。
顔を上げる。
目があった巨人の瞳には冷たい感情が灯る。

「そうか。ならば仕方ないな」

槍が掲げられる。穂先が少女の頭蓋を狙う。
横に転がる程度では、あの槍は躱せない。躱すのなら、立ち上がり空へと逃げるしかない。
だが、大量の血を失ったフェイトにそんなことはできない。
動けない少女へ、断頭台の刃の如く槍が下ろされる。

「みんな……ゴメン」

最期の言葉は謝罪の言葉。この街で出会った友人たちの顔が、走馬灯のように脳裏を駆け抜ける。
そして――――――――

突如割り込んだ黒い影によって、巨槍は弾かれた。

「――――――――――え？」

「むっ」

呆気にとられた巨人と少女。二人を嘲笑うように、不敵な笑みで間に立つのは黒い青年。

大剣を振りまわし、大地に突き立て、巨人を真っすぐに見上げる。睨みつけてくる黒い相貌の持ち主へ、ランボルギーニが言った。

「貴様、テージスが言っていた魔導師か。確か名は……」

フェイトは思う。どうして、どうしてこうもこの男は――――――

「松田……怜治！」

ヒーローの様に現れるのだろうかと。

第４８話　騎士二人（前書き）

テスト終わったあああああああああああ！！！！！

二重の意味でえええええええええええ！！！！！

第４８話　騎士二人

人知れず、激闘が繰り広げられる海鳴市。
結界によって外部からの侵入および内部からの脱出は不可能になっている。
ここは海鳴市の境界線。本来なら魔法を使えない地球人には視認できない結界が聳え立つ場所。
結界を抜けようとすれば、海鳴へ行く理由を抹消され、自ら遠ざかる。無理に通ろうとすれば弾かれる。そういう結界なのだ。
そんな結界の前に立つ男が一人。
つま先から頭までを漆黒の外套に包まれその表情を窺うことはできない。

「ここが、海鳴か」

男の目の前に広がる街並みは静謐で、街灯に灯る人工の光で彩られている。
一見なに一つ異常は見られないが、実際は高ランク魔導師がしのぎを削る戦場と化している。
その事実を、男の目は捉えていた。

「すでに戦いの火ぶたは切って落とされたか。少し遅くなったが、まだ間に合うだろうか」

右手が伸びる。手袋に包まれた黒い指が結界に触れた瞬間、紫電が迸った。
指が焼け、異臭が漂う。外部からの侵入を結界によって阻まれたのだ。
無言で炭化した指を眺め、男は治癒魔法を発動。燐光が指を包み、

炭化した指を再生させた。

「まったく、随分と凶悪な結界だ。無理に入ろうとする者は殺しも辞さないと……」

ため息を漏らし、治ったばかりの手を再び結界に当てる。

結果は変わらない。紫電が迸り、男の手を容赦なく焼いていく。

男は怯まず、炭化していく手に魔力を注ぐ。魔法を紡ぎ、陣を描く。

「だけど、僕には無意味だ」

築かれた陣が発光し、結界に干渉。眩い燐光がせめぎ合い、やがて結界に人一人が通れるほどの孔が空いた。

悠々と、男は結界を抜けて海鳴へと入る。

結界の孔は即座に塞がり、炭化した手のすぐに再生された。

「さあ行こう。愛しき姫に会うために」

激闘が隠された海鳴も、人を拒む結界も、男の姿も何もかも、さっきまでと何も変わらない。

変わったとすれば、結界の外にいた男が、結界の内にいるということだけ。

魔法少女リリカルなのは　☆Ｔｈｅ　Ｒｉｄｅｒ☆　ＡＸＥＬ　第８話　騎士二人

「それじゃあわたし、行きますね」

「ああ、行ってこい」

ぺこり、と少女が頭を下げ、キャブスターが返した。

少女は立ち、魔銃士は倒れていた。キャブスターの視界には満天の星空が広がる。

両者全力を尽くした砲撃戦。その軍配は高町なのはに上がった。

キャブスターの周りには三つの球体が転がっている。魔力はもう底をつき、動かすことはできない。

なのはの方も消耗は激しかっただろう、額には汗が浮かび、顔には疲労の色が見て取れる。

それでも、少女は行くと言った。友を助けるために、疲弊した身体に鞭打って向かうのだ。

なのはの足に光の羽が生じ、少女の体を空へと運ぶ。

栗色の髪を靡かせ、少女は夜空の向こうへと飛んで行った。

「負けたか……さて、これからどうしたものか」

敗れたからといって、キャブスターの目的に変わりはない。家族を奪った者を見つけ、復讐を果たす。

その手段の一つが過去へと飛ぶことだったが、それも潰えた。

例え他の騎士団が目標の奪取に成功したとしても、報酬はキャブスターには回ってこないだろう。

勝者が全てを手に入れ、敗者は何も得られない。そういうものだ。

しばしの沈黙。やがて、答えが出た。

「変わらない。私が目指すモノは、何も」

そうだ。目的は変わらず、その手段の一つが消えただけ。ならば、他の方法を探すまで。
立ち上がり、転がる三つの球を回収する。
ずれた帽子をかぶり直し、歩き出す。

「さて、もう騎士団に用は無い以上、ここにいる理由もないな」

独り呟いた言葉は風に溶け、復讐に燃える魔銃士の姿が闇の中へと消えて行った。

「ディアーチェ、フェイトの治療を頼む」

無残に破壊された校舎、そして穿たれたクレーターの底で怜治は言った。
背後で、フェイトの傍らに立つディアーチェが少女を一瞥。視線を怜治に戻して言う。

「我は子烏の騎士の様に上手くはできん。小娘を助けたくば、さっさと月村邸に向かうのだな」

「それができりゃ、とっくにそうしているよ！」

ガキン、と火花を散らし、金属音が鳴り響く。
ビリビリと痺れる手に握るのは黒い大剣。目の前の偉丈夫が持つ巨槍とぶつかり合う。

「ふんっ！！」

裂帛の気合で振り下ろされる巨槍。迫りくる猛威に、魔力で限界まで筋力を強化。渾身の一撃を以て大剣を振るい、巨槍を迎え撃つ。

「――――らあ！！」

鋼と鋼がぶつかり合う。突風が吹き荒れ、クレーターの底には砂嵐が巻き起こる。

これはたまらん、とディアーチェがフェイトを背負って飛翔。戦線から離脱。

「ったく、見た目通りの馬鹿力しやがる。これは何度も受け切れねぇぞ」

「貴様の方こそ、見た目に反してなかなか。私と真っ向から力で勝負する人間など久方ぶりだ」

「そうかよ！」

再び刃が交叉。響く轟音は雷鳴の如く。二人の戦場は苛烈を極めて行った。

植えられた木々や、整えられたグラウンドはもはや見る影もなかった。

全てが薙ぎ払われ、破壊され尽くした校庭にディアーチェが降り立つ。

背負った少女を寝かせ、もう一度怪我を診る。

非道い状況なのは変わらない。肩口から袈裟切りされ、噴き出た

血で全身は彼女の瞳と同じ色に染め上がっている。
出血多量により顔は青白い。このままだと死ぬのは必然。

「まったく。もともと装甲が薄い防護服をさらに薄くして戦うとは莫迦な真似を……」

ディアーチェの口から出たのは心配の声ではなく苦言。彼女にとってフェイトはいつかの敵であり、仲間ではないのだから気遣う理由は無いのだ。
ディアーチェは本を開く。パラパラと頁（ページ）をめくり、目的の頁で停止。文字をなぞり、記録された魔法を発動する。

「もっとも、あの巨人の力の前ではどちらの恰好でも結果は同じか。となるとあの木偶の坊も甘いな。もう一歩踏み込めばこ小娘を両断できただろうに」

本から燐光が漏れ、同色の光がフェイトを包み込む。
癒しの波動が細胞を活性化させ、傷口を塞いでいく。

「我に出来るのはここまでだ。傷は治せても、失った血までは戻せん。」

さてどうしたものか、とディアーチェは思考の海に沈む。
外傷は塞がったが、このままだとフェイトは大量出血で死に至るだろう。
さっきまでフェイトの生死などどうでもよかったが、魔力を消費して外傷を治した以上、助かってもらわねば魔法が無駄になってしまう。
輸血しようにも機材が無い。いやそれ以前にディアーチェは人間ではなくプログラム生命体なのだから

勝手が違う。そもそも血液型が合うかも解らない。

「やはり、月村邸に行って癒し手に治療させるしかないか……」

闇の書を裏切った守護騎士に任せるのは癪だが、自分ではこれ以上できないのだから仕方ない。

理解はできるが、どうにも納得がいかない。

そもそも、自分たちはこんなところにいるはずがないのだ。

あの時、偶然すれ違ったはやてに話を聞いて、フェイトを助けるよう頼まれた。ディアーチェとしてははやての言うことなど世界が滅ぼうとも聞く気は無いのだが、彼女の連れが承知してしまった。

今思い出しても溜飲が湧く。二つ返事で任せろとほざいた青年と、それに満面の笑みでお礼をした少女。まったくもって、苛立ちの対象でしかなかった。

「奴も奴だ。自らの目的を放り出して寄り道など、何を考えて……」

轟音。

ディアーチェの背後、クレーターの底から土色の大瀑布が上がり、その中から怜治が飛び出して来た。

地上で一回バウンドし、大剣を突き立てて転がる体を強制停止。

一足遅れて、赤銅の巨人が降ってきた。

銀月髪の少女が巨人と青年を交互に見て、ため息を漏らす。

「やはり、打ち負けたか」

「バカ言うな。ちょっと槍の風圧で吹っ飛んだだけだ」

「どう違うのだ」

ディアーチェは横たわるフェイトを一瞥。怜治へ視線を戻し、告げる。

「テスタロッサの傷は治したが、あくまで外見だけだ。このままだと小娘は失血で死ぬ」

「くそ、やっぱりシャマルに頼るしかないか」

「癪だが仕方ない。そこで、策が二つある」

「なんだ」

「ひとつ、我か貴様のどちらかが巨人の相手をし、その間にもう一方は小娘を連れて月村邸へ向かう。

ふたつ、貴様が今すぐ死んで我が完全復活。巨人を瞬殺し、小娘を月村邸へ連れて行く」

一旦言葉を切り、黒い笑みで続けた。

「さあ、どちらがいい？我としてはふたつ目を猛烈に推したいところだが」

「当然一つ目だバカ」

ふたりの視線が同時にランボルギーニに向く。

巨人は巨槍を肩に担いだ姿勢でこちらを静かに見下ろしていた。

怜治達の話がまとまるまで待つ気なのか、苛烈な闘志はなりを潜めている。

怜治とディアーチェの視線が交錯。話は決った。決断を告げる。

「俺がこのデカブツの相手をするから、お前はフェイトを連れて行け」
「我がこの木偶の坊の相手をするから、貴様は小娘を連れて行け」
重なる二人の声。決断は両者異なり、微妙な空気が流れる。
青年と少女の視線が再度激突。両者の瞳には怒りのかがり火が灯っていた。
「小僧、貴様何を寝ぼけたことを言っておる。あの塵(ゴミ)人形から受けた傷が癒えておらぬのだから大人しく帰れ」
「てめぇこそ、力が落ちているくせに調子にのんな。はやてが相手にならなかったのに、ソックリさんのお前がどうにかできるわけねぇだろ」
「我が子烏より劣る？はっ、確かに一度破れたが、それは絞り滓がいらぬ入れ知恵をした結果だ。一対一で戦えば千回中千回我が勝つ」
バチバチと視線が火花を散らす。
そして、何かに気付いたように巨人へと視線が向けられた。
「……なんだ？」
「お前、なんでさっきから攻撃してこねぇ？自分で言うのもなんだが俺ら、これ以上ないくらいに無防備だったぞ？」
「不意打ちは主義に反する。それだけだ」
憮然とした巨人の物言い。それを聞いて、なるほど、とディアーチェの顔に黒い笑み。

素早く杖を向け、銀の魔弾を放つ。
ランボルギーニの対魔力の前に魔弾は消滅。巨人の瞳に戦意が宿る。

「これで、貴様の相手は我でいいな？」

「そちらがそれで良いのなら、受けて立とう」

巨槍が上がる。竜頭の穂先が振動し、獰猛な唸り声を上げる。

「おいディアーチェ、お前何してる」

「貴様こそ何している。さっさと小娘を連れて行け」

少女の背の黒翼が広がる。闇色の剣十字の杖が掲げられ、魔導書から燐光が漏れる。
ディアーチェの翡翠の瞳には闘争の炎が燃え上がっていた。

「戦いが始まるぞ。言っておくが、我はもう小娘のことは気にせんぞ」

少女の物言いに怜治は歯噛みする。
ディアーチェの言葉ははったりではなく真実だからだ。
気にしないと言ったら、ほんとうに気にしないだろう。
ランボルギーニとディアーチェが本気で戦えば、すぐ後ろにいるフェイトの身が危険にさらされるのは当然。
怜治がとる行動は一つだけだった。
フェイトを抱きかかえ後方にジャンプ。大剣となったスタンをバイクに戻し、跨る。
黒い流星となった青年が夜空を駆け抜けて行った。

二人っきりになった校庭で、巨人が口を開く。

「いいのか？先ほどの話だと、貴様は本調子ではないようだが」

「はっはっは。笑わせるなよ木偶の坊。
いくら力が落ちていようが、蛆が竜を討つことなどできん」

ディアーチェの嘲笑に、巨人の瞳に怒りの色が混じる。

「この私を蛆と嘲り、その矮躯で自らを竜と称するか」

「姿など関係ない。我は王で、貴様は愚かにも王に刃を向ける愚者だ。なんと称しようが我の勝手よ」

闇統べる王が杖を振る。背後に銀の魔弾が銀幕の如く展開し、巨大な魔法陣が三重展開。迸る魔力が重圧となって空気を押し潰す。

「来るがいい塵芥。我は永遠を生きる闇の王。ロード・ディアーチェだ！」

巨人が大地を蹴って疾走し、魔弾が王の命を受けて疾駆した。

月村邸。

アウレリア・テージスが倒れた今も、広い庭では自立型に設定されたゴーレムたちとアースラスタッフの魔導師との乱戦が続いていた。

石兵が振るう爪を杖で払い、光弾でゴーレムを砕いていく。

負傷した者はシャマルを始めとする医療スタッフの治療を受け、再び前線へと戻っていく。

そして奥では、クロノとユーノが灰被りの騎士団（サンドリオン シュバリエス）の首席であるテルスター・マスタングと。アルフとザフィーラがその使い魔ファルコンと戦い、そして、ヴィータが次席であるインシグニア・モヴァノを迎え撃っていた。

「おらぁっ！！」

「ふっ！！」

鉄槌と赤槍が交叉。二人の騎士の顔の間で火花を散らす。

ヴィータは弾けるように飛び退き、魔力で鉄球を錬成。鉄球を放り、鉄槌で撃ち飛ばす。

赤い魔力光の軌跡を残して飛来する鉄の流星。インシグニアが槍を巧みに操り、鉄球を弾く。

回避行動によって隙が生まれ、素早くグラーフアイゼンがカートリッジをロード。〈ラケーテンフォルム〉となり、推進剤による加速でヴィータが回転。スパイクとなった鎚が唸りを上げる。

迫る紅い旋風に対して防御など不可能。槍で受け止めようなどとすれば、その槍ごと体を砕く。

「噴進式（ラケーテン）――――」

唸る旋風を前に、インシグニアが槍を構える。

柄がスライドし、カートリッジを排出。鬼将の体を圧縮魔力が駆け巡る。

槍が赤く輝き、紅の旋風を迎撃する。

「穿つ虎（ボーア・ティーゲル）！」

「鉄槌（ハンマー）ァァアア！！」

鉄槌が咆え、槍が閃く。

スパイクが鬼将の甲冑に噛みつき、赤い穂先が鉄騎の騎士服を貫く。

鎧が砕ける音と衣を裂く音が同時に響く。

互いの得物が相手の身体を貫く直前に弾けるように飛び退く。

インシグニアの足下に鎧の破片が落ち、ヴィータの前を裂かれた赤い布が舞う。

「マジかよ。あそこから相討ちに持っていくかよ……」

頬を伝う汗を拭いながらヴィータは驚きを露わにした。

今の攻防、インシグニアは明らかに後手だった。にもかかわらず、彼女はヴィータの攻撃を防ぐどころか相討ちに持ち込んだ。

それは槍という武器の機敏さ以上に、インシグニア自身の実力を如実に表していた。

ヴィータは一回深呼吸。戸惑いを吐き出し、吸い込んだ空気で沸騰する頭を冷却して落ち着く。

鉄槌を下段に構え、眼前の敵を見据えて腰を落とす。

インシグニア・モヴァノの実力はヴィータ、ヴォルケンリッターと同等であるのは明らか。一瞬の油断が勝負を決する。

「――――はあっ！！」

大地を蹴ってヴィータが飛翔。ハンマーフォルムに戻ったグラーフアイゼンからカートリッジをロードし、鉄槌を振り上げ頭上から槍騎士の頭蓋を打ち砕く。

「炎の打撃（フランメ・シュラーク）！！」

インシグニアが後退して鉄槌を回避。鉄槌が大地を叩き、付与された魔力が炸裂し炎上、赤い炎の波濤が大地を舐める。

炎の壁を抜けてインシグニアが槍を振る。

ヴィータは鉄槌で槍を防ぎ攻撃に転じる。火花が散り、鉄槌と槍がせめぎ合う。

ヴィータが踏み込むタイミングに合わせてインシグニアが一歩後退、バランスを崩すヴィータを鬼将の拳が襲う。ヴィータは全身をねじるように強引に回避、回転の勢いを利用した一撃を放つも槍に防がれる。

打撃の衝撃でインシグニアが後退。ヴィータは返す刀で〈飛翔（シュワ）する燕（ルベフリーゲン）〉を放つ。鉄槌に打ち出された鉄球三発が疾駆、僅かに間を開けて槍騎士を襲う。

インシグニアが槍を旋回させて一球目を叩き落とし、二球目を彼方へと弾く。三球目をさばこうとした槍で突いた瞬間、鉄球が炸裂。爆炎と鉄片が撒き散らされた。

鉄球に着弾時炸裂の効果を付与した結果だ。

ヴィータはグラーフアイゼンにカートリッジを充填。敵の攻撃に備える。

黒煙の壁を引き裂き鬼将が疾駆する。突き出される槍に合わせてヴィータは後方に飛んで回避する。

「――――甘い！」

赤槍ガジャルグが唸る。インシグニアから魔力が注がれ、槍の穂先から魔力刃が伸びて少女騎士を襲う。

すぐさま前方に〈装甲手楯（パンツァーシルト）〉を展開。赤いベルカ式魔法陣が槍の進撃を阻む。

はずだった。

ヴィータのバリアに魔力刃が触れた瞬間、装甲手楯が紙の様に破れた。
少女の顔に驚愕。難なく防壁を突破した赤槍は勢いを落とすことなく、ヴィータの胸へと進撃する。

「こ、なくそぉっ！！」

反り返り、上半身を地面と平行になるほどに倒す。同時にグラーフアイゼンを振って槍を弾く。
がむしゃらに振った鉄槌は穂先を叩き赤い軌道を強制変更、必殺の刺突は少女の赤い髪を掠め、編み込んだ髪を解かして行った。。
背筋を冷たいモノが滑り下りる。大地を蹴って距離を取り、風に煽られる髪をバインドで結ぶ。

「おまえ……さっきのは、防壁破壊か？」

「私の愛槍の銘を忘れましたか？
破魔の赤槍ガジャルグ。この魔槍の前に、あらゆる防御と結界、そして鎧は意味を成しません」

「なるほど、この屋敷に張られた結界が突然消えたのもおまえのせいってことか」

冷静に返すも、インシグニアの槍の力はヴィータを戦慄させた。
防御・結界を破壊する魔槍。つまりは彼女の槍は防ぐには己が獲物で捌くしかない。
加えて鎧、すなわち騎士服の防御機能すら役に立たないのだ。
ヴィータはお気に入りの帽子を取り、魔力へと還す。騎士服の防御機能が効果を発揮しない以上、必要以上の装備は不要。攻撃の反動に耐えられるだけの装甲を残し、捨てた分を魔力の補填に充てる。

少女の蒼い瞳が騎士を捉える。あどけない少女の顔に、歴戦の騎士の面がはまる。

「久しぶりだな、こういうの。たった一発のポカで生死が別れるっていうか、そういう緊張感って」

ヴィータの脳裏を過去の記憶がよぎる。

空は黒い雲に覆われ、辺りは戦火で赤黒く振り潰された世界。闇の――夜天の書の守護騎士として渡り歩いた戦場は今とは違い愛情も友情も何もない、信じられるのは己が力のみ。

そんな単純で何の意味もない世界に、この一時、少女は舞い戻る。

「行くぞ、インシグニア・モヴァノ。本物の騎士ってのを見せてやる」

感情を捨てる。全身を戦闘兵器へと切り替える。

やることは一つ。目の前を敵を、この手に握る鉄槌で叩き潰す。

「は――――っ！！」

大地を蹴り、ヴィータは真紅の弾丸となって疾走。

グラーフアイゼンから立て続けにカートリッジが排出される。その数三つ。鉄の伯爵が、その最強の姿を現す。その名も〈ギガントフォルム〉。

少女の身の丈ほどある角柱状の槌が一閃され、大地を薙ぐ。

めくりあげられる岩盤。銀の鬼将の視界を遮るそれを、赤い槍は容易く粉砕した。

土壁の向こうから突貫する紅の鉄騎。振り下ろされる魔槌を、素早く引いた槍で受け止める。

甲高い音が響き、インシグニアの体が地に沈む。

「これが、本物の騎士？随分と非力な事で……！」

「安心しな、こっからガンガンギア上げて行ってやるよぉ！！」

両者の武器から弾丸が弾ける。迸る魔力が、騎士の戦いをさらに激化させる。

踏み出した足が瓦礫を踏み砕き、渇いた音を立てる。

崩壊したビルの瓦礫と粉塵で灰色に染まった街をトゥアレグが歩く。

自ら最強を誇る大魔法は戦場であった中心街を見事に崩壊させていた。

地面には巨大なクレーターができ、その表面をコンクリ片とガラス片が覆う。

乱立する高いビルは真上から押しつぶされ、無残な姿に変わっている。

人狼の足が止まる。獣の前にふたりの女が倒れていた。桃と銀の髪を持つ美女たちだった。が、本来なら艶のある長い髪も、瓦礫によってくすんで見えた。

人狼の膝が曲がり蹲踞（そんきょ）の姿勢。倒れた女たちの顔を覗き込む。

鼻筋が通り、凛とした美貌。男なら誰でも見惚れそうな美女の顔を見ても、トゥアレグの感情が揺れることは無い。

シグナムの髪をつかみ、顔を自分の前にまで引き寄せる。

苦悶の声が騎士から漏れる。意識がはっきりしていないのか、深緑色の瞳は焦点が合わず、四肢は力なく垂れている。息は絶え絶え

で、このままでは危険な状態になることは眼に見えた。

「ったく、人間のくせに随分と頑丈だな」

ペッ、とシグナムの顔につばを吐き、手を離す。騎士の顔が垂直落下。鈍い音が鳴り、僅かに頭が跳ねてまた落ちる。

「ま、生かしておいて利はねぇしな。ここで、殺しておくか」

トゥアレグの金の瞳が獰猛に輝く。残酷な笑みを浮かべ、爪が鋭く光る。魔力で補強され、爪が鋼の硬度となる。

「これで終わりだ。あばよ、時代遅れの騎士」

断頭台の刃の如く振り下ろされる魔爪。

五本の刃がシグナムの首を貫き、鮮血を散らす――――ことはなかった。

「なに……？」

人狼の顔に驚愕と疑問。振り下ろした腕の先、必殺の魔爪は騎士の首を貫かず、コンクリの大地を穿っていた。

外したわけではない。突然、シグナムの体が視界から消え失せたのだ。

トゥアレグの疑問を晴らすように声が響く。

「いけないな。女性はもっと優しく扱うものだ」

「――――！！」

顔を上げると、瓦礫の小山に立つ男がいた。つま先から頭までを漆黒の外套に包まれ、シグナムを脇に抱えていた。

「てめぇ――――」

誰だ、と言おうとした言葉が切れる。

考えるまでもない。海鳴を囲む結界がある以上、外部からの侵入は不可能。外套の男がどこの者かなど考えるまでもない。

「管理局員か。随分とまた珍妙な恰好した野郎だな」

「管理局？残念だが違う。
僕はついさっきこの街に入った闖入者さ」

外套の男の言葉に、トゥアレグが怪訝な表情を浮かべる。

「ついさっき入った？馬鹿を言うな、この街を包む結界を通り抜けられるわけがねぇ」

「信じるか信じないかは君の勝手さ。でも、僕はこうして街の中にいて、君の前にいる。
そして――――――――」

「僕は、君たちの敵さ」

その瞬間、圧倒的に巨大な魔力が噴出した。

「なっ！？」

殺気混じりの魔力の波濤に押し流され、トゥアレグの体が後方に飛ぶ。

男の魔力を感じ、全身から汗が噴き出る。

トゥアレグが思わず恐怖するほどに、男の魔力は巨大なものだった。

これほど巨大な魔力ならばなるほど、結界を抜けたというのも納得ができる。

「なるほどな。てめぇも〈緋色の夜の女王〉の力を欲しがってるはぐれ魔導師ってことか。悪いがとっくに定員オーバーだ！」

月からの魔力を受け、トゥアレグの魔力が膨れ上がる。術式を紡ぎ、男の足下へ展開。

獣人の最強の魔法が牙をむく。

「〈月落とし（ムーンフォール）〉！！」

展開した魔法陣が光輝き、召喚された超質量が男を押し潰すはずだが、男は未だ健在だった。立てられた人差し指から小さな魔法陣が展開し、回転していた。

トゥアレグの顔に驚愕。

〈月落とし〉は確かに発動し、超質量は召喚された。が、男はそれを指一本で支えているのだ。

「月の質量を召喚ですか……。大した魔法だが、ようは強力な重力魔法だ。逆方向から同等の力をぶつけてやれば簡単に相殺できる」

「ふざけんなよてめぇ、それがどんなことが解ってんのか……！？」

「さぁ？単純に僕が君より腕がいいというだけのことだろ。
ああそれと、さきほど〈緋色の夜の女王〉の力を欲しがっていると言ったがそれは違う。
僕は、彼女を殺しに来たんだ」

男の隠れた顔が闇の中で笑い、狂気の魔弾が殺到した。

月村邸上空にて、灰色と橙と緑の光が激突する。
緑の光が上昇、身体を回転させて緑の羽をばら撒く。緑の羽が光の矢となって下の二人に殺到する。

「来たぞ、アルフ！」

「分かってるよ！」

ザフィーラに叫び返し、アルフが前に出てザフィーラを背後に防壁を展開。
緑の矢が防壁に激突し弾かれ、地上へと散っていく。
光の雨が止むと同時にザフィーラが飛び出す。虚空を蹴って上昇、手甲に包まれた拳がファルコンを討つ。
双翼が盾となって拳を受け止める。ファルコンの口腔から光、寒気を感じてザフィーラが距離を取る。

「カッ！！」

魔鳥から吐き出される鮮やかな緑の炎。炎はザフィーラを包み込み、虚空を舐め夜の空を染める。

肉を焼く熱をザフィーラは〈精神甲冑（パンツァーガイスト）〉で防ぐ。ダメージは防ぐが、炎に包まれる息苦しさは変わらない。

アルフが下から〈フォトンランサー〉を放ち炎の檻を粉砕する。

炎から解き放たれたザフィーラが突撃する。ファルコンが再び緑の炎を吐き出すが、下方からのアルフの雷弾が炎を引き裂き守護獣に道を拓く。

ザフィーラの拳がファルコンの顔面を殴り飛ばす。魔力で筋力を強化し、全身の筋肉が膨れ上がる。

「がるううううぁっ！！」

守護獣が咆え、拳が振り抜かれる。緑の魔鳥は流星の如く地面に直下、大地に激しく叩きつけられた。

立ち上がろうとするファルコンを〈鋼の軛〉が拘束する。白い魔力条がファルコンを大地に縫いとめる。

アルフがトドメにと雷弾を放つ。が、突然割り込んできた影によって雷弾は不発に終わった。

土砂とともに飛んできたのは赤毛の少女、ヴィータだった。少女の視線の先には、銀の鬼将が立っている。

「おお、モヴァノ殿！」

「ファルコンか、悪いが助けることはできない。それを許してくれるほど、この騎士は甘くは無い」

インシグニアの赤槍の柄から排熱の蒸気が上がる。圧縮魔力の残滓の向こうで、騎士の瞳に闘志の炎が猛っていた。

膝をついたヴィータにアルフが駆け寄ろうとするが、ヴィータが

手を上げて制した。

「来んな！これはあたしの騎士としての戦いだ。手出しすんじゃんねぇ！」

ヴィータが大地を蹴って弾丸の如く疾駆。迎え撃つインシグニアの槍と鉄槌が激突し甲高い音が響く。

弾けるように離れ、また両者突撃する。鉄槌の柄が伸長し槌が巨大化した。その大きさに、銀の鬼将が踏み込みを躊躇う。

鉄槌の騎士が咆え、鉄の伯爵が唸りを上げる。

巨槌は大地を抉り塹壕のような穴を開けながら突貫する。

意を決して槍騎士が疾走。地面に顔を擦りつけるように身をかがめて前に出る。

騎士の頭上を鉄槌の柄が通過していく。髪を撫でる風に背筋が凍るが、これで巨槌の攻撃は回避できた。ガジャルグを突き出し、少女の胸を穿つ。

「甘ぇよ」

伸びた巨槌が縮小し、伸びた柄が縮む。舞い戻った鉄槌がインシグニアの後頭部を叩いた。

騎士の体が崩れ落ちる。が、大地を踏みしめ堪えた。

「ガジャルグ！！」

「アイゼン！！」

魔槍ガジャルグからカートリッジを三発ロード。圧縮魔力が漲り赤槍が輝く。

グラーフアイゼンからも同じく三発カートリッジをロード。鉄槌

に注がれる圧縮魔力が鉄槌を強化。
鼻が触れるほどの距離で騎士の嵐の如き剣戟が繰り広げられた。
鉄槌を槍が弾き槍の刺突を躱しカウンターの一撃を受け流す。赤い半月を描く槍を前に踏み込んで回避し零距離からの打撃を鎧で持ちこたえる。顔を潰す稲妻めいた膝を躱して鉄槌を振り上げるが肘を押さえられて動きが停止、閃く赤槍を身体を折り畳んで強引に躱す。身体が悲鳴を上げるが無視して鉄槌を振るう、生成した衝撃弾を叩きつけ〈鉄の咆哮（アインゲホイル）〉を近距離で発動。激しい閃光と音がインシグニアの視覚聴覚を一時停止、距離を取ろうとした鬼将に容赦ない〈巨人の一撃（ギガント・シュラーク）〉が炸裂した。
弧を描いて宙を舞うインシグニアに追い打ちをかけようと膝に力を込める。が、ヴィータの足下へ赤い槍が突き刺さった。
紅の鉄騎が鬼将を見据える。地を這う四足獣の姿勢をしたインシグニアの手には赤い魔槍。ならば、この槍は誰のものなのか、そんなヴィータの疑念にインシグニア自らが答えた。

「ガジャルグの第二形態、〈ズィリンゲフォルム〉。
魔力によって錬成されたもう一本の槍が、私の槍術をさらに高める」

「二刀流ならぬ二槍流か？そんなもんよく扱えるな」

足元の槍を引き抜き、インシグニアへと投げ返すヴィータ。
両手に魔槍を携え、銀の鬼将が不敵に笑う。

「その程度、できなければ騎士の称号などもらえません」

対峙する騎士の間を風が抜ける。
風を引き裂き銀の鬼将が疾走、紅の鉄騎が迎え撃つ。
裂帛の気合を以て鉄槌を振り下ろし、必殺の意志を以て双槍が閃

く。

「巨人の一撃（ギガント・シュラーク）！！」

「獅子王双牙（ローウェ・シュトーツェフ）！！」

全てを粉砕する巨大化した剛槌と同時に二か所の急所を穿つ双槍が激突した。

第４９話　怪鳥（前書き）

ギリギリ更新完了。

第４９話　怪鳥

全速力で月村邸へと向かった怜治。
どこかで追い抜いたのか、はやてよりも先に月村邸にたどり着いた。
医療テントの前に着地し、出てきたシャマルにフェイトを預けた。

「頼むぞ」

「任せて下さい。これが私の仕事ですから」

フェイトを抱え、シャマルは身を翻してテントの奥へと向かう。
少しして、怒声にも似た声が聞こえてきた。フェイトの容体はそれほど危険だったのだろう。
それでも、これ以上怜治に出来ることはない。

「よし、行くか」

医療テントに背を向け、再びスタンに跨り考える。ディアーチェの加勢に向かうか、ここにいるゴーレムや騎士団員を討ち倒すか。
思考の海に沈む怜治を、隣からの声が引き揚げた。

「あの、マツダさん」

ん？と視線を隣に向ける。管理局の制服を着た女性スタッフが立っていた。
同年代の相手にさん付けで呼ばれてすこしむず痒い思いをしている怜治に、女性が続ける。

「マツダさんも怪我が酷いですよね。治療をするのでこちらに来てください」

「いやいい、俺はこのまま他の奴らを潰しに……」

「来てください」

「……はい」

問答無用、拒否権なんてねぇにありはしねぇんだからとっと来いやゴルァ、と視線で言われた気がして、怜治は大人しくスタンから降りた。

テントへと足を踏み入れた瞬間、轟音が鳴り響いた。

「ッ！！」

テントから飛び出し、音のした方を見る。

結界によって魔力反応は感知できなくとも、何が起こっているのかはすぐに判った。

戦いが一つ、終わったのだ。

魔法少女リリカルなのは　☆Ｔｈｅ　Ｒｉｄｅｒ☆　ＡＸＥＬ　第９話　怪鳥

次元世界ベルカ。

ベルカ式魔法発祥の地であり、魔導騎士たちの故郷。
発達した魔法文化があり、騎士の称号を持った優れた魔導師と、特異な資質を持った王たちの世界。
そんな話を、毎日のように祖母から聞いていた。
彼女の先祖はベルカからの移住者だった。
ベルカの世界が滅びに向かった際に、生き残りとともにミッドチルダへと移住したのだ。
代々語り継がれていくベルカ騎士達の逸話を聞き、彼女は滅んだ故郷の復活を願うようになった。
だが、そんなことは不可能だ。
死者が蘇ることが無いように、滅んだ世界が蘇ることもない。
不可能の壁にぶち当たった彼女に手を差し伸べたのは、古代の魔法を研究している組織だった。
その危険性から使用・修得を禁忌とされた遺失魔法（ロストマギ）。組織がソレを求めるように、彼女もソレに希望を託した。
ベルカの世界を蘇らせ、話に聞いた騎士たちの世界を、栄光を取り戻す。
それが、インシグニア・モヴァノの願いだった。

勝ったと思った。驕りではなく、武器を通して確かな手ごたえがあった。
けれど、意識が遠のいていく。
それはつまり、自分が負けたということ。
少なくとも、ここで自分は戦線を離脱する。

（ああ……くやしいな……）

そうして、紅の鉄騎は意識を手放した。

「私の勝ちです、紅の鉄騎」

ヴィータが倒れるのを確かに見て、インシグニアが勝利を宣言した。

とはいえ、インシグニアも無事とは言い難い状態だった。

甲冑は八割が損傷し、魔力も限界に近い。これ以上の戦闘が厳しいのはインシグニアも同じだった。

互い満身創痍、騎士の称号を持った魔導師が死力を尽くして戦った結果とすれば当然のことだろう。

インシグニアの瞳が、ザフィーラとアルフを捉える。

臨戦態勢を取った守護獣と使い魔。その奥ではファルコンが拘束から逃れようともがいていた。

インシグニアが一歩下がると、ザフィーラ達が一歩間を詰める。

どうやら、逃がす気は無いらしい。

インシグニアが槍を構える。倒すことはできなくとも、引きに徹すれば問題ないと判断したのだ。

倒れた少女を人質にするような真似はしない。彼女が信じる騎士像に反するからだ。

大地を蹴り、守護獣が弾丸となって突撃。

赤い魔槍とザフィーラの手甲とぶつかり火花を散らした。

「ッ！！」

突然、インシグニアが距離を取った。槍騎士の顔には驚愕が張り付いていた。

騎士は己が槍を見つめ、静かに言った。

「先程、『私の勝ち』と言いましたが……取り消します」

ガジャルグに亀裂が走った。

「この勝負引き分けです。紅の鉄騎よ」

耐えることを止めたかのように、赤い魔槍が砕け散った。

騎士にとってデバイスは共に戦場を駆け、命を預ける己が分身。

それが砕けた以上、インシグニアは勝ったといえない。

ヴィータは武器を失わなかったが倒れた。インシグニアは倒れなかったが武器を失った。故に引き分け。ふたりの騎士の激闘は、勝者のない引き分けという結果で終わったと言うのだ。

槍が赤い欠片の群れとなってばら撒かれる前に待機状態に戻す。

インシグニアの手にひび割れたミニチュアの槍が納まる。

身を翻し去ろうとする鬼将を、ザフィーラが呼びとめた。

「待て、このまま逃がすと思うか？」

「逃げさせてもらいます。貴方達も、私に構う暇があったら執務官たちの加勢をした方がいいかと。

我らの首席は、ああ見えてなかなか強いですから」

そう言って、銀の鬼将が闇へと消えた。

インシグニアが倒れなかった以上、結界は消えない。魔力反応が感知できない状況で、彼女の俊敏さに追いつくことは不可能だ。

「どうする？」

「ファルコンは私が見張ろう。アルフは庭園で暴れるゴーレムたちを倒しに向かってくれ」

「はいよ」

短く返事し、アルフが走っていく。

アルフも本音を言えばフェイトの下へと向かいたんだろうが、結界の中では使い魔と主との繋がりすら断たれてしまっている以上我儘は言えないのだろう。

その主が今どんな状況にあるのか知らない使い魔を見送り、ザフィーラは地に縫いつけられた隼の使い魔へと視線を移す。

大地から飛び出した魔法条が、さらに強くファルコンを締め付けた。

〈紙獣(しじゅう)の書〉という魔導書がある。

使い魔の技術を応用した魔導書で、頁の一枚一枚が持ち主の意志に応じて獣の姿に形を変えるのだ。

ロストロギアではなく、知名度は低く出典は古い。名を知っている者はいても、詳しく性質を知る者は少ないだろう。

それが今、テルスター・マスタングの指令の下でふたりの少年に襲いかかっていた。

鳥となった頁が弾丸の如く飛ぶ。

「ユーノ、来るぞ！当たるなよ！」

「分かってるよ！」

魔力で強化され、高速で飛ぶ紙の鳥は物理的破壊力を持つ意思を持った弾丸であり鋭利な刃だ。

たかが紙と侮れば敗北は必至。

低空から弧を描いて急上昇した鳥を躱し、クロノが光弾を放つ。
光弾を受けた紙の鳥は無残に砕け散りその白い紙片が大地に落ちる。
背後から怖気。咄嗟に跳ぶと足元を鳥が通過していった。
杖先に光刃を展開し切り裂く。返す刀で光刃を射出し上空の鳥を穿つ。
着地すると同時に〈スティンガースナイプ〉を四発放つ。
四つの光弾がクロノの中心に螺旋を描いて周囲の鳥を一掃。

「スナイプショット！」

クロノが発したキーワードで弾丸が加速、さらに鳥を貫通させ、マスタングに襲いかかる。

「甘いな、執務官」

マスタングは赤い革の本――――〈紙獣の書〉を開き頁をばら撒く。
ばら撒かれた紙が集まり二メートル級の巨鳥が壁となってクロノの光弾を防ぐ。
巨鳥が崩れ、無数の小鳥に分かれて執務官に突撃する。
クロノは杖を前に出し〈ブレイズキャノン〉を放つ。熱量を伴う青い閃光が紙の鳥を焼く。
だが鳥の量は多く、砲撃で焼き切れず生き残りが殺到する。
クロノは後方に跳んで距離を稼ぐが鳥の飛行速度は早くすぐに距離は縮まる。
薄い刃が少年に迫る。

「伏せてクロノ！」

少年にしては少し高めの声が響く。
クロノは声の言うとおりに膝を追ってしゃがんだ瞬間に淡い緑の魔力鎖が頭上を通過していった。
魔力鎖が紙の鳥たちを貫き、空中に固定する。
鎖を束ねるのは淡い栗色の髪の少年、ユーノ・スクライアだった。
ユーノの鎖を掴む手に力がこもる。

「バインドブラスト！」

魔力が鎖を這い、内側から粉砕した。
その衝撃で鳥たちが粉砕され、破片が紙吹雪となって散る。
鳥の弾幕が消え去り、マスタングまでの道が拓けた。

「クロノ！」

「おう！」

ユーノが叫んだときには、すでにクロノは突撃していた。
少年が漆黒の弾丸と化し、一気にマスタングとの距離をゼロにする。
身構えるマスタングの両手両足をユーノがリングバインドで固定し動きを封じる。
クロノの魔杖Ｓ２Ｕから光刃が伸びる。
非殺傷故、殺す気はない。
だがその光刃で切り裂かれた者は命の代わりに魔力を奪われ地に伏すだろう。
マスタングの懐に潜り込む。水色の双眸が首魁を見上げる。

「これで終わりだ。テルスター・マスタング」

「それは、どうかな？」

光刃が閃く。

逆袈裟に身体を切り裂く刃を前に、マスタングの口元は歪んでいた。

四肢を止めるバインドが破壊され、歪曲した短剣が黒い魔杖ごとクロノの胸を貫いた。

外から響く爆音や轟音に、すずかは思わず耳を押さえた。

戦いが始まってどれほど経ったか。外からの戦闘音は終わりを見せず少女は不安を募らせていく。

外の状況が解らないことが余計少女を不安にさせる。

青年の言葉の力も今は消えかけていた。

この広い月村邸。その中にいるのはすずかとアリサだけだ。

姉や使用人は別の場所に避難している。

当然最初は反対したが、恭也やなのはたちの説得によってしぶしぶといった形で出て行ってもらった。

アリサが居るのは本人の抵抗があまりに激しかったからで、すずかもたった一人になるのは不安だったので親友である彼女には残ってもらった。

あの時の姉の複雑そうな顔は思い出すたびに申し訳なく思うが、親友には近く似て欲しく、家族は安全な場所にいて欲しかったのだ。

今思うと変なことかもしれないが、その時はそう思ったのだから仕方がない。

ベッドに身体を沈めて枕を抱きしめる。

「……大丈夫、だよね？」

自問して、無駄な事だと思った。
すずかは管理局の働きに賭けるしか自分の身を守れない。
十二月に何度か魔導師として戦ったがその力ももう絞り滓程度しか残っておらず戦うことはもちろん、簡単な魔法さえ使えないのだ。
そんな自分が魔導師相手に自衛などできるわけがない。

「――――あれ？」

ふと、疑問が湧いた。
クロノの言葉を思い出す。
アウレリア・テージスによって攫われた者は皆、少なからず魔法資質――――微量ながらも魔力を持っていたという。
なのはやはやても攫われていたのだからそれは本当だろう。だが、なら何故すずかは攫われたのか。
すずかは言葉通り魔法資質を持っていた。だがそれは今は消失し資質があったという痕跡だけが残っていると聞いた。故に、魔力は無く生成器官であるリンカーコアもない。
攫われた者たちは魔力を持っていた。だがすずかは持っていない。なのに魔法資質を有する者として攫われた。何故か。

「魔力があるから魔法資質もある、というわけじゃないのかな……」

魔法に関する知識を持っていないすずかに判断することはできない。
この事件が終わったら聞いてみようと思った。

「それは、あなたが特別な存在だからですよ」

「ッ！？」

背後からの冷たい声に、ベッドから転げ落ちるすずか。

振り向くと、灰色の背広の男――――マスタングがいた。脇には赤い革表紙の本を抱え、左手には歪な刃の短剣、右手には魔力の鎖が握られ、その先は部屋の外へと続いていた。

すずかは部屋の入り口を見る。

警備を担当していた魔導師二人が倒れていた。

全身を切り刻まれ、赤い線が縦横無尽に描かれていた。

視線をマスタングに戻す。冷たい微笑に少女の体が硬直する。

男は冷たい笑みを浮かべたまま、先ほど放った言葉の続きを言う。

「我々は〈緋色の夜の女王〉と呼ばれたプラウディア・エメロード・ギャランを復活させるため、その器に相応しい者を探していました。器に必要な者は三つ。

一つ、女性であること。

二つ、魔法資質を持っていること。

三つ、〈女王の魂（クイーンズソウル）〉に適合している、つまりは相性が良いことです。

一つ目は簡単なのですが、二つ目と三つ目はこの世界のように魔法文化のない世界では見つけづらい。ですので、選定をする必要がありました。選定方法は説明するまでもありませんね？」

すずかは答えない。目の前の脅威に、無力な少女は目を逸らすこともできなかった。

沈黙を肯定と受け止めたのか、マスタングが続ける。

「〈女王の魂〉は自分に適合する者の位置を漠然とですが我々に教えてくれます。それに従ってまず選定を行う範囲を決めます。

次に魔法資質を持った女性だけを攫います。この方法はその時々

によって違うのですが、今回は鉱石魔導師のテージスさんが居たことと、この日本という国の女性が占いやお守りに関心があることを利用してあのような方法を取りました。
そして候補者を集めたら、〈女王の魂〉に適合する者を探しあてます。これは〈女王の魂〉自身が探すので我々がするのは実質候補者を集めるところまでですね。
そして〈女王の魂〉は、貴女を選んだ」

「……どうして、ですか……？」

「さあ？我々は〈女王の魂〉との適合条件はその中に眠る女王陛下に近いモノがあるからだと考えています」

「わたしが、そのプラウディアって人と似ているということですか？」

「ええ。それが身体的特徴なのか精神面なのかはたまた思想なのかどうかは判りませんが、なんの共通点も無しに選ばれるとは思いませんから。
さて、話は終わりです」

マスタングが一歩前にでる。反射的にすずかが下がる。
男の左手が短剣を逆手に持ち直し懐に潜る。戻ってきた左手には手の平大の赤い宝石が鎮座していた。
美しく、そして禍々しく光輝く宝石にすずかは一瞬目を奪われ、すぐに恐怖で我を取り戻した。
少女の怯えた顔を楽しむようにマスタングが告げる。

「さて、力づくは好まないのでできれば自主的に受け取って欲しい。
……月並みな言葉だが、あまり拒むと、」

右手が引かれる。鎖がその先に捕えたモノを引き寄せた。
引き寄せられたものを見て、すずかが悲鳴を上げた。

「クロノくん！」

鎖で縛られた少年の顔は赤く、苦痛に顔を歪めていた。胸に小さな穴が空き、そのから流れる赤い血がクロノのバリアジャケットを汚していた。

「執務官殿の命が危ないですよ」

マスタングが短剣の切っ先をクロノに向ける。

「君たちは我々灰被り（サンドリオン）の騎士団（シュバリエス）を犯罪者だと思っているようですが、次元世界には我々以上に危険な者たちがいます。
永遠の命を保つために人を都市ごと食らった〈魔人〉。人はもちろん動植物から微生物までまさしく星ひとつの生命全てを殺し尽くした〈毒竜〉。悪魔信奉の狂人〈邪神導師〉。裏で流通している違法薬物の約八割を牛耳る〈麻薬王〉。各次元世界の自治を謳い時空管理局打倒を掲げる〈革命王〉。テロ組織や戦争地域に武器を売り続ける〈死の商人〉。奇妙な魔法と発明品でいつくもの世界を破滅に追い込んだ〈暗黒賢人〉。
次元世界の平和を守る管理局にとって宿敵ともいえるこの〈次元最悪の七人〉を〈クライシス・セブン〉と名付けました。次元世界中の賞金稼ぎや管理局員が追っていますが、このうち〈魔人〉と〈毒竜〉はすでに討ち倒され、〈暗黒賢人〉はもう長く現れないことから死んだと言われていますので、今は〈次元最悪の四人（クライシス・フォー）〉ですね。
そして、この短剣は今話した〈次元最悪の七人〉の一人、〈毒竜〉の遺品。毒剣〈クリス・ナーガ〉です」

歪な刃が不吉に光る。
毒剣と聞いて、すずかの背筋を氷塊が滑り落ちる。
赤い顔をしたクロノと毒剣を交互に見るすずか。その反応に満足したのか、そうです、とマスタングが言った。

「この毒剣に傷を負わされた者は刃に宿る毒に侵されます。毒の強さや量は私の自由。今は動けないとはいえ死ぬような毒ではありませんが、」

毒剣の切っ先がクロノの首筋に立てられる。
ほんの少し力を入れるだけで、毒の刃が少年の首を貫き殺すだろう。
すずかの顔から血の気が引いていく。

「やめて！」

「ええ、やめます」

あっさりと、マスタングは毒剣を退けた。
あっけにとられたすずかに向かって冷たい笑みを浮かべる。

「さっきはああ言いましたが、管理局員、特に執務官のようなエリートを手に掛けると後後面倒なのです。
ですので、もっと簡単かつ貴女に効果的なことをするとします」

赤い魔導書が光る。続けて、部屋の外から絹を裂く悲鳴が響く。
聞き慣れた少女の声に、すずかが目を見開いた。

「ちょっと、離して！離しなさいよ！」

声を荒げて金髪の少女、アリサ・バニングスが紙製の鳥に引きずられて部屋に入ってきた。
マスタングの前に投げ出されたアリサの胴をマスタングが踏みつけ、毒剣の刃がアリサに向けられた。

「今度は本気です。御友人を助けたければ、自らの手で陛下を受け止めて下さい。」

マスタングの手から〈女王の魂（クイーンズソウル）〉が離れ、空中を漂いながらすずかへと近づく。
宝石はすずかの目の前で停止。すずかが手を伸ばすのを待つかのように浮遊する。

「あ……あ……」

「早く」

歪な刃がアリサの首を撫でる。
迫る恐怖に身を震わせながらも、アリサは叫ぶ。

「ダメ、すずか！」

「やめるんだ！」

クロノも続けて叫ぶ。
それでも、少女に選択の余地などあるはずがなかった。

大剣が一閃される。
紺色の魔力刃が半月を描いて大地に振り下ろされる。
刃の先には自律式のゴーレム。豆腐を切るかのように脳天から股間までを両断、その先の大地に大瀑布を上げる。
拡散する衝撃の波濤が周囲を薙ぎ払う。
青年の立ち回りによって悉く瓦礫へと変わっていくゴーレムの軍勢。生き残りを管理局員たちが掃討していく。
やがて、全てのゴーレムが破壊され、庭園に瓦礫が散乱する。
息を吐き、怜治は大剣を肩に担いで言った。

「やっと終わったか。あの野郎、数だけは大層揃えやがって」

「その大層な数が、おまえが参戦しただけであっという間に終わったんだが？」

「今更だけど、ぜろって結構凄い人？」

怜治の後ろで鉄平と正義が息絶え絶えになっていた。
渡された魔法杖にもたれかかり、気合とか根性とかで立っている。
潜った場数の違いというやつか、治療を受けたとはいえ怜治にはまだ余裕があった。

「さぁ？なんでも魔力量は平均以上らしいが、他はまだ素人レベルだろ」

「素人レベルでそれなら、おれたちはあれか、本来なら非戦闘員の村人Ａとかか？」

「判りにくい例えだな……」

思わずため息が出た。
顔を上げると、アルフが手を振って駆けよって来た。
怜治たちも手を上げる。フェイトのことを伝えようと怜治が走り出す。

「おーい、アル……フ？」

怜治の走りが遅くなり、徒歩となりやがて止まる。
距離を詰めたアルフが怪訝そうに眉を顰める。

「怜治、どうしたんだい？」

アルフとしてはフェイトについて知りたいのだが、怜治はアルフの言葉も耳に入らない様であった。
黒い双眸が、まっすぐに月村邸へと向けられている。

「怜治？」

アルフの二度目の言葉も怜治には届いていない。
怜治は今、自身を貫いた感覚に呑まれていた。
結界によって魔法的知覚が妨害されている今、青年を貫く感覚はいわば第六感、本能的なものだった。
無意識のうちに、手は握り拳になっていた。いつの間にか、膝は曲がり跳躍の体勢になっていた。

「――――――――」

本能が告げる。月村邸にいる誰かに危機が迫っていると。
月村邸にいる者は限られている。誰が危険に曝されているかなど、考えるまでもない。

「あ、おい怜治!?」

「ぜろ!?どうしたんだよ!」

周囲の声を無視し、怜治は大地を蹴って飛翔した。

大地を這うように奔る銀の閃光。

時折揺れる危なっかしい軌道を描きながら一筋の流星となって大地を駆ける。

少女は焦っていた。同時に自分の修練の甘さに苛立つ。

行き慣れた友人の家。以前よりもずっと速く行ける筈なのに、なぜこうも遅いのか。

飛行速度が遅い。魔力の出力が安定しない。それが少女の気を散らせ軌道を不安定にする。

息を呑む。

危うく電柱に激突するところだった。

アスファルトの大地に足を突き刺し強引に軌道を修正した。

そのせいで速度が落ち、また苛立つ。悪循環だった。

少女がここまで急ぐのはさっきから感じる悪寒だった。

口で説明できない感覚。

それを信じて――内心外れて欲しいと願いつつ急ぐ。

やがて、見慣れた屋敷が見えた。バカ正直に門をくぐる気はない。

が、わざわざ回り道する気もない。

割けるだけの魔力を両足に叩き込み大地を蹴り、飛翔する。

黒翼を広げ、少女は突撃した。

視界が真紅に染まる。
身体が燃えるように熱い。まるで内側から火を焚かれているかのようだ。
同時に胸から込み上げてくる黒いモノ。
自分ではないナニかが自分を蝕んでいく。
その感覚に恐怖を感じ、そして抗えないことに絶望する。
やがて、以前見たあの光景がまた目の前に広がった。
城から紅蓮の草原を見下ろす女性、今は無き世界エメロードの最後の女王。
流れるような漆黒の髪が炎に照らされ僅かに緋色を帯びる。

「――――――――あ」

思わず言葉が漏れた。
プラウディアと目が合ったからだ。
血のように赤い唇が吊り上がり笑みを作る。
女王の背から赤い翼が広がる。
紅玉の如く輝く六対十二の赤翼が伸びてすずかを包む。
まるで赤い森に覆われるように、すずかの意識が闇に沈んでいった。

「すずか……ちょっとすずか！」

少女の部屋で、アリサの悲鳴が響く。
すずかの胸に〈女王の魂（クィーンズソウル）〉が埋まり赤い光を放つ。
少女の瞳に光は無く、闇色の眼窩が虚空を見つめる。

「素晴らしい。やはり貴女は器として最高の逸材だったのですね。拒絶反応なく陛下を受け入れた」

歓喜の笑みを浮かべ、マスタングがすずかに歩み寄る。

「今はまだ完全ではないでしょうが、やがて貴女の意識は陛下に塗りつぶされその身体は陛下のものとなる」

「ちょっとあんた、すずかにそんなことして何しようってのよ！」

背後からの声に、男が振りかえる。

肌を指す冷たい眼差しに一瞬怯えつつ、アリサは気丈に叫ぶ。

「大昔の魔法だかなんだか知らないけど、そんなもの使ってあんたは何がしたいのよ！どうせ下らないことなんでしょ。そんなことにわたしの友達を巻き込まないで！」

アリサの言葉に、マスタングの口元が吊り上がる。

くつくつとくぐもった笑いを漏らし、男が言った。

「何がしたい、ですか……。確かに、灰被りの騎士団（サンドリオン　シュバリエス）の目的は女王陛下の復活ではなくその先、遺失魔法（ロストマギ）によってそれぞれの願いを叶えること。そして私の望みは……そう、最期を見ること」

「最期……？」

そうです、とマスタングが頷く。

「プラウディア・エメロード・ギャランはその類い稀なる魔導の才を持ったがため、女王であると同時に強力な兵器であることを義務

付けられました。
女としての幸せを捨て、王としての責務と兵器としての殺戮にまみれた人生。それに耐えられなくなった陛下は自らその命を絶ち、いま一度人生をやり直すために〈女王の魂〉に自らの力と記憶を封じたと言われています。
そんな彼女が復活したらどのような人生を歩むのか。一人の女として生を謳歌するのか、それとも安穏と暮らす人間に嫉妬しその力を再び振るうのか。戦争によってすべてを捨てた者が生をやり直すとして、どのような最期を迎えるのか、私はそれが見たい」

「そんな、ことのために……？」

マスタングの願いに、アリサは戦慄する。
プラウディアの事を陛下と呼ぶが、目の前の男はプラウディアを敬愛などしていない。
ただの実験台、マウスか何かと同等に見ている。
男が願うのは過去の再生でも、未来への希望でも、誇りでも尊敬でも友情でもない。
プラウディアという女性がこれから受けるであろう苦痛を、苦悩を、その全てを観察し自らの娯楽に変えようとしている。
アリサと同じ人の姿。翼があるわけでも、角や尾が生えているわけでもない。
だというのに、同じ人間だとは思えない。
人の苦しみを悦楽に感じるモノを、そしてたったそれだけのためにここまでするモノを、同族だと思えなかった。

「最、低……！」

唇を強く噛みしめ、口に鉄くさい血の味が広がるのも気付かず吐いた呪詛の言葉。

その一言に、マスタングの笑みが消えた。その極寒の表情を繕うことなく、男がアリサに詰め寄る。

「最低、ですか。貴女の様な子供に私の考えが理解できるとは思えませんが……」

すらりと、歪な短剣が抜かれる。アリサを捕えた紙の鳥が少女を持ち上げ、空中に固定する。

少女の顔が恐怖で歪む。

「私も、実は怒るんですよ？」

あらゆる生命を殺す毒剣が一閃され――――なかった。

銀の魔弾が奔る。青い斬撃が疾駆する。

魔弾が短剣を弾く。マスタングめがけて放たれた魔弾は躱されカーペットに穴を開けた。

斬撃が隣の部屋から壁を粉砕しながら紙の鳥を切り裂く。倒れそうになるアリサを青年の腕が受け止めた。

「貴方たちは……！」

マスタングの顔に驚愕。この戦いで初めて見せる焦りの表情だった。

黒髪の青年が踏み出す。瓦礫が踏み割れ乾いた音を鳴らす。肩に担ぐのは紺色の刃を宿した黒い大剣。

茶髪の少女が窓から部屋に飛び込む。金色の剣十字の杖を男に向ける。銀光が背後に控えていた。

「怜治……さん？」

「はやて……！」

少女が青年の名を呼び、少年が少女の名を呼ぶ。
名を呼ばれた二人は呼んだ者に一瞬だけ視線を向け、すぐにマスタングへと戻す。
その瞬間、二人の口から同じ言葉が紡がれるのを彼らは見た。

――――大丈夫。任せておけ――――

「ギリギリ、間に合ったってところか……」

「いえいえ、もう終わりです」

体裁を整え、マスタングが勝ち誇った笑みを浮かべる。
男の背後にはすずかがいる。この少女が男の手にいる限り、男の勝利は揺るがないのだ。

「すでに彼女には陛下の意識がダウンロードされ始めています。貴方達は負けたのですよ！」

哄笑が響く。
怜治は静かに腰を落とし、大剣を下段に構える。

「残念だなマスタング。まだ勝負は終わっちゃいねぇ」

「――――なんですって？」

哄笑が止む。男の冷たい双眸と青年の不敵な双眸が交錯する。

「お前は知らない。ロストロギアを完全に制御する能力者がいるってことを……」

「ハッ、何を言い出すかと思えばそんなことあるわけ――――」

マスタングの言葉が途切れる。

怜治の顔は不敵な笑み。青年の言葉が、マスタングから余裕を奪い去る。

「まさか、そんな……貴方が！？」

「気付くのが遅ぇ！！」

大剣が一閃される。

半月を描く刃が水平に疾走。

迸る衝撃波が男を壁ごと粉砕して廊下へと叩きだす。

粉塵が舞い、クロノが苦しそうに咳こんだ。

「君は！もう少し回りを配慮しろ、この部屋を全壊させる気か！？」

「細かいこと気にすんじゃねぇよ。お前こそ、なにぶっ倒れてんだ情けねぇ」

「くっ……」

『レイジ、クロノ坊も心配だが、今はすずか嬢の方を優先しろよ』

「……それもそうか」

スタンを背中に回し、すずかへと近づく。

片膝をついて目線を合わせ、少女の胸へと手をかざす。

「ちょっと待ってろ、今すぐこんなもん取って……」

「させるかぁあっ！！」

怒号とともに、巨大な紙の鳥が部屋に飛び込んできた。

その後ろに、烈火の如く憤怒に燃えるマスタングの姿があった。

紙の鳥が怜治を突き飛ばし、部屋の隅まで転がした。

「失敗できないんですよ、ここまできて今更ぁあ！！」

マスタングが再びすずかの隣に立つと、紙の鳥が四枚の翼を広げ羽ばたく。

暴風が巻き起こり、部屋の中を蹂躙する。

「くそっ！アリサ、クロノを頼む。行くぞはやて！」

「は、はい！」

怜治はスタンを騎士形態（ナイトフォーム）に変形、同時にフラガラッハを起動し突撃する。

はやてが剣十字を振るい銀の魔弾が疾走、魔弾が鳥の翼を穿つ。

浮力を失った鳥が地に落ちる。

「はあっ！」

暴風が止むと同時に怜治が跳躍。

身体を回転させ黒い剣を叩きつける。

鳥の右上の翼の付け根から胸にかけて刃が一閃。着地すると同時

にフラガラッハで鳥の首を切り落とした。
鳥が崩れ落ち、その影から必殺の毒剣が突き出される。
怜治は首を逸らして何とか回避。連続の刺突を避けるために一旦後方に跳ぶ。
紙獣の書が発光、頁が破れ鳥となり矢の如く怜治に襲いかかる。

「ウッゼぇんだよ！」

スタンに魔力を注ぐ。
スタンの魔力変換機能によって怜治の魔力が電気に変換され剣から蒼電が迸る。
雷撃を纏った剣を一閃。
波状に広がる雷撃の蔓が鳥たちを撃ち落とす。
怜治が一気に距離を詰める。突き出された毒剣にフラガラッハを合わせ防いだ。

「どうやら、剣の扱いは俺の方が上手のようだな」

「そのようですね。ですが！」

赤い革の本を突き出す。
頁が宙を舞い鳥に変わる。
再び鳥が襲いかかる前に、怜治の手が紙獣の書を掴み、

「いい加減……」

「なっ！？」

「同じ手ばっか食うかバカ野郎！」

魔導書の頁を引き剥がした。
文字列の光が止み、宙の鳥たちが力を失って墜落していく。

「バカな、紙獣の書がこんな方法で……がっ！？」

鈍い音が響く。
怜治がマスタングに頭突きしたのだ。
さらにスタンを逆手に持ち変え、柄で思いっきり男の横顔を殴り飛ばす。
毒剣が零れ落ちた。
怜治はフラガラッハを待機状態に戻し、空いた手で拳を作り、渾身の一撃をマスタングに叩きつけた。
短い悲鳴を残し、マスタングの体が床に叩きつけられ弾み、また床に落ちた。
男は立ち上がらない。
沈黙が部屋に落ちる。

「これで、今度こそ終わりだ」

怜治が沈黙を破り、勝ちどきをあげた。
踵を返し、すずかへと近づく。邪魔者居なくなった以上、一刻も早くすずかから〈女王の魂（クイーンズソウル）〉を取り除かなければならない。
さっきと同じように片膝をついてすずかと目線を合わせた時、怜治は違和感を感じた。

「……？」

怜治は首を傾げ、すずかをまじまじと見つめる。
やがて、違和感は確信となる。
月村すずかという少女の髪は、こんなにも黒かっただろうか。

月村すずかという少女の肌は、ここまで白かっただろうか。
そして、
月村すずかという少女の瞳は、こんなにも紅かっただろうか。

「そんなじっと女性を見つめるなんて、失礼な方ね？」

ゾクリ、と怜治の背を悪寒が駆け降りる。
すずかの口から洩れた声はすずか自身の声だというのに、その言葉に宿るモノは、すずかではなにナニか。

「てめぇ――――！」

「遅いわ」

烈風が叩きつけられ、怜治の体が吹き飛ぶ。
そのまま烈風は四方の壁を粉砕し、少女の部屋を木っ端微塵に吹き飛ばした。
まるで鳥籠から解放された金糸雀（カナリア）のように、笑い声が響く。
空中に投げ出されたクロノとアリサを、怜治とはやてがそれぞれ抱える。
風が粉塵の籠をかき消し、怜治はその奥に立つ少女を見た。
背恰好はすずかそのものだった。だが、闇の様な黒髪や燃える紅蓮の瞳、そして迸る膨大な魔力はすずかとは別物だと伝える。なによりも、少女の背から生えた紅い翼がそれを顕著にあらわしていた。
六対十二の赤翼。それが少女を守る様に広がっていた。

「あれは……月村すずかなのか？」

クロノが信じられないといった表情で言った。

怜治はすぐに否定の言葉を述べる。

「違う。あれは……」

怜治の言葉に三人の視線が集中する。

そして、眼下の少女もまた、言ってみろと挑戦的な笑みを浮かべていた。

生唾を呑み込む。信じたくないという気持ちを表に出し、悔しさをにじませながら、怜治が言った。

「あれは〈緋色の夜の女王〉、プラウディア・エメロード・ギャランンだ」

第５０話　緋色の夜の女王

「フェイト！　シャマル、フェイトは大丈夫なのかい！？」

「落ち着いてアルフ。こっちも出来ることは全部やってるわ。あとはフェイトちゃん自身を信じましょう」

「く……っ」

悔しさでアルフは奥歯を噛みしめる。

結界のせいでフェイトの状態を感知できなかったとはいえ、主を守るべき使い魔として情けなくて自身への怒りがとめどなく湧いてくる。

全ての怒りを拳に込め、それを塀に叩きつけようとした瞬間、怒号の炸裂音が響いた。

アルフやシャマル、庭園にいる魔導師たちが屋敷へと視線を向ける。

屋敷の一角、すずかの部屋が粉塵に覆われていた。

次にアルフを貫いたのは膨大な魔力。

空を見上げれば、結界はいつの間にか消えていた。

それは、結界を張っていたインシグニアが離脱しマスタングが倒れたからで、つまり今は魔導師の騒ぎが大っぴらにされているということだ。

それに気付いたアースラスタッフが急いで結界を再構築する。

暗い空を再び結界が覆う。

魔法が外に漏れないことにほっと胸を撫で下ろすが、すぐに視線はすずかの部屋があったところへと向かう。

「一体、何が起こったんでいうんだい……」

「レイジングハート、今のわかった？」

『Ｙｅｓ，　Ｍａｓｔｅｒ』

海鳴を包む結界が消え、また別の結界が張られたという現象を見て、なのはが愛機に向かってつぶやいた。

結界が張られたままでも、先ほどと違いみんなの魔力反応をしっかりと感知することができる。

「フェイトちゃんの魔力がすごく小さい。シグナムさんとリインフォースさん、それにヴィータちゃんのも」

『Ｍｓ．Ｄｅａｒｃｈｅ　ｈａｓ　ｂｅｅｎ　ｆｉｇｈｔｉｎｇ　ｙｅｔ』

なのはとレイジングハートが魔力感知を駆使して仲間たちの状態を確認していく。

「うん。でも、けっこう苦戦してるみたい。

怜治さんとはやてちゃん、アルフとザフィーラはすずかちゃんの家だね」

『Ｍｒ．Ｙｕｎｏ　ａｎｄ　Ｍｒ．Ｃｈｒｏｎｏ　ｔｏｏ』

愛機の言葉になのははは頷く。

続いて感じた魔力に、少女は眉を顰めた。

「誰だろう。すごい大きな魔力がふたつ。一つはシグナムさん達の近くに。
もうひとつは……」
視線が泳ぎ、やがて止まる。
「すずかちゃんの家だ……」

苛烈な槍が動きを止める。
突然の停止に、ディアーチェが怪訝な表情。次の瞬間、全身を貫く魔力反応に全身が粟立った。
「ッ！　なんだ、この魔力は……まさか」
「どうやら、そのようだな」
ランボルギーニの言葉にも興奮が混じっていた。
巨人が槍を突き立て、銀髪の王へと訊ねる。
「私としては、もう戦う理由が消えたわけだが……どうする？」
「ふざけるなよ塵芥。貴様の事情など知らん。我の前に立った以上、貴様の辿る道は二つ」
ディアーチェの全身から魔力が湧き立つ。
それは最強を自負する誇りからか、より強いモノが現れたことへの苛立ちか。
翠緑の瞳に獰猛な炎が宿る。

「我に滅ぼされるか、我が闇の一部となるかだ！」

銀の魔弾が殺到する。

巨人は槍を構え直し、静かに対峙する。

「いいだろう。振りかかる火の子は払わねばならん」

『ＵＲＹＹＹＹＹＹＹッ！！」

「ハハハハハハッ！！」

憤激の槍が咆え、闇統べる王の哄笑が響きわたる。

魔弾の雨が止む。

獣人と黒衣の男、両者が動きを止め、視線を彼方へと向ける。

「く、くくく……」

トゥアレグの口元が吊り上がり、獰猛な笑みが浮かぶ。

「がははははははっ！！！　このバカでけぇ魔力、間違いねぇ」

下卑た笑いが響きわたる。

獣人の表情に倒されたであろう仲間を按ずる想いは無い。

そもそもいつかは殺し合うかもしれない相手だ。

彼らの役目をやり抜いた以上、彼らの生存に得は無いのだ。

そして獣人の裡を満たすのは己が願いが叶うということへの喜び

だった。

「女王様の復活だ！！」

獣の歓喜の咆哮が夜空に響き渡った。

烈風によって空中に投げ出された怜治は奥歯を噛みしめる。
間に合わなかった。
守るという約束を果たせなかった自分に腹が立つ。
苛立ち沸騰しそうになる頭に無理矢理冷却水をぶっかけて冷やす。
怜治の力なら、まだすずかを助けることはできる。
眼下に立つ少女を見据え、怜治は全身に力を込める。

「松田」

背後からの声に、怜治は半身を向ける。

「ザフィーラか……」

「これは、どうなっている？この巨大な魔力は？すずか殿は……」

「あれだ」

怜治は赤翼を従える少女を指した。
少女の姿を見て、守護獣は全てを察した。
続いて、主であるはやてへと近づく。

「主、ここは私に任せて主は治療を」

「大丈夫や。それよりもザフィーラ、アリサちゃんを頼む」

そう言って、はやては気絶したアリサをザフィーラに預ける。

「ついでだ。コイツも頼む」

怜治がクロノを放り、彼もザフィーラが受け取った。
守護獣の眉間に線が刻まれ渋い顔をした。

「主、ここはやはり私が……」

「ダメや。すずかちゃんはわたしが、友達が助けなきゃダメなんや」

はやての背から黒翼が広がる。
剣十字が光を宿し、少女が突撃した。

「……悪いが、お前ひとりに華をもたせるわけにはいかねぇんだよ」

一足遅れて、青年が駆けだした。

復活を果たした女王の前に、青年と少女が降り立った。
媚笑を浮かべ、女王が口を開く。

「何か御用かしら？」
「単刀直入に言うぞ。そのガキの体、返す気はあるか？」
「ないわ」
「そうか……なら！」
「力尽くや！」
はやてが剣十字を向け、銀光が奔る。
身をかがめて怜治が光弾と並走していく。
迫る銀と黒の弾丸を前に、プラウディアの瞳に火が灯る。
「強引な方々ね」
プラウディアの前に緋色の魔法陣が展開する。
陣が光り、無数のレーザー光が迸る。
緋色の光が銀の光弾を砕き、床を切り裂く。
光刃の網をくぐり抜け、怜治が双剣を振るう。
閃く黒と白、二つの剣が交叉し斜めの十字を描く。
十二の赤翼が羽ばたき烈風を生み出す。
風が咆え、怜治を宙に浮かす。背後ではやての悲鳴が聞こえた。
無防備となった青年へ、レーザー光が容赦なく殺到する。
『レイジ！』
「くそ――――ったれが！」

剣を手放し、鎧を外してスタンをバイク形態へと戻す。
スタンのボディを蹴り飛ばしレーザーの檻から離脱。
床に叩きつけられたスタンの悲鳴が上がる。
床を転げ回り、その勢いですぐさま立ち上がる怜治。フラガラッハの刃を伸長し、同時にカートリッジを二発ロード。圧縮魔力を全て強度に回し、プラウディアを迫るレーザー光ごと薙ぎ払った。
プラウディアが魔法障壁を展開させようと手を上がる。が、その手に光る縛鎖が絡みつき発動を阻害した。
一閃される刃が魔力の火花を撒き散らし、爆音によって女王の体が部屋の外へと吹き飛んだ。
烈風が部屋を蹂躙し、粉塵が視界を覆う。

「や、やりすぎや怜治さん！　すずかちゃんの身体に何かあったらどうするん！？」

「あんなんでやられてくれるなら結構だ。怪我ならシャマルが直すし、それでもダメなら責任くらい取る」

「……怜治さん、自分がいっとる意味解ってます？」

「お前にはどういう意味に聞こえたんだ。
……それよりも今のは」

怜治はフラガラッハを待機状態にし、スタンを大剣形態（ブレイドフォーム）に切り替えると、部屋にユーノが走り込んできた。

「大丈夫ですか！？」

「なんとかな。やっぱりさっきのはお前か、サンキュな。ってか、お前今まで何してたんだ？」

「大きな紙の鳥に押さえされてたんですよ。さっき突然消えたんで走って来たんですけど……っ」

ユーノが膝を折り崩れ落ちる。倒れる前に怜治が受け止め、壁にそっともたれさせる。

「すいません。魔力がもう限界で……」

「さっきの援護で十分だ。今は休んでろ」

「さっき大きな魔力を感じましたけど、状況はどうなってますか？」

「最悪だよ」

部屋から出る。邸内はすでに戦闘の影響で所々傷ついていた。補修が大変だなと思っていると、階下から緋色の魔弾が襲ってきた。

咄嗟に飛び退き魔弾を回避。階下へと目を向けると、大広間の中央で緋色の女王が笑っていた。

「上等……！」

ユーノの制止の声を無視し、大剣を構え飛び出す。

宙に浮いた体が重力に引かれて落下を開始する。

着地のタイミングに合わせて両足に魔力を集中し強化、無事に着地した。

女王は不敵な笑みを浮かべ、黒い双眸が少女を睨みつける。

「いい度胸だな、落下中の無防備なところを狙うなんて。舐めてん

のか？」

「ふふ、貴方程度の相手になぜそのようなことを？」

「油断してると痛い目見るぞ」

「あら、これは油断ではなく――――」

赤翼が広がる。紅玉の様な翼が光り魔法陣を多重展開していく。

「――――余裕というものよ」

緋色の光が、豪雨となって降り注いだ。
青年の姿を光の雨が一瞬で覆い尽くす。
敷石が砕け、床に無数と穴が空き粉塵が撒き散らされる。
穴と穴が繋がり更に大きな穴となっていく。
粉塵と煙が大広間を覆ったところで、ようやく光の雨が止んだ。

「こんなものなのね……つまらない」

「悪いな、こんなもんじゃないんだよ！」

鉄翼が広がり、内側から煙を引き裂く。
青年の背後に魔法陣が多数展開。陣の向こうから、鉄騎の軍勢が顔を出す。
竜人形態（ドラゴンフォーム）。
怜治が誇る最強の形態を前に、プラウディアが黒く妖艶な笑みを浮かべる。

「あらホント、少しは楽しめるかしら」

「少しで済ませるつもりはねぇぞ。本気でこねぇと痛い目見るぞ」

背後の鉄騎を掴む。

鉄騎が変形し、二振りの太刀が青年の両手に納まる。

加えて、待機する鉄騎たちがみな武具へと変わり、射出態勢に入る。

女王の翼が緋色に輝く。

二人の魔力が大気を震わせ、剣呑な空気が満たされていく。

「――――――――」

「――――――――」

視線が交錯し、両者の間で無音のゴングが鳴る。

青年が大地を蹴りつけ、その後を無数の武具が追う。

女王とその翼が迎え撃つ。

大広間に、激闘の狂想曲が響きわたった。

「ああ、もう！怜治さんったら自分で先に行って！」

烈風に吹き飛ばされ、逆さまになっていたはやては起き上がり、痛む体を引きずり部屋から出る。

「ああ、まだ腕が痛む。ディアーチェのやつ適当な治療したんちゃうやろな」

この場にいない少女に悪態をつきながら、魔力反応を辿って階下

に降りる。
そして、眼前に広がる戦場に驚愕を露わにした。
「なんや、これ……？」
文字通り、そこは戦場であった。
鉄の翼を背負った青年が二振りの太刀を振るい、赤翼を従えた少女が閃光の嵐を巻き起こす。
宙に舞う武具が奔り、緋色の閃光が哮る。
閃光の雨をくぐり、地を這うように女王に迫る。
右手の太刀で斬り上げる。十二の翼の一枚が盾となって刃を防ぐ。
返す刀で一閃される左の太刀。場所の胴を薙ぐ直前に怜治の腕が急停止。
太刀の先から左腕の付け根まで、緋色の円環が動きを封じていた。
少女が腕を振り下ろす。
緋色の豪雨が怜治を地へと叩き落とした。
全てを焼き切る閃光の刃が青年を捉える。
怜治は跳ねるように躱し、太刀を投げる。
プラウディアが首を曲げていとも簡単に回避。その一瞬の間に怜治が距離を詰める。
手に取る武器は太刀から斧へと変わっていた。
再び、緋色の円環が振りあげた腕を封じる。
「同じ手が通じると思うな！」
腕に魔力が注がれ強化。剛力が、力ずくで円環魔法陣を粉砕。斧が一閃される。
緋色の障壁と斧が激突。激しい光の大瀑布が上がる。
障壁に弾かれ、怜治は背後の武具を一斉射出。鋼の流星が降り注ぐ。

赤翼が輝き障壁を多数展開。流星を悉く防ぐ。弾かれた武具が大地に突き刺さる。
着地した怜治が再度突撃。斧を投げ捨て、大剣を掴む。

「させないわよ！」

閃光の雨が襲う。怜治は飛び退くが、突き立てられた鉄器が皆弾け飛ぶ。閃光に焼かれ貫かれ切り裂かれていく。損傷した鉄騎たちが魔法陣を通して消えていった。

「くっそ、このままじゃジリ貧だな」

建物全壊覚悟でヴェルサティスを呼ぶかと考えるがすぐに思いとどまる。
すずかを助けるためにプラウディアを倒す必要はあるが、ヴェルサティスの一撃はすずかの体を傷つける。
そんなことは怜治が望むことではない。

「――――――――ちっ」

迫る閃光の嵐を大剣の一閃で切り裂く。次の暴風に備え構えるが、緋色の嵐はやってこない。代わりに、少女の手に紅蓮の大玉が納まっていた。
十二の赤翼が大きく広がり、そこから流れる魔力がさらに紅蓮を大きくしていく。
怜治とプラウディアの距離は八メートル。その距離からでも圧倒的な熱量が肌を焼いてくる。
大広間の中央に、小さな太陽が君臨していた。
紅蓮を超えて真白に輝く太陽を抱く黒髪の少女。
その笑みが極寒に向かった時、火球が炸裂した。

「サタン・フレア」

色すら失くした超高温の劫火が大広間を呑み込んだ。

視界を塗り潰す白い光とともに、超高熱が襲いかかる。

広がる劫火の波濤をなんとか防御魔法で受け止める。白い劫火は魔力で構成された銀色の障壁すら溶かしていく。はやての尋常離れの魔力がなければ一瞬で呑まれていただろう。

炎の津波が納まり、視界に色が戻る。

回復した視界に映る大広間は、高熱によって敷石が溶けだし、白い蒸気を上げる酷い惨状となっていた。

その中央に立つプラウディアは悠々と微笑を浮かべていた。

女王が見つめる先に黒い鋼の壁が聳え立っていた。床に広がる魔法陣から生えていた。

プラウディアの炎を受け、表面が融解した壁は役目を終えたかのように魔法陣を通って帰っていく。

黒い壁が消え去り、その向こうで倒れている者を見てはやてが悲鳴を上げた。

「怜治さん！」

思わず物陰から飛び出すと、足元からの熱気で一瞬視界が揺らぐ。なんとか意識を保ち、床を蹴って飛翔、怜治の下へと辿りつく。

壁に守られていたからだろう。怜治の周りは炎の被害を受けておらず、無事に降り立てた。

それでも、怜治とスタンは酷い状態だった。

肌は点々と焼け焦げ、鎧は表面が溶けていた。

「怜治さん、怜治さん！」

肩を掴み、耳元で叫ぶが怜治から返答は無い。
熱にあてられたせいか、意識が混濁している。
黒い双眸にはいつもの活気が無かった。
治療のためにシャマルを呼ぼうとしたところで前方から殺気。
バッ、と顔を上げると、プラウディアが悠然と見下ろしていた。
白く細い指が紅い唇をなぞり、妖艶な笑みを浮かべると魔法陣が展開する。
緋色の絶望が輝きを放つ。
それが怜治へのトドメだと判ると、迷わずはやては青年の前に立って壁となった。
が、プラウディアの前では無意味。無慈悲な女王の閃光は少女ごと怜治の命を刈り取るだろう。
そんなことは、はやてとて予想している。だから、最期の希望に縋(すが)る。

「すずかちゃん！」

プラウディアの動きが止まる。
緋色の光に照らされながら、はやては叫ぶ。
プラウディアの中に、まだすずかの人格が生きていると信じて。

「すずかちゃん、気をしっかり持って！　そんな人に負けんで戻ってきて！」

「――――つっ、あなた、煩いわね！」

女王の右手が上がる。それが振り下ろされれば、閃光がはやてと

怜治を吹き飛ばす。
だが、その手は下ろされなかった。
「なっ、どうして」
プラウディアの顔が驚愕に歪む。
掲げられた白い手は、女王の意志に背いてひたすらに天井を指し続ける。
続いて女王の顔に苦悶の表情。右手を上げたまま、左手で胸を掻き抱く。
「く……そんな、まだこの娘の意識が……！？」
復活して初めて、プラウディアにとって予想外の出来事だった。
適合する器を見つけ、その意識を乗っ取り自身の記憶と知識そして魔力を上書きした。
上書きした後に、器本体の意識が再浮上してくるなど、考えもしなかった。
そのことにはやても気付き、なお一層声を上げる。
「頑張ってすずかちゃん！　自分を保って、昔の人のなんて追い払って！」
「～～～～ああうるさい！！　いい加減に、大人しく――――――！」
プラウディアの激昂とともに、緋色の魔法陣が彼女を覆い尽くす。
「すずかちゃん！！」

「あああああっ！！」

少女の叫びと女王の怒号。その両方を掻き消す閃光の嵐が巻き起こった。

怜治は夢を見ていた。

自分で夢だと判る夢、明晰夢だ。

闇の中に浮かぶ自分自身を第三者の視点からみているだけの面白みのない夢だ。

時に上から、時に下から自分の体を眺める。なんとも奇妙な気分だった。

（なんか、俺の体がたいが良くなってきてないか？）

もともと筋肉質な体系ではなかったが、魔法に出会ってからの戦闘や高町恭也との修練などによってより引き締まったというか、がっちりとした体つきになっていた。

「やれやれ、最初に言う言葉がそれか。相変わらずの血筋だな」

背後からのため息交じりの言葉に、怜治はバッと振り返る。

すると、いつの間にか視点が変わっていた。さっきまで見ていた自分自身から闇を見ていた。

そして目の前に浮かぶのは闇の中でもはっきりと判る漆黒に身を包んだ人型の影。

フードによって顔は見えないが、声の調子から男ではないかと怜治は判断した。

「お前、誰だ？　ここは夢の中だろ、なんで俺の知らない奴が出てくる？」

「夢なんてそんなものさ、と言いたいところだがここは正直に言おう。君にこの夢を見せているのは僕だ。だから、僕はここにいる」

怜治の眉間にしわが刻まれ、怪訝な表情。

それを気にすることなく男は続ける。

「僕に気付けたということはもうすぐ目覚めるのだろう。頼むから、目を覚ましても僕のことを忘れたりしないでくれたまえ」

「おい、それってどういう――――」

「では、また……」

男が手を上げる。

その瞬間、怜治の意識がまた闇へと沈んでいった。

「――――――――はっ！」

気がついた時、怜治は寝台に横になっていた。

無機質な蛍光灯の光が顔を照らし、その眩しさに怜治は顔を顰めた。

身体を起こすと全身に痛みが走りまた顔が歪む。

自分の体を見ると、全身に包帯が巻かれミイラ男の一歩手前であった。

「一体何が……」

周囲を見渡すと、どうやら医療テントの中の様だ。浅葱色に囲まれた空間に薬の匂いがした。

前後左右に寝台が並べられ、その上に負傷した魔導師たちが眠っていた。

右手を頭にあて、記憶を探る。

破壊されていく大広間。緋色の夜の女王の手に輝く太陽。

そして、白熱の劫火に焼かれる自分。

「――――――――!!」

弾けるように寝台から飛び降り、浅葱色の幕を突き破るように飛び出す。

すぐに外につながるかと思ったが、どうやらそのままブリーフィングルームに繋がっていたようだ。

クロノ、なのはにはやて、アルフにザフィーラとそしてディアーチェの五人の視線が同時に向けられ思わずたじろぐが、すぐに立ち直り単刀直入に訊ねる。

「何があった？」

答えはすぐには返ってこなかった。

皆の顔に影が差し、俯く彼らの様子を見て怜治は悟った。

「そう……なのか？」

「信じられぬのなら自分の目で確かめて来い。なかなかの光景だぞ？」

ディアーチェの言葉に従い、今度こそテントから出る。
そして、目の前に広がる光景に息を呑んだ。

「……」

広がる月村家の庭園。手入れされた芝生は土が掘り返され、小さなクレーターと盛り土の群れが無様な斑模様を描く。館へと目を向ければ、正面から巨獣に食われたかのように抉られ半壊していた。
吹き飛んだ少女の部屋が目に入り、怜治は周囲を見渡す。
いない。いる筈の少女が、守るべきはずの少女の姿がどこにもない。
取り乱したように少女の影を下がる怜治の肩を、ザフィーラが掴む。
二人の視線が交錯する。
青年の黒い瞳が困惑に揺れていた。いつもの不敵で力強い輝きは見えなかった。

「主が言うには、おまえが倒れた後に月村殿は一度意識を取り戻したらしい」

「なにっ！？」

青年の瞳に期待の色。
それが、より彼を絶望に落とすことになると解った上で、守護獣は続きを言った。

「彼女は一言、主に言ったらしい。
――――――――“ごめんなさい”と、それを最後に月村殿は自ら姿を消した」

殴られるような衝撃が怜治を襲った。
崩れ落ちそうになる身体を足で踏ん張り倒れるのを防ぐ。
狼狽を隠すように両手で顔を覆う。
心臓がバクバクと暴れ、血液が沸騰していく。手の爪が皮膚を貫き血がにじむ。
守れなかったことへの絶望が、悔しさが、自分への怒りが、怜治の心を埋めて行く。

「ふっざけんな……」

絶望すらも怒りに塗り潰され、ようやく怜治が声を発した。
黒い双眸には苛烈な炎。冷たく、そして不滅の炎が怜治の体を突き動かす。
歩き出した怜治にザフィーラが訊ねる。

「どこへ行く気だ」

「すずかを探す」

「場所は解っているのか」

「解らねぇ。でも、このままジッとしていたら一生解らないままだろうが」

「そうか……なら良い」

怜治の足が止まる。振り返り、ザフィーラを睨みつける。

「引っかかる言い方だな。まるで、俺がそういうのを待っていたみ

たいだ」

「その通りだ。執務官からのお達しでな、おまえがショックで使い物にならないか確かめて来いと言われてな」

あのガキ、と怜治は小さく悪態をつく。

毒にやられて弱っていても少年執務官の頭の回転は弱まることはなかったようだ。

怜治が寝ていた間に、彼らはすでに次へ行動を移していたのだ。

「で、俺の戦意確かめておきながらなんも進んでませんってオチはねぇよな？

当然、すずかの居場所くらいは解ってるんだろうな」

「無論だ。ついでに残りの灰被り（サンドリオン）の騎士団（シュバリエス）というオマケつきだ」

「……場所は？」

ザフィーラが右腕を上げ、褐色の指が天を指す。

怜治の視線が腕をなぞり、指が差す先を見る。

「――――空だ」

月が君臨するはずの空に、黒雲を従える城が聳え立っていた。

「結論から言おう。あそこにいるすずかではなく、プラウディア・エメロード・ギャランだ」

作戦会議が始まって早々、クロノが空気をどん底に突き落とす発言をした。

会議に参加しているのは治療が済んでいるスタッフとなのは、はやて、怜治、ディアーチェ、ザフィーラだ。

僅かな希望の否定を責める声は上がらない。否定材料が少なすぎる。

「上空に浮かぶ城……便宜上、『エメロード城』とでも言っておこう。

エメロード城から探知できる魔力反応はプラウディアを除いて四人分。先ほどの戦闘の結果から考えるとテルスター・マスタング、インシグニア・モヴァノ、クンタッシ・ランボルギーニ、トゥアレグ・パサートだろう」

「マスタング？あの野郎逃げ切ったのか」

「ああ、プラウディアが逃亡した時のどさくさに紛れてだろうな。紙獣の書は投げ捨てられていたが、クリス・ナーガはしっかりと持ち帰っている」

「捕えた使い魔から情報をと思ったが奴め、ファルコンを見捨てて迷いなく魔力供給を切ってしまった」

面倒なことだ、とクロノが呟く。

話が戻り、クロノが続ける。

「解析班からの報告によると、あの城はいつかの時の庭園と同じようなモノということだ。次元転送を可能にした魔法建築物だ。プラウディアが復活したから現れたのではなく、もともと騎士団の本拠地がアレなのだろう」

プロジェクターが作動し、部屋の中央にエメロード城の内部構造が映し出される。
最下層に動力炉があり、倉庫を挟んで中央には女王が居る思われる玉座の間、上層は居住スペースとなっているようだ。

「プラウディアが復活してなおこの地に留まる理由は解らない。敢えて推測するならば、まだ完全復活していない、つまりは身体と精神がシンクロしていないんだろう。
逃走中に拒絶反応で暴走し、次元の海に投げ出されたら敵わないからな」

「いまは新しい体に馴染むのを待ってるってことか」

クロノが顎を引いて頷く。

「タイムリミットは、これも推測で悪いが今から約二十七時間。約一日だ」

あまりにも短い残り時間に周囲がざわめく。
なのはが立ち上がり、声を荒げた。

「だったら……だったら急いで助けにいかなくちゃ！　もしも間に合わなかったりしたら……！」

「この戦力でか？」

クロノの冷静な言葉に、あ、と少女の口から言葉が漏れた。

「フェイトは重傷で意識も戻らない。守護騎士達はシャマルとザフ

ィーラ以外戦闘は不可能。はやてだって腕が折れているし、ユーノは魔力切れ。情けないことに、僕も立って喋っているのが精いっぱいだ。

満足に戦えるのはなのはと怜治とディアーチェ、あとは管理局魔導師がせいぜい二十人ちょっと。この数で彼らに挑むのは無謀すぎる」

「だったら……」

どうするの？という少女の問いに、クロノが顔を伏せる。

躊躇いを振り切るように顔を上げると、その答えを告げた。

「さっき、本局へ増援を要請した。

相手が相手だけに、管理局はＡランク以上で構成された実戦部隊を組み込んだ次元航行部隊を三部隊送ってくれることになった」

アースラスタッフたちがまたざわめく。

今度のは喜色を混ぜた反応だった。

管理局の編成について知らない怜治達が首を傾げていると、近くにいた魔導師が『アースラの様な次元航行船が援軍に来るということだ』と教えてくれた。

それが本当ならばこちらの戦力はアースラを含めて四隻の艦船と百人以上の魔導師となる。

一筋の光明になのはたちの顔に希望が浮かぶ。

これなら、と同じく希望に胸を膨らませた怜治がクロノに訊ねた。

「で、その援軍はいつ来るんだ？」

「二十四時間後だ」

シン――――、と希望に満ちた空気が静まりかえった。
クロノの言った言葉の意味をすぐに理解できず茫然とし、理解してからは納得できないと怜治が詰め寄った。

「ちょっと待てよ、あの城がこっちに留まっているのが二十七時間なのに、援軍待ってたらたった三時間しかないじゃねぇか！？」

「これでもかなり無理を通してもらったんだ。それにこの戦力なら三時間もあれば制圧は十分可能だ！」

「それは楽観的すぎるだろうが！！」

二十七時間という残り時間はあくまで推測だ。もっと長くかかるかもしれないし、もっと短いかもしれない。
第一、艦隊がそろったのを見てプラウディアが大人しく突入を許すとは思えないし、援軍到着と同時に突入が可能とも限らない。
それを考えれば、三時間という時間は短すぎる。
クロノらしからぬ、偶然に頼りっきりの作戦に怜治は異を唱えた。
だが、クロノの言葉によって一蹴されてしまう。

「だったら、今の戦力で勝てるのか？」

「――――――――――くっ」

怜治の顔が苦渋に歪む。
そうだ、結局その問題へとブチ当たる。

「敵はプラウディアだけじゃない。彼女を守る灰被り（サンドリオン）の騎士団（シュバリエス）もいる。
さっきも言ったが、今彼らと対等に戦える戦力は君となのはとデ

ィアーチェの三人だけだ。
プラウディアと直接戦った君なら解るだろう。彼女は、たった三人で戦って勝てる相手か？騎士団の妨害をくぐり抜けた状態で」

できるなどと言えるわけがない。
プラウディアとの戦闘、あの時彼女は本気ではなかった。下手をすれば全力の半分も出していなかったかもしれない。まず、怜治を脅威と認識していなかった。
なのはもディアーチェも強い。だが、それを遥かに超えてプラウディアは強いのだ。

「君の言いたいことも解る。だが、今は少しでも確率の高い手段を取るしかないんだ。
たった三人で女王に挑むか、タイムリミット寸前でも十分な戦力で当たるか。僕は指揮官として、事件の解決と皆の生存両方を考えたうえで後者を推す」

クロノの判断は正しいだろう。
スタッフ全員の命を預かる指揮官として、少しでも皆が生き残る方法を選んでいる。
納得ができなくとも、異論は飲み込むしかなかった。
クロノが皆を見渡し声を張り上げた。

「各員アースラに移動して作戦開始まで待機！次の先頭まで十分に体を休めてくれ」

スタッフたちが立ち上がり会議室から出て行く。
怜治もゆっくりとした歩みでそれに続いた。

アースラに移動し、怜治は宛がわれた部屋に入った。
白いベッドとイスと机のみが置かれた簡素な部屋だった。
部屋の隅に置かれた相棒を発見したので駆け寄り声をかけた。

「よう、酷い姿だな」

『会って最初に言うことがそれかよ』

バイク形態のスタンが不満気な声を上げる。
スタンのボディは怜治を守ったため損傷がひどく、溶けていたり亀裂が走っていたりと痛々しい姿だった。
怜治が車体に手を当てて魔力を注ぐとリカバリー機能が作動し、損傷部分を瞬く間に直していく。
あっという間に、万全な状態のスタンピードがそこに鎮座することになった。

『なぁレイジ、すずか嬢のこと……』

「時間が無いってのは判ってる。それでも助けてみせる」

『レイジ……』

「なーに、分の悪い賭けには慣れてるだろ。今回だって上手くいくさ」

ポンポンとシートを叩きながら笑う怜治だが、背後から投げられた言葉に笑みが消えた。

「残念だが、月村すずかの命は諦めろ」

「……ディアーチェ」

怜治の背後、部屋の入口には銀髪翠眼の少女が立っていた。
ディアーチェは部屋の質素さに憤然と鼻を鳴らしつつベッドへ腰を下ろす。
痛いほどの沈黙。それに耐えられなくなったスタンが口火を切った。

『えー……なぁディア嬢、あの巨人の旦那との戦闘はどうなったんだ？
お嬢が無事ってことはやっぱり勝ったのか？』

ディアーチェの顔が歪む。眉間に溝が刻まれ、苛立ちが顔に広がっていく。

「あの木偶の坊、突然『目的は達せられた。これ以上ここにいる意味は無い』などと言い出して消えおった。おかげで勝敗はつかずじまいだ」

『そ、そうかそりゃ残念……』

「さっきの、どういう意味だ」

怜治がディアーチェの前に立って言った。
少女が見上げる青年の顔には怒りの色。
答えぬディアーチェに、怜治が再度問う。

「さっきの、すずかの命を諦めろってのはどういう意味だ」

黒と翠緑の瞳が交錯。剣呑とした空気の中、少女が息を吐いた。
失望の色の混じったため息だった。

「貴様は阿呆でがさつだが、疑り深いところは評価していたのだがな……。よほどあの子娘が大事と見える」

「言いたいことがあるならはっきり言えよ。遠慮するような関係でもないだろ」

「確かに。ならば、言ってやろう。
――――管理局は、月村すずかを助けない」

「――――――――」

冷たい沈黙が降りる。
怜治の瞳が大きく開き、何かに首を絞められているかのように表情を歪ませる。

「どうして……そう言える」

絞り出す様な声の問いに、ディアーチェは静かに答える。

「プラウディア・エメロード・ギャラン。つまりは緋色の夜の女王とは確かな意志と自我を持った、正しく生きたロストロギアだ。非常に忌々しいが、その力は闇の書すら凌駕する。
故に、管理局はその存在を許さない。
自分に振りかかる脅威に敏感に反応し排除しようとするのが人間だ。
プラウディアは強大な魔量を持ち、その力で被害を出している。
『あの力の矛先を自分たちに向けられるかもしれない』、『かつて

の地位を取り戻すために力を振るい始めるかもしれない』。そんなんの確証もない、恐怖からの可能性を潰すために人間は動くものだ」

「管理局は、クロノが言ってた援軍はすずかを助けるために来るんじゃなく、すずかごと灰被りの騎士団（サンドリオン シュバリエス）とプラウディアを消すために来るって言うのか」

「最初からではないだろう。だが、もう手遅れだと判断すればそうなるのは必然。

我の予想では、送られてくる援軍にはあの小童よりも上の人間が、艦船には闇の書の闇を消し去ったあのアルカンシェル級の兵器が搭載されているだろう」

「そんな……」

信じられないと思う一方でディアーチェの言うことにも一理あった。いや、おそらく彼女の予想は正しい。

そもそも、管理局からの援軍はどういう目的で来るのだろうか。

月村すずかという少女を救うために来るのか。

プラウディアという未知の脅威を消し去るために来るのか。

より生存率の多い方に賭けるとクロノは言った。それは管理局も同じ考えのはずだ。

次元世界に対して脅威に成り得るプラウディアを倒し、次元世界の平和を保つためには少女一人の犠牲もやむなしというだろう。

そう、かつてギル・グレアムが八神はやてを犠牲に闇の書を永遠に消し去ろうとしたように。

「だったら、どうすれば……」

当然、その予想は最悪の場合に限られる。
怜治達が死力を尽くしてプラウディアからすずかを解放すればなんの問題もない。
だが、それを成し遂げる可能性が低い以上、怜治の望む結果に終わる方が奇跡となる。
もうすでに、本気ですずかを助けようとしているのは地球に住む者たちだけだろう。
怜治の視界が闇に染まっていく。
守ると約束したはずの少女が守れない。その絶望が青年の思考を停止させていく。

「一つだけ、月村すずかを助ける手段がある」

闇に沈む精神を掬い上げるように、最期の足掻きを見るように、ディアーチェの声が響いた。
俯いた顔を上げる。
怜治の顔を見るディアーチェは悪魔の様に笑い、見下すように、最期の希望を提示した。

「なぁ怜治、貴様、死ぬ気はあるか？」

かつん、という足音とともに、漆黒の男が怜治の前に現れた。

これでよし、とインシグニアが小さく呟いた。
女騎士の手にはたった今修復が完了した破魔の赤槍〈ガジャルグ〉が握られていた。
自室を出て広間へと向かう。
大きな円卓が置かれた広間へと入ると、席についていたのはトゥ

アレグとランボルギーニの二人だけだった。
随分と人が減ったなとインシグニアは思った。
先ほどの戦いで一人が捕縛され、一人が何も言わず脱退した。首席の使い魔も消え、残った戦力はたった四人。そして誰一人無傷の者がいないのだから、先の戦いがどれほど厳しいものだったかは良く判った。
席につき、口を開く。

「マスタングはどこに？」

「女王様の器とお話の最中だ。あの野郎、抜け駆けなんかしねぇだろうな」

「完全復活したのならば魔力で判る。そう焦らなくとも良いだろう」

「うるせぇぞクンタッシ……」

ギロリ、と獣人の金の瞳が巨人を睨みつける。
トゥアレグは苛立っていた。先の戦いでの闖入者。あの男とは結局決着がつくことはなかった。戦闘中に女王の復活を知り、少ししてマスタングから帰還命令が届いたからだ。
復活とともに帰還するのはもともとそういう計画だったから大人しく従ったし異論はない。だが、撤退する際にあの男からなんの妨害も追撃もなかった。逃がされたのだ。
獣人としての誇りを持ち、人間を見下すトゥアレグにとって最大の侮辱だった。自分よりも劣るはずの人間に圧倒され、あまつさえ見逃された。これ以上ない屈辱だった。

「そういえば、パサートの覆面の下はそれだったのですね」

「ああ？　なんだ、獣人とは仲良くできませんってか？」

「いいえ、ただ今まで隠されていたモノを知ったことに対して感想を言ったまでです。そもそも仲良くしようなどと思っている者はここに誰もいませんよ」

「はっ、それもそう……なんだ？」

トゥアレグが腰を上げ、視線を外へ向ける。

獣人の聴覚が空気の振動を捉えていた。その音の正体は、城の防衛機能による魔法爆撃だった。

それが起動しているということは、何者かが近づいているということだ。

近づく魔力を感知に他の二人も立ち上がり得物を手に取る。

三人の魔導師が臨戦態勢に入ると同時に、広間の壁が粉砕された。

苦しい。

裡から自分の全てを呑み込もうとする緋色の光を瞼の奥に感じ、すずかは顔を曇らせた。

呼吸は苦しく、全身から嫌な汗が噴き出る。

喉はからからで、眼の奥は燃えるように熱い。

心臓は締め付けられるように痛い一方で鼓動は激しく今にも破裂しそう。

無理やり座らされた玉座から投げ出された両足の感覚はすでになく虚しく揺れていた。

すずかの苦しみ呼応するように背中の赤翼が蠢きそれが背中を蹂躙する。

終わることない内側からの責め苦に、すずかは耐えていた。

クロノの予想に反して、すずかはまだ自分の意識を保っていたのだ。

「そろそろ、諦めてもらえませんか？」

横からの声に、視線だけを向ける。

灰色の背広に紺色のネクタイに黒縁眼鏡をかけた、マスタングが冷たい瞳でこちらを見ていた。

「だったら……早く、この世界から出て下さい。そうすれば、すぐにでも身体は渡します」

「できません。貴女が身体の主導権を取り戻したせいで、貴女の器としての優秀性に疑いが生じましたので。

次元空間で暴走でもされたらたまりませんからね」

ふん、と鼻を鳴らしてマスタングは黙った。

すずかがこうしてプラウディアからの侵食に耐えているのは、ただ女王の力が友達を傷つけることを恐れたからだ。

自分の住む家をあっという間に破壊し尽くしたあの力。人を傷つけても何とも思わない冷たい心。

アレを、大切な人たちの住む世界で解き放ちたくなかった。

だが知識のない少女に次元を超える手段など解らず、結局ここに来てしまった。

こうして耐えていれば、いつか助けが来るかもしれない。それでも、すずかはもうあそこへ戻るつもりはなかった。

見てしまったのだ。自分が傷つけた青年の姿を。

それを庇い、前に出た友人の悲しみの混じった必死な顔を。

自分の中には人を傷つける力しかない。誰かを傷つけるなんてしたくないすずかは、この力とともに心中するつもりであった。

だからこそ早く出発してほしいのだが、それをマスタングが渋ったためにいつまでも地球に残っている。
早くこの世界から出て行きたい。そうしないと、遠からずすずかの身体は今度こそ乗っ取られる。そうなれば、彼女はまた大切な人を傷つけるかもしれない。
そんなこと、すずかは絶対に嫌だった。
もう、大切な人を傷つけたくない。そして、あの凶暴な姿を大切な人に見られたくないのだ。

「――――――――――!」

遠くから轟音が響き、城が僅かに揺れる。
マスタングが一瞬驚いた顔をしたが、すぐに落ち着きを取り戻した。思念通話で状況を知ったのだろう。

「まさか……」

少女の瞳が開かれ、心がざわめく。
それは歓喜であり、同時に苦痛でもあった。

轟音とともに広間の壁が粉砕され、その向こうから黒い脚が踏み出された。
臨戦態勢のインシグニアたち三人の前に、黒髪黒眼、鉄の翼を背負った青年が現れた。
青年の背後には無数の鉄器が浮遊し、活躍の時は今か今かとエンジンをふかしていた。

「誰だ、てめぇ」

トゥアレグが訊ねた。
青年がさらに一歩踏み出し、名を告げた。

「松田怜治――――魔導騎兵（ライダー）だ」

青年は、たった一人で死地へ向かう。

第５０話　緋色の夜の女王（後書き）

そろそろすずか編も佳境です。
次回あたりからスパートかけていきたいです。

第51話　アジ・ダハーカ

援軍到着まであと二十時間。クロノは慌ててブリッジへと向かった。

突然、エメロード城に動きがあったからだ。

ブリッジに駈けこむと、モニターには爆撃の嵐に包まれたエメロード城が映っていた。

クロノに気付き、スタッフが状況を報告した。

「誰かがエメロード城に向かっているようです。この魔力反応は――――」

「怜治……！」

ギリッ、と奥歯を噛みしめクロノは踵を返してブリッジから出ようとするが、それを銀髪の少女が妨げた。

「ディアーチェ、なんのつもりだ」

「それはこちらの台詞よ。貴様こそどこへ行く気だ？」

「怜治を呼び戻す。いや……」

クロノの目が細くなる。剣呑な光が瞳に宿る。

「これは、君の差し金か。どういうつもりだ」

「どういうつもりかと言われてもな。我は貴様らの同志になった覚えはない。我に都合良い状況だった故、利用させてもらっただけだ」

「貴様……！」

クロノが手をポケットに突っ込む。Ｓ２Ｕを取り出そうとすると、クロノの目が見開かれた。

執務官の顔に焦りが生まれる。戻された手には、なにも握られていなかった。

クロノが茫然と自分の手を見つめていると、慌てた様子でなのはが駆けこんできた。

「クロノくん大変！　わたしのレイジングハートが無くなってるの！」

「何っ！？」

狼狽した様子でなのはがさらに続ける。

「わたしだけのじゃない、フェイトちゃんのバルディッシュやシグナムさん達のデバイスもないの！」

驚愕に顔を歪ませ、クロノがディアーチェを睨みつけた。

「説明くらい、してくれるんだろうな？」

「ん、ああ説明か……。そうさな、では皆を集めるがいい」

踵を返し、ディアーチェはブリッジを出て行く。

怪訝な表情を崩さずに、クロノはその後をついて行った。

「さて、どこから聞きたい？」

ブリーフィングルームの椅子にどかっと座り、集めたみんなの前でディアーチェが言った。

集まったのはクロノとなのは、はやてとその守護騎士達。フェイトは未だ意識は戻らず、アルフは彼女を看ていていない。シグナムとリインフォースはいるが、手足に包帯が巻かれまだ痛々しさが残る。

剣呑な視線がディアーチェに集まる中、クロノが口火を切った。

「どうして怜治を一人で行かせた。それに、僕らのデバイスはどこに隠した。それも君の仕業なんだろ」

張り詰めた空気が部屋を満たす。

一部殺気に近い視線を向ける者をいるが、ディアーチェはどこ吹く風で語り出す。

「まず怜治を一人で行かせた理由だが、それは貴様らと同じよ。我にとってその方が都合が良かったからな。

貴様らの魔導器は、怜治に持たせた」

無言で、クロノが怪訝な表情をした。

「そんなことしてなんになる。僕のＳ２Ｕならまだしも、なのはたちのデバイスは他人に扱えるものではないだろ」

純粋な魔法発動の道具であるストレージデバイスとは違い、なのはやフェイトが使うインテリジェントデバイスは発動の手助けとなる処理装置、状況判断を行える人工知能も有し意思を持つため、基

本本来の持ち主の許可なく他人が扱えるものではない。守護騎士達のアームドデバイスももともと本人に合わせて調整されたものであるからそれ以外の魔導師には扱えない。
さらに凍結の変換資質を持たない怜治に氷結魔法に特化したデュランダルなど持たせたところで意味がない。
理解できない、と言った表情をしたクロノを嘲笑うようにディアーチェが言った。

「怜治の希少技能は知っているな？」

「……ロストロギアを制御する力、だろ」

そうだ、とディアーチェが頷く。

「ロストロギアの制御などとそんな能力、おかしいと思わんか」

「おかしいも何も、事実彼はロストロギアを制御している。君がその実例だろう」

「確かに。だが、何故ロストロギアしか制御できぬと考える？　それ以外も制御できるのではないかと何故考えない」

「……何が言いたい」

はぁ、とディアーチェが失望のため息を吐いた。
翠緑の瞳が白い少女を捉える。

「高町なのは、ロストロギアとは何だ？」

「え、わたし！？

えっと……昔滅んだ世界から流れ出た魔法や技術の総称、だっけ？」

「まぁそんな認識で構わん。

さて、貴様らもロストロギアに関わるのは初めてではないのだから解っているだろうが、ロストロギアとはその形も能力もそれぞれ違う。製造方法も製作者も、本来の目的と用途もだ。

ロストロギアの共通点はただ過去に在った世界の遺産であるということだけ。そして、その技術をロストロギアと決めるのは管理局だ。間違っても、技術や魔法が進化してロストロギアになるわけでも、ロストロギアに認定されるとソレになんらかの変化が生じるわけではない。

ここで先ほどの疑問に戻る。なぜ、松田怜治はそんなロストロギアを制御し操れる？　いや、なぜロストロギアしか制御できないと決めつけられる？」

本来、ロストロギアを制御し操れるのはそれに適合した者を除いて他にいない。

松田怜治はスタンピードという〈魔導二輪〉と適合し、八神はやては〈闇の書〉と適合し、今回月村すずかが〈女王の魂（クイーンズソウル）〉と適合した。

だが松田怜治は〈魔導二輪〉以外にも〈ジュエルシード〉と〈闇の書〉の闇を制御した。

それが彼の希少技能だからと言えばそれまでだろう。だが、もしそうでなかったとしたら、松田怜治の希少技能を皆が勘違いしていたとしたら。

考えてみれば、怜治を検査して希少技能の正体を確認したわけではない。彼が〈ジュエルシード〉と〈魔導二輪〉を制御したことと、リンディが昔聞いたという特異点の話から勝手に判断したのだ。

「それは……」

クロノが口籠る。

やがて、一つの答えにたどり着いた。

だが、それをあっさりと口にできない。そんなことはあり得ない。

あったとしたらそれは人間の域を超えているからだ。

執務官の顔に浮かぶのは驚愕と困惑。それをじっくりと堪能した後、ディアーチェが告げる。

「そうだ。松田怜治の真の能力、それは――――」

「あらゆる魔法、魔法技術、魔法による事象それら全てを奪うのだ」

魔法少女リリカルなのは　☆Ｔｈｅ　Ｒｉｄｅｒ☆　ＡＸＥＬ　第１１話　アジ・ダハーカ

『あり得ねぇ！　そんな力、人間が持てるわけがない』

時は遡り、怜治の部屋にスタンの声が響く。

ディアーチェによって語られた怜治の力の正体。それはにわかに信じがたい力であった。

「……」

「信じる信じないは貴様の勝手よ鉄屑。我が示すはあくまで仮説。だが……」

ディアーチェの翠緑の瞳が、黒衣の男を捉える。

ランボルギーニが去った後に遇ったという謎の男は、静かに怜治だけを見つめている。

「その男の話、我は乗るぞ。あとは怜治、貴様しだいだ」

「俺は……」

『ちょっと待て相棒、何を迷ってんだ。いつもの初見は信じません精神はどこ行った？』

「……初見じゃ、ない」

『は？』

「こいつと会うのは、初めてじゃないんだ」

怜治は立ち上がり、真っすぐに黒衣の男と対峙する。

「確認だ。俺の力の使い方をお前は知っていて、力を使えばすずかは助けられるんだな？」

「ああ。もちろん」

『レイジ！』

スタンが止めようと声を張り上げるが、怜治が手を上げて制した。

すでに怜治の中で天秤は落ち着いている。スタンは矛先を変え、黒衣の男へ訪ねる。

『おいアンタ、レイジの能力の事とか色々訊きたいことがあるが取りあえず一つ。アンタの目的はなんだ?』

「僕の目的?」

聞き返した後、すぐさま答えを告げる。

「それは彼女を、プラウディアを殺すことさ」

『だったらアンタがやればいいだろ。隠してるつもりかもしれないけど、アンタの実力はオレたちなんかよりずっと上だってのバレバレだぞ』

ふむ、と男は考える仕草をしてディアーチェへと視線を投げた。むっと顔を顰めながらディアーチェが代わりに答える。

「確かに、忌々しいがこやつの力ならプラウディアを討つことは容易かろう。が、その際月村すずかの命の保証は無いぞ」

「まぁ僕が動くのは管理局も失敗した後だろうね。彼らと関わるのは僕としては避けたいんだ」

怜治の瞳に剣呑な光。落ち着かせるように、黒衣の男が怜治の肩に手を添える。

「だから、君にこうして話を持ってきた。

僕は君に力の使い方を教える代わりに、君は器となった少女を救

い、〈女王の魂（クイーンズソウル）〉を破壊してくれればいい」

「そうか……だが」

怜治が口を閉ざす。

青年が言おうとしたことを察し、男が答えた。

「ああ、そうだな。月村すずかは助かるが、君は死ぬ」

「……」

「絶対とは言わないが、決して楽観視してはいけないよ。君が死ぬとしたら要因はふたつ。

ひとつ、反動による死。君の力はそれほどに強大で、心と体が破壊される。最悪、能力の発動と同時にね。

ふたつ、能力を使用してもなおプラウディアに届かなかった場合による戦死。悪いがこれに関しては君の努力しだいだな」

「安心しろ。貴様が死んでも、完全復活した我がプラウディアを滅ぼしてやる。が……」

「すずかの安全は保証しない、だろ？　言われなくたって分かってるよ」

「ならば良い。時間は決して余裕があるわけではなかろう。やるなら早々に決めろ」

そう言って、ディアーチェはベッドに寝転がってしまった。

彼女にとってこの状況は自分を完全復活させるチャンスでしかなく、そして藁にも縋る思いで掴む機会でもないらしい。

全ては怜治の決断しだい。
このまま管理局の援軍を待てば時間はギリギリ。しかも管理局はすずかごとプラウディアを排除する可能性が高い。
ディアーチェと男の提案を受け入れればすずかは助けられるかもしれない。だが、確実に怜治は死ぬ。
すずかと怜治。二人が助かる可能性は低い。
それでも、

「もう一度聞く。俺が力を使えば、すずかは助けられるんだな」

「その時まで、君の体がもてばね」

「……判った。力の使い方、教えてくれ」

青年は、覚悟を決めた。

「管理局が推測した時間はまだあるが、あくまで推測であるということを忘れてはいけない。向こうに行ったら一分一秒無駄にはできないからね」

男の警告に怜治は無言で頷く。
床には漆黒の魔法陣が展開し、黒い光が部屋を包み込んでいた。

「この船の転送装置を使ってもいいけど、君の単独行動がばれるのを少しでも遅らせるために僕が城の目の前まで飛ばす。
転送完了と同時に城の防衛機能が作動するから今のうちに気を引き締めておいてくれ」

「判った」

「ああ、あとこれだ」

じゃらり、と男の手の平でソレらが転がる。

男のプレゼントを見て、怜治が驚いた顔をし、小さく笑った。

「窃盗罪だな。戻ってきたら逮捕してやる」

「悪いが大人しく待ってやる気はないよ。

……行くよ。覚悟は良いね」

「ああ、充分だ」

魔法陣の光が強くなる。身体が宙に浮く感覚に包まれる。

怜治は意識を集中する。

『レイジ……』

ふと、鎧になった相棒が語りかけてきた。

意識を乱さず、怜治が応える。

「なんだ」

『オレは、やっぱり反対だ。これじゃあオマエはディア嬢や黒ずくめの言いなりだぞ』

「何をいまさら。他に手が無いんだ。仕方ないだろう」

その通りだ。

これは、最も可能性の高い手段を取った結果だ。
月村すずかが助かる可能性が最も高い手段。それが、怜治の力の行使であり、その代償は彼自身。
なんのことはない。死ぬ者が変わるだけだ。
消える運命に遇った少女が生き、生きる運命の青年が死ぬ。一人が生きる代わりに一人が死ぬ。等価交換だ。
理屈は分かる。だが、スタンは納得などできない。

『レイジ、一つ訊きたい』

「今度はなんだ。あんま集中を乱れさせるな」

『どうしてそこまで自分を投げ出す。オマエにとって、すずか嬢ってのはそこまで大事なのか？』

「……」

静かに、スタンは怜治の答えを待つ。
ここで彼が自分の命を軽んじるような事を言うようなら、スタンは怜治を見捨てるつもりだ。
自身を省みない者が、人を助けることなどできない。それは、ただ相手の心に傷を刻みこむだけだ。

（もっとも、結局ついていくんだろうなぁ。ああ、オレってホント甘ちゃん）

そんな馬鹿なら余計放っておけないだろ、と自身を呆れていると、怜治が口を開いた。

「俺の両親は、俺がガキの頃に離婚した。もしも、あの時俺がだだ

をこねたり泣き喚いたりして止めればそうならなかったかもしれない。だから、俺はあの時何もせず傍観したのを後悔してた」

淡々と紡ぐ怜治の言葉に、スタンはただ耳を傾ける。

「別に今が嫌ってわけじゃない。おかげでお前とも会えたし、魔法なんて面白いモノと会えた。

でも、もう何もしないでいるのは嫌なんだ。俺に出来ることがあるのに、それをしないで大切な者を失うのはもう嫌なんだ」

不思議な感覚だ。

集中するために簡潔に済ませるつもりが意外と長い。けれど、喋れば喋るほどに気持ちが昂る。

胸が熱い。握る拳は固く決して解けない。

「俺は諦めが悪いからな、足掻くぜスタン。

一度手に入れた力（モン）も、一度繋いだ繋がり（キズナ）も、もう二度と失くさない、手放さない、奪わせない」

『……そうか。判った、もう何も言わない』

躊躇いは消えた。

スタンピードは誓う。この身は一生、この諦めの悪い相棒に捧げようと。

「準備完了、行くぞ！」

転送魔法が発動する。

視界を黒が覆い、身体が時空を超えた。

光が治まった部屋の中に、青年の姿はどこにもなかった。

『レイジ、この戦いが終わったらどうする？』

「なんだよいきなり」

転送の最中、時空の狭間での問いかけに、怜治は虚を衝かれた。

いいから、と答えを急かされ、怜治は少し考えて答えた。

「そうだな、取りあえずクロノからの小言から逃げねぇと。その後にはガキどもが喚きながら怒りに来るだろうから上手く逃げて、シグナムやザフィーラの拳骨からも逃げて、それから鉄平たちにも勝手したこと怒られるだろうからまた……」

『逃げてばっかだな』

「まったくだ」

一人と一台の笑い声が響く。

精一杯笑った後、怜治は真剣な表情で言った。

「スタン。俺は、『もう死んでもいい』なんて思えるほど人生堪能したつもりはない」

『……』

「――――生きて帰るぞ。すずかも連れてな」

『……当然！』

転送が終わる。青年の号令とともに、無数の鉄騎が飛び出した。

そうして、青年は死地に赴いた。

目の前には鋭い眼光をこちらに向ける三人の戦士。銀鎧の槍騎士、褐色の巨人、狼の獣人。

怜治はポケットに右手を突っ込み、男から受け取ったソレらをしっかりと握りしめた。

ポケットから手を出し握ったままの右手を前に出す。手の平を上にし、そっと拳を開いた。

「勝手に連れてきちまって悪いな。でも、知り合いがピンチなんだ。――――――――力を、貸してくれ」

そう言って、青年が手の平を転がるソレらを真上に放った。上昇したソレらはやがて空中で止まり、重力に引かれて落下する。

「告げる。我は仮初の王、我が声に従い、今ここに偽りの契約を結べ」

呪文（トリガー）を唱えた瞬間、空気が一変する。

世界が、異質な何かに蝕まれていく。

落下するソレらが光り、形状を変えて石畳に突き刺さった。

魔法使いの杖が、閃光の戦斧が、剣十字の杖が、炎の魔剣が、鉄の伯爵が、風のリングが、魔導師の杖が、氷結の杖が、青年の前に並ぶ。

正当な持ち主にしか起動できないデバイスが、青年の言葉に従い真の姿を現したのだ。

だが、これはまだ怜治の能力の初期段階に過ぎない。勝つためには本格的な発動、更なる段階へ進まねばならない。

その瞬間、怜治の死が確実となる。

「――――――――」

喉が渇く。いくら強がろうが、死への恐怖が消え去りはしない。手が震える。足がすくむ。顔は気持ち悪いぐらいに蒼白で、歯がカチカチと音を鳴らす。心臓の鼓動はうるさいぐらいに激しくて、どれだけ息を深く吸っても治まらない。

それでも。

「――――――――、思い出せ」

思い出せ、なんのためにここに来た。

思い出せ、どんな気持ちでここに来た。

思い出せ、この先に、何が待っている――――――――。

「そう、だ……」

戦斧を掴む。へし折れるほど強く。砕けるほどしっかりと。

震えは止まった。鼓動は落ち着いている。

迷いはない。躊躇いは無い。恐怖は消えず、だが、たった今乗り越えた。

「行くぞ――――――――――――――――」

戦斧を掲げる。

世界を蝕むナニカが広がり、城全体を包み込んだ。

これが、松田怜治の能力。

怜治の中で埋もれ、スタンとの出会いでその片鱗を見せ、ディアーチェによって発見された。
故に、この力を三つ首六眼の魔竜になぞらえこう呼んだ。
「誓う（セット）――――――――――――――魔導略奪、“もうその手を離さない（アジ・ダハーカ）”」
そうだ。この先にあるものは、
命を賭けるには十分過ぎる。
《魔導略奪（アジ・ダハーカ）》。一定範囲内の、あらゆる魔導の技と術、そして魔法事象・現象を奪う力。
怜治は持ってきたデバイスから持ち主のデータを悉く略奪した。
フェイトやなのはの戦闘経験と魔法資質、守護騎士達の強力な戦闘技術と知識と経験、執務官の戦術を奪い自分の血肉とする。
デバイスに掛けられたロック機能を解除、拒否権を奪い、強制的に服従させる。
戦斧からカートリッジが連続排出。
戦斧が大剣に変わり、青い刃が弾け出る。
魔法杖が宙を舞い、魔剣と魔槌が獣の如く唸る。風のリングを指にはめ、白刃を抜く。
背後の鉄騎たちが歓声を上げた。
暴君の如く全ての魔導を自分の物に変える〈魔導略奪（アジ・ダハーカ）〉。なるほど、数ある希少技能の中でもこの力は最強の一つだろう。だが、それを振るう怜治の体と精神は最強に非ず。デバイスから奪い、脳に流れ込む膨大な情報は人の脳の処理速度を軽く凌駕し、その負荷に怜治は耐えられない。
故に乱発は控えよ。
制御を誤れば、松田怜治は裡に秘めた自らの力に喰い殺される。

否、完全に制御しようとも、この力は常に怜治の命を削り続ける。
この力は神様からの贈り物（ギフト）などではなく呪い。命を差し出し力を得る悪魔の契約。
怜治の命の蝋燭に灯る火は、すでに猛る炎と化していた。今までとは比べ物にならない勢いで寿命を焼き尽くしていく。
生きたければ能力の発動を止めればいい。だが、それはできない。
一度乗り越えた死への恐怖。今ここで退けば、二度とあの恐怖は越えられない。故に発動停止は不可能。生き残りたければ、この命が燃え尽きる前に目的を果たすしかない。
もうすでに、目の前の敵は脅威ではない。
力を発動した瞬間から、闘うべき相手は自分自身。打倒すべきは己の心。超えるべきは己が限界。

「――――――――――――行くぞ」

敵にではない。これは自分自身への宣戦布告。
すべてを奪う暴虐の力をねじ伏せるために、青年は突撃した。

目の前に光景に、インシグニアは驚愕した。
青年から放たれる異質なオーラ。そして彼が携えてきたデバイスは別の持ち主がいたはずだ。
魔導師が、自分以外の魔導師のデバイスを使うことは本来あり得ない。

（彼女がデバイスを貸した？　いや、そんなことをするくらいなら自分で来るはず。わざわざ一人で特攻させるなど意味がない）

思考に沈む槍騎士の横を、黒い影が駆け抜けた。トゥアレグだ。

人狼が獰猛な笑みを浮かべ、青年を迎え撃ったのだ。

「てめぇらなにつっ立ってやがる！　あいつはオレたちの前で武装した。あのガキはオレたちの敵だろうが！」

叫びながら、トゥアレグが怜治に跳びかかる。

五本の爪から魔力刃が伸び、五振りの短剣が振り下ろされた。怜治のフラガラッハと激突し火花を散らす。

人狼の金の瞳には闘争の炎。ついさっきまでの苛立ちのはけ口を見つけた戦士の笑みが禍々しく歪む。

「一人で特攻とはいい度胸だガキ！　だがな、現実を見な、てめぇは一人、こっちは三人、しかも全員ランクはＡＡ以上だ！！」

「関係ねぇな」

青い刃を宿した大剣が一閃され石畳を粉砕。トゥアレグは間一髪後方に跳ぶことで回避した。

五指を壁に突き刺し獣の姿勢をとりながら、トゥアレグが嗤う。

「いいだろう、生意気なガキには――――――――――おしおきだ」

轟ッ、と唸りを上げてトゥアレグの体が炎上。自滅ではない。

炎の奥で哄笑を響かせながらトゥアレグが壁を蹴って突貫する。

紅蓮の軌跡を描き、人狼が焼夷弾となって襲いかかった。

「まず、一回」

怜治は落ち着いた様子で呟いた。

魔導略奪は乱発できない。だから、使用回数を正確に知っておか

なければならない。
大剣を床に突き刺し、フラガラッハを待機状態へ戻す。代わりに炎の魔剣を掴む。
刀身からカートリッジが排出された。
「喰らいなぁ、煉獄爪翔牙弾（オルトロス）！！」
燃え上がる人狼の体に怜治の右手が触れた瞬間、青年を呑み込むはずだった炎は一瞬にして消えうせた。その代わりに、青年の右手に煌煌と燃える炎があった。
人狼の笑みは凍りつき、やがて表情は驚愕に変わる。
そして困惑に変わる前に、怜治の燃える拳によって床に叩きつけられた。
「ばがなばぁっ！？」
痛みに悲鳴を上げる人狼に跨り、怜治の手にある魔剣が魔弓に変わる。
青年の顔には獰猛な笑み。
「弓なんざ生まれてこのかた持ったことねぇけどよ」
カートリッジが二発ロードされ、眩い魔力光から一本の矢が生まれた。
見様見真似で構え、トゥアレグのこめかみに矢の先をあてがう。
魔弓がキリリ、と引き絞られる音を聞いてトゥアレグの背を氷塊が滑り落ち血の気が引いて行く。
「この距離ならいやでもはずさねぇだろ」

『Ｓｔｕｒｍｆａｌｋｅｎ』

響く電子音とともに、矢が射られた。怜治の手を離れた矢は烈風を伴い、空気抵抗・魔法障壁といった一切の制約を受けず、その勢いと破壊力を一切減殺させることなく零距離で人狼へと炸裂した。烈風が咆え猛り、爆裂と怒号と砂塵が弾ける。

悲鳴と赤い体液を残し、人狼の体は城の最下層まで突き落とされていった。

「一人目」

一瞬の攻防で人狼を下した青年に、インシグニアは戦慄した。敵を一人と侮り、無闇に突撃したのはトゥアレグの愚策。だが、一撃で倒されるほど彼は弱くない。

そんな獣人の戦士を一撃で倒し、そしてトゥアレグの魔法を無効化した謎の力。その力が、青年がデバイスを複数所持していることと関係しているのかと推測するが確証がない。

灰被りの騎士団（サンドリオン シュバリエス）は元々古代の魔法文明を研究する一団だ。目的が緋色の夜の女王に固定されてもその根っこは変わらない。インシグニアは騎士団の一員として魔法に関する知識を深めてきた。一般人では知り得ない魔法も知っている。が、青年の力は、女騎士が見てきたどんな古い文献にも無い、全くの未知の魔法だった。

世界は広い。そんな当たり前の事実を今更ながらに実感した。

「どうやら、一筋縄ではいかないようだな」

「そのようですね」

巨人の言葉を素直に肯定する。

両者槍を構え、まずは巨人が突撃した。

『ＵＲＹＹＹＹＹＥＥＥＥＥッ！！』

巨槍が吼え、激しく振動する。

迫る巨獣を見据え、怜治は魔剣を手放し、代わりに白い魔法杖を手に取った。

「てめぇには地上で世話になったな。リベンジと行かせてもらう」

背後の鉄騎が疾走を開始した。

鋼の濁流が巨人に襲いかかり、巨人はそれを槍で捌いて行く。

槍の防御をくぐり何台かの鉄騎が巨人にぶち当たるが、鍛え抜かれた巨人の体は鋼をも凌駕した。速度を落とすことなく、ファイティング・ブルが頭蓋に振り下ろされた。

巨槍が頭蓋を砕くより速く、雷光の大剣がそれを受け止めた。

衝撃が地を奔り亀裂が走る。

「対魔力だっけか？　魔法の魔力結合を強制解離する巨人族が先天的に保有する対魔法スキル。もっとも、解離する魔力にも限界があるみたいだけどな」

『Ｄｉｖｉｎｅ　Ｂｕｓｔｅｒ』

魔法使いの杖から閃光。紺碧の光が巨人を撃つ。

迸る光の奔流に巨人が押し流されていく。

踏ん張る巨人の方にインシグニアが着地、再度跳躍し怜治の頭上を取る。

ガジャルグがカートリッジをロード。槍の石突きから魔力が噴射され槍騎士が流星の如く直下。

怜治が咄嗟に飛び退くと、石畳を粉砕する衝撃とともにインシグ

ニアが降り立った。今さっき怜治がいた場所にだ。
無防備な隙を見せることなく槍騎士が迫る。赤槍が閃き神速の突きを連射。一突き一突きが急所を穿つ必殺の槍捌き。怜治を守ろうと壁になった鉄騎たちが悉く弾き飛ばされていく。
大剣による斬撃は線だが、槍の刺突は点であるために防ぐのは至難。最も、それは普段の怜治の力量ならの話。
大剣と魔杖を手放し、鉄槌を握った。
デバイスを通じて、紅い少女の経験をダウンロード。怜治の体に銀の鬼将への対抗策が刻まれていく。
鉄槌を片手で振りまわし、刺突の雨を見事に叩き落とす。
インシグニアに驚愕。初見の相手にここまで対応されたことへの驚きだった。
怜治が鉄槌を両手で持ち渾身の力で槍を打ち返した。衝撃でインシグニアの体が吹っ飛ぶ。
円卓の上に着地したインシグニアを追撃しようとするとランボルギーニの巨重が怜治の体を吹き飛ばした。
石畳を転がる怜治を巨人が見下ろす。

「油断するなよ。貴様の力がいかに強力でも、数の上ではこちらの方が上だ」

「バカ言うな、武器の数ならこっちの方が圧倒的に上だろうが！」

怜治の怒号とともに鉄騎が爆走する。
鋼の濁流を躱し、ランボルギーニが再度突撃した。

「同じ手は食わねぇよ」

怜治の背後――――城の外にヴェルサティスが出現した。全砲門が光り、放たれた無数の閃光が巨人を叩き潰す。

流れ弾が外壁を砕き、城の一部が崩れ揺れる。
荒れ狂う光の嵐をくぐり抜け、インシグニアが怜治に迫る。
ガジャルグからカートリッジが四発排莢。加えて全魔力を槍に注ぎ、その真の力を発揮する。

「これが、破魔の赤槍ガジャルグのフルドライブ！！」

槍が投擲された。天を衝く槍が赤く輝く。光によってその像が歪み、形が朧となっていく。
マズイ。怜治は直感する。インシグニアが放とうとしている魔法を鉄の伯爵は知らない。このタイミングで、情報のない技は危険過ぎた。
ならば取るべき手段は一つ。手加減無用、広範囲魔法で動きを封じるまで。
怜治の手に氷結の杖が治まる。

「悠久なる凍土、凍てつく棺のうちにて永遠の眠りを与えよ」

シェルコからの魔力のバックアップと、杖から奪ったデータをフル回転させることによる高速詠唱。
負荷で脳が沸騰し視界が赤に染まるが無視。
詠唱完了、魔力充填終了、変換術式完全起動。

「吼えろ――――――――――獅子の流星（ローウェ・メテオ）！！」

瞬間、光の中からガジャルグが飛び出た。一つではない。二つでもない。その数は十を超え、百を超え、千すら超えた。
〈ウンエンドリヒフォルム〉。無限の名を冠す、破魔の赤槍の真の姿、真の力。
一度放てば大地全てを穿ち、全ての敵を殲滅する。

だが、怜治はそれを超えた魔法を放つ。
氷結の杖を流星群に向け、最後の呪文（トリガー）を叫ぶ。

「凍てつけ！」

『Ｅｔｅｒｎａｌ　Ｃｏｆｆｉｎ』

杖先から噴き出た魔力の奔流が槍の雨とインシグニアを呑み込んだ。
そして解き放った魔力がすべて凍結し氷へと変わる。
一瞬のうちに現れる巨大な氷の塊。その中に、インシグニアも千を超えるガジャルグもろとも封じ込められた。
怜治が息を吐く。吐息は白かった。
氷結の杖を手放し、魔法使いの杖を再度掴む。
そして、残った巨人へと杖を向ける。
ヴェルサティスの猛攻を受けても尚、巨人は歩みを止めなかった。
巨槍を盾にし、ゆっくりと、確実に怜治へと迫っていた。
槍の向こうにいる巨人と目が合った瞬間、巨人は雄叫びをあげながら猛進を開始した。
ズンズンと足場を揺らして迫るランボルギーニを怜治は冷静に迎え撃つ。
部屋いっぱいにばら撒かれた怜治たちの魔力。それを魔杖の先端に集中する。
蒼い光が流れ星のように一点に集束し、光球を形成した。
エース級の魔力を持った四人の魔導師の魔力から形成された光球からは巨人すら寒気を覚える程の魔力と圧を放つ。
ランボルギーニが吼えた。それと同時に、光球が炸裂した。

『Ｓｔａｒｌｉｇｈｔ　Ｂｒｅａｋｅｒ』

紺碧の閃光が奔り、少し遅れて耳をつんざく轟音が鳴り響いた。
巨大な閃光は一瞬にしてランボルギーニを呑み込み、立ちふさがる壁を悉く粉砕しそのまま城を貫通した。
半径二メートルに及ぶ風穴が空き、そこから砂塵が吐き出されていく。まるで傷ついた城が吐いた血の様だった。
怜治は素早く戦斧を拾い上げ大剣へと変える。
巨人はまだ、倒れてなどいない。
魔力の大渦から赤銅の巨躯が飛び出した。
全身を閃光で焼かれてなお歩みを止めぬ巨人の形相はまさに修羅。

「負け、られんのだ」

息絶え絶えの喉から漏れたのはその一言。
爛々と光を失わない瞳から一筋の涙が零れた。それは、悔し涙だったのか。

「負けられんのだ、あいつを救うために――――不治の病に侵され狂気に歪んだあいつを救うためにも！！」

巨人の慟哭が轟く。
そうか、と怜治はランボルギーニに同情の視線を送る。
この巨人もまた、自分と同じく大切な者のために戦っているのだ。
――――だが、だからと言って怜治は止まれない。相手にも譲れない想いがあったと知った上で、その想いを、願いを、全てを踏み躙って前へと進む。

「があああああああああああああっ！！！」

巨人が咆哮し、槍が一閃される。
巨人の全魔力は肉体強化に全振りされる。

鋼が金剛石へと進化。膨れ上がった肉体から迸る金剛力は鬼神の如く。故に、振り下ろされる槍の速度もまた鬼神。

クンタッシ・ランボルギーニ。友を救うために戦うことを決めた巨人の、全身全霊の、音速を超えた一撃が振り下ろされた。

それを――――――――――

『Ｊｅｔ　Ｚａｍｂｅｒ』

――――――――――神速を以て打ち砕いた。

振り上げられる雷光の刃。

装填された全てのカートリッジを使用し、超高密度で形成された刃は金剛石すら両断する。

斬り落とされた槍の穂先は彼方へと飛び、先を失った柄は虚しく空を斬る。

巨槍を切り裂いた刃は巨人の肉へと喰らいつく。左腰から右肩にかけて斬り上げ、僅かに残った魔力の一滴までを蒸発させた。

渾身の一撃を斬り伏せられ、一滴残らず魔力を失った巨人の体が崩れ落ちる。

両膝をつき、頭を垂らした巨人の脇を、悠々と青年が抜けて行く。

ふと、青年の足が止まった。

「悪いな。お前らの願い、踏み躙られてもらった。こっちにも、譲れないモンがあるんでね」

そう言って青年はまた歩き出した。鉄騎とデバイスたちが後に続く。

ただの瓦礫と化した広間には、氷像となった槍の騎士と、全ての力を失い眠りについた巨人だけが残された。

第５２話　黄金の魔王

怜治の力とそのリスクとそれを聞いた青年の行動を全て話し終えて、ディアーチェは息を吐いた。

〈魔導略奪（アジ・ダハーカ）〉の件（くだり）からは誰も口を挟まなかったためスムーズに話せたとはいえ、一度に多く喋ったせいか顎が少し疲れた。

もっとも、話の最中に表情を百面相の様に変え続ける少女たちはなかなか滑稽で笑えたので気にしない。

暗く沈んだ部屋の空気はディアーチェには心地良かった。この空気を味わえただけでも、怜治を死地へと送ったかいがあったというものだ。

黒い笑みを浮かべて全員の顔色を眺めていると、クロノが踵を返して部屋から出ようとしていた。

「どこへ行く気だ？」

「決まってる。怜治を連れ戻しに行く。今回の作戦には、彼の力が必要なんだ」

ディアーチェはため息をついた。

「無駄な事を。貴様も見たであろう、あの城の防衛機能を。魔導器が無い貴様に出来ることはない」

「僕には、な」

ディアーチェの顔が歪む。眉間にしわが刻まれ険しい表情を作った。

真剣な眼差しで、クロノが言った。

「このアースラごと、城に向かう」

「ならん」

クロノの頭のすぐ横を銀色の光が抜けた。そのすぐ後にドン、と小さな爆発が起こった。同時に二人分の呻き声と、ゴトン、と重たいモノが床に落ちる音が響いた。誰かの悲鳴が聞こえた。

壁についた黒い爆発の痕を見て、全員の視線がディアーチェに殺到。闇色の剣十字の先をクロノに向けていた少女に、皆が息を呑んだ。

今の爆発は、ディアーチェが放った魔力弾によるものだったのだ。床には銀色の縛鎖に捕えられたザフィーラとリインフォースが転がっていた。

沈んだ空気が一気に張り詰める。

なのはとはやてを守るように守護騎士達が前に出る。

主を守り魔力を蒐集するために造られた守護騎士はデバイスが無くとも常人よりは力は上だ。となると、ザフィーラとリインフォースが捕えられたのは彼らがデバイスを必要としないからか。

「騒ぐな、塵芥ども」

だが、それでもデバイスを持ち、闇の書の闇たるディアーチェには届かない。

絶対零度の言葉とともに、ディアーチェの背後の壁一面に巨大なベルカ式魔法陣が展開。

聖剣の名を持つ広域殲滅魔法の術式が刻まれていた。

「ディアーチェ！」

「吠えるなよ将。お前たちがここで大人しくしていてくれれば何もせん。
従ってくれるな、執務官？」

不敵な笑みを浮かべるディアーチェ。だが、その翠緑の瞳には躊躇いの色はない。
クロノが警告を無視して部屋を出ようとすれば、ディアーチェは容赦なくその聖剣を振り下ろす。

「何が、目的だ？」

「何をいまさら。我の目的は闇の書として完全復活し、また終りなき旅へと出ること。そして復活に必要なのは松田怜治の死。だから、この状況を利用しただけだ」

笑みを崩さずにディアーチェが続ける。

「いまさら貴様らが出て行ったところで何も変わらん。だが、人間の意地というのは以前これでもかと見せつけられたからな。今回は何ひとつとしてイレギュラーは許さん」

去年の年の終わり、ディアーチェはたかが人間と侮ったが故に敗北した。
同じ轍は二度と踏まない。
ほんの些細なイレギュラーから事態をひっくり返すのが人間。ならば、そのイレギュラーとなりうる者たちを監視し押さえればそれは起こらないのだ。

（もっとも、怜治の力の前ではこ奴らは足手まといにしかならんがな）

口に出さず、心の裡で思う。
怜治の力は文字通り〈魔導略奪〉。一対多、もしくは圧倒的な戦闘力を持つ相手に一人で挑む時こそ真価が発揮される。
なのはたちがエメロード城に向かったとして、怜治からデバイスを取り返したとしても状況は変わらず、むしろ悪化する。
〈魔導略奪〉の魔手は敵だけでなく味方にも影響を及ぼすのだ。
魔法が封じられれば、なのはたちなど年相応の無力な少女に過ぎない。だから怜治は一人で行ったのだ。

（まぁ、態々教えてやる義理もないか）

加えて言えば、怜治に言った管理局がすずかを見捨てているという話もしていない。したところで、クロノの前では仮説の域を出ないのは明白だし、そもそもその仮説も怜治をその気にさせるための話だ。疲労した顎をさらに酷使して伝える必要もないだろう。

「さて、貴様らが知りたかった松田怜治単独行動の真相はこれで終わりだ。
もっとも、知ったところで出来ることなど無いがな」

沈黙が落ちる。少女たちが顔を俯かせ、守護騎士達はやり場のない悔しさや怒りに顔を歪めていた。
重く暗く、沈みこんだ空気を打破するかのように、少女の声が響いた。

「あんたは、それでええんか？」

八神はやてが、責めるような視線でディアーチェを見ていた。
ディアーチェの笑みが崩れ、顔を顰めた。

これだ。闇統べる王たる少女を苛立たせるのはいつも、この同じ顔をした少女の言葉とその表情だ。

「いいのかとは、何がだ子烏」

「怜治さんのことや。あんた、今までいっしょに暮らしてたのにどうしてそんな簡単に見捨てられるん！？」

「何を言うかと思えば、くだらん。確かに我は融合騎で、奴はロードだ。だが、だからといって我は奴に頭を垂れる気はないし、奴は我に心を許すこともなかった。

判るか子烏？　我らの間には、貴様らの家族ごっこのような関係はない。我は奴を利用し、奴も我を利用する。そういう関係なのだ」

「そんな、そんなのって……」

――――寂し過ぎる。

少女はそう言ってまた顔を俯かせた。

その姿が、余計ディアーチェを苛立たせた。

（なんだ、その様は）

他人の事情に首を突っ込み、それに対してできることが無いと判ると落ち込む。自分の無力さに打ちひしがれるかのように落ち込む様は酷く無様に見えた。

いや違う。そうではない。

ディアーチェが苛立つ理由はほかにある。だがそれが判らない。

自分の心のざわめきを理解できずさらに苛立った。

「ディアーチェ」

謎の苛立ちの正体に悩んでいると、いつの間にかクロノが目の前に立っていた。
その距離になるまで彼の接近に気付けなかったと思うとさらに苛立ちが募る。
けれど、それを顔に出すわけにはいかない。心のざわめきなど、他人に見せる物ではない。
荒れる内心を悟られぬよう警戒しながら、ディアーチェは応答した。

「なんだ？」

どうやら内心は気付かれなかったようだ。険しい貌を保ったまま、クロノが言った。

「取引がしたい」

「……なに？」

予想外の言葉に一瞬呆気にとられたが、すぐにディアーチェの表情が戻り、余裕を持った笑みが浮かぶ。
くぐもった笑いを漏らしながら、闇統べる王は黒髪の少年を見上げた。

「取引とは面白い。言っておくが、我が最も望む品は今を以て我の手に向かっている。いかなる宝を以てしても我の心を動かすことは容易ではないぞ？」

「ああ、判ってる」

面白い、とディアーチェは呟いた。
外に出て暴れられるのは困るが、この部屋の中――――自分の目が届く範囲でなら存分にあがいてもらって構わない。決して覆らぬ結末を変えようともがく人間の姿。それを肴にするのも一興だ。

「よかろう。ではまず、何が望みだ？」

「怜治を助けに行ってもらいたい」

ディアーチェは顔を顰めた。失望のため息を吐いた。
クロノの望みは、あまりにも予想通り過ぎた。つまらなくて、危うく〈エクスカリバー〉を撃ってしまいそうになった。

「貴様、莫迦か？　我が復活の機会を投げ捨てる程の価値があるモノなどあるわけが――――」

「ある」

――――ない。と言おうとしたが遮られた。
クロノの目に嘘は見えない。いや、もとよりこの少年がそんな器用であるとは思えない。
ならば、クロノの言うことは真実と言うこと。だが、ディアーチェが復活を捨ててまで欲しいモノがあるのかと言われれば無論ノーだ。
だから、ディアーチェはクロノが出す品に興味を持った。
黒い笑みを浮かべ、ディアーチェが言った。

「面白い。ならば言ってみせろ。
ただし、また割れを失望させるような事を言うようなら、この船を吹き飛ばす」

「安心してくれ、賢い君なら、必ず頷くはずだ」

「ほう……！」

ディアーチェの瞳が爛々と輝く。

期待が王の心を埋めていく。

塵芥の足掻きを早く見せろと、蛇のように嗤う。

生死のかかった一言を、クロノが言い放った。

魔法少女リリカルなのは　☆Ｔｈｅ　Ｒｉｄｅｒ☆　ＡＸＥＬ　第１２話　黄金の魔王

エメロード城が、絶え間ない爆裂と轟音に揺れる。

先ほどまでの静まりかえっていた城内は嘘のようで、その轟音の原因は確実にこちらに向かって来ていた。

常に冷静であったマスタングもさすがに慌てたのか、さきほどから忙しくコンソールを叩いていた。

どうやら、城内の警備システムに指示を出しているようだ。

システムが起動して二十分ほどか、未だ喧騒は止まない。ということは、侵入者はまだ生きてここを目指しているということ。

「……」

すずかはぎゅっと胸の前で手を合わせる。爪が食い込むほど強く握り合わせ祈る。

どうか、あの人ではないように。

――――――無理な願いだ。

この姿を、あの人に見られないように。

――――――こんな無茶をする者は彼しかいない。

あの人が、無事に帰れるように。

――――――マスタングがそんなこと許すわけがない。

少女の願いは自らの理性によって否定される。

やがて、喧騒が止まった。

台風の目に入ったかのような突然の静謐。

そして、それは破られた。

耳をつんざく轟音とともに玉座の間への扉が粉砕された。

黄金の巨鎚が、少女への道を閉ざす障害を薙ぎ払ったのだ。

ガラガラと崩れて行く壁の向こうから、黒髪の青年が姿を現す。

その後ろから、鉄騎の軍勢と魔剣魔杖がついてくる。

「――――――――――!」

青年と目が合い、すずかは息を呑んだ。

黒い双眸は蒼い光を帯び、怜治からは素人目にも判るほどに魔力が滾っていた。

強い。今、目の前にいる松田怜治は、月村邸よりも段違いに強い。

だが、同時にそれは危うさの表れだ。数時間という短期間にあれほどの力の上昇、それに人間の体が耐えられるはずがない。

すずかの耳には、怜治の体から悲鳴が聞こえた。人の域を超えた悪魔の力に青年の身体は今にも瓦解しそう。

だというのに、当の本人はいたって気にせず。

「よう、まだ元気そうだな、すずか」

なんて、街で偶然会ったかのように話しかけてきた。
胸が痛い。意識を乗っ取られそうだからではない。
彼――――松田怜治にそこまさせたことへの罪悪感からの痛み。
辛い。
今の自分はいつプラウディアに意識を完全に乗っ取られてもおかしくなくて、残った最後の魔導師の短剣は人の命を弄べるモノで、それでも青年は諦めずに立ち向かうのだろう。
どれほど傷ついても、彼は歩みを止めずに進み続ける。例えその先に自分の死が待っていても。
松田怜治とはそういう人間だ。
自分を省みず、自身の傷を塞ぐ手を他人へと差し伸べる人間だ。
そんな彼を止める方法は一つだけ。

「……帰って、ください」

差し伸べられた手を、振り払えばいい。
案の定、怜治の表情が凍りついた。
怜治の口が動くのが見えた。その口から言葉が出る前に、すずかの声が飛ぶ。

「帰ってください。わたしのことは、もういいんです。どうか、今すぐ帰ってください」

出来る限り感情を殺して声を飛ばした。
怜治の顔を見るのが辛くて顔を背ける。

「どうして、そんなことを言う」

耳朶を叩く声に肩が跳ねた。

自分の体を掻き抱きながら答えた。

「もうわたしは、あそこには戻れません。だってそうでしょう？　あんなに暴れて、たくさん壊して、たくさん……あなたを傷つけました。今のわたしは普通の女の子じゃありません。危険な……化け物、です。だから見捨ててください。放っておいてください。――――忘れて、ください」

声はもう返ってこない。

当たり前だ。危険を冒して助けに来たのに、助けるべき本人から拒絶されたのだ。

きっと言葉も出ず、怒りを通り越して呆れているだろう。

こんな奴のために命なんか賭けるんじゃなかった、と。

それでいい。そう思ってもらって構わない。

もう二度と遇うことはないのだ。いや、遇ったとしてもそれはすずかではない。

ならば、少しでも悲しみのない別れを。

嫌いな人になれば、失った悲しみは薄れるから。

そんな想いを込めて、すずかは救いの手をはたき落とした。

これでいい。そんな暗い感情に、心の闇にすずかの意識が沈んでいく。

だが、彼女はまだ解っていない。松田怜治という男を。

「――――――――してるのか？」

「え？」

手を一度払われた程度で、引っ込む男ではない。

拒絶されたから、諦めるような男ではない。
どんなに想いを伝えても、それに素直に頷く男ではない。
そしてなにより。

「お前は――――――――」

人の思った通りに動いてやるような、優しい男ではない。

「俺をバカにしてるのかぁっ！！！！」

耳をつんざく――――先ほどの轟音を超える怒号が轟いた。
沈みかけた意識を引きずり上げる程の怒鳴り声に、すずかは思わず顔を上げた。
青年と目が合った。
怒っていた。黒い双眸には煌煌と業火が燃え、青年の表情は犬歯をむき出しにする憤怒の形相。
両手は固く拳を握り、わなわなと震えていた。
一歩、青年は踏み出した。
ズンッ、と叩きつけられた右足は敷石を砕いた。
拳を振り上げ、怜治が叫ぶ。

「お前はっ！　俺の周りに誰が居るのか忘れてんのか！！
異世界人、魔法使い、クローン人間、犬人間、プログラム生命体、果ては喋るバイク。見ろ、俺の周りにノーマルなんざ一人もいねぇんだよ！！
そこへ化け物（おまえ）が加わったところで、いまさら何も変わんねぇんだよ！」

喉が張り裂けんばかりに叫ぶ怜治。
響く怒号の一言一言が、すずかの煩悶を薙ぎ払っていく。

「言っとくがなすずか！　お前がどんだけ嫌だ嫌だって喚こうが俺はお前を連れてくぞ。
俺はお前が可哀想だと思ったから来たんじゃない。お前にいなくなって欲しくないから来たんだ。そこにお前の意志なんざ関係ねぇからな！」

なんと、横暴な言葉だろうか。
こちらの意見も意思も、今までの苦悩も全部無視して、この青年はすずかを連れて帰ると言った。

「勝手、すぎますよ……」

「ああ。今さら気付いたのか？」

いつだったか、すずかは怜治を騎士のようだと称した。
だが違う。怜治は、魔王だ。
人を救う善なる戦士ではなく、自らの意志で動き、他人の意志など無視して人を連れ去る魔王。
だけど、この魔王になら、攫われてもいいかもとすずかは思った。

「……ください」

もういい。今まで悩んでいた自分がバカみたいだ。

「聞こえないな」

青年は言った。この自分が傍にいても何の問題もないと。

「……助けてください」

だったら。

「声が小さい！」

月村すずかの願いは、一つしかない。

「――――、助けてください！！」

――――当然ッ！

青年が疾走した。

颶風となった魔王の前に、最後の騎士が立ちふさがる。

騎士は姫を守るために必殺の毒剣を引き抜き、魔王は姫を攫うために魔導の軍勢を奔らせた。

エメロード城の激闘を、地上で眺める者がいた。あの黒衣の魔導師だ。

男は中心街のビルの屋上で、遠見の魔法を使って遥か上空の戦いを観戦していた。

青年は善戦していた。少なくとも、男の予想を超える働きはすでにしていた。

「頑張るじゃないか。この分ならもしかしたら……」

「目的は果たせる、と言いたいのか？」

背後からの声に男が振り返り、相手を確認すると闇の奥で顔を綻ばせた。

「やあ！　久しぶりだね、何年振りだろうか。六十年？　いやもっとかな」

両腕を広げ闖入者を歓迎し、相手の名を呼んだ。

「また会えて嬉しいよ、怜一郎！」

そうかい、と怜一郎は冷たく返した。
男と違って老人の顔に喜色はない。
彼の右手には黒い石が握られていた。
それを見て、男は警戒の色が浮かんだ。

「――――――――」

一歩、僅かに後ずさる。
目の前にいるのは魔導師ですらない老人一人。だが男は知っている。
この老人こそが、広い次元世界でも唯一自分を殺しうる存在であるということを。

「怖いからそれ、引っ込めてくれないかい？　悪いが僕はまだ消えるわけにはいかないんだ」

「安心しろ。ただ孫のことが気になっただけだ」

戦いに来たのではないと分かり、男は安堵した。
再度空を仰ぎ、怜一郎にも遠見の魔法をかける。
望遠鏡を覗いているかのように拡大された視界に、城へと迫る影が映った。

思わず感嘆の声を上げた。

「ほう……。あの執務官も大したものだ。彼女を動かすとはね」

闇の奥で男が小さく笑った。

「怜治君、君は生き残れるかな？」

騎士の毒剣が青年の胸に突き刺さった。

激しい戦闘の僅かな隙間を偶然すり抜けた小さな一突きだった。

ちくりとした程度の僅かな刺し傷だが、それだけで相手を殺すのがこの毒剣の力だ。

刺し傷からしみ込んだ毒が怜治の体を蝕み、命を削る。

急速に広がるだるさと熱に怜治は膝をつく。見下ろすマスタングの蔑みの目に怒りが湧くが身体は動かない。

〈魔導略奪（アジ・ダハーカ）〉は最強の力だが無敵ではない。

すでに体内に入った毒はどうにもできない。命を蝕む痛みと熱はすでに怜治のものであり、それを略奪することはできない。

いかに力の強い獣にも天敵がいる。怜治にとってあの毒剣こそがそれだ。

「貴方の快進撃もここまでですね。どんなに貴方の力が強力でも、力を使う貴方自身が倒れてしまえばそれで終わり。鋼すら切り裂く名刀も、誰かが持たなければただの鉄の塊です」

その通りだった。事実、怜治の背後に浮かぶ魔導器はただそこに浮かぶだけで怜治を助けようとしない。

マスタングの足が上がり、怜治の頭に下ろされた。

後頭部に鈍痛が奔ると同時に顔面を床に叩きつけられた。鼻の奥が熱くなった。
すずかの悲鳴が耳朶を叩く。

「しかし、貴方には感謝しなければならない。他の騎士団を片づけてくれたおかげで、願いを叶えられるのは私だけになりました」

それに、とマスタングの目がすずかに移る。
顔を床にこすりつけながら、怜治も目を向ける。
すずかの顔は蒼白となり、やがて胸を押さえて苦しみだした。
怜治が声をかけようとするが毒に侵された体では声は響かない。
マスタングの興奮した声が届く。

「苦しみの中で見えた一筋の光。それが消えた時の絶望が、無防備な彼女の心を覆い尽くした。
さぁ見てください。今度こそ、プラウディア・エメロード・ギャランの復活です！」

すずかの胸から、赤い光が解き放たれた。
光は少女の体を覆い、その身体に別の人格を植え付けて行く。
地上で感じた以上に膨大な魔力が再び降りた。
少女の長い髪は高貴な黒へと変わり、肌は雪の様に白く、瞳は紅蓮に輝く。
あどけない少女が、艶やかな気配を放つ。
緋色の夜の女王が、再び復活した。
今度こそ完全な復活。その魔力は以前のそれを凌駕していた。
その魔力に魅せられて、空が緋色に染まる。
自然にすら影響をもたらす魔導師。
漆黒の闇を緋色に変えた。故に、緋色の夜の女王。
怜治を踏みつけたまま、マスタングが恭しく礼をした。

「再度復活、おめでとうございます女王陛下。
さて、この男をどうしましょうか？」

紅い瞳が怜治へと移った。炎の色の瞳は冷たかった。

「興味無いわ。殺しなさい」

刃のように鋭い声が、青年の死を宣告した。

「御意に」

毒剣が上がる。
殺傷力のない刃でも、それが内包する毒は人を殺すには十二分。
これまでか、と怜治が諦めかけた時、背後の壁が爆裂した。
爆風と粉塵の奥から黒い影が疾走。黒翼を広げ、得物を捉えた猛禽の如く青年へ向かって直下した。
反射的にマスタングが毒剣を振るう。
だが元より斬撃には不適な刃。影は悠々と刃を躱し、男の脇腹を全力で蹴りつけた。
マスタングの体が滑るように吹っ飛び、怜治の前に影が降り立つ。
背には六枚の黒翼、片手には闇色の剣十字の杖。砂塵を被っても銀の髪は輝きを失わず、眼窩には宝石のような翠緑の瞳が納まっていた。
視線が合った。
怜治は思わず名を呼んだ。

「ディアーチェ……どうして？」

「なに、少々事情が変わったのだ。

それよりも貴様、なんだその無様な姿は」

剣呑な視線を投げ、エルニシアクロイツを怜治に向けた。

剣十字から癒しの光が照射され、毒を浄化した。

「お？　おお……おお！」

さっきまでの熱とだるさが嘘のように消え去り、ぴょんぴょんと飛び跳ねる怜治。

それを見て、マスタングが声を荒げた。

「馬鹿な！　クリス・ナーガの毒を解毒しただと。かの毒竜が作った、数千の成分から調合されたあの毒を！？」

ディアーチェがつまらなそうに言った。

「吠えるな塵芥。その毒竜とやらが数千の毒を扱うというのなら、我は数万の解毒の法を知っておるというだけの話だ」

夜天の書はそもそも研究するために魔導師の技術を収集する収集蓄積装置だ。

改変されたとはいえその根本は魔力蒐集という形で残り、闇の書の核であるディアーチェがその知識を持っていてもおかしくはない。

毒竜がどれほどの魔導師であったとしても所詮一世代の人間。永い時を旅した書のには遠く及ばない。

ディアーチェが指を鳴らす。

空間が歪み、そこから銀色の魔力鎖が飛び出してマスタングの四肢に巻き付いた。

「な、なにを……ぐぅっ！」

腕を絞め上げられ、毒剣が落ちる。
ズルズルと鎖に引き摺られ、マスタングがディアーチェの足元までやってきた。

「だが、その刃が脅威であることは変わりない。
うむ。王たる我に脅威を感じさせた褒美をくれてやろう」

「ごぼぉっ！！？」

ディアーチェの右足が、マスタングの顔面にめり込んだ。
赤い血と白い個体を撒き散らしながらディアーチェの足がマスタングの口の中へと押し込まれていく。
鎖がさらに引かれ、マスタングの顔が歪む。塞がれた口からくぐもった悲鳴が漏れた。
涙をためた瞳が玉座に向き、プラウディアに助けを求めた。
女王は無視した。

「くっくっく……」

四肢を引っ張られ、口を裂かれ、涙を流す男をディアーチェは恍惚の表情で見下ろしていた。

「さあ、存分に味わうがいい。王の足をなぁ！！」

鎖が一気に引かれると同時に、ディアーチェがマスタングの顔を思いっきり踏みつけた。
顎が砕かれた。四肢が引き千切られた。
四本の肉塊と口から上の頭部が鮮血を振りまきながら宙を舞った。
胴体からも血が噴水のように噴き出て広間を真っ赤に染め上げて

いく。

「ははははははははははっ！！！
最高だ。最高に笑える死に顔だったぞ貴様。ああ、覚えておくぞテルスター・マスタング。我を久方ぶりに笑わせてくれた憐れな道化よ！
ははははははははは！！」

血の雨を全身に浴びながら、ディアーチェは笑っていた。
その姿はまるで悪鬼。多くの人の人生を喰らってきた闇の書に相応しい姿だった。

『ったく、とんでもねぇ王様だな』

スタンの言葉に、怜治は頷いた。
ディアーチェの虐殺に悪意など無い。例えるなら、子どもが小さな虫をいたぶって遊ぶようなものだ。
意味のない殺戮を行い、それを楽しむことのできる精神を持った小さな悪魔（こども）。それがロード・ディアーチェだ。

「黙りなさい」

氷のように冷たい声が響く。同時に緋色の光線がディアーチェを襲った。
間一髪で躱し、ディアーチェは怜治の隣に着地した。
銀髪の少女にすでに笑みはなく、刃のように鋭い視線が玉座に向けられていた。
プラウディアが玉座から腰を上げていた。六対十二の赤翼が広がった。

「貴女、人の城を汚して高笑いなんて品が無さ過ぎると思わなくて？」

女王の声は不機嫌だった。

非難の言葉を、闇統べる王は笑い飛ばす。

「ふん。骨董品に宿った人格風情が、他人の体を使わなくてはこの世にとどまれぬ塵芥が人を名乗るか。くだらん」

「骨董品って、お前がそれ言うか？」

「黙れ」

「貴女もね！」

怒号とともに緋色の光が乱舞。魔力の光線が嵐となって押し寄せた。

怜治が前に出て両手をかざして〈魔導略奪〉を発動し、プラウディアの攻撃を奪う。人の限界を超えた力に脳が沸騰、視界が明滅するが無視。その魔力を魔導師の杖に装填。

『Ｂｌａｚｅ　Ｃａｎｎｏｎ』

熱を伴う閃光がプラウディアを襲うが、女王を守る赤い翼に阻まれた。

翼の間から覗くプラウディアの顔には苛立ちが浮かぶ。だが、すぐに黒い笑みへと変わった。

「あら、よく見たら貴方、見たことある顔ね」

「今さらかよ。女王様なら人の顔ぐらい一発で覚えな」

「今の、どういう手品なのかしら？　一回やっただけで随分辛そうだけど」

「うるせぇよ……」

額に浮かんだ汗を拭う。

〈魔導略奪〉は乱発できない。特に膨大な魔力を持つプラウディアの魔法をいちいち受け止めていたら身体がもたない。

「（怜治）」

頭の中に直接声が響く。

珍しく、ディアーチェから念話が飛んできた。

いつもの彼女なら念話による作戦会議などしないのだが、さすがのディアーチェもプラウディアを甘く見ているわけではないようだ。

怜治はディアーチェの言葉の続きを待つ。

「（怜治、先ほどの技、あと何回使える）」

ディアーチェの問いに怜治は頭を巡らせる。

さきほどの光嵐を受け止めた際に受けた脳の衝撃。自分の体と精神がどこまで耐えられるか考える。

「（そうだな……多くて三回、それ以上は冗談抜きでヤバい）」

「（そうか。つまり四回は使えるということだな）」

「（おいこら）」

「（さて怜治、貴様、策はあるのか？）」

怜治は首を傾げた。

またも珍しい。ディアーチェが怜治から指示を仰いできた。

「（策つってもあんまり具体的なのはねぇな。敢えて言うなら、真正面から叩き潰す）」

ディアーチェのため息が聞こえた。

白い視線が肌を貫く。

「（ならば怜治、今から我が言うとおりに動け。我が援護する）」

「……はぁっ！？」

今度こそ、本気で怜治は驚いた。

思わず念話を忘れてしまった。

今まで怜治の戦闘を見ているだけだったディアーチェが、共闘を提案してきたのだ。

怜治が驚く理由が判るのか、ディアーチェが不機嫌そうに鼻を鳴らした。

「勘違いするなよ小僧。

プラウディアの力は強い。単体の魔法の威力なら我の方が勝るだろうが詠唱に時間がかかる。それまで奴の注意を引きつける囮役が必要なだけだ」

「はいはいそうですか」

自然と、笑みが零れる。
たった一人、横にいるだけでどうしてこうも変わるのだろうか。
怜治の右手に炎の魔剣が、左手に鉄の伯爵が納まる。
それを見て、プラウディアの赤翼から光が溢れた。

「いいか。あの翼は貴様らで言うところのデバイスだ。
敵を屠る矛であり自らを守る盾。そして魔法を放つための魔導器だ」

「なるほど、つまりあれを全部毟っちまえば」

「奴は何もできん！」

エルニシアクロイツから魔弾が殺到した。
銀の光とともに怜治も駆けだす。背後の鉄騎の砲門も火を噴いた。
プラウディアも翼から光の嵐を放つ。
銀弾と閃光が緋色の嵐と激突し激しい爆発を起こした。
爆煙に紛れて怜治がプラウディアに肉迫。鉄槌と剣を振り下ろした。

「――――――――ちっ」

緋色の障壁に阻まれた。
弾かれ宙に舞う怜治を四枚の赤い翼が襲う。
虚空を蹴り上げ躱す。だが翼の数は十二枚、また別の翼が襲いかかった。
魔法使いの杖を取り、正面に防壁を全力展開。赤い翼の槍を防いだ。
それでも翼の進撃は止まらない。そのまま怜治を天上へ叩きつけようとする。

怜治のバリアジャケットが爆ぜた。事故ではない。自らジャケットを構成する魔力を解放して犠牲にすることで起こった爆風によって力点がずれ槍の猛攻から離脱したのだ。

ジャケットパージと言われる防御法だが、パージ後は完全に無防備になるのとジャケットの再構成に魔力が必要になるのが欠点だ。だが、そんな欠点は今の怜治には関係ない。

魔力はシェルコからのバックアップで無尽蔵。再構成までの隙は鉄騎たちが稼いでくれた。

そして、怜治に意識を向けていたプラウディアへ、ディアーチェ迫っていた。

少女が握る剣十字には夥しい量の魔力が宿っていた。背負った術式は彼女の最強の魔法を表していた。

同時にプラウディアを多面角の結界が捕えた。半球状のドームから翼の先半分が生えるという奇妙なオブジェが完成した。

広げられた翼は結界に挟まれたことで動きを取れない。さらに結界によって被害範囲を抑えるだけでなく、反響のように魔法の威力を絶えずプラウディアに叩き込むのだ。

ディアーチェが飛翔し、プラウディアの頭上に杖が突き立てられた。

「なっ！？」

結界に阻まれることなく入り込むはずだった杖は結界の表面で刃を立てるだけだった。

プラウディアが内側から障壁を展開させて杖の侵入を阻んだのだ。

赤翼たちが拘束を解こうともがく。ギチギチと結界が危うい音を立てた。

一旦離脱を考えたディアーチェに頭上から青年の叫び声が届いた。

「動くな、ディアーチェ！」

叫びながら怜治は剣十字の杖を取った。
シェルコから膨大な魔力を引きだしその全てを杖に叩き込む。
力任せに一気に術式を紡ぎ上げる。
魔力充填完了。効果範囲限定終了。術式展開完了。
虚空を蹴って流星の如く直下。
閃光の戦斧も掴み〈フラッシュムーブ〉を連続発動。落下速度を神速へと跳ねあげた。
空気を切り裂き、怜治はエルニシアクロイツの石突きへと着地した。
その衝撃はプラウディアの防御を貫くには十分過ぎた。
二本の剣十字の杖が差しこまれた。

「響け終焉の笛――――」
「轟け光の聖剣――――」

太陽よりも強い輝きを放つ二つの光球が生まれた。
プラウディアの表情が凍りつく。

「――――ラグナロクッ！！」
「エクスカリバ――――――――――！！」

極光が轟いた。
一瞬にしてドームを覆い尽くした魔力の激流は結界によって押し返され中央に立つ女王を呑み込む。
滅びの光が渦を巻き、嵐の如く結界内を暴れ回った。
全身を焼かれ、プラウディアの悲鳴が轟音とともに響く。
結界を崩壊させないように制御するディアーチェの額にも汗が浮かぶ。
常に余裕を見せる彼女を必死にさせる程の破壊力。本来なら都市

一つ壊滅させかねない広域殲滅魔法をたった一人に向けて放つ。普通の人間では一瞬にして蒸発してしまうほどの威力を誇っていた。

「――――――――なんと……」

「マジかよ……」

だが、相手は普通の人間ではなかった。

光の暴風雨の奥で、苦痛に喘ぎながらも女王の瞳は光を失っていなかった。

紅蓮の瞳が、絶えず怜治達を見ていた。

悲鳴はいつの間にか止み、低い怨磋の唸り声へと変わっていた。

翼が自由を取り戻した。結界が破壊され、光の激流が解き放たれた。

狂ったように極光が暴れ回り、広間を破壊していく。

怜治達を呑み込もうと大口を開けて光の津波が押し寄せた。

「くそ――――ったれ！」

右手をかざし、光の大波の魔力を略奪。迫る第二波へとぶつけ相殺した。

第三波、第四波は鉄騎たちの砲撃でしのいだ。

光の激流が治まった時、大広間は完全に破壊されていた。

天井は消滅し、がらんと大口を開けて緋色の星空を見せている。

精緻を極めた壁も豪華な石畳も、全てが無残な瓦礫へと変わっていた。

破壊された玉座に、プラウディアの姿があった。膝をついて苦痛に顔を歪める王を見下すように、紅蓮の瞳が向けられていた。

彼女を守る十二の紅い翼のうち、二枚が真ん中から先が焼け落ち、一枚が明後日の方向を向いていた。

未だ健在の九枚の翼を見て、怜治達を絶望が奔襲う。

「冗談だろ。アレだけ受けてたった三枚かよ」

「まったくだ。残り九枚、どうやって潰す……」

溢れた魔法の衝撃は、二人にもダメージを与えていた。
鉄騎たちも半分近くが損傷しその姿を消している。
戦力は半減。だが相手はたった四分の一しか失っていない。
最悪の戦況だ。

「……仕方ないか」

息を吐いて、ディアーチェが立ち上がった。
怜治へ視線を向け、はっきりと言った。

「怜治、ユニゾンだ」

「――――――――は？」

本当に、今日は予想外のことが起き過ぎている。

「ユニゾンだ」

呆気にとられた怜治を小突きながらディアーチェがまた言った。

「認めたくないが、今の状況をひっくり返すにはそれしかない。
貴様の力と我が知識、二つが合わされば敵はない」

「自信満々なのは心強いが、いいのか？　お前、そういうの嫌がっ

てなかったか？」

その通りだった。

ディアーチェが現れてから二ヶ月間、何度かはやてとともにユニゾンの訓練が提案されたがディアーチェが拒否していたために試してすらいない。

確かに形式上、怜治はディアーチェのロードである。だがだからといって簡単にできるかというとそうではない。

融合事故。

この融合型デバイスが主の肉体を乗っ取る危険性があるからこそ融合型デバイスが製品化されなかった理由だ。

しかも相手は闇の書の闇そのものと言ってもいいディアーチェだ。なんの対策も無しでのユニゾンは危険だ。

「……つっても、試さなくたってヤバいのは同じか。

判った、やってやる。ただし体は乗っ取んなよ。あくまでお前は力だけ寄こしやがれ」

「ふん。それは、貴様の精神しだいだ」

怜治は立ち上がり、前に出る。

ディアーチェの小さな手のひらが背中に触れるのを感じた。

目を閉じ、意識を集中する。

心を一つに。意思を一つに。討つべき者を、一つに。

怜治はディアーチェの鼓動を、ディアーチェは怜治の鼓動を感じていた。

二人の想いが重なった時、一気に呪文（トリガー）を引いた。

「ユニゾン――――――――――」

「――――――――――イン！」

その瞬間、怜治の身体に大量の魔力が、脳に膨大な情報が叩き込まれた。
全身が悲鳴を上げた。拒絶反応で身体が弾け飛びそうになる。
断線する意識を必死で繋ぎとめるも、力の濁流は矮小な人間の抵抗を嘲笑うかのように薙ぎ払う。

「あああああああああああああっ！！！！！」

肉体が限界を超える。精神はとっくにレッドゾーンへと到達していた。
命の蝋燭は一気に燃え上がり、その命を消費していく。
その時。

『Ｅｖｏｌｕｃｉ？ｎ　Ｓｉｓｔｅｍａ　Ｉｇｎｉｃｉ？ｎ』

怜治の体を包んだ鎧（スタン）が弾け飛んだ。
破損ではない。
パートナーの危機を感じて、怜治を守るために、スタンピードが新たな姿を取ろうとしているのだ。
そう。闇の書事件の際、損傷した二つのデバイスが主のために自ら進化を望んだように。
弾け飛んだパーツが変形、組み合わさり、再び青年の体を包む。
局部を覆う鎧ではない。全身を包み込む全身甲冑（フルプレートアーマー）。
積層鎧が頭の先からつま先まで全てを包んだ。膨大な魔力に適応し、黒い機体が色を変える。
闇を照らす太陽を連想させるような輝ける黄金。五指の先には鋭い爪。頭部には白い双角が闘牛の様に飛び出し、背中から三対六枚の黒翼が飛び出した。

「なに……その姿？」

その姿、この場に怜治の仲間が見たらこう言うだろう。

まるで闇の書の闇のようだ、と。

「がああああああああああああああああああああっ！！！！」

これが、松田怜治と、ロード・ディアーチェ、そしてスタンピードの三体ユニゾン。

黄金に輝く鎧に反して兜から覗く翠緑の瞳は禍々しく、背負った黒翼は妖しくギラついていた。

まさしくその姿。

『ＦＯＲＭＡ　？　〈ＤＩＡＢＬＯ〉』

悪魔のごとし。

第53話　そして……

いつからだろうか。私が石となって次元を漂うようになったのは。
いつからだろうか。彼らが私を回収したのは。
いつからだろうか。

いつから彼らは、私が彼らの願いを叶えるなどという妄言を吐く様になったのだろうか。

黄金の悪魔が咆えた。
ビリビリと空気を震わせる怒号。その咆哮に、プラウディアは思わずたじろいだ。

（――――！　気圧された……この私が？）

悪魔は真っすぐに女王を睨みつける。
腰を落とし、両腕を地に置く四足獣の姿勢。
狂気に歪む翠緑の瞳。烏の様な漆黒の翼が震える。

「その姿、まるで血に飢えた獣ね。
いくら私に勝てないからといって、理性を捨てるのはどうなのかしらね」

下がった分、前に出た。
怜治から感じる魔力は、おそらくプラウディアとほぼ互角。
だがプラウディアに焦りはない。
相手は理性を失くした獣同然。理性の伴わない魔獣に後れを取る

ほど、プラウディアは弱くない。
もうすぐなのだから。
長い時間をかけてようやくやってきた好機。
プラウディア・エメロード・ギャランの大望を叶えるチャンスを、逃すわけにはいかない。
魔力を練り上げ、残った九枚の翼へと伝える。
獣ができる行動は只一つ。
真っ向からの突撃のみ。タイミングさえ掴めば、カウンターで突き殺す。

「さぁ、来なさい。朕(あそん)であげるわ」

瞬間、黄金の悪魔が目の前に現れた。

「――――――――ッ！」

空間移動かと思わせる程の一瞬の出来事。
悪魔の右手が拳に変わる。
放たれるのはなんの変哲もない正拳突き。
防壁で防ごうとしたプラウディアを、本能が叱責した。
咄嗟に赤い翼が飛び出し壁となった。
黄金の右手が赤翼にぶつかり、ゴゥンッ、という重く低い打撃音が響いた。
吹き飛ぶプラウディア。
滑空するように宙を舞った女王の体は玉座に叩きつけられることでようやく止まった。
全身を駆け巡る痛みに目を白黒させながら、プラウディアは自分の身に起こった事態を確認する。

「そんな……ッ！」

防御に回った二枚の翼に、大穴が穿たれていた。赤い羽根がひらひらと舞っていた。
穴の向こうにはジッと立つ金色の悪魔が見えた。
アレの拳によって翼が破壊されたのは明らか。だがそれはあり得ないことだった。
女王が背負う十二の赤翼。それは敵を屠る矛であり彼女を守る盾であり、そして彼女の魔力を使って魔法を放つ現代でいうデバイスだ。
その強度は高く、広域殲滅魔法を連続で受けても全滅することはない。
それを、たった一撃で二枚を破壊し、さらに女王が張った防壁すら貫いた。
いったい、彼は何をしたのか。
理性を失くした獣が、どんな奇策を用いたというのか。

「……いえ、違うわね。そう、貴方は何も特別な事はしていない」

そうしてようやく、プラウディアの頭が現実を受け止めた。
まさに、青年は真っすぐに拳を突き出しただけだ。
奇策も何もない。
ただ拳を固く握り、魔力で強化を施した拳の威力が、プラウディアの防御を上回ったということ。
さらにさきほどの移動もそうだ。空間転移などしていない。あれはただ強く地面を蹴って走ってきただけ。
悪魔の動作に、特別な技術など無い。
ただの純粋な力のみで女王を凌駕するのだから、策など足枷にしかならない。
騎乗兵（ライダー）と闇統べる王（ロード・ディアーチェ）と魔導二輪（スタンピード）。彼ら三位一体のユニゾンは、青年に圧倒的な魔力と身体能力を与えたのだ。

「侮るのは、もうやめね。貴方は本気で潰してあげる」

冷徹な声とともに、プラウディアが立ち上がる。

翼は残り七枚。されど、慢心を捨てた彼女には十分な戦力。

それでも油断はするな。

敵はただの獣ではない。魔力を有し、人を凌駕した身体能力を持った魔獣。

敵に人の常識は当てはまらない。魔導師の常識は通用しない。

「認めるわ、松田怜治。今から貴方は――――――――」

悪魔が腰を落とす。足に力がこもり、炸裂するその瞬間を待っていた。

「――――――――私の敵よ」

咆哮とともに疾走した金色の悪魔を、赤い翼が迎え撃った。

魔法少女リリカルなのは　☆Ｔｈｅ　Ｒｉｄｅｒ☆　ＡＸＥＬ　第１３話　そして……

遥か昔、彼女がこの世に生を受けた時、人々は歓喜した。

もともと強い魔法資質を持った子が生まれることが多い血筋ではあったが、彼女は歴代の王の中でも魔法の力が抜きんでて強かった。

世は戦乱の時代。未だ鉄と火薬の兵器が闊歩する時代。

そんな時代において、強力な魔導師というのは文字通り百人力であった。

戦車よりも早く戦場を駆け、重火器を圧倒する火力で敵兵を薙ぎ払う。

たった一人で戦況を一変させる力。それが当時の魔法の役目だった。

故に、高い資質を持った者は優先して徴兵された。

国のためにと勇んでいく者、英雄になってみせると豪語する者が現れた。

無論家族との別れに嘆き、拒む者もいた。だが戦乱は待ってくれない。半ば強制的に連行し、家の者には金を渡して黙らせた。これ以上騒げばどうなるか、という脅し文句とともに。

王家の者として生まれた彼女も、例外ではなかった。いやむしろ、王族だからこそ前線に出ることを強く望まれた。

王は民を導く者。それは平和の世でも、戦乱の世でも変わらない。戦乱の世における民を導くとは、王自らが戦に出て勝利をもたらすことだった。

幼少期の記憶と言えば、魔法訓練と勉強の毎日。

王としてのたしなみ以上に、指揮官としての心構えや戦術論を叩き込まれた。

次期女王というイメージからは遠い、戦争に勝つための研？（けんさん）の毎日。

彼女も、最初は国のためにと努力した。魔法の才能を磨き上げ、彼女の力を最大限に生かす特別製（ワンオフ）のデバイスまで作られた。

すべては戦争に勝つため。勝てば、彼女の国は栄え、平和の世が訪れる。

負ければ国土と民は蹂躙される。

彼女には、勝利を求めるしかなかった。

やがて戦場に出た彼女は周囲の期待通りに武勲を積んでいった。

ある日、彼女の前に一人の少年が連れてこられた。年は彼女と同じくらい。だが背は彼女より低い。黒い髪と瞳が印象的だった。

「姫様、今日から我が魔導師部隊に配属される者です」

少年が前に出る。

「■■■■レイオン、です」

軍隊式の敬礼のポーズをとって、少年は名前だけ名乗った。
発音が拙くて、最初の方は聞きとれなかった。
連れてきた魔導師部隊の隊長が渋い顔をした。

「申し訳ありません。こいつは次元漂流者でまだこちらの言葉や礼式に慣れていないのです」

次元漂流者。
なんらかのトラブルによって住んでいた世界から別の世界へと飛ばされた者のことだ。
隊長が言うには、少年は元の世界の記憶を失くしてしまったらしい。行くあてもないので、軍が預かることにしたのだという。
預かるといっても、ようは兵士として徴用するということだ。戦乱の世で、人員は多くて困ることはない。
彼女は少年が配属される部隊を聞いて少し顔を曇らせた。
魔導師部隊。
文字通り、魔導師の身で構成された特殊部隊だ。彼女もそこに所属している。
姫だからといって特別扱いされるわけでもなく、だが小隊を任させるほどの武勲は上げている。

魔導師部隊と言っても国中の魔導師を掻き集めて立ち上がった部隊ではない。篩(ふるい)に掛けられた精鋭部隊、いうなればエリートの集まりだ。

つまり、この少年もまた高い魔法資質を備えているということになる。だが、彼女はそれを感じることができなかった。

少年を見る。体格は決して恵まれたものではなかった。

いや、そこは関係ない。魔導師は体力よりも精神面の強さが求められるのだ。

それでも、彼女は少年に何も感じなかった。

才ある者なら誰もが放つ覇気の様なものが、少年からは感じられなかった。

別に少年の入隊に意見する気はない。だが、この少年は早々に戦場で死ぬだろう。そう確信できるほどに少年には何もなかった。

だから、彼女は一つ提案することにした。

「ねぇ、この子、私の部隊に入れていいかしら?」

冷静沈着で有名な隊長の顔に驚愕が張り付いた。

「何か問題あるかしら?」

珍しく王族の特権を使って、彼女はその少年を自分の指揮下に置いた。

理由は簡単。自分の下にいる方が、少年が生き残れると思ったからだ。

これでいい。

自分は王族。民を導く者。

少年は、彼女の采配によってその生を延ばすだろう。

彼女は王族として、一人の民の命を守ったのだ。

それからも、彼女は兵士として戦場を駆け抜けた。

予想通り、少年は戦死することなく彼女とともに戦場を駆け抜け、いつの間にか彼女の副官になるまでに成長していた。
そうして、彼女は大人へとなっていった。
自分の選択は間違っていなかったと喜ぶ彼女の前に、訃報が飛び込んできた。

国王が、死んだ。

原因は敵国からのテロによるものだった。
悲しかった。だが、王族という肩書は彼女に涙を流す時間を長くは与えなかった。
王に子どもは彼女一人だった。
よって、彼女は父が死んだ次の日に、女王の地位についていた。
女が王位に即位することには当然反発もあった。
だが、王家の男児のほとんどは例のテロによって死んでいたために残った男児は皆幼子だった。
加えて彼女には兵士として挙げた武勲が多くあり、部下からの信頼も多く、民からも英雄視されていた。
反対する者は、やがていなくなった。
女王に即位したことにより軍を辞め、彼女の戦場は国政へと移った。
だが幼少から戦いばかりをしてきた彼女に、政(まつりごと)を完ぺきにこなせるわけもなく、やがて彼女は宰相や議会の言いなりへとなっていく。
こんなはずではなかった。
暗く心を闇に沈めていく彼女を支えたのは、以外にもあの時の少年だった。
いつの間にか彼女よりも背が高くなり、青年期を過ぎて成人する彼。
彼女の身を気遣う彼に魅(ひ)かれていくのに、そう時間はかからなかった。

女王が身籠った。その報せは重鎮たちを驚かせ、彼らはその相手に激昂した。

身分を超えた愛。ドラマチックにも聞こえるが実際は祝福されることのない愛だ。

子を堕ろそうと毒は三回飲まされた。うち一回は彼女の命にもかかわった。

彼女が愛した男は投獄された。裁判も無しで、極刑が決定された。

貴族院より、王の座を降りるよう宣告された。次の王は、十分に成長した彼女の従弟（いとこ）だった。

兵士時代の仲間に助けられ、なんとか子は産んだ。元気な男の子だった。

政争に巻き込まれぬよう、戦友に頼んで国外へと逃がした。

他の者には堕胎したと虚偽の報告をした。

やがて、兵士として戦線に復帰するよう命令された。

従うしかなかった。絢爛なドレスを脱ぎ捨て、明日からは再び戦場を駆ける毎日が待っている。

女王として最後の日。彼女は城のバルコニーから世界を見下ろした。

戦火が広がり、彼女の瞳と同じ色に染まった世界が見えた。

地上から聞こえる怨磋の声。苦痛に喘ぎ、民は慟哭する。

結局、彼女は自分が王として未熟だったことを知った。

何が間違っていたのだろうか。いや、何もかもが間違っていたのかもしれない。

もしも彼女が魔法の力を持っていなかったとしたら。

もしも彼女が王の血筋などでなかったら。

もしも彼女が、戦乱のない世界で生まれていたとしたら。

溢れてくるＩＦ。あり得ない、叶うことのない希望が心を埋め尽くす。

「馬鹿ね。そんなこと、無理に決まって……」

自分の心の弱さに嫌悪していると、彼女の脳を雷鳴が駆け抜けた。
思考が冴えた。永く貯め込んだ知識の蔵が開き、彼女が求める答えを提示した。

「……違う」

あった。彼女の願いを叶える方法が。
想像するしかないイフを現実にする方法があった。
時間はない。
決意を固めると同時に、彼女は行動を開始した。

再び、彼女は世界を見下ろしていた。
ただし、今度は独りではなかった。
彼女の後ろには、頭からつま先までを黒一色で隠した男がいた。
珍妙な格好をしていも彼女が唯一愛した男を間違うことはなかった。
闇の奥で、粗い息遣いが聞こえた。
投獄され処刑されるはずの彼がここにいることに疑問は感じなかった。
いつも彼女の傍にいたのがこの男だ。彼女の最期の時も傍にいておかしいものか。
彼女の手には赤い宝石が握られていた。国宝級の品物だ。
価値が高いから盗ってきたわけではない。今から行う儀式に必要な条件を満たす物がこれしかなかったのだ。
転生魔法。
死んだ人間が、生前の記憶を保持したまま新たな肉体を持って生きる大禁呪。

他の物に自分の記憶と知識を封じ込め、魔力で劣化を防ぐ。ようは魂を別の物に保管するのだ。
そして自分の全てを封じたソレは時代を、時に次元を旅し、やがて自分の記憶と力のすべてを受け入れ得る器を見つけ、器の意識を取り込んで復活する。
人が人ならざる者として生きること、そして関係のない他者の聖を奪い取るが故に禁忌とされた魔法だ。
彼女の足下にはすでに魔法陣は描き終わっている。あとは術式を刻んだこの石に自分の全てを封じこむだけ。
その瞬間、彼女の肉体はただの肉塊へと変わる。
失敗は許されない。失敗すれば、彼女は死よりも辛い時の牢獄へと永遠に幽閉される。
男は彼女がしようとしていることに気付いたようだ。
止めろ。そう彼の口が動いた。
彼女は、小さく微笑んだ。

「悲しいわね……ここまでしても、人々は戦いを止めない。どうして世界を独り占めしないと気が済まないのかしら?」

彼女の言葉。それに説得の余地を見出したのか、男はまくしたてた。

「常に欲し続けるのは人間の本質さ。鳥が空を飛ぶように、魚が川を泳ぐように、人は欲し続けるものだ」

黒に覆われ、彼の表情はうかがうことはできない。
だが、きっと彼は悲しそうな顔をしているだろう。彼女を追いこんだのは自分だと、彼は自分を責めているのだろう。

「ねぇ。私、違う時代に生まれたかった。戦争なんてない平和な世

の中。
女王としての地位も、この魔法の力もいらない。ただ、あなたと穏やかに暮らしたいわ」
「僕もだよ、プラウディア」
フードがめくれ、男の顔が見えた。
今にも泣き出しそうな、情けない表情だった。
相変わらず、頼りない。男ならもっとしゃんとしろと怒りたくなった。
だが、彼女はそんな彼を好きになったのだ。
「ありがとう。レイオン」
男の黒い瞳から、涙があふれた。
彼女の頬を、熱いモノが滑り落ちた。
「もしできることなら、別の世界で、別の時代で、また貴方と会いたいわ。
平和な世界で、魔法なんてない世界でずっと……」
無理な願いだ。彼女は今から新たな身体を求めて旅に出る。
だが彼にはそれはできない。彼には長い時を生きる術はない。
だから、これがきっと最後。
だから――――
「愛しているわ、レイオン。永遠に」
今できる最高の笑顔で、別れを告げた。

それが、人としてのプラウディア・エメロード・ギャランの最期の記憶。女王の魂（クィーンズソウル）としての緋色の夜の女王の最初の記憶。

プラウディア・エメロード・ギャランの願い。

魔法も争いもない平和な世界で、ただの少女として一生を過ごすこと。

その願いを叶えるためなら、屍の山などいくらでも築こう。

光の嵐が咆えた。

緋色の光が渦を巻き、目の前の敵へと炸裂した。

それを、悪魔は腕の人薙ぎで払いのけた。

先ほどの手品ではない。力任せにこちらの魔法を粉砕したのだ。

まったくもって、イレギュラーすぎる。

緋色の光線が乱舞。百を超える光の雨が降り注ぐ。

青年の思考は冴えていた。視界は鮮明で、身体は軽く力が漲っていた。

視界を朱に染める光の豪雨。

それを防ぐために、青年は脳をフル回転させる。

闇統べる王から受け取った闇の書の知識。その中からこの状況に最適な魔法を検索し、溢れる魔力で一気に発動する。

銀の魔法陣が三つ、前方に展開した。

陣はプラウディアの光線を弾き、青年の道を拓く。

女王との距離は約二十メートル。

七枚になった赤翼が槍の如く殺到してきた。

一枚目で陣を破壊され、甲冑の肩口が砕けた。即座に補修。

交差する二枚の翼を飛んで躱し踏みつけ一気に距離を詰める。

心臓を真っすぐに狙った翼を半身で避け、掴む。

「ぐるぅぅあああっ！！！」

雄叫びをあげ、圧倒的な膂力で翼を引き千切った。
残り六枚。
破壊した翼を投げ捨て女王へと迫る。
右手に魔力を集中。蒼く輝く光球が生まれ、それを前にかざす。
閃光が迸った。
蒼い光がプラウディアに向かって直進。
女王の放った光線によって相殺された。轟音と爆炎が派手にぶちまけられた。
爆炎をくぐり抜け、怜治は女王へと肉薄した。
両手を合わせ、戦鎚のごとく振り下ろす。
三枚の翼が盾となり、防がれた。
翼の奥から光線が咆えた。
甲冑を焼き切るが、即座に再生。
闇の書に記録された情報から大威力魔法を検索、発見、発動。
光が集い、剣が生まれた。
光剣を縦に一閃。迸った光の熱が翼を一枚叩き斬った。
残り五枚。
プラウディアが後方に跳んで距離を取る。
怜治の足下に緋色の魔法陣が展開。緋色に輝く縛鎖が飛び出し、怜治の動きを封じた。
足を止めた魔人に、殺戮の光が殺到した。
光の嵐は甲冑が砕き、露わになった肌を光が焼く。
低く重い悲鳴が響きわたる。
視界が明滅する痛みの中でも、青年は隙を見逃さなかった。
甲冑が砕けたことで縛鎖が緩み、その隙に青年は嵐から飛び出した。
即座に甲冑を補修。追いかけて来た光嵐へ、砲撃魔法を叩き込む。

爆炎が上がり、緋色の光が途絶えた。
視界を遮られても、青年は構わず黒煙の中へと飛び込んだ。
悪魔の膂力は床を蹴り砕き、三秒もかけずに黒煙を突破した。
そこへ、

「やっぱり獣ね。態々真正面から来るなんて」

地上で青年を灼いた、あの真白の火球があった。

「――――サタン・フレア」

火球が炸裂する寸前、怜治は迷わず〈魔導略奪（アジ・ダハーカ）〉を発動した。
色を失った劫火の熱が奪われていく。

「が――――あ……ッ！」

脳の一部が弾けた。
奪った熱に耐えられず、怜治の体が崩壊を開始した。
全身の血液が沸騰し、血管が破裂した。
視界が赤に染まる。
即座に治療魔法を全力で発動。崩れる体を無理矢理維持する。
だが、敵が弱ったこの瞬間を、彼女は見逃さない。

「汝、天上に逆らいし愚かな光。
光は闇へと堕ちる。侮蔑し、怒り、憎悪せよ。
漆黒の心は不鎮の劫火に。天下（てんげ）を照らす光より強く輝き、天下を灰塵へと変えろ。
堕天の太陽を、ここに――――――――――！」

さらなる絶望が押し寄せた。

女王の手から生まれるのは新たな真白の太陽。
まともに使える〈魔導略奪〉はあと一回。
少女を救うためにも使えない。
ならば、手段は一つ。
記録された数多の魔法。その中で、最高威力の魔法を探しだした。

「……。
……。
……、……。
……」

小さく、掠れるような声で高速詠唱。
青年が両手を上げる。その両手には、一振りの剣があった。

「サタン・フレア――――！」

「……不敗の聖剣（カリブルヌス・エクスカリバルヴルッフ）――――」

一つは光すら焼き尽くす真白の劫火。
もう一つは未来永劫くすむことのない黄金。
ふたつの極光が激突した。

音が消えた。
あれほどの魔力と熱量がぶつかり合えば、その威力は途方もないモノであるはずなのに、轟音も、爆炎も、何も起こらなかった。
静かに、怜治は目を覚ました。
壁に埋もれた身体を起こすと、脚は青年を支えられず倒れた。
ユニゾンは解除されていた。傍には、疲弊しきったディアーチェ

が横になっていた。
黄金の甲冑はばらばらに粉砕されていた。相棒のスタンが、ばらばらになっていた。
黒い破片が辺りにぶちまけられ、元の形を成していなかった。
怜治は慌てなかった。
いや、慌てている暇など無かった。
なぜなら――――

「大した……ものね」

プラウディア・エメロード・ギャランが、まだ立っていたから。
怜治が埋まっていた壁の真反対側の壁に満身創痍の体預けて青年を眺めていた。
残った翼は、三枚。
立たなければならないというのに、青年の体にそんな力は残っていなかった。
赤い翼に光が宿り、渦を巻く。
それを最後に、怜治達を吹き飛ばすつもりだ。
怜治は防御魔法が使えない。ディアーチェは動けない。スタンは動かない。
絶体絶命だった。

「くそ……」

「貴方達、誇っていいわよ。私をここまで追い詰めたのはかつていなかったもの」

プラウディアが薄く笑った。
怜治は奥歯を噛みしめた。
魔力は僅か。意識は今にも断絶しそうで、視界もかすみ始めた。

ディアーチェとのユニゾンが、想像以上に体を痛めつけていた。
ここまでか、と諦めかけた時。

（――――――――あ）

目の前に落ちていた、勝利のカギを見つけた。
思わず、笑みが零れた。
こんなにも最後の切り札が近くにあったというのに、何故諦めようとしているのだ。
手を伸ばす。
届かなかったので匍匐前進するように身体を引きずっていく。
身体を動かす度、激痛が走った。体中から熱いモノが流れ出て行く。全身から、熱が逃げて行く。

「耐えろよな、俺の体……！」

もうすぐなのだ。もうすぐで、全てが終わる。
あと少し、既に指先が触れている。
あと少しで、最後の切り札が手に納まる。
掴んだのは、二つの指輪と一冊の本。

「さようなら。松田怜治。私の最後の敵よ」

光の渦が膨れ上がる。広間に光が溢れ、弾けようとした瞬間。

「ああ、さよならだ」

ズンッ、と、プラウディアの体を青年の腕が貫いた。

「……え？」

呆けたようなプラウディアの声。
紅蓮の瞳が見る先、彼女の胸から生えた、青年の腕。
その手には、光輝く魔力の源が握られていた。

「――――――――〈旅の鏡〉……」

青年が、勝ち誇った笑みで言った。
〈旅の鏡〉。空間を繋ぐ『鏡』により、離れた場所の物体を『取り寄せ』する魔法。
これが最後の切り札。その力で、プラウディアからリンカーコアを抜き取ったのだ。
女王の体が崩れ落ちる。同時に、光の渦が露となって消えうせる。
魔力を失ったことによる反動だ。
いかにプラウディアが強力な魔法を使えても、魔力の源であるリンカーコアを抜かれれば隙は必ず生まれる。
そして、その時の痛みや脱力感は、怜治自身その身を以て体験済みだ。

「これで最後だ。プラウディア・エメロード・ギャラン」

青年の腕が、プラウディアの体から消えて元に戻る。
もう一方の手で掴んでいた本を開き、プラウディアのリンカーコアを叩き込む。

「おおおおおお――――――――――っ！！！」

獣のような雄叫びとともに、怜治は立ち上がる。
力など無くとも、身体が悲鳴を上げようとも、そこに希望があれば、人間は立ち上がれる。

青年が駆けだす。
怜治の背から、光の翼が顕現した。
その正体は、春先で青年が手に入れた願いを叶える宝石。
翼から魔力が噴き出し、青年の体をプラウディアの下へと運んだ。
女王の前に、青年は立った。
残された力の使用回数は一回。その一回で、全てが終わる。

「させる、ものかぁっ！！」

プラウディアが咆えた。
最後の力を振り絞り、翼を動かす。
三枚の翼が、槍となって怜治に襲いかかった。
すべてが急所を穿つ絶殺の軌道。
怜治の手にデバイスはない。防ぐ手段はなく、躱す力など残っていない。
希望を屠る女王の槍。
だが、最後の抵抗に、三発の魔弾が噛みついた。
緋色の夜の女王の魔力を受けて立ち上がったディアーチェが、杖を向けていた。
ボロボロになった騎士服も、薄汚れた顔も気にせず、少女が叫んだ。

「行け！　怜治！！」

叫んだ後、また意識を失くして倒れる。
その直前に闇統べる王が死に物狂いで放った三発の魔弾。
そのうち二発が赤い翼槍を打ち砕き、一発が軌道を逸らした。
三つの死神から、青年は解放された。
だが。

「させ、ない！！」

死神が、再度駆けた。

逸れたはずの槍の軌道。それが再び、怜治へと向かい、青年の胸を貫いた。

「……がっ！！？」

近距離からの攻撃に、バリアジャケットは意味を為さなかった。

なんとか急所は外れた。だが重傷であることに変わりはない。

視界が赤に染まり、足元には赤い水たまりができた。

「いい加減に、しやがれ……っ！」

左手で翼を掴んだ。

右手で、プラウディアの胸にある宝石へと手を伸ばす。

その手を、女王が払った。

弾かれた怜治の手。それと同時に、プラウディアの手から光が漏れる。

「リンカーコアを、抜いたからって、魔法が一切使えなくなるわけじゃないわ。

たった一発、この距離なら、こんな魔力弾でも、貴方を殺せる」

「てめぇ、悪あがきにも程があるだろう」

「貴方に言われたくないわねっ！」

光弾が放たれた。

緋色の光は怜治の頭めがけて飛んだ。

怜治の顔から血の気が引いて行く。

（どうする。〈魔導略奪〉はあと一回。ここで使ったら、すずかに使う分が……。

――――いや、違う。そうじゃない）

すずかは助けられる。絶対に。

残された問題は、怜治自身が生き残れるかということ。

クロノは言った。より可能性の高い方を取ると。

ディアーチェは言った。より可能性の高い方法を提示すると。

ならば、怜治が取るべき手段は、たった一つ。

絶対の死と確定する死。どちらを取るか、考えるまでもない。

「いいさ。分の悪い賭けは、嫌いじゃない」

弾かれた右手が戻って、顔を覆う。

牙をむく光弾は手に触れて、その魔力を略奪されて消えた。

崩れて行く。悪魔の力に耐えられず、松田怜治という男を形作る全てが崩れて行く。

断絶する意識のなか、今度こそ、女王の核へと触れる。

「――――――――――――」

青年はすでに空っぽだ。目の前にいるのは誰で、ここはどこで、なんのためにここにいて、なんのためにソレに手を伸ばしたのか、彼の体は知らない。

だが、魂が覚えている。

やるべきことは一つ。自らの願いはたった一つ。

限界を超えて先へ。青年はその命を燃やして最後の力を振るう。

「俺の勝ちだ。プラウディア・エメロード・ギャラン」

眩い光が、広間を満たした。

自分を捕えていた闇が消え去るのをすずかは感じた。
何もない世界に、光が差した。
希望に満ちた、暖かい光。
その光に向かって、すずかは手を伸ばした。

気付くと、世界は夜の闇に支配されていた。
薄暗い広間。精緻なつくりだったであろう広間は、瓦礫が散乱する灰色の荒野へと変わっていた。
ふと、すずかは自分が誰かに抱きしめられていることに気付いた。
顔を上げる。

「……あ」

自分を強く抱きしめる黒い髪の青年。
それが誰なのか解り、一瞬顔に熱が集まるが、それはすぐに冷めていった。

「怜治……さん？」

名前を呼ぶ。
青年から、返事はない。
黒い瞳に光はなく、顔に生気はない。

本来なら感じる筈の、人の体温をまったく感じられない。
すずかは、顔に張り付く赤黒い欠片に気付く。
血だ。血が渇いた後だ、
その血の出所は、青年の胸だった。
胸が穿たれ、空洞からは向こう側が見えた。
足元の血だまりは、人間にとって致死量だった。
治療しなければと思い、すずかは青年の抱擁から抜けようとする。
抜けない。
こんな状態でも、青年は少女を強く抱きしめていた。
もう二度と離さないために。自分を繋ぎとめるために。
どうしても抜け出せず、すずかは青年の体にもたれた。
そして気付いてしまった。生きているはずの人間なら皆持つはずの心臓の鼓動。それが、青年からは聞えなかった。感じられなかった。

「そんな……」

何があったのか、すずかは判った。
青年は戦ったのだ。自分を救うために、自分を脅かす過去の女王と。
その結果、すずかは救われた。その過程にどれほどの激闘があったかなど、崩壊した広間を見れば一目瞭然。だが、その代償に、青年は自らの命を差し出したのだ。

「うそ……ですよね……？」

答えは返ってこない。
それが、答えになっていた。
少女の瞳から熱いモノが零れる。
それは頬を伝い、やがて雫が地に落ちる。

「言ったじゃないですか。わたしのチョコ、楽しみにしてるって。なのに、もう渡せないじゃないですか……。約束したのに、わたしを乗せて、空、飛んでくれるって……」

少女の嗚咽が響く。

少女の涙を止める者はなく、涙は止まることなく流れ続けた。

「うそつきぃ……」

夜天に座す月に照らされ抱擁する二つの影。

一人は死に体となり、もう一人はその者の死に涙する。

その様を、赤い宝石が静かに見ていた。

二人の魔導師の激闘により、城は崩れかかっていた。

外で待機している管理局も突入にしり込みしている。

だからこそ、彼はここにいた。

広間へと辿りつく。

月に照らされ嘆く少女。少女に抱かれ、全てが停止した青年。

それを見て、彼は全てを理解した。

「そうか。君は、成し遂げたんだね」

本音を言えば驚きだ。彼の予測では、青年は目的を果たせず散るはずだった。

だが青年は成し遂げた。

奇跡などと言う陳腐な理由ではない。

青年の執念が、想いが生んだ結果だ。

魔法は想いを叶える力。青年は想いを、魔法が叶えた。

少女へと近づく。わざと大げさに足音を立てながら。

案の定、少女がこちらに気付いた。

目を赤くはらし、涙でぐしゃぐしゃになった顔でこちらを見た。

一言告げる。

「君は、彼を助けたいかい？」

少女の答えは、決まっていた。

物語には必ず終わりがある。

それと同様に必ず始まりがある。

すべての始まり。時を超え、時代を超え、人を変えてそれはある。

今に至るための物語。

今へとつなげるための過去の物語。

過去を遡った先、原初の物語が必ずある。

そして物語は、過去（ゼロ）へと向かう。

第５３話　そして……（後書き）

次回より
外章　Ｒｉｄｅｒ'ｓ　Ｚｅｒｏ　始動。

外章　1　赤い騎士（前書き）

※注

過去編は５０~ ６０年ほど前の日本が舞台です。
作者の調査不足で史実と異なる点があるかもしれませんがご了承ください。
海鳴ではありません。
なのはたちは出ません。

以上の注意事項をご理解したうえでお読みください。

外章　1　赤い騎士

「――――は、は、は――――――ははははははっ！！」

男の哄笑が響く。

草木が生えない寂しげな荒野。吹き荒ぶ風が砂塵を巻き上げる。

そんな荒野の一帯が、凍りついていた。土色の世界に、氷の世界が顕現していた。

極寒の世界の中心で、男は氷漬けになっていた。自らの裡に秘めた力を氷結させられ、内側から氷像と化していた。

ぱきり、と氷が踏みしめられて砕けた。

男が顔を上げると、少女が一人立っていた。

少女の手には、緩く湾曲した夕日の様に輝く紅蓮の剣があった。

端整な顔立ちの美少女だが、その銀の瞳は冷たく、一切の感情を消していた。

彼女こそが、この氷の世界を作り出した張本人。そして、男の命を狩りに来た処刑人。

「〈毒竜〉エルドラド・ブロアム。管理局魔導師を始めとした大量殺人、自然保護区域での違法魔法使用及び絶滅危惧種の密猟。その他諸々の罪で、おまえを討つ。

最後にい残すことはあるか？」

冷徹な処刑宣告。それを聞いて、エルドラドはさらに笑いを漏らした。

「ははははっ！　なるほど、オレもついに終わりか。

楽しかったぜ〈赤い死神〉！　いや〈氷結の戦乙女（ヘルズヴァルキリア）〉、それとも

〈魔狩り姫（エクスキューショナー）〉か？　まったく、どれもこれもおまえを言い表すにはうってつけの通り名じゃねぇか！」

さらなる哄笑が響く前に、夕日剣がエルドラドの首を落とす。
切り口は一瞬で凍り、血を噴き出すことなく〈毒竜〉の体が崩れ落ちる。
殺されても尚、〈毒竜〉は笑っていた。

その昔、大きな戦があった。
多くの次元世界が巻き込まれる大戦だ。
彼らが創り上げた質量兵器は大地を抉り、野原を荒れ地に変えた。
広大な森を炎が呑み込み、青い空を黒煙と鉄の船が覆った。
多くの人が死んだ。多くの街が廃墟と化した。多くの可能性が、消えていった。
やがて、戦争を終わらせようと三人の賢人が立ちあがった。
三人の理想は、長い時をかけて果たされた。
次元世界が手を取り始め、まず最初に質量兵器が禁止された。
子どもでも簡単に扱える兵器の類は廃棄されていった。
それに合わせて、クリーンなエネルギーとして魔法が注目されていった。
時代が変わる。
年号が新暦に変わり、魔法中心の時代の始まった。
それに合わせて、さまざまな組織が作られていった。
その代表として、時空管理局があげられる。
次元世界における司法機関。複数の世界によって共同で運営される組織だ。
だが、いきなり出てきた組織に全てを任せるほど、世界は甘くない。

信頼を得るためには、それ相応の結果を出さなければならない。

「よって、俺たちはひとつでも多くの功績を上げて、他の次元世界に管理局を認めさせなければならない。
判るな？　ファミリア」

「え？」

突然名前を呼ばれた少女――――ファミリア・オートザムは意識を窓の外の風景から、名を呼んだ青年へと戻した。

「ああ……うん、そうね。判ってるわラルゴ」

窓から零れる日の光を背中に浴びる青年が眉を吊り上げた。

「二佐をつけろ、オートザム執務官。これは任務の話だぞ」

「頭固いわねぇ、訓練生時代からの付き合いじゃない。いつか禿げるわよ。
あと、私の任務とその長ったらしい歴史の授業と何の関係が？」

「この頃、おまえの勤務態度への不満が俺のところへと送られてきている。これがどういう意味かわかるか？」

「あんたが私のお目付け役ってことでしょ」

「そうだ！　つまりおまえの悪評がイコールで俺となり、俺の評価が下がる！　出世に響いたらどうする気だ！？」

はぁ、とファミリアはため息をついた。

彼女の前にいるのはラルゴ・キール。彼女の同期の管理局員にして、直属の上司だ。

事件捜査や調査を取り仕切る役職である執務官をどうしたら小隊に組み込めるのか不思議だが、昔から頭の巡りは早い男だ。ファミリアという戦力を手元に置くために色々と手を回したのだろう。

ファミリアの悪評がそのまま自分につながるとラルゴは言った。逆を言えば、ファミリアのあげた功績もそのままラルゴの功績となるのだ。

魔導師――――正確に言えば魔導騎士――――として類いまれな才能を持つファミリアには出世欲が無い。

それを利用して上に成り上がろうとしているのが、このラルゴ・キールなのだ。

ファミリアはラルゴを出世される代わりに、その力を存分に振える任務を与えられる。それが、二人が訓練生時代にした契約だ。

「若干十八歳で二等陸佐なんてポストにいるあんたの評価が、私みたいな若輩者の不手際で揺らぐものですか」

清濁併せ持った人間。

それが、ファミリアが抱くラルゴへの印象だ。

彼には理想がある。そして理想だけで全てが上手くいかないことを知っていた。

人がみな平和に造れる世界を作る。それがラルゴの夢であり、そのために必要なのが次元世界の平和。そしてそれの一番の近道は時空管理局による管理体制だと思っている。

だが、管理局を中心に置いた世界体制になっても、ラルゴの想う時代が来るかというとそうではない。

彼が想う通りの世界を作りたければ、管理局の中で上に行くしかない。

上に行くためには功績がいる。それを作るのが、ファミリア・オ

ートザムだ。

「ふん、弱冠十一歳で執務官試験に合格した管理局の切り札（エース・オブ・エース）なんて言われているおまえが、上の将官たちの目の上のたんこぶにならないわけがないだろ。揚げ足取りは彼らの十八番だ。無関係だと思っていたら、いつか足元をすくわれるぞ。

いや……」

しかめっ面を崩し、黒い笑みを浮かべてラルゴが言った。

「彼らも、おまえの家とトラブルにはなりたくないだろうから、そんな心配はないか」

「ッ！　ラルゴ……」

ファミリアの眉間にしわが刻まれた。

少女から噴き出た怒気が、部屋の空気を一気に重くしていく。

肌を刺す鋭い殺気。それを全身に浴びながらも、ラルゴ・キールは動じない。

時空管理局二等陸佐。他人の功績だけで登られるほど、その道はなだらかではないのだ。

「……はぁ、判ったわよ」

先に折れたのはファミリアだった。

鋭い殺気は也を潜め、重くなった空気が霧散していく。

「あんたの忠告通り気をつけるわよ。家が出っ張って来るのは私だって嫌だし。

それよりも、いい加減任務の話しましょ？　もとの本題はそこな

わけだし」

「判ればいい。では、おまえへの任務だが、違法魔導師の居場所が判った。

目標の名前は、セドリック・ディグニティ」

ファミリアの銀の瞳が見開かれた。

だらけていた体が覚醒した。

「セドリック・ディグニティ？　〈魔人〉って呼ばれてる次元最悪（クライシス）の七人（セブン）の一人？」

「今は五人だがな。先日君が討ち取った〈毒竜〉に続く大捕りモノだ。励んでくれたまえ」

完全に口調を仕事モードに切り替えた上司の言葉に、ファミリアは肩を落とした。

〈クライシス・セブン〉。次元最悪の七人といわれる、同じ人間とは思えない精神と魔法技術を持った化け物どもだ。

「簡単に言ってくれるわね。あんな化け物クラスの魔導師どもを二人で倒せだなんて、無理無茶を通り越して無謀よ」

先日ファミリアが討ち取った一人も、人間だけで数万、生物なら数億を自らの魔法で殺し尽くしたという最悪の名に恥じない狂人だった。

そんな大物を短期間で二人も捕まえることになるとは、ファミリアの日常は徐々にハードっぷりを増している。

だがそんなことはラルゴには関係なく、彼は冷たく言い放った。

「別に二人でしろなど一言も言っておらん。戦力は十分に揃えてやっているのに、おまえが足手まといだの信用できないだのと言って連れて行かないだけだろうが」

「事実よ。私の戦闘についてこれる魔導師も騎士も、今の時代にはどこにもいないんだから。

……で、場所は？」

「第九十七管理外世界にある惑星だ。現地での名称は地球。文化レベルC、魔法文化無しの、未だ次元運航もできない発展途上世界だよ」

「魔法文化無しの世界でどうして〈魔人〉が？」

「それを究明することも含めて君の任務だ。

場所は日本。つい最近大戦があったそうだ。当然だが、現地人との接触は避けるように」

判ってるー、と手を振って部屋を出ようとするファミリア。

ラルゴは机の引き出しから物を取り出し、彼女に投げ渡した。

「お守りに持って行け。今度の相手は二百年以上生きた文字通り魔人だ。油断はできんぞ」

「ありがと、珍しく気が利くわね。

……？　これ、なに？」

「ロストロギアだ」

「はぁっ！？」

「つい最近スクライアとかいう一族が発掘したのだがな、封印が厳重すぎて使い方も小隊もまったくわからん上、現時点では歴史的価値なしと判断されて俺に回されてきた」

「ちょっと待ちなさい。あんた、これお守りじゃなくて単純にいらない物を私に押しつけただけよね？」

「そうとも言う。だがお守りにというのは本当だ。一説には大戦期時代の兵器の一部とも言われているらしいしな。〈大魔導騎士（パラディン）〉なんて異名を持つお前にはぴったりだろう」

「あんたね……」

肩を震わせながら、地獄の底から響くような低い声が響く。

今すぐにでも受け取ったそれを投げ返してやろうかと思ったが、物はそれなりに重く、しかも鋭利な部分もある。万一の被害を考える程度には、ファミリアは冷静だった。

だが怒りが治まることはない。

使えない道具を渡されたのは事実だし、そもそも大戦期の兵器の一部というのが本当ならこんなところにあるはずがない。ラルゴ自身も信じてはいないだろう。

獣のように唸りながら、悔しそうにファミリアは部屋を後にする。

ラルゴに押しつけられた黒い石を強く握りしめながら。

幼少のころ、大きな戦があった。

鉄の鳥が空を舞い、空襲によって首都が焼けた。

二つの地方都市を核の炎が包み、黒煙が雲を突き抜けた。

人は灰に、建物は瓦礫になった。
多くの人が死に、多くの街が廃墟と化し、多くの可能性が消えていった。
たくさんの犠牲が出て、戦争は終わった。
そして、日本という国の復興が始まった。

「あー空が青い」

季節は夏。世間の常識に外れることなく、この五十鈴(いすず)市の地上を燦々と輝く太陽が照らし出す。
松田怜一郎が通う高校の校舎が焼け落ちたため、学校の授業は野外で行われていた。
高校生になって青空教室を体験することになるとは、と怜一郎は空を見上げていた。
仰ぎ見る空は痛いほどに青く、雲ひとつ見当たらない。
ギラギラと輝く太陽の熱気に当てられて、額に汗が浮かぶ。

「なにを唐突に、どうしたんだよ怜」

日光を手の平で遮っていると、友人である中嶋橘花(きっか)が声をかけてきた。
瞳の色は怜一郎と同じ黒。髪は彼と違って坊主頭だ。

「別に、その通りの意味だよ。この季節、こうも雲ひとつない晴天だと暑くて敵わん。
空や太陽はもう少し地上を気にかけて雲を作るなり、陽ざしを抑えるなりするべきだ」

「自然にそんなものを期待してどうすんだよ。夏は暑いのが基本。夏が涼しくなったら、それはもう世界の終焉だよ」

「その分冬が暖かくなれば釣り合いがとれるんじゃないか？」

「生態系とか滅茶苦茶になるぞ」

「……中嶋、おまえのその現実主義者の様なところ、どうにかならんか？」

「怜こそ、その昼行燈の様な性格をどうにかしろよ。今、日本は大変なんだよ」

「大変、ね。そりゃそうだ」

怜一郎たちが幼少のころ、大きな戦争があった。

詳しい原因は知らない。いや、人から聞いた程度のことしか知らない。

それでも覚えている。

鉄の翼が落とした爆弾が、この地を焼き払ったことを。

彼の幼少期の記憶の大半を占めるのは、眼前に広がる炎の海と、全身を焼かれて溺れていく人たちだった。

最終的に、日本は戦争に負けた。

敗戦の暗い雰囲気に埋もれる暇もなく、人々は立ち上がり復興の狼煙を上げた。

怜一郎が暮すこの街でもそうだ。

空襲によって半分が焼けたこの街も、徐々に立ち直りを見せていた。

未だ戦争の爪痕は残っているが、それもあと数年で消えてなくなるだろう。

少なくとも、目で見て分かる物はなくなる。

「負けて、立ちあがって、俺たちはなにか変わるんだろうか……」

始業ベル代わりの鐘が鳴った。

中嶋が慌てて自分の席に戻っていく。

友人の背中を見送ると、ふと再建中の校舎が見えた。

「全部戻しちまったら、忘れちまうんじゃないのか？」

数年もすれば、この国は立ち直るだろう。

痛々しい戦争の爪痕をすべて消し去り、すべてを元通りに、より発展した姿になる。

そうなっても、みんなの心にあの記憶は残っているだろうか。

痛みを忘れず、また過ちを繰り返さないと、そういえるのだろうか。

彼の疑問に答える者は誰もなく、彼も自ら答えを探そうとも思わなかった。

最後のベルが鳴り響く。

学生たちは黒塗りの学生鞄を持って下校する。

ある者は自宅へ、ある者は寄宿舎にある自分の部屋へと帰っていく。

そんななか、怜一郎はアルバイト先へと向かう。

「あー、今日も頑張ったね俺」

「いまどき頑張ってない奴なんているかよ」

自宅の方角が同じため、隣を歩いていた中嶋の言葉に怜一郎がツッコミを入れた。
夕日に照らされ、茜色に染まった町を歩く。
一度は焼け野原になった街だが、もう半分以上が再建され徐々に昔の街並みを取り戻しつつある。
それでも、目を凝らして見れば瓦礫が積み上げられていたり、焼失した家屋の取り壊し後が残っていた。

「……ん？」

ふと、見慣れない人物を捉えた。
幼少からこの街に住む怜一郎とて、住人全員の顔を覚えているわけではない。
それでも、彼はその人物がこの街の人間ではないと判った。
彼女の容姿が、この国のものではなかったからだ。
腰まで届く亜麻色の長い髪。鼻筋の通った整った顔立ちで、小さな眼窩に納まる瞳の色は銀。明らかに外国人だ。衣服を下から押し上げる胸の膨らみから、性別は女だと判った。
別に今この国に日本人以外がいることに不思議はない。
だが、彼女の着ている服に違和感を持った。
茶色に制服。学生服ではない。警官の服でもない。どこかの国の軍服になら見えなくもない。
いや、それ以前に軍服や警官の制服を女性が着ている姿は見たことが無い。しかもよく見れば女性は若く、少女にも見える。
海の向こうでは女性の社会進出が進んでいるのだろうか。

「どうした怜？」

「ん……なぁ中嶋、あの女なんだけ――――」

言葉が途切れた。
指さした先、さっきまでいたはずの少女の姿が消えていた。
慌てて周囲を見渡す。
いない。
まるで最初からいなかったかのように、少女の姿が見つからない。

「あの女って……どれ？」

「いや……悪い、なんでもない」

それから中嶋と別れ、バイト先に向かうまで出来る限り捜したが、少女の姿を再び見ることはなかった。

「死神犬？　なんですかソレ？」

バイト先で、持ちこまれた四輪自動車の下に潜った店長からの噂話に怜一郎は呆気にとられた。
戦後の今、少々調子が悪くなった程度でモノを新調等できない。
そんな時代だからか、『形あるものなら何でも直します』を売り文句にしている光岡修理店はそれなりに繁盛していた。

「そう。この車持ってきた米人が言ってたんだが、なんでも最近全身真っ黒でまるで熊みたいにデカイ犬の目撃情報が出てるんだとよ」

「熊みたいにデカイって、じゃあ熊なんじゃないんですか？　どうして死神犬なんていう怪談に？」

怜一郎が五十鈴市の西側には山野が広がっている。
空襲によって山が焼け、食べ物を探して熊が降りてきても不思議ではない。
そう言うと、車の下から光岡赤城が顔を出した。油で汚れた顔はしかめっ面だった。

「あのな、俺は三十年近くこの街に住んでいるが熊なんか一回も見たことねぇんだよ。それに、熊がわおーんって吠えるのか？」

「……吠えたんですか？」

怜一郎の問いに、光岡が頷く。

「吠えたらしい。まるで狼の遠吠えみたいだってな。いっとくが、この国には狼はもういねぇぞ」

「知ってますよそれくらい。
それで、その死神犬ってのは何をするんですか？　まぁ吠えるのも十分迷惑ですが」

「そりゃあ死神なんてついてるんだから、人をあの世へ連れてっちまうんだろうよ。
実際、最近行方不明者が増えているらしい」

「それが死神犬が原因だと？　いまいち信じられないですね」

「誰かに拉致られて人身売買されるよりマシだろ」

「冗談なら笑えません」

怜一郎の冷えた返答に、はあ、と光岡がため息をついた。
つまらなそうな視線を投げて、光岡は車の下へと戻っていく。

「噂じゃ、帝国が戦争用に造っておいた生物兵器が脱走したんじゃないかって話だ」

「それはもう空想小説の域ですね」

「当然俺だって信じちゃいねぇさ。でも、それくらい今は不安定というか、とにかくそんな時期なんだ。おまえも気をつけろよ。将来この国を背負ってくのはおまえらになるんだからさ」

「――――――――判って、ます」

思わず言葉に詰まる。
将来。自分はどんな道を歩いているのだろう。
まだこの街にいるだろうか。それとも他の街で暮らしているだろうか。
判らない。将来が不安、というのとは違う。
自分に何ができるのか。自分が何をしたいのか。それが判らない。
故に進むべき道が見えないのだ。
見えなくて、判らなくて、目を背けたくなる。
それでも時は進む。自ら足を前に出さなくとも、道を決めるべき瞬間は刻一刻と近づいてくる。
怜一郎もすでに十七歳。あと一年足らずで、進学か就職か、それだけでも決めなくてはならない。

「判ってるけど、どうしろってんだよ……」

湿っぽい夏の風が、青年の苦悶の声を攫って行った。

バイトが終わり、怜一郎は夜の街を走っていた。
彼は学校近くの寄宿舎住まいの寄宿生のため、多少の夜更かしは次の日に影響はない。
それでも、寄宿舎の門限を破ることはできない。
万が一にでも破れば、あの元軍人と噂のゴリラ管理人の説教が待っている。
あれは、精神的にキツイ。
過去のトラウマが蘇り、思わず走る速度が上がる。
寄宿舎まであと十分程度のところまで来た。バイト先から出た時間を考えて、門限には十分間に合うはずだ。
説教は何とか免れそうだ、と安堵の息を漏らした時、視界に、黒い影が現れた。

「――――――――え」

足が止まる。
額に浮かんだ汗を拭う。
視線の先、月光を背に、長い影が伸びていた。
黒い剛毛に覆われた肉体。四肢は先に行くにつれて細くなり、その全てが地についていた。
太い尾が垂れ、その反対側には二本の耳が立ち、鼻が突き出た頭部があった。
犬だ。
黒い毛を持つ、大型の犬が立っていた。

“――――なんでも最近全身真っ黒でまるで熊みたいにデカイ犬が出るんだとよ――――”

光岡が言っていた噂が脳裏を過る。
その噂通り、黒犬の体躯は逞しく、見かたによっては熊に見えるかもしれない。
悪寒が走り、肌が粟立つ。
「あれが、死神犬……？」
よく見ると、むき出しになった白い牙が、しっかりとなにかを咥えていた。
それが何なのか判り、怜一郎はたじろいだ。
人だ。
人の頭が、犬の口に挟まっていた。
“――――最近行方不明者が増えているらしい――――”
知っている。光岡から話は聞いたし、新聞の片隅にそんな記事が載っていたのを見たことがある。
“――――死神犬は人をあの世へ連れてっちまうんだ――――”
その通りだ。死神犬は、人をあの世へ連れて行く。
もっとも、アレは人を導くのではなく、無理やり連れて行くのだ。
“――――誰かに拉致られて人身売買される――――”
違う。そんなことはない。
行方不明者。ようは死体が発見されておらず、所在が不明の者たち。
見つからないはずだ。

獣が他の生物を襲う理由は只一つ。喰らうため。
いなくなった者たちは皆、アレに――――――――。

「……う」

恐怖が全身を駆け抜けた時、犬の顎が完全に閉じた。
ぐしゃり、と果実を踏み砕いたような音とともに、人の頭が肉塊に変わった。
粘り気のある液体が地面を濡らした。
もう、限界だった。

「うわあああああああああああああああっ！！！」

走った。
恥も外聞もかなぐり捨てて逃げた。
今さっき走って来た道を全速力で走り抜ける。
門限。説教。怜一郎の頭からそんなことは吹き飛んでいた。
逃げなければ死ぬ。追いつかれ、捕まりでもすれば彼はアレが咥えていたモノと同じ運命を辿る。
全力の逃走に心臓が悲鳴を上げる。
口の中はカラカラで、頭の中が白熱する。
まともに思考はできず、ただ自分の最期のイメージがこびりついて離れない。

「ご、がっ！？」

足がもつれてこけた。
体力を使い果たし。限界を迎えた足が急速を求めて動こうとはしない。
はっ、はっ、はっ、と犬の様に喘いで酸素を貪る。

恐る恐る後ろを見る。
いない。
あれほど恐怖した犬の姿は、どこにもない。
逃げ切った。
安堵に胸を撫で下ろし、ゆっくりと立ち上がった瞬間。

「――――つっ！」

チクリ、と足に痛みが走った。
全身が総毛立つ。
足元に、黒い蛇がいた。
泥沼の様に濁った瞳と目があったと思った時、怜一郎の意識が闇へと沈んでいった。

ズルズルと、怜一郎は人気のない森へと運びこまれていた。
いつもなら日差しが差し込み明るい森だが、月が雲に隠された今夜は暗く闇に覆われていた。
黒い大蛇が拘束を解き、怜一郎の体が地面に放り出された。
蛇の毒が効いているのだろう。青年の瞳は焦点が合わず、意識は朦朧としている。
草木が揺れ、黒蛇が意識をそちらに集中させた。
鎌首をもたげるが、警戒はすぐに解けた。
草木を掻きわけ、現れたのは黒い獣の群れだった。
数は二十頭ほど。ただ、群れを形成する獣の種はみな異なっており、熊に鷹、牡鹿や猿や牛、そして怜一郎が見たあの死神犬もいた。
獣たちに共通する点は、全てが黒一色で染まっていることと、通常の獣よりも体躯が優れていること、そして各々が人間を一人連れてきていることだ。

老若男女問わず、獣たちは攫ってきた者を地面に下ろす。
頭を中心に向けた円を描く様に人々を並べると、一頭が円の中心に出た。あの死神犬だ。
死神犬は血で濡れた口を地面に押しつけ、地面に血の紋を描き始めた。
人々を二重の円形に線で繋ぎ、頭部を円で囲む。二重線の間に幾何学的な記号を刻み、中心に向かって渦を巻く。
やがて、半径五メートルほどの魔法陣が完成した。
作業をやり終えた獣たちが最後の仕上げに取り掛かる。
牡鹿が、牛が、犬が、人々の頭に肢を乗せ、体重をかける。
巨躯から生まれる力に圧され、人の頭蓋が軋む。
人の口から苦悶の声が漏れた。
獣たちは耳を貸さず、最後のひと押しとばかりに体重をかけた。
そして。

「やっと見つけたわよ。獣ども」

舞い降りた死神によって、獣の首と胴が別れを遂げた。

朦朧とした意識の中、怜一郎は自分の最期が近づくのをジッと見ていた。
森の中で現れた獣の群れ。
自分と同じように攫われてきた人々。
描かれていく血の紋。
頭蓋にかかる重圧。
死を覚悟した。
不思議と、恐怖が湧いてこない。
もはや諦めているのか。それともそこまで生への執着が無いのか。

どうでもいい。
いくら考えたところで、もうここで松田怜一郎と言う人間の命は潰えるのだ。
抵抗など不可能。ならば、これも運命だと受け入れ――――。

「やっと見つけたわよ。獣ども」

――――ようとした瞬間、凛とした声が響くとともに犬の頭が落ちた。
地面に突き刺さった赤い刀剣。炎のように赤く、氷のように冷たい輝きを放っていた。
少し遅れて、赤い外套に身を包んだ少女が降りてきた。
亜麻色の長い髪が波打ち、銀の瞳は闘志に光る。
突然の闖入者に、獣の意識が集中する。
怜一郎の頭蓋から圧力が消えた。
獣たちが吼え、地を蹴り少女へ襲いかかる。
少女が腰を落とし、突き刺さった刀剣を右手で抜き放つ。

「氷剣投影（コピール・ユヴェルト）」

空いた左手に、赤い氷が現れた。
赤氷は形を整え、やがて一振りの刃へと変わる。
両腕を翼の如く広げ、少女騎士が疾走した。
夕日色に輝く刃が一閃。牙を向ける大蛇を顎から上下に切り裂いた。二筋の黒線となった大蛇が舞う。
雄牛の猛進を飛んで躱し、頭蓋に氷剣を突き立てた。ゴプッ、と黒い血を噴きだし雄牛が力尽きて倒れた。
背後から襲いかかる死神犬。頭蓋を噛み砕く牙が閉じる前に裏拳を叩き込む。身を翻し、喉を真一文字に切り裂く。断末魔は上がらず、血が噴き出す音だけが鳴った。

「ミリィ、後ろ！」

響いた別の少女の声に、ミリィと呼ばれた騎士が反応。間一髪、背後からの牡鹿の突進を躱した。

牡鹿の角が、外套の端を攫った。

「ナイス、メリーバ！」

「油断しないでください。また来ますよ！」

メリーバと呼ばれた小柄な少女が茂みから飛び出した。

細かく波打つベージュ色の短髪に、網目模様の黄色の帽子を被っていた。背中には亀甲模様の巨大な盾を背負っていた。

方向転換し、再度牡鹿が枝分かれした巨大な角を向けて突進してきた。

メリーバが牡鹿の前に立つ。両手を前に突き出し、角槍を掴んだ。

「――――――――ふんっ！！」

小柄な少女が、巨大な牡鹿の突進を受け止めた。

運動エネルギーを炸裂し、メリーバの足下から土砂が巻き上がる。

押し進もうと牡鹿が力を込めるが、それが炸裂する前に、騎士の刃が斬り伏せた。

頭上から降った猿を、弧を描いた斬撃で斬り捨てた。

飛翔しようとした鷹の肩翼を斬り落とし、落下した猛禽の頭蓋を踏み潰した。

以後も、黒い獣たちは悉く切り捨てられていく。

首を刎ねられ、眉間を貫かれ、左右に切り裂かれ、獣たちは悲鳴を上げる暇もなく命を散らして行く。

切り口から噴き出た赤黒い血が血の紋を潰して行く。
一方的な殺戮だった。
圧倒的な力の前に、巨躯を誇る獣たちがあっという間に全滅した。

「――――――――あ」

肉塊と化した獣たちが、黒い煙なって消えた。
まるで最初からそこに何もなかったかのように、その姿を散らした。
残されたのは攫われた人々と、獣を倒した少女たちだけだ。
怜一郎の胸に去来するのは助かったことへの安堵と、死の権化であった獣たちを斬り倒した少女への畏怖だ。
風が吹く。
雲が払われ、隠された月の光が森を照らす。
明るくなった世界で、少女の姿をはっきりと見た。
腰まで届く艶のある亜麻色の髪が月光に濡れ、輝く白銀の胸甲の上から赤いジャケットに袖を通し、腰にはジャケット同じ赤の外套を巻き、黒いホットパンツからは白い脚が伸びる。
少女の瞳の色は銀。鋼の様に冷たく、天に座す月の様に神々しく輝いていた。

これが、管理局最強の騎士ファミリア・オートザムと管理局最高のデバイス技師、松田怜一郎の出会い。
二人の物語が、幕を開けた。

Ｒｉｄｅｒ-ｓ　Ｚｅｒｏ　１話　赤い騎士

外章　1　赤い騎士（後書き）

ついに始まりました過去編！

五、六話程度で納める予定ですが、もう大学の後期が始まるので隔週更新はこれが最後になるでしょう。

外章　2　青い剣士

漆黒の猛禽が空を飛ぶ。
巨大な翼を広げ、空気を掴んで宙を舞い、風を切って滑空する。
鋭い眼光が、地上に向かう。
夜の帳が降りた街に、闇よりも暗い黒があった。
深く、暗く、この世のすべての負の感情が混じり合ったような混沌があった。
猛禽が空中で急停止。翼をたたみ、地上へ直下する。
漆黒の流星が、混沌の闇へと突っ込んだ。
混沌が猛禽を呑み込み、同化した。

「我が眷族が滅んだだと……？」

混沌から声が響いた。
闇が起き上がる。混沌が人型を成した。
青白い長身と肩幅の広い体躯を覆い隠す漆黒のコート。鈍色の髪は短く刈り込まれ、まるで針金のように風になびくことはない。くすんだ蒼い瞳が明滅する。
取り込んだ猛禽が見てきた記憶を再生しているのだ。
眷族が一人の魔導騎士によって滅ぼされていく様を見て、男は深く息を吐いた。

「なるほど、管理局か。思いのほか早くここを嗅ぎつけられたな」

口に手を当て、思案する。
彼が見た光景で重要なのは眷族を滅ぼされたことよりも、眷族が描いた魔法陣を潰されたことだ。
あの魔法陣の意味を管理局の魔導師は知っているだろうか。

知らないようなら僥倖。眷族に隠れて彼は真の目的を果たせる。
知っているようなら排除する。〈魔人〉セドリック・ディグニティの邪魔をする者は、誰であろうと容赦しない。
先ほどの記憶を何度も再生し、対策を考えて行く。
四度目の再生が終わった時、セドリックはある点に気付いた。
魔導師――――性格には魔導騎士か――――が振るった夕日色の片手剣。
口元が吊りあがり、セドリックが嗤った。

「そうか。奴が噂に聞く〈魔狩り姫（エクスキューショナー）〉。悪しき魔導師を狩る猟犬か。
奴なら私の陣の仕組みに気付くだろう」

答えは出た。あの少女は確実にこちらの企みに気付いている。
今はまだでも、生かせば必ず答えにたどり着く。
することは決った。
ならば、あとは行動に移すのみ。
セドリックの体が膨らみ、爆ぜた。
爆音ではなく泡が破裂する音が鳴り、爆炎ではなく漆黒の獣たちがセドリックから飛び出して行く。

「行け我が眷族よ。人を攫え、人を殺せ。その血と生命を以て、この地に血の紋を刻め。
その時、我が宿願にまた近づくのだ」

逞しい角を持った牛が、巨躯を誇る狼が、鋭い爪を持った猛禽が、丸太のように太い大蛇が。
ありとあらゆる獣たちが混沌の渦を抜け、夜の帳へと潜っていく。
そして、ズルリ、と獣の群れに遅れて三体の異形のモノが生まれた。
全身を鱗に覆われたモノ、蝙蝠の様な翼を持つモノ、両腕が魔獣

の顎門となっているモノ。
瞳を持たず、漆黒の巨躯を持つ三体の異貌のものどもが魔人の前に並ぶ。

「お前たちはあの女を殺してこい。髪の毛一本残さずな。奴の血は、私には必要ない」

カカカと嗤い、異貌の魔獣が駆けだした。

Ｒｉｄｅｒ-ｓ　Ｚｅｒｏ　２話　青い剣士

目を覚ますと、夜は明け、怜一郎は病院の寝台の上にいた。
あれから何があったのか、怜一郎は知らない。
月明かりに照らされた少女の姿を最後に、彼の意識はまた眠りに落ちてしまったのだ。
それからが大変だった。
病院の検査を受け、休む間もなく警察から話を聞かれた。
噂の死神犬を見たと言ったら、少し呆れた表情をされた。
そんな反応をされるとあのことをそのまま話しても無駄だと悟り、適当な作り話をした。
住民の義務としてはダメだろうが、いなくなった人たちは動物に殺されましたなどと言って彼らは信じるだろうか。

「ま、もう終わったことだからいいか」

寝台に体を沈め、怜一郎は独り呟いた。

そうだ。人を攫っていた獣たちは全てあの少女に討ちとられた。
もう行方不明事件は起きないだろう。
いずれ事件は時の流れに埋もれ、忘れ去られるだろう。
皆の記憶から消え、人が消えたということすら忘れられるだろう。

「おーっす怜。生きてるか？」

心配の色など一切見せず、学生服姿の中嶋が入ってきた。
思考を中断し、怜一郎は体を起こす。

「入っていきなり失礼な奴だな」

「別にいいじゃねぇか。んで、体の調子はどうよ？一応制服と鞄持って来たけど」

そう言って、中嶋が右手を上げる。
その手には怜一郎の鞄と制服があった。
怜一郎はゴキゴキと体をねじって調子を確かめる。
問題はない。蛇にかまれたので毒の心配があったが、気だるさもない。

「ああ、大丈――――」

言葉が切れる。
頭の片隅に、あの少女のことが引っかかった。
自分の命の恩人。いや、彼女にそんな気持ちが無かったのかもしれないが、彼女のおかげで今自分がこうして生きていられる。

「お礼くらい言っておくべきだよな……」

「ん？　なんだって怜？」

「悪い中嶋。やっぱ俺今日は休むわ」

中嶋が帰り、病院を出た怜一郎は昨夜の森に来ていた。
木々の間から日差しが入り込み、光のカーテンが出来ていた。
茂みを掻きわけ、獣に連れてこられたあの場所へとやってきた。
獣たちの血はなかったが、足跡や這いずり回った後は残っていた。
そして、なにより目を引いたのは円形に抉られた大地だ。
爆弾か何かで吹っ飛ばしたかのような形で、地面が窪んでいた。
そこは、あの血の紋が刻まれた位置だ。

「森の外に倒れてたって言ってたな。ってことは、誰もこれを見てないのか？」

怜一郎たちを運んだのは十中八九あの少女たちだろう。
彼らを運んだ後、またここに戻ってきてあの血の陣を消したのか。
そう思うと、あの陣には何か意味があったのだろうか。
もっともそれを確信に変える知識を彼は持っていないが。

「ん？」

突如、怜一郎の視界が白に焼けた。
飛び退く様にその場から離れると、黒光りした石が目に入った。
それが光を反射したのだと判り、安堵と自分の慌てっぷりにため息を零し、その石を拾い上げた。

「――――――――ッ！」

瞬間、がさりと茂みが揺れた音に、全身が強張った。
獣の生き残りか。粟立つ肌を押さえつけ、一歩ずつ退く。
昨夜と違い、運がいいことにこちらには武器がある。
だが、こんな石コロ一つであの怪物じみた獣たちに太刀打ちできるだろうか。
逃走か迎撃か。判断を下す前に、茂みが二つに割れて、向こうから人影が飛び出した。

「ふーっ、やっと着きました。ミリィー！　急いでくださーい」

飛び出してきたのは、昨夜見た少女の片割れだった。
昨夜と同じ、ベージュ色の神を隠す網目模様の黄色の帽子に亀甲模様の盾を背負った少女。
確か、メリーバと呼ばれていたか。

「……」

「……あ」

目があった。少女の目が点になった。
固まってしまった少女に、怜一郎も思わず言葉を失ってしまった。
思わず、拾った石を懐に入れてしまった。
気まずい沈黙が流れる。

「ちょっと待ってよメリー、急いでもアレは逃げないわよ」

そして、そんな沈黙をバッサリ斬り裂いて現れた亜麻色の髪の少女。
彼女もやはり、昨夜と同じ格好をしていた。あの夕日色の剣を持

っていないことを除けばだが。

「あ」

目が合い、少女の目が点になる。
しかしメリーバの様に固まることなく、やっちまったぜチクショーとばかりに手で顔を覆い隠した。
指の隙間から深いため息が漏れた。

「えっと、君、昨日俺を助けてくれた人だよね？」

このままではいけないと思い、怜一郎が確認のため声をかけた。
指の隙間から銀の瞳が覗く。
透き通るような色に見つめられ、どきりと心臓が跳ねた。

「見られてたか……。
ええそうね。お礼なら結構よ。それが仕事なんだから」

「いや、それでも言わせてくれよ。ありがとう」

「あっそう。どういたしまして」

「どうしてまたここに？　昨日の動物たちは全部倒したんじゃ……」

「ん？　そうね……実は」

「ちょっとミリィ！」

少女の言葉を遮るメリーバ。
銀の瞳が小柄な少女を捉える。

「仕方ないじゃない。見られてたんなら下手にごまかすよりも本当のことを教えておいた方がいいわよ」

そう言って、少女の瞳がまた怜一郎を映す。

「見て分かると思うけど、私たちはこの国の人間じゃない。いいえ、国どころか、この世界の人間でもないわ」

少女の言葉の意味が、怜一郎は一瞬理解できなかった。

「魔導師。この国だと陰陽師とか呪術師って言った方がイメージしやすいかしら？

とにかく、私たちはそういう能力を持った人間よ。そんでその力で全世界……宇宙かしら？　とにかく全部の世界を平和にしようって動いているのが時空管理局。で、私はそこから派遣されたエージェント。工作員のほうが判りやすいかしら？」

「えっと……」

解った？　なんて視線を向けられ、怜一郎は困惑した。

少女の言葉を頭の中で反芻し、噛み砕いて行く。

他の世界。魔導師。時空管理局。

どれもこれも信じがたい話だ。だが、怜一郎はすでにその魔法の力と思われるモノの片鱗を見ている。

あの黒い獣を単身で圧倒する膂力。なにもないところから氷を生みだし、それを剣に変えた。

あれが魔法なのだろう。実際に見たことがある以上、認めないわけにはいかない。

目の前にいるのは、この世界とは違う世界から来た、魔法使いな

のだ。

「理解できたようね。なら、次の話に進むわよ」

「次？」

そう、と頷いて少女は続けた。

「私はある違法魔導師を追ってこの世界に来たの。そいつはどうしようもない悪党でね、自分の命を長引かせるために街を一つ、文字通り呑み込んでしまうのよ」

「呑み、込む……？」

「そ。そんなやつを野放しにしておけないでしょ？　だから私がそいつをとっ捕まえに来たのよ。あなたたちは知らぬ間に、命の危険に曝されてたってわけ」

命の危険。

昨夜の死に臨んだ記憶を思い出し、肌が粟立つ。

なんということか。この少女が来なかったら、自分たちは知らぬ間に食い殺されていたというのか。

「……ん？」

少女の話を理解したうえで、怜一郎は疑問を抱いた。

背筋を氷塊が滑り落ちる。

「なぁ、そのイホーマドーシってのは、昨日君が倒した中にはいなかったのか？」

「いなかったわ」

平然と、変らぬ口調で少女は答えた。

殴られたような衝撃が怜一郎を襲う。

あの獣たちの親玉は、まだ生きている。

「それって、つまり……」

「ええ、今この街で起こっている失踪事件はまだ続くわ。性格には失踪じゃなくて殺人なんだけど、関係ないわ。

私が追っている魔導師はこの街で何かしらの儀式魔法を発動しようとしているの。またここに来たのはなにかヒントが無いかと思ったのと……」

少女の言葉は、怜一郎の耳に届かない。

彼の頭には昨夜の事件がまだ終わっていない事実が響きわたる。

あの時の死の恐怖。あれを、他の誰かが味わうことになるというのか。

怒りと恐怖。驚愕と困惑。様々な感情が入り混じり、それを固めるように拳を握る。

「ま、そういうわけだから暫くは家の中で大人しくしてなさい。

私も奴の逮捕に全力を注ぐけど、用心に越したことはないわ」

「待ってくれ！」

怜一郎の制止の声に、立ち去ろうとした少女の足が止まる。

首を回し、銀の瞳が青年を捉えた。

「なに？」

透き通るような声に、何故か緊張してしまう。
頭を振り、怜一郎は少女を見据えて言った。

「俺も、手伝わせてくれ！」

「……あなた、自分が何言ってるか分かってる？」

銀の瞳が細く、鋭くなった。
刃の様な視線が青年を貫く。
それでも、青年は気圧されることなく続けた。

「俺に魔法なんてもんが使えないのは判ってる。戦力になるとも思ってない。
だけど、事件のことを知って、何もしないままじゃいられない。
この街は俺の街だ。俺の友人や知り合いがいっぱい住んでる。その街を、強いからって全部他人に任せるなんてできない」

「それは、私が信用できないってこと？」

「違う。君ならできると思ったから、その手伝いをしたいんだ」

真っすぐにぶつかり合う二人の視線。
二人の間で、メリーバがアワアワと心配そうに見守っていた。

「……はぁ、判ったわ。手伝ってもらう」

「ちょっ、ミリィ！？」

睨み合いはどれほどしただろう。先に折れたのは少女だった。
少女が手を差し出す。
「ファミリア・オートザムよ。この子はメリーバ。私の使い魔よ」
使い魔の少女が嘆息した。
「……はぁ、仕方ないですね。
ミリィの使い魔、メリーバです。メリーとお呼び下さい」
「ああ。松田怜一郎だ。長かったら怜でいい」
怜一郎も手を差し出し、ファミリアの手をしっかりと掴む。
「ええ、よろしくねレイ」
かくして、二人の魔導師とただの高校生の共同捜査が始まった。

「いやー、やっぱり土地勘のある人間がいると結構違うわね」
軽口とともに剣が閃き、黒狼の首を刎ねた。
真っ黒な肉を見せる断面から炭の様に黒い血が噴き出て獣が倒れた。
凄惨な光景に、怜一郎は顔を顰めた。
「そりゃどうも。道案内程度で役に立てるならこっちも本望だよ」
ファミリアからの最初の頼み。それはこの街の案内だった。

彼女が追っている魔導師は大量の使い魔を使役して街中に隠れているらしい。
そして日暮れと同時に動きだし、人を攫っては殺して行く。
よって、怜一郎は人気のない場所へ彼女たちを連れて行った。
半焼し見捨てられた家。街外れの寂びれた公園。建物の死角になっていて人眼につきにくい路地裏。
半日かけて案内をし、見つけた黒い獣たちを片っ端から狩っていった。
怜一郎は戦えない――――正確には足手まといだと言われたから――――ため、戦闘は全てファミリアとメリーバにまかせっきりだ。
今も、ファミリアが雑木林の奥にある社の下でたむろしていた獣たちを倒したばかりだ。
群れの規模は昨夜と同じ程度。種類も似ていたから、これらを放った魔導師は几帳面な性格なのかもしれない。
黒い獣が霞となって消滅するのを確認して、ファミリアは腰を落とす。
地面に顔を近づけ思案顔。怜一郎は訊ねた。

「どうしたんだ？」

「同じなのよ」

「同じって？」

聞き返すと、ここ、とファミリアが地面の一点を指さす。
目で彼女の指を追い、その先にあるモノを見た。

「……地面に……絵？」

二重の円形に線で繋ぎ、等間隔で小さな円があった。二重線の間

に幾何学的な記号を刻み、中心に向かって渦を巻く図形が大地に刻まれていた。

「魔法陣よ」

魔法陣？　と聞き返すと、そう、とファミリアは頷いた。

「あなたが倒れてた森にもあったものと同じよ。
私がこっちに来たのは二日前なんだけど、あなたを助ける前にも何度か見たわ」

そう言われ、怜一郎は再度地面の図形を注視した。
なるほど確かに。半径五十センチメートルと随分と小さくなっているが、あの森で死神犬が描いていた図形にそっくりだ。

「ってことは、その魔法陣ってのを街中に描くのが敵の目的ってことか？」

「そう判断していいでしょうね。儀式魔法を行うのに地面に魔法陣を刻むのは昔の常套手段だったし、相手はかなり古くから存在している怪人。昔ながらの技術で儀式を発動しようとしているのかもしれない」

立ち上がるファミリア。
剣を振りかざし、魔法陣の中心に突き立てた。
怜一郎の耳に、断末魔が一瞬谺（こだま）した。

「――――――――ッ！」

突然の衝撃に襲われ、怜一郎の体が崩れる。

地面に倒れる直前、メリーバが青年を支えた。

「大丈夫ですか？」

「あ、ああ。大丈夫。ちょっと眩暈がしただけだから」

「きっと陣を構成していた魔力にあてられたのね。魔導師には影響ないんだけど、あなたは違ったわね。ごめん、配慮が足りなかったわ」

「いやいい。それより、次はどこへ行く？　あと人気が少なそうなところと言ったら高台になる神社しか思いつかないんだが」

「そうね……」

手を口元に持っていき、ファミリアが思考に沈んだ。

決断が下る。真っすぐに怜一郎を見つめ、ファミリアが言った。

「レイ。その神社の場所を教えて。あなたの手伝いはそれでおしまい」

「……は？」

今日何度目かの衝撃。

聞いた言葉の意味をすぐには理解できず、茫然と立ち尽くす。

「聞えなかった？　神社の場所だけを私に教えて、あなたはもう帰りなさい」

「ちょ、ちょっと待てよ！　なんだよそれ、ここまできて何を今さら！」

「ここまできたからよ。空を見なさい。もうすぐ、日が沈む」

「――――――――ッ！」

その通りだ。日はすでに沈みかけ、青い空は茜色に染まっていた。やがて夜になる。夜になれば、狩り切れなかった獣たちが動きだす。

そうなればファミリアは捜査ではなく獣の討伐に集中するだろう。そうなれば、獣たちの魔力で場所を追えるファミリアに案内は必要ない。

「勘違いしないで。別にあなたが邪魔だとか、そういうことじゃないの。

大規模な戦闘になれば、私はあなたを守れない。あなたを危険に晒すわけにはいかないの」

子どもに言いきかすような柔らかな声。

その気遣いが、余計に怜一郎の心を抉る。

「でも、俺は……」

言葉が続かない。

何を言っても、ファミリアの主張を覆すことはできない。

悔しい。己の無力さに腹が立つ。

拳は固く握られ、爪が食い込む。

「……わかった」

肩を震わせながら、青年は静かに了承した。

雑木林を出て、そこで怜一郎はファミリアと別れた。

肩を落とし、とぼとぼと離れて行く背中を見て、ファミリアが呟いた。

「ちょっと、可哀相だったかしら」

「いいえ。ミリィの判断は正しいですよ」

後悔の色を浮かべたファミリアを、メリーバが庇う。

「もともと、地元住民を関わらせることさえ問題だったんです。あの時ミリィが言わなかったら、私が言ってました」

間違っていないと、メリーバは言う。

怜一郎の言う神社はここからそう遠くないようだが、そこでも戦闘になれば確実に夜になる。

戦闘ができない怜一郎を夜中に連れ回すことはできない。

判断を誤れば、また怜一郎が危険に晒されることになる。

ファミリアは管理局員だ。次元世界の平和を守るとともに、そこに住む者たちの生命も守らねばならない。

今ここで優先すべきは、事件の解決よりも怜一郎の安全の確保だ。

だが捜査は早めに済ませたい。

その両方を満たす選択は、これしかなかった。

唯一にして最善の選択だ。

彼の協力を無碍にしたことを悔いるのならば、一刻も早くこの街

に平穏を取り戻すべきだ。

「そうね。いきましょうメリー。
ここからは、魔導師(わたしたち)の領域だわ。彼は、来ない方が良い」

銀の瞳に闘志の炎。見えなくなった青年の背中を一瞬思い出し、身を翻す。

赤い外套が翻る。懐から取り出したカードが、夕日色の剣に変わる。

沈みゆく太陽に挑むように、二人の魔導師は歩き出した。

「……ねぇメリー」

「……なんですかミリィ」

怜一郎が言っていた神社に着いた二人の魔導師の首が、ほぼ真上を向いていた。

二人の目の前に聳えるのは長い長い石の階段だった。

何段あるか、数えるのも馬鹿らしくなるほどで、上の方には赤い鳥居が小さく見える。

ここを今から登るのか。ファミリアの顔に憂鬱の色が広がっていく。

「飛んでっちゃ、ダメ？」

「ダメです」

主の弱音を、使い魔が一刀両断した。

「ここは魔法文化のない管理外世界ですから、極力魔法の使用は避けてください」

「ああもう。こんなの登るのなんて実家の寺院への道だけだと思ってたのに……」

「こういうので心身を鍛えるという認識は、次元世界共通なのでしょう」

大きな溜息を吐いて、ファミリアは長い石段に足をかけた。

「つ、疲れた……」

「お疲れ様、です……」

息を切らしながら、ファミリアは赤い鳥居をくぐった。
石段を登りきった時には、夜の帳が降りていた。
日は完全に姿を消し、世界は闇に包まれた。
すでに、この街から平穏は消え去った。
日が再び昇るまで、街には魑魅魍魎の獣たちが闊歩する戦場と化す。
そして、ファミリアの前にもソレはいた。

「あら、お出迎えなんて嬉しいことしれくれるじゃない」

立っていたのは、漆黒の異貌。
全身を鱗に覆われたモノ、蝙蝠の様な翼を持つモノ、両腕が魔獣

の顎門となっているモノ、計三体の魔獣が並んでいた。
瞳を持たない異貌たちの頭が割れ、三日月形の口が開いた。
『お初にお目にかかるな〈魔狩り姫（エクスキューショナー）〉。我はセドリック・ディグニティ。汝が追い求める〈魔人〉よ』
異貌たちの口から流れる男の声が、三重奏となって神社に響き渡る。
ファミリアは腰を落とし、メリーバが少し後ろで盾を構えた。
異貌を一体一体見て、ファミリアが口を開いた。
「わざわざご丁寧にどうも。そんな趣味悪い使い魔じゃなく本人の口で言ってくれたら感激のあまりハグしてあげるのに」
『そのまま背骨を砕かれそうだから遠慮しておこう。
貴公の名はこちらの耳にも届いておる。討った違法魔導師の数だけ通り名を持つ、貴公の武勇伝がな』
「残念だけど、その通り名って一つも気に入ってないのよね。
……で？　まさか挨拶のためだけにそんなの放ったわけじゃないんでしょ？」
『無論。貴公が我の邪魔をする以上、放っておく理由はないのでな』
異貌の喉が鳴る。
翼が広がり、両腕から白い歯が覗いた。
『憂いは、早々に取り除かせてもらう！』
石畳を粉砕して、三体の異貌が疾走した。

剣鱗が、爪が、牙が、一斉にファミリアへと襲いかかる。

「私の武勇伝を知ってる割には、随分と舐められたものね」

シャラン、と夕日剣が揺れる。

刃が赤い半月を描き、夕日剣が妖しく輝いた。

異貌がファミリアに触れる。

その剣鱗は騎士の柔肌を抉り、爪が切り刻み、牙が噛み砕くはずだった。

だが、出来なかった。

鱗の猛進を足一本で止め、爪はいつの間にか現れた氷の剣に防がれ、牙は騎士の夕日剣によって阻まれた。

膨れ上がる殺気と魔力に、異貌たちは危険を察知して騎士から離れようと飛び退く。

それよりも早く、騎士の体が回転。夕日剣が閃き、円月を描き、その軌跡に氷の礫(つぶて)が置かれていき、一気に弾けた。

赤い刃に切り裂かれ、氷の礫に撃ち抜かれた異貌の口から悲鳴が響く。

「しっかし、気持ち悪い姿ね。例えるなら、鱗がディープワンズ、翼がナイトゴーント、三つ口がズシャコンってところかしら」

「余計なこと言ってないで、まだ倒れていませんよ」

メリーバの言うとおり、悲鳴は治まり、異貌たちがよろよろと立ち上がる。

ファミリアから受けた傷は見る見るうちに塞がり、やがて何事もなかったかのように再生した。

「そう。どうやらタフさだけには自信があるみたいね」

ファミリアが再度腰を落とす。銀の瞳には闘志の炎。
獲物を見つけた獣の如く、瞳は爛々と輝いていた。

「紅蓮氷剣フランベルグと、氷刃の騎士ファミリア・オートザム。
参る！」

赤い颶風が大地を蹴り、異貌の者どもへと突撃した。

寄宿舎についたころには、すでに月が出ていた。
闇に支配された街を歩きながら、怜一郎は寄宿舎を見上げる。
体がだるい。風邪ではないだろう。昨日襲われたことも原因ではない。
原因は、自分への失望か。
名も知らぬ者たちを守るためにこの世界にやってきた少女。
その少女に協力しようと言いながらも、そうそうに出来ることが無くなって帰された。
もう会うことはないかもしれない。今日一日で、街の半分以上を見て回ったのだ。もう案内は要らないだろう。
彼女の言ったことは正しい。怜一郎にあの獣どもと戦う力など無く、今日も彼女に戦闘はまかせっきりであった。
なんとも情けない。男の自分が、一人の少女に助けられてばかりだとは。

「寝よう。考えたってどうしようもないんだから」

自分に言い聞かせるように、怜一郎は寄宿舎へと入る。
瞬間、重苦しい違和感に襲われた。

「――――――――ッ！」

全身が総毛立ち、一瞬呼吸が止まる。
飛び出そうになる心臓を抑えて、怜一郎は寄宿舎の中を見渡す。
暗い。夜なのだから当たり前かもしれないが、明かり一つないというのはおかしい。
なにより、あの恐ろしい管理人の姿が見えない。
吸い込む空気が、重い。まるで山登りの途中化の様に息苦しい。
ギシリ、と床板が軋む音が響いた。
闇の奥へと視線を向ける。
軋む足音は、どんどん近づいて来る。

（誰だ。ファミリアの言ってた魔法使いか？　いや、どっちにしろ、俺にどうにかできる相手じゃない）

怜一郎は腰を落とす。
戦うためではない。逃げるための準備だ。
この異質な空間を作り上げたモノが人であれ獣であれ、怜一郎に勝ち目はない。
ならば逃げるしかない。逃げて、ファミリアの下へ向かうしかない。

（ったく、ホントに情けない。怖くなったら女に頼るなんて、弱過ぎるだろ俺）

自分の弱さに呆れていると、闇から漆黒の人型が現れた。
頭の天辺からつま先まで、全身を黒一色の外套に包まれた人間が現れた。
その異様な姿に、怜一郎の足が下がる。

「おまえが、ファミリアが追ってる魔導師か？」

「――――――――」

闇に体を沈めながら、ソレは無言で手を前に突き出した。

手から淡い光が溢れて、怜一郎が咄嗟にしゃがんだ瞬間に熱を帯びた光球が頭上を駆け抜けた。

チリチリと全身が警告を叫ぶ。

今すぐ逃げろという本能に従い、怜一郎は一目散に玄関へと向かう。

「なっ！？」

駆けだすと同時に急停止。足が追いつかず、尻もちをついてしまった。

怜一郎は再度立ち上がることなく、目の前に落ちていたモノに目を奪われた。

ソレは、獣の死体だった。

隆起した肉と黒い毛に包まれた体躯。間違いない。昨夜怜一郎を襲い、昼間にファミリアが倒した獣とモノだ。

それが息絶えていた。

頭部の右半分を消し飛ばされ、焼け焦げた脳の断面をのぞかせた状態で絶命していた。

原因は明らか。先ほど怜一郎の頭上を通過した光球だ。

背後を振り向き、黒衣の魔導師を見上げる。

「おまえ、俺を助けてくれたのか？」

魔導師は答えず、怜一郎の横を通って外へ出た。

途端に、獲物を見つけた黒い獣たちに囲まれた。
怜一郎なら恐怖で縮みあがりそうな状況なのに、魔導師は悠然と立っていた。

「この街の夜はすでに〈魔人〉に支配されている」

魔導師の声が響いた。
声色から、男だと判った。
男は周りにいる獣に目もくれず、怜一郎を真っすぐに見据える。

「〈魔人〉は強い。おそらく、彼女でもただでは済まないだろう。だからこそ、君に問う」

漆黒の外套の奥から、闇色の瞳が覗く。
ここの底まで見透かす様な眼光に縛られ、怜一郎は動けない。
青年を見下ろしながら、魔導師は静かに訊ねた。

「君は、彼女を助けたいかい？」

何度目かの斬撃が、ディープワンズの体躯を切裂いた。
腰から上下が強制的に引き離され、黒い血を撒き散らしながらディープワンズが地に転がった。
背後からの殺気に、ファミリアは体を倒す。
頭上をナイトゴーントの爪が滑っていく。髪を数本持っていかれた。
即座に体を起こし、ナイトゴーントの足を掴んで地面に叩きつける。
悲鳴を上げる異貌の魔物に容赦なく氷の槍を叩き込んだ。

顔を上げると、ズシャコンが三つの口を開いて突進してきた。
空いた手に氷剣を納め、迎撃するファミリアの前にメリーバが躍り出た。
少女の身の丈と同等の大きさの盾を構え、ズシャコンの突撃を受け止める。
ファミリアが地を蹴って跳ぶ。身を捻り、魔物の背後を取る。
敵が振り返るより速く、二本の刃が首を刎ねた。
弧を描き、首が地面に転がった。
戦いは終わったかのように見えたが、ファミリアは魔物から距離をとり、未だ構えを解かない。
メリーバも横で盾を構えて警戒していた。
そして、息絶えたはずの魔物の体が起き上がり別れた半身と首が繋がっていく。氷槍に穿たれた孔が塞がっていく。
断面が泡立ち、切れ目が無くなり綺麗になった。
何事もなかったかのように、異貌の魔物たちが立ちあがった。

「あ～も～メンドクサイ」

時間が巻き戻ったかのような光景に、ファミリアが嘆息した。
魔物たちはファミリアの敵ではない。
それでも、この再生能力は厄介だった。

「決して疲れず、決して倒れずの刺客ですか。ファミリアにはもっとも有効な手かもしれませんね」

「あんた。主のピンチに何を呑気な事を……」

今思えば、魔物たちは足止めの役目も担っているのかもしれない。
強力な再生能力でファミリアを足止めし、その間に〈魔人〉は人を攫って魔法陣を完成させていく。

そして、ファミリアがいくら強くとも人間。体力には限界があるし、戦い続ければ疲弊し、隙も生まれやすくなる。
一撃で決める必要はない。じわじわと嬲るように、ファミリアを追い詰めていく。

「ま、別に手がないわけじゃないんだけどな……」

「三体ってのが辛いですね。あの機動力だと、わたしでも一体しか止められません」

決して斃れない魔物。ソレを討つ手が、ファミリアにはある。
だが、その手が一度に捕えられるのは一体まで。しかも隙が大きく、他の二体の攻撃に対応する自信がない。
メリーバの援護があっても二体とも止めることはできない。
歯痒い状態だ。手だてがあっても、その先のことを考えると手が出せない。
ファミリアの心情を知ってか知らずか、魔物どもの口が三日月に歪み、ケラケラと嘲笑する。
剣を持つ騎士の手に力がこもった時、天地を揺るがす爆音が轟いた。

「――――――――ッ！！？」

目の前に敵がいることも忘れて、ファミリアは振り向いた。
ここは長い石段の先にある高台。街の様子は良く見えた。
そして、街の一角が蒼く輝いているのが見えた。

「ミリィ、あの方角は……」

メリーバの声が僅かに震える。

彼女たちが見た方角。あの方角は、怜一郎が向かって行った方角ではないか。

悪寒が走り、ファミリアの肌が総毛立つ。

「まさか……」

迂闊だった。

狡猾な〈魔人〉が、貴重な時間をただの足止めだけに使うはずがない。

ここにファミリアを縫いつけておいて、じっくりと儀式の準備を進めても不思議ではない。

自身への怒りで頭が沸騰。彼の安全を気遣ったつもりが、むしろ危険に晒していた。

すぐにも駆けだしそうになる両足を抑え、冷却水（りせい）を以て頭を冷やす。

一片でも冷静を保ち、思考し、決断した。

「メリー。頼める？」

「無論です。それでこそ、わたしの主（マスター）です」

いくつもの戦いをくぐり抜けた二人に言葉は不要。念話も使わず、二人は意志を統一した。

ファミリアが地を蹴って飛翔する。

逃がしてたまるものかと魔物どもも飛翔・跳躍する。

「させませんよ！」

メリーバも遅れて飛び、ディープワンズの上でくるりと一回転。

瞬間、小柄少女の姿が消え、巨大な亀が、ディープワンズを押し

潰した。
使い魔とは、動物を素体に造られる。
メリーバの素体は、ファミリアの家と代々主従契約を結び続けた万年を生きると言われた霊亀だ。
巨重の落下に、大地が一瞬揺れた。
下敷きにされたディープワンズから骨が砕ける音と内臓の破裂音が響く。
口腔から黒血を吐き出し悲鳴を上げる。
ここから、ディープワンズにとっての地獄が始まる。
魔物どもの再生は自動。即ち、魔物たちに己が再生力を制御することは不可能。
故に、その並はずれた再生力はディープワンズの状況に関係なく発揮される。
失った血液が補充され、骨が繋がれ、内臓が再生した。そして再生した瞬間メリーバの巨重によって再び粉砕される。
再生の度に破壊される負の連鎖。
ディープワンズに逃れる術はなく、助ける者もいない。
空へと逃げた魔導騎士を追っていく魔物たちは仲間に見向きもせず、神社には魔物の悲鳴が響き続ける。

ナイトゴーントを抜き、ズシャコンがファミリアに突撃。三つの口から覗く牙が襲いかかった。

「ミスったわね。わざわざ仲間と距離を取るなんて、いい的よ！」

ズシャコンの牙が届くよりも速く、ファミリアの手刀が黒い体に突き刺さる。
指先に氷の刃をつけた右腕がズシャコンの体に沈み、魔物の体が震えた。
反撃が来る前に、ファミリアが魔力を一気に流し込んだ。

送り込まれた魔力は冷気に変わり、冷気は内側からズシャコンを凍りつかす。
体内を氷漬けにされ、ズシャコンが地面に向かって落ちて行く。
ファミリアがバインドを発動。光の縄が魔物を縛り付け、宙釣りにする。
魔物どもの再生能力は体が損傷してこそ意味を成す。
故に、体を傷つけずに氷像にしてしまえば再生は止まるのだ。
ズシャコンの末路を見て警戒したのか、ナイトゴーントの追跡の手が緩む。
この隙にと、ファミリアは速度を上げて蒼い光へと向かった。

「――――――――――えっ？」

光源へとやってきたファミリアは、目の前の光景に驚愕した。
光の正体は炎だった。
蒼い炎が舞い踊り、黒の獣の群れを焼き払っていた。
そして、その炎の中心に、青年の姿が、松田怜一郎の姿があった。
蒼炎は青年の周りで渦を巻き、襲いかかる黒獣を焼き尽くす。
青年を守るように、青年が纏うように、蒼炎が舞う。

「何よ、あれ……」

青年の手には、一振りの剣があった。
蒼く輝く青い剣。炎はその刃から発していた。
驚愕に立ちつくすファミリアの横を黒い颶風が駆け抜けた。
有翼の魔物。ナイトゴーントだ。
ファミリアよりも炎を操る青年を脅威とみなしたのか、ナイトゴーントはその爪を怜一郎へと向ける。

「――――レイ！」

ファミリアが叫ぶと同時、怜一郎が剣を振った。
閃く青剣。炎が軌跡を描いて、ナイトゴーントの体を切り裂いた。
脳天に刃が乗り、そのまま滑るように両断されたナイトゴーント。
その身体から、蒼炎が弾け飛ぶ。

「……なっ」

ナイトゴーントの断末魔が響く。
決して斃れぬはずの魔物が、脅威の再生力を持つはずの魔物が、
灰塵へと還っていく。
後に残るのは蒼い炎。
蒼炎に照らされ、ファミリアの口から言葉が零れる。

「そんな、どうしてアレがこんなところに……」

昔、一振りの魔剣があった。
氷のように冷たく無慈悲に、劫火のように熱く猛り、あらゆる魔
を焼き喰らい尽くす魔剣。
魔を殺すために存在し、魔導の使徒を葬る必殺剣。
その名を。

「……魔殺獄剣、ヴォーパルソード」

外章　3　黒い魔人

かつて起こった複数の次元世界を跨いでの大戦。
俗に大戦期と言われる時代、質量兵器が闊歩する時代においても、魔導師は重要な戦力であった。
人の身で高速機動を可能とし、大火力の魔力砲で戦場を焼き払う。言うなれば戦車だ。
機械兵器が主流の時代でも、優れた魔導師の力は重宝されていた。
無論、魔導師とはどこか一つの世界だけが保有していたわけではなく、多くの世界に存在していた。
味方ならば心強いが、敵となると厄介の種でしかない。
故に、対魔導師兵器が作られるのも当然と言えた。
魔法行使を封じる結界。魔力を打ち消す対魔法装甲。様々な兵器や武装が開発され、その中でも最凶と言われたのが、一振りの魔剣だ。
銃撃・魔法戦が主となる戦場において、近接戦闘用の武装の活躍など期待されない。だが、その魔剣はたった一点においてどんな兵器よりも優れていた。
対魔導師用の魔剣として開発されたソレは、魔力を喰らい熱エネルギーに変換する性質を持った鉱石でできていた。魔剣はその性質を極限まで発揮するよう細工され、魔導師の天敵へと昇華した。
魔導師が魔法を使うには魔力が不可欠である。だが、魔剣はその魔力を喰らい熱に変える。
即ち、魔剣に斬られた――――最悪触れた者は――――自身の魔力を全て魔剣に奪われ、熱として霧散する。
一度に大量の魔力を失った魔導師は疲労困憊したかのように動きが鈍る。
魔力のない魔導師など恐れるに足らぬ。魔剣は、魔導師への切り札として大いに期待された。

だが、魔剣にもたった一つ、そして致命的な弱点があった。
剣へと形を変えて性質が僅かに変質し、魔力を奪って熱に変換するには魔法資質を持つモノが使わなければならなかった。
しかし一方で魔導師が持てば、性質を限界まで上げられた魔剣は持ち主の魔力までも奪い、使い手を一瞬にして灰にしてしまった。
魔法資質を持たぬ者ならば問題なく扱える。だがそれは魔剣ではなくただの剣だ。
魔法資質を持つ者なら性能を発揮できる。だが持ち主は一瞬で灰となって命を落とす。
致命的な矛盾を抱えたソレを使おうとする者など現れる筈もなく、その問題が判ると魔剣はお蔵入りとなった。
だれにも使われることなく、一度として剣として働くことなく、いわくつきの品として封印されてしまった。
やがて魔剣を生んだ国は滅んだ。時が流れ、考古学者が発見した書物には、魔剣のことが書かれていた。
その魔剣、あらゆる魔導を喰らい、魔導の使徒を滅ぼす呪いの剣なり。
その力、悪魔の如く。その炎、地獄の如く。
故にその剣はそう呼ばれた。
〈魔殺獄剣（まさつごっけん）ヴォーパルソード〉と。

Ｒｉｄｅｒ-ｓ　Ｚｅｒｏ　３話　黒い魔人

「彼女を、助けたいかい？」

男の言葉が、ゆっくりと耳朶にしみ込んでいく。
その意味を考え、その奥に隠れた真意を理解し、怜一郎は答えた。
「助け、られるのか？」
自分にその力があるのかと、希望に縋るように青年は言った。
男が、静かに頷く。
「それは君の精神力次第、といったところだがね。
まったく、異能はあるのに魔力がないとは……。ほんとう、難儀な血筋だね」
ぶつぶつと何ごとか呟き、男の手が怜一郎の頭に触れる。
「少々手荒い手段になる。痛いかもしれないが、男子なら我慢したまえ」
そう言った瞬間、膨大な力が怜一郎へと流れ込んだ。
血管が膨らみ、瞳孔が全開になる。
骨が軋み、全身が悲鳴を上げる。
「が……あ、あああ……ッ！！」
苦痛に喘ぐ。まるで鍵のかかった箱が、力づくで開かれようとしているようだ。
そして、箱の中身も外へ出ようと暴れている。
外と内の両側から力に押され、心が潰されそうになる。
「――――――――――――――あ」

そして、鍵が壊れた。
箱から力が溢れ、体内を駆け巡る。
さっきまでの痛みが嘘だったかのよう消えていた。

「……って、あれ？」

とぼけた声が怜一郎から出た。
青年は自分の体を眺め、ペタペタと感触を確かめては首を傾げた。
自分の中で何かが変わったのは間違いない。だがそれがなんなのかが判らない。
力が強くなった感覚はない。知覚が鋭敏になったわけでもなさそうだ。
強くなった、という確かな感覚が湧かないのだ。

「落ち着きたまえ。今のはきっかけを与えただけ。
君の力が発揮されるにはこの遺失物を……」

男が袖から、重厚な革表紙の本を取り出した。
魔力がない怜一郎でも、その本から溢れる力を感じた。
男が魔導書を怜一郎に差しだす。
魔導師と魔導書、二つを交互に見て、わずかに迷いを見せながらも怜一郎が魔導書へと手を伸ばす。
その瞬間、魔導書が粉砕した。

「うわっ！？」

目を見開き、咄嗟に手を引っ込める怜一郎。
男も息を呑んだが、その視線は破壊された本ではなく、青年の周りを飛び回る蒼い光に向けられた。
光は恒星の様に青年の周りを飛び、やがて怜一郎の手へと飛び込

んできた。
そこから、怜一郎の意識は途絶えた。
辛うじて覚えているのは掴んだ光が剣になったことと、剣から蒼炎が放たれたことだけだった。

轟音と爆炎が弾ける。
空襲だと気付いた時には、世界は真っ赤だった。
焦げ臭い異臭が鼻をつき、燃え盛る炎の熱気で目が痛い。
腰から下が家屋に潰され動かない。
何も感じない。痛みを感じないのは嬉しいが、動けないのは辛い。
眼前には赤い炎が迫っている。このままでは、自分は丸焼か燻製か。どちらかにしても勘弁してもらいたい。
しかし、死が迫っているというのに自分が落ち着いていることが意外だった。
自分という人間は、こんなにも落ち着きのある人間だっただろうか。
それとも、逃れようのない死を前にして達観した諦めでもしているのだろうか。
後者だろうと思った。一度思うと、抗おうとも思わなかった。
抗うのを止めると、意識が遠のいて行く。
これで終わりかと、短い人生だったなと思う。

（――――――――――――――あ）

閉じかけた耳に、声が響く。
何と言っているかは解らない。だが、確かに自分を呼ぶ声がした。
落ちた瞼が上がる。閉じた手を開き、前へと伸ばす。
そして、その手に触れたのは。

――――――――ムニュ

（……
……
……
……
……ムニュ？）

不思議な感触が手に広がる。
手に吸いつく様に柔らかく、絹の様なさわり心地。
一体これは何かと、怜一郎は瞳を開けて……絶句した。
眼前に広がるのは亜麻色の髪の少女の顔。
透き通るような銀の瞳が困惑に揺れていた。

「……」

「……ええっと……」

戸惑いの声。
視線を下げて行くと、怜一郎の手が、がっしりと、ファミリアの胸を掴んでいた。
触れているとかではなく、がっつりと。
指の関節を少しでも動かそうものならそりゃあもう……。
顔から血の気が引いて行く。

「ご、ごごごごごごごごめんっっっっっ！！！！！！」

見えない何かに殴り飛ばされたかのように、怜一郎の体が後ろへと転がる。

ゴン、ガン、バコン、と物騒な音を立てて部屋を散らかす怜一郎。

「ごめん！　わざとじゃないしいやわざとだから許されるわけでもないけど本当にゴメン！！」

ここは寄宿舎の自分の部屋だとかなんでここに彼女がいるのかとか諸々の疑問は彼方に吹っ飛び、怜一郎はひたすらに頭を下げる。

今更ながら、後頭部が妙に温かい。もしや膝枕でもされていたのだろうか。

そう思うと只でさえ上がった顔の熱がさらに上がってしまう。

「……」

痛いほどの沈黙の後、ぎしり、と床板が軋む。ファミリアが動いたのだろう。

一発殴られるくらいは覚悟して、怜一郎は目をギュッとつぶる。

「顔を上げて」

透き通るような声が耳朶にしみ込む。

刺々しさのない言葉に従い、怜一郎は顔を上げる。

ぺちん、と右頬を叩かれた。いや触られた。

「昨日のこと、どこまで覚えてる？」

「……は？」

予想外の言葉に、間抜けな声が出た。

「は？　じゃない。アンタ、昨日自分が何したのか覚えてる？」

銀の瞳が鋭くなる。

慌てて怜一郎は記憶を探る。

「えっと、寄宿舎の前で黒ずくめの男に遇って、あの黒い獣に囲まれて……それから、男になんかされて……」

そこからさきが思い出せない。

なんとか捻り出そうと、黒い瞳がぐるぐると回る。

その様子を見て、ファミリアは息を吐いた。

「そう。覚えてないのね」

身を翻し、ファミリアは窓に向かう。

怜一郎の部屋は二階にあり、特に視界を遮るものもないので遠くまでよく見える。

日が昇っており、暖かい陽光がファミリアを包み込む。

「……」

朝日に照らされたファミリアは、綺麗だった。

白磁の肌は日の光で美しく彩られ、艶のある長髪が輝きを放つ。

彼女の美貌を再確認すると、ますます先ほどの事故への罪悪感がこみ上げてきた。

「なぁ……」

「何？」

「怒って、ないのか……？」

「胸触ったこと？　別に気にしないわよ。わざとじゃないのは見て判るし、減るものでもないしね」

「あ……そう」

異性にあんなことされて平気なのは女としてそれはどうなんだと呆れ、一方でもしかして自分は男に見られていないのではと少し傷ついたりもする。

立ち上がると、机の上にある黒い石に目がいった。

見覚えがある。昨日、怜一郎は森で拾ったあの石だ。

「これ、君が使ったのよ」

「……え？」

ファミリアの言葉に、怜一郎はぽかんと口を開けた。

「昨日、その石で君が〈魔人〉の使い魔を倒して、君は倒れたの」

「嘘だろ……。こんな石でアレを？　俺が？　どうやって？」

信じられず、立て続けに疑問を口にする怜一郎。

ファミリアは石を手に取り、青年へと渡す。

――――ドクン。

と、怜一郎の中で何かが蠢いた。

内側の違和感に、青年の額に汗が浮かぶ。

「落ち着いて。ゆっくりと息を吸って。……落ち着いた？」

「あ、ああ……」

深呼吸を二度三度やって、ようやく違和感が治まった。

裡で蠢くものも鎮まった。

「無意識での発動か。ある意味、それでよかったのかもしれないわね……」

「え？　それってどういう……」

「ミリィッ！！」

怜一郎の言葉を遮る怒声。

声のした方を見ると、窓の縁に手をかけて、メリーバが入り込んでくるところだった。

背中に荷を背負ったメリーバの額には青筋。ファミリアが溜息をついた。

「朝っぱらからうるさいわよメリー。おつかいに行かせたのがそんなにいやだった？」

「ち・が・い・ま・す！　ミリィ、もうこれ以上彼を事件に関わらせるのは止めるんじゃなかったんですか？　なのに、貴女がマツダさんのところにいてどうするんですか！」

「そのつもりだったんだけどねぇ。でも、もう無理よ」

ファミリアの言葉に、メリーバは口籠った。
畳みかけるようにファミリアが続ける。

「レイはもう二度も〈魔人〉に関わった。しかも二度目は奴の使い魔を倒した。例えそれが無自覚だったとはいえ、〈魔人〉からしたら脅威よ。奴は、レイを優先して襲う可能性があるの」

「そ、それは……」

「だったら、こうして私たちが護衛してた方が一石二鳥ってもんでしょ？」

「た、確かに……じゃあ！」

背負った荷をファミリアに押しつけ、メリーバが怜一郎へと迫る。
青年の胸辺りまでしか高さがない小柄な少女が見上げながら言う。

「マツダさん。約束して下さい。決して、決っっっっして戦おうなんてしないで下さい！　いいですね？」

「りょ、了解……」

よろしい、と言ってメリーバが下がる。

「ふふ、メリーも強引ねぇ。本人に自覚がないんだから戦いようがないのにねー」

怜一郎が視線を上げると、ファミリアが荷を解き、不思議な物を取り出していた。

手の平に納まる金属製の小箱。表面にいくつものボタンが付いており、ファミリアはそれを押している。

「……」

右手で小箱を使い、空いた左手が細長い棒状の物体を取り出す。銀の包装紙を破り、中身を取り出す。

白い物体が現れ、ファミリアが齧りついた。白い歯で棒を噛みちぎり、もぐもぐと咀嚼していく。

平然と取り出された未知の道具に、怜一郎は疑問を口にした。

「……それ、なに？」

「それって？」

動きを止め、怜一郎の方を向くファミリア。

「今手に持ってんのと、食ってんの」

「えっと……こっちのは、通信端末。局に中間報告をね。それでこれは、レーション。携帯食料って言えば想像できる？」

「携帯食料……」

「そ。食べてみる？」

ファミリアはレーションの一部を千切り、怜一郎に渡す。

渡されたレーションをまじまじと見つめる。

質感はかまぼこに似ているだろうか。ある程度弾力があって、力を入れると形を変えた。

一気に口に放り込む。もぐもぐと咀嚼し、味わう。
顔のパーツが中央に集まった。

「……不味い。というか味がない。粘土みたいだ」

「あ～やっぱりそういう感想か。一応、三回食べれば人が一日に必要な栄養素が取れるらしいけど」

渋い顔をした怜一郎を見てファミリアが笑う。
無味のレーションをなんとか呑み込み怜一郎が訊ねる。

「それで、そっちの通信端末、だっけ。すごいな。電線もコンセントもないのに動いてる」

「こっちの技術力じゃまだ珍しいのかしらね。でもそのうちこの世界でも広まると思うわよ。文化レベルは低いわけじゃないんだし」

「そっか。本当に、他の世界から来たんだな」

「生まれた場所が違うだけで、基本的な部分は変わらないと思うけどね」

残りのレーションを呑み込み、報告も済ませたところでファミリアは両腕を上に上げて背筋を伸ばす。

「さて、相変わらず質素な朝食も済ませたところ出し、レイも目覚めたし、そろそろお暇しましょうかね」

「あ、そうか。ここ男子寮だしファミリアがいるといろいろ……え？」

言葉を詰まらせ、怜一郎が固まった。
目がぐるぐると回る。慌てているようだ。

「今のが朝飯。ってことは今の時間は――――――――！」

しまった！　と怜一郎は声に出さず自分を怒鳴りつけた。
現在時刻は七時五分前。この時間は確かいつも――――――――。

「おーっす起きろ松田ー。飯だぞー」

ノックもせず、眠気の混じった声とともに扉が開く。
入ってきたのはボサボサ黒髪の青年。怜一郎の同級生で、隣の部屋の学生だ。寝坊防止に、隣同士で起こし合うのがここの決まりなのだ。
青年は、ファミリアとメリーバを見て案の定硬直。
そして。

「みんなぁぁぁぁあああ！！！！！　松田が部屋に女連れ込んでるぅぅぅぅうううう！！！！！」

おさかなくわえたどら猫を追い掛ける勢いで、大声を出して部屋から飛び出して行った。

「あはははは！　いやーあんな楽しそうな光景を見たのは久しぶりね」

「笑い事じゃありません！　管理局の執務官ともあろう者が、あん

な数の管理外世界の一般人に姿をさらすなんて」

窓から外を見ながら笑うファミリアにメリーバが苦言を呈した。
先ほどの騒ぎ。松田怜一郎が女（しかも二人）を連れて込んでいたということは、厳格な寮監による平穏な朝を木っ端微塵に粉砕した。
ファミリアを見た学生の声により、この部屋には雪崩のように寄宿生が押し寄せた。
皆ファミリアを見て驚き、怜一郎にどういうことかと詰め寄っていた。
仕方ない。ファミリアもメリーバも、その容姿――――髪や瞳の色――――はこの国の人間ではあり得ない色だ。
ファミリアも多くの人に囲まれ、質問攻めに遭った。
どこの国の人か。髪や瞳の色は生まれつきなのか。
現在の状況から、自分の様な異国の風貌の人間への敵意を警戒したが、彼らにはそのようなものはなかった。
笑顔で囲まれるというのは久しぶりで、思い出すだけでファミリアの顔には笑顔の華が咲く。
厳しいと評判の寮監の接近によって審問は打ち切られたが、あの様子では怜一郎はまだ質問攻めに遭っていることだろう。

「……あ」

窓の下、寄宿舎から黒い学生服を来た集団が現れた。
その中から怜一郎を見つけ、ファミリアは手を振った。
向こうもこちらに気付き、軽く手を上げた。
それを学友に見つかり、首に腕を回され絡まれている。

「楽しそうね」

少女の顔に影が落ちる。楽しく語り合える友人。彼女にはそんな者はいるだろうか。

同期の者で親しくなった者くらいいる。だが皆自分の仕事に追われ、碌に遭っていない。

胸が、キュッと締め付けられる。

管理局最高の魔導騎士は、常に孤独だ。

「ファミリア……？」

使い魔の声に、ハッと気づく。

「ごめんメリー。ちょっとつまらないことを考えていた」

「そうですか。では、これからの動きについて検討を」

窓から離れ、メリーバと向き合う。

そうだ。自分は孤独などではない。この少女がいるではないか。

迷いを払い、ファミリアは今後の方針を告げた。

「とりあえずは待機。少し、気になることができた」

「気になること、マツダさんの力ですか？」

ファミリアが頷く。

「そう。レイには魔法資質はないわ。なのに、彼はあの魔剣を動かした」

口元に手を当て、メリーバは自分の考えを口にした。

「魔殺獄剣。アレは魔法資質がないと動かないはずです。二度の命の危険で、彼の中の魔法資質が覚醒したということでしょうか？」

「ないわね。ヴォーパルソードは魔力を持つモノは全て焼き殺す。自分の使い手もその例外ではないわ。

それに、怜にはやっぱり魔法資質はない。寝ている間に確認したわ」

「……ファミリア。それが本当だとしたら」

剣呑な表情を浮かべたメリーバに、ファミリアが頷く。

「レイは、魔力も無しに魔道具を操った。これは、本来ならあり得ないことだわ」

「この世界特有の先天資質、という可能性を除けばですがね」

「こんな田舎世界にそんなモノが、と言いたいけど、目の前で見ちゃった以上否定できないわね。

私たちで解明できない以上、このことは今は置いておきましょう。もう一つ、気になることもあるし」

もう一つ？　とメリーバが訊き返す。

答えようとした時、机に置いておいた端末の画面が明滅。メールが送られてきていた。

ファミリアが手に取り、メールに目を通す。

「レイが言ってたんだけど、ヴォーパルソードを使う直前に黒ずくめの男に遇ったと言ってたわ。事実、彼から魔力の残滓を感じた。その波長を記録して、〈魔人〉の魔法陣の画像と一緒に解析室に送

ったのよ。
で、今その結果が届いた」
「……どうでしたか？」
薄く笑い、ファミリアは端末をメリーバに渡す。
少女の顔が青ざめて行く様子を見て、ファミリアは冷たく言った。
「最悪よ。
この世界に、もう一人〈次元最悪の七人（クライシス・セブン）〉が来てるなんて」
「最悪だ。
朝っぱらからあんな人数に囲まれるなんて」
机に突っ伏して、怜一郎は唸るように言った。
寮監に見つからなかったのは幸運だったが、それ以外は不運だった。
学校に着くまで、寄宿生からは途切れることなく質問をぶつけられた。
やれどこの国の人だの、やれいつから知り合ったのだの、もう付き合っているのか、やったのか、どんどんと下劣になっていく質問の嵐に、怜一郎の精神は朝から擦り減らされてしまった。
魔導師とか異世界から来たとか、本当のことを言うわけにもいかなかったというのも原因の一つだろう。
ギシリと机が軋みを上げた。
顔を上げると、中嶋橘花（きつか）が肘を乗せてこちらを見ていた。
目尻が垂れ、口元が緩んで見えるのは気のせいではないだろう。

「なんだよ」

「聞いたぜ怜。異国のお嬢様をお持ち帰りしたんだってな。しかも二人」

「違うって判ってんのに、どうしておまえはつっかかってくるんだ」

「そりゃお前、その手の話に興味なさそうだった松田怜一郎の部屋に美少女二人となれば気にもなるさね」

「そういうもんか？」

「そういうもんだよ。……で？　本当のところどうなんだよその娘とは？」

好奇の視線と笑みを向けられ、怜一郎はぐったりと机に頭を乗せる。

「どうもこうも、何もないよ。彼女がこの街を知りたいっていうから案内して、最後に俺が疲れて倒れたところを介抱してくれたんだ。それ以上も、それ以下でもない」

「ふ～ん……じゃあ、別に恋慕の情もないわけ？」

「……」

そうだ、と言おうとした。だが、言葉が出てこない。

たった三文字、一息で言える言葉が言えなかった。

言おうとすると、胸の奥が絞められ言葉を遮る。

実際、自分は彼女にどんな感情を抱いているのだろうか。
最初は命の恩人だった。次は案内人だった。そして今は、なんなのだろうか。

「は～ん。
ひゅ～。
ふ～ん。
へぇ～。
ほ～」

答えが見つからず悶々とする様を見て中嶋はニヤニヤ笑い、勝手になにか納得して自分の席へと戻って行った。
授業が始まってからも考えたが、怜一郎にはこの感情の正体が判らなかった。

管理局から送られてきたのは短い一文だった。
“波長一致　〈暗黒賢人〉レイオン・スターライナー”
端末を握りしめ、ファミリアは窓の外を睨みつける。
レイオン・スターライナー。自分の知識欲を満たすために多くの人命を犠牲にしたと言われる狂気の魔導師だ。
長年姿を消していたことから死亡説も流れていたが、それが嘘だということが今証明された。
この街のどこかに、最悪の一人がいる。そう思うと、自然に顔が険しくなってしまう。

「ミリィ。貴女の背中を守る使い魔として、提案があります」

「聞きたくない」

メリーバの提案を、聞くことなく一蹴した。
二人は長い付き合いだ。ファミリアにはメリーバが何を言おうとしているのか予想できる。そして、その提案は受け入れ難いものだった。
拒絶されても、メリーバは提案を告げた。

「ミリィ。〈魔人〉に〈暗黒賢人〉、この二人相手ではわたしたちだけでは手が余ります。管理局に、援軍を要請しましょう」

「別に二人が手を組んだと決まったわけじゃないわ。〈暗黒賢人〉はレイに魔剣を渡してる。上手くすれば、悪人同士で潰し合ってくれるかもしれない」

「それは楽観過ぎです。魔導師なら、貴女の名と武勇を知らない者はいません。〈赤い死神〉を潰すために、奴らが手を組む可能性だって十分にあります」

「それこそ、悲観し過ぎよ」

「ミリィ……」

増援を頑なに拒むファミリア。
その理由をメリーバは知っている。

「まだ、あの時のことを気にしてるんですか？」

騎士の肩が震えた。
図星ですか、とメリーバは項垂れた。
ファミリアは極力人に自分の力を見せない。

怜一郎が後ろにいた時も、全力の三割も出していなかった。
原因は幼少期に負ったトラウマだ。あの時の心の傷を、ファミリアは未だ抱えていた。

（仕方ないですね……）

今後のファミリアとの関係が悪化することを覚悟で、メリーバは増援要請を決意する。
これから戦うであろう魔導師は最凶最悪の魔導師、それが二人だ。
激戦は必至、ファミリアが重傷を負うのは確実で、最悪ファミリアは命を落とす。
メリーバは使い魔として、ファミリアを死なせるわけにはいかない。
管理局へ通信しようと端末に手を伸ばした時。
最凶の一角が、窓の向こうで笑っていた。

「やぁ、初めましてだね。かわいい騎士さん？」

ガラス一枚隔てた外から男の声にファミリアは肌が粟立つのを感じた。
全身を漆黒に包んだ男から感じる魔力は、怜一郎から感じたソレと同じ。
間違いない。この男が、〈暗黒賢人〉――――。
気付いた時には、すでにファミリアは突撃していた。
魔力で脊力を強化。ファミリアが踏みしめた床板が悲鳴を上げて、赤い弾丸が窓をブチ破った。
ガラスが砕け散り、悲鳴のような音が響く。
メリーバは急いで周囲に結界を張る。
住人の意識から自分たちをはずし、空間の位相をずらす。

結界内がある限り、この街の住人がこれから始まる魔導師の激闘に気付くことはない。
たとえ地が砕けようと、天が割れようと、人が死のうと、彼らは気付かない。
氷剣と夕日剣を交差させ、騎士はレイオンに斬りかかる。
レイオンが袖から魔杖を取り出し、双剣を受け止めた。
先端に飾られた鬼の頭蓋、暗い眼窩が騎士を見ていた。

「いきなりだね。こちらは挨拶をしただけなのだが」

「乙女の部屋を除く変質者に挨拶なんて不要よ」

ガキン、と杖を弾いてファミリアは男の懐に潜り込む。
氷剣が閃き、レイオンの体を上下に両断。
獲った、と思った瞬間。レイオンの骸が膨れ上がり、爆散した。

「――――ッ！」

咄嗟に後方に跳び、爆裂から退避。騎士服が僅かに損傷、魔力を注いで速やかに修復。
煙が風に流される。騎士の視線の先にはレイオンがさっきと同じ姿勢で立っていた。

「本当にいきなりだね。一歩間違えたら死んでいた」

「当然よ。殺す気で斬りかかったんだから」

虚空を踏みつけ、ファミリアが駆ける。
魔力を凍結させて手に刃をとる。
戦輪、ダガー、曲刀、ランス。赤い氷によって造形された無数の

刃が一斉にレイオンに向かう。
鬼の眼窩が発光。魔導師の前に黒い魔法壁を展開。氷刃が高密度の魔力の壁に阻まれ砕けて行く。
その下を、赤い颶風が駆け抜けた。

「――――――――なんと」

その影を捉えた瞬間、騎士は既に背後を取っていた。
魔導師が振り返る前に、強化された脚で蹴り飛ばす。
回転し虚空を滑るレイオン。寄宿舎の屋根にぶつかり瓦と木材を粉砕しながら斜め上へと吹き飛ぶ。
魔導師が体勢を整え様とした時、既にファミリアはさらなる追撃へと頭上に移っていた。
容赦なく、ファミリアの蹴りがレイオンの顔面を貫いた。
骨が砕ける嫌な感触を感じながら、地面へと叩きつける。
大地が揺れ、砂塵が波濤となって舞い上がる。
砂塵の霧が晴れる。ファミリアの脚が、地盤に亀裂を入れていた。
精神リンクによってメリーバに流れてくるファミリアの感情は苛立ち。
ゆらりと、ファミリアの背後に黒衣の魔導師が佇んでいた。
意識だけを背後に向け、騎士は言った。

「ぬらりくらりとまったく、〈暗黒賢人〉というより〈影法師〉ね」

「褒め言葉として受け取っておこう。
それはそうと、ずっとそこにいると危ないよ？」

自分の左右に魔力を感じ、ファミリアに戦慄が走る。地面を蹴って後方に跳ぶ。
瞬間、ファミリアのいた場所に異常な重力場が発生した。

遅れていた右足が不可視の鉄槌で潰された。長い脚から、赤い血と白い個体が溢れた。
騎士の端整な顔が苦痛に歪む。
氷剣を二振り精製、投擲して力場を発生させていた魔法陣を破壊した。

「メリー、治癒お願い！」

はい！　という声とともにファミリアの右足を淡い魔法環が包む。
治癒の光に包まれ、潰された右足が回復していく。

「使い魔は後方支援か。君が猪突猛進な分、大変だな」

「逆よ。あの子が優秀だから、私が突っ走れるのよ！」

地を蹴り距離を詰める。
神速で振り抜かれた剣はレイオンの体を捉え、切り裂く。
だが、男の体は蜃気楼のように消えてなくなり、またファミリアの背後を取っていた。

「どうやら、君とは相性がいいようだ。
君の力では、僕は捉えられない」

「言ってくれるわね。言っとくけど、こっちはまだ全力出してないわよ」

獣の如く瞳を光らせるファミリアに、レイオンがくつくつとくぐもった笑いを零す。

「知っているよ。君の実力は聞いているからね。

だが――――――――」

男の空気が変わる。

霞の様に捉えづらい雰囲気から一変。重く暗く、どす黒い重圧がファミリアに圧し掛かった。

「僕にばかり気にかけていていいのかな？」

ズンッ――――と、黒い光の柱が現れた。

ファミリアの視線の先にあるその場所は。

「レイ――――――――！」

青年が向かったあの場所だ。

カッカッと白墨の音が響く。

怜一郎は机に広げた教科書に目を通しながら、黒板の内容や教師が話すことをノートに書き込んでいく。

この授業が終われば昼休みだ。待ちきれない者はすでに陰に隠れて弁当に手をつけている。

「……」

ふと、背筋を冷たいモノが滑り落ちた。

ぞわりと全身が総毛立つ。

違和感の正体を確かめようと、怜一郎は身を捩って後ろを向く。

この行動をしたことを、青年は激しく後悔した。

「――――――――――なんで」

驚きの言葉が漏れた。

遥か視線の先、校門の前に、男がいた。

闇よりも深く暗い黒のコート。鈍色の髪。青白い肌に埋め込まれた蒼い瞳がまっすぐにこちらを見ていた。

青年の挙動を不審に思った生徒たちが、次々と校門に目を向ける。

その場にいる皆がアレの存在に気付いていく中、怜一郎はアレが笑ったのが判った。

怜一郎の視力は常人と変わらない。だというのに、百メートル以上離れた先の男の唇の動きが見て取れた。

――――――――――陽のあるうちは動けぬと誰が言った？――――――

絶望の闇が空を覆う。

生徒たちの悲鳴と、饗宴に狂った獣たちの咆哮が混じり合い響きわたる。

黒光に閉ざされた世界で、魔人の狩りが始まった。

外章　4　揺れる心

天を衝く黒光の柱。ソレから感じる魔力は、間違いなく昨夜の〈魔人〉と同じ。

ファミリアは自分が致命的な勘違いをしていたことに気付いた。

〈魔人〉――――セドリック・ディグニティ――――の使い魔による狩りは夜間にしか行われなかった。

過去の〈魔人〉が起こした事件も、全て陽が落ちてからだった。

だから、〈魔人〉は夜にしか動かない。みんなそう思い込んでいた。

「レイ――――――――――――!」

困惑したファミリアの脳裏に青年の顔が過る。

セドリック・ディグニティの狙いは十中八九怜一郎だ。

いや、学校は他の生徒も大勢いる。

未知の脅威の排除と、儀式に必要な贄を一気に集めることができる絶好の狩り場だ。

ファミリアの意識が学校へと向かう。

大地を蹴り、青年を救おうと騎士が颶風となって駆け出した。

だが、弾丸の如く疾駆するファミリアの前に、漆黒の魔導師が立ち塞がった。

「ここまで派手にやっておいてどっかいくなんてひどくないかい？」

「どきなさい！」

レイオンの戯言に耳など貸さず、フランベルグを一閃。真紅の刃が魔導師を捉えるが、またしても刃は雲を切り裂く如く不発に終わ

る。

「アンタ、あそこにはアンタが昨日助けたレイがいるのよ。なんで邪魔するの！」

「確かに助けた。だが彼を助けたのは生かすためではなく、育てるためだったからさ」

「育てる？」

訝しげな顔をするファミリアに、そうだ、とレイオンが頷いた。

「彼はピースだ。僕の願いを叶える為の最も重要なピース。そして願いを叶えるためには彼に強くなってもらうしかないのさ。果実は、熟してから食べるものだからね」

「アンタねぇッ！！」

身勝手な言い分に、ファミリアが激昂する。

レイオン・スターライナーは〈次元最悪の七人（クライシス・セブン）〉とされる者の例に漏れることなく狂人だ。

かつて、多くの危険な魔法技術・魔導具を開発し、実験と称して多くの人の人生を狂わせ、次元世界を壊してきた魔導師。

その優れた頭脳と闇に堕ちたその精神が〈暗黒賢人〉という二つ名の由縁だ。

レイオンを振り抜こうとファミリアが飛翔する。だが黒魔導師はそれを超えた速度で回り込み、騎士の前に立ちはだかる。

「君があそこにいる〈魔人〉を倒したいのは承知している。だがここで君が助けに入っては彼の成長の妨げとなる。

今だけは、大人しく僕の相手をしておいてもらおう」

「そんなこと言って！　レイが持ってる魔剣は〈魔人〉にとって脅威、だから奴も真昼間から動いているのよ。もしもレイが殺されたりしたらどうするつもりよ！？」

叫ぶ騎士の表情には必死の色が浮かぶ。

怜一郎はヴォーパルソードが使える。それを本人が覚えていなくて、昨夜の発動が偶然だったとしてもその事実は変わらない。

強力な魔導具は時に意志を持ち、自ら持ち主を守ることがあるという。

それが持ち主への忠誠心なのか、己を使うものがいなくなることを恐れてなのかは解明されていないが、あの魔剣にもそれが当てはまるのだろう。

目の前の魔導師はそれを判って、この状況を傍観している。

あの魔剣は必ず青年を助けるために起動する。そしてその炎がセドリックの使い魔に対して有効なのは証明済みだ。

だが、魔法戦というのはそんな単純なものではない。

セドリックは一度魔剣の力を使い魔の目を通して見ている。一度見て、脅威と確認したモノへの対策を怠るものが、長年管理局の手を逃れることができる筈がない。

奴は必ず魔殺獄剣に対する何らかの対策を講じてくる。

頼りの魔剣を封じられて、怜一郎が、あの学校にいる生徒たちが生き残れるわけがない。

ファミリアの表情から、彼女の言いたいことを察した魔導師が、薄く笑った。

「死んだら死んだまでのこと。この程度の危機、乗り越えられないような者なら僕は要らない」

ぷつり、とファミリアの頭の中で、何かが弾けた。

「君も管理局員なら、人助けよりも僕の様な重犯罪者の首を狙った方が得なんじゃないのかい？
くだらない正義感なんかドブに捨てて、僕と踊ろうじゃないか」

激昂し、熱くなった頭が急速に冷えていく。
同時にファミリアの顔から表情が消えて行く。
銀の瞳はただ虚ろに、目の前の黒衣の魔導師だけを映す。

「そう。どうしてもどかないって言うのなら……」

一変した騎士の様子に、レイオンが首を傾げ、そして隠れた瞳を見開いた。

「アンタを殺して、通るだけだ！！」

夕日剣の柄から弾丸が三発排莢。解き放たれた圧縮魔力が騎士の体を満たして行く。
刃が赤く紅く朱く輝く。
迸る魔力は冷気に変わり、夏の日差しが嘘かのように世界から熱が消えて行く。

「――――――――フルドライブッ！！！」

瞬間、天地が真紅の絶氷に包まれた。

Ｒｉｄｅｒ's　Ｚｅｒｏ　４話　揺れる心

何かに縋るように、怜一郎は天を仰いだ。
その黒い瞳に映るのはその黒よりも深い闇に覆われた空。
時刻は昼過ぎ程度だというのに、まるで夜の帳が降りたかのように暗い。

「……」

いくら睨みつけても、天は変わらず黒に閉ざされたまま。本のように、仏からの救済の糸が垂れ下がって来ることはない。
顔を俯かせ、青年は溜息をついた。

「良く考えてみると、蜘蛛なんて助けたことなかったな」

〈魔人〉の襲撃により、学校は大混乱となった。
漆黒の獣たちが唸りを上げ、人間たちは阿鼻叫喚の混乱の渦に呑まれた。
人々は逃げ惑い、抵抗を嘲笑うかのように獣の群れが咆哮した。
混乱の中、怜一郎が身を隠したのは建て直し中の校舎だった。
無論、獣たちも校舎の中には入り込んでいる。
それでも遮蔽物が碌にない校庭にいるよりはずっとマシだろう。
二階の教室で息を潜め、怜一郎はジッと襲撃が止むのを待つ。正確にはファミリアとメリーバがやって来るのを待つ。
真昼間からの強行、魔法資質のない怜一郎ですら不穏な魔力を感じるこの異変を、あの魔導騎士達が察知できないわけがない。
助けが来るまで大人しくしていよう。そう考えたところで、怜一

郎はゴツンと頭を木の壁に打ち付けた。

「ほんっとうに情けない。ファミリアに頼りっぱなしじゃないか俺は」

何もできない自分に腹が立つ。力のない自分に腹が立つ。

自分と同い年の少女に全てを押しつける自分の弱さに、腹が立つ。

力、と思い出して怜一郎は制服のポケットをまさぐる。

指先に感じる固い感触。手を広げてしっかりと握り、ポケットから手とともにソレを取り出した。

握られていたのは黒い石。石製ナイフの様な形で、黒曜石のように艶のある石。

怜一郎はこれであの黒い獣を倒したのだとファミリアは言った。

未だに信じられない。確かに青年に昨夜の記憶はない。

だが、こんな石一つであの獣をどう倒したというのだろうか。

「――――――――!」

外から物音。ガタ、ゴト、バタンと何かが暴れるような音。ソレに混じって、誰かの震えた悲鳴が聞こえてきた。

音が近づいてくる。

ペタペタという裸足の足音とズルズルという布の擦れる音。

何かが、何かを引きずっている音だ。

音はどんどんと大きくなり、悲鳴もよりはっきりと聞えて来た。

「おいやめろ、離せ、離せよぉ！」

「くそっ、くそぉっ!!　なんなんだよこれぇ!?」

「ああ……誰か、助けて、母さぁん……」

悲鳴は、一人だけのものではなかった。
怜一郎はその中に知った者の声を確かに聞いた。

「……中嶋？」

ゾクリ、と全身が総毛立つ。
扉の向こうから聞こえてきた声の一つは、間違いなく中嶋のものだった。
肩が震える。木製の壁一枚隔てた向こうで、友人が危機に陥っている。
自然と、石を強く握りしめる。冷たい感触が、肌の熱を吸って熱くなっていく。

「……ああ、くそっ」

苛立ちを口から吐き捨てる。
先ほどの葛藤が、沸騰する頭を無理矢理冷却した。駆けだそうとした脚から力が抜けて、浮いた腰が再び落ちる。
助けようとして、出て行って、何ができる。
中嶋を引きずっているのが黒い獣なのは明らか。ならば怜一郎に出来ることなど無い。ただ無様に捕まり、悲鳴の数が一つ増えるだけ。
壁にもたれて天井を仰ぐ。灯りのない電灯が目に映る。

「くそっ、本当に情けない」

こうして自分の無力さを嘆くのは何度目か。
昔から、自分に出来ることは何なのかを探し、迷っていた。やりたいこととは何なのかを考え、求めていた。

やりたいことは今目の前にある。長く求めていたモノがあっても、それを成し遂げるだけの力がない。

「なんでだよ……」

何故、自分には力がないのか。

今この瞬間にも友が危機に陥っているというのに何もできないことへの自責の念が胸を締め付ける。

痛くて、現実から逃げたくなって、目を閉じた。

見えるのは瞼の裏のはずなのに、赤い光が過った。

その輝きは、怜一郎の迷いを消していく。

「――――――――そうだ」

迷う必要など無い。

あの時、自分を炎から救った人間は、力の有無など考えていただろうか。

あの夜、自分を獣から救った少女は、二の足を踏み迷っていただろうか。

違う。

どちらも、そんなことはなかった。

ならば自分も立ち上がるべきだ。力の有無など無意味。

今この身が望んでいるのなら、ただひたすらに進むしかない。

しっかりと、さらに強く石を握りしめる。

手の平の痛みが、青年の心を固く締めあげる。

浮いた腰は落ちることなく、力を込めた脚は止まることなく。

「待ちやがれ!!!」

青年は、自ら戦場へと飛び出した。

扉を吹き飛ばしかねない程の勢いで、教室から飛び出した。
バン、という激しい音と青年の咆哮に、無数の視線が一点に向けられる。

「れ……怜……」

弱弱しい声、顔が涙でぐしゃぐしゃになった中嶋の視線が飛んできた。
同じように恐怖で強張った男子と女子の顔が一つずつ。そして彼らの制服の襟を咥えた黒い犬。
黒い淀んだ眼が、怜一郎を見据えてきた。
腰を落とし、石をしっかりと握って構える怜一郎。
応戦の意志を見て、中嶋が声を荒げる。

「ば、馬鹿！　お前何してんだ、早く逃げろよ！」

「うるさい。そんなこと言ったら、余計に逃げにくくなるだろうが」

武術の経験など無い。せいぜい体育の授業で竹刀を握った程度。
ならば出来ることは只一つ。
しっかりと見て、躱して、打つ。
作戦など無い。愚直なまでの特攻。それが、怜一郎に出来る唯一の一手。
駆けだそうとした瞬間、視界の端に影。とっさに横に跳ぶと、ドサッという何かが落ちる音がした。
蜥蜴だった。
黒一色の、胴が丸太のように太い大蜥蜴がこちらを見ていた。
背後から空気が漏れるようなシューシューという音。振り返ると、黒い大蛇がとぐろを巻き、鎌首をもたげていた。
二日前、怜一郎を攫ったあの蛇を思い出す。

あの時の恐怖が蘇り、脚が震える。叩いて無理矢理止めた。

「いきなり囲まれてんじゃねぇよ……」

男子の一人が掠れた声を出した。

確かに、勇んで飛び出してきた割にはあまりにも情けない状況。

それでも、やることは変わらない。

犬だけに向けていた意識を三つに分割して警戒する。

ジリジリと重圧がのしかかって来る。

沈黙を切り裂く様に、大蛇が飛びかかって来た。

とぐろがスプリングのように伸び、大蛇が矢の如く翔る。

体をねじり躱す。鋭い牙が二の腕をかすり、波打つ尾が横っ腹を叩いた。

焼けるような痛みと腹に伝わる鈍痛に顔を顰める。

大蛇の攻撃を皮切りに、蜥蜴と犬が疾走する。

壁を這い、床板を踏み割り、二頭の獣が迫る。

一足遅れて大蛇が再度滑空。三つの脅威が青年に牙をむく。

「……」

回避は不可能。蛇の牙には毒でもあったか、体は熱く視界が揺れる。

唯一の頼りである石の使い方は未だ分からない。

絶体絶命。その四文字が青年の脳裏を埋め尽くす。

「……って、馬鹿か俺は」

石を握る。碌に体重をかけないまま、石を握りしめた右手を前に突き出す。

青年の口元はつり上がり笑みを作っていた。自棄になったかと、

その場にいた全てが思った。
そうなのかもしれない。だが、青年にはある種確信があった。
石の使い方が判らない？　何を馬鹿な事を。
使い方など、考えるだけ無駄だ。
こんな石、敵を殴りつける以外にどうしろという。
ゴンッ、と石の先が、犬の頭部に触れた。ただそれだけ。石は弾かれ、獣の牙は青年を貫くはず。

「――――――――」

はず、だったのだ。
だがそうはならない。青年を貫くはずの牙は以前届かず、弾かれるはずの石は未だ、犬の頭に触れている。
目も眩む蒼い劫火が弾けた。

悲鳴と咆哮が響きわたり、人と獣の濁流の中でセドリック・ディグニティは不動のまま直立していた。
くすんだ蒼の瞳は真っすぐに校舎を見据えていた。
背後で逞しい角を持った黒牛が生徒を引きずっていく。
命乞いの言葉は、セドリックに届くことはない。
もとよりこの場で殺すつもりはない。彼らはこれから行う儀式に必要な贄だ。
いずれその命を捧げてもらうが、それは今ではない。
だが人の体というのは存外脆い。使い魔たちに誤って殺さぬよう念話で伝令を出しておく。
使い魔と視覚を共有している〈魔人〉には、青年が蒼い光に包まれる瞬間が見えていた。
青年の握った石が使い魔の一体に触れた時、共有していた視覚が

一つ消えた。その視覚を有していた使い魔が消滅したのだ。
すぐに近くにいた使い魔を向かわせ、視覚に接続して観察を続ける。
青年は眩い青い光に包まれ、石は青い剣となった。刃から蒼炎が噴き出し、囲んでいた使い魔たちを一瞬で灰塵に帰した。
使い魔とのラインが次々と消えて行く。
消滅した使い魔が最後に見た光景は全て同じ。魔を喰らわんと猛る蒼い炎だった。

「……ふむ」

顎に右手を当てて思案顔。
剣から迸る炎は強烈。でなければ、セドリックの使い魔を一瞬で灰にすることなど出来はしない。
だというのに、先にある校舎が炎上することは一切ない。
窓から時折蒼い光が零れるが、それだけだ。蒼い炎はその他いっさいを焦がすことなく、魔の眷族だけを燃え散らす。
解せぬ、と顔を顰め、脳裏を駆け抜けた閃きにセドリックの両目が大きく開いた。

「なんとそうか。あの魔剣、アレは魔導に関したモノのみを焼き払うのか。
ということは、アレがかの〈魔殺獄剣〉！　呪われた名剣を、このような辺境の次元世界で見ることになるとは……」

顔に感動の色を浮かべて、セドリックは感嘆した。そしてすぐに怪訝な表情へと切り替わる。

「しかし判らん。あれが〈魔殺獄剣〉ならば、何故あの小童はアレを扱える？　魔剣の持つ矛盾を、どうして乗り越えた？」

ピシリと、闇の空に亀裂が走った。
思考を中断し、魔人が空を見上げる。
亀裂は空全体に奔り、そして砕けた。
闇色のステンドグラスが、その混沌の破片を撒き散らす。
黒い雨に紛れ、降りて来る者に、セドリックは驚嘆した。
赤い騎士の姿。銀の瞳。手にした刃は真紅に輝く。
その姿、まさにカの通り名にふさわしい。

「ついに来たか！　〈赤い死神〉！！」

次の瞬間、赤い剛刃が〈魔人〉を切り裂いた。

校舎を徘徊する使い魔を蒼い炎で焼き散らした数が十を超えたところで、怜一郎は一度動きを止めた。
昨日とは違い、意識ははっきりとしていて視界は明瞭。
体が熱いが、けっして苦痛はない。むしろ熱がエネルギーとなって体を動かす。
目線が右手に握った魔剣に下りる。ずしりと重い感触を確かめる。
青く輝き、炎を吐き出す謎の魔剣。これがこの世界の理から常軌を逸しているのは明らかだ。
何故それを自分が使えるのか。理由は判らない。
それでも、今この場で、戦えるだけの力があるというのは心強い。
恐怖する対象でしかなかった黒い獣たちが、この魔剣の前ではひとたまりではない。
この魔剣で獣を倒すたびに、気分が高揚していく。
今まで無力だと思っていたことが嘘のようだ。
外で轟音。

驚きで肩が跳ねた。視線を外に向ける。
校庭に、巨大な氷の塊があった。
通常のモノとは違う赤い氷。見覚えがある。
アレは、青年がよく知る騎士の魔法。

「ファミリア……！？」

駆けだす。
階段を数段すっとばして全速力で昇降口に辿りつく。

「……つっ」

急ぎ過ぎたか。鈍い頭痛とともに視界が一瞬揺らぐ。
気にしない。今は、この状況を作り出した魔人を退けることだけに専念する。
やっと彼女の役に立てる。この魔剣の力なら、それが叶う。後ろでただ見ているだけではなく、彼女と肩を並べて戦える。
心臓を弾ませ、校舎から外へ飛び出した。
そして、冷気の津波に呑み込まれた。

「な……っ！？」

驚愕の声が掻き消された。
開いた口から鉄砲水のような冷気が入り込んだのだ。
噎せ返る。気付くと、全身に薄氷が張り付いていた。
氷はあっという間に体中を蝕み、怜一郎を氷像に変えて行く。
体温を奪われ、動きを封じられていく恐怖に陥るが、すぐに青年を蒼い炎が包み込んだ。
炎は全身を舐め回し、氷だけを溶かして行く。
体に自由が戻る。漏らした安堵の息は白かった。

前を見る。そこは、氷の世界だった。

「――――――――――！」

驚きで声が出ない。

今の季節は夏。そして冬でも雪には縁遠いこの街ではあり得ない光景だった。

空を仰ぐ。闇色の空には大穴が穿たれていた。穴を中心にいつくも亀裂が走っていた。

視線を大地で下ろす。普通ではあり得ない赤い氷。それが校庭を完全に覆っていた。

氷原に生えた氷柱は〈魔人〉の使い魔が氷漬けにされたものか。

そして、氷の世界の中心で、赤と黒の影が激突していた。

黒い影は大量の使い魔を放った最凶の魔導師の一角、〈魔人〉セドリック・ディグニティ。

そして、赤い影は――――――――――。

「ファミリアー――――――！！」

青年の叫びは、魔導師の剣戟の嵐に遮られた。

突如襲った衝撃に、セドリック・ディグニティなそのくすんだ蒼い瞳を見開いた。

空に穴が空き、飛来した真紅の影。

油断はなかった。防御は試みた。

だが、騎士の斬撃は、防御の上から魔人の胴を薙ぎ払った。

大量の魔力を削られ、一瞬視界が歪む。

人間では不可能な時を活き続け、幾多の戦場をかけた熟練の魔導

師であるセドリックにとって、まともに攻撃を入れられたのは久方ぶりのことだった。
自分の使い魔を軽くあしらったのだから、弱者などとは思っていなかった。
だが、騎士の力は〈魔人〉の予測の上をいく。
斬撃とともに放たれた氷結の波濤。その冷気の爆流は、一瞬にしてセドリックの使い魔を氷像に変えた。
共有していた視覚が、一気に一つに戻る。
首を回し、自らの目で敵影を探す。
背後から殺気。氷結した大地を蹴ると同時、赤い刃が大地に谷をつくる。身を翻しカウンターで魔弾を放つ。
魔弾は不発に終わる。鋼色の魔弾が誰もいない大地を砕いた。

「……なるほど、速いな」

敵の実力を冷静に分析する。
この見通しの良い校庭。人が隠れられる遮蔽物などあるわけがない。
だがセドリックの視界が一つである以上、彼の死角をつけば姿を消したように見せるのは不可能ではない。

「だが、この場にいるのが私の使い魔のすべてというわけではないぞ」

〈魔人〉の体が風船のように膨らみ、弾けた。
全方位に向かって、黒い濁流が奔る。
濁流の先には黒い眼球と白い牙。唸り声を上げて、百を超える黒い獣が首を伸ばす。
そして、九十の獣が一瞬で斬り殺された。
首を刎ねられ、頭蓋を叩き割れ、頭部を両断され、体を氷像に変

えられた。
黒い血の雨を降らして獣がつぎつぎと命を落として行く。
ガキン、という鋼がぶつかり合う音。
生き残った使い魔が、騎士の刃を捉えたのだ。
スピードを殺され、氷刃の騎士がその姿を露わにした。

「ほう……」

セドリックの口から感嘆の声が漏れた。

「見間違いではなかったか……。
なるほどそれが、貴様が〈赤い死神〉と呼ばれる所以か」

ファミリアの姿は、いつものソレとは異なっていた。
赤い騎士服ではなく、真紅の全身鎧を着込んでいた。
材質は鋼鉄ではない。僅かに透明で、絶え間なく発せられる冷気。
氷だ。騎士の鎧は氷でできていた。
いくつもの氷の板を重ねた積層鎧。双角の兜を被り、亜麻色の長髪は結いあげられていた。
唯一晒された鼻梁の通った端整な顔は無表情で、銀の眼光は鋭く魔人に突き刺さる。
手に持つ刃が紅蓮の如く輝く。だが、その形状はフランベルグとは異なっていた。
例えるなら鎌。夕日剣を中心に氷の柄が伸び先端には三日月形の氷刃が獲物を求めて妖しく光っていた。
これこそが、ファミリア・オートザムのフルドライブ。
氷の刃は振るう度に冷気の波濤を撒き散らし標的の命を確実に刈り取り、氷の鎧はその身を守る。そして鍛え上げられた騎士の膂力はその重装備でも高速機動を可能とする。
大鎌を操るその鎧姿は鬼神。その姿を見た者はみな等しく畏怖し、

そしてひれ伏す。

「〈魔人〉、セドリック・ディグニティ。
世界規模破壊活動、殺人、建造物破損、魔導法違反、公務執行妨害、その他諸々の罪で……」

鎌が上がる。
三日月の刃が、魔人の首を刎ねんと鈍く光った。

「――――――――おまえを殺す」

氷原を蹴り、氷刃の騎士が突撃した。
セドリックの前に魔法陣が展開。光る円形の陣から黒い獣たちが這い出て来る。

「殺す、か。公務員として、そこは逮捕と言うべきではないか？」

「何を今さら。おまえに、そんな慈悲は必要ない。
おまえは、無意味に人を殺し過ぎた」

氷鎌が一閃。三日月の刃が獣たちの首を刎ねた。
切り口は一瞬で凍りつき、黒血が噴き出ることはなかった。

「無意味？　我が願望を知りもせず、よくもぬけぬけと……！」

ファミリアの言葉を侮蔑と受け取り、セドリックの顔が歪む。
魔人の手に魔光が灯り陣を描く。
緻密な魔法術式が刻まれた三重魔法陣。群青色の魔法陣が眩く光、轟音とともに閃光を吐き出した。
氷原を焼く魔力砲が迫る。

ファミリアは鎌の柄を地面に突き立て体を上空へ逃がす。
体のバネを利用し鎌も完全に地面から離す。
群青の閃光が騎士の真下を駆け抜けた。魔力砲が放つ熱は凄まじく、騎士の氷の鎧を溶かした。
氷の鎌もまた同様に溶けていく。
だが、ファミリアの変換資質は凍結。魔導騎士の魔力が尽きない限り、鎧も鎌も、幾度も再生する。

「――――はあっ！！」

裂帛の気合とともに、赤い鎌を振り落とした。
轟っ、と空気が唸り、必殺の斬撃が叩きつけられた。
氷原が割れ、土砂の瀑布を舞い上げる。
疾駆する冷気の波濤。全てを氷結させるはずのソレが、途中で拡散を止めた。

「……」

ファミリアの顔のパーツが中央による。
長柄から彼女の手に伝わる感触に違和感。
土煙が晴れる。
騎士の前に現れた光景に、ファミリアは目を見開いた。
目の前には〈魔人〉セドリックの姿。だが、氷鎌は彼まで届いていなかった。
魔人の足下には召喚魔法陣があった。そこから伸びたのは赤黒い巨躯、鋭い爪を有した強靭な四肢、積層鎧の様な鱗、背後には蝙蝠の様な巨大な翼、長い首の先に鎮座する頭部は鰐のようで、血のように真っ赤な眼が騎士を見ていた。
竜だ。
黒竜がセドリックを庇い、ファミリの刃から魔人を守っていた。

騎士の刃は黒竜の固い鱗に止められていた。白い歯を見せ、黒竜が嘲笑した。

「呆れた。そんなモンまで使い魔にしてたなんて。いっそのこと動物園でも開きなさいよ」

「生憎と、我が眷族を檻に閉じ込める気はない。
そもそも目の前に餌があるのに食えないなどストレスの元だ。
愛する眷族にそのような責め苦を与えるわけにはいかない」

「何それ。ペットにかける情があるなら人にも情を感じなさいよ」

「それは、無理な相談だ――――！」

黒竜が開口。暗い喉の奥から炎が迸り、火炎が奔る。
騎士を紅蓮が包み込む。
天まで届く灼熱の柱からファミリアが飛び出した。
鎧武具ともに大破。竜の火炎は騎士の防御を焼き払い、その体を舐め回した。
騎士の美貌は煤に汚され、艶のある髪は先が焦げていた。
それでもファミリアは退くことはない。
竜との戦闘経験はないが、ソレに近い魔法生物への対処法はだいたい頭に入れている。
腰を落とす。
銀の瞳は猛禽の如く鋭く、竜と魔人を獲物として捉えた。
駆けだそうと、脚に込めた力を炸裂させる。が、騎士は動かない。
急停止に、上半身だけが射出されそうになった。
騎士の視線は未だ魔人と黒竜に注がれている。だが、敵の視線はファミリアを捉えていない。
セドリックの視線を追うファミリア。魔人が見ていたモノを見た

時、騎士の体が強張った。

「な、んで……」

震えた声が響く。

少女の視線の先、木造校舎の昇降口に、青年が立っていた。

昨日から行動を共にしていた黒髪黒眼の青年。

この瞬間まで、彼のことはファミリアの頭から抜け落ちていた。

学校に突入した時の初撃で放った冷気の波濤、それで無関係な者たちは氷の中に保護した。

強引な方法だが、人払いの結界を張る暇がなかった以上、魔導師の戦いを現地人に見られることなく全力で力を振るうにはこれしかなかったのだ。

氷に封じた学生たち、その中に彼もいると思っていた。いるはずだと思っていた。

だというのに、彼は寄宿舎から出た時と同じ姿で立っていた。

違う点はたった一つ。青年の手に掴まれた青い魔剣。

蒼炎揺らめく〈魔殺獄剣〉。何故彼がソレを手にしているのか、想像するに難くない。

無数の獣に襲われたこの状況下、彼は戦うことを選んだのだろう。

その方法は、彼には一つしかない。

「どうしてよ……」

それでも、ファミリアは彼に戦って欲しくはなかった。

自分と同じ場所にいて欲しくなかった。彼には、平穏な日常を謳歌して欲しかった。

そしてなによりも、この姿を見られたくなかった。

猛禽のように鋭い眼光は消えうせ、ただの少女の瞳へと戻っていた。

銀の瞳が揺れる。同時に、心臓が激しく拍動する。
呼吸が荒く、嫌な汗が頬を伝う。
ファミリアを見る青年の顔は、驚愕の色に染まっていた。
その奥にあるのは彼女への畏怖か恐怖か。
ドクン、と心臓が大きく跳ねた。
脳裏を掠める忌まわしき過去。
氷を纏った幼かったころの自分。横たわる巨大な魔獣の死骸。それを交互に見つめ、青ざめた表情を向けた大人たち。
やめて。そんな目で、わたしを見るな。
恐怖するな。わたしは、みんなのために、戦ったのに――――。

「……いやあああああああ！！！！」

幼い騎士を恐れる目、目、目、目。恐怖に彩られた無数の視線に貫かれた時のあの恐怖、孤独感。
彼女の心に癒えぬ傷をつけたあの痛みが、再び全身を駆け巡る。
視界が歪む。目から熱いモノが頬を伝うのを感じた。
ソレを最後に、氷刃の騎士は意識を失った。

「ファミリア、管理局員になる気はないか？」

遡ること十年前、突然呼び出されたファミリアは父の言葉に驚いた。

「管理、局員……？」

記憶にある。この次元世界の平和を守ろうと造られた組織だ。
たった一つの組織でどうやって宇宙のように広大な次元世界を守

るのか疑問ではあったが、昔から魔法の力を誰かのために、と言われていたファミリアは以前から興味を持っていた。

だが、そのことを父には話していない。二つ上の姉には話したことがあるが、姉は口が軽い方ではないから、きっとこれは偶然だろう。

父の話をまとめるとこうだ。

時空管理局は今、魔導師としての資質が高い者を集めている。次元世界を管理するために、管理局は魔法を使って行く方針なのだ。

そして、その魔法資質の高い者として、ファミリアの家、オートザム家に協力要請があった。正確には、ファミリアを管理局員にスカウトしてきたということだ。

オートザム家はベルカの大戦期に覇王軍の一兵卒から武功を立てて貴族へと成り上がった武門の一族だ。

ミッド式魔法と違い、オートザム家が使うベルカ式魔法は先天資質に大きく依存するが故に時代とともに廃れ、今では術者は少ない。現存する術者は、このオートザム家の人間か聖王教会の人間くらいだろう。だが、その分騎士の称号を与えられるまでの使い手ならば、戦力として申し分ないだろう。

そして、ファミリアは弱冠七歳でその騎士の称号を与えられている。

百年に一度の天才、神童。幼少からそのように呼ばれていたファミリアに声がかかるのも当然かもしれない。

「ファミリア、おまえは素晴らしい才能を持っている。その才能を輝かせるのに、管理局は絶好の場所だと思っている」

確かに、ファミリアの魔導騎士としての成長は凄まじく、同年代で彼女に敵はない。その実力は大人顔負けで、ついこの間も聖王教会の教会騎士団から入団の誘いがあったほどだ。もっとも、オートザムは覇王クラウス・G・S・イングヴァルトを主君とし、聖王オ

リヴィエ・ゼーゲブレヒトを祀る聖王教会につくことはないだろう。
二人の王は交流があり親友でもあったというが、その臣下もそうであるとは限らないし、ある必要もないのだ。

「判断は、おまえに任せる。おまえはまだ幼く、将来を決めるのはまだ早いかもしれない。だが、全てを誰かの言うとおりにするほど子どもでもないはずだ。
私は、おまえに判断を委ねるとする」

父は答えを娘に任せると言った。当然、ファミリアの管理局への入局はオートザム家にも利がある。
彼女の活躍によって、再びベルカ式が脚光を浴びるかもしれないのだ。
故郷である世界を失い、ミッドチルダに堕ち延びるように避難してきたベルカ系人にとって、それは宿願ともいえることだった。
ベルカ文化の復興の中心にオートザムあり。その評判が広がれば、オートザム家はより栄えるだろう。
ファミリアの父もソレを望んでいる。だが、家長以前に父として、娘であるファミリアの判断に任せるのは親心か。
いや、もしかしたら父は娘がどんな答えを出すのか、すでに知っていたのかもしれない。
生まれながらにして強い魔力を持ち、魔法の技術は父や祖父を超えた天賦の才能。
常日頃、自らの力を誰かのためにと言われ続け、それを疑いもしなかった少女。
そんな少女がどんな答えを出すのに、一分もかからなかった。

「お父さま、そのお話、おうけします。ファミリアは、管理局に入ります」

かくして、史上最年少管理局員が誕生した。
オートザム家は世話係兼守り手として、代々契りを結び続けてきた霊亀の使い魔を与えた。
最高の技師によって鍛え上げられた夕日剣とともに、二人は家を出た。

弱冠七歳という若さでの管理局員の誕生に、世間は沸き立った。
中にはただの広告塔ではないかと怪訝な表情を見せる者もいたが、やがてそんな顔は消え失せた。
事件が起こったのは、辺境の世界に突如現れた単眼の巨人。
猛吹雪が絶えず吹き荒れる極寒の世界で、全長二十メートルを超える大巨人が暴れているという通報だった。
理性を持たず破壊と暴虐を繰り返す巨人を管理局はヒトではなく災害クラスの魔獣、巨神に認定、即座に討伐隊が結成され、情報収集のために先遣隊が跳んだ。
先遣隊は一日も持たず全滅。辛うじて回収したレコーダーには轟音と悲鳴、管理局員たちの断末魔と巨神の咆哮が絶えず録音されていた。
圧倒的な脅威に、ファミリアが立ち上がった。
少女を中心に、計二五八名の魔導師部隊が結成され、巨神討伐へと向かった。
そして、ファミリア・オートザムは癒えぬ傷を負った。
結論から言えば、任務は成功した。
たった一人の犠牲者も出さず、部隊は帰還した。だが、凱旋ムードに沸き上がるミッド人に囲まれた彼らの顔は青白く、何かに脅えているようだった。
部隊など必要なかった。あの少女一人で事足りた。彼女と自分では、次元が違う。
魔導師部隊にいた一人が語った言葉である。
その通りだった。暴虐の巨神を討つのに、部隊など不要だった。

巨神は、ファミリア一人で討ち取ったのだ。
誰もがその光景に目を疑った。
吹雪の中横たわる巨体。全身が氷結し、斬られた個所から流れる青い血は凍っていた。
絶命した巨神の前に立つのは一人の少女。全身を氷の鎧で守り、夕日剣は紅蓮の氷鎌へと形を変えていた。
ファミリア・オートザムのフルドライブ。その未成熟な体躯が弱点にならぬようにと攻撃と防御を上昇させた姿。
その力は確かに凄まじく、大人が手も足も出なかった巨神をたった一人で討ち取った。
神童と言われた少女は、周囲の期待通り、否、期待以上の活躍を見せたのだ。
だが、隊員たちのファミリアへの印象は恐怖へと変わった。
十歳にも満たない幼い少女。それが、災厄が命を持ったような巨神を単独で討伐したのだ。その力に驚き、力の違いに絶望し、その力を持つ少女に恐怖した。
顔色が青白いのは寒いからではない。彼らは恐れている。巨神を倒したその力が自分の側に向けられることを。
やがて少女は鎧を解く。艶のある亜麻色の髪が風に踊り、赤い騎士服がはためく。
振り返り、少女は言う。任務は終わったと。この巨神はもう暴れられないと。
言おうとして、振り返って、隊員たちの恐怖に染まった目を見て、少女の声は止まった。
そして

「……化け物かよ」

吹雪に掻き消されてしまいそうな小さな声に、少女の心は貫かれた。

誰かを守るために管理局員になった。生まれながらのこの力を、人のために使えるならと思っていたのに、守った者からの言葉が彼女を傷つけた。

少女が傷ついたことに気付くことなく、隊員たちから注がれる目、目、目、目、目、目、目。

五百を超える視線が一斉に少女を貫く。

全ての視線が例外なく、恐怖に彩られていた。

帰還し、〈大魔導騎士（パラディン）〉と讃えられ、〈管理局の切り札（エース・オブ・エース）〉と讃えられ、一方で〈赤い死神〉と蔑まれた。

そして、少女は仲間の前で全力を出すことが無くなった。

その後少女は同世代の管理局候補生とともに訓練校に入り、そこで後の上司となるラルゴ・キール、親友となるミゼット・クローベル、レオーネ・フィルスと出会う。

親友たちに囲まれ、夢を追う上司に就いても、少女の傷が癒えることはなかった。

「……う」

ファミリアが呻き、目を開く。

昔の夢を見た。あまり思い出したくない夢だ。

嘆息する。そして吸い込むと、土の匂いが鼻いっぱいに広がる。

手を動かすと柔らかい草の感触。ようやくファミリアは地面に寝ていたことに気付いた。

起き上がる。

見える周囲の風景に見覚えがあった。

ここは、ファミリアがメリーバと共にこの街に来た時の転移ポイントだ。

同時に騎士の脳裏に意識を失う直前の記憶が蘇る。
おかしい。自分は魔人と戦闘中だったはず。なのに、なぜこんなところにいるのだろうか。
背後から草をかき分ける音。振り向きフランベルグへ手を伸ばす。が、手は空を泳ぐ。いつも身近にあった夕日剣がその姿を消していた。

「――――――――――！」

目を見開く騎士の前に、二つの影が飛び出した。

「ミリィ！　大丈夫ですか！？」

「ファミリア！」

現れたのは騎士の使い魔とこの街で知り合った青年だった。
メリーバの背には寄宿舎に置いてきた彼女たちの荷物。急いで取りに行っていたらしく二人の額には大量の汗が浮かんでいた。
肩を落として脱力し、ファミリアは座り込んだ。

「ミリィ！？　やっぱり魔人との戦闘で怪我したんですか！」

「違うわよ、ちょっと力が抜けちゃっただけ。それより教えて。どうして私がここにいるのか」

「はい……。実は……」

ファミリアに食料を渡し、治療をしながらメリーバが説明を始めた。
ファミリアが突然倒れた後、当然魔人はファミリアにトドメを刺

そうとしていた。
それを、怜一郎と間一髪間に合ったメリーバが守った。
セドリックは氷の檻から解放された使い魔たちで怜一郎を足止めし、メリーバが魔人と相対した。
二人とも善戦したが魔人を倒すこと叶わず、セドリックはやがて姿を消した。
怜一郎の学友たちとともに。
街はその後大混乱となった。白昼に突然、学生の大量失踪だ。どうやらセドリックは怜一郎の学校以外にも使い魔を放っていたようで、攫われた人間の数は百を超えた。
混乱の中、優先すべきはファミリアの安全だというメリーバの提案の下、二人はこの森までファミリアを運び、医療器具を取りに寄宿舎まで向かったということだった。

「……そう。どうやら、セドリック・ディグニティに一杯喰わされた様ね」

黒い光の柱を見た時、注意していれば街中に使い魔が放たれていたことが判っただろう。だが、セドリック本人が陽動を担うことで、ファミリアの意識は全てそちらに向かった。
いや違うとファミリアはかぶりを振る。自嘲した渇いた笑いを漏らす。
魔人の策にハマったのではない。自分が弱かったからこうなった。
自分が未だに、あの時の傷を乗り越えられずにいるから。

「ホント、情けないったらありゃしない……」

膝を抱え、脚の間に頭を埋める。
自分の不甲斐無さに怒りを通り越して呆れてくる。

「ファミリア。申し訳ありませんが、落ち込んでいる暇はありませんよ」

「ん。判ってる」

顔を埋めたまま答える。

まだ任務は終わっていない。

セドリック・ディグニティのもう一つの通り名は〈街喰い〉。〈魔人〉の目的は街を丸ごと消し去る儀式魔法を起動。

まだ五十鈴市は消えていない。まだ儀式は始まっていない。

まだ、助けられる人はいる。

立ち上がるファミリア。

銀の瞳に迷いはない。恐れはない。

白熱する鋼の如く闘志に輝いていた。

「ほら、お前の剣。壊れてないから安心しろ」

怜一郎が夕日剣を差し出した。

受け取る。休みなく戦ったせいで傷んでいた回路などが復調していた。磨かれたのか、真紅の刃が月光に濡れて光っていた。

「ありがとう。メリーバも。整備してくれたのね。ありがとう」

「あ……いえ……」

口籠るメリーバ。どうしたのか判らずにいると、黒髪の青年が遠慮がちに言った。

「それ、整備したの俺」

「え？」

ファミリアの目が見開く。剣へと視線を戻す。
夕日剣に異常はない。その出来は素人のものではなく、管理局でも十分に通用するレベルだった。

「仕事でそういう機械系のを相手することが多くてな。けっこう難しかったけど、大丈夫そうなら良かった」

「え、ええ。ありがとう。問題なんてどこにもない」

ファミリアの声が弾む。管理外世界の住人がデバイスを修理できるなどあり得ないはずだった。
なにせ文明のレベルが違う。使われている部品も理論もまるで違うはずだ。
なのに、この青年はやってのけてしまった。

（ヴォーパルソードのことと言い、何かあるのかしらね）

そう思って、かぶりを振って無駄な思考を振り払う。
彼の力のことは後回しだ。今は、魔人との戦闘に集中すべきだ。
剣を腰に差す。意識を集中し、セドリックの魔力を追う。

「見つけた」

今度こそ、奴を討つ。
騎士が走り出し、すぐに止まった。足音が、一人分多かった。

「レイ」

「帰れなんて言うなよ。学校の連中が攫われて混乱中なんだ。俺だけ帰ったら色々面倒なことになる」

なるほど、とファミリアは思う。

確かに生徒たちがいなくなったというのに彼だけが無事というのは不自然か。

ならば。

「君は、ここで待ってなさい」

身を翻し、騎士の手を青年の胸に当てる。

ファミリアから放たれた魔力が氷に変わり、怜一郎を木の幹へと拘束した。

手刀が振り下ろされ、青年の手から魔剣の石が零れた。

「な……！　おいファミリア！」

「手荒なまねしてごめんなさい。でも、これ以上君を巻き込むわけにはいかない」

「ふざけんな！　今さら、巻き込まれるもないだろうが！」

怜一郎の言葉を無視し、使い魔へと視線を向ける。

「メリー、彼のこと見てて頂戴。今回は、アレも使う気だから」

「……はい。気をつけて」

青年と使い魔に背を向け、騎士が歩き出す。

青年の声が背を叩き続ける。

振り返らない。振り返れない。
結局、騎士はあの時の傷を背負い続ける。

「ファミリアーーーーーーーーーーーーー！！」

青年の怒号が森に響き、騎士は最後の決戦へと向かうために地を蹴った。

外章　4　揺れる心（後書き）

案の定というかなんというか、アンケートの回答があんまり集まってませんね。
強制していいものではないので仕方ないのかもしれませんが、どっちでもいいという方が多いということでしょうか？
一応あと一週間あるのでアンケートの回答はまだ募集中です。

1996

外章　5　ダエーワ（前書き）

お知らせが三つ。

1．以前過去編は五話程度で終わると言いましたが、作者の構成力不足故に六話編成となってしまいました。
　本編復帰までさらに待たせることになってしまい申し訳ありません。

2．アンケート結果ですが、番外編はやることにしました。回答して下さったみなさまありがとうございました。

3．過去編の舞台は五十鈴市ですが、同名の地名が実在するとのこと。
　ですがそことは一切関係ありませんのでご了承ください。

外章　5　ダエーワ

突然の大量失踪に混乱する五十鈴市。
だが、街ではもう一つの異常事態に頭を悩ませていた。
突如街の真ん中に現れた巨大な氷の塊。
山の様に大きく、普通では考えられない赤色の氷。
ファミリアがフルドライブから放った冷気の波濤によって造られたものだ。
結界が消え、皆の意識の外から戻ってきた氷山の姿は住人を驚愕させた。
すでに氷山の周りには人ごみができており、騒ぎになっていた。

「まったく、管理局最強と言ってもまだ子どもか。あと一歩分の配慮が足りない」

氷山から声が響いた。
同時に展開された魔法結界。
氷山は再び住人の意識の外に弾き飛ばされた。
人ごみが消えた時、氷山が砕け散った。
氷がガラス片の様に散り、陽光を反射して輝いた。

「彼女の覇気に圧されて大人しくしていたが、事態は随分と進んでいるようだな」

黒衣の魔導師が氷の封印を解いて現れた。
闇に隠された瞳が泳ぎ、一点へと向かって止まる。
星が瞬く夜空を、赤い光が翔けて行く。

「ちょっかい出した手前、かわいい騎士殿の方も気になるけど、こ

こは本来の目的を優先するか」

魔導師の姿が揺らぐ。

黒い体躯が霞の様におぼろげになり、塵の様に風に吹き飛ばされた。

後に残ったのは砕けた氷塊。誰にも気付かれることなく、氷塊は残っていた。

Ｒｉｄｅｒ's　Ｚｅｒｏ　５話　ダエーワ

セドリックの魔力を追って辿りついたのは、奴と初めて対峙（魔物越しだったが）したあの神社だった。

前回は真面目に長い石段を登ったが、今は飛行しているためあの石段と顔を合わせることはない。

魔法で視力を強化。上空で旋回しながら境内を窺う。

「見つけた……」

猛禽の如く銀の瞳が輝く。

飛行から浮遊に転換。重力に引かれゆっくりと赤い騎士が境内に降り立った。

ばさり、と赤い外套がはためく。

騎士が夕日剣を抜く。

月明かりに濡れた刃が血のような輝きを放つ。

「数時間ぶりね。相変わらず元気そうでムカつくわ」

銀の眼光が目前の黒い塊を射抜く。
闇よりも暗い淀みの奥から声が届く。

「大層な口ぶりだな。突然泣いて倒れた人間の言葉とはとても思えん」

痛いところをつかれ、ファミリアの頬が引きつる。

「言葉は選びなさい。なにせあなたはここで終わり、下手なこと言ってそれが遺言になったら憐れじゃない」

「その言葉、そのまま返してやろう。ここで吐いた言葉が遺言になるのは貴様の方だ」

魔人から魔力が噴き出る。
突風の様に吹き荒れる魔力が境内を暴れ回る。
暴れる髪を手で押さえながらファミリアは視線を泳がせる。
セドリックは五十鈴市から多くの住人を攫っている。
魔人の撃破も重要だが、民間人の安全はもっと重要だ。
ファミリアの思惑を察したのか、セドリックがくぐもった笑いを零した。

「安心しろ。街の住人はここにはいない。奴らは、我が宿願を果たすための儀式に必要な贄として、丁重に扱っている」

「あんたの使い魔に見張らせて？　悪いけど、扱われている人間からしたら最悪ね」

ファミリアが腰落とす。

夕日剣を強く握り、銀の瞳は猛禽の如く敵を射抜く。
セドリックが一歩下がる。途端にファミリアを無数の視線が貫いた。
視線だけを泳がせ、ファミリアは正体を掴んだ。
案の定、セドリックの使い魔たちがファミリアを中心に円状に配置されているのだ。

「随分とお友達が多いのね。学校や今までの戦闘で結構潰してきたつもりなんだけど？」

「フン。我が眷族を完全に滅ぼすには、その主たる私を滅ぼす以外に手はないぞ」

「なるほど。単純で助かるわ！」

騎士の足下が弾けた。
赤い颶風となってファミリアが境内を駆け抜ける。
夕日剣が閃き、真紅の刃が魔人の首をかっ斬ろうと唸りを上げる。

「つまりは、あなただけを狙えばいいってことでしょ」

騎士の顔に不敵な笑み。だが、素直に敵の刃を受け止める程セドリックは優しくはない。
二人の間に割って入る黒い影の大群。周囲に待機していた使い魔たちが主を守ろうと出てきたのだ。
全員黒い体躯に黒い眼球。この街に来て幾度となく見てきた獣どもが一斉に牙をむく。

「邪魔よ」

標的を変えた真紅の刃が大蛇の顔面に叩き込まれる。頭蓋と鱗を切り裂き、刃が滑り大蛇を両断。黒い血が噴き出て石畳に染み込んでいく。

吠えた狼へと裏剣が叩き込まれ咆哮が悲鳴に変わった。牡鹿の角を飛んで躱し首を刎ねた。

踊るように、舞うように、ファミリアの刃が獣どもを殺して行く。剣を一振りする度に首が飛び、腕を振るう度に鉄拳が頭蓋を砕く。高く上がった脚は高速で落とされ獣は地面に這いつくばった。

計十七体。主を守ろうと飛び出した獣たちは一瞬にして物言わぬ肉塊へと変わった。

汗一つ掻かず、ファミリアは魔人へと歩を進める。

「大したものだな。〈管理局の切り札（エース・オブ・エース）〉と謳われることだけある」

だが、とセドリックの口元が吊りあがる。

神社の奥にある森から、灯篭の影から、魔人の足下から、ありとあらゆる場所から影が飛び出しファミリアの前に立ちふさがる。

黒一緒に染め上げられた獣たち。その数は、数えるのも馬鹿馬鹿しくなるほどだった。

「この獣の激流。貴様一人で踏破出来るか？」

一頭が吼えた。咆哮は獣たちの間で伝播し、次々と空を向かって咆哮した。

頭が絶え間なく上げられ黒い波がたつ。

そして、

「殺せ。今度こそ、その女の命を奪ってこい！」

黒い津波が、氷刃の騎士へと襲いかかった。

「おい！　おいメリーバ、この氷どうにかしろよ！！」

夜の闇に包まれた森の中に青年の声が響く。
太い樹に氷とともに縛り付けられた怜一郎。
唯一の武器である魔剣の石は手から離れている。
文字通り手も足も出ない状況にある青年を、ベージュ色の髪の少女、メリーバが冷たい目で見つめていた。

「そこから自由になって、どうするんですか？」

「そんなの、ファミリアのところに行くに決まってんだろ！！」

「だったら無理です。ミリィが帰ってくるまで大人しくしていてください」

「ふざけんな！」

口角泡を飛ばしながら上がる怜一郎の怒声をメリーバが冷静に聞き流す。
メリーバの助けは期待できないと知り、怜一郎は手足をばたつかせて自ら氷の縛から逃れようとする。だが管理局最高の騎士であるファミリアの魔法をただの人間である怜一郎に破れるわけがない。
無駄に体力を消耗するだけだと悟り、ようやく抵抗を止めた。
だが、この状況から脱出しなければならないのは変わらない。
急がば回れ。ここは慌てず、言葉で説得していこうと思う。

「なぁ、あの男がおまえらの追ってた奴なんだよな？」

「ええ。〈魔人〉セドリック・ディグニティ。百年以上前に現れた謎の魔導師。
　他の通り名としては〈街喰い〉、〈獣の王〉とも呼ばれています」

「そんなヤバい奴、ファミリア一人でどうにかなるのか？　いやあいつが強いのは十分わかってる。でも簡単に勝てるようなら、こんな事態になってないんじゃないのか」

「……確かに、〈魔人〉は〈次元最悪の七人（クライシス・セブン）〉の中でも上位の実力を持っていると言われています。単純な力比べなら五分五分、ですが一対一の戦闘ならファミリアに負けはあり得ません」

　でも、と一旦言葉を区切り、少女が続ける。

「〈魔人〉にはまだ隠された力があると思われます。その力次第では……危ないかもしれません」

「だったら！　おまえはこんなところにいていいのか！？　使い魔と主の関係って詳しく知らねぇけど、放っておいていいわけじゃないんだろ！」

「いいわけないじゃないですか。でも、わたしじゃダメなんですよ」

　少女の顔に影が落ちる。
　自嘲の笑みが少女の顔に張り付いていた。

「わたしの力はあくまで防御。主を守るための力ですが、わたしでは、ファミリアの戦闘速度についていけないんです」

ミリィは防御系魔導師が故、後衛型に見えるが正確には違う。彼女は前衛の背後を守る守衛。一方でファミリアは剣を手に突撃していく前衛魔導師。

一見相性がよさそうに見えるが、ファミリアの戦闘スピードはメリーバの援護可能な範囲を容易く超える。攻め手が守り手に合わせて手を抜くことなどできる筈もなく、ファミリアが一人で戦い、メリーバは結界維持や周囲への配慮といった裏方に徹するという役割分担ができていた。

その判断に対して不満はない。それは正しい判断であるし、自分がいるからファミリアが周囲に気を配る必要なく力を振るえると思えば苦ではなかった。

だが、この時、彼女一人で太刀打ちできない敵が現れた時ほど自分の無力さを恨むことはないだろう。

誰か一人でも彼女と対等の力を持つ仲間がいれば良かった。彼女が背中を預けるのではなく、肩を並べて共に戦場を駆けられる戦友がいたらと何度願ったことだろう。

だがそれは希望でしかない。彼女は管理局最強の魔導師であり、それはつまり次元世界の魔導師の頂点にいると言っても過言ではないのだ。

そんな彼女に対等できる者など、そう易々と見つかるわけがない。見つかったとしても、今の様にそれは敵対関係だった。

「わたしもあなたも、行ったところでなにもできない。むしろ彼女の足を引っ張りかねないんです。

そしてなにより、彼女はわたしたちが見ていては全力で戦えない」

あ、と怜一郎から声が漏れた。

「そういえば、どうしてあの時ファミリアは突然倒れたんだ？　〈魔人〉に何かされたのか？」

ふるふるとメリーバが首を横に振った。

「ミリィは……昔のトラウマというものを引きずっているんです」

「トラウマ……？」

メリーバが首を縦に振った。

そしてポツリポツリとファミリアの過去を語った。

幼いながらに天才と謳われていたこと、その才能を買われ管理局にスカウトされたこと。そして、ある任務で癒えぬ傷を負ったこと。

「初めてあの子と会った時、小さくてかわいい女の子だなと思いました。強くて、その力を良いことに使おうとしていた。だからわたしはミリィと契約しました」

メリーバはその少女の顔に似合わぬ、過去への郷愁に笑みを零した。

「騎士としては一人前なんですけど、日常生活はてんでダメダメで。わたしは使い魔というより家政婦、いえベビーシッターの様なものでしたよ。

長い間一緒にいたからこそ、あの時のミリィの顔は辛かった……」

笑みが消え、顔のパーツが寄っていく。悲しげで、歯を食いしばっているようだった。

メリーバがファミリアをどれほど大事に思っているか、怜一郎が知るにはそれで充分だった。

俯く少女を見つめ、青年が言った。

「だったらなおさらだろう。あいつを一人で向かわせないでついて行くべきだ。
何ができるかなんて考える前に、何をしたいのかを優先するべきじゃないのか」

青年の言葉は、自分自身に向けたモノでもある。
ファミリアやセドリックが自分以上に強いことなど端から判り切ったこと。
それでも怜一郎はそこへ行きたい。彼女の下へと向かいたいのだ。
怜一郎の言葉に心が揺らいだのか、メリーバが不安げな表情で見つめ返してきた。

「どうしてですか……？」

「え？」

「どうして、あなたはそこまでできるんですか？
ただの民間人であるあなたを、何がそこまで突き動かすんですか？」

予想外の質問に、怜一郎はぱちぱちと目を瞬かせた。鏡があれば、随分と間抜けな顔が映ったことだろう。

「そ、れは……」

答えが出ない。
言われてみれば何故だろうかと自問する。
自分がここでじっとしていることができないのは判る。だが、何故敵を倒すでも皆を救うでもなく、ファミリアを助けに行こうと言うのか。

彼女に救われたことへの恩返しか。男としてのプライドか。いやそれとも……。

答えがいつくも浮かび、また沈むという思考の渦に囚われた怜一郎。そんな彼を掬いだすように、闇の向こうから声が響いた。

「まったく、鈍すぎて見ているこっちがイライラしてくる」

「「――――――――――!」」

二人の意識が闇の奥へと奔る。

森の奥から、木々によって造られた闇の空間から、黒衣の人型が浮かび上がる。

頭からつま先までを漆黒に包んだ男を見て、メリーバが臨戦態勢に入る。

「あなた――――レイオン・スターライナー!!」

背負った盾を構えるメリーバ。一方で男の正体を知らない怜一郎には何が何やらわからなかった。

少女の激昂を宥めるように、レイオンが手を上げる。

「まぁ落ち着いて。僕は君たちと争いに来たわけじゃない。この瞬間だけは、君たちの味方だ。誓ってもいい」

「……何に誓うというのですか？　こちらはあなたが民間人を見殺しにしようという発言をじかに聞いているんです。それ以前に多くの人の命を奪っているあなたの言葉をどう信じろと？」

立て続けに物騒な単語を聞き、怜一郎はギョッとする。

対してレイオンは落ち着いた様子で、

「確かに、僕も君たちの立場なら信用はできない。だが君たちは判っている。どちらも、僕には勝てないということをね」

「……」

内心同意しながら、メリーバは奥歯を噛みしめる。

事実、メリーバ一人でレイオンには勝てない。だからメリーバは手を出せない。

手を出せば即座に殺される。だが、手を出さなければ、このまま大人しくしていればレイオンは攻撃をしてこない。

もっとも、それもレイオンの争いに来たのではないという言葉が本当だったとしてだが。

メリーバの判断に、漆黒の魔導師が悠々と両腕を広げた。

「賢明な判断、感謝する。頭の悪い奴だと玉砕覚悟で突っ込んでくるからね。

本題に入ろう。僕の要件は、〈魔人〉セドリック・ディグニティの目的についてだ」

「……！

あなたが、それを知っていると？」

「まあね。これでも、彼より闇の世界にいるのは長くてね。蛇の道は蛇というべきか、いろいろと話が聞こえてくるんだよ。

結論から言おう。ファミリア・オートザムでは、ディグニティを止められない」

二人の間に衝撃が走る。

メリーバの顔が歪み、眉間に怒りの溝が刻まれていのをレイオン

がなだめる。

「怒るなよ。君だって考えていなかったわけではないだろう？〈魔人〉の力も目的も知らない人間に、奴を倒せるわけがない」

「ならばそれに辿りつくまで。ミリィなら出来ます。騎士の称号を安く見ないでいただきたい」

「安くなど見ていない。ベルカではないが、騎士には昔世話になったからね。その強さは身にしみて理解している。だが、それでも〈魔人〉には届かない。

だが手が無いわけじゃない。彼女が勝利するには……」

黒い頭部が動く。闇の奥の眼が、勝利のカギを見つめていた。

「君だよ、松田怜一郎君」

ニヤリと、賢人が笑った。

氷刃が閃き、獣の頭蓋を両断した。

靄に消える獣の体を踏みつけて騎士が進み、その前に新たな獣が立ち塞がりそれを再び斬り捨てた。

獣の激流の中を、ファミリアは確実に進んでいた。

襲いかかる全てを斬り捨てて前に進む。

馬の蹄が振り下ろされた。ファミリアは氷剣を氷槍に変えて無防備な腹に突き立てた。

悲鳴を上げて仰向けに倒れる馬に槍を突き立てたまま、棒高跳びの要領でファミリアが空へ飛んだ。

夥しい数の獣が空を仰いだ。そして、夜天を舞う赤い騎士の姿が最後の光景となった。

騎士が指にはさんだ氷剣、その数十本。騎士の腕が交叉し、氷剣が流星となって獣の渦の中に叩き込まれた。

氷剣は獣たちや石畳に突き刺さり、ファミリアの合図とともに爆散した。

ドーム状に広がる赤い魔力の塊。轟ッ、という炸裂音が境内に響いた。冷気とともに砕けた石畳の破片がばら撒かれる。

凍結変換した魔力を、氷から魔力へと戻す荒業だ。その際に発生するエネルギーを攻撃に転用したベルカ騎士の常識から外れた爆撃だった。

剣という形に押し込められていた魔力が渦を巻いて周囲を薙ぎ払ったのだ。

黒い激流にぽっかりと円形の穴が空いた。そこにファミリアが降り立つ。

右手に夕日剣、左手に氷剣を握り、両腕を翼のように広げたままファミリアは再び獣の軍勢へと牙をむいた。

斬り伏せ砕き凍らせる。

氷剣は槍に斧に大剣に投擲剣へと姿を変える。その時その時に合った最優の武器へと形を変え、それを騎士が完ぺきに扱って見せる。

ファミリアが担当する違法魔導師は、どいつもこいつもクセのある者たちばかりだ。常に自分にとって相性のいい相手が当たるとは限らない。そして執務官はそれを言い訳にしてはいけない。

故に生み出された戦法。凍結という己が魔法資質を裁断元に生かすためにファミリアが編み出した戦闘スタイル。変幻自在に武器は姿を変え、それを迷いなく使いこなすファミリア。

氷刃の騎士の歩みを止めることは誰にも叶わず、騎士の刃にみな等しく頭を差し出す。

その舞闘はやがて畏敬すら抱かせた。

罪人を狩る処刑人。されどその姿に人は魅せられる。故についた

〈《魔狩り姫（エクスキューショナー）》〉の二つ名。
心を魔導に喰われた罪人を狩るために、姫騎士がその刃を振るうのだ。

「たいしたものだな。流石管理局が誇る魔導騎士ということか……。だが」

魔人が口元を歪めて笑った。
こちらの戦力はほぼ無尽蔵。ファミリアがいかに魔力と戦闘に優れようとその精神力と体力には限界がある。
故に、

（このまま押し切れば、こちらの勝ちは揺るがない……が）

人海戦術などで倒せるのなら、氷刃の騎士はとっくの昔に潰れている。
いくつもの武功も通り名も持つ前に死んでいる。
数の強さ程度、凌駕できずに何がエースか。
斬撃の嵐が獣の壁を吹き飛ばし、ファミリアの手に氷の弓が握られた。
赤い氷の矢を魔力の弦に番え、キリリと音を立てた。迸る魔力に魔人が警戒の色を見せた。
新たに獣たちが立ちふさがる。その牙が騎士に突き立てられる前に、氷の矢が放たれた。

「〈氷牙竜閃（アイス・ドラッケン）〉――――！！」

赤い流星が爆走した。
空気を切り裂き、轟音を響かせ矢が奔る。
もはやそれは閃光だった。大地を抉り、獣たちを薙ぎ払い、赤い

光がセドリックへと牙をむいた。

（私を直接狙ってくるか！！）

地を蹴りセドリックが空へと逃げる。

主を守ろうと獣たちが壁を作るが氷の魔弾は何のことなく黒い壁を粉砕した。

だがその先に標的はいない。魔人はすでに空へと逃げていた。

魔弾はそのまま地を抉り続け、どこかで爆散する――――はずだった。

「なにぃっ！！？」

セドリックが驚愕の声を上げる。

自分の真下を素通りするはずの氷の魔弾。それが、突然軌道を変えて魔人へと襲いかかったのだ。

ほぼ直角に曲がり、魔弾が咆哮を上げてセドリックの胸を貫いた。

黒い体躯を赤い閃光が抉り、鮮血が吹き出した。魔人の表情が苦痛に歪む。

大地を蹴ってファミリアが飛翔。

氷の魔弓を携え魔人へと肉薄する。

近づく騎士の姿を見て、セドリックがくぐもった笑みを見せた。

「勝負を、焦ったか……？　愚かな。まだ、私は倒れておらんぞ！！」

魔人の両手に魔光が灯る。黒く深い闇の魔弾が騎士に牙をむいた。

迫る死の気配の前に、なんとファミリアは笑って返した。

「あなたこそ、まだわたしの攻撃は終わってないわよ？」

何？　と疑問を口にしようとした時、セドリックの口から出たのは声ではなく赤黒い血。同時に腹に走る灼熱の激痛と衝撃。
視線を下ろすと、今しがた自分を貫いたはずの赤い魔弾が、再び魔人の体を貫いていた。
閃光は騎士の手に戻り、その姿をさらす。
赤く紅く輝く夕日剣。ファミリアの愛剣。フランベルグがそこにあった。

「キ、サマ……己が武器を放ったというのか！？」

「これでも、あんたみたいな奴を相手にしたのは初めてじゃないのよ。あんたがまともな魔導師じゃないように、わたしも常識に当てはまる騎士じゃないのよ」

手に戻ったフランベルグを再び番え、必殺の魔弾が吠えた。

「〈氷牙竜閃（アイス・ドラッケン）〉！！」

ほぼゼロ距離からの魔弾の射出。
炸裂する閃光と轟音、眩い光の渦に魔人の体が呑み込まれていった。

天に向かって光が翔け抜けて行く。
夜天を穿つ流星が消え、騎士の手に絶氷の剣が舞い戻る。
二つの影が降りるのはほぼ同時だった。
一つは華麗に降り立ち、一つは無様に地面にその体を叩きつけた。
ファミリアの長い亜麻色の髪が波打ち、顔にかかった髪を頭を振って払った。
髪とともに、汗が飛んだ。

ファミリアが放ったのはミッド式で言うところの砲撃魔法だ。一射一射に渾身の力を込めた魔弾を三連射。体力も魔力も消費が激し過ぎた。

掻いた汗で額に張り付いた髪が鬱陶しい。髪を掻きあげながら、ファミリアは倒れ伏したセドリックへと近づく。魔人による統制を失い、獣たちはただ見ているだけだ。

油断はしない。相手は最凶と言われた男。普通の人間の常識が当てはまるとは限らない。

「さすがに、首を刎ねれば死ぬでしょ」

夕日剣を構える。屈み、倒れた男の首に刃を当てた。

瞬間、全身を鋭い殺気に貫かれ、ファミリアは咄嗟に弾け飛ぶように後ずさった。

幽鬼のようにゆらりと立ち上がる魔人。胴に三つの穴をあけた体が何ごともなかったかのように立ち上がった。

疲労の汗が引っ込み、冷や汗が吹き出した。

「考えてもなかったわけじゃないけど、本当に立ち上がれるとちょっとショックだわ」

ファミリアの言葉に穿たれた体でセドリックが笑った。

「いや、まったく効いていないというわけではない。私以外の者だったら、確実にやられていただろう。　だがやはり、昼間に見たアレには及ばんな」

「……」

「どうした？　あれが貴様にとっての最強の技であろう、今更出し

惜しみは止めておけ。それとも……」

口元が吊りあがる。獲物を狙う、獰猛な獣の笑みだ。

「出したくとも、出せないのか？」

ちっ、とファミリアは舌打ちした。

ファミリアのフルドライブ。数で圧倒する魔人にアレは最優の手段だろう。だが、高い威力を誇る代償にアレはファミリアの魔力と体力を大量に奪って行く。

学校で消費した魔力と体力は取り戻していない。加えて〈氷牙竜閃〉の三連射、ファミリアにはもうフルドライブを維持する力は残っていない。

だが、それはファミリアだけに限った話ではない。騎士の口元が笑みを作る。

「そっちこそ、あのでかいトカゲはどうしたのよ？　ご飯あげ忘れてすねられちゃったの？」

今度は魔人が渋面を作る番だった。

昼間の戦いで激しく消耗したのはファミリアだけではない。おそらく、セドリックにも黒竜を制御する余裕がないのだ。だからこそこんな工夫のない獣の数をそろえることしかできないのだ。

「なるほど、お互い切り札は封じられた状態ということか」

「そうね。でもさっきのを見る限り体術ならわたしの方が上手ね。このままいけばわたしが押し切らせてもらうけど？」

「ふ……。残念だが、その要望に応えることはできない。貴様が私

を滅ぼす前に、貴様の方が力尽きる」

「好きに言ってなさい。でも、こうしてあんたがわたしにかまけている間にわたしの使い魔があんたの儀式魔法陣を破壊するわよ」

騎士の言葉に魔人が目を見開いた。くすんだ碧眼が動き、やがて笑った。

「はったりなら無意味だな。そして同時に失望した。もしや、我が朋友の〈毒竜〉もそんな小賢しい手を使って討ったのか？」

今度はファミリアが目を見開いた。〈毒竜〉といえば、この前ファミリアが倒した〈次元最悪の七人（クライシス・セブン）〉の一人だ。

思考を巡らせ、ゆっくりと言葉を吐き出した。

「そう。〈毒竜〉と〈魔人〉が繋がってるって噂は本当だったんだ。じゃあ、〈邪神導師〉とも友達ってのも本当？」

「正確には違うな。奴とは一時手を組んだことはあったがそれっきりだ。エルドラドも奴のことはむしろ嫌っていた方だろう。どちらにしろ、我らも二度と関わり合いたくないと思っていることは確かだ」

「あんたにそれを言わせるって、どんだけ狂ってんのよそいつ」

〈魔人〉が関わりを拒否する〈邪神導師〉の存在にゾッとするが、この場にいない者のことを考えても仕方ない。もう一人の狂人は意識の外に放り出し、セドリックだけを見据える。

「話を戻しましょうか。わたしもあなたも得意の大技は使えない。

ようは消耗戦ね。あなたが力尽きるか、わたしが力尽きるかのどちらかになる」

「それならば断然こちらが優位だな。人の常識は私には当てはまらない」

確かに、とファミリアは頷いた。そして、前からの疑問を口にした。

「どうせ長引くのなら口が利けるうちに聞いておきたかったんだけど、あなたがやろうとしている儀式ってなんなの？」

一歩踏み込んだ質問に、セドリックが訝しげな表情を浮かべた。

「意外だな。まだ判っていなかったのか。どうやら知識の方に関しては買い被っていたようだ」

「全然判んないってことはないのよ。術式の傾向からみて魔力を吸い上げるタイプだと見ているんだけど、こんな魔法文化のない世界で魔力吸い上げたってなんになるのよってわけ。

理由をこじつけるなら単純に管理局に見つかりたくないから。さすがにこんな辺境世界を常時監視できるほどウチもまだ力ないしね」

石畳をつま先でこすりながらファミリアが推察を述べて行く。

興味があるのか、セドリックも静かに耳を傾けていた。

「見つかりたくない、そこまで魔力を欲してない。となると召喚系かしら。でもこんな大規模術式展開してもこの世界の魔力じゃ喚べるのなんてたかが知れてるわ。となると、生物ではなくソレ意外なの何か。現象か、物質か、もしくは……扉、とか」

「――――――」

息を呑むのが聞こえた。ファミリアはわざとらしく笑みを浮かべて続けた。

「昔、どっかの学者が言ってたわね。次元の狭間に眠る三千世界、あらゆる魔導の秘術がそこにある。今じゃお伽噺同然で信じてる人間なんて碌にいないけど。確か、その世界の名は――――アルハザード。

次元の狭間――――ようは次元断層の先ってことよね。でもそこにあるのは魔導の理想郷なんかじゃなく全てを飲み込む虚数空間。でも仮に、虚数空間のさらに先があるとしたら、その先にあるのがアルハザードだとしたら……」

「……ふ、確かに、是が非でも足が向くな。貴様は私が虚数空間を超えるための扉を喚ぼうとしている。そう言いたいのだな？」

「あくまで推察よ。あり得ない話じゃないけど、絶対っていう確証のない仮の話」

長い髪を梳きながらファミリアが締めくくった。

静かな風が二人の間を流れて行く。

「ふ……」

セドリックの口から笑い声が零れた。今まで冷静沈着を貫いていた魔人が、肩を震わせ感情を露わにしていた。

「ふはははははは！！　なるほど、なかなか面白い推察だ。先ほ

どの言葉は訂正しよう。〈赤い死神〉よ、貴様は文武ともに優秀だ！」

両手を広げ、天を仰いで魔人が笑っていた。

今まで見せたことのない、心からの称賛の声だった。

「ははは、は……は。残念だが、この儀式の目的はそんな大層なものではない。私の目的はもっと単純なものだ。そう、人間ならば誰しも一度は抱く願い……」

残忍な笑みを浮かべ、魔人が言った。

「不老不死！」

「〈魂喰らい（ソウル・イーター）〉。それがセドリック・ディグニティの希少技能（レアスキル）だ」

暗い森に黒魔導師の声が響く。

驚愕に目を見開く二人を前に、レイオンが言葉を並べて行く。

「奴は言葉通り、生物から命を奪える。殺した者から生命力と魔力を奪い取り、奴は永い時を生きてきた。だがその能力には問題がある。奪った生命力を自らに込めた際、その分奴は若返ってしまう」

「八十年生きる者を五十歳で殺した場合、三十年分若返る、と？」

そうだ、とレイオンは頷いた。

確かにそれなら問題がある。いくら永遠を活きる能力を持っていても、際限なく若返っては意味がない。それでは、いずれ奴は生ま

れる前まで戻りこの世から消滅することになる。

「だから奴は奪った生命力をそのまま別の生物に変換する術を開発した。それがあの黒い使い魔たちだ。

奴は、召喚系ベースの生体生成魔導師なのだ。

これにより奴は能力の欠点を解消したが、また別の問題が出てきた。奪った生命力で別の生命に変換したため、自らに還る命が少なくなってしまう。だから奴は不定期ながら食事をする。その様がどのようなものか、君なら分かるだろう」

「……魔人の別の通り名は〈街食い〉。奴がこの街で行おうとしている儀式、それはこの街の住人の命を奪い取ること？　自分の命を長らえさせるために、数千人の人間を殺すというのですか？」

怜一郎に魔法の知識はない。故に二人の会話について行けないが、メリーバの顔色からどれほど危険な状況なのかが見て取れた。

「さて、話を最初に戻そう。僕がここに来たのはその儀式を止めてもらうためだ」

「止める？　それはわたしたちに会いに来る理由にはなりませんよ。あなたはわたしより強い。本当に魔人の企みを止めたいのならあなた一人でどうにでもできるはずです」

その通りだ。レイオンはセドリックと同じく最凶と称される一角。魔導師であるこの男が、メリーバや怜一郎の力を欲するとは思えない。ファミリアなら考えられなくもないが、ならば直接彼女の前に姿を現わせばいい。

だがレイオンは首を横に振った。

「残念だが、僕でも魔人に勝つのは難しい。勝てたとしても、僕は致命傷を負うことになるだろう。僕はまだ死ねない。だから、僕は戦わない」

「……自分勝手ここに極まり、といったところですね」

「判っている。だから僕は君たちに勝利のカギを渡しに来た。管理局だって、犯罪者に手柄を奪われたなんていう結末は望んでいないだろ？　僕が君たちを魔人に勝てる領域まで連れて行く。あとは君たちが魔人を倒せばそれでおしまい。
悪い話ではないだろう。結局、君たちだって魔人を倒したいのだから」

「それで、あなたがわたしたちにくれる勝利のカギが、怜一郎さんの力の覚醒ということですか？」

「は？」

突然自分の名前が挙がり、怜一郎が間抜けな声を出した。
冗談だと思ったが、メリーバの表情からだと本気らしい。
レイオンも否定せずに頷いた。

「彼の力は、この世で唯一魔人を圧倒する力だ。そして偶然にも、その力を最大限に発揮する魔道具がここにある」

レイオンが手を差し出す。いつの間に拾ったのだろうか、その手には発動前のヴォーパルソードが鎮座していた。
どこにでもありそうな石塊が、この瞬間だけはどんな宝石にも負けない光沢を帯びていた。

「あり得ないです」

メリーバが一蹴した。少女の瞳が憤怒の色に燃えていた

「ここに来てまで実験ですか。結局、あなたは人をマウスと同列にしか見られないのですね。

ファミリアが一人で行ったのは、彼を危険に巻き込ませないためです。使い魔として、主の想いを無碍にするようなことはできませんし、個人としても一般人である彼を巻き込むのは反対です」

「もっともなご意見。だが、なによりも優先すべきは」

魔導師が指を鳴らす。バチリと火花が弾け、怜一郎を捕縛していた氷が砕け散った。

自由を得た体が重力に引かれて地面に落ちる。怜一郎は尻もちをついてしまう。

痛みに顔を顰める青年の前に、黒い手が差し伸べられた。手の平には、眠りについた魔剣があった。

「問おう。君は、ファミリア・オートザムを助けたいか？」

「当たり前だ！」

魔剣へと手を伸ばす。だが手が届く寸前に黒い手は引っ込み、怜一郎の手が空を撫でた。

「何故？」

黒魔導師の重なる問いに、怜一郎は恨めしい顔を向ける。

ファミリアが倒れるか、儀式が発動するか。どちらにしても時間

が無いこのときに、無駄な問答は苛立ちを募らせるだけだ。

「誤解してもらっては困る。いっただろう。僕は勝利のカギを持ってきたと。だが、君はそんなではせっかくのカギが満足に機能しない。それでは魔人には勝てない」

「……俺の力は、奴を圧倒するんじゃなかったのか？」

「圧倒するとも。だがそれは君の力が全開になった時だ。今の君では、一瞬で死ぬ」

レイオンが空いた手を握り、パッと開いた。

自分の頭蓋が弾ける映像を想像してしまい、怜一郎の顔から血の気が引いていく。

黒魔導師の問いは続く。

「問おう。君は何故（なにゆえ）ファミリア・オートザムを助ける？　助けられたことへの恩返しか？　関わったことへの責任感か？　男子故に女子を助けるという正義感か？」

闇の奥から選択肢が並べられていく。だが怜一郎は選べない。

彼自身が納得できる答えが出てこない。彼自身にも、この気持ちの正体を理解できない。

「さぁ答えろ。良く考えてからな。もしも間違えば、この街は地図から永遠に消滅することになる」

「そ、れは……」

考える。目を閉じ、両手を合わせて思考の海へと沈む。

怜一郎に魔法のことはこの中で誰よりも知識が浅い。だが、自分のことに関しては、彼自身が一番知っているはずだ。助言はない。必要ない。きっとこの気持ちの正体は、自分だけの力で見つけないと意味がない。

瞼の裏にさまざまな記憶が駆け巡る。

そういえば、彼女と会ってまだ三日しか会っていない。濃密で、衝撃的な三日間だった。

突如攫われ、命の危機を救われ、助けになりたいと頼みこみ、無自覚に力を手に入れていた。

力を自覚し、本格的に彼女の助けになれると思ったら、彼女の戦いはさらに上へと上がっていた。

自分と彼女との力の差を嘆き、力のない自分を恨んだ。

「――――――――」

何かが、引っかかった。

崖から奈落に落ちている途中ででっぱりに触れたような衝撃。

堰を切ったように、答えが濁流の如く頭の中に流れ込んでくる。

「あ……、え……？」

答えを頭の中で反芻して、理解したら、急に顔に熱が集まってきた。

感情の正体以上に、今まで気付かなかった自分の間抜けさに恥ずかしくなってきた。

レイオンの肩が震えている。顔は見えないが、きっと意地悪い笑みを浮かべているのだろう。

「どうやら、答えは見えたようだね。聞かせてもらおうか。何故君は、ファミリア・オートザムを助ける？」

青年が立ち上がる。脳裏には、赤い騎士服を纏った少女の背中。艶のある亜麻色の髪が綺麗で、彼女の剣舞は美しくて、彼女の仕草の一つ一つに魅了された。

初めて彼女を見たあの夜。今思えば、あの時から彼女に心奪われていた。

魔導師の問いに、まっすぐ前を見て、その答えを告げた。

「俺は、ファミリアが好きなんだ」

永遠を生きる。ただそれだけのために、人を殺し、街を滅ぼす。セドリックの望みは、ファミリアの理解の範疇を超えていた。間違いない。セドリックは狂っている。もうすでに奴は人ではない。人の領域から足を踏み外した化け物だ。

嫌悪と侮蔑の表情を浮かべ、ファミリアが刃を向ける。

「呆れた。〈毒竜〉もそうだったけど、あんたはそれ以上の馬鹿だ」

「ふん。貴様に詰(なじ)られたところで私の心は揺れん」

魔人の口元が歪み、獰猛な笑みを作る。

「どうした？　視線で私は殺せない。そこから刃を振っても私は斬れん。私を殺したければ――――」

言い終わる前に、騎士は颶風へと変わっていた。

足が石畳を粉砕し、空気を切り裂き騎士が駆ける。

「その刃で、私の頭蓋を砕いてみせろ！」

黒い濁流が迸った。闇一色の野獣の波が騎士へと襲いかかる。

騎士の手には赤氷の槍。投擲され、赤い流星が黒波に水平に着弾。閉じ込められていた魔力が解放され、爆発した。赤い光と熱量がドーム状に広がり獣の肉壁に大穴を穿つ。

大波に空いた円形の穴。その向こうに魔人の姿が見えた。

夕日剣の鍔が回りカートリッジを連続ロード。四つの弾丸が石畳に落ちて鈴の音を響かせた。

全身に魔力が滾る。持ち前の魔力と一緒に注ぎ、次の一撃に全霊を込める。

脳が沸騰し視界が白熱。吹き飛びそうになる意識を掴み取り、術式を紡ぎ、魔力を注ぎ、解き放つ。

「フル、ドライブ――――――――――！！」

騎士の咆哮に夕日剣が猛烈な光を放つ。

魔力がファミリアの全身を覆い凍結。氷刃の騎士を赤氷の鎧が包み紅蓮の闘鬼へと姿を変えた。

夕日剣が氷を纏い伸長。長い柄の先に三日月の刃が納まった。

本日二度目のフルドライブ。その負荷にファミリアの体が悲鳴を上げた。だが騎士は止まらない。止まれない。この街の者たちを守るために、自分の勝利を信じる青年のために、止まることなどできない。

「終わりだ！！」

大鎌が閃き冷気の波濤が広がる。夏の夜、境内に冬が訪れる。

刃は魔人を切り裂き、今度こそ氷像へと変える。

はずだった。

「――――――――な」

ファミリアの口から絶望が漏れた。

必殺の刃が、止まる。止められた。

刃に添えられた黒い指――――指の並びから左手だ――――、同色の爪が刃に突き刺さり、それ以上の進撃を許さない。

指の主を目で追う。指から手、腕と続き、鋭利な突起がついた方に目が止まった。隆起した腹筋に目が行き、上に移動。太い首の上に鎮座した、一角の頭部。黒い髪、瞳、鼻、唇とその奥に収納された牙。

いつの間にか、セドリックの隣に有角の黒鬼がいた。

鬼と肩を並べた魔人が笑う。

「黒竜が切り札だと、誰が言った？」

鬼の右手が動き、ファミリアの顎を討ち抜いた。脳震盪を起こし、視界が歪む。騎士の体は弧を描いて宙を舞い、冷たい石畳へと叩きつけられた。赤い大鎌が渇いた音を立てて落ちた。

剛腕による一撃で意識が朦朧としている。手が、脚が、壊れた人形の様な動きを見せる。

立つことのできない騎士に黒い獣たちが群がる。牙の間から垂れた唾液が騎士を汚して行く。

「そ、んな……私は、負けられ……」

「さらばだ氷刃の騎士。貴様との闘争、久々に血が滾った。認めよう、貴様こそ、私を打倒し得る唯一の存在だったと」

ソレは、セドリックによる勝利宣言。そしてファミリアにとっての敗北の宣告だった。
魔人の姿が黒い幕によって見えなくなる。荒い息遣いがファミリアを包む。

「……ッ！」

一頭の獣が右足に噛みついた。獣の牙が少女のやわ肌を貫き、灼熱の痛みが襲いかかった。
獣に食われるという事態に精神が崩壊していく。少女の瞳から涙が溢れた。恐怖に心が蝕まれていく。

「宿敵へのたむけだ。我らが内で、共に永遠に生きろ」

魔人の哄笑が響く。悔しさに、また涙が零れる。
脳が思考を放棄し、視界が暗転していく。
そして、最期を悟った少女の前に、一筋の青光が輝いた。

轟音、そして爆炎が弾けた。
空から舞い降りた破壊の力が境内を蹂躙し、少女を取り囲んでいた獣たちを薙ぎ払った。全身を焼かれ、苦悶の悲鳴を上げた獣たちが散っていく。
闇が晴れて、少女の前にあったのは炎。晴天の空に広がるような、青に輝く劫火。
青い炎が膨れ上がり、天へと昇る。蒼炎が四足獣の形を取っていく。
頭部にあたる部分に灯る紅い眼光。口から轟く咆哮は灼熱を以て空気を焼いて行く。四つの脚が石畳をしっかりと踏みつけ、巨体を支えていた。
そして、蒼炎の獣の上に、人影があった。

炎に照らされ黒い輪郭が見えた。

「行け」

境内に響く声。それに従い、炎の巨獣が弾けて小さな炎獣へと別れた。

蜘蛛の子を散らすように炎獣が駆け回り、魔人の使い魔へと襲いかかった。

狩る者とかられる者が逆転した。今まで境内を支配していた使い魔たちが、青い獣によって滅ぼされていく。

蛍の様に、炎上した使い魔が転げ回り、力尽きて灰塵へと帰して行く。

混乱の渦の中、炎獣に跨っていた人影が地上に降りる。ゆっくりと、そしてしっかりとした歩みでファミリアの隣に立つ。

その正体を見て、ファミリアは驚愕した。人影は、怜一郎だった。

「レイ……！？　君どうして……」

「立てるか？」

少女の問いを遮り、青年がファミリアの隣で屈む。

脚の痛みに顔を歪めていると、怜一郎が懐から治療器具を取り出し、ファミリアの脚を治療していく。

使い慣れていない道具のため少々手付きがぎこちないが、なんとか痛みを和らげることはできた。

「ちょっと、何してるのよ！　ああもうメリーは何してんのよ！」

「怒らないでやってくれ。俺が勝手に来たんだ。それに、メリーバはこの街に張られた魔法陣ってのを消しに言ってる。だから」

青年が眼前の魔人へと視線を飛ばす。
闘志に燃えた黒い瞳。青年の手には、あの魔剣の石があった。

「後は、お前を倒すだけだ」

魔石が弾けた。青い炎を撒き散らして、魔殺獄剣が顕現する。
魔導への最終兵器が獲物を前に咆哮する。
立ちはだかった新たな障害に、魔人が肩を震わせ笑った。

「ははははっ！！　小僧、貴様今何といった？　倒す？　調子に乗るなよ小僧、その魔殺獄剣がいかに強力であろうと、それは剣の力であって貴様の力ではない！」

あらゆる魔導を焼き尽くす魔殺獄剣ヴォーパルソード。その力は確かに強力だが、誰かが持って振るわなければただの鉄塊。剣術などに縁のない怜一郎に、使いこなせるはずがない。
蒼い炎は確かに脅威。だが、それは剣とその僅かな周囲にしかない。剣は魔導に対して無敵でも、手首から先、青年の体を守りはしない。

「下らん世迷言を。興が醒めたではないか。せめて、死を以て償え！」

黒鬼が咆哮し、颶風となって駆けた。
ファミリアを一撃で昏倒させたその剛力は青年の体を容易く粉砕するだろう。

「逃げて！　君じゃあいつに敵わない！　なのに、どうしてきたのよ！」

「大丈夫だ」

少女の悲鳴を聞いて、青年は只一言そう言った。
黒い死が近づいてくる。
三秒後に訪れる死を前に、青年は静かに言の葉を紡いだ。

「告げる。汝と我は共にある。我は汝で汝は我。ならば、汝の力もまた我が力なり」

「――――――――――え？」

青年が紡いだのは、明らかな詠唱。だがそれは、魔力がある者が行ってようやく意味を成す。魔力を持たない怜一郎がやってもなんの意味もないはず。
なのに。
青年から、力の滾りを感じるのだろうか。
死のカウントダウンが二に変わる。
魔剣を掲げ、青年がトリガーを引いた。

「誓う（セット）――――――――――」

死が一秒後に迫る。

「――――――――――魔導同化“君とともに歩こう（ダエーワ）”」

鬼の拳が青年を撃った。
硬質な拳は人間の肌を容易く貫き、肉とその奥の臓物を引き裂き再び皮膚を貫いて外へと出る、ことはなかった。

「な――――――――――に？」

驚愕の声は誰のものか。
鬼か、魔人か、少女か。
確かなのは、誰もが予想外のことが起こったということ。
黒鬼の拳が、青年の胸に触れたところで止まっていた。
あの剛力が、ただの人間の皮膚に阻まれていた。

「どうして来たか。そう言ったな」

青年から光が漏れる。
青い蒼い碧い光。それは鬼の腕に絡みつく。

「簡単だ。だって、お前が一人で来たのだって同じような理由だろ」

そして、光は炎に変わった。蒼炎に包まれ炎上していく黒鬼。
その顔は凄惨に歪み、苦痛の咆哮を上げる。

「もう嫌なんだよ。誰かに守られるだけなのは。俺だって、誰かを守りたい――――いや、お前を守りたい」

鬼が灰塵へと帰して行く。その様子を、信じられないと言った表情で魔人が見ていた。
少女は耳朶にしみ込む言葉に意識を集中させていた。

「だけど、俺はまだ弱いから。お前を守るほど強くないから。だから――――」

蒼炎が猛る。青年の心に呼応しその勢いを増して行く。
かつて怜一郎は命を救われ、今も異界の少女のおかげでこうして

生きている。
嫌だった。もうただ助けられる側にいるのは。だから街の案内を申し出た。それくらいの助けはしたかったから。
助けたいという感情はやがて守りたいというものへと変わった。だが、守りたい少女は十分に強くて、自分はまだまだ弱くて。
だから――――――――

「一緒に戦いたい。お前と一緒に、肩を並べてみんなを守りたい！」

全身に炎を纏い、松田怜一郎は宣言した。
炎に照らされ、黒い瞳は蒼く輝いていた。

外章　6　そして二人は

ミッドチルダ地上本部の窓から陽の光が差し込む部屋で、ラルゴ・キールは両腕を上に伸ばして息を吐いた。

目の前には高く積まれた書類の山。全てが二等陸佐である彼が目を通すべき書類であり、それをすべて処理し終えた証印が押されていた。

「まったく、電子データ化が進んでいるというが、まだまだ紙の方が多い」

大量の書類を読んだせいで疲れた目頭を揉みほぐす。

革張りの椅子の背もたれにもたれかかり身を沈める。目を閉じ、深く息を吸って、ゆっくりと吐いた。

若くして上の階級にいるというのは疲れる。下からは嫉妬が、さらに上の人間からはつまらない嫌味が届く。

今処理した書類にも、上からの嫌がらせと思える物がいくつか挟まれていた。

閉じた目が開く。理想に燃える瞳がまだシミの少ない天井を睨みつける。正確には、上の階にいる席を見ていた。獲物を狙う猛禽の如く眼光が奔る。

ピピピッ、と机の端に置かれた通信機が鳴いた。視線をそちらに移し、通信に出た。

「どうした？」

『オートザム執務官から、任務の報告をしたいと。二等陸佐との面会を希望しています』

「報告書なら秘書に渡すよう言え」

『いえ、直接伝えたいことがあると。なんでも剣……について話したいとのことですが』

ラルゴの眉が跳ねた。顎に手を添えて考え、結論を出した。

「判った、通せ」

判りました、という声を最後に通信が切れた。

少しして、重厚な扉が開いて亜麻色の髪の少女が現れた。

その表情は、どこか暗い。

「ファミリア、用があるならメールしろ。あんなことを言っては不要な誤解とうわさが広が」

「ラルゴ・キール」

刃のように鋭く、氷のように冷たい声がラルゴの言葉を遮った。

二等陸佐の眼前に、氷の刃が向けられていた。

騎士を見る。管理局の制服に身を包んだ少女の目は。

「あなたを、許さない」

絶対零度の怒りに燃えていた。

Ｒｉｄｅｒ'ｓ　Ｚｅｒｏ　６話　そして二人は

山の上の神社に蒼い炎が落ちるのを、メリーバは確かに見た。
不安に駆られて足が神社へと向くが、理性を以て踏みとどまった。
今自分がやるべきことは儀式魔法陣の破壊。裏方として、なすべきこそを為す。
メリーバの足下には、その魔法陣がある。この街に来て何度も見た円形の魔法陣。術式はすでに解析済み、空中で少女の指が奔り相殺術式を刻んだ魔法円を描く。円は陣の上に重なり、眩い光を吐き出して共に消え失せた。
重い息を吐いて、額の汗を拭う。
破壊した魔法陣はこれで四つ目、五十鈴市全体を対象にしているはずだから、残りがいくつあるのか考えるだけでも眩暈がしてくる。
「って、情けないこと言ってられませんね。向こうでは、二人が頑張っているんですから」
「その通りだ」
同意の声に、今引き締めたばかりの気が弛緩、というよりねじ曲がった。
メリーバの複雑な心境を表す視線の先には黒衣の魔導師、レイオン・スターライナーがいる。
こちらはなかなかに魔力を消費して疲労がたまってきているというのに、この魔導師はそんなそぶりは一切見せない。やはり、魔導師としてのレベルは彼の方が数段上だ。
「何の用ですか。あなたの担当は街の西のはずですが？」
「ああ、儀式用魔法陣四十三個。ひとつ残らず潰してきたところだ。

このまま南へと向かおうと思ったが、一応報告しておこうと思ってね」

さらりと告げられた対象の数にメリーバはげんなりした。ということは、まだこちらにはあと四十個近い魔法陣が残っているということか。

まだまだ先の長い道のりに、メリーバの精神が白旗を上げそうになる。

「教えてくれて感謝します。もしも南が終わったのなら、そのまま北に向かってくれて結構です。多分、いえきっとそのころにはまだわたしは作業中でしょうから」

ちなみに、メリーバがいるのは街の東側だ。西側にいて、南に行こうとしたレイオンがいるということは明らかに寄り道だ。

〈次元最悪の七人（クライシス・セブン）〉は皆まともではないというが、この男も例外ではない。性格の意地悪さという意味で。

「しかし、見事に騙されました。勝利のカギを持ってきたというから〈暗黒賢人〉がどんな魔導具を持ってくるのかと思っていましたが、まさかただ怜一郎さんの能力の正体を説明しただけだったなんて……」

「騙してなどいない。事実彼は魔人を唯一圧倒できる戦士として覚醒し、今戦っている」

返す言葉もない。

メリーバは次の魔法陣を探しながら青年の力を思い出す。

「……あらゆる魔導と肉体と精神をリンクさせ、体を魔導に染め

る。ようは体に手にした魔導具と同じ性質を持たせる力、魔導同化（ダエーワ）ですか。正直、話を聞いただけでは信じられない能力ですね」

「だが見てしまった。己が目で見た以上信じざるを得ない。違うか？」

「ええ、その通りですよ」

発見した。現在地から百二十メートルほど南へ移動。何故かレイオンもついてきた。

非難する視線を送ると、僕もこっちに行くところだったのさ、なんて言ってきた。

到着。すぐさま魔法陣の破棄に入るが、どうも背後からのレイオンからの視線が気になる。

いっそのこと会話した方が集中できると、話を振ることにした。

「そういえば、あなたはどうしてこの世界に？　魔人と同じくこの世界に用があった。しかしこの騒ぎのせいでそれどころではなくなり、魔人への仕返しでわたしたちに協力しているとか？」

「君の中で僕はどれだけ子どもなんだ。……用があったのは確かだが、別に魔人のせいでそれが出来なくなったわけじゃない。むしろ、魔人のおかげで僕の用事は早めに済ませることができた」

「――――――――」

魔法陣が砕け、光の塵となっていく。

だがメリーバは額の汗を拭かない。何か確信を得たかのように目を見開いていた。

「その目的とは、怜一郎君のことですか？」

「……なぜ、そう思う」

レイオンの声から余裕が消えた。メリーバは黒いオーラを背後から感じ、全身から嫌な汗が出た。

それでも静かに、メリーバは続けた。

「いま思えば、どうしてもっと早くその結論に至らなかったのか不思議でなりません。

あなたは怜一郎君に執着していました。最初は彼を魔人の使い魔から守ろうとし、昼間の発言も考え直して見れば彼を鍛えるためだった。それでも許しませんが」

メリーバの口から次々と結論が紡がれていく。

背後に感じるオーラに揺らぎが生じている。信じられないが、次元最悪の一人が動揺しているようだ。

「そしてなにより、あなたは怜一郎君の力を知っていた。それこそ本人以上に。まるで、ずっと昔から彼のことを見ていたかのように」

「……」

「結論を言います。もしかして、松田怜一郎はレイオン・スターライナーの……！」

突如、突風が吹き荒れた。

暴虐の風が、メリーバの言葉を叩き落とした。

風が止んだ時、黒衣の魔導師の姿が消えていた。それは、メリーバの仮説が正しいという証明でもあった。

メリーバの顔に暗い影。肩を落とし、呟く。

「本当に、あなたはどうしようもない人ですね」

少女の言葉は誰にも聞かれることなく、大地に落ちて砕けた。

有角の魔人が苦悶の表情を浮かべて灰塵に帰していく。

苦痛に満ちた咆哮がその命の終わりを告げていた。

蒼い炎が鬼を喰らい尽くし消えて行く。消えゆく炎の壁の向こうで、セドリックが驚愕に震えていた。

セドリックは確かに、魔殺獄剣の弱点をついたはずだった。

炎に焼かれるのは剣に触れた場合のみ。だからこそ素人同然の使い手の反応速度を上回った攻撃を叩き込んだ。

青年は鬼の剛力の前に無様に倒れ、その体は物言わぬ肉塊に変わるはずだった。だが現実は違った。青年は倒れず、命を散らせたのは鬼の方だった。

「何をした……」

固く握った拳が震える。魔人の理解を超えた魔法現象、理解できない青年の生存。狩られるだけの弱者が、狩る側の強者に一矢報いた。

その事実は、セドリックのプライドを打ち砕いた。

「貴様、何をした――――――――――――!!」

怒号が響いた。

青白い顔に青筋を浮かべ、表情は驚愕から憤怒へと切り替わっていた。
魔人の怒りに呼応し、周囲の獣が遠吠えする。
怒りに染まった黒い眼が青年を貫いて行く。
だが、渦巻く憤怒の中で青年は立っていた。
魔剣の炎を纏い、黒い瞳は炎に照らされ青く輝いていた。
その背中を、ファミリアは魅せられたように見つめていた。

「ファミリア」

「え、あ、……なに？」

「まだ、やれるか？」

顔を向けず、青年は訊ねた。
だがその言葉と裏腹に、青年には確信があった。この少女が、ただ見ているわけがないと。
ファミリアは自分の状態を調べる。消費した魔力は膨大で、魔力切れは近い。足の傷は塞がったとはいえ違和感がないわけではない。
それでも少女は立ち上がる。騎士として、皆を守る管理局員として。

「何を、当たり前のことを！」

「ああ。安心した」

気丈な少女を見て、青年は微笑んだ。
剣士と騎士が肩を並べて魔人と対峙する。

「俺があいつを引きつける。だからファミリアはその隙に、特大の

をブチかましてくれ」

「……本気？　君がヴォーパルソード以外の力を手に入れたのは判るけど、それだけであいつを倒せると思ってるの？」

諌めるような騎士の言葉に、剣士はハッ、と笑い飛ばした。

「まさか。俺の力は強力だが、それだけであいつを超えたなんて自惚れはしないさ。でも」

剣士の瞳が騎士を見つめる。

「俺は、一人じゃない」

「――――――――」

ストン、と剣士の言葉が胸に落ちた。

言葉は騎士の中へと沁み渡り、騎士の不安を消し去った。

「判った。この〈管理局の切り札（エース・オブ・エース）〉に任せなさい。でも、一つ約束して。

絶対に無理はしないで」

「……ああ」

一瞬だけ交わる視線。ソレを最後に、剣士が魔人へと立ち向かって行った。

憤怒の形相のまま、魔人は獣をけしかけてくる。

黒い狼、雄牛、牡鹿、蛇、猿。数多の獣が襲いかかり、そして全てが怜一郎に触れた途端に蒼い炎に焼かれていく。

鋭い牙や爪も、逞しい角も関係ない。魔導に染まった全てが、怜一郎の炎によって灰塵へと帰っていく。

レイオンの言うとおり、その力はセドリックを圧倒していた。

セドリックの顔に焦りの色が浮かんでいく。

だが、剣士の顔に余裕はなかった。風を切りながら、騎士の忠告を思い出す。

（無理をするな、か。したくてもできないんだがな）

陽が沈んだ夜とはいえ夏の気候。蒸し暑いこの夜の下、これほど激しく動き、炎に巻かれていても怜一郎は汗一つ掻かない。

これが、〈魔導同化（ダエーワ）〉の力。手にした魔導具の、その能力から素材の特性までを自分の体に複写する。即ち、今の怜一郎の全身が、ヴォーパルソードと同じ力を保持しているということ。魔導師が今の彼に触れれば、その瞬間に蒼炎に焼かれていく。

魔殺獄剣を全身に纏う力。まさに最強、魔導師を相手するのに、これ以上の切り札は無い。

だが、大きな力にはそれ相応の代償が付き纏う。それは、怜一郎の〈魔導同化〉も例外ではない。

時間が経つに連れて、怜一郎の体はヴォーパルソードと同じものに、即ち一振りの魔剣になっていく。

剣は即ち鉄。剣に神経は無い。剣に血流は無い。剣に脳は無い。剣は、思考しないし歩くこともない。

今は体の表面だけに済んでいるが、いずれ体は剣となり、人としての生を失うだろう。

刻一刻と、怜一郎が鉄の塊となる瞬間が近づいて行く。

魔人を討つための最強の力は、そのまま怜一郎を滅ぼす死神となって帰って来る。

怜一郎は魔人と時間、二つの強敵を相手にする必要となっている。

（――――時間なんて後回し。今は、コイツを倒すことだけに集中しろ！）

恐れを抱く体を鞭打って、意識を戦闘へと切り替える。
すでに、怜一郎は獣の波を抜けていた。正確には、悉くを灰にしていたのだ。
これは失策かと剣士は内心舌打ち。剣の侵食は、能力を使えば使うほど早くなる。雑魚は無視して、セドリックだけを討つべきだったか。

（って、過ぎたことを考えても仕方ねぇ――――！）

すでにセドリックは迎撃態勢に入っていた。魔人の両手で禍々しく輝く魔力球。漆黒の魔力の砲弾が、放たれる。
体を畳み、地面すれすれを駆け抜ける。
間髪いれずに第二波が襲ってくる。闇の光弾に囲まれ、咄嗟に魔剣となって左手で防ぐ。
本来なら腕を焼く魔光。けれどこの腕の表面はすでに魔剣と同質。触れた光弾は瞬く間に蒼炎に包まれ消え失せた。
炎の壁をくぐり抜け、その先の魔人に肉薄した。

「――――――――はあっ！」

狙い澄ましたように魔人の剛腕が怜一郎の顔面に突き刺さり、顔が後方に吹き飛んだ。
拳の前に結界が張られていた。蛍火のように炎が舞うが、魔人の腕が燃えることは無い。
剛腕の一撃に、怜一郎の体が来た道を押し戻される。

「ここまできて、退けるかよ！！」

踏ん張り、吹き飛ぶ体を止めて再度突撃。それに合わせてカウンターが飛んで来る。
だが来ると判っていればどうということはない。
両腕で顔面を守る。そして、がら空きになった腹に右剛腕が突き刺さった。
骨が砕けるような鈍い音に、声にならない悲鳴が上がる。

「～～～～～～～～～～ッ！！！」

込み上がる胃液と、吹き飛びそうになる体を押さえつけ腹を穿つ剛腕を掴み、力を解放。瞬時に蒼い炎が腕を焼く。
煉獄の蛇が魔人の腕を駆けあがっていく。

「ちっ」

胴を蹴られ体が離れる。
魔人の左手から黒い狼へと変化。大顎を開き、燃える左腕を肩から噛み千切った。
粗い断面から黒い血が突き出て、落ちた右手が灰になっていく。
冷静な判断だった。
セドリックは右手が燃えたと同時に斬り捨てた。まるで自分の体などいくらでも代わりが利くかのようにあっさりと。
くすんだ蒼い瞳が怜一郎を捉える。
その瞳の奥には、憤怒や嘲笑、油断の色は消えていた。
怜一郎の背筋を氷塊が滑り落ちて行く。
魔人が本気になったのだと判った。奴にとって怜一郎は、邪魔者でも愚かな贄でもない。
セドリック・ディグニティという男をこの世から葬り去る脅威として認めたのだ。

即ち、次に来るのは魔人が放つ全霊の一撃。

（早くしてくれよ、ファミリア！）

剣を握る手に力がこもる。

突如、怜一郎を取り囲んでいた獣たちが爆ぜて霧散した。獣たちがいた場所には黒い砂が溜まっていた。

何が起こったのか、それはすぐに判った。

魔人から感じる魔力の圧が増していく。

セドリックの使い魔は、彼が奪った命から生成したモノ。それが消えたということは、あの膨大な数の獣を模っていた魔力が全て、セドリックの下へと戻っていくということ。

「小僧、私は貴様を侮っていたようだ。まさか貴様のような脆弱な人間を前に、万全を整えねばならなくなるとはな……」

魔力とともに、セドリックの体が盛り上がっていく。

漆黒のコートが裂け、隆起した筋肉が露わになる。

青白い皮膚を、硬質の黒い鱗が覆って行く。

気がつけば、魔人の体は二回りほど大きくなっていた。

黒い鱗、爬虫類の眼光、口から覗く白い牙、月を背負う巨躯。

その姿は、正しく竜だった。セドリックの奥の手である黒竜を体内で生成し、自身と融合を果たしたのだった。

「この姿を見せるということは、私にとっては大きな恥だ。だが小僧、貴様にとっては誇らしいことである」

獰猛な外見と裏腹に、その口調には未だ理性の色が残っていた。

だがそれもすぐに潜める。

「これで最後だ。我が最大の一撃で貴様をその忌々しい魔剣ごと滅ぼす。そして騎士も殺す。その後は、ゆっくりと食事をするとしよう」

「無駄だよ。お前が苦労して張り巡らせた魔法陣はメリーバが解除している」

「だからどうした。儀式など、私がいる限り何度でも行える。今すぐできんというのなら、また準備するまで」

「――――――――」

「……」

両者の間に沈黙が流れる。

怜一郎は剣を両手で握り、セドリックは腰を落として両足に力を溜めて行く。

そして、二人の戦士が同時に駆けた。

「――――――はあああっ！！」

「らあああああああっ！！」

轟く二つの咆哮。黒と蒼の嵐が、真正面から激突した。

魔剣の切っ先は魔人の肩を穿ち、魔人の剛腕が青年の腹を今度こそ貫いた。

両者の顔が苦痛で歪む。

セドリックの肩から黒血とともに蒼炎が噴き出し、怜一郎の腹からは鋼が砕ける音とともに鮮血が噴き出す。

魔剣をより深く刺そうとするが、体格の差がソレを許さない。そ

れどころか、セドリックは右腕を怜一郎の中に埋めたまま青年を持ち上げた。

「がああああ……！！」

腹の中身を掻きまわされて悲鳴が響く。痛みは灼熱となって脳を焼き、意識が吹き飛びそうになる。

魔剣と同質の体は触れるだけで魔人の体を蒼炎で蝕むが、その速度は使い手の精神力や体力に作用されるようだ。竜鬼と化したセドリックの巨躯を焼き払うには火力が足りな過ぎる。

「さらばだ人間。恨むなら、自らの不運を呪え。生き残り、半端に力を得てしまった不運をな」

竜鬼が笑う。開いた口腔の奥から赤い炎がせり上がって来る。

ここまでかと諦めかけたその時、凛とした声が響いた。

「不運なのはアンタよ。なにせ、この私に狙われたんだから」

瞬間、魔人の体が氷結した。煌煌と燃える炎も熱を奪われ消えた。

「な……にぃ……！？」

氷は魔人から命を吸い取るように赤く冷たい花弁を裂かせる。

いつの間にか、二人は結界の中にいた。

結界の境界を引くべき支点には氷剣が刺さっていた。

結界の中を真紅の騎士が悠々と歩いて来る。

傷は癒えても、痛みが残る体を引きずり騎士が立っていた。

何が起こったか判らず、セドリックの口から戸惑いの言葉が漏れる。

「お、女……貴様、何を……！？」

「さっきの言葉、そのまま返すわ。私のフルドライブが、いつ切り札なんて言った？」

ふふん、と笑い、ファミリアが続ける。

「これが私の対魔導師戦用の切り札、魔封結界氷結世界（ニブルヘイム）。この結界の中にいる私以外の魔導師は、魔力を強制的に氷結変換される。アンタがどれほど膨大な魔力を持っていようと、アンタが魔力を使って戦う魔導師である以上、この結界の呪縛からは逃れられない」

そして、魔力を持たない怜一郎はこの結界の影響を受けない。受けたとしても、ヴォーパルソードの力で無効化される。

「ぬうぅぅ……がぁぁぁ……！」

フランベルグが一閃、魔人の右腕を斬りおとして怜一郎を解放した。

全身を覆う氷の重みで、セドリックが膝をついた。多くの人から奪った魔力が氷となってさらにセドリックを責める。その様子はまるで、罪人へと下される罰のようだった。

そして、己が罪を形にしたかのような氷にが、セドリック・ディグニティを圧し潰した。

それは、地獄の光景だった。

平穏な世界を襲った大災害。人類の日常を破壊し、彼らが生きる

大地を滅ぼすには十分だった。
割れた地面から灼熱の津波が噴き出し、街を呑み込んだ。暗黒の空からは雷光の豪雨が降り注ぎ、平原を貫いた。封印されていた邪竜が蘇り、人々を恐怖のどん底へと叩き落とした。次元断層が起こり、時空の裂け目から覗く虚数空間の闇が、海水を飲み干し、森林を食い尽くした。
歴史に起こる次元災害。その真っ只中に、彼はいた。
世界の滅ぶ様を目の当たりし、彼はその地獄を生き残った。
災害が去った時、彼の世界はボロボロだった。
住んでいた街は消えた。平原は焼け野原に、豊かな森はただの荒野と変わり、蒼穹を映した海は干上がり虚しい大峡谷だけが残った。邪竜は虚数の闇に呑まれて消えてもう二度と現れない。だがそれ以上に失ったものが大きすぎた。家族が、友が、恋人が、一度にいなくなった。世界の人口の三割が命を落とした。
それは彼だけではなかった。生き残った者たちが感じたのは、生存への喜びよりも大切な者を失ったことへの絶望だけだった。
嘆き、慟哭する者たちを見下ろす空は痛いほどに青かったのを覚えている。
だが、やがて人々は復興のために立ち上がった。
絶望に打ちのめされても、失ったことへの悲しみを背負ったまま立ち上がった。
何年かかっても、どれほどの苦難が待っていようと、人々は歩き出した。
その光景を見て、彼は決意した。
このことを、歴史に残そう。滅び、灰になった世界が蘇る様を、この目で見て伝えて行こう。
人は素晴らしい。どれほどの苦境に立たされようと、決して諦めることなく生きて行ける。この感動を、皆に伝えよう。
そのためには、人の一生は短すぎる。まずは、この身を時の呪縛から解き放たなくては。

彼もまた歩き出す。他の者たちとは違う方向へと。

「ぬおおおおおおおおおおおおっ！！！！」

咆哮が上がり、氷の枷から魔人が脱出した。
手足を無理矢理動かしたせいで全身が悲鳴を上げて黒血が噴き出す。
落雷を受けたように、二人の戦士は動けない。
怒号の叫びを上げて魔人が突撃してくる。

「まだ、まだ私は死ぬわけにはいかない！！　まだ私は見ていない、復興の時を！　歴史の完成を！　私はぁぁあああっ！！！！」

「ファミリア！」

視線が交錯し、ファミリアが飛んで躱し、怜一郎は逆方向に転がる。二人の間を、氷を背負った重戦車が駆け抜けて行く。
轟音が響き、石畳を粉砕していった。

「らあああああああああああっ！！！！！」

魔人が方向転換、咆哮を上げて再び突撃してきた。
怜一郎は立ち上がり、魔剣を上げて対峙する。

「いい加減、止まっとけ！！」

魔剣が蒼炎を帯びて閃く、突撃する魔人の左肩から胸を通って右足の付け根まで刃が食い込んだ。

黒血に混じって蒼炎が迸る。斜めに両断された魔人の上半身が黒血の軌跡を描きながら滑空し落下。取り残された左腕と下半身が無様に転がった。

「私は、私はまだ……」

呻き声が響く。魔人は生きていた。全ての魔力を氷と炎に奪われ、半身を失ってもなお魔人はその命を繋いでいた。

その執念に、怜一郎は戦慄した。

手を動かし、這って結界から出ようとするセドリックにファミリアが歩み寄る。

見下ろす魔人の碧眼は白濁していた。放っておいても、奴はこのまま死ぬだろう。

だが、

「死ぬわけには……私は、見なければ……」

「そう。でも、あなたはここで終わり。もう、あなたの夢は叶わない」

フランベルグが光り、冷徹な声が響く。魔人の瞳に一瞬輝きが戻り、表情が強張った。

「そんな……私は――――」

夕日剣が一閃、魔人の言葉ごと、その首を刎ね飛ばした。

ゴロン、と黒い首が転がる。その最期の表情は、苦痛と絶望に染まっていた。

「あなたの夢は知らない。でも、私は忘れない。あなたという魔導

師の願いを踏みにじったことを」

騎士の言葉には、悲哀の色があった。

踵を返し、青年の方を向く。向けられた表情からは、悲哀の色は消えていた。

「はい。これでこいつを殺したのは私。君が気にすることは無いわ」

「そ、それは……」

確かに、人を斬った感触というのは良いものではなかった。だが、だからといって、彼女がそれを背負う必要はないのではないか。

そう言おうとして、止まる。言えば、彼女の覚悟を無視するような気がしたから。

怜一郎が背負うはずの殺人の業を、ファミリアが代わりに背負ったのだ。ならば、その覚悟を邪魔してはいけない。彼女の決意を侮辱するような事はできなかった。

怜一郎は魔導同化（ダエーワ）を解除。炎が消えて、魔剣が石へと姿を変えた。

貫かれた腹の痛みが蘇るが男の意地で意識を保つ。

ファミリアが苦笑しながら、手を差し出した。怜一郎も手を差し出し、握手に応えた。

「お疲れ怜。それとありがとう、君がいなかったら私は勝てなかった。本当に感謝してる」

「……いや、俺も、お前の力になれて良かったよ」

陽が昇る。夜の闇が終わり、光にあふれた新たな一日が始まる。

勝利を祝福するような光に、二人の表情が緩む。

山上の境内で朝陽を浴びる二人の影が伸びていく。

二人が今後歩む人生の様に長く、真っすぐに、伸びていた。

「もう、帰るのか？」

「ええ、こっち（こっち）での任務も終わったわ。魔法世界人の私たちがいつまでも無魔法世界にいるわけにはいかないもの」

結局あの後、二人は受けた傷が原因で倒れてしまった。メリーバが駆けつけてくれなかったらそのまま夏の日差しで干物になっていただろう。

その後はメリーバによる集中治療と、事後処理及び事件被害者の記憶操作（アフターケア）などで一日が終わってしまった。

そしてまだ誰も目が覚めていないであろう早朝、彼女たちが地球に来て五日目、二人がこの世界を去る時が来た。

「でも心残りは〈暗黒賢人〉ね。逃したのがイタイわ」

左の拳を、右の手の平に打ち付けるファミリア。レイオンを取り逃したのがそれほど悔しかったのだろう。

魔人を倒した時、すでにレイオンはこの世界を去っていたらしい。きっちりと街の魔法陣は破壊して。

結局、彼が何をしたかったのかは判らない。メリーバは何か気付いたらしいが、「所詮推測ですから」と話そうとしない。

「もう、無理しないで下さい。わたしたちの標的はあくまで〈魔人〉だったんです。奴を討てただけでも死力を尽くしたのに、あのレベルの魔導師と連戦なんてわたしの心臓がもちません」

「情けないわね。私たちは管理局員よ。犯罪者を無視していい理由なんてないわ」

意外と戦闘狂の気配があるのだろうか。怜一郎が苦笑していると、ファミリアが半眼で睨みつけてきた。

「なに笑ってんのよレイ。君ももうすぐこっちに来るんだから、他人事じゃないわよ」

「ああ。判ってるさ」

怜一郎は管理局に入ることを決めた。本来なら魔力無しの管理外世界の人間が入ることは難しいらしいが、ファミリアの推薦で入れるそうだ。彼女が言うには、怜一郎にはデバイス技師として光るものがあるとのこと。彼女の隣にいようと決めた手前、この誘いは怜一郎には天啓だった。

「覚悟しときなさいよ、私専属の技師として、ガンガンこき使ってやるんだから」

「それは大変だ。お手柔らかに頼むよ」

最後に、思いっきり握手を交わす。その際に、手の中に何かが滑りこんできた。

「じゃあ、また会いましょう。二度目の春、迎えに来るから。それまでに腕を上げておく様に」

「ああ。待ってるから、今度は置いてったりしないでくれよ」

「しませんよ。わたしが責任もって連れて来ますので」

「ああ。頼む」

さよならは言わない。彼らが再び会うのはそうは遠くないのだから。

メリーバがお辞儀をし、ファミリアがひらひらと手を振って、そして消えた。

蜃気楼のように、光の中へ溶けて行った。

残されたのは黒髪の青年。まるで白昼夢に会ったようで、胸に戸惑いが生まれる。

手の平を見る。握手の時に握らされた物体を見て、瞳が大きくなった。

手の中に会ったのは小型の端末。ファミリアが本局と通信に使っていたものと同じタイプだ。

ファミリアがどう使っていたかを思い出し、なんとか捜査してみる。

番号の羅列が現れた。はっとして、固定電話のマークのボタンを押す。

単調な電子音が二度三度と繰り返され、止まった。

そして。

『ヤッッホー、使いこなすの速かったわね。やっぱり私の目に狂いはなかったか』

端末の向こうから聞こえてきた声に、歓喜の震えが駆け巡った。

「ファミ、リア……？」

『何よーもう私の声忘れちゃったの？』

「いや、そんなことない。そんなこと、あるわけがない」

『冗談よ。そんなに必死にならないの。
……ねぇ、私、一言言い忘れちゃったの。だから、連絡くれて嬉しかった』

「言い忘れたこと……？」

うん、と端末の向こうから少し恥じらいの色の籠った声が帰って来た。

数瞬の沈黙の後、彼女の声が響いてきた。

『好きよ、怜。私、君のことが好き』

ドクンと、心臓が跳ねた。そして――――

「――――――――――――――――ああ。俺も好きだよ、ファミリア。大好きだ」

そして、青年は二度目の春を迎えた頃に、故郷の世界に別れを告げる。

それからは彼の傍らにいつも、亜麻色の髪の騎士がいた。

「何のつもりだ、ファミリア・オートザム執務官」

管理局最強の騎士に怒気を向けられても、ラルゴ・キールは慌てなかった。

この程度のことで取り乱していては、上層部の嫌味に耐えられるわけがない。

剣を向けたまま、騎士は口を開いた。

「今回の任務、偶然が重なり過ぎていたわ。

あんたがたまたまもらったというお守りがあの〈魔殺獄剣ヴォーパルソード〉で、任務先でたまたま現地の民間人の手に渡り、たまたまその人間がヴォーパルソードと使える能力を所持していた。

ねぇラルゴ、偶然にしては随分と出来過ぎじゃない？」

「……何が言いたい」

「ラルゴ、あんた知ってたわね。アレがヴォーパルソードだったってことも、地球にあの能力者がいるってことも、全部……！」

沈黙が流れる。

騎士と陸佐、二人の視線がぶつかり合い火花を散らす。

折れたのは、ラルゴの方だった。

「……特異点、という言葉を聞いたことがあるか？

遥か昔、あらゆる魔法原理を覆す力を持つと言われた者たちの総

称だ。その者たちは魔法原理に縛られず、我らの想像を超えた力を発揮し、時には制御不可能と言われた魔導具すら使いこなすという」

「それで？　あいつが特異点だったとして、何がしたかったの？」

「そんな常識を超えた人間が管理局にいたら、どれほどの戦力になるだろうな」

向けられた剣先が揺れた。騎士の心に動揺が走ったのがよく判る。

「あんた、何言ってんの？」

「何もおかしなことは言っていないぞファミリア。管理局は常に人材不足だ。そこに有能な人材がいると判れば、例え管理外世界の人間とはいえ使うべきだと思わんか？」

「本人にその意志があるのなら構わないわ。でも今あんたがやってるのはただの徴用よ」

「では聞こう、その本人である松田怜一郎君には、その意志は無いのかな？」

「そ……れは……」

無い、とは言えなかった。

そして怜一郎の力を知って、戦闘部隊への誘いをして来る者はラルゴだけでは治まらない。

それでもダメだ。彼の力は彼自身の命を削る。そんなこと、ファミリアは許容できなかった。

「だめよ。あの力はあんたが思ってるような万能の力じゃない。あれを使い続ければ、怜は壊れてしまう。なにより、彼を戦場に出すことを、私が許さない」

剣先の揺れは止まっていた。騎士の心に迷いはなかった。

「あんたがそんなに平和を作りたいというのなら、私が作る。この世のすべての罪人を、私がすべて斬り捨てる。怜を戦わせるくらいなら、私がずっと前線に居続ける。

あんたの言うことなら何でも聞いてあげる。だけど、それだけはあんたの思い通りにさせない。私の命を賭けても、あいつを守るわ」

ラルゴの瞳が大きくなり、大きな溜息を吐いた。

「いいだろう。そこまで言うのなら彼の戦闘部隊への配属は無しだ。お前の希望通り、技師として迎える。

ただし、彼の力があれば止められるであろう事件は、全てお前が引き受け、止めてみせろ。ソレができなかった時は……」

「必要ないわ。そんなこと、あり得ないんだから」

そう言って、氷刃の騎士は部屋から出て行った。

残されたラルゴはくつくつと笑っていた。

「ファミリアがあそこまで気にするとは。別の意味で気になってきたな」

歪んだ笑みを浮かべ、ラルゴは一人で続ける。

「あいつの心を奪った男か、まったく、人のモノを横からかすめ取

るとはやってくれる。
ああ、早く来てくれ怜一郎。存分にこき使ってやる……」

青年は笑う。
まだ見ぬ男への黒い感情と、やがて親友と呼ぶことになる男への想いを込めて、ラルゴ・キールは笑っていた。

やがて、青年は管理局の黎明期を支えた賢人として讃えられることになる。
そして騎士は最高の魔導師として、剣士は、最高の技師として尊敬を集めることになるのは、まだ先の話。

外章　6　そして二人は（後書き）

これにて過去編終了。
次回からは、以前言っていたように番外編に入ります。

さーて頑張って早く本編に戻るぞー。

外伝　魔王誕生　上（前書き）

まずはお詫びをせねばなりません。
五十三話にて、一部登場人物の名前を間違えていました。
申し訳ありません。

外伝　魔王誕生　上

目覚めた時、そこは戦場だった。
空には鋼鉄の船が浮かび、大地には炎と黒煙の柱が乱立していた。
蒼いはずの空は、煙と戦艦によって黒く染まっていた。
息をすると異臭が鼻腔に入りこみ顔を顰めた。
荒涼の大地を見渡すと、異臭の元が散らばっていた。
炭化した、人の体だった。破壊された装甲車の破片や魔杖魔剣が墓標のように立っていた。

「貴方、こんなところで何をしているの？」

声がした。振り返り、全身が硬直した。
そこにいたのは女性だった。
鼻梁の通った美しい顔立ちに闇の様に気高い黒髪、肌は処女雪のように白く、眼窩に埋まった真紅の瞳が神々しさを露わしていた。
迷彩柄の軍服に身を包み、背中には十二の紅い翼を背負っていた。
本来なら不自然な組み合わせ、だが彼女の美しさの前には違和感は霞み、彼女をより輝かせていた。

「ちょっと聞いてるの？　貴方がここにいる理由を訊ねているのだけど」

責めるような視線が突き刺さり、記憶を探る。

「……判らない」

「え？」

思い出せない。有るはずの記憶、この世に生まれ落ちて、今この瞬間まで生きてきた記憶が、何ひとつなかった。

「僕は、誰だ。一体、誰なんだ……？」

時は遥か昔、魔導と科学が肩を並べて破壊をもたらす大戦の時代。

これは、とある女王と魔王の物語。

魔法少女リリカルなのは　☆Ｔｈｅ　Ｒｉｄｅｒ☆　外伝　魔王誕生　上

薄暗い部屋の中央で目を閉じ、意識を集中する。

少年は深く呼吸し、大気中の魔力素を取りこみリンカーコアを通して魔力を精製。体を駆け巡る魔力を誘導し、両手で掴んだ魔杖に集める。

「術式（セット）装填、グレイヴ！」

魔杖の先端に埋め込まれた青い宝珠に文字が浮かび発光。

淡い光を放ちながら宝珠が受け取った魔力を使って魔法を発動、足元に魔法陣が展開し青い光が部屋全体を包み込んだ。

平らな床から円錐形の棘が飛び出した。

続いて金属音が鳴り響く。甲高い音を立てて、鉄色の短剣が床に落ちた。

円錐の棘には刀傷。男を襲った短剣を、棘が防いだのだ。

光が治まり、男が目を開く。薄暗い部屋に、別の男の声が響いた。

「よし、魔法の制御は完ぺきなようだな」

「はい。ありがとうございます、師匠（せんせい）」

部屋の隅の影から人の脚が出た。そのまま胴、腕、頭が現れる。

現れたのは男だった。口元の髭が流線型を描き、目元は赤い仮面に隠されていた。歩く度に揺れる外套は軍の上級士官を、そして胸の階級章は彼が陸軍佐官であることを示していた。だが腰に差された二本の近接用刀剣型の魔道具から、彼は軍人というより騎士といった風であった。

エヴォーラ・ロータス。それが仮面の騎士の名である。

髭を弄りながら、エヴォーラは賛辞を続ける。

「たった四ヶ月でこれほどとはな。私の目に狂いはなかった。レイオン、お前の様な弟子を持てて私は幸せだよ」

「いえ、これも全て師匠のおかげです」

レイオンが敬礼をする。

記憶を失い、戦場を彷徨っていたレイオンに魔導師の素養を見いだしたのは他ならぬエヴォーラだった。

まさに、レイオンにとって彼は恩人であった。

エヴォーラはレイオンがつくりだした円錐に触れて感嘆の声を上げた。

「うむ。魔力の浸透率も完ぺき、魔法陣の術式も一切不備はなかった。これでお前も、立派な陣術魔導師だ」

「ありがとうございます！」

魔導の師からの賛美に、レイオンは胸が高まった。

陣術魔導師とは、自らの魔力を使って地形に干渉する〈陣術魔法〉を得意とする魔導師のことだ。魔法戦においては主に後方支援を担当する。

刀剣を使う前衛や高火力で戦場を焼き払う砲撃魔導師と違って敵を討つ攻撃能力は無く戦場の華には程遠いが、戦場の地形を操作することができる陣術は重要なファクターとなる。

地盤を液状化させて敵の足を止めたり、戦艦からの砲撃を壁を作って防いだりと、陣術魔導師の働きで自軍の損害が天と地ほど変わるため、ようは部隊全員の命を預かる役目を持つ。

エヴォーラはレイオンにその陣術魔法の素養があると見抜き、四ヶ月かけてその術を叩き込んだ。

本来なら一年から二年かけて会得するものだが、エヴォーラの見立て通り、レイオンは渇いたスポンジのように陣術を会得していった。

いま思えば、魔法理論すら知らない者に一から全てを教えるというのは大変な苦労だったろう。

エヴォーラには感謝してもしきれない。レイオンはいくら感謝しても足りないくらいだろう。

口元を緩めながら、騎士は肩を叩いて言った。

「これでお前も我らギャランの栄えある魔導師部隊の一員だ」

仮面の騎士の言葉にレイオンは硬直した。

驚きの表情で師の顔を見る。

「僕が、魔導師部隊？　本当ですか……？」

魔導師部隊は、この国で言うエリート部隊であり、エヴォーラがうち一つの隊長を勤める部隊でもある。

魔導師の身で構成された三つの分隊を一つの部隊とし、それが七部隊存在し、王族警護の第一部隊を覗く全てが戦場の最前線に配置されている。

魔法素質のある人間なら大勢いる。だが戦場では魔法による魔力弾だけでなく、機械兵器による鉛や火薬の弾丸が飛びまわっている。防御魔法による守りだけではそれらは防ぎきれない。

対策として単純に重装甲にすればいいのだが、魔導師の利点は魔力の身体強化からの小回りの利く機動性だ。機械兵器に対抗するための装備をすれば、魔導師の魅力を殺してしまう。

故に、戦場に出る魔導師は文字通り選りすぐりのメンバーで構成される。

通常の装備で鉛玉を躱し、敵の戦艦を落とせるほどの実力を兼ね備えた魔導師たちを集めた部隊が、魔導師部隊なのだ。

そんなエリート集団に、自分の様な身元がはっきりしない者が入っていいのだろうか。

レイオンの疑問に気付き、エヴォーラが言った。

「何を迷う。お前は私が目をつけ、育てた魔導師だ。自信を持て、レイオン」

「……はい！　判りました、師匠（せんせい）！」

かくして、レイオンの魔導師部隊入隊が決定した。

四方を壁に囲まれた部屋での任命式。歓声も祝いの花もないが、レイオンの顔に不満は無かった。

エヴォーラに連れられて、レイオンは砦の中を歩く。
二人がいるのはギャランと戦争状態にあるコントゥアとの最前線、国境を守るフレーザー砦だ。
七つある魔導師部隊のうち、エヴォーラが率いる第三部隊、そしてレイオンが所属することになった第三部隊第二分隊はこの地に配置され、剣林弾雨の戦場に多くの兵士とともに駆け抜けている。
今日はレイオンの魔導師部隊への配属日である。陽はすでに傾き、この日の戦闘は終わりを迎えている。レイオンの初陣は明日になるだろうとはエヴォーラの談。
部隊のみなと顔合わせのために待機室へと向かっている。が、エヴォーラの足が止まった。
仮面の騎士の顔に驚きが張り付いていた。体を傾け、エヴォーラの向こうにあるものを見て、レイオンは硬直した。
通路にたち、外を眺める女性。心臓が暴れ出すほどの美女だ。
夜闇のような黒髪が流れ、処女雪の様に白い肌に赤い唇がよりいっそう映える。
レイオンの瞳に映る横顔は憂慮の色が浮かんでおり、その表情、その仕草、吐く息にすら艶があった。
硬直から回復した騎士が女に歩み寄り、声をかけた。

「プラウディア姫、何故この様な場所に」

師が放った名前に、レイオンは衝撃を受けた。
目の前の女性の名はプラウディア・エメロード・ギャラン。次元世界エメロードに覇を唱える大国、ギャランの姫であり、そして戦場を彷徨っていたレイオンの第一発見者だ。
あれ以来姫と会うことはなかったが、その美貌を忘れることは無かった。
黒髪の姫がこちらを向く。紅い瞳には不快の色があった。

「あらロータス隊長、軍属の者が戦場にいるのは当然ではなくて？」

「……申し訳ありません、姫様」

「その姫と呼ぶのもやめてください。軍人としての階級は貴方の方が上ですし、私は一介の魔導師としてここにいます」

女の声は異を唱えることを許さない。

王族だからと特別扱いされるのが嫌なのだろう。

プライドが高いというより、国を守るための軍にいることを誇りにしているのかもしれない。

そしてついにエヴォーラが折れた。

「分かり……了解した、プラウディア分隊長」

「こちらも、先ほどの無礼お詫びします第三部隊長。ところで、そちらにいる方は？」

「ああ、紹介しよう。今日から魔導師部隊に配属される……」

「ロータス隊長の弟子の、レイオンです」

敬礼をして名を名乗る。

緊張からか、舌が回らない。案の定、プラウディアは首を傾げた。

エヴォーラがフォローする。

「すまない。こいつは次元漂流者で、まだこちらの言葉や礼式に慣れていないのだ」

レイオンは己が身の上を思い出した。
軍属の次元漂流者、それが今の自分の立場であった。
なんらかのトラブルによって住んでいた世界から別の世界へと飛ばされた者のことを指し、レイオンに記憶が無いのもその影響だろうと言われた。行くあてもなく、茫然としているところに軍に誘われ、藁にもすがる思いで了承した。
翻訳魔法が無くてはこの世界の人間の言葉はまったくしゃべることができなかったが、それも少々拙いながらも会話ができるまでに上達した。全てエヴォーラのおかげだった。
師への感謝の想いを反芻していると、プラウディアの視線に気付いた。
ルビーの様に紅い瞳がレイオンをまじまじと見つめていた。
美人の女性に見つめられ、自然と心臓の鼓動が速くなる。
紅い唇が上下に分かれ、言葉が発せられた。

「ねぇ隊長、この子を私の分隊に入れてもいいかしら？」

エヴォーラが雷に撃たれたかのように震え、仮面では隠しきれない動揺を見せた。
プラウディアの言葉にもだが、今まで見たことのない師匠の姿にレイオンは驚愕した。
答えぬ騎士に、王女がたたみ掛ける。

「何か、問題あるかしら？　隊長」

それが決定打になった。
有無を言わせぬ圧力に満ちた言葉に、エヴォーラはただ彼女の提案を呑むしかなかった。
プラウディアの表情は笑み。ついさっき王族ではなく一兵士として扱うよう言っていたが、それを指摘することすら許さない笑顔を

浮かべていた。
第三魔導師部隊第二分隊。そこが、レイオンが所属する隊であり、プラウディアが分隊長を務める隊であった。

太陽が顔を出すと同時に、ソレは始まった。
砲撃による轟音が腹に響く。敵兵の雄叫びがかつては平原だった荒野に谺する。
鋼鉄の船が空を及び、魔杖を携えた魔導師が戦場を駆け抜けて行く。
砦の扉の前で、レイオンは魔杖を強く握りしめていた。
ぶ厚い鉄の扉の向こうには砲撃による炎と魔法による閃光、そして鈍く輝く刃の世界が広がっている。
記憶が無くとも、死への恐怖は知っていた。
レイオンはぐるりと周囲を見渡す。甲冑を纏った兵士たちが並ぶ。この中の何人が生き残るのだろうか。
戦場へと出向く兵士たちの背中が見える。愛する者の写真を見て生存を誓う者、武勲を上げて出世を狙う者、祖国を脅かす敵への怒りに犬歯をむき出しにしている者、戦いへの高揚感から悪鬼の笑みを浮かべる者、死への恐怖で顔が真っ青になっている者、みな異なる思いを胸に秘め、その瞬間を待っていた。
そして、

「扉が開くぞー！　前軍進めー！！」

開戦の鐘が鳴り響く。
銃兵や槍兵、鋼鉄の鎧に身を包んだ兵士たちが扉から我先にと飛び出して行く。
勢いに乗って進みそうになる足をどうにか押さえる。レイオンの

出番はまだ先だ。今出て行けば真っ先に敵の砲撃の的になる。身を守るための防弾・防刃加工された魔導服なんて気休めにしかならない。

緊張がピークに。手足が震え、カチカチと歯が音を立てた。

「しっかりなさい」

前から声が響く。長い黒髪が、荒野に咲く一輪の花の様に輝いていた。

「私たちは国を守るためにここにいる。恐怖は捨てなさい。誇りを持ちなさい。

いま私たちがここにいることで、助かる命があることを知りなさい」

プラウディアの言葉が、レイオンの震えを止めて行く。

凛とした声は威厳に満ちており、彼の不安を覆って行く。

そして、その時が来た。

「魔導師部隊、出ろ！！」

『応っ！！！』

再び扉が開き、魔導師たちが駆け抜けて行く。

レイオンが砦の外へと足を踏み出した時、世界は音に満ちていた。

狂気の混じった雄叫び、轟音と爆音、魔力砲が空気を焼き、鋼が剣戟を奏でる。

人を昂らせ、恐怖させる全てがそこにあった。

不安は完全に消えた。今考えるべきは、勝利と生存。それだけだ。

視界を広く、戦場全体を見渡す。後衛としてやるべきことに全神

経を集中させる。
第三魔導師部隊第二分隊が敵と激突した。
「どらっしゃあああああっ！！！」
咆哮を上げて槍騎士のブーンが疾走。三又槍を振るい敵兵を穿ち切り裂き薙ぎ倒して行く。
双剣士のビックサムが続く。刀身の長さが異なる二本の刃で編まれる斬撃の結界が展開されていく。ただし、中に入った者は守られるのではなくサイコロのように切り刻まれていく。
轟雷拳士のエアロエイトの拳から雷光が奔る。地を一閃する雷撃を受けた敵兵が感電、鼻腔・口腔から白煙を出し、沸騰した血液や脳髄を撒き散らして倒れて行く。
「ほらほらあっ！　前衛組ばっかに手柄をやらないよ！！」
金の三つ編みを振り回しながらカプチーノが叫ぶ。女魔導師の手には淡く光る鎖。縛鎖は敵兵巻きつき動きを封じる。捕縛士が飛翔。その矮躯からは考えられないような膂力が発揮され、捕まえた敵兵を振り回し、鉄球の如く投げた。弧を描いて鎖は落下、その時響いた音はできることなら二度と聞きたくない。
背後から緋色の光を感じる。振り向く間もなく、十二条の閃光が奔った。
閃光が大地を抉り、爆炎と爆風を撒き散らす。
遅れて振り向く。六対十二枚の赤い翼が広がっていた。
荒野に立つ烈火の天使はギャランの姫、否、分隊長であり、砲撃魔導師のプラウディア・エメロード・ギャランだった。
ギャランが彼女のためだけに創り上げた生体系デバイス〈オリュンポス〉が放った魔力砲は戦況をこちらに傾けるのには十分過ぎた。
事実、ギャラン側の魔導の力が恐怖となってコントゥアに伝搬す

るのに時間はかからなかった。

「ま、魔導師だ！　ギャランの魔導師部隊が来たぞ！！」

こちらの快進撃に、コントゥアの兵士が恐怖の入り混じった声で叫んだ。

戦車や重装備の兵士を残し、歩兵が撤退していく。

だが、それを見逃してやるほどギャランの魔導師は優しくは無い。

「逃がさない」

褐色の少女が呟き、前面に巨大な魔法陣を展開。三重の円に刻まれた術式は物体の召喚を示していた。

魔法陣から現れたのは魔獣。牙の短剣が並ぶ顎、鰐のような頭部、蛇の様に長い首。

召喚師チャレン・ジャーが呼び出したのは若い火竜。口腔から紅蓮の劫火が吐き出され大地を舐め回す。

味方が巻き込まれないようレイオンは陣術魔法を発動。杖を通して魔力が大地に浸透、味方の足下から地層の柱を出す。その下をコントゥア兵の悲鳴と人が焼ける異臭が満たして行く。

運よく竜の息吹から生き延びた僅かな兵が逃げて行く。

レイオンたちが場所を移そうとしたとき、脳に直接ブーンから思念通話が届いた。

「（来たぞ！　コントゥアの魔導師部隊だ！）」

部隊に緊張が走る。目に視力強化の魔法を叩き込み前線を見る。

強化繊維で編まれた魔導服、携えた武具は魔力を放ち、通常のモノと比べて異質な気配。

資料で見たとおり、コントゥアの魔導師部隊だった。

人数がこちらよりも多い。数に任せた殲滅は不可、勝つには敵の陣形を崩す必要があった。
自らの役割を思い出し、魔杖を大地に突き立てる。
「術式（セット）装填――――！」
宝玉が発光。足元に魔法陣が展開し、魔力が杖を通して大地に伝わり、敵の足場を沼地に――――変わらなかった。
「――――――――っ！？」
レイオンの顔に驚愕と焦り。すぐさま今展開した術式を確認する。
（術式に不備はない。陣術魔法も、発動している。ということは――――！）
焦りが治まり理解の色が広がっていく。
すると、ブーンから思念通話が届いた。
「（通達！　敵部隊にも陣術魔導師がいるぞ！）」
槍騎士からの警告は、レイオンの予測と同じだった。
地形に干渉する陣術魔法。それが向き合う一から同時に発動されれば、干渉の魔力は正面からぶつかり合い相殺される。
こちらにも陣術魔導師がいるのはコントゥアも気付いただろう。
その際、取るべき行動は一つ。
敵の陣術魔導師を、速やかに潰すこと。
「（チャレン、姫っち！　新入り！　そっちに一人行ったぞ！）」

ハッとして空を見る。退却していくコントゥア兵の頭上を駆け抜けて行く人影があった。
青い宝玉を銀色のフレーム囲んだ魔杖、地上を見下ろす双眸には獰猛な闘志の炎。
コントゥアの空戦魔導師が戦場に舞い降りた。
魔杖の先端に鎮座した青い宝玉が発光、眩い光弾が豪雨となって降り注ぐ。
光が地を穿ち、クレーターが出来上がっていく。光弾を受けた兵士たちが断末魔を上げて倒れて行く。
爆炎とともに肉片がぶちまけられていく。
空戦魔導師の狙いはレイオン一人。他の者はついで程度で爆撃を繰り返して行く。

「いかせるかっ！」

カプチーノの手から光の縛鎖が奔るが、敵は空で華麗に舞い鎖を躱す。
レイオンの魔杖が発光。杖を大地に突き立て陣術魔法を発動。大地が盛り上がり、魔導師の航路を狭めるように岩の柱が飛び出した。
カプチーノの縛鎖と合わせて、ようやく空を飛ぶ魔導師の動きが乱れる。突然のルート変更を余儀なくされ体勢を崩したのだ。
レイオンは思念通話をチャレン・ジャーに飛ばす。

「（チャレン、ビッグサムを転送してくれ！　座標は――――！）」

「（わかった）」

最後まで言う前に、チャレン・ジャーからの返答があった。
少女の手に転送魔法陣が展開。前線にいる双剣士を捕捉し、淡い光で包み込む。

レイオンは再び地形に干渉、新たに岩の柱を作り出す。
土柱が飛び出すと同時にビックサムの姿が現れた。座標はドンピシャ、レイオンの計算通りだった。
双剣士を乗せて土柱が背を伸ばし、コントゥアの魔導師の前までビックサムを送りこむ。

「おおおおおおおおっ！！！」

双剣士の巨躯が震える。咆哮とともにビッグサムが柱を蹴って空戦魔導師へと肉薄。
右剣〈ゴルドー〉が右肩から胸に掛けて魔杖ごと切り裂いた。即座に左剣〈ワーワン〉が閃き、敵魔導師の首を刎ねた。
苦悶の表情を刻みつけ、赤い軌跡を描いて魔導師の首が地に堕ちる。少し遅れて残りの体も地面に落下、砕けて地面を濡らすシミへと変わった。
前方でも歓声が上がる。どうやら、ブーンかエアロエイトが敵陣の陣術魔導師を討ち取ったようだ。
魔杖を突き立て、陣術魔法を発動。魔力が大地に浸透し、敵軍の足下を沼地に変えて動きを止める。
レイオンの背後で、赤い翼が広がった。
膨大な魔力に背筋を撫でられ、味方だと判っていても冷や汗が出る。

「みんな、下がりなさい。一気に決めるわ」

赤い唇が開閉し、言葉が発せられた。
緋色の光が溢れ、十二の翼から眩い光が放たれる。
瞬間、極光が吼えた。
空を焼き地を抉る十二条の閃光。それは統率された猟犬のように敵軍だけを殲滅した。

熱線に焼かれ、悲鳴を上げる間もなくコントゥアの魔導師たちは影だけを残してこの世から消え去った。

プラウディアの一撃が決定打となり、戦況はギャラン側へと傾いた。

自慢の魔導師部隊を潰されたコントゥア軍は総崩れ、すごすごと退却していった。

初めての戦場を生き残ったレイオンは、黒煙を上げる荒野を眺めていた。

戦場を駆けた興奮と、プラウディアの圧倒的な破壊に茫然と立ち尽くしていたレイオンの肩が叩かれた。

横にはプラウディアが立っていた。

「御苦労さま。初陣にしてはよくやれていたわよ。今後もこの調子でよろしく頼むわ」

軽くウインクして、プラウディアは去っていく。

その優雅さに、トクン、とまた別の意味で胸が跳ねた気がした。

再び見渡す戦場に、別の色があった気がした。

こうして、少年は初めての戦争は終わり、彼は見事生き延びた。

だが戦争はこれで終わりではない。コントゥアは軍備を整え、最速で明日にもまた攻めてくる。

彼の戦場の日々は、まだ始まったばかり。

そこは、一面の闇だった。

光は闇に呑みこまれ空間の細部を見ることはできない。

闇の重圧がのしかかった重い空気がどんよりと堆積していた。

「が、ぎゃあああああああああっ！！！！！」

耳を劈く悲鳴が響く。同時に肉が焼ける異臭が広がる。
男の悲鳴を闇はそっと飲み込み、断末魔が外へ漏れることは無い。
悲鳴が止む。闇の中に浮かぶ赤い紋様。
それは熱せられた焼き鏝だった。鏝に描かれた紋様が男の胸にもあった。
高熱の焼き鏝による拷問。それが斫した悲鳴の正体だった。
ぐったりと崩れ落ちる男の体を腕輪が支える。鉄の腕輪には鎖が付いており、鎖の末端は壁につながっていた。
男の脚は僅かに床から浮いていた。重力に引かれて落ちる体を鎖が繋ぎとめ腕が軋み、男に苦痛を与え続けていた。

「どうだ。少しは頭が冷えたか？」

荒れた呼吸を整える男の耳に、荘厳な声が響いた。
息が止まる。胸に鉄球で殴られたような鈍痛が落ちる。
声の主は、男性だった。それが誰なのか、磔の男はすぐに判った。
闇の中で姿が見えなくとも、その者が放つ気配が気付かぬ者などいない。
この国に住む以上、彼の者の声を知らぬ者などいないのだ。

「どれ、もう一度訊ねてみようか」

姿なき拷問吏が再び焼き鏝を押しつけた。
先ほどよりも強く、深く。より大きな悲鳴が喉の奥から押し出されていく。

「カン・グーよ。王立院を首席で卒業した天才よ」

悲鳴の渦を前に顔色を一切変えず、男は言葉を紡いでいく。

「答えよ。アレをどこに隠した？」

絶叫で喉が裂ける寸前に鏝が離れた。

玉の様な汗が頬を伝い、顎から落ちた。

疲弊しきった顔をあげる。

囚人の視界は未だ闇に閉ざされており、声の主の顔は見えなかった。

「貴方は、あの子をどうする気なのですか……」

渇き切った声が無明に響く。

やがて、答えが返ってきた。

「無論、使う。アレがあればこの戦乱の世は終わり、我らが統治する世界が誕生する。貴様が願った、みなが幸せになる世界がやって来るのだぞ」

「詭弁だ！！　そのために、それだけのためにどれほどの人間が死ぬことになると思っているのですか！？

そして何より、あの子はどうなる。貴方はどれほどの罪を背負わせる気ですか！！」

「詭弁は、貴様の方だ」

荘厳な声がカン・グーの言葉を一蹴した。

足音が響き、声の主が近づいてくる。

「戦争に、罪は存在しない。兵士は常に奪い、傷つけ、そして殺す。その行為の果てに、国民は生を得る。それを罪というのなら、この世界は罪人で満ちている」

耳朶に響く声は重く、聞く者の抵抗を削っていく。

「アレは罪人になるのではない。この国を救う英雄となるのだ。なにより、アレの理論を確立し実際に造り上げたのは貴様だぞカン・グー。貴様は、自ら作り上げたモノを罪と蔑み、アレの存在意義を否定した。命の尊厳を否定、この場でもっとも大きな罪を犯しているのは、他ならぬ貴様だ」

罪の意識が、カン・グーの胸に落ちる。

素晴らしいことだと思っていた。戦乱の時代を終わらせる術として、彼はある禁忌に手を染めた。

覚悟はあった。一つの禁を破るだけで、戦火の下の略奪や暴虐、飢えや貧困からも解放される。人々の暗い心に希望の光を、罪人に聖断を。そう思っていた。

だが、ある日を境に恐怖を抱くようになった。

徐々に形を成し、命を得て行くソレを見て行くうちにカン・グーの裡に後悔の念が募っていった。

禁忌が禁忌であるが所以、彼はそれを見落としていた。

今ならば、先人たちがソレを禁忌にした理由がよく判る。

だからこそ逃げた。誕生寸前の禁忌とともに。

災厄をこの世に解き放つ前に、自らの行為に責任を取ろうとした。

だが国が許さなかった。目の前に置かれた勝利のカギ。それをわざわざ捨てる者など、この世にはいなかった。

戦乱の時代において、反戦を掲げる聖人よりも、敵を狩る殺人鬼（えいゆう）の方が正義なのだ。

「失礼します」

別の足音が無明の闇へと足を踏み入れた。
声の主が離れるのを感じる。
ひそひそとした話声が聞え、やがて嘲笑が投げられた。

「カン・グー。アレは見つかったぞ」

絶望の鐘が脳内で鳴り響く。

「貴様は上手く隠したようだがな。幸か不幸か先のモデュスとの衝突、あれで隠し小屋が一緒に吹き飛んだらしい。アレは、我が軍の者が保護したそうだ」

「そ、んな……」

最悪の光景が脳裡に展開される。
すべてが破壊された世界。絶望に彩られた闇の世界が来てしまう。

「これで反逆者である貴様を生かしておく理由は無くなったな」

シャラン、と鉄が滑る。拷問吏が処刑人に変わる。刃が抜かれ、首筋に冷たい鋼が当てられた。

「考え直してください！　アレがもたらすのは安寧ではなくただの破――――」

刃が奔る。
カン・グー。磔の天才は胸の内を全て吐き出す前に、その首を刎ねられた。

血の雨を飲み干した闇を、歓喜の笑いが満たして行く。

「本日の勝利を祝しまして――――――――」

夜の帳が下りた。寂しげな荒れた大地に反して、砦の中は歓喜の色が溢れていた。

みなが今か今かと幹事の掛け声を待つ。そして、その時は来た。

「カンパーイ！！」

『カンパーイ！！！！！』

歓声とともに杯が掲げられ、ぶつかりあって金管の音を奏でる。

食堂で行われているのは勝利の宴。今日の戦場を生き抜き、そしてコントゥアを叩きのめしたことへの祝杯だった。

酒に満たされた杯を片手に、長テーブルいっぱいに広げられたごちそうに群がる兵士たち。

香しい匂いにつられるまま手を伸ばし、空いた胃袋へ詰め込んでいく。

空腹感が消えていき、幸福な気持ちが胸いっぱいに広がる。酒を呷り気持ちも浮いてくる。

たった一つの不幸で命を落としかねない戦場において、心を落ち着けさせることができるのは食事ぐらいだろうか。緊張で凝り固まった体を、温かい食事と美酒がほぐしていくようだった。

兵士たちの顔は喜色満面だった。それは、レイオンも例外ではなかった。

彼は部隊の仲間に挟まれて、酒を強要されていた。

「いやー新入り、お前なかなかやるじゃねぇか！」

「ほんと、ロータス隊長が見込んだだけはあるわね。陣術魔法も完ぺきだったし」

「あ、ありがとうございます……」

ブーンが肩に腕を回し、カプチーノが金紗の髪を揺らしてしな垂れてくる。

分隊で一二を争う酒豪の二人に挟まれたレイオンの前には次々と酒が持ち込まれてくる。

レイオンは困惑した表情を浮かべるが期待の視線は消えない。

覚悟を決めて、渡された杯を傾け中の酒を一気に飲む。よい子は真似するな。

「――――――――ぷはあっ！」

だんっ、と杯を机に置くと周囲から歓声が上がる。

「いい飲みっぷりだ新入り！　さぁもう一杯！」

「ちょっとブーン、今度は私が注ぐ番！　いつまでも新人君を独り占めしないの！」

「うるせぇぞカプチーノ。これは、男同士、戦友の誓いを結ぶ杯だ。女のお前は引っ込んでろ」

「何よ、戦友ってのなら私だって無関係じゃないわ。だいたい、アンタみたいに真正面から突っ込んで暴れることしかしない超超前衛のアンタより、一緒に後衛で援護に回る私の方が戦友に相応しいわ」

「ああっ！？　言ったなこの陰険金髪女！」

「言ったわよ。それが何か！？」

「……陰険ってのは否定しないんですね」

レイオンを挟んで大音量で喧嘩する槍騎士と捕縛士。
周りも二人を止めようとしないあたり、こんな言い合いは日常茶飯事なのだろう。

「おいおい大事な後衛なんだから無理はさせるなよ？」

見かねたビッグサムが助け船を出す。
だが帰ってきたのは槍騎士と捕縛士の冷たい眼差しだった。

「判ってるって。ビッグサムは心配し過ぎなんだよ」

「そうよねぇ～図体はデカイくせに肝は小さいんだから」

「おいおまえらいい加減に……」

「まあまあいいじゃないですか」

立ち上がった巨漢の肩が叩かれた。
長い銀髪を流した青年、エアロエイトが朗らかな笑みを浮かべていた。

「二人だって魔導師部隊に選ばれるくらいの者です。ギリギリとラインくらい判ってますよ。それに、」

穏やかな顔に暗い影が落ちる。

「今日は新人君の初陣と生還祝いです。これくらいのは、許してあげましょう」

「む……」

エアロエイトの言葉に、ビッグサムがゆっくりと腰を下ろした。

今は歓喜の渦に湧いているが、ここは戦場。いつ隣にいる戦友が死ぬか判らない。エリート部隊といわれる魔導師部隊でも必ず生存できるというわけではない。配属したての新人となれば尚更だ。

事実、今日の戦闘で他の分隊に欠員が出たという。

だが彼らに悲しむ暇はない。

悲しめば心が乱れる。

心の乱れはそのまま精神の乱れに直結し、魔法に不作動を引き起こす。

ほんの小さな綻びが生死を分ける。それが戦場を生きる者にとって当然のことだ。

生きるために、死んでいった者のための涙を流しはしない。

ただ胸に故人とともに過ごした時間を刻み、生きる糧にするだけ。

ソレを思えば、ブーンたちの騒ぎようも仕方ないのかもしれない。

「まったく、いつになったら戦争は終わるのやら……」

「中央では決戦兵器を開発してるなんて噂がありますから、それを待ちましょうよ」

「フン。そんなモン、どこの国も造っておるわ。ソレらがぶつかり合ってこちらが負けた時、どうなると思う」

「負けた時は死んだときですよ。考えたってしょうがない。僕らに出来るのは、今と明日を全力で生きることだけです。戦ってね」

この宴会の場に、戦いを望む者はどれほどいるだろうかとビッグサムは考える。

兵士の中には正規兵だけでなく流れモノの傭兵や徴兵された者たちもいるだろう。前者なら食い扶ちのために戦乱を望むかもしれない。反対に後者は一刻も早く故郷へと変えることを望んでいるだろう。

争いがあっても、なくても、困るものが存在する。まったくもって、世界は複雑すぎる。

（ブーンは気性が激しく好戦的だが、戦乱を望んでおらんだろう。アレは平穏の中に刺激を求める男だ。

チャレンは論外、カプチーノは……よく判らん。そして……）

杯を傾けながら、視線を横へ。鶏のモモに齧り付くエアロエイトを見る。

辺境の貴族出身だと聞いていたが、詳しい出生は聞いていない。

（いや、自分のことを隠しているのはワシも一緒か……）

魔導に手を染める者というのは少なからず胸の裡に秘めた想い、もしくは信念を持っている。

ソレを叶え、貫くために魔導を振るうのが魔導師だ。

そしてそれを容易く口外する者は少ない。一度他人に知られれば軽くなってしまう気がするからだ。

ビッグサムの場合は先天的に高い魔法素質を持っていた。貧しい村を飛び出し、ただ立身出世を求めて軍の門を叩き、いくつもの戦

場を経てここにいる。
ソレを思えば、自分にとって、終戦とは何を意味するのだろうか。

（……止そう。メシがまずくなる）

思考を振り払い、料理に手を伸ばした。
それが一時しのぎの逃避だとは自覚せずに。

「隊長、あげる」

「ありがとうチャレン。料理はおいしい？」

「うん」

プラウディアは食堂の隅、宴会の喧騒からは最も離れた場所にいた。
もともと大騒ぎするのは性に合わないし、元々の身分もあってか一部を除いてどこか皆の対応は固い。
除いた一部の一人が、今目の前にいるチャレン・ジャーだった。
背が低く、褐色の肌に琥珀色の瞳が目を引く少女。本来ならこんな場所には不釣り合いな幼い少女。
村が野盗に焼かれ、家族を失くした彼女を保護した軍が魔法素質に目をつけて教育した少女。
幼さゆえか、彼女はプラウディアを対等の仲間として扱ってくれる（隊長相手にそれはそれで問題だが）。それがプラウディアには嬉しかった。

「ん」

フォークで突き刺した肉の切り身を差し出すチャレン・ジャー。
屈んでそれを口にする。咀嚼し、呑みこんで笑顔を浮かべる。

「うん。おいしい」

「よかった……」

安堵した表情を浮かべる少女。その仕草が可愛らしくて、思わず頭を撫でてしまう。

「ん……なに？」

「なんでもー」

わしゃわしゃと撫で続ける。
守らなければ、この少女を。そして創ろう。彼女が迷わず笑える世界を。
誓いを胸に、姫と少女の晩餐は続く。

いつまでも続く。そう思っていた。
共に闘い、共に生き抜き、生還と勝利を祝福する。
そんな、激しくも心昂る日常が、続くと思っていた。
王暦７６５年。コントゥアとの境界線を守護していた第三魔導師部隊第二分隊はコントゥア軍との戦闘中に未知の勢力からの奇襲を受ける。
その奇襲によって、分隊から三人の欠員が出た。

そのなかには、黒髪の少年の名があった。

外伝　魔王誕生　上（後書き）

仲間たちのまとめ

砲撃魔導師プラウディア
槍騎士のブーン
双剣士のビックサム
轟雷拳士のエアロエイト
捕縛士カプチーノ
召喚師チャレン・ジャー
陣術魔導師レイオン

地位順
プラウディア＞ビッグサム＞エアロエイト＝ブーン＝カプチーノ＞チャレン・ジャー　レイオン

年齢順
ビッグサム＞ブーン＝カプチーノ＞エアロエイト　プラウディア＞レイオン＞チャレン・ジャー

外伝　魔王誕生　中（前書き）

土曜日ですが更新。

外伝　魔王誕生　中

レイオンが目覚めた時、そこに光はなかった。
無明の闇が視界いっぱいに広がっていた。

「……ここは？」

右頬がひんやりと冷たい。感触から石畳だろうと推測、となると自分は横になっているということか。
起き上がろうとしたが、手足が動かない。無理矢理動かそうとすると、ギシリという音と両手足首を締め付けられる痛みに襲われた。

「縛られてる……」

自分は捕まったのだろうか。
ここで目覚める直前の記憶を思い出す。
戦場で、突然の奇襲を受けた。
コントゥアの部隊かと思ったが、装備や動きが彼の知るコントゥアの物とは大きく違っていた。
特殊部隊なのだと言われればそれまでだが、ならば何故特殊部隊があんなところに配置されていたのかが疑問になる。
コントゥアの目的はフレーザー砦の攻略。ならば戦闘が始まって人が減った砦の陥落に部隊を動員するべきだ。
なのに、奴らは他の者にも目をくれずに自分たちに襲いかかって来た。
まるで奴らの目的が元から自分たちだけであったかのように。

（ここは、コントゥアの地下牢か？」

手足を封じられながらも、どうにか体を起こす。
ひんやりと、どこか湿っぽい空気が頬を撫でて行く。
冷たい空気にのって、声が届いた。

「目が覚めたか？　実験体三十七號」

届いた声には感情が無かった。氷のように冷たい声が響いてくる。
ペタペタという足音とともに、人影が現れた。
櫛も碌に通していないボサボサの土色の髪。背はひょろりと高く顔立ちからみて性別は男。染みだらけの白衣に袖を通し、丈の長い脚絆の裾を引き摺って上履き（スリッパ）を履いた足で歩いてきた。茜色の瞳には感情が無く、酷く冷たい眼差しだった。
幽鬼を思わせる風体に、レイオンは言葉を失っていた。
男の右足が上がり、振り子運動を以てつま先がレイオンの腹に突き刺さった。

「――――ガッ！！」

「目が覚めたかと聞いたんだ。さっさと返事をしろ」

無様に転がるレイオンを見下ろして男は言った。
髪を掴み、無理矢理起こす。
至近距離で男と顔を見合わせる。
茜の瞳は冷たく、人を見る眼差しではなかった。

「起きたな。よし、じゃあついて来い」

男は髪を掴んだままレイオンを引きずっていく。
痛みに顔を歪めても気にすることなく男は歩き続ける。
レイオンは引きずられながらも周りの様子を把握しようと目を凝

らす。
闇に目が順応し始め、うっすらと周囲が見えてきた。
石畳が敷き詰められた床に、木製の机や棚が並ぶ。机には使用用途が判らない目盛りの付いたガラス製の器具が、棚には専門書が無雑作に詰め込まれている。
壁には人がまるまる入れそうな円筒形のポッドが並んでいた。

（研究所……？　まさかコントゥアの人体実験場か！？）

どこの国も、自軍を勝利に傾けるための決戦兵器を開発しているという話は聞いている。
所詮ウワサだと思っていたがこんな場所を見てしまえば信じざるを得ない。
ふと、視界の隅に鉄格子の牢が入り込んできた。
中はどうなっているのは見えないが、鉄格子の間から漂ってくる腐臭から中身を想像するに難くない。
これから自らに降り注ぐ事態に関して、嫌な想像が脳裏をよぎり、背筋を氷塊が滑り落ちて行く。
やがて、男の歩が止まる。
髪を掴む手が離れ、石畳に頭をぶつけた。
頭を動かし前を見る。

「おや、アンタみたいな御身分の人間にはここは不釣り合いですぜ？」

「下らんことはいい。デュトロ、アレはどこだ」

その声は、荘厳な響きを持っていた。
逆らうことを許さぬ重い声だった。

「それならここに。俺の足下に転がっているのがそれです」

：：

アレというのが自分のことだと判り、レイオンは強張った。

そして、自分を見下ろす声の主に、さらに驚愕が張り付いた。

銀糸金糸に彩られた絢爛な装い、右の指にはまる指輪には国旗にも刻まれた天使の紋様が刻まれた赤い宝石が鎮座していた。

頭部に鎮座した王冠が、その者が王位に就く者であることを示していた。

そして、彼の者はレイオンが知る人物であった。

この闇の中でも見分けがつくほどに艶のある黒髪は短く切り揃えられ、瞳は紅蓮の炎が絶えることなく灯っていた。血色がよく、逞しい体に鋭角の鼻筋に優美な輪郭。齢六十を超えても尚衰えぬその美貌。その者こそギャランの第四十七代国王、フォルティス・エメロード・ギャランだった。

光届かぬ地下に国王。不釣り合いな組み合わせにレイオンの思考が追いつかない。

「これが禁忌とされた悪魔の器か。本当に見た目だけなら人間と変わらないな」

レイオンを見下ろしながら、フォルティスが言った。

「あくまで見た目だけですぜ。さっき軽く調べましがよく出来てる。人間と同じようで、まったく根本が異なっている」

「さすが、カン・グー最後の作品ということか」

その名を聞いた途端、デュトロの顔が歪んだ。

「国王陛下よぉ。俺があいつを嫌いなのは知っているだろ」

「だからどうした。お前が奴より有能だというのなら働きを以て示せばよい。つまらんことにいちいち反応するな」

ちっ、とデュトロが舌打ちした。

（どういうことだ……。フォルティス王がここにいるってことは、ここはギャラン国内なのか？　だったらなぜ僕は拘束されている

混乱しながらも、レイオンは二人の会話から現状を把握していく。カン・グー。その名は知っている。ギャランの有名な魔導科学者であり、彼の発明した魔導兵器の多くが実戦投入され戦果を上げている。

確か、数週間前に国家反逆罪で逮捕・処刑されたと聞いた。

（カン・グー博士は国家の最重要機密を他国に売ろうとして捕まったんだっけ……）

各紙では天才の暴走など、富に目がくらんだ売国奴などと罵られた記事が掲載されたのを思い出す。

（悪魔の器。それがカン・グー博士が外に持ち出そうとした機密……？）

「おい」

頭から奔る痛みに思考が中断した。

デュトロが再びレイオンの髪を掴み、無理矢理立たせたのだ。

ひょろりと細い体格から人一人持ち上げる力がどこから出てくるのだろうか。

「覚えてるか実験体三十七號？　ここはお前が生まれた場所だ」

「ぼ、僕は三十七號なんて名前じゃ……」

「うるせぇ。レイオンなんてのもロータスが便宜上つけた偽名だろうが。お前にはそもそも名前なんて不要なんだよ」

ぱっ、と地下に光が溢れ、闇が引き裂かれていく。
天井に取り付けられた照明が光り輝き地下を照らして行く。
暗順応した視界が一度真白に塗りつぶされ、徐々に色を取り戻して行く。
そして、そこに広がる光景に絶句した。

「――――――――――――ッ！！！」

壁一面に並ぶ人一人はいる円筒形のポッド。
中身は液体に満たされ、ポッドからは太い色とりどりのケーブルが伸びていた。
そして、ポッドの中に浮かぶモノがあった。

「見えるか？　こいつらは、お前の兄弟だ」

ソレは人だった。生まれたままの姿で、男性や女性の体がポッドの中に浮いていた。
口には呼吸器が付けられていた。ポッドを満たす液体が絶えず泡を出し続けていることから、中にいる人たちは生きているらしい。
もっとも、指一つ、眉ひとつ動かない状態を生きていると言えるのならばだが。
フォルティスがつまらなそうに円筒の森を眺めている一方で、レ

イオンは未だ混乱から立ち直れていなかった。
なぜなら、中にいる者たちは皆、

「僕と、同じ顔？」

レイオンと瓜二つだったのだから……。

魔法少女リリカルなのは　☆Ｔｈｅ　Ｒｉｄｅｒ☆　外伝　魔王誕生　中

「お前もこうやって生まれたんだ。理解できたろ？　お前がまったく昔のことを思い出せない理由が」

この世界で目覚めて半年近く。だというのに一向に自分の過去の記憶が戻らないことに疑問を感じていた。
だがそれも判った。
記憶が戻るわけがない。
失う以前に、レイオンという男に過去など無かったのだから。
あの戦場が目覚めて初めて見た光景。生まれ、培養され、ポッドの中から生まれ落ちて見た最初の景色があれだったのだ。
知りたいと望み続けた己が出生。だがソレは、知った瞬間に否定したくなるような忌まわしいものだったのだ。

「そんな……それなら、僕は……」

過去など望んだのが間違いだったのだ。

「お前はこの大戦の時代を終わらせるために造られた人造人間（ホムンクルス）だ。禁忌とされたその力で他国を蹂躙し、ギャランに世界の覇権と永遠の繁栄をもたらす決戦兵器なんだよ」

崩れ落ちるレイオンを嘲笑しながら、デュトロが聞きたくもない真実を語っていく。

「造られたお前達は総勢七十九体。それだけいて成功だと認められたのはお前だけで、あとはもうゴミなんだぜ、実験体三十七號」

デュトロが屈み、濁った緋色の瞳が正面から向けられる。
冷たかったはずの眼差しに、どす黒い熱がこもっていた。

「ところがだ。言い出しっぺであるカンが途中でビビってお前を外に逃がそうと、いや消そうとしやがった。お前らの製造法は当時あいつしか知らなかったからな。あいつ自身が死んだ今じゃもうこれ以上の生産は無理だ」

言葉を区切り、ちらりとデュトロの目がフォルティス王に向けられる。

「陛下がカンを殺しちまったからな」

「……裏切り者を放っておくことなどできん。それに、成功体を調べれば製造法は簡単に判ると言ったのはお前だぞデュトロ」

「いやいやその通り。まったくカンも甘い。てめーの才能に自惚れて、自分以外には器を造れるとは思ってなかったんだな」

くくく、とデュトロがくぐもった笑いを零す。

「さてと。何か聞きたいことやいい残したいことはあるか？　この後お前に待っているのはつら～いことだけだからな。心残りは失くしておけ」

ほれほれと質問を促すデュトロに、レイオンは未だ解けぬ混乱の中から問いを引きだした。

「悪魔の器って、なんなんですか……？」

フォルティス王の口からでた単語だ。彼らが造ろうとしていたモノであり、それがレイオンは成功体であり、ポッドで眠る兄弟たちは失敗作だという。

ならば知りたい。自分に過去が無いのならば、この命は何のために生み出されたのか。この時代に生を受けた意味を知りたかった。

「……」

レイオンの問いにデュトロの笑みが凍った。眉が吊りあがり、見るからに不快な表情を形成していく。

緋色の眼差しがフォルティス王へと向けられる。

答えを求められた王がゆっくりと言葉を紡ぐ。

「悪魔の器とは、我が国に古くから伝わる伝承の一つだ。

遥か昔の大古の時代。この世界を支配した魔の眷族達。人類を蹂躙し、全ての天地を我がものにした悪魔たちは、とある勇者によって滅ぼされた。僅かに生き残った者たちは次元の狭間へと逃げ込んだが、勇者の力によって次元の狭間は封印され、魔族たちは未来永劫、虚無の世界に閉じ込められることとなった」

それは、この世界でもっとも有名なお伽噺だ。
魔族を退けた勇者は新たなる人類の祖となり、今いる人類はみな勇者の子孫なのだと。
この世界の子供なみなそういう物語を聞かせられ、自らに勇者の血が入っていることを喜び誇りにしていくのだ。

「だが閉じ込められる直前、魔族たちはこの世界に戻るための手段を残した。魔族たちの執念によって造られたそれは勇者の力を以てしても完全に消し去ることができず、この世界には魔族が再びこの世界に来るための鍵が残された」

ポッドの中に浮かぶ人影を見つめながらフォルティス王の言葉が続く。

「鍵は勇者によって封印され、時の流れの中に沈んでいった」

紅蓮の瞳に哀愁の色。我が子を愛でるように手がポッドを撫でる。

「数年前、我が国内の遺跡で有るものが発見された。それが、かつて魔族たちがこの世界に残した鍵だった」

「だがそれは古過ぎて使い物にならなかった。なんせ勇者殿は千年以上前の話だ。魔族様の技術力がどんだけ高かろうが、時の風化には耐えられなかったんだな」

王の言葉を受け継ぎ、デュトロがしみじみと語った。
もっとも、彼の緋色の瞳にはなんの感動もなかった。

「だが、カン・グーからその鍵の残骸から新たな鍵を、器として造

り直した」

フォルティスの瞳がレイオンを捉えた。

「それが悪魔の器。それが、お前の正体だ」

頭を殴り飛ばされるような衝撃だった。

遥か昔にこの世界の天と大地を支配した闇の種族。それがこの世を去るときに残した一欠片の怨念。

それが自分。それがレイオンの求め続けた己が正体だった。

知りたくない真実だった。

「話はもう終わりだ。お前には使命を果たしてもらう。この乱世をギャランの勝利に導くというな」

冷たい言葉とともに、レイオンの四肢を光の縛鎖が拘束し、宙空に釣り上げる。

デュトロが研究所の奥へと引っ込んでいき、フォルティス王が告げた。

「厄介なことに、カン・グーはお前の器としての機能に封印を施した。それを今から解く」

デュトロが戻ってきた。彼は独りではなかった。

共にいる人間は、レイオンが知っている人物だった。

「チャレン！　エアロエイト！！」

驚愕に両目を見開き叫んだ。

現れたのは傷だらけの魔導服姿の二人だった。

鉄の首輪をつけられ、目と口を封じられていた。手足には魔力を封じるための枷がはめられていた。

視界を閉ざされ、口を聞くことすらできぬまま、二人はレイオンの目の前まで連れてこられた。

「どうしてここに……二人に何をするつもりなんですか！？」

「言っただろう。カンの野郎が施した封印を解くと。この二人には、そのための贄になってもらう」

贄という単語に二人の肩が震えた。

視覚が閉ざされている分、聴覚が過敏になっているのかもしれない。視界を閉ざされたことへの不安も重なり、二人の精神に過大な負担がかかっていく。

「やれ」

「はいよ」

王の命を受け、デュトロがチャレン・ジャーの眼帯を取り外しながら片手で端末を操作。

ピピピッ、という電子音が響く。

そして、

エアロエイトの首が吹っ飛んだ。

「えっ？」

間の抜けた少女の声を、血の吹き出る音が掻き消した。べしゃりと少女の顔が赤に染まる。視界も朱に染まる。

鮮血の噴水が水柱を立て、空間が赤の斑に染まっていく。
王の前に魔法壁が展開し飛び散る血飛沫を防ぐ。デュトロは防ぐことはせず、むしろ全身でソレを浴びた。緋色の瞳が歓喜に輝いていた。
ごとり、と落ちた銀髪の首が赤い斑点模様に染まる。

「あ……」

少女の目と、虚ろな死者の目が交錯。轟雷拳士の死に顔は、自身に何が起こったのか理解できていなかった。

「あああああああああああああああああああっ！！！！！！」

チャレン・ジャーの悲鳴が響きわたる。
狂乱する少女の体を拘束具が繋ぎとめていた。

「エイト、エアロエイト！！　いやあああああ！！！」

死んだ仲間に駈けよることもできず、少女の瞳から雫が溢れる。
髪を振り乱し、涙が飛沫となって待ちきらされる。

「貴方たちは……」

目の前の惨劇に、レイオンの肩が小刻みに揺れる。
憤怒の眼光が奔る。

「なんてことを！　彼が、エアロエイトが何をしたって言うんですか！？」

青年の獅子吼が響きわたる。黒い瞳には憤怒の劫火。先ほどまで

の混乱は遥か彼方へと吹っ飛び、ただ怒りの感情だけが湧きあがって来る。
　喚く青年へと、絶氷の言葉が突き刺さる。
「なにを、か。貴様の心の裡が見えたな」
　王は眼前の惨劇に無関心だった。波紋一つ浮かばぬ穏やかな水面の様に落ち着いていた。
「何かしていたのなら、この仕打ちが許されたというのだな」
「何を、言って……」
「ではこうしよう。この男はかつてギャランに滅ぼされた国の王族だった。唯一の生き残りだったこの男は私を暗殺するために身分を隠し軍に入りこんだ」
　薄ら笑いを浮かべながら、フォルティスがエアロエイトの経歴を述べていく。それが真か否か、確かめる術はない。真実を知る当の本人がすでにこの世にいないのだから。
「そんなことを言ってるんじゃない！　この国のために戦ってきた彼を、どうして殺したりなんか……。僕の封印に何の関係があるんですか！！」
「言ってしまっては意味がないだろ。お前が知れば封印が強固になる可能性があるからな」
　デュトロの嘲笑うような言葉。歪んだ光を帯びた瞳が褐色の少女に向かう。

ハッとして、レイオンは後に起こることを理解した。
レイオンの目が縋るようにフォルティス王に向けられる。
「本気ですか？　彼女も彼も一流の魔導師ですよ。いえ、それ以前にあなたの国の民だ。王である貴方が自ら民に犠牲を強いる気ですか！」
その言葉に、王の瞳が揺らぎ、口が開かれた。
「民のために、王がいるのではない」
それは死を決定した死神の言葉だった。
「王とは、国家の象徴！　王なくして国は成り立たぬ。そして民は、その国という機械を動かすための部品の集まりにすぎん！！」
両腕を広げ、フォルティスは断言した。
それは、王を絶対とする独裁者の言葉だった。
「ギャランがこの大戦を勝ち抜き支配者となるためならば、悪魔にすら魂を売ろう。それが王として、己が国を繁栄に導く我が使命だ！　そして民はその犠牲となるべきものだ！」
「そ、んな……」
「ましてやその者たちは軍属。軍人ならば国のために命を散らせるのも本望だろう。いや、その程度の覚悟もなく軍の門を叩く方がおかしいのだ」
信じられなかった。

自分たちが命を駆けて戦っているのは民を守るためではなく、この王の欲を満たすための者でしかなかったことに。そしてなによりも。

「貴方の娘も軍属なんですよ」

「だからどうした。あいつとて覚悟はしているはずだ。お前のように、いつまでも足掻き続ける愚物と同じにするな」

もう、何も言えなかった。

言ったところで王の意志は変わらず、自分たちの運命は変えられないのだ。

（こんな奴を守るために、僕たちは……！）

レイオンの心が黒く染まっていく。

それは絶望か、暴君への怒りか。どす黒い感情が渦巻いてくる。

――――――――願え。

声が、響く。

この場の誰のものでもない声に顔を上げる。

チャレン・ジャーは震えていて、デュトロとフォルティスの表情に変化はない。

（誰にも、聞えていない……？）

――――――――願え。

また聞えた。

間違いない。ここに、何かいる。

――――――――――隠すな。曝け出せ。お前の裡に眠る感情を。

声は暗く重く、精神を揺さぶる魔力を持っていた。

心が揺れる。淀んだ水面に波紋が広がり、やがて波紋は波になった。

「レイオン……」

耳朶に響く少女の声に顔を上げる。

顔面蒼白、恐怖から真っ青になった唇が震えて言葉を吐き出す。

「助け」

嘆願の言葉が途切れ、あとには血の雨が降る。

少女の首が宙を舞い、弧を描いて落下。絶望に染まった瞳から涙があふれた死に顔だった。

――――――――――……え。

「カンの封印を解くカギ、それは絶望や憤怒といった負の感情。ようは精神を不安定に、心を淀ませればいい。それにはお仲間の死ってのがお約束だろ？」

デュトロの嘲笑う声が響く。

だが、それはレイオンの耳には届いていなかった。

――――――――――……願え。誓いを立てろ。さすれば力を与えん。

虚空から響く声。すぐ隣にいて、耳元で囁かれているよう。

「……は」

口元が吊りあがる。黒い瞳が揺れる。より深い闇に染まっていく。
耳元で悪魔が笑う。

――――――お前は何をしたい？　こいつらをどうしてやりたい？　想像しろ。創造しろ。その全てが、お前の力になる。なぜなら……。

他の二人が何か話している。が、耳に入ってこない。
聞えるのは悪魔の囁きのみ。心の奥で、何かが溢れてくる。
レイオンという器が満たされていく。容量を超えて注がれていく。
満たされた。溢れた。器は壊れそうで壊れなかった。

――――――お前は、オレたちの子どもなのだから。

「は、ははははははははははははははははっ！！！」

笑う。
生きた肉塊（にんげん）がこちらを見ている。何が起こっているのか判らないといった表情。
可笑しい。身をよじらせて笑った。
己が抱える物の大きさに嗤う。世界の汚さに哂う。
笑う哂う嗤う笑う哂う嗤う笑う哂う嗤う笑う哂う嗤う笑う哂う嗤う笑う哂う嗤う笑う哂う嗤うわらわらわらわらわらわらわらわらわらわらららららららららららららららら……………………

――――――――――――――――――

「――――――――――――――――誓う（セット）！！！！」

力が解き放たれた。

封印を解かれた悪魔が顕現し、復活を祝して笑う。

闇の眷族の力が空間を塗りつぶし、世界を変える。

そして、破滅の光が全てを包み込んだ。

巨大な扉の向こうにはさらに巨大な空間が広がっていた。

壁一面に金色の輝きがあり、天井はドーム状。精巧な彫刻が施された柱が並ぶ。

絢爛な道をプラウディアは歩いていた。

左右から聞こえるのは万雷の拍手。華やかな装いに身を包んだ貴族たちが彼女の到来を歓迎していた。

もっとも、それが本心からの祝福かは定かではないが。

プラウディアの足が止まる。目の前には王の玉座。

黄金と白銀で装飾された王のみが腰を下ろすことが許された座。

ひじ掛けに手をそっと置き、プラウディアはようやく理解した。

本当に父はこの世にいないのだと。

訃報が届いたのは二週間前だった。フレーザー砦に使者がやって来て、王の死をプラウディアに伝えた。わざわざ前兵士に聞こえるような大声で。

敵国のテロによるものだと知らされた。悲しみも大きかったが、彼女を驚かせたのはその後だった。

王が死ねば国は新たな王をたてる。王族とはいえ女である彼女の王位継承の序列は低かった。だが、彼女より上の王族もまた例のテロで命を落としたというのだ。

よって、王位はプラウディアが継ぐこととなった。彼女は一度は断ったが、他に残った継承者が皆幼子だったことや王の実子が彼女

だけだったこともあり、結局は頷くことにした。
玉座に腰を下ろす。
そこから見える景色が、王の景色なのだと判った。
万雷の拍手が轟く。
こうして、ギャランの国に、新たな女王が誕生した。
そう。最後の女王が。

プラウディアが王位について五年がたった。
軍を退役し、政務に取り組むようになったがそれにもようやく慣れた。
エメロード全体を包む戦乱は未だ終息の気配を見せない。
執務室には書類の山がいくつも築かれ、軽く指で押しただけで紙の山は崩壊し床を白と黒のコントラストで埋め尽くすだろう。

「……コントゥアの侵攻がまた激しくなってきたわね」

軍事関係の書類に目を通しながらプラウディアは呟いた。

「ブーン、カプチーノ、ビッグサム。彼らはどうしてるのかしら」

戦場を共に駆けた戦友の名を連ね、女王の脳裏に軍人だった頃の思い出が浮かんでは消えて行く。
その中に、褐色の少女と銀髪の青年もいた。
女王の表情に影が落ちる。奇襲を受けた際にはぐれ、最後まで戻ってこなかった部下。
そして死体を見ることなく、戦死扱いとなった部下。
一人を除いて。

「陛下、よろしいですか？」

扉をノックする音ともにくぐもった声が聞こえた。

顔を上げ、暗い色を排除する。王の不安を、配下に見せることはできない。

「いいわ。入って」

一瞬の間をおいて扉が開く。新たな書類の山が見えて、それを持つ人間の顔が現れた。

黒髪に黒眼、同じく黒い背広に身を包んだ青年。

レイオン。あの戦場から唯一彼女の元を離れなかった部下。そして、あの奇襲で生き残った人間。

重傷を負っていて復帰は難しいとのことからプラウディアが秘書官として引きぬいてきたのだ。

そんな少年だったレイオンも、五年という月日によって青年へと成長していた。

「また、随分と大量に書類を持って来てくれたわね」

「文句なら僕に書類を渡す宰相たちに言ってください」

「言えないから、貴方に言っているのよ」

苦笑して、レイオンが書類を机に置いた。どうやら早急にサインがもらいたいようだ。

一枚目をめくり、目を通す。そして、ため息を漏らした。

「また全部決まっている。あとは私がサインするだけ。それだけで、また議会の希望が通る」

軍人として生活してきた彼女に完ぺきな政務ができるわけもなく、彼女の未熟さを理由に彼女が持つはずの権限はどんどん議会に取られていった。

これではただの傀儡だ。いや、事実そうなのだろう。

戦場で皆を導くことはできても、権謀術数が渦巻く政治の世界で導くことはできず、ただ誰かの言いなりになるだけだった。

こんなはずではなかった。

父の後を継ぎ、民を導く王になるはずが今では議会の言いなりだ。

「これでは、お父様に顔向けできないわ」

「フォルティス王に、ですか……」

「ん？　どうかした、怖い顔して」

「い、いえ、何でもありません」

口籠るレイオンにジトッとした視線を送りつつ、書類にサインする。

書類の山が瞬く間に消費され、最期の一枚を片づけるとプラウディアは席を立つ。

ふわりと髪が揺れ、細い腕がレイオンの首に回された。

鼻腔を突く甘い香りにレイオンの頭が一気に沸騰した。

「へ、へへへへへ陛下！？」

「ちょっと休憩。今は、ただのプラウディアよ」

唇が押しつけられる。

レイオンの腕が女王の腰に回される。
二つの影が一つに重なる。
戦場から国政へ、ともに歩んできた二人は、いつの間にか恋に落ちていた。
どちらが想いを伝えたのかなど覚えていない。本当に、気付いたらこのような関係になっていた。
そのことに不満など無い。プラウディアがレイオンを心から愛しており、レイオンもまたプラウディアを心底愛していた。
だが、

（僕は、いつまでこの人をだまし続けるのだろうか……）

プラウディアは知らない。彼女の父を殺したのは他ならぬレイオンなのだ。
彼が罪人として逮捕されなかったのはあの研究所が王族しか知らぬ場所だったからか、多くの重鎮が関わっていたからなのか。
真相は判らない。判っているのは、あの地下で友が二人死に、レイオンの裡に眠る力が目覚めたということだけ。

（そう言えば、僕の力をどこまでの人間が知っているのだろうか……）

浮かんだ疑問は、甘い香りの中に溶けて行った。

鉄格子が閉じる音が響く。
カビ臭い地下牢に、レイオンは転がっていた。
薄汚れた囚人服に身を包んでいた。手足には魔法封じの鉄枷がはまり鎖で繋がっていた。表情は虚ろで、精神的にも憔悴していた。

「まったく、馬鹿な男だ」

鉄格子の向こうで、番兵が怒りの言葉を吐き捨てた。

兜の奥から見える瞳は侮蔑の色に満ちていた。

「女王様に手を出すなんて、身の程知らずが」

吐いた唾が顔にかかる。拭う気にはなれなかった。

女王の懐妊。新たな命の誕生は本来祝福されるべきだ。それが将来の王となれば当然のこと。

だが相手がよくなかった。未来の王の父親は、身元すらはっきりしない次元漂流者――――未だにそういう扱いになっている――――だった。

重鎮たちの顔が烈火に燃え上がるのを思い出す。無駄に蓄えられた髭が震え、刻まれた皺が顔に大きな溝を造った様はなかなか笑えた。

だが、声を出して笑う気にはなれなかった。

「……悲しんでいたな。彼女」

あの時の女の横顔が脳裏に蘇る。

身ごもった彼女に浴びせられたのは祝福ではなく罵声。

その場で自分たちは引き離され、自分はこうして牢屋行きだ。

身分を超えた愛など、物語のようにうまく進むわけがなかった。

自分に待っているのは、きっと死刑。

「もしかしたら……」

ぽつりと呟く。

「これが、僕への罰なのか」

人を殺め、愛した女をだまし続けた。
命を奪った殺人鬼の命を以て罪を償う。まったく、正しい判断だ。
瞼が落ちる。
憔悴した心と体が睡眠を欲していた。
視界が闇に閉ざされる直前、悪魔の笑みを見た気がした。

「……！　……！！」

耳朶に響く喚き声に、目が覚めた。
どのくらい眠っていたのだろうか。何分？　何時間？　何日？
生憎と地下牢に時間を知らせる物はなくレイオンの疑問が解決することはない。

「……オン！　おい起きろ！」

声が大きくなった。ガンガンと鉄格子を叩く音が騒がしい。
眼差しに不快感を込めて、レイオンは鉄格子の向こうの者を見た。
そして、体が固まった。

「ああ！　やっと起きやがったなこの野郎！」

叱咤する声の中にも安堵の色があった。
一方、レイオンは声の正体に驚愕していた。
震える唇から、どうにか声を絞り出す。

「ブ、ブーンさん……？」

「ああそうだよ！　てめぇの戦友のブーン様だ。ちょっと待ってろ、今すぐそこから出してやるから」

かつて共に戦場を掛けた槍騎士はそう言って牢の錠前に鍵を突っ込んだ。

視線を下げると、番兵が気絶していた。

一分もかからず、派手な音を立てて錠前が落ちた。鉄格子が開いて行く。

「どうしてブーンさんがここに？　だってコントゥアの侵攻はまだ続いているはずで……」

牢から這い出しながら訊ねると、ブーンは待った、と手を上げた。

「そのことについては走りながら話す。今はお前をここから出すのが先決なんだ」

走りだすブーン。あっという間に開いた距離をレイオンは必死に詰める。

前線を離れ過ぎた。もともとあったブーンとの体力の差がさらについていた。

「お前の言ってたコントゥアの戦線だがな。正直、俺ら魔導師はもうお払い箱なのさ」

地上への階段を駆け上りながら、ブーンがレイオンの問いに答えた。

「議会のジジイどもは魔導師よりも科学の力を信用しているらしい。おかげで戦場は今や新型兵器の実験場さ」

ブーンの言葉にレイオンは記憶を探る。

確かに、一人の強力な魔導師を育てるよりも一台の強力な兵器を造った方が安上がりだという話が上がったことがある。

戦場での戦死者を減らすためだとか言っていたが、本音は予算を多く懐に入れるためだろうと感想を抱いたのを覚えている。

「そうなるとだな、砦に要るのは兵士じゃなくて兵器の整備士になるわけだ。部隊は解散され、ほとんどの奴らは他の戦場に飛ばされるか、魔導技師に鞍替えするらしい」

「それは……すみません」

「別にお前を攻めてるわけじゃねぇさ。姫っちだって今までずっと兵士だったんだ。あの口達者なジジイどもと渡り合えるとは思ってねぇよ」

慰めの言葉が、静かにレイオンの胸を抉る。ブーンの言葉は裏を返せば、最初からプラウディアには期待していなかったということだ。

ブーンの言葉が続く。

「それで、部隊解散の通知は俺たちのところにも来た。ビッグサムはモデュスに、カプチーノは中央で魔導技師として、俺はＢＵ連合との激戦区への異動だ。

別にそれに文句はねぇ。俺は戦えるし、カプチーノは頭がいいから采配は間違っちゃいねぇ。ビッグサムだって武勲が欲しいんだから異論はねぇだろうな。だが、とある一報が俺たちの足を止めた」

前方に光が見えた。地上へ辿りついた証拠だった。
最後の一段を踏んで地上へ。新鮮な空気を胸一杯に吸い込んだ。

「姫っちが、処刑される」

時が止まった気がした。
吸い込んだ空気が吐き出せない。そのくせ、心臓の鼓動だけは静かに加速していく。

「安心しろ。別にお前とできちまったって理由で殺されるんじゃねぇ。いや、どっちも死んじまうんだから同じか……。
姫っちの従兄弟がもうすぐ成人するのは知ってるか？　議会の連中はそいつを次期国王の座に就かせる気だ」

「王位なら、勝手に就かせればいい。プラウディアを殺す必要なんてないでしょう」

「ところが、ジジイどもはこのさい前王の直系を完全に断ちたいらしい。フォルティス前王に兄弟はいないから、姫っち一人で乗り換えは済むとのことだ。まったくもって、歴史と伝統を重視する頭でっかちどもの考えそうなことは解らん。
姫っちは戦場に戻され、新兵器の流れ弾に撃たれて死ぬ。そういう筋書きらしいぜくそったれ」

不快感を隠すことなく、ブーンが吐き捨てた。
一方、レイオンの顔には絶望の色。心臓の鼓動がどこまでも加速し、足が今にも王宮に向かいそうになる。
それをギリギリで押さえられるのは一片だけ残った理性だった。
行ってどうするのか。彼女を助けてどうする。彼女にこの国を捨

てさせ共に国外へ逃げる。それでいいのか。その後は？　この戦乱の時代、他国の王族を匿うようなお人好しの国などあるわけない。国内を逃げ回ってもダメだ。軍にいたからこそ分かることだ。議会――――特に宰相たち――――は猟犬のように自分たちを追いまわす。

どれだけ考えても、生き残る手段が見つからない。

「いったい、どうすれば……」

「んなもん決まってんだろうが！」

思考の迷路に入り込んだレイオンの背中をブーンが殴った。

「ゴッ！？」

「てめぇの悪いところだ。ぐだぐだ考えんのは後！　今は姫っちを救うことだけを考えな！」

「「その通り！」」

ブーンを賛同する二つの声。

どちらも、レイオンが聞き知った声だった。

「カプチーノさん、ビッグサム！」

金の髪をなびかせ、そして双剣を携えた二人の魔導師。

ブーンとレイオンを合わせ、第三魔導師部隊第二分隊の仲間がここに集った。

「でも、どうしてここに？　ブーンさんの話だとみんな別の場所に

……」

「悪いけど、私って仲間を見殺しに出来る程冷徹じゃないの」

「軍人としてあってはならないことだが、今回ばかりはワシも大人しくはしとれん！」

力強い返答だった。

迷いない瞳が輝いていた。

「質問だレイオン。お前、姫っちを助けたいか？　もしも助けたいってんなら、俺たちは全力でお前らをサポートする」

「僕は……」

瞳を閉じる。迷いはすでになく、鼓動が治まっていく。代わりに、全身が熱くなる。血が滾る。

答えはもう出ていた。

「僕は、プラウディアを助けたいです。だから、力を貸してください」

疲弊した体に活力が漲る。魔力が溢れる。青年の想いに魔力が応えようとしている。

「「「当然！！！」」」

心強い返答とともに、四人は走り出した。

外伝　魔王誕生　下

プラウディア救出を誓ってから六か月後。月下に四つの影が王都を疾走していた。

ブーンが三又槍を肩に担ぎ、カプチーノの手には魔法陣が浮かび臨戦態勢だった。ビッグサムは腰に差した双剣の柄頭に手をあてたまま走る。そしてレイオンの手には師から貰った魔杖が握られていた。

四人の恰好は普段と違っていた。夜闇に紛れるために漆黒のローブに全身を包んでいた。息がかかるほど近づかないとお互いの顔すら確認できなった。

プラウディア処刑は次期王の成人の儀が済むまでということが判り、この半年は勘を取り戻すことと手回しに時間をかけた。

そして二日後、新たな王が玉座に座る。救出のチャンスはおそらく今夜が最後。

この時を逃せば、厳重な警備の下で彼女は戦場に送られ事故に装い殺される。

自然と、レイオンの顔に焦りの色が浮かぶ。

「落ちつけよレイオン。この半年間、やれることはやってきたんだ」

「……判ってます」

魔杖を掴む手に力がこもる。

勘は取り戻した。戦闘になってもこのメンバーなら負けるつもりはない。

手回しも済んだ。彼女を救いだし、レイオンとともに外国で静かに暮らせる用意はできていた。

プラウディアはすでに子どもを産んでいた。こちらの手の者に迎

えに行かせた。自分と彼女の子に一目会いたかったが、覚悟が鈍りそうな気がしたからやめた。
王宮へと向かいながら情報を整理し現状把握、そして作戦を確認する。

「王宮に入ったら、ワシとブーン、そしてレイオンで陛下を迎えに行く。カプチーノはそこで別れて、指定の場所で子どもを受け取ってくれ。国境で陛下を連れた我らと合流だ」

「了解よ」

カプチーノが力強く頷く。ビッグサムの引き続き確認していく。

「今はほとんどが出払っているとはいえ、王宮内では親衛隊との戦闘が予想される。ブーン、レイオン、覚悟は良いな？」

「当然。王国最優の戦士どもで構成された親衛隊。どれほどの者かわくわくが止まらねぇ」

「アンタ、もしかしてそのためにこの作戦に参加したの？」

「レイオンは？」

ビッグサムの問いかけに、一呼吸置く。
心に迷いはなかった。力強く答える。

「大丈夫です。誰であろうと、負けるつもりはありません」

「よく言った。皆の者、ここが正念場だ。行くぞ！」

応っ！！
力強い答えとともに、四つの影が速度を上げた。

夜中、明かりが消えていても王宮の中は不思議と明るかった。
昼間の様な絢爛さはないが、暗視魔法を使わなくとも視界が確保できる程度の明るさに一物の違和感を抱いた。
予定通り、カプチーノとはここで別れ、レイオン、ブーン、ビッグサムの三人で王宮の中を進む。
事前に手に入れておいた内部の隠し通路の見取り図と内通者による警備の巡回の隙間を利用して確実にプラウディアのもとへと突き進んでいく。

どれほどの時間がたったか。三人は王宮の三階、広い廊下を走っていた。
この上、四階にプラウディアの私室がある。彼女がいるとしたらそこしかない。

「――――――――――！」

突如、前方から感じた気配に足が止まる。
足音が響き、その正体が現れた。

「お前たち。この先に何の用がある？」

「……師匠（せんせい）！」

現れたのは目を赤い仮面で隠した騎士、エヴォーラ・ロータスだった。

彼の背後には部下と思われる兵士たちが並んでいる。

「もう一度聞くぞ。何故、ここにいる」

「それはこっちの台詞だぜロータス隊長。今ごろ北の戦線で剣振ってるはずのアンタがどうしてここにいる？」

ブーンの言うとおりだった。彼らが得た情報によればエヴォーラもまたコントゥアとの戦線を離れ北の戦場に飛ばされたはず。レイオンはその情報に、かつての師と敵対することが無いのだと安堵していた。

「私がここにいるのはそれが任務だからだ。情報と戦場は常に変化し続けるものだ」

「……なるほど。一部、偽の情報を掴まされたということか」

ビッグサムが忌々しげに呟く。一部、といったのはここまでの経路になんの問題も起こらなかったからだろう。

九割の真実の中に一割の偽りがあっても気付かないものだ。

「ワシらは貴方の手の平で踊っていたということか。ワシらをここまでおびき寄せたのは、あくまで国に仇なす逆賊として消すためといったところか？」

「それもある。だが、」

仮面の奥の瞳が妖しく瞬き、レイオンを射抜いた。
背中を氷塊が滑り落ちて行く。

「ブーン、ビッグサム。ここは大人しく引け。そして二度と姿を見せるな。そうすれば我らも手は出さん。だがレイオン」

絶対零度の殺気が迸った。エヴォーラの腰から刀剣型魔道具が引き抜かれた。

「お前はここで捕える。そういう命令だ」

刃が閃き、次の瞬間には廊下が崩壊した。
轟音とともに粉塵の瀑布が上がり、瓦礫の滝とともにレイオン達は王宮の中庭まで落とされた。
なんとか着地する。半年間の訓練が役に立った。
敵も着地し、背後の兵士たちが一斉に抜刀した。同時に何人かからは魔力を感じる。

「この魔力、なるほどこいつらが親衛隊か」

被った瓦礫を払いながらブーンが唸るように言った。瞳が獰猛に輝き、眼前の得物に舌なめずりしていた。
槍を構えてブーンが言う。

「レイオン。ここは俺とビッグサムが引き受けた。お前は先に、姫っちのところに行け！！」

槍騎士と双剣士が突撃していく。

一瞬迷ったが、二人の眼差しに後押しされ、レイオンは決意した。
魔杖を地面に突き立て陣術魔法を発動。妨害しようと襲ってきた槍兵をビッグサムが薙ぎ払った。

「必ず迎えに来ます！　それまでどうか……！」

生きていてくれ。そう願い、足元の大地から土柱を伸ばす。
柱は塔になりレイオンを元の三階まで押し上げた。
地上から激しい剣劇の音が聞こえる。
それを無視して、レイオンは走り出した。

「……行ったか。で？　ブーン、この状況を切り抜ける方法があるか？」

青年が走り去るのを確認して、ビッグサムは背中を合わせた騎士に問いかけた。
すでに二人は親衛隊に包囲されていた。
ぐるりと円形をつくる兵士たちを一人一人見て行き、ため息をついた。

「装備は一級品。魔力量も上々。対してこちらは一世代前の魔道具に老兵と戦闘狂。状況はすこぶる悪い」

「ははは！　何言ってんだビッグサム、こんな状況だからこそ楽しいんじゃねぇか！　前も後ろも敵だらけ、しかも全員一流！　これで燃えなきゃ男が廃るぜ！」

「燃え過ぎて灰になるのは勘弁だな……」

この状況を恐れるどころかむしろ楽しむその気概にビッグサムは頭を抱えそうになる。
だが、だからこそ自分もこうして立っていられるのだろうとも思った。

「お前たち、本気で抵抗する気か？」

思考を遮る様に、エヴォーラの鋭い声が飛んだ。
ブーンの獣の眼光が奔る。

「そっちこそ、この国が姫っちに何をしようとしているのか知ってこんなことしてんのか？」

「王は国のためにという。だが国自体が王を軽んじては国そのものが成り立たんでしょう」

「我らの任務はプラウディア女王陛下の警護とレイオンの確保だ。私は親衛隊隊長として、任務を遂行するまでだ」

「……見損なったぜ隊長。アンタはただ考えることを棄てたバカだ。そんなやつの命令を今まで聞いてきたのかと思うと虫唾が走らぁっ！！」

ブーンが怒声とともに駆けだした。
鋼の刃が激しい開戦のベルを鳴らす。

彼女は、大地を眺めていた。

黒真珠の様な長い黒髪。肌は雪のように白く、唇は真紅。紅蓮の瞳が外界を捕え、絢爛な黄金のドレスに包まれていた。長く会っていなかったが、その美貌は一切曇っていなかった。

だが、その横顔には憂いがあった。

プラウディアとの距離は手を伸ばせば届くほどに近い。なのに触れられない。

触れた瞬間に砕け散ってしまいそうで。それほどまでに、今の彼女は危うかった。

彼女の考えていることが不吉な事に思えた。思わず、止めろと呟いていてしまった。

真紅の唇が割れて、鳥が歌う様な声が流れた。

「悲しいわね……ここまでしても、人々は戦いを止めない。どうして世界を独り占めしないと気が済まないのかしら？」

「常に欲し続けるのは人間の本質さ。鳥が空を飛ぶように、魚が川を泳ぐように、人は欲し続けるものだ」

まくしたてるように返した。それでしか、彼女を留めることができない気がしたから。

くすり、と彼女の口が緩む。華の様な笑顔が向けられた。

「ねぇ。私、違う時代に生まれたかった。戦争なんてない平和な世の中。

女王としての地位も、この魔法の力もいらない。ただ、あなたと穏やかに暮らしたいわ」

「僕もだよ、プラウディア」

泣きそうな声だった。

彼女がしようとしていることが判ってしまったから。彼女はこの世界から去る。去って、別の時代、別の世界、別の体にその魂を移そうとしている。

その魔法理論、仕組み、全ての情報が、隣の悪魔が笑って教えてくれる。

「ありがとう。レイオン」

彼女の頬に涙が流れた。レイオンも、目頭が熱くなるのを感じた。

「もしできることなら、別の世界で、別の時代で、また貴方と会いたいわ。

平和な世界で、魔法なんてない世界でずっと……」

彼女の手から赤い光が漏れる。

血のように赤く、炎のように熱い。

空が緋色に染まるほどの光が世界を包む。

「愛しているわ、レイオン。永遠に」

満面の笑みを浮かべて、緋色の夜に女王が消えた。

崩れ落ちる彼女の体を抱きしめる。

冷たく、命の鼓動は感じられない。

美麗な笑みを張り付けたまま、彼女の魂が抜けて行った。

見上げると赤い宝石が中空を漂っていた。

妖しい輝きを放ちながら、それはレイオンを見下ろしていた。

空間が歪む。彼女の魂を抱いたソレが、次元の穴へと去っていく。

「待って……」

待ってくれない。手を伸ばす。届かない。

「プラウディアーーーーーーーーーーッ！！！！」

男の絶叫が響く。

そして、彼女は去っていった。

残された彼は、彼女の抜けがらを強く抱きしめることしかできなかった。

失意の体を引きずって、レイオンは中庭まで戻ってきた。

目の前に広がる光景に足を止めた。

整えられた芝生は掘り起こされ、草木は乱されていた。緑の庭が、赤黒く染め上げられていた。

大地に横たわる兵士の骸。

切り刻まれ、穿たれた傷口からは血が流れ、それが渇いて地面を汚していた。

骸の中に、見知った顔を見た。

「ブーンさん、ビッグサム……」

ブーンは右腕を失っていた。胸に大穴を穿たれていた。中間から折れた槍を抱えて、膝をついて俯いた姿勢で死んでいた。

狂戦士の顔には、満足そうな笑みがあった。

ビッグサムは首と胴が別れていた。腹は真一文字に裂かれ、桃色の腸が飛び出していた。大の字に倒れた胴のすぐそばに頭部が転がっていた。右眼を失ったその死に顔は苦痛に歪んでいた。

「プラウディア陛下はどうした？」

冷たい声に顔を上げる。
二振りの剣を掴んで、エヴォーラがこちらを見ていた。
全身に傷を刻み、血の跡を残しながらも仮面の騎士だけが生きていた。
その双眸から闘志は未だ消えず、レイオンを最後の獲物として捉えていた。

「彼女は、往ってしまいました……」

「そうか」

悲哀のかけらも見せず、エヴォーラは短く言った。

「ならば、残された任務はお前を捕えるだけか」

仮面の騎士が構える。魔法陣が足元に展開した。
大地が盛り上がり、土砂をかき集めて固まっていく。

「お前には何度も見せたな。私の魔法、〈飛燕剣舞〉は」

土砂が、六つの腕の形を取った。五指から手首までしかないが、その腕には魔力刃が握られていた。
これがエヴォーラの使うゴーレム創成魔法を応用した特異剣術。
土から形成された腕と自前の両腕、合計八つの腕から繰り出される斬撃の嵐は鋼すら砕く削岩機だ。
六つの腕が高速機動を開始する。刃の嵐が迫る。

「殺しはしない。お前は大事な兵器だからな」

その言葉に、レイオンの瞳に光が戻る。
思考が驚愕に戸惑う。
「師匠は、知ってたんですか？　僕の出生を……」
「最初からじゃない。お前をフレーザーに連れて行ったあとに聞かされた」
「じゃあ、チャレンやエアロエイトを殺した人も知ってるんですね」
「ああ」
心臓が跳ねる。体熱い。冷めきった心が燃えて行く。
「だったら、何故従っているんですか！　この国は僕らをただの道具にしか見ていない。チャレンも、エアロエイトも僕も、プラウディアさえ!!　そんな国に何故従うんですか師匠!?」
刃の嵐に向かって吠える。風の向こうで、エヴォーラの声が帰って来た。
「まだ気付かないのか。お前たちに奇襲をしかけたのは私だ。チャレン・ジャーやエアロエイトが死ぬのは聞かされていた」
衝撃に、脳が一瞬思考を停止した。
「そ、んな……」
「国が軍人を道具の様に使うと言ったな。ソレは何もおかしなことではない。軍人とは、国を外からの脅威を防ぎ、内側の混乱を鎮め

る兵器に過ぎない。それはこの世界共通のことだ。
この国がおかしいのではない。そんな風に思えてしまう、お前がおかしいんだ」

決定的な言葉だった。レイオンの心に黒いモノが宿っていく。
悪魔が、笑った。

「だったら……」

斬撃に弾かれた小石が頬をかすめる。皮膚が裂け、赤い筋が流れた。
レイオンの瞳が、闇に染まった。

「だったらこんな世界、僕は要らない！！」

レイオンの体から魔力が迸る。裡に住む悪魔が喝采を上げていた。
右手を上げる。
ここは闇の楽園。死者は生者に、悪は善に、破滅は幸福に。我が想いこそが絶対の掟。ここは、あってはならぬ夢の世界。

「誓う（セット）、魔導改変“貴様を殺す世界（アンラ・マンユ）”！！！！！」

世界を魔の眷族が支配する。
天空が変わる。赤い血の色に染まる。
レイオンを想いが世界を塗り潰して行く。

「貴様、止めろ！」

エヴォーラの顔に初めて焦りが生まれた。
六つの腕が斬撃の嵐とともに駆け抜けてくる。

「消えろ」

言葉通り、土塊の腕が消えた。

跡形もなく、まるで最初からそこになかったかのように。

「ははははははは……」

笑う哂う嗤う。

猛る魔力を放出し、大地に影が落ちる。

それは巨大な鉄槌だった。冷たい鈍色の光沢を持った巨鎚が空に鎮座していた。

その巨大さに、エヴォーラが喚く。

「なんだそれは。私はそんなもの教えていない。召喚魔法などお前に！」

「召喚？　違う。これは魔力変換だ。僕の魔力が、そのまま鋼に変わったんだ」

「何を、言っている……！？」

魔力を別のエネルギー体に、例えば熱や電気に換えることは可能だ。その資質を最初から有した魔導師も存在する。

だが鋼はエネルギー体ではない。物質だ。魔力ですべての物質構成することはできない。

生物はみな魔力に近い精神エネルギーを持つというが、鋼は生きてすらいないのだ。

だが、ここではそれが可能になる。それがレイオンが持つ力の正体。

己が夢想を世界に理に刻み込む対界魔法。

「それはお前たちの世界の話だ。ここは僕の世界。この空の下、お前たちの常識は通用しない。

これがお前たちの欲しがっていた悪魔の力だ。世界の理を書きかえる魔導改変（アンラ・マンユ）だ！！」

鉄槌が振り下ろされる。

沈む大地が、仮面の騎士の断末魔を呑み込んだ。

暗い地下に、それはあった。

棺に入れられ、厳重な封印がいくつも施されていた。

そんなもの、彼にはなんの妨げにならなかった。

封印を、紙を千切るように解いていき、棺を開けた。

「――――――――――これか」

干からびたミイラが入っていた。

瞳を失くした眼窩には闇が広がっていた。

「これが、僕の親か」

王は言っていた。魔族はこの世界に戻るための鍵を残したと。それは勇者にも破壊できなかったと。

このミイラが鍵なのだ。

この、魔族と勇者の間に生まれた子供こそが鍵なのだ。

そして自分がそれから造られたということは。

「まったく、くだらない」

閃光。そして炎上。

枯れたミイラが燃えて行く。燃えて燃えて、灰になっていった。

黒衣を翻し、男は去っていった。

「さよなら、お母さん」

そこは、ギャランとリベルタビラとの国境だった。

赤土の荒野の中に、一人の女が倒れていた。

金の髪は砂塵に汚れてその輝きを失っていた。

女の歩いてきた後には血の痕が続く。彼女の背には矢が生えていた。腹部は短剣で刺された傷があった。

女の腕は交叉し、胸に赤子を抱いていた。

生まれて一、二ヶ月しか経っていない。まだ自分の足で歩くことすらできぬ赤ん坊だ。

それは大切な戦友の子どもだった。自らを投げ打ってでも、この子だけは救いたかった。

女の頭上を影が包む。

眼を開けると、男が見下ろしていた。

全身を漆黒に包んだ男。彼女は、そっと微笑んだ。

「遅いわよ。ばか……」

「……ゴメン」

「ふふ、来たから許すわ」

ふと疑問に思う。予定よりも人数が少ない。ここで六人になるはずなのに、半分しかいない。

聞かずとも理解した。最高の結果ではないが、最悪だけは避けられた気がした。

抱いた赤子を男に託す。

「ちゃんと抱いていなさい。決して離しちゃだめよ」

それが、女の最期の言葉だった。

後悔など一切見せず、幸せそうな顔で女は旅立っていった。

その骸を、男が静かに見下ろしていた。

決して離すな。そう言って最後の仲間は死んでいった。

腕に感じる重みは生まれたばかりの命の重み。

何と軽く、そしてなによりも重い。

「ゴメン、カプチーノ。僕はその言葉を守れない」

赤ん坊の顔を除く。事態を呑み込めていない無垢な顔。

ふと、赤ん坊が微笑んだ。優しい笑顔で男の指を握った。

熱いものが込み上げてくる。

「……ゴメン」

謝罪する。この赤子にも、きっとヤツらは入って来る。
だから遠ざけなければいけない。魔法という存在から。闇の深淵から。
赤子を掲げる。
脳内で魔法陣を構築し、展開。次元の穴をこじ開ける。

「こんな親でゴメン。ずっと一緒にいてやれなくて、ゴメン」

次元の穴の向こうに、こことは違う星が見えた。
青い星。優しく、希望に満ちた星に見えた。
赤子が重力を失い穴に吸い込まれていく。
小さな手が伸ばされた。赤子の目には涙があった。

「――――――――」

男はその手を握らない。この手に、それを掴む資格など無い。
赤子が完全に吸い込まれ、穴が閉じた。
残されたのは男一人。

「君を一人にはしないよプラウディア」

外套が翻る。闇の奥に輝く眼差しは金剛の強さ。

「君が人をやめるというのなら僕もやめよう。
君が永遠を生きるというのなら僕も生きよう。
君がどこまでいようと僕は見つけ出す」

そして、そして。

「その苦しみから、救いだして見せる」

男は歩き出す。

二度と振り返ることなく。

これがレイオン・スターライナーの始まり。

これが幸福など訪れぬ闇の人生の始まり。

これが、魔王誕生の物語。

外伝　魔王誕生　下（後書き）

これにて外伝も終了。
次回は久しぶりにあんにゃろめが登場。
ああ、三ヶ月ぶりか……。

第５４話　未来へのプロローグ

春になった。
冷たい冬の風は去り、穏やかで暖かい風が吹く。
木の枝からは若い芽が顔を出し、近いうちに桃色の花弁を咲かせるだろう。
そんな、出会いと別れの季節がやってきた。

青い空の下を少女が歩く。歩く度に紫がかった長い髪が揺れる。
この街で有名な私立小学校の制服を着て、胸に赤いペンダント、そして手には学生鞄と花束。
少女が向かう先には大きな病院があった。
白い建物の最上部にある赤十字が目立つ。
長い髪の少女が病院の門をくぐる。
薬の様な特有のにおいが鼻腔をくすぐった。
受付に行き見舞いに来た旨を伝えると見舞客であることを示すワッペンを渡された。
胸にワッペンを付けて、少女は病院の中を歩く。
目的の病室を見つけて足を止める。

「……」

一瞬の躊躇、思い直して扉を軽くノックし耳を澄ます。
返事は、ない。
ドアノブに手を伸ばし、引く。ドアがスライドし、少女を病室に迎え入れた。

病室は個室だった。
飾りっ気のない部屋にある大きなベッドに目が行く。

鞄を床に置き、花を花瓶に生けてからベッドに近づく。
白いベッドには、青年が眠っていた。
呼吸器をつけられ、体から何本もの管が伸びて傍らの機械につながっていた。
心拍を示す輝点はゆっくりとしたリズムで刻まれており、青年が今でも生きていることを示していた。
けれど、青年は動かない。閉じた瞳は未だ開かれず、弱い呼吸を繰り返すだけだ。
少女の手が青年の手を握る。
僅かな体温しか感じられない。いつか感じたあの暖かみにはほど遠い。

「怜治さん……」

青年の名を呼ぶ。目覚めない。
少女の瞳が揺れる。

「怜治さん……！」

さっきより強く呼んだ。それでも、青年は目覚めない。
少女の瞳から熱い滴が零れた。

「あ、あああああ……」

両の手で握りしめて、少女の体が崩れる。
慟哭が病室を満たして行く。
ペンダントが寂しげにゆれる。
あの冬の日、命を賭けて青年は少女を救った。
そして、青年は未だ目覚めない。

季節は、春になった。

魔法少女リリカルなのは　☆Ｔｈｅ　Ｒｉｄｅｒ☆　ＡＸＥＬ　ＥＰＩＬＯＧＵＥ　未来へのプロローグ

青い空に光が弾けた。
桜色の光が円形に広がり轟音と熱を撒き散らした。
その様子を見ていた管理局員は、天空に咲く光の華に簡単の息を漏らした。

「おいおいおいこれ演習だろ？　誰だよ、対竜戦闘を想定してるやつは。そんな話聞いてないぞ」

走ってきた上官に敬礼し問いに答える。

「あの子ですよ。リンディ艦長の推薦で入ってきたあの……」

「高町研修生か？　何をあんなに必死になってんだあいつは」

「見た感じ、もやもやをふっ切るためって感じですかね。なんか悩みでもあるんじゃないですか？」

「あいつがか？　ロストロギアが関わる事件を二つも解決した天才少女だぞ」

「天才ゆえの悩みってやつじゃないですか？」

確かに、彼女の悩みや迷いを彼らは理解できない。
少女は唇を噛みしめ引き金を引く。
空にまた、光の華が咲いた。

夜の街を翔る閃光があった。
稲妻のように荒々しく、雷鳴のように猛々しく、閃光が走る。
そんな閃光を捕えようと七つの影が飛び出した。
獣の仮面を被った、のっぺりとした影たち。手には各々異なる武器を掴み先行に襲いかかる。

「――――――――」

息を呑んだのは、誰だったのか。
閃光が止まり雷光を吐き出した。
雷撃に槍に貫かれた影が落ちて行く。
生き残りを黄金の刃が切り裂いた。
雷光から一つの小さな影が飛び出した。襲撃者たちが追う。
影たちは虚ろな瞳で、標的の顔を見た。
幼い貌を飾る金の髪、紅い瞳。

「――――サンダーフォール！！」

そこまで判った次の瞬間には、雷撃の雨に撃たれていた。
蒸気を上げて落ちて行く影を少女は紅い瞳で静観していた。

『訓練終了だ。フェイト、もう上がっていいぞ』

天空から声が響いた。落ち着きのある少年の声だった。
空間が歪み崩壊していく。夜の闇が消え去り、白い壁が四方を取り囲んだ。
訓練用の戦闘バーチャル映像が消えたのだ。
フェイトは戦斧を下ろし、深呼吸。
自分の魔力の残量、体力の余裕などを考え、言った。

「クロノ、もう一度お願い」

天井からため息が聞こえてきた。
スピーカーの向こうで、義兄がどんな顔をしているのか想像に難くない。

『何回やれば気が済むんだ？　訓練のしすぎで倒れるなんて笑えないぞ』

「大丈夫だよ。もう一回、もう一回だけお願い！」

『その台詞、さっきも聞いたぞ。もう三度目だ』

「う……」

『フェイト。これ以上は本当に認められない。僕には君の上官として、そして家族として君の体調を管理する義務がある』

「でも……ッ！」

『終了だ。もうシステムは起動させない。暴れたいのならその中で好きに暴れればいい』

冷たい言葉を最後に、天井からの声は途絶えた。
重い沈黙が降りる。
白い空間の中で、金の少女はただ立ちつくした。

ふぅ、と息を吐いてクロノは椅子に身を沈めた。
目の前の机にコーヒーの入ったカップが置かれた。
視線を横に向ける。

「ありがと、エイミィ」

「どういたしまして」

自分の分のカップを持ったエイミィが笑っていた。
だが、その笑顔はすぐに曇った。

「フェイトちゃんの様子、どう？」

「相変わらずだ。まだ振り切ることができないらしい」

義妹の様子を思い出す。端的に言うのなら、彼女は悔いていて、そして焦っていた。
あの冬の事件から、フェイトは自分だけが何もできなかったと自分自身を責めていた。

「それを言えばなのはも同じ状態だったな。演習場にスターライトをブチ込んで大穴を開けたと管理人が涙ながらに教えてくれた」

「はやてちゃんやヴォルケンリッターのみんなも似たような様子だ

って。レティ提督が困った顔してた」

「そうか……」

背もたれに体重をかける。ギシリとイスが悲鳴を上げた。

あの冬の事件。Ｓ・Ｓ事件と名付けられた、灰被り（サンドリオン）の騎士団（シュバリエス）によるロストロギア事件。

以前から警戒されていた過激派魔導師集団の事件に多くの被害が予想されたが、管理局の迅速な対応によりほぼ被害ゼロで解決した、と表向きはそうなっている。

故に世間は知らない。あの事件解決の最大の功労者が、二ヶ月たった今も目を覚ましていないという事実に。

そしてそれを知る者たちは、みな己が無力さに怒り、悔いていた。

もっと自分に力があれば、あの時青年を一人で行かせなければ、彼女たちの胸の裡に後悔の念が渦巻いている。

よって彼女たちは自分を追いつめる。戒めのために。二度とこのような事を起こさせないために。

身を削って力をつけようとしている。

クロノからすれば、それは褒められた行為ではない。

自らの無力さを嘆き鍛錬することは良い。だがその過程に彼女たちは自分を省みていない。

そんな方法で手に入れた力など、自分を危機に陥れるもろ刃の剣でしかないことを彼女たちは判っていない。

（……シグナム達は問題ないだろう。守護騎士は僕よりも長く戦いに身を置いた歴戦の猛者。いずれ自らその過ちに気付く）

瞳を閉じて思考の海へ。若き執務官の頭の中を思考の波が駆け巡る。

（問題はなのはたちだ。彼女たちを止めるには言葉だけではだめだ。そう、もっと強烈な何かがいるだろう……）

少女たちの今後に心配しながら、一方で楽しみでもある。

この事件をきっかけに彼女たちはさらなる高みへと行くだろう。

人を守り、人を助ける魔導師の高みへ。

今は少し迷走しているだけ。その道をしっかりと示してやれば、彼女たちはどこまでも飛んで行ける。

だが、その原因を許す気は毛頭ない。

「あのバカ。人の妹をこんなに心配させて、起きたら思いっきり怒鳴りつけてやる」

――――――――だから、早く起きろ。

少年は思考の海を後にして、目の前の仕事に手を伸ばす。

「……というわけでして、管理局はあなたを迎える準備があります」

ガラスの向こうからの言葉を聞いて、ノマド・エルカミーノは眉を顰めた。

彼は灰被り（サンドリオン）の騎士団（シュバリエス）の一人として海鳴を襲撃し、現地の魔導師によって逮捕された犯罪者だ。

彼は囚人服に袖を通し、手足を魔法封じの枷をはめられた状態で椅子に座っていた。

今彼は面会室にいる。ガラスの向こうにいる女が面会者だ。

女の名はリンディ・ハラオウン。紺色の管理局の制服に身を包み、淡い緑の長い髪を一つに束ねていた。

いつも子どもたちに向けられる優しげな双眸は也を潜め、真剣みを帯びていた。

「犯罪者である私を管理局員に？　本気か？」

「もちろん。しばらくは監視と魔力制限をさせていただきますが本気です」

一瞬の沈黙。両者の視線が交錯する。

リンディの目に嘘は見られない。エルカミーノは呆れた様子で言った。

「もしや管理局はいつもいつもこんなことをしているのか？　いくら人手不足だからといって犯罪者を雇用するというのは正義を掲げる組織としてどうかと思うぞ」

「当然、こちらも精神鑑定や経歴などで精査して上での勧誘です。残念ながらあなたの同胞であるパサートさんにはこのお話は上がっておりません」

「だろうな。あの男を欲しがる組織など黒社会のものか馬鹿だけだ。だが私も決してまともな精神だとは思えんが？　なにせ、自分の体を改造するような人間だ」

自嘲の笑みをこぼす。

宿願を果たすために人の道から外れた魔導師が精神鑑定で良い結果が出るなど思えなかった。

俯く魔導師に、リンディが凛とした声で言い放った。

「ですが今のあなたはそれを悔いている。もっと他に方法があった

はずだと思っている。だからこそ、私はあなたを誘っているのです。やり直しの機会を、贖罪の機会を与えようと思ったのです」

エルカミーノが目を見開く。

悔いている？　自分が？　今までの行いを後悔し、やり直しを望んでいるというのだろうか。

思考の海へ沈む。じっくりと考えてから浮上、答えを出した。

「悪いが、断る。

私は後悔などしていない。そして私に罪を償う方法があるというのならそれは表舞台へ立つことではない。この暗い独房でみじめな最期を迎えることだ」

「あなたの魔法技術と知識で、あなたが傷つけた以上の数の人を救えたとしてもですか？」

「情に訴えかけようとしても無駄だリンディ・ハラオウン。もうすでに私は答えを出している。

私も魔法は私だけのために。私の願いは――――――――」

ただ、あの子を喜ばせることだけだったのだから……。

「そうですか……。残念ですが、あなたの意志ならば仕方ありませんね」

本当に残念そうに、リンディが席を立つ。

背を向けて面会室を去ろうとする女に魔導師は最後の質問を投げた。

「私を捕まえたあの青年は、どうしている？」

去ろうとした足が止まる。

憂いを帯びた声で、背を向けたまま答えた。

「まだ、眠っています」

「……そうか」

それを最後に、魔導師は口を閉ざした。

足を踏み出しリンディは部屋を出た。

「……ふぅ」

「あら、お疲れの様ねリンディ」

「レティ……」

面会室を出たリンディを待っていたのは同僚にして友人のレティ・ロウランだった。

本局運用部に勤務しており、人員や艦船の配置などを取り仕切っており、リンディとはともにお茶をする仲でもある。

二人は廊下を歩きながら会話を続ける。

「聞いたわよ。クロノ君に昇進話が来たそうじゃない。今回の事件の指揮官としての功績を認められて」

「本人は乗り気じゃないみたい。あの事件で僕は何もできなかった

って」

「相変わらず固いのね～」

「真面目なのよ」

簡単な近況を話しつつ二人は並んで歩く。

ふいに、レティが真剣な表情で訊ねた。

「そのようすだとダメだった？」

レティの言葉にリンディは頷く。残念そうに肩を落とすレティ。

「闇の書事件に続き、高ランク魔導師を大量ゲットするチャンスだったけどさすがにそうはうまくいかないか……」

「別に候補に挙がったのは彼だけではないでしょう？　まだ諦めるのは早いのではなくて？」

「それなんだけどさ、どうやら聖王教会が出っ張って来たのよ」

「聖王教会が？」

「そう。ほらベルカ系の魔導師がいたじゃない。あちらさんが彼女の後見人に名乗りを上げてるのよ」

「あらあら」

「人手不足はどこも同じってことね」

はぁ、とため息を漏らすレティ。
一方でリンディは思索を巡らせていた。
勧誘対象に挙がっていたのは三人。一人に断られ、もう一人は教会が持っていった。となると残るは一人。頭の中で彼のデータを思い出す。

「そういえば、」

隣からの声に、思索を中断。視線を隣へと向けた。

「あの子、まだ眠ってるの？」

「……ええ。あれから二ヶ月。意識を取り戻す様子はないわ」

「生きてはいるのよね？」

もちろん、とリンディは顎を引いて肯定。レティの言葉を待つ。

「早く目覚めるといいわね。あれほどの逸材、逃す手はないわ」

「ちょっとレティ……！」

「何よ。人事に関わる者として将来有望な若者の心配するのは普通のことよ」

眼鏡の奥を光らせながらレティが続ける。

「春のＰ．Ｔ事件、冬の闇の書事件と闇のかけら事件、そし今回のＳ．Ｓ事件。
全て第９７管理外世界『地球』で起こった事件であり、なのはち

ゃんみたいな幼い子供の影に隠れてたけど、その後ろにはずっと彼がいたわ。

Sランク魔導師のプレシア・テスタロッサ、英雄ギル・グレアム、そして灰被り（サンドリオン）の騎士団（シュバリエス）の魔導師七人のほとんどを彼が倒している」

レティが言ったことはほとんど公式発表されていない記録だ。

プレシアは虚数空間に呑みこまれ死亡。グレアムは謎の襲撃者との戦闘による傷を理由に退職。灰被りの騎士団は駐在していた局員の奮闘により壊滅ということになっている。

どの事件も、彼の功績は隠されてきた。表に出せないようなことも同時にやって来たせいなのだが、それでは命がけで戦ってきた彼があまりにも不憫だ。

「仕方ないわ。本局での破壊行為や特異技能（ストレンジスキル）なんて公にしたら大騒ぎになるわ」

「なのはちゃんに感謝ね。マスコミの興味は九歳の天才魔導師に向いているから、おかげで彼は顔だけは堂々と出せるわ」

「現地協力者の欄に小さくだけどね」

右手の親指と人差し指で小さな丸をつくり、リンディは苦笑した。

今回の事件で自分に出来たのはそれぐらいのこと。青年の力を隠し、少しでも彼を普通の魔導師に見せることだけだった。

それほどに、彼の力は異常だったのだ。

もしも世間に知られれば、彼はどのような扱いを受けるだろうか。

それが決して幸せな形でないことだけは判るからこそのこの対応だ。

永遠に隠せることではないだろうが、わざわざこちらからバラす必要もないだろう。

「さて、私は最後の一人とお話に行くわ」
「了解。いい返事が来ることを期待してるわ」
そう言って二人は別れる。
剣林弾雨の戦場とは違う、権謀術数の戦場へと踏み出した。

ばさり、と新聞が少女の手から放り出された。
リノリウムの床に落ちる直前、新聞は別の手に拾われた。
桃色の髪の麗人が新聞を捨てた赤毛の少女に非難の視線を向けた。
「ヴィータ。新聞を放るな、まだ私が読んでいない」
「うっせー、そんなモン読む価値ねぇよ」

赤い武装隊甲冑のアンダースーツを着たヴィータが不機嫌そうに言った。
なんなんだとシグナムが新聞に目を通す。
文字を追って行くに連れてシグナムの美麗な眉が歪み、その美貌に剣呑の色が浮かんで来る。
一体何事かと気になったシャマルが後ろから覗きこみ見出しを読み上げる。
「『駐在管理局員の奮闘！　武装魔導師集団“灰被り(サンドリオン)の騎士団(シュバリエス)”を壊滅！』……か」
見出しの内容に伏せていたザフィーラが耳を震わせた。
顔を上げるとシグナムが文面を見せてきた。

一面を飾る魔導師たちの写真。その中には彼らヴォルケンリッターの姿もあった。

「良く撮れているな」

「世事はいいザフィーラ。問題は、ヴィータが不機嫌になった理由はその内容だ」

「確かに。私たちが頑張ったって褒めてくれてるけど……」

「あいつのことが何ひとつ書かれちゃいねぇ。一緒に戦ったことにはなってるけど脇役扱いだ」

痛い沈黙が降りる。
重い空気の中でザフィーラが口を開いた。

「仕方ないだろう。あいつは目立つわけにはいかん。あの力を公にすることはできんからな」

「だったら！　……あたしらをこんな大げさに取り上げなくていいのに……！！」

ヴィータが固く拳を握る。奥歯を噛みしめ、瞳には後悔の念が渦巻いていた。

「あたしら、なにもできなかった……なのに！」

「確かに、な……。灰被りの騎士団（サンドリオン シュバリエス）の人員は七人。うち二人が死亡、四人が投獄され、一人は未だ逃走中だ。うち五人を倒し、すずか殿を助け出したのはあいつだった」

「あたしらが、もっとしっかりしてれば……！」

拳がさらに強く閉まる。爪が皮膚を裂いて出血する直前にその手を別の手が握った。

握った手の先には、彼女の主がいた。

「あかんよヴィータ。それ以上強くにぎったらけがするで」

「はやて……」

それは車いすの少女、八神はやてだった。彼女の後ろにはリインフォースがいた。

夜天の主は小さな騎士の手をそっと包み込む。

優しいぬくもりに包まれて、固く閉じた拳が解かれた。

「……うん、けがはないようやね」

よかったよかったと笑顔で頷く少女にシグナムが訊ねた。

「主はやて、杖の調整は？」

「終わったで。……リインフォース」

「はい。我が主」

リインフォースが剣十字の杖をはやてに渡す。

「これがシュベルトクロイツバージョン7や」

外見に変化はないが、はやての魔力に耐えられるよう調整されている。
杖をしっかりと握ってはやては守護騎士達を見渡す。
「みんな、あの時のことで悔やむのはようわかる。でもいつまでもひきずってたらダメや」
少女の言葉に、歴戦の騎士達が静かに耳を傾ける。
「今はわたしたちのできることをしよ。頑張って、怜治さんに無茶させないくらいに強くなろ」
「はやてちゃんは……怜治君が目覚めると思ってるんですか？」
「なに言うてんのやシャマル。わたしは九年間ずっと闘病生活やったんやで？　まだたった二ヶ月、諦めるには早すぎる」
「それも……そうですね。申し訳ありません主はやて」
「あやまらんでええて。ほな行こうか。みんな、この子の試験運転につきあってな」
『御意に』
祝福の風に押されて夜天の主が進む。その右を烈火の将が、さらに右を風の癒し手が歩く。左側を紅の鉄騎が、その左を蒼き狼が歩く。
五人の騎士を引きつれるその姿は巨鳥の翼のようだった。

世界の書籍や膨大なデータが保管される超巨大データベース、無限書庫。
縦に長く伸びた円筒形の書庫内には気の遠くなるほどの奥の本棚が並んでいる。
縦横無尽に通路が走り、その上を司書たちが本をかかえて走っている。
長年放置されてきた書庫の有用性が先の闇の書事件で実証されたため、現在無限書庫は司書たち総動員で整理にあたっている。
それでもデータ請求は来るため、探査系の魔法に秀でた者たちはそちらの対応にあたっていた。
スクライア一族の少年、ユーノ・スクライアもその一人だ。
こちらの忙しさなど知ったことかと資料請求してきた黒髪の少年に辟易しながらも彼は文書探索をする。
そんなユーノの視界にちらちらと入って来る銀髪翠眼の少女。無重力空間を優雅に漂いながら本を読んでいる。

「……ねぇ」

「なんだ」

「暇なら手伝ってほしんだけど」

「断る」

ユーノの懇願をばっさりと斬り捨て、少女は再び読書に没頭していく。
自分が忙しい時に近くで暇を持て余されるのはかなりイラッとくるもので、普段温厚なユーノの額にも青筋が浮かんでいた。

「あのさぁ」

怒気をはらんだ声が吐き出される。

「みんな忙しいんだから手伝う気ないなら出てってくれないかな？」

一瞬の沈黙、綺麗な翠眼が少年を見据えた。

「貴様らの都合など知ったことか。我がここで本を読むのは正当な権利だ。恨むならあの執務官を恨め」

「ぐっ……」

本当に恨んでやろうかと一瞬思うが自分に呪力などないことを思い出してやめた。

銀髪の少女――――闇統べる王、ディアーチェには確かにこの場で自由に過ごす権利がある。

それは、二か月前の事件に遡る。あの青年が一人敵の本拠地へ向かい、他の者たちが行くことをディアーチェが妨害していた。

そこへクロノがある条件を出して彼女を援軍に向かわせた。

その権利こそがこの無限書庫での自由である。

彼女は好きな時にここにきて、好きなだけデータや書籍を閲覧することができる。

もともとデータ収集蓄積装置であった闇の書の核であったディアーチェだ。彼女の読書好きは相当なものだった。あの事件以降、ほぼ毎日ここにきては一日中本を読んでいる。

彼女の説得を諦めたところへ、手伝いに来ていたアルフが怒った顔で飛んできた、

「な～にが正当な権利だよ！　アンタは怜治を助けられなかったん

だがあんな条件無しだよ無し！」

「失礼な犬だな。我があそこで駆けつけなければ怜治もすずかもこの世界にはおらんぞ」

「ふん！　アタシらが乗り込んだ時あんたはぶっ倒れてたじゃないか。……怜治なんか、血まみれで……すずかがずっと……」

アルフの声が震えて行く。瞳が潤み、しまいには持っていた資料を放り投げて顔を両手で覆ってしまった。放物線を描いて舞う資料を見てユーノが悲鳴を上げた。

「喚くな。どちらにしろ奴が今土の下にいない以上我は約束を守った」

アルフを宥めていたユーノが顔を向けた。

中世的な顔の表面には疑問符が浮かんでいた。

「そういえば、君って意外と律儀だよね」

「……なに？」

「いやだって、そのクロノとの約束だって別に反故にしても君にはどうでもよかったんだろ？　ここに来るのに別に特別なものは要らない。それこそ君ならセキュリティを力づくで突破してここに入ることだって可能なんだ。なのに、君はわざわざ怜治さんを助けるって約束を果たしてここにいる」

ユーノの言葉が続く。

「そうだ。思い返して見れば君は一度も約束を反故にしなかった。地球で大人しくしていろと言われたな素直に従っていた。当然あの場で暴れてもどうにかならないと判ってことだろうけど、君は今まで君なりの流儀を通してきた。これはぼくの推察に過ぎないけど、もしかして君は――――――――」

「下らん」

ディアーチェの手から本が放られユーノの鼻っ柱に命中。

悲鳴を上げる少年を無視して少女は無限書庫から立ち去っていく。

「大人しく聞いてやっておればなにを……。我が、繋がりを求めているとでも言うのか――――――――」

彼女はずっと一人だった。マテリアルの少女たちがいたがアレは自分から派生した、謂わば分身の様なものだ。仲間とか同士などではない。だから、ディアーチェはずっと一人だった。

一人じゃなくなるにはどうするか。誰かと繋がるにはどうすればいいのか。

信頼を得ればいい。ならそれを得るにはどうすればいいだろうか。約束を守る。それが簡単な方法ではなかろうか。

下らない、と闇統べる王は吐き捨てた。そんなモノは、永い旅の中で捨てたはずだ。

胸にもやをかかえたまま少女は飛んだ。

そこは闇だった。

光のない無明の世界。だというのに視界は鮮明だった。

手を見る。視線は腕をなぞりそのまま足元へ。両足ちゃんとそろ

っている。
自分は、まだ生きているのだろうか。
足元がいやにしっかりしていている。いつものことのはずなのに妙な違和感。
足音が聞こえた。

『なんであんたはそう無茶をするのかねー』

相手は見えず、いたずらをした子どもを叱るような声だけが聞こえた。
聞き慣れたその声に怜治はその正体を見た。だが、本体を見つけることはできない。
見つけようと周囲を見渡しているとまたも声が響く。

『まだ私に会うには七十年ほど早いね。まだあんたはこっちに来るべきじゃない』

突然、闇の世界に一筋の光が走った。
光は彼を照らし、光に向かって走れと白い道を作る。

『行って来なさい。あんたを待っている人がいる。
あんたが助けた命だ。最後まで面倒みてやんな』

それを最後に声は途絶えた。
役目を終えたとばかりに気配が消えて行く。
光の先を見る。暖かく、希望に満ちた光が視界を真白に染める。

――――――――さん……怜治さん……。

光の向こうから声が聞こえた。

声に導かれて足が進む。

「――――――――」

一瞬、足を止めて振り返る。後方に広がるのは無明の闇。
その先にいるであろうあの人に向かって手を上げる。

「じゃあなばあさん。あんたの言うとおりだ。俺は、まだこっちにはこれない。
できることなら、ずっと俺を……俺たちを見守っててくれ」

それじゃ、と最後の別れの言葉を闇に投げて、青年は光へと飛び込んだ。

沈没した意識が浮上する。
口元が湿っている。マスクか何かつけているのだろうか。
ピッ、ピッ、ピッ、と規則的な電子音が耳朶を叩く。
首から下に違和感。なんか、変に重い。
そっと瞼を押し上げ眼を開く。
視界に広がるのは白い蛍光灯を吊るした天井。
そして、

「……あ」

色とりどりの瞳を持った顔の群れだった。
怜治が目覚めたということに気付くのに一秒の時を要した。
不安や悲哀の仮面が少女たちから剥がれ落ちてかわりに驚愕が広がる。ここまでは皆同じ反応。

だがそこから先は人それぞれだった。
顔を真っ赤にする者、瞳に涙をためて喜びを表現する者、安堵の息を漏らす者。
そして、
『こ――――――――――――の、バカァァアア――――――――ッ！！！』
ドッカーン！　という効果音が相応しいほどの怒号が轟いた。
同時に腹部にのしかかる少女三人分の体重。
「――――ゴッッッフゥ……ッ！！？」
「バカーッ！　怜治のバカバカ、無茶して心配させてもーバカァ！！」
「おいこらてめーはやてに心配かけやがってただじゃおかねぇぞ！！」
「よかった、本当によかった――――――――！！」
「お、お前ら、重いからさっさとどけ……いややっぱどくな。後ろに控えてるポニテ騎士とか犬男がすっげぇ怖い顔してる――――！」
重い空気はどこへやら。一瞬にして喧騒に包まれた病室。
鳴りやまぬ歓声に病院スタッフが怒鳴りこみに来るまであと三十秒。

病院の中庭に二人の男がいた。
全身を漆黒に包んだ魔導師と禿頭の老人がいた。
老人は頭上から響いてくる歓声に眉を潜め、魔導師は闇に隠れた口元を笑みで歪めた。

「ようやく目を覚ましたようだね」

「ああ。礼を言うよ。あれでも、儂には大事な家族だ」

「相変わらず素直じゃないね怜一郎。ま、君が孫にデレデレの好々爺というのも似合わないがね」

ふん、と怜一郎は鼻を鳴らした。
それは苛立ちではなく、彼が喜びや興奮を抑えるときに良くする癖だと魔導師は知っていた。

「礼を言いたいのはこちらも同じだよ。彼のおかげで、僕の目的は果たされた。彼と彼女のおかげで、プラウディアはようやく時の牢獄から解放された」

新たな生を求めて永遠に彷徨う女王の魂。それを砕き、彼女を真の意味で解放することがレイオンの目的であった。
器は残っているがその中身はすでに空。緋色の夜の女王はもうこの世から完全に消え去った。

「だから僕はもう逝こうと思う。頼むよ怜一郎」

そして、彼がこの世に留まる理由も消え去った。
怜一郎は静かに問うた。

「……本当にいいのか、レイオン」

構わない、と〈暗黒賢人〉――――レイオン・スターライナーは頷いた。

怜一郎は悲痛な面持ちで懐から石製ナイフを取り出した。

石が輝きその姿を炎の剣に変えた。

〈魔殺獄剣ヴォーパルソード〉。彼だけがその異能によって扱うことのできる、あらゆる魔導を焼き尽くす最凶の刃。

青い炎を纏う断罪の刃を前にレイオンは微笑を零した。

彼は今まで背負ってきた全ての煩悶を脱ぎ捨てたのだ。

すでにこの世に未練など無く、訪れぬ終焉に自ら飛び込むことを決意していた。

両手を広げ、みずから死神の刃を求めてくる。

「僕が消えれば魔族(やつら)ももうこっちにはこれない。僕から君の孫の代まで受け継がれてきた魔の呪いはこれで潰える」

「儂らの力も消えるということか？」

「いや、残念ながら君や彼はすでに力を完全に発現し、彼らと契約してしまった。だから君たちの力は残る。この繋がりが完全に消えるのはおそらく、彼の孫あたりだろう」

「……そうか」

レイオンの言葉の全てを魔法が使えない怜一郎は理解できない。

だが、この身に宿る力を未来の若者が受け継ぐことが無いと判り安堵した。

この力は強力だが反動が大きい。事実、力を使い過ぎた若者が二ヶ月も昏睡状態だったのだ。

こんなものは、早々に消えてなくなった方がいい。
魔殺の炎剣を構えた。蒼炎が激しく燃え上がる。

「さらばだ。僕の子どもたち。君たちの幸福を地獄で祈っているとしよう」

「さようならだ、爺さん。あんたのくれた命、たっぷりと使わせてもらう」

一閃。
蒼炎がレイオンを薙ぎ、その身を劫火で包み込む。
それはまさに罪人を喰らう裁きの炎。

「あ、あ……我が子孫に…幸……あれ」

閃光が放たれ、レイオンの体が爆散した。
青い火の子をばら撒きながら魔導師はその命を失った。
剣はすでに石に戻り、老人はその場を去る。
公にされることなく、最悪の魔導師の一人がこの世から消え去った。
誰もいなくなった中庭に空から歓喜の声が落ちた。

アースラの自室でクロノはモニタに書かれた文字に目を奪われていた。
心臓の鼓動が加速するのを感じていると、目尻に涙を浮かべたエイミィが部屋に飛び込んできた。素早くモニタを閉じた。

「クロノ君！　いまなのはちゃんから連絡があって、怜治君が！！」

「ああ。こっちにも今フェイトから連絡が来た」
出来得る限り平静を装った声で返す。
エイミィは感動の薄さに呆れたがそれがいつもの彼らしかったので特に気にならなかった。
「私、艦長に知らせてくる！」
「ああ、頼む」
入ってきたと同じくらいの勢いで部屋を飛び出して行くエイミィ。その足音が完全に聞こえなくなるのを待って再度モニタを立ち上げた。
モニタに表示されているのは怜治の診断結果だ。主に、魔法方面に関しての。
白い枠線で書かれた人型の右上には現在の彼の魔力量が記載されていた。
その数値は、ゼロだった。
別に不思議ではない。彼は一人で灰被り（サンドリオン）の騎士団（シュバリエス）との激戦を繰り広げたのだ。魔力を使い果たしても不思議ではない。むしろそれでまだ魔力に余裕があったら彼は化け物だと思う。
だが、問題はその下だ。
人型の胸のあたりには魔力の精製器官であるリンカーコアが描かれていた。
そして、それが活動を停止しているという旨が記載されていた。
「リンカーコアの、消滅ではなく停止だと？　聞いたことが無い」
だが現実はその前例のない事態を示していた。

モニタを閉じ、クロノは席を立つ。
常に冷静を保とうとするはずの執務官の手が震え、顔は悲哀の感情が溢れていた。

「僕は今、自分が言った言葉を悔いている。怜治、君は目覚めるべきではなかったのかもしれない」

松田怜治の現在の魔力はゼロ。
そして、魔力をつくるためのリンカーコアが活動していない。つまり魔力が回復しない。
クロノの口から、結論が零れた。

「怜治は、もう魔導師じゃない」

非情な現実が、少年の胸を貫いた。

第５４話　未来へのプロローグ（後書き）

次はキャラ設定

キャラ設定＋オマケ話

すずか√編

初めて最初から最後までオリジナルの長編。一応十三話＋一話の計十四話で終えられたので話しのボリューム的には作者は満足。

この章の主役は怜治とすずか、そんで時々ディアーチェなので他のキャラの扱いが少々不遇かも。

話の展開としては王道っぽく。

敵登場→狙いがヒロイン→奮闘→敵がヒロイン攫う→主人公助ける

の一本道。

下手に複雑なストーリーは時間食うため止めました。

オリキャラの能力や容姿に関してはみんな童話からとってみるとか拘ってみました。

でも一人称が被るキャラが多かったからそこがちょっと後悔。

話の内容としてはＦａｔｅ／Ｓｔａｙ　ＮｉｇｈｔのＨｅａｖｅｎｓＦｅｅｌがモチーフ。いやどこがって言われると説明しづらいんですが……

プラウディア・エメロード・ギャラン　（女）

イメージカラー：赤

魔力光　：緋色

デバイス　：六対十二枚の赤い翼　正式名称『オリュンポス』

魔力ランク　：ＳＳ

魔法体系　：エメロード式魔法戦術

容姿　：ストーリー上はそのまますずか

過去シーンに関しては長い黒髪　白い肌　紅眼

黄金のドレス

二つ名　：緋色の夜の女王

願い　　：平和な世界で一人の少女として生きること
かつて滅んだ次元世界、『エメロード』にあった大国ギャランの最後の女王。
すずか√のボスキャラ。
本来は遠距離からの砲撃と手にした武器での近接戦闘の使い分けが可能だが、すずかの体では近接戦闘は無理と判断し本編では砲撃一辺倒。あれでもＭＡＸではないという。
復活に協力した者の願いを叶える、という灰被りの騎士団の勝手な予想の下に人が集うが彼女にはそんな気はさらさらなく、彼らがやってきたことは無駄骨ともいえる。
名前の由来は三菱自動車のセダン型自動車『プラウディア』と４ドアハードトップ型乗用車『エメロード』、そして『ギャラン』より。
　モチーフは『白雪姫』。

灰被りの騎士団（サンドリオン　シュバリエス）
　もとは古代の魔法文明の研究と復活を目的とした私設研究チーム。資料や研究材料を得るために盗掘まがいのこともしていたために管理局からも睨まれていた。女王の魂（クイーンズソウル）を発見してからはプラウディアの復活が第一目標に。
荒事が絶えないので構成員は自然と戦闘可能な魔導師に限定されていった。特に定員は決っておらず、常に七人というわけではない。
作者は魔法体系に関してミッド・ベルカ以外にもいろいろあるはずだと考えているので独特の戦法をとるキャラを多くしました。あと、リリカルなのはの登場人物は年齢不詳が多いので年齢は特に決めていません。
便宜上席順を設けているが特に意味はなく、入ってきた順番やちょうど空席だった番号を振り当てられる。
プラウディア復活を目的として以降、噂を聞きつけ願いを持った魔導師たちが集まるようになったためどんどん武装集団化。元の目的

である研究はあまり行われていない。
怜治をはじめとする地球在住魔導師たちによって事実上の壊滅。
せっかく出したんだからこれっきりにせず何人かはいつか再登場させたいものです。
　ちなみにサンドリオンとはシンデレラのフランス語。騎士も同じく。白雪姫を守るのがシンデレラの騎士とはこれいかに。
　七人設定なのは白雪姫を匿った七人の小人より。

テルスター・マスタング　（男）
イメージカラー：グレー
魔力光　：灰色
デバイス　：毒剣クリス・ナーガ　紙獣の書（正確にはデバイスではない）
魔力ランク　：Ａ＋
魔法体系　：ミッドチルダ式魔法
容姿　：灰色背広　紺色ネクタイ　飴色の革靴　黒縁眼鏡
　若い男。
　二つ名　：怪鳥
　願い　：復活したプラウディアが今の世界を見てどう思うかを見ること
灰被りの騎士団のリーダー。リーダー＝最強ではないのであしからず。
元は教授職でインテリ。戦闘に関しては決して強くはなく、戦えるのは毒剣という反則武器のおかげ。
正確はひん曲がっており裡では人を見下す傾向あり。希望としては復活したプラウディアが平穏な世界の住人に嫉妬し暴れ回るのを期待したが彼女にそんな気はさらさらないので完全に無駄骨。
一応敵軍のリーダーだけど極悪巨悪というより小悪党風。
作者としてもそんなに思い入れが無く、イメージＣＶ無し、容姿モデル特に無しといろいろ酷い。

クロノ、ユーノ、怜治を追いつめるもディアーチェによって殺される。
名前の由来はアメリカのフォード・モーターの『テルスター』、『フォード・マスタング』より。
モチーフはグリム童話より『死神の名付け親』

使い魔ファルコン　（男）
イメージカラー：緑
魔力光　：緑
デバイス　：なし
魔力ランク　：Ａ相当
容姿　：瞳は暗視スコープ　背中に緑の翼
マスタングの使い魔。
炎が吐けるのは変換資質ではなく使い魔の素体が火炎能力を持つ魔鳥だったため。
犬猫の使い魔はいる癖にどうして鳥がいないんだ、と思って生まれたキャラ。でもできてすぐに「ああ、みんな羽なんかなくても飛べるからか」と気付いたけどもったいないのでそのまま登場。
暗視スコープは鳥眼解消のため。実際に効果あるの？　とか言わないで。
ザフィーラ・アルフに敗北後、マスタングに魔力供給を断たれて消滅。
名前の由来は隼を意味する『ファルコン』とフォード・モーターの『フォード・ファルコン』より。

インシグニア・モヴァノ　（女）
イメージカラー：銀
魔力光　：赤
デバイス　：破魔の赤槍ガジャルグ
魔力ランク　：ＡＡＡ

魔法体系　：古代ベルカ式魔法
容姿　：銀のドレス甲冑　栗色の長髪の女騎士
二つ名　：銀の鬼将
願い　：次元世界ベルカの復活
オリジナル魔法ばっかにするわけにいかないので出しましたベルカ騎士。
隠し設定としては元教会騎士。武器は色々悩んだけど変に穿った武器にはせずシンプルに槍に決定。そして騎士団の紅一点。
性格はシグナムと似通ったところあり。
ガジャルグはケルト神話に出てくるディルムッド・オディナの武器ゲイ・ジャルグの別称。防壁破壊の性能はそこから。Ｆａｔｅ／Ｚｅｒｏが楽しすぎるぜ！
魔法の名前は虎とか獅子とかネコ科から拝借。
月村邸でヴィータを倒すもエメロード城にて怜治に敗北。その後管理局に逮捕された。
モデルは戦場のヴァルキュリアよりアリシア・メルキオット。
名前の由来はドイツの自動車メーカー　オペルの中型乗用車『インシグニア』と大型乗用車『モヴァノ』より。
イメージＣＶは井上麻里奈
モチーフはディズニー版『塔の上のラプンツェル』

クンタッシ・ランボルギーニ　（男）
イメージカラー：銅
魔力光　：エメラルドグリーン
デバイス　：剛槍ファイティング・ブル（突撃槍型）　待機形態は腕輪
魔力ランク　：Ｓ
魔法体系　：巨人族式魔法槍術
容姿　：二ｍ超の巨人　淡い緑髪に赤銅色の肌　白い衣服で黒薔薇の刺繍

二つ名　　：剛強無双
願い　　：不治の病にかかった友人を救う
コンセプトはフェイトがどうしても勝てない敵。ということでフェイトが負けたことのあるなのは、クロノ、シグナムの特徴を取ってハイパワー、経験豊富、近距離型という設定の下生まれました。
騎士団最強は多分この人
願いの欄にある友人は実はＦｏｒｃｅ編への伏線。でも現時点でＦｏｒｃｅやるかは未定なので多分無駄に終わる。
巨人族ということで魔法体系もベルカというより巨人族独自のモノ。
キャラ名とデバイス名および形状は「血塗られた罪深き神殺の剱」さんからのアイデア。せっかく考えてくれたのですからまたいつか登場させてあげたいな。
今後こういうアイデアは頂けたら積極的に出そうかなと思ってます。
これからオリキャラの登場数も増えますし。
名前は車か船とか飛行機といった乗り物関連にして下さると出しやすいです。設定もあまり細かく指定されますと出しづらいかも。
フェイトを圧倒し、ディアーチェと激戦を繰り広げるがエメロード城にて怜治によって倒された。その後管理局により逮捕。
モデルは武装錬金よりヴィクター・パワード。
名前の由来はイタリアの自動車メーカー『ランボルギーニ』とそこのスーパーカー『カウンタック』より（クンタッシはカウンタックのイタリア読み）。
イメージＣＶは小山力也
モチーフは『ジャックと豆の木』より雲の上の巨人。

トゥアレグ・パサート　（男）
イメージカラー：赤茶
魔力光　　：紅
デバイス　　：なし

魔力ランク　：ＡＡＡ＋
魔法体系　：我流獣人式魔法体術
容姿　：深紅の布で顔を隠した戦士　赤黒いジャケット　金の瞳
二つ名　：月落とし
願い　：獣人が支配する世界の創造
その他　：変換資質『炎熱』

連載開始直後にツッコミがあったのですが、この小説のジャンルはファンタジー。その理由はコイツを出したかったから。

獣人とか魚人だらけの世界があってもいいと思う。

騎士団の中でもコイツは完全な武闘派。人間を見下し、獣人こそ素晴らしいという思想。なんというブーメラン。

戦闘に関してはデバイスを使わずに魔法が使え、魔法を織り交ぜた体術が得意。

粗暴というか荒っぽい性格のため技名を暴走族チックに。

ちなみに技名の読みは〈炬陽鎚（コヨーテ）〉・〈雀刈（ジャッカル）〉・〈斧炎？（フェンリル）髏〉。

シグナム・リインフォースに勝つもエメロード城で怜治に敗北。逮捕され収監。

モデルはＯＮＥＰＩＥＣＥよりＣＰ９のジャブラ。

名前の由来はドイツの自動車メーカー　フォルクスワーゲンの四輪駆動ＳＵＶ『トゥアレグ』と同じくセダン『パサート』より。

イメージＣＶは高塚正也

モチーフは『赤ずきん』より狼男。

パオ・キャブスター　（男）
イメージカラー：ダークブラウン
魔力光　：土色
デバイス　：魔球銃エウロパ・イオ・カリスト・ガニメデ
魔力ランク　：ＡＡ
魔法体系　：ミッドチルダ式魔法

容姿　　：無精髭　枯れた色の中折れ帽　土色のジャケットと脚絆
二つ名　　：魔銃士
願い　　：家族を殺された瞬間への時間移動（敵討ちは自身の手で行いたいため正確な願いはこれ）

コンセプトは西部劇に出てくるガンマン。武器も最初は二丁拳銃の予定でしたがなのは相手に二丁拳銃じゃ無理じゃね？　ＳｔＳとか見ても。と思い四つの球体を操る射撃型に変更。自分は動かず敵を撃つのが戦闘スタイル。

最初はもっとひょうきんで面白いオッサンだったけど背景考えると明るいのはどうかと思い無口キャラに。トゥアレグと同じく武闘派。

デバイス名のネタ元は木星のガリレオ衛星から。

ちなみに、彼の家族を襲ったのは金眼の女で、番号が刻まれた首輪をしていたとか。

なのはに敗北し灰被りの騎士団を離脱し逃走。現在行方不明。

モデルはアイシールド２１よりキッド（武者小路紫苑）

名前の由来は日産自動車の小型自動車『パオ』と小型トラック・バン『キャブスター』

イメージＣＶは内田夕夜

モチーフは『ブレーメンの音楽隊』

ノマド・エルカミーノ　（男）
イメージカラー：深緑
魔力光　　：ヴィリディアン
デバイス　　：ゴーレム製造用魔短剣（複数所持）　正式名称無し
魔力ランク　　：ＡＡＡ
魔法体系　　：ミッドチルダ式ベースの我流ゴーレム創成魔法
容姿　　：深緑のインバネスコート　赤髪の男

二つ名　　：四元の翁
願い　　：新しい人造生命の開発（正確にはエメロードの知識を得ること）
手っ取り早く数が欲しいと思い、ちょうどＶｉｖｉｄにゴーレム創成がでてきたのでこりゃラッキーと頂戴。
そのさいコロナが「これがわたしのゴーレム創成！」と言っていたので、よしじゃあ違うゴーレム創成があってもいいんだなと曲解してあんな能力に。
本来はインテリ系なので魔力は上でもキャブスターよりは弱い。
本当の肉体はすでになく、ゴーレム創成技術で作った体で行動。
実年齢は現Ｒｉｄｅｒ内では最高。
怜治に二度にわたって敗北。逮捕され収監された。
モデルはるろうに剣心より四乃森蒼紫。
名前の由来はＧＭのブランド　シボレーのステーションワゴン『ノマド』とピックアップトラックの『エルカミーノ』より。
イメージＣＶは安原義人さん
モチーフは『アラビアンナイト』

アウレリア・テージス（男）
イメージカラー：黒
魔力光　　：紫
デバイス　　：なし
魔力ランク　　：Ａ
魔法体系　　：鉱石魔法
容姿　　：全身を漆黒のローブ　無地の白い仮面
二つ名　　：魔石導師
願い　　：鉱石魔法の再興
ストーリー展開上、すずかたちが攫われる必要がありました。単純に家に押し入って攫うわけにもいかず、色々考えた結果ペンダントによる強制転移。その際思い付いたのが鉱石魔法。

灰被りの騎士団の魔法は独特な物が多い、ということなのでちょうど良かったです。
生まれは代々鉱石魔法を扱う民族の長子。普通の魔法の資質もあったのに一族の誇りに拘り他の魔法に手を出すことはなかった。
鉱石魔法に関しては本編で大体説明していますのでそちらを。
テージスはより鉱石の力をうまく引き出すために肉体改造しています（筋トレという意味ではなく）。
怪人風にと全身黒ずくめにしたら後に出てくるあんちくしょうとキャラ被りして少し焦ったのは良い思い出。
素顔は仮面に隠され出ませんでしたが、間違ってもイケメンじゃありません。ありませんとも。
ディアーチェによって殺害される。
モデルは特になし。
イメージＣＶは鈴木達央
名前の由来はイタリアの自動車メーカー　ランチアの中型乗用車『アウレリア』とセダン型『テージス』より。
モチーフは『ハーメルンの笛吹き男』

外章Ｒｉｄｅｒ，ｓ　Ｚｅｒｏ
アンケートによって発表決定となった話。
タイトル通りＲｉｄｅｒの過去編。怜治のじいちゃんばあちゃんの若いころの話。舞台は海鳴に非ず。
月姫がモチーフ。いやどこが？　といわれると説明しづらいんですが……。

松田怜一郎　ヤングｖｅｒ　（男）
イメージカラー：黒

魔力光　　：なし　蒼はヴォーパルソードのモノ
デバイス　　：魔殺獄剣ヴォーパルソード（正確にはデバイスではない）
　魔力ランク　：なし
魔法体系　　：なし
　容姿　　：黒髪黒眼
　その他　　：魔導同化“君（ダエーワ）とともに歩こう”

怜治の祖父の若かりし姿。当時年齢十七歳。
魔法資質が無いにも関わらず魔法の道具を使いこなす。十三話でリンディが言っていた“特異点”とはこの人のこと。リンディが聞いた話は尾ひれがついていたため正確ではなく、正しくは魔道具と肉体をシンクロさせて性能を全開まで引きだすというもの。
怜治と同じく特異技能あり。その詳細は本編にて。
事件後、高校卒業とともに管理局に入局。技術部に配属されデバイス開発に置いてその才能を開花。デバイス技術の基礎を築く。
武器であるヴォーパルソードはルイス・キャロルの鏡の国のアリスにあるジャバウォックの詩にある剣のこと。
学ランは若者の戦闘服。
モデルは遠野志貴。
イメージＣＶは野島健児さん。

　ファミリア・オートザム　（女）
イメージカラー：赤
魔力光　　：カーマイン
デバイス　　：紅蓮氷剣フランベルグ
　魔力ランク　：ＡＡＡ
魔法体系　　：古代ベルカ式
　容姿　　：腰まで届く亜麻色の髪　赤の外套　銀の瞳
　その他　　：魔力変換　凍結　空戦魔導師

怜治の祖母の若かりし姿。ＰＯＲＴＡＢＬＥ編よりも少し若い。

十八歳。
その武勇はちょこちょこ本編でも出てました。
当時は管理局でも数少ないベルカ式魔導師で、執務官。騎士の称号を得ていた凄腕の魔導師。管理局最強といわれ、エース・オブ・エースとも呼ばれた。
伝説の三提督の一人、ラルゴ・キールの片腕として働き管理局黎明期を支えた隠れた功労者。ベルカの武家であるオートザム家の次女。姉が一人あり。
後にグレアムにリンディ、それととある槍騎士の師匠となる。
武勇の数だけ異名を持ち、味方には畏怖を、敵には恐怖を与える。
その実力は他の追随を許さず、故に孤独であったが必死についてこようとする地球の青年に心惹かれた。
戦闘スタイルは魔力変換資質で造った氷の刃による高速戦闘。フランベルグと合わせ二刀流が基本スタイル。凍結を制御することで様々は武具を作る。剣はもちろん、槍に弓矢、斧に薙刀に棍棒と何でもござれ。ただし銃火器とかは無理。
名前の由来はマツダ・ファミリアとマツダの販売系列オートザムより。
モデルはアチャ子。判らん人は各自調べて。
イメージＣＶは豊口めぐみさん。

使い魔メリーバ　（女）
イメージカラー：ベージュ
魔力光　　：キャロットオレンジ
デバイス　　：なし
魔力ランク　：ＡＡ
魔法体系　　：古代ベルカ式
容姿　　：ベージュ色の短髪に、網目模様の黄色の帽子、背中には亀甲模様の盾

ファミリアの使い魔。正確にはオートザム家の使い魔であるためファミリアとは後に契約を解除。現在はオートザム家当主の使い魔として生活。その正体は大亀。

フェイトにおけるアルフの様なポジション。主従というよりも信頼できる友であり大切な家族。

戦闘は後衛。ファミリアの援護や周囲への結界処理などを担当。直接戦闘に参加することは少ないが、彼女がいるからこそファミリアが戦闘に集中できる。まさに縁の下の力持ち。

名前の由来はドイルの自動車メーカー『オペル』の小型ＭＰＶ『メリーバ』。

モデルはテイルズオブグレイセスのかめにん。

イメージＣＶは戸松遥さん。

セドリック・ディグニティ　（男）
イメージカラー：鈍色
魔力光　：群青
デバイス　：なし
魔力ランク　：Ｓ
魔法体系　：ミッドチルダ式　召喚魔法　生体生成魔導師
容姿　：青白い長身、漆黒のコート。短い鈍色の髪、くすんだ青い瞳
その他　：希少技能　『魂喰らい』
『魔人』の異名を持つ次元最悪の七人（クライシス・セブン）の一人。
文字通り人の命を奪う希少技能を持ち、殺した人の数だけ己が命を保つ、まさに化け物。
生体生成魔法によって疑似生物を大量に造り出し、それを召喚して戦う。
ぶっちゃけ月姫のネロ・カオス。
敵としてこんなに都合のいいキャラもいないと思います。
多にして個。タフで死ににくい。キャラの無双シーンを書くには

絶好のキャラなのです。
名前の由来は日産の上級セダン『セドリック』と三菱のセダン型『ディグニティ』。
モデルは前記のとおり『月姫』のネロ・カオス。
イメージＣＶは中田譲治。

外伝　魔王誕生

Ｆａｔｅ、月姫、と来たからこれは空の境界？　と思われるかもしれませんが別にそんなことはなく……。
一部五十三話と同じようなシーンがありますが、アレはプラウディア視点、今度のはレイオン視点となっております。
よって、五十三話と矛盾する点があっても決して間違いではなくただ彼らの認識の違いということなのです（ここ重要）！！！！
こんなオリキャラだらけの話投稿していいんだろうかと悩みもしましたが皆さまの応援の声に後押しされて無事書きあげることができました（飛ばし飛ばしではありましたが）。ありがとうございます。

レイオン・スターライナー　（男）
イメージカラー：黒
魔力光　　：漆黒
デバイス　　：なし
魔力ランク　：ＳＳ＋
魔法体系　　：不明
容姿　　：漆黒のローブに全身を包む。顔は見えない。
その他　　：魔導改変“貴様（アンラ・マンユ）を殺す世界”
すずか√、Ｒｉｄｅｒ’ｓ　Ｚｅｒｏと二つの章を跨いで登場した謎のまっくろくろすけ。

コイツに関しての感想が一切来ていないので皆さまがどう予想していたか判りませんが、その正体は次元世界エメロードの大国ギャランによって造られた人造人間。そして怜治の遠い御先祖様。祖母は悪魔、祖父は勇者という（色んな意味で）すごいやつ。

四十六話でエルカミーノが言っていたホムンクルスとはこいつのこと。

目覚めたところを保護され、ギャランの軍人として活躍。後にプラウディア女王の側近を務め、やがて女王と恋に落ちる。国によってプラウディアが謀殺されると知り助けようとするも女王自身が世界に絶望し自害。絶望の中に生まれたのは世界に対する憎悪。その感情に力が完全に覚醒、ギャランを滅ぼした……って惚れた女がピンチにならんと本気になれんのかこの一族は！

暗黒賢人の異名を持つ次元最悪の七人の一人。某マッドサイエンティストも真っ青な狂気の発明によって多くの世界を危機に陥れたとされる。

ホムンクルスとしての性質と悪魔の器の力により極端に長命。セドリックとはまた違う化け物。

プラウディアを本当の意味で救うために世界を渡り歩く。

そして、自分の子供に同じ道を歩ませまいと我が子を遠い魔法のない世界へと送った。

特異技能が三つ出てきましたがどれが一番強いとかは別に決めてません。じゃんけんみたいにそれぞれ相性があり、互いに得手不得手がありますから。代償も大きく決して万能とは言えませんしね。

名前の由来は「零闇」、全ての始まり、虚無という意味を込めてレイオン。またドイツ・アウベルダー社製スーパーハイデッカー観光バス『スターライナー』。

モデルは無し。

イメージＣＶは木村良平さん

～その後の二人～
魔王と女王

気付くとそこは、黄金の丘だった。
大地を包む黄金の草原。風が吹く度黄金の海に波が立つ。
彼は輝く草原を見渡してその美しさに感嘆の息を吐いた。
そして黄金の果てに彼は彼女を見つけた。
歩を進め、やがて歩みは走りに変わった。
息が上がるなど何百年ぶりのことだろうか。それほどまでに彼の胸は高鳴っていた。
彼女の目の前までやって来て足を止める。
膝を曲げた男を、赤い瞳が微笑とともに見下ろしていた。
呼吸を整え彼女を真っ向からみる。
本来の姿で彼は彼女と再会した。
かつて約束した、平和な世界での再会。その実現に胸の奥から熱いものが込み上げてくる。

「プラウディア……」

「レイオン……」

名を呼びあい、強く抱きしめた。
腕を相手の首や背に回して力を込める。
その体温を、その鼓動を、その息吹を、全身で受け止め刻みこんでいく。

「会いたかった。ずっと……ずっと……」

「バカね。私なんかのために……本当にバカ……！」

悪態をついていても彼女の目尻に浮かぶ涙は歓喜の証だった。

山の様にため込んでいた言葉があったはずなのにまったく出てこない。

それでも、こうして互いに触れ合うだけで全てが伝わる気がした。

抱擁を解いて顔を合わせる。赤い瞳に吸い込まれるように顔が近づき唇が重なった。

二人は語り合う。

別れたあの時からの想いを吐き出していく。

そして、別れの時はやってきた。

当然だ。彼はその永い生の中で多くの罪を犯してきた。

多くの人を殺め、人生を狂わし、世界を汚してきた。

罪人の魂はしかるべき場所に送られその罪に相応しい罰を受けるのだ。

足元の大地が消えて漆黒の穴が開いた。

闇の彼方から聞こえてくるのは地獄の劫火の熱と怨磋の声。

重力に従ってその身が闇に沈んでいく。

二人に悲しみはなかった。そもそもこの邂逅じたいが奇跡、神が与えた慈悲なのだ。

再び出会うという願いは叶った。ならば、他の願いも叶うはずだ。

あの約束を、彼女はもう一度口にした。

「私、別の世界で、別の時代で、また貴方と会いたいわ」

「僕もだよ」

静かに頷いた。
体が闇に引かれて行く。地獄の者たちは我慢が足りないようだ。
彼の首までが沈んだところで、彼女は言った。
「愛しているわレイオン。永遠に」
「僕も、プラウディアを愛している」
「ありがとう」
「ありがとう」
そうして、二人は再び別れた。
黄金の大地に残された彼女の背後から声をかける者がいた。
「もう、いいんですかい？」
「ええ。十分よ」
振り返る。そこには共に戦乱を生きた仲間たちがいた。
「行きましょう。あの人がまたここに来るまで待ち続けましょう」
『御意に』
騎士達が女王に付き従い丘を去っていく。

「私、ずっと待ってるわよ」

青い空の下、愛しき者に向けた声が風に乗って飛んでいった。

どこまでもどこまでも、飛んでいった。

～その後の二人～

剣士と騎士

「何よ、これ」

不機嫌さを隠すことなく、ファミリア・オートザムはその感情を吐き出した。

銀の瞳が差す先には書類の山。四角い証明写真と自己ＰＲ文なんぞが書かれていた。

電子化の進むこのご時勢にわざわざこんなものをつくるなんて予算と労力と資源の無駄だと本気で思う。

ファミリアの視線が動き、山の向こうにいるラルゴ・キールに向かう。

二人がいるのはラルゴの執務室、ようはいつもファミリアが任務を言い渡される部屋である。

任務を言い渡すと言われたからやってきたファミリアだったが、いつもは指令書一枚と詳細データを渡されるはずがこんな書類の山を渡されたのだ。何よこれ、という台詞意外考え付かない。

睨まれるのに耐えきれなくなったのかラルゴが重い口を開いた。

「お前の、弟子候補たちだ」

「……弟子候補？」

「ああそうだ。管理局の切り札（エース・オブ・エース）であるお前に魔導の教えを請う声が多くてな、こうして希望者が募ったわけだ」

「なに勝手な事を……。私は弟子を取る気はないわよ。執務官の任務に半人前なんて連れていけない」

「だったらしばらくはお前に任務はやらん。今はこちらが優先事項だ」

ラルゴの言葉は執務官の仕事に誇りを持っている彼女を不快にするのは十分だった。

世界中で絶えず怒り続ける犯罪よりも優先すべきとは聞き捨てならない。ファミリアは不快感を露わにする。

美麗な眉が歪み眉間にしわが刻まれた。顔立ちがいいだけに彼女の怒り顔は迫力があった。

だが、そんな彼女と長く仕事をしてきたラルゴには効かなかった。

「凄んでもダメだ。そもそもお前を出すような案件は今はない。とにかく、今日中にその資料に目を通しておけ。次世代の若者を育てるのも管理局員の義務だ。

いいか、これは管理局一等陸佐としての命令だ。口答えは許さん」

「～～～～～～ッ！！」

上司としての言葉にファミリアは二の句をつげなくなる。

上司と部下である以前に共に訓練校にて基礎を学んだ友人なのだが、そんな温情を見せるラルゴ・キールではない。

これ以上逆らえば一等陸佐としての権限をフルに使って彼女を罰してくる。

そう、例えば減棒とか謹慎とか。減棒とか減棒とか。

（ああ、我慢よ私！　只でさえ月末で懐で寂しいというのにここでそんな目に会ったら……！！）

毒の入った茶を飲み干したような顔をして、ファミリアは書類の山をかかえて部屋を出た。

最強の騎士が葛藤する様を、ラルゴ・キールはほくそ笑みながら見ていた。

「な～にが『次世代の若者を育てるのも管理局員の義務だ』よ！私はまだ二十歳になったばっかだっての。まだまだ現役で活躍するんだから、次の世代なんて知ったこっちゃないわよ！」

とある部屋でファミリアの怒声が響いた。

鉄槌の如く振り下ろされた拳が机を殴り鈍い音が鳴った。机の上に置かれた工具たちが舞う。

犬歯をむき出しにして怒りを露わす彼女の姿はまるで獣だ。その様子にエリートたる執務官の面影は見えない。

「だいたい次世代の教育ってんなら訓練校にもっと予算まわしてやれっての。素人が現場の魔導師に付いてこれるわけないでしょうが！！　ねぇ！？」

ぐりんと首を回してファミリアが睨みつける先には黒髪の青年がいた。

作業に没頭していた肩が跳ね、やれやれと言った様子で椅子を回して顔を向けた。

「んー、でもラルゴの言うことも一理あると思うけどな」

現れたのは黒い瞳。落ち着きのある印象を与える青年の名は松田怜一郎。

局員には珍しい、管理外世界の出身だ。

もっとも彼も管理外世界の常識に外れることなく魔力はもたず、彼は技師として働いている。

それでも彼には特殊な力を持っているがそれを知っている人間は目の前にいるファミリアと上司であるラルゴ、そして友人であるミゼットやレオーネくらいだ。

賛同を得られず膨らむファミリアをなだめながら怜一郎は続ける。

「管理局ってのは絶えず人手不足なんだろ。危険任務の多い魔導師が特にだ。量が確保できないんじゃ一人一人の質を上げるしかないだろ」

「そもそも新人が育たないのは上層部のオッサンどもが訓練校や教導隊への予算を削るからでしょうが。本局や地上本部の防御を整えたいのも解るけど、その尻拭いを私にさせるってのが気に入らないのよ！」

再び振り下ろされる拳。魔力で強化したのか、机が拳型に陥没していた。

怜一郎の背筋を氷塊が滑り落ちる。

まずい。これ以上は俺の部屋がヤバい。取りあえず話題を逸らせようと考えた。

「ミリィも、どうしてそんなに弟子を取るのが嫌がるんだよ。任務を受けられないのが嫌ならその時以外に受け持つってことにすればいいじゃないか。
ラルゴだって本心じゃミリィを縛りつけたくはないだろう」

「む……」

ファミリアの顔から怒りが一瞬消えた。どうやらそれも一度は考えたようだった。
それもそうだ。ファミリアは管理局最高の魔導師。いくら次世代育成のためとはいえ彼女を任務から外すのは得策ではない。
ファミリア本人だって新人育成が大切なことというのは解っているはずだ。一体何故頑なに断ろうとするのか。

「だって、弟子を取るってことは本当にその子と付きっきりになるのよ。こっちも変なこと教えるわけにもいかないから訓練メニューとか色々考えなくちゃいけなくて、四六時中そのことを考えなくちゃいけないの」

「そりゃ……そうだろうな」

「もしもそんなことになったら……ねぇ？」

一瞬、ファミリアがものすごく意地悪な笑みを浮かべた気がした。
騎士の体がふわりと浮いて細い腕を怜一郎の首に回す。心臓が跳ねた。
体が密着され、優しい香りが鼻腔をつついた。

「こうして、レイと一緒にいる時間も減るのよ？　それでもいいの？」

「そ、それは困る……かも」

服越しに感じる柔らかい感触に怜一郎の顔が沸騰する。

綺麗な銀の瞳に見つめられて心臓の鼓動が加速する。

頬に手を添えられてファミリアの顔が近づいてくる。

彼女と出会った日から五年。かつては命の恩人だった彼女が今は恋人となった。当然こういう行為は初めてではないが緊張や心臓の加速を抑えられない。

なにせファミリアは美人だ。五年の時は怜一郎の背丈や体格を逞しいモノにしたが、ファミリアはそれ以上に綺麗になっていた。おかげで彼女が近づいてくるだけでこちらは顔から火を噴くような思いをさせられている。

「……っ」

目を閉じてその時を待つ。が、いっこうにあの感触はやってこない。

そっと目を開けると、すぐ目の前にあったはずのファミリアの顔が無い。

首を九十度近く曲げてようやく発見、ファミリアは右手を怜一郎の肩に乗せ、左手を伸ばしていた。

白い指が掴んだのは紺色の小箱。丸みを帯びた立方体で軽い。

どうやら、ファミリアの興味はそちらに移ってしまったようだ。

やれやれと残念な気持ちと安心感に包まれる。が、その箱の中身を思い出して心臓が再加速。

「これ、なに？」

当然の如く、聞いてきた。

仕方ないと覚悟を決めて怜一郎は小箱を手に取る。
椅子から立ち上がり互いに手を伸ばしてもぶつからない程度に距離を取った。
そして、ファミリアに差し出した。

「プ、プレゼント……」

「……え？」

どきり、と今度はファミリアの心臓が跳ねた。
無意識に顔に熱が集まる。
小箱の形状からして、中身を想像してしまう。
二人が付き合うようになってもうすぐ五年。互いに成人して二、三年だ。
早い者ならそろそろ結婚してもおかしくない年齢だ。

「え、あのその……ちょっと待って。急過ぎて心の準備が……」

珍しく慌てた様子を見せるファミリア。
エースであろうと、騎士称号を得た魔導師だろうとその中身はれっきとした女性。
そういうことには、それ相応のシチュエーションと心の準備が必要だった。
ファミリアの言葉を聞かず、怜一郎が箱を開けた。
箱の中に鎮座していたのは銀の指輪。装飾がされていないシンプルなものだったがファミリアの胸には温かい気持ちが溢れる。
場所が少々気に入らないが、あとは彼の言葉を待つだけ。
怜一郎も緊張しているのか沈黙が長い。が、それすらも心地よかった。

「こ……」

男の口から言葉が吐かれた。

……こ？

「これ、俺が造ったデバイスなんだ！　処女作！　ファミリアに使ってほしい！！」

バゴォン！　と乙女心が集束砲に撃ち抜かれた。粉々を通り越して灰塵となった。

「……は？」

「いやいつだったか言ってただろ？　双剣の鍛錬にもう一本剣が欲しいって。だから、造ってみた！」

太陽の様に眩しい笑顔を向ける怜一郎。もっとも、今のファミリアにとっては忌々しいモノでしかない。

記憶を探ると確かにそんなことを言った気がする。普段は氷で剣を作るのだが、あれはファミリアの魔力で作られるもので、使い捨てで作るのももったいないからどうにかしたいといった内容だったか。

取りあえず起動。白い無垢な剣が現れた。軽く振ってみる。

特徴が無いのが特徴というか、見た目よりも実用性を重視したようだ。怜一郎らしいと言えばらしい。

いい剣だと素直に思った。

「ど、どうだ……？」

「ええ。そうね。でも、」

文句はない。剣には、剣にはないのだ。
あるのは、こいつ(このバカ)だ。

「違うでしょうがあああああああああああああああああっ！！！！」

「げボゥあああああああああああっ！！？」

最強の騎士の拳が男の顔面を貫いた。
コマの様に大回転し、派手な音を立てて落下した。

「この、バカ！」

倒れた愛しい彼にトドメの一発。グハッと精神的ダメージを受ける怜一郎を放って部屋を出た。
外に出ると同時にため息一つ。

「なんか、真剣に悩んでる私がバカみたいじゃない」

その通りなのかも、と独り呟く。
彼との生活は始まったばかり。少しばかり焦り過ぎていたのだろうか。
焦ってしまうほどに、彼女はかつての孤独が辛かったのだろうか。
ファミリア自身に答えは解らない。解ったところで、過去のことになど興味はない。

「ま、やってみてもいいか」

ん、と伸びをして騎士は歩き出す。その指には、愛する者からの

送り物がしっかりとついていた。
その後、ファミリア・オートザムは多くの弟子を取ることとなる。
彼女に教えを受けた者はみな立派な魔導師として管理局を支えていくこととなる。
そして、異能の剣士が騎士の実家に向かうまで、もう二年。

～その後の二人～
青年と少女

青い空、桜が舞う季節がやってきた。
病院の中庭に植えられた桜にもピンクの花弁が咲き誇っていた。
風に煽られ舞い散る桜の下を、二人の人影が歩く。
車いすに乗った黒髪の青年とそれを押すのは長い髪の少女だ。
花のシャワーを浴びながら二人は言葉を交わす。

「暖かくなってきましたね」

「そうだな。そろそろ春服を準備しないとな」

「そうですねー」

「それまでに歩けるようにならないとな」

少女が小さく息を呑んだ。
俯き顔に影が落とす少女に青年はため息をついた。

「なんでお前が落ち込むんだよ。気にするなって言ってるだろ」

「だって……」

「だってもなにもなし。もうそんな顔をすんな」

「はい……」

また一つ、青年はため息をついた。

彼が車いすに乗っているのは訳がある。

ことの始まりは二ヶ月ほど前、少女はある事件に巻き込まれ、青年は彼女を全力で救った。それこそ、命を賭して。

その甲斐あって少女を掬いだすことには成功した。だが、その代償は決して小さくはなかった。

つい先日まで、彼は意識不明、昏睡状態だった。

やっと目覚めたと思ったら今度は首から下が動かなかった。

限界を超えた魔力使用による反動、ようは魔力を一度に大量に消費した過負荷が神経系にダメージを与えてしまったのだ。

完全に神経がイカれていなかったのは幸いだった。リハビリを重ねることで上半身のマヒはすぐに回復した。下半身の方もいずれ回復するとのことだった。

しばらくは不便な生活を強いられるだろうが車いすに関して先輩がいるのでそちらに教えを請うとしよう。

とにかく、確かに彼が現在の状態になったのは少女が巻き込まれた事件が原因だが、決して少女に火があるわけではないので彼女が負い目を感じることはないのだ。だというのにこの少女は未だに負い目を感じている。

それは少女の優しさゆえだろうが、青年としてはいつまでも気にされては困るのだ。

なにせ、彼は少女の笑った顔を気に入っていたのだから。

「怜治さん」

名前を呼ばれ顎を上げる。下から少女の顔を覗き込むような格好になった。

「なんだ？」

気のせいだろうか。少女にしては珍しく、いたずらっぽい笑みを浮かべていた。

「いなくなって欲しくないって、どういう意味ですか？」

「ぶっ」

噴いた。そう言えばそんなことを叫んだ気がする。

あの時は感情に任せて叫んでいたが、今考えればかなり恥ずかしいことを口走ってしまったと思う。

彼女の言う意味を想像したら顔に熱が集まって来る。

「えっと、な……」

「どういう意味ですか？」

重ねて聞いてきた。どうやらはっきりするまで逃がす気はないらしい。

ため息また一つ。なんとかの弱みというやつか、決心して答えを出した。

「それはだな――――――――――」

強い風が吹いた。
地面に落ちた花びらを巻き上げる突風の音に青年の声はかき消された。
周りにいる者には誰にも聞えない。
只一人、彼のもっとも近くにいた少女だけが聞いていた。
華の様な、綺麗な笑みを浮かべていた。

「返事は？」

分かりきったことを聞く。
少女はそっと青年の耳元に顔を持っていき、彼だけに聞こえるように呟いた。

春の空の下。桜の花に囲まれた二人が幸せそうに笑っていた。

過去は終わり、物語は未来へ向かう。
先は見えず不安は尽きない。だが彼らは恐れず歩き続ける。
彼らはもう、一人ではない。
二人の未来を、二人で紡いでいくのだ。

キャラ設定＋オマケ話（後書き）

これですずか編は完全に終了です。
次回からＳｔＳに向けて進めていきます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9169k/

魔法少女リリカルなのは☆The Rider☆

2012年1月15日01時50分発行